日 本 菌 類 誌

北海道大学名誉教授・日本学士院会員
農 学 博 士
伊 藤 誠 哉 著

第 二 巻

担 子 菌 類

第 五 号

マツタケ目・フクキン（腹菌）目

東 京 · 書 肆
株式会社
養 賢 堂 発 行

1959

Box 7

日本菌類誌

北海道大学名誉教授・日本学士院会員
農学博士
伊藤誠哉著

第二巻
担子菌類
第五号
マツタケ目・フクキン（腹菌）目

東京・書肆
株式会社
養賢堂発行

—1961・第2版—

Mycological Flora of Japan

SEIYA ITO

Nogakuhakushi

Prof. Emer. of the Hokkaido University, M.J.A.

Vol. II
Basidiomycetes
No. 5
Agaricales, Gasteromycetales

Tokyo

Yokendo Ltd.

1961

著者は本邦産菌類研究のため
朝日新聞社より科学奨励金の
交付を受けました。茲に同社
に対し深甚な感謝の意を表し
ます。

目 次

Agaricales　マツタケ目

菌糸は通常各所の地中，糞中等に蔓延し，或は植物残屍，稀に動物残屍上に死物寄生し，又樹木草本の根或は地上部，稀に他菌に寄生し，更に蘚類，羊歯類と密接なる生活関係を保ち，殊に針葉並に広葉樹に外生菌根（ectotrophic mycorrhiza）或は蘭類に内生菌根（endotrophic mycorrhiza）を作りて共生するもの等あり；菌糸は之れ等の生活過程に於て時に種々なる形態を呈す，即ち菌核（sclerotium）或は基物を塊状に綴り合せたる擬菌核（pseudosclerotium），又は白色の菌糸紐（mycelial strand）或は黒色の針金状の根状菌糸束（rhizomorph）を作り，更に又子実体の茎の基端に長き太き根即ち偽根（pseudorhiza）を作り，或は基物表面に菌糸叢生し稍々密なる茎の基部毛叢(mycelial or basal tomentum）を作ること等あり，子実体（carpophore）は初め菌糸体の一部に菌糸の小球塊として表わる，この未だ傘の開張せざる始原体（primodium）を通常卵或は蕾（egg or button）と称し，漸次発育して傘，茎及び子実層托の各部を分化するに至る；この分化発生の過程は担子菌分類上極めて重要視されつつありて，従来永く PATOUILLARD 氏の見解の如くヒダナシタケ目（サルノコシカケ目 *Aphyllophorales* or *Polyporales*）は裸実（gymnocarpous）即ち始原体の初期より最後迄子実層托が裸出せるもの，腹菌類(*Gastromycetes*)は被実（angiocarpous）即ち子実層は最後に至りても被われありて裸出せざるもの，マツタケ目（Agaricales）は半被実（hemiangiocarpous）即ち子実層托は始原体の内部に生じ後に裸出するものなりとして明確に各群を分ち本書もまた之れに従いたり，然るに近時の研究によればヒダナシタケ目及び腹菌類に於ては多少の例外あれども之の標識を採用し得るも，マツタケ目に於ては以上三様式の外，擬被実（pseudoangiocarpous）即ち初め子実層は裸出するも後縁辺の内屈によつて一旦包蔵され，それより縁の開張によつて再び裸出するもの等をも見出さるるに至れり，之れ極めて重大なる発見たるや明かなれど1属中に異様式のものあり，従つて分類学上多少の疑義を有するところあるが如く，尚研究を要する問題とせらる。

肉眼的性状：—**［傘］**　傘（帽，蓋(盖及盖は俗字)pileus, cap）の全形は傘或は笠形，円錐形，鐘形，盃形，漏斗形，貝殻形，釘形等ありて，外囲は円形，扇形，箆形，半円形等；傘面は扁平，丸山形(凸形)，凹面（圧低）等にて中心部即ち中盤（disc）は扁平，或は中丘（中心凸形 umbo）又は中窩（中心凹形 umbilicum）を有す，種々の色を呈し，無毛平滑或は毛，繊維或は鱗片を有し，乾燥或は粘膠性，平坦或は放射線条又は扇襞状の畦溝を存し，稀に環紋を有するものあり，時に熟後亀裂を生じ，又罅裂するものあり；傘縁は全縁，波状，裂皮状等にて真直，内屈，内捲，反転，波曲す；傘径は大体に於て 0.5～500 mm，通俗径 10 cm 以上を大形，2.5 cm 以下を小形と呼ぶ；肉は膜質，肉質，靱肉質，稀に殆ど革質，時に膠質となるも木質或は炭質なることなし，傘質は茎質と同一にて互に密に連続するもの，或は質を異にし，又分離層を生じて容易に脱離するもの等あり，多くは腐敗性なるも，乾枯し湿気を得て再生複原するものあり，味は温和或は辛，苦，香臭は種々あり。

［茎］　茎（柄，stipe，stem）は中心生，偏心生或は側生にて，時に無茎，稀に傘の基部茎状となり裏面よりは茎として認め得れども上面より見ればその存在を認め得ざる場合あり，かくの如きものを特に擬茎（偽茎，pseudostipe）と呼ぶ；茎の全形は通常細き或は太き円柱形にて全長に亙つて同幅，或は1方に漸細，又は中央部膨大して便腹状（ventricose），或は基部膨大して球根状（bulbous）となる。表面の性質は傘面と同様の変化をなす，その長短は通俗的に傘径に比して称するを常とし，大体 500 mm に及ぶものあり；肉は一様にて中実（solid），髄部は弛き菌糸にて充塞（stuffed）され，或は中空（hollow）となる；基端は偽根，毛叢，菌糸紐，根状菌糸束に連る。

［子実層托］　子実層托(托 hymenophore）は明かに褶状又は管孔状，或は脈襞状をなすものの外，褶が分岐し或は側脈によりて互に連結され網状となりて管孔状に推移する中間性を表わすことあり；托は傘肉と連結し或はこれより剝離す；褶（襇，ヒダ

lamella, gill) は傘の全長に亙るものの外，屢々小褶 (lamellula) を混在す；その形に２型ありて１は横断面にて両面が平行或は殆ど平行なる型即ち両面平行型 (inaequalihymeniferous type) と断面楔形にて刃状をなす型即ち楔型 (aequihymenial type) とありてヒトヨタケ属 (*Coprinus*) のものは前者に属しその他は楔型なり，何れの場合に於ても厚薄，広狭の別ありて，疎生或は密生す；褶稜は鋭或は鈍にて全縁，或は波状～鋸歯状をなし，褶側と同質或は異質なり；托(褶及管孔壁)の茎と接着する状態は従来分類上の極めて主要なる特徴の１として認められたる所にて通常次の６種となす。(第１図ｂ参照)

1. 隔生 (remote) 褶は茎の頂部より遙かに離れたるもの，
2. 離生 (free) 褶は茎に接着せざるもの，
3. 狭生或は上生 (adnexed) 褶は茎の頂部に僅か附着するもの，
4. 直生 (adnate) 褶は広く茎に附着するもの，
5. 垂生 (decurrent) 褶は茎に沿下附着するもの
6. 彎生 (sinuate) 褶は茎に附着する近き部分に切れ込みを有するもの，

尚以上の外弧生 (弓形 arcuate)，有襟生 (カラ collariate)，陥入 (剪切生 emarginate)，圧接 (depressed) 等の種々なる唱呼を用ゆる場合あり，且つ相互間には往々中間形を存す。

［ベール(被膜)］ ベール(被膜 veil) は従来蕈 (茸は国字) 類の分類に当り重要なる外的標徴とされ，先づこれを外被膜 (universal veil) と内被膜 (partial veil) とに分ち，成熟体に於て前者は壺(脚苞 volva, cup) に，後者は鍔 (輪 annulus, ring) となると極めて単純に解釈せられたりしも，発生的には基本的性質の異なる器官が混乱されあることを認めらるるに至れり，

1. **外被膜** (壺)，外被膜 (volva [巫女の義]，universal veil) は菌の蕾時代に於て，子実体の外囲を包む外套膜にて，通常膜質にて薄き蜘網状のものならず，子実体が成熟大形となるに従つてこの被膜は破れて茎の下端に壺，傘の表面に疣瘤又は痂皮 (volva patch) として残存す，従つて volva なる語に広狭の両義あることとなり外被膜を表わす場合と茎端に存する壺のみを意味する場合とあり，壺はその名の示す如く壺状，或はコップ状又は袋状なれども，往々茎の基部に鞘状をなし所謂鞘 (sheath) を作り，或は同心円的の断片，綿絮，更に粉状等となる。時に鞘の上端が鍔状を呈することあり，殊にモミタケ属 (*Catathelasma*) 或はショウゲンジタケ属 (*Rozites*) の如き２重鍔の場合に於てその外下部の鍔が明かに之の種に属することを知るを得べく，従つて厳正に云わば鍔状外被膜(annular volva) 或は外被膜鍔 (volval annulus) とも称すべきものなり，斯くの如き外被膜 (壺) はテングタケ属 (*Amanita*)，フクロタケ属 (*Volvariella*)，ヒトヨタケ属 (*Coprinus*) 等に於て極めて良く発達しつつあるも，これに近き諸属等に於ては退化し不明瞭或は早失性のことあり，要するに蕈類の外被膜は腹菌類 (*Gastromycetes*) に於ける殻皮 (peridium) に該当する器官なるべきか。

2. **蜘網膜** 始原体の表皮組織の１層或は全層が傘の生育開張に伴つて引き伸ばされて薄くなり遂に破れて傘の表面或は傘縁と茎との間に残存することあり従つてこの残物は薄くして繊弱なるを常とし，若し無茎の種類等にて傘表が膠化せる状を呈すれば表皮層ベール (pellicular veil) と称し (LOHWAG 氏)，若し茎が存在し傘縁と茎との間を連結し乾燥にて蜘蛛巣状なる時は FRIES 時代より常用せられたる如く蜘網膜 (cortina) と呼ぶ，従つて茎上に著しき，且つ永存的鍔を作らずと雖，時に早失性の繊弱なる痕跡的鍔を存することあり，之れ或は蜘網鍔 (cortinar annulus) 又は表皮層鍔 (pellicular annulus) とも称すべきものならん，要するに蜘網膜は半被実の場合の形成物にて，系統的には外被膜より派生せるものと認めらる。

3. **縁膜片** 擬被実及び半被実の発生過程に於て傘縁は初めより或は２次的に茎の上部に接着し屢々両者の組織が癒合し相互の菌糸が伸長交雑する場合あり，斯る場合に傘の開張によりてこの部は伸展され遂には切断するに至る。この分離に当り必ずしも先の接着部に於てのみ行わるるものに非らず，若し切断が茎に近き部分に於て行わるれば膜片は傘縁に附着懸垂するに至る，かかる場合その膜片を縁膜片(marginal veil, velar appendiculation) と呼ぶ，若し切断が傘縁に近く行わるれば膜は茎上に鍔状となりて残存す，通常之れを単に鍔(輪 annulus, ring) と称するも，厳正には縁膜鍔(marginal annulus)と呼ぶべきものなり，又若し切断が茎及び傘縁に近き部分に同時に行わるれば可動鍔 (annulus movilis, movable ring) を生ず，以上述ぶる所の好例としてはハナイグチタケ (*Boletinus cavipes*)，カラカサタケ(*Macrolepiota procera*) 等を挙げらる。

4. **頂鍔** 上記の外被膜より出来たる外被膜鍔，

及び次の子実体の表皮層より出来たる表皮層鍔（蜘網鍔），更に傘及び茎の組織より出来たる縁膜鍔の何れにも属さずして専ら子実層托となるべき部分が膜状となりて出来たる鍔を頂鍔（annulus superus, apical veil）と呼ぶ，これが発生順序よりすれば当然子実層托の性状を有し，その柵状組織的構造は存続されあることはテングタケ（*Amanita*）の鍔が主に等径の膨大せる細胞より成りあるを以ても容易に知ることを得べく，この鍔の好例としてはタマゴタケ（*Amanita caesarea*）を挙ぐるを得べく，或は従来単に鍔と称したるもののうちにも之れを大なり小なり含みあらんかと考えられる。この頂鍔はその性質上，子実層托の離生或は傘縁が充分内屈せざる種類の蕈には形成せられざることとなる。尚極めて普通に上鍔又は下鍔と称することあれども，この語は只鍔の茎上に於ける相関的位置を示すに留まり何等其の性質を表わすものに非らず。

以上専ら SINGER 氏（1949）に従つて解説したる所にして大に注意を要すべき事項なりと雖，尚研究を要すべきもの多く，又急に系統的分類に重要視するが如きは未だ尚早なるべし，只能く各器官の性質を理解したる後，普通の分類に於ては従来の如き様式に従うを可とすべきか。

［胞子紋］ 胞子の粉堆即ち胞子紋（spore print）の色を分類の標識として用いしは已に FRIES 氏の考察に始まり漸次重要視さるるに至り，P. A. SACCARDO 氏（1915）は全マツタケ類 *Agaricaceae*（今のマツタケ目 *Agaricales* よりイグチタケ類を除外せるもの）を直ちにその胞子紋により次の5群に大別し，総ての属を各々之れに収めたり。

第Ⅰ群（Section として）白色胞子群（*Leucosporae* FR.）—胞子紋は白色，類白色，淡黄色，或はバラ色。

第Ⅱ群 紅色胞子群（*Rhodosporae* SACC.）—胞子紋はバラ色或はバラ銹色。

第Ⅲ群 褐色胞子群（*Ochrosporae* GILL.）—胞子紋は黄土色或は類銹色，又は後に黒色。

第Ⅳ群 紫色胞子群（*Janthinosporae* QUÉL.）—胞子紋は黒紫色，黒菫色或は褐紫色。

第Ⅴ群 黒色胞子群（*Melanosporae* SACC.）—胞子紋は黒色。

胞子紋は子実体の茎を去り，白紙上に傘を臥せ，硝子鐘等を以て覆い無風状態の下に胞子を落下せしめて作る。以前には白色胞子紋は黒紙上に作らしむることを推奨せるも却つて此際も白紙の方を優れりとす。（CRAWSHAY, 1930），斯くの如くして得たる胞子紋の色は他の場合と同様之れを表現するに極めて困難なるが為めに以前は SACCARDO の Chromotaxia を，其後各国共 RIDGWAY の Color Standards and Color Nomenclature，1912 を用いたりしが，今や此等は入手するに困難なるが為めに MAERZ, A 及 M. REA PAUL の Dictionary of color, 1930 を用いるもの漸次多きに至れり，尚 CRAWSHAY（1930）は其著ベニタケ属（*Russula*）の胞子刻紋に於ては胞子紋の色の図版を揚げ且つ之れをAよりH（ROMELL 1891 は3段階）迄の記号を以て示せり，然れ共斯の如き記号表示が果して効果を収むるや否やは疑わしい，更に本邦に於ても色の著書なきに非らざるも未だ上記の如き世界的基準名と対称せるものなきが如し。

以上の如く胞子紋の記録は困難なるのみならず，菌の老若，胞子脱落後の乾燥或はその取扱等によりその色の変化することあり，又前記両群の中間色，或は両群に亙る色を有するもの，時に他群に属すべき色を表わすもの等あり，殊に熱帯産の種類には緑色の胞子紋を有するものありて何れの群にも収むべき所なし，従つて玆に色を第一基準としての分類につき再検討を要すべきを主唱する者あるに至れり，要するに胞子紋が今日迄の人為的分類法に非常に役立ちたることは争うべからざる事実にて，この点に着眼せる FRIES 氏の識見に対しては大に賞讃せらるべきは勿論なり，然れども上記の如き欠陥あり，且つ系統的分類法を企てつつある現在に於てはその分類上に占むる立場は確かにその第1線より退かざるべからず，但しこれを以て直ちにその重要性を失墜せりというべきには非らず。（別表参照）

［子実体の諸型］ 熟練せる蕈採集者は細かく各部の性状を検する迄もなく，直ちに鑑別して食用に供す。之れによりて時に意外なる事態を起すことなきにあらざれど，確かにそこに綜合的特徴即ち型（type）のあることを示すものなり，例えばカワキタケ（*Panus*），ムキタケ（*Hohenbuehlia*），シジミタケ（*Resupinatus*），ツキヨタケ（*Lampteromyces*）チヤヒラタケ（*Crepidotus*）の諸属を説明するに旧式の分類にて人の能く知るヒラタケ（*Pleurotus*）型なりと称すれば直ちに其特徴の概念を得べく，又エノキタケ（*Flammulina*），ツエタケ（*Oudemansiella*），ビロウドツエタケ（*Xerula*）等の諸属を説明するに旧式の *Collybia* 型なりと称すれば容易に判明するが如し，旧式にては *Collybia* 属はエノキ

タケ属と称せしが新式にてはモリノカレバタケ属と称するが如く変名せるものあるにより特に注意を要すると共に常に旧式分類法に通暁せざるべからざることとなるべし，玆にその煩を除くために別表(第7頁)並に子実体の重なる型を図示せり，(第1図a)。之れを利用せば容易に旧属の特徴を知るを得べし。

顕微鏡的性状：一旧式分類法は専ら肉眼的性状に基き，之れに只担子柄及び胞子の顕微鏡的観察を補記せるに限りしも，漸次研究の進むに従つて内部諸器官の発生的或は化学的性質等をも加味し系統的分類に進みつつありて今や新式分類法は其面目を一新するに至れり。

[傘茎の肉] 傘及び茎の肉（trama, context, flesh）は基礎組織と結締組織とより成り，前者は後者に比して一般に幅広き大形の菌糸より成り，通常容易に区別し得べきも，この両者間に根本的に差異の存するものにあらず，然るに独りベニタケ科（*Russulaceae*）に於ては基礎組織は球嚢（sphaerocyst）より成り，不均一構造（heteromerous structure）をとり，他科の均一構造（homoiomerous structure）なると区別さる；肉の菌糸は往々厚膜を有し僅か膠化し，或は薄膜にて膠状物内に埋走す。糊性或は非糊性，菌絆（嘴状突起 clamp）を有し或はこれを欠く；茎の組織は一般に傘及び子実層托のそれに比して密にて繊維質或は軟骨質のもの多く，傘の弛き軟き組織へ急に移行するにより，通常非連続性，特異性或は異質等と称してその関係を示す。又往々茎が離脱するにより分離茎と呼ぶことあるもヒナノヒガサタケ（*Marasmiellus*）の場合の如く両者間に小形細胞より成る離層の存するものとは全く意義を異にするものなり；肉中には通常の菌糸の外に屢々分泌物を含み或は移動を司る導管を混在す，例えばハツタケ（*Lactarius*）等に於ける乳汁菌糸（lacticiferous hyphae），ベニタケ（*Russula*）等に於ける油脂菌糸（Oleiferous hyphae）等の外，粘液管（gloeo-vessel）或は表面篩状をなす篩管（coscinoid）等を有することあり。

[外皮] 傘及び茎の外皮（cortex）は屢々分化せる組織より成り，更に托上に生ずる嚢状体物をも混在し，又その外部に外被膜層の残物（前記表層外被膜 pellicular veil）を存することあり；能く発達せるものは表皮層（cuticle, pellicle）及び表皮下層（subhypodermal layer）とを有し，表皮層は往々3層即ち上表皮層（epicutis），中表皮層（subcutis）及び下表皮層（hypodermium）より成る。これ等各層をその構造上より見れば純然たる子実層が傘縁辺，茎の頂部等に存する所謂托外子実層（extrahymenial hymenium）なることあり，又形態これと類似する無性の子実層状被(hymeniform layer)，或は毛状を呈する毛状被（trichoderm），毛の柵状をなせる柵状被（trichodermal palisade），粘液を分泌せる粘毛被（ixotrichoderm），普通の短径の細胞状をなせる短細胞被（epithelium, cellular layer），平行に走る菌糸よりなる平行菌糸被（cutis）等に区別され，更にこれ等の各被を構成する要素を見れば托上に存する諸器官等の皮部に生ぜるもの，即ち皮嚢体（dermatocystidia），皮擬嚢体（dermatopseudocystidia），皮擬糸状体（dermatopseudoparaphyses），皮担子柄（dermatobasidia）等の外，肉中の菌糸の先端の伸出せるもの，或は球嚢（sphaerocyst）等の存することあり，なお皮嚢体はその存する位置によりて傘嚢体（pilocystidia, pileocystidia），茎嚢体（caulocystidia）と分称す，但し嚢状体につきては後項参照。

[托] 托の両側面には子実層を有し，担子柄（basidia）が並列し時に擬糸状体（pseudoparaphyses）を介在し，往々嚢状体等を混在す。担子柄は常に1室即ち単胞担子柄（holobasidia）にて，所謂前担子柄（probasidia）或は担子上嚢（epibasidia）を有することなし，常に柵状に並列し，その基端の隔膜は約同一水平面にありて，子実下層（subhymenial layer）の細胞に連続す，形多くは棍棒形にて時に細頸壜状のものあり，通常薄膜にて熟後速かに頽廃するも稀に厚膜のものあり，時に aceto-carmine 液にて濃色に染色さるる顆粒（カーミン染色粒 carminophilous granulation）を有す（シメジタケ属 *Lyophyllum*），頂に2或は4小柄を生じて胞子を着生す；小柄は多くは半鎌形に屈曲し，甚だ長きこと稀なり；担子柄にて未だ小柄を生ぜざる未熟なるものを小担子柄（basidiole）と称す。その形は当然担子柄と同様なるも往々小形にて細く，また稍々紡錘形に傾く。

擬糸状体は托の両側平行型の多くの種（ヒトヨタケ属 *Coprinus*）及び甚だ稀に楔型の種に於て認めらるるものにて，小担子柄とは相互の癒着及び分離の状を異にし内容なき大形の異形のものなり，これの存在によりて担子柄は多少規則正しく隔離され，恰も鋪道上に点在或は碁盤目の如き観を呈す。

[嚢状体] 嚢状体（cystidia）は広義に解釈せば子実体の各部に生ずる無性の嚢状菌糸体を指示す

るも漸次其の間に種々性質の異るものあるを知られ各々別称を用いるに至れり；まずその存在する位置によりて区別し，托上に存するものの内，褶或は管孔の壁に生ずるものを褶側嚢体 (pleurocystidia)，褶或は管孔の稜に生ずるものを稜嚢体 (cheilocystidia) と呼び，傘或は茎の無性表面上に存するものを皮嚢体 (dermatocystidia) と称し，更に傘上に生ずるものを傘嚢体 (pilocystidia, pileocystidia)，茎上に生ずるものを茎嚢体 (caulocystidia) と称す。但しこの区別は只その位置によるものなるが故に其の解剖的及び生理的の意義を有せざるものなり，従つて其の性質による区別を企てられあり，即ち真正嚢状体(true cystidia) と擬嚢状体 (pseudocystidia, false cystidia) とに分たれ，真正嚢状体は普通の菌糸に連結し成生するものにて，擬嚢状体とは肉中に存在する導管類に連結するものを指せり，但しその起原に於て屢々この区別点に一致せざる場合なきにあらず，それがために専らその全性質を参酌し箇々のものを考察さるる場合あり；真正嚢状体中，担子柄と同一水準より起り，ただその形によりてのみ担子柄或は擬糸状体と明かに異なるものあり，これを正嚢体 (cystidiole) と称し，屢々褶及び管孔の壁に於て存在するものなり，正嚢体にて稜に存在するものを稜嚢体 (cheilocystidia) なる上記の名称を使用す。若し嚢状体が正嚢体と異なり肉の菌糸或は子実下層の下部より起るものなる時はこれを類嚢体 (leptocystidia, ROMAGNESI, 1944) と称し，往々その1部厚膜となり又有色となりたる場合は通常剛毛体 (setuloid cystidia, setae) と称す。但し正嚢体と類嚢体との間に屢々推移形を認めらる。擬嚢体はベニタケ科 (*Russulaceae*) 及びミミナミハタケ (*Lentinellus*) 等に存在するものにて大嚢体 (macrocystidia, ROMAGNESI, 1944)，粘嚢体 (gloeocystidia)，及び篩嚢体 (coscinocystidia) 等之れに属す。大嚢体は acid-aldehyde 液にて暗色に変じ，その内容が cresyl-blue にて濃青色とならず，粘嚢体はその内容が cresyl-blue によりて濃青色となり，膜は淡菫色となる。(但し粘嚢体は極めて稀に之れを有する種類あるのみ)，篩嚢体は篩管の末端にてこれ亦稀に存す。然れ共大嚢体及び粘嚢体は必ずしも導管類と連結せざることあり，従つてかかる場合は化学的性質よりは明かに擬嚢状体なるも，その解剖的性質よりは明かに真正嚢状体と認めらる。斯くの如き類に属するものに metuloid (*Peniophora*-cystidium, lamprocystidia, ROMAGNESI 1944) 及び黄金嚢体 (chrysocystidia, ROMAGNESI 1944) 等あり，metuloid はサルノコシカケ類の *Peniophora* 属に普通に存在するものにて，キノコ類のアセタケ (*Inocybe*) その他にも見出され分泌作用を有し，のち厚膜となり其の頂端或は全表面に亙つて結晶を被むるものなり，又黄金嚢体は他と異なりてアンモニア液中にてその内容は特有なる黄色を呈するものを称し，両者共に解剖的には真正嚢状体にて化学的には擬嚢体と認めらる。この嚢状体の存否は何れも分類上重要なる特徴とさる。

[托実質] 子実層の下に多数の隔膜を有する小形菌糸の密なる子実下層 (subhymenium) と托実質 (hymenial trama) との間に両者と異る層あるときは之れを子実脚層 (hymenopodium) と称す。托実質 (hymenophoral trama) には次の4型あり，(FAYOD 1889)。

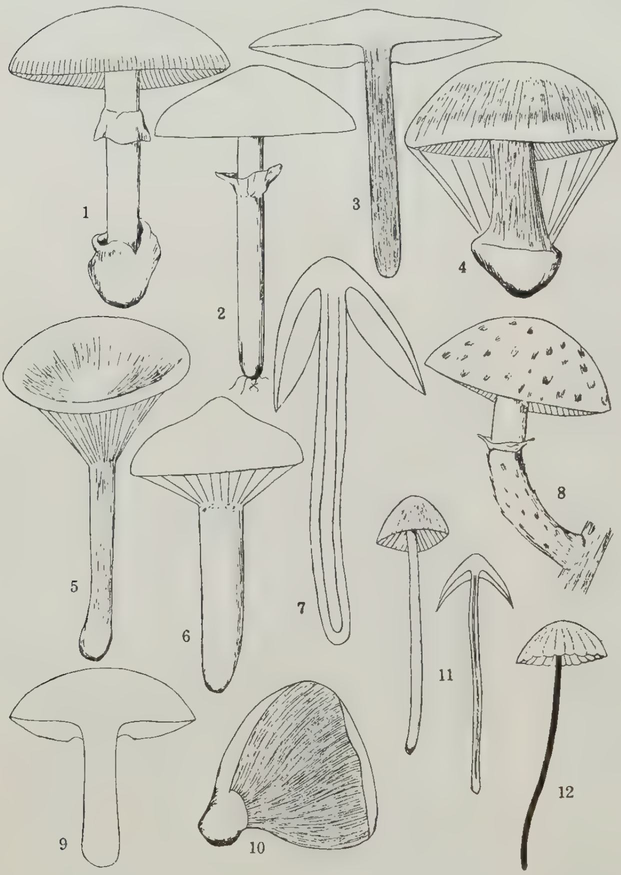
1. **混淆乃至不整型** (intermixed～irregular type) 托の縦断面に於て菌糸が平行或は一様に拡布することなく，互に屈曲混乱錯綜せるもの。
2. **類整型乃至整型** (subregular～regular type) 菌糸は完全に或は殆ど平行に且つ一様に走るもの。
3. **両側型** (bilateral type) 規則正しき中軸ありてその側層はやや平行に菌糸が走り，のち外側に屈曲して子実脚層或は子実下層に連結す，中軸と側層の菌糸は同径或は異径にて色，膠化度，密度，隔膜数によりて区別するを得。
4. **逆型** (inverse type) 中軸及び側層の存することは前型と同様なるも側層より外側に屈曲したる菌糸は前型と逆に稜に遠き方に進み子実脚層或は子実下層に連結するもの。

これ等は系統分類上重要なるものにて例えばテングタケ科 (*Amanitaceae*) に於てテングタケ族 (*Amaniteae*) に属するものは両側型なるにシカタケ族 (*Pluteeae*) に属するものは逆型，又アカヤマタケ科に於てヌメリガサタケ属 (*Hygrophorus*) は両側型，或は又ベニタケ科 (*Russulaceae*) は類整型～不整形或は混淆型等なるが如し。

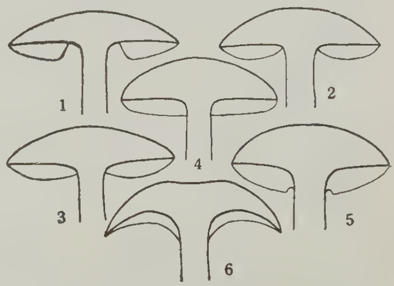
[胞子] 胞子 (芽胞 spore) は等径或は伸長し多くは楕円形或は卵形にて，往々類球形，円筒形或は紡錘形を呈し，更に外囲凹凸し，多角形，花形，或は星形となる。表面は平滑或は刺，疣，背稜 (畦)，網，点等の突起刻紋を有す。両側不等 (非左右相称 heterotropism) なること多く，稀にやや相称 (orthotropism)なり，上端は截頭或は円頭，下端の臍

部 (hilum) に臍穴 (suprahilar depression) 或は円形平滑なる臍蓋 (suprahilar disc) を有するものあり，更に臍蓋が糊性なるときは臍点 (hilar spot) と称し，非糊性なるときは胞子盤 (plage 仏語浜の義，KÜHNER 1926) と称し，ケガサタケ属 (*Galerina*) 等に対して重要なる特徴とせらる；膜は厚薄種々ありて単一或は複合にて有層，普通内膜(endosporium) と外膜 (exosporium) とを有し，(更に内膜を internal 及び external endosporium，外膜を episporium と exosporium とに分たるる場合あり)，外膜の外に全胞子を包む無色の嚢，すなわち外被 (perisporium) を有するものあり，時に内膜に短刺ありて膜中に埋在し表面より点状に見ゆ，有層の胞子にては屢々発芽孔を有す，発芽孔は外膜が中断し扁平となるにより胞子は截頭となる，若し胞子の頂部が薄くなりて多少円錐形に膨出せる時は特に乳頭 (callus, HEIM 1931) と呼び発芽孔と区別さる；膜は糊性，擬糊性或は非糊性*；胞子内の核は単核或は双核なり，初め担子柄中に於て核分裂が行われ，この分裂は常に横性 (chiastic) 即ち紡錘糸の方向は担子柄の縦軸に直角をなす (現今縦性分裂なるアンズタケ科 (*Cantharaceae*) は本目より除外せらる)。二回分裂の結果生ぜる 4 核が 4 胞子内に移動する際通常小柄内にて第 3 分裂をなし，1 核は胞子に入り他の 1 核は担子柄に戻りて頽廃す，若し第 3 分裂が胞子内にて行わるるときは双核の胞子となる。

胞子は小担子柄の成熟に従つて逐次経続的に成生され其の全数に至りては実に驚くべきものありて，BULLER 氏 (1909) はハラタケ (*Agaricus campestris*) の通常大の 1 傘より落下する胞子数は 1,800 百万個に及ぶと称せり，これ等胞子の落下分散は托の断面楔形のものに於ては容易なりと雖，両側平行形のヒトヨタケ (*Coprinus*) に於ては容易ならず，これ等の種類の褶はその外部より順次液化 (自家消化) を起し胞子分散に便ならしむ。



第 1 図 a. 子実体の主なる型 1. テングタケ (Amanita) 型 2. カラカサタケ (Lepiota) 型 3. エノキタケ (Collybia)型 4. フウセンタケ (Cortinarius) 型 5. カヤタケ (Clitocybe) 型 6. クギタケ (Gomphidius) 型 7. ヒトヨタケ (Coprinus) 型 8. スギタケ (Pholiota) 型 9. シメジタケ (Tricholoma) 型 10. ヒラタケ (Pleurotus) 型 11. クヌギタケ (Mycena) 型 12. ホウライタケ (Marasmius) 型



第 1 図 b. 褶の着生状
1. 隔生 2. 離生 3. 狭生
4. 直生 5. 彎生 6. 垂生

* 菌糸及び胞子の糊性に就きては現今極めて重要視されつつありて，その検定には基準試薬として MELZER 氏 (1924)液を用ゆ，本試薬の処方は次の如し。沃度加里 1.5g，沃度 0.5g，水 20cc，抱水クロラール 22g，本試薬にて糊性 (amyloid) のものは殆ど黒色～淡灰色，擬糊性のものの最終色は褐色～帯紫色，非糊性 (non-amyloid) のものは黄色～殆ど無色なり。

以上述ぶる胞子は厳格なる意義よりすれば担子柄胞子（basidiospore）とも称すべきものにて有性胞子なり，本目には尚これと異なる副胞子形を有することあり，例えば托或は傘に厚膜胞子（chlamydospore）を作り（ヤグラタケ *Asterophora*），又連鎖子（oidea）或は分生胞子（conidia）を生ずるものあり。

分類：—［FRIES–SACCARDO 氏分類］菌蕈類の分類出発点たる FRIES 氏（1821）の Systema Mycologicum に於ては菌蕈類 *Hymenomycetes*（Class）を 6 目（order）に分ち，その第 1 目 *Pileati* を直ちに 12 属に分ちたるが，そのうち本問題に直接関与するものはただ次の 3 属 *Agaricus*, *Schizophyllum* 及び *Boletus* あるに過ぎず，而して氏は *Agaricus* を胞子紋の色により 5 series と 2 亜属（*Coprinus*, *Gomphus*）となし，更に前者を 36 族（tribe）となせり，後氏及び継承者はこれ等 36 族を属に進級せしめ，益々胞子紋の色を重視し，SACCARDO 氏（1887）は Sylloge Fungorum に於ては全 Agaricaceae（イグチ類を除く）を 4 群に，Flora Italica Cryptogama，Hymeniales（1915–16）に於ては前記の如く次の 5 series に分ちたり，

Leucosporae	（白色胞子群）	23 属
Rhodosporae	（紅色胞子群）	9 属
Ochrosporae	（褐色胞子群）	13 属
Janthinosporae	（紫色胞子群）	7 属
Melanosporae	（黒色胞子群）	5 属

従来久しきに亙り多少の相違ありとするも大体に於てこの種の分類方式に準拠し，簡易人為的分類一覧表及び各属模型図をも記載さるるに至り，大に初学者の理解を容易ならしめたり，（次表参照）

旧式属分類一覧表（J. RAMSBOTTOM 氏（1923）による）

子実体 ＼ 胞子紋の色	白	ピンク	褐	紫	黒
A. 肉質					
a. 鍔或は壺存在					
1. 鍔及壺存在	テングタケ属 (*Amanita*)				ジンガサタケ属 (*Anellaria*)
2. 壺のみ存在	ツルタケ属 (*Amanitopsis*)	フクロタケ属 (*Volvaria*)	(*Acetabularia*)	(*Chitonia*)	
3. 鍔のみ存在					
イ. 褶は離生	カラカサタケ属 (*Lepiota*)	(*Annularia*)		ハラタケ属 (*Psalliota*)	
ロ. 褶は狭生或は僅か垂生	ナラタケ属 (*Armillaria*)		スギタケ属 (*Pholiota*)	モエギタケ属 (*Stropharia*)	
b. 鍔或は壺欠如					
4. 褶は蠟質	アカヤマタケ属 (*Hygrophorus*)				クギタケ属 (*Gomphidius*)
5. 褶は傷時乳汁滲出	チチタケ属 (*Lactarius*)				
6. 茎は偏心生或は欠如	ヒラタケ属 (*Pleurotus*)	カクミノコナカブリ属 (*Claudopus*)	チャヒラタケ属 (*Crepidotus*)		
7. 茎は軟骨質					
イ. 褶は垂生	ヒダサカズキタケ属 (*Omphalia*)	(*Eccilia*)	チャムクェタケ属 (*Tubaria*)		
ロ. 褶は直生或は離生	エノキタケ属 (*Collybia*)	アオエノモミウラタケ属 (*Leptonia*)	ムクエタケ属 (*Naucoria*)	ヒメシバフタケ属 (*Psilocybe*)	ヒカゲタケ属 (*Panaeolus*)
ハ. 褶は彎生	クヌギタケ属 (*Mycena*)	モミウラタケモドキ属 (*Nolanea*)	コガサタケ属 (*Galera*)	クズタケ属 (*Psathyra*)	ナヨタケ属 (*Psathyrella*)
8. 茎は肉質					
イ. 褶は離生	(*Hiatula*)	シカタケ属 (*Pluteus*)	オキナタケ属 (*Pluteolus*)	(*Pilosace*)	

胞子紋の色 子実体	白	ピンク	褐	紫	黒
ロ. 褶は彎生	シメジタケ属 (*Tricholoma*)	イッポンシメジタケ属 (*Entoloma*)	ワカフサタケ属 (*Hebeloma*)	イタチタケ属 (*Hypholoma*)	
ハ. 褶は垂生，叉状纒絡す	アンズタケ属 (*Cantharellus*)				
ニ. 褶は垂生，薄し	カヤタケ属 (*Clitocybe*)	ヒカゲウラベニタケ属 (*Clitopilus*)	ツムタケ属 (*Flammula*)		
ホ. 褶は垂生，傘肉より分離す	ヒダハタケ属 (*Paxillus*) (*Lepista*)		ヒダハタケ属 (*Paxillus*) (*Tapinia*)		
ヘ. 褶は直生，他の茸に寄生す	ヤグラタケ属 (*Nyctalis*)				
ト. 褶は直生，体は剛直，脆くして通常鮮色	ベニタケ属 (*Russula*)				
c. 蜘網状或は糸状被膜(ベール)を有す。					
9. 被膜は茎上に蜘網状消失性鍔を作る			フウセンタケ属 (*Cortinarius*)		
10. 被膜は傘面表皮に固着す			アセタケ属 (*Inocybe*)		
B. 膜質或は肉状膜質，脆く，速に腐敗或は縮み上る					
11. 褶は下より上方に液化す					ヒトヨタケ属 (*Coprinus*)
12. 液化作用なし			キオキナタケ属 (*Bolbitius*)		
C. 強靱，革質，或は木質					
a. 茎は中心生					
13. 褶は単一；乾燥品は水湿により複原す	ホウライタケ属 (*Marasmius*)				
14. 褶は分岐す	(*Xerotus*)				
b. 茎は側生或は欠如					
15. 褶は纒絡す	カイガラタケ属 (*Lenzites*)				
16. 褶は単一，稜は全縁	カワキタケ属 (*Panus*)				
17. 褶は単一，稜は歯状	マツオオジタケ属 (*Lentinus*)				
18. 褶稜は縦裂す	スエヒロタケ属 (*Schizophyllum*)				
19. 褶稜は鈍く，縮む	(*Trogia*)				

[KONRAD–MAUBLANC 氏分類] この間に於て漸次分類は進展し，以前サルノコシカケ類となしたるイグチ類は本目に，或は本目に収めたりしアンズタケ (*Cantharellus*) カイガラタケ (*Lenzites*) の類はサルノコシカケ類に移属せらるる等の変化を見，比較的近代に至り KONRAD, P. MAUBLANC, A. 両氏は共著 (Les Agaricales(1948) に於て本目を次の如く 6 科に，その第一科 マツタケ科 *Agaricaceae* を 12 族，総計 96 属に分類せり。

マツタケ目 *Agaricales* の科

I. マツタケ科 *Agaricaceae*：—肉は糸状菌糸より成り，就中，茎は繊維質なり；褶は薄くして鋭稜にて短かき担子嚢を有す。(79 属)

II. ベニタケ科 *Russulariaceae*；—甚だ自然的なる科にて他の者と明かに区分さる；肉は球嚢細胞を有し，茎に於ても然り，従つて脆弱割れ易し；

褶は厚く，托実質は整型；胞子紋は淡色；胞子は刻紋を有し，糊性。(2 属)

Ⅲ. アカヤマタケ科 *Hygrophoraceae*：—褶は疎にして厚く，甚だ長き担子柄を有す；胞子紋は白色；胞子は平滑。(1 属)

Ⅳ. クギタケ科 *Gomphidiaceae*；—褶は疎にして厚く，托実質は両側型；胞子は大にして紡錘形，平滑；胞子紋は銹～黒色。(2 属)

Ⅴ. ヒダハタケ科 *Paxillaceae*：—褶は垂生，薄くして柔軟，甚だ容易に剝げる，屢々脈によつて互に連結さる，実質は両側性；胞子紋は黄色；胞子は平滑。(2 属)

Ⅵ. アミタケ科 *Boletaceae*：—肉質；子実層は管孔状，傘より容易に剝げるのを常とす。(10属)

マツタケ科 *Agaricaceae* の族

1. テングタケ族 *Amaniteae* 外被膜 (universal veil)＝壺 (volva)；及び内被膜 (partial veil)＝鍔 (annulus) とを有す；托実質は両側型 (bilateral type)；胞子は白色，発芽孔なし。(3 属)

2. キツネノカラカサタケ族 *Lepioteae* 壺なくして内被膜存在す；托実質は整型 (regular type)；胞子は白色。(3 属)

3. シカタケ族 *Pluteae* 外被膜は存在し，永存或は早失；托実質は逆型 (inverse type)；胞子バラ色，発芽孔なし。(2 属)

4. ハラタケ族 *Agariceae* 外被膜は存在し，早失或は永存；内被膜は鍔を作る；托実質は整型；胞子は濃褐紫色，発芽孔あり。(1 属)

5. ヒトヨタケ族 *Coprineae* 脆弱菌にて急に発育す；傘の被膜は細胞状；胞子は黒色，濃褐或は褐紫色なるも菫色ならず，発芽孔を有す。(6 属)

6. モエギタケ族 *Strophariеae* 前者に類似す；前者ほど脆弱ならず，屢々生色；傘の被膜は細胞状ならず；胞子は菫色或は淡菫色にて黒色或は褐色ならず。(4 属)

7. スギタケ族 *Pholioteae* 外被膜は早失性，屢々内被膜あり；胞子は黄土色，本族及び次の族は胞子の黄土色の種類全部を含む。(13 属)

8. フウセンタケ族 *Cortinarieae* 外被膜は蜘網膜 (cortina) となる，胞子は黄土色。(6 属)

9. イッポンシメジタケ族 *Entolomeae* 胞子はバラ色，稜形。(5 属)

10. エノキタケ族 *Collybieae* 瀟洒たる菌，茎は軟骨質；胞子は白色。(10 属)

11. シメジタケ族 *Tricholomeae* 肉質菌；傘及茎は同質；胞子は白色或は淡色。(13 属)

12. ヒラタケ族 *Pleuroteae* 材上菌にて茎は偏生，側生或は無茎；褶は垂生；胞子は白色或は淡色。(13 属)

[SINGER 氏分類] SINGER 氏は已に 1936 年マツタケ目の分類 (Das System der Agaricales —Ann. Myc. 34:286) を公にし，更に進んで 1949 年大著 The "Agaricales" (mushrooms) in modern taxonomy を公表し，次ぎの 15 科 (164 属) に分てり。

1.	アカヤマタケ科	*Hygrophoraceae*	(5属)
2.	シメジタケ科	*Tricholomataceae*	(67属)
3.	テングタケ科	*Amanitaceae*	(7属)
4.	ハラタケ科	*Agaricaceae*	(15属)
5.	ヒトヨタケ科	*Coprinaceae*	(9属)
6.	オキナタケ科	*Bolbitiaceae*	(7属)
7.	モエギタケ科	*Strophariaceae*	(8属)
8.	フウセンタケ科	*Cortinariaceae*	(13属)
9.	チャヒラタケ科	*Crepidotaceae*	(4属)
10.	イッポンシメジタケ科	*Rhodophyllaceae*	(3属)
11.	ヒダハタケ科	*Paxillaceae*	(4属)
12.	クギタケ科	*Gomphidiaceae*	(2属)
13.	アミタケ科	*Boletaceae*	(15属)
14.	オニイグチタケ科	*Strobilomycetaceae*	(3属)
15.	ベニタケ科	*Russulaceae*	(2属)

同氏は広く各地を旅行し，広汎なる見地に立ち一貫せる調査研究の結果を取りまとめたるものにて，今後相当の論議あるべしと雖，少くとも現在に於ては最高位に存するものなるべし，而して本分類を理解するには前記の KONRAD, MAUBLANC 両氏の分類を知るを可とし，且つ両氏の記せる対照表を見るを便とするにより次にこれを掲ぐ。

SINGER 氏分類 ： KONRAD–MAUBLANC 氏分類

Ⅰ. アカヤマタケ科 *Hygrophoraceae* ：
　　アカヤマタケ科 *Hygrophoraceae*

Ⅱ. シメジタケ科。 *Tricholomataceae* ：
　　シメジタケ族 *Tricholomeae*
　　エノキタケ族 *Collybieae*
　　ヒラタケ族 *Pleuroteae* 一部

Ⅲ. テングタケ科 *Amanitaceae* ：
　　テングタケ族 *Amaniteae*
　　シカタケ族 *Pluteae*

Ⅳ. ハラタケ科 *Agaricaceae* ：
　　ハラタケ族 *Agariceae*

キツネノカラカサタケ族 *Lepioteae*
スギタケ族 *Pholioteae*

V. ヒトヨタケ科 *Coprinaceae* :
ヒトヨタケ族 *Coprineae*

VI. オキナタケ科 *Bolbitiaceae* :
スギタケ族 *Pholioteae* 一部

VII. モエギタケ科 *Strophariaceae* :
モエギタケ族 *Stropharieae*
スギタケ族 *Pholioteae* 一部

VIII. フウセンタケ科 *Cortinariaceae* :
フウセンタケ族 *Cortinarieae*
スギタケ族 *Pholioteae* 一部

IX. チャヒラタケ科 *Crepidotaceae* :
チャムクエタケ属 *Tubaria*
シロクモノスタケ属 *Riparites*
チャヒラタケ属 *Crepidotus*
コナカブリタケモドキ *Pleurotellus*

X. イッポンシメジタケ科 *Rhodophyllaceae* :
イッポンシメジタケ族 *Entolomeae*
ヒカゲウラベニタケ属 *Clitopilus*
ムツノウラベニタケ属 *Rhodocybe*

XI. ヒダハタケ科 *Paxillaceae* :
ヒダハタケ科 *Paxillaceae*

XII. クギタケ科 *Gomphidiaceae* :
クギタケ科 *Gomphidiaceae*

XIII. アミタケ科 *Boletaceae*
XIV. オニイグチタケ科 *Strobilomycetaceae* } :
アミタケ科 *Boletaceae*

XV. ベニタケ科 *Russulaceae* :
ベニタケ科 *Russulaceae*

本表によりてイグチ科は2科に分れ，各族は各々合同して独立科に昇格せるを知るべし，本書に於ては SINGER 氏の分類を採用し只便宜上，科の配列順序を変更せり。

科検索表

A. 傘茎の肉は均一にて糸状菌糸より成り球嚢を含まず。

a. 子実層托は管孔を有し，以前サルノコシカケ類に収められたり；肉質菌；托は傘肉より離れ易し；托実質は両側型。

α. 胞子は平滑，多くは小中形；紋はオリーブ，肉桂，鹿の子，ピンク，黄土，レモン色等。
アミタケ科 Boletaceae (13)

β. 胞子は刻紋を有し，稀に平滑，多くは大形；紋は黒，帯緑，濃褐，暗褐，茶褐色等；菌絆なし。
オニイグチタケ科 Strobilomycetaceae (43)

b. 子実層托は管孔状ならず。

α. 托は襞状にて多くは脈により連結され網目を作り或は叉状に分岐す，傘より剝げ易し；托実質は両側型；胞子は小中形，平滑或は疣刺あり；紋は類白，淡黄土～褐色；菌絆あり。
ヒダハタケ科 Paxillaceae(47)

β. 托は褶状。

I. 褶は疎にして厚し，垂生。

1. 胞子は大形，平滑；紋は黒褐，類黒色；托実質は両側型；菌絆なし。
クギタケ科 Gomphidiaceae (52)

2. 担子柄（小柄を含む）は異常的に長く胞子長の約 5.5～7 倍；褶は蠟質；胞子は小中形，平滑；紋は白色；菌絆あり；托実質は両側型（ヌメリガサタケ属 *Hygrophorus*）或は非両側型（オトメノカサタケ属 *Camarophyllus*，アカヤマタケ属 *Hygrocybe*）。
アカヤマタケ科 Hygrophoraceae (56)

II. 褶は薄くして鋭稜，蠟質ならず；担子柄は短棍棒形；従来 *Agaricaceae* と総称せるものにて各族を分合して科となせるものなれば特に注意を要す。

1. 胞子は角形ならず。

甲. 胞子紋は淡色系

い. 褶は深き垂生～狭生にて離生ならず；胞子は糊，非糊或は擬糊性，発芽直前単核，発芽孔なし；紋は純白或は僅かクリーム，ピンク，淡灰，淡緑等にて濃鮮色ならず；托実質は大部分のものは両側或は逆型ならず，只一族モミタケ族(*Biannularieae*）丈は幼時両側型なるも後科とは褶の離生ならざること及び核の状を異にす；本科は他科の独立せし際取り残されたるものの集りの如き観を呈し，従つて範囲広汎にて千差万別のものを含む。
シメジタケ科Tricholomataceae(87)

ろ. 褶は離生或は殆ど離生；傘茎共に肉質にて離れ易し；托実質は両側型にて胞子紋白，クリーム，帯緑色のもの（テングタケ族 *Amaniteae*）と実質は逆型にて紋ピンク，帯褐ピンク色のもの(シカタケ族 *Pluteae*)と

あり；胞子は糊或は非糊性，発芽直前，双核，発芽孔なし；被膜はよく発達し，壺及鍔を有するもの，その1或は両者を欠くものあり。

テングタケ科 Amanitaceae (224)

乙．胞子紋は淡色～暗色系にて純白，クリーム，黄土，緑～オリーブ，ピンク等の族（キヌカラカサタケ族 *Leucocoprineae*，キツネノカラカサタケ族 *Lepioteae* シワカラカサタケ族 *Cystodermatae*）と紫褐色，セピア等の族（ハラタケ族 *Agariceae*）とあり；傘茎は穀粉～鱗片状の被覆物を有し，鍔の存在により特有の観を呈す；褶は薄く離生，稀に狭生，直生，或は垂生；托実質は整型～不整型；胞子は比較的厚膜，発芽孔は存在或は欠如，多くは擬糊性，通常双核；壼或は鍔，又は両者を存す；担子柄は小形；稜嚢体は欠如或は不明瞭又は早失；黄金嚢体なし；菌絆存在或は欠如。

ハラタケ科 Agaricaceae (264)

丙．胞子紋は暗色系；托実質は両側或は逆型ならず；胞子は発芽前大部分双核．

い．胞子は発芽孔を有す。

イ．托は両面平行型；胞子は濃暗褐色或は黒色；傘面屢々扇襞状；熟後液化す（ヒトヨタケ亜科 *Coprinarioideae*）

ヒトヨタケ科 Coprinaceae[1] (295)

ロ．托は横断面楔形。

* 上表皮層は子実層状或は短細胞状被より成る。

° 胞子紋は帯紫暗褐色～黒色，或は稀に銹ピンク或は帯紫バラ色等にて胞子は濃硫酸によりて淡スレート色となるもの（ナヨタケ亜科 *Psathyrelloideae*）と；紋は黒又は濃帯紫暗褐色にて胞子は濃硫酸によりて脱色せざるもの（ヒカゲタケ亜科 *Panaeoloideae*）とあり；褶は離生ならず子実体は熟後液化せず，

ヒトヨタケ科 Coprinaceae[2] (295)

°° 胞子紋は鮮銹色～濃銹色或は銹暗褐色又は赭褐色にて紫彩なし；胞子は平滑，常に発芽孔あるも不明瞭のことあり；菌絆あり。**オキナタケ科**

Bolbitiaceae (319)

** 上表皮層は常に匍匐菌糸より成る；褶は類離生～垂生；鍔は欠如或は存在，壼なし；胞子紋は暗紫褐色～濃暗褐セピアにて紫彩あり；担子柄は小～大；稜嚢体を存し通常稜を異質とす；多くは褶側に黄金嚢体あり；菌絆あり。**モエギタケ科**

Strophariaceae (330)

ろ．胞子は発芽孔を有せず。

イ．胞子紋は粘土褐色～甚だ鮮かなる銹色；胞子は常に複膜，発芽孔なきも屢々乳頭あり，多くは種々の突起あり，多くは双核；茎は中心生なるも稀に偏生，側生，或は無茎；稜嚢体多く，褶側嚢体稀なり；屢々真の蜘網膜あり；特有の metuloid を有す；多くは菌絆あり。**フウセンタケ科**

Cortinariaceae (355)

ロ．胞子紋は帯褐～淡褐黄色にて鮮銹色ならず；胞子は膜の分化著しからず，平滑，稀に点或は小刺あるも疣瘤なし，屢々単核；茎は偏生，側生或は無茎；褶は垂下；被膜は膜状或は蜘網状或は欠如；稜嚢体は屢々存在，褶側嚢体なし；著しき metuloid なし；菌絆は存在或は欠如。**チャヒラタケ科**

Crepidotaceae (421)

2．胞子は何れの側より見るも角形或は上下側より見たるときのみ角形；膜は非糊性；紋はピンク色。**イッポンシメジタケ科**

Rhodophyllaceae (430)

B．傘茎の肉は不均一にて球嚢を含み，脆弱にて割れ易し；胞子は常に糊性の刻紋を有す；紋は白，クリーム，深黄土色；菌糸は常に菌絆なし；褶は離生～垂生，屢々同長にて多数；托実質は整型～不整型；乳汁欠如（ベニタケ属 *Russula*）或は存在（チチタケ属 *Lactarius*）

ベニタケ科 Russulaceae (449)

本邦既知科及属一覧表

I. アミタケ科	***Boletaceae***
1. クリイロイグチタケ亜科	Gyrodontoideae
クリイロイグチタケ属	*Gyroporus*
2. ヌメリイグチタケ亜科	Suilloideae
アミハナイグチタケ属	*Boletinus*
ヌメリイグチタケ属	*Suillus*
3. アワタケ亜科	Xerocomoideae
キヒダタケ属	*Phylloporus*
アワタケ属	*Xerocomus*
4. イグチタケ亜科	Boletoideae
キイロイグチタケ属	*Pulveroboletus*
イグチタケ属	*Boletus*
ニガイグチタケ属	*Tylopilus*
ヤマイグチタケ属	*Leccinum*
II. オニイグチタケ科	**Strobilomycetaceae**
オニイグチタケ属	*Strobilomyces*
クロイグチタケ属	*Porphyrellus*
キクバナイグチタケ属	*Boletellus*
III. ヒダハタケ科	**Paxillaceae**
ヒロハアンズタケ属	*Hygrophoropsis*
ヒダハタケ属	*Paxillus*
IV. クギタケ科	**Gomphidiaceae**
クギタケ属	*Gomphidius*
V. アカヤマタケ科	**Hygrophoraceae**
ヌメリガサタケ属	*Hygrophorus*
オトメノカサタケ属	*Camarophyllus*
アカヤマタケ属	*Hygrocybe*
VI. シメジタケ科	**Tricholomataceae**
1 シメジタケ族	Lyophylleae
シメジタケ属	*Lyophyllum*
ユキワリタケ属	*Calocybe*
ヤグラタケ属	*Asterophora*
2 カヤタケ族	Clitocybeae
i. カヤタケ亜族	Clitocybinae
キツネタケ属	*Laccaria*
ツキヨタケ属	*Lampteromyces*
カヤタケ属	*Clitocybe*
ムラサキシメジタケ属	*Lepista*
サマツタケモドキ属	*Tricholomopsis*
モリノカレバタケ属	*Collybia*
スギヒラタケ属	*Pleurocybella*
ii. キシメジタケ亜族	Tricholomatinae
ヒダサカズキタケ属	*Omphalina*
ナラタケ属	*Armillariella*
キシメジタケ属	*Tricholoma*
3 オオイチョウタケ族	Leucopaxilleae
クロサカズキシメジタケ属	*Cantharellula*
オオイチョウタケ属	*Leucopaxillus*
ミミナミハタケ属	*Lentinellus*
ザラミノシメジタケ属	*Melanoleuca*
4 シジミタケ族	Resupinateae
シジミタケ属	*Resupinatus*
ムキタケ属	*Hohenbuehelia*
5 ワサビタケ族	Panelleae
ワサビタケ属	*Panellus*
スズメタケ属	*Dictyopanus*
6 スエヒロタケ族	Schizophylleae
スエヒロタケ属	*Schizophyllum*
7 マツオオジタケ族	Lentineae
キヒラタケ属	*Phyllotopsis*
ヒラタケ属	*Pleurotus*
カワキタケ属	*Panus*
マツオオジタケ属	*Lentinus*
8 ヒナノヒガサタケ族	Hemimyceneae
ツエタケ属	*Oudemansiella*
ビロウドツエタケ属	*Xerula*
ヒナノヒガサタケ属	*Marasmiellus*
エノキタケ属	*Flammulina*
クリイロムクエタケ属	*Macrocystidia*
9 ホウライタケ族	Marasmieae
i. ホウライタケ亜族	Marasmiinae
マツカサキノコ属	*Pseudohiatula*
ホウライタケ属	*Marasmius*
ニセホウライタケ属	*Crinipellis*
ii. クヌギタケ亜族	Myceninae
ヒメヒロヒダタケ属	*Fayodia*
クヌギタケ属	*Mycena*
ニセマツカサシメジタケ属	*Baeospora*
ヒメカバイロタケ属	*Xeromphalina*
アミヒカリタケ属	*Filoboletus*
10 モミタケ族	Biannularieae
モミタケ属	*Catathelasma*
VII. テングタケ科	**Amanitaceae**
1 テングタケ族	Amaniteae
テングタケ属	*Amanita*
ヌメリカラカサタケ属	*Limacella*
ホシアンズタケ属	*Rhodotus*
2 シカタケ族	Pluteeae
フクロタケ属	*Volvariella*

シカタケ属 *Pluteus*

VIII. ハラタケ科 Agaricaceae

1 キヌカラカサタケ族 Leucocoprineae

オオシロカラカサタケ属 *Chlorophyllum*

カラカサタケ属 *Macrolepiota*

キヌカラカサタケ属 *Leucocoprinus*

2 ハラタケ族 Agariceae

ハラタケ属 *Agaricus*

アカヒダカラカサタケ属 *Melanophyllum*

3 キツネノカラカサタケ族 Lepioteae

キツネノカラカサタケ属 *Lepiota*

4 シワカラカサタケ族 Cystodermateae

シワカラカサタケ属 *Cystoderma*

コガネタケ属 *Phaeolepiota*

IX. ヒトヨタケ科 Coprinaceae

1. ヒトヨタケ亜科 Coprinoideae

ヒトヨタケ属 *Coprinus*

2. ナヨタケ亜科 Psathyrelloideae

イヌセンボンタケ属 *Pseudocoprinus*

ナヨタケ属 *Psathyrella*

3. ヒカゲタケ亜科 Panaeoloideae

ヒメシバフタケ属 *Panaeolina*

ヒカゲタケ属 *Panaeolus*

ジンガサタケ属 *Anellaria*

X. オキナタケ科 Bolbitiaceae

コガサタケ属 *Conocybe*

ツチイチメガサタケ属 *Pholiotina*

オキナタケ属 *Bolbitius*

フミヅキタケ属 *Agrocybe*

XI. モエギタケ科 Strophariaceae

1. モエギタケ亜科 Stropharioideae

モエギタケ属 *Stropharia*

クリタケ属 *Naematoloma*

シビレタケ属 *Psilocybe*

2. スギタケ亜科 Pholiotoideae

スギタケ属 *Pholiota*

センボンイチメガサタケ属 *Kuehneromyces*

XII. フウセンタケ科 Cortinariaceae

1 アセタケ族 Inocybeae

アセタケ属 *Inocybe*

ワカフサタケ属 *Hebeloma*

チャニセムクエタケ属 *Naucoria*

2 フウセンタケ族 Cortinarieae

ショウゲンジタケ属 *Rozites*

フウセンタケ属 *Cortinarius*

ヒダホテイタケ属 *Leucocortinarius*

チャツムタケ属 *Gymnopilus*

カワムラジンガサタケ属 *Phaeocollybia*

ケコガサタケ属 *Galerina*

ヒメスギタケ属 *Phaeomarasmius*

XIII. チャヒラタケ科 Crepidotaceae

チャムクエタケ属 *Tubaria*

シロクモノスタケ属 *Ripartites*

チャヒラタケ属 *Crepidotus*

コナカブリタケモドキ属 *Pleurotellus*

XIV. イッポンシメジタケ科 Rhodophyllaceae

ヒカゲウラベニタケ属 *Clitopilus*

ムツノウラベニタケ属 *Rhodocybe*

イッポンシメジタケ属 *Rhodophyllus*

XV. ベニタケ科 Russulaceae

ベニタケ属 *Russula*

チチタケ属 *Lactarius*

Boletaceae R. MAIRE アミタケ科

R. MAIRE, Bull. Soc. Bot. Fr. tab. 1901 (ut *Boletacées*)–SINGER, Agaricales, 641, 1949。

傘は無毛或は大小の鱗片，繊維，顆粒，軟毛又は絨毛を被むり，屢々亀裂を生ず，粘性或は乾燥，小～大形；縁は時に突出す；子実層托は管孔状，稀に褶状（キヒダタケ属 *Phylloporus*）なり；管孔は短～長，茎周に垂生，直生或は接着又は離生す，各管孔の結合度は比較的弱し，白色，灰色，黄色，橙色或は赤色を呈す；孔口は甚だ小形にて時に幼時閉塞され，或は初めより開口して広し，多くは一様に分散するも，往々放射状に配列し縦壁が褶襞状をなすことあり，これをイグチ褶襞（boletinoid hymenophore）という。この時は托は傘より分離せざれども，一般には容易に分離す，孔口は円形或は角形なるも，褶状托のものはイグチ褶襞より更に褶状をなし只僅少の横脈にて連結せらる，屢々管孔と同色にて往々橙色，赤色或は赤褐色を呈し，後屢々オリーブ色或は帯黄褐色となり，切傷により汚鉛色，青色，緑色又は黒色に変ず；胞子は成熟するも尚著しき色を呈さずして，淡蜜色，帯褐蜜色，淡黄色或は無色にて，稀に鮮黄金色のものあり，平滑にて一様の膜を有し，厚さ稀に 1μ に及び，長さ稀に 20μ を超

す，発芽孔及び乳頭なく，球形，類球形，短楕円形，卵形，紡錘状円筒形或は円筒形を呈す；胞子紋はオリーブ色，肉桂色，帯赤ピンク色，帯黄褐色，帯褐淡黄色或はレモン色を呈す；担子柄及び嚢状体は小形或は大形；托実質は両側型；菌糸は菌絆を有し或は欠如す；茎は円筒形にて同幅，或は基部狭細又は肥大し，往々球根状，或は中部肥大して便腹状をなす，表面は平滑無毛，或は小腺点，粒，粉状綿絮，痂皮状鱗片又は網状線，浅き又は隆起せる網状脈を有す，中実，充塞或は中空；被膜は屢々存在し，膜質，膜状綿絮質，膠質或は粉質，茎上に消失性或は永存性の鍔を作り，傘縁に縁膜片を残す；地上，稀に腐木上に生じ，多くは林木に菌根を作り，甚だ稀に地中菌の生子実体に寄生す；多くは無毒にて食用とせらるるも有毒のものあり；4亜科に分つ。

本科の分類は比較的近代に至りて整理せられたところにして，分類の出発点たる E. FRIES 氏 (1821) の Systema mycologicum に於てはサルノコシカケ科 (*Polyporaceae*) 中の只1属 *Boletus* に収められ 20 種を載せられたるに過ぎず，其後研究進み今や2科 18 属を収められ，マツタケ目に移属さるるに至れり，斯くの如き移属は目下殆ど定説となりあるところにして，殊にイグチ類の托実質が皆大なり小なり両側型なるは全然サルノコシカケ科に於て認められざる性質にて，ヒダハタケ科 (*Paxillaceae*)，クギタケ科 (*Gomphidiaceae*) に近縁なるを示すものなり。

亜科検索表

A．菌絆は常に存在；管孔はイグチ褶襞ならず；胞子は楕円形或は球形にて長さ幅の2倍以上とならず。

（I） クリイロイグチタケ亜科 **Gyrodontoideae** （14）

B．菌絆欠如或は極めて少数，但し只1属（第二亜科ハナイグチタケ属 *Boletinus*）に於て一定せざるも，この属の管孔はイグチ褶襞にて胞子長きにより前科と区分さる。

a．子実層托はイグチ褶襞，或は全部赤色～ピンク色，或は茎に小腺点あり；殆ど全部針葉樹に菌根を作る。

（II） ヌメリイグチタケ亜科 **Suilloideae** （16）

b．子実層托はイグチ褶襞ならず，又内部赤～ピンク色ならず，又茎に小腺点なし。

α．托実質は所謂両側型の *Boletus* 亜型にて側層の菌糸は中軸よりも淡色にて，甚しく膠化するが為めに弛く配列され，初めは著しく屈曲す。

I．傘は膠性或は粘性，(粘性ならざるものはイグチ褶襞なり)；菌糸は全部針葉樹に菌根を作る，従つて針葉樹林にのみ産す．(ヌメリイグチタケ亜科の一部)

II．傘は乾燥或は粘性なるも前亜科の如く甚しからず，菌糸は針葉樹に菌根を作るものあれども多くは広葉樹に関係し或は多分菌根を作らず。

（IV） イグチタケ亜科 **Boletoideae** （28）

β．托実質は所謂両側型の *Phylloporus* 亜型にて側層は中軸より弛からずして只僅か拡布し殆ど同色，その壁は互に接触し，老時幾分不規則となる；子実層托は管孔状或は褶状。

（III） アワタケ亜科 **Xerocomoideae** （24）

（I） **Gyrodontoideae** SINGER (1945) **クリイロイグチタケ亜科**

菌糸は常に菌絆を有す；胞子は楕円形或は球形；胞子紋は帯褐色或は黄色；本亜科に4属を収む。

本邦既知属 クリイロイグチタケ属 **Gyroporus** （14）

（シワイグチタケ属 *Gyrodon* は本邦に産するや否や不確実）

Gyroporus QUÉL. em. PAT.
クリイロイグチタケ属

QUÉLET, Enchir. Fung. 161, 1886—PATOUILLARD, Hymen. Eur. 130, 1887; Ess. Tax. 124. 1900—SINGER, Agaricales, 643, 1949.

Suillus KARSTEN, Hattsv. 2:1, 1882 (non S. F. GRAY, 1821)

Coelopus BATAILLE, Bolets, 12, 1908.

Leucobolites G. BECK, Zeitschr. Pilzk. 2:146, 1923.

Leucoconius G. BECK, l. c. 2:146, 1923.

子実体は肉質，少しく早腐性，中～大形；傘の表面は非粘性，無毛～粗なる繊維状類鱗片を被むる；外皮は匍匐～斜上せる薄膜或は厚膜の伸長せるも往々寧ろ短き太き菌糸より成る，その先端部は屢々類嚢状体となりて柵状に並列す；子実層托は管孔状にて小～大形の孔口を有し，茎周に接着す，寧ろ

長し，白色，ピンク色，或は淡藁色；胞子紋は黄色；胞子は淡藁色〜黄色，楕円形，通常幅の2倍よりも長きことなく，中等大なるも寧ろ変化し易し；嚢状体は管孔壁及び孔口稜に生ず；托実質は両側型の *Boletus* 亜型；茎は中空或は中実，表面は無毛或は纖維状，類糠状にて，網目，小腺，被膜，擬菌核等なし；肉は白色或は類白色，傷により不変色或は青色となる；菌糸は常に菌絆あり；普通の無機試薬にて僅か着色するか或は全く反応なし；boletol を含まず（GILBERT，1931）；針葉或は広葉樹下地上に生じ，多分菌根を作るべきも，屢々木に関係なき野外にも生ず；温帯及熱帯地方産，約7種を知らる，全種優良なる食用菌なり。

（本属名は gyros〔希〕（円），poros〔希〕（軽石，孔より出づ）

基準種 *G. cyanescens* (BULL. ex FR.) QUÉL.

本邦既知種　クリイロイグチタケ

G. castaneus　(15)

Gyroporus castaneus (BULL. ex FR.) QUÉL.

クリイロイグチタケ

QUÉLET, Enchir. Fung. 161. 1886—PATOUILLARD, Ess. Tax. 124. 1900—MURRILL, Mycologia, 1 : 14. 1909; N. Am. Fl. 9 : 134. 1910; Mycologia, 5 : 1, pl. 80, f. 1. 1913—REA, Brit. Basid. 554. 1922—GILBERT, Bolets, 101, pl. 16, f. 46. 1931—SINGER, Farlowia, 2 : 237. 1945; Agaricales, 644. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 133. 1952—HONGO, Trans. Facul. Educ. Shiga Univ. 4 : 55, f. G. 1955—HEIM, Champ. Eur. 2 : 143, f. 139, B. 1957.

（今関，Nagaoa, 2 : 41. 1952—原，日．菌．目．144. 1954—松田及本郷，植．研．雑．31 : 200. 1956—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，83, f. 212, pl. 37, f. 212. 1957）

Boletus castaneus BULL. Herb. Fr. 324, pl. 328. 1776—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 509. 1801; Myc. Eur. 2 : 137. 1825—D. C. Fl. Fr. 2:124. 1815—FRIES, Syst. Myc. 1 : 392. 1821; Epicr. Myc. 426. 1838; Hymen. Eur. 517. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 236. 1860—BARLA, Champ. Nice, 66, pl. 32, f. 11-15. 1859—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:436. 1844—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 248. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 :261. 1871—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 267. 1872—GILLET, Champ. Fr. 633, c. ic. 1874—WINTER, Pilze, 1:460. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 6:45. 1888; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 900. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1 : 271. 1892; Brit. Fungi, 357. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 330. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 75, pl. 79, f. 177. 1910—NEUMAN, Polyp. Wisc. 122, pl. 25, f. 84. 1914—BRESADOLA, Icon. Myc. 19:pl. 940. 1931—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 6 : 473. 1937—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 221, pl. 87, f. 2. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 35. 1953.

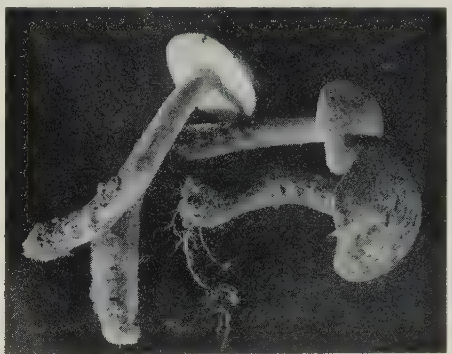
（白井，日．菌．目．ed. 3. 54. 1927—川村，日．菌．図鑑，2 : 277, f. 248. 1954）

Suillus castaneus POIRET, in KARSTEN, Hattsv. 2:1. 1882—SCHROETER, Pilze Schles. 1:496. 1888—KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2) : 535. 1898—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 190. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1) : 242, pl. 39. 1912.

(P. HENNINGS, Bot. Jahrb. 31 : 737. 1902; 32 : 40. 1903—松村，植．名鑑，1 : 175. 1904—白井，日．菌．目．ed. 2. 643. 1917)

Coelopus castaneus BAT. Bolets, 13. 1908.

子実体は群生或は孤生；傘は径5—10 cm，丸山形，のち不規則に扁平となり，或は中央圧低，又は稀に全く盃状となる；表面は肉桂色〜栗褐色，通常周縁淡色，非粘性，微細の絨毛を被むり，稀に殆ど無毛なり；肉は白色或は帯白色にて，空気に触れて変色



第2図　クリイロイグチタケ Gyroporus castaneus ×1/2　（大谷氏）

せず，緊緻にて肉質，のち柔軟にて脆し，味温和，臭なし；托は茎周に接着し，白色或は帯白色，のちクリーム色〜淡黄色或は淡レモン黄色となり，往々傷により褐斑を生ず；管長は 3—6 mm にて 8 mm に及ぶことあり；孔口は小形〜中形，(1 mm に 1—3 個)，円形；茎は 4—8×1—2.5 cm，傘面と同色，通常頂部淡色，僅かに絨毛あり，非粘性，時に不規則なる溝あり，上方に狭細，まれにやや同幅，充塞或は中空；被膜なし；胞子は楕円形，臍上板を有し，平滑，殆ど無色〜淡黄色，1油球を含み，非糊性，7—11×4.5—6 μ；胞子紋は黄色〜シトロン黄色；担子柄は 27—40×8—11 μ，4胞子；孔縁に於ける嚢状体は多生，突錐形，長さ 20—55 μ，基部幅 4—6 μ，薄膜，無色，孔壁に於けるものは散生，多少紡錘形，

38—46×7—11 μ；托実質は真の両側型にて所謂 *Boletus* 亜型；菌糸は菌絆を有す；可食。

所在及産地

林地，草原地上—夏秋　北海道，本州—欧，北米，北阿，濠。

和名　クリイロイグチタケ（栗色猪口茸）〔今井〕
　　クリイグチ（栗猪口）〔方言〕
　　アカタケ（赤茸）〔池野〕

（II） **Suilloideae** SINGER（1945）

ヌメリイグチタケ亜科

傘は膠性或は粘性，或は湿時稀にやや粘性，或は粘性ならず（但しこの時は子実層托はイグチ褶襞なり，従つてイグチタケ亜科より区分さる，粘性の場合は本亜科にてはイグチ褶襞或は然らず）；茎は小腺点を有し或は欠如；被膜(鍔)は膠質或は纖維状膜質或は欠如す（被膜は同時に粉状にて鮮黄なること決してなし）；茎は通常多少同幅，明かなる擬菌核なし，中実或は中空；子実層托は単に孔口のみならず全部橙黄色，濃暗赤色或はピンク色，若し他色なれば常に針葉樹に菌根を作るものなるにより区別さる；菌糸は菌絆なく，只1属に存す；4属を収め，本邦2属を知らる。

本邦既知属検索表

A．被膜欠如；傘面粘性
　　ヌメリイグチタケ属　**Suillus**[1]　(16)
B．被膜は少くとも幼時には存在す
　a．茎に小腺点存在或は欠如；傘は幼時中丘上粘性，傘面無毛或は拭い去らるる纖維あり，托はイグチ褶襞或は小孔を有す；菌絆欠如；茎は中実
　　ヌメリイグチタケ属　**Suillus**[2]　(16)
　b．茎に小腺点なし；傘は非粘性或は熟時稀に縁より粘性となる；傘面は纖維状，痂皮状或は綿絮状；多くの種に於て托は著しきイグチ褶襞にて径 0.5 mm 以下の小孔とならず；菌絆を有するものあり；茎は時に中空。
　　アミハナイグチタケ属　**Boletinus**　(22)

Suillus MICHELI ex S. F. GRAY em. SNELL
ヌメリイグチタケ属

S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 646. 1821—SNELL, Mycologia, 34 : 403. 1942—SINGER, Agaricales, 654. 1949.

Pinuzza MICHELI ex S. F. GRAY, l. c. 646. 1821.
Rostkovites KARSTEN, Rev. Myc. 3 : 16. 1881.
Cricunopus KARSTEN, l. c. 16. 1881.
Boletus DILLENIUS ex FRIES sensu KARSTEN, l. c. 17. 1881. (non S. F. GRAY 1821)
Viscipellis QUÉLET, Enchir. Fung. 155. 1886.
Versipellis QUÉLET, l. c. 157. 1886. pr. p.
Ixocomus QUÉLET, Fl. Myc. 411. 1888.
Boletopsis HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**; 194. 1898. (non FAYOD 1889)
Chalciporus BATAILLE, Bolets, 19. 1908.
Boletus subgen. *Ixocomus* KONRAD, Soc. Linn. Lyon, 3. 1932.

子実体は肉質，早腐性，小～中形；傘は外皮の菌糸著しく膠化して，中央部に於て初めより膠性～類粘性；胞子紋は渋色～灰卵黄色，或は濃オリーブ色；胞子は通常小形なるも，或種に於て約 14 μ に及ぶ，少くとも大部分は寧ろ淡色；嚢状体は通常寧ろ大形にて樹脂状物を被むる；托は茎周に直生～稀に僅か接着し，屢々類垂生，稀に真の垂生；孔口は甚だ小～甚だ大形，後者の場合は通常イグチ褶襞に配列す，往々孔口並に管孔内部は橙黄赤色，或は帯紫赤色～ピンク色；托実質は真の両側型にて所謂 *Boletus* 亜型；茎は通常多少円筒形，小腺点は存在或は欠如（腺は白色，黄色，赤色，肉桂色，淡菫色，或は黒色の点にて，皮嚢状体或は皮擬糸状体と皮担子柄との2型の皮嚢状体に終る菌糸の束より成る）；被膜は存在或は欠如，若し存在せば糊状，或は膜状にて湿時膠性～粘性なり；型的に林内地上に生じ，殆んど皆針葉樹に菌根を作る；大部分擬被実；温帯，寒帯及亜熱帯等の平地並に山地にて松類の存する所に産す，約 28 種を知らる；良好の食用菌を含む。

（本属名は suelos〔希〕，suillus〔羅〕(豚の) より出づ）

基準種　*S. luteus*（L. ex FR.）S. F. GRAY

本邦既知種検索表

A．被膜(鍔)を有す
　a．茎に小腺点なく，鍔より上部に網目あり
　　α．孔口は広く，熟時 1 mm 以上あり，灰白色
　　　シロヌメリイグチタケ
　　　S. aeruginascens　(17)
　　β．孔口は小にて通常 1 mm 以下，黄金色
　　　ハナイグチタケ　***S. grevillei***　(18)
　b．茎に小腺点あり，頂上部に多少網目あり；孔口は小にて黄色
　　　ヌメリイグチタケ　***S. luteus***　(18)
B．被膜(鍔)を有せず；茎に網目なし
　a．茎に腺点あり；孔口に白乳滴を出し，著しき粒を有す，黄色
　　　チチアワタケ　***S. granulatus***　(19)
　b．茎は平滑

α. 孔口は著しく広くして放射状に配列す，緑黄色にてオリーブ褐色となる；味辛からず。
アミタケ **S. bovinus** (21)

β. 孔口は広きも放射状ならず，銹色；味甚だ辛し　カラアミタケ **S. piperatus** (22)

Suillus aeruginascens (SECR.) SNELL

シロヌメリイグチタケ

SNELL, Lloydia, 7:25, pl. 2, f. B; pl. 7, f. F. 1944—SINGER, Agaricales, 657. 1949.

(今関及本郷，原色日．菌．図鑑，83, pl. 37, f. 215. 1957)

Boletus viscidus L. Sp. Plant. 2 : 1177. 1753—FRIES, Bolet. 12. 1835; Epicr. Myc. 423. 1838; Hymen. Eur. 513. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 235. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1: 259. 1871—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 265. 1872—GILLET, Champ. Fr. 634, c. ic. 1874—WINTER, Pilze, 1 : 463. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 6:38. 1888; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 903. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 498. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:293. 1892; Brit. Fungi, 364. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 125. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 328. 1908—NEUMAN, Polyp. Wisc. 128, pl. 16, f. 57. 1914—REA, Brit. Basid. 559. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 19 : pl. 932. 1931—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 5 : pl. 416. 1935—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 217, pl. 85, f. 3. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 43. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:129, f. 130, A. 1957.

(今井，植．研．雑．25 : 17. 1950—川村，日．菌．図鑑，2 : 249, f. 231, 1954)

Boletus aeruginascens SECR. Myc. Suisse, 3:6. 1833.

Boletus laricinus BERK. Engl. Fl. 5(2) : 148. 1836; Outl. Brit. Fung. 230. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 251. 1871—FRIES, Hymen. Eur. 513. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 6 : 37. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1 : 292. 1892.

Boletus squalidus FR. Epicr. Myc. 413. 1838; Hymen. Eur. 501. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 6 : 12. 1888.

Boletus elbensis PECK, Rep. N. Y. Sta. Cab. 23: 129. 1872—SACCARDO, Syll. Fung. 6 : 37. 1888.

Cricunopus viscidus KARST. Rev. Myc. 3 : 16. 1881.

Boletus dubius ALLESCH. Verz. Südbay. Pilze, 78. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 9 : 158. 1891.

Viscipellis velifera QUÉL. Enchir. Fung. 155. 1886.

Viscipellis viscida QUÉL. l. c. 156. 1886.

Ixocomus viscidus QUÉL. Fl. Myc. 416. 1888—ATAILLE, Bolets, 21. 1908—GILBERT, Bolets, 114. 1931—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 126. 1952.

Ixocomus viscidus var. *velifera* QUÉL. l. c. 416. 1888—BATAILLE, Bolets, 21. 1908.

Boletus larignus BRITZM. Hymen. Südbay, 9: 19. 1891—SACCARDO, Syll. Fung. 11:81. 1895; 21: 237. 1912.

Boletus indecisus BRITZM. l. c. 9 : 19. 1891—SACCARDO, Syll. Fung. 11 : 81. 1895. (non PECK)

Solenia viscida KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2) : 522. 1893.

Boletopsis viscidus P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 195. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1) : 242, pl. 46. 1912.

Boletus Britzmayeri SACC. et TROTT. Syll. Fung. 21 : 236. 1912.

Suillus viscidus IMAZ. Nagaoa, 2 : 34. 1952.

(原，日．菌．目．355. 1954)

子実体は群生，往々叢生；傘は径 5—12 cm，初め半球形，丸山形～饅頭形，のち開張し，時に鈍中丘あり，粘性，無毛，屢々細皺あり，汚色にて甚だ変化し，白，灰，オリーブ，黄，褐，赤色等を帯ぶるも，通常幼時褐色，老時帯緑灰色となる，外皮剝げ易し；縁は薄く，幼時屢々縁膜片を有す；托は直状



第3図　シロヌメリイグチタケ
Suillus aeruginascens
×1/2　(大谷氏)

垂生し茎上に網目を附く，大形，可成り長く，白色，灰色，汚緑色を帯び，遂に褐色となる；孔口は広く，角形，複合，有歯，灰白色，のち灰，帯緑，帯褐色となる，接触によりて濃色となる；茎は 5—8×1—2 cm，殆ど同幅，頂部網状，粘性，鍔上は白色或は淡緑，下は汚黄色～灰色或は淡褐色，綿絮状繊維あり，中実；傘は膜状，大，薄く，裂け，早失性，白色，のち灰，オリーブ，汚褐色等となる；肉は水潤状，柔軟，鍔部白色，茎部殊に基部黄，緑，褐色を帯び，多少青色となる，臭味よし；胞子は楕円状紡錘形，平滑，淡黄色，10—12×4—5 μ；胞子紋は黄褐色；嚢状体は円筒状棍棒形或は便腹状円筒形，無色～帯

黄色，60—80×6—11 μ；可食。

所在及産地

落葉松林地—夏秋　北海道，本州—欧，北米

和名　シロヌメリイグチタケ（白粘猪口茸）〔今井〕

クロヌメリイグチ（黒粘猪口）

ジコウボウ（時候坊）〔方言〕

Suillus grevillei (KLOTZSCH) SING.

ハナイグチタケ

SINGER, Agaricales, 657. 1949—IMAZEKI, Nagaoa, 2 : 33. 1952.

（原，日．菌．目．355. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，83, pl. 37, f. 215. 1957）

Boletus Grevillei KLOTZSCH, Linnaea, 7 : 198. 1832.

Boletus elegans FR. Epicr. Myc. 409. 1838. (non SCHUM.); Hymen. Eur. 497. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 442. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 229. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:250. 1871—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 259. 1872—GILLET, Champ. Fr. 638. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:241. 1876—WINTER, Pilze, 1:475. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 6:3. 1888; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 907. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:261. 1892; Brit. Fungi, 356. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 319. 1908—REA, Brit. Basid. 558. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 19 : pl. 902. 1931—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 216, pl. 84, f. 2. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 43. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 128. 1957. (*B. flavus* form)

（川村，日．菌．図説，n. 48. 1921；日．菌．図鑑，2:248, f. 230, 1954—今関，原色きのこ，pl. 59（右）. 1942）

Cricunopus elegans KARST. Rev. Myc. 3:16. 1881; Hattsv. 2:4. 1882; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 278. 1889.

Viscipellis flava var. *elegans* QUÉL. Enchir. Fung. 155. 1886.

Ixocomus flavus var. *elegans* QUÉL. Fl. Myc. 415. 1888—BATAILLE, Bolets, 20. 1908.

Solenia elegans KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2) : 522. 1893.

Boletopsis elegans P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 195. 1900.

Suillus elegans SNELL, Lloydia, 7:27, pl. 2, f.c.; pl. 7, f. G. 1944.

子実体は群生，稀に叢生；傘は径 4—15 cm，通常 5—10 cm，丸山形にて屢々扁平丸山形となり，時に中央凹下し，或は稍々中丘あり；表面は無毛，粘性にて通常濃黄～赤褐色の膠質物を有し，これは時に放射状点線に乾燥す，色は通常栗褐色にて往々微かなる灰色の金属光沢を有す，或は淡黄金栗褐色にて



第4図　ハナイグチタケ Suillus grevillei ×1/3　（大谷氏）

屢々狭き黄縁を有することあり，更に又これより淡色にてレモン色，黄金色，帯赤黄色等のことあり；縁は時に被膜の残片を附着す，特に乾燥気象下に於てこれを認めらる；肉は緊緻，鮮黄金色～濃レモン色，古品に於ては外皮下に吸水性の帯褐色の層を認めらる，味温和，臭は淡き樹脂様，或は僅か酸臭あり；托は狭生，直生或は僅か垂生，比較的短く，鮮黄金色，稀に古品に於て帯褐黄色，傷時淡菫色或は帯褐色となる；孔口は角形，部分的に複合，径 0.5—1.5 mm，通常 0.5—0.7 mm；茎は 4—12×1—2.5 cm，上方に狭細～類同幅，頂部に近く著しき鍔を有す，托より上部には通常細かき網目を有し，鍔下には時に破片的に網目あり，鍔より下方の表面は変化性に富み，稍々粉状～繊維状，或は毛叢点状，稀に皺状～微痂皮状，又は無毛のことあり，色もまた変化し，繊維状外層は鮮黄金色外皮上に褐色を帯ばしむ，頂部は管孔の如く鮮黄色なり，茎肉は鮮黄金色～レモン黄色，のち汚褐黄色となる，中実；鍔は厚く，暗黄色～赤褐色，往々乾燥季にはこれを欠く；胞子は楕円～楕円状紡錘形，平滑，淡黄オリーブ色，7—11×3—4 μ；胞子紋は黄金褐～栗褐色；嚢状体は管壁に多生，多くは叢生し，棍棒形～鋭尖形，多く縊れ，或は頭状，無色～黄色，或は黄金褐色，25—75×4—10 μ；可食。

所在及産地

主に針葉樹林地—夏秋　本州，九州—欧．北米．濠

和名　ハナイグチタケ（花猪口茸）〔川村〕

ジコウボウ（時候坊）〔方言〕

Suillus luteus (L. ex FR.) S. F. GRAY

ヌメリイグチタケ

S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 646. 1821—SLIPP & SNELL, Lloydia, 7:36, pl. 7, f. L. 1944—SINGER, Farlowia, 2 : 270. 1945; Agaricales,

658. 1949.

（今関，Nagaoa, 2:34. 1952; 及土岐，林．試．研．報．67:32. 1927—原，日．菌．目．355. 1954—松田及本郷，植．研．雑．31:200. 1956—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，83, f. 213, pl. 37, f. 213. 1957）

Boletus luteus L. Sp. Plant. 2:1177. 1753—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, pl. 265. 1803—FRIES, Syst. Myc. 1:386. 1821; Elench. Fung. 128. 1828; Epicr. Myc. 409. 1838; Hymen. Eur. 497. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:442. 1844—BARLA, Champ. Nice, 60, pl. 31. f. 1–3. 1859—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 229. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:238. 1867—FUCKEL, Symb. Myc. 16. 1869—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:250. 1871; Handb. Austr. Fungi, 103. 1892—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:259. 1872—GILLET, Champ. Fr. 638, c. ic. 1874—KARSTEN, Hymen. Fenn. 3:241. 1876—WINTER, Pilze, 1:475. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 6:3. 1888; 14:164. 1899; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 909. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1:505. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:261, f. 4–6. 1892; Brit. Fungi, 356. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 125. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 181, f. 173-4. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 319, f. 73, A. 1908—MURRILL, Mycologia, 1:11. 1909; 12:59, pl. 2, f. 1. 1920; N. Am. Fl. 9:155. 1910—ROLLAND, Atl. Champ. 74, pl. 78, f. 174. 1910—REA, Brit. Basid. 558. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 183, pl. 94. 1927—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 2:190, f. 38. 1935—KONRAD & MAUBLANC, Sel. Icon. Fung. 6:466. 1937—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 216, pl. 84. f. 1. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 43. f. 88. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:126, pl. 9, f. 1. 1957.

（川村，植．雑．22:378, f. 6. 1908; Illus. Jap. Fungi, pl. 17, f. 13-16. 1925; 日．菌．図説，n. 213. 1929; 食用菌及有毒菌，f. 33 (p. 28) 1931; 日．菌．図鑑，2:246, f. 229. 1954—白井，日．菌．目．ed. 2. 97. 1917; ed. 3. 55. 1927—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:112. 1931—松浦，茸類辞典，50, f. 50. 1933; 応用菌蕈学，1104. 1941—牧野，日．植．図鑑，1026, f. 3075. 1940—今関，日．隠．植．図．495, pl. 238, f. 2. 1939; 原色きのこ，pl. 59（左）1942—今井，植．研．雑．25:17. 1950）

Boletus annulatus PERS. Syn. Meth. Fung. 503. 1801; Myc. Eur. 2:125. 1825—NEES, Syst. Pilze Schw. 214, f. 204. 1817.

Boletus salmoinicolor FROST, Bull. Buff. Soc. Nat. Sci. 2:100. 1874.

Cricunopus luteus KARST. Rev. Myc. 3(9):16. 1881; Hattsv. 2:3. 1882; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 278. 1889.

Viscipellis lutea QUÉL. Enchir. Fung. 155. 1886.

Boletus subteus PECK, Bull. N. Y. Sta. Mus. 1:62. 1887.

Ixocomus luteas QUÉL. Fl. Myc. 414. 1888—BATAILLE, Bolets, 20. 1908—GILBERT, Bolets, 114. 1931.—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:127. 1952.

Boletopsis lutea P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 195, f. 103, B-C. 1897—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1):248, pl. 42c. 1912.

（安田，植．雑．29:60. 1915; 31:63. 1917）

Solenia lutea KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):522. 1898.

子実体は孤生或は叢生；傘は径 4—13 cm，半球形～扁平丸山形；表面は平滑，光沢あり，甚しく粘性，乾燥気候下にては僅か黏状となる，粘液は乾きて線条をなす，灰褐色，黄褐色，赤褐色，或は黒褐色等にて，老時暗色となる；肉は柔綿質，屢々水潤状，初め白色，老時淡レモン色となる，特に管孔に近き部分著し，切傷時鈍赤褐色を帯ぶ，味は温和，臭は微かに酸臭あり；托は直生或は僅か垂生，鮮黄色～黄金色，老時暗色；孔口は不規則，角形，径 1—1.5 mm；被膜は膜状にて，茎を鞘状に包む，初め白色にて厚く，のち薄くなりて灰色となる；茎は 3—11×1—2.5 cm，殆ど同幅，或は上部狭細，鍔を有す；鍔は著しく，通常外方に曲り垂下す，幼時膠性，灰色～暗菫色，或は黒褐色，又は帯黄～黄褐色，上側は黄褐色なり；頂上部に多少網目を存す；表面は鍔の上下共に粉状～小腺点ありて上方特に著し，色は初め帯黄色，のち頂部黄色，基部白色或は軟皮色，小腺は帯褐色或は帯黄色，茎肉は繊維質，傘肉と同色なるも基部及外皮に近く帯灰色，或は帯褐色或は鮮黄色にて肉色の線条を有す，中実；胞子は類楕円形～楕円状紡錘形，平滑，淡黄色，6—11×2.5—4 μ；胞子紋は銹褐色，嚢状体は孔稜に叢生し小腺点を作る，管壁に於ては単生，棍棒形～幾分有嘴，無色，淡黄～暗帯褐色，24—60×6—14 μ；可食。

所在及産地

針葉樹林地上—夏秋　北海道，本州，九州—欧．濠．北南米．亜（西北）

和名　ヌメリイグチタケ（滑猪口茸）〔古名〕

ボタイグチ〔方言〕

ボタモチイグチ〔方言〕

ババゴケ〔方言〕

Suillus granulatus (L. ex FR.) KUNTZE

チチアワタケ

O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):535. 1898—

SNELL, Lloydia, 7: 32, pl. 4, f. A; pl. 7, f. J. 1944—SINGER, Agaricales, 658. 1949.

(今関, Nagaoa, 2.33. 1952; 及土岐, 林. 試. 研. 報. 87: 50. 1956—原, 日. 菌. 目. 355. 1954—松田及本郷, 植. 研. 雑. 31: 200. 1956—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 83, f. 214, pl. 37, f. 214. 1957)

Boletus granulatus L. Sp. Plant. 2: 1177. 1753—FRIES, Syst. Mycol. 1: 387. 1821; Elench. Fung. 1: 126. 1828; Epicr. Myc. 410. 1838; Hymen. Eur. 498. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1: 442. 1844—BARLA, Champ. Nice, 63, pl. 31, f. 4–12. 1859—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 230. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2: 239. 1867—FUCKEL, Symb. Myc. 16. 1869—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1: 251. 1871; Handb. Austr. Fungi, 104. 1892—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1: 260. 1872—GILLET, Champ. Fr. 639, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3: 242. 1876; Hattsv. 2: 10. 1882; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 280. 1889—WINTER, Pilze, 1: 474. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 6: 5. 1888; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 2: 913. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1: 504. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1: 280. 1892; Brit. Fungi, 262. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.–fam. 1, 1**: 194. 1900—ATKINSON. Mushrooms, ed. 2. 178. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 320. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 75, pl. 78, f. 175. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1): 265. 1912—NEUMAN, Polyp. Wisc. 141, pl. 19, f. 65, pl. 20, f. 65. 1914—REA, Brit. Basid. 560. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 183, pl. 93. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 19: pl. 907, 1931—CLELAND. Toadst. Mushr. S. Austr. 2: 193, f. 40. 1935—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 6: 466. 1937—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 217, pl. 85, f. 2. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 43. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2: 125, f. 2, pl. 9, f. 2. 1957.

(白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 95. 1917; ed. 3. 55. 1927—今関, 日. 隠. 植. 図. 495, pl. 238, f. 1. 1939; 原色きのこ, pl. 58 (左) 1942—川村, 日. 菌. 図鑑, 2: 251, f. 232. 1954)

Boletus flavo-rufus SCHAEFF. Fung. Bavar. 2: pl. 123. 1763.

Boletus lactifluus WITH. Brit. Pl. II, 3: 415. 1792—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fung. 3: pl. 420. 1803.

Boletus circinans PERS. Syn. Meth. Fung. 505. 1801; Myc. Eur. 2: 126. 1825—NEES, Syst. Pilze Schw. 214, f. 205. 1817.

Leccinum lactifluus S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1: 647. 1821.

Boletus collinitus FR. Epicr. Myc. 410. 1838.

Boletus albus PECK Rep. N. Y. Sta. Cab. 23: 130. 1872.

Boletus punctipes PECK, Rep. N. Y. Sta. Mus. 32: 32. 1880.

Rostkovites granulatus KARST. Rev. Myc. 3 (9): 16. 1881—MURRILL, N. Am. Fl. 9: 153. 1910; Mycologia, 5: 3, pl. 80, f. 3–4. 1913.

Boletus brevipes PECK, Rep. N. Y. Sta. Mus. 38: 110. 1885.

Viscipellis granulata QUÉL. Enchir. Fung. 156. 1886.

Ixocomus granulatus QUÉL. Fl. Myc. 412. 1888—BATAILLE, Bolets, 22. 1908—GILBERT, Bolets, 114, pl. 4, f. 10. 1908—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2: 127. 1952.

Suillus circinans POIR. in KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2): 535. 1893.

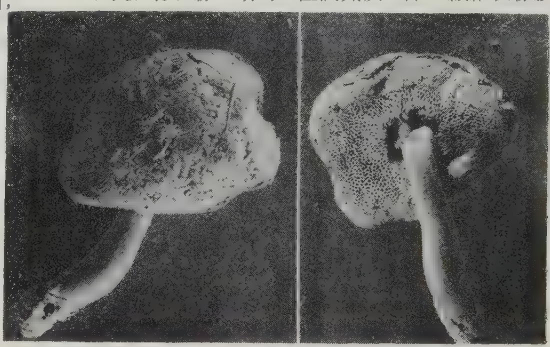
Boletus Miramar ROLL. Bull. Soc. Myc, Fr. 20: 205, pl. 10, f. 2. 1904.

Uloporus Miramar BAT. Bolets, 23. 1908.

Gyrodon Miramar SACC. et TROTT. Syll. Fung. 21: 254. 1912.

Boletus subtomentosus (non L. ex FRIES)
(川村, 日. 菌. 図説, n. 160. 1930)

子実体は群生, 往々孤生, 稀に散生; 傘は径 4—20 cm, 丸山形, 縁は幼時, 湿潤気候の際に繊維状縁膜





第5図 チチアワタケ Suillus granulatus
a. 子実体表面 b. 同裏面 × 1/3
c. 嚢状体 d. 担子柄 e. 胞子 ×860 (大谷氏)

片を有す；表面は湿時甚だ粘性，屢々不明瞭の点線あり，色は変化し，暗栗褐色にて鹿皮色～象牙色等を経て老時淡色となる；肉は緊緻にて，のち柔軟となる，幼時純白色，のち管孔に近き部分或は全部淡黄色となり，老時帯褐色，空気に触れて変色せず，味は温和，臭は微酸臭，時に幾分悪臭あり；托は直生，稀に少しく垂生，淡クリーム色，のち汚黄色となり，傷により変色せず；孔口は類円形～不正形，複合，著しく小粒点あり，初め白色乳を滴らす，黄色，孔径 0.25—1 mm，通常 0.25—0.5 mm；茎は 2—8×0.6—3 cm，殆ど同幅，或は上部狭細，鍔なし，稀に頂に近く小なる仮鍔あるも速に消失す，網目なし，頂部より微細小腺点を有し，中部より以下は少数となる，乾燥，稀に幾分湿潤，白色～淡褐色間に変化し，頂部に近く黄色，老時ピンク～褐色斑を生ず，小腺は黄～ピンク褐色，乾時暗色となる，肉は白色～淡黄色，中実；胞子は楕円形，平滑，無色，6—10×2.5—3 μ；胞子紋は黄褐色；嚢状体は孔稜に簇生し小腺点を作り，管壁には単生す，無色，時に柄部多少帯黄色，45—90×7—15 μ；可食。

所在及産地

松林地上—夏秋　本州—欧. 北米. 濠. 亜（西比）

和名　チチアワタケ（乳泡茸）〔今関〕

Suillus bovinus (L. ex FR.) KUNTZE

アミタケ

O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2) : 535. 1893—SINGER, Agaricales, 658. 1949.

（今関，Nagaoa, 2:33. 1952；及土岐，林. 試. 研. 報. 67:32. 1954—原，日. 菌. 目. 355. 1954—松田及本郷，植. 研. 雑. 31:199. 1956—今関及本郷，原色日. 菌. 図鑑，84, f. 216, pl. 37, f. 216. 1957）

Boletus bovinus L. Sp. Plant. 2 : 1177. 1753—FRIES, Obs. Myc. 1:112. 1815; Syst. Myc. 1:388. 1821; Elench. Fung. 126. 1828; Epicr. Myc. 411. 1838; Hymen. Eur. 499. 1874—PERSOON, Myc. Eur. 2:127. 1825—CORDA, Icon. Fung. 5:83, pl. 10, f. 85. 1842—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:442. 1844—BARLA, Champ. Nice, 69. 1859—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 230. 1860—FUCKEL, Symb. Myc. 16. 1869—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:252. 1871—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 260. 1872—GILLET, Champ. Fr. 641, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:242. 1876; Hattsv. 2:10. 1882; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 280. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 474. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 6 : 6. 1888; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 911. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 504. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:280. 1892; Brit. Fungi, 361. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL. Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 194. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 320. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 75, pl. 79, f. 178. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1) : 266. 1912—REA, Brit. Basid. 561. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 19 : pl. 909. 1931—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 5:pl. 418. 1935—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 219, pl. 86, f. 1. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 42. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:126. 1957.

（安田，植. 雑. 23 : 69. 1909; 31 : 62. 1917—KAWAMURA, Illus. Jap. Fung. pl. 3, f. 5-7. 1912; 14, f. 7-9. 1915；日. 菌. 図説，n. 180. 1929；食用菌及有毒菌，f. 32 (p. 28). 1931；日. 菌. 図鑑，2 : 254, f. 234. 1954—白井，日. 菌. 目. ed. 2. 95. 1917; ed. 3. 54. 1927—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:112. 1931—松浦，茸類辞典，50, f. 49. 1933；応用菌蕈学，1098, f. 729. 1941—今関，日. 隠. 植. 図. 493, pl. 237, f. 2. 1939；原色きのこ，pl. 58 (右) 1942)

Boletus gregarius VAHL, Fl. Dan. pl. 1018. 1790.

Boletus mitis PERS. Myc. Eur. 2 : 129. 1825.

Boletus bovinus var. *mitis* QUÉL. Champ. Jura Vosg. 3 : 442. 1875.

Viscipellis bovina QUÉL. Enchir. Fung. 157. 1886.

Viscipellis bovina var. *mitis* QUÉL. l. c. 157. 1886.

Ixocomus bovinus QUÉL. Fl. Myc. 413. 1888—BATAILLE, Bolets, 22. 1908—GILBERT, Bolets, 115. 1931—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 129. 1952.

Ixocomus bovinus var. *mitis* QUÉL. Fl. Myc. 414. 1888—BATAILLE, Bolets, 22. 1908.

Boletus recedens BRITZM. Hymen, Südbay 6: 33, f. 46. 1890—SACCARDO, Syll. Fung 11:80. 1895; 21 : 244. 1912.

Boletinus mitis HOEHN. Ann Myc. 3:549. 1905

子実体は群生或は叢生；傘は径 5—11 cm，丸山形～饅頭形，のち開張し，遂には凹下す，弾性あり；表面は平滑，湿時粘性，乾時光沢あり，淡黄褐，帯褐淡黄色，肉色，銹色，褐色等；縁は薄くして鋭く，初め内屈し，のち波状となる；外皮は剝げ易く，殊に縁辺に於て著し；托は直状垂生，短く，傘肉より少しく長し，大，弾性，傘肉に附着し剝離せず，黄色，のち帯オリーブ褐色となる；孔口は甚だ広く，角形，複合，歯を有す，屢々放射状に配列す，帯緑黄色，のち帯オリーブ褐色となる；茎は 5—10×1 cm，同幅，撓曲，平滑，レンズ下にて微毛を認める，通常傘面より淡色，往々下部濃色，基部に白色綿絮を有す，中実；肉は柔韌，甚だ弾性あり，僅か腐性，帯白色～クリーム黄色にて徐々に帯赤肉色と

なり，往々淡緑色を帯ぶ，味温和，臭弱く，よし；胞子は楕円状紡錘形，平滑，淡黄色，8—10.5×3—4.5μ；胞子紋はオリーブ黄褐色；嚢状体は円筒状棍棒形或は紡錘形，無色〜淡黄色，35--60×5—9μ；可食。

所在及産地

針葉樹林及草原地上—夏秋　全土—欧．北米．阿．亜（西比．支）

和名 アミタケ（網茸）〔安田〕
シバタケ（芝茸）〔方言〕
スドオシ〔方言〕　ヌノメ〔方言〕

Suillus piperatus (BULL. ex FR.) KUNTZE

カラアミタケ

O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2) : 535. 1893—SINGER, Farlowia, 2 : 46. 1945; Agaricales, 659. 1949.

(今関, Nagaoa, 2:34. 1952; 及土岐, 林. 試. 研. 報. **67**; 32, f. 1–2. 1954—原, 日. 菌. 目. 355. 1954)

Boletus ferruginatus BATSCH, Elench. Fung. Cont. 1 : 179, pl. 25, f. 128. 1786—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, pl. 83. 1797.

Boletus piperatus BULL. Champ. Fr. pl. 451, f. 2. 1789—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, pl. 34. 1797—PERSOON, Disp. Meth. Fung. 27. 1797; Syn. Meth. Fung. 507. 1801; Myc. Eur. 2 : 128. 1825—DECANDOLLE, Fl. Fr. 2 : 125. 1815—NEES, Syst. Pilze Schw. 215, f. 207. 1817—FRIES, Syst. Myc. 1 : 388. 1821; Epicr. Myc. 412. 1838; Hymen. Eur. 500. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 441. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 231. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 240. 1867—FUCKEL, Symb. Myc. 16. 1869—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 252. 1871—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 261. 1872—GILLET, Champ. Fr. 640, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 243. 1876; Hattsv. 2 : 11. 1882; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 280. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 472. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 6 : 8. 1888; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 915. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 503. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1 : 279. 1892; Brit. Fungi, 361. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 194. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 321. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 75, pl. 79, f. 176. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1) : 264, pl. 45c. 1912—NEUMAN, Polyp. Wisc. 140. 1914—REA, Brit. Basid. 561. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 19 : pl. 911. 1931—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 5 : pl. 419, f. 1. 1928—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fung. 219, pl. 89, f. 2. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 41, f. 89. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 129. 1957.

Leccinum piperatum GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 647. 1821.

Boletus sistotrema PECK, Rep. N. Y. Sta. Cab. 23 : 133. 1872.

Viscipellis piperata QUÉL. Enchir. Fung. 157. 1886.

Ixocomus piperatus QUÉL. Fl. Myc. 414. 1888—GILBERT, Bolets, 115, pl. 5, f. 15. 1931—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 130. 1952.

Chalciporus piperatus BAT. Bolets, 19. 1908.

Ceriomyces piperatus MURR. Mycologia, 1 : 150. 1909.

Ceriomyces ferruginatus MURR. N. Am. Fl. 9 : 143. 1910.

子実体は群生；傘は径 2—6cm，半球形〜丸山形，のち扁平となる；表面は平滑，光沢あり，湿時稍々粘性，淡黄褐〜肉桂色にて，多少銅色を帯ぶ；托は直生〜類垂生，屢々褶状に垂生す，黄褐色；孔口は広く，角形〜不正形，有歯，銅色，のち銹色，傘面より濃色；茎は 4—12×0.5—1.5cm，繊細，通常基部狭細し，屢々屈曲，平滑，黄褐色，甚だ発達せる黄色菌糸によりて基部黄色を呈す，中実；肉は傘に於て肉赤色，茎部に於て強き橙黄色，空気に触れて変色せず，柔軟，臭弱く，味甚だ辛し；胞子は紡錘楕円形，平滑，淡黄褐〜褐色，8—11×3—4μ；嚢状体は甚だ多生，殊に稜部に多し，便腹紡錘形，頭部及基部以外に赤褐〜黄銹色の筒状結晶を被むる，これによりて孔は赤銅色を呈す，45—65×10—13μ；可食。

所在及産地

針葉樹林及草原地上—夏秋　本州—欧．北米

和名 カラアミタケ（辛網茸）

Boletinus KALCHBR.

アミハナイグチタケ属

KALCHBRENNER, Bot. Zeitschr. 25 : 182. 1867—SINGER, Agaricales, 649. 1949.

Euryporus QUÉLET, Enchir. Fung. 163. 1886.

子実体は肉質，早腐性，中等大；傘は繊維毛〜鱗片を被むるも，繊維或は鱗片は粘質層外に出でざるが為に被膜の破片の場合の如く著明ならず，表面は湿季に於ても乾燥なり，稀に縁より中央に向つて漸次粘性となるものあり；胞子は多少長く，比較的小〜中等大（13.2μ に及ぶ），淡蜜色にて時に暗色の物を交入す；嚢状体は大形にて多くは樹脂状有色の被覆物を有す；菌絆は多くの種類に於て存在す；孔

口は多少放射状に配列して放射状に伸長し，寧ろ広くして複合す，管孔の放射状壁は褶状となり，殊に茎に近づきて著しく，縁に於ては認められず；茎は通常円筒形或は類円筒形，稀に紡錘形或は中部膨大し便腹状，常に小腺なし；被膜は常に存在し，必ずしも常に永存せずして常に鍔を作ると限らず，単一或は2重なり，後の場合はその外層は傘の外皮の連続なり；針葉樹に菌根を作り，地上稀に腐木上に生ず；研究せられたる種類は擬被実にて他に疑わしきものあり；寒帯及び温帯針葉樹林地産（1種熱帯産）；約15種を知らる，食用菌。

（本属名は *Boletus*（属名）の示小辞）

基準種 *B. cavipes* (OPAT.) KALCHBR.

本邦既知種検索表

A．菌糸は多数の菌絆を有す；茎は早く中空；傘は褐色～肉桂色；肉は傷時変色せず；落葉松に菌根を作る。

アミハナイグチタケ **B. cavipes** (23)

B．菌糸は菌絆なきか極めて稀に存す；茎は通常中実；傘面赤色；肉は傷時変色す；松に菌根を作る。

ベニハナイグチタケ **B. pictus** (24)

Boletinus cavipes (OPAT.) KALCHBR.

アミハナイグチタケ

KALCHBRENNER, Bot. Zeit. 25:181. 1867; Icon. Hymen. Hung. 4:52, pl. 31. 1877—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 10:669. 1800—SACCARDO, Syll. Fung. 6:51. 1888 (ex err. typ. *clavipes*); Fl. Ital. Crypt. Hymen. 2:940. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1:5. 1888—W. G. SMITH, Brit. Basid. 331. 1908—MURRILL, Mycologia, 1:5. 1909; N. Am. Fl. 9:159. 1910—REA, Brit. Basid. 556. 1922—GILBERT. Bolets, 90, pl. 2, f. 5. 1931—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 5: pl. 420. 1934; Agaricales, 2:131. 1952—SLIPP & SNELL, Lloydia, 7:15, pl. 1A; pl. 7, f. A. 1944—SINGER, Agaricales, 652. 1949.

（今井，植．研．雑．25:18. 1950—今関，Nagaoa, 2:32. 1952—原，日．菌．目．33. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，88, pl. 39, f. 226. 1957）

Boletus cavipes OPAT. Comm. Bolet. 11. 1836—FRIES, Epicr. Myc, 413. 1838; Hymen. Eur. 520. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:441. 1844—GILLET, Champ. Fr. c. ic. 1874—WINTER, Pilze, 1:476. 1884—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 35. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:129, f. 24, pl. 13, f. 2. 1957.

Boletus ampliporus PECK, Bull. Buff. Soc. Nat. Sci. 1:60. 1873; Rep. N. Y. Sta. Mus. 26:67. 1874.

Euryporus cavipes QUÉL. Enchir. Fung. 163. 1886—BATAILLE, Bolets, 24. 1908.

Solenia cavipes KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2): 522. 1893. (ex err. typ. *caripes*)

Boletopsis cavipes P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 195. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1): 249, pl. 42B. 1912.

子実体は群生，稀に叢生；傘は径3—10cm，初め円錐状鐘形にて，幼時鈍尖頭，のち開張して丸山形となり，通常稍々中丘あり；表面は乾燥，綿絮状小鱗片あり，古品に於て稀に幾分亀裂す，通常褐色，渋色



第6図 アミハナイグチタケ Boletinus cavipes
a. 子実体 ×1/2 b. 胞子 c. 嚢状体 ×1000
（大谷氏）

～肉桂色，往々黄金色～橙黄色のものあり；縁は薄く，鋭く，内屈し，初め縁膜片を有す；肉は柔靱，黄白色～淡橙色，傷により変色せず，味温和，臭なし；托は垂生して鍔に達す，傘肉より分離し難く，黄色～硫黄色，のち帯緑色～黄オリーブ色となる；管孔は短し；孔口は広く，複合，角形，蜂窩状，径2mmに及び，波状薄片状，放射状に並び，放射状壁は少く隆起す，硫黄色，のち帯緑～汚褐オリーブ色となる；茎は髄部速かに失われ，殆ど初めより中空となる特徴あり，5—8×0.5—1cm，便腹状にて上部狭細，往々屈曲，頑強，綿毛状小鱗片～綿絮状，褐色，渋色或は栗褐色；鍔は綿絮状，厚く，白色，のち赤色を帯ぶ；胞子は楕円形，平滑，淡黄色，8—10×3—4μ；胞子紋は黄オリーブ色；嚢状体は管壁に多生，円筒形或は僅か便腹状の紡錘形，薄膜，60—80×7—12μ；可食。

所在及産地

高山落葉松林地—秋 本州—欧．北米．亜（朝）

和 名　アミハナイグチタケ（網花猪口茸）

Boletinus pictus (PECK) PECK
ベニハナイグチタケ

PECK, Bull. N. Y. Sta. Mus. 8:77. 1889—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 180, f. 175. 1903—MURRILL, Mycologia, 1:6. 1909; N. Am. Fl. 9: 160. 1910—NEUMAN, Polyp. Wisc. 118. pl. 15, f. 56, pl. 16, f. 56. 1914—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 191, pl. 98. 1927—SINGER, Farlowia, 2: 256. 1945; Agaricales, 653. 1949.

（今関，原色きのこ，pl. 61（右）. 1942; Nagaoa, 2:32. 1952—今井，植．研．雑．25:19. 1950—原，日．菌．目．33. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，88, pl. 39, f. 227. 1957）

Boletus pictus PECK, Rep. N. Y. Sta. Cab. 23: 128. 1872—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 193. 1900.

Boletus Spraguei BERK. et CURT. Grev. 1: 35. 1872.

Boletus Murraii BERK. et CURT. Grev. 1:35. 1872.

傘は径 5—8cm，丸山形～扁平；表面は乾燥或は僅か粘性，覆瓦状鱗片に被われ，初め濃帯紫赤色，鱗片下は黄色或はピンク色；縁に屢々縁膜片あり；肉は厚く，柔靱，クリーム色，傷により徐々にピンク或は帯赤色となる；托は直生し幾分垂下し，接着せず，初め淡黄色にて老時暗色となり，傷時帯褐ピンク色となる；管孔は短し，孔口は広く，角形，複合；茎は 5—7×0.6—1.2cm，円筒形，下方稍々狭細，傘面と同性質にて同色或は淡色，中実或は髄部海綿状にて時に僅か中空となる，肉は肉白色，基部に向つて褐色となる；鍔は稍々頂部に存す，密なる繊維質，初め淡桃色，のち褪色し，灰色となる；胞子は楕円形，平滑，淡黄色，9.5—11×4μ；胞子紋は帯褐淡黄色～淡褐色；可食。

所 在 及 産 地

山地松林湿地上—秋　　本州—北米

和 名　ベニハナイグチタケ（紅花猪口茸）〔今井〕

疑 問 種

Boletinus paluster (PECK) PECK
(LLOYD, Myc. Writ. 5, Lett. 67: 7. 1918)

（Ⅲ） **Xerocomoideae** SINGER (1945)
アワタケ亜科

菌糸は菌絆なきか或は稀に甚だ僅か存在す（その時は托は通常褶状なり）；胞子は紡錘状類円筒形，往々寧ろ短し，胞子紋はオリーブ褐色；傘は乾時稍々有毛或は有毛，屢々湿時僅か或は明かに粘性；托は褶状（大部分纏絡脈状），或は管孔状にて孔は屢々 1mm 以上或は中形，屢々不正にて複合なるも真のイグチ褶襞状ならず，直生或は垂生，稀に甚だ僅か茎周に接着す；嚢状体は無色或は蜜色，屢々蜜色の結晶を被る；托実質は両側型にて側層は僅か拡布し，互に接触し，中軸より僅か淡色にて所謂 *Phylloporus* 亜型なり；茎は中実，円筒形或は類円筒形，稀に便腹状，被膜なし，小腺点なし，粘性或は膠性ならず，表面は著しきピンク或は鮮赤色ならず；地上，材上，腹菌上及び蟻塚上生，SINGER 氏 (1949) は 2 属を収む，共に本邦に産す。

本 邦 既 知 属 検 索 表

A．托は褶状をなす
　　キヒダタケ属　**Phylloporus**　(24)
B．托は管孔状をなす
　　アワタケ属　**Xerocomus**　(25)

Phylloporus QUÉL.
キヒダタケ属

QUÉLET, Fl. Myc. 409. 1888—SINGER, Agaricales, 664. 1954.

子実体は肉質，早腐性；一般性質はアワタケ属 (*Xerocomus*) に同様なるも子実層托は褶状をなし，多くの場合に於て横脉によりて連結さる；傘の表皮は幼時及び新鮮時常にアンモニア蒸気によつて生青色に変ず；托実質は常に両側型の所謂 *Phylloporus* 亜型なり；樹下の地上，稀に甚だ腐朽せる材上に生ず；殆ど汎布；約 3 種を知らる。

（本属名は phyllon〔希〕(葉)，poros〔希〕(軽石，孔）より出ず）

基準種　*P. Pelletieri* (LÉV.) QUÉL.

本属は本科所属の他菌と異りて子実層托は褶状をなし横脈にて連結さる，従つて只其外観よりすればヒダハタケ科 (*Paxillaceae*) に属するが如し，然れども托実質は両側型の *Phylloporus* 型にて傘の新鮮表皮層がアンモニア蒸気によりて生青色に変ずる特徴等は全然次の属アワタケ (*Xerocomus*) 属と一致し特別近親なるものと認めらるるに至り，両属を併せて一亜科とさる。

本邦既知種

　　キヒダタケ　***P. rhodoxanthus***　(24)

Phylloporus rhodoxanthus (SCHW.) BRES.
キヒダタケ

BRESADOLA, Fungi Trid. 2: 95, pl. 207. 1900; Icon. Myc. 16; pl. 768. 1930—BATAILLE, Bolets,

24. 1908—MURRILL, N. Am. Fl. 10 : 193. 1917—GILBERT, Bolets, 88, pl. 2, f. 4. 1931—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 6 : 450. 1937; Agaricales, 2 : 101. 1952—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 247. 1938—SINGER, Farlowia, 2 : 280. 1945; Agaricales, 665. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 45, f. 38. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 143, f. 24, B. 1957.

（今関，原色きのこ，pl. 39（右）. 1942; Nagaoa, 2 : 35. 1952: 及土岐，林. 試. 研. 報. 67 : 32. 1954—原，日. 菌. 目. 260. 1954—川村，日. 菌. 図鑑，5: 503, f. 503. 1954——松田及本郷，植. 研. 雑. 31 : 200. 1956—今関及本郷，原色日. 菌. 図鑑，82, f. 211, pl. 36, f. 211. 1957.

Agaricus rhodoxanthus SCHW. Fungi Carol. n. 640. 1822.

Gomphus rhodoxanthus SCHW. Syn. Am. Bor. n. 256. 1834.

Gomphidius rhodoxanthus SACC. Syll. Fung. 5 : 1139. 1887.

Flammula rhodoxantha LLOYD, Myc. Writ. 1 : 17. 1899.

Paxillus rhodoxanthus RICKEN, Blätterp. 95, pl. 28, f. 1. 1915—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 167, f. 160. 1903—KAUFFMAN, Agar. Mich. 285. 1918.

Clitocybe Pelletieri GILL.—KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 11, f. 3-4. 1914.

（白井，日. 菌. 目. ed. 2. 145. 1917; ed. 3. 86. 1927—川村，日. 菌. 図説，no. 109. 1929—松浦，茸類辞典，77, f. 79. 1933—原，日. 菌. 目. 74. 1954）

子実体は群生或は散生；傘は径 4—10 cm，丸山形のち開張し，鈍頭～凹下す；表面は微細軟毛あり，のち無毛となる，乾燥し，時に割裂す，栗褐色にて赤或は黄色を帯ぶ；托は褶状にて基部に於て側脉を有し，或は大部分孔状に纒絡す，垂生，黄金色～ウコン色；茎は 4—8×0. 5—1 cm，同幅或は稍々便腹状，稍々擬根あり，赤褐色の繊維状或は細綿毛あり，淡色，帯赤黄色，基部黄色；肉は傘部に於て帯赤～帯黄色，茎部に於て黄色，臭味温和；胞子は円壔形～紡錘形，平滑，淡黄金色，10—15×3. 5—4. 5 μ；胞子紋は黄色；担子柄は棍棒形，35—40×8—10 μ；嚢状体は孔壁及稜に多生，紡錘形，内容黄色，60—90×12—16 μ；可食。

所在及産地
林地上—夏秋　本州—欧. 北米.

和名　キヒダタケ（黄襞茸）〔今関〕

Xerocomus QUÉL.

アワタケ属

QUÉLET, Fl. Myc. 417. 1888—SINGER, Agaricales, 665. 1949.

Versipellis QUÉLET, Enchir. Fung. 157. 1886. pr. p.

Xerocomopsis REICHERT, Palest. Jour. Bot. Reh. Ser. 3 : 229. 1940.

子実体は肉質，早腐性，中等大；傘は多少細密軟毛を被むり，屢々少くとも断片的の柵毛被を有す；托は多くは寧ろ広くして角形の孔口を有し，褶状ならず，稀に類イグチ褶襞状なるも真のイグチ褶襞とならず，直生，屢々垂生歯を有し，或は弧状垂生，稀に茎周に接着す，離生ならざるも老時往々剝離す；胞子の大さは種々あり，類円筒形，類紡錘形，楕円状円壔形，楕円状類棍棒形，往々殆ど楕円状卵形にて寧ろ短し；胞子紋は常にオリーブ褐色；托実質は *Phylloporus* 亜型；嚢状体は中～寧ろ大形，著しき結晶を被らざるか或は全くなし，束をなさず；茎は通常円筒形，或は類円筒形にて，比較的寧ろ細く，甚だ稀に中膨れ球根状となる，往々茎の頂部に赭褐～栗褐色の粗なる網目を有す；被膜なし；黄粉を有す；茎或は傘上に膠質の被覆なし；肉は変色せざるか或は屢々或部分変色す，すべての菌糸は菌絆を有せす；林内及庭園地上或は腐木上に生じ，菌根を作るが如し，稀に地中菌の子実体上に生ず；全地に汎布；約 18 種を知らる，食用菌。

（本属名は xeros（乾燥），kome（毛，木の葉）より出づ）

基準種　*X. subtomentosus*（L. ex FR.）QUÉL.

本邦既知種検索表

A．他菌に寄生せず
- a．傘は粘性ならず，絨状；肉の変色度弱し
  - α．傘面の亀裂少く，裂目は黄色；外皮下肉は褐色　アワタケ　***X. subtomentosus***　(25)
  - β．傘面著しく亀裂し，裂目は紫紅色；外皮下肉は赤色　キッコウアワタケ　***X. chrysenteron***　(26)
- b．傘は湿時粘性；管孔は擦傷により緑青色となる　ニセイロガワリタケ　***X. badius***　(27)

B．ツチガキ菌子実体に寄生，肉は青変す，傘面亀裂せず　タマノリイグチタケ　***X. astereicola***　(28)

Xerocomus subtomentosus (L. ex FR.) QUÉL.

アワタケ

QUÉLET, Fl. Myc. 418. 1888—BATAILLE, Bolets, 18. 1908—GILBERT, Bolets, 116, 141, pl. 8, f. 22.

1931—SLIPP & SNELL, Lloydia, 7:45, pl. 5, f. B; pl. 8, f. B. 1944—SINGER, Agaricales, 668. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 120. 1952.

Boletus subtomentosus L. Sp. Plant. 2 : 1178. 1753—PERSOON, Obs. Myc. 2:9. 1799; Syn. Meth. Fung. 506. 1801; Myc. Eur. 2:138. 1825—NEES, Syst. Pilze Schw. 215, f. 206. 1817—FRIES, Syst. Myc. 1:389. 1821; Epicr. Myc. 415. 1838; Hymen. Eur. 503. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 440. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 232. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 242. 1867—FUCKEL, Symb. Myc. 16. 1869—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 254. 1871; Handb. Austr. Fungi, 105. 1892—QUÉLET, Champ. Jura. Vosg. 1 : 162. 1872—GILLET, Champ. Fr. 648. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 244. 1876; Hattsv. 2 : 13. 1882; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 281. 1889—WINTER, Pilze Deut. 1:471. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 6 : 14. 1888; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 918. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1:502. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:265. 1892; Brit. Fungi, 357. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 192, f. 103, A. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 322. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 76, pl. 80, f. 181. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1) : 263, pl. 43B. 1912—NEUMAN, Polyp. Wisc. 137, pl. 22, f. 74. 1914—REA, Brit. Basid. 563. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 19 : pl. 914. 1931—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 6:462. 1937—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 220, pl. 86, f. 2. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 41. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 136. 1957.

(P. HENNINGS, Hedwigia, 39, Beibl. 155. 1900—松村，植. 名鑑，1 : 133. 1904—白井，日. 菌. 目. 15. 1905; ed. 2. 99. 1917; ed. 3. 56. 1927—安田，植. 雑. 31 : 222. 1917—広江，応用菌蕈学，1108. 1941—川村，日. 菌. 図鑑，2 : 259, f. 237. 1954)

Ceriomyces jujubinus procerus BATT. Fung. Arim. Hist. pl. 30, f. F. 1755.

Boletus crassipes SCHAEFF. Fung. Bavar. pl. 112. 1763.

Leccinum subtomentosum GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 647. 1821.

Rostkovites subtomentosum KARST. Rev. Myc. 3(9) : 16. 1881.

Versipellis subtomentosus QUÉL. Enchir. Fung. 158. 1886.

Suillus subtomentosus STEINZ, in KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2) : 535. 1893.

Ceriomyces subtomentosus MURR. Mycologia, 1: 153. 1909; 2:46, pl. 19, f. 6. 1910; N. Am. Fl. 9: 149. 1910.

Xerocomopsis subtomentosus REICHERT, Palest. Jour. Bot. Reh. Ser. 3 : 229. 1940.

子実体は群生或は孤生；傘は径 3—15 cm，丸山形～殆ど扁平；表面は稍々軟毛を有し，絨状，熟時亀裂せざるか或は少くとも1部亀裂す，湿潤或は乾燥，黄褐色，帯褐オリーブ色，帯褐オリーブ黄色或は赤褐色にて，裂目は黄色にて赤色ならず；肉は緊緻，



第7図 アワタケ Xerocomus subtomentosus ×1/2 （大谷氏）

淡レモン色～淡黄色，時に外皮下褐色を帯ぶ，切断面は急に或は濃く変色せず，或時ののち青変し，稀に青変せず，味臭共に温和；托は直生，或は彎状直生し，僅か垂生し，屢々殆ど離生となる，幼時鈍オリーブ黄色，黄色～硫黄色，傷時青変す；管孔長し；孔口は大にて不正形，多少複合，径 1—3 mm；茎は 5—7×1—1.5 cm，殆ど同幅，鍔なし，網目は托の垂下により頂部に著しく，他部には大なる擬網を存す，表面は無毛，粉状，微小点状鱗片或は穀粉状，淡ピンク褐色，淡黄色，傷により褐色となる，乾燥；茎肉は黄白色，ピンク褐色～淡褐色，切断により微青色に除々に変化す；胞子は橢円形～類紡錘形，平滑，淡黄色，11—15×4.5—5.5 μ；胞子紋はオリーブ色；嚢状体は便腹状紡錘形，時に棍棒形，無色或は黄色，50—60×7—10 μ；可食。

所在及産地

林内草地—夏秋　北海道，本州，九州—欧．北米．濠．亜（ボルネオ）

和名 アワタケ（泡茸）〔古名〕

Xerocomus chrysenteron (BULL. ex FR.) QUÉL.

キッコウアワタケ

QUÉLET, Fl. Myc. 418. 1888—BATAILLE, Bolets, 19. 1908—GILBERT, Bolets, 115, 138, pl. 7, f. 19-20. 1931—SINGER, Agaricales, 668. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 121. 1952.

Boletus chrysenteron BULL. Champ. Fr. 328, pl. 490, f. 3. 1791—DECANDOLLE, Fl. Fr. 2:126. 1815.

FRIES, Epicr. Myc. 415. 1838; Hymen. Eur. 502. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 232. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:241. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:254. 1871; Handb. Austr. Fungi, 105. 1892—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:261, pl. 16, f. 4. 1872—GILLET, Champ. Fr. 648, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 2:13. 1882—WINTER, Pilze, 1:471. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 6:14. 1888; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 917. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1:502. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:263. 1892; Brit. Fungi, 357, pl. 22, f. 3. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 193. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 322. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 76, pl. 80, f. 180. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1) : 263, pl. 43. 1912—NEUMAN, Polyp. Wisc. 138, pl. 21, f. 73. 1914—REA, Brit. Basid. 562. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 179, pl. 90. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 19; pl. 913. 1931—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 6:461. 1937—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 220, pl. 88, f. 2. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 40, f. 86. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:136, pl. 14, f. 3. 1957.

(安田, 植. 雑. 35:269. 1921—白井, 日. 菌. 目. ed. 3. 55. 1927—広江, 応用菌蕈学, 1099. 1941—川村, 日. 菌. 図鑑, 2 : 255, f. 235. 1954)

Versipellis chrysenteron QUÉL. Enchir. Fung. 157. 1886.

Suillus chrysenteron POIRET in KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2) : 535. 1893.

子実体は群生或は散生; 傘は径 4—7 cm, 丸山形, 饅頭形〜扁平, 時に中部凹下す, 柔軟; 表面は乾燥, 綿架状軟毛を有し, 暗褐色〜類煉瓦色, のち外皮は網状に亀裂し, 裂目は帯紫紅色を呈す; 托は彎状直生〜狭生, 黄色〜緑黄色; 孔口は大にて不等, 角形〜不正形, 托と同色; 茎は 5—7×1—1.5 cm, 剛直, 緊緻, 殆ど同幅, 或は基部狭細, 真直又は屈曲, 繊維状線条あり, 血赤色にて頂部黄色, 基部白色; 肉は傘に於て黄白色, 外皮下赤色, 管孔に近き部は類青色, 茎に於て上部黄色, 残部稍〻紫色, 味及臭共に著しからず; 胞子は紡錘状円筒形, 平滑, 淡黄色, 12—15×4.5—5 μ; 嚢状体は稀生, 類紡錘形, 鈍頭, 50—60×7—10 μ; 可食。



第 8 図 キッコウアワタケ
Xerocomus chrysenteron ×1/2 (大谷氏)

所在及産地

林内草地—夏秋 本州, 九州—欧. 北米. 濠. 阿.

和名 キッコウアワタケ (亀甲泡茸) 〔安田〕

Xerocomus badius (FR.) GILB.

ニセイロガワリタケ

GILBERT, Bolets, 116. 1931—SINGER, Agaricales, 669. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 122. 1952.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 84, f. 218, pl. 37, f. 218. 1957)

Boletus badius FR. Elench. Fung. 1:126. 1828; Epicr. Myc. 411. 1838; Hymen. Eur. 499. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 441. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 231. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 239. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:252. 1871—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:260. 1872—GILLET, Champ. Fr. 641, c.ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 243. 1876—WINTER, Pilze, 1 : 473. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 6:7. 1888; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 911. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 503. 1888—BERTRAND, Bull. Soc. Myc. Fr. 6: LII. 1890—ROLLAND, Bull. Soc. Myc. Fr. 8:9, pl. 3, f. 3. 1892—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1 : 278. 1892; Brit. Fungi. 361. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 194. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 320. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1):265, pl. 44B. 1912—NEUMAN, Polyp. Wisc. 141. 1914—REA, Brit. Basid. 560. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 19 : pl. 910. 1931—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 5 : pl. 412. 1935—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 218, pl. 85, f. 1. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 41, f. 87. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 137, f. 23. 1957.

Boletus glutinosus KROMBH. Abbild. Schw. 5 : 11, pl. 36. f. 12–18. 1836.

Boletus vaccinus FR. Epicr. Myc. 420. 1838; Hymen. Eur. 508. 1874—GILLET, Champ. Fr. 651. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 6 : 29. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:272. 1892—REA, Brit. Basid.

568. 1922—et. Auct.

Rostkovites badia KARST. Rev. Myc. 3(9): 16. 1881.

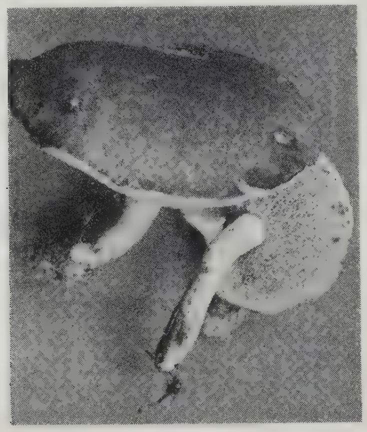
Viscipellis badia QUÉL. Enchir. Fung. 156. 1886.

Ixocomus badius QUÉL. Fl. Myc. 412. 1888—BATAILLE, Bolets, 21. 1908.

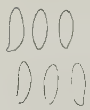
Oedipus vaccinus BATAILLE, Bolets, 14. 1908.

Tubiporus vaccinus RICKEN, Vademecum, ed. 1, 207. 1918.

子実体は群生；傘は肉質，半球形，のち丸山形にて中高，径 8—12cm，稀により以上，湿時粘性，乾時微毛あり，後無毛平滑となる，肉桂色，栗色，チョコレート色等を呈す；縁は薄く，初め内屈す；



a



b

第9図　ニセイロガワリタケ Xerocomus badius
a．子実体　×1/2
b．胞　子　×400　（大谷氏）

托は直生，彎生，彎入等にて可成り大，長く，帯緑黄色にて青変す；孔口は角形，可成り大，クリーム黄色，のち緑黄色，接触によりて緑青色となる；肉は柔軟，白色，外皮下褐赤色，茎の基部に於て時々黄褐色を呈す，管孔の上部は淡緑青色なり，傷により僅か青変す，無臭，味温和；茎は通常長くしてやや華奢，殆ど同幅，網目なく，淡黄土色或は黄土褐色，上部に多少線条あり，基端帯白色にて軟毛あり；胞子は楕円状紡錘形，平滑，油球あり，帯黄色，13—15×4.5—6 μ；胞子紋は黄褐オリーブ色；稜及褶側嚢体は紡錘形或は棍棒形，無色，40—55×8—12 μ；可食。

所在及産地

針葉樹林内—夏秋　　本州，九州—欧．北米．阿

和名　ニセイロガワリタケ（贋色変茸）〔本郷〕

Xerocomus astereicola IMAZ.
タマノリイグチタケ

IMAZEKI, Nagaoa, 2 : 35, f. 13. 1952.

（今関及土岐，林．試．研．報．67:33, f. 3. 1954—原，日．菌．目．394. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，85, pl. 38, f. 219. 1957）

傘は径 4—5.5cm，厚さ 1—1.3cm，丸山形，のち開張し，縁は多少波状となる；表面は乾燥，微細絨毛を被むり，汚黄褐色；肉は淡シトロン黄色，接触によりて青変し，のち暗褐色となる；托は凸面にて，直状類垂生，シトロン～黄色，接触によりて肉の如く青変す；孔口は角形，1mm 間に約1個，茎に近き孔は放射状に長し，茎は 4—5×0.5—0.7cm，基部僅か太くして，急に狭細す，煤色の線条あり，頂部シトロン色；胞子は円壔形，平滑，帯褐淡黄色，9—11(12)×4—5.5 μ；嚢状体は無色或は淡き帯褐淡黄色，70—80×8.5—11.5 μ．

所在及産地

ツチガキ（*Astraeus hygrometricus*）の子実体に寄生—夏秋　　本州

和名　タマノリイグチタケ（玉乗猪口茸）〔今関〕

(Ⅳ) Boletoideae SINGER (1947)
イグチタケ亜科

傘は粘性或は乾燥；茎は同幅或は便腹状～球根状，粘性或は乾燥；被膜は存在或は欠如；若し存在せば粉状にて黄色，或は橙黄煉瓦色，或は緑色，或は然らざれば全く膠性；菌絆は常に欠如；小腺点なし；托実質は常に両側型の *Boletus* 亜型，即ち側層は弛くして甚だ拡布し，色は中軸より淡し；托は内外共に赤或はピンクならず；菌根を針葉樹に作るものあるも，広葉樹に多く形成或は多分作らざるものあり；6属を収められ本邦4属を知らる。

本邦既知属検索表

A．茎は痂皮状ならず，屢々平滑，細軟毛，微細なる網目或は幾分縦繊維を有し，或は粉状；托は離生，直生～幾分垂生；孔口は小或は広く，赤色或は同色；広葉樹或は針葉樹に菌根を作り，或は不明。

a．胞子紋は帯褐色にてオリーブ色を帯び或はオリーブ色

α．傘は黄粉に被わる

キイロイグチタケ属　**Pulveroboletus**　(29)

β. 傘は黄粉に被われず

イグチタケ属 **Boletus** (30)

b. 胞子紋は新鮮時全くオリーブ色の痕跡なくして汚ピンク肉色～鈍肉色，材褐色，濃銹褐色等；味苦し

ニガイグチタケ属 **Tylopilus** (39)

B. 茎は痂皮状にて暗色鱗片或は穀粉を有し，表面粗なり，屢々寧ろ堅き繊維質，屢々基部肥大部より頂部に向つて狭細す；托は離生或は甚だ強く接着；孔口は甚だ小形，赤色ならず；菌根は殆ど常にヤナギ類或はブナ類に作らる

ヤマイグチタケ属 **Leccinum** (40)

Pulveroboletus MURR. em. SING.

キイロイグチタケ属

MURRILL, Mycologia, 1:9. 1909—SINGER, Agaricales, 672. 1949.

子実体は肉質，早腐性；傘は湿時粘性，乾時は乾燥；表皮は屢々平行菌糸被よりなり，稀に毛被よりなる，屢々表生の黄粉に被わる，この粉は往々黄色よりは少しく帯緑或は帯赤色なるも，類白，灰色，褐色等とならず；被膜を有するならば其質は粉質蜘蛛巣状にて粘性ならず，稀に完全に膠質にて無色のものあり；被膜を有せざるものならば被膜の痕跡が茎の膠状或は粉状の鞘となりて残り，稀に全く被膜の痕跡をも認められず；茎は全く平滑なるか或は往々網目あり，通常類円筒形或は基部に於て幾分肥大するも型的の中膨れ球根状とならず；托は幼時弧状ならず，後扁平或は下方に凸面となり，通常茎周に接着す，通常管孔は長く，茎と縁との中間部のもの最も長し，屢々鮮黄金色，赤橙色，黄金オリーブ色にて乾燥するも褪色せず；孔口は小～大形；托実質は真の両側型にて所謂 *Boletus* 亜型，菌絆なし；胞子は型的には長形にて紡錘形或は楕円状紡錘形～類円筒形，稀に短円筒形或は短楕円形；嚢状体は通常寧ろ大形にて上部広く膨大し，或は寧ろ細くして細頸壜形；胞子紋はオリーブ褐色；肉は黄粉被膜を有する種に於てのみ青変す；針葉樹並に広葉樹林内或は木に近き地上に生じ，菌根関係あるものの如し；多分全地に汎布，約12種を知らる，或種は食用菌。

（本属名は pulvis〔羅〕（塵，粉），Boletus（属名）より出づ）

基準種　*P. Ravenelii* (BERK. et CURT.) MURR.

本邦既知種　キイロイグチタケ ***P. ravenelii*** (29)

Pulveroboletus ravenelii (BERK. et CURT.) MURR.

キイロイグチタケ

MURRILL, Mycologia, 1:9. 1909; N. Am. Fl. 9: 157. 1910—SINGER, Agaricales, 674. 1949—HONGO, Acta Phytotax. Geobot. 14:75, f. 1(15). 1951.

（今関，Nagaoa, 2:37. 1952—原，日．菌．目．308. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，84, f. 217, pl. 37, f. 217. 1957）

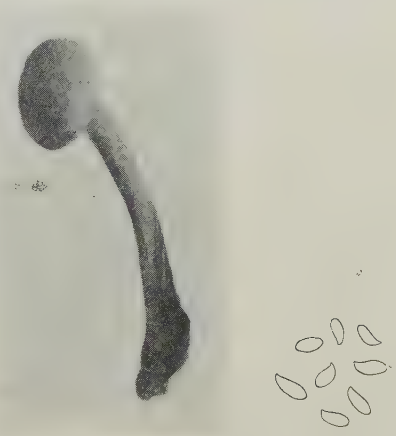
Boletus Ravenelii BERK. et CURT. Ann. Mag. Nat. Hist. II, 12 : 429. 1853—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 192. 1900—NEUMAN, Polyp. Wisc. 140, pl. 19, f. 67. 1914.

子実体は孤生或は時に叢生；傘は径 4—10 cm，丸山形，のち殆ど扁平；表面は幼時或は湿時僅か粘性，初め被膜の残物なる著しきレモン色の粉毛を被むり，のち裸出し，中部灰黄色～煉瓦色を呈す；肉は類白色，或は幾分黄色，擦傷時除々に青変す，味僅か酸味あり；管孔は直生，茎周に接着，淡黄色，のち黄褐色或は焦茶色，傷時緑青色となる；孔口は大，或は中等大，類円形；茎は 4—10×0.7—1.3 cm，同幅，屢々屈曲，幼傘の如く被膜に被われ同色，網目なし，茎肉は黄色，傷時変色せず，中実；茎頂に近く鍔あり，鍔はレモン黄色，蛛網状或は軟毛状，消失性；胞子は楕円形，平滑，無色，8.5—10.5×4.5—5.2 μ；胞子紋は淡黄褐色；可食？

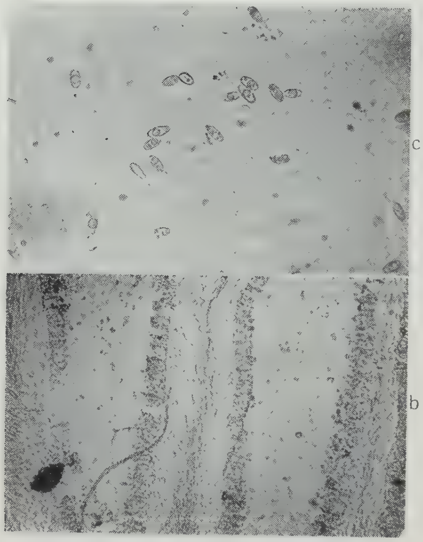
所在及産地

松林地上—夏秋　　本州，九州—北米

和名　キイロイグチタケ（黄色猪口茸）〔本郷〕



a　　d



第10図　キイロイグチタケ
Pulveroboletus ravenelii
a．子実体　×1/2　　b．托実質断面
c．胞子　×340　　d．胞子　×600（大谷氏）

Boletus Dill. ex Fr. em. Gilb.
イグチタケ属

Fries, Syst. Myc. 1：385. 1821—Gilbert, Bolets, 96. 1931—Singer, Agaricales, 675. 1949.
Tubiporus Paulet ex Karsten, Rev. Myc. 3：16. 1881.
Dictyopus Quélet, Enchir. Fung. 159. 1886.
Oedipus Bataille, Bolets, 13. 1908.
Suillellus Murrill, Mycologia, 1：16. 1909.
Ceriomyces Battarra ex Murrill, Mycologia, 1：144. 1909.

子実体は肉質，早腐性，中～大形；傘は平滑或は有毛，乾燥或は粘性；托は茎周に接着～殆ど離生，管孔は単一，長し；孔口は小或は大形；托実質は真の両側型にて所謂 *Boletus* 亜型；胞子紋はオリーブ色，或は少くとも新鮮時はオリーブ色彩を有する褐色；胞子は通常長形；茎は通常太く，肉質，中実，網目或は細微の綿絮，小鱗片，類穀粉状，稀に平滑にて無毛，痂皮状ならず，小腺点なし，明かなる擬菌核を有せず；肉は白色或は黄色，往々1部赤色，傷時屢々青変，稀に赤変す，味温和或は苦し；すべての菌糸に菌絆なし，林内及び木に近き地上に生じ，菌根を作る；汎布；約 48 種を知らる；食用並に有毒。

（本属名は bolos〔希〕（土塊）或は bolites（ケルト民族土語，食菌）より出づという）

基準種　*B. edulis* Bull. ex Fr.

本邦既知種検索表

A．茎は一般に肥大，屢々便腹状；孔口は小形，多くは大形菌（クロアワタケは中形）
  a．肉は白色或は黄色，空気に触れて青変せず，時に皮下赤色；孔口は白色或は材色，時に老時緑色となる，接触によりて青緑色とならず；茎に網紋を有し，時に平滑或は鱗被あり；味温和。
    α．肉は白色；孔口は初め白色或は材色；茎は黄色ならず。
      Ⅰ．嚢状体は無色；肉は皮下赤色。
        1．管孔及孔口は最後に緑色となる；傘は径 7—22 cm，灰褐～暗褐色；茎は殆ど同幅或は球根状，汚白色にて淡黄～淡褐を帯ぶ；胞子 12—18×4—6 μ。
          ヤマドリタケ　***B. edulis***　(31)
        2．管孔及孔口は緑色とならず；傘は 7—15 cm，煤けたる帯緑暗褐色；茎は初め卵状，のち伸長し球根状，暗褐色，遂に黒色となる；胞子 12—15×4—5 μ。
          ススケイグチ　***B. aereus***　(32)
      Ⅱ．嚢状体は著しく有色；傘は 5—10 cm，灰褐黒～殆ど黒色；孔口は材色；茎は傘に比して太く白色～材色；胞子 10—14×4—5 μ。
          クロアワタケタケ　***B. griseus***　(33)
    β．肉は全部或は少くとも皮下黄色；孔口及茎は黄色。
      Ⅰ．茎に網紋あり；傘は径 8—15 cm，桃赤色，中央帯紫赤褐色；孔口は黄色，老時青緑斑を生ず；胞子 11—13×3—4 μ。
          アカジコウ　***B. regius***　(33)
      Ⅱ．茎に網紋なく，微細鱗被あり；傘は径 8—20 cm，黄褐～橙褐色，のち亀裂を生ず；孔口は帯緑汚黄色；胞子 10—14×4—6 μ。
          アカヤマドリタケ　***B. impolitus***　(34)
  b．肉は多くは黄色，時に白色，空気に触れて青変す；孔口は黄色，橙色或は赤色，接触によりて緑色或は黒色となる；茎に網紋或は粒あり，時に平滑，全部或は少くとも一部赤色。
    α．孔口は赤色ならず；茎に白色或は肉色の網紋あり；苦味；傘は径 10—20 cm，帯緑黄褐色；茎の頂部黄色，その下部赤色；胞子 12—16×4.5—5.5 μ。
          アシベニイグチタケ　***B. calopus***　(34)
    β．孔口は赤色或は橙色；茎に赤色網紋或は粒あり；苦味なし。

I. 茎に赤色網紋あり;孔口赤色或は赤橙色。
1. 肉は管孔上は赤橙色, 他は黄色, 傷時直ちに強く青変し茎の基部は赤菫色; 傘は径 5—20 cm, 帯焦茶オリーブ～帯褐色; 茎は通常基部便腹状, 黄色にて基部褐～紫色; 胞子 11—15×7—8 μ。

ウラベニイロガワリタケ ***B. luridus*** (35)

2. 肉は管孔上は黄色, 他は帯白色, 空気に触れて帯赤色となり, のち緑青色に転ず, 茎の基部は黄褐～赤色; 傘は径 9—25 cm, 汚白色～帯褐黄色; 茎は卵状球根形にて過度に肥満す, 初め頂部黄色, のち全部洋紅色となる; 胞子 11—16×5—7 μ。

ウラベニイグチタケ ***B. satanas*** (36)

II. 茎に網紋なく血赤色の小粒を存す; 肉は橙黄色, 空気に触れて緑青色となり, 茎の基部は赤色となる; 傘は径 10—20 cm, 褐～栗褐色; 胞子 13—18×5—7 μ。

オオウラベニイロガワリタケ ***B. erythropus*** (36)

B. 茎は一般に著しき肥大ならず, 網紋なし; 孔口は中～大形; 多くは中形菌。
a. 肉は黄色, 空気に触れて直ちに青変し, のち灰青, 灰菫～赤色となる; 傘は径 5—9 cm, 焦茶色或は帯褐オリーブ色; 茎は頂部黄色, 下方赤褐色, 絨毛状～有点; 孔口は黄色; 胞子 20—22×4—4.5 μ。

イロガワリタケ ***B. pulverulentus*** (37)

b. 肉は白色, 皮下赤色を帯ぶ, 傷時やや青変す; 傘は径 4—8 cm, 血赤色或は赤褐色; 茎は黄色にて赤褐色の汚線あり; 孔口は黄色; 胞子 20—22×4—4.5 μ。

コウジタケ ***B. rubellus*** (38)

Boletus edulis BULL. ex FR.
ヤマドリタケ

BULLIARD, Champ. Fr. 322, pl. 60, 494. 1871—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, 1 : pl. 111. 1797—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 510. 1801—DE CANDOLLE, Fl. Fr. 2:124. 1815—FRIES, Syst. Myc. 1:392. 1821; Elench. Fung. 1:127. 1828; Epicr. Myc. 420. 1838; Hymen. Eur. 508. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 437. 1844—BARLA, Champ. Nice, 69, pl. 34. 1839—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 234. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 245. 1867—FUCKEL, Symb. Myc. 16. 1869—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:256. 1871; Handb. Austr. Fungi, 107. 1892—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:265. 1872—GILLET, Champ. Fr. 646, c.ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3: 246. 1876—WINTER, Pilze, 1:467. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 6:29. 1888; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 928. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:281. 1892; Brit. Fungi, 362. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 125. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 172, f. 164. 1903—W. G. Smith, Brit. Basid. 325, f. 73, B. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 76, pl. 81, f. 182. 1910—NEUMAN, Polyp. Wisc. 131, pl. 22, f. 78. 1914—REA, Brit. Basid. 566. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 179, pl. 91. 1927—BRESADOLA, Icon. Mycol. 19 : pl. 923. 1931—GILBERT, Bolets, 117, 152. pl. 10, f. 28. 1931—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 6:453. 1937; Agaricales, 2:107. 1952—SLIPP & SNELL, Lloydia, 7 : 52, pl. 8, f. F. 1944—SINGER, Agaricales, 678. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 38, f. 85. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:130, f. 24, pl. 11, f. 1. 1957.

(川村, 植. 雑. 22:328, f. 1. 1908; Illus. Jap. Fung. pl. 18, f. 1–2. 1925; 日. 菌. 図説, n. 140, 214. 1929; 日. 菌. 図鑑, 2 : 261, f. 239. 1954—白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 95. 1917; ed. 3. 55. 1927—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:112. 1931—松浦, 茸類辞典, 133, f. 155–156. 1933; 応用菌蕈学, 1100, f. 730–731. 1941—今関, 日. 隠. 植. 図. 489, pl. 235, f. 3. 1939; Nagaoa, 2: 39. 1952—原, 日. 菌. 目. 34. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 85, f. 221, pl. 38, f. 221. 1957)

Ceriomyces crassus BATT. Fung. Hist. 62. 1775—MURRILL, Mycologia, 1:149. 1909; N. Am. Fl. 9 : 142. 1910.

Agaricus bulbosus SCHAEFF. Fung. Bavar. 2 : pl. 134. 1763.

Boletus soldidus SOW. Col. Fig. Engl. Fung. pl. 419. 1803.

Boletus crassipes SCHUM. Enum. Pl. Saell. 2 : 375. 1803.

Leccinum edule S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 647. 1821.

Boletus esculentus PERS. Myc. Eur. 2:131. 1825.

Tubiporus edulis KARST. Hattsv. 2 : 5. 1882; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 279. 1889.

Dictyopus edulis QUÉL. Enchir. Fung. 159. 1886.

Boletus bulbosus SCHROET. Pilze Schles. 1:499. 1888—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 191. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1) : 257, pl. 44. 1912.

Suillus edulis POIR. in KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2) : 535. 1893.

Suillus bulbosus KUNTZE, l. c. 535. 1893.

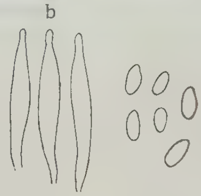
Boletus Atkinsoni PECK, Bull. N. Y. Sta. Mus.

94 : 20. 1905.
Boletus nobilis PECK, l. c. 48. 1905.
Oedipus edulis BAT. Bolets, 14. 1908.

子実体は孤生或は群生；傘は径 7—22cm，丸山形，或は殆ど扁平，縁辺鈍円；表面は湿潤，湿時往々粘性となる，カーキー色，灰赤色，渋褐色，或は淡褐黄色，屢々縁辺淡色；傘肉は初め緊緻，のち往々柔軟，白色或は黄白色，外皮下及管孔上帯赤色，変色せず，味良く，臭は強き菌臭あり；托は狭生～



a b



c d

第11図 ヤマドリタケ
Boletus edulis
a．子実体表面
b．同裏面 ×1/3
c．嚢状体
d．胞子 ×300
（大谷氏）

殆ど離生，深く接着，幼時白色，のち黄色～緑色，傷時多少帯褐淡黄色となる；孔口は殆ど円形，小～微小，管孔と同色にて緑色となる；茎は 5—22×1.2—3.6cm，殆ど同幅或は球根状，真直或は屈曲，頑強，鍔なし，殆ど全長に亘り，殊に上部に於て帯白色の網目を有し，往々基部の方は殆ど粗面となる，表面は無毛，粉状，或は基端に白色軟毛あり，汚白色にて，淡黄色～淡褐色を帯ぶ；茎肉は純白色～帯赤色，或は多少帯赤線条あり，中実；胞子は紡錘状楕円形，平滑，淡オリーブ色，12—18×4—6μ；胞子紋は濃オリーブ褐色；嚢状体は多からず，便腹状錐形～便腹状にて嘴状突起あり，無色，50—60×7—10μ；可食。

所在及産地
林地上—夏秋 北海道，本州，九州—欧.北米.阿.濠
和名 ヤマドリタケ（山鳥茸）

Boletus aereus BULL. ex FR.
スステイグチタケ

BULLIARD, Herb. Fr. pl. 385. 1788—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 511. 1801; Myc. Eur. 2 : 137. 1825—DECANDOLLE, Fl. Fr. 2:124. 1815—FRIES, Syst. Myc. 1:393. 1821; Epicr. Myc. 420. 1838; Hymen. Eur. 508. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:437. 1844—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:246. 1867—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:263, pl. 16, f. 2. 1872 (err. typ. *Aeneus*) —GILLET, Champ. Fr. 647, c. ic. 1874—WINTER, Pilze, 1:467. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 6:29. 1888; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 931. 1916—SCHROETER, Pilze. Schles. 1 : 499. 1888—COOKE, Handb. Austr. Fungi, 107. 1892—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1 : 277. 1892; Brit. Fungi, 361. 1911 —P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:191. 1900 —W. G. SMITH, Brit. Basid. 325. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 77, pl. 82, f. 183. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 258, pl. 44c. 1912—REA, Brit. Basid. 567. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 19 : pl. 924-925. 1931—GILBERT, Bolets, 117, 154, pl. 11, f. 31. 1931—SINGER, Agaricales, 678. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales 2:108. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 38. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 131, pl. 11, f. 1. 1957.
（川村，日．菌．図鑑，2:267, f. 241. 1954）

Tubiporus aereus KARST. Hattsv. 2 : 5. 1882.
Dictyopus aereus QUÉL. Enchir. Fung. 159. 1886.
Oedipus aereus BAT. Bolets, 14. 1908.
Boletus edulis subsp. *aereus* KONR. Bull. Soc. Linn. Lyon, 4. 1932.

傘は径 7—15cm 或はそれ以上に及び，初め半球形，のち低き丸山形，遂に円き羽布団形となり，縁辺多少尖る；表面は煤けたる帯緑暗褐色を呈し，密に短絨毛に被われ天鵞絨状の触感あり；肉は肉質，緊緻，白色，皮下僅か淡赤色を帯ぶ，空気に触れて変色せず，味及臭温和；管孔は細くして長さ中央部に於て約 1cm；托は殆ど離生，初め白色，のち硫黄色；孔口は微細，円形，管孔と同色；茎は長さ 10cm に及び，上部厚さ 2—4cm，初め卵状，のち伸長して基部多少球根状をなす，白色～肉色，次第に暗褐色を帯び，下部或は全部黒褐色となる。美しき網紋あ

り，中実，のち充塞；胞子は長楕円形～長紡錘形，基端斜に有嘴，黄色，12—15×4—5μ；可食。

所在及産地

林地—夏秋　　本州—欧．濠

和名 スズケイグチタケ（煤猪口茸）〔川村〕

Boletus griseus FROST

クロアワタケ

in PECK, Rep. N. Y. Sta. Mus. 29 : 45. 1878—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 191. 1900—SINGER, Agaricales, 678. 1949.

（安田，植．雑．37 : 35. 1923—広江，応用菌蕈学，1102. 1941—川村，日．菌．図鑑，2:276, f. 247. 1954）

Boletus flexuosipes PECK, Bull. N.Y. Sta. Mus. 8 : 130. 1889.

Ceriomyces griseus MURR. Mycologia, 1 : 145. 1909; N. Am. Fl. 9 : 138. 1910.

傘は径 5—10cm，初め半球状，開きて丸山形となる；表面は乾燥，殆んど平滑，幼時粉末状に見え鞣皮様の触感を与う，灰褐色を帯びたる黒色或は殆ど黒色；肉は厚くして緊緻，白色，切断面に淡褐色の汚染を呈することあるも青変せず；管孔は直生，やや接着，帯黄材色，長さ約 5mm；孔口小，殆ど同形，多少不同，白色～材色；茎は 5—10×0. 5—1. 3 cm，傘径に比して太く，上部やや細く，下端鈍尖，材色，著しき細かき暗色の網紋あり，中実；胞子は長楕円形，平滑，淡黄褐色，10—14×4—5μ；嚢状体は著しく有色。

所在及産地

林地—夏秋　　本州，九州—北米

和名 クロアワタケ（黒泡茸）〔安田〕

Boletus regius KROMBH.

アカジコウタケ

KROMBHOLZ, Abbild. 2 : 3, pl. 7. 1832—FRIES, Epicr. Myc. 420. 1838; Hymen. Eur. 508. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 438. 1844—GILLET, Champ. Fr. 646. 1874—WINTER, Pilze, 1:468. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 6:28. 1888; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 930. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:286. 1892; Brit. Fungi, 363. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 192. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 324. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 257. 1912—REA, Brit. Basid. 566. 1922—PELTEREAU, Bull. Soc. Myc. Fr. 42 : Atlas, pl. 17-18. 1926—BRESADOLA, Icon. Myc. 19 : pl. 922. 1931—GILBERT, Bolets, 117, 157. 1937—SINGER, Agaricales, 678. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 109. 1952—HEIM, Champ. Eur. 2 : 134. 1957.

（川村，日．菌．図鑑，2 : 265, f. 240. 1954）

Tubiporus regius KARST. Hattsv. 2 : 5. 1882.

Dictyopus appendiculatus var. *regius* QUÉL. Enchir. Fung. 160. 1886.

Suillus regius KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2) : 536. 1893.

Boletus subtomentosus subsp. *cerasius* MARTIN, Mat. Fl. Crypt. Suisse, 2(1) : 32, pl. 14, f. 3-4, pl. 15, f. 1-2. 1903.

Oedipus regius BAT. Bolets, 14. 1908.

Boletus appendiculatus subsp. *regius* KONRAD, Bull. Soc. Myc. Fr. 41:63. 1925; et MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 5 : pl. 401. 1926—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 37. 1953.

Boletus pachypus (non FRIES)

（川村，植．雑．22:377, f. 5. 1908; 23:364. 1909—白井，日．菌．目．ed. 2. 97. 1917; ed. 3. 55. 1927—MATSUURA, & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3 : 112. 1931—広江，応用菌蕈学，1105. 1941）

傘は径 8—15cm，幼時球状，のち饅頭形となり，縁辺鈍円；表面は乾燥，桃赤色，中央やや帯紫赤褐色，レンズ下にて微細毛あり，のち無毛となる；肉は肉質，厚く，緊緻，黄色～硫黄色，茎の基部に於て桃色を呈す，傷時変色せず，味温和，無臭；托は



第 12 図　アカジコウタケ Boletus regius ×1/2　（大谷氏）

殆ど離生；管孔は細く，長さ 1cm に及ぶ，淡黄色；孔口は微小にて円形，やや角張る，硫黄色，老時青緑斑を生ず；茎は 6—12×2. 5—5cm，同幅或は基部球根状，黄色，下部に紫褐色の汚染あり，全面に赤褐色の網紋を有す；胞子は長楕円形，基端斜に有嘴，平滑，黄土色，11—13×3—4μ；嚢状体は紡錘形にて，やや便腹状，50—70×12—15μ；可食。

所在及産地

広葉樹林地—夏秋　本州—欧

和名 アカジコウタケ（赤時候(坊)茸）〔方言〕

Boletus impolitus FR.

アカヤマドリタケ

FRIES, Epicr. Myc. 421. 1838; Hymen. Eur. 509. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 234. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 246. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 257. 1871—GILLET, Champ. Fr. 651, c. ic. 1874—QUÉLET, Champ Jura Vosg. Suppl. 11 : 398. 1882—WINTER, Pilze, 1 : 466. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 6 : 30. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1 : 268. 1892; Brit. Fungi, 357. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 192. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 326. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 258. 1912—REA, Brit. Basid. 568. 1922—SINGER, Agaricales, 679. 1947—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 38. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 136. 1957.

（川村，日．菌．図鑑，2 : 263. 1954）

Boletus reticulatus SCHAEFF. Fung. Bav. 4 : Ind. 78, pl. 108. 1774—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 927. 1916.

Tubiporus impolitus KARST. Hattsv. 2 : 6. 1882.

Versipellis fragrans var. *impolitia* QUÉL. Enchir. Fung. 158. 1886.

Xerocomus impolitus QUÉL. Fl. Myc. 417. 1888—GILBERT, Bolets, 148, pl. 9, f. 26. 1931.

Suillus reticulatus POIR. in KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2) : 535. 1893.

Oedipus impolitus BAT. Bolets, 14. 1908.

傘は径8—20 cm，幼時球状，漸次半球形～丸山形，遂に円布団状となり，時に扁平，縁辺鈍円；表面は初め小皺を有して硬く，幼時表皮の端は少しく下に伸びて茎を緊密に包む，黄褐色～橙褐色，往々赤褐色のものあり，レンズ下にて汚白色絹状繊維毛が密に表面を被うを認めらる，老時平滑となり，更に亀裂を生じ淡黄色の肉を現わし斑となること多し；肉はほぼ白色，表皮下淡黄色，空気に触れて青変せず，厚く，緊緻，型及臭よし；托は殆ど離生，接着，初め淡黄色，のち暗褐色；管孔は中部のものは長さ約2 cm に及ぶ；孔口は微細円形，初め鮮黄色の薄層に被われ，後消失して開口す，帯緑汚黄色；茎は 6—10×3—5 cm，同幅或は下部僅か肥大，黄色にて赤褐色の汚染を有す，微細なる鱗被を存す，中実；胞子は円壔状紡錘形，平滑，帯緑淡黄色，10—14×4—6 μ；可食。

所在及産地

山地雑木林内，稀に平地林内—夏秋

本州—欧．北米．阿

和名 アカヤマドリタケ（赤山鳥茸）〔川村〕

Boletus calopus PERS. ex FR.

アシベニイグチタケ

PERSOON, Syn. Meth. Fung. 513. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1 : 390. 1821; Epicr. Myc. 416. 1838; Hymen. Eur. 506. 1874—NEES, Syst. Pilze Schw. 216, f. 208. 1817—BARLA, Champ. Nice, 68. 1859—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 439. 1884—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 232. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 243. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 255. 1871; Handb. Austr. Fungi, 106. 1892—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 263. 1872—GILLET, Champ. Fr. 645. 1874—KARSTEN, Hattsv. 2 : 15. 1882—WINTER, Pilze, 1 : 469. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 6 : 24. 1884; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 922. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 501. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1 : 285. 1892; Brit. Fungi, 362. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 324. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1) : 259. 1912—REA, Brit. Basid. 570. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 5 : pl. 403. 1930; Agaricales, 2 : 110. 1952—GILBERT, Bolets, 117, 161, pl. 12, f. 35. 1931—SINGER, Agaricales, 678. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 38. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 134, f. 133. 1957.

（今関，Nagaoa, 2 : 38. 1952—川村，日．菌．図鑑，2 : 260, f. 238. 1954—原，日．菌．目．34. 1954）

Boletus olivaceus SCHAEFF. Icon. Fung. Ind. 77, pl. 105. 1763—FRIES, Epicr. Mycol. 416. 1838; Hymen. Eur. 506. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 233. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 243. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 255. 1871—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 2 : 355. 1873—GILLET, Champ. Fr. 649. 1874—KARSTEN, Hattsv. 2 : 15. 1882—WINTER, Pilze, 1 : 468. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 6 : 24. 1884; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 928. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 501. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1 : 269. 1892—W. G. Smith, Brit. Basid. 324. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1) : 259. 1912—REA, Brit. Basid. 570. 1922.

Boletus terreus SCHAEFF. Icon. Fung. Ind. 93, pl. 315. 1770.

Boletus pachypus γ *olivaceus* PERS. Myc. Eur. 2 : 130. 1825.

Boletus subtomentosus var. *calopus* PERS. l. c. 139. 1825.

Boletus tesselatus ROSTK. in STURM, Deut. Fl. III, 5 : 99, pl. 32. 1844.

Dictyopus calopus QUÉL. Enchir. Fung. 160. 1886.

Dictyopus olivaceus QUÉL. l. c. 160. 1886.

Oedipus calopus BAT. Bolets, 15. 1908.

Oedipus olivaceus BAT. l. c. 15. 1908.
Tubiporus calopus RICK. Vadem. 206. 1918.
Tubiporus olivasceus RICK. l. c. 206. 1918.

子実体は群生；傘は径 10—20cm，初め球状，のち丸山形～饅頭形，縁は初め内屈す；表面は乾燥，微細毛を有し，のち無毛となる，帯緑黄褐色；肉は甚だ厚く，軟かく，淡黄色，空気に触れて淡青藍色となる，苦味，臭少し；托は直生；管孔は細く，かなり長く，黄色，のち緑色となる；孔口は細小，多角形，鮮黄色，老時暗緑色の汚染を生ず；茎は 7—12×2—3cm，初めやや円錐状，のち多くはほぼ同幅，全面赤色のことあるも，多くは下部暗赤褐色にて上部美しき赤色を呈す，その赤色部に細き汚白色の網紋を存す；胞子は楕円状紡錘形，平滑，淡黄緑色，12—15×4—6μ；嚢状体は管壁に存し，オタマジャクシ形～便腹状紡錘形，無色，45—65×12—18μ；不食。

所在及産地

山地針葉樹林地—夏秋　　本州—欧．濠

和名 アシベニイグチタケ（足紅猪口茸）〔川村〕
アカジコウ（方言）（異物同名）

Boletus luridus SCHAEFF. ex FR.
ウラベニイロガワリタケ

SCHAEFFER, Fung. Bavar. 2:78, pl. 107. 1763—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 512. 1801; Myc. Eur. 2:132. 1825—FRIES, Syst. Myc. 1:391. 1821; Epicr. Myc. 418. 1838; Hymen. Eur. 511. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 438. 1844—BARLA, Champ. Nice, 67, pl. 33, f. 2-5. 1859—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 233, pl. 15, f. 5. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:258. 1871; Handb. Austr. Fungi, 108. 1892—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 264. 1872—GILLET, Champ. Fr. 642, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 246. 1876—WINTER, Pilze, 1:465. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 6 : 34. 1888; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 933. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 500. 1888—MASSEE. Brit. Fung. Fl. 1: 288. 1892; Brit. Fungi, 363, pl. 27, f. 1. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 191. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 125. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 327. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 78, pl. 85, f. 189. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1):256, pl. 43D. 1912—BRESADOLA, Icon. Myc. 19 : pl. 929. 1931—GILBERT, Bolets, 117, 167. 1931—CLELAND, Toadst. Mus. S. Austr. 2: 193. 1935—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 6 : 455. 1937; Agaricales, 2 : 113. 1952—SINGER, Agaricales, 680. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 222, pl. 91, f. 1. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 36. 1953—Heim, Champ. Eur. 2 : 132, f. 23, pl. 10, f. 2. 1957.

（川村，植．雑．22 : 326, f. 2. 1908; Illus. Jap. Fung. pl. 2, f. 25-8. 1912; 日．菌．図説，n. 171. 1929; 日．菌．図鑑，2:270, f. 243. 1954—白井，日．菌．目．ed. 2. 97. 1917; ed. 3. 55. 1927—安田，植．雑．34:30. 1920—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori. Soc. Agr. Sci. 3:112. 1931—松浦，茸類辞典，53, f. 52. 1933; 応用菌蕈学，809, 1102, f. 626. 1941—今関，日．隠．植．図．491. 1934; 原色きのこ，pl. 60(左). 1942; Nagaoa, 2:39. 1952—原，日．菌．目．34. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，87. 1957）

Boletus rubeolarius BULL. Champ. Fr. 1:326, pl. 100. 1762—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 512. 1801—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, pl. 250. 1803.

Boletus tuberosus SCHRAD. Sp. Fl. Germ. 148. 1794.

Leccinum luridum S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 648. 1821.

Leccinum rubeolarium S. F. GRAY, l. c. 648. 1821.

Tubiporus luridus KARST. Hattsv. 2 : 8. 1882; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 279. 1889.

Dictyopus luridus QUÉL. Enchir. Fung. 160. 1886.

Suillus luridus KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2) : 535. 1893.

Suillus rubeolaris POIRET, in KUNTZE, l. c. 535. 1893.

Oedipus luridus BATAILLE, Bolets, 16. 1908.

Suilellus luridus MURR. Mycologia, 1 : 17. 1909; 4:163, pl. 68. f. 1. 1912; N. Am. Fl. 9:151. 1910.



第 13 図　ウラベニイロガワリタケ Boletus luridus ×1/2　（大谷氏）

子実体は群生或は散生；傘は径 5—20 cm，半球形，丸山形～饅頭形，のち扁平となる；表面は乾燥，或は稍々粘性，絨毛を有し，のち無毛となる，帯焦茶オリーブ色～帯褐色，煤色，接触により黒変す，外皮剝げ易し；托は離生，黄色，遂に緑色となる；管孔は長し；孔口は小，円形～角形，初め鮮紅色に

て橙黄色，のちオリーブ色となる；茎は 5—15×3—6cm，頑強，通常基部便腹状に膨大し，擬根を有す，黄色にて上部濃色，鮮紅色の網目を有し，基部褐色～紫色；肉は黄色，管孔上は赤或は赤橙色，切傷によりて速かに強く青変す，茎の基部は赤菫色を呈す，臭良からず；胞子は円壔状紡錘形，有嘴，平滑，淡黄色，11—15×7—8μ；胞子紋は褐黄色；嚢状体は棍棒状紡錘形～披針形，45—60×8—12μ；可食。

所在及産地

林地，特に広葉樹林地—夏秋

本州，九州—欧．北米．濠

和名 ウラベニイロガワリタケ（裏紅色変り茸）〔川村〕

Boletus satanas LENZ

ウラベニイグチタケ

LENZ, Nützl. Schädl. Schw. 67, pl. 8, f. 33. 1831—FRIES, Epicr. Myc. 417. 1838; Hymen. Eur. 510. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:439. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 233. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:244. 1867—FUCKEL, Symb. Myc. 16. 1869—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:257. 1871—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:264, pl. 15, f. 1. 1872—GILLET, Champ. Fr. 642. 1874—WINTER, Pilze, 1 : 465. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 6:34. 1888; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 935. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1:500. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1 : 287. 1892; Brit. Fungi, 363. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 191. 1900—W. G. Smith, Brit. Basid. 324. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 78, pl. 85, f. 188. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1) : 254. pl. 45. 1912—REA, Brit. Basid. 571. 1922—BRESADOLA, Icon. Mycol. 19 : pl. 927. 1931—GILBERT, Bolets, 117, 167. 1931—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 5 : pl. 405. 1935; Agaricales, 2 : 112. 1952—SINGER, Agaricales, 680. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 37. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 133, pl. 10, f. 1. 1957.

（今関，日．隠．植．図．491, pl. 236, f. 2. 1939; Nagaoa, 2:39. 1952—川村，日．菌．図鑑，2:268, f. 242. 1954—原，日．菌．目．34. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，87. 1957）

Boletus edulis var. *tuberosus* PERS. Syn. Meth. Fung. 511. 1801.

Boletus luridus var. *tuberosus* PERS. Myc. Eur. 2 : 133. 1825.

Boletus marmoreus ROQUES, Hist. 65, pl. 6. 1832.

Boletus tuberosus BULL. Champ. Fr. pl. 100. 1872.

Tubiporus Satans KARST. Hattsv. 2 : 7. 1882.

Dictyopus tuberosus QUÉL. Enchir. Fung. 160. 1884.

Suillus Satanas KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2): 536. 1893.

Oedipus tuberosus BAT. Bolets, 16. 1908.

Boletus luridus BARLA, Champ. Nice, 67, pl. 33, f. 1. 1859. (non SCHAEFFER et FRIES)

Boletus sanguineus KOMBH. Abbild. Schw. 5: 14, pl. 38, f. 1–6. 1836. (non WITHERING)

Boletus erythropus KROMB. l. c. 16, pl. 38, f. 7–10. 1836. (non PERSOON, nec FRIES)

子実体は孤生或は小群生；傘は径 9—25cm，饅頭形，半球状丸山形，多肉；表面は無毛，或はやや微細毛を有し，触感鹿皮の如く，光沢なく，初め湿時明かに粘性，汚白色，灰白色，帯褐黄色にて，稀に淡クリーム色，淡黄褐色となる；縁は薄く，初め内捲して茎に接し，開張するも尚内屈す；外皮は剝げず；托は彎状離生；管孔は，密，短く，傘厚より甚しく短し，淡黄色，のち鮮黄色，遂にオリーブとなる，接触によりて緑染さる；孔口は小円形，初め黄色，のち茎の方より赤色，血赤色，緋色となり，縁部は屢々黄色を残存す，老時銅橙色となり，オリーブ色を帯ぶ，接触によりて青黒に汚染す；茎は太く，短く，7—10×5—6cm，初め卵状球根形，のち伸長するも，なお常に過度に肥満す，初め頂部黄色なるも，全部美なる洋紅色となり，のち褐色し各所汚染し，中部殊に基部淡オリーブ黄色となる，上中部に於て著しき血赤色の細網を有し，下部の網は弛くして淡色なり，中実；肉は厚く，緊緻，白色～類白色，管孔上は黄色，空気に触れて帯赤色となり，のち緑青色に変ず，変色は管孔上に於て著し，茎の基部は黄褐～赤色となる，味温和，臭は初め弱く，のち悪し；胞子は楕円形～紡錘形，平滑，淡黄色，11—16×5—7μ；胞子紋は黄オリーブ色；嚢状体は孔側に存し，円筒状棍棒形，紡錘形，無色，40—50×5—10μ；可食と称せらる。

所在及産地

草原及林地上—夏秋 本州—欧

和名 ウラベニイグチタケ（裏紅猪口茸）

Boletus erythropus FR. ex FR.

オオウラベニイロガワリタケ

FRIES, Obs. Myc. 2 : 243. 1818; Anteckn. Sv Aetl. Svamp. tab. 41. 1836—KROMBHOLZ, Abbild Schw. 5 : pl. 37, f. 15–7. 1836—BARLA, Champ. Nice, 68, pl. 33, f. 6–7. 1859–BERKELEY, Outl. Brit

Fung. 233. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1: 258. 1871—SACCARDO, Syll. Fung. 6 : 35. 1888; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 933. 1916—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 191. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 125. 1900—REA, Brit. Basid. 571. 1922—GILBERT, Bolets, 118, 169, pl. 13, f. 37. 1931—BRESADOLA, Icon. Myc. 19 : pl. 930. 1931—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 5 : pl. 407. 1935; Agaricales, 2 : 113. 1952—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 2 : 193. 1935—SINGER, Agaricales, 679. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 36. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:133. 1957.

(今関, Nagaoa, 2:39. 1952; 及土岐, 林. 試. 研. 報. 67:32. 1954—原, 日. 菌. 目. 34. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 86, pl. 39, f. 224. 1957)

Boletus luridus β. erythropus FR. Syst. Myc. 1:391. 1821; Epicr. Myc. 418. 1838; Hymen. Eur. 511. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 4: 330-XLIV. 1876—GILLET, Champ. Fr. 642. 1874—MASSEE, Brit. Fung. Fl. I, 289. 1892.

Boletus miniatoporus SECR. Mycogr. Suisse, 3 : 28. 1833.

Boletus luridiformis ROSTK. in STURM, Deut. Fl. III, 5:105, pl. 35. 1844—FRIES, Hymen. Eur. 512. 1874—GILLET, Champ. Fr. 644. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 6 : 36. 1888.

Tubiporus erythropus KARST. Hattsv. 2 : 9. 1882.

Dictyopus erythropus QUÉL. Enchir. Fung. 160. 1866.

Suillus Erythropus POIRET, in KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2) : 535. 1893.

Oedipus erythropus BAT. Bolets, 17. 1908.

傘は径 10—20 cm, 多肉, 粗大, 丸山形; 表面は細微絨軟毛を被むり, 乾燥, のち僅か湿潤, 褐色～栗褐色, 屢々濃赤渋色; 縁は厚くして鋭し, 初め内屈す; 托は離生～狭生; 管孔は長し, 黄色, のち帯緑色となる; 孔口は小円形, 鈍き血赤色, のち赤色, 橙黄色, 銅色を帯ぶ, 接触により緑黒色となる; 茎は 5—12×2—4 cm, 太く, 便腹状, 傘の下にて狭縊, 黄色, 網目なきも, 血赤色の小粒密生し, 頂部以外は全部赤色に見ゆ, 粒間は濃黄色, 基部はオリーブ褐色, 中実; 肉は緻密, 厚く, のち柔軟となる, 美しき橙黄色, 空気に触れて直ちに緑青色となる, 往々基端に於て赤色となる, 味温和, 臭弱し; 胞子は楕円状紡錘形, 平滑, 淡黄色, 13—18×5—7 μ; 胞子紋はオリーブ褐色; 嚢状体は管孔側に多生, 紡錘形～棍棒形, 無色, 30—45×6—9 μ; 可食。

所在及産地

針葉樹林地上一夏秋　　本州一欧. 北米

和名 オオウラベニイロガワリタケ

ツブイロガワリタケ (粒色変り茸)

Boletus pulverulentus OPAT.

イロガワリタケ

OPATOWSKI, Comm. Hist. Nat. Fung. Bolet. 27, pl. 1. 1836—KONRAD, Bull. Soc. Myc. Fr. 43:198. 1927—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 5 : pl. 411. 1928—SINGER, Agaricales, 679. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 40. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:138. 1957.

(松田及本郷, 植. 研. 雑. 31:200. 1956—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 86, pl. 39, f. 223. 1957)

Boletus radicans FR. Epicr. Myc. 415. 1836. pr. p. (non Syst. Mycol. 1:390, nec Hymen. Eur. 503)—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:262, pl. 16, f. 3. 1872—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 919. 1916—REA, Brit. Basid. 564. 1922. pr. p.—BRESADOLA, Icon. Myc. 19 : pl. 916. 1931. (non PERSOON nec Auct.)

Versipellis radicans QUÉL. Enchir. Fung. 158. 1886. pr. p.

Uloporus Mougeotii QUÉL. Champ. Jura. Vosg. Suppl. 15 : 4, pl. 9, f. 6. 1886.

Xerocomus radicans QUÉL. Fl. Myc. 417. 1888. pr. p.—BATAILLE, Bolets, 18. 1908.

Xerocomus pulverulentus GILB. Bolets, 116, 143, pl. 8, f. 24. 1931—SLIPP & SNELL, Lloydia, 7 : 46, pl. 8, f. c. 1944—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 122. 1952.

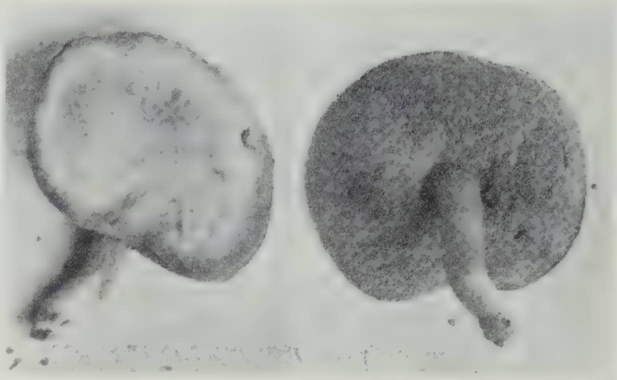
(今関, Nagaoa, 2:37. 1952—原, 日. 菌. 目. 394. 1954)

Boletus badius KAWAM. (non FRIES)

(川村, 日. 菌. 図説, n. 49. 1929; 日. 菌. 図鑑, 2: 252, f. 233. 1954—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:112. 1931—松浦, 茸類辞典, 53, f. 51. 1933; 応用菌蕈学, f. 732 (p. 1106). 1941—今関, 日. 隠. 植. 図. 493, pl. 237, f. 1. 1939; 原色きのこ, pl. 60 (右). 1942)

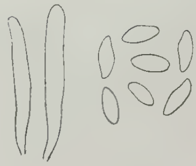
子実体は群生或は叢生; 傘は径 5—9 cm, 丸山形, のち扁平丸山形, 或は往々波状をなし, 中央凹下す; 表面は甚だ微細の絨毛あり, 乾燥, 湿時僅か粘性, 老時無毛となり, 光沢あり, 焦茶色或は帯オリーブ褐色にて, 褐色或は赤色の汚染を有し, のち赤褐或は多少紫黒色又は黒褐色となる; 縁は幼時より内屈し, 鋭く, 同色; 托は分離性, 直生或は彎状直生; 管孔は長さ 3—13 mm, レモン色, 切傷によりて直ちに緑色或は青色に変ず; 孔口はシトロン～黄色, のち緑黄色となり, 遂に淡褐黄色となる, 円形～角形, 広く, 径 0.5—1 mm, 屢々多少不正形となり, 成時茎に近き部に於て長く, 且つ波曲す, 屢々複合, 接触によりて直ちに青変し, のち赤褐～黒褐色となる; 茎は 5—13×0.6—3.5 cm, 形かなり変化し, 真

直或は基部に於て曲り，基部狭細或は便腹状をなし，往々紡錘形の類偽根を有す，織維状肉質，緊緻，中実，表面は幼時微細絨毛あり，のち点となる，黄色，のち頂部淡黄色，下方赤色～赤褐色にて濃紫色～紫黒色の点を有す，接触によりて，かなり速に褐黒色に染まり，最後に基部紫黒色或はオリーブ褐色となる，鍔及網目なし；肉は柔靱，水潤性，黄色，切傷後直ちに濃青色となる，のち灰青色或は灰菫色～赤色となる，屢々切断時茎の基部紫赤色となり，のち銹黒色に変ず，味は温和或は僅か酸味，臭は著しからず；胞子は円壔形，基端小嘴あり，平滑，帯オリーブ黄色，11—14×3.5—5 μ；胞子紋は帯淡黄オリーブ色；嚢状体は孔稜に多生，屢々簇生し，便腹状紡錘形，屢々多少結晶を被むり，無色～淡黄色，50—85×10—15 μ；可食。



a　　b

第 14 図　コウジタケ Boletus rubellus
a．子実体表面　b．同裏面　×1/2
c．嚢状体　d．胞子　×250
（大谷氏）



c　　d

所在及産地

広葉樹林地—夏秋　北海道，本州—欧．北米

和名　イロガワリタケ（色変り茸）〔川村〕
アイタケ（藍茸）〔方言〕

Boletus rubellus KROMBH.
コウジタケ

KROMBHOLZ, Abbild. Schw. 5:11, pl. 36, f. 21–24. 1836—FRIES, Hymen. Eur. 518. 1874—WINTER, Pilze Deut. 1:459. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 6:45. 1888; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 904. 1916—BRESADOLA, Icon. Myc. 19 : pl. 941. 1931—SINGER, Agaricales, 679. 1949.

(今関, Nagaoa, 2:39. 1952—原, 日. 菌. 目. 34. 1954—松田及本郷, 植. 研. 雑. 31 : 200. 1956—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 86, f. 222, pl. 38, f. 222. 1957)

Boletus sanguineus WITH. Brit. Pl. 4:419. 1796—FRIES, Boleti, 6. 1835; Epicr. Myc. 412. 1838; Hymen. Eur. 500. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 231. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2: 240. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:252. 1871; Handb. Austr. Fungi, 104. 1892—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:260. 1872—GILLET, Champ. Fr. 640. c. ic. 1874—WINTER, Pilze, 1:473. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 6:8. 1888; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 910. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:266. 1892; Brit. Fungi, 357. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 322. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1): 264. 1912—REA, Brit. Basid. 562. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 6:464. 1937.

(P. HENNINGS, Hedwigia, 39, Beibl. 155. 1900—松村, 植. 名鑑, 1:133. 1903—白井, 日. 菌. 目. 15. 1905; ed. 2. 97. 1917; ed. 3. 55. 1927—川村, 植. 雑. 22:328, f. 3. 1908; 日. 菌. 図説, n. 153. 1929; 日. 菌. 図鑑, 2:257, f. 236. 1954—今関, 日. 隠. 植. 図. 489, pl. 235, f. 1–2. 1939; 原色きのこ, pl. 61 (左). 1942—広江, 応用菌蕈学, 1107. 1941)

Viscipellis sanguinea QUÉL. Enchir. Fung. 156. 1886.

Ixocomus sanguineus QUÉL. Fl. Myc. 413. 1888.

Suillus rubellus KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2): 536. 1893—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Natürl. Pfl.-fam. 1, 1** : 190. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1):242. 1912.

Suillus sanguineus KUNTZE, l. c. 536. 1893.

? *Boletus cramesinus* SECR. Monogr. Suisse, 3: n. 36. 1833—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 218, pl. 90, f. 2. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 41. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:136. 1957.

? *Xerocomus cramesinus* KONR. & MAUBL. Agaricales, 2:123. 1952.

傘は径 4—8 cm，半球形～丸山形，のち開張扁平となり，更に凹入することあり；表面は乾燥，有毛～無毛，血赤色或は赤褐色；肉は白色，外皮下少しく赤色を帯ぶ，傷時稍々青変するのみ，味温和或は良く，臭なし；托は直生～僅か垂生，黄色；孔口は中等大，屢々大形のものを混ず，角形，黄色；茎は 3—6×0.6—1 cm，同幅，或は基部便腹状，黄色，赤褐色の汚線あり，汚線は茎を旋りて縦走するがため茎は捩れたる観を呈す；胞子は長楕円形，平滑，淡

緑色，20—22×4—4.5μ；嚢状体は円筒状棍棒形，黄色，45—50×7—9μ；可食。

所在及産地

林地，芝生—夏秋　本州—欧

和名 コウジタケ（麴茸）〔古名〕

Tylopilus KARST.

ニガイグチタケ属

KARSTEN, Rev. Mycol. 3:16. 1881—SINGER, Agaricales, 681. 1949.

Rhodoporus (QUÉLET) BATAILLE, Bolets, 11. 1908.

Leucogyroporus SNELL, Mycologia, 34 : 408. 1942.

? *Rhodobolites* G. BECK, Zeitschr. Pilzk. 2:146. 1923.

子実体は肉質，早腐性，中形；傘は稍々平滑～細密軟毛，往々小疱痕を有す，乾燥或は粘性，種々なる構造の表皮層を有し，往々短細胞被よりなる；托は少くとも幼時淡色，少くとも成熟せば通常茎周に接着す；孔口は小形，傷時以外は口縁褪色せず；胞子紋は汚ピンク肉色～鈍肉色，材褐色，濃銹褐色等，屢々貯蔵標本にては淡色となる；胞子は淡蜜色，藁色，淡褐色，形は変化し，平滑，薄膜；嚢状体は通常良く発達し，往々無色の担子柄と著しく対象的なり；托実質は真の両側型にて所謂 *Boletus* 亜型；茎は無毛或は柵状の毛或は皮部嚢状体に被われ，屢々網目の部分に子実層を存す；ベールなし；肉は類白色にて黄色ならず，空気に曝すとき不変化或は変化するも青色とならず；味苦く，味温和なる色の変らざるものは只1種を知らるるのみなり，胞子及実質或は後者のみ往々僅か糊性；林内地上に生じ，多分菌根を作る；殆ど汎布；約15種を知らる，食用となるものあるも苦味あるものは食用とせず。

（本属名は tylos〔希〕（瘤，硬皮），pilos〔希〕（帽子）より出づ）

基準種　*T. felleus* (BULL. ex FR.) KARST.

本邦既知種　ニガイグチタケ　***T. felleus*** (39)

Tylopilus felleus (BULL. ex FR.) KARST.

ニガイグチタケ

KARSTEN, Rev. Myc. 3(9):16. 1881; Hattsv. 2:2. 1882; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 276. 1889—SCHROETER, Pilze Schles. 1:497. 1888—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:190. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 124. 1900—MURRILL, Mycologia, 1:15. 1909; N. Am. Fl. 9 : 134. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1): 243. 1912—REA, Brit. Basid. 554. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 6:452. 1937; Agaricales, 114. 1952—SINGER, Agaricales, 682. 1949.

（今関, Nagaoa, 2:40. 1952—原，日．菌．目．374. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，85, pl. 38, f. 220. 1957）

Boletus felleus BULL. Champ. Fr. 325, pl. 379. 1787—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 509. 1801; Myc. Eur. 2:136. 1825—DE CANDOLLE, Fl. Fr. 2: 125. 1815—FRIES, Syst. Myc. 1:394. 1821; Epicr. Myc. 425. 1838; Hymen. Eur. 516. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 436. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 236. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:247. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:260. 1871; Handb. Austr. Fung. 108. 1892—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:266. 1872—GILLET, Champ. Fr. 631, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:248. 1876—WINTER, Pilze, 1:461. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 6:43. 1888; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 902. 1916—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 173, f. 166. 1903—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:291. 1892; Brit. Fungi, 364. 1911—ATKINSON, Mushrooms. ed. 2. 173, f. 166. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 329. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 79, pl. 86, f. 190. 1910—NEUMAN, Polyp. Wisc. 123, pl. 24, f. 83, pl. 25, f. 83. 1914—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 179, pl. 92. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 19 : pl. 938. 1931—GILBERT, Bolets, 117, pl. 9, f. 27. 1931—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 35. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:141, f. 141. 1957.

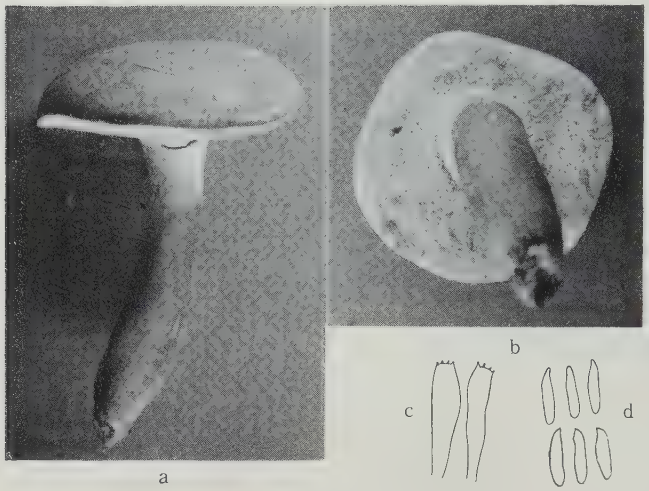
（川村，日．菌．図説，n. 68. 1929；食用菌及有毒菌，f. 37(p. 31). 1931；日．菌．図鑑，2:272, f. 244. 1954—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:112. 1931）

Dictyopus felleus QUÉL. Enchir. Fung. 159. 1886.

Rhodoporus felleus QUÉL. Fl. Myc. 420. 1888—BATAILLE, Bolets, 11. 1908.

Suillus felleus POIR. in KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):535. 1893.

傘は径 6—12cm，半球形～饅頭形，のち開張し扁平；表面は無毛，平滑，淡黄色，栗褐色，或は帯紅褐色；托は直生，管孔は多少長く，白色，のち肉色；孔口は中等大，円形～角形，白色，のちピンク色；茎は 4—9×2—3cm，同幅或は基部球根状にて上部に狭細，上部に網目あり，傘と同色或は淡色，中実；肉は白色，傷により僅か肉色となる，厚くして柔軟，味甚だ苦し，臭なし；胞子は長紡錘形～円壔形，基部有嘴，平滑，ピンク色，12—14×3—4.5μ；胞子紋はピンク色にて褐オリーブ色ならず；苦味ありて食用不適。



第15図　ニガイグチタケ Tylopilus felleus
a．子実体表面　b．同裏面 ×1/2　c．担子柄　d．胞子
（大谷氏）

所在及産地

林内，通常針葉樹腐木上一夏秋

本州，九州一欧．北米．濠．亜（西比）

和名　ニガイグチタケ（苦猪口茸）〔川村〕

Leccinum S. F. GRAY em. SNELL
ヤマイグチタケ属

S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:646. 1821—SNELL, Mycologia, 34:403. 1942—SINGER, Agaricales, 683. 1949.

Krombholzia KARSTEN, Rev. Myc. 3:17. 1881. (non RUPRECHT) ex GALEOTTI (1844) nec BENTHUM (1881)

Trachypus BATAILLE, Bolets, 12. 1908. (non REINW. et HORNSCH.)

Krombholziella R. MAIRE, Publ. Inst. Bot. Barcelona 3(4):41. 1935.

子実体は肉質，早腐性，中～大形；傘の表皮は短細胞被，或は只僅かの球嚢，或は毛被の糸状菌糸に混在する短大菌糸の連鎖，或は少くとも表層に水平に並ぶ糸状菌糸よりなる平行菌糸被より構成さる，粘性或は乾燥，無毛，小顆粒，或は細密軟毛を有し，亀裂を屢々生ず，縁は屢々無性にて膜状，表皮層及び縁の肉が突出し，縁膜片と誤認さる；托は黄色，帯黄色，類白色～汚色，下方に凸出；管孔は肉厚及傘径に比して甚だ長きも，茎周に至りて急激に短かくなり，殆ど離生，或は成時全く離生となる；孔口は甚だ細微～小形（径 1 mm 以下）にて孔壁甚だ薄し，褪色せざるも傷時屢々汚染を生ず；托実質は真の両側型にて所謂 *Boletus* 亜型；胞子紋はオリーブ焦茶～焦茶色，オリーブ褐色；胞子は常に紡錘状円筒形或は紡錘状楕円形，甚しく伸長し寧ろ大形，屢々長さ 20 μ 以上に及ぶ種類あり；嚢状体は紡錘状にて中部膨大し，甚だ屢々頂部細頸壜状をなす，無色，小或は中形；茎は通常寧ろ細くして頂部脆く，基部に向つて漸大し，屢々基部堅繊維質となる，暗色粗鱗片或は著しく突出せる穀粉を被むりて痂皮状を呈す，痂皮は往々微細なる網目を作る，皮部担子柄，皮擬糸状体及び平行せる無色菌糸の束となる皮嚢体より構成さる，小腺点なく，粘膠性なくして常に乾燥，擬菌核を有せず；肉は黄色或は白色，変色或は変色せず，屢々茎の基部青色となるも，多くは他部変色せず；菌絆を有せず。広葉樹（ヤナギ，ドロ，カバ，シデ，ブナ，カシワ等）林及び木に近き地上に生じ，菌根を作る；多くは熱帯以外の地に産す，約 12 種を知らる，食用菌。

（本属名は lekos〔希〕（皿），-cinus（関するの意の接尾語）より出づるか）

基準種　*L. aurantiacum* (BULL.) S. F. GRAY

本邦既知種検索表

A．傘は白～灰褐～暗褐色。
　a．傘は汚白，灰，暗褐色より黒色に至る；茎は白～灰白色，繊維痂皮あり。
　　ヤマイグチタケ　***L. scabrum***　(40)
　b．傘は白色，中盤緑灰色；茎は白色，綿絮粒あり。シロヤマイグチタケ　ssp. ***niveum***　(41)
B．傘は赤橙色，褐橙色或は褐赤色；茎は灰白色，褐色の小鱗被あり。　キンチャヤマイグチタケ　***L. aurantiacum***　(42)
C．傘は淡紅色～淡葡萄酒色；茎は白色，粒点あり，基部鮮黄色を呈す。
　　アケボノアワタケ　***L. chromapes***　(43)

Leccinum scabrum (BULL. ex FR.) S. F. GRAY
ヤマイグチタケ

S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:647. 1821—SLIPP & SNELL, Lloydia, 7:61, pl. 6, f. 4; pl. 8, f. L. 1944—SINGER, Agaricales, 686. 1949.

（今関，Nagaoa, 2:40. 1952；及本郷，原色日．菌．図鑑，87. 1957）

Boletus scaber BULL. Champ. Fr. 319, pl. 132. 1872; pl. 489, f. 1. 1790—PERSOON, Obs. Myc. 2: 13. 1799; Syn. Meth. Fung. 505. 1801; Myc. Eur.

2:146. 1825—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, 2: pl. 175. 1799—DE CANDOLLE, Fl. Fr. 2:126. 1815—FRIES, Syst. Myc. 1:393. 1821; Elench. Fung. 1:127. 1828; Epicr. Myc. 424. 1838; Hymen. Eur. 515. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:436. 1844—BARLA, Champ. Nice, 71, pl. 35, f. 1–5. 1859—BERKELEY, Oult. Brit. Fung. 235. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:249. 1867—FUCKEL, Symb. Myc. 16. 1869—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:259. 1871—QUÉLET, Champ. Jura Vosg, 1:266. 1872—GILLET, Champ. Fr. 637, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:248. 1876—WINTER, Pilze, 1:461. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 6:41. 1888; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 906. 1916—SCHROETER, Pilze. Schles. 1:497. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:293. 1892; Brit. Fungi, 364, pl. 27, f. 4. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1:1**:191, f. 102, A–B. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 125. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 174. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 328. 1908—MURRILL, Mycologia, 1:3, pl. 1, f. 5. 1909—ROLLAND, Atl. Champ. 79, pl. 87, f. 192. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1):254, pl. 42D. 1912—NEUMAN, Polyp. Wisc. 127. 1914—REA, Brit. Basid. 573. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 186, pl. 96. 1927—BRESADOLA, Icon. Mycol. 19: pl. 936. 1931—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 6:459. 1937—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 223, pl. 89, f. 1. 1950—HEIM, Champ. Eur. 2:140, pl. 12, f. 1. 1957.

(P. HENNINGS, Hedwigia, 39, Beibl. 155. 1900—松村, 植. 名鑑, 1:133. 1904—白井, 日. 菌. 目. 15. 1905; ed. 2. 97. 1917; ed. 3. 55. 1927—KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 14, f. 10–13. 1915; 日. 菌. 図説, n. 175. 1929; 日. 菌. 図鑑, 2:274, f. 245. 1954—安田, 植. 雑. 35:161. 1921—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:112. 1931—松浦, 蕈類辞典, 109, f. 126. 1933; 応用菌蕈学, 1107, f. 733. 1941—今関, 日. 隠. 植. 図. 491, pl. 236, f. 1. 1939)

Krombholzia scabra KARST. Rev. Myc. 3(9): 17. 1881; Hattsv. 2:17. 1882; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 277. 1889—GILBERT, Bolets, 118, 184, pl. 15, f. 44. 1931.

Gyroporus scaber QUÉL. Enchir. Fung. 162. 1886.

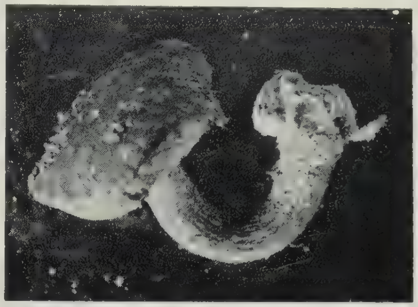
Trachyporus scaber BAT. Bolets, 12. 1908.

Ceriomyces scaber MURR. Mycologia, 1:146. 1909.

Ceriomyces viscidus MURR. N. Am. Fl. 9:139. 1910. (non FRIES)

Trachypus leucophaeus KONRAD & MAUBL. Agaricales, 2:116. 1952.

子実体は孤生或は群生；傘は径5—20cm, 半球形, 丸山形, のち扁平となる, 縁に真の縁膜片を有せず；表面は無毛或は稀に微細毛を疎生す, 屢々完全に乾燥, 湿時僅か粘性, 遂に有皺或は渓流状, 時に亀裂す, 色は極めて変化し, 淡黄褐色, 灰褐色, 暗褐色, 或は帯紅褐色等を呈す；肉は緊緻, 白色にて淡褐色或は淡紅色を帯ぶ, 空気に曝露して幼品は変色せざるも, 老品にては灰色となり, 或は各所にピンク或は菫褐色を帯ぶ, 味は温和, 臭著しからず；托は狭生～殆ど離生, 管孔甚だ長く, 純白色～白黄色, 傷時肉色或は帯黒色となり, 老時帯褐色；孔口は円形



第16図　ヤマイグチタケ Leccinum scabrum ×1/3　（大谷氏）

～稍々不正形, 通常径0.4—1mm, 白色～灰色；茎は6—12×1—2cm, 上方に狭細, 基部類球根形, 鍔なく, 網目なし, 表面に繊維痂皮あり, 多少肋骨状或は擬網を存し, 乾燥, 白色～灰白色, 鱗片は灰色或は黒褐色；茎肉は強靱にて甚だ繊維質, 白色, のち灰色となる, 切断により不変色, 屢々基部に於て藍色, 中実；胞子は紡錘状楕円形, 淡オリーブ褐色, 14—18×5—6μ；胞子紋は暗褐色；嚢状体は稀生, 棍棒形～便腹状嘴突起あり, 無色, 25—60×7—10μ；可食。

所在及産地

林地—夏. 秋　本州, 九州—欧. 北米. 亜(西北)

和名　ヤマイグチタケ（山猪口茸）〔川村〕

ssp. **niveum** (FR.) SING.

シロヤマイグチタケ

SINGER, Agaricales, 686. 1949—HEIM, Champ. Eur. 2:141. 1957.

Boletus scaber var. *niveus* FR. Obs. Myc. 1:111. 1815; Hymen. Eur. 516. 1874—GILLET, Champ. Fr. 637. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 11:398. 1882—SACCARDO, Syll. Fung. 6:41. 1888; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 907. 1916—REA, Brit. Basid. 573. 1922.

Boletus scaber var. *chioneus* FR. Obs. Myc. 2: 250. 1818; Syst. Myc. 1:394. 1821; Epicr. Myc. 425. 1838.

Boletus chioneus scaber SECR. Monogr. Suisse,

3:12. 1833.

Boletus halopus ROSTK. in STURM, Deut. Fl. 3(5):131, pl. 48. 1844—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 5 : pl. 409. 1935.

Boletus albus GILLET, Rev. Myc. 3(9):5. 1881.

Gyroporus scaber var. *niveus* QUÉL. Enchir. Fung. 162. 1886.

Boletus Gilletii SACC. et CUBONI, Syll. Fung. 6:46. 1888.

Boletus versipellis var. *niveus* PAT. Tab. Anal. 7:63. 1889.

Trachypus scaber var. *niveus* BAT. Bolets, 12. 1908.

Boletus scaber f. *aerugineus* KILL. Pilze Bayern, 2:19. 1925.

Boletus scaber f. *alba* SARTORY et L. MAIRE, Bolets, 388. 1930.

Trachypus holopus KONR. et MAUBL. Agaricales, 2:116. 1952.

子実体は孤生或は小群生；傘は径 7cm に及び，半球形，丸山形，饅頭形，のち開張す；表面は初め軟毛あり，のち無毛となる，雨によつて僅か滑かとなる，雪白色，往々中盤緑灰色となる；縁は鋭く，時に僅か突出す；肉は厚く，緊緻，白色，傷時黒変せずして緑灰色となる；托は彎状離生，管孔可成り長く，初め白色，のち緑灰色となる；孔口は小にて円形，白色，のち緑灰色となる；茎は緊緻，長く，殆ど同幅，通常基部太し，白色，湿時僅か緑灰色となる，綿絮粒に被われ，頂部に於て甚だ密なり；茎肉は繊維状肉質，白色にて緑灰色となる；胞子は楕円状紡錘形，平滑，淡黄色，16—19×5—6μ；胞子紋は黄褐色。

所在及産地

広葉樹林地—夏秋　　北海道，本州—欧

和名 シロヤマイグチタケ（白山猪口茸）〔今井〕

Leccinum aurantiacum (BULL.) S. F. GRAY
キンチャヤマイグチタケ

S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:646. 1821—SINGER, Agaricales, 686. 1949.

(今関及本郷，原色日．菌．図鑑，87, pl. 39, f. 225. 1957)

Boletus rufus SCHAEFF. Icon. Fung. 4:75, pl. 103. 1763—SCHROETER, Pilze Schles. 1:498. 1888—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 906. 1916. pr. p.—BRESADOLA, Icon. Myc. 19:935. 1931—et Auct. pr. p. (non FRIES, BERKELEY)

Boletus aurantiacus BULL. Champ. Fr. 320, pl. 236, f. 2. 1784—DECANDOLLE, Fl. Fr. 2:127. 1815—PERSOON, Myc. Eur. 2:147. 1825—BERTRAND, Bull. Soc. Myc. Fr. 6 : pl. 46. 1890—ROLLAND, Bull. Soc. Myc. Fr. 8:10, pl. 4, f. 2. 1892—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 5 : pl. 408, f. 1. 1936—HEIM, Champ. Eur. 2:141, pl. 12, f. 2. 1957—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 40. 1953. (non JACOBASCH)

Boletus aurantius SOW. Col. Fig. Engl. Fungi, 1: pl. 110. 1797—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 504. 1801.

Boletus versipellis FR. Epicr. Myc. 424. 1836; Hymen. Eur. 515. 1874. pr. p.—BERKELEY, Oult. Brit. Fung. 235. 1860—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:266. 1872. pr. p.—GILLET. Champ. Fr. 636, c. ic. 1878—SACCARDO, Syll. Fung. 6: 40. 1888—REA, Brit. Basid. 572. 1922—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 222, pl. 88, f. 1. 1950—et Auct. pr. p.

Boletus scaber β. rufus PERS. Myc. Eur. 2:146. 1825.

Boletus aurantius scaber SECRETAN, Myc. Suisse, 3:9. 1833.

Boletus scaber var. *aurantiacus* RABENH. Deut. Krypt. Fl. 1:436. 1844—BARLA, Champ. Nice, 72, pl. 35, f. 6–12. 1859—GILLET, Champ. Fr. 637, c. ic. 1874.

Krombholzia versipellis KARST. Rev. Myc. 3(9):17. 1881.

Gyroporus rufus QUÉL. Enchir. Fung. 161. 1886.

Boletopsis rufa P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl–fam. 1, 1**: 194. 1900.

Trachypus rufus BATAILLE, Bolets, 12. 1908.

Tubiporus rufus RICKEN, Vademecum, ed. 1, 204. 1918.

Trachypus aurantiacus KONR. et MAUBL. Agaricales, 2:117. 1952.

子実体は孤生或は群生；傘は肉質，厚く，半球形～丸山形にて中高，径 4—21cm；表面は明かに微毛を被むり，初めは密なる産毛に蔽わる，乾燥，初め美なる赤橙色，褐橙色或は褐赤色，時々雨露により褪色す；縁は薄く，屢々縁膜片を存す；肉は厚く，初め緊緻にて，傘部は柔くなり，茎の基部は堅緻に残る，白色にて，淡紅色～灰色の不規則の汚点を生じ，遂に褐黒色となる，茎の表面近くの部は青味を帯ぶ，味温和，臭なし；托は彎状離生，表面は甚だ膨れ出づ，長くして，細かく，密，汚白色～灰色，孔口は小，径 0.75mm 以下，円形；茎は 5—20×1—5cm，上方に狭細，下方太く，灰白色，その上に褐色，灰褐色或は黒色の小鱗被を散在し，往々それは幾分網目状に配列す，基部を傷つくれば青変す；胞子は長紡錘形，平滑，帯黄色，11—17×3.5—5μ；油球を含む；胞子紋は黄褐色；嚢状体は紡錘形にて便腹状，無色，30—50×9—12μ；可食。

所在及産地

林内地上―夏秋　　本州，九州―欧．北米

和名　キンチャヤマイグチタケ

（金茶山猪口茸）〔今関及本郷〕

Leccinum chromapes (FROST) SING.

アケボノアワタケ

SINGER, Agaricales, 686. 1949.

（今関，及土岐，林．試．研．報．67:32. 1954；及本郷，原色日．菌．図鑑，87. 1957）

Boletus chromapes FROST, Bull. Buffalo Soc. Nat. Sci. 2:105. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 9: 157. 1891—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 176, f. 168. 1903—NEUMAN, Polyp. Wisc. 128. 1914.

（川村，植．雑．22:329, f. 4. 1908；日．菌．図説，n. 105. 1929；日．菌．図鑑，2:275, f. 246. 1954—白井，日．菌．目．ed. 2. 95. 1917；ed. 3. 55. 1927—広江，応用菌蕈学，1099. 1941）

Suillus chromapus KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2): 535. 1893.

Ceriomyces chromapes MURR. Mycologia, 1: 145. 1909; N. Am. Fl. 9:139. 1910.

傘は径 5—10 cm，丸山形，のち扁平となる；表面は往々僅か細毛を有し，柔かく，乾燥，湿時にても粘性ならず，淡紅色～淡葡萄酒色，中央濃色；縁は鋭或は幾分鈍く，同色；肉は白色，傷時不変色；托は離生或は僅か着生，白色，のち肉色となり，老時褐色を呈す；孔口は小形にて類円形～角形，管孔と同色，子実面多少凹凸を有す；茎は 6—9×0.8—1.2 cm，同幅，或は上部少しく狭細，基端尖る，白色にてピンク～褐色の粒点を有し，基部鮮黄色を呈す，往々全部黄色を呈す，上部に往々微かなる網目あり；茎肉は白色～黄色，殊に基部鮮黄色なり，中実，老時髄部褐色となり中空となる；胞子は円壔状楕円形，平滑，殆ど無色～淡緑色，11—14×4—5 μ。

所在及産地

林地―夏秋　　本州―北米

和名　アケボノアワタケ（曙泡茸）〔川村〕

疑問種

Boletus rhodomyces BERK. et CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4:122. 1858.

Strobilomycetaceae GILBERT　オニイグチタケ科

GILBERT, Bolets, 83, 105. 1931—SINGER, Ann. Myc. 34:324. 1936; Agaricales, 688. 1949.

傘は粘性或は粘性ならず；子実層托は管状，茎の周囲に接着～直生；胞子紋は黒色，或は殆ど黒色にて，黒褐或は濃オリーブ褐色；胞子は完熟せば濃色にて多くは暗褐色なり，表面に暗色の刻紋を有し，稀に平滑のものを混ずるも，大形（長さ 20—30 μ）なるか，或は比較的厚膜なるにより区別さる，不完全なる発芽孔を有し，截頭或は前亜科のものより尖頭なり；担子柄及び嚢状体は比較的肥大す；托実質は両側型にて所謂 *Boletus* 亜型；茎は通常殆ど円筒形にて比較的細長；被膜は屢々存在す；菌絆は欠如；地上，稀に根際或は腐木上に生ず；SINGER 氏 (1949) は 3 属を収む，すべて皆本邦に産す。

本邦既知属検索表

A．胞子は球形～短楕円形；紋は殆ど黒色

オニイグチタケ属　**Strobilomyces**　(43)

B．胞子は長形

a．管孔口及び孔口は幼時白色～淡灰クリーム色，熟時淡紅色，泥灰色～赤褐色；胞子紋は黒褐，栗褐，灰褐にてオリーブ色彩なし

クロイグチタケ属　**Porphyrellus**　(44)

b．管孔は幼時黄色，老時蜜色，帯褐蜜色又はオリーブ色；胞子紋は濃オリーブ褐色～黒色にて赤味なし

キクバナイグチタケ属　**Boletellus**　(46)

Strobilomyces BERK.

オニイグチタケ属

BERKELEY, in HOOKER'S Jour. Bot. 3:77. 1851—SINGER, Agaricales, 691. 1949.

Eriocorys QUÉLET, Enchir. Fung. 163. 1886—BATAILLE, Bolets, 10. 1908.

子実体は靱肉質，腐敗することなく枯凋す，中～大形；傘は通常鱗片を被むる；托は初め淡色或は灰色を帯び，老時暗色となる；胞子紋は黒色；胞子は短かく，表面に網状，粒状，縦翼を有し，或は平滑なり；担子柄は通常甚だ大形；嚢状体は無色～褐色，通常大形；茎は中部膨大せず，多少に拘らず被膜を有す；半被実；約 9 種を知られ，亜熱帯に多く，温帯に少し；食し得るも価値少し。

（本属名は strobilos〔希〕（紡績，毬果）mykes〔希〕（菌）より出づ）

基準種　*S. floccopus* (VAHL. ex FR.) KARST.

本邦既知種

オニイグチタケ　***S. floccopus***　(44)

Strobilomyces floccopus (VAHL. ex FR.) KARST.

オニイグチタケ

KARSTEN, Hattsv. 2:16. 1882—SACCARDO, Syll. Fung. 6:50. 1888; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 939. 1916—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 194. 1900—SINGER, Agaricales, 692. 1949.

(今井, 植. 研. 雑. 25:19. 1950—今関, Nagaoa, 2:41. 1952—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 89, f. 228, pl. 40, f. 228. 1957)

Boletus strobilaceus SCOP. Ann. Hist. Nat. 4: 148. 1770—BERKELEY, Engl. Fl. 5(2):154. 1836—FRIES, Epicr. Myc. 422. 1838; Hymen. Eur. 513. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:265. 1872—GILLET, Champ. Fr. 635, c. ic. 1874—WINTER, Pilze, 1:463. 1844—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 33, f. 81. 1953.

(白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 99. 1917; ed. 3. 56. 1927)

Boletus strobiliformis DICKS. Pl. Crypt. Brit. 1:17, pl. 3, f. 2. 1785.

Boletus coniferus VILL. Hist. Pl. Dauph. 3: 1039. 1789.

Boletus echinatus VILL. l. c. 1098. 1789.

Boletus floccopus VAHL. Fl. Dan. pl. 1252. 1799—FRIES, Syst. Mycol. 1:393. 1821—PERSOON, Myc. Eur. 2:144. 1825.

Boletus cinereus PERS. Syn. Meth. Fung. 504. 1801; Myc. Eur. 2:143. 1825.

Boletus gossypinus PERS. l. c. 144. 1825.

Boletus squarrosus Pers. l. c. 145, pl. 19. 1825.

Boletus floccopus strobilaceus FR. Elench. Fung. 1:127. 1828.

Boletus stygius WALLR. Fl. Crypt. Germ. 4: 608. 1833.

Strobilomyces strobilaceus BERK. Outl. Brit. Fung. 236. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:261, f. 63. 1871—KARSTEN, Hattsv. 2:16. 1882—SACCARDO, Syll. Fung. 6:49. 1888; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 939. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1:507. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1: 257, f. 7. 1892; Brit. Fungi, 365, 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 124. 1900—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 194, f. 102, C–D. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 184, f. 177–9. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 332, f. 74. 1908—MURRILL, Mycologia, 1:8. 1909; N. Am. Fl. 9:157. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1):244, pl. 41. 1912—NEUMAN, Polyp. Wisc. 121, pl. 25, f. 85. 1914—REA, Brit. Basid. 556. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 194, pl. 100, f. 1. 1927—GILBERT, Bolets, 111, pl. 16, f. 46. 1931—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 6:476. 1937—HEIM, Champ. Eur. 2:146, f. 54, pl. 14, f. 1. 1957.

(P. HENNINGS, Hedwigia, 39, Beibl. 155. 1900—松村, 植. 名鑑, 1:175. 1904—白井, 日. 菌. 目. 96. 1905; ed. 2. 643. 1917; ed. 3. 383. 1927—KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 8, f. 8–10. 1913; 日. 菌. 図説, n. 187. 1929; 日. 菌. 図鑑, 2:281, f. 250. 1954—安田, 植. 雑. 29:115. 1915; 31:62. 1917—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori. Soc. Agr. Sci. 3:112, pl. 2, f. 4. 1931—松浦, 茸類辞典, 93, f. 105. 1933; 応用菌蕈学, 1097, f. 728. 1941—今関, 日. 隠. 植. 図. 487, pl. 234, f. 3–4. 1939)

Eriocorys strobilacea QUÉL. Enchir. Fung. 163. 1886—BATAILLE, Bolets, 11. 1908.

Eriocorys strobilacea var. *floccopus* QUÉL. l. c. 163. 1886—BATAILLE, Bolets, 11. 1908.



第 17 図　オニイグチタケ
Strobilomyces floccopus
×1/2　(大谷氏)

傘は径 5—10cm, 半球形～丸山形; 表面は白色より褐色となり, 更に黒褐色～紫黒色となる, 多数の著大なる粗き大鱗片を覆瓦状に被むり, その状松の球果に稍々似たり; 縁は縁膜片を有す; 肉は白色にて, 切断面は速かに赤変し, のち黒色となる, 厚くして綿絮状, 臭よし; 托は直生或は稍々垂生, 管孔長し, 初め白色, 遂に黒褐色～黒色となる; 孔口は大にて角形, 白色, 傷時帯赤色, のち黒褐色となる; 被膜は幼時子実層面を蔽い, 房毛状, 厚し, 白色, のち黒褐色を呈す, 縁膜片及び鍔として残る; 茎は 7—15×1—2cm, 同幅, 或は往々上部狭細, 上部は数多の縦襞を有し白色を帯び, 不完全なる鍔の下部には傘の如き鱗被ありて同色, 中実; 胞子は類球形, 粗大の帯状背稜より成る網目を有す; 暗褐紫色, 8—11μ; 胞子紋は黒色; 可食。

所在及産地

林地—夏秋　北海道, 本州, 九州—欧. 北米

和名 オニイグチタケ (鬼猪口茸)
オニタケ (鬼茸)

Porphyrellus GILB. em. SING.

クロイグチタケ属

GILBERT, Bolets, 99. 1931—SINGER, Agaricales,

692. 1949.

Phaeoporus BATAILLE, Bolets, 11. 1908. (non SCHROETER (1888))

Boletus subgen. *Porphyroporus* SMOTLACHA, Monogr. Cesk. Hrib. 31. 1911.

子実体は肉質，早腐性，中形；傘は有毛，乾燥；傘は初め白色～淡灰クリーム色；胞子紋は黒褐，栗褐，灰褐色にて，オリーブの色彩を帯びず；胞子は長さ幅の1.5倍より長く，外膜内に短円筒形の刺を有し，殆ど膜外に出でずして点状に見ゆ，或は平滑なり；茎は平滑にて後屢々絨毛状となり，粗大或は細微の網目を有す。多くは北米及濠洲産；約5種を知らる；経済的価値少し。

（本属名は porphyreos〔希〕（紫色）より出づ）

基準種　*P. pseudoscaber* (SECR.) SING.

本邦既知種検索表

A．傘は暗茶褐色；茎は同色；托は茶褐色。

クロイグチタケ　***P. pseudoscaber***　(45)

B．傘は黄褐色にて中央に茶褐色の鱗被あり；茎は淡黄色にて網目あり；托は紅紫褐色。

ヤシャイグチタケ　***P. fusisporus***　(45)

Porphyrellus pseudoscaber (SECR.) SING.

クロイグチタケ

SINGER, Agaricales, 693. 1949.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，89. 1957）

Boletus pseudoscaber SECR. Mycogr. Suisse, 3:13. 1833.

Boletus porphyrosporus FR. et HOK, Boleti, 13, n. 36. 1835—FRIES, Epicr. Myc. 423. 1836; Hymen. Eur. 514. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1: 265. 1872—GILLET, Champ. Fr. 636, c. ic. 1874—WINTER, Pilze, 1:462. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 6:38. 1888; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 902. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:296. 1892; Brit. Fungi, 365. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.—fam. 1, 1** : 191. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 328. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1):253. 1915—BRESADOLA, Icon. Myc. 19:pl. 934. 1931—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 35. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:142. 1957.

（川村，日．菌．図鑑，2:279, f. 249. 1954）

Boletus fuligineus FR. et HOK, Boleti, n. 37. 1835—FRIES, Epicr. Myc. 419. 1836; Hymen. Eur. 514. 1874—GILLET, Champ. Fr. 635. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 6:39. 1888.

Gyroporus porphyrosporus QUÉL. Enchir. Fung. 162. 1886; Fl. Myc. 426. 1888.

Phaeoporus porphyroporus BATAILLE, Bolets, 11. 1908—REA, Brit. Basid. 555. 1922.

Phaeoporus porphyrosporus var. *fuligineus* BATAILLE, Bolets, 11. 1908—REA, Brit. Basid. 555. 1922.

Porphyrosporus porphyrosporus SMOTLACHA, Monogr. 62. 1911.

Tubiporus porphyrosporus RICKEN, Vademecum, ed. 1, 205. 1918.

Porphyrellus porphyrosporus GILBERT, Bolets, 75, 99. 1931—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4:pl. 395. 1935; Agaricales, 2:119. 1952.

（今関，Nagaoa, 2:42. 1952—原，日．菌．目．284. 1954）

子実体は孤生或は僅か群生；傘は肉質，厚く，半球形，のち丸山形，径5—15cm，乾燥，微細絨毛ありて絨状，平滑，光沢なし，オリーブ灰色，オリーブ褐色，のち暗茶褐色，接触によりて暗色となる；縁は薄く，初め内屈す；肉は緊緻，のち柔軟，茎の方は繊維質，傘部は可成り厚く，2.5cmに及ぶ，汚白色，空気に触れて帯赤紫色，のち茶褐色となる，初め管孔上の肉は白色，のち僅か緑青色となる，紙を緑に染め速に暗褐色となる，味なく臭弱し；茎は可成り太く，強靱，10—13×2—2.5cm，円筒状或は上方に狭細，下方少しく太し，粉絨状，暗茶褐色，全面に濃茶褐色の細点を密布す；托は直状彎生～半離生，長く，5—15mm，縁厚く，オリーブ灰色，のち空気に触れて赤紫色となる，孔口は可成り広く，不規則，円状多角，灰黄オリーブ色，接触によりて褐青色となる；胞子はやや不正形にて紡錘形にて下部広く，平滑，帯赤黄色，油球を含む，12—17×3.5—7μ；胞子紋は褐紫色；嚢状体は無色或は僅か赤黄色，孔口縁に甚だ多生，棍棒状紡錘形，基部長管状，60—100×18—25μ。

所在及産地

針葉樹林内—夏秋　　北海道，本州—欧

和名　クロイグチタケ（黒猪口茸）〔今関〕

コゲチャイグチ（焦茶猪口）〔川村〕

Porphyrellus fusisporus (KAWAM.) IMAZ. et HONGO

ヤシャイグチタケ

IMAZEKI & HONGO, Col. Illus. Fungi Jap. 89, pl. 40, f. 229. 1957.

Strobilomyces fusisporus KAWAM. Icon. Jap. Fungi, 2:282, f. 251. 1954.

傘は径2.5—4cm，饅頭形にて時に中央少しく突出す；表面は粘性，淡黄色又は淡黄褐色の地に茶褐～オリーブ褐色の小鱗被を有し，鱗被は中央部に於て密集し濃褐色を呈す，縁に白色～淡黄土色の綿架

状縁膜片を存す；肉は白色，柔軟，強臭，苦味；托は殆ど離生，接着し，紅紫褐色，管長 1cm に達す；孔口は多角形，径 0.5—1mm；茎は 3.5—8.5×3—6 mm，基部僅か太く，淡黄色にて両端殆ど白色，褐色或はオリーブ色の縦長の網紋を存す，肉は白色，やや繊維質，中実；胞子は広紡錘形，13.5—18.5×8—11 μ；胞子紋は茶褐色；無毒か。

所在及産地

雑木林地上—夏　　本州

和名 ヤシャイグチタケ（夜叉猪口茸）〔川村〕

Boletellus MURR. em. SING.
キクバナイグチタケ属

MURRILL, Mycologia, 1:10. 1909—SINGER, Agaricales, 694. 1949.

Boletogaster LOHWAG, Beih. Bot. Centralbl. 42:274. 1931.

Frostiella MURRILL, Mim. Contrib. Herb. Univ. Fla. Agr. Exp. Sta. 5. 1942.

子実体は肉質，早腐性，中～大形；傘は鱗片あるか裸状；管孔は黄色，往々赤色孔口を有す；胞子紋は濃オリーブ色～黒色；胞子は有色，平滑或は埋在短刺を有して外見有点状，或は屢々縦の翼或は脉を有し，或種にては網目あり，常に長形；地上，稀に木の根際或は腐木上に生ず；汎布，約 15 種を知る。

（本属名は *Boletus*（属名）より出づ）

基準種 *B. ananas* (CURT.) MURR.

本邦既知種検索表

A. 傘面ポンポンダリアの花の如し；茎は長さ10cm に及び，同幅，平滑

　キクバナイグチタケ ***B. floriformis*** (46)

B. 傘面花状ならず；茎は長さ 16cm に及び，上方に狭細，表面に極めて著しき網目状隆起あり。

　セイタカイグチタケ ***B. russellii*** (46)

Boletellus floriformis IMAZ.
キクバナイグチタケ

IMAZEKI, Nagaoa, 2:42, f. 14. 1952.

（今関及土岐，林. 試. 研. 報. 67:32. 1954—原，日. 菌. 目. 34. 1954—今関及本郷，原色日. 菌. 図鑑，90, f. 230, pl. 40, f. 230. 1957）

傘は径 6—7cm，厚さ 2.5—3.5cm，半球形，のち丸山形となる；表面は乾燥，汚バラ色，密に鱗片を被むり，熟時屢々著しきモザイック状に裂け，恰もポンポンダリアの花の如き観を呈す，各鱗片は大形にて圧着し，煤色を呈す；縁は鈍く，縁膜片を有す；肉は厚さ 1—1.5cm，緻密，淡色或は帯黄色にて管孔に近く多少帯褐淡黄色或は灰黄色，傷時藍色となる；被膜は初め管孔面を覆い，膜質，のち裂けて縁膜片として残り，鍔を作らず；托は狭生～殆ど離生，管孔長くして各管離れ易し，接触によりて僅か藍色となり，遂に褐色となる；孔口は広く，円形或は角形，径 1—2mm，稜は歯状；茎は 7—10×1—2cm，同幅，基端類球根形，煤色，頂部紅紫色，平滑，僅か圧着繊維を有し，殆ど無毛；茎肉は緊緻，汚色，基部灰色となる，中実；胞子は紡錘形，基端有嘴，縦に畦を有し，帯褐黄色，20—24×8.5—12.5 μ；嚢状体は棍棒形，薄膜，41—47×13—17.5 μ；可食？。

所在及産地

林地—秋　　本州

和名 キクバナイグチタケ（菊花猪口茸）〔今関〕

Boletellus russellii (FROST) GILB.
セイタカイグチタケ

GILBERT, Bolets, 107. 1931—SINGER, Agaricales, 696. 1949.

（今関及本郷，原色. 日. 菌. 図鑑，90, f. 231, pl. 40, f. 231. 1957）

Boletus Russellii FROST, Bull. Buffalo Soc. Nat. Sci. 2:104. 1874—NEUMAN, Polyp. Wisc. 134, pl. 22, f. 76. 1914.

Ceriomyces Russellii MURR. Mycologia, 1:144. 1909; N. Am. Fl. 9:137. 1910—HONGO, Acta Phytotax. Geobot. 14:74, f. 1(14). 1951.

子実体は孤生；傘は径 5—10cm，丸山形にて厚し；表面は乾燥，湿時僅か粘性，軟毛状小鱗片を被むり，或はその毛が束状となりて隆起せる鱗片となる，毛被下は帯黄色，のち網状に亀裂す，淡褐色～灰黄色；肉は薄く，帯黄色，傷時不変色，臭味共に著しからず；管孔は直生或は僅か垂生，茎周に凹入，幼時帯黄緑色，熟時暗色にて褐色を増す；孔口は寧ろ大形にて角形，一様なり，稜は薄し；茎は長く，10—16cm，基部に漸大し太さ 2—3cm，上方径 1—1.5cm，甚だ粗大なる網目にて縦溝を作る，縁は広くして裂け，湿時膨脹し，乾時に於ても僅か膠状なり，全部鮮ピンク肉色或は帯褐赤色，凹部は通常暗色ならず；茎肉は緊緻，帯黄色，中実或は髄部僅か充塞さる；胞子は長楕円形，明かに縦線条を有し，オリーブ色，15—20×8—10 μ；胞子紋はオリーブ褐色；可食？

所在及産地

混淆林陰地上—夏秋　　本州—北米

和名 セイタカイグチタケ（背高猪口茸）〔本郷〕
疑問種

Boletellus ananas (CURT.) SING. ヒメオニイグチ
＝*Strobilomyces pallidus* LLOYD (err. typ.)
（安田，植. 雑. 30:206. 1916; 21:63. 1917—白井，日. 菌. 目. ed. 2. 643. 1917; ed. 3. 383. 1927—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori. Soc. Agr. Sci. 3:112, pl. 2, f. 8. 1931—松浦，茸類辞典，93, f. 106. 1933）
＝*Strobilomyces pallescens* COOKE et MASS.
（今井，植. 研. 雑. 25:20. 1950）
＝*Boletellus pallescens* GILB.
（今関，Nagaoa, 2:44. 1952）
〔因記〕 今井，今関両氏の記する如く，本種は北米及び濠州に産しキクバナイグチに近きものにて本邦に産するや否や，いまだ確認せられず。

Paxillaceae R. MAIRE ヒダハタケ科

R. MAIRE, DUMÉE & LUTZ, Bull. Soc. Bot. Fr. 48:ccxliii. 1901; Recherches, 165. 1902 (ut *Paxillacées*)—LOTSZ, Vorträge, 716. 1907—SINGER, Agaricales, 624. 1949.

傘は類細密軟毛～細密軟毛を有し，往々粘性，小～大形，縁は初め内捲；托は褶状なるも他科と異り屢々纏絡せる脉及び畦，或は褶襞の脉状皺襞によりて連結され，稀に広き多数の網目を作りてナミダタケ（*Merulius*）の托に類似し，或は褶は側脉なきも再三叉状に分岐す；褶は通常寧ろ狭幅にて，帯褐色，淡渋色，黄色或は橙色，茎が存在せば茎上に垂生す；胞子紋は殆ど白色～淡蜜黄色；胞子は小～中形，平滑，或は刺又は疣を有す，球形，卵形，楕円形或は楕円状円壔形，嚢状体及び擬嚢状体は殆ど皆欠如す；托実質は多少両側型にて，或物は側層に真に拡散するも，他は整形の中軸を有して甚だ纏れたる全く不規則なる側層を有す；茎は存在或は欠如，中心生，偏心生或は側生，擬根なし；菌絆なし，菌糸膜は非糊性；被膜は或種に存するも一般には欠如；肉は通常著しく柔軟にて多くの種類の実質内菌糸は類膠性なり，化学薬品（鉄剤，苛性加里，アンモニア）等により通常子実体の表面及び肉に強き着色反応を呈す；材及び地上に生じ，菌根を作らず。

本科はクギタケ科（*Gomphidiaceae*）と共にアワタケ科（*Boletaceae*）及びオニイグチタケ科（*Strobilomycetaceae*）と互に近縁にて，何れも托実質は両側型をなす。然し其胞子紋の色，胞子の大さ，化学反応等，殊に菌絆の存否に就きて異り，多くの点より本科はアワタケ科に，クギタケ科はオニイグチタケ科に関係深きものならんと称せらる。

元来本科の子実層托が多くの他の諸科と趣きを異にし褶は襞状となりナミダタケ（*Merulius*）に類似し或は又再三叉状分岐をなしあるがために容易に識別せらるるも，時に却つて分類上論議を有するものなきに非らず。例えばキヒダタケ属（*Phylloporus*）を本科に収むるもの，或はアワタケ科に所属せしむるものあるが如し，この属に就きては已にアワタケ科の内に記述せる所なり。

本科内に4属あり，本邦にては2属を知らる。

本邦既知属検索表

A．胞子紋は殆ど白色；褶は僅か纏絡或は纏絡せざるも著しく叉状をなし，褶を連結する横脈なし；化学反応は微弱或は欠如；胞子常に平滑。
　ヒロハアンズタケ属 **Hygrophoropsis** (47)
B．胞子紋は少くとも駱駝色或は濃褐色；褶は少くとも基部に於て纏絡し，横脈を存す；化学反応は著し；胞子は完全に平滑。
　ヒダハタケ属 **Paxillus** (48)

Hygrophoropsis (SCHROET.) R. MAIRE
ヒロハアンズタケ属

in MARTIN-SANS, L'Empoisonnement, 99. 1921—SINGER, Agaricales, 628. 1949.

Cantharellus subgen. *Hygrophoropsis* SCHROETER, Pilze Schles. 1:511. 1889.

Merulius S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:636. 1821. (non FRIES)

傘は幼時内捲する縁を有し幾分軟毛を有す；胞子紋は淡色；托は褶状；褶は垂生，狭幅，弓状，幾分鈍稜にて著しく，通常反復叉状をなす；胞子は類無色或は帯黄色の反射光を有す，平滑，小～やや中形，薄き単一非糊性の膜を有し，類球形，楕円形，楕円状円壔形或は円筒形；担子柄は小形にて多くは4胞子を着け，凡ての点に於て正常なり；嚢状体欠如；硫酸鉄，苛性加里，アンモニア等に対する化学反応は色に関する限りに於て著しからず；凡ての菌糸は菌絆を有す；地上，深蘚間及材或は鋸屑上生；北温帯産の外熱帯産のものあり，2種を知らる，共に経済的関係少し。

（本属名は hygros〔希〕(湿潤)，phoreo〔希〕(荷う)，opsis〔希〕(類似) より出づ）

基準種 *H. aurantiaca* (WULF. ex FR.) R. MAIRE

本邦既知種

ヒロハアンズタケ ***H. aurantiaca*** (48)

Hygrophoropsis aurantiaca (WULF. ex FR.) R. MAIRE

ヒロハアンズタケ

in MARTIN-SANS, L'Empoisonnement, 99 (?). 1921—SINGER, Agaricales, 629. 1949.

Agaricus aurantiacus WULF. in JACQ. Misc. Austr. 2:101, pl. 14, f. 3. 1781.

Agaricus alectorophoides SCHAEFF. Fung. Bavar. 4 : Ind. 46, pl. 206. 1774.

Merulius aurantiacus PERS. Syn. Meth. Fung. 488. 1801.

Merulius nigripes PERS. Syn. Meth. Fung. 489. 1801.

Agaricus subcantharellus SOW. Col. Fig. Engl. Fungi, pl. 413. 1803.

Cantharellus aurantiacus FR. Syst. Myc. 1:318. 1821; Epicr. Myc. 365. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2: 206. 1863; Hymen. Eur. 455. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:446. 1844—BERKELEY, Outl.Brit. Fung. 215, pl. 14, f. 1. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2: 207. 1867—FUCKEL, Symp. Myc. 14. 1869—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1: 227. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7:pl. 1104 (no. 1057). 1883; Handb. Austr. Fungi, 80. 1892—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:215. 1872–GILLET, Champ. Fr. 352, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:225. 1876; Hattsv. 1: 238. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 270. 1889—WINTER, Pilze, 1:523. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:483. 1887—SCHROETER, Pilze Schles. 1:511. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:320, f. 4 (p. 301). 1893; Brit. Fungi, 213. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 201, f. 106, k. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2, 129, f. 127–128. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 295. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 53, pl. 53, f. 117. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1):275, pl. 47c. 1912—RICKEN, Blätterp. 4, pl. 2, f. 2. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 40. 1918—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 70, pl. 28, f. 1. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 10:pl. 473. 1929—LANGE, Agar. Denm. 11: 39. 1936; Fl. Agar. Dan. 5:84, pl. 196, f. c. 1940—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:399. 1948—HEIM, Champ. Eur. 2:115. 1957.

(川村, 日. 菌. 図鑑, 3:306, f. 304. 1954)

Cantharellus Ravenelii BERK. et CURT. Ann. Mag. Nat. Hist. II, 12:425. 1853.

Clitocybe aurantiaca STUDER, Hedwigia, 39, Beibl. : 7. 1900—REA, Brit. Basid. 273. 1922—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 82. 1938.

Canterel alectrophoides MURR. N. Am. Fl. 9: 169. 1910.

子実体は群生; 傘は径 2—9cm, 丸山形, のち扁平となり更に圧低され, 幾分漏斗形となる; 表面は橙赤黄色～帯褐橙黄色, 時に淡色, やや細密軟毛を被むり, 縁は内屈し, 遂に波状となる; 肉は柔軟, 帯黄色～黄土色, 薄く, 味及臭温和; 褶は垂生, 鮮かなる濃橙色, 稀に淡色, むしろ規則正しく 3—5 回叉状分岐し, 密, むしろ狭幅, 但しアンズタケに比すれば広し, 薄し, 稜は鈍頭; 茎は 4—7×0.5—1cm, 殆んど同幅, 帯黄或は赤褐色, 時に下部暗褐色, 纎維或は微軟毛を有し, 屢々屈曲す, 中実, 時に中空; 胞子は楕円形, 平滑, 無色, 9—10×4—7μ; 胞子紋は白色; 嚢状体なし。



第 18 図 ヒロハアンズタケ
Hygrophoropsis aurantiaca
×1/2 (大谷氏)

所在及産地

針葉樹林地—夏秋

北海道, 本州—欧. 北米. 濠. 亜(小亜. 西比)

和名 ヒロハアンズタケ (広褶杏茸) 〔今井〕

Paxillus FR.

ヒダハタケ属

FRIES, Gen. Hymen. 8. 1836—SINGER, Agaricales, 629. 1949.

Agaricus trib. *Tapinia* FRIES, Syst. Myc. 1: 269. 1821. pr. p.

Ruthea OPATOWSKI, Comm. Bolet. in Wiegm. Arch. 2:4. 1836.

Rhymovis RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1: 453. 1844.

Tapinia KARSTEN, Hattsv. 1:452. 1879.

Plicaturella MURRILL, N. Am. Fl. 9:172. 1910.

Tapinella GILBERT, Bolets, 67. 1931.

Paxillopsis GILBERT, Bolets, 86. 1931. non LANGE, 1939.

Paraxillus SINGER, Ann. Myc. 40:58. 1942.

傘は幾分細密軟毛を有し, 内捲の縁をもつ; 胞子

紋は少くとも駱駝色或は濃褐色，胞子は帯黄色；胞子は帯黄色～帯褐色，平滑，薄膜にて発芽孔及び乳頭なし；褶は垂生，屢々網目状に纒絡し，特に茎に近き部に於て著し，往々褶壁に横脉を生ず，屢々容易に傘肉より剝離す；托実質は屢々中軸，拡散する側層及び不規則なる子実脚層より成り，或は簡単なる構造なるも常に拡散す；茎は中心生，偏心生，側生或は欠如す；被膜は存在或は屢々欠如す；肉は屢々褐色となる；嚢状体は時に褶壁及び稜に存在す；担子柄はすべての点に於て正常形；硫酸鉄，苛性加里，アンモニア等の化学着色反応は著し；地上或は材上生，汎布，約6種を知らる；木材腐朽菌及び食用菌を含む。

（本属名はpaxillus〔羅〕（小さき杭或は栓）より出づ）

基準種　*P. involutus* (BATSCH ex FR.) FR.

本邦既知種検索表

A．胞子は長さ 7.5μ 以下；嚢状体なし。

a．茎は太く，著しき軟絨毛を密生す。

ニワタケ　***P. atromentosus***　(49)

b．茎は側生にて短きか或は欠如す。

α．胞子 3.8—6×3—4.5μ；臭なきか或は著しからず。

イチヨウタケ　***P. panuoides***　(50)

β．胞子 3—4×1.7—2μ；臭は往々ありて不快臭。　サケバタケ　***P. curtisii***　(51)

B．胞子は少くとも大部分 7.5μ 以上；嚢状体あり；茎を有し；臭なし。

ヒダハタケ　***P. involutus***　(51)

Paxillus atromentosus (BATSCH ex FR.) FR.

ニワタケ

FRIES, Epicr. Myc, 317. 1938; Monogr. Hymen. Suec. 2:119. 1863; Hymen. Eur. 403. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 195. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:194. 1871; Illus. Brit. Fungi, 6:pl. 876. (no. 869). 1888—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:183, pl. 10, f. 1. 1872; Enchir. Fung. 93. 1886—GILLET, Champ. Fr. 528, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:192. 1876; Hattsv. 1:451. 1879—WINTER, Pilze, 1:572. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:988. 1887—SCHROETER, Pilze Schles. 1:515. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:10. 1893; Brit. Fungi, 252, pl. 26, f. 6. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 126. 1900—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 203. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2, 169, f. 161. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 254. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 67, pl. 69, f. 154. 1910—MIGULA, Kryt. Fl. 3, Pilze 2(1):280, pl. 48, f. 1-2. 1912—RICKEN, Blätterp. 95, pl. 28, f. 4. 1915—MURRILL, N. Am. Fl. 10:147. 1917—KAUFFMAN, Agar. Mich. 287. 1918—REA, Brit. Basid. 552. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 157, pl. 77. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 14:pl. 679. 1930—JOSSERAND, Bull. Soc. Myc. Fr 48:112, f. 1, pl. 13, f. 1. 1932—LANGE, Agar. Denm. 12:59. 1938; Fl. Agar. Dan. 4:51, pl. 134, f. E. 1939—SINGER, Agaricales, 631. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Brit. Comm. Fungi, 181, pl. 70, f. 1. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 100. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 46. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:144, pl. 15, f. 3. 1957.

(P. HENNINGS, Hedwigia, 39, Beibl. 156. 1900—松村，植．名鑑，1:157. 1904—白井，日．菌．目．62. 1905; ed. 2. 407. 1917; ed. 3. 243. 1927—LLOYD, Myc. Writ. 4, Lett. 60:6. 1915—KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 16, f. 18-20. 1915；日．菌．図説，n. 91. 1929；日．菌．図鑑，5:501, f. 501. 1954—安田，植．雑．36:103. 1922—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:113. 1931—松浦，茸類辞典，78, f. 86. 1933；応用菌蕈学，1116, f. 741(右). 1941—原，日．菌．目．234. 1954—今関及本郷，原色日　菌．図鑑，81, f. 206, pl. 36, f. 206. 1957)

Agaricus jacobinus SCOP. Fl. Carn. 2:438. 1772.

Agaricus atrotomentosus BATSCH, Elench. Fung. 89, pl. 8, f. 32 a-d. 1783—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 472. 1801—NEES, Syst. Pilze Schw. 194. pl. 21, f. 175. 1817—FRIES, Syst. Myc. 1:272. 1821.

Rhymovis atrotomentosa RABENH. Deut. Krypt. Fl. 1:453. 1844.

Paxillus jacobinus SACC. Fl. Ital. Crypt. Hymen. 668. 1916.

子実体は孤生或は叢生；傘は径 5—15cm，堅緻，強靱，丸山形，のち開張扁平となり，或は凹下す；表面は類無毛或は多少粉状綿毛，往々中盤に軟毛を有す，平坦或は往々微細の溪流状，銹褐色～帯黒褐色，縁辺往々淡色；縁は初め内捲，永存的に内屈；肉は厚く，緻密～海綿状，白色～淡黄色，臭味は僅かに存し，時に不快の塵臭を有す；褶は直生或は垂生，密生，寧ろ狭幅，後方分岐し，屢々網状に連結し，往々茎上にて管孔状をなす，淡クリーム黄色～黄褐色；茎は 3—12×1—3cm，屢々偏心生，或は側生，堅緻，頑強，真直～屈曲，著き帯黒褐色の軟絨状毛を密布するを特徴とす，中実，屢々偽根を有す；胞子は卵形～球状楕円形，平滑，帯黄色，5—6×3

—4 μ; 胞子紋は帯黄色; 嚢状体なし; 可食。

所在及産地

針葉樹腐朽材上, 株或は根際, 地上—夏秋

本州—欧. 北米

和名 ニワタケ (庭茸)〔白井〕

モンパタケ (紋羽茸)〔川村〕

Paxillus panuoides (FR. ex FR.) FR.

イチョウタケ

FRIES, Epicr. Myc. 318. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:120. 1863; Hymen. Eur. 404. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 196, pl. 12, f. 6. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:195. 1871; Illus. Brit. Fungi, 6:pl. 878(no. 871). 1888; Handb. Austr. Fungi, 73. 1892—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:183. 1872—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:193. 1876—WINTER, Pilze, 1:571. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:989. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:11. 1893; Brit. Fungi, 254. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 126. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2, 170, f. 163. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 255. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 67, pl. 69, f. 155. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1):279. 1912—RICKEN, Blätterp. 95, pl. 28, f. 3. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 288. 1918—REA, Brit. Basid. 553. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 14:pl. 681, f. 1. 1930—JOSSERAND, Bull. Soc. Myc. Fr. 48:112, f. 1, pl. 13, f. 3. 1932—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 5:pl. 391. 1934; Agaricales, 100. 1952—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:245. 1938—LANGE, Agar. Denm. 12:59. 1938; Fl. Agar. Dan. 4:pl. 134, f. B. 1939—SINGER, Agaricales, 631. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 46, f. 40. 1953.

(LLOYD, Myc. Writ. 5, Lett. 63:9. 1916—安田, 植. 雑. 30:419. 1916—白井, 日. 菌. 目. ed. 3. 243. 1927—北島, 林. 試. 報. 28:41, 52. 1928; 樹病学及木材腐朽論, 477. 1933—笠井, 鉄道大臣官房研究所業務研究資料, 21(15):1–12. 1933—広江, 応用菌蕈学, 1117. 1941—逸見及赤井, 木材腐朽菌学, 420, f. 221. 1945—原, 日. 菌. 目. 234. 1954—今関及土岐, 林. 試. 研. 報. 67:46. 1954—川村, 日. 菌. 図鑑, 5:502, f. 502. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 81, pl. 36, f. 207. 1957)

Agaricus acheruntius HUMB. Fl. Frib. 73. 1793.

Merulius pezizoides PERS. Syn. Meth. Fung. 493. 1801.

Merulius lamellosus SOW. Col. Fig. Engl. Fungi, 3:pl. 403. 1803.

Agaricus lamellirugus DECANDOLLE, Fl. Fr. 6:44. 1815.

Agaricus panuoides FR. Obs. Myc. 2:228. 1818; Syst. Myc. 1:273. 1821.

Gomphus pezizoides PERS. Myc. Eur. 2:10. 1825.

Agaricus croceolamellatus LETILLIER, Ann. Sci. Nat. II, 3:94. 1835.

Cantharellus Dutrochetii TURPIN in MONTAGNE, Ann. Sci. Nat. II, 5:342. 1836.

Rhymovis panuoides RABENH. Deut. Krypt. Fl. 1:453. 1844.

Paxillus rudis BERK. et CURT. Ann. Mag. Nat. Hist. III, 4:296. 1859—SACCARDO, Syll. Fung. 5:890. 1887.

Paxillus ligneus BERK. et CURT. Jour. Linn. Soc. Bot. 9:423. 1867.

Tapinia panuoides KARST. Hattsv. 1:452. 1879.

Crepidotus croceolamellatus GILLET, Champ. Fr. 557, c. ic. 1884.

Paxillus acheruntius SCHROET. Ber. Schles. Ges. 300. 1884; Pilze Schles. 1:515. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:202, f. 107, A–B. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1):279. 1912—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 666. 1916.

(P. HENNINGS, Bot. Jahrb. 32:40. 1902—松村, 植. 名鑑, 1:157. 1904—白井, 日. 菌. 目. 61. 1905; ed. 2, 407. 1917; ed. 3, 243. 1927—原, 日. 菌. 目. 234. 1954)

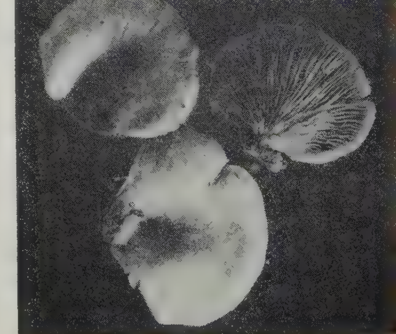
Paxillus lamellirugus QUÉL. Enchir. Fung. 93. 1886—HEIM, Champ. Eur. 2:144, f. 140. 1957.

Paxillus ionipus QUÉL. Champ. Jura Vosg. Suppl. 16:2. 1887—SACCARDO, Syll. Fung. 9:136. 1891.

Tapinia lamellosa MURR. N. Am. Fl. 10:146. 1917.

Tapinella panuoides GILBERT, Bolets, 67. 1931.

子実体は群生或は畳生; 傘は幅 2—6 cm, 長さ 1.5—5(10) cm, 無茎或は往々基部狭細し茎状となる, 初め背着, 速に貝殻状, 半円形, 半卵形, 扇形等となり, 遂に広く反転開張し, 波状浅裂し花弁状をなす, 丸山形或は殆ど扁平; 表面は淡黄色～帯褐黄色, 軟毛或は小鱗片を被り, のち平滑無毛となり, 幾分



第 19 図　イチョウタケ Paxillus panuoides 1/2 (大谷氏)

渓流状線を有す，基部軟毛を存し，屢々紫色を帯ぶ；縁は薄く，鋭く，波状或は縮む；肉はクリーム色，のち帯白色となる，柔軟，薄く，臭なく，味僅かに存す；褶は密生，狭幅，垂生，基部に近く網状をなし，分岐し，屢々縮み，黄色或は橙黄色；胞子は類楕円形或は類球形，平滑，淡黄褐色，4—6×3—4μ；胞子紋は淡黄色；嚢状体なし。

所在及産地

針葉樹腐木上—夏秋

北海道，本州—欧．北米．濠．阿

和名 イチヨウタケ（銀杏茸）〔安田〕

Paxillus curtisii BERK.

サケバタケ

BERKELEY & CURTIS, Ann. Mag. Nat. Hist. II, 12:423. 1853—SINGER, Agaricales, 631. 1949. (LLOYD, Myc. Writ. 4, Lett. 60:8. 1915; Lett. 61:5. 1916—安田，植．雑．30:26. 1916—白井，日．菌．目．ed. 2, 407. 1917; ed. 3, 243. 1927—原，日．菌．目．234. 1954)

Paxillus corrugatis ATK. Mushrooms, ed. 2, 170, f. 162. 1903—SACCARDO, Syll. Fung. 21:201. 1912—KAUFFMAN, Agar. Mich. 288. 1918.

Tapinia corrugata MURR. N. Am. Fl. 10:146. 1917.

子実体は無茎，畳生；傘は径 2—7cm，坐生，半円形～扇形，丸山形～開張扁平，不規則に基部楔形に狭細す；表面は黄色～橙黄色，基部に近く赤褐色の色彩を帯ぶ，殆ど無毛或は甚だ僅か有毛；縁は全縁，稍々同色，内捲；肉は淡黄色，海綿状，乾時堅し，臭は往々ありて特異なる不快臭；褶は密生ならず，稍々規則正しく数回叉状，幅 2—3mm，薄くして鈍稜，甚だ波状にて細鈍鋸歯あり，側面に縦溝ありて著しき縮皺を有するを特徴とす，橙黄色，生時容易に傘肉より剝離し得；胞子は広楕円～卵形，平滑，淡黄色，3—3.5×1.5—2μ；胞子紋はオリーブ黄色。

所在及産地

針葉樹腐木及材上—夏秋　　　本州—北米

和名 サケバタケ（裂歯茸）〔安田〕

Paxillus involutus (BATSCH ex FR.) FR.

ヒダハタケ

FRIES, Epicr. Myc. 317. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:118. 1863; Hymen. Eur. 403. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 195, pl. 12, f. 5. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:194. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fung. 1:194, f. 48. 1871; Illus. Brit. Fungi, 6:pl. 875. (no. 867). 1888—QUÉLET, Champ Jura Vosg. 1:183. 1872; Enchir. Fung. 93. 1886—GILLET, Champ. Fr. 529, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:191. 1876; Hattsv. 1: 450. 1879—WINTER, Pilze, 1:573. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:987. 1887—SCHROETER, Pilze Schles. 1:516. 1889—ROLLAND, Bull. Soc. Myc. Fr. 7:10, pl. 1, f. 1. 1891; Atl. Champ. 67, pl. 69, f. 153. 1910—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:9. 1893; Brit. Fungi, 252, pl. 26, f. 6. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 126. 1900—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:203, f. 107, c. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2, 166, f. 159. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 253. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1): 280. 1912—RICKEN, Blätterp. 96, pl. 28, f. 2. 1915—MURRILL, N. Am. Fl. 10:147. 1917—KAUFFMAN, Agar. Mich. 286. 1918—REA, Brit. Basid. 551. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 157, pl. 78. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 14:pl. 677. 1930—JOSSERAND, Bull. Soc. Myc. Fr. 48:112, f. 1. 1932—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1:176. 1934—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:244. 1938—LANGE, Agar. Denm. 12:59. 1938; Fl. Agar. Dan. 4:51. pl. 134, f. D. 1939—SINGER, Agaricales, 631. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Brit. Comm. Fungi, 181, pl. 70, f. 2. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:99. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 46, f. 39. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:143, f. 78, pl. 15, f. 1. 1957.

(原，日．菌．目．234. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，81, pl. 36, f. 208. 1957)

Agaricus lateralis SCHAEFF. Fung. Bavar. 4: Ind. 31, pl. 71–72. 1774.

Agaricus contiguus BULL. Champ. Fr. pl. 240, 576, f. 2. 1784—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, 1 : pl. 56. 1797.

Agaricus involutus BATSCH, Elench. Cont. 1:39, pl. 13, f. 61. 1786—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 448. 1801; Myc. Eur. 3:62. 1828—FRIES, Syst. Myc. 1:271. 1821.

Ruthea involuta KLOTZ. in DIETRICH, Fl. Reg. Bor. 391. 1838.

Rhymovis involuta RABENH. Deut. Krypt. Fl. 1:453. 1844.

Cortinaria involuta SICARD, Hist. Nat. Champ. 150, f. 206. 1884.

Paxillus lateralis SACC. Fl. Ital. Crypt. Hymen. 669. 1916.

子実体は孤生或は群生；傘は径 4—10cm，堅緻，柔靱，丸山形，のち開張し，屢々中央凹下す；表面は不明瞭の綿毛を被むり，色種々ありて，赭色，銹褐色，赤褐色，オリーブ褐色等，湿時往々類粘性，乾時光沢斑点を有す；縁は初め内捲し，有畦或は線

条あり；肉は厚く，柔軟，海綿状，淡黄色，傷時帯褐色となる，味及臭なし；褶は密生，寧ろ広濶，弓状，垂生，淡色，のち銹色，通常茎に近く纒絡し，茎上にて稀に網状孔となる； 茎は 3—8×1—2cm，同幅或は下方僅か狭細，淡色にて赤色を帯び，のち汚黄色或は肉桂褐色となる，無毛～絨毛状，通常中心生，時に偏心生，中実；肉は帯褐色；胞子は楕円形，平滑，淡帯褐黄白色，7.5—10.5×4.5—6μ；胞子紋は肉桂色～赭色；嚢状体は中位に多生或は散生，披針形，50—70×10—12μ；可食。

所在及産地

林内外地上，地中埋木上，切株基部，稀にニワトコの生幹上―夏秋

北海道，本州―欧．北米．濠．小亜

和名 ヒダハタケ（襞歯茸）〔今井〕

Gomphidiaceae R. MAIRE クギタケ科

R. MAIRE, Publ. Junta Cienc. Nat. Barcelona, 43. 1933—SINGER, Agaricales, 634. 1949.

子実体はカヤタケ（*Clitocybe*）型；傘は無毛或は細密軟毛又は穀粉を被むり，粘性～膠性にて稀に乾燥，小～寧ろ大形；褶は寧ろ厚く，屢々鈍稜，稍々粗或は粗にて稀に稍々密，多少弓状をなし，蠟状類膠質～靱肉質，茎上に常に垂生す，成時灰色～銹色を呈す；胞子紋は黒褐色～殆ど黒色，古き標本にては通常銹褐色を呈す；胞子は常に伸長し，紡錘形～類円筒形，屢々明かなる臍あり，多くは明かなる発芽孔或は乳頭なし，平滑，蜜色或は灰色；担子柄は正常形にて通常4胞子を生ず，胞子を作るとき稍々伸長す；嚢状体は大形にて抽出し，通常栗色或は暗褐色の樹脂物を被むる，往々甚だ厚き膜を有し，多くは多生す；托実質は或種にては型的に両側型，中軸は平行～稍々平行せる菌糸より成り甚だ薄くして消失性なり，側層は初め拡散し，成時屢々稍々消失性となる；子実下層の次層なる子実脚層は甚だ厚く，著しく錯綜せる菌糸より成る；子実下層の構造は変化す；茎は同幅或は膨大し，諸形あり，内部及表面の褪色せる基部を有す；被膜は存在或は欠如し，多くは之れを有し，弛き擬柔組織より成り，全く膠質或は強靱なる繊維質又は粉質なり，往々茎上に鍔を作る，只1種茎上に小腺あるものを知らる；すべての菌糸に菌絆なし；針葉樹林地上に生じ菌根を作る。

本科は極めて小なる科にして従来只一属クギタケ属（*Gomphidius*）ありしに過ぎざりしが SINGER 氏（1942）は被膜が球嚢より成る *Cystogomphus* 属を添加せり，極めて特異の性を有し他の全科と容易に識別さる。褶厚く疎にして蠟状なる点に於てアカヤマタケ科（*Hygrophoraceae*）に近似するも，菌絆なく，濃色の胞子，その他嚢状体の性，化学反応の差違等により明かに区別されアワタケ科（*Boletaceae*）よりも寧ろオニイグチタケ科（*Strobilomycetaceae*）に近縁のものとさる。

本邦既知属　　クギタケ属　**Gomphidius**　(52)

Gomphidius FRIES
クギタケ属

FRIES, Genera Hymen. 8. 1836—SINGER, Agaricales, 634. 1949.

Agaricus subgen. *Gomphus* FRIES, Syst. Myc. 1:314. 1821.

科の性質に同じ，但し被膜は球嚢より成らず，すべての表皮層に球嚢存在せず；傘は肉質にて表面は通常粘性，稀に乾燥す；被膜は早失性の縁膜片或は蜘蛛巣膜となる；褶は垂生，膠状肉質，柔軟；茎は中心生，傘肉と同質；胞子紋は黒褐色～殆ど黒色；胞子は伸長，類紡錘形；嚢状体は多生，針葉樹林地に生じ，菌根を作る；北半球温帯産，約 16 種を知らる；食用菌。

（本属名は gomphos〔希〕（大釘）より出づ）

基準種　*G. glutinosus* (SCHAEFF. ex FR.) FR.

本邦既知種検索表

A．傘肉は帯褐淡黄色～橙色，稀に鮭肉色；常に被膜あり，正確に平行せる色素を被れる菌糸より成り，肉眼的には膠質無色ならず；子実下層は錯綜せる密層なり；中軸は幼時痕跡的，老時不明瞭。

a．傘は乾燥或は湿時類粘性；茎の基部黄色；毛は圧着せる小鱗片を作る；嚢状体は厚膜。

フサクギタケ　***G. tomentosus***　(53)

b．傘は湿時粘性；茎基部毛叢は灰卵黄色，蜜色或は鮮黄色；嚢状体は一様に薄膜

クギタケ　***G. rutilus***　(53)

B．傘肉は白色，稀に一部多少鮭肉色或は露出により鮭肉色となる；被膜なきか或は存在せば類平行～類錯綜せる細き色素を被らざる菌糸より成る；肉眼的には無色～白色にて屢々一部或は全部膠

性，老時往々除々に黒変す；子実下層は糸状細胞～糸状，中位に密なり；幼時中軸は明瞭，老時稍々明瞭。

a．被膜は始原体にのみ存す，成品にては痕跡なし；茎の皮嚢体は束生し屢々小腺を作る；落葉松に菌根を作る。

キオオギタケ ***G. maculatus*** (54)

b．被膜は幼傘の褶を蔽い古品にても多少明らかなる痕跡を残す；落葉松以外の針葉樹に菌根を作る—胞子は大部分 14μ 以上。

α. 被膜は繊維質或は一部繊維質にて一部膠質，後の場合は茎の頂部に１—３粘液帯を生ず；肉は生時及び乾時鮭肉色或は幾分ピンクを帯ぶ，但し茎の下部は濃鮮黄色或は鮮黄色，稀にピンク赤色。

オオギタケ ***G. roseus*** (55)

β. 前者と異る—甚だ強き鮮かなる黄色基部を有す—傷時肉はピンク或は赤色に変ぜず—傘は暗褐色にてピンクならず；子実体は寧ろ高くして頑強；胞子 15—24×4—7.5μ。

シロエノクギタケ ***G. glutinosus*** (55)

Gomphidius tomentosus MURR.

フサクギタケ

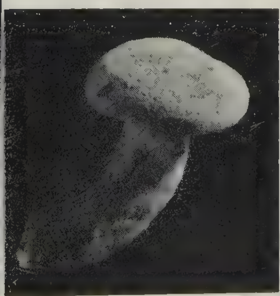
MURRILL, Mycologia, 4:307. 1912—KAUFFMAN, Mycologia, 17:124, pl. 14, 1925—SACCARDO, Syll. Fung. 23:293. 1925—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:285. 1938.

（原，日．菌．目．140. 1954）

子実体は孤生或は群生；傘は径2—9 cm，多くは3—5 cm，円錐形，のち開張し中丘を有す，時にのち中窩を生じ，更に殆ど漏斗形となる；表面は乾燥或は湿時類粘性，桃色或は橙黄色～帯褐淡黄色，中盤暗色，のち乾時帯紅褐色となる，圧着せる鱗片或は綿状軟毛を被むる；縁は内屈し，軟毛あり，繊維状縁膜片を存す；肉は柔軟，帯褐淡黄色，乾時桃色とな



a



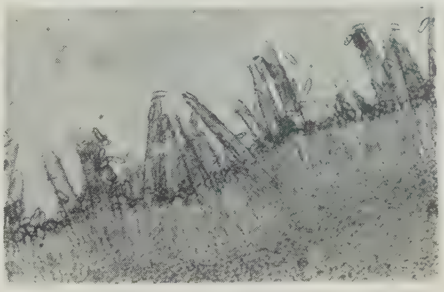
b



c



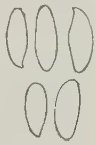
d



c

第20図 フサクギタケ
Gomphidius tomentosus

a. b. c. d. 子実体 ×1/3
e. 子実層拡大，剛毛体を示す ×200
f. 胞子 ×500 （大谷氏）



f

る；味温和，臭可なり；褶は垂生，疎生，時に茎に近く及び褶の中部に於て叉状分岐し，寧ろ厚幅，全縁，殆ど同色，のち灰色となる：茎は 6—20×0.7—2 cm，上部狭細，時に基部僅か狭細し，稍々同色，髄部充塞或は中実，肉は黄色にて柔軟，蜘蛛巣膜は繊維状，平行せる菌糸より成り，早失性；胞子は円壔形或は円壔状紡錘形，平滑，15—20×7.5—8.75μ；胞子紋は黄色；嚢状体は厚膜；可食。

所在及産地

林内地上—秋　　北海道，本州—北米

和名 フサクギタケ（房釘茸）〔今井〕

Gomphidius rutilus (SCHAEFF. ex FR.) LUND. et NANNF.

クギタケ

in SINGER, Agaricales, 636. 1949.

(松田及本郷, 植. 研. 雑. 30:262. 1955—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 82, f. 210, pl. 36, f. 210. 1957)

Agaricus viscidus L. Sp. Plant. 2:1173. 1753.

Agaricus rutilus SCHAEFF. Fung. Bavar. 4: Ind. 24, pl. 55. 1774—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, 1:pl. 105. 1797—FRIES, Syst. Myc. 1:315. 1821.

Gomphidius viscidus FR. Epicr. Myc. 319. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:150. 1863; Hymen. Eur. 400. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:453. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 196. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:194. 1867—FUCKEL, Symb. Myc. 13. 1869—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:205. 1871; Illus. Brit. Fungi, 6: pl. 881 (no. 858). 1888—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:184. 1872; Enchir. Fung. 91. 1886—GILLET, Champ. Fr. 624, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:191. 1876; Hattsv. 1:526. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 256. 1889—WINTER, Pilze, 1:575. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 1138. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 663. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1:524. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:347. 1892; Brit. Fungi, 329. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:209, f. 108, A-B. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 154. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 250. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 72, pl. 74, f. 166. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1):302, pl. 51. 1912—RICKEN, Blätterp. 8, pl. 3, f. 3. 1915—REA, Brit. Basid. 325. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 14:pl. 673. 1930—LANGE, Agar. Denm. 11: 35. 1936; Fl. Agar. Dan. 5:6, pl. 161, f. D, E. 1940—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 211, pl. 83, f. 3. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:96. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. f. 42. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:144, pl. 14, f. 4. 1957.

(KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 5, f. 13-15. 1913; 日. 菌. 図説, n. 52. 1929; 日. 菌. 図鑑, 5: 554, f. 535. 1954—白井, 日. 菌. 目. ed. 2, 261. 1917; ed. 3, 152. 1927—安田, 植. 雑. 36:22. 1922—広江, 応用菌蕈学, 1120, f. 744. 1941)

Gomphidius rutilus IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:284. 1938.

(原, 日. 菌. 目. 140. 1954)

子実体は孤生或は群生; 傘は径 5—15 cm, 鐘形或は円錐形, のち開張し, 中丘を有す; 表面は湿時粘性, 暗褐赤色, 乾時淡色となりて光沢あり; 肉は帯赤色, 茎の下部約3分の2は濃厚なる黄色を呈す; 味温和, 屢々収斂性あり; 褶は垂生, オリーブ色, のち暗褐紫色を呈し, 疎生, 屢々分岐す, 稜は屢々淡色; 茎は 7—12×2—3 cm, 同幅或は下方狭細, 同色, 基部繊維状毛叢ありて, 卵黄色, 蜜色或は鮮黄色なり; 蜘蛛巣膜は平行せる菌糸より成り, 綿絮様にて早失性の鍔を作る; 胞子は類紡錘形, 平滑, 18—22×6—7 μ; 胞子紋は帯褐オリーブ色; 嚢状体は鈍頭円筒形にて, 頂端屢々稍々頭状となり, 一様に薄膜なり; 可食。

所在及産地

主に針葉樹林地上—夏秋

北海道, 本州—欧. 北米. 亜(小亜. 西比)

和名 クギタケ (釘茸) 〔川村〕

Gomphidius maculatus (SCOP. ex FR.) FR.

キオオギタケ

FRIES, Epicr. Myc. 319. 1838; Hymen. Eur. 400. 1874—QUÉLET, Enchir. Fung. 91. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5:1138. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 661. 1916—COOKE, Illus. Brit. Fungi, 6:pl. 882 (no. 859). 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:348. 1892—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 209. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 154. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 251. 1908—RICKEN, Blätterp. 9, pl. 3, f. 2. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 170, pl. 23. 1918—BRESADOLA, Icon. Myc. 14: pl. 674. 1930—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 45. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:145, f. 141, A. 1957.

Agaricus maculatus SCOP. Fl. Carn. 2:448. 1772.

Gomphidius gracilis BERK. et BR. in BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 196, pl. 12, f. 7. 1860—FRIES, Hymen. Eur. 400. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2, 285. 1888; Illus. Brit. Fungi, 6:pl. 883 (no. 860). 1888—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 1138. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 662. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1:525. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:349. 1892; Brit. Fungi, 329. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 209. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 251. 1908—BRESADOLA, Icon. Myc. 14 : pl. 675. 1930—LANGE, Agar. Denm. 11:35. 1936; Fl. Agar. Dan. 5:6, pl. 161, f. c. 1940—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:285. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:97. 1952.

(原, 日. 菌. 目. 140. 1954)

Gomphidius stillatus STRAUSS, in STURM, Deut. Fl. III, 3:3, pl. 2. 1831—COOKE, Handb. Brit. Fung. 1:206. 1871.

Gomphidius maculatus var. *gracilis* QUÉL. Enchir. Fung. 91. 1886.

Gomphidius maculatus subsp. *gracilis* KONR. et MAUBL. Icon. Sel. Fung. 5:389. 1925.

子実体は散生或は群生し, 時に稍々叢生; 傘は径 2—5 cm, 円錐形～丸山形, 鈍頭, 速に扁平とな

り，のち凹下す；表面は粘性の剝げる外皮あり，無毛，淡桃色或は淡褐色，細皺縮を有し，のち黒色或は黒褐色の斑点を生ず，斑点は縁辺に著しく，のち屢々不正形となる；肉は厚く，柔軟，白色或は微かに肉色を呈す；味及臭なきか或は僅か存す；褶は垂生，後方狭幅，稍々疎生或は疎生，類膠質〜柔蠟質，2叉す，初め帯白色，のち淡オリーブ灰色，遂に烟色となる；稜は鈍くして異質；茎は 5—10×0.4—0.8 cm，殆ど同幅或は稍々下方に狭細，波曲，堅緻，上部白色或は肉色，初め皮嚢体は束生し，帯赤色の鱗片を作り，のち無毛となる，老時黒点或は帯黒線条を存す，基部の肉は黄色，中実或は中空；ベールは殆原体のみに存在し，成時存在せず；胞子は形変化し，円筒状紡錘形〜長楕円形，淡烟褐色，平滑，15—23×6—7 μ；胞子紋はオリーブ褐色；嚢状体は褶側及稜に多生，円筒形，鈍頭，変化す，100—135×15—25 μ；可食。

所在及産地

落葉松に菌根を作る—秋　　北海道—欧．北米

和名　キオオギタケ（黄扇茸）〔今井〕

Gomphidius roseus (FR.) GILL.

オオギタケ

GILLET, Champ. Fr. 623, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:525. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basid. 355. 1889—QUÉLET, Enchir. Fung. 91. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5:1138. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 662. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1: 524. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:348. 1892; Brit. Fungi, 329. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 154. 1900—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 209. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1):303, pl. 51, f. 1–4. 1912—RICKEN, Blätterp. 9, pl. 3, f. 4. 1915—REA, Brit. Basid. 324. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 5:pl. 390. 1926; Agaricales, 2:96. 1952—BRESADOLA, Icon. Myc. 14:pl. 672. 1930—LANGE, Agar. Denm. 11:35. 1936; Fl. Agar. Dan. 5:6, pl. 161, f. B. 1940—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 45. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2: 145, f. 141, B. 1957.

(KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 4, f. 1–4. 1912; 日．菌．図説，n. 71. 1929; 日．菌．図鑑，5: 553, f. 534. 1954—白井，日．菌．目．ed. 2. 261. 1917; ed. 3. 152. 1927—梅村，富士．植．志．374. 1923—松浦，葺類辞典，139, f. 160. 1933—IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 55 : 518. 1941—今関，原色きのこ，pl. 39 (左). 1942; 及土岐，林．試．研．報．67:41. 1954—原，日．菌．目．140. 1954—松田及本郷，植．研．雑．30:262. 1955—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，81, f. 209, pl. 36, f. 209. 1957)

Agaricus viscidus NEES, Syst. Pilze. Schw. 53, pl. 24, f. 197 B. 1817 (non LINNÉ, 1753)

Agaricus glutinosus var. *roseus* FR. Syst. Myc. 1:315. 1821.

Gomphidius glutinosus var. *roseus* FR. Epicr. Myc. 319. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:150. 1863; Hymen. Eur. 400. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:452. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:205. 1871; Illus. Brit. Fungi, 6:pl. 880 (no. 857). 1888—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1: 184. 1872—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:190. 1876—WINTER, Pilze, 1:575. 1884.



第 21 図　オオギタケ
Gomphidius roseus
×1/2　（大谷氏）

子実体は孤生或は群生；傘は扁平丸山形，鈍頭，のち往々凹下す；表面は淡紅色或は薔薇色，粘性，乾時光沢あり；肉は白色或は鮭肉色又は幾分ピンクを帯ぶ，茎の基部は濃鮮黄色，稀にピンク赤色，味よし；褶は垂生，疎，狭幅，叉状に分岐し，灰白色にてオリーブ色となる；茎は 3—5×1—1.5 cm，下方に狭細し，白色にて屢々基部淡紅色を帯ぶ，髄部充塞；蜘蛛巣膜は薄くして僅か膠質，茎の頂部に1—3粘液帯を作る；胞子は紡錘形，平滑，15—17×4—5 μ；胞子紋は淡灰オリーブ色；嚢状体は円筒形，90—160×12—15 μ；可食。

所在及産地

針葉樹林地上—夏秋　　本州—欧

和名　オオギタケ（扇茸）〔川村〕

Gomphidius glutinosus (SCHAEFF. ex FR.) FR.

シロエノクギタケ

FRIES, Epicr. Myc. 319. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:149. 1863; Hymen. Eur. 399. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:452. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 196. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:195. 1867—FUCKEL, Symb. Myc. 13. 1869—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1: 205. 1871; Illus. Brit. Fungi, 6:pl. 879 (no. 856). 1888—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:183, pl. 10, f. 5. 1872; Enchir. Fung. 91. 1886—GILLET, Champ. Fr. 624, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:190. 1876; Hattsv. 1:525. 1879; Krit.

Oefv. Finl. Basidsv. 255. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 575. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 1137. 1887: Fl. Ital. Crypt. Hymen. 663. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 524. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 209. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 154. 1900—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1 :346. 1892; Brit. Fungi, 328. 1911—ROLLAND, Atl. Champ. 71, pl. 74, f. 165. 1910—RICKEN, Blätterp. 9, pl. 3, f. 1. 1915—REA, Brit. Basid. 324. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 14 : pl. 671. 1930—LANGE, Agar. Denm. 11 : 34. 1936; Fl. Agar. Dan. 5:5. pl. 161, f F. 1940—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:95. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 45. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:144, f. 78. 1957.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 55:517. 1941—今関及土岐，林．試．研．報．87:53. 1956)

Agaricus lubricus SCOP. Fl. Carn. 2:447. 1772.

Agaricus glutinosus SCHAEFF. Fung. Bavar. 4: Ind. 17, pl. 36. 1774—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, pl. 7. 1797—FRIES, Syst. Myc. 1:315. 1821.

Agaricus viscidus PERS. Syn. Meth. Fung. 291. 1801. (non LINNÉ, 1753)

子実体は孤生或は群生：傘は径 5—12.5 cm，丸山形，鈍頭，のち扁平となる；表面は帯紫暗褐色或は暗褐色，屢々黒点を有す，平滑，甚だ粘性；肉は白色，茎の基部の方は黄色，厚し，味苦し；褶は深く垂生，疎，広幅，叉状に分岐し，帯白色にて灰色となる，粘性；茎は 5—10×1—2 cm，同幅或は基部狭細，繊維状，往々黒色鱗片あり，粘性，帯白色，基部強き黄色；蜘蛛巣膜は鍔は作り，消失性；胞子は紡錘形，平滑 15—24×4—7.5 μ；胞子紋は濃オリーブ色；嚢状体は円筒形，130—160×12—16 μ；可食。

所在及産地

針葉樹林地—夏秋　　本州—欧．北米

和名　シロエノクギタケ（白柄釘茸）〔今井〕

Hygrophoraceae ROZE　アカヤマタケ科

ROZE, Bull. Soc. Myc. Fr. 23:110. 1876. (ut *Hygrophorées*)—SINGER, Agaricales, 141. 1949.

傘は屢々粘性～膠性，表皮層は放射状に配列する糸状菌糸より成り，屢々密なり，稀に膠質物に埋在する匍匐状或は直立する菌糸より成る；托は褶状；褶は蠟質にて，担子柄の異常なる長さ（胞子長の5—7倍）の為めに厚し，稜は膠質層の存在するが為めに鈍し；小担子柄は糸状；小柄は4或は2；胞子紋は白色；胞子は薄膜，小形にて球形～大形にて円筒形，一般には形及大さは寧ろ一定せずして大約卵状楕円形（円筒形）なり，常に平滑，非糊性にて稀に糊性のものあり；嚢状体を欠如或は寧ろ不明瞭；担子柄にはカーミン染色顆粒なし；托実質は不整型，整型或は両側型；茎は類軟骨質～肉質，往々粘性或は膠性，往々被膜あり，平滑或は頂部穀粉状繊維を有し，或は全面縦線状繊維を有す；肉は味温和或は往々苦味あり，辛味なし，通常少くとも傘にては肉質；菌糸は常に非糊性，多数の菌絆を有す；組織は均一にて離層なく，角質ならず，林地上，蘚間，稀に腐木上に生ず。

本科は担子柄長くして褶厚く稜は蠟質なるを特徴とせられ従つてクギタケ科（*Gomphidiaceae*）に類似するも本科の胞子紋は白色にて菌糸に菌絆を有するにより異り，又本科の如く白色胞子紋を有するシメジタケ科（*Tricholomataceae*）の内ナラタケ属（*Armillariella*）及びシメジタケ属（*Tricholoma*）中には担子柄の長きものあるも，これ等は菌絆を有せずして胞子も亦強く薬品に反応するがために区別され，またキツネタケ属（*Laccaria*）は厚き褶を有するも，その胞子は屢々有刺なるにより分つを得べし，又同科中モミタケ族（*Biannularieae*）の托実質は両側型にて本科ヌメリガサタケ属（*Hygrophorus*）と一致するも，その被膜は2重，胞子は糊性，褶は密なる等全く異なれり。

従来本科には只1属 *Hygrophorus* を置き3亜属に分ちたりしが今日各々独立せしめ，ヌメリガサタケ属（*Hygrophorus*）オトメノカサタケ属（*Camarophyllus*）アカヤマタケ属（*Hygrocybe*）とされ，尚その他の2属を添加されたるも邦産なし。

本邦既知属検索表

A．托実質は両側型；被膜は屢々存在；屢々菌根を作る；胞子は非糊性。

　　ヌメリガサタケ属　**Hygrophorus**　(57)

B．托実質は両側型ならず；被膜なし；胞子は非糊性。

　a．托実質は細き菌糸（径 7 μ 以下）よりなり，屢々混淆型に見ゆ；褶は常に垂生或は稍々垂生，或は彎生；傘茎は鮮色（赤，黄，緑，橙色）ならざるも，往々橙暗褐色，肉桂色或は泥鉛色のものあり。

　　オトメノカサタケ属　**Camarophyllus**　(68)

b．托実質は類整型或は完全に整型；色素は屢々鮮色；乳汁なし。
アカヤマタケ属 **Hygrocybe** (72)

Hygrophorus Fr.
ヌメリガサタケ属

Fries, Fl. Scand. 339. 1835; Gen. Hymen. 8. 1836; Epicr. Myc. 320. 1838—Karsten, Hattsv. 1:216. 1879—Singer, Agaricales, 144. 1949.

Agaricus trib. *Limacium* Fries, Syst. Myc. 1: 31. 1821.

Hygrophorus trib. *Limacium* Fries, Epicr. Myc. 320. 1838.

Limacium Kummer, Führer Pilzk. 25, 118. 1871—Schroeter, Pilze Schles. 1:530. 1889.

一般性質は科の記載に同じ，褶は直状類垂生～長垂生；托実質は両側生；被膜は屢々存在；嚢状体は極めて稀生にて不明瞭；擬嚢状体なし；胞子は非糊性，通常樹木の附近地上に生じ，菌根を作る；裸実，半被実；熱帯以外に広く分布す，約 52 種，知らるる範囲にてはすべて食用となる。

（本属名は hygros〔希〕(湿潤)，phoreo〔希〕(荷う）より出づ）

基準種　*H. eburneus* (Bull. ex Fr.) Fr.

本邦既知種検索表

A．茎は膠状被膜の残物に蔽われ粘性或は膠性。
a．傘は白色或は中盤のみ淡黄色。
α．傘縁及茎頂部には少くとも黄色粒を存す。
ウコンガサタケ　***H. chrysodon*** (58)
β．傘茎に黄色粒なし，甚だ粘性。
Ⅰ．傘は純白色，光沢あり，臭温和或は殆どなし。　シロヌメリガサタケ
H. eburneus (58)
Ⅱ．傘は白色にて幾分帯黄色，臭強し。
クサヌメリガサタケ　***H. cossus*** (59)
b．傘は有色。
α．傘は黄色，橙色，赤色或は暗オリーブ黄色。
Ⅰ．傘は全面鮮レモン色にて帯赤色ならず。
キヌメリガサタケ　***H. lucorum*** (60)
Ⅱ．傘は中盤暗オリーブ～オリーブ褐色（少くとも幼時)，老時鮮黄色となる，(傘径 3—5 cm)　シモフリヌメリガサタケ
H. hypothejus (60)
＊小形（傘径 1—3 cm)
フユヤマタケ　***f. pinetorum*** (61)
β．傘は灰色，オリーブ灰，褐黒色或は帯黒色—茎は 2 重鞘を有し鍔帯を作る。
コケイロヌメリガサタケ
H. olivaceo-albus (61)
γ．傘は肉桂褐色，赤褐色或は肉渋色にて茎は粘性。
Ⅰ．中盤淡栗褐色～栗褐色，縁は淡鮭肉～鈍藁色；褶は帯白色或は淡紅渋色を帯ぶ。
チャヌメリガサタケ　***H. discoideus*** (62)
Ⅱ．中盤オリーブ褐色，縁は淡黄灰色；褶は白色。　ヒメヌメリガサタケ
H. leucophaeus (62)
B．茎は乾燥或は湿潤，時に触感やや粘性なるも膠状被膜なし。
a．繊維質被膜は茎の上部に早失性の繊維状鍔を作る。　サクラシメジタケモドキ
H. purpurascens (63)
b．繊維状被膜なし。
α．褶は明かに赤点を生じ或は赤色に染る。
Ⅰ．傘は一様に暗酒赤色；褶は傘と同色。
ヒメサクラシメジタケ
H. capreolarius (63)
Ⅱ．傘は中盤鈍桃色～帯紫色，縁は淡色；褶に赤点あり。
1．褶は密～群生（120～130)
サクラシメジタケ　***H. russula*** (64)
2．褶はやや疎～密（75—95)
オオサクラシメジタケ
H. erubescens (64)
β．褶は赤点なし。
Ⅰ．傘は淡紅渋色，鮭肉色或は淡桃色，時に渋色～銹色。
1．傘は鮮帯赤肉色，中盤暗色；褶は白或は淡肉色；傘径 5—10 cm。
フキサクラシメジタケ
H. pudorinus (65)
2．中盤栗褐色，縁は淡色；褶は白色；傘径 2—5 cm。　コクリノカサタケ
H. arbustivus (66)
β．傘は灰色，煤色～帯黒色。
Ⅰ．芳香あり。　ウスチャヌメリカサタケ
H. agathosmus (66)
Ⅱ．臭なきか或は甚だ少し。
1．傘は速に乾燥し；褶は灰色となる。
ヤギタケ　***H. camarophyllus*** (67)
2．傘は粘性を失わず；褶は白色或は桃色を帯ぶ。　ウスアカヒダタケ
H. calophyllus (67)

Hygrophorus chrysodon (BATSCH ex FR.) FR.

ウコンガサタケ

FRIES, Epicr. Myc. 320. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:123. 1863; Hymen. Eur. 405. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 197. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:195. 1871; Illus. Brit. Fungi, 6:pl. 885(no. 872). 1888—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:185. 1872; Enchir. Fung. 48. 1886—GILLET, Champ. Fr. 178, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:216. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 130. 1889—WINTER, Pilze, 1:571. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:387. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 340. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:353. 1893; Brit. Fungi, 173. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 154. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 111, f. 115. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 256. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 32, pl. 28, f. 54. 1910—KAUFFMAN, Agar. Mich. 178. 1918—REA, Brit. Basid. 291. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 101, pl. 45. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 7:pl. 301. 1928—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:99. 1938—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 2:13, pl. 3. 1939—SINGER, Agaricales, 145. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 105, pl. 19, f. 4. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:73. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 58. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:204, f. 166, B. 1957.

(川村, 日. 菌. 図説, n. 45. 1929; 日. 菌. 図鑑, 3:317, f. 314. 1954—小林. 日. 隠. 植. 図. 505, pl. 243, f. 3–6. 1939—原, 日. 菌. 目. 158. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 12. 1957)

Agaricus Mugnarius SCOP. Fl. Carn. (2). 2:429. 1772.

Agaricus chrysodon BATSCH, Elench. Fung. Cont. 2:79, f. 212. 1789—FRIES, Syst. Myc. 1:32. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:568. 1844.

Limacium chrysodon SCHROET. Pilze Schles. 1:531. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 213. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1) : 321, pl. 54 D. 1912—RICKEN. Blätterp. 15, pl. 6, f. 4. 1915—LANGE, Agar. Denm. 5:16. 1923; Fl. Agar. Dan. 5:14, pl. 164, f. G. 1940.

Hygrophorus mugnarius MURR. N. Am. Fl. 9:391. 1916.

子実体は孤生或は群生; 傘は径 3—8 cm, 丸山形にて, 扁平に開張し, 稍々中丘あるか鈍頭; 表面は湿時粘性, 乾時光沢あり, 白色にて表生の多数の卵黄色なる綿絮状粒を縁辺に有す, 但し幼時はその全面を被う; 縁は初め内捲し, 白色綿毛を有す; 肉は白色, 寧ろ厚く, 臭味共に著しからず; 褶は垂生, 白色或は稜部黄色を帯ぶ, 疎, 中位に広幅; 托実質は両側型にて菌糸拡散す; 茎は 3—8×0.6—1.5 cm, ほぼ同幅, 粘性, 白色なるも傘面の如き微細の黄色綿絮を有し, 綿絮は特に頂部に多く, 屢々不完全なる輪層を作る, 髄部充塞さる; 担子柄は 4 胞子を有す; 胞子は楕円形, 平滑, 無色, 7—10×4—6 μ; 胞子紋は白色; 可食, 但し不快臭を伴うという。

所在及産地

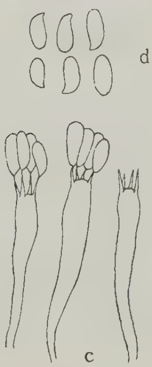
ブナ. ナラ等広葉林地及針葉樹林地上—秋

北海道, 本州—欧. 北米. 阿

和名 ウコンガサタケ(鬱金傘茸)〔川村〕



a b



d

c

第 22 図ウコンガサタケ
Hygrophorus chrysodon
a. b. 子実体 ×1/2
c. 担子柄
d. 胞子 ×600 (大谷氏)

Hygrophorus eburneus (BULL. ex FR.) FR.

シロヌメリガサタケ

FRIES, Epicr. Myc. 321. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:123. 1863; Hymen. Eur. 407. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 197, pl. 15, f. 1. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:195, 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:196. 1871; Illus, Brit. Fungi, 6:pl. 886(no. 873). 1888—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:185. 1872; Enchir. Fung. 49. 1886—GILLET, Champ. Fr. 180, c. ic, 1874—KARSTEN. Myc. Fenn. 3:193. 1876; Hattsv 1:217. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 130. 1889—WINTER. Pilze, 1:570. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:388, 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 340. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:353. 1893; Brit. Fungi, 173.

1911—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 111, f. 116. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 256. 1908—MURRILL, Mycologia, 6:164, pl. 131. 1914—KAUFFMAN, Agar. Mich. 178. 1918—REA, Brit. Basid. 292. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 101, pl. 46, f. 2. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 7:pl. 303. 1928—IMAI, Jour. Facul. Agar. Hokkaido Imp. Univ. 43:100. 1938—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 2:7, pl. 1. 1939—SINGER, Agaricales, 145. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:72. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 58. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:204. 1957.

（原，日．菌．目．158. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，12. 1957）

Agaricus jozzolus SCOP. Fl. Carn. (2), 2:431. 1772.

Agaricus lacteus SCHAEFF. Fung. Bavar. 4, Ind. 19, pl. 39. 1774.

Agaricus eburneus BULL. Champ. Fr. pl. 551, f. 2. 1791—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 364. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:33. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:568. 1844.

Agaricus nitens SOW. Col. Fig. Engl. Fungi, pl. 71. 1797.

Limacium eburneus SCHROET. Pilze Schles. 1: 530. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:213. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1): 321, pl. 54F. 1912—RICKEN, Blätterp. 16, pl. 6, f. 5. 1915—LANGE, Agar. Denm. 5:15. 1923; Fl. Agar. Dan. 5:14, pl. 164, f. E, E'. 1940.

Clitocybe albicastanea MURR. Mycologia, 5: 206. 1913.

子実体は群生或は稍々叢生；傘は径3—7(10) cm，丸山形，のち開張し扁平となり，或は稍々中丘を存す，老時往々縁辺上昇して中盤凹下することあり；表面は膠性或は粘性，無毛或は白色光沢絹糸を存す，成時全面純白色；縁は初め内捲して綿絮状軟毛を有し，のち平担となる；肉は白色，中盤部に於て厚く，縁部に向つて薄く，堅緻，臭味共に温和，或は殆どなし；褶は初め幾分弓状なるも速に垂生し，稍々疎或は疎，中等幅にて茎に近く広く，前方狭し，純白色にて，老時褪色す；托実質は両側型にて菌糸拡散す；茎は 6—15×0.5—1 cm，殆ど同幅或は基部僅か狭細し，或は紡錘形となる，純白色，老時屢々汚色となる，甚だ膠性にて，膠質物の下は絹糸状，乾時光沢あり，頂部に白色の繊維質の点或は小鱗片ありて粗面なり，中実なるも後ち中空となる；担子柄は 4 胞子を有し，細長，40—45×7 μ；胞子は楕円形，平滑，無色，6—8×3.5—5 μ；胞子紋は白色；可食。



a　　　b　　　c

第 23 図　シロヌメリガサタケ

Hygrophorus eburneus

a．子実体表面　　b．同裏面　×1/2

c．胞子　×600　　　　（大谷氏）

所在及産地

広葉樹林及混淆林地上—秋

北海道—欧．北米．阿．亜（中亜．西比）

和 名　シロヌメリガサタケ（白粘傘茸）〔今井〕

Hygrophorus cossus (SOW.) FR.

クサヌメリガサタケ

FRIES, Epicr. Myc. 321. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:124. 1863; Hymen. Eur. 406. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 197. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:196. 1871; Illus. Brit. Fungi, 6:pl. 887 (no. 874). 1888—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:185. 1872; Enchir. Fung. 49. 1886—GILLET, Champ. Fr. 179, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:217. 1879—WINTER, Pilze, 1:570. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:389. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 341. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:354. 1893; Brit. Fungi, 173. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 154. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 257. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 32, pl. 28, f. 55. 1910—REA, Brit. Basid. 292. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 7:pl. 304. 1928—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido. Imp. Univ. 43:101. 1938.

（原，日．菌．目．158. 1954）

Agaricus Cossus SOW. Col. Fig. Engl. Fungi, pl. 121. 1799.

Agaricus eburneus var. *b.* Fr. Syst. Myc. 1: 33. 1821.

Agaricus eburneus var. *Cossus* RABENH. Deut. Krypt. Fl. 1:568. 1844.

Limacium Cossum P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 213. 1900—

MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1): 322. 1912—RICKEN, Blätterp. 16. 1915—LANGE, Agar. Denm. 5:16, f. 10. 1923.

Limacium eburneum var. *Cossus* LANGE, Fl. Agar. Dan. 5:14, pl. 164, f. A. 1940.

Hygrophorus eburneus var. *Cossus* QUÉL. in KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:72. 1952—HEIM, Champ. Eur. 2:204, f. 167, A. 1957.

子実体は孤生或は群生；傘は径 4—8cm，丸山形，のち開張し扁平となり，稍々中丘を有し，或は凹下す；表面は甚だ粘性，純白色ならず，特に，茎の下部に於て淡黄土色を帯ぶ；縁は無毛；肉は白色，のち帯黄色或は黄色，味温和，臭強し；褶は類垂生或は類直生，疎，厚く，白色，のち僅か帯黄色，脉により連結さる；茎は 6—12×0.6—1.2cm，同幅にて基部狭細，淡黄土色，或はほぼ同色，粘性，頂部穀粉状或は粒状，髄部充塞，のち中空となる；胞子は広楕円形，平滑，無色，7—9×5—6μ；胞子紋は白色。

所在及産地

林地上—秋　　北海道—欧，阿

和名 クサヌメリガサタケ（臭粘傘茸）〔今井〕

Hygrophorus lucorum KALCHBR.
キヌメリガサタケ

KALCHBRENNER, Icon. Hymen. Hung. 35, pl. 19, f. 4. 1874—FRIES, Hymen. Eur. 409. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 3:440. 1875; Enchir. Fung. 50. 1886—WINTER, Pilze, 1:567. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:394. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 346. 1915—RICKEN, Blätterp. 13, pl. 5, f. 3. 1915—BRESADOLA, Icon. Myc. 7:pl. 314. 1928—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:104, pl. 3, f. 4. 1938—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 2:13. 1939—SINGER, Agaricales, 146. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:76. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 60. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:200. f. 163, A. 1957.

（原，日．菌．目．158. 1954）

Limacium lucorum P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 213. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1):322. 1912—LANGE, Fl. Agar. Dan. 5:13, pl. 163, f. c. 1940.

子実体は群生或は散生；傘は径 2—6cm，鐘状丸山形，鈍頭或は中丘を有し，のち開張し，少しく凹下す；表面は無毛，或は乾燥によりて小皺を生じ，粘性，鮮レモン色，縁は初め屢々綿毛あり，稍々淡色，薄し；肉は白色なるも外皮下レモン色，柔軟，臭味共に殆どなし；褶は直状垂生，疎或は稍々疎，帯白色にて屢々傘縁の方レモン色，時に全部レモン色；托実質は両側型にて菌糸拡散す；茎は 3—7×0.5—1cm，同幅或は不規則に圧辺さる，上部白色，下部淡黄色，粘性の被膜に包まれ綿絮状，髄部充塞され柔軟；胞子は広楕円形，平滑，無色，8—11×5—6μ；胞子紋は白色；可食。



第 24 図 キヌメリガサタケ
Hygrophorus lucorum
×1/2 （大谷氏）

所在及産地

林地—秋　　北海道—欧

和名 キヌメリガサタケ（黄粘傘茸）〔今井〕

Hygrophorus hypothejus (FR.) FR.
シモフリヌメリガサタケ

FRIES, Epicr. Myc. 324. 1836; Monogr. Hymen. Suec. 2:128. 1863; Hymen. Eur. 410. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 198. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:198. 1871; Illus. Brit. Fungi, 6:pl. 891(no. 883). 1888; Handb. Austr. Fungi, 74. 1892—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:187, pl. 10, f. 5. 1872; Enchir. Fung. 50. 1886—GILLET, Champ. Fr. 183, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:196. 1876; Hattsv. 1:222. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 131. 1889—WINTER, Pilze, 1:566. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:396. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:360. 1893; Brit. Fungi, 176. 1911—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 114. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 32, pl. 28, f. 56. 1910—MURRILL, N. Am. Fl. 9:394. 1916—KAUFFMAN, Agar. Mich. 183. 1918—REA, Brit. Basid. 296. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 7:pl. 317. 1928—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 2:15, pl. 5. 1939—SINGER, Agaricales, 146. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 106, pl. 32, f. 3. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:78. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 60, f. 107. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:200. 1957.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，12, pl. 1, f. 4. 1957）

Agaricus limacinus SOW. Col. Fig. Engl. Fungi. 1:pl. 8, 1797. (non SCOPOLI)

Agaricus vitellum ALB. et SCHW. Consp. Lusat. 179. 1805.

Agaricus hypothejus FR. Obs. Myc. 2:10. 1818; Syst. Myc. 1:35. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:567. 1844.

Hygrophorus fuligineus FROST et PECK, 35 Ann. Rep. N. Y. Sta. Mus. 134. 1884.

Limacium Vitellum SCHROET. Pilze Schles. 1: 528. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:212. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1):325, pl. 54 J. 1912.

Hygrophorus elegantulus PECK, Bull. Torr. Bot. Club, 22:200. 1895.

Hygrophorus amygdalinus PECK, l. c. 25:322. 1898.

Hygrophorus Morrisii PECK, l. c. 26:64. 1899.

Hygrocybe arenicola MURR. Mycologia, 4:208. 1912.

Hygrophorus subpustulatus MURR. l. c. 210. 1912.

Limacium hypothejum RICK. Blätterp. 13, pl. 5, f. 5. 1915—LANGE, Fl. Agar. Dan. 5:11, pl. 162, f. D–D′. 1940.

Hygrophorus vitellum SACC. Fl. Ital. Crypt. Hymen. 345. 1915.

子実体は群生；傘は径 2—5cm，初め僅か鈍き中丘あり，のち丸山形～扁平にて僅か中丘を存し，時に少しく中盤圧低さる；表面は初め無色の膠の厚層に被われ，その下は多少繊維状，中盤はオリーブ～暗オリーブ褐色，縁の方へ淡色又は淡黄色，老時鮮かなる黄，橙色或は緋色となる；肉は薄く，外皮に近く黄色，褶の上は水潤状白色，臭及び味明かならず；褶は初め白色にて速に淡黄色となり，遂に多少傘縁と同色，狭幅～やや広幅，垂生，やや疎～疎；茎は 4—7×0.7—1cm，下方に僅か狭細，下部3分の2程厚き膠質鞘に被われ，鍔帯は繊維状，早失性，これより上部は絹糸状にて帯黄色，下部諸色を呈し，オリーブ褐色，オリーブ黄色，鮮黄色，橙色或は緋色等，肉は帯白或は外囲に近く帯黄色，中実；胞子は楕円形，平滑，7—8.5×4—5.5μ；担子柄は4胞子；食用。

所在及産地

松林内地上—晩秋　　本州—欧．北米

和名 シモフリヌメリガサタケ

（霜降粘傘茸）〔今関及本郷〕

f. **pinetorum** (HONGO) HONGO

フユヤマタケ

IMAZEKI & HONGO, Col. Illus. Fungi Jap. 12. 1957.

Hygrophorus pinetorum HONGO, Acta Phytotax. Geobot. 15:103, f. 2. 1954.

前種の小形品種，傘径 1—3cm；胞子は 7.5—9.5×4—5.5μ．12—1 月頃関西のアカマツ林に極めて普通に見らる。

子実体は散生。傘は径 1—3cm，丸山形～扁平，屢々多少圧低，時に鈍小丘を有す；表面は初め無色膠状の被膜のために粘性，膠皮の下に幾分圧着せる繊維を有す，黄褐色，黄黄土色或はオリーブ暗褐色，中央暗色，老時淡色となる，縁は初め内屈し，線条なし；肉は寧ろ薄く，淡黄色，柔軟，味及臭なし；褶は直状垂生～垂生，帯白色或は淡黄色，疎，幅 2—6mm，寧ろ厚く，蠟質，連結脈あり，稜は平担；茎は 3—4×0.2—0.4cm，或はより以上長く，同幅，屢々撓曲，下方約 4/5 は膠皮に蔽われ，速に乾燥す，膠皮下に幾分圧着せる白色繊維を有す，傘面より淡色，時に帯黄色，帯赤色或は殆ど帯白色，頂部帯白色，稍々粉状；被膜は白色綿架状にて頂部に早失性の輪層を作る；胞子は楕円形，平滑，無色，非糊性，7.5—9.5×4—5.5μ；胞子紋は白色；担子柄は 36—47×7.5—9μ；4胞子；嚢状体なし；托実質は両側型。

所在及産地

アカマツ林地—秋冬　　本州

和名 フユヤマタケ（冬山茸）〔本郷〕

Hygrophorus olivaceo-albus (FR.) FR.

コケイロヌメリガサタケ

FRIES, Epicr. Myc. 324. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:128. 1863; Hymen. Eur. 410. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:187. 1872; Enchir. Fung. 50. 1886—GILLET, Champ. Fr. 185, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:195. 1876; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 131. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:395. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 347. 1915—COOKE, Illus. Brit. Fungi, 6:pl. 890, (no. 882). 1888; Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 292. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:359. 1893; Brit. Fungi, 175. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 154. 1900—W. G. SMITH, Brit Basid. 259. 1908—KAUFFMAN, Agar. Mich. 184, pl. 25. 1918—REA, Brit. Basid. 296. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 7:pl. 316. 1923—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 2:23, pl. 8. 1939—SINGER, Agaricales, 146. 1948—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:78. 1952—HEIM, Champ. Eur. 2:199, f. 162, A. 1957.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 53:395. 1939—原，日．菌．目．158. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，12. 1957)

Agaricus olivaceo-albus FR. Syst. Myc. 1:35. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:567. 1844.

Limacium olivaceo-album SCHROET. Pilze Schles. 1:532. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:213. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1):325. pl. 54B. 1912—RICKEN, Blätterp. 13, pl. 5, f. 2. 1915—LANGE, Agar. Denm. 5:15. 1923; Fl. Agar. Dan. 5:11, pl. 162, f. A. 1940.

子実体は叢生、群生或は散生；傘は径3—8(10)cm，丸山形、或は幾分著しき中丘を有し、開張せば屢々殆ど扁平；表面は膠性～粘性、膠層の下に煙オリーブ灰色～帯黒色の纖維線条著し，中盤焦茶色～黒色，縁辺は淡色にて灰色；肉は中盤部厚く，白色，柔軟，臭味共に著しからず；褶は白色或は基部幾分灰色，中幅，直生或は稍々垂生，密～稍々疎，厚し；托実質は両側型にて菌糸拡散す；茎は 8—15×1—3cm，棍棒形～同幅，[illegible]著しく逆2重鞘を有するを特徴とす，その外層は膠状，内層は傘面と同様なる圧着せる帯黒色纖維より成り，[illegible]の消失性の[illegible]或は類膜質の鍔となる，老時この鞘は屢々下部に同心的のボロボロの帯に破る，茎は白色にて鍔より上部無毛或は粉状；胞子は楕円形，平滑，無色，9—12×5—6μ。

所 在 及 産 地

広葉及針葉樹林地--秋　　本州—欧，北米

和 名 コケイロヌメリガサタケ

(苔色粘傘茸)〔今井〕

〔因記〕 本郷氏は川村氏の*Armillaria nigrescens*(クロマツタケモドキ)は本菌なるべきかと称す。

Hygrophorus discoideus (PERS. ex FR.) FR.

チャヌメリガサタケ

FRIES, Epicr. Myc. 323. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:127. 1863; Hymen. Eur. 408. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:195. 1876; Hattsv. 1:220. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 131. 1889—GILLET, Champ. Fr. 182, c. ic. 1874—COOKE, Illus. Brit. Fungi, 6:pl. 912, (no. 880). 1888; Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 291. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:393. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 345. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:358. 1893; Brit. Fungi, 175. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 258. 1908—REA, Brit. Basid. 295. 1922—KONRAD, Bull. Soc. Myc. Fr. 45:61. 1929; & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4:pl. 369. 1936; Agaricales, 2:77. 1952—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 2:29. 1939—SINGER, Agaricales, 146. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 55. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:201. 1957.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 55:446. 1941)

Agaricus discoideus PERS. Syn. Meth. Fung. 365. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:33. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:568. 1844.

Hygrophorus nitidus (non FRIES) QUÉL. Champ. Jura Vosg. Suppl. 8:228. 1878; Enchir. Fung. 50. 1886—KONRAD, Bull. Soc. Myc. Fr. 39:32, pl. 1, f. C 12. 1923.

Limacium discoideum SCHROET. Pilze. Schles. 1:532. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:213. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1):323, pl. 54C. 1912—RICKEN, Blatterp. 11. pl. 4. f. 5. 1915.

子実体は散生或は群生；傘は径 2—5cm，丸山形或は僅か中丘を有し，のち開張し扁平或は中丘を存し，老時縁辺反転す；表面は無毛，膠性～糊性，初め縁に近く微かの綿毛あり，中盤は淡栗褐色～栗褐色，周縁部は淡鮭肉色～鈍藁色；肉は薄く，白色或は稍々煉瓦色の色彩を帯ぶ，臭味共に著しからず；褶は帯白色或は淡紅淡色の色彩を帯ぶ，密～稍々疎，狭幅，垂生；托実質は両側型にて菌糸拡散す；茎は 4—9×0.3—0.5cm，同幅，上部は白色の纖維毛を有し，下方は明かなる膠質被膜の残物を存し僅か粘性，全部白色；胞子は楕円形，平滑，無色，5.5—6.5×4μ；胞子紋は白色。

所 在 及 産 地

針葉樹林地—秋　　本州—欧，北米

和 名 チャヌメリガサタケ(茶粘傘茸)〔今井〕

Hygrophorus leucophaeus (SCOP. ex FR.) FR.

ヒメヌメリガサタケ

FRIES, Monogr. Hymen Suec. 2:126. 1863—GILLET, Champ. Fr. 181. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:219. 1879—Winter, Pilze, 1:568. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:392. 1887—KONRAD, Bull. Soc. Myc. Fr. 45:64. 1929; & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4:pl. 370. 1937; Agaricales, 2:77. 1952—SINGER, Agaricales, 146. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 57. 1953.

Agaricus leucophaeus SCOP. Fl. Carn. 2(2):423. 1772.

Agaricus glutinosus BULL. Champ. Fr. pl. 539, f. C-E. 1791.

Hygrophorus glutinifer ssp. *leucophaeus* FR. Epicr. Myc. 323. 1838; Hymen. Eur. 408. 1874.

Hygrophorus mesotephrus BERK. et BR. Ann. Mag. Nat. Hist. II, 13:7, pl. 5, f. 2. 1854—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 198. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:197. 1871; Illus. Brit. Fungi, 6:pl. 914, (no. 887). 1888—FRIES, Hymen. Eur. 411. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 11:395. 1882; 18:466. 1891; Enchir. Fung. 51. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5:398. 1887;

Fl. Ital. Crypt. Hymen. 349. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:362. 1893; Brit. Fungi. 176. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 259. 1908—REA, Brit. Basid. 297. 1922—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:105. 1938—HEIM, Champ. Eur. 2:202. 1957.

(原，日．菌．目．158. 1954)

Limacium mesotephrum P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:213. 1900—LANGE, Agar. Denm. 5:14. 1923; Fl. Agar. Dan. 5:11, pl. 162, f. B. 1940.

Limacium leucophaeum RICKEN, Blätterp. 11, pl. 4, f. 6. 1910—LANGE, Agar. Denm. 5:15, f. 7. 1923; Fl. Agar. Dan. 5:13, pl. 163, f. G. 1940.

Hygrophorus discoideus (non FRIES) QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:187. 1872; Enchir. Fung. 49. 1886.

Hygrophorus arbustivus (non FRIES) BRESADOLA, Icon. Myc. 7:pl. 309. 1928.

子実体は孤生或は散生；傘は径 1.5—3cm，丸山形～扁平，少しく中丘を有す；表面は淡汚黄色或は帯褐灰色の厚き糊状物に被われ，周辺は淡灰黄色，中央部はオリーブ褐色に見ゆ，縁は僅か白色綿絮を有し，線条なし；肉は白色，臭味なし；褶は垂生，白色，稍々密生；茎は 3—4×0.4—0.5cm，同幅，厚く糊状物に被われ，傘と同色に見ゆ，頂部は糊状物なくして乾燥，白粉状，中実；胞子は楕円形，平滑，無色，7.5—10×5—6μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地

林地—秋　　　　北海道—欧

和名　ヒメヌメリカサタケ（姫粘傘茸）〔今井〕

Hygrophorus purpurascens
(ALB. et SCHW.) FR.
サクラシメジタケモドキ

FRIES. Epicr. Myc. 322. 1838; Hymen. Eur. 407. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 2:353. 1873—KARSTEN, Hattsv. 1:218. 1879—WINTER, Pilze, 1:569. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:390. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 341. 1915—R. MAIRE, Bull. Soc. Myc. Fr. 27:411, 1911—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4:pl. 366. 1927; Agaricales, 2:75. 1952—A. H. SMITH, Lloydia, 2: 53, pl. 21. 1939—SINGER, Agaricales, 145. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 57. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:203. 1957.

(今関及山内，日．菌学会報，7:10. 1958)

Agaricus purpurascens ALB. et SCHW. Consp. Lusat. 182. 1805—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:568. 1844.

Hygrophorus russula var. *purpurascens* QUÉL. Enchir. Fung. 49. 1886.

Limacium purpurascens SCHROET. Pilze Schles. 1:531. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:213. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1):323. 1912—RICKEN, Blätterp. 10. 1915.

子実体は群生；傘は径 6—12cm，丸山形，のち扁平或は洋独楽形となり，縁は老時迄内屈す；表面は膠質の薄皮のために粘性，老時殆ど乾燥，圧着纖維あり，縁は綿絮状纖維あり，往々圧着鱗片となる，纖維層の色は中盤蝦老茶色，或は小豆色，縁は淡色にて鈍桃色，尚一般に淡色のことあり，纖維の下の肉は帯白色；肉は白色，厚く，臭及味は明かならず；褶は淡桃色～淡灰酒赤色にて速に帯赤紫色の斑点を生ず，垂生，密～やや粗（60—70 茎に達す），狭幅；茎は 4—10×1—2cm，上部太く，下部漸細して尖る，中実，乾燥，鍔より下部に絹糸状纖維あり，上部は絹糸状，下方は傘面と多少同色にて屢々暗帯紫赤色の斑点あり；鍔は纖維質被膜の残物より成り早失性なり；担子柄は 4 胞子；胞子は類卵形，平滑，無色，5.5—7.5×3—4.5μ；紋は白色。

所在及産地

モミ林内—秋　　　　本州—欧．北米

和名　サクラシメジタケモドキ

（擬桜湿地茸）〔今関及山内〕

Hygrophorus capreolarius (KALCHBR.)
SACC.
ヒメサクラシメジタケ

SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 342. 1915—BRESADOLA, Icon. Myc. 7:pl. 307. 1928—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 2:51, pl. 20. 1939—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:75. 1952—HEIM, Champ. Eur. 2:202, f. 165, B. 1957—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 56. 1953 (non IMAI)

(原，日．菌．目．157. 1954—本郷，植．研．雑．29: 92. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，11, f. 3; pl. 1, f. 3. 1957)

Hygrophorus erubescens var. *capreolarius* KALCHBR. Icon. Hymen. Hung. 35, pl. 18, f. 3. 1874—FRIES, Hymen. Eur. 407. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:391. 1887.

Hygrophorus erubescens ssp. *capreolarius* WINT. Pilze. 1:569. 1884.

Limacium capreolarium MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1):324. 1912.

? *Hygrophorus capreolarius* IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:102. 1938.（コサクラシメジ）

Hygrophorus purpureo-badius IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 55:447. 1941—HONGO, Bull. Facul. Lib. Arts Educ. 2:48, f. 1–2. 1953.
(今関，原色きのこ，pl. 25(右). 1942; 及土岐，林. 試. 研. 報. 67:43, pl. 2, f. 4, 1954)

子実体は群生或は孤生；傘は径 3—6 cm，丸山形，開張して鈍頭或は稍々中丘を存し，遂に縁辺少しく反転す；表面は粘性にて速に乾燥，暗紅色の小点を密布し，その小点は中盤上に密集し，縁辺にては淡色にて癒合し淡暗紅色を呈す；縁は初め内屈して白絹状；肉は寧ろ厚く，帯白色，帯赤色或は同色，臭味共に著しからざるか，穀粉状の臭あり；褶は直生にて垂生となり，寧ろ疎，中部広幅，厚く，剛直，初め淡色にて肉色或はピンクなるも遂に傘面と同色となる，幾分脉にて連結さる；托実質は両側型にて菌糸拡散す；茎は 3—6×0.5—1.2 cm，殆ど同幅或は便腹状，内生繊維を有し，稍々線条あり，頂部綿絮状細鱗片あり，初め帯白色にて赤味を帯び，のち傘面と同色となる，通常頂部は淡色に残る，中実；胞子は楕円形，平滑，無色，6—10×4—5 μ；多くは 7.5×5 μ；胞子紋は白色。

所在及産地

林地—秋　　　北海道，本州—欧．北米

和名 ヒメサクラシメジタケ（姫桜湿地茸）〔今井〕
ヒメムラサキシメジタケ（姫紫湿地茸）〔今関〕

Hygrophorus russula (SCHAEFF. ex FR.) QUÉL.
サクラシメジタケ

QUÉLET, Enchir. Fung. 49. 1886; Fl. Myc. 262. 1888—KAUFFMAN, Agar. Mich. 185, pl. 26. 1918—REA, Brit. Basid. 293. 1922—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 2:46, pl. 18. 1939—SINGER, Agaricales, 145. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:74. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 57. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:202, f. 165, A. 1957.
(小林，日. 隠. 植. 図. 503, pl. 242, f. 4. 1939—今関，原色きのこ，pl. 25(左). 1942; 及本郷，原色日. 菌. 図鑑，11, f. 1; pl. 1, f. 1. 1957)

Agaricus Russula SCHAEFF. Fung. Bavar. 4: Ind. 25, pl. 58, 1774—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 338. 1801—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1: 562. 1844—BARLA, Champ. Nice, 22, pl. 13, f. 11–12. 1854—FRIES, Hymen. Eur. 52. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 363. 1889; Illus. Brit. Fungi, 8:pl. 926, (no. 1116). 1891—WINTER, Pilze, 1 : 825. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 664. 1889—W. G. SMITH, Outl. Brit. Fung. Suppl. 16. 1891—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):687, pl. 76 D. 1912.
(安田，植. 雑. 31:16. 1917)

Gymnopus russulus S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:607. 1821.

Tricholoma Russula GILL. Champ. Fr. 91, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:35. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:94. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 116. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:185. 1893; Brit. Fungi, 103. 1911—W.G. SMITH, Brit. Basid. 34. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 23, pl. 16, f. 27. 1910—BRESADOLA, Icon. Myc. 2:pl. 67. 1927.
(P. HENNINGS, Hedwigia, 39, Beibl. 156. 1900—松村，植. 名鑑，1:177. 1904—白井，日. 菌. 目. 100. 1905; ed. 2. 665. 1917; ed. 3. 398. 1927—KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 6, f. 9–11. 1913; 日. 菌. 図説，n. 138. 1929; 日. 菌. 図鑑，4:454, f. 438. 1954—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:118. 1931—松浦，茸類辞典，38, f. 38. 1933; 応用菌蕈学，1196. 1941—原，日. 菌. 目. 370. 1954)

Limacium russula RICKEN, Blätterp. 1:10, pl. 4, f. 1. 1915.

傘は径 6—12 cm，半球形〜丸山形，往々広き中丘あり，開張し屢々隆起せる縁を有す；表面は粘性にて速に乾燥し，外皮は容易に剝げず，類白色〜縁に近く桃色にて，紫赤色の斑紋を有す，往々全部暗赤色となる；中盤多少帯紫紅色，暗酒赤色或は帯紫赤色にて，通常中盤の周囲に帯紫赤色の繊維線条あり，初め平滑なるも，微細の圧着せる細繊維の痂皮に破れ，中盤に粒状〜稍々鱗片状の観を与う，擦傷によりて往々帯黄色〜酒赤色等に変色す；縁は内捲し，微細の綿毛を存す；肉は厚く，白色にて外皮下桃色を帯ぶ，堅緻，臭味共に温和；褶は密〜群生，鈍き直生にて垂生となる，狭〜中幅，幼時白色，速に淡桃色となり，のち汚帯紫赤色斑を生じ，老時往々全部汚紫赤色となる；托実質は両側型にて菌糸拡散す；茎は7—10×1—3 cm，同幅或は基部に向つて僅か狭細，時に稍々便腹状，乾燥，頂部粉状〜無毛，基部無毛，初め白色，のち帯紫色となり，遂に傘面と多少同色となる；胞子は楕円形，平滑，無色，7—8×4—5 μ；可食。

所在及産地

主に広葉樹林地—秋　　　本州—欧．北米．阿

和名 サクラシメジタケ（桜湿地茸）〔安田〕

Hygrophorus erubescens (FR.) FR.
オオサクラシメジタケ

FRIES, Epicr. Myc. 322. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:125. 1863; Hymen. Eur. 407. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:186, pl. 11, f. 1.

1872; Enchir. Fung. 49. 1886—GILLET, Champ. Fr. 181. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:194. 1876; Hattsv. 1:219. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 131. 1889—COOKE, Illus. Brit. Fungi, 6:pl. 888, (no. 876). 1888; Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 290. 1889—WINTER, Pilze, 1:569. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:390. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:355. 1893; Brit. Fungi, 174. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 257. 1908—REA, Brit. Basid. 293. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 101, pl. 46, f. 2. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 7: pl. 306. 1928—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:102. 1938—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 2:48, pl. 1939—SINGER, Agaricales, 145. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 106, pl. 34, f. 3. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:74. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 57. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:203. 1957.

(原, 日. 菌. 目. 158. 1954—今関及土岐, 林. 試. 研. 報. 67:42. 1954—川村, 日. 菌. 図鑑, 3:312, f. 309. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 11, pl. 1, f. 2. 1957)

Agaricus rubescens PERS. Disp. Meth. Fung. 21. 1797; Syn. Meth. Fung. 366. 1801.

Agaricus erubescens FR. Syst. Myc. 1:32. 1821.

Agaricus purpurascens var. *erubescens* RABENH. Deut. Krypt. Fl. 1:568. 1844.

Limacium rubescens SCHROET. Pilze Schles. 1:531. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 213. 1900.

Limacium erubescens RICKEN, Blätterp. 10, pl. 4, f. 2. 1915.

Hygrophorus rubescens SACC. Fl. Ital. Crypt. Hymen. 342. 1915.

子実体は群生或は孤生; 傘は径 5—12cm, 丸山形, 開張し扁平となり, 中丘を有し, 遂に縁辺稍々反転す; 表面は膠性或は粘性, 内生繊維あり或は老時中盤に点状鱗片あり, 縁に近く帯白色, 中盤には汚赤色を流し或は斑を有し, 淡紅の色彩が屢々全傘に拡がる, 屢々縁に水滴を附す; 縁は初め内屈し, 微細毛あり, のち無毛; 肉は白色, 厚く, 軟く, 屢々傷によりて帯黄色となる, 臭味共に著しからず; 褶は直生にて垂生となる, 密或は稍々疎, 狭幅, 白色にて淡紅色となり, 半透明の観を呈し美なり, 速に汚褐赤色の斑点或はその色となる, 稜は平坦; 托実質は両側型にて菌糸拡散す; 茎は 5—15×1—2cm, 殆ど同幅にて, 多くは幾分尖る基端に向つて狭細, 中実, 表面は乾燥, 帯白色, 傘と同色或は斑点を有し, 僅か繊維あり, 頂部粉状; 胞子は楕円形, 平滑, 無色, 7—9.5×5—6μ; 胞子紋は白色; 可食。

所在及産地

針葉樹林地上—秋

北海道, 本州—欧. 北米. 阿. 亜(西比)

和名 オオサクラシメジタケ(大桜湿地茸)〔今井〕

トキイロタケ (鴇色茸)〔川村〕

Hygrophorus pudorinus (FR.) FR.

フキサクラシメジタケ

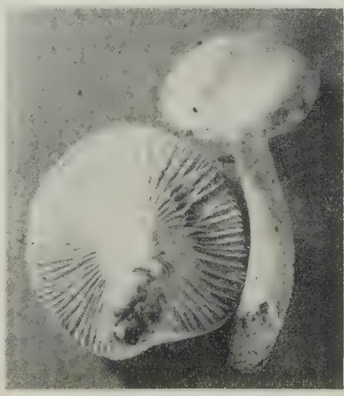
FRIES, Epicr. Myc. 322. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:126. 1863; Hymen. Eur. 407. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:186. 1872; Enchir. Fung. 49. 1886—GILLET, Champ. Fr. 181, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:194. 1876; Hattsv. 1:219. 1876; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 131. 1889—COOKE, Illus. Brit. Fungi, 6:pl. 911, (no. 877). 1888; Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 290. 1889—WINTER, Pilze, 1:569. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:391. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 343. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:356. 1893; Brit. Fungi, 174. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 258. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 33, pl. 29, f. 58. 1910—MURRILL, N. Am. Fl. 9:393. 1916—KAUFFMAN, Agar. Mich. 186. 1918—REA, Brit. Basid. 294. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 7:308. 1928—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 103. 1938—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 2: 36. 1939—SINGER, Agaricales, 146. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:75. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 57. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:203. 1957.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 12. 1957)

Agaricus pudorinus FR. Syst. Myc. 1:33. 1821.

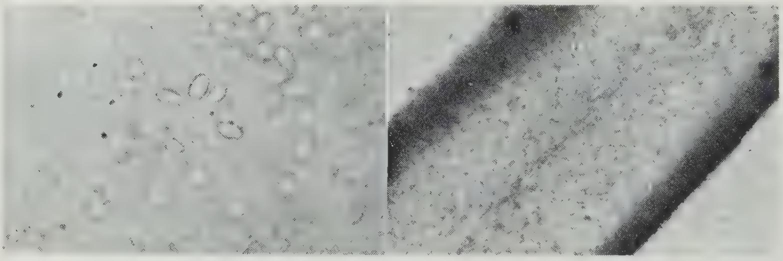
Agaricus eburneus var. *pudrinus* RABENH. Deut. Krypt. Fl. 1:568. 1844.

Limacium pudorinum P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1,1**:213. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1): 324, pl. 54M. 1912—RICKEN, Blätterp. 10, pl. 4, f. 3. 1915—LANGE, Fl. Agar. Dan. 5:13, pl. 163, f. D. 1940.



a

子実体は群生或は散生; 傘は5—10cm 丸山形, のち殆ど扁平に開張し, 鈍頭; 表面は湿時粘性, 鮮かなる帯赤肉色, 中盤は暗色, 無毛, 平坦; 縁は初め内捲し



c b

第25図 フキサクラシメジタケ Hygrophorus pudorinus
a．子実体 ×1/3 b．褶模断面の一部 ×200 c．胞子 ×500（大谷氏）

て白色の細綿毛あり；肉は白色或は外皮下特に肉色を帯ぶ，厚く，緻密，味温和，臭は松脂様にて寧ろ不良；褶は初め直状垂生，後類垂生，稍々疎，狭幅，厚く，時に分岐し，中間脈あり，白色或は淡肉色の色彩あるも赤点なし；托実質は両側型にて菌糸拡散す；茎は 5—10×1—2cm，同幅或は下方に狭細，頑強，乾燥，白色或は肉色，頂部に白色綿絮状粒あり，下方に向つて多少圧着せる繊維あり，湿時往々稍々粘性の触感を与う，中実；胞子は円筒状楕円形，平滑，無色，6—9×4—5μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地
針葉林或は湿淆林地上一秋
北海道，本州一欧．北米

和名 フキサクラシメジタケ（富貴櫻湿地茸）〔今井〕

Hygrophorus arbustivus FR.
コクリノカサタケ

FRIES, Epicr. Myc. 323. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:126. 1863; Hymen. Eur. 408. 1874—COOKE. Handb. Brit. Fungi, 1:196. 1871; Illus. Brit. Fungi, 6:pl. 896, f. a. (no. 879). 1888—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:186. 1872; Enchir. Fung. 49. 1886—GILLET. Champ. Fr. 182. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:220. 1879—WINTER, Pilze, 1:568. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:493. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 344. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:357. 1893; Brit. Fungi, 174. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 258. 1908—REA, Brit. Basid. 294. 1922—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:104. 1938—SINGER, Agaricales, 146. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:77. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 57. 1953—HEIM. Champ. Eur. 2:201, f. 164, A. 1957.
（原，日．菌．目．157. 1954）

Limacium arbustivum P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:213. 1900—MIGULA, Krypt Fl. 3, Pilze 2(1):323, pl. 54Q. 1912—RICKEN, Blätterp. 12. 1915.

子実体は群生或は叢生；傘は径 2—5cm，丸山形にて鈍頭或は中丘を有し，のち開張し，更に縁辺少しく反転するも中丘を存す；表面は湿時甚だ粘性，中盤栗褐色にて周縁淡色，幼時僅か暗色，中盤幾分絨毛状なり，縁に内生繊維を有す；肉は白色にて外皮下赤褐色を帯ぶ，臭なく，味良し；褶は直生にて垂下歯を有し，或は僅か垂生，稍々密，白色；茎は 5—10×0.4—1cm，同幅，白色，湿時少しく粘性，上部に白色綿絮粒を存す，中実；胞子は楕円形，平滑，無色，8—10×4—6μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地
林地一秋 北海道，本州一欧．阿

和名 コクリノカサタケ（小栗傘茸）〔今井〕

Hygrophorus agathosmus (FR.) FR.
ウスチャヌメリカサタケ

FRIES, Epicr. Myc. 325; Monogr. Hymen. Suec. 2:129. 1863; Hymen. Eur. 411. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:188. 1872; Enchir. Fung. 50. 1886—GILLET, Champ. Fr. 184, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:196. 1876; Hattsv. 1:222. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 132. 1889—COOKE, Illus. Brit. Fungi, 6:pl. 913, (no. 886). 1888; Brit. Fungi, ed. 2. 293. 1887—WINTER, Pilze, 1:566. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:397. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 348. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:361. 1893; Brit. Fungi, 176. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 259. 1908—REA, Brit. Basid. 297. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 7:319. 1928—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:105. 1938—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 2:53, pl. 22. 1939—SINGER, Agaricales, 147. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:79. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 59, f. 106. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:205, f. 167, c. 1957.
（原，日．菌．目．157. 1954）

Agaricus pustulatus PERS. Syn. Meth. Fung. 354. 1801. pr. p.

Agaricus agathosmus FR. Obs. Myc. 1:16. 1815.

Agaricus pustulatus var. *agathosmus* RABENH. Deut. Krypt. Fl. 1:567. 1844.

Limacium agathosmus SCHROET. Pilze Schles. 1:533. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL,

Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:212. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1) : 326, pl. 54N. 1912—RICKEN, Blätterp. 14, pl. 6, f. 1. 1915—LANGE, Agar. Denm. 5:14. 1923; Fl. Agar. Dan. 5:12, pl. 163, f. F. 1940.

子実体は群生或は散生；傘は径 4—10cm, 丸山形にて鈍頭，のち開張して扁平となりて広き低き中丘を存す；表面は無毛，膠性～粘性，鼠色或は鈍き灰色にて，中盤暗色，周縁少しく淡色；縁は初め内屈し，微細の毛を有し，遂に反転し，屢々波状となる；肉は柔軟，白色或は水潤状灰色，臭甚だ著しくして良く，味温和；褶は直状垂生或は垂生，白色，老時汚灰色，密～疎，中位に狭幅，寧ろ薄し；托実質は両側型にて菌糸拡散す；茎は 5—12×0.6—1.5cm, 同幅，基部の方僅か太し，乾燥或は湿潤なるも膠質ベールなし，初め全面粉状なるも，のち無毛となり，繊維線条あり，初め帯白色，後淡灰色，中実；胞子は楕円形，平滑，無色，7.5—10×4—6μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地

針葉樹林地—秋　　北海道—欧．北米．阿

和名 ウスチャヌメリカサタケ

（淡茶粘傘茸）〔今井〕

Hygrophorus camarophyllus (ALB. et SCHW. ex FR.) DUM., GRANDJ. et MAIRE

ヤギタケ

DUMÉE, GRANDJEAN & R. MAIRE, Bull. Soc. Myc. Fr. 28:292. 1912—REA, Brit. Basid. 298. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4: pl. 374. 1936; Agaricales, 2:80. 1952—SINGER, Agaricales, 147. 1949.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 55:445. 1941)

Agaricus caprinus SCOP. Fl. Carn. ed. 2, 2:438. 1772—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:566. 1844.

Agaricus elixus SOW. Col. Fig. Engl. Fungi, 2: pl. 172. 1799—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 460. 1801; Myc. Eur. 3:96. 1828.

Agaricus camarophyllus ALB. et SCHW. Consp. Fung. Lusat. 177. 1805—FRIES, Syst. Myc. 1:99. 1821.

Hygrophorus caprinus FR. Epicr. Mycol. 326. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:131. 1831; Hymen. Eur. 412. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:197. 1876—GILLET, Champ. Fr. 186. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 9:166. 1879; Enchir. Fung. 51. 1886—COOKE, Illus. Brit. Fungi, 6: pl. 889, (no. 889). 1888; Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 294. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:399. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 351. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1:530. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:344. 1893; Brit. Fungi, 169. 1911—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1):316, pl. 53J, f. 1-2. 1912—RICKEN, Blätterp. 18, pl. 7, f. 4. 1915—BRESADOLA, Icon. Myc. 7: pl. 324. 1928—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 2:55, pl. 23. 1939—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 56. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:211, f. 172, c. 1957.

（安田，植．雑．38:96. 1924—白井，日．菌．目．ed. 3. 168. 1927—広江，応用菌蕈学，1122. 1941—原，日．菌．目．158. 1954—川村，日．菌．図鑑，3:315, f. 312. 1954）

Camarophyllus caprinus KARST. Hattsv. 1:224. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 133. 1889.

Limacium caprinum KÜHNER (sec. SINGER)

子実体は群生；傘は径 4—10cm, 丸山形にて鈍頭或は僅かに中丘あり，のち扁平となり，時に多少凹下す；表面は湿時粘性にて速かに乾燥し，全面煤褐色，密着せる濃褐色の繊維が放射状に走り線条を認む，無毛，外皮剝げ易し；縁は初め綿毛或は粉末を有す；肉は白色，厚く，脆く，味温和，臭甚だ僅か存す；褶は垂生，疎，中位に広幅，帯白色にて，のち灰色を帯ぶ，中間脈あり；托実質は両側型にて菌糸拡散す；茎は 4—8×1—1.5cm, 乾燥，密着せる暗褐色の繊維縦走し，暗褐色或は傘面と同色，同幅或は下方に狭細し，上部に圧着絹糸或は微粉あり，基部は殆ど無毛；胞子は楕円形，平滑，無色，6—9×4—5μ；胞子紋は白色～淡クリーム色；可食。

所在及産地

針葉樹林地上—秋　　本州—欧．北米

和名 ヤギタケ（山羊茸）〔安田〕

クロオオギタケ（黒扇茸）〔川村〕

Hygrophorus calophyllus KARST.

ウスアカヒダタケ

KARSTEN, Hattsv. 1:224. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 132. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:399. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 350. 1915—BRESADOLA, Icon. Myc. 7: pl. 323. 1928—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 2:55, pl. 24. 1939—SINGER, Agaricales, 147. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:80. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 56. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:211. 1957.

（川村，日．菌．図鑑，3:316, f. 313. 1952）

Hygrophorus caprinus var. *calophyllus* QUÉLET, (Enchir. Fung. 51. 1886)

Hygrophorus camarophyllus var. *calophyllus* KONR. et MAUBL. Sel. Icon. Fung. 6:431. 1937.

Limacium calophyllum P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:213. 1900.

子実体は孤生; 傘は径 5—11 cm, 丸山形, 鈍頭或は低き中丘あり, のち開張して殆ど扁平となる; 表面は膠性～粘性, 無毛, 全面暗褐煤色～黒褐色, 或は周辺稍々淡色, 縁は内屈す; 肉は白色, 厚く, 外皮剝げ易し, 臭味共に良し; 褶は垂生, 稍々疎或は疎, 狭幅, 厚く, 美しき淡紅色, のち淡黄褐色となる, 屢々中間脈あり; 托実質は両側型にて菌糸拡散す; 茎は 6—15×1—1.5 cm, 同幅にて, 時に上部或は下部僅かに太く, 基端鈍尖, 表面乾燥, 鼠色の線条密存し, 全体黒鼠色, 頂部は穀粉状, 髄部充塞す; 胞子は楕円形, 平滑, 無色, 6—7×4—5 μ; 胞子紋は白色; 可食。

所在及産地

針葉樹林地—秋　　本州—欧. 北米

和名 ウスアカヒダタケ (薄赤襞茸)〔川村〕

Camarophyllus (FR.) KUMMER

オトメノカサタケ属

KUMMER, Führer Pilzk. 26, 117. 1871—KARSTEN, Hattsv. 1:xvii. 1879—SINGER, Agaricales, 147. 1949.

Agaricus trib. *Clitocybe* subtrib. *Camarophylli* FRIES, Syst. Myc. 1:98. 1921.

Hygrophorus trib. *Camarophyllus* FRIES, Epicr. Myc. 325. 1838.

科の性質に同じ; 傘は著しき鮮色を呈せずして, 鈍橙色～殆ど橙色, 往々汚鉛色或は白色, 粘性或は乾燥; 褶は直状類垂生～垂生, 疎生, 再三叉岐することなし; 托実質は殆ど交錯し, 或は少くとも中層を認め難き程不整なり, 径 7 μ 以下の菌糸より成る; 胞子は非糊性, 単核; 担子柄は老時黒化せず, 4 胞子或は 2 胞子を生ず; 稜嚢体, 擬嚢状体等欠如; 茎は傘の如く濃色或は淡色～白色; 被膜なし; 肉は空気に曝露せる時及び苛性加里にて処理せる時に赤変せず, 乳汁なし; 牧林地, 牧草地, 芝生, 圃場等に生じ, 稀に密林地上に生ずるも, 菌根を作らざるものの如し; 裸実; 北帯～亜熱帯, 多くは北温帯産, 約 12 種を知らる, 或種は食用とさる。

(本属名は Kamara〔希〕(円天井), phyllon〔希〕(葉) より出づ)

基準種　*C. pratensis* (PERS. ex FR.) KARST.

本邦既知種検索表

A. 褶は垂生。
  a. 褶は深く垂生; 胞子大形 (長さ 6 μ 以上)
    α. 傘は白色。
      I. 傘は粘性或は稍々粘性。
        1. 傘は径 1—3 cm; 胞子 7—8×4—5 μ; 混淆林地上。
          コオトメノカサタケ **C. niveus** (68)
        2. 傘は径 0.5—1.5 cm; 胞子 7.5—10×4—5 μ; 針葉腐木上。
          ヒメオトメノカサタケ **C. subniveus** (69)
      II. 傘は湿潤, のち乾燥, 径 3—6 cm; 胞子 9—12×5—7 μ。
          オトメノカサタケ **C. virgineus** (69)
    β. 傘は銹褐, 帯赤～赤銹色, 湿潤, のち乾燥, 径 2—7 cm; 胞子 6.5—9×4—5 μ。
          ハダイロガサタケ **C. pratensis** (70)
    γ. 傘は灰色或は帯褐灰色, 湿時やや粘性, 径 1—4.5 cm, 胞子 7—9×6—6.5 μ。
          ウバノカサタケ **C. lacmus** (71)
  b. 褶は僅か垂生, 淡肉色; 胞子小形; 傘は白色, 径 1 cm 内外。フタイロコガサタケ **C. microbicolor** (71)
B. 褶は彎生; 傘面乾燥。
  a. 胞子大形 (長さ 6 μ 以上)
    α. 傘は暗褐色, 径約 6 cm; 胞子 8—10×6—7.5 μ。　チャオトメノカサタケ **C. fuscovillosulus** (72)
    β. 傘は鶯色, 径 5—10 cm; 胞子 7—8×5—6 μ。
          キオトメノカサタケ **C. chrysoconos** (72)
  b. 胞子小形, 5—6.25×4—5 μ; 傘は灰褐色, 径 5—10 cm; 肉は傷時肉色に変ず。
          ヒメノカサタケ **C. carnescens** (72)

Camarophyllus niveus (SCOP. ex FR.) KARST.

コオトメノカサタケ

KARSTEN, Hattsv. 1:232. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 134. 1889—LANGE, Agar. Denm. 5: 19, f. 7. 1923; Fl. Agar. Dann. 5:19, pl. 164, f. F. 1940—SINGER, Agaricales, 148. 1949.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 13. 1957)

Agaricus niveus SCOP. Fl. Carn. ed. 2. 2:430. 1772.

Agaricus virgineus FR. Syst. Myc. 1:100. 1821. pr. p.

Agaricus virgineus b. *niveus* RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:566. 1844.

Hygrophorus niveus FR. Epicr. Myc. 327. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:133. 1863; Hymen. Eur. 414. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 199. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:197. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:199. 1871; Illus. Brit.

Fungi, 6: pl. 900, f. A, (no. 896). 1888—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:199. 1876—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:189. 1872; Enchir. Fung. 51. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5:403. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 354. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1:529. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2: 347. 1893; Brit. Fungi, 171. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 212. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 154. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 261. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1):316. 1912—RICKEN, Blätterp. 18, pl. 7, f. 3. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 191. 1918—REA, Brit. Basid. 300. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 7: pl. 329. 1928—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:107. 1938—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 5:19. 1942—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 107, pl. 34, f. 2. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:82. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 54, f. 105. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:214, f. 175, B. 1957.

Hydrocybe nivea MURR. N. Am. Fl. 9:377. 1916.

子実体は群生或は散生；傘は径 1—3cm，丸山形或は鐘形，のち開張し，扁平にて屢々凹下し或は中窩を存す；表面は生時粘性にて中盤に透明線条あり，透明的白色～純白色，無毛；肉は白色，薄く，柔靱，臭なく，味温和；褶は垂生，疎，寧ろ狭幅，薄く，白色，幾分脈あり；托実質は菌糸錯綜，沃度にて帯黄色となる；径は 2—6×0.2—0.5cm，同幅或は下方狭細，乾燥，白色，無毛，平滑或は幾分線条あり，中実，のち中空；胞子は楕円形，平滑，無色，非糊性，7—8×4—5μ；胞子紋は白色。

所在及産地

混淆林地—秋　　　北海道，本州—欧．北米．阿

和名 コオトメノカサタケ（小乙女傘茸）〔今井〕

Camarophyllus subniveus (IMAI)

ヒメオトメノカサタケ

Hygrophorus subniveus IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:108, pl. 3, f. 7. 1938.

子実体は群生或は孤生；傘は径 5—15mm，丸山形，のち開張し，僅か凹下す；表面は白色，無毛，僅か粘性，湿時吸水性にて線条あり；肉は白色，薄く，臭なく，味温和；褶は長く垂生，疎，薄し，白色；茎は 1—2×0.1—0.2cm，同幅，白色，絹糸様光沢あり；胞子は楕円形，有刺，無色，7.5—10×4—5μ；胞子紋は白色。

所在及産地

針葉樹腐木上—秋　　　北海道

和名 ヒメオトメノカサタケ（姫乙女傘茸）〔今井〕

Camarophyllus virgineus (WULF. ex FR.) KARST.

オトメノカサタケ

KARSTEN, Hattsv. 1:225. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 134. 1889—MURRILL, N. Am. Fl. 9:386. 1916—LANGE, Agar. Denm. 5:19. 1923; Fl. Agar. Dann. 5:19, pl. 164, f. c. 1940—SINGER, Agaricales, 148. 1949.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，13, f. 5; pl. 2, f. 5. 1957）

Agaricus virgineus WULF. in JACQ. Misc. Austr. 2:104. pl. 15, f. 1. 1781—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, pl. 32. 1797—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 456. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:100. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:566. 1844.

Agaricus ericeus BULL. Champ. Fr. pl. 188. 1791.

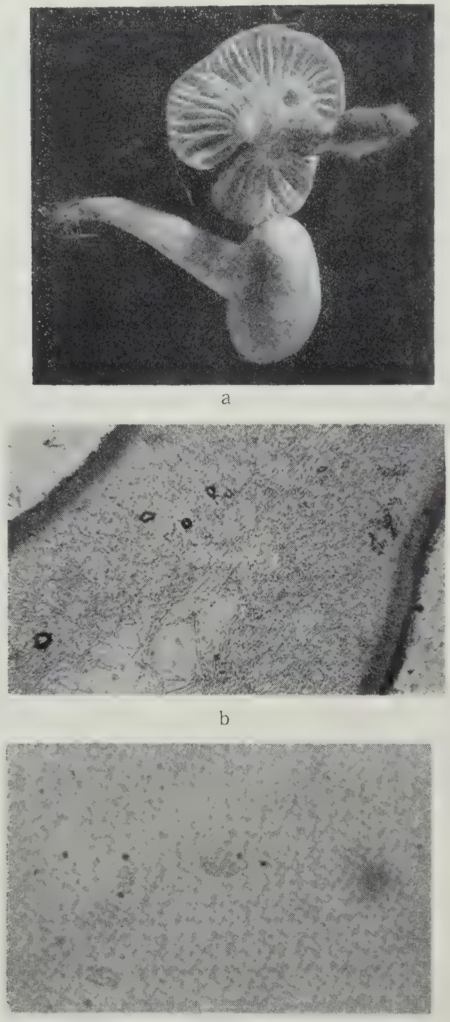
Hygrophorus virgineus FR. Epicr. Mycol. 327. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2: 133. 1863; Hymen. Eur. 413. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 199. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2: 196. 1869—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:199. 1871; Illus. Brit. Fungi, 6: pl. 892, (no. 894). 1888; Handb. Austr. Fungi, 74. 1892—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:189. 1872; Enchir. Fung. 51. 1886—GILLET, Champ. Fr. 187, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:199. 1876—WINTER, Pilze, 1:563. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 402. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 355. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:346. 1893; Brit. Fungi, 170, pl. 15, f. 4. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 154. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 261. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 33, pl. 29, f. 59. 1910—RICKEN, Blätterp. 18. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 191. 1918—REA, Brit. Basid. 300. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 7: pl. 328. 1928—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:106, pl. 3, f. 2. 1938—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 5:23. 1942—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 107, pl. 34, f. 1. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:82. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Cham. Super. 54. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:214, f. 174, A. 1957.

（今関及土岐，林．試．研．報．67:43. 1954）

Hygrophorus ericeus SCHROET. Pilze Schles. 1:529. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 212. 1900.

（安田，植．雑．25:441. 1911—白井，日．菌．目．ed. 2. 289. 1917; ed. 3. 168. 1927—広江，応用菌蕈学，1123. 1941—原，日．菌．目．158. 1954）

子実体は群生，叢生或は孤生；傘は径 3—6cm，初め丸山形にて通常僅か中丘あり，のち殆ど扁平と



a

b

c

第 26 図　オトメノカサタケ
Camarophyllus virgineus
a. 子実体 ×1/2　　b. 褶横断面の一部 ×200
c. 胞子 ×600　　　　　　　　（大谷氏）

なり，遂に僅か凹下す；表面は白色，初め湿潤，のち乾燥し屢々亀裂し，最後に幾分繊維状となり，中盤帯黄色となる；縁は初め内屈し，のち殆ど扁平となる，薄し；肉は白色，柔軟水潤状，味温和，臭なきか或は僅か良好；褶は垂生，疎，寧ろ厚く，白色，中間脈あり；茎は比較的短かく，2.5—6×0.5—1.2 cm，下方狭細，白色，平滑，無毛或は時に粉状，乾燥，初め中実，のち髄部充塞；胞子は楕円形，平滑，無色，9—12×5—7 μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地

草原，林地一秋

北海道，本州一欧．北南米．阿．濠

和名 オトメノカサタケ（乙女傘茸）〔今井〕
シロヤマタケ（白山茸）〔安田〕

Camarophyllus pratensis (PERS. ex FR.) KARST.

ハダイロガサタケ

KARSTEN, Hattsv. 1:225. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 134. 1889—LANGE, Agar. Denm. 5:18, f. 2. 1923; Fl. Agar. Dann. 5:17, pl. 165, f. F, F^1. 1940—SINGER, Agaricales, 148. 1949.
（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，13, f. 6; pl. 2, f. 6. 1957）

Agaricus fulvocus BOLT. Hist. Fung. Halif. 56. 1788.

Agaricus ficoides BULL. Champ. Fr. pl. 587, f. 1. 1792.

Agaricus miniatus SOW. Col. Fig. Engl. Fungi. 2: pl. 141. 1799.

Agaricus pratensis PERS. Syn. Meth. Fung. 304. 1801—FRIES, Syst. Mycol. 1:99. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:566. 1844.

Hygrophorus pratensis FR. Epicr. Myc. 326. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:132. 1863; Hymen. Eur. 413. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 199. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:196. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:199. 1871; Illus. Brit. Fungi, 6: pl. 917, (no. 892). 1888—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:189. 1872; Enchir. Fung. 51. 1886—GILLET, Champ. Fr. 188, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:198. 1876—SACCARDO, Syll. Fung. 5:401. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:345. 1893; Brit. Fungi, 170, pl. 15, f. 1. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 154. 1900—ATKINSON, Mushrooms, 113. 1903—MURRILL, Mycologia, 2:159, pl. 27, f. 1. 1910—RICKEN, Blätterp. 17, pl. 7, f. 2. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 190. 1918—REA, Brit. Basid. 299. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 104, pl. 47. 1927—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 5:24. 1942—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 107, pl. 33, f. 3. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:82. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 55. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2: 215, f. 176, A. 1957.
(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 53:395. 1939—本郷，植．分．地．14:53, f. 6. 1950—今関，原色きのこ，pl. 31（右）. 1942; 及土岐，林．試．研．報．67:42. 1954—原，日．菌．目．158. 1954）

Hygrophorus ficoides SCHROET. Pilze Schles. 1:529. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 212. 1900—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 353. 1915.

Hydrocybe pratensis MURR. Mycologia, 6:2.

1914.

Camarophyllum fulvosus MURR. N. Am. Fl. 9: 387. 1916.

子実体は孤生，群生或は叢生；傘は径 2—7(10)cm，鈍頭～丸山形にて速に多少開張し中丘あり，老時独楽形；表面は湿時無毛，速に乾燥し微細繊維状，屢々中盤に網目状或は不規則に罅裂す，幼時は寧ろ銹褐色或は帯赤色にて徐々に淡色となり赤銹色，更に



第 27 図　ハダイロガサタケ
Camarophyllus pratensis
a. b. 子実体 ×1/2　c. 胞子 ×600　（大谷氏）

淡鈍黄色等に褪色す；肉は帯白色或は淡黄褐色，臭味共に温和；褶は垂生，疎，厚く，狭～中位広幅，傘と同色或は淡色，通常中間脈あり；茎は3—7×0.6—1.2cm，殆ど同幅或は基部狭細，乾燥，無光沢，無毛，平坦，帯白色或は傘面と同色，髄部充塞；担子柄は 39—48×6.5μ，4 或は 2 胞子；胞子は楕円形～類卵形，平滑，無色，非糊性，6.5—9×4—5μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地

林間及草原地上—夏秋　北海道，本州—欧．北米

和名　ハダイロガサタケ（肌色傘茸）〔今関〕
　　　オトメノハナガサタケ（乙女花傘茸）〔今井〕

Camarophyllus lacmus (SCHUM. ex FR.) KARST.

ウバノカサタケ

KARSTEN, Hattsv. 1:229. 1879—LANGE, Fl. Agar. Dan. 5:18, pl. 165, f. B. 1940.

Agaricus Lacmum SCHUM. Fl. Saell. 2:333. 1803.

Hygrophorus lacmus FR. Epicr. Myc. 329. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:136. 1863; Hymen. Eur. 416. 1874—QUÉLET, Enchir. Fung. 52. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5:408. 1887; Fl. Ital. Crypt. 357. 1915—BRESADOLA, Icon. Myc. 7:pl. 337, 1. 1928—HEIM, Bull. Soc. Myc. Fr. 46:Atl. 40. 1930—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 108, pl. 32, f. 2. 1950—KONRAD et MAUBLANC, Agaricales, 2:83. 1952—HONGO, Bull. Fac. Lib. Arts Educ. Shiga Univ. 7:41, f. 1, a; f. 2, II. 1957—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 55. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2: 211, f. 172, B. 1957.

Hygrophorus subradiatus var. *lacmus* COOKE, Illus. Brit. Fungi, 6:pl. 935, b. (no. 902). 1888.

Hygrophorus Colemannianus RICK. Blätterp. 18, pl. 7, f. 5. 1915. (non BLOXAM)

子実体は群生；傘は径 1—4.5cm，丸山形，のち開張し，凸頭；表面湿時やや粘性，無毛，吸水性，帯褐灰色にて菫色の色彩を帯ぶ，縁の方淡色，湿時縁辺透明線条あり，乾けば不透明となり淡色；縁は幼時内屈す；肉は柔軟，薄く，傘に於ては帯灰色，茎に於ては帯白色，味温和，臭は微かに穀粉様；褶は垂生，弓形，やや疎～疎，強き連絡脈あり，厚く，幅 2—4mm，灰色；茎は 3—5×0.3—0.6cm，同幅或は下方狭細，屢々屈曲，円柱状或は圧辺され，上部帯白色或は淡灰色，下部屢々帯黄色，中実～充塞，基部白綿毛に蔽わる；胞子は類球状卵形～広楕円形，平滑，7—9×6—6.5μ（或は 6.5—7.5×5.5—6μ）；担子柄は 4 胞子，38—50×6.5—8.5μ；稜及褶側囊体なし。

所在及産地

針葉樹林内蘚地—秋冬　本州—欧

和名　ウバノカサタケ（乳母傘茸）〔本郷〕

Camarophyllus micro-bicolor (S. ITO et IMAI)

フタイロコガサタケ

Hygrophorus bicolor (non KARSTEN, 1884) S. ITO et IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16: 14. 1939.

子実体は群生或は孤生；傘は径約 1cm 或はそれ以上に及び，丸山形，のち開張す；表面は乾燥，乳白色或は帯白色，平坦或は僅か皺あり；肉は白色，厚し；褶は僅か垂生，稍々疎，厚く，淡肉桂色；茎は 1.5—2.5×0.1—0.15μ，同幅或は基部肥大，白色，頂部白粉状，下部稍々光沢あり；胞子は球形～卵形，平滑，無色，5—6μ；胞子紋は白色。

所 在 及 産 地

広葉樹林地一秋　　小笠原島

和 名　フタイロコガサタケ（二色小傘茸）〔今井〕

Camarophyllus fuscovillosulus (IMAI)

チャオトメノカサタケ

Hygrophorus fuscovillosulus IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 53:396. 1939.

（原，日．菌．目．158. 1954）

子実体は孤生；傘は径約 6cm，初め円錐形，のち開張し凹下し，稍々中丘あり；表面は乾燥，中盤部暗褐色，周縁淡色，綿毛状小鱗片或は絨毛状小鱗片を有す；縁は内捲し，線条なし；肉は灰色，傷時変色せず，臭味共に穀粉状；褶は彎生，稍々疎，厚く，帯灰色．便腹状にて前方狭細し，基部有皺；茎は約 10×1cm，殆ど同幅にて基部僅か太く，僅か仮根あり，煤色繊維線条あり，基部淡色，中実；胞子は広楕円形，平滑，無色，8—10×6—7.5μ；胞子紋は白色。

所 在 及 産 地

林地一秋　　北海道

和 名　チャオトメノカサタケ（茶乙女傘茸）〔今井〕

Camarophyllus chrysoconos (IMAI)

キオトメノカサタケ

Hygrophorus chrysoconos IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 53:396. 1939.

子実体は群生；傘は径 5—10cm，円錐形，のち開張し，鋭き中丘あり；表面は乾燥，鶯色～暗鶯色，周縁淡色，穀粉状小鱗片あり，線条なし；肉は白色，堅く，臭は穀粉状，味なし；褶は白色～灰色，彎生，稍々密；茎は 7—12×0.8—1.2cm，上方僅か狭細，褐色線条あり，頂部白色穀粉を有す；胞子は広楕円形～類卵形，平滑，無色，7—8×5—6μ；胞子紋は白色。

所 在 及 産 地

林地一秋　　北海道

和 名　キオトメノカサタケ（黄乙女傘茸）〔今井〕

Camarophyllus carnescens (IMAI)

ヒメノカサタケ

Hygrophorus carnescens IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:108, pl. 3, f. 3. 1938.

（原，日．菌．目．157. 1954）

子実体は群生；傘は径 5—10cm，丸山形，のち開張し，鈍頭；表面は乾燥，灰褐色，粉状，遂に屢々裂け，縁は僅か淡色にて内屈す；肉は厚く，緻密，初め白色，傷時淡紅色となるも黒色とならず，臭は穀粉様，味温和；褶は彎生，帯白色～帯黄色，傷時淡紅色を帯び，疎，広幅；茎は 4—8×1—2cm，両端狭細，帯白色，繊維線条あり，傷時肉色となる．中実；胞子は広楕円形或は類倒卵形，平滑，無色．5—6.25×4—5μ；胞子紋は白色。

所 在 及 産 地

林地一秋　　北海道

和 名　ヒメノカサタケ（姫傘茸）〔今井〕

Hygrocybe (FR.) KUMMER

アカヤマタケ属

KUMMER, Führer Pilzk, 26, 111. 1871—KARSTEN, Hattsv. 1:xvii, 233. 1879. (err. typ. *Hydrocybe*)—FAYOD, Ann. Sci. Nat. Bot. VII, 9:307. 1889—SINGER, Agaricales, 150. 1949.

Hydrophorus BATTARRA, Fung. Hist. 51. 1755—EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5:431. 1909.

Agaricus trib. *Clitocybe* subtrib. *Hygrocybi*, FRIES, Syst. Myc. 1:101. 1821.

Hygrophorus trib. *Hygrocybe* FRIES, Epicr. Myc. 329. 1838.

Godfrinia R. MAIRE, Bull. Soc. Myc. Fr. 18, Suppl. :116. 1912.

科の性質に同じ；傘は粘性或は乾燥，屢々鮮赤色或は鮮黄色，屢々前色は後色に褪め，或は火赤橙色，稀に生菫色，緑，バラ色，酒赤色等を混和す，又は暗色を有し，或は色素なし；後者の暗色或は色素なき場合にては褶は垂生ならざるも，鮮色種にては垂生，狭生～稍々垂生なるか或は狭生～直状彎生なり；胞子紋は純白色；胞子は非糊性にて黒変せず，単核或は更に稀に双核；担子柄は 4 或は 2 胞子；嚢状体は往々存在し，糸状；擬嚢状体なし；担子柄は老時黒化せず；托実質は類不整型にて多くの菌糸は幅 7μ 以上，或は明かに整型；茎は内生の縦線条を有し，或は硝子状平滑，乾燥或は膠性；肉は味温和，稀に苦味；乳汁なし；野外草原，稀に林中の壌土，砂地，湿地上に生じ，菌根を作らざるが如し；多分裸実；殆ど汎布，約 22 種を知らる，食用菌あるも疑はしきものもあり。

（本属名は hygros〔希〕（湿潤），kybos〔希〕（六面体，骰子，頭）より出づ）

基準種　*H. conica* (SCOP. ex FR.) KARST.

本 邦 既 知 種 検 索 表

A．傘茎共に粘性ならず。

a．傘は鋭円錐形～円錐状鐘形。

α．子実体は傷時或は老時黒色に変ず；傘色は変化するも大体橙黄色～帯赤橙黄色；胞子 8

—12×5.5—7.5μ。
アカヤマタケ ***H. conica***[1] (74)
β. 子実体は黒化せず。
Ⅰ. 傘は緋色；茎は帯白色；胞子16—20×7.5—10μ。オオミノアカヤマタケ
H. macrospora (75)
Ⅱ. 傘はレモン黄色，頂部橙色；胞子 11—14×7—10.5μ。 トガリツキミタケ
H. acutoconica f. ***japonica*** (75)
Ⅲ. 傘は小豆色にて鮮かなる淡桃色；胞子 6.5—8×4—5μ。
アケボノタケ ***H. amoena***[1] (75)
b. 傘は鈍円錐形，丸山形，或は中盤凹下す。
α. 傘は小鱗片を有す。
Ⅰ. 傘は緋色，朱色にて黄或は橙黄色となる。
1. 胞子小形。
甲. 傘径 1—2cm，往々漏斗形；胞子 7—9.5×4.5—5μ；褶は深く垂生。
ベニヒガサタケ ***H. cantharellus*** (76)
乙. 傘は径 2—4cm，漏斗形とならず；胞子 6—9×4—5μ；褶は直生～広狭生。
アカヌマベニタケ ***H. miniata*** (77)
丙. 傘径 0.4—0.8cm；胞子 7—8×5—6μ；褶は僅か垂生或は直生。
ムニンヒメベニタケ
H. parvicoccinea (77)
2. 胞子大形。
甲. 傘は径 1—2.5cm；胞子 11—19×7.5—10μ。オオアカヌマベニタケ
H. pseudococcinea (78)
乙. 傘は 0.7—2cm；洋紅色～緋色，鱗被は初めより灰色～褐色；胞子 9.5—11.5×6—7μ。
ザラツキキヤマタケ
H. turunda (78)
* 色は緋色；鱗被は老時暗色とならぬか或は変色す；胞子 10—14×6—8.5μ；水蘚上生。
ミズゴケノハナタケ
f. ***sphagnophila*** (78)
* 色は橙～黄色；鱗被は褐色とならず；胞子は 10—15×6—7.5μ 或は 12—16.5×6—7.5μ；水蘚上生。
キミズゴケノハナタケ
f. ***macrospora*** (79)
* 傘径 0.3—1cm；赤～緋色；鱗被は殆ど褐色化せず；胞子 8—11.5×5—7μ，砂地上生。
ヒメアカヌマベニタケ f. ***minor*** (79)
Ⅱ. 傘は帯褐灰色にて灰色となる，傷時速に帯赤色に変ず。
オオヒメノカサタケ ***H. ovina*** (79)
β. 傘は褪色せる時は無毛。
Ⅰ. 傘は橙色，黄金色或は卵黄色。
1. 褶は垂生；茎長約 4cm；胞子 10—12.5×8—10μ。 コキヤマタケ
H. subvitterina (79)
2. 褶は直生～やや垂生；茎長 1—4cm；胞子4—6×4—5μ。
ヒメダイダイタケ ***H. aurantia*** (80)
3. 褶は狭生或は直状類垂生；茎長 4.5—6cm；胞子 6.5—8.5×4.5—6μ。
ヌマヤマタケ ***H. stagnina*** (80)
4. 褶は殆ど離生；茎長約 6cm。
ヒメキヤマタケ
H. obrussea f. ***pusilla*** (80)
Ⅱ. 傘は血赤色；茎長 3—7cm，外皮発達不良；傘径 2—5cm。
ベニヤマタケ ***H. coccinea***[1] (80)
Ⅲ. 傘は鮮紅色～帯黄橙色；茎長 3—5cm；褶は殆ど 3 角形；傘径 1.5—3cm。
コベニヤマタケ ***H. imazekii*** (81)
B. 傘は粘性；茎は乾燥或は湿潤なるも粘性ならず。
a. 傘は鋭円錐形或は著しき円錐形中丘あり。
α. 子実体は黒変す；傘は帯赤橙黄色等。
アカヤマタケ ***H. conica***[2] (74)
β. 子実体は黒変せず；傘は鮮やかなる桃色。
アケボノタケ ***H. amoena***[2] (75)
b. 傘は扁平，丸山形，鈍頭或は鉢頭円錐形。
α. 傘は黄色～鮮橙黄色：褶は狭生。
アキヤマタケ ***H. flavescens*** (82)
β. 傘は血赤色；褶は狭生～直生。
Ⅰ. 傘は確実に認めらるる膠質外皮あり。
ヒイロガサタケ ***H. punicea*** (82)
Ⅱ. 傘は明かなる外皮なし。
ベニヤマタケ ***H. coccinea***[2] (80)
C. 傘茎共に粘性。
a. 傘は暗緑～若草色，速に帯黄～帯赤色等に変ず；茎の上部緑色。

ワカクサタケ ***H. psittacina*** (83)

b．傘は混合色にて変化し，褐，黄，ピンク，オリーブ，菫色等を混ず，乾時ピンク色を帯ぶ。

ナナイロヌメリタケ ***H. laeta*** (84)

c．傘色は鮮色にて単色。

α. 傘は黄色系。

Ⅰ．傘は橙黄色。

1．褶は直生～稍々垂生；傘径 1—4 cm；胞子 6—8×4—5 μ。

キヤマタケ ***H. ceracea*** (85)

2．褶は彎生；傘径 1—2.5 cm；胞子 7.5—10×5—6 μ。ムニンキヤマタケ

H. miniatostriata (85)

Ⅱ．傘は硫黄色～黄金色；褶は狭生，のち彎生；傘径 2—5 cm；胞子 6—8×4—5 μ。

ツキミタケ ***H. chlorophana*** (85)

β. 傘は緋色にて黄色となる；褶は狭生～直生，屢々僅か垂生。

Ⅰ．傘径 1—4.5 cm。

ミイノベニヤマタケ ***H. marchii*** (86)

Ⅱ．傘径 0.5—1 cm。

ヌメリアカヌマベニタケ

H. minutula (86)

Hygrocybe conica (SCOP. ex FR.) KARST.

アカヤマタケ

KARSTEN, Hattsv. 1:236. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 137. 1889—MURRILL, N. Am. Fl. 9:379. 1916—LANGE, Agar. Denm. 5:24, f. 6. 1923; Fl. Agar. Dan. 5:24, pl. 167, f. D. 1940—SINGER, Agaricales, 153. 1949.

(今関及本郷，原色日．菌．図鑑，16, f. 18; pl. 3, f. 18. 1957)

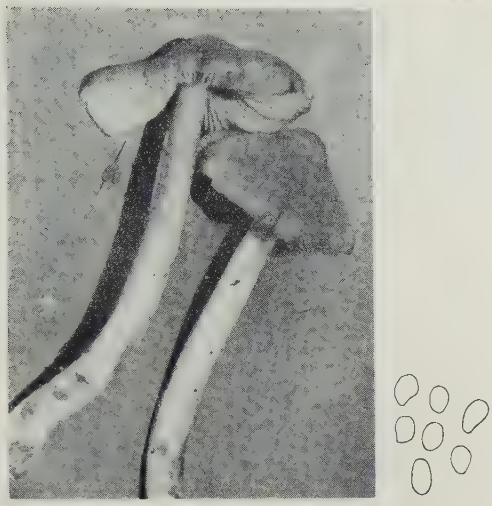
Agaricus conicus SCOP. Fl. Carn. 2, 2:443. 1772—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 335. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:103. 1821—RABENHORST. Deut. Krypt. Fl. 1:564. 1844.

Hygrophorus conicus FR. Epicr. Myc. 331. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:142. 1863; Hymen. Eur. 419. 1874—BERKELEY, Outl Brit. Fung. 202. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2: 198. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:203. 1871; Illus. Brit. Fungi, 6:pl. 908, (no. 915). 1888; Handb. Austr. Fungi, 76. 1892—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:192. 1872; Enchir. Fung. 53. 1886—GILLET, Champ. Fr. 192, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:203. 1876—WINTER, Pilze, 1:559. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 418. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 366. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:339. 1893; Brit. Fungi, 168, pl. 15, f. 5. 1911—SCHROETER, Pilze Schles. 1:526. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:211, f. 109, F. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 154. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 114. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 265. 1908—MURRILL, Mycologia, 2:162, pl. 27, f. 8. 1910—ROLLAND, Atl. Champ. 33, pl. 28, f. 57. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1): 310. 1912—RICKEN, Blätterp. 21, pl. 8, f. 4. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 200. 1918—REA, Brit. Basid. 307. 1922—GÜSSOW & ODELL. Mushr. Toadst. 101, pl. 46, f. 1. 1927—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:112. 1938—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 5:50, pl. 6–7. 1842—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 111, pl. 35, f. 4. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:85. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 50. f. 45. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:208, pl. 16, f. 4. 1957.

(P. HENNINGS, Hedwigia, 39, Beibl. 156. 1900—松村，植．名鑑，1:148. 1904—白井，日．菌．目．43. 1905; ed. 2. 287. 1917; ed. 3. 168. 1927—KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 4, f. 18–19. 1912; 日．菌．図説，n. 41. 1929; 日．菌．図鑑，3:309, f. 306. 1954—梅村，富士．植．志．367. 1923—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori. Soc. Agr. Sci. 3: 113. 1931—松浦，茸類辞典，81, f. 88. 1933: 応用菌蕈学，f. 748. 1941—今関，原色きのこ，pl. 30 (左). 1942; 及土岐，林．試．研．報．67:42. 1954—原，日．菌．目．158. 1954)

Godfrinia conica R. MAIRE, Rech. Cyt. Tax. Basid. 117. 1902.

子実体は群生或は孤生；傘は径 3—7 cm，鋭或は鈍円錐形，往々丸山形にて円錐形中丘を有す，充分開張することなし；表面は湿時僅か粘性，速に乾燥，無毛或は老時幾分線を生じ，往々外皮破れて繊維毛を作る，色は変化性に富み，通常中盤及びその周囲は帯赤或は帯緋の橙黄色を呈し，縁辺淡橙色，屢々明かなるオリーブの色彩を帯ぶ，稀に永く鮮黄色を保有し，老時徐々に帯オリーブ灰～黒色となる，傷時速に黒色に変ず：縁は屢々裂け或は裂片となりて反転す；肉は傘面と同色にて，同様に黒変す，薄く，甚だ脆し，臭味共に著しからず；褶は殆ど離生，密～稍々疎，広幅にて便腹状，薄く，初め殆ど白色，帯灰オリーブ，淡黄橙或はオリーブ黄色，傷時及老時黒変す，稜は波状～鋸歯状；茎は 6—11×0.5—1 cm，同幅，湿潤或は乾燥，粘性ならず，甚だ脆く，裂け易し，無毛或は圧着せる繊維あり，屢々縦線条ありて捩曲す，基部類白色，他は暗赤色，橙色，黄色，或は汚オリーブ黄色，老時及傷時黒変す，中



第28図 アカヤマタケ Hygrocybe conica
a. 子実体 ×1/2 b. 胞子 ×500 （大谷氏）

空；担子柄 34—39×9—11 μ, 1, 2, 3 或は 4 胞子；胞子は類楕円形，平滑，無色，非糊性，8—12×5.5—7.5 μ；胞子紋は白色；褶側及稜嚢体なし；托実質は整型，大形の乳汁管を有す；外皮は膠質菌糸の薄き貧弱の層より成る；可食。

所在及産地

林地—夏秋

北海道，本州，九州—欧．北米．濠．亜（小亜）

和名 アカヤマタケ（赤山茸）〔白井〕

Hygrocybe macrospora (S. ITO et IMAI)
オオミノアカヤマタケ

Hygrophorus macrosporus S. ITO et IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:14. 1939.

子実体は孤生或は稍々群生；傘は径約 4 cm，円錐形，のち開張す；表面は乾燥或は稍々粘性，中盤緋色或は淡緋色，繊維状小鱗片或は粗毛を有し，周縁は淡色にて繊維あるか或は裸出す；肉は橙黄色にて外皮下緋色；褶は彎入或は離生，白色，稜は黄色，疎，広幅，厚し；茎は 4—6×0.5—0.7 cm，同幅，白色，のち帯黄色，頂部粉状，撓曲性，中空；胞子は楕円形～円壔形，平滑，無色，16—20×7.5—10 μ；胞子紋は白色。

所在及産地

林地—秋 小笠原島

和名 オオミノアカヤマタケ（大実赤山茸）〔今井〕

Hygrocybe acutoconica (CLEM.) SING. f. japonica HONGO
トガリツキミタケ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 31:145, f. 1, c-d. 1956. （今関及本郷，原色日．菌．図鑑，p. 16, f. 19; pl. 3, f. 19. 1957）

Hygrophorus acutoconicus f. *japonicus* HONGO, l. c. 145. 1956.

原種と異り胞子広倒卵形，大形，11—13.5(14)×7—9.5(10.5) μ なり；子実体は群生；傘は径 3—4 cm，幼時類鋭頭円錐形，速に鐘状となり，遂に開張して円錐形の中丘を存す；表面は無毛，湿時粘性，レモン黄色，頂部橙色，縁辺無線条或は微に線条あり，黒変せず；肉はむしろ脆く，薄く，淡黄色，黒変せず，無味無臭；褶は殆ど離生，淡黄色，やや疎，幅 3—4 mm 或はより以上，むしろ薄く，やや便腹状，中間脈あり，稜は全縁或は僅か崩る；茎は 4—5.5×0.35—0.6 cm（中央部），多少上方狭細，円柱状或は圧辺され，幾分繊維線条あり，屢々捩曲し，レモン黄色，基部白色，充塞～中空；胞子は広卵形，平滑，無色，非糊性，11—13.5(14)×7—9.5(10.5) μ；担子柄は 33—39×7.5—11 μ, 2 胞子；褶側及稜嚢体なし。

所在及産地

林地—秋 本州

和名 トガリツキミタケ（尖月見茸）〔本郷〕

Hygrocybe amoena (LASCH) RICKEN
アケボノタケ

in SINGER, Agaricales, 153. 1949. （今関及本郷，原色日．菌．図鑑，16, f. 17; pl. 3, f. 17. 1957）

Agaricus amoenus LASCH, Linnaea, 3:390. 1828.

Hygrophorus calyptraeformis BERK. et BR. Outl. Brit. Fung. 202. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:204. 1871; Illus. Brit. Fungi, 6: pl. 894, (no. 916), pl. 923, (no. 917). 1888—FRIES, Hymen. Eur. 420. 1874—WINTER, Pilze, 1:559. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:419. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:340. 1893; Brit. Fungi, 168. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 265. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1):308, pl. 53 E, f. 1-3. 1912—REA, Brit. Basid. 308. 1922—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 112, pl. 32, f. 1. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:87. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 50. 1953.

(KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 5, f. 19-21.

1913; 日. 菌. 図説, n. 34. 1929; 日. 菌. 図鑑, 3: 311, f. 308. 1954—白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 237. 1917; ed. 3. 168. 1927—原, 日. 菌. 目. 157. 1954)

Hygrophorus amoenus QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:192. 1872; Enchir. Fung. 53. 1886—GILLET, Champ. Fr. 191, c. ic. 1878—RICKEN, Blätterp. 22. 1915—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4: pl. 385. 1937—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 5:47, pl. 10. 1942—HEIM, Champ. Eur. 2:208. 1957.

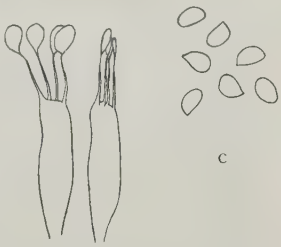
(本郷, 滋大論集, 1:93. 1952)

Hygrocybe calyptraeformis FAYOD, Ann. Sci. Nat. VII, 9: 309. 1889.

子実体は散生或は群生; 傘は径 3—8 cm, 鋭円錐形～鋭凸頭, 開張するも著しき円錐形中丘を残し, 縁は湿時微かなる小線条あり, 老時開張し, 更に反転して裂片となる; 表面は湿時僅か粘性, 速に乾燥, 稍々内生繊維を表わす, 小豆色～帯赤栗褐色にて桃赤色或は淡菫色の色彩を帯び, のち甚だ鮮かなる淡桃色となる, 中盤は時に類白色; 肉は薄く或は中位に厚く, 淡桃色, 臭味共に著しからず, 褶は上昇着生にて狭生となる, 密～稍々疎, 狭幅なるも幾分便腹状, 時に中間脈あり, 淡き鮮桃色, 稜は波状にて, 往々微細の鬚毛あり; 茎は 6—10×0.6—1 cm, 同幅, 甚だ脆く, 裂け易く, 無毛, 滑かにて粘性ならず, 屢々縦線条を有し或は捩曲線あり, 円柱形或は稀に圧辺, 類白色にて肉色の色彩あり, 時に幼時淡菫色の色彩を帯ぶ; 担子柄は 36—52×7—9 μ, 小柄 9 μ に及ぶ, 4, 稀に 2 胞子を生ず; 胞子は広楕円形, 平滑, 非糊性, 無色, 6.5—8×4—5 μ; 胞子紋は白色; 褶側及稜嚢体は同形, 散生, 85—90×18—23 μ, 棍棒形, 円筒形或は便腹紡錘形, 約 20 μ 抽出す, 薄膜, 無色, 単一或は稀に先端に近く分岐す; 托実質は整形～類不整型; 外皮は甚だ薄く, 分化度低し; 可食。



a



b c

第 29 図 アケボノタケ
Hygrocybe amoena
a. 子実体 ×1/2
b. 担子柄
c. 胞子 ×500 (大谷氏)

所在及産地

森林内, 牧野, 竹林内, 地上—夏秋

本州, 九州—欧. 北米

和名 アケボノタケ (曙茸) 〔川村〕

Hygrocybe cantharellus (SCHW.) LANGE
ベニヒガサタケ

LANGE, Agar. Denm. 5: pl. 1, f. K. 1923; Fl. Agar. Dan. 5:28, pl. 167, f. B. 1940—SINGER, Agaricales, 152. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:89. 1952—HEIM, Champ. Eur. 2: 211, f. 171, c. 1957.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 14, pl. 2, f. 9. 1957)

Agaricus Cantharellus SCHW. Schr. Nat. Ges. Leipzig, 1:88. 1822. (non LINNÉ)

Hygrophorus Cantharellus FR. Epicr. Myc. 329. 1838—PECK, Rep. N. Y. St. Cab. 23:114. 1872—SACCARDO, Syll. Fung. 5:414. 1887—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 5:30. 1942—MATSUDA & HONGO, Jour. Jap. Bot. 30:150, f. 2, A. 1955.

Camarophyllus Cantharellus MURR. Mycologia, 3:196. 1911; N. Am. Fl. 9:388. 1916.

Hygrophorus miniatus var. *Cantharellus* KAUFFM. Agar. Mich. 195. 1918.

子実体は孤生或は群生; 傘は径 1—2 cm, 或はそれ以上に及び, 幼時丸山形にて中央扁平, のち広山形となりて中窩を生じ或は往々中盤圧低されず, 又往々縁は拡がりて遂に広き漏斗形となる; 表面は乾燥, 初め絹状, のち微細の鱗被を特に中盤の周囲及び圧低部に生ず, 色は変化し, 朱色, 赤橙色或は黄黄土色等にて, 幼時鮮色, 老時淡色となり, 鮮赤色は徐々に黄色となる, 縁は海扇貝状或は波状; 肉は薄く, 帯赤橙色或は黄色, 味及臭温和; 褶は通常深く垂生, 橙色～黄色にて通常傘面より淡色, やや疎～疎, 広幅, 稜は平坦; 茎は 3—4×0.2—0.3 cm, 或は長さ更に長く, 同幅或は上方僅か太く, 円柱状或はやや圧辺され, 無毛, 乾燥, 傘面と同色, 基部帯白色或は淡黄色, 脆く, 充塞或は中空; 胞子は楕円形, 平滑, 非糊性, 7—9.5×4.5—5 μ; 稜及褶側嚢体なし。

所在及産地

松林の内外砂地上—夏秋 本州—欧. 北米

和名 ベニヒガサタケ (紅日傘茸) 〔本郷〕

Hygrocybe miniata (SCOP. ex FR.) KARST.
アカヌマベニタケ

KARSTEN, Hattsv. 1:234. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 137. 1889—LANGE, Agar. Denm. 5:27. 1923; Fl. Agar. Dan. 5:27, pl. 166, f. F. 1940—SINGER, Agaricales, 152. 1949.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 14, f. 10; pl. 2, f. 2. 1957)

Agaricus flammans SCOP. Fl. Carn. 2, 2:443. 1772.

Agaricus miniatus FR. Syst. Myc. 1:105. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:564. 1844.

Hygrophorus miniatus FR. Epicr. Myc. 330. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:139. 1863; Hymen. Eur. 418. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 201. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:198. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:202. 1871; Illus. Brit. Fungi, 6: pl. 921, f. A, (no. 910). 1888; Handb. Austr. Fungi, 76. 1892—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:191, pl. 10, f. 2. 1872; Enchir. Fung. 53. 1886—GILLET, Champ. Fr. 194, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:202. 1876—WINTER, Pilze, 1:560. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:413. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:336. 1893; Brit. Fungi, 165. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 154. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 264. 1908—MURRILL, Mycologia, 2:163, pl. 27, f. 9. 1910—RICKEN, Blätterp. 24, pl. 8, f. 9. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 195. 1918—REA, Brit. Basid. 305. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 7: pl. 337, f. 2. 1928—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:111, 1938—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 5:28. 1942 (var. *typicus*)—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 110, pl. 36, f. 1. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2: 88. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 52. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2: 210. 1957.

(P. HENNINGS, Hedwigia, 39, Beibl. 156. 1900—松村, 植. 名鑑, 1:148. 1904—白井, 日. 菌. 目. 43. 1905; ed. 2. 287. 1917; ed. 3. 168. 1927—KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi. pl. 1, f. 27–9. 1912; 日. 菌. 図説, n. 42. 1929; 日. 菌. 図鑑, 3:308, f. 305. 1954—松浦, 茸類辞典, 81, f. 89. 1933—小林, 日. 隠. 植. 図. 501, pl. 241, f. 4–5. 1939—原, 日. 菌. 目. 158. 1954—今関及土岐, 林. 試. 研. 報. 67:42. 1954)

Hygrophorus flammans SCHROET. Pilze Schles. 1:528. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:211. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1):313. 1912.

(安田, 植. 雑. 37:207. 1923—広江, 応用菌蕈学, 1124, f. 748(右). 1941—原, 日. 菌. 目. 158. 1954)

Hydrocybe flammea MURR. N. Am. Fl. 9:381. 1916.



a　　　b

第30図　アカヌマベニタケ Hygrocybe miniata
a. 子実体 ×2/3　b. 胞子 ×700 (大谷氏)

子実体は群生或は稍々叢生；傘は径 2—4 cm, 幼時内屈せる縁を有し，丸山形，老時その儘或は開張し扁平となり，中盤凹下し或は僅か中窩を生ず；表面は湿時鮮緋色にて無毛に見ゆ，殆ど吸水性，のち橙色或は一様に黄色に変じて微細繊維状小鱗片を生ず，湿時透明線条なく，或は時に縁辺に甚だ僅かの透明線条あり，老時及乾時僅か割る；肉は薄く，脆く，蠟質，傘面と同色或は淡色，傷により著しき変色せず，臭著しからず，味温和或は少しく土臭し；褶は鈍く直生～広き狭生，密～稍々疎，便腹状，厚く，傘面と同色なるも速に橙色，或は黄色に褪色す；茎は 3—5×0.3—0.4 cm，同幅，傘と同色にて徐々に褪色，無毛或は老時微かに繊維毛あり，髄部黄色，皮部橙色，中実，のち中空となる；胞子は楕円形，平滑，非糊性，無色，6—9×4—5 μ；胞子紋は白色；褶側及稜嚢体なし；托実質は類整型；可食。

所在及産地

林内腐蝕土上，草地，沼地—夏秋

北海道，本州—欧．北米．濠．亜(印)

和名　アカヌマベニタケ（赤沼紅茸）〔白井〕

Hygrocybe parvicoccinea (S. ITO et IMAI)
ムニンヒメベニタケ

Hygrophorus parvicoccineus S. ITO et IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:14. 1939 (non HONGO, Bull. Fac. Lib. Arts Educ. Shiga Univ. 2:48, f. 4. 1953)

子実体は群生；傘は径 4—8 mm，丸山形～円錐形，のち開張す；表面は乾燥，汚洋紅色或は洋紅色，

縁は繊維を有し，中盤繊維状小鱗片を有す；肉は薄く，橙黄色，外皮部洋紅色；褶は僅か垂生或は直生，稍々疎，厚く，紅色，稜は黄色；茎は約 1×0.2cm，同幅，上部傘と同色，下部橙色，頂部に橙色粉を被むる；胞子は広楕円形，平滑，無色，7—8×5—6 μ；胞子紋は白色。

所在及産地

林地—秋　　小笠原島

和名 ムニンヒメベニタケ（無人姫紅茸）〔今井〕

Hygrocybe pseudococcinea HONGO
オオアカヌマベニタケ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 30:73, f. 1, A–C. 1955. (ut *Hygrophorus pseudococcineus*)

子実体は群生し殆ど叢生；傘は径 1—2.5cm，或はそれ以上に及び，丸山形～広丸山形，のち開張して屢々中央僅か圧低，縁は往々不正波状をなす；表面はやや吸水性，全面或は少くとも圧低部に微細なる密綿絮を有す，のち幾分鱗被となる，湿時鮮緋色を呈し，乾時バーミリオン～橙色，殆ど線条なし；肉は薄く，柔軟，黄色にて皮下帯赤色，味及臭なし；褶は垂生（幼時弧状），黄橙色～クリーム黄色，屢々後部帯白色，疎，幅 2—3mm，厚く，稜は平坦；茎は 2—5×0.3—0.6cm，同幅或は基部僅か太く，傘面と同色，下方帯黄色，屢々圧辺され，やや線条あり，中空；胞子は広楕円形，平滑，非糊性，11—19×7.5—10 μ；胞子紋は白色；担子柄は 46—63×11—14 μ，4 胞子；稜囊体及褶側囊体なし；菌絆あり。

所在及産地

混淆林地上—夏　　本州

和名 オオアカヌマベニタケ（大赤沼紅茸）〔本郷〕

Hygrocybe turunda (FR.) KARST.
ザラツキキヤマタケ

KARSTEN, Hattsv. 1:235. 1879—LANGE, Agar. Denm. 5:27. 1923; Fl. Agar. Dan. 5:27, pl. 168, f. H. 1940—SINGER, Agaricales, 152. 1949.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，18, f. 8; pl. 2, f. 8. 1957）

Agaricus turundus FR. Syst. Myc. 1:106. 1821.

Agaricus miniatus b. *turundus* RABENH. Deut. Krypt. Fl. 1:565. 1844.

Hygrophorus turundus FR. Epicr. Myc. 330. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:139. 1863; Hymen. Eur. 418. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:191. 1872; Enchir. Fung. 53. 1886—GILLET, Champ. Fr. 191. 1874—COOKE, Illus. Brit. Fungi, 6:pl. 921, f. B, (no. 910). 1888; Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 301. 1889—WINTER, Pilze, 1:560. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:413. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 361. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:336. 1893; Brit. Fungi, 167. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:211. 1900—RICKEN, Blätterp. 25. 1915—REA, Brit. Basid. 305. 1922—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 5:31. 1942—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:91. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 52, f. 100. 1953—HONGO, Bull. Fac. Lib. Arts Educ. Shiga Univ. 6:31, f. 1, A. 1957—HEIM, Champ. Eur. 2:211, f. 171, A. 1957.

(Imai, Bot. Mag. Tokyo, 55:448. 1941—今関及土岐，林．試．研．報．67:43. 1954)

子実体は散生～群生；傘は径 7—20mm，或はそれ以上，丸山形～扁平，或は中盤幾分圧低さる，縁は永く下屈して屢々扇形をなす；表面は乾燥，微細繊維状或は綿絮状鱗被あり，地色は洋紅色～緋色，鱗被は初めより灰色～褐色，線条なし；肉は薄く，脆く，表面と同色，無味無臭；褶は垂生，弓状，疎，厚く，波状，クリーム色或は基部赤色を帯ぶ，幅 1.5—4mm；茎は 1.5—4.5×0.1—0.2cm，同幅或は先端の方肥大，円柱状或は圧辺，無毛，傘面と同色，下方淡色或は帯黄色，基部白色綿絮状菌糸に蔽われ，中空，内部橙黄色；胞子は狭楕円形，平滑，往々中部縊れ，非糊性，9.5—11.5(14.5)×6—7(7.5) μ；担子柄は 4 或は 2 胞子，44—51×8.5—10.5 μ；菌絆あり；褶実質は淡黄，幾分纏絡せる幅 9—30 μ の菌糸より成る。

所在及産地

蘚或は草間砂地，又は水蘚沼地—夏秋

本州—欧．北米

和名 ザラツキキヤマタケ（粗面黄山茸）〔今井〕

f. **sphagnophila** (PECK) HONGO
ミズゴケノハナタケ

IMAZEKI & HONGO, Col. Illus. Fungi Japan, 14. 1957.

Hygrophorus miniatus var. *sphagnophilus* PECK, Bull. N. Y. St. Mus. 67:23. 1903—KAUFFMAN, Agar. Mich. 196. 1918—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 5:29. 1942—KOBAYASI, Sci. Res. Ozegahara Moor, 559, f. 7. 1954.

Hygrophorus miniatus f. *sphagnophilus* HONGO, Jour. Jap. Bot. 27:160, f. 1, g-h. 1952.

Hygrophorus turundus f. *sphagnophilus* HONGO, Bull. Fac. Lib. Arts Educ. Shiga Univ. 6:31, f. 1, B. 1957.

色は緋色；鱗被は老時暗色化せざるか或は僅か変

色す；胞子は 10—14×6—8.5μ。

所在及産地

水蘚上—秋 本州，九州—北米

和名 ミズゴケノハナタケ（水蘚花茸）〔本郷〕

f. **macrospora** (HONGO) HONGO

キミズゴケノハナタケ

IMAZEKI & HONGO, Col. Illus. Fungi Japan, 14. 1957.

Hygrophorus (*Hygrocybe*) *turundus* var. *macrosporus* HONGO, Jour. Jap. Bot. 31:144, f. 1, a–b. 1956.

Hygrophorus turundus f. *macrosporus* HONGO, Bull. Fac. Lib. Arts Educ. Shiga Univ. 6:31, f. 1, c. 1957.

基本種に比して胞子大形にて橙色～黄色の美しき脆き種なり，子実体は群生或は散生，脆弱；傘は径 0.8—2.3 cm，広丸山形，のち開張，或は更に中央僅か圧低さる，非粘性，乾燥，橙色～黄色，微細鱗被は中盤上に著しく集結す，縁は線条なく，鈍鋸歯状；肉は薄く，外被部橙色，内部は黄色，無臭無味；褶は垂生，やや弧状，広幅（1.5—4 mm），疎，淡黄～クリーム色，厚し；茎は 6—11.5×0.15—0.3 cm，同幅，無毛，円柱状，傘面と同色，基部淡色，充塞或は中実；胞子は楕円～類円筒形，平滑，無色，非糊性，10—15×6—7.5μ，或は 12—16.5×6—7.5μ；担子柄は4胞子，40—48×10—11μ；稜及褶側嚢体欠如；褶実質はやや平行；傘実質は表面菌糸の芝生状被の下同質なり。

所在及産地

オオミズゴケ（*Sphagnum cymbifolium*）の間—夏 本州

和名 キミズゴケノハナタケ（黄水蘚花茸）〔本郷〕

f. **minor** (HONGO)

ヒメアカヌマベニタケ

Hygrophorus parvicoccineus sensu HONGO, Bull. Fac. Lib. Arts Educ. Shiga Univ, 2:48, f. 4. 1953. (non S. ITO et IMAI)

Hygrophorus turundus f. *minus* HONGO, Bull. Fac. Lib. Arts Educ. Shiga Univ. 6:31, f. D. 1957; Jour. Jap. Bot. 32:145. 1957.

傘は径 3—10(14) mm，色は赤（spectrumred）～緋色；鱗被は殆ど褐色化せず；茎は 10—25×1—1.5 mm；胞子は 8—11.5×5—7μ。

所在及産地

草原或は松林内砂地—秋 本州

和名 ヒメアカヌマベニタケ（姫赤沼紅茸）〔本郷〕

Hygrocybe ovina (BULL. ex FR.) KÜHNER

オオヒメノカサタケ

KÜHNER, Contrib. Etude Hymen. 43. 1926—SINGER, Agaricales, 152. 1949.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，13, f. 7, pl. 2, f. 7. 1957）

Agaricus ovinus BULL. Champ. Fr. pl. 580. 1772. pr. p.—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 303. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:109. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:566. 1844.

Agaricus metapodius FR. Obs. Myc. 2:110. 1818.

Hygrophorus ovinus FR. Epicr. Myc. 328. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:135. 1863; Hymen. Eur. 415. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fungi, 200. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 200. 1871; Illus. Brit. Fungi, 6: pl. 900, f. b, (no. 900). 1888—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:190. 1872; Enchir. Fung. 52. 1886—GILLET, Champ. Fr. 190. 1874 KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 53, f. 103. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2: 211, f. 172, A. 1957.

Camarophyllus ovinus LANGE, Agar. Denm. 5:21, f. 12. 1923; Fl. Agar. Dan. 5:21, pl. 166, f. E. 1940. (sensu BRESADOLA)

子実体は群生；傘は径 3—7 cm，丸山形～半球形，のち広丸山形或は老時幾分開張す，中盤は屢々鈍頭に残り或は往々扁平となる，初め帯褐灰色，或は中盤赭色，縁辺淡汚桃色，褪色して淡くして灰色を増す，速に乾燥して粘性ならず，褪色せる時は微細の繊維状鱗片を生ず，老時幾分割る；肉は中盤部厚く，縁に向つて薄くなり，淡色～類白色，傷時速に帯赤色となる，臭は微或はかなり著しく，刺激性，味は僅かにて不快；褶は初め直生，速に深く彎生，中位に密～稍々疎，広幅，類白色，傷時桃色に染まり，遂に帯黒色の点となる，乾時殆ど常に黒化す；茎は 2—8×0.4—1 cm，同幅，往々頂部幾分開張す，円柱状或は圧辺され，往々溝を作る，傘と同色或は淡色，擦傷時桃色或は酒赤色となり，遂に黒色となる；担子柄は 42—54×6—7μ，4胞子；胞子は楕円形～稍々卵形，平滑，非糊性，無色，7—9×5—6μ；胞子紋は白色；托実質は整型～類整性；真の膠質外皮なし。

所在及産地

芝生上及針葉樹林或は混淆林地上—秋

本州—欧．北米

和名 オオヒメノカサタケ（大姫傘茸）〔今井〕

Hygrocybe subvitterina (IMAI)

コキヤマタケ

Hygrophorus subvitellinus IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 55:448. 1941.



第31図　コキヤマタケ
Hygrocybe subvitterina
子実体 ×1
（大谷氏）

子実体は孤生；傘は径約1cm，丸山形，レモン色或は卵黄色，粘性ならず，縁は無線条にて波状；肉は黄色；褶は垂生，疎，帯黄色；茎は約4×0.2cm，下方狭細，無毛，基部絨状，光沢を有し，傘と同色，中空；胞子は類卵形，類球形或は広楕円形，平滑，無色，10—12.5×8—10μ；胞子紋は白色。

所在及産地

針葉樹林地一秋　　本州，九州

和名　コキヤマタケ（小黄山茸）〔今井〕

Hygrocybe aurantia MURR.

ヒメダイダイタケ

MURRILL, Mycologia, 3:195. 1911; N. Am. Fl. 9:383. 1916.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，14, f. 13, pl. 2, f. 13. 1957）

Hygrophorus aurantius MURR. Mycologia, 4: 332. 1912—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 5: 43. 1942—HONGO, Jour. Jap. Bot. 27:190, f. 2(3–4). 1952.

子実体は群生；傘は径 0.5—1.5cm，稍々円錐形〜鐘形，のち丸山形，遂に殆ど扁平となり，縁は僅かに反転す，時に鈍頭の中丘を有す；表面は湿潤，粘性ならず，平滑，無毛，乾時僅か絹糸状，橙色〜黄橙色，鈍藁色或はクリーム色に褪色す，湿時縁に小線条あり；肉は傘と同色，甚だ脆弱，臭なし；褶は直生〜稍々垂生，疎〜稍々疎，寧ろ広幅，同色或は淡色，屢々中間脈あり，稜は平坦；茎は 1—4×0.08—0.2cm，同幅或は下方僅か狭細，円柱状，真直或は屈曲，無毛，傘と同色或は淡色，頂部粉状；担子柄は 23—34×6.5—7.5μ，4胞子；胞子は球形，類球形或は広楕円形，平滑，非糊性，無色，4—6×4—5μ；胞子紋は白色；托実質は類整型。

所在及産地

混淆林地上，蘚類間生一春冬　　本州一北米

和名　ヒメダイダイタケ（姫橙茸）〔本郷〕

Hygrocybe stagnina HONGO

ヌマヤマタケ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 32:208, f. a–c. 1957.
Hygrophorus stagninus Hongo, l. c.

子実体は散生；傘は径 1.5—2cm，或はそれ以上，丸山形にて鈍頭，のち開張，無毛，粘性なし，吸水性，湿時透明線条あり，橙色〜黄色；肉は薄く，脆く，同色，無味無臭；褶は狭生或は直状類垂生，疎，幅 2—3.5mm，厚く，傘と殆ど同色或は淡色；茎は 4.5—6×0.2—0.25cm，同幅，充塞〜充実，無毛，傘面と同色，基部白色；胞子紋は白色；胞子は卵形，平滑，屢々幾分角形，非糊性，6.5—8.5×4.5—6μ；担子柄は通常4胞子，32—45×6.5—7μ；稜及褶側嚢体はなし；褶肉は殆ど平行〜幾分纏絡菌糸より成り，幅 5—15μ；菌絆あり。

所在及産地

水蘚沼地一秋　　本州

和名　ヌマヤマタケ（沼山茸）〔本郷〕

Hygrocybe obrussea (FR.) KARST. f. pusilla IMAI

ヒメキヤマタケ

IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 55:446. 1941.
（今関及土岐，林．試．研．報．67:42. 1954）

傘は径約 1.5cm（原種は径 3—8cm），鐘形，のち開張し僅か鈍円錐中丘あり，のち縁は屢々裂片或は浅裂し，反転す；表面は湿潤，硫黄色〜黄金色，のち淡色となる，無毛，のち絹糸状，線条なし；肉は薄く，淡黄色，黒変せず，臭味なし；褶は殆ど離生，疎，広幅にて便腹状，厚く，淡黄色〜黄金色；茎は無毛，繊維線条あり，同幅或は下方狭細，傘と同色，約 6×0.3cm（原種は 6—8×0.4—0.6cm）

所在及産地

林地一秋　　本州

和名　ヒメキヤマタケ（姫黄山茸）〔今井〕

Hygrocybe coccinea (SCHAEFF. ex FR.) KARST.

ベニヤマタケ

KARSTEN, Hattsv. 1:234. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 137. 1889—LANGE, Agar. Denm. 5: 25. 1923; Fl. Agar. Dan. 5:25, pl. 168, f. G. 1940—SINGER, Agaricales, 152. 1949.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 15, f. 15, pl. 3, f. 15. 1957)

Agaricus miniatus SCOP. Fl. Carn. 2, 2:442. 1772.

Agaricus coccineus SCHAEFF. Fung. Bavar. 4, Ind. 70, pl. 302. 1774—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 334. 1801—DECANDOLLE, Fl. Fr. 2:186. 1815—FRIES, Syst. Myc. 1:105. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:565. 1844.

Hygrophorus coccineus FR. Epicr. Myc. 330. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:139. 1863; Hymen. Eur. 417. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 201. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2: 197. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:201. 1871; Illus. Brit. Fungi, 6:pl. 920, (no. 909). 1888; Handb. Austr. Fungi, 75. 1892—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:191. 1872; Enchir. Fung. 53. 1886—GILLET, Champ. Fr. 194. c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:202. 1876—WINTER. Pilze, 1:560. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:412. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:335. 1893; Brit. Fungi, 165. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 154. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 114. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 264. 1908—MURRILL, Mycologia, 2:162, pl. 27, f. 7. 1910—RICKEN, Blätterp. 23. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 196, pl. 30. 1918—REA, Brit. Basid. 304. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 7:pl. 344. 1928—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:110. 1938—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 5:37, pl. 4. 1942—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 109, pl. 36, f. 4. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:88. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 51. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:210, f. 171, B. 1957.

(白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 289. 1917; ed. 3. 168. 1927—原, 日. 菌. 目. 158. 1954—今関及土岐, 林. 試. 研. 報. 67:42. 1954—KOBAYASI, Sci. Res. Ozegahara Moor, 559, f. 8. 1954)

Hygrophorus miniatus (non FRIES) SCHROET. Pilze Schles. 1:528. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:211. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1):312. 1912.

Hydrocybe miniata (non KARSTEN) MURR. N. Am. Fl. 9:380. 1916.

子実体は群生；傘は径 2—5 cm, 幼時鈍円錐形にて内屈縁を有し, 老時開きし縁を有し鈍中丘を存す；表面は湿潤或は僅か触感粘るも, 良く発達せる膠質の外皮なし, 色は一様に血赤色, 幾分褪色するも赤色残りて鮮黄色とならず, 無毛, 平滑；縁は不透明



a



b

第32図 ベニヤマタケ Hygrocybe coccinea
a. 子実体 ×2/3
b. 胞子 ×400
(大谷氏)

或は湿時微かに小線条あり, 熟時反転せず；肉は表面と同色或は淡赤色, 薄く, 脆し, 臭なく, 味温和；褶は広く直生～狭生, 屢々垂歯を有す, 密～稍々疎, 広幅, 厚く, 橙赤～黄橙色, 乾時淡黄色, 稜は平坦；茎は 3—7×0.3—0.8 cm, 殆ど同幅, 円柱状或は往々圧辺, 撓曲, 無毛或は多少繊維状線条あり, 光沢あり, 脆く, 粘性ならず, 上部或は全部傘と同色, 基部速に黄色となり, 時に白色菌系の薄被により類白色となる, 髄部充塞～中空；担子柄は 44—60×7.5—9 μ, 4 胞子；胞子は楕円形, 平滑, 非糊性, 無色, 7.5—10.5×4—5 μ；胞子紋は白色；托実質は類整型；可食。

所在及産地

林地草間一春秋

北海道, 本州, 九州—欧. 北米. 濠

和名 ベニヤマタケ（紅山茸）〔今井〕

Hygrocybe imazekii HONGO
コベニヤマタケ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 30:215, f. 1(1-3). 1955 (*Hygrophorus Imazekii*)

子実体は群生, 傘は径 1.5—3 cm, 円錐状丸山形, のち開張し, 屢々やや中丘あり；表面は鮮紅色～帯



a



b

第33図 コベニヤマタケ Hygrocybe imazekii
a. 子実体 ×2/3
b. 胞子 ×500
(大谷氏)

黄橙色，非粘性，無毛，縁辺に僅か線条あり，味及臭なし；褶は直状にてやや垂生，クリーム色，殆ど3角形をなし広幅（7—9 mm），疎，屢々横脈を有す；肉は味及臭なし；茎は 3—5×0.2—0.5 cm，同幅，上部傘面と同色，下部淡色；胞子は円壔形，屢々中部溢れ，平滑，非糊性，7—9.5×3.5—5 μ；胞子紋は白色；担子柄は 26—46×7.5—8 μ，4胞子；稜嚢体及褶側嚢体なし；菌糸は菌絆あり。

所 在 及 産 地

林内地上—冬　　本州，九州

和 名　コベニヤマタケ（小紅山茸）〔本郷〕

Hygrocybe flavescens (KAUFFM.) SING.

アキヤマタケ

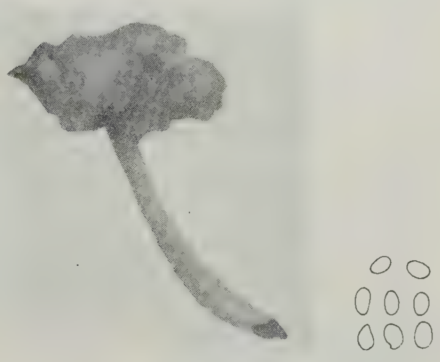
SINGER, Agaricales, 154. 1949.

（今関及本郷，原色日. 菌. 図鑑，14, f. 12, pl. 2, f. 12. 1957）

Hygrophorus puniceus var. *flavescens* KAUFFM. 8 Rep. Mich. Acad. Sci. 1906; Agar. Mich. 198. 1918.

Hygrophorus flavescens A. H. SMITH et HESLER, Lloydia, 5:60, pl. 13. 1942—Hongo, Bull. Fac. Lib. Arts Educ. Shiga Univ. 1:94, f. 1. 1952.

子実体は群生；傘は径 2—4.5 cm，幼時内屈縁を有し広丸山形，のち扁平となり或は中盤僅か或は広く凹下す，縁は幾分下向す；表面は甚だ粘性なるも，



a　　b

第34図　アキヤマタケ Hygrocybe flavescens

a．子実体 ×2/3　b．胞子 ×650（大谷氏）

速に乾燥し，光沢あり，黄色～鮮橙黄色にて，淡橙～淡黄色に褪色す，無毛，湿時透明線条あり；肉は薄く，蠟質，類黄色，臭味共に著しからず；褶は狭生，密～稍々疎，広幅，便腹状，淡黄色；茎は 2.5—5×0.4—0.9 cm，同幅或は下部狭細，円柱状或は往々圧辺さる，脆し，無毛或は初め微かに繊維毛あり，湿潤～乾燥にて粘性ならず，基部類白色，中部橙色，上部褶と略々同色，中空；担子柄は 29—35×6.5—8 μ，4胞子；担子柄は棍棒形にて基部伸長せず，通常菌絆を有す；胞子は楕円形，平滑，非糊性，無色，5—8×4—5 μ；胞子紋は白色；褶側及稜嚢体なし；乳管は肉及托実質中に存在す。

所 在 及 産 地

混淆林地上，草原—秋　　本州，九州—北米

和 名　アキヤマタケ（秋山茸）〔本郷〕

Hygrocybe punicea (FR.) KARST.

ヒイロガサタケ

KARSTEN, Hattsv. 1:235. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 137. 1889—MURRILL, N. Am. Fl. 9:381. 1916—LANGE, Agar. Denm. 5:23. 1923; Fl. Agar. Dan. 5:23, pl. 167, f. G. 1940—SINGER, Agaricales, 153. 1949.

（今関及本郷，原色日. 菌. 図鑑，15, f. 16: pl 3, f. 16. 1957）

Agaricus puniceus FR. Syst. Myc. 1:104. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:564. 1844.

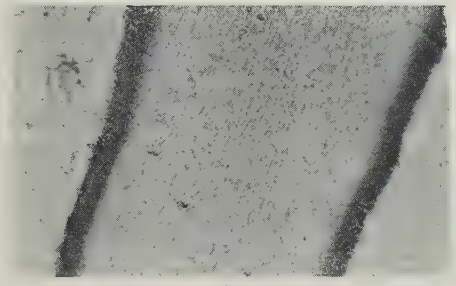
Hygrophorus puniceus FR. Epicr. Myc. 331. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:141. 1863; Hymen. Eur. 419. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 201. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:198. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:202. 1871; Illus. Brit. Fungi, 6: pl. 922, (no. 912). 1888—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:195. 1872; Enchir. Fung. 53. 1886—GILLET, Champ. Fr. 195. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:203. 1876—WINTER, Pilze, 1:559. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:416. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 367. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:338. 1893; Brit. Fungi, 167, pl. 15, f. 9. 1911—PECK, Mem. N. Y. St. Mus. 4:149, pl. 52, f. 15. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 264. 1908—MURRILL, Mycologia, 2:161, pl. 27, f. 5. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1):309, pl. 53, f. 1–4. 1912—RICKEN, Blätterp. 21, pl. 8, f. 2. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 197. 1918—BRESADOLA, Icon. Myc. 7: pl. 345. 1928—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 5:63, pl. 11. 1942—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 110, pl. 34, f. 2. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:87. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 51, f. 98. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:209, f. 170, B (a–c). 1957.

（KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 9, f. 14–6. 1914; 日. 菌. 図説, n. 173. 1929; 日. 菌. 図鑑, 3: 310, f. 307. 1954—白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 287. 1917; ed. 3. 168. 1927—安田, 植. 雑. 36:83. 1922—小林, 日. 隠. 植. 図. 501, pl. 241, f. 1–3. 1939—広江, 応用菌蕈学, 1125. 1941—原, 日. 菌. 目. 158. 1954）

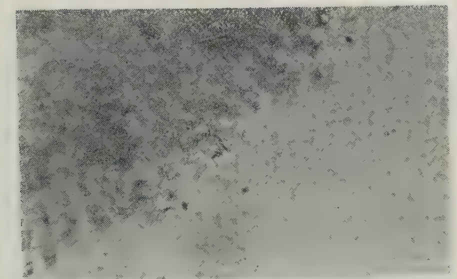
子実体は群生或は散生；傘は径 3—7 cm，鈍円錐形にて幼時縁は内屈す，のち中丘を存し或は扁平と



a



b



c

第35図　ヒイロガサタケ Hygrocybe punicea
a．子実体 ×1/2　　b．褶横断面の一部 ×200
c．子実層の拡大 ×600　　　　　　（大谷氏）

なる，縁は往々下向し，時に開張し，又時に反転するも，往々広丸山形に残る；表面は粘性，無毛，縁に透明線条あり，初め全面濃血赤色，鮮かなる橙色線状に褪せる，老時全面淡橙色となる；肉は薄く，脆く，蠟質，水潤状汚赤橙色，のち淡橙黄色となる，臭なく，味温和，傷時変色せず；褶は初め鈍く直生し垂生歯を有し，のち狭生となる，稍々疎，広幅，赤橙色～淡黄色，稜は平坦；茎は 4—9×1—1.5 cm，同幅或は基部僅か細し，往々便腹状，基部は白色或は帯黄色，他は赤色なるも速に橙色或は黄色となる，多少繊維線条あり，髄部充塞或は中空；担子柄は 44—58×8—10 μ，通常4胞子；胞子は類橢円形，平滑，非糊性，無色，8—10×5—6 μ；胞子紋は白色；褶側及稜囊体なし；托実質は類整型；外皮は膠質にて著し；可食。

所在及産地

林地或は草原地—夏秋　北海道，本州—欧．北米

和名　ヒイロガサタケ（緋色傘茸）〔川村〕

Hygrocybe psittacina (SCHAEFF. ex FR.) KARST.

ワカクサタケ

KARSTEN, Hattsv. 1:237. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 138. 1889—MURRILL, N. Am. Fl. 9:380. 1916—LANGE, Agar. Denm. 5:25. 1923; Fl. Agar. Dan. 5:25, pl. 168, f. D. 1940—SINGER, Agaricales, 154. 1949.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，16, f. 20, pl. 3, f. 20. 1957）

Agaricus psittacinus SCHAEFF. Fung. Bavar. 4, Ind. 70, pl. 301. 1774—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fung. pl. 82. 1797—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 335. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:102. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:564. 1844.

Hygrophorus psittacinus FR. Epicr. Myc. 332. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:143. 1863; Hymen. Eur. 420. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 202. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:203. 1871; Illus. Brit. Fungi, 6:pl. 910, (no. 919). 1888—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:192. 1872; Enchir. Fung. 53. 1886—GILLET, Champ. Fr. 192. c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:204. 1876—WINTER, Pilze, 1:558. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:420. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 366. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1:526. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:341. 1893; Brit. Fungi, 168, pl. 15, f. 8. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 211. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 114. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 265. 1908—MURRILL, Mycologia 2:160, pl. 27, f. 4. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1): 308. 1912—RICKEN, Blätterp. 22, pl. 8, f. 6. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 202. 1918—REA, Brit. Basid. 308. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 7:pl. 346, f. 1. 1928—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 5:75. 1942—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 112, pl. 34, f. 5. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales. 2:91. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 52. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:217, pl. 16, f. 2. 1957.

（小林，日．隠．植．図．501, pl. 241, f. 6-8. 1939—IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 55:447. 1941—原，日．菌．目．158. 1954—今関及土岐，林．試．研．報．67:43.

1954)

子実体は群生或は散生；傘は径 1—3.5 cm，円錐形～鐘形，のち丸山形～扁平，往々低き中丘あり；表面は糊性或は湿時甚だ粘性，乾時ワニス塗の如し，初め透明線



第 36 図 ワカクサタケ
Hygrocybe psittacina
×2/3 （大谷氏）

条あり，褪色せば不透明となる，幼時暗緑色～若草色，速に褪色し，或は赤色，渋色，桃肉色又は汚黄色等に変ず，通常淡肉色に乾く；肉は薄く，傘面と略同色，脆きも，厚き外皮の為めに幾分しなやかなり，臭味共に著しからず；褶は直生，稍々疎，狭～広幅，或は往々便腹状，初め帯緑色，速に帯赤色或は黄色となる，稜は平坦；茎は 3—7×0.2—0.5 cm，同幅，幾分しなやかにて，表面平坦或は波状，幾分透明性，上部或は殆ど全部緑色，速に黄色或は橙色に変色し，老時傘の如く桃色となる，全長に亘つて甚だ粘性なり；担子柄は 38—46×6—7 μ，4 胞子；胞子は楕円形，平滑，非糊性，無色，7—9×4—5 μ；胞子は白色；褶側及稜嚢体なし；托実質は類整型；外皮は厚くして膠質。

所 在 及 産 地

林地，牧場，路傍地上—夏秋　　本州—欧．北米

和 名 ワカクサタケ（若草茸）〔今井〕
ロクシヨウタケ（緑青茸）〔小林〕

Hygrocybe laeta (PERS. ex FR.) KARST.
ナナイロヌメリタケ

KARSTEN, Hattsv. 1:233. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 136. 1889—MURRILL, N. Am. Fl. 9:380. 1916—LANGE, Agar. Denm. 5:27, f. 18. 1923; Fl. Agar. Dan. 5:28, pl. 168, f. F, F′. 1940—SNIGER, Agaricales, 154. 1949.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，14, f. 14; pl. 2, f. 14. 1957）

Agaricus laetus PERS. Obs. Myc. 2:48. 1799; Syn. Meth. Fung. 334. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:334. 1821—RABENHORST. Deut. Krypt. Fl. 1: 565. 1844.

Hygrophorus laetus FR. Epicr. Myc. 329. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:138. 1863; Hymen. Eur. 417. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 200. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:197. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:201. 1871; Illus. Brit. Fungi, 6:pl. 938, (no. 906). 1888—GILLET, Champ. Fr. 191, c. ic. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 9:166. 1879; Enchir. Fung. 52. 1886—WINTER, Pilze, 1:561. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:411. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 361. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:333. 1893; Brit. Fungi, 164. 1891—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:212. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 263. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1):313, pl. 53 F, f. 5–7. 1912—RICKEN, Blätterp. 24, pl. 8, f. 8. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 201. 1918—BRESADOLA, Icon. Myc. 7:340. 1928—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 5:72, pl. 16 a. 1942—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 109, pl. 33, f. 1. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:91. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 52. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:217, f. 177, A. 1957.

（本郷，植．研．雑．26:23, f. A–B. 1951; Jour. Jap. Bot. 26:146. 1951）

Hygrophorus Houghtonii BERK. et BR. Ann. Mag. Nat. Hist. IV, 11:n. 1360. 1873—COOKE, Illus. Brit. Fungi, 6:pl. 936, (no. 907). 1888; Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 299. 1889.

Hygrophorus Peckii ATK. Jour. Myc. 8:114. 1902—KAUFFMAN, Agar. Mich. 202. 1918.

Hygrophorus Davisii PECK, Bull. Torr. Bot. Club, 83:214. 1906.

Hydrocybe Peckii MURR. N. Am. Fl. 9:379. 1916.

Hydrocybe Davisii MURR. l. c. 9:382. 1916.

子実体は群生；傘は径 1—3.5 cm，幼時丸山形，のち扁平となり，中盤凹下し，縁は往々反転して幾分漏斗形となる；表面は無毛，甚だ粘性，透明線条あり，橙褐色を帯びたるピンク～桜色にて，種々の色に変化し，これにオリーブ，ピンク，黄，赤，褐色，更に紫灰色等を混ず；茎は薄く，強靱，傘面と同色或は淡色，臭なきか僅か不快，味は著しからず；褶は直生～垂生，柔靱，稍々疎，狭～中位幅，傘の如く種々の色を呈し，淡紅色～橙褐色等；茎は 3—12×0.2—0.4 cm，同幅，かなり柔靱，無毛，粘性，傘と多少同色，上部屢々淡紫灰色；担子柄は 25—36×4.5—6.5 μ，4 或は 2 胞子；胞子は広楕円形，平滑，非糊性，無色，5—7.5×4—4.5 μ；胞子紋は白色；褶側嚢体なく，稜嚢体は細長糸状，25—49×1.5—2 μ；托実質は整型～類整性；外皮は厚くして膠性。

所 在 及 産 地

沼地蘚間，林内湿地及竹林内地上—春秋
本州—欧．北米

和 名 ナナイロヌメリタケ（七色粘茸）〔本郷〕
ヌメリサクラタケ（粘桜茸）〔本郷〕

Hygrocybe ceracea (WULF. ex FR.) KARST.
キヤマタケ

KARSTEN, Hattsv. 1:234. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 136. 1889—MURRILL, N. Am. Fl. 9:378. 1916—LANGE, Agar. Denm. 5:27. 1923—SINGER, Agaricales, 154. 1949.

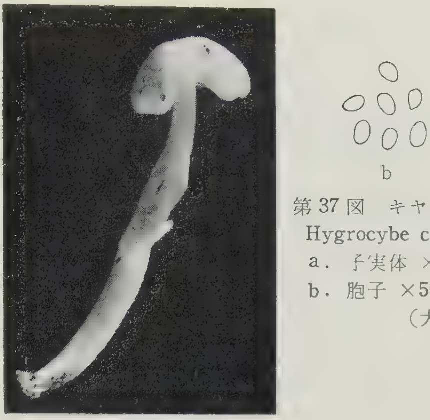
Agaricus ceraceus WULF. in Jacq, Misc. Austr. 2:105, pl. 15, f. 2. 1781—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, pl. 20. 1797—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 336. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:102. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:565. 1844.

Hygrophorus ceraceus FR. Epicr. Myc. 330. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:138. 1863; Hymen. Eur. 417. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 201. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:197. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:201. 1871; Illus. Brit. Fungi, 6: pl. 904, f. B. (no. 908). 1888; Handb. Austr. Fungi, 75. 1892—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:191. 1872; Enchir. Fung. 22. 1886—GILLET, Champ. Fr. 193. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:201. 1876—WINTER, Pilze, 1:561. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:412. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 360. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1:528. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2: 334. 1893; Brit. Fungi, 165. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:211. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 154. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 263. 1908—MURRILL, Mycologia, 2:160, pl. 27, f. 2. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(1):313, pl. 53, f. 5-8. 1912—RICKEN, Blätterp. 24. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 193. 1918—REA, Brit. Basid. 304. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 99. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 7: pl. 242. 1928—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:109. 1938—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 5:69. 1942—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 109, pl. 34, f. 4. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:90. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 52. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2: 217, f. 177, c. 1957.

(今関, 原色きのこ, pl. 30 (中). 1942—原, 日. 菌. 目. 158. 1954)

Godfrinia ceracea R. MAIRE, Rech. Crypt. Tax. Basid. 123. 1902.

子実体は群生或は散生；傘は径 1—4cm, 幼時丸山形にて縁は殆ど内屈せず, 後広丸山形にて鈍頭, 往々中盤扁平或は僅か凹下す；表面は僅か粘性にて吸水性, 湿時中盤迄透明線条あり, 鮮かなる淡橙黄色にて, 藁黄色に褪色す, 無毛；肉は黄色, 柔軟, 脆し, 臭味共に著しからず；褶は広く直生～稍々垂生, 基部広幅にて往々3稜形, 疎, 厚く, 淡黄～殆ど白色, 稜は平坦；茎は 2—6×0.2—0.5cm, 同幅, 円柱状或は往々圧辺, 真直或は撓曲, 無毛, 少しく粘性なるも速に乾燥し, 光沢あり, 傘面と同色, 中空；担子柄は 32—43×6—7μ, 4胞子；胞子は広楕円形～稍々楕円形, 平滑, 無色, 6—8×4—5μ; 胞子紋は白色；褶側及稜嚢体なし；托実質は不整型；外皮は膠性, 分化甚だ貧弱にて薄し；可食。



第37図 キヤマタケ
Hygrocybe ceracea
a. 子実体 ×1/2
b. 胞子 ×500
(大谷氏)

所在及産地

蘚間及び林地上一秋
北海道, 本州, 九州一欧. 北米. 濠

和名 キヤマタケ（黄山茸）〔今井〕

Hygrocybe miniatostriata (S. ITO. et IMAI)
ムニンキヤマタケ

Hygrophorus miniato-striatus S. ITO et IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:15. 1939.

子実体は孤生或は群生；傘は径 1—2.5cm, 丸山形或は広類鐘形, 表面は淡橙黄色～鮮橙黄色, 粘性, 長線条あり；褶は広彎生, 傘面と同色或は淡色, 密. 厚し；茎は2—3×0.1—0.3cm, 同幅, 稍々粘性, 淡帯緑黄色～黄色, 乾時光沢あり；胞子は楕円形～円壔形, 平滑, 無色, 7.5—10×5—6.5μ; 胞子紋は白色。

所在及産地

林内落葉間地上一秋 小笠原島

和名 ムニンキヤマタケ（無人黄山茸）〔今井〕

Hygrocybe chlorophana (FR.) KARST.
ツキミタケ

KARSTEN, Hattsv. 1:236. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 137. 1889—MURRILL, N. Am. Fl. 9:378. 1916—LANGE, Agar. Denm. 5:23. 1923; Fl. Agar. Dann. 5:23, pl. 166, f. B. (D). 1940—SINGER, Agaricales, 154. 1949.

Agaricus chlorophanus FR. Syst. Myc. 1:103.

1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:564. 1844.

Agaricus ceraceus subsp. *chlorophanus* PERS. Myc. Eur. 3:233. 1828.

Hygrophorus chlorophanus FR. Epicr. Myc. 332. 1838; Hymen. Eur. 420. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:203. 1871; Illus. Brit. Fungi, 6:pl. 909, (no. 918). 1888—GILLET, Champ. Fr. c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:204. 1876—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 9:167. 1879; Enchir. Fung. 53. 1886—WINTER, Pilze, 1:558. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:419. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 365. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1:526. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2: 341. 1893; Brit. Fungi, 168. 1911—PECK, Mem. N. Y. St. Mus. 4:147, pl. 51, f. 13-20. 1900—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:211. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 265. 1908—MURRILL, Mycologia, 2:160, pl. 27, f. 3. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1):310, pl. 53c. 1912—RICKEN, Blätterp. 22. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 198. 1918—REA, Brit. Basid. 308. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 7:pl. 341, f. 1. 1928—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4:pl. 387, f. 1. 1937; Agaricales, 2: 90. 1952—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 5: 68. 1942—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 112, pl. 35, f. 1. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 51. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:217, f. 177, B. 1957.

(KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 17, f. 3-5. 1913; 日. 菌. 図鑑, n. 62. 1929; 日. 菌. 図鑑, 3:313, f. 310. 1954—白井, 日. 菌. 目. ed. 3. 168. 1927—松浦, 茸類辞典, 94, f. 107, 113. 1933; 応用菌蕈学, f. 747 (右). 1941—小林, 日. 隠. 植. 図. 507, pl. 244, f. 3-5. 1939—今関, 原色きのこ, pl. 30 (右). 1942—原, 日. 菌. 目. 158. 1954)

子実体は群生; 傘は径 2—5 cm, 丸山形～鐘形, のち殆ど扁平, 鈍頭; 表面は粘性, 硫黄色～黄金色, 無毛, 往々縁辺に透明線条あり, 屢々裂く; 肉は薄く, 脆く, 淡黄色, 傷時黒変せず; 褶は狭生, のち彎生, 稍々疎, 寧ろ広幅, 便腹状, 薄し, 傘面と略同色; 茎は 3—8×0. 4—0. 8 cm, 同幅或は殆ど同幅, 円柱状, 稀に圧辺, 多少屈曲, 傘面と同色, 粘性, 無毛, 平坦, 往々裂く; 胞子は狭楕円形, 平滑, 無色, 6—8×4—5 μ; 胞子紋は白色; 可食。

所 在 及 産 地

平原及林地—夏秋　　本州—欧. 北米

和 名　ツキミタケ (月見茸) 〔川村〕

Hygrocybe marchii (BRES.) SING.

ミ イ ノ ベ ニ ヤ マ タ ケ

SINGER, Agaricales, 153. 1949.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 14, f. 11, pl. 2, f. 11. 1957)

Hygrophorus Marchii BRES. Icon. Myc. 7:pl. 343. 1928—HONGO, Jour. Jap. Bot. 26:141, f. 1(3-6). 1951.

子実体は群生或は孤生; 傘は径 1—4. 5 cm, 半球形～丸山形, のち扁平となり, 屢々中盤凹下す; 表面は緋色, 各所に於て僅か変化し, 老時褪色して黄色となる, 湿時粘性, 透明線条あり, 乾時幾分絹糸状, 縁は初め内屈, 僅か波状; 肉は傘面と稍々同色, 脆く, 臭味共になし; 褶は直生～狭生, 屢々僅か垂生, 稍々疎～疎, 広幅にて便腹状, 類白色或は淡黄色, 稜は不正, 中間脈あり; 茎は 2. 5—6. 5×0. 2—0. 7 cm, 同幅或は下方幾分狭細, 円柱状～僅か圧辺, 真直或は稍々屈曲, 傘と同色或は淡色, 基部屢々類白色, 脆く, 無毛, 粘性, 中空; 担子柄は 35—45×6. 5—7. 5 μ, 通常 2 胞子; 胞子は楕円形, 平滑, 無色, 6. 5—9×4—4. 5 μ; 胞子紋は白色。

所 在 及 産 地

混淆林埴土上—夏秋　　本州—欧. 北米

和 名　ミイノベニヤマタケ (三井紅山茸) 〔本郷〕

Hygrocybe minutula (PECK) MURR.

ヌ メ リ ア カ ヌ マ ベ ニ タ ケ

MURRILL, N. Am. Fl. 9:380. 1916—SINGER, Agaricales, 154. 1949.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 16, f. 21, pl. 3, f. 21. 1957)

Hygrophorus minutulus PECK, Bull. N. Y. St. Mus. 1:9. 1888—A. H. SMITH & HESLER, Lloydia, 5:79. 1942—HONGO, Acta Phytotax. Geobot. 14: 72, f. 1(3). 1951.

(松田及本郷, 植. 研. 雑. 30:259, f. 1, C-E. 1955)

子実体は群生或は孤生; 傘は径 5—10 mm, 幼時丸山形, のち広丸山形～扁平, 中盤凹下せず; 表面は無毛にて明かに粘性, 緋色, 老時淡鮮黄色となる, 縁辺に透明線条あり; 肉は薄く, 脆く, 傘面と同色, 臭味共に温和; 褶は直生～狭生, 或は垂下歯を有す, 密～稍々疎, 広幅にて幾分便腹状, 帯赤橙色, 稜は平坦; 茎は 1. 5—2×0. 1—0. 25 cm, 脆し, 同幅, 髄部充塞, のち中空となる, 湿時粘性, 初め上部赤色, 下部黄色, 老時全面黄色となる; 担子柄は 28—40×7—8 μ, 4 胞子; 胞子は楕円形, 時に中部縊れ, 平滑, 無色, 非糊性, 7—9×4—6 μ; 胞子紋は白色; 褶側及稜嚢体なし; 托実質は整型～類整型。

所 在 及 産 地

腐蝕質及林内蘚間生—夏秋　本州, 九州—北米

和 名　ヌメリアカヌマベニタケ

(粘赤沼紅茸) 〔本郷〕

Tricholomataceae ROZE シメジタケ科

ROZE, Bull. Soc. Bot. Fr. 23:51. 1876. (ut *Tricholomées*)—SINGER, Ann. Myc. 34:328. 1936; Agaricales, 155. 1949.

Schizophyllacées ROZE, l. c. 51. 1876.
Mycenacées ROZE, l. c. 51. 1876.
Marasmiées ROZE, l. c. 51. 1876.
Clitocybées ROZE, l. c. 51. 1876.
Omphaliées ROZE, l. c. 108. 1876.
Collybiées ROZE, l. c. 109. 1876.
Pleuropodées ROZE, l. c. 112. 1876.
Armillariees ROZE, l. c. 113. 1876.
Pleurotaceae VAN OVEREEM, Bull. Jard. Bot. Buitenzorg, 9:20. 1927.
Lentinaceae VAN OVEREEM, l. c. 12. 1927.

褶は通常合流し，狭生，直生，彎生或は垂生，稀に類離生なり（若しも類離生ならば胞子は分散時単核なるにより他と区別さる）；托実質は不整型，類不整型或は整型にて稀に両側型（但しこの時は胞子は単核にて糊性なるにより他と区別さる），決して逆型ならず；胞子紋は鈍白色，クリーム色，淡クリームピンク色，甚だ淡き灰色，淡緑色或は淡汚灰色等にて決して濃或は鮮色を呈せず；胞子膜は単一或は不明瞭なる複合にて稀に内外膜並に外被に分化す（その時は外囲円形にて何等発芽孔の痕跡なし），非糊性，糊性，或は稀に擬糊性（この時は傘表も亦擬糊性の色を表わす）；担子柄はカーミン着色顆粒を有し，或はこれを欠く；小柄は(1), 2, (3), 4；嚢状体或は擬嚢体は存在或は欠如；茎は中心生，偏心生，側生，或は欠如，成熟時真の壺を有するものなし，稀に乳汁を有す；糊性或は非糊性にて稀に膠化或は非膠化性の肉を有し，その菌糸は薄膜或は厚膜，均一質，往々傘と茎との間に分離層を有す；茎は角質にて，時々紐状，纖維状に裂ける基部を有し或はこれを欠く；味は温和，苦味，辛味等あり；林内，牧場，芝生，庭園，砂漠，高原，泥炭地，湿泥地等の地上，腐蝕物上，深蘚中等に生じ，ベニタケ科或は種々なる顕花植物上に寄生するものあり。

SINGER 氏 (1949) は 10 族に分つ，本科は範囲甚だ広く；その分類亦複雑なり，特に注意を要す。

族 検 索 表

A. 胞子膜，組織及び上表皮層はすべて非糊性或は非擬糊性。

a. 担子柄はカーミン着色顆粒を含む。
(I) シメジタケ族 **Lyophylleae** (88)

b. 担子柄及び小担子柄はカーミン着色顆粒を含まず。

α. 褶は縦裂す；茎は欠如或は側生，屢々擬茎を有す。 (VI) スエヒロタケ族
Schizophylleae (163)

β. 褶は縦裂せず；茎は存在或は欠如；擬茎存在或は欠如。

I. 子実体はヒラタケ (*Pleurotus*) 型にて円筒形の胞子を有し，或はヒラタケ型にて肉の一部或は全部膠化す；分泌嚢体は屢々存在す。

1. 肉は通常膠化せず；胞子は円筒状類紡錘形，紡錘形或は類楕円状円壔形，腸詰形等；若し肉が僅か膠質ならば托実質は不整型なるにより次の族と異なる。
(VII) マツオオジタケ族 **Lentineae** (164)

2. 肉は一部或は全部膠化す；胞子は球形，腎臓形，楕円形，稀に円筒形，往々卵形；托実質は屢々狭きも明かに整型或は類整型；上表皮層は叉状糸状体構造ならず。
(IV) シジミタケ族 **Resupinateae** (156)

II. 子実体に諸型あり；若しヒラタケ (*Pleurotus*) 型なれば同時に円筒形の胞子を有することなく；ヒラタケ型と膠化せる肉とは同時に起らず；分泌嚢体は稀に存す。

1. 傘は著しく分化せる上表皮層を有せず，即ちその最上層は傘肉と異ならず，或は密，或は少くとも真の皮嚢体，皮擬嚢体，箒状細胞或は突起を有する菌糸を含まず（茎に突起ある菌糸あるものあり），決して子実層状或は柵状上表皮層を有することなし；擬嚢体欠如；乳汁なし；子実体はヒダサカズキタケ (*Omphalia*) エノキタケ (*Collybia*)，ヒラタケ (*Pleurotus*)，カヤタケ (*Clitocybe*) 或はシメジタケ (*Tricholoma*) 型にて稀にホウライタケ (*Marasmius*) 型なり。

甲. 黒色根状束を有し傘の表皮の菌糸が膠質層に埋在するホウライタケ型；或は茎に突起ある匍匐菌糸を有し稜嚢体の著しきホウライタケ或はエノキタケ型のもの（ヒナノヒガサタケ族の一部）

乙. 子実層托は脈状；分泌嚢体は擬糊性

（マツオオジタケ族の一部）

丙．子実層托は褶状；分泌嚢体欠如；上表皮層の分化著しからず（ナラタケ属 *Armillariella* 及シメジタケ属 *Tricholoma*の内菌絆を有せざるものを除く）；子実体はカヤタケ或はシメジタケ型，稀にヒラタケ型（この時は胞子は円筒状ならず，肉は膠化せず），或はヒダサカズキタケ型（この時は嚢状体なし），或はエノキタケ～ホウライタケ型（この時は表皮層に全く球嚢なし）；根状菌糸束は白色或は黒色（この時は菌糸間に菌絆なく，又肉は膠化せず，又子実体はホウライタケ型ならず）

（Ⅱ）カヤタケ族 **Clitocybeae** （97）

2．傘は甚だ分化せる上表皮層を有す；或は乳汁あり；或は皮擬嚢体の幾種を有す；子実体はクヌギタケ（*Mycena*），エノキタケ（*Collybia*），ホウライタケ（*Marasmius*），ヒダサカズキタケ（*Omphalia*）型にて稀にヒラタケ―ホウライタケ（*Pleurotus—Marasmius*）型，即ちホウライタケ型にて偏茎，側茎或は痕跡的茎を有するもの，或は甚だ稀にカヤタケ（*Clitocybe*）或はシメジタケ（*Tricholoma*）型のものあり。

甲．子実体はカヤタケ，シメジタケ型にて菌絆なきもの（カヤタケ族の一部）

乙．子実体はカヤタケ或はシメジタケ型ならず；菌絆あり。

イ．上表皮層は子実層状にて毛を挿入し，或は短細胞被即ち球嚢の薄層より成る。（ホウライタケ族の一部）

ロ．上表皮層は更によく分化し球嚢状ならず。

（Ⅷ）ヒナノヒガサタケ族 **Hemimyceneae** （178）

B．胞子膜，組織或は上表皮層は糊性或は擬糊性。

a．托実質は決して両側型ならず，時に幼品にて甚だ不明瞭なることあるも，被膜なきにより区別さる。

α．子実体はヒラタケ（*Pleurotus*）型或はワンタケ（*Peziza*）又はサルノコシカケ（*Polyporus*）の如き形態をなす。

Ⅰ．胞子は非糊性或は擬糊性，平滑（ホウライタケ族の一部）

Ⅱ．胞子は甚だ糊性，平滑或は平滑ならず。

1．胞子は平滑，寧ろ短かき楕円形～円筒形；子実体は小形にて甚だ群生す，ヒラタケ型或はサルノコシカケ型。

（Ⅴ）ワサビタケ族 **Panelleae** （160）

2．胞子は球形にて殆ど平滑（この時は擬嚢体を有す），或は微細疣～有刺；托は常に褶状（オオイチョウタケ族の一部）

β．子実体はヒラタケ，ワンタケ，サルノコシカケ型ならず。

Ⅰ．子実体はエノキタケ（*Collybia*），ホウライタケ（*Marasmius*），クヌギタケ（*Mycena*），或はヒダサカズキタケ（*Omphalia*）型。

（Ⅸ）ホウライタケ族 **Marasmieae** （191）

Ⅱ．子実体はカヤタケ（*Clitocybe*）或はシメジタケ（*Tricholoma*）型。

（Ⅲ）オオイチョウタケ族 **Leucopaxilleae** （148）

b．托実質は幼時明かに両側型；被膜（2重鍔）を有す。

（Ⅹ）モミタケ族 **Biannularieae** （222）

（Ⅰ） Lyophylleae Kühner シメジタケ族

Kühner, Bull. Mens. Soc. Linn. Lyon, 7:204. 1938—Singer, Agaricales, 163. 1949.

一般性質科に同じ；担子柄は熟時カーミン着色顆粒を含む；胞子紋は白色；胞子は平滑或は有刺，非糊性；菌糸はすべて非糊性，菌絆を有す；表皮層は通常能く分化せず，屢々吸水性なるも，往々殊に鮮色の表皮層を有する種に於ては小球嚢より成る明かな上表皮層を有す；色素は菌糸膜を被ひ或は細胞内に存在す；地上，株上及び枯葉上に生じ，菌蕈子実体上に生ずるものあり；Singer 氏（1949）は3属を収む，本邦皆これを産す。

本邦既知属検索表

A．死物寄生種；厚膜胞子欠如。

a．鈍色種（灰，灰黄褐，焦茶色等），或は色素なく，その時は担子柄長くして胞子平滑。

シメジタケ属 **Lyophyllum** （89）

b．明色種，或は色素なく，その時は長担子柄と平滑胞子との両性結合せず。

ユキワリタケ属 **Calocybe** (94)

B．活物寄生的にベニタケ科菌の腐体上に生ず；厚膜胞子を多生す。

ヤグラタケ属 **Asterophora** (95)

Lyophyllum Karst. em Sing.

シメジタケ属

Karsten, Acta Soc. pro. Faun. Fl. Fenn. 2:3. 1831; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 29. 1889—Singer, Ann. Myc. 34:332. 1936; Agaricales, 163. 1949.

Tephrophana Earle, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5: 427. 1909.

族の性質に同じ；傘は通常多少吸水性，或は軟骨質の皮層を有し，縁以外は絹糸状ならず（縁は往々絹糸状），粘性ならず，鈍色（灰色，暗褐色，赭褐色等），多くは細胞内色素を有し，稀に何等の色素なし；上表皮層には小球嚢なし；托は褶状；托実質は整型或は類整型；担子柄は大形子実体に於ては屢々寧ろ長し，通常4胞子；稜嚢体は寧ろ不明瞭にて屢々欠如，その他の嚢状体は存在せず；胞子は平滑，稀に疣状刺ありて球形，其他は種によりて球形～楕円形或は卵形，及び楕円状円壔形～円筒形或は紡錘形或は幾分圧辺されて類角形等に変化す；厚膜胞子は子実体に見出されず；茎は屢々団塊状或は単一；被膜欠如；子実体はシメジタケ (*Tricholoma*)，カヤタケ (*Clitocybe*)，ヒラタケ (*Pleurotus*)，エノキタケ (*Collybia*) 或はヒダサカズキタケ (*Omphalia*) 型；地上，枯葉上，材上等に生ず；多分全部裸実；北温帯産，約23種を知らる，食用菌。

（本属名は lyo〔希〕(弛む，離れる)，phyllon〔希〕(葉) より出づ）

基準種 *L. leucophaeatum* Karst.

本邦既知種検索表

A．肉或は褶，又は両者は傷により黒変せず。

a．子実体は多肉，叢生，茎は肉質或は多少軟骨質なるも中空ならず，シメジタケ或はカヤタケ型。

α. 茎は中心性，地上生。

I．子実体は多数叢生；茎はむしろ太く肉質。

1．子実体は多くは多数叢生するも個々分離するを得；傘は 6—10 cm，淡灰～茶褐色；胞子径 4—6 μ。

ホンシメジタケ *L. aggregatum* (89)

2．子実体は大塊茎状主茎ありこれより多数簇生す；傘は 0.5—1.5 cm，灰色～帯黒色；胞子径 4—5 μ。

シャカシメジタケ *L. cinerascens* (90)

II．子実体は少数 (2—3) 叢生す；茎は軟骨質なるも中空ならず；傘は 3.5—10 cm，暗褐黒色，脈及び微小黒粒を存す；胞子 5—6 ×3—4.5 μ。

クロシメジタケ *L. loricatum* (91)

β. 茎は偏心生，材幹上生；子実体はヒラタケ－シメジタケ型；通常叢生；傘は 5—15 cm，白色～帯褐クリーム色；胞子 4—6 μ。

シロタモギタケ *L. ulmarium* (92)

b．子実体はエノキタケ型にて傘茎はむしろ薄肉，茎は軟骨質にて中空；傘はオリーブ褐～類暗褐色，0.7—2 cm；胞子 4.5—5.5 μ；焼土上。

ヤケノシメジタケ *L. ambustum* (93)

B．肉或は褶，又は両者は傷により黒変す。

a．胞子は3角形，8—10×5—7 μ；傘は 3.5—7 cm，灰黄土色，焦茶或は褐黒色。

カクミノシメジタケ *L. trigonosporum* (93)

b．胞子は卵形にて一端尖り，6.5—9×4—4.5 μ。

スミゾメシメジタケ *L. semitale* (94)

Lyophyllum aggregatum (Schaff. ex Secr.) Kühner

ホンシメジタケ

Konrad & Maublanc, Agaricales, 1:366. 1948.

（今関及本郷，原色日. 菌. 図鑑，17, f. 23, pl. 4, f. 23. 1957）

Agaricus aggregatus Schaeff. Icon. Fung. 121, pl. 305—306. 1770—Secretan, Mycogr. Suésse, 2:141. 1833—Fries, Epicr. Myc. 65. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:117. 1857; Hymen. Eur. 90. 1874—Rabenhorst, Deut. Krypt. Fl. 1: 543. 1844—Cooke, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 51. 1883; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 182 (no. 145). 1883—Winter, Pilze, 1:797. 1884—P. Hennings, in Engler & Prantl, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:266. 1900—Migula, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):664. 1912.

Agaricus decastes Fr. Obs. Myc. 2:105. 1818; Syst. Myc. 1:49. 1821; Epicr. Myc. 65. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:116. 1857; Hymen. Eur. 90. 1879—Persoon, Myc. Eur. 3:209. 1828—Rabenhorst, Deut. Krypt. Fl. 1:544. 1844—Cooke, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 51. 1883—Karsten, Myc. Fenn. 3:55. 1876—Winter,

Pilze, 1:797. 1884—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 266. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):664. 1912.

Agaricus humosus FR. Epicr. Myc. 66. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:117. 1857; Hymen. Eur. 92. 1872.

Clitocybe decastes QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:87. 1872—GILLET, Champ. Fr. 162, i. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:68. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 66. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:160. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 180. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 69, pl. 53, f. 9–12. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:418. 1893; Brit. Fungi, 184. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 155. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 51. 1908—REA, Brit. Basid. 277. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 4:pl. 153. 1927.

（川村，日．菌．図鑑，4:426, f. 422. 1954）

Clitocybe humosa QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1: 87. 1872—GILLET, Champ. Fr. 163. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:70. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:162. 1887.

Clitocybe aggregata GILL. Champ. Fr. 161. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:69. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:160. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 184. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:419. 1893; Brit. Fungi, 185. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 155. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 51. 1908—REA, Brit. Basid. 278. 1922—LANGE, Agar. Denm. 8:58. 1930; Fl. Agar. Dan. 1:87, pl. 39, f. A; pl. 40, f. F–G. 1935 (incl. forma vel var. *Sphaerospora*, *Ovispora* et *reducta*)

Gyrophila aggregata QUÉL. Enchir. Fung. 19. 1886; Fl. Myc. 274. 1888.

Gyrophila aggregata var. *humosa* QUÉL. Enchir. Fung. 19. 1886; Fl. Myc. 275. 1888.

Gyrophila aggregata var. *decastes* QUÉL. Fl. Myc. 275. 1888.

Tricholoma aggregatum COST. et DUF. Nouv. Fl. Champ. 10. 1891—RICKEN, Blätterp. 360, pl. 97, f. 1. 1915—KONRAD, Bull. Soc. Myc. Fr. 41: 40. 1925; 47:140. 1931; & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3:pl. 247. 1934—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 63, pl. 14, f. 1. 1950—HEIM, Champ. Eur. 2:307, f. 222, A. 1957.

（原，日．菌．目．368. 1954）

Tricholoma shimeji KAWAM. Illus. Jap. Fungi, pl. 13, f. 8—10. 1915.

Tricholoma humosum IMAI, Jour. Fac. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:73, pl. 2, f. 6. 1938.

（原，日．菌．目．369. 1954）

Lyophyllum decastes SING. Agaricales, 165. 1949.

Tricholoma conglobatum (non SACCARDO) Auct. nonn.

Lyophyllum aggregatum var. *typicum* KÜHNER et ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 164. 1953.

子実体は多数叢生，稀に孤生す，叢生するも各個体は分離することを得，塊茎状主株より簇出するにあらず；傘は径 6—10 cm，丸山形，のち開張し鈍中丘を存し或は僅か圧低さる，往々不正形となる；表面は淡灰色，灰黒色より茶褐色等に変移し，平滑，無毛，屢々内生繊維あり，乾時光沢あり，縁は薄く，永く下屈し，波曲，屢々不正にて波状浅裂す；肉は中央厚く，周辺薄く，弾性，白色，最後に柔軟となる，味温和臭弱し；褶は直生〜彎生，老時僅か垂生，白色〜帯黄色或は肉色，密，やや広幅，薄し，稜は小波状をなす；茎は 7—10×0.5—1.5 cm，不等幅にて基部著しく肥大，多くは多少屈曲，時に圧辺，中心生にて時にやや偏することあり，白色〜帯白色，基部灰色〜褐色，頂部粉状，他は繊維状，弾性，中実；胞子は球形，平滑，無色，径 4—6 μ；紋は白色；好食菌。

所 在 及 産 地

原野及雑木林地—夏秋

本邦全土—欧．北米．亜(西比)

和 名 ホンシメジタケ（本湿地茸）〔今関及本郷〕

Lyophyllum cinerascens (BULL. ex KONR.) KONR. et MAUBL.

シャカシメジタケ

KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:366. 1948.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，18, pl. 4, f. 24. 1957）

Agaricus cinerascens BULL. Champ. Fr. pl. 428, f. 2. 1788—PERSOON, Myc. Eur. 3:209. 1828—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 106. 1860—FRIES, Monogr. Hymen. Suec. 2:287. 1863; Hymen. Eur. 73. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 41. 1883; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 170 (no. 116). 1883.

Agaricus conglobata VITT. Fung. Mang. 349. 1835—FRIES, Epicr. Myc. 46. 1838; Hymen. Eur. 69. 1874—WINTER, Pilze, 1:814. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:660. 1889.

Clitocybe conglobata BRES. Fung. Trid. 1:27, pl. 32. 1883; Icon. Myc. 4:pl. 151. 1927—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 181. 1915—LANGE, Agar. Denm. 8:59. 1930; Fl. Agar. Dan. 1:88, pl. 39, f. D. 1935.

Tricholoma cinerascens GILL. Champ. Fr. 121. 1874—BARLA, Champ. Alp. Marit. 59, pl. 45, f. 11–14. 1890—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:217. 1893; Brit. Fungi, 113. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 43. 1908—RICKEN, Blätterp. 359, pl. 97, f. 2. 1915—REA, Brit. Basid. 238. 1922—WAKEFIELD &

DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 64, pl. 14, f. 2. 1950.

Gyrophila cinerascens QUÉL, Enchir. Fung. 19. 1886.

Tricholoma conglobatum SACC. Syll. Fung. 5: 126. 1887—BARLA, Champ. Alp. Marit. 56, pl. 42, f. 8–15. 1890—RICKEN, Blätterp. 360. 1915—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:72. 1938.

(P. HENNINGS, Hedwigia, 39, Beibl. 156. 1900—松村, 植. 名鑑, 1:177. 1904—白井, 日. 菌. 目. 100. 1905; ed. 2. 665. 1917; ed. 3. 397. 1927—川村, 日. 菌. 図説, n. 148. 1929; 食用菌及有毒菌, f. 35. 1931; 日. 菌. 図鑑, 4:442, f. 428. 1954—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:117. 1931—松浦, 茸類辞典, 14, f. 11. 1933—小林, 日. 隠. 植. 図. 553, pl. 267, f. 1–3. 1939—牧野, 日. 植. 図鑑, 1022, f. 3064. 1940—今関, 原色きのこ, pl. 26. 1942—原, 日. 菌. 目. 369. 1954) Auct. plur. = *L. aggregatum*.

Gyrophila aggregata var. *cinerascens* QUÉL. Fl. Myc. 275. 1888.

Clitocybe cinerascens BRES. Fung. Mang. 59, pl. 35. 1899; Icon. Myc. 3:149. 1928—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 182. 1915.

Tricholoma aggregatum ssp. *cinerascens* KONR. Bull. Soc. Myc. Fr. 47:141. 1931; & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3: pl. 248. 1934.

Lyophyllum decastes ssp. *cinerascens* SING. Agaricales, 165. 1949.

Clitocybe agglomerata KAWAM. Icon. Jap. Fungi, 4:440, f. 427. 1954.

Lyophyllum aggregatum var. *fumosum* KÜHN. in KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 164. 1953.

子実体は塊茎状の太き主株より多数簇出し1団塊となる；傘は径 0.5—1.5 cm，或はそれ以上に及び，初め球状にて丸山形となり，のち開張扁平，鈍頭或は僅か圧低さる，密生する為め互に圧迫し屢々不正形となる；表面は乾燥，湿時僅か粘性，初め暗色なるも，のち帯白～灰色，更に灰褐～帯黒色等となる，乾時淡色にて光沢あり，平滑，無毛或は不明瞭の綿毛あり，外皮は剝げる，縁は薄く，内屈，白粉状，遂に不正形となり浅裂す；肉は白～帯灰色，厚く，緊緻，味温和，臭弱し；褶は彎生～直生，往々下垂歯あり，白色～淡灰色，のちクリーム色，密，やや広幅，稜は全縁；茎は 1—2.5×0.2—0.7 cm，単一，時に分岐，同塴，白色～帯灰色，往々屈曲，繊維状，頂部粉状，弾性，中実；胞子は球形，平滑，無色，径 4—5 μ；紋は白色；可食。

所在及産地

林地—夏秋　　本邦全土—欧．北米

和名 シャカシメジタケ（釈迦湿地茸）

Lyophyllum loricatum (FR.) KÜHNER

クロシメジタケ

KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:336. 1948—SINGER, Agaricales, 165. 1949.

Agaricus cartilagineus BULL. Herb. Fr. pl. 589, f. 2. 1793—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 356. 1801—DECANDOLLE, Fl. Fr. 2:188. 1815—FRIES, Syst. Myc. 1:46. 1821(?); Epicr. Myc. 36. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:70. 1857; Hymen. Eur. 60. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:559. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 101. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:28. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1: pl. 166 (on. 90). 1883—WINTER, Pilze, 1:819. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1: 661. 1889—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):683. 1912.

Agaricus loricatus FR. Epicr. Myc. 37. 1838, Monogr. Hymen. Suec. 1:71. 1857; Hymen. Eur. 60. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:107. 1887—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 33. 1883.

Tricholoma cartilagineum QUÉL. Champ. Jura Vosg. 2:339. 1873; Suppl. 11:388. 1882—GILLET, Champ. Fr. 109, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:37. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:107. 1887—BARLA, Champ. Alp. Marit. 53, pl. 39, f. 6–10. 1890(?)—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:197. 1893; Brit. Fungi, 106. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 37. 1908—RICKEN, Blätterp. 359. 1915—REA, Brit. Basid. 226. 1922—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:70. 1938.

(原，日．菌．目．369. 1954).

Tricholoma loricatum GILL. Champ. Fr. 108. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:37. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:107. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 132. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 51, pl. 38, f. 1–3. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:198. 1893; Brit. Fungi, 106. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 37. 1908.

Gyrophila cartilaginea QUÉL. Enchir. Fung. 13. 1886.

Gyrophila cartilaginea var. *loricata* QUÉL. Enchir. Fung. 13. 1886.

Clitocybe cartilaginea BRES. Fungi Trid. 2: pl. 111. 1892; Icon. Myc. 4: pl. 152. 1927—ROLLAND, Atl. Champ. 29, pl. 24, f. 46. 1910—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 181. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 734. 1918—REA, Brit. Basid. 278. 1922.

Clitocybe cartilaginea var. *Friesii* SACC. Fl. Ital. Crypt. Hymen. 182. 1915.

Lyophyllum aggregatum var. *loricatum* KÜHN. in KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 164. 1953.

子実体は少数 (2—3) 叢生; 傘は径 3.5—10cm, 丸山形, のち開張し鈍頭; 表面は暗褐黒色或は帯黒色, 屢々各所に灰褐色或は淡褐灰色の斑点を混じ, 微小なる黒粒を存す, 軟骨質の外皮を被り, 僅か隆起せる放射状の脈を存す, 縁は永く内屈し, 初め軟毛あり; 肉は初め帯白色, のち褐色を帯び, 脆く, 味及臭よし; 褶は彎状直生, 少しく垂生し, 白色, のち灰或は黄色となり, 更に稜部より暗色となる, 密, 幅 6—10mm, 稜は波状或は微歯を有す; 茎は 3—15×0.5—1.2cm, 上方に僅か狭細或は殆ど同幅にて基部少しく膨大し或は幾分根状となる, 灰白色, のち傘面と殆ど同色, 基部暗色, 類軟骨質, 上部粉状, 基部綿架状或は粗なる長毛あり, 中実; 胞子は広楕円形, 平滑, 5—6×3—4.5μ; 紋は白色; 可食。

所在及産地

林地上. 腐木上又は切株周囲—秋

北海道, 本州—欧. 北米

和名 クロシメジタケ (黒湿地茸) 〔今井〕

Lyophyllum ulmarium (BULL. ex FR.) KÜHNER

シロタモギタケ

KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:369. 1945—SINGER, Agaricales, 166. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 164. 1953. (今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 17, f. 22, pl. 4, f. 22. 1957)

Agaricus ulmarius BULL. Champ. Fr. pl. 510. 1791—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, pl. 67. 1797—FRIES, Syst. Myc. 1 : 186. 1821; Epicr. Myc. 130. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:239. 1857; Hymen. Eur. 167. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:517. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1: 46. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2: pl. 227(no. 271). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:92. 1876—WINTER, Pilze, 1 : 739. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:659. 1889—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):678. 1912.

Pleuropus ulmarius S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:615. 1821.

Pleurotus ulmarius QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:111. 1872; Enchir. Fung. 147. 1886—GILLET, Champ. Fr. 342. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:341. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 320. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:366. 1893; Brit. Fungi, 205. 1911—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 102, f. 105-106. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 91. 1908—RICKEN, Blätterp. 449. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 659, pl. 141. 1918—REA, Brit. Basid. 442. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 6: pl. 281, f. 1. 1928—LANGE, Agar. Denm. 8:26. 1930; Fl. Agar. Dan. 2:68, pl. 64, f. c. 1936—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 99, pl. 30, f. 1. 1950—HEIM, Champ. Eur. 2:224, f. 179, B. 1957. (川村, 日. 菌. 図鑑, 4:410, f. 405. 1954)

Tricholoma ulmarium KARST. Hattsv. 1:46. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 56. 1889—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:78, pl. 2, f. 8. 1938. (原, 日. 菌. 目. 370. 1954)

Dendrosarcus ulmarius KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):464. 1898.

Micromphale ulmarius MURR. N. Am. Fl. 9: 307. 1916.

子実体は叢生或は孤生; 傘は大形～甚だ大形にて径 5—15cm, 或はそれ以上に及ぶ, 外囲円形或は一



a c b

e d

第38図 シロタモギタケ Lyophyllum ulmarium

a. b. 子実体 c. 同裏面 ×1/3
d. 担子柄 e. 胞子 ×400
(大谷氏)

方に偏して不正形となり，丸山形，のち開張し鈍頭～盤状となる；表面は湿潤，白色～帯褐クリーム色，時に中央褐色を帯び，老時鈍き軟皮色となる，往々やや濃色の斑紋を生ず，平滑，無毛或は多少軟毛あり，老時中央に罅裂を生ずることあり，縁は平坦にて，やや波状，老時屢々割裂す；肉は白色，厚く，緊緻，味温和，やや粉臭あり；褶は彎状狭生にて彎入或は円し，やや疎，広幅，白色或は淡黄土色；茎は 3—7×1—2cm，殆ど同幅にて基部紡錘状に狭細し或は肥大す，通常幹側に生ずる関係上偏心生にて屈曲し，切株上に生ぜば中心生となり真直，傘面とほぼ同色，無毛或は僅か又は密に軟毛を生ずることあり，緊緻，弾性，中実；胞子は球形，平滑，無色，径 4—6μ；紋は白色；可食。

所在及産地

ニレ其他の広葉樹生死幹上—秋

北海道，本州—欧．北米

和名 シロタモギタケ（白楡木茸）〔今井〕

ニレタケ（楡茸）〔古名，川村〕

Lyophyllum ambustum (FR.) SING.
ヤケノシメジタケ

SINGER, Agaricales, 166. 1949 (non KÜHN. et ROMAGN. 1953)

Agaricus ambustus FR. Syst. Myc. 1:157. 1821; Epicr. Myc. 97. 1876; Monogr. Hymen. Suec. 1:175. 1854; Hymen. Eur. 127. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:73. 1876—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 73. 1883; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 155b(no. 212). 1883—WINTER, Pilze, 1:770. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:642. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 264. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):642. 1912.

Collybia ambusta QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:238. 1872; Enchir. Fung. 33. 1883(?)—GILLET, Champ. Fr. 308. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:162. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:247. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 218. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:148. 1893; Brit. Basid. 146. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 68. 1908—RICKEN, Blätterp. 403. 1915—REA, Brit. Basid. 341. 1922—A. H. SMITH, Pap. Mich. Acad. Arts. Lett. 21: 147, pl. 21, f. 3. 1935—LANGE, Fl. Agar. Dan. 2: 17, pl. 45, f. G. 1936—JOSSERAND, Bull. Soc. Myc. Fr. 53:182, f. 4–5. 1937—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:286. 1948—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 77. 1950—HEIM, Champ. Eur. 2:268. 1957.

Marasmius ambustus KARST. Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 106. 1889.

Lyophyllum sphaerosporum KÜHNER et ROMAG. Fl. Analyt. Champ. Super. 166, f. 230. 1953—HONGO, Bull. Fac. Lib. Arts. Educ. Shiga Univ. 7:41. f. 1, b. 1957.

子実体は群生或はやや叢生；傘は径 0.7—2cm，丸山形，のち扁平となり，遂に僅か圧低され，微乳頭を存す；表面は無毛，やや吸水性，オリーブ褐色～類暗褐色，縁に於て幾分淡色；縁は微かに線条あり，幼時内屈す；肉は薄く，同色，臭は幾分穀粉状；褶は直生，密，狭幅，傘より淡色，稜は全縁；茎は 1—3×0.1—0.2cm，円柱形或は圧辺され，真直或は屈曲，傘と同色，頂部霜粉状，軟骨質，管状；胞子は球形，平滑，往々微点あり，無色，径 4.5—5.5μ，非糊性；担子柄は 4 胞子，21—24×6—6.5μ；稜及褶側嚢体なし；菌絆あり。

所在及産地

焼上上—夏　　本州—欧．北米

和名 ヤケノシメジタケ（焼野湿地茸）〔本郷〕

Lyophyllum trigonosporum (BRES.) SING.
カクミノシメジタケ

KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:368. 1948—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 164. 1953. (ut KÜHN.)

Clitocybe semitalis var. *trigonospora* BRES. Fung. Trid. 1:30, pl. 34. 1883.

Collybia semitalis var. *trigonospora* QUÉL. Enchir. Fung. 28. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5:204. 1887.

Agaricus transformis BRITZ. Hymen. Südbay. 9:3, f. 546. 1898.

Tricholoma transforme SACC. Syll. Fung. 11: 12. 1895; 21:24. 1912.

Collybia fumosa var. *trigonospora* QUÉL. Champ. Jura Vosg. Suppl. 21:2. 1897.

Collybia trigonospora BATAILLE, Bull. Soc. Myc. Fr. 27:371. 1911.

Clitocybe transformis MAIRE, Bull. Soc. Myc. Fr. 27:408. 1911.

Tricholoma trigonosporum RICKEN, Blätterp. 38. 1915—KONRAD, Bull. Soc. Myc. Fr. 47:144. 1931; & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3:pl. 249. 1934—HEIM, Champ. Eur. 2:307, f. 222, B. 1957. (IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 55:444. 1941)

Clitocybe trigonospora SACC. Fl. Ital. Crypt. Hymen. 185. 1915—BRESADOLA, Icon. Myc. 4: pl. 186. 1927—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:88, pl. 39, f. B. 1935.

Lyophyllum transforme SING. Agaricales, 166. 1949.

子実体は群生し，屢々叢生；傘は径 3.5—7 cm，或はそれ以上に及び，鐘状丸山形，のち開張し中央窪む；表面は乾燥，初め粉状，のち無毛，灰黄土色，焦茶色，褐黒色等にて褪色せず，縁は薄く，初め内屈し，粉状，のち屢々波曲し，浅裂す；肉はやや柔軟，灰白色，皮下淡焦茶色，傷によりて黒変す，無味無臭；褶は類垂生或は彎状直生，灰色，煤色或は淡藁色，擦傷により褐黒色となる，やや密，広幅；茎は 2.5—5×0.5—1.5 cm，同幅にて基部狭細或は球根状に肥大し，稀に束状となる，繊維状線条あり，のち無毛となる，頂部粉状，帯白色，のち灰色，淡藁色にて遂に黒色となる，充塞のち中空；胞子は3角形，平滑，無色，8—10×5—7 μ；胞子紋は白色。

所 在 及 産 地

林内地上—秋　　本州—欧

和 名　カクミノシメジタケ（角実湿地茸）〔今井〕

Lyophyllum semitale (FR.) KÜHNER
スミゾメシメジタケ

KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:367. 1948—SINGER, Agaricales, 167. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 164. 1953.

Agaricus semitalis FR. Syst. Myc. 1:117. 1821; Epicr. Myc. 82. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1: 146. 1857; Hymen. Eur. 110. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:64. 1876—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 63. 1883; Illus. Brit. Fungi, 2:292 (no. 184). 1888—WINTER, Pilze, 1:782. 1884—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 265. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):653. 1912.

Collybia semitalis QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:92. 1872; Enchir. Fung. 27. 1886—GILLET, Champ. Fr. 314. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:141. 1979—SACCARDO, Syll. Fung. 5:204. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 228. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:121. 1893; Brit. Fungi, 137. 1889—W. G. SMITH, Brit. Basid. 60. 1908—REA, Brit. Basid. 329. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 4:pl. 196. 1927.

Marasmius semitalis KARST. Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 100. 1889.

Tricholoma semitale KARST. Krit. Oefv. Finl. Basid. Tillägg, 1:179. 1892—RICKEN, Blätterp. 358. 1914—KONRAD, Bull. Soc. Myc. Fr. 41:40. 1925; & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3:pl. 251. 1926—HEIM, Champ. Eur. 2:307. 1957.

（今関及土岐，林．試．研．報．67:49, f. 9. 1954）

子実体は叢生；傘は径 3.5—4 cm，或はそれ以上に及び，鐘状丸山形，のち開張し，中丘を存し，或は圧低さる；表面はやや湿潤性，帯褐鼠色，のち淡色となる，乾時褪色す，無毛，平滑或は内生繊維あり，外皮剝げ易し，縁は初め内屈し，湿時線条あり；肉は薄く，やや強靱，白色にて淡鼠色を帯ぶ，傷によりて黒変す，臭は不良，味僅か苦し；褶は彎生或は狭生，白色にて淡鼠色を帯び，傷によりて黒変す，やや疎，広幅，稜は波状；茎は 3—5×0.5—1 cm，殆ど同幅或は基部僅か太く，帯白鼠色，繊維状，頂部に細鱗片を有し，基部に長き白粗毛を密生す，やや軟骨質，充塞，のち中空；胞子は卵形にて一端尖り，無色，平滑，6.5—9×4—4.5 μ；胞子紋は白色；菌絆多し；可食。

所 在 及 産 地

林地—秋　　本州—欧

和 名　スミゾメシメジタケ

（墨染湿地茸）〔今関及土岐〕

Calocybe KÜHNER
ユキワリタケ属

KÜHNER, Bull. Mens. Soc. Linn. Lyon, 7:211. 1938—SINGER, Agaricales, 167. 1949.

科の性質に同じくして，傘は常に鮮色を呈し，灰，暗褐或は焦茶等の暗色ならず，或は色素少し，往々色素は結晶となり附着す；胞子は常に小形にて長さ 7 μ 以下，稀に之れより長きときは通常刺を有す；上表皮層は屢々細胞状；被膜は存在或は屢々欠如す；地上，腐木上生；裸実；温帯及熱帯，特に米国に多し；約 13 種を知らる，良食用菌を含む。

（本属名は kalos〔希〕（美しき），kybos〔希〕（六面体，骰子，頭より出づ）

基準種　*C. gambosa* (FR.) SING.

本邦既知種　ユキワリタケ　***C. gambosa***　(94)

Calocybe gambosa (FR.) SING.
ユキワリタケ

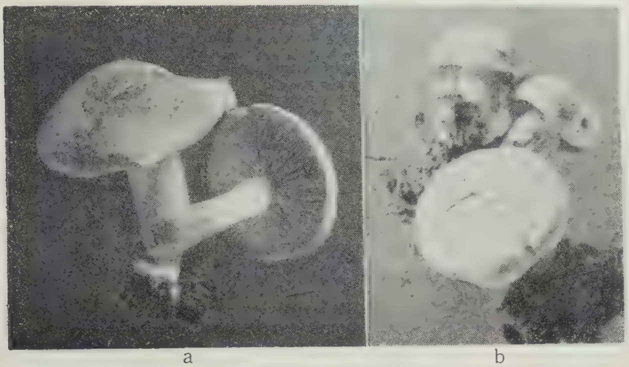
SINGER, Agaricales, 168. 1949.

Agaricus Georgii L. Sp. Plant. 2:1173. 1753—FRIES, Epicr. Myc. 43. 1838; Hymen. Eur. 67. 1874—WINTER, Pilze, 1:814. 1884—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 267. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze. 2(2):679. 1912.

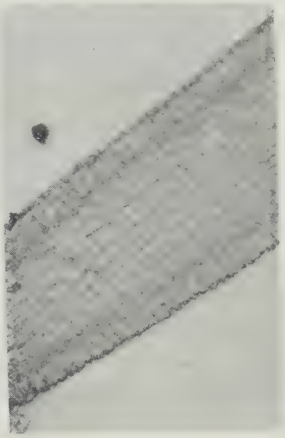
Agaricus mouceron BULL. Herb. Fr. pl. 142. 1791.

Agaricus graveolens SOW. Col. Fig. Engl. Fungi, 3:pl. 281. 1803.

Agaricus gambosus FR. Syst. Myc. 1:50. 1821; Epicr. Myc. 43. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1: 82. 1857; Hymen. Eur. 66. 1874—RABENHORST,



a b



c

第39図　ユキワリタケ Calocybe gambosa
a. b. 子実体　×1/3　　c．褶横断面の一部　×200
（大谷氏）

Deut. Krypt. Fl. 1:557. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 104, pl. 4, f. 5. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:31. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 63 (no. 103). 1883—WINTER, Pilze. 1:814. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:659. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:267. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):679, pl. 126, f. 1-3. 1912.

Agaricus albellus FR. Epicr. Myc. 43. 1838; Hymen. Eur. 67. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:32. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 229, (no. 105). 1883—WINTER, Pilze, 1:814. 1884—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):679. 1912.

Tricholoma Georgii QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:81. 1872—SACCARDO, Syll. Fung. 5:120. 1887—BARLA, Champ. Alp. Marit. 55, pl. 41, f. 8–11. 1890—ROLLAND, Atl. Champ. 25, pl. 19, f. 35. 1910—RICKEN, Blätterp. 350, pl. 95, f. 2. 1915—REA, Brit. Basid. 232. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:361. 1948.

Tricholoma albellum QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1 : 81. 1872—KARSTEN, Hattsv. 1 : 45. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:121. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 142. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 55, pl. 41, f. 12–17. 1890—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:208. 1893; Brit. Fungi, 111. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 40. 1908—REA, Brit. Basid. 233. 1922.

Tricholoma gambosum GILL. Champ. Fr. 116, c. ic. 1871—KARSTEN, Hattsv. 1:45. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:120. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 141. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 54, pl. 41, f. 1–7. 1890—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:208. 1893; Brit. Fungi, 109, pl. 8, f. 2. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 40. 1908—REA, Brit. Basid. 232. 1922—LANGE, Agar. Denm. 9:28. 1933; Fl. Agar. Dan. 1:61, pl. 26, f. B. 1935—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:71. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 60, pl. 9, f. 2. 1950.

（川村，日．菌．図説，n. 237. 1929；食用菌及有毒菌，f. 2 (p. 4). 1931—原，日．菌．目．369. 1954）

Gyrophila Georgii QUÉL. Enchir. Fung. 15. 1886.

Tricholoma Mauceron SACC. Fl. Ital. Crypt. Hymen. 140. 1915.

Lyophyllum Georgii SINGER, in KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 162, f. 221. 1953.

子実体は群生或は叢生；傘は径 4—12 cm，半球形，のち丸山形～鉢頭或は殆ど扁平となり，通常不規則に波曲し，時に割裂す；表面は白色，帯白色，黄色，黄灰色或は黄土色，平滑，殆ど無毛或は僅か綿絮あり，縁は内屈し，初め僅か軟毛あり，のち無毛となる；肉は白色，厚く，緊緻，臭及味は新しき穀粉様；褶は彎生，白色，のち微黄色，密，幅 3—6 mm，便腹状；茎は 5—10×1—2 cm，同幅にて基部肥大す，白色，のち微黄色，絹状細繊維あり，頂部白綿絮状，中実；胞子は類楕円形，平滑，5—6×3—4 μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地
林地及草原—初夏　北海道，本州—欧．亜(支)

和名 ユキワリタケ（雪割茸）〔古名〕

Asterophora DITMAR ex S. F. GRAY
ヤグラタケ属

DITMAR, in SCHRADER, Jour. Bot. 3(3):56. 1809—S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:635. 1821—FRIES, Syst. Orbis Veg. 151. 1825; Syst. Myc. 3:205. 1829—SINGER, Agaricales, 170. 1949.

Nyctalis FRIES, Syst. Orbis Veg. 78. 1825; Stirpes Agri Fems. 3:58. 1825; Gen. Hymen. 9. 1836.

族の性質に同じ；傘は鮮色ならず；褶は屢々幾分退化し，寧ろ厚くして鈍稜，狭幅にて疎生なり，胞子の成生は厚膜胞子形成が盛なればなる程退化す；厚膜胞子は常に菌糸体及び子実体に生じ，傘の表面下より最上層中，或は傘の下部及び托中に存す；厚膜胞子は褐色，星芒形或は平滑；monomethylparamidophenol は肉に対し甚しく陽性なり；ベニタケ科の菌に寄生す；裸実；欧，北米，キューバ，日本等に産す，約2種を知らる，経済的価値なし。

（本属名は aster〔希〕(星)，phoreo〔希〕(荷う）より出づ)

基準種 *A. lycoperdoides* (BULL.) DITMAR ex S.F. GRAY

本邦既知種検索表

A．厚膜胞子は傘面に生じ，黄褐～茶褐色粉末に被わる；傘は径 1—3 cm；茎は 2—4×0.2—0.5 cm；厚膜胞子は著しき突起を有す；殆どクロハツ腐体上に生ず。

ヤグラタケ ***A. lycoperdoides*** (96)

B．厚膜胞子は多くは褶面に生じ，平滑；傘は 2—3 cm，絹状灰白色；茎は細長，3—5×0.1—0.2 cm；多くはクロハツ以外のベニタケ属種腐品上に生ず。

ナガエノヤグラタケ ***A. parasitica*** (97)

Asterophora lycoperdoides (BULL.) DITMAR ex S.F. GRAY
ヤグラタケ

DITMAR, in SCHRADER, Jour. Bot. 3(3): 56, pl. 2, f. 2. 1809; in STURM, Deut. Fl. 3(1): 53, pl. 26. 1817—FRIES, Obs. Myc. 2: 367. 1818; Syst. Myc. 3: 206. 1829—S.F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1: 635. 1821—BONORDEN, Handb. Allgem. Myk. 134, pl. 11, f. 224. 1851—CORDA, Icon. Fung. 6: 2, pl. 1, f. 5. 1854—O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2): 444. 1893—SINGER, Agaricales, 171. 1949.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，18, f. 25; pl. 4, f. 25. 1957）

Elvela clavus SCHAEFF. Fung. Bavar. 3: pl. 279. 1770.

Agaricus lycoperdonoides BULL. Herb. Fr. pl. 516, f. 1. 1790.

Agaricus lycoperdoides PERS. Syn. Meth. Fung. 325. 1801; Myc. Eur. 3: 127. 1828—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi. 3: pl. 383. 1803—NEES, Syst. Pilze Schw. 206, f. 194, 1817.

Merulius lycoperdoides DC. Fl. Fr. 2: 128. 1815.

Asterophora agaricoides FR. Obs. Myc. 2: 367. 1818; Syst. Myc. 3: 205. 1829.

Asterophora physaroides FR. Obs. Myc. 2: 367. 1818; Syst. Myc. 3: 206. 1829—BONORDEN, Handb. Allgem. Myk. 134, pl. 11, f. 225. 1851.

Asterophora trichioides FR. Obs. Myc. 2: 367. 1818.

Onygena agaricina SCHW. Syn. Fung. Car. 39. 1822.

Nyctalis asterophora FR. Epicr. Myc. 371. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2: 214. 1863; Hymen. Eur. 463. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1: 447. 1844—DEBARY, Bot. Zeit. 17: 385, 397, pl. 13, f. 1–2. 1859—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 217. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1: 231. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7: pl. 1132, f. b (no. 1067). 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1: 218, pl. 13, f. 4. (var. *pusilla*). 1872; 3: 546. 1875; Enchir. Fung. 141. 1886—GILLET, Champ. Fr. 357, c. ic. 1874—WINTER, Pilze, 1: 516. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 501. 1887—KARSTEN, Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 269. 1889. pr. p.—BREFELD, Unters. Gesam. Mykol. 8: 77, pl. 5. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2: 330, f. 5 (p. 301). 1893; Brit. Fungi, 218. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 128. 1900—LLOYD, Myc. Writ. 1: 61, f. 29. 1901—W.G. SMITH, Brit. Basid. 299, f. 65. 1908—RICKEN, Blätterp. 8, pl. 2, f. 6. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 32, pl. 1. 1918—REA, Brit. Basid. 541. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 10: pl. 486, f. 2. 1929—LANGE, Agar. Denm. 9: 42, pl. 1, f. d_{1-4}. (forma *major*). 1933; Fl. Agar. Dan. 5: 8, pl. 162, f. F. 1940—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4: 362, f. 2. 1935; Agaricales, 1: 288. 1948—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 212, pl. 25, f. 8. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 167. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2: 272, f. 202, A. 1957.

（田中，植．雑．1: 187. 1887—KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 9, f. 7–10. 1914；日．菌．図説，n. 20. 1929；日．菌．図鑑，3: 318, f. 315. 1954—白井，日．菌．目．ed. 2. 395. 1917; ed. 3. 236. 1927—小林，日．隠．植．図．515, pl. 248, f. 5–7. 1939—原，日．菌．目．227. 1954）

Asterophora agaricicola CORDA, Icon. Fung. 4: 8, pl. 3, f. 24. 1840—TULASNE, Ann. Sci. Nat. Bot. III, 20: 27. 1853—SACCARDO, Syll. Fung. 4: 148. 1886.

Astrotrogus asterophorus FR. Summa Veg. Scand. 497. 1849.

Asterotrichum Dittmari BONORDEN, Handb. Allgem. Myk. 82. 1851.

Hypomyces asterophorus TULASNE. Ann. Sci. Nat. Bot. IV, 13: 14. 1860; Sel. Fung. Carpol. 3: 54, pl. 9. 1865.

Nyctalis parasitica KARST. Hattsv. 1: 481. 1879. pr. p.

Nyctalis lycoperdonoides SCHROET. Pilze Schles.

1:525. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 210, f. 109, C, E. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):305, pl. 52, f. 3–4. 1912—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 458. 1915.

(安田，植．雑．28:521. 1914—広江，応用菌蕈学，1121, f. 745–746. 1941)

Astrotrogus lycoperdodes KUNTZE, Rev. Gen. 3(2):443. 1898.

(松浦，茸類辞典，214, f. 256. 1933—今関，原色きのこ，pl. 51 (右). 1942)

Asterophora clavus MURR. Mycologia, 6:163, pl. 129. 1914

子実体は叢生或は散生；傘は径 1—3cm，初め殆ど球状，のち半球形より饅頭形となる；表面は白色なるも，速に黄褐～茶褐色なる厚膜胞子の粉末に蔽わる；肉は厚く，白色にて灰色を帯ぶ，味及臭は穀粉様；褶は早く多数の厚膜胞子成生のために屢々発達を抑制さる，通常幼品に於て認められ，殆ど直生，白色，のち汚白色，疎，狭幅，厚くして鈍稜，往々叉状をなす；茎は 2—4×0.2—0.5cm，殆ど同幅，白色にて茶褐色を帯ぶ，粉状或は絹状，屢々屈曲，時に捩曲す，充塞；胞子は楕円形，平滑，無色，5—6×3.5—4μ；厚膜胞子は傘面に多生し，厚膜，類球形にて多くの鈍頭円錐状突起を全面に粗生し金米糖状を呈す，実体は径約 12—18μ，時に 20μ，に及ぶ，帯褐色。

所在及産地

クロハツタケ (*Russula nigricans*) 等ベニタケ類の腐品上—夏秋　　北海道，本州—欧．北米

和名 ヤグラタケ（櫓茸）〔古名〕

Asterophora parasitica (BULL. ex FR.) O. KUNTZE

ナガエノヤグラタケ

KUNTZE, Rev. Gen. 3(2):445. 1898—SINGER, Agaricales, 171. 1949.

(今関及本郷，原色日．菌．図鑑，19. 1957)

Agaricus parasiticus BULL. Herb. Fr. pl. 574, f. 2. 1791—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 371. 1801—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, 3: pl. 343. 1803—FRIES, Syst. Myc. 1:135. 1821.

Nyctalis parasitica FR. Epicr. Myc. 372. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:214. 1863; Hymen. Eur. 464. 1874—DEBARY, Bot. Zeit. 17:397, pl. 13, f. 12–19. 1859—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 218. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:231. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7: pl. 1113 (no. 1068). 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:218, pl. 13, f. 3. 1872; Enchir. Fung. 141. 1886—GILLET, Champ. Fr. 357, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:228. 1876; Hattsv. 1:481. 1879. pr. p.—SACCARDO, Syll. Fung. 5:502. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 459. 1915—WINTER, Pilze, 1:516. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 525. 1889—BREFELD, Unters. Gesam. Mykol. 8:91, pl. 6. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:329. 1893; Brit. Fungi, 217. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 209. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 128. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 299. 1908—RICKEN, Blätterp. 8, pl. 2, f. 7. 1915—REA, Brit. Basid. 541. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 10: pl. 487, f. 1. 1929—LANGE, Agar. Denm. 9: 43. 1933; Fl. Agar. Dan. 5:9, pl. 162, f. G. 1940—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4: pl. 362, f. 1. 1935; Agaricales, 1:287. 1950—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 212, pl. 25, f. 7. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 167, f. 69. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:272, f. 202, B. 1957.

子実体は叢生；傘は径 2—3cm，円錐状鐘形，のち丸山形～扁平，鈍中丘を有す；表面は初め白色，のち灰色或は帯菫灰色，絹状繊維あり，白粉を被むり，乾時永く銀色を保つ；肉は汚灰褐色，薄く，柔軟，味温和，臭弱くして不快；褶は直生或は有歯垂生，灰白色，のち褐色，疎，狭幅，厚く，不等長，のち纒絡す；茎は管状にて長く，3—5×0.1—0.2cm，同幅或は上方に漸細，白色～灰白色，粉状，屢々屈曲し，基部に毛あり，中空；胞子は楕円状卵形，平滑，無色，5—6×3—4μ；胞子紋は白色；厚膜胞子は多くは褶面に多生し，紡錘状楕円形或は卵形，厚膜，平滑，淡褐色，12—16×7—10μ。

所在及産地

ベニタケ属 (*Russula*) 及チチタケ属 (*Lactaria*) 種の腐品上—夏秋　　本州—欧

和名 ナガエノヤグラタケ（長茎櫓茸）〔川村〕

(II) Clitocybeae FAYOD カヤタケ族

FAYOD, Ann. Sci. Nat. VII, 9:344. 1889 (ut *Clitocybés*)—SINGER, Agaricales, 171. 1949.

Tricholomés, l. c. 376. 1889—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:64. 1938 (ut *Tricholomateae*)

Collybiées KONR. et MAUBL. Icon. Sel. Fung. 6:235. 1934—IMAI, l. c. 113. 1938. (ut *Collybieae*)

Armillarieae IMAI, l. c. 46. 1938.

担子柄は正常にてカーミン着色顆粒を含まず；胞子，組織及び上表皮層の菌糸は非糊性；稜は縦裂せず；托実質は明かに両側型ならず；上表皮層の分化は著しからず（ナラタケ属 *Armillariella* 及びシメジタケ属 *Tricholoma* の内菌絆を有せざる種類を除く）；擬嚢体，分泌嚢体及び著しき嚢状体欠如；カヤタケ（*Clitocybe*）或はシメジタケ（*Tricholoma*）型，稀にヒラタケ（*Pleurotus*）型（この時は胞子は円筒形ならずして肉は膠化せず），或はヒダサカズキタケ（*Omphalia*）型（この時は嚢状体なし）或はエノキタケ（*Collybia*）～ホウライタケ（*Marasmius*）型（この時は表皮層に全く球嚢なし）；根状束は白色或は黒色（後者の場合は菌糸間に菌絆なく，又肉は膠化せず，又子実体はホウライタケ型ならず）；托は常に熟品に於て能く発達す；種々なる基物上に活物或は死物寄生或は共存す；2亜族18属を収む。

本邦既知属検索表

A．菌糸は菌絆を有す。

(1) カヤタケ亜族 **Clitocybinae** (98)

a．稜嚢体は著しく大形膨大にて本族中に類例なし，但し薄膜にて乾燥せば速に崩壊す，稜は異質；胞子は通常短かくして小形～中形，屢々厚膜を有す；傘は肉質；茎は中心生。

サマツタケモドキ属 **Tricholomopsis** (114)

b．稜嚢体は著大ならず。

α. 子実体は発光性；胞子は大形，球形；胞子紋純白ならず；被膜を有す；ヒラタケ型；材上生。

ツキヨタケ属 **Lampteromyces** (102)

β. 子実体は発光せず。

Ⅰ．ヒラタケ型；胞子小形，胞子紋白色，被膜なし；托実質は不整型；質は強靱にて再生す；色素なし；材上生。

スギヒラタケ属 **Pleurocybella** (124)

Ⅱ．ヒラタケ型ならず，再生せず，若し質強靱にて再生するものなれば褶は前者の如く垂生せず。

1．托実質は甚だ不整或は混淆型；傘は非吸水性；肉は柔肉質にて薄し；褶は疎；ヒダサカズキタケ型（ヒダサカズキタケ属の一部）

2．托実質は整型或は類整型。

甲．褶はむしろ厚くして疎，屢々青，紫，赤，紅，黄色等の色彩を有す；胞子は球形にて有刺，或は多少円筒形にて平滑；被膜なし。

キツネタケ属 **Laccaria** (98)

乙．褶は薄くして密。

い．茎は軟骨質ならず。

イ．褶は直生～深く垂生；カヤタケ型；胞子平滑，或は胞子紋白色。

カヤタケ属 **Clitocybe** (103)

ロ．褶は凹入彎生

* 胞子粗面；胞子紋淡汚桃色。

ムラサキシメジタケ属 **Lepista** (112)

* 胞子平滑；胞子純白色，稀に甚だ淡きクリーム色。（シメジタケ属の一部）

ろ．茎は細くて管状，外皮軟骨質にて強靱；褶は類離生～直生，時に幾分彎生；胞子紋は屢々ピンク色を帯ぶ。

モリノカレバタケ属 **Collybia** (117)

B．菌糸に菌絆なし。

(2) キシメジタケ亜族 **Tricholomatinae** (126)

a．褶は垂生或は直状垂生。

α. 胞子紋は白色；胞子膜は薄し；茎は幅 4 mm 以下；被膜及黒色根状束なし。

ヒダサカズキタケ属 **Omphalina** (126)

β. 胞子紋は屢々有色にて多くは帯黄色；胞子膜は成時往々むしろ厚し；茎は幅 4 mm 以上；被膜及黒色根状束を有す；カヤタケ型。

ナラタケ属 **Armillariella** (129)

b．褶は著しく凹入彎生，稀に狭生；胞子紋はピンク色ならず；多くは地上生。

キシメジタケ属 **Tricholoma** (131)

(1) Clitocybinae Sing. カヤタケ亜族

Singer, Agaricales, 171. 1949.

族の性質に同じ，菌絆は正常形に於ては常に存在す。

Laccaria Berk. et Br.

キツネタケ属

Berkeley & Broome, Ann. Mag. Nat. Hist. 5:370. 1883—Singer, Agaricales, 174. 1949.

Russuliopsis SCHROETER, Pilze Schles. 1:622. 1889.

傘は乾燥～類吸水性，無毛～小鱗片あり，平滑～湿時透明線条あり；表皮層は著しき分化なし；褶は寧ろ厚くして幾分疎生，中位に広幅～甚だ広幅，通常鮮色にて青色，ライラック色，菫色，酒赤色，バラ色，黄色；托実質は確然たる整型或は殆ど整型；胞子は円壔形にて大形（長さ 11—22μ），平滑なるか，或は短楕円形～球形にて有刺，刺は往々屈曲し，螺旋状に配列し，非糊性；胞子紋は白色或は淡菫色；担子柄は屢々2胞子，然らざれば4胞子，カーミン着色顆粒を含まず；多くは稜嚢体を有す；肉は繊維状肉質，再生せず，非糊性；色素は著しからず，菌絆あり；ferric sulphate にて明かなる濃灰色の変色を起す；陽地，林地，山地等の耕土，砂土，密蘚中，腐木上，落葉上等に生ず；半被実；汎布，約10種を知らる，食用菌。

（本属名は lac〔希〕(乳)，或は laccatus〔羅〕(光沢ある）より出づ）

基準種　*L. laccata* (SCOP. ex FR.) BERK. et BR.

本邦既知種検索表

A. 子実体は鮭肉色～肉色，褐色
  a. 担子柄は4胞子を着く—傘は径 1.5—3cm，縁に線条あり；茎は 3—5×0.2—0.3cm；胞子 8—10μ。　キツネタケ　***L. laccata*** (99)
    ＊ 小形にて傘径 0.5—1.5cm，縁に線条なし；茎は 2.5—3.5×0.1—0.2cm。　ヒメキツネタケ　f. ***minuta*** (100)
    ＊ 大形にて傘径 4—7cm，縁に線条あり；茎は長く 10×0.5cm；胞子 7.5—9×7—7.5μ。　オオキツネタケ　var. ***proxima*** (100)
  b. 担子柄は2胞子を着く—傘は径0.6—1.3cm，縁に線条あり；茎は 1—2.3×0.1cm；胞子 9.5—12.5μ。　ヒメキツネタケモドキ　***L. tortilis*** (100)
B. 子実体は紫水晶色，キツネタケと同形同大，胞子 7.5—9μ；担子柄は4胞子を着く。　ウラムラサキタケ　***L. amethystea*** (101)
C. 子実体は鼠色～やや灰褐色，傘径 1～1.5cm，湿時線条あり；茎は 1.5—2.5×0.15—0.25cm；胞子 7.5～10μ；担子柄は4胞子？　ギンコタケ　***L. murina*** (102)

Laccaria laccata (SCOP. ex FR.) BERK. et BR.
キツネタケ

BERKELEY & BROOME, Ann. Mag. Nat. Hist. V, 12:371. 1883; Grev. 12:70. 1884—KARSTEN, Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 73. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:443. 1893. pr. p.; Brit. Fungi, 195. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 158. 1900—ROLLAND, Atl. Champ. 31, pl. 27, f. 53. 1910. pr. p.—MURRILL, Mycologia, 3:99, pl. 40, f. 4. 1911; N. Am. Fl. 10:2. 1914—REA, Brit. Basid. 290. 1922—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1:69. 1934—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 6: 236. 1934; Agaricales, 1:409. 1948—IMAI, Jour. Facul. Agric. Hokkaido Imp. Univ. 43:89. 1938—SINGER, Agaricales, 176. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 73, pl. 20, f. 2. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 131, f. 185. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2: 283. 1957.

（今関，原色きのこ，pl. 31（左）. 1942；及土岐，林. 試. 研. 報. 67:44. 1954—原，日. 菌. 目. 173. 1954—松田及本郷，植. 研. 雑. 30: 259. 1955—今関及本郷，原色日. 菌. 図鑑，19, f. 26, pl. 5, f. 26. 1957）

Agaricus farinaceus HUDSON, Fl. Angl. 616. 1762—SOWERBY, Col. Fig. 2:pl. 208. 1799—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 453. 1801.

Agaricus laccatus SCOP. Fl. Carn. ed. 2. 2:444. 1772—FRIES, Syst. Myc. 1:106. 1821; Epicr. Myc. 79. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:141. 1857; Hymen. Eur. 108. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:537. 1844. pr. p.—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 113, pl. 5, f. 3. 1860. pr. p.—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:44. 1871. pr. p.; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 139 (no. 179). 1883. pr. p.—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:63. 1876—WINTER, Pilze, 1:785. 1884. pr. p.—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 265. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):655, pl. 120, f. 5. 1912. pr. p.

Agaricus rosellus BATSCH, Elench. Fung. Cont. 1:123, pl. 19, f. 99. 1786.

Agaricus farinaceus β. rosellus PERS. Syn. Meth. Fung. 453. 1801.

Omphalia farinacea GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:612. 1821.

Clitocybe laccata QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1: 91. 1872. pr. p.—SACCARDO, Syll. Fung. 5:197. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 206. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 79, pl. 64, f. 1–5. 1892—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 89. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 57. 1908—RICKEN, Blätterp. 382, pl. 100, f. 2. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 747. 1918—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 62, pl. 23. 1927. pr. p.—BRESADOLA, Icon. Myc. 4:pl. 187, f. 1. 1928.

（白井，日. 菌. 目. 22. 1905; ed. 2. 145. 1917; ed. 3. 86. 1927—川村，日. 菌. 図説，n. 222. 1929；日. 菌. 図鑑，4:422, f. 416. 1954—MATSUURA & KA-

NADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:117. 1931—松浦，菲類辞典，82, f. 90, 1933; 応用菌蕈学，f. 807（左）(p. 1191). 1941—原，日．菌．目．74. 1954)

Clitocybe laccata var. *farinacea* GILL. Champ. Fr. 174. c. ic. 1874.

Camarophyllus laccatus KARST. Hattsv. 1:231. 1879. pr. p.

Omphalia laccata QUÉL. Enchir. Fung. 26. 1886. pr. p.

Collybia laccata QUÉL. Fl. Myc. 238. 1888.

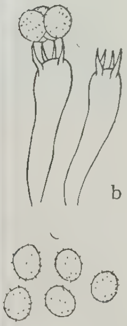
Russuliopsis laccata a. *rosella* SCHROET. Pilze Schles. 1:623. 1889.

Clitocybe proxima BARLA, Champ. Alp. Marit. 80, pl. 64, f. 17–20. 1892.

子実体は群生或は散生；傘は径 1.5—3cm，或はそれ以上に及び，丸山形，のち扁平となり，往々中窩あり；表面は吸水性，鮭肉色，淡桃色或は帯褐桃色，乾時黄土黄色に褪色す，初め無毛，のち屢々微細鱗片に破る，時に絹状，縁は往々波状或は縮み，



a



b

c

第 40 図　キツネタケ Laccaria laccata
a．子実体 ×2/3　　b．担子柄
c．胞子 ×500　　（大谷氏）

条溝ありてやや扇襞状をなす；肉は赤褐色，やや薄く，茎肉は緊緻なり，味温和，臭よし；褶は直生，狭生，類彎生或は垂下歯にて直生，肉色，のち白粉状，疎，やや広幅，厚し；茎は 3—5×0.2—0.3cm，殆ど同幅，真直或は屈曲又は捩曲し，傘面と同色，繊維状，基部に白絨毛あり，緊緻，中空；担子柄は 4 胞子；胞子は球形，有刺，径 8—10μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地

林地或は樹下地上—夏秋

北海道，本州，九州—欧．北米．濠．亜（支．小亜）

和名　キツネタケ（狐茸）〔川村〕

f. **minuta** IMAI

ヒメキツネタケ

IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:90. 1938.

（原，日．菌．目．173. 1954）

子実体は群生；原種に比して小形にて傘は径 0.5—1.5cm，無線条或は僅かに線条あり；茎は 2.5—3.5×0.1—0.2cm，基部少しく肥大す；担子柄は 4 胞子。

所在及産地

林地—夏　　北海道，本州

和名　ヒメキツネタケ（姫狐茸）〔今井〕

var. **proxima** (BOUD.) MAIRE

オオキツネタケ

R. MAIRE, Bull. Soc. Myc. Fr. 25:LV. 1908—REA, Brit. Basid. 290. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 6:237. 1934—SINGER, Agaricales, 176. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 73, pl. 20, f. 2b. 1950.

（今関及本郷，日．菌．図鑑，19. 1957）

Clitocybe proxima BOUD. Bull. Soc. Bot. Fr. 28: 91, pl. 2, f. 2. 1881—SACCARDO, Syll. Fung. 9:26. 1891; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 207. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 80, pl. 64, f. 17–20. 1892.

Laccaria proxima PAT. Ess. Tax. 158. 1900—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 131. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:283. 1957.

Clitocybe laccata var. *proxima* BRES. Icon. Myc. 4:pl. 188. 1927—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:89, pl. 40, f. E. 1935.

子実体はむしろ大形にて高く，傘は径 4—7cm，扁平丸山形，黄褐色，甚だ吸水性，乾時黄褐黄土色，粉状鱗被あり，薄肉；褶は直生，広幅，疎，帯紅肉色，稜は腐蝕，老時粉状；茎は長く 12cm に及ぶ，通常 10×0.5cm，幾分棍棒形，粗き纖維線条あり，傘面と同色，基部に白軟毛あり，味少しく苦し；担子柄は 4 胞子；胞子は卵状球形，細刺あり，7.5—9×7—7.5μ；稜に散生せる縮毛あり。

所在及産地

林内水蘚間—夏秋　　本州—欧

和名　オオキツネタケ（大狐茸）〔今関及本郷〕

Laccaria tortilis (BOLT. ex FR.) PAT.

ヒメキツネタケモドキ

PATOUILLARD, Hymen. Eur. 97. 1887; Ess. Tax. 158. 1900—MURRILL, N. Am. Fl. 10:2. 1914—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 6:

237. 1934; Agaricales, 1:409. 1948—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 73. 1950—HONGO, Bull. Fac. Lib. Arts. Educ. Shiga Univ. 7:42, f. 1, c. 1957—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 131. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2: 283. 1957.

（小林，日．隠．植．図．531, pl. 256, f. 4–6. 1939—原，日．菌．目．74. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，19, f. 28, pl. 5, f. 28. 1957）

Agaricus tortilis BOLT. Hist. Fung. 1:41, pl. 41, f. A. 1788—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 454. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:111. 1821; Epicr. Myc. 80. 1838; Hymen. Eur. 109. 1874—WINTER, Pilze, 1:784. 1884—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 655. 1912.

Clitocybe tortilis GILL. Champ. Fr. 174. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:198. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 208. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 748. 1918—BRESADOLA, Icon. Myc. 4:pl. 187, f. 3. 1927—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:90, pl. 40, f. D. 1935.

（松浦，茸類辞典，82, f. 91. 1933）

Omphalina laccata var. *tortilis* QUÉL. Enchir. Fung. 26. 1886.

Collybia laccata var. *tortilis* QUÉL. Fl. Myc. 238. 1888.

Clitocybe laccata var. *tortilis* BARLA, Champ. Alp. Marit. 79, pl. 64, f. 14–16. 1892—RICKEN, Blätterp. 382, pl. 100, f. c. 1915.

子実体は群生；傘は径 0.6—1.3cm，丸山形，のち扁平にて広く圧低さる；表面は吸水性，無毛或は微細粉鱗被あり，黄褐肉色，濃色の中盤まで透明線条あり；縁は波状；肉は薄く，膜質，傘表と同色，味温和，臭微なり；褶は直生或は直状類垂生，少数，淡紅肉色，のち白粉状となり，厚く，蠟質，幅 1—3 mm，稜は全縁；茎は 1—2.3×0.08—0.12cm，同幅或は下方僅か太く，無毛或は僅か繊維状，傘面と同色，充塞；胞子は球形，有刺（刺は長さ 1.5—2.3 μ），径 9.5—12.5μ，非糊性；担子柄は2胞子，37—43×11—13μ。

所在及産地

砂地—春秋　　　本州—欧．北米

和名 ヒメキツネタケモドキ

（擬姫狐茸）〔今関及本郷〕

Laccaria amethystea (BULL. ex S. F. GRAY) MURR.

ウラムラサキタケ

MURRILL, N. Am. Fl. 10:1. 1914; Mycologia, 10:178, pl. 8, f. 2. 1918—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:91. 1938.

（今関，原色きのこ，pl. 31(中). 1942；及土岐，林．試．研．報．67:44. 1954—松田及本郷，植．研．雑．30: 259. 1955）

Agaricus amethysteus BULL. Herb. Fr. pl. 198. 1784; pl. 570, f. 1G. 1791—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 465. 1801—DECANDOLLE, Fl. Fr. 2:172. 1815.

Agaricus amethystinus BOLT. Hist. Fung. Halif. p. 63. 1788—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, 2:pl. 137. 1799.

Agaricus laccatus FR. Syst. Myc. 1:107. 1821 [b. *pileo amethystinus*]; Epicr. Myc. 79. 1838 [d. *obscure violacea*]; Hymen. Eur. 108. 1874 [d. *obscure violacea*]—Auct. plur. pr. p.

Omphalia amethystea GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:614. 1821.

Clitocybe laccata var. *amethistea* GILL. Champ. Fl. 174, c. ic. 1874.

Laccaria amethystina BERK. et BR. in COOKE, Grev. 12:70. 1884—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4:237. 1934; Agaricales, 1:410. 1948—SINGER, Agaricales, 176. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 131. 1953.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，19, f. 27, pl. 5, f. 27. 1957）

Collybia amethystina QUÉL. Fr. Myc. 238. 1888.

Russuliopsis laccata b. *amethystina* SCHROET. Pilze Schles. 1:623. 1889.

Clitocybe laccata var. *d. obsure violacea* BARLA, Champ. Alp. Marit. 79, pl. 64, f. 11–13. 1892.

Laccaria laccata var. *amethystina* MASS. Brit. Fungi, 195. 1911—KAUFFMAN, Agar. Mich. 747. 1918—REA, Brit. Basid. 290. 1922—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 73, pl. 20, f. 3. 1950.

Clitocybe laccata var. *amethystina* RICKEN, Blätterp. 382, pl. 100, f. a. 1915—BRESADOLA, Icon. Myc. 4:pl. 187, f. 2. 1927—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:89, pl. 40, f. B. 1935—HEIM. Champ. Eur. 2:283. 1957.

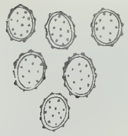
（川村，日．菌．図説，n. 28. 1929；日．菌．図鑑，4: 423, f. 417–418. 1954—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:117. 1931—松浦，茸類辞典，85, f. 94. 1933—原，日．菌．目．74. 1954）

Clitocybe amethystea SACC. Fl. Ital. Crypt. Hymen. 206. 1915.

子実体は孤生或は群生；傘は径 1.5—3cm，広丸山形，中窩を有し，往々深く陥入し茎の中空に連る；表面は吸水性，湿時暗褐色或は汚紫色，乾時茶褐色より遂に淡黄褐色となる，光沢なく，外皮は屢々細鱗片に砕け，或は絹状なり，時に波曲皺縮し不正形となり，周辺線条あり；肉は紫色，老時褪色す，幾分薄く，緊緻；褶は直生或は垂生，濃紫色或は暗灰



a



b

第41図 ウラムラサキタケ Laccaria amethystea

a. 子実体 ×2/3

b. 胞子 ×650

(大谷氏)

紫色にて傘面より永く保有し，老時帯紫茶褐色となる；茎は 3—7×0.2—0.5cm，同幅，傘面と同色或は褶より僅か淡色，繊維状にて，往々捩曲す，中空；担子柄は4胞子；胞子は球形，有刺，径 8—10μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地

林地或は路傍庭園地上—夏秋

北海道，本州，九州—欧．北米．亜(小亜)

和名 ウラムラサキタケ（裏紫茸）〔川村〕

ムラサキゴケ〔方言〕

Laccaria murina IMAI
ギンコタケ

IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido. Imp. Univ. 43:91. 1938.

（原，日．菌．目．173. 1954）

子実体は群生；傘は径 1—1.5cm，丸山形，或は半球形，のち開張し扁平となる；表面は湿時及幼時灰色，乾時鼠色或はやや灰褐色，僅か絨毛を帯ぶ，縁は初め内巻す，湿時線条あるも，乾時平滑となる；肉は鼠色；褶は直生，灰色，のち白粉状，疎，厚し；茎は 1.5—2.5×0.15—0.25cm，同幅或は上方に僅か漸細，殆ど傘面と同色或は少しく淡色，線条あり，下方白色の絨毛あり；胞子は球形，有疣，7.5—10μ；胞子紋は白色。

所在及産地

林地—夏　北海道

和名 ギンコタケ（銀狐茸）〔今井〕

Lampteromyces SING.
ツキヨタケ属

SINGER, Mycologia, 39:79. 1947; Agaricales, 178. 1949.

子実体はヒラタケ(*Pleurotus*)型；明かに色素を有し，寧ろ傘は鮮色，発光性あり；傘は粘性或は吸水性ならず，繊維状；褶は深く垂生；担子柄はカーミン着色顆粒なし；胞子紋は帯白灰色；胞子は無色，平滑，非糊性，屢々厚膜，球形，甚だ大形；嚢状体は不明瞭或は欠如；托実質は整型，幾分波曲或は真直にて，著しく錯綜せざる菌糸より成る；子実下層は狭し；茎は偏心生或は側生，緊緻，糸状菌糸より成る永存的被膜は鍔を作る；肉は菌絆を有する非糊性の菌糸より成る；日本産，1種，猛毒菌。

（本属名は lampros〔希〕(輝く)，mykes〔希〕(菌)より出づ）

基準種 *L. japonicus* (KAWAM.) SING.

本邦既知種 ツキヨタケ ***L. japonicus*** (102)

Lampteromyces japonicus (KAWAM.) SING.
ツキヨタケ

SINGER, Mycologia, 39:80. 1947; Agaricales, 178. pl. 7, f. 1–3. 1949.

（佐々木，尾瀬ヶ原，552. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，21, f. 34, pl. 6, f. 34; pl. 68, f. 401; phot. III, 14; V, 16. 1957）

Pleurotus noctilucens INOKO, Mitteil. Med. Fac. Kaiserl. Jap. Univ. Tokyo, 1:210. 1889. (non LÉVEILLÉ)

（白井，日．菌．目．ed. 2. 467. 1917—原，日．菌．目．278. 1954）

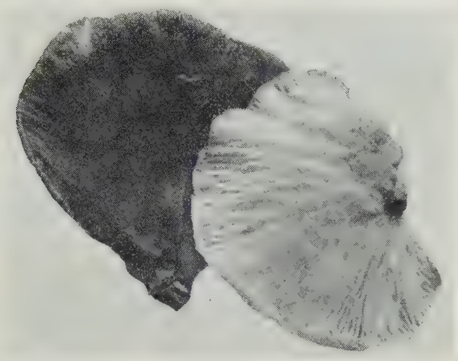
Pleurotus japonicus KAW. Jour. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo, 35, (3):2, pl. 1–3. 1915; Illus. Jap. Fungi, pl. 18, f. 17–19. 1925; Icon. Jap. Fungi, 4: 401, f. 401. 1954—SACCARDO, Syll. Fung. 21:71. 1912.

（川村，植．雑．24:278. 1910; 日．菌．図説，n. 166, 215, 216. 1929; 食用菌及有毒菌，51, f. 19, 50, 52, 54–56. 1931—安田，植．雑．28:356. 1914—白井，日．菌．目．ed. 2. 467. 1917; ed. 3. 285. 1927—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:116. 1931—小林，日．隠．植．図．551, pl. 266, f. 3–5. 1939—牧野，日．植．図鑑，1021, f. 3062. 1940—広江，応用菌蕈学，806, 1182. 1941—今関，原色きのこ，pl. 9 (右). 1942）

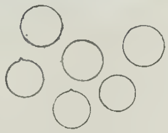
Armillaria japonica IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:52, pl. 2, f. 10. 1938.

（原，日．菌．目．20. 1954）

子実体は畳生或は群生；傘は径 6—23cm，初め球状，のち半円形或は腎臓形となり，丸山形，のち扁平となり，更に反転し，後方浅く圧低さる；表面は色変化し，幼時橙黄肉桂色にて，後部に舌状細鱗片を有し，周辺に向つて繊維状鱗被を存す，のち幾分淡色となり，遂に暗褐或は暗紫色の斑紋を生じ，後部に明かなる綿絮状鱗片を有し，その鱗片は周辺に



a



b

第42図　ツキヨタケ
Lampteromyces japonicus
a．子実体×1/3
b．胞子×350（大谷氏）

向つて小形にてやや不明瞭となる；肉は初め帯黄色，のち白色，茎肉は暗紫色或は帯黒色を呈す，周縁部は薄く茎に近き部は厚くして 2cm に及ぶ，やや脆く繊維質にて褶に沿うて裂け易し，味なく，臭は初めなく，のち特有の臭あり；褶は初め黄色，のち帯白色，初め長く垂生，のち彎状垂生，直状垂生或は垂生し，茎の上部に於ける鍔に至りて急に終り，或は時に線状隆起となりて茎上に伸ぶ，疎或はやや密，広幅にて 2cm に及び，屢々茎に近く叉状をなす；茎は長さ 2.5cm，幅 3cm，或はそれ以上に及び，初め偏心性，のち殆ど側生，短かくして緊緻，堅靱；鍔は幼時著しく，狭き厚き膜状，のち褶の終りに隆起せる輪となりて残る；胞子は球形，平滑，大形にて径 13—17μ；胞子紋は白色，或は僅か淡紫色を帯ぶ；褶は発光性を有す；猛毒あり。

所在及産地

ブナ及カエデ，稀にトドマツ枯木上—夏秋
本邦全土

和名　ツキヨタケ（月夜茸）〔古名〕
ワタリ，クマヒラ，クマヘラ，ブナノカタワ，ヒカリゴケ等の名あり。

Clitocybe (Fr.) Staude em. Sing.

カヤタケ属

Staude, Schwämme Mitteldeutschl. XXVIII & 122. 1857—Quélet, Champ. Jura Vosg. 1: 85. 1872—Singer, Agaricales, 182. 1949.

Agaricus trib. *Clitocybe* Fries, Syst. Mycol. 1:78. 1821. pr. p.

Omphalia Quélet, Enchir. Fung. 19. 1886. (non Persoon ex S. F. Gray, 1821)

Lepista (Fr.) W. G. Smith sensu Patouillard, Hymen. Eur. 96. 1887 (non W. G. Smith, 1870)

子実体はカヤタケ（*Clitocybe*）型の典型にて，屢々傘は中央凹み或は中窩を有し，褶は深く垂生す，或は直状類垂生；往々 HCN を生ず；傘は乾燥或は吸水性，甚だ稀に粘性，色素なきか或は細胞内に色素を有し，鈍色（灰色，赭褐色等），緑色，或は甚だ屢々帯褐淡黄色，淡汚桃色，肉桂色，黄褐栗色等を呈す；上表皮層は僅か分化し，匍匐或は弛く絡れたる糸状菌糸の絹糸状或は類軟毛被より成る；褶は薄く，屢々弧形，白色，傘と同色，或はクリーム色を呈し，屢々 HCN を生ず；胞子紋は純白色，クリーム色，帯緑色，或は淡汚鮭肉色，後者の場合は胞子は粗面ならず，一般に常に平滑なり，前者の純白胞子紋及び球形或は類球形胞子を有する場合は平滑ならず；胞子膜は常に非糊性にて甚だ薄し；担子柄は正常，通常 4 胞子，稀に 2 胞子；嚢状体は欠如し，稀に甚だ不定的不明瞭の分散せる擬嚢体或は稜嚢体ありて，能く発達し密集せる稜嚢体を有することは極めて稀なり；托実質は整型或は類整型，又は類両側類整型にて，完全なる不整型或は両側型或は逆型なることなし，常に非糊性；茎は通常中心生，繊維状肉質或は軟骨質皮部を有し，中実或は中空となる；肉は再生することなく，肉質柔軟，或は柔軟繊維質にて強靱或は革質ならず；菌糸は薄き，稀に不規則にて僅か厚き膜を有し，常に多数の菌絆を有す；林の内外，庭園，草原，山地等の地上，深蘚中，植物残屍上，糞上等に生ず；多分全部裸実；汎布，約 200—300 種，食毒両者あり。

（本属名は klitos〔希〕（傾く），kybos〔希〕（六面体，骰子，頭）より出づ）

基準種　*C. infundibuliformis* (Schaeff. ex Fr.) Quél.

本邦既知種検索表

A．傘面非吸水性。
　a．傘は通常丸山形～扁平，遅く圧低さる。
　　α．大形菌にて傘径 15cm に至る。
　　　I．胞子は類球形，径 6—7μ；傘は藁色。
　　　オオイヌシメジタケ　***C. geotropa***[1] (110)
　　　II．胞子は楕円形，6—9×4.5—6μ。
　　　　1．傘は曇灰色。
　　　　ハイイロシメジタケ　***C. nebularis*** (104)
　　　　2．傘は乳白色。
　　　　　シロノハイイロシメジタケ
　　　　　　f. ***alba***[1] (105)

β. 中形或は小形菌。
　I. 有色種。
　　1. 胞子楕円形; 褶は白色, のち黄色。
　　　甲. アニス臭あり; 傘は緑色を帯ぶ, 径 3—8 cm; 胞子 6—8×4—5 μ。
　　　　アオイヌシメジタケ ***C. odora*** (105)
　　　乙. アニス臭なし; 傘は灰褐色, 径 2.5—7 cm; 胞子 5.5—7.5×3.5—5 μ; 茎の基部棍棒形～類球根状を特徴とす。
　　　　ホテイシメジタケ ***C. clavipes*** (106)
　　2. 胞子類球形。
　　　甲. 傘は暗褐色, のち淡青色を帯ぶ, 径 7—13 cm; 胞子 4—6 μ, 粗大なる疣状突起あり; 褶は菫色なるを特徴とす。
　　　　イヌムラサキシメジタケ
　　　　C. cyanophaea (107)
　　　乙. 傘は暗淡黄白色, 径約 5 cm; 胞子 4—5 μ, 平滑; 褶は白色; 小笠原産。
　　　　ハチマキイヌシメジタケ
　　　　C. vittatipes (107)
　II. 白色種。
　　1. 傘はむしろ大形。
　　　甲. 胞子長さ 6 μ 以上, 楕円形。
　　　　シロノハイイロシメジタケ
　　　　C. nebularis f. ***alba***[2] (105)
　　　乙. 胞子長さ 6 μ 以下; 傘は径 4—8 cm, 白塗料を塗りたる如し; 胞子類球形或は広卵形, 5—6×4—5 μ, 或は 4—5 μ。
　　　　オシロイシメジタケ ***C. cerussata*** (107)
　　2. 傘は前者より小形。
　　　甲. 屢々基物を貫通する白色菌糸紐あり; 傘は径 2.5—5 cm; 茎細長; 胞子 4—5×2.5—3 μ。
　　　　ヤドリギイヌシメジタケ
　　　　C. eccentrica (108)
　　　乙. 菌糸紐なし。
　　　　イ. 茎は細長; 傘は 2—3 cm; 胞子広楕円～類球形, 5.5—6×4 μ。
　　　　　シロヒメカヤタケ ***C. candicans*** (108)
　　　　ロ. 茎は細長ならず; 傘は径 2—6 cm; 胞子卵形～類楕円形, 4—5×3—4 μ。
　　　　　コシロイヌシメジタケ
　　　　　C. catinus (109)
b. 傘は速に漏斗形となり, 白色ならず; 褶は常に深く垂生。
　α. 極めて大形にて傘は径 10—30 cm 或はそれ以上に及び, 淡赤褐色～帯白色; 胞子 6—8×4—5 μ。
　　オオジョウゴタケ ***C. maxima*** (109)
　β. 大形なるも前者より小。
　　I. 傘は径 4—12 cm, 色変化し, 帯黄～淡渋色; 胞子 6—7×3.5—4 μ。
　　　カヤタケ ***C. infundibuliformis*** (110)
　　II. 傘は径 10—15 cm, 暗藁色一淡渋色; 胞子径 6—7 μ。
　　　オオイヌシメジタケ ***C. geotropa***[2] (110)
　γ. 小形にて傘径 1—2 cm, 褐色の鱗被を被むる; 胞子 3—4 μ; 小笠原産。
　　ムニンヒメサカズキタケ
　　C. castaneifloccosa (111)
B. 傘面吸水性。
　a. 傘は焦茶色, 径 2.5—4 cm, 殆ど漏斗形; 茎に不明瞭なる網目あり; 胞子楕円形, 5×2.5 μ。
　　ニセクロサカズキタケ ***C. imaiana*** (111)
　b. 傘は湿時やや粘性, 淡橙黄色, のち赤褐色, 径 5—10 cm, 浅き漏斗形; 茎に網目なし; 胞子不規則なる楕円形, 3—4×2—3 μ; 有毒。
　　ドクササゴタケ ***C. acromelalga*** (111)
　c. 傘は藁色～白色, 径 2.5—4.5 cm, 扁平にて僅か中窩あり; 茎は平滑, 基部屢々羊毛状; 胞子は楕円～狭楕円形, 6.5—7.5×3.5—4 μ。
　　コカブイヌシメジタケ ***C. fragrans*** (112)

Clitocybe nebularis (BATSCH ex FR.) QUÉL.
ハイイロシメジタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1: 85. 1872—GILLET, Champ. Fr. 157, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1: 57. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 63. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 142. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 170. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 63, pl. 48, f. 1–9. 1892—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2: 405. 1893; Brit. Fungi, 179, pl. 16, f. 1. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 155. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 46. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 29, pl. 24, f. 47. 1910—RICKEN, Blätterp. 375, pl. 103, f. 1. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 725. 1918—REA, Brit. Basid. 269. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 64, pl. 25. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 3: pl. 133. 1927—LANGE, Agar. Denm. 8: 43. 1930; Fl. Agar. Dan. 1: 73, pl. 32, f. E. 1935—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 80. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1: 396. 1948—SINGER,

Agaricales, 186. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 66, pl. 15, f. 1. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 137, f. 201. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:276, pl. 34, f. 1. 1957.

(原, 日. 菌. 目. 74. 1954)

Agaricus pileolarius BULL. Champ. Fr. pl. 400. 1788—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, pl. 61. 1797.

Agaricus nebularis BATSCH, Elench. Fung. 2: 25, f. 193. 1789—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 349. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:86. 1801; Epicr. Myc. 55. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:100. 1857; Hymen. Eur. 79. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:545. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 107. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1: 35. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 79 (no. 128). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:48. 1876—WINTER, Pilze, 1:806. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:657. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:267. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):670. 1912.

Gymnopus nebularis S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:609. 1821.

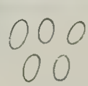
Omphalia nebularis QUÉL. Enchir. Fung. 20. 1886.

Clitocybe pileolaria MURR. Mycologia, 7:268. 1915.

子実体は群生或は弧生; 傘は径 4.5—15 cm, 初め円錐形, 丸山形となり, のち殆ど扁平となり, 鈍頭, 稀に中央僅か圧低さる; 表面は乾燥, 初め通常微粉を有し, のち平滑, 曇灰色或は黄灰色, 縁辺淡色, 縁は初め内屈し, 柔嫋; 肉は白色, 肉質, むしろ緊密にて厚し, 味及臭可なり; 褶は垂生, 白色, のちクリーム色, 密, 両端に狭く, むしろ狭幅, 稜は全縁; 茎は 6—8×0.8—2.2 cm, 同幅或は上方に漸細し, 基部やや棍棒形或はやや便腹状, 白色或は灰色にて帯白色綿絮ありて有線条, 肉は白色, 繊維質, 弾性, 中実; 胞子は楕円形, 平滑, 6—9×4.5—6 μ, 多くは 7.5×4.5 μ; 胞子紋は白色; 可食と称せらる。



a b



c

第 43 図 ハイイロシメジタケ Clitocybe nebularis
a. 子実体表面 b. 同裏面 ×1/2
c. 胞子 ×550 (大谷氏)

所在及産地

林内落葉間—秋

北海道, 本州—欧. 北米. 亜. 小亜

和名 ハイイロシメジタケ (灰色湿地茸) 〔今井〕

f. alba (LANGE) IMAI
シロノハイイロシメジタケ

IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 53:81. 1938.

(原, 日. 菌. 目. 74. 1954)

Clitocybe nebularis var. *alba* LANGE, Agar. Denm. 8:43. 1930; Fl. Agar. Dan. 1:74, pl. 32, f. E. 1935.

Clitocybe alba SING. Agaricales, 186. 1949.

傘は乳白色なる以外は原種と同性質なり。

所在及産地

林内落葉間—秋 北海道, 本州, 九州—欧

和名 シロノハイイロシメジタケ (白灰色湿地茸) 〔今井〕

Clitocybe odora (BULL. ex FR.) QUÉL.
アオイヌシメジタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:86. 1872—CILLET, Champ. Fr. 158, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:63. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 64. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:153. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 174. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 66, pl. 51, f. 10-15. 1892—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2: 412. 1893; Brit. Fungi, 182, pl. 16, f. 2. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 155. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 49. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 30, f. 50. 1910—RICKEN, Blätterp. 370, pl. 100, f. 3. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 728. 1918—REA, Brit. Basid. 274. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 67. 1927—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:75, pl. 30, f. A. 1935—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:397. 1948—SINGER, Agaricales, 186. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 67, pl. 16, f. 4. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 137. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:278. 1957.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 53:394. 1939—原, 日. 菌. 目. 74. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 21, pl. 6, f. 33. 1957)

Agaricus virens SCOP. Fl. Carn. 2:437. 1772—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:266. 1900.

Agaricus odorus BULL. Champ. Fr. pl. 556, f. 3. 1791—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, pl. 42. 1797—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 323. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:90. 1821; Epicr. Myc. 59. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:106. 1857; Hymen. Eur. 85. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:543. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 108. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:36. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 101 (no. 134). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:50. 1876—WINTER, Pilze, 1:801. 1884—SCHROETER, Pilze Sches. 1:655. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:266. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):667. 1912.

Gymnopus odorus S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:606. 1821.

Clitocybe virens MURRILL, Mycologia, 9:258, pl. 11, f. 2. 1917—BRES. Icon. Myc. 3:pl. 140. 1927.

子実体は類叢生; 傘は径 3—8cm, むしろ薄肉, 丸山形, のち開張扁平となり, 往々僅か中丘あり, 更に圧低さる, 屢々不正形にて波曲す; 表面は湿潤, 汚緑色～青緑色, 平滑或は時にやや線条あり, 老時汚白色或は淡泥土色に褪色す, 縁は初め内屈し, 綿毛あり, 肉は白色, 緊緻, アニスの強臭あり; 褶は直状垂生, 白色, のち帯黄色或は緑色を帯ぶ, 密或はやや疎, 傘肉に比してむしろ広幅; 茎は 3—8×0.4—0.6cm, 同幅或は基部少しく太く, 屢々深く落葉及腐蝕物内に埋まる, 傘面と同色或は帯白色, 上部粉状, 基部白色綿毛あり, 繊維状, 充塞のち中空; 胞子は広楕円形, 平滑, 6—8×4—5 μ; 胞子紋は白色; 可食。

所在及産地

林内落葉間—秋　　本州—欧. 北米

和名 アオイヌシメジタケ

(青犬湿地茸)〔今井〕

Clitocybe clavipes (PERS. ex FR.) QUÉL.
ホテイシメジタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:85. 1872—GILLET, Champ. Fr. 155, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:57. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 63. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:143. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 171. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:405. 1893; Brit. Fungi, 179. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 155. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 47. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 29, pl. 24, f. 45. 1910—RICKEN, Blätterp. 375, pl. 103, f. 3. 1915—MURRILL, N. Am. Fl. 9:410. 1916—KAUFFMAN Agar. Mich. 726. 1918—REA, Brit. Basid. 269 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 3:pl. 135. 1928—LANGE, Agar. Denm. 8:46. 1930; Fl. Agar. Dan. 1:76, pl. 32, f. D. 1935—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3:pl. 293. 1930; Agaricales, 1:396. 1948—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:81. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 66, pl. 15, f. 2. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 137. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:282. 1957.

(原, 日. 菌. 目. 74. 1954—今関及土岐, 林. 試. 研. 報. 67:36. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 20, pl. 5, f. 29. 1957)

Agaricus clavipes PERS. Syn. Meth. Fung. 353. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:86. 1821; Epicr. Myc. 56. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:100. 1857; Hymen. Eur. 79. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:545. 1844—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:49. 1876—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 45. 1883; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 80 (no. 129). 1883—WINTER, Pilze, 1:805. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:656. 1889—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):670. 1912.

Agaricus carnosior PECK, Rep. N. Y. St. Cab. 23:76. 1872.

Omphalia clavipes QUÉL. Enchir. Fung. 20. 1886.

Clitocybe carnosior SACC. Syll. Fung. 5:146. 1887.

子実体は散生或は叢生; 傘は 2.5—7cm, 丸山形, のち扁平となり, 全形殆ど倒円錐形となる, 鈍頭, 稀に中丘あり; 表面は乾燥, 灰褐色或は煤褐色, 時に中央暗色, 無毛, 平坦, 縁は薄く, 初め強く内屈



第44図 ホテイシメジタケ Clitocybe clavipes ×2/3 (大谷氏)

す；肉は白色，柔軟，中盤厚し，味及臭可なり；褶は深く垂生，白色，往々クリーム色，やや疎，中部むしろ広幅，両端に狭し，薄し，稜は全縁；茎は3—6×0.6—1cm，上方に漸細し，基部太くして棍棒形或は類球根状を呈する特徴あり，基部幅 2cm に及ぶ，傘面と同色或は淡色，無毛或は僅か繊維あり，柔軟，弾性，中実；胞子は楕円形，平滑，5.5—7.5×3.5—5μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地

林内—秋　　北海道—欧．北米

和名 ホテイシメジタケ（布袋湿地茸）〔今井〕

Clitocybe cyanophaea (FR.) SACC.

イヌムラサキシメジタケ

SACCARDO. Syll. Fung. 5:146. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:408. 1893; Brit. Fungi, 180. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 48. 1908—RICKEN, Blätterp. 367. 1915—REA, Brit. Basid. 272. 1922. (KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 9, f. 1–3. 1914; 日．菌．図説，n. 225. 1929；日．菌．図鑑，4: 427, f. 423. 1954—白井，日．菌．目．ed. 2. 145. 1917; ed. 3. 86. 1927—原，日．菌．目．74. 1954)

Agaricus nudus HARZ. Abbild. Pilze, pl. 30. 1842—5. (non. *Trich. nudum*)

Agaricus cyanophaeus FR. Hymen. Eur. 82. 1874—WINTER, Pilze, 1:803. 1884—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 267. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):669. 1912.

子実体は孤生或は 2—3 叢生；傘は径 7—13cm，初め半球形，のち開張扁平となり，鈍頭，縁は下曲し，不規則に浅裂し鈍円状裂片を作り，粗大なる波状を呈し，左右不均等となること多し；表面は多少湿潤，暗褐色，のち淡青色を帯ぶ，無毛，平滑；肉は白色，厚く，緻密；褶は垂生，初め鮮かなる菫色，のち褪色して褐色となる，甚だ密，傘肉より剝げ易し；茎は 5—8×1.5—2.5cm，上方に狭細，基部やや肥大，初め淡青色を帯び，のち淡褐色となり，上部は急に白色となる，無毛，屢々屈曲，緊緻，充塞或は中空；胞子は類球形，粗大なる疣状突起を有す，無色，径 4—6μ；胞子紋は白色。

所在及産地

林内—秋　　本州—欧

和名 イヌムラサキシメジタケ（犬紫湿地茸）〔川村〕

Clitocybe vittatipes S. ITO et IMAI

ハチマキイヌシメジタケ

S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:11. 1939.

子実体は孤生；傘は径約 5cm，中窩を有す；表面は暗淡黄白色，吸水性ならず，やや繊維あるか殆ど無毛，縁は薄く，淡色，内巻す；肉は甚だ薄く，類膜質，水潤状灰色，味及臭なし；褶は長く垂生，白色，やや粗或は中位に密，稜は波状或は鋸歯状，垂生部は帯褐灰色或はオリーブ褐色を呈す；茎は約 4×0.5cm，同幅，オリーブ灰色，弾性，類軟骨質，繊維状，中空；胞子は球形或は類卵形，平滑，径 4—5μ；胞子紋は白色。

所在及産地

林地—秋　　小笠原島

和名 ハチマキイヌシメジタケ（鉢巻犬湿地茸）〔今井〕

Clitocybe cerussata (FR.) QUÉL.

オシロイシメジタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:86. 1872—GILLET, Champ. Fr. 151, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:64. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 64. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:154. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 167. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 67, pl. 51, f. 24–28. 1892—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:413. 1893; Brit. Fungi, 182. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 155. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 49. 1908—REA, Brit. Basid. 275. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 3: pl. 142. 1928—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:79. 1935—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:83. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:387. 1948—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 68, pl. 19, f. 1. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 141 (n. 13). 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:280. 1957.

(原，日．菌．目．74. 1954—川村，日．菌．図鑑，4: 428, f. 424. 1954)

Agaricus cerussatus FR. Syst. Myc. 1:92. 1821; Epicr. Myc. 61. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1: 108. 1857; Hymen. Eur. 86. 1874—PERSOON, Myc. Eur. 3:119. 1822—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:542. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 108. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:36. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1: pl. 121 (no. 137). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:51. 1876—SCHROETER, Pilze Schles. 1:654. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 266. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):665, pl. 123. 1912.

子実体は叢生或は群生；傘は径 4—8cm，丸山形或は類鐘形，のち開張す，鈍頭或は広中丘あり，の

ち少しく圧低さる；表面は初め白色にて白塗料を塗りたる如く，微細絹状粉毛あり，のち無毛となりて淡灘色となる，縁は内屈し，絨毛を有し，屢々やや浅裂し或は波状をなす；肉は白色，柔軟，緻密，味温和，臭なし；褶は直生或は幾分垂生，白色，甚だ密，狭幅，薄し；茎は 3—10×0.5—1cm，同幅或は基部太く，屢々互に結着す，白色，殆ど無毛，基部に白色綿絮あり，中実；胞子は類球形或は広卵形，5—6×4—5μ，或は径 4—5μ；胞子紋は白色。

所在及産地

林地一夏秋　　北海道，本州一欧．亜（西北）

和名 オシロイシメジタケ（白粉湿地茸）〔川村〕
カブイヌシメジタケ（株犬湿地茸）〔今井〕

Clitocybe eccentrica PECK
ヤドリギイヌシメジタケ

PECK, Bull. Torr. Bot. Club, 25:321. 1898; Bull. N. Y. St. Mus. 157:81. 1912—SACCARDO, Syll. Fung. 16:24. 1902 (ut *excentrica*)—MURRILL, N. Am. Fl. 9:399. 1916.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 53:394. 1939—原，日．菌．目．74. 1954)

子実体は群生或は叢生；傘は径 2.5—5cm，甚だ薄く，中窩を有し或は類漏斗形；表面は無毛，湿時光沢ありて水白色，乾時白色，縁薄く，屢々浅裂し，不正形或は1側深裂す；褶は垂生，白色，密，狭幅；茎は細長，2.5—4×0.2—0.4cm，屢々偏心生，白色，無毛，基部に粗剛毛あり，屢々基物を貫通する長き白色菌糸紐を附す，肉は強靱，中実；胞子は 4—5×2.5—3μ。

所在及産地

腐幹上一秋　　北海道一北米

和名 ヤドリギイヌシメジタケ
（宿木犬湿地茸）〔今井〕

Clitocybe candicans (PERS. ex FR.) QUÉL.
シロヒメカヤタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:87. 1872—GILLET, Champ. Fr. 153, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:66. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 66. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:157. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 169. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:416. 1893; Brit. Fungi. 183. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 155. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 50. 1908—KAUFFMAN, Agar. Mich. 729. 1918—REA, Brit. Basid. 276. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 3:pl. 147. 1928—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:80, pl. 33, f. A. 1935—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:386. 1948—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 136. 1953.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 55:445. 1941—原，日．菌．目．74. 1954—今関及土岐，林．試．研．報．67: 36. 1954)

Agaricus cyathiformis BULL. Herb. Fr. pl. 575, f. E. 1791.

Agaricus candicans PERS. Syn. Meth. Fung. 456. 1801.

Agaricus candicans FR. Syst. Myc. 1:91. 1821; Epicr. Myc. 63. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1: 111. 1857; Hymen. Eur. 88. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:541. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 109. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:144. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:37. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 82 (no. 141). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:54. 1876—WINTER, Pilze, 1:799. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1: 654. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:266. 1900.

Omphalia candicans QUÉL. Enchir. Fung. 22. 1886.

Clitocybe albo-umbilicata MURR. Mycologia, 7: 257. 1915. pr. p.

Clitocybe candens MURR. N. Am. Fl. 9:399. 1916.

子実体は群生；傘は径 2—3cm，類膜質，丸山形，のち扁平或は僅か圧低さる；表面は乾燥，乾時光沢ある白色，表生の絹状粉を有す，縁は下屈し，正形；



a



b

第45図　シロヒメカヤタケ
Clitocybe candicans
a．子実体 ×2/3
b．胞子 ×500
（大谷氏）

肉は白色，薄し，味及臭温和；褶は直生，のち垂生，白色，密或は甚だ密，狭幅，薄し，稜は全縁；茎は細く，2—5×0.2—0.4cm，同幅，白色，軟骨質，無毛，基部絨毛あり，屈曲し，中空，葉間等に幾分根あり；胞子は広楕円形～類球形，平滑，5.5—6×4μ；胞子紋は白色。

所在及産地

林内落葉間—秋　本州，九州—欧．北米．亜(錫)

和名　シロヒメカヤタケ（白姫茅茸）〔今関〕

Clitocybe catinus (FR.) QUÉL.

コシロイヌシメジタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:235. 1872—GILLET, Champ. Fr. 137. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:76. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:174. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 187. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 75, pl. 61, f. 3–5. 1892—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:431. 1893—W. G. SMITH, Brit. Basid. 54. 1908—RICKEN, Blätterp. 364, pl. 99, f. 5. 1915—MURRILL, N. Am. Fl. 9:402. 1916—KAUFFMAN, Agar. Mich. 735. 1918—REA, Brit. Basid. 284. 1922—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:85. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:392. 1948—SINGER, Agaricales, 188. 1949.

（小林，日．隠．植．図．527, pl. 254, f. 3. 1939—原，日．菌．目．74. 1954—松田及本郷，植．研．雑．30: 259, f. A–B. 1955）

Agaricus catinus FR. Epicr. Myc. 72. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:126. 1857; Hymen. Eur. 99. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 57. 1883; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 111 (no. 163). 1883—WINTER, Pilze, 1:85. 1884—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:266. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):661, pl. 123 J. 1912.

Omphalia catinus QUÉL. Enchir. Fung. 24. 1886.

子実体は群生或は散生；傘は径 2—6 cm，柔嫋，丸山形～扁平となり，のち圧低され遂に殆ど漏斗形となる；表面は白色，雨によりて淡汚褐色となり，乾時褪色す，乾燥，平滑，無毛，縁辺に線条なく，縁は下屈す；肉は白色，薄く，柔嫋，味温和，臭は穀粉様；褶は垂生，常に白色，密，狭幅；茎は 3—6×0.2—0.6 cm，同幅或は基部少しく太く，白色，のち汚色，真直，上部平滑，下部に軟毛あり，弾性，充塞，のち中空；胞子は卵形或は類楕円形，平滑，非糊性，4—5.5×2.5—3.5 μ；胞子紋は白色；嚢状体なし；可食。

所在及産地

林地—秋　北海道，本州—欧．北米

和名　コシロイヌシメジタケ（小白犬湿地茸）〔今井〕

Clitocybe maxima (GÄRTN. MEYER et SCHERB. ex FR.) QUÉL.

オオジョウゴタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:88. 1872—GILLET, Champ. Fr. 141, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:71. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 66. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:165. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 190. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 70, pl. 55. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:424. 1893; Brit. Fungi, 187. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 52. 1908—KAUFFMAN, Agar. Mich. 721, pl. 155. 1918—REA, Brit. Basid. 280. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 4:pl. 155. 1927—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:391. 1948—SINGER, Agaricales, 187. 1949—HEIM, Champ. Eur. 2:274. 1957.

（川村，日．菌．図鑑，4:425, f. 420–421. 1954）

Agaricus maximus GÄRTNER, MEYER et SCHERBIUS, Fl. Wett. 3(2):329. 1802—FRIES, Epicr. Myc. 67. 1938; Monogr. Hymen. Suec. 1:119. 1857; Hymen. Eur. 93. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:541. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:40. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 135 (no. 151). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:57. 1876—WINTER, Pilze, 1:795. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:653. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:266. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):662. 1912.

Agaricus giganteus LEYSS. Fl. Hal. 1214—Auct. nonn. (non SOWERBY, nec FRIES, Epicr.)

Agaricus infundibuliformis HOFFM. Nom. Fung. 148. 1789. (non SCHAEFFER, nec FRIES, Epicr.)

Agaricus giganteus a. Fr. Syst. Myc. 1:80. 1921.

Agaricus gibbus γ. *maximus* FR. Elench. Fung. 1:13. 1828.

Agaricus stereopus PERS. Myc. Eur. 3:72. 1828.

Omphalia geotropa QUÉL. Enchir. Fung. 22. 1886. pr. p.

Clitocybe geotropa RICKEN, Blätterp. 373. 1914. pr. p.

Clitocybe geotropa var. *maxima* NÜESCH, Trichterlinge, 121. 1926—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3:pl. 289. 1927—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 138. 1953.

子実体は群生或はやや叢生；傘は径 10—30 cm，或はそれ以上に及び，薄肉，初め広丸山形にて，広き中丘あり，のち扁平となり，遂に広き漏斗形となるも，尚鈍き或は広き中丘を存す；表面は常に乾燥，初め淡色，速に淡き赤褐色となり，老時褪色して帯白色となる，初め絹糸毛に被われ，老時僅か綿絮状鱗片を被むる，縁は薄く，初め内屈し，粉毛あり，開平し平坦或は明瞭ならざる線条を有す，褶に沿うて裂け易し；肉は中盤以外は甚だ薄く，帯白色，老時汚色，強靱，味温和，臭むしろ強し；褶は垂生，初め白色，速に汚黄色となり，老時淡渋色，密，狭幅，

両端狭く，便腹状ならず，傘肉より剝げ易し，稜は全縁；茎は 7—13×2—4 cm，同幅にて基部棍棒状球根ありて，時に径 6 cm 或はそれ以上に及ぶ，薄き圧着せる白毛被を被むり，屢々銹色斑を生ず，纖維線条あり，強靱，弾性，充塞；胞子は楕円状卵形，不明瞭の刺あるか平滑，6—8×4—5 μ；胞子紋は白色；稜嚢体は瘦針形；可食。

所在及産地

林内地上—夏秋　　本州—欧．北米

和名　オオジョウゴタケ（大漏斗茸）〔川村〕

Clitocybe infundibuliformis (SCHAEFF. ex FR.) QUÉL.

カヤタケ

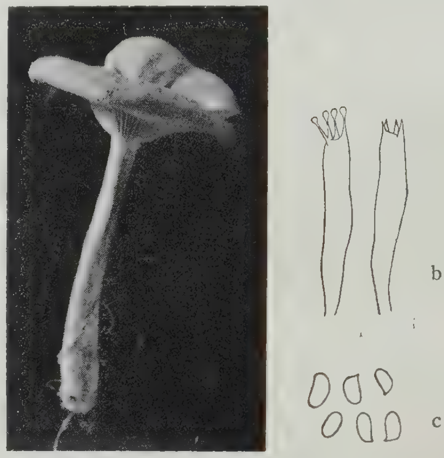
QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:88. 1872—GILLET, Champ. Fl. 144, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:71. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 66. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:165. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 191. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 71, pl. 57, f. 1–5. 1892—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:425. 1893; Brit. Fungi, 187. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 155. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 52. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 30, pl. 26, f. 51. 1910—RICKEN, Blätterp. 373, pl. 101, f. 2. 1915—MURRILL, N. Am. Fl. 9:408. 1916—KAUFFMAN, Agar. Mich. 736, pl. 158. 1918—REA, Brit. Basid. 281. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 62, pl. 22, f. 2. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 4: pl. 156. 1928—LANGE, Agar. Denm. 8:46. 1930; Fl. Agar. Dan. 1:77, pl. 32, f. c. 1935—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1:67. 1934(?)—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:84. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:391. 1948—SINGER, Agaricales, 187. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 68, pl. 16, f. 2. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 138. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:277, pl. 34, f. 3. 1957.

（白井，日．菌．目．ed. 2. 145. 1917; ed. 3. 86. 1927—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:117. 1931—小林，日．隠．植．図．561, pl. 271, f. 3–4. 1939—今関，原色きのこ，pl. 34（左）. 1942—原，日．菌．目．74. 1954—川村，日．菌．図鑑，4:429, f. 425. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，20, pl. 5, f. 31. 1957）

Agaricus infundibuliformis SCHAEFF. Fung. Bavar. 4: Ind. 49, pl. 212. 1774—FRIES, Epicr. Myc. 68. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:119. 1957; Hymen. Eur. 93. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 110, pl. 5, f. 2. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:40. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2: pl. 107 (no. 152). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:57. 1876—WINTER, Pilze, 1:795. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:652. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:266. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):663. 1912.

Omphalia infundibuliformis QUÉL. Enchir. Fung. 23. 1886.

子実体は孤生或はやや叢生；傘は径 4—12 cm，むしろ薄肉，初め丸山形にて僅か中丘あり，のち速に広き漏斗形となる；表面は乾燥，色は大さと共に変化し，帯黄色，淡桃色～肉色或は淡洪色，老時淡色



a

第 46 図　カヤタケ Clitocybe infundibuliformis
a．子実体 ×1/2　　b．担子柄
c．胞子 ×450　　（大谷氏）

にて普通中央暗色，微細絹状鱗片を被むるか或は殆ど無毛，縁は初め内屈し，屢々波状，平坦，薄し；肉は白色，中盤厚し，柔軟，味温和，臭可なり；褶は深く垂生，白色或は帯白色，むしろ密，狭幅，両端狭し，薄し，茎は 4—8×0.4—0.8 cm，殆ど同幅或は上方に僅か狭細，帯白色或は傘面と同色，上部無毛，基端白色菌糸を有し落葉等に連る，緊緻，弾性，中実；胞子は核子形，6—7×3.5—4 μ，或は 8.5—12.5×4—5 μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地

林内或は草原地，落葉上—秋

北海道，本州，九州—欧．北米．濠(?)
亜（小亜．西比）

和名　カヤタケ（茅茸）〔白井〕
ジョウゴタケ（漏斗茸）

Clitocybe geotropa (BULL. ex FR.) QUÉL.

オオイヌシメジタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:89. 1872—GILLET, Champ. Fr. 138, c. ic. 1876—KARSTEN,

Hattsv. 1:73. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 67. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:171. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 194. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 72, pl. 59, f. 1–9. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:427. 1893; Brit. Fungi, 188. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 28, pl. 23, f. 44. 1910—RICKEN, Blätterp. 373, pl. 101, f. 1. 1915. pr. p.—REA, Brit. Basid. 283. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 4: pl. 166. 1927—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1: 73, pl. 34, f. D. 1935—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 390. 1948—SINGER, Agaricales, 187. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 69, pl. 17, f. 1. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 138. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:275, f. 203, A. 1957.

(小林, 日. 隠. 植. 図. 531, pl. 256, f. 1–3. 1939—原, 日. 菌. 目. 74. 1954)

Agaricus geotropus BULL. Herb. Fr. pl. 573. f. 2. 1791—DECANDOLLE, Fl. Fr. 2 : 172. 1815—FRIES, Epicr. Myc. 70. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 123. 1857; Hymen. Eur. 96. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 110. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:41. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2: pl. 83 (no. 154). 1883—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 266. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):662, pl. 124. 1912.

Agaricus gibbus β. major FR. Syst. Myc. 1: 82. 1821.

Agaricus gilvus var. *geotropus* RABENH. Deut. Krypt. Fl. 1:540. 1844.

Omphalia geotropa QUÉL. Enchir. Fung. 22. 1886. pr. p.

子実体は散生或は群生；傘は径 10—15 cm に至り，扁平，中部圧低漏斗型となるも常に明かなる小形の中丘あり；表面は乾燥，幼時藁色，老時肉色を帯びたる暗藁色或は淡渋色，縁は内屈し，綿毛あり；老時肉は白色，厚く，緊緻，味温和，臭は微にして可；褶は垂生，白色にて，傘面と同色となる，密，やや広幅或は狭幅，両端狭し；茎は 5—13×2—3 cm，屢々傘径を超す，上方に漸細，白色～帯黄色，或は傘面と同色，繊維状，中実；胞子は類球形或は広卵形，平滑，径 6—7 μ；胞子紋は白色。

所 在 及 産 地

林内陽地及草原—秋　　本州—欧

和 名　オオイヌシメジタケ（大犬湿地茸）〔小林〕

Clitocybe castaneifloccosa S. ITO et IMAI
ムニンヒメサカズキタケ

S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:12. 1939.

子実体は群生或は叢生；傘は径 1—2 cm，丸山形，のち開張扁平となり，更に縁辺反転す；表面は乾燥黄褐色或は肉桂褐色の纖維状細鱗被を被むる；肉は水潤状褐色，薄し；褶は長く垂生，白色，のち鋌色，やや密，やや厚く，脆し；茎は 1.5—3×0.1—0.3 cm，多くは下方狭細，傘面と殆ど同色或は淡色，上部白粉あり，下部殆ど無毛，基部白色粗毛あり，中実或は充塞；胞子は類球形或は卵形，平滑，径 3—4 μ；胞子紋は白色。

所 在 及 産 地

林地—秋　　小笠原島

和 名　ムニンヒメサカズキタケ
（無人姫盃茸）〔今井〕

Clitocybe imaiana SING.
ニセクロサカズキタケ

SINGER, Agaricales, 189. 1949.

Clitocybe fallax IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido. Imp. Univ. 43:87. 1938. (non SACCARDO et TROTTER, 1912)

(原, 日. 菌. 目. 74. 1954)

子実体は群生；傘は径 2.5—4 cm，圧低され或は中窩を有し，のち殆ど漏斗形をなす；表面は吸水性，類焦茶色～焦茶色，のち淡色となる，縁辺平坦或は僅か線条あり，縁は内巻す；肉は淡色，甚だ薄し；褶は垂生或は直生，淡色或は類灰色，密，弓形；茎は 2.5—4×0.2—0.4 cm，同幅，殆ど傘面と同色，僅か繊維あり，不明瞭なる網目を有す，中空；胞子は楕円形，平滑，5×2.5 μ；胞子紋は白色。

所 在 及 産 地

針葉樹林腐木上—秋　　北海道

和 名　ニセクロサカズキタケ（贋黒盃茸）〔今井〕

Clitocybe acromelalga ICHIMURA
ドクササコタケ

ICHIMURA, Bot. Gaz. 65:110. 1918—KAWAMURA, Bull. Jap. Assoc. Sci. 8:500. 1933; Icon. Jap. Fungi, (日. 菌. 図鑑), 4:430, f. 426. 1954.

(松浦, 茸類辞典, 66, f. 67. 1933; 応用菌蕈学, f. 625. 1941—今関, 原色きのこ, pl. 35(右). 1942—本郷, 植. 分. 地. 14:53, f. 5. 1950—原, 日. 菌. 目. 74. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 20, f. 32, pl. 5, f. 32. 1957)

子実体は孤生或は小叢生，往々菌輪を作る；傘は径 5—10 cm，小品は扁平，大品は多くは中央圧低され浅き漏斗形；表面は湿時やや粘性，淡橙黄色，のち黄赤褐色となる，縁は内屈，のち反転，波状，形不正となる；肉はやや薄く，白色にて淡褐色を帯ぶ，

強靱，味及臭著しからず；褶は垂生，淡肉色，老時淡黄褐色を帯ぶ，密，広幅，薄し；茎は 4—8×0.5—1.5 cm，同幅にて基部やや肥大，多くは屈曲，傘面と同色，基部白色，落葉に附着す，肉は繊維質にて縦裂し易く，弾性，充塞，老品には縦の長間隙を生ず；胞子はやや不規則なる楕円形，平滑，3—4×2—3 μ；胞子紋は白色；有毒。

所在及産地

主としてマダケ林内，稀に竹林以外—秋（稀に春） 本州

和名 ドクササゴタケ（毒笹子茸）〔山田，川村〕
ヤケドキン（火傷菌）〔市村〕
ヤブシメジ（藪湿地茸）

Clitocybe fragrans (SOW. ex FR.) QUÉL.
コカブイヌシメジタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:91. 1872—GILLET, Champ. Fr. 167, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:83. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 71. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:188. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 203. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 78, pl. 63, f. 14-20. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:439. 1893; Brit. Fungi, 193. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 155. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 57. 1908—RICKEN, Blätterp. 380. 1915—REA, Brit. Basid. 289. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 4: pl. 181. 1927—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:85, pl. 37, f. F. 1935—SINGER, Agaricales, 188. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 72, pl. 19, f. 3. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 135. 1953. (本郷，植. 研. 雑. 30:215, f. 2(1). 1955—今関及本郷，原色日. 菌. 図鑑，p. 20, f. 30, pl. 5, f. 30. 1957)

Agaricus fragrans SOW. Col. Fig. Engl. Fungi, 1: pl. 10. 1797—FRIES, Syst. Myc. 1:171. 1821; Epicr. Myc. 78. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1: 135. 1857; Hymen. Eur. 105. 1874—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 455. 1801; Myc. Eur. 3:107, pl. 27, f. 5. 1828—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:538. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:43. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2: pl. 124 (no. 174). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:62. 1876—WINTER, Pilze, 1:787. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1: 649. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 266, f. 122, G. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 657, pl. 123 E. 1912.

Agaricus gratus SCHUM. Enum. Pl. Saell. 2: 277. 1803.

Omphalia fragrans QUÉL. Enchir. Fung. 25. 1886.

Clitocybe suaveolens KONR. & MAUBL. Agaricales, 1:403. 1948. pr. p. (non QUÉLET)—HEIM, Champ. Eur. 2:278. 1957.

Clitocybe fragrans var. *depauperata* LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:85, pl. 37, f. G. 1935.

子実体は群生或はやや叢生；傘は径 2.5—4.5 cm，扁平～丸山形或は僅か中窩あり；表面は吸水性，湿時淡藁色，中央帯褐色，乾時白色となる，平滑，湿時縁辺に僅か線条あり；肉は薄く，白色，強きアニス臭あるか或は殆ど無臭 (var. *depauperata*)；褶は直生或は僅か垂生，帯白色，むしろ密，薄し，広幅；茎は 5—8×0.5—0.7 cm，同幅，傘面より淡色，平滑，基部屢々羊毛状，弾性，中空；胞子は楕円形或は狭楕円形，平滑，無色，非糊性，6.5—7.5(8)×3.5—4 μ；胞子紋は白色；担子柄は 14—17×5.5—6 μ，4 胞子；稜嚢体なし；可食。

所在及産地

林内地上—秋冬　本州—欧. 阿. 亜(西北)北米?

和名 コカブイヌシメジタケ
（小株犬湿地茸）〔本郷〕

疑問種

Clitocybe extenuata (FR.) IMAI (シロイチョウタケ) Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 88, pl. 2, f. 9. 1938. 原，日. 菌. 目. 74. 1954)

Clitocybe geotropa var. *subinvoluta* (川村，日. 菌. 図鑑，4:424, f. 419. 1954. シロシメジモドキ)

Lepista (FR.) W. G. SMITH
ムラサキシメジタケ属

W. G. SMITH, Jour. Bot. 8:26. 1870—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:192. 1871—SINGER, Agaricales, 190. 1949.

Paxillus trib. *Lepista* FRIES, Epicr. Mycol. 315. 1838.

Rhodopaxillus R. MAIRE, Ann. Mycol. 11:337. 1913.

傘は吸水性，類吸水性，或は非吸水性；托は褶状；褶は凹入彎生，或は稀に単純なる垂生，屢々傘肉より離脱す；茎は通常中心生にて繊維状肉質；肉は強靱ならずして再生せず；子実体は往々大なる叢生塊を作り，或は環状 (fairy ring 菌輪，仙人輪，魔の輪，狐の土俵) に甚だ密に群生す；胞子は寧ろ小形にて微細の粗面，非糊性，薄膜，往々一部平滑，楕円形，短楕円形，或は卵形，稀に楕円状円壔形，無色；胞子紋は甚だ淡き汚ピンク色～クリームピンク色；担子柄はすべての点に於て正常；嚢状体なし；托実質は整型或は類整型，すべての菌糸は非糊性にて多数の菌絆を有す；上表皮層は僅か分化するのみ林内，草原，庭園等の地上，堆肥上に生じ，材上に

生ぜず；裸実：多分汎布，約 15 種を知らる，良好の食用菌を有す。

（本属名は lepis〔希〕（鱗片）より出づ）

基準種 *L. subaequalis* (BRITZ) LING.

本邦既知種検索表

A．傘は径 10—15cm，初め菫色，速に褪色；縁は幼時綿架あり，波状；胞子 6—9×4.5—6μ。
オオムラサキシメジタケ
L. personata (113)

B．傘は径 3.5—8cm，茎と共に前者より濃色；縁は幼時より無毛，波状少し；胞子 6—8×3—5μ。
ムラサキシメジタケ ***L. nuda*** (114)

Lepista personata (FR. ex FR.) W. G. SMITH

オオムラサキシメジタケ

W. G. SMITH, Jour. Bot. 8:26. 1870—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:193. 1871—SINGER, Agaricales, 193. 1949.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，23. 1957）

Agaricus bicolor PERS. Syn. Meth. Fung. 281. 1801—SCHROETER, Pilze Schles. 1:658. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:267. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):675, pl. 126, f. 4–6. 1912.

(P. HENNINGS, Hedwigia, 39, Beibl. 156. 1904—松村，植．名鑑，1:176. 1904—白井，日．菌．目．100. 1905; ed. 2. 665. 1917; ed. 3. 397. 1927—安田，植．雑．25:442. 1911—原，日．菌．目．369. 1954)

Agaricus personatus FR. Syst. Myc. 1:50. 1821; Epicr. Myc. 48. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1: 88. 1857; Hymen. Eur. 72. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:556. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 105, pl. 5, f. 1. 1860—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:46. 1876—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 41. 1883; Illus. Brit. Fungi, 1: pl. 66 (no. 113). 1883—WINTER, Pilze, 1:810. 1884.

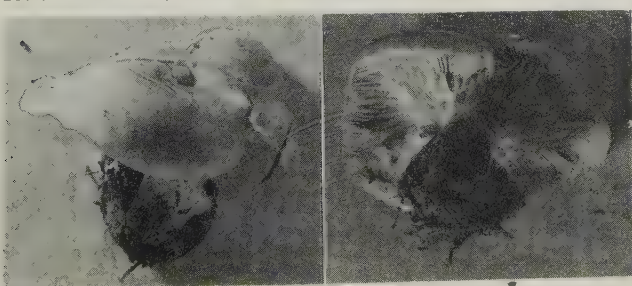
Tricholoma personatum QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:82. 1872—GILLET, Champ. Fr. 119, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:50. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 57. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:130. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 149. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 58, pl. 45, f. 1–5. 1890—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:215. 1893; Brit. Fungi, 113, pl. 8, f. 3. 1911—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 87, f. 87–88. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 42. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 24, pl. 17, f. 30. 1910—MURRILL, Mycologia, 2:43, pl. 19, f. 1. 1910—RICKEN, Blätterp. 352, pl. 95, f. 3. 1915 KAUFFMAN, Agar. Mich. 707. 1918—REA, Brit. Basid. 236. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 53, pl. 17. 1927—LANGE, Agar. Denm. 9: 30. 1933; Fl. Agar. Dan. 1:63, pl. 28, f. A. 1935—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:76, pl. 2, f. 7. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 61, pl. 14, f. 3. 1950.

（安田，植．雑．25:442. 1911—KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 6, f. 7–8. 1913；日．菌．図鑑，4:445, f. 430. 1954—白井，日．菌．目．ed. 2:665. 1917—広江，応用菌蕈学，f. 810 (p. 1195). 1941—今関，原色きのこ，pl. 24（左）. 1942—原，日．菌．目．369. 1954）

Rhodopaxillus personatus R. MAIRE, Ann. Myc. 11:338. 1913.

Rhodopaxillus saevus (GILL.) KÜHN. et ROMAGN. Fl. Analyt. Champ. Super. 171. 1953—HEIM. Champ. Eur. 2:289. 1957.

子実体は群生或は孤生し，時に菌輪を作る；傘は径 10—15cm，初め半球形，のち丸山形より扁平となり，遂に中央圧低さる；表面は幼時菫色なるも，比較的早く褪色しやや白色となり，更に淡褐色に変ず，湿時湿潤にてやや半透明，乾時不透明，粉状，のち平滑，縁は初め内巻，のち開平反転し波状をなし，往々罅裂す，初め綿毛あるも無毛となる；肉は白色にて菫色を帯び，緻密，のち海綿状となる，中盤甚だ厚く縁辺薄し，味及臭強からず；褶は彎生或は殆ど離生，菫色，のち淡灰菫色，遂に淡褐色となる，密，広幅，傘肉より剝げ易し，稜は全縁；茎は 7—10×1.5—3cm，殆ど同幅にて基部球根状，白色にて菫色を帯ぶるも，のち褪色す，早失性の繊維を存す，緊緻，中実；胞子は楕円形にて多くは便腹状，6—9×4.5—6μ，多くは 9×4.5μ；胞子紋は淡肉色或は淡帯桃色；可食。



a b

第 47 図 オオムラサキシメジタケ Lepista personata

a．子実体表面 b．同裏面 ×1/2 （大谷氏）

所在及産地

林内及草原—秋 北海道，本州—欧．北米．濠．亜（西比）

和名 オオムラサキシメジタケ （大紫湿地茸）〔川村〕

〔因記〕 原氏日本菌類目録 369 頁に本菌の *forma minor* BRES. を掲げ和

歌山県田辺町南方熊楠氏同定の旨を記しあり。本郷氏は従来本邦にてオオムラサキシメジタケと呼ばるるものはむしろ次に記するムラサキシメジならんと記せり。

Lepista nuda (BULL. ex FR.) W. G. SMITH
ムラサキシメジタケ

W. G. SMITH, Jour. Bot. 8:26. 1870—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:192, f. 47. 1871—SINGER, Agaricales, 193. 1949.

(MATSUDA & HONGO, Jour. Jap. Bot. 30:150. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 23, f. 39; pl. 7, f. 39. 1957)

Agaricus nudus BULL. Champ. Fr. pl. 439. 1791—FRIES, Syst. Myc. 1:52. 1821; Epicr. Myc. 48. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:89. 1857; Hymen. Eur. 72. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 555. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 105, pl. 4, f. 7. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:141. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 41. 1883; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 67 (no. 114). 1883; Handb. Austr. Fungi, 13. 1892—WINTER, Pilze, 1:810. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:658. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 267. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):675. 1912.

Tricholoma nudum QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:82. 1872—GILLET, Champ. Fr. 120, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:50. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:131. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 148. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:216. 1893; Brit. Fungi, 113. 1911—W. G SMITH, Brit. Basid. 43. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 24, pl. 17, f. 31. 1910—RICKEN, Blätterp. 352, pl. 95, f. 4. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 709. 1918—REA, Brit. Basid. 237. 1922—LANGE, Agar. Denm. 9:30. 1933; Fl. Agar. Dan. 1:63, pl. 28, f. c. 1935—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hakkaido Imp. Univ. 43: 77. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 62, pl. 12, f. 3 1950.

(川村, 日. 菌. 図説, n. 108. 1929; 日. 菌. 図鑑, 4 : 446, f. 431. 1954—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:118. 1931—松浦, 茸類辞典, 61, f. 59. 1933; 応用菌蕈学, 1194. 1941—小林, 日. 隠. 植. 図. 505, pl. 243. 1939—今関, 原色きのこ, pl. 24(右). 1942—原, 日. 菌. 目. 369. 1954—今関及土岐, 林. 試. 研. 報. 67:47. 1954)

Rhodopaxillus nudus R. MAIRE, Ann. Myc. 11: 338. 1913—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:376. 1948—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 171, f. 62. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:288, pl. 33, f. 3. 1957.

子実体は群生, やや叢生或は孤生; 傘は径 3.5—8 cm, 初め球状, のち丸山形～扁平となり, 時に中央



第48図　ムラサキシメジタケ Lepista nuda ×1/2　（大谷氏）

圧低さる; 表面は湿潤, 明かなる紫色にて, 早く淡汚赤褐色或は汚桃色に褪色す, 無毛, 平坦, 縁は内屈し, 波状をなすこと少く, 無毛; 肉は柔軟, 薄く, 菫色を帯び, 乾時白色, 臭及味温和; 褶は後方円く, 往々小歯ありて垂生, 初め菫色或は傘面とほぼ同色, 乾時淡色, 密, 狭幅, 傘肉より剝げ易し; 茎は 4—8 ×0.5—1 cm, 同幅或は基部肥大, 菫色或は傘面と同色, 乾時或は老時褪色す, 下部殆ど無毛, 上部絹状粉あり, のち無毛となる, やや弾性, 中実; 胞子は楕円形, 平滑或は粗面, 6—8×3—5 μ; 胞子紋は汚肉色或は淡汚桃色; 可食。

所在及産地

林内—秋　北海道, 本州—欧. 北米. 濠. 亜(小亜)

和名　ムラサキシメジタケ (紫湿地茸)〔川村〕

Tricholomopsis SING.
サマツタケモドキ属

SINGER, Schweiz. Zeitz. Pilzk. 17:13. 1939; Agaricales, 194. 1949.

子実体はシメジタケ (*Tricholoma*) 型, 稀にカヤタケ (*Clitocybe*) 或は殆どヒラタケ (*Pleurotus*) 型となる; 細胞内色素によつて能く色どられ, 少くとも上表皮層は鮮色或は鈍色を呈す, 鮮色なるときは往々傘の有色表面上に暗褐色, 帯黒色の小鱗片を有し, 褶及び茎は屢々同様の鮮色—通常黄色—を呈す; 傘は多少肉質, 漏斗形ならず, すべての種類に於て多少小鱗片或は繊維を有す, 表皮層は繊維を作る菌糸の末端を有する以外は僅かに分化す; これ等の末端菌糸は屢々僅か皮嚢体状をなし往々有色の細胞液を含む; 托は褶状; 褶は帯黄色或は白色, シメジタケ (*Tricholoma*) に於けるが如く凹入彎生, 或は直生～幾分カヤタケ (*Clitocybe*) の如く垂生, 或は単にモリノカレバタケ (*Collybia*) に於けるが如く狭生; 胞子は純白或は殆ど純白色; 胞子は楕円形～球

形，薄くして後往々僅か厚き単一膜を有す，膜は平滑，非糊性（沃度液にて帯黄色），或は僅か擬糊性（過熟せしものは沃度液にて甚だ淡き帯褐色となる）；担子柄は何れの点に於ても正常；嚢状体は褶側になし；稜嚢体は甚だ著しく，大形なるも薄膜なるが為めに乾燥によつて速に頽廃し看過さるることあり；托実質は整型或は類整型，寧ろ長き往々容積大なる菌糸が甚しく纒絡乃至稍々平行してこれを構成す；茎は中心生或は幾分偏心生，繊維状肉質，中実或は髄部充塞され早晩中空となるも軟骨質管状ならず；すべての菌糸は非糊性，多数の菌絆を有す；寧ろ新鮮の木或は甚だ腐朽せる木上に生ず，殆ど汎布，約 14 種を知らる。

（本属名は *Tricholoma*（属名），opsis（類似）より出づ）

基本種　*T. rutilans* (SCHAEFF. ex FR.) SING.

本邦既知種検索表

A. 褶は黄金色。

a. 傘は全面赤紫色の鱗片に被われ，径5—15cm。

サマツタケモドキ　***T. rutilans*** (115)

b. 傘は黄色にて全面に銹褐色の鱗片を点布す，径 3—6cm，或はそれ以上。

キサマツタケモドキ　***T. decora*** (116)

B. 褶は白色；傘は灰色～灰褐色或は黒褐色，径 5—15cm；茎基端に白色菌糸紐を附す。

ヒロヒダタケ　***T. platyphylla*** (116)

Tricholomopsis rutilans (SCHAEFF. ex FR.) SING.

サマツタケモドキ

SINGER, Agaricales, 196. 1949—HEIM, Champ. Eur. 2: 308, f. 223. 1957.

(MATSUDA & HONGO, Jour. Jap. Bot. 30:150. 1955—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，21, f. 35, pl. 6, f. 35. 1957)

Agaricus variegatus SCOP. Fl. Carn. ed. 2. 2: 434. 1772—FRIES, Epicr. Myc. 31. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:60. 1857; Hymen. Eur. 53. 1874.

Agaricus rutilans SCHAEFF. Fung. Bavar. 4: Ind. 51, pl. 219. 1774—FRIES, Syst. Myc. 1:41. 1821; Epicr. Myc. 30. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:59. 1857; Hymen. Eur. 53. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:561. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:24. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 89 (no. 74). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3: 37. 1876—Winter, Pilze, 1:825. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:663. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:268. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):686, pl. 126F. 1912.

Agaricus xerampellinus SOW. Col. Fig. Engl. Fungi, 1:pl. 31. 1797.

Tricholoma rutilans QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:78. 1872—GILLET, Champ. Fr. 1 03, c. ic. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:96. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 124. 1915—KARSTEN, Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 52. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:188. 1893; Brit. Fungi, 103, pl. 7, f. 2. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 159. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 34. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 24, pl. 18, f. 32. 1910—RICKEN, Blätterp. 343, pl. 91, f. 1. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 689. 1918—REA, Brit. Basid. 219. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 56, pl. 18. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 2:pl. 69. 1927—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3:pl. 262, f. 1. 1932; Agaricales. 1:356. 1948—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1:63. 1934—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:52, pl. 21, f. 21, D, D′. 1935—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 57, pl. 11, f. 1. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 151. 1953.

（松村，植．名鑑，1:177. 1904—白井，日．菌．目．100. 1905; ed. 2. 667. 1917; ed. 3. 398. 1927—KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 8, f. 6–7. 1913; 日．菌．図説，n. 35. 1929; 食用菌及有毒菌，f. 71 (p. 83). 1931; 日．菌．図鑑，4:453, f. 437. 1954—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:118. 1931—松浦，茸類辞典，90, f. 102. 1933; 応用菌蕈学，809 (p. 1193). 1941—小林，日．隠．植．図．503, pl. 242, f. 1–3. 1939—原，日．菌．目．370. 1954—今関及土岐，林．試．研．報．67:48. 1954)

Gymnopus rutilans S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:605. 1821.

Cortinellus rutilans KARST. Hattsv. 1:24. 1879—MURRILL, N. Am. Fl. 10:33. 1914; Mycologia, 9:259, pl. 11, f. 5. 1917—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:57. 1938.

（今関，原色きのこ，pl. 22 (左). 1942—原，日．菌．目．93. 1954）

子実体は群生，叢生或は孤生；傘は径 5—15cm，或はそれ以上に及び，鐘形，のち丸山形～扁平となり，中央僅か圧低され，屢々幾分中丘あり；表面は乾燥，地色は黄色なるも全面に赤紫色の綿毛鱗片を密布し，中央殊に密にて濃色を呈す，縁は初め内巻す；肉は淡黄色，やや厚く，柔軟，味温和，臭なし；褶は着生状変化し，円形直形，のち彎入，黄色或は黄金色，密，広幅或はむしろ狭幅，稜は硫黄色の綿絮ありて細鋸歯状；茎は 6—20×1—2.5cm，上方に狭細或はほぼ同幅，地色は淡黄色或は黄色にて傘面と同様なる微細綿毛鱗被を有し或はほぼ無毛，屈曲，時に偏心生，充塞のち中空；胞子は類球形或は類楕

円形，平滑，5—8×4—7μ；胞子紋は白色；棱嚢体は多生，大形，棍棒形～紡錘形，80—150×10—25μ；多分無毒，時に下痢を起す人ありという。

所在及産地

松の切株或はその腐材上一夏秋

北海道，本州一欧．北米．濠．亜(小亜)

和名 サマツタケモドキ（擬早松茸）〔川村〕

アカゲタケ（赤毛茸）〔川村〕

Tricholomopsis decora (FR.) SING.

キサマツタケモドキ

SINGER, Agaricales, 196. 1949—HEIM, Champ. Eur. 2:309. 1957.

Agaricus flavovirens FR. Obs. Myc. 1:25. 1815.

Agaricus decorus FR. Syst. Myc. 1:108. 1821; Epicr. Myc. 130. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1: 144. 1857; Hymen. Eur. 168. 1874—WINTER, Pilze, 1:739. 1884—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 260. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):614. 1912.

Agaricus multipunctus PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 25:73. 1873.

Clitocybe decora GILL. Champ. Fr. 171. 1874—KAUFFMAN, Agar. Mich. 724. 1918.

Cortinellus decorus KARST. Hattsv. 1:25. 1879—MURRILL, N. Am. Fl. 10:33. 1914; Mycologia, 7:164, pl. 160, f. 3. 1915—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:58. 1938.

(原，日．菌．目．93. 1954)

Tricholoma decorum QUÉL. Champ. Jura Vosg. Suppl. 11:3. 1882—KARSTEN, Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 52. 1889—REA, Brit. Basid. 219. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3:pl. 263. 1932; Agaricales, 1:357. 1948—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:52. 1935—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 151. 1953.

Gyrophila decora QUÉL. Enchir. Fung. 11. 1886.

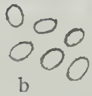
Tricholoma multipunctum SACC. Syll. Fung. 5:96. 1887.

Pleurotus decorus SACC. Syll. Fung. 5:342. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 320. 1915—A. L. SMITH & REA, Trans. Brit. Myc. Soc. 2:128, pl. 10. 1905—RICKEN, Blätterp. 448. 1915—BRESADOLA, Icon. Myc. 6:pl. 282. 1928.

子実体は群生，やや叢生或は孤生；傘は径 3—6 cm，或はそれ以上に及び，丸山形，のち扁平となり，中央圧低さる，縁はむしろ強く内屈す；表面は湿潤，鮮かなる黄色，時に褐色或はオリーブ色を帯ぶ，銹褐色にて老時帯黒色となる多数の小鱗片を散布し，鱗片は中央部に於て密にて暗色，縁は薄し；肉は薄く，柔軟，黄色，臭なく，味温和或は苦し；



a



b

第49図 キサマツタケモドキ
Tricholomopsis decora
a．子実体 ×2/3
b．胞子 ×500 （大谷氏）

褶は直生或は垂下歯を有し，黄金色，密，広幅，薄く，稜は綿絮状；茎は 3—6.5×0.4—0.7cm，中心生或は屢々偏心生，同幅或は基部僅か肥大，傘面と同色，微細鱗片を点布し，真直或は屈曲，充塞，のち中空；胞子は広楕円形或は類楕円形，平滑，5—7×4—5μ；胞子紋は白色；稜嚢体は房状をなし，棍棒形或は紡錘形，35—70×12—20μ；可食。

所在及産地

枯木上一夏秋　北海道，本州一欧．北米．亜(小亜)

和名 キサマツタケモドキ（黄擬早松茸）〔今井〕

Tricholomopsis platyphylla (PERS. ex FR.) SING.

ヒロヒダタケ

SINGER, Agaricales, 196. 1949.

Agaricus grammocephalus BULL. Champ. Fr. pl. 594. 1873—SCHROETER, Pilze Schles. 1:648. 1889—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):653. 1912.

Agaricus platyphyllus PERS. Obs. Myc. 1:47. 1796; Syn. Meth. Fung. 362. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:117. 1821; Epicr. Myc. 82. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:147. 1857; Hymen. Eur. 110. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:537. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 114. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:146. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:54. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 128 (no. 183). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:64. 1876—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:265. 1900—WINTER, Pilz, 1:782. 1884.

Agaricus repens FR. Obs. Myc. 1:14. 1815.

Collybia platyphylla QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:93. 1872—GILLET, Champ. Fr. 313, c. ic. 1874

—KARSTEN, Hattsv. 1:141. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:203. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:121. 1893; Brit. Fungi, 139. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 149. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 93. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 60. 1908—MURRILL, Mycologia, 7:118, pl. 158, f. 4. 1915—RICKEN, Blätterp. 406, pl. 107, f. 1. 1915 KAUFFMAN, Agar. Mich. 767. 1918—REA, Brit. Basid. 328. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 113, pl. 53, f. 1. 1927—LANGE, Fl. Agar. Dan. 2:9, pl. 42, f. D. 1936—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:116. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:277. 1948—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 74, pl. 23, f. 1. 1954—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 93, f. 158. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:268, f. 12, D. 1957.

(今関, 原色きのこ, pl. 35(左). 1942; 及土岐, 林. 試. 研. 報. 67:36. 1954—原, 日. 菌. 目. 84. 1954—川村, 日. 菌. 図鑑, 4:420; f. 413–414. 1954)

Collybia grammocephala QUÉL. Enchir. Fung. 27. 1886—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 229. 1915—BRESADOLA, Icon. Myc. 4: pl. 191. 1928.

Marasmius platyphyllus KARST. Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 100. 1889.

Gymnopus platyphyllus MURR. N. Am. Fl. 9: 367. 1916.

子実体は群生, やや叢生或は孤生; 傘は径 5—15 cm, 鐘形, のち丸山形～扁平となり, 鈍頭, 更に圧低され, 往々浅き漏斗形となる; 表面は乾燥, 湿時湿潤, 灰色～灰褐色, 或は黒褐色にて, 暗褐色放射状繊維ありて有線条, 中央暗色, 縁は初め内屈し, 屢々波状, 罅裂し易し; 肉は帯白色, 薄く, 脆し, 味は不良, 臭温和, 僅かアニス臭あり; 褶は狭生, 深く彎入, 遂に離生, 白色, 疎, 広幅, 柔軟, 脆く, 裂け易し, 稜は波状或はやや鋸歯状にて暗褐色を帯ぶ; 茎は 7—12×1—2 cm, 同幅, 白色或は少しく淡褐色～灰色, 絹状, 上部幾分粉状, 他部繊維状線条あり, 屢々有溝, 堅固, 基端切断状をなし或は白色の菌糸紐に連る, 外皮は類軟骨質, 内部は繊維肉質, 充塞, のち中空; 胞子は広楕円形, 平滑, 7—10×6—8 μ; 胞子紋は白色; 稜嚢体あり; 可食。

所在及産地

林内腐木上及その周囲—夏秋

北海道, 本州—欧. 北米. 亜(支. 西比. 小亜)

和名 ヒロヒダタケ (広褶茸) 〔川村〕

Collybia (FR.) QUÉL. em. SING.
モリノカレバタケ属

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:92. 1872—SINGER, Agaricales, 197. 1949.

Agaricus trib. *Collybia* FRIES, Syst. Mycol. 1: 129. 1821.

Rhodocollybia SING. Schweiz. Zeitschr. Pilzk. 17:15. 1939.

Dictyoploca (MONTAGNE, ut trib.) HEIM, Rev. Mycol. 10:23. 1945.

子実体は確実にモリノカレバタケ～ホウライタケ (*Collybia*～*Marasmius*) 型, 即ち褶は明かに垂生ならずして狭生～類離生, 彎生～凹入, 或は直生; 縁は初め通常内屈; 傘は円錐状鐘形ならずして丸山形乃至扁平, 往々幾分凹面となるも多くの種に於て著しき中窩なし; 茎は細くして寧ろ強靱乃至甚だ強靱なる紐状をなし, 稀に幾分太くなるも明かに繊維状強靱にて速に中空となる; 傘は甚だしく分化せる上表皮層を有せず, 即ち球嚢, 柵状及び変性せる菌糸の類存在せずして, 表皮層は通常纏絡或は匍匐, 平行菌糸の密層より成る; 担子柄はすべての点に於て正常にて寧ろ小形; 小担子柄は紡錘形; 稜嚢体は欠如或は存在するも屢々不明瞭にて成品にては実質の菌糸より直接生ず; 他の嚢状体は欠如; 胞子は球形～楕円形～卵形～紡錘形～円筒形～棍棒状円壔形, 薄き平滑, 非糊性の膜を有し, 臍上凹部あり或はなし; 胞子紋は白色, 淡クリーム色或は屢々クリームピンク色; 茎は往々菌核より発育す, 往々被層に分生胞子を作る, 平滑或は縦線条～溝あり, 無毛, 有粉或は有絨毛; 仮根は屢々存在す; 肉は強靱肉質, 肉状繊維質或は往々明かに強靱にて, 子実体は原位置に於て枯凋せる後再生す, 薄き或は厚き膜の菌糸より成る, 往々一子実体中に両菌糸を有す, 多くの種に於て菌糸は有色にて, 色素は細胞間隙, 膜中或は細胞内に存在す, 菌糸膜は非糊性, 凡ての菌糸に菌絆あり; 油管, 乳汁なし; 味は温和或は辛し; 臭はなきもの或は HCN, セルリー, 蒜臭あり; 地上, 落葉上, 腐菌上, 腐木或は生木上, 深蘚間, 腐蝕物上, 芝生, 庭園等に生ず; 裸実; 汎布, 約 33 種を知らる, 経済的価値なし。

(本属名は kollybos〔希〕(小貨幣) より出づ)

基本種　*C. dryophila* (BULL. ex FR.) QUÉL.

本邦既知種検索表

A. 水蘚間生ならず。

a. 子実体は菌核より生ぜず。

α. 茎は平滑無毛, 只基部に軟毛あるのみ, 纖細。

I. 傘は径 1—4 cm, 通常藁色, 中央帯褐色; 茎は同色。

モリノカレバタケ　***C. dryophila*** (118)

II. 傘は径 2—6 cm, 淡渋色或は肉赤色; 茎は赤褐色, 密に叢生。

カブベニチャタケ ***C. acervata*** (119)

β. 茎は平滑無毛ならず。

I. 茎に縦線条或は縦溝あり, むしろ太し。

1. 傘は径 3—6 cm, 色は変化し, 通常湿時暗褐色, 乾時淡色; 茎は同色。

エセオリミキタケ ***C. butyracea*** (119)

2. 傘は径 5—10 cm, 茎と共に白色, のち赤斑を生ず。

アカアザタケ ***C. maculata*** (120)

II. 茎に線条なく, 絨毛, 軟毛或は鱗被に被わる。

1. 傘は径 1—5 cm, 赤褐色〜淡桃色; 茎は同色にて白色軟毛に被わる。

アマタケ ***C. confluens*** (121)

2. 傘は径 3—5 cm, 暗紫褐色; 茎は同色にて淡黄土色粗毛に被わる。

スミレホウライタケ

C. fuscopurpurea (122)

3. 傘は径 1.5—3.5 cm, 黄褐色; 茎は黄橙色, 粉状或はやや粗毛鱗被に被わる; 小笠原産。

ハハノツエタケ ***C. matris*** (122)

b. 子実体は菌核より生ず。

α. 菌核は卵形或は核子形, 赤褐色或は類黒色; 腐茸上生。

ヤグラタケモドキ ***C. tuberosa*** (122)

β. 菌核は球形或は腎臓形, 淡黄褐色; 地上生。

タマツキカレハタケ ***C. sclerotipes*** (123)

B. 水蘚間に生ず。

a. 小形にて傘径 7—17 mm, 暗紫褐色; 茎は細長, 長さ 5.5 cm に至る, 淡紫灰色; 褶は僅か灰色。

ヤチナメコタケ ***C. leucomyosotis*** (123)

b. 中形にて傘径 3—4.5 cm, 黄〜黄土色; 茎はやや太くして長く, 長さ 9 cm に及ぶ, 傘面と同色; 褶は淡黄色にて帯褐色稜を有す。

ヤチヒロヒダタケ ***C. ozeensis*** (124)

Collybia dryophila (BULL. ex FR.) QUÉL.

モリノカレバタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:97. 1872; Enchir. Fung. 31. 1886—GILLET, Champ. Fr. 330, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:155. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:234. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 226. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:140. 1893; Brit. Fungi, 145, pl. 12, f. 6. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 65. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 48, pl. 48, f. 102. 1910—RICKEN, Blätterp. 413, pl. 108, f. 2. 1915—LANGE, Agar. Denm. 3:16, pl. 1, f. 9. 1917; Fl. Agar. Dan. 2:9, pl. 43, f. E. 1936—KAUFFMAN, Agar. Mich. 754, pl. 160. 1918—BRESADOLA, Icon. Myc. 4: pl. 212. 1928—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:280. 1948—SINGER, Agaricales, 200. 1949—HEIM, Champ. Eur. 2: 265, f. 199, A. 1957.

(HONGO, Jour. Jap. Bot. 28:330, f. 1. 1953—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 22, f. 36, pl. 6, f. 36. 1957)

Agaricus dryophilus BULL. Herb. Fr. pl. 434, f. 2. 1789—SOWERBY, Col. Fig. Brit. Fungi, 2:127. 1799—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 452. 1801—DECANDOLLE, Fl. Fr. 2:166. 1815—FRIES, Syst. Myc. 1:124. 1821; Epicr. Myc. 92. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:162. 1857; Hymen. Eur. 122. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:532. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 119. 1960—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:150. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:59. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2: pl. 204(no. 206). 1883; Handb. Austr. Fungi, 20. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:71. 1876—WINTER, Pilze, 1:773. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1: 643. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:264. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):645. 1912.

(安田, 植. 雑. 23:403. 1903—白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 31. 1917; ed. 3. 13. 1927—原, 日. 菌. 目. 9. 1954)

Omphalia dryophila S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:612. 1821.

Marasmius dryophilus KARST Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 103. 1889—REA, Brit. Basid. 524. 1922—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 82, pl. 24, f. 8. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 88, f. 153. 1953.

(広江, 応用菌蕈学, 1146. 1941—原, 日. 菌. 目. 191. 1954)

Collybidium dryophilum MURR. Mycologia, 3: 101, pl. 40, f. 8. 1911; 4:164, pl. 68, f. 3. 1912.

Gymnopus dryophilus MURR. Mycologia, 9: 259, pl. 11, f. 4. 1917.

子実体は類叢生或は群生; 傘は径 1—4 cm, 丸山形, のち扁平, 鈍頭, 遂に中央幾分圧低され, 屢々不正形となる; 表面は粘性ならず, 色は変化するも通常藁色, 中央に褐色の色彩あり, 周辺は淡色或は白色にて細線条あり, 無毛, 平滑; 肉は中盤やや厚く, 周辺に向つて薄く, 傘面と同色, 味温和, 臭むしろ強し; 褶は狭生, 白色或は淡色, 密, 狭幅, 稜は平坦或は微細歯あり; 茎は 2.5—6×0.15—0.3

cm，傘面と同色，上部淡色，同幅にて基部幾分肥大，無毛，軟骨質，中空，基端に白色菌糸あり；胞子は狭楕円形，平滑，非糊性，4—5.5×2.5—3.5μ；胞子紋は白色；囊状体なし；可食。

所在及産地

林内落葉間—春秋

本州—欧.北米.阿.濠.亜(錫)

和名 モリノカレバタケ（森枯葉茸）〔本郷〕
モリノカサ（森笠茸）〔安田〕

Collybia acervata (FR.) GILL.

カブベニチャタケ

GILLET, Champ. Fr. 329, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:154. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 234. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 225. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:140. 1893; Brit. Fungi, 145. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 65. 1908—RICKEN, Blätterp. 412. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 759. 1918—REA, Brit. Basid. 337. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 5:pl. 211. 1928—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:122. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3:pl. 203. 1934; Agaricales, 1:282. 1948—SINGER, Agaricales, 200. 1949—HEIM, Champ. Eur. 2: 266. 1957.

（原，日.菌.目. 83. 1954）

Agaricus acervatus FR. Syst. Myc. 1:122. 1821; Epicr. Myc. 92. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1: 160. 1857; Hymen. Eur. 122. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:533. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 119. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:58. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 267 (no. 205). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:71. 1876—WINTER, Pilze, 1:773. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:643. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:264. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):644. 1912.

Collybia erythropus var. *acervata* QUÉL. Enchir. Fung. 31. 1886.

Marasmius acervatus KARST. Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 103. 1889—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 88. 1953.

Gymnopus acervatus MURR. N. Am. Fl. 9:362. 1916.

Marasmius erythropus Auct.

(KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 5, f. 30-31. 1913; 日.菌.図説, n. 233. 1929; 日.菌.図鑑, 3: 333, f. 324. 1954—白井, 日.菌.目. ed. 2. 339. 1917; ed. 3. 200. 1927—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori. Soc. Agr. Sci. 3:114. 1931—松浦，茸類辞典，106, f. 124. 1933; 応用菌蕈学，f. 770-772 (p. 1146). 1941—原，日.菌.目. 191. 1954. カレバタケ)

子実体は密に叢生或は孤生；傘は径 2—6cm，丸山形～扁平，鈍頭，遂に圧低さる；表面は僅か吸水



a



b

第50図 カブベニチャタケ
Collybia acervata
a. 子実体 ×1/3
b. 胞子 ×550
（大谷氏）

性，湿時淡渋或は肉赤色にて僅か肉質，乾時淡色或は帯白色となり僅か皺を生ず，無毛，縁は初め内巻し，のち開平す，湿時往々不明瞭の線条あり；肉は薄くして淡色，茎に於ては茶褐色なり，味温和，臭なし；褶は僅か狭生或は離生，白色或は肉色を帯び，密，広幅；茎は 4—8×0.2—0.5cm，同幅或は僅か上方に狭細，稀に圧辺され，或は捩曲す，無毛，赤褐色，上部屡々帯白色，基部に白色綿毛を有す，剛直，中空；胞子は長楕円形或は長核子形，平滑，6—8×2.5—4μ；胞子紋は白色；囊状体なし；可食。

所在及産地

林内落葉間及腐木上—夏秋

北海道，本州—欧.北米

和名 カブベニチャタケ（株紅茶茸）〔今井〕
カレバタケ（枯葉茸）〔川村〕

〔因記〕 *Marasmius erythropus* は欧米に於て混乱せる種にて本邦のカレバタケは暫く *C. acervata* にあて将来の研究をまつ。

Collybia butyracea (BULL. ex FR.) QUÉL.

エセオリミキタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:93. 1872; Enchir. Fung. 28. 1886—GILLET, Champ. Fr. 316. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:144. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:209. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 233. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:125. 1893; Brit. Fungi, 139, pl. 12, f. 3. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 61. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 47, pl. 46, f. 99. 1910—RICKEN, Blätterp. 408, pl. 107, f. 2. 1915—LANGE, Agar. Denm. 3:16, pl. 1, f. 6. 1917; Fl. Agar. Dan. 2:11, pl. 41, f. c. 1936—KAUFFMAN, Agar. Mich. 753. 1918—REA, Brit. Basid. 331. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 4:pl. 200. 1928—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp.

Univ. 43 : 118. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:277. 1948—SINGER, Agaricales, 201. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 76, pl. 22, f. 1, A–B. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 92. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:265, f. 79 (4), pl. 35, f. 1. 1957.

(広江，応用菌蕈学，1188. 1941—原，日. 菌. 目. 83. 1954—今関及土岐，林. 試. 研. 報. 67:36. 1954)

Agaricus butyraceus BULL. Herb. Fr. pl. 572. 1791—FRIES, Syst. Myc. 1:121. 1821; Epicr. Myc. 84. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:151. 1857; Hymen. Eur. 113. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:536. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 115. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:147. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:55. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 143 (no. 189). 1883; Handb. Austr. Fungi, 18. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:66. 1876—WINTER, Pilze, 1:780. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:646. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:265. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 650. 1912.

(安田，植. 雑. 23:402. 1909—白井，日. 菌. 目. ed. 2. 31. 1917: ed. 3. 13. 1927)

Marasmius butyraceus KARST. Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 101. 1889.

子実体は群生或は孤生；傘は径 3—6 cm，丸山形，のち開張し扁平となり，中丘を存す，時に不規則に隆起する縁を有す；表面はやや吸水性，色は変化し，通常暗赤褐色或は渋色，のち帯黄色，黄土色或は帯白色に褪色す，中丘は永く暗色に残る，無毛，平坦；肉は中盤厚く，縁辺薄く，帯桃色〜淡褐色にて白色となる，やや肉質，味及臭温和；褶は僅か狭生或は離生，白色或は帯白色，密，広幅〜やや狭幅，薄く，稜に鈍鋸歯あり；茎は 2—8×0.4—0.8 cm，上方に漸細し，基部肥大，往々類球根状となり幅 2 cm に及ぶ，帯黄色，帯褐色或は帯赤色にて通常傘面と同色，線条あり，無毛，基部僅か綿毛を有す，基端に菌糸あり，外皮剛直にて軟骨質，中空；胞子は楕円形，有嘴，平滑，6—7×3—4 μ：胞子紋は白色；嚢状体なし；可食。

所在及産地

林内，主に針葉樹下—夏秋

北海道，本州—欧. 北米. 阿. 亜(西北)

和名 エセオリミキ

オリミキ

Collybia maculata (ALB. et SCHW. ex FR.) QUÉL.

アカアザタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 2:341. 1873; Enchir. Fung. 28. 1886—GILLET, Champ. Fr. 315, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:144. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:207. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 233. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:123. 1893; Brit. Fungi, 139, pl. 12, f. 5. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 60. 1908—MURRILL, Mycologia, 6:163, pl. 130. 1914—RICKEN, Blätterp. 410, pl. 107, f. 3. 1915—LANGE, Agar. Denm. 3:15, pl. 1, f. 4. 1917; Fl. Agar. Dan. 2:10, pl. 42, f. c–c'. 1936—KAUFFMAN, Agar. Mich. 768. 1918—REA, Brit. Basid. 330. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 4:pl. 194. 1928—PILÁT, Bull. Soc. Myc. Fr. 49: 279. 1933—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 118. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:276. 1948—SINGER, Agaricales, 201. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 75, pl. 21, f. 2. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 92. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:264, f. 198. 1957.

(原，日. 菌. 目. 84. 1954)

Agaricus carnosus CURT. Fl. Lond. 5:pl. 71. 1783–88—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, 3:246. 1803.

Agaricus maculatus ALB. et SCHW. Consp. Fung. 186. 1805—FRIES, Syst. Myc. 1:45. 1821; Enchir. Myc. 84. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:150. 1857; Hymen. Eur. 112. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:536. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 115. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:pl. 142. 1883—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 55. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 142 (no. 186). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:65. 1876—WINTER, Pilze, 1:781. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:647. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:265. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):651, pl. 121, f. 1–2. 1912.

Marasmius maculatus KARST. Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 100. 1889.

Gymnopus carnosus MURR. N. Am. Fl. 9:358. 1916.

子実体は群生或はやや叢生；傘は径 5—10 cm，肉質，緊緻，丸山形，のち開張扁平となり，鈍頭或は広中丘あり；表面は白色或は帯白色，速に銹色の斑点或は斑紋を生じ，のち全面帯黄色，帯褐色或は帯赤色となる，無毛，平滑，縁は初め内巻す，薄し；肉は白色，中盤厚く，緊緻，味温和，臭は穀粉様；褶は狭生或は殆ど離生，白色或は帯黄色にて，屢々赤斑を生ず，甚だ密，狭幅，稜は屢々有歯；茎は 6—12×0.6—1.5 cm，同幅或はやや便腹状となり，基端狭細し著しき根状となる，屢々基部に於て屈曲す，縦線条或は縦溝あり，赤斑を有し，屢々捩曲し，緊緻，軟骨質，中空；胞子は類球形，特に僅か有嘴，径 4—6 μ；胞子紋は白色或は淡肉色；嚢状体なし，



第51図 アカアザタケ Collybia maculata ×1/2 (大谷氏)

可食。

所在及産地

地上或は林内腐木上一夏秋

北海道, 本州一欧. 北米. 亜(小亜. 西比)

和名 アカアザタケ (赤痣茸) 〔今井〕

Collybia confluens (PERS. ex FR.) QUÉL.

アマタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:95. 1872—GILLET, Champ. Fr. 322, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:150. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 222. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 238. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:130. 1893; Brit. Fungi, 141. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 63. 1908—LANGE, Agar. Denm. 3:18, pl. 1, f. 13. 1917; Fl. Agar. Dan. 2:14, pl. 44, f. G. 1936—KAUFFMAN, Agar. Mich. 775. 1918—BRESADOLA, Icon. Myc. 5: pl. 203. 1928—SINGER, Agaricales, 201. 1949.

(P. HENNINGS, Bot. Jahrb. 31:738. 1902—松村, 植. 名鑑, 1:136. 1904—白井, 日. 菌. 目. 24. 1905; ed. 2. 163. 1917; ed. 3. 96. 1927—KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 17, f. 19–21. 1925—松浦, 茸類辞典, 30, f. 28. 1933—原, 日. 菌. 目. 83. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 22, f. 37; pl. 6, f. 37, phot. VI, 27. 1957)

Agaricus confluens PERS. Obs. Myc. 1:10. 1796; Icon. Descr. Fung. 1:15, pl. 5, f. 1. 1798; Syn. Meth. Fung. 365. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:123. 1821; Epicr. Myc. 88. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:156. 1857; Hymen. Eur. 117. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:535. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 116. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:56. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2: pl. 50, f. b. (no. 194). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:68. 1876—WINTER, Pilze, 1:777. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:645. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 265. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 647. 1912.

(白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 31. 1917; ed. 3. 13. 1927—原, 日. 菌. 目. 9. 1954)

Agaricus hariolorum BULL. Herb. Fr. pl. 56? 1781; pl. 585, f. 2. 1793—DECANDOLLE, Fl. Fr. 2: 182. 1815—FRIES, Syst. Myc. 125. 1821; Epicr. Myc. 88. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:155. 1857; Hymen. Eur. 117. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 66. 1883; Illus. Brit. Fungi, 2: pl. 50, f. a. (no. 194). 1883—WINTER, Pilze, 1:778. 1884—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 265. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 648. 1912.

Collybia hariolorum QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:94. 1872; Enchir. Fung. 29. 1886—GILLET, Champ. Fr. 322, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:150. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:221. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 238. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:130. 1893; Brit. Fungi, 141. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 63. 1908—RICKEN, Blätterp. 416. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 774. 1918—BRESADOLA, Icon. Myc. 5: pl. 202. 1928.

Marasmius confluens KARST. Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 102. 1889—RICKEN, Blätterp. 72, pl. 24, f. 2. 1915—MURRILL, N. Am. Fl. 9:269. 1915—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 137. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:290. 1948—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 89, f. 154. 1953.

(原, 日. 菌. 目. 191. 1954—今関及土岐, 林. 試. 研. 報. 67:45. 1954)

Marasmius hariolorum QUÉL.—REA, Brit. Basid. 522. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:290. 1948—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 81, pl. 25, f. 3. 1950.

子実体は叢生或は群生, 往々菌輪を作る; 傘は径1—5cm, 丸山形〜扁平, 鈍頭; 表面は吸水性, 湿時赤褐色〜淡桃色, 中央濃色, 乾時灰肉色〜帯白色となる, 薄く, 柔脆, 縁は甚だ薄く, 往々内巻し, 湿時小線条あり, 成時平坦, 老時屢々反転す; 肉は甚だ薄く, 傘面とほぼ同色, 味及臭殆どなし; 褶は離生或は隔生, 帯白色, 密, 甚だ狭幅; 茎は 4—12×0.15—0.4cm, 同幅或は基部僅か太く, 屢々圧辺され, 類軟骨質にて強靱, 傘面と同色或は淡栗褐色, 頂部以外は密なる白色軟毛を被むる, 基部に於て互に癒着し綿状菌糸によりて落葉に附着すること多し, 中空; 胞子は楕円形, 平滑, 6—7×3—4μ: 胞子紋は白色; 可食。

所在及産地

広葉樹林内落葉上一夏秋

北海道,本州一欧.北米.阿.亜(小亜)

和名 アマタケ〔川村〕

Collybia fuscopurpurea (PERS. ex FR.) SING.

スミレホウライタケ

SINGER, Agaricales, 201. 1949.

Agaricus fuscopurpureus PERS. Icon. Desc. Fung. 1:12, pl. 4, f. 1–3. 1798; Syn. Meth. Fung. 451. 1801; Myc. Eur. 3:137. 1828—FRIES, Syst. Myc. 1:128. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:533. 1844.

Agaricus terginus FR. Syst. Myc. 1:128. 1821.

Marasmius fuscopurpureus FR. Epicr. Myc. 377. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:220. 1863; Hymen. Eur. 469. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 219. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1: 234. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7:pl. 1121, f. b. (no. 1075). 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:222. 1872; Enchir. Fung. 143. 1886—GILLET, Champ. Fr. 371. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:168. 1879—WINTER, Pilze, 1:511. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:515. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3: 159. 1893; Brit. Fungi, 151. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 302. 1908—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:229. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1):386. 1912——RICKEN, Blätterp. 73, pl. 24, f. 1. 1915—PENNINGTON, N. Am. Fl. 9:272. 1915—LANGE, Agar. Denm. 4:17, f. 2. 1921; Fl. Agar. Dan. 2:22, pl. 46, f. E, E′. 1936—REA, Brit. Basid. 520. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 10:pl. 493. 1929—KONRAD, Bull. Soc. Myc. Fr. 47:135. 1931; & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3:pl. 219, f. 1. 1934; Agaricales, 1:290. 1948—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 89. 1953.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 55:451. 1941)

Marasmius terginus FR. Epicr. Myc. 377. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:221. 1863; Hymen. Eur. 469. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:235. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7:pl. 1122, f. a. (no. 1076) 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 5:323–xxxi. 1877; Enchir. Fung. 143. 1886—KARSTEN, Hattsv. 1:168. 1879—GILLET, Champ. Fr. 371. 1874—WINTER, Pilze, 1:510. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:516. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 469. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1:561. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:159. 1893; Brit. Fungi, 151. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:229. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 302. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1):387, pl. 69D, f. 1–3. 1912—RICKEN, Blätterp. 73. 1915—REA, Brit. Basid. 521. 1922—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 89. 1953.

子実体は群生或は叢生; 傘は径 3—5 cm, 丸山形〜扁平, 初め僅か中央圧低さる, 僅か肉質, 堅靱; 表面は僅か吸水性, 湿時暗紫褐色, 乾時帯黄色或は藁色となる, 縁は薄く, 湿時透明の細線条あり; 肉は味温和; 褶は狭生或は離生, 帯赤色, やや疎, 甚だ広幅; 茎は 5—8×0.3—0.4 cm, 同幅にて基部太く, 暗紫褐色, 上部殆ど平滑, 下部淡黄土色の粗毛にて鞘状に包まる, 基部幾分屈曲し, 根状となりて枯葉に附着す, 中空; 胞子は核子形, 平滑, 6.5—8×3—3.5 μ: 胞子紋は白色, 担子柄は長き小柄 (約 8 μ) を有す。

所在及産地

林内落葉上一夏秋　　北海道, 本州一欧. 北米

和名 スミレホウライタケ (菫蓬萊茸)〔今井〕

Collybia matris S. ITO et IMAI

ハハノツエタケ

S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:16. 1939.

子実体は孤生或は群生; 傘は径 1.5—3.5 cm, 丸山形, のち扁平となる; 表面は湿時僅か粘性, 周辺淡黄褐色, 中央暗色, 長き線条を有し, 無毛, 縁は類膜質; 肉はやや薄し; 褶は狭生, 淡赤褐色, やや疎, 便腹状; 茎は約 4×0.3—0.4 cm, 殆ど同幅或は基部僅か肥大し, 根状となりて狭細す, 黄橙色, 粉状或はやや粗毛鱗被を有す, 中空; 胞子は円壔形, 平滑, 無色, 7.5—9×4—5 μ: 胞子紋は白色。

所在及産地

陰林腐木上一秋　　小笠原島

和名 ハハノツエタケ (母の杖茸)〔今井〕

Collybia tuberosa (BULL. ex FR.) QUÉL.

ヤグラタケモドキ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:96, pl. 3, f. 5. 1872—GILLET, Champ. Fr. 320, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:152. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:224. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 236. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:133. 1893; Brit. Fungi, 141, pl. 12, f. 2. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 149. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 63. 1908—RICKEN, Blätterp. 418. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 773. 1918—LANGE, Agar. Denm. 3: 18, pl. 1, f. 15. 1917; Fl. Agar. Dan. 2:15, pl. 44, f. D–D′. 1936—REA, Brit. Basid. 334. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 5:pl. 207, f. 1. 1928—

—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:278. 1948—SINGER, Agaricales, 202. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 77, pl. 22, f. 3. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 93, f. 53. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:267, f. 200, c. 1957.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 53:296. 1939—原，日．菌．目．84. 1954)

Agaricus tuberosus BULL. Champ. Fr. pl. 257. 1791—FRIES, Syst. Myc. 1:133. 1821; Epicr. Myc. 90. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:160. 1857; Hymen. Eur. 119. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:535. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:58. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 144, f. a. (no. 197). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:70. 1876—WINTER, Pilze, 1:776. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:644. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:265, f. 122, E. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):646. 1912.

Gymnopus tuberosus S.F.GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:611. 1821.

Marasmius tuberosus KARST. Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 103. 1889.

子実体は群生し菌核より生ず；傘は小形にて径5—10 mm，丸山形或は殆ど扁平，鈍頭或はやや中丘あり；表面は初めむしろ絹状，のち平滑となり，白色にて屢々赤或は黄味を帯ぶ，平坦，甚だ薄きも不透明；肉は白色或は赤味を帯び，甚だ薄し；褶は直生，帯白色，密，狭幅，稜に微細軟毛あり；茎は細長にて 2—4×1 mm，白色或は赤味を帯び，同幅，薄き白色蜘網状粉毛に被われ，上部屢々殆ど無毛，波曲す，下端菌糸に連る；菌核は形変化し，卵形或は核子形，赤褐色或は類黒色；胞子は楕円形，平滑，4—5.5×2—3 μ；胞子紋は白色。

所在及産地

腐れきのこ或は湿潤腐蝕物上—夏秋　　北海道，本州—欧．北米

和名　ヤグラタケモドキ（擬櫓茸）〔今井〕

Collybia sclerotipes (BRES.)

タマツキカレハタケ

Agaricus cirrhata (non SCHUM. ex FR.)—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:57. 1871. pr. p.; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 144, f. b. (no. 197). 1883—SCHROETER, Pilze Schles. 1:645. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 265. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):647. 1912.

Marasmius sclerotipes BRES. Fungi Trid. 1: 12, pl. 11, f. 1. 1881—SACCARDO, Syll. Fung. 5:558. 1887—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 228. 1900—REA. Brit. Basid. 528. 1922.

Collybia cirrhata (non QUÉL.)—RICKEN, Blätterp. 417, pl. 109, f. 2. 1915—LANGE, Agar. Denm. 3:18, pl. 1, f. 16. 1917; Fl. Agar. Dan. 2:15, pl. 44, f. E. 1936.

Collybia cirrhata var. *Cookei* BRES. Icon. Myc. 5:pl. 206. 1928—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 93. 1953.

(小林，Nagaoa, 2:116, f. 70B, 71-72. 1952)

Collybia Cookei D. J. ARNOLD, Mycologia, 27: 414. 1925—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:279. 1948—SINGER, Agaricales, 202. 1949.

子実体は群生或は叢生，菌核より生ず；傘は小形にて径 5—9 mm，丸山形にて往々中丘あり，のち扁平〜僅か圧低さる；表面は平滑，無光沢，中央部淡紅褐色，周辺淡色或は殆ど白色，縁辺は全縁にて薄質，線条あり；肉は白色，薄く，無味，無臭；褶は直生，淡紅白色或は帯白色，密，広幅，稜は全縁；茎は 4—7×0.08—0.1 cm，同幅，淡紅白色〜淡褐色，粉状，基部に根毛ありて菌核に連る，中実；菌核は球形或は腎臓形，ほぼ平滑にて少しく凹凸あり，淡黄褐色；胞子は卵形或は類球形，平滑，無色，3—4×2.5 μ；胞子紋は白色；嚢状体なし。

所在及産地

林内地上—夏秋　　本州—欧．北米

和名　タマツキカレハタケ（玉付枯葉茸）

Collybia leucomyosotis COOKE et SMITH, sensu LANGE

ヤチナメコタケ

LANGE, Fl. Agar. Dan. 2:16, pl. 45, f. c. 1936—KOBAYASI, Sci. Res. Ozegahara Moor, 558, f. 5, pl. 1, f. 2. 1954.

子実体は孤生；傘は径 7—17 mm，鐘形，のち開張，丸山形或は殆ど扁平；表面は幾分粘性にて光沢あり，中丘は暗紫灰色，周辺淡色，平滑，暗色の線条あり，縁は真直，全縁；褶は直生或は僅か垂生，僅か灰色，疎，狭幅，不等長，連結横脈あり，稜は鋸歯状；茎は 3.5—5.5×0.13—0.18 cm，同幅，帯紫灰色或は淡色，下部蒼白，頂部粉状，基部に菌糸を附す，平滑，光沢あり，脆く，幾分軟骨質，中空；胞子は卵形或は楕円形，平滑，無色，内容顆粒状，7—10×4.5—6 μ，通常 7×4.5 μ；担子柄は 30—40×6—7 μ，4 稀に 2 胞子；傘及外層の組織は擬柔組

織状，托実質は擬組織状にて泡状細胞より成る；嚢状体なし。

所在及産地

水蘚間—秋　　本州—欧

和名　ヤチナメコタケ（谷地滑子茸）〔小林〕

〔因記〕 SINGER 氏は *Collybia leucomyosotis* を *Lyophyllum palustre* (PECK) SING. (Agaricales, 166. 1949) の異名となせり，之れにつきては今後の考証にまつ。

Collybia ozeensis KOBAY.
ヤチヒロヒダタケ

KOBAYASI, Sci. Res. Ozegahara Moor, 558, f. 6, pl. 1, f. 5. 1954.

子実体は孤生；傘は中形にて径 3—4.5 cm，丸山形，のち開張し，縁は内屈或は稀に反転す；表面は幾分粘性，帯黄色～淡黄土色，中央微細皺ありて灰色，甚だ微細なる暗灰色にて圧着せる繊維を縁に向つて放射状に存す，縁は全縁にて帯褐色；褶は直生或は僅か垂生，淡黄色，やや疎，不等長，稜は全縁にて帯褐色；茎は 4.5—9×0.35—0.8 cm，上方に狭細，傘面と同色，微細線条あり，暗灰色繊維を有し，上部淡色にて殆ど白色，肉質，幾分脆く，中空；胞子は卵形或は楕円形，有嘴，平滑，無色，内容顆粒状，6—8×4—5 μ；担子柄は 27—30×6.5—7 μ，2 或は 4 胞子；稜嚢体は棍棒形或は不正形。

所在及産地

水蘚間—秋　　本州

和名　ヤチヒロヒダタケ（谷地広襞茸）〔小林〕

疑問種

Collybia abundans (広江，応用菌蕈学，f. 804 (p. 1189). 1941—原，日. 菌. 目. 83. 1954) エノキタケモドキ

Collybia adianticeps (BERK. et CURT.) SACC. Syll. Fung. 5:241. 1887. (松村，植. 名鑑，1:136. 1904—白井，日. 菌. 目. 24. 1905; ed. 2. 163. 1917; ed. 3. 95. 1927—原，日. 菌. 目. 83. 1954) = *Agaricus adianticeps* BERK. et CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4:112. 1860 (MIQUEL, Prol. Fl. Jap. 391. 1867—白井，日. 菌. 目. 7. 1905; ed. 2. 31. 1917; ed. 3. 12. 1927) 函館。

Collybia efflorescens (BERK. et CURT.) SACC. Syll. Fung. 5:220. 1887. (松村，植. 名鑑，1:136. 1904—白井，日. 菌. 目. 24. 1905; ed. 2. 163. 1917; ed. 3. 96. 1927—原，日. 菌. 目. 84. 1954) = *Agaricus efflorescens* BERK. et CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4:112. 1860. (白井，日. 菌. 目. ed. 2. 31. 1917; ed. 3. 13. 1927—原，日. 菌. 目. 9. 1954) 小笠原島

Collybia latesulcata UMEM. Fl. Mt. Fuji (富士. 植. 志.) 366. 1923. フジタケ (白井，日. 菌. 目. ed. 3. 1927—原，日. 菌. 目. 84. 1954) 富士山。

Collybia palmicola (BERK. et CURT.) SACC. Syll. Fung. 5:233. 1888. (松村，植. 名鑑，1:136. 1904—白井，日. 菌. 目. 24. 1905; ed. 2. 163. 1917; ed. 3. 96. 1927—原，日. 菌. 目. 84. 1854) = *Agaricus palmicola* BERK. et CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4:112. 1860. (白井，日. 菌. 目. ed. 2. 33. 1917; ed. 3. 13. 1927—原，日. 菌. 目. 9. 1954) 小笠原島

Collybia talpina (BERK. et CURT.) SACC. Syll. Fung. 5:213. 1887. (松村，植. 名鑑，1:136. 1904—白井，日. 菌. 目. 24. 1905; ed. 2. 165. 1917; ed. 3. 96. 1927—原，日. 菌. 目. 84. 1954) = *Agaricus talpinus* BERK. et CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4:112. 1860. (白井，日. 菌. 目. ed. 2. 35. 1917; ed. 3. 14. 1927—原，日. 菌. 目. 10. 1954) 小笠原島

Pleurocybella SING.
スギヒラタケ属

SINGER, Mycologia, 39:81. 1947; Agaricales, 202. 1949.

色素なきか殆どなし；子実体はヒラタケ (*Pleurotus*) 型；傘は比較的薄し；表皮層は僅か分化す；胞子は無色，球形或は類球形，或は多少楕円形，薄膜，非糊性，小形；担子柄はすべての点に於て正常；嚢状体は全く欠如；托実質は不整型，殆ど錯綜して僅か軸の方向を取り或は取らず，菌糸は薄膜，後厚膜 (0.5—1 μ)，往々子実層より抽出し老品にては毛状となる；茎は欠如或は多少偏心生；被膜なし；肉は薄肉質，僅か強靱，非糊性及非膠性の菌絆ある菌糸より成り，菌糸は老品に於て往々厚膜となる；材上生，北及び温帯産，約 3 種を知らる，経済的関係なし。

(本属名は pleua〔希〕(側或は肋脈)，kybos〔希〕(六面体，骰子，頭)，ella (縮小詞) より出づ)

基準種　*P. porrigens* (PERS. ex FR.) SING.

本邦既知種検索表

A. 茎は偏心生にて屈曲，絨毛を被むる；傘は径 2—5 cm，白色；広葉樹幹上。

　　ヒメシロタモギタケ **P. lignatilis** (125)

B. 無茎，初め背着，のち長耳形～扇形の傘となる，

3—8×2—6 cm, 純白色; 針葉樹幹上。
スギヒラタケ ***P. porrigens*** (125)

Pleurocybella lignatilis (PERS. ex FR.) SING.
ヒメシロタモギタケ

SINGER, Agaricales, 203. 1949.

Agaricus lignatilis FR. Syst. Myc. 1:94. 1821; Epicr. Myc. 132. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:243. 1857; Hymen. Eur. 169. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:5171. 844—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:93. 1876—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:47. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 257, f. a. (no. 276). 1883—WINTER, Pilze, 1:737. 1884—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:260. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):613. 1912.

Pleurotus lignatilis GILL. Champ. Fr. 341, c. ic. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:344. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 319. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:369. 1893; Brit. Fungi, 206. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 92. 1908—RICKEN, Blätterp. 448. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 666, pl. 143. 1918—REA, Brit. Basid. 444. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 6:pl. 283, f. 2. 1928—LANGE, Fl. Agar. Dan. 2:69, pl. 62, f. F. 1936—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:420. 1948—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 73, f. 125. 1953.

Clitocybe lignatile KARST. Hattsv. 1:86. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basid. 73. 1889.

Agaricus abscondens PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 31:32. 1879.

Pleurotus abscondens SACC. Syll. Fung. 5:346. 1887.

Micromphale abscondens MURR. N. Am. Fl. 9: 307. 1916.

Tricholoma lignatile R. MAIRE, Fungi Maroc. 100. 1937.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 53:394. 1939—原, 日. 菌. 目. 369. 1954)

子実体は群生或は叢生; 傘は径 2—5 cm, 丸山形, のち扁平, 往々僅か圧低さる, 屢々不正形; 表面は帯白色, 時に中央灰色, 初め僅か綿絮粉状, のち無毛, 縁は内屈す; 肉は白色, 柔軟, 臭強し; 褶は直状垂生, 白色, 密, 狭幅, 茎は 2—6×0.3—0.7 cm, 偏心生, 白色, 同幅, 屈曲, 幾分絨毛を被むる, 充塞, のち中空; 胞子は卵形, 平滑, 3—5×2—3 μ; 胞子紋は白色; 可食。

所在及産地

広葉樹幹上—夏秋　　北海道, 本州—欧. 北米

和名 ヒメシロタモギタケ (姫白楡木茸) 〔今井〕

Pleurocybella porrigens (PERS. ex FR.) SING.
スギヒラタケ

SINGER, Agaricales, 208. 1949.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 22, f. 38; pl. 7, f. 38. 1957)

Agaricus abietinus SCHRAD. Spic. Fl. Germ. 132. 1794.

Agaricus porrigens PERS. Obs. Myc. 1:54. 1796; Syn. Meth. Fung. 480. 1801; Myc. Eur. 3: 21. 1828—FRIES, Syst. Myc. 1:184. 1821; Epicr. Myc. 136. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:252. 1857; Hymen. Eur. 178. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:514. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 137. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:50. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 259, f. a. (no. 288). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:97. 1876—WINTER, Pilze, 1:733. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:625. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:260. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):609. 1912.

Phyllotus porrigens KARST. Hattsv. 1:92. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 112. 1889.

Pleurotus niphetus ELLIS, Bull. Torr. Bot. Club, 9:18. 1882.

Pleurotus porrigens GILL. Champ. Fr. 334. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:374. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 311. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:378. 1893; Brit. Fungi, 211. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 95. 1908—RICKEN, Blätterp. 455. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 671. 1918—REA, Brit. Basid. 449. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 6:pl. 281, f. 2. 1928—HEMMI, Bot. Mag. Tokyo, 44:162, f. 3. 1932—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:96. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:419. 1948—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 102, pl. 31, f. 6. 1950.

(広江, 応用菌蕈学, f. 798 (p. 1184). 1941—今関, 原色きのこ, pl. 37 (右). 1942—本郷, 植. 分. 地. 14: 72, f. 1 (2). 1951—原, 日. 菌. 目. 279. 1954)

Calathinus porrigens QUÉL. Enchir. Fung. 46. 1886.

Geopetalum porrigens MURR. Mycologia, 4:215. 1912.

Geophetalum abietinum MURR. N. Am. Fl. 9: 300. 1916.

Pleurotellus porrigens KÜHN. et ROMAGN. Fl. Analyt. Champ. Super. 74, f. 127. 1953.

子実体は多数畳生; 傘は 3—8×2—6 cm, 初め背着し, 類球形にて永存的内巻縁を有し, 無茎, のち反転伸長し, 斜上或は水平となり, 長耳形, 倒卵形或は扇形となる; 表面は純白色, 無毛にて基部に絨軟毛を有す, 縁は波状或は浅裂す; 肉は白色, のち

クリーム色，薄くして，むしろ脆し，味及臭なし；褶は放射状，密，甚だ狭幅，薄く，多く叉状をなし，基部纏絡す；胞子は球形～類球形，平滑，5—6.5×4—5.5μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地

林内腐朽針葉樹(主にスギ)切株上—夏秋

北海道，本州—欧．北米．亜(樺)

和名 スギヒラタケ（杉平茸）〔逸見〕

（2） Tricholomatinae Sing. キシメジタケ亜族

Singer, Agaricales, 209. 1949.

族の性質に同じ；ヒダサカズキタケ(*Omphalina*)，ナラタケ(*Armillariella*)及びキシメジタケ(*Tricholoma*)各属の少数種以外は菌絆を有せず。

Omphalina Quél. em Sing.
ヒダサカズキタケ属

Quélet, Enchir. Fung. 42. 1886—Singer, Pap. Mich. Acad. Arts Sci. 32:124. 1948; Agaricales, 209. 1949.

Omphalia (Fr.) Quélet, Champ. Jura Vosg. 1:99. 1872, sensu Singer (1942) em. Romagnesi (1942) (non S. F. Gray)

子実体は明かに且つ典型的にヒダサカズキタケ(*Omphalia*)型にて，中にヒダサカズキタケ～ヒラタケ(*Omphalia-Pleurotus*)型即ちヒダサカズキタケ型なるも偏心～類側生の茎を有するものあり；色素は欠如或は存在し，屢々多量に存在し，膜中或は屢々表面を被う；鈍色（灰色～殆ど黒色），或は鮮色（黄，緑，紫色等）；傘は多少吸水性，無毛或は中心部に近く鱗片を有す，縁は真直或は内屈，屢々中窩あり；表皮層は放射状に配列する糸状菌糸より成りて一般に僅か分化す；褶は垂生，往々比較的に厚くして疎生しオトメノカサ(*Camarophyllus*)或はアカヤマタケ(*Hygrocybe*)を想起せしむ；胞子紋は純白色；胞子は無色，平滑或は稀に有刺，膜は薄きか稍々薄く，非糊性，形は短楕円形，楕円形，卵形，甚だ短き円筒形或はチルダ(～)形；担子柄はすべての点に於て正常なるも屢々2胞子；嚢状体は或種に於て甚だ分散せる不明瞭なる棱嚢体を有するものを除けば欠如；托実質は不整型，稀に整型なり，不整型の菌糸は不透明にて幾分厚膜，非糊性，整型の場合は甚だ狭き甚だ不整なる子実下層によつて一部置き換えらる；茎は肉質～類軟骨質，狭き中空或は髄部充塞され後中空となる，径1—2mm，稀にそれ以上，中心生或は偏心性～僅かの種に於て類側生；根状束欠如，少くとも黒色のものなし；肉は屢々吸水性，水潤状，薄く，菌絆を有する或は有せざる一部厚膜の菌糸より成る；砂礫地，枯木，埋木，蘚間に生ず，北及温帯産，約11種を知らる，経済的価値なし。（本属名はomphalos〔希〕(臍)より出づ）

基準種　*O. umbellifera* (L. ex Fr.) Quél.

本邦既知種検索表

A．傘は初めより開き縁は内屈す；褶はむしろ疎にて狭幅。

a．中形にて傘は径1—4cm，暗褐色～煙褐色；褶は灰白色；茎長1.5—3cm，無毛；胞子7.5—10×4—6μ；材上生。

ヒダサカズキタケ　***O. epichysium*** (126)

b．小形にて傘は径0.7—1.5cm，灰褐色；褶は灰色；茎長2—2.5cm，無毛或は絨粉状；胞子6.5—8×5—5.5μ；地上生。

ヒメサカズキタケ　***O. rustica*** (127)

B．傘は初め鐘状にて縁は真直。

a．傘は径1—3cm，黒褐色，乾時灰白色；褶は暗褐色；茎は傘と殆ど同色；胞子7—9×4—5μ；地上生。

コクロサカズキタケ　***O. umbratilis*** (127)

b．傘は径1—2.5cm，レモン黄色，乾時緑色；褶は初め黄色，のち緑色；茎は傘と同色；胞子7—8×4—6μ，落枝，木屑，切株上生。

ミドリタケ　***O. wynniae*** (128)

Omphalina epichysium (Pers. ex Fr.) Quél.
ヒダサカズキタケ

Quélet, Enchir. Fung. 43. 1886—Singer, Agaricales, 212. 1949.

Agaricus epichysium Pers. Syn. Meth. Fung. 462. 1801—Fries, Syst. Myc. 1:169. 1821; Epicr. Myc. 123. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:184. 1857; Hymen. Eur. 158. 1874—Rabenhorst, Deut. Krypt. Fl. 1:520. 1844—Karsten, Myc. Fenn. 3:87. 1876—Winter, Pilze, 1 746. 1884—Schroeter, Pilze Schles. 1:628. 1889—Cooke, Handb. Austr. Fungi, 27. 1892—P. Hennings, in Engler & Prantl, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:262. 1900—Migula, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):621. 1912.

Omphalia epichysium Quél. Champ. Jura Vosg. 1:100. 1872—Karsten, Hattsv. 1:130. 1879; Krit.

Oefv. Finl. Basidsv. 93. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:314. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 287. 1915—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 101, f. 104. 1903—W.G.SMITH, Brit. Basid. 85. 1908—RICKEN, Blätterp. 388. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 818, pl. 171. 1918—REA, Brit. Basid. 426. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 6:pl. 261. 1928—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:133. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1: 334. 1948—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 128. 1953.

(原，日．菌．目．229. 1954)

子実体は群生或は孤生；傘は径 1—4cm，丸山形，のち開張し，中窩を有し，更に漏斗形となる，縁は内屈す；表面は暗灰色～煙褐色，乾時淡色，中央綿架鱗片を有し，のち無毛となる，縁辺湿時細線条あり，縁は波状，浅裂す；肉は傘面と殆ど同色，薄く，柔軟，味及臭なし；褶は垂生，灰白色，疎，狭幅，稜は全縁；茎は 1.5—3×0.15—0.4cm，同幅，傘面と同色，無毛，基端に白色綿架あり，殆ど中実或はやや中空；胞子は楕円形，平滑，7.5—10×4—6μ；胞子紋は白色；嚢状体なし。

所在及産地

林内腐木上—夏秋

北海道—欧．北米．亜(支．小亜)

和名　ヒダサカズキタケ（襞盃茸）〔今井〕

Omphalina rustica (FR.) QUÉL.

ヒメサカズキタケ

QUÉLET, Enchir. Fung. 43. 1886.

(今関及本郷，原色日．菌．図鑑，28, f. 40, pl. 7, f. 40. 1957)

Agaricus ericetorum PERS. Obs. Myc. 1:50, pl. 4, f. 12. 1796. pr. p.

Agaricus rusticus FR. Epicr. Myc. 124. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:185. 1857; Hymen. Eur. 159. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 95. 1883; Illus. Brit. Fungi, 8:pl. 959, f. c.(no. 1153). 1891—WINTER, Pilze, 1:745. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:628. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:262. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):621. 1912.

Omphalia rustica QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:100. 1872—GILLET, Champ. Fr. 297, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:133. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 94. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:316. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 287. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:391. 1893; Brit. Fungi, 199. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 157. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 86. 1908—RICKEN, Blätterp. 390, pl. 105, f. 13. 1915—REA, Brit. Basid. 427. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 6:pl. 262, f. 3. 1928—LANGE, Fl. Agar. Dan. 2:58, pl. 59, f. E. 1936—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:337. 1948—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 127. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:240, f. 186, D. 1957.

(MATSUURA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 4: 100, f. 7. 1932; 応用菌蕈学, 1185. f. 799. 1941)

子実体は散生；傘は径 0.7—1.5cm，膜質，僅か丸山形，中窩あり，のちやや漏斗形となる；表面は吸水性，無毛，灰褐色，粗き線条あり，乾時僅か絹状にて平坦；肉は傘と同色，無味無臭；褶は深く垂生，灰色，甚だ疎，むしろ厚く，両端に狭し，時に殆ど襞状となる；茎は 2—2.5×0.1—0.2cm，同幅或は上方太く，傘面と同色，無毛或は絨粉状，基端に軟毛あり，充塞；胞子は広卵形～類球状卵形，平滑，6.5—8×5—5.5μ；胞子紋は白色；嚢状体なし。

所在及産地

林内地上，草原砂土，地衣生湿土上—秋

本州—欧．亜(西比)

和名　ヒメサカズキタケ（姫盃茸）〔本郷〕

ヒメアンズタケ（姫杏茸）〔松浦〕

Omphalina umbratilis (FR.) QUÉL.

コクロサカズキタケ

QUÉLET. Enchir. Fung. 45. 1886.

Agaricus umbratilis FR. Syst. Myc. 1:157. 1821; Epicr. Myc. 127. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:190. 1857; Hymen. Eur. 164. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:521. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 99. 1883; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 274, f. a. (no. 265). 1883; Handb. Austr. Fungi, 29. 1892—WINTER, Pilze 1:742. 1884—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:262. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):616, pl. 118, f. 5-6. 1912.

Omphalia umbratilis GILL. Champ. Fr. 229, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:137. 1879—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 7:47. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:330. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 298. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:399. 1893; Brit. Fungi, 202. 1911—W.G. SMITH, Brit. Basid. 88. 1908—RICKEN, Blätterp. 399. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 824. 1918—REA, Brit. Basid. 432. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 6:pl. 267, f. 1. 1928—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:135. 1938.

(原，日．菌．目．230. 1954—今関及土岐，林．試．研．報．67:46. 1954)

子実体は群生或は孤生；傘は径 1—3cm，鈍鐘形，のち丸山形となり中窩を存す；表面は吸水性，湿時黒褐色或は焦茶褐色，乾時灰白色，縁は細線条あり；



a



b

第52図 コクロサカズキタケ Omphalina umbratilis
a. 子実体 ×2/3
b. 胞子 ×500
(大谷氏)

肉は類膜質，傘面と同色，味及臭なし；褶は直状垂生，暗褐色，密，広幅；茎は 2—5×0.2cm，同幅，傘面と殆ど同色，平滑，強靱，充塞のち中空；胞子は核子形，平滑，無色，7—9×4—5μ；胞子紋は白色。

所在及産地

林地—秋　　北海道，本州，九州—欧．北米．濠

和名 コクロサカズキタケ（小黒盃茸）〔今井〕

Omphalina wynniae (BERK. et BR.)

ミドリタケ

Hygrophorus Wynniae BERK. et BR. Ann. Mag. Nat. Hist. V, 3:208. 1879—COOKE, Grev. 7:pl. 121, f. A. 1879; Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 301. 1833; Illus. Brit. Fungi, 6:pl. 905, f. a (no. 911). 1888—SACCARDO, Syll. Fung. 5:415. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 362. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:337, f. 1 (p. 301). 1893; Brit. Fungi, 167. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 261. 1908—REA, Brit. Basid. 306. 1922.

(KAWAMURA, Illus. Jap. Fung. pl. 1, f. 30–32. 1912; 日．菌．図説，n. 58. 1930; 日．菌．図鑑，3: 314, f. 311. 1954—白井，日．菌．目．ed. 2. 289. 1917; ed. 3. 168. 1927—原，日．菌．目．158. 1954)

Omphalia Wynniae QUÉL. Champ. Jura Vosg. Suppl. 11:390. 1882—R. MAIRE, Ann. Myc. 11: 338. 1913—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3:pl. 235, f. 2. 1926: Agaricales, 1:336. 1948—HEIM, Champ. Eur. 2:240. 1957.

Omphalina bibula QUÉL. Enchir. Fung. 44. 1886.

Omphalia bibula SACC. Syll. Fung. 5:234. 1887—RICKEN, Blätterp. 397, pl. 105, f. 8. 1915.

Agaricus bibulus P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:262. 1900.

Agaricus Wynniae P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:263. 1900.

? *Omphalia abiegena* LANGE, Fl. Agar. Dan. 2:58, pl. 60, f. H. 1936.

? *Omphalina abiegena* (BERK. et BR.) SING. Agaricales, 212. 1949.

子実体は群生；傘は径 1—2.5cm，鐘状丸山形，のち開張し，僅か中窩を存し，更に浅き漏斗形となる，薄膜質；表面は吸水性，レモン黄色，乾くに従つて緑色となる，透明線条あり，無毛；肉は薄く，白色或は傘面と同色にて淡し，味温和，無臭或は乾時臭あり；褶は弧状垂生，疎，広幅，薄く，初め黄色，のち漸次緑色となる；茎は3—4.5×0.1—0.3cm，上方に向つてやや太くして傘肉に移行す，無毛，傘と同色，基端絨状，中空；胞子は広楕円形，平滑，無色，7—8×4—6μ；胞子紋は白色。

所在及産地

落枝，木屑，切株上—夏秋　　本州—欧

和名 ミドリタケ（緑茸）〔川村〕

疑問種

Omphalia Ephippium (BERK. et CURT.) SACC. Syll. Fung. 5:323. 1887. (松村，植．名鑑，1:156. 1904—原，日．菌．目．229. 1954) = *Agaricus Ephippium* B. et C. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4:114. 1860. 小笠原島

Omphalia fujiana UMEM.

(白井，日．菌．目．ed. 3. 239. 1927—原，日．菌．目．229. 1954) 富士山．セイシチタケ。

Omphalia ousimae (BERK. et CURT.) SACC. Syll. Fung. 5:326. 1887. (松村，植．名鑑，1:156. 1904—白井，日．菌．目．60. 1905; ed. 2. 399. 1917; ed. 3. 239. 1927—原，日．菌．目．230. 1954) = *Agaricus Ousimae* B. et C. Proc. Am. Acad. Arts. Sci. 4: 114. 1860. 奄美大島

Omphalia plumbaria (BERK. et CURT.) SACC. Syll. Fung. 5:336. 1887. (松村，植．名鑑，1:156. 1904—白井，日．菌．目．60. 1905; ed. 2. 399. 1917; ed. 3. 239. 1927—原，日．菌．目．230. 1954) = *Agaricus plumbarius* B. et C. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4: 114. 1860. 小笠原島

Omphalia porphyromyces (BERK. et CURT.) SACC. Syll. Fung. 5:319. 1887. (松村，植．名鑑，1: 156. 1904—白井，日．菌．目．60. 1905; ed. 2. 399. 1917; ed. 3. 239. 1927—原，日．菌．目．230. 1954) = *Agaricus porphyromiges* B. et C. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4:114. 1860. 小笠原島

Omphalia ruficeps (BERK. et CURT.) SACC. Syll. Fung. 5:319. 1887. (松村，植．名鑑，1:157. 1904—白井，日．菌．目．60. 1905; ed. 2. 399. 1917; ed. 3.

239. 1927—原，日．菌．目．230. 1954)＝*Agaricus ruficeps* B. et C. Proc. Am. Acad. Arts. Sci. 4: 1860.

(P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 262. 1900) 小笠原島

Omphalia usta (BERK. et CURT.) SACC. Syll. Fung. 5:319. 1887. (松村，植．名鑑，1:157. 1904—白井，日．菌．目．60. 1905; ed. 2. 399. 1917; ed. 3. 239. 1927—原，日．菌．目．230. 1954)＝*Agaricus usta* B. et C. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4:114. 1860.

(P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 262. 1900) 小笠原島

Armillariella KARST. em. SING.
ナラタケ属

KARSTEN, Hymen. Fenn. 2(1)4:1881—SINGER, Agaricales, 214. 1949.

Aeruginospora v. HOEHNEL, Sitzb. Akad. Wiss. Wien, 117:102. 1908.

子実体はカヤタケ (*Clitocybe*) 型，往々幾分オトメノカサ (*Camarophyllus*) を想起せしむ，色素は細胞間隙(或は膜内)或は細胞内に存し，黄色，帯褐蜜色，焦茶色，黒灰色等，傘は小鱗片或は纖維を被むり，或は有点，線状，又は平滑にて無毛，吸水性或は非吸水性，非粘性；表皮層は屢々少しく或は幾分分化し，子実層状上表皮層を有す；褶は密或は疎，中位に厚く～寧ろ厚く，直生～屢々垂生；托実質は整型，時に殆ど不整型；胞子紋は幾分有色，通常淡き帯褐淡黄色，稀に白色；胞子は屢々中位に厚膜，無色，短楕円形，楕円状円壔形，類球形等，非糊性；担子柄は正常，通常4胞子，時に2胞子，時に胞子を形成せざる硬化せる担子柄を存す，極めて稀に担子柄の基部隔膜に菌絆を有することあり；嚢状体は褶側に通常存在せず；稜嚢体は屢々存在す；茎は纖維状肉質或は角質，一様に屢々幾分中空となる，幅 2—4 mm 或はそれ以上；根状束は屢々存在す；ベールは往々存在し，鍔を作る，但し多くの種類には之れを欠く；肉は肉質，強靱ならず，再生の能なく，屢々不快臭を有す；菌糸は薄膜～中位厚膜，菌絆なく或は稀に分散不定的に存在す，非糊性；材上，深蘚間，稀に地上生；半被実；汎布，約 17 種を知らる，有害寄生菌，食用菌。

(本属名は Armillaria (属名)，即ち armilla 〔羅〕(腕環)；ella (縮小詞) により出づ)

基準種 *A. mellea* (VAHL ex FR.) KARST.

本邦既知種検索表

A．鍔を有す；傘は色変化するも蜜黄～栗褐色，径 3—11 cm；胞子 8—9.5×5—6 μ。

ナラタケ **A. mellea** (129)

B．鍔を有せず；其他の性質殆ど前者と同一；胞子やや大にて 8—10×5—7 μ。

ナラタケモドキ **A. tabescens** (130)

Armillariella mellea (VAHL ex FR.) KARST.
ナラタケ

KARSTEN, Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 46. 1889—PATOUILLARD, Ess. Tax. 156. 1900—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:383. 1948—SINGER, Agaricales, 216. 1949.

(MATSUDA & HONGO, Jour. Jap. Bot. 30:150. 1955—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，23, f. 41; pl. 7, f. 41; pl. 68, f. 399; phot. IV, f. 22. 1957)

Agaricus putridus SCOP. Fl. Carn. ed. 2. 2:420. 1772.

Agaricus melleus VAHL, Fl. Dan. pl. 1013. 1792—FRIES, Syst. Myc. 1:30. 1821; Epicr. Myc. 22. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:44. 1857; Hymen. Eur. 44. 1874—BARLA, Champ. Nice, 18, pl. 11, f. 1–6. 1859—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1: 570. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 96, pl. 4, f. 1. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:19. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1: pl. 32 (no. 56). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:33. 1876—WINTER, Pilze, 1:831. 1884.

(白井，日．菌．目．7. 1905)

Agaricus stipitis WITH. in SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, pl. 101. 1797.

Agaricus polymyces PERS. Syn. Meth. Fung. 269. 1801.

Agaricus melleorubens BERK. et CURT. Jour. Linn. Soc. Bot. 10:283. 1868.

Armillaria mellea QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:75. 1872—GILLET, Champ. Fr. 83, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:21. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 46. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:80. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 94. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 38, pl. 21–22. 1888—SCHROETER, Pilze Schles. 1:668. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:228. 1893; Brit. Fungi, 99, pl. 6, f. 2. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 270, f. 123, B. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 83, f. 85. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 30. 1908—MURRILL, Mycologia, 1: 2, pl. 1, f. 2. 1909—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):696, pl. 127. 1912—KAUFFMAN, Agar. Mich. 653, pl. 138–140. 1918—REA, Brit. Basid. 108. 1922 GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 50, pl. 16. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 2: pl. 52. 1927—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:40, pl. 15, f. A. 1935—

PILÁT, Bull. Soc. Myc. Fr. 52:321. 1936—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:49, pl. 2, f. 2. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 54, pl. 4, f. 3. 1950.

(P. HENNINGS, Hedwigia, 39, Beibl. 156. 1900—松村, 植. 名鑑, 1:131. 1904—白井, 日. 菌. 目. 9. 1905; ed. 2. 51. 1917; ed. 3. 23. 1927—川村, 植. 雑. 23:166, f. 1. 1909; Illus. Jap. Fungi, pl. 6, f. 24–25. 1915; 日. 菌. 図説, n. 2, 98. 1929; 食用菌及有毒菌, f. 9 (p. 11). 1931; 日. 菌. 図鑑, 4:457, f. 441–442. 1954—三宅市郎, 蚕. 試. 報. 1(5):336. 1916—北島, 林. 試. 報. 28:38, pl. 5, f. 39–41, pl. 8, f. 27. 1928—小林, 日. 隠. 植. 図. 557, pl. 269, f. 4–6. 1939—牧野, 日. 植. 図鑑, 1020, f. 3058. 1940—広江, 応用菌蕈学, f. 814–16 (p. 1198). 1941—今関, 原色きのこ, pl. 7 (左). 1942—逸見及赤井, 木. 腐. 菌学, 435, f. 233. 1945—千葉及寺本, 東, 大. 演. 林. 報. 43:34. 1952—原, 日. 菌. 目. 20. 1954—今関及土岐, 林. 試. 研. 報. 67:35. 1954—佐々木, 尾瀬ヶ原, 552. 1954)

Omphalia mellea QUÉL. Enchir. Fung. 20. 1886.

Mastoleucomyces melleus KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2:861. 1891.

Armillaria solidipes PECK, Bull. Torr. Bot. Club, 27:611. 1900.

Armillaria putrida MURR. N. Am. Fl. 10:39: 1914.

Clitocybe mellea RICKEN, Blätterp. 362, pl. 100, f. 1. 1915—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 140, f. 203. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:277, f. 204, pl. 40, f. 1. 1957.

Lepiota mellea LANGE, Agar. Denm. 2:31. 1915.

Rhizomorpha subcorticalis PERS. Syn. Meth. Fung. 704. 1801.

Rhizomorpha subterranea PERS. Syn. Meth. Fung. 705. 1801.



a



b

第53図 ナラタケ Armillariella mellea
a. 子実体 ×1/3
b. 胞子 ×550
(大谷氏)

子実体は叢生或は群生; 傘は 3—11 cm, 初め類半球形, のち丸山形より殆ど扁平となり, 鈍頭, 更に中央一様に圧低さる; 表面は通常乾燥, 湿時屢々やや粘性, 淡蜜黄色～栗褐色或は黒褐色, 周辺淡色, 通常褐色或は帯黒色の房毛或は鱗片を被むり, 老時中央以外は鱗片を失う, 縁辺に線条あり; 肉は白色或は帯黄色, やや柔軟, 味幾分不快或は苦し; 褶は直生或は小歯にて垂生, 帯白色或は汚黄色, 老時銹斑を生ず, やや疎, 広幅ならず, 遂に胞子によりて白粉状を呈す; 茎は 5—10×0.5—1 cm, 同幅或は基部やや太くして厚さ 2 cm に至る, 鍔より上部は粉状にて帯白色, 下部は渋色或は帯褐色, 老時暗色となり, 通常綿絮鱗片を有し, のち無毛となり或は線条あり, 弾性, 充塞のち中空; 鍔は上位, 白色或は帯黄色, 膜質, 早失性; 胞子は楕円状卵形, 平滑, 8—9.5×5—6.5 μ; 胞子紋はクリーム色; 根状束は能く発達し, 針金状にて樹根上, 樹皮下, 根際, 塊茎上に存し, 大害を醸す, 屢々鱗光を放つ; 可食。

所在及産地

種々の林木生幹或は枯幹根際, 切株, 根上或は草原地上—夏秋

本邦全土—欧. 北米. 阿. 濠. 亜(小亜. 瓜. 西比)

和名 ナラタケ (楢茸)〔川村〕
ハリガネタケ (針金茸)〔白井〕
クリタケ (栗茸)〔白井〕

Armillariella tabescens (SCOP. ex FR.) SING.

ナラタケモドキ

SINGER, Agaricales, 216. 1949.

(MATSUDA & HONGO, Jour. Jap. Bot. 30:150. 1955—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 24, f. 42; pl. 7, f. 42. 1957)

Agaricus tabescens SCOP. Fl. Carn. ed. 2. 446. 1772—FRIES, Epicr. Myc. 33. 1838; Hymen. Eur. 111. 1874—WINTER, Pilze, 1:852. 1884.

Agaricus gymnopodius BULL. Herb. Fr. pl. 601, f. 1. 1840—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 311. 1801—FRIES, Epicr. Myc. 183. 1801; Hymen. Eur. 244. 1874.

Agaricus socialis D.C. Fl. Fr. 6:48, 185. 1815 (non FRIES, nec COOKE)

Agaricus buxeus PERS. Myc. Eur. 3:190. 1828.

Lentinus caespitosus BERK. Lond. Jour. Bot. 6:317. 1847.

Pleurotus caespitosus BERK. et CURT. Jour. Linn. Soc. 10:287. 1869—SACCARDO, Syll. Fung. 5:352. 1887.

Clitocybe gymnopodia GILL. Champ. Fr. 162. 1874—ROLLAND, Atl. Champ. 29, pl. 25, f. 48. 1910.

Agaricus monadelpha MORGAN, Jour. Cinc. Soc. Nat. Hist. 6:69, pl. 4. 1883.

Agaricus inarmillatus SCHULZER, Oest. Bot. Zeits. 256. 1883.

Omphalia mellea var. *gymnopodia* QUÉL. Enchir. Fung. 20. 1886.

Clitocybe monadelpha SACC. Syll. 5:164. 1887.

Collybia tabescens SACC. Syll. Fung. 5:206. 1887.

Pleurotus caespitosus SACC. Syll. Fung. 5:352. 1887.

Clitocybe socialis BARLA, Champ. Alp. Marit. 65, pl. 49, f. 7–8. 1892.

Armillaria mellea exannulata PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 46:134. 1893.

Clitocybe tabescens BRES. Fungi Trid. 2:84, pl. 197. 1900; Icon. Myc. 3: pl. 134. 1928—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 176. 1915—RICKEN, Blätterp. 383. 1914—KÜHNER, Bull. Soc. Myc. Fr. 49, Atl. pl. 55. 1933—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3:281. 1934; Agaricales, 1:398. 1948—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 140. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2: 277, f. 205. 1957.

Monadelphus caespitosus MURR. Mycologia, 3:192. 1911; N. Am. Fl. 9:420. 1916.

Armillaria tabescens EMEL, Gen. Arm. 50. 1921.

Armillaria mellea var. *tabescens* REA, Brit. Basid. 110. 1922.

? *Clitocybe parasitica* WILCOX, Bull. Okla. Exp. St. 49:18, pl. 1–11. 1901—DUGGAR, Fung. Dis. pl. 471, f. 234. 1909.

(北島，樹病学，295，f. 127. 1933—原，日．菌．目．74. 1954)

子実体は叢生；傘は径 3—8 cm，丸山形～扁平，鈍頭，更に時に圧低さる；表面は蜜黄色，黄褐色或は赤褐色，暗褐色の細鱗片を被むり，中央は綿絮粗毛鱗片となる；肉は白色，無味無臭；褶は垂生，やや密，淡色或は肉色；茎は 8—16×0.4—0.7 cm，同幅或は上方僅か狭細，幾分傘面より暗色，上部白色，充塞のち中空；胞子は倒卵形，平滑，8—10×5—7 μ；胞子紋は帯白色；根状束は能く発達し，針金状，樹木に大害をなす；可食。

所在及産地

広葉樹枯幹，稀に立木の根部上—夏秋

本州—欧．北米

和名 ナラタケモドキ（擬楢茸）

Tricholoma (FR.) STAUDE
キシメジタケ属

STAUDE, Schwämme Mitteldeutschl. XXVIII & 125. 1857—QUÉLET. Champ. Jura Vosg. 1: 76. 1872—SINGER, Agaricales, 218, 1949. (non BENTHUM, 1846. *Scrophulariaceae*)

Agaricus trib. *Tricholoma* FR. Syst. Myc. 1: 36. 1821.

Cortinellus ROZE, Bull. Soc. Bot. Fr. 23:51. 1876.

Gyrophila QUÉLET, Enchir. Fung. 9. 1886.

Mastoleucomyces BATTARRA ex. O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2:860. 1891.

Glutinaster EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5: 433. 1909.

Monomyces BATTARRA ex EARLA, l. c. 442. 1909.

Sphaerocephalus BATTARRA ex EARLE, l. c. 447. 1909.

? *Nemecomyces* PILÁT Ann. Mycol. 31: 54. 1933.

傘は粘性或は非粘性，無毛或は内生又は外生繊維あり，更に鱗片を有するものあり，非吸水性；色素は菌絆なき種の多くに於ては菌糸膜を被い，其他はすべて細胞液中に溶存す；表皮層は絡れたる僅か分化せる菌糸，寧ろ類平行の細き菌糸或は確実に平行せる太き菌糸より成り，寧ろ稀に子実層状上表皮層を有す；褶は通常甚だ明かに凹入彎生し，殊に菌絆を有する種に於て常に著し，往々菌絆なき種に於て狭生或は殆ど直生に傾くも決して垂生とならず，薄く～中位に厚く，稍々，水平，初め稀に稍々斜上；胞子紋は純白色，稀に淡クリーム色，決して真のクリームピンク或はピンク色ならず又緑を帯ぶることなし；胞子は無色，通常甚だ薄き平滑の膜を有し，非糊性，甚だ稀に僅少の古き胞子が幾分擬糊性を表わす，楕円形～類球形，稀に紡錘形，十字形或は類角形，脉上凹部或は蓋を有し或は有せず；担子柄は何れの点も正常，4胞子，甚だ稀に2胞子；嚢状体は通常欠如，稀に稜嚢体，更に稀に褶側に存す，菌絆を有する種に於ては嚢状体のすべての種は常に存在せず；托実質は整型～殆ど類整型，細き平行せる或は幾分絡れたる寧ろ細き伸長せる菌糸より成る；茎は中心生，肉質～肉状繊維質，往々甚だ堅きも軟骨質，革質或は角質ならず，中実，髄部充塞或は中空となるも管状ならず，ベール欠如或は蜘蛛巣膜片状，肉質鍔，或は茎頂に環帯を作り，稀に膜質なり肉は肉質，味は温和，辛く或は苦し，屢々普通の試薬の一或は数個に著しく反応す（フォーマリン，フェノール，KOH，酸類等）；菌糸は本来薄膜，伸長，非糊性，菌絆存在或は欠如；多くは林内地上，稀に野外，平原，甚だ稀に材上或は深蘚中に生ず；或種は擬被実；多くは温帯，亜熱帯産，約79種を知らる，

重要食菌あるも毒菌もあり，菌根を作るものあり。（本属名は thrix〔希〕(毛)，loma〔希〕(房，房毛，縁）より出づ）

基準種 *T. equestre* (L. ex FR.) QUÉL. = *T. flavovirens* (PERS. ex FR.) LUNDELL

本邦既知亜属及種検索表

A．菌体の凡ての菌糸は菌絆を有す；表皮の分化不良にて只著しく纒絡せる菌糸のみより成る；色素は細胞内に存し或は欠如す；菌根を作り或は作らず。

(1) ミドリシメジタケ亜属 **Contextocutis** (132)

B．菌糸は全く菌絆なきか或は只担子柄の基部又は茎の外側に分散するのみ，若し菌絆存在せば子実体は僅か色素を有し強き特有の臭を有す；表皮は纒絡～やや平行菌糸よりなり，傘は常に縁辺肉眼的に絹状を呈す；或種は菌根を作る。

(2) シロシメジタケ亜属 **Sericeicutis** (132)

C．菌糸は菌絆を有せず；極めて例外的に茎の基部に存することあり；色素は通常明かに菌糸膜上に結晶す；表皮の構造は平行菌糸より成り，傘は粘性なれば無毛或は無毛ならず，乾燥なれば通常軟毛，鱗片，鱗被，纖維毛等を有するも決して前亜属の如く絹状ならず，稀に縁に粗毛あり；乾燥種に於ては前者の如き臭なし；多分全種菌根を作る。

(3) キシメジタケ亜属 **Tricholoma** (132)

---

(1) ミドリシメジタケ亜属 **Contextocutis**

A．胞子は楕円形～類球形

a．茎は平滑にて基部に白綿毛あり；傘は径 3—6 cm，帯褐淡緑色にて変化性に富む；褶は初め淡緑，のち白色。

ミドリシメジタケ ***T. saponaceum*** (133)

b．茎は煤色の鱗状をなす；傘は径 5—7 cm，曇緑色；褶は初め白～乳白色。

ミネシメジタケ var. ***squamosum*** (134)

B．胞子は類方形にて多少十字形或は類 3 稜形；傘は径 5.5—15 cm，黄褐～類栗褐色；褶は類黒紫色。

ウラムラサキシメジタケ ***T. porphyrophyllum*** (135)

(2) シロシメジタケ亜属 **Sericeicutis**

A．褶は甚だ密，白色～淡黄色；傘は白色にて淡褐色を帯ぶ，径 5—12 cm，無毛；茎は基部屢々球根状；胞子 5.5×4 μ；臭あり。

シロシメジタケ ***T. album*** (135)

B．褶は密，白色；傘は純白色，径 3—10 cm，初め無毛なるも，のち纖維或は微細鱗片を生ず；茎の基部は球根状ならず；胞子 6—7×4—5 μ；臭なし。

シロケシメジタケ ***T. columbetta*** (135)

C．褶は密，白色；傘は淡黄色にて暗緑褐色の纖維を被むる，径 4—6 cm；茎の基部球根状ならず；胞子 6—7.5×3.5—4.5 μ；蠅に有毒。

ハエトリシメジタケ ***T. muscarium*** (136)

(3) キシメジタケ亜属 **Tricholoma** (*Eu-Tricholoma*)

A．膜質或は纖維状の鍔を有し，従来 *Armillaria* 属となせるもの。

a．傘面粘性。

α．巨大菌にて傘径 10—22 cm 或はそれ以上に及び，帯黄赭褐色，成時不明瞭の鱗被あり；褶は白色，のち黄褐色を帯ぶ；茎は短大；胞子 6—7×4—5 μ。

サマツタケ ***T. colossum*** (136)

β．中形菌にて傘径 4—8 cm，煤黒色；褶は白色，茎は細長；胞子 8—10×4—5 μ。

クロマツタケモドキ ***T. nigrescens*** (137)

b．傘面乾燥。

α．傘径 8—20 cm 或はそれ以上に及び，肉桂色～栗褐色の鱗被を存す；茎は長く，基部肥大；胞子 6—7.5×5—6.5 μ。

マツタケ ***T. matsutake*** (137)

β．傘径 5—10 cm，茶褐色の鱗被を存す；茎は比較的短く，茎部急に細し；胞子 5—7×4—5 μ。 マツタケモドキ ***T. robustum*** (138)

B．幼時往々蜘網膜あるも前者の如き鍔を作らず。

a．傘面粘性。

α．褶は変色せず。

I．褶は硫黄色。

1．傘面淡黄～帯緑黄色，中盤に赤～褐色の鱗片あり，径 5—10 cm；茎は菌蕾時球状；褶は密にて広幅；胞子 6—8×4—5 μ。

キシメジタケ ***T. flavovirens*** (138)

2．傘面帯褐黄色，老時暗褐色の鱗被を存す；茎は菌蕾時球状ならず；褶は前者より疎にて狭幅。

シモコシタケ var. ***pinastreti*** (139)

II．褶は帯黄白色。

1．傘面は黄色～シトロン色，上に暗緑色～緑黒色の纖維を被むる，径 4—10 cm；胞子 6.5—7.5×3.5—4.5 μ。

アイシメジタケ *T. sejunctum* (139)

2．傘面は黄色～白色にて，上に煤色繊維を被むる，径 4—7 cm；胞子 5—6×3—4 μ。 シモフリシメジタケ *T. portentosum* (140)

β. 褶は変色し，老時或は接傷時赤変或は赤～褐色の斑点を生ず。

Ⅰ．茎は初め粘性，茎肉は黄～橙色；褶は初め淡黄～橙黄色；傘は焦褐色，径 5—8 cm，微細繊維或は鱗片ありて線状；胞子 6—7×4.5—6 μ。

キヒダマツシメジタケ *T. fulvum* (141)

Ⅱ．茎は乾燥，茎肉は白色；褶は初め白色。

1．臭なきか微弱，味温和；傘は赤褐～栗褐色。

甲．傘面に線条繊維あり，径 3.5—7 cm；胞子 4—6×3—4 μ。

マツシメジタケ *T. albobrunneum* (141)

乙．傘面平坦，径 4—10 cm；胞子 6—8×4—5 μ。

カキシメジタケ *T. ustale* (142)

2．臭は類穀粉状，苦味；傘は径 6—12 cm，中部に黒色鱗片あり；胞子 5—6×3.5 -4 μ。 オオカキシメジタケ *T. pessundatum* (142)

b．傘面乾燥，鱗片状，繊維状，毛状，或は粉状，往々蜘網膜を有す；褶は変色す。

α. 傘は赤褐色，鱗片を被むり；褶は白色，赤変或は赤斑を生ず。

Ⅰ．茎は中空ならず；味温和；傘径 5—10 cm；胞子 5—7×4—5 μ。

アカゲシメジタケ *T. imbricatum* (143)

Ⅱ．茎は中空；味不快；傘径 3—8 cm；胞子 6—8×4—6 μ。

クダアカゲシメジタケ *T. vaccinum* (144)

β. 傘は淡黄褐色，微細絨毛あり；褶は白色，のちクリーム色より赤味を帯ぶるに至る；茎は中実，味は苦くして辛し；傘径 6—12 cm；胞子 4—6×3.5—4 μ。

オオニガシメジタケ *T. acerbum* (145)

γ. 傘は灰色，灰褐色，灰緑色，淡褐色等。

Ⅰ．褶は白色にて赤稜，のち全部桃赤色となる；傘は径4—6 cm，灰褐色，中央黒褐色，粒状或は小鱗片状，胞子 4.5—5.5×3.5—4 μ。 ケショウシメジタケ *T. orirubens* (145)

Ⅱ．褶は白色にて灰色となる。

1．幼時強き苦味あり；傘は灰色，灰緑色或は銀灰色，黒色繊維或は鱗片あり，径 3—7 cm；胞子 6—7×4—5 μ。

ネズミシメジタケ *T. virgatum* (145)

2．僅か苦味あり；傘は中央菫灰色，縁辺帯白色，粉状，径 4—6 cm；胞子 6.5—7.5×4—5 μ；小笠原産。

チチシマシメジタケ *T. boninensis* (146)

3．味温和；傘は灰色，灰褐色～鼠色，黒色繊維或は鱗片あり，径 3—8 cm；胞子 5—6×4—5 μ。

クマシメジタケ *T. terreum* (146)

Ⅲ．褶は灰白色。

1．褶は褐変す；傘は地色帯白～淡褐色にて黒褐色大鱗片を存す，径 4—8 cm；胞子 7—9×4—5 μ。

クロゲシメジタケ *T. squarrulosum* (147)

2．褶は黄変す；傘は帯白～灰色にて灰色鱗片を有す，径 3—8 cm；茎に蜘網膜の残物あり；胞子5—7×3—4 μ。

アクゲシメジタケ *T. scalpturatum* (147)

（1） Contextocutis SING. (1945)
ミドリシメジタケ亜属

Tricholoma saponaceum (FR.) QUÉL.
ミドリシメジタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:80. 1872—GILLET, Champ. Fr. 107, c. ic. 1874 -KARSTEN, Hattsv. 1:36. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 53. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:106. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 131. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 50, pl. 37, f. 1–9. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:196. 1893; Brit. Fungi, 106. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 159. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 36. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 26, pl. 20, f. 37. 1910—RICKEN, Blätterp. 343, pl. 93, f. 1. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 699. 1918—REA, Brit. Basid. 227. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 2:pl. 85. 1927—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:354. 1948—SINGER, Agaricales, 223. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi. 59, pl. 11, f. 4. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 157. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:303, pl. 29, f. 4. 1957.

（今関及土岐，林．試．研．報．87:55, f. 4. 1956）

Agaricus madreporeus BATSCH, Elench. Fung. Cont. 2: pl. 36, f. 203. 1789.

Agaricus saponaceus FR. Obs. Myc. 2:101. 1818; Epicr. Myc. 35. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:69. 1857; Hymen. Eur. 59. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1: 559. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 101. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:138. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:27. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1: pl. 91 (no. 88). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:39. 1876—WINTER, Pilze, 1:820. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:662. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 268. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):684. 1912.

Agaricus argyrospermus BULL. Herb. Fr. pl. 602. 1840.

Gyrophila saponacea QUÉL. Enchir. Fung. 13. 1886.

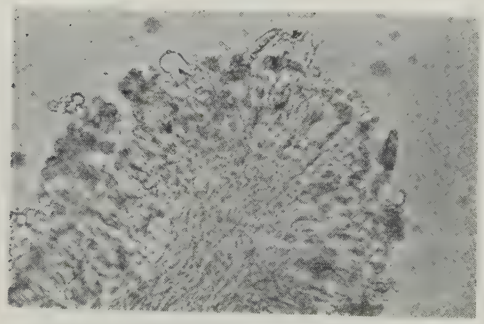
Tricholoma sp. 松浦, 茸類辞典, 14, f. 12. 1933.

? *Tricholoma atrovirescens* KAWAM. Icon. Jap. Fungi, 4:451, f. 435. 1954. (モエギシメジ)

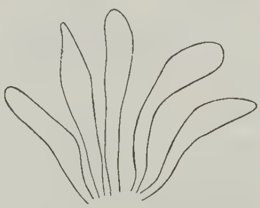
子実体は孤生或は叢生; 傘は径 3—6 cm, 丸山形にて開張し, 往々鈍き中丘あり或は圧低さる; 表面は平滑, 雨時やや粘性を帯び, やや湿潤性, 帯褐淡緑色なるも変化性に富む; 肉は白色～淡緑色, 傷時淡桃色となる, 厚くして緊緻, 味なく, 臭強く不良; 褶は彎入彎生, 初め淡緑色, のち白色, 灰色とならず, やや疎, むしろ広幅, 薄し; 茎は 5—10×0.7—1 cm, 漸次下方に太く, 往々落葉間に深く根をおろし, 基部甚だ細きことあり, 灰白色, 上部帯緑色, 平滑, 基部は白綿毛に被われ, 接触により桃色に変ず, 繊維状肉質, 充塞; 胞子は卵状楕円形, 平滑, 6—6.5×4—5 μ; 可食。



a



b



c



d

第 54 図 ミドリシメジタケ
Tricholoma saponaceum
a. 子実体 ×1/2
b. 褶稜附近横断面 ×200
c. 稜嚢体
d. 胞子 ×500
（大谷氏）

所 在 及 産 地

林地—夏秋 本州, 九州—欧. 北米

和 名 ミドリシメジタケ（緑湿地茸）〔松浦〕

var. **squamosum** (COOKE) REA

ミネシメジタケ

REA, Brit. Basid. 227. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3: pl. 245 1934; Agaricales, 1:354. 1948.

（今関及土岐, 林. 試. 研. 報. 67:48, f. 8, pl. 6, f. 4. 1954）

Agaricus saponaceus var. *squamosus* COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 33. 1883; Illus. Brit. Fungi, 1: pl. 216 (no. 89). 1883.

Tricholoma saponaceum var. *andosiacum* BRES. Icon. Myc. 2: pl. 86. 1927—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:60, pl. 26, f. c. 1935.

Tricholoma saponaceum forma

（松村, 植. 名鑑, 1:177. 1904—白井, 日. 菌 目. 100. 1905; ed. 2. 665. 1917; ed. 3. 397. 1927—原, 日. 菌. 目. 370. 1954）

原種とは煤色鱗状の茎により異る。

子実体は群生或は叢生; 傘は径 3.5—7 cm, 初め半球形, 次第に開張扁平となり, 更に圧低されて皿～鉢状となる, 鈍き中丘を有す; 表面は幼時帯緑色～暗煙草色, のち曇緑色となり, 遂に帯緑灰白色～淡灰白色となる, やや湿潤性なるも粘性ならず, 煤色粒状の軟毛を密生す, 外皮剝げ易し; 肉は白色, 厚く, 比較的堅く, 傷時徐々に帯褐ピンク色に変る, 臭は青臭く, 清涼なる刺激臭あり, 味は青臭き残味あり; 褶は彎入, 初め白色～乳白色, 傷時帯褐ピンク色となる, やや疎, 比較的厚し; 茎は 2.5—8×0.8—1.5 cm, 上方に狭細, 下方便腹状にて基部狭細, 汚緑色, 上部或は老時帯褐或は帯黒色となる, 煤色の毛が鱗状に附着し接触により容易に剝落す, 充塞; 胞子は楕円形, 平滑, 5—6.5×4.5 μ; 胞子紋は白色; 嚢状体なし; 可食。

所在及産地

地上及根際—夏秋　　本州—欧

和名　ミネシメジタケ（峰湿地茸）〔今関及土岐〕

Tricholoma porphyrophyllum IMAI
ウラムラサキシメジタケ

IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:69, pl. 2, f. 5. 1938—SINGER, Agaricales, 224. 1949.

（原，日．菌．目．369. 1954）

子実体は群生或はやや叢生；傘は径 5.5—15 cm，丸山形，のち開張し扁平となる；表面は粘質或は湿潤，黄褐色或は類栗褐色，平滑，縁は淡色，波状；肉は薄く，脆し，味及臭温和；褶は彎生，類黒紫色，のち褪色し遂に黄褐色となる，密，やや狭幅；茎は 4.5—15×0.6—2.5 cm，同幅或は下方やや球根状，白色，帯黄色或は黄褐色，繊維状，中実或は中空，偽根あり；胞子は類方形にて多少十字形となり，或は類3稜形，平滑，6—7.5×4.5—6 μ；胞子紋は白色。

所在及産地

林地及樹下—夏秋　　北海道

和名　ウラムラサキシメジタケ

（裏紫湿地茸）〔今井〕

（2） Sericeicutis SING. (1949)
シロシメジタケ亜属

Tricholoma album (SCHAEFF. ex FR.) QUÉL.
シロシメジタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:83. 1872—GILLET, Champ. Fr. 122. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:41. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 55. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:127. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 145. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:213. 1893; Brit. Fungi, 112. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 41. 1908—KAUFFMAN, Agar. Mich. 704. 1918—REA, Brit. Basid. 235. 1922—KONRAD, Bull. Soc. Myc. Fr. 43:180. 1927; & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3:pl. 266. 1934; Agaricales, 1:358. 1948—BRESADOLA, Icon. Myc. 3: pl. 108. 1928. (f. *gracilis*)—LANGE, Agar. Denm. 9:26. 1933; Fl. Agar. Dan. 1:59, pl. 27, f. D. 1935—SINGER, Agaricales, 225. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 61, pl. 10, f. 2. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 157. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:303, pl. 30, f. 1. 1957.

（川村，日．菌．図鑑，4:443, f. 429. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，25, f. 46, pl. 8, f. 46. 1957）

Agaricus albus SCHAEFF. Fung. Bavar. 4:68, pl. 256. 1770—FRIES, Syst. Myc. 1:53. 1821; Epicr. Myc. 47. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:91. 1857; Hymen. Eur. 70. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:556. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 105, pl. 4, f. 6. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:33. 1871; Ill. Brit. Fungi, 1:pl. 65(no. 110). 1883(?)—WINTER, Pilze, 1:812. 1884.

Agaricus leucocephalus BULL. Herb. Fr. pl. 536. 1791—PERSOON, Myc. Eur. 3:113. 1828.

Gyrophila alba QUÉL. Enchir. Fung. 16. 1886.

Tricholoma japonica KAW. Illus. Jap. Fungi, pl. 18, f. 9-12. 1925—HONGO, Jour. Jap. Bot. 26: 141. 1951.

（白井，日．菌．目．ed. 3. 397. 1927—MASTUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:118. 1931—本郷，植．分．地．14:53, f. 4. 1950—今関及土岐，林．試．研．報．67:47. 1954—原，日．菌．目．369. 1954）

子実体は群生或はやや叢生，屢々列生或は菌輪を作る；傘は径 5—12 cm，半球形，のち丸山形，縁は初め内屈す；表面は乾燥，湿時白色，乾時及老時微かに淡黄色を帯び，中央部淡粘土色を呈す，無毛，絹状，周辺大きく波状をなす，外皮分化不良；肉は白色，中盤甚だ厚し，味苦くしてやや辛し，臭微弱；褶は彎生，白色或は淡黄色を帯び，甚だ密，やや広幅，稜は平坦；茎は 3—8×1—2 cm，殆ど同幅或は上方に狭細，屢々基部球根状，白色或は僅か褐色を帯び，頂部粉状，中実；胞子は球形にて径 4.5 μ，或は類球形にて 5.5×4 μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地

混淆林，特にクロマツ樹下地上—秋

本州，四国，九州—欧．北米

和名　シロシメジタケ（白湿地茸）〔川村〕

ヌノビキタケ（布引茸）〔古名〕

（砂モグリ，マツシメジ，シロキノコ等の方言あり）

Tricholoma columbetta (FR.) QUÉL.
シロケシメジタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:78, pl. 2, f. 2. 1872—GILLET, Champ. Fr. 101, c. ic. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:99. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 120. 1915—KARSTEN, Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 52. 1889—BARLA, Champ. Alp. Marit. 47, pl. 33, f. 3-7. 1890—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:190. 1893; Brit. Fungi, 104. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 159. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 35. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 26, pl. 19, f. 36. 1910—RICKEN, Blätterp. 336, pl. 89, f. 1. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 692. 1918

—REA, Brit. Basid. 221. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3: pl. 240. 1925; Agaricales, 1:345. 1948—BRESADOLA, Icon. Myc. 2: pl. 71. 1927—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:51, pl. 22, f. B. 1935—SINGER, Agaricales, 225. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 156. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:305, pl. 30, f. 2. 1957.

Agaricus columbetta FR. Syst. Myc. 1:44. 1821; Epicr. Myc. 32. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1: 63. 1857; Hymen. Eur. 55. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:560. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 99. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:25. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1 pl. 48 (no. 77). 1883—WINTER, Pilze, 1:823. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:663. 1885—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:268. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):685. 1912.

Cortinellus columbetta KARST. Hattsv. 1:26. 1879—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:59. 1938.

(原，日．菌．目．93. 1954)

Gyrophila columbetta QUÉL. Enchir. Fung. 12. 1886.

子実体は群生或は孤生； 傘は径 3—10cm, 丸山形，のち開張扁平となり，鈍頭；表面は乾燥，純白色，稀に灰色を帯ぶ，糯子状光沢を有す，初め無毛，のち絹状繊維或は微細鱗片を生ず，縁は初め内屈し，微細軟毛あり；肉は白色，やや薄し，味及臭なし；褶は彎入殆ど離生，白色にて変色せず，密，むしろ広幅，稜は屢々波状をなし横裂す；茎は 5—10×0.7—1.5cm, 同幅或は不同にて基部球根状ならず，白色，光沢あり，繊維線条あり，屢々縦裂す，往々蜘網膜の残物を附す，中実；胞子は類卵形或は広楕円形，平滑，6—7×4—5μ; 胞子紋は白色；可食。

所在及産地

林地—秋　　　　北海道—欧．北米

和名 シロケシメジタケ（白毛湿地茸）〔今井〕

Tricholoma muscarium KAWAM.

ハエトリシメジタケ

KAWAMURA, Icon. Jap. Fungi, 4:449, f. 434. 1954.

(川村，食用菌及有毒菌，f. 14(p. 14). 1931—松浦，茸類辞典，74, f. 78. 1933—HONGO, Jour. Jap. Bot. 27:190, f. 2(2). 1952—原，日．菌．目．369. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，25, f. 47, pl. 8, f. 47. 1957)

傘は径 4—6cm, 初め丸山形，のち扁平となり，中丘あり，更に縁辺反転す；表面は乾燥，地色は淡黄色にて，暗緑褐色の絹状繊維に被わる，中央暗色，縁は房毛を有す；肉は白色，縁辺甚だ薄くして脆く，裂け易し，味温和，臭よし；褶は彎生にて小歯を有し，白色，のち幾分黄色を帯ぶ，密，広幅；茎は 4—7×0.7—1.5cm, 上方やや狭細，下方やや太く，基端少しく尖る，上部白色，下部淡黄色，平滑，殆ど充塞；胞子は楕円形，平滑，6—7.5×3.5—4.5μ; 胞子紋は帯黄色；可食，蠅には有毒。

所在及産地

林内地上—秋　　　　本州

和名 ハエトリシメジタケ（蠅取湿地茸）〔古名〕

(3) Tricholoma (*Eu-Tricholoma* LANGE) (1933)

Armillaria subgen. *Verarmillaria* IMAI (1938)

キシメジタケ亜属

Tricholoma colossum (FR.) QUÉL.

サマツタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:76. 1872—GILLET, Champ. Fr. 105. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:32. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:91. 1887—BARLA, Champ. Alp. Marit. 43, pl. 25, f. 10–12; pl. 26, f. 1–7. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3: 181. 1893; Brit. Fungi, 101. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 33. 1908—RICKEN, Blätterp. 333. 1915—BRESADOLA, Icon. Myc. 2: pl. 60. 1927—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:347. 1948—SINGER, Agaricales, 227. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 152. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:295. 1957.

(P. HENNINGS, Hedwigia, 39, Beibl. 156. 1900—松村，植．名鑑，1:177. 1904—白井，日．菌．目．100. 1905; ed. 2. 665. 1917; ed. 3. 397. 1927—川村，植．雑．22:414. 1908; 23:355. 1909; Illus. Jap. Fungi, pl. 15, f. 1–2. 1915; 日．菌．図説，n. 183. 1929; 日．菌．図鑑，4:452, f. 436. 1954—広江，応用菌蕈学，1193, 294. 1941—原，日．菌．目．369. 1954)

Agaricus colossus FR. Epicr. Myc. 18. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:47. 1857; Hymen. Eur. 50. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:28. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1: pl. 75 (no. 66). 1883—WINTER, Pilze, 1:827. 1884—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:268. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):688. 1912.

Gyrophila colossus QUÉL. Enchir. Fung. 10. 1886.

Armillaria colossa BOUD. Bull. Soc. Myc. Fr. 16:18, pl. 1, f. 2. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 158. 1900—SACCARGO, Syll. Fung. 16:20. 1902; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 101. 1915—REA, Brit. Basid. 107. 1922.

子実体は散生或は群生；巨大，多肉，傘は径 10—22cm，稀にそれ以上に及び，初め球形，丸山形より扁平となり，中央部僅か高く縁辺幾分下捲す；表面は湿時やや粘性，帯黄赭褐色，中央濃色，初め無毛にて綿毛状の感を有し，成時微細無数の赭褐色なる平坦不明瞭の鱗被を生じ，鱗被間に淡黄色の地色を表わす，又往々淡褐色のことあり，縁辺は少しく綿毛状；肉は白色，緻密，厚く，傷時微に淡黄褐色を帯ぶ，臭及味温和；褶は彎入し殆ど離生，白色，のち黄褐色を帯ぶ，密，広幅；茎は 6—12×3—5cm；短大にて基部少しく肥大，基端鈍尖，鍔より上部は白色，下部は淡赤褐色，中実；鍔は往々上位に存し，綿毛状，早失性；胞子は広楕円形～類球形，平滑，6—7×4—5μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地

松林内—夏秋　　本州，四国，九州—欧

和名　サマツタケ（早松茸）〔古名〕

Tricholoma nigrescens (KAWAM.)

クロマツタケモドキ

Armillaria nigrescens KAWAM. Icon. Jap. Fungi, 4:462, f. 444. 1954.

傘は径 4—8cm，初め鐘形，のち開張扁平～丸山形となり，鈍頭，表面は甚だ粘性，煤黒色，縁はやや内屈し，綿状縁膜片を附す；肉は白色，厚く，肉質にて緊緻，味温和，臭よし；褶は直生し微に垂生の観あり，白色，広幅；茎は 6—12×1—2cm，同幅にて基端は鈍く尖る，鍔より上部は白色粉状，下部は綿毛状の柔かき被覆を有し，やや黄褐色を帯び，傘面と同様なる暗色の汚斑を有す，弾性，充実；鍔は上位，綿毛状，不明瞭；胞子は楕円形，平滑，8—10×4—5μ；胞子紋は白色。

所在及産地

針葉樹林地—秋　　本州

和名　クロマツタケモドキ（黒擬松茸）〔川村〕

〔附記〕本郷氏は本菌は *Hygrophorus olivaceo-albus*（コケイロヌメリガサタケ）と同一なるべしと称せらる。

Tricholoma matsutake (S. ITO et IMAI) SING.

マツタケ

SINGER, Agaricales, 227. 1949.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，26, f. 49, pl. 9, f. 49, phot. IV, f. 19. 1957）

Agaricus edodes SCHROET. Gartenfl. 35:135. 1886. (non. BERKELEY)

Armillaria edodes P. HENN. Not. Königl. Bot. Gart. Mus. Berl. 2:385. 1899; Bot. Jahrb. 28:270. 1901.

(P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam, 1, 1**270. 1900—草野，植．雑．14:225. 1900—白井，日．菌．目．9. 1905; ed. 2. 51. 1917)

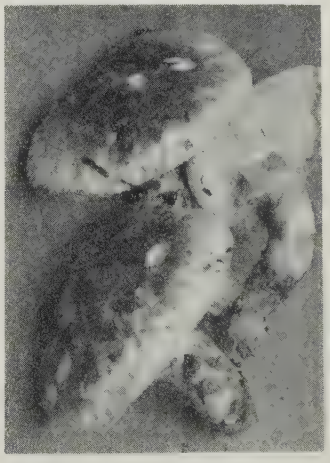
Cortinellus edodes P. HENN. Hedwigia, 39. Beibl. 156. 1900.

（松村，植．名鑑，1:137. 1904—白井，日．菌．目．26. 1905—KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 8, f. 11–12. 1913）

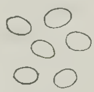
Armillaria caligata HAR. et PAT. Bull. Mus. Hist. Nat. 8:132. 1902.

Armillaria Matsutake S. ITO et IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 39:327. 1925—ZELLER & TOGASHI, Mycologia, 26:545, f. 1–3. 1934—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:47, pl. 1, f. 11. 1938.

（白井，日．菌．目 ed. 3. 23. 1927—川村，日．菌．図説，n. 56, 240. 1929；日．菌．図鑑，4:463, pl. 445. 1954—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:118. 1931—松浦，茸類辞典，9–10, f. 5–7. 1933；応用菌蕈学，291, f. 248–266. 1941—小林，日．隠．植．図．555, pl. 268. 1939—牧野，日．植．図鑑，1019, f. 3056. 1940—今関，原色きのこ，pl. 8（左）．1942）



a



b

第55図　マツタケ Tricholoma matsutake　a．子実体 ×1/4　b．胞子 ×550（大谷氏）

子実体は孤生或は群生，屢々菌輪を作る；傘は径 8—20cm，或はそれ以上に及び，初め球形或は半球形，のち丸山形となり，鈍き中丘を存す，遂に開張扁平となる；表面は乾燥，肉桂色或は栗褐色の圧着せる繊維状鱗片を被むる，中央暗色，縁は内屈し，幼時褐色或は淡色の羊毛状の縁膜片を有す；肉は白色，緊緻，厚く，味温和，臭よく且つ強し；褶は彎生，白色，のち帯黄色，密，広幅，稜は全縁ならず；茎は 10—20×1.5—3cm，或はそれ以上に及び，殆ど同幅或は上方に狭細，通常基部肥大す，鍔より上部は白色，粉状，下部は黄土褐色～栗褐色の圧着せ

る繊維状鱗片を被むる，中実；鍔は膜状，狭く，稀に蜘網状，多くは永存するも，時に早失性，上位，上面白色，下面茎とほぼ同色；胞子は広楕円形或は殆ど円壔形，平滑，6—7.5×5—6.5μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地

主にアカマツ，時にツガ，シラビソ，クロマツ，エゾマツ，稀にトドマツ林地—秋，時に梅雨期　日本全土

和名 マツタケ（松茸）〔古名〕

Tricholoma robustum (ALB. et SCHW. ex FR.) RICKEN

マツタケモドキ

RICKEN, Blätterp. 332, pl. 87, f. 3. 1915—REA, Brit. Basid. 230. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:347. 1948—SINGER, Agaricales, 227. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 151. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2: 293. 1957.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，26, f. 50, pl. 9, f. 50. 1957）

Agaricus robustus ALB. et SCHW. Consp. Fung. 147. 1805—FRIES, Syst. Mycol. 1:226. 1821; Epicr. Myc. 21. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:37. 1857; Hymen. Eur. 41. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:570. 1844—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:33. 1876—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 22. 1883; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 33 (no. 51). 1883. (sub *aurantius*)—WINTER, Pilze, 1:838. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:670. 1889.

Armillaria robusta GILL. Champ. Fr. 81. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:19. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 45. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:74. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 103. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 34, pl. 17, f. 5–7. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:226. 1893; Brit. Fungi, 97. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 158. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 29. 1908—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl-fam. 1, 1 **:270. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):699. 1912—REA, Brit. Basid. 106. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 1:pl. 44. 1927—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1: 41, pl. 16, f. c. 1935—ZELLER, Mycologia, 30:472. 1938—HOTSON, Mycologia, 32:788. 1940.

（今関，植．研．雑．26:266. 1951—原，日．菌．目．20. 1954）

Gyrophila robusta QUÉL. Enchir. Fung. 9. 1886.

Mastoleucomyces robustus KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2:861. 1891.

Armillaria caligata (non GILLET)

(KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 18, f. 3–5. 1925; 日．菌．図説，n. 66. 1929; 日．菌．図鑑，4: 465, f. 446. 1954—白井，日．菌．目．ed. 3. 23. 1927—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:118. 1931—松浦，茸類辞典，18, f. 10. 1933; 応用菌蕈学，295, 509, f. 331. 1941—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:48. 1938)

子実体は孤生或は群生；傘は径 5—10 cm，初め半球形にて，次で低山形となり，更に開張扁平となるも縁は下方に彎曲す；表面は乾燥，茶褐色の細鱗被を密着し，中央部濃栗褐色，周辺淡色なり，縁に縁膜片を附着す；肉は白色，硬肉質，厚く，味温和或はやや苦し，臭はマツタケより弱し；褶は初め直生状，展開後微かに彎生を呈す，白色，のち褐色となる，中位に密，広幅；茎は 5—10×1—2 cm，殆ど同幅にて下方に狭細，基端尖る，鍔より上部は白色粉状，下部は傘面と同色にて鱗片を有す，茎の長きものは下部少しく彎曲す，充実；鍔は上位，膜質，むしろ狭く，上面白色，下面茎と同様なり；胞子は広楕円形，平滑，5—7×4—5μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地

松林内—秋　全土—欧．北米．濠

和名 マツタケモドキ（擬松蕈）〔川村〕（マツタケノオバサン，オバマツタケ，マツタケノオジサン，オバジコウ等の方言あり）

Tricholoma flavovirens (PERS. ex FR.) LUNDELL

キシメジタケ

SINGER, Agaricales, 218. 1949.

（松田及本郷，植．研．雑．30:259. 1955—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，24, f. 43, pl. 7, f. 43. 1957）

Agaricus equestris L. Sp. Plant. 2:1173. 1753—FRIES, Elench. Fung. 1:6. 1828; Epicr. Myc. 26. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:50. 1857; Hymen. Eur. 48. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:563. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 97, pl. 4, f. 2. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:20. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 72 (no. 59). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:34. 1876—WINTER, Pilze, 1:829. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:666. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:268. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):689, pl. 126 E. 1912.

Agaricus aureus SCHAEFF. Fung. Bavar. 4: Ind. 19, pl. 41. 1774.

Agaricus flavovirens PERS. Syn. Meth. Fung. 319. 1801.

Tricholoma equestre QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:76. 1872—GILLET, Champ. Fr. 94, c. ic. 1874—

KARSTEN, Hattsv. 1:30. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 50. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:87. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 113. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 41, pl. 24, f. 1-12. 1890—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:177. 1893; Brit. Fungi, 100. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 159. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 32. 1908—MURRILL, Mycologia, 1:2, pl. 1, f. 3. 1909—ROLLAND, Atl. Champ. 22, f. 24. 1910—RICKEN, Blätterp. 335, pl. 90, f. 3. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 682. 1918—REA, Brit. Basid. 215. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 2:pl. 53. 1927—LANGE, Agar. Denm. 9:16. 1933; Fl. Agar. Dan. 1:50, pl. 19, f. c. 1935—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:66, pl. 2, f. 4. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:343. 1948—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 155. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:309, pl. 32, f. 1. 1957.

(KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 7, f. 26-28. 1913; 日. 菌. 図説, n. 179. 1929; 食用菌及有毒菌, f. 12(p. 13). 1931; 日. 菌. 図鑑, 4:447, f. 432. 1954—白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 665. 1917; ed. 3. 397. 1927—梅村, 富士. 植. 志. 371. 1923—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:117. 1931—松浦, 茸類辞典, 17, f. 15. 1933—今関, 原色きのこ, pl. 23(中). 1942—原, 日. 菌. 目. 369. 1954)

Gyrophila equestris QUÉL. Enchir. Fung. 10. 1886.

Melanoleuca equestris MURR. N. Am. Fl. 10: 24. 1914.

子実体は群生或はやや叢生; 傘は径 5—10 cm, 丸山形, のち開張し鈍頭; 表面は湿時粘性, 淡黄色或は帯緑黄色, 広き中盤上に帯赤色或は暗褐色の鱗片を被むる, 縁は平坦; 肉は白色, 皮下黄色を帯ぶ, 中盤厚く, 縁は薄し, 臭は殆どなく, 味は初めやや穀粉様にて, のち不良; 褶は彎入し殆ど離生, 硫黄色, 密, 広幅, 便腹状, 稜は全縁或は腐蝕す; 茎は 5—10×1—2 cm, 同幅或は基部類球根状, 淡黄色〜硫黄色或は白色, 微細鱗片を有し, 或は殆ど無毛, 中実, 稀に中空; 胞子は楕円形, 平滑, 6—8×4—5 μ; 胞子紋は白色; 可食。

所在及産地

林内落葉間—秋　　　　本邦全土—欧. 北米

和名 キシメジタケ (黄湿地茸)〔川村〕
キンタケ, ウコンシメジ (方言)

var. **pinastreti** FR.
シモコシタケ

FRIES, Hymen. Eur. 48. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:34. 1876—SACCARDO, Syll. Fung. 5:89. 1887.

(川村, 日. 菌. 図鑑, 4:448, f. 433. 1954)

原種と異なり傘面は帯褐黄色にて肉は薄く且つ軟かにて裂け易く; 茎も亦軟かく繊維質にて縦裂を生じ易し; 茎は白色にて僅か黄色を帯び, 彼に比して細長, その基部は膨大するも菌蕾時は彼の如く球状なることなし; 尚傘面は老時暗褐色の鱗被を有すること; 肉は白色にて水潤状柔軟なること; 褶は黄色にて彼の如く密ならずして狭幅なる等の相違あり; 可食。

所在及産地

海浜松林内—秋　　　　本州, 九州—欧.

和名 シモコシタケ (霜越茸)〔古名〕

Tricholoma sejunctum (SOW. ex FR.) QUÉL.
アイシメジタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:76. 1872—GILLET, Champ. Fr. 96, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:31. 1876—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 88. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 113. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:178. 1893; Brit. Fungi, 100. 1911—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 88, f. 89. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 32. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 22, pl. 15, f. 26. 1910—RICKEN, Blätterp. 335, pl. 89, f. 2. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 683. 1918—REA, Brit. Basid. 215. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3:pl. 239. 1932; Agaricales, 1:343. 1948—LANGE, Agar. Denm. 9:16. 1933; Fl. Agar. Dan. 1:50, pl. 20, f. B. 1935—IMAI, Jour. Facul. Agar. Hokkaido Imp. Univ. 43:67. 1938—SINGER, Agaricales, 226. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 156, f. 217. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:302, pl. 32, f. 2. 1957.

(今関, 原色きのこ, pl. 23(右). 1942; 及土岐, 林. 試. 研. 報. 67:50. 1954—本郷, 植. 研. 雑. 29:92. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 25, pl. 8, f. 44. 1957)

Agaricus sejunctus SOW. Col. Fig. Engl. Fung. pl. 126. 1799—FRIES, Syst. Myc. 1:47. 1821; Epicr. Myc. 26. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1: 52. 1857; Hymen. Eur. 48. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:21. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 53(no. 60). 1883—WINTER, Pilze, 1:828. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:666. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:268. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 690. 1912.

Agaricus leucozanthus PERS. Syn. Meth. Fung. 319. 1801.

Gyrophila sejuncta QUÉL. Enchir. Fung. 10. 1886.

Gyrophila socialis var. *sejuncta* QUÉL. Champ.

Jura Vosg. Suppl. 20:2. 1895.

Melanoleuca sejuncta MURR. N. Am. Fl. 10: 25. 1914.

? *Tricholoma quinquepartitum*

（松村，植．名鑑，1:177. 1904—白井，日．菌．目．100. 1905; ed. 2. 665. 1915; ed. 3. 397. 1927—原，日．菌．目．370. 1954）

子実体は群生或はやや叢生；傘は径 4—10 cm，丸山形，のち開張扁平となり，鈍き中丘を存す，遂に縁辺幾分高まりて屢々不規則なる波状をなす；表面は湿時僅か粘性，無毛，平滑，黄色～シトロン色，上に暗緑色～緑黒色の繊維を被むる，縁は薄く，絨毛状；肉は白色，皮下黄色を帯び，緻密，脆し，中



第 56 図　アイシメジタケ Tricholoma sejunctum
a．子実体 ×1/3　　b．胞子 ×450
（大谷氏）

盤厚く，味往々少しく苦く，臭やや穀粉様；褶は彎入或は彎生，帯黄白色，やや密，広幅，脆し；茎は 5—10×1—2 cm，同幅或はやや便腹状，白色～淡黄色，殆ど無毛，中実；胞子は類球形～楕円形，平滑，6.5—7.5×3.5—4.5 μ；胞子紋は白色；可食。

所 在 及 産 地

林地—夏秋　　　　北海道，本州—欧．北米

和 名　アイシメジタケ（藍湿地茸）〔今井〕

Tricholoma portentosum (FR.) QUÉL.

シモフリシメジタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 2:338. 1873—GILLET, Champ. Fr. 97, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:31. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 50. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:89. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 111. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 43, pl. 25, f. 1–9. 1890—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:178. 1893; Brit. Fungi, 100. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 159. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 33. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 28, pl. 23, f. 43. 1910—RICKEN, Blätterp. 336, pl. 89, f. 3. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 684. 1918—REA, Brit. Basid. 215. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 2: pl. 56. 1927—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1: 50, pl. 19, f. B. 1935—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:344. 1948—SINGER, Agaricales, 226. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 156. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:302, pl. 31, f. 2. 1957.

（今関及土岐，林．試．研．報．79:7, f. 9. 1955—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，25, f. 45, pl. 8, f. 45. 1957）

Agaricus portentosum FR. Syst. Myc. 1:39. 1821; Elench. Fung. 1:5. 1828; Epicr. Myc. 26. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:52. 1857; Hymen. Eur. 48. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 97. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:21. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1: pl. 54 (no. 61). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:34. 1876—WINTER, Pilze, 1: 828. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:665. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:268. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):689, pl. 125. 1912.

Agaricus luridus LASCH, Linnaea, 4:521. 1829.

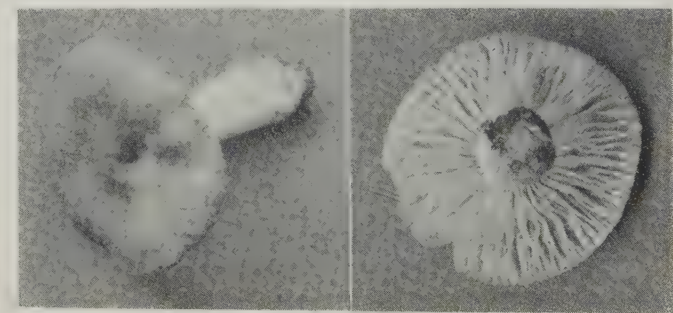
Agaricus fumosus HARZER, Abbild. Pilze, pl. 73. 1845.

Gyrophila portentosa QUÉL. Enchir. Fung. 10. 1886.

Tricholoma fumidum KAWAM. Illus. Jap. Fungi, pl. 19, f. 12–14. 1925.

（白井，日．菌．目．ed. 3. 397. 1927—川村，食用菌及有毒菌，f. 13 (p. 14). 1931—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:118. 1931—松浦，茸類辞典，14, f. 12（左）. 1933; 応用菌蕈学，f. 811（左）(p. 1195). 1941—HONGO, Jour. Jap. Bot. 27:190, f. 2(1). 1952—原，日．菌．目．369. 1954）

子実体は散生或は群生；傘は径 4—7 cm，丸山形～開張し，やや中丘あり，往々不正形にて縁辺反転す；表面はやや粘性，平滑，地色は黄色～白色にて



第 57 図　シモフリシメジタケ Tricholoma portentosum
a．子実体表面　　b．子実体裏面 ×1/2　　（大谷氏）

煤色繊維にて密に被わる，光沢あり，外皮剝げ易し；肉は硬く，汚白色にて皮下黄色を帯ぶ，味及臭なし；褶は後方円く，僅か狭生或は離生，初め白色，のち黄色を帯び，疎，広幅；茎は 8—10×1.5—2cm，殆ど同幅，平滑，帯黄白色，緊緻，中実；胞子は楕円形，平滑，5—6×3—4μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地

林地—秋　　本州，九州—欧．北米

和名 シモフリシメジタケ（霜降湿地茸）〔川村〕

Tricholoma fulvum (D.C. ex FR.) REA

キヒダマツシメジタケ

REA, Brit. Basid. 217. 1922—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 57, pl. 10, f. 1. 1950. (non SACCARDO, 1915)

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 53:393. 1939—今関，原色きのこ，pl. 23(左). 1942—原，日．菌．目．369. 1954)

Agaricus fulvus DC. Fl. Fr. 2:186. 1815—FRIES, Syst. Myc. 1:37. 1821—PERSOON, Myc. Eur. 3:177. 1828.

Agaricus flavobrunneus FR. Obs. Myc. 2:119. 1818; Epicr. Myc. 28. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:56. 1854; Hymen. Eur. 51. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1: 562. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 98. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:22. 1871; Illus. Brit. Fungi. 1:pl. 58(no. 70). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:35. 1876—WINTER, Pilze, 1:826. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1: 665. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:268. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):688. 1912.

Tricholoma flavobrunneum QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:77. 1872—GILLET, Champ. Fr. 91, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:33. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 51. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:93. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 115. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 43, pl. 27. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:183. 1893; Brit. Fungi, 101, pl. 7, f. 4. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 34. 1908—RICKEN, Blätterp. 334, pl. 88, f. 2. 1915—BRESADOLA, Icon. Myc. 2:pl. 59. 1927—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3:pl. 243. 1932; Agaricales, 1:349. 1948—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:48, pl. 18, f. c. 1935—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 152, f. 212. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:298. 1957.

(今関及本郷，原色日．菌．図鑑，27, pl. 10, f. 52. 1957)

Gyrophila fulva QUÉL. Enchir. Fung. 11. 1886.

子実体は散生或はやや叢生；傘は径 5—8cm，円錐状鐘形，のち開張扁平となり，幾分中丘あり；表面は粘性，焦褐色，中央濃色，微細の繊維或は内生鱗片ありて線状，肉質；肉は通常傘に於て白色，茎に於て黄色～橙色，基部銹色を帯び，時に全部硫黄色，水潤状，かなり緊緻，臭は著しく，のち不快；褶は彎入，垂下歯を有す，淡黄色或は橙黄色，老時或は接触により赤色～褐色の斑点を生ず，密，やや広幅；茎は 4—8×0.8—1.2cm，僅か便腹状にて基部狭細，初め粘性，頂部白色或は淡色，その他は赤褐色にて繊維あり，屢々屈曲，中空；胞子は卵形，6—7×4.5—6μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地

主に広葉樹林内—秋　　北海道，本州—欧．北米

和名 キヒダマツシメジタケ

（黄褶松湿地茸）〔今井〕

ヌメリキシメジタケ（滑黄湿地茸）〔今関〕

Tricholoma albobrunneum (PERS. ex FR.) QUÉL.

マツシメジタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:77. 1872—GILLET, Champ. Fr. 93, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:34. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 51. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:93. 1887—BARLA, Champ. Alp. Marit. 44, pl. 27, f. 7-11. 1890—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:184. 1893; Brit. Fungi, 103. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 159. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 34. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 23, pl. 16, f. 29. 1910—RICKEN, Blätterp. 333, pl. 88, f. 4. 1915—REA, Brit. Basid. 218. 1922—IMAI, Jour. Facul. Agar. Hokkaido Imp. Univ. 43:68. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:348. 1948—SINGER, Agaricales, 223. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 57, pl. 10, f. 3. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 152. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:296. 1957.

(今関，原色きのこ，pl. 22(右). 1942—原，日．菌．目．369. 1954—今関及土岐，林．試．研．報．67:47. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，27, pl. 10, f. 51. 1957)

Agaricus striatus SCHAEFF. Fung. Bavar. 4: Ind. 18, pl. 38. 1774—SCHROETER, Pilze Schles. 1:665. 1889—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 688. 1912.

Agaricus albobrunneus PERS. Syn. Meth. Fung. 293. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:37. 1821; Epicr. Myc. 29. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:57. 1857; Hymen. Eur. 51. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:562. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:23. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 197 (no. 71). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:35. 1876

—WINTER, Pilze, 1:826. 1884—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:268. 1900.

Gyrophila albobrunnea QUÉL. Enchir. Fung. 11. 1886.

Tricholoma striatum SACC. Fl. Ital. Crypt. Hymen. 118. 1915—LANGE, Agar. Denm. 9:15. 1933; Fl. Agar. Dan. 1:49, pl. 16, f. A. 1935.



第58図 マツシメジタケ
Tricholoma albobrunneum ×2/3 (大谷氏)

子実体は群生或は孤生；傘は径 3.5—7 cm，円錐形～丸山形，のち扁平，やや中丘を存す；表面は粘性，赤褐色～殆ど栗褐色，周辺淡色，内生繊維ありて線条を有す；縁は内屈し，屢々有皺；肉は白色，外皮下褐色を帯び，緊緻，味温和，臭微なり；褶は彎生或は彎入，白色，老時赤色を帯ぶ，やや密，甚だ広幅，緊緻；茎は 4—8×1—2 cm，同幅，乾燥，上部白粉状，下部淡赤色線条あり，中実；胞子は類球形或は卵状楕円形，平滑，4—6×3—4 μ；胞子紋は白色；可食，往々軽き下痢を起す。

所在及産地

林地，殊に松林地上—秋　北海道，本州—欧．濠

和名 マツシメジタケ（松湿地茸）〔今井〕

Tricholoma ustale (FR.) QUÉL.

カキシメジタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:77. 1872—GILLET, Champ. Fr. 94. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:34. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 51. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:94. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 119. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 44, pl. 28, f. 1—4. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:184. 1893; Brit. Fungi, 103. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 34. 1908—RICKEN, Blätterp. 334, pl. 88, f. 3. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 688, pl. 146. 1918—REA, Brit. Basid. 218. 1922—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:49, pl. 17, f. c. 1935—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:349. 1948—SINGER, Agaricales, 228. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 153. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:298, f. 16, A, pl. 30, f. 3. 1957.

(KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 17, f. 6–9. 1925; 日．菌．図説，n. 141. 1929—白井，日．菌．目．ed. 3. 398. 1927—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:118. 1931—松浦，茸類辞典，70, f. 74. 1933；応用菌蕈学，f. 762（下）(p. 1168). 1941—原，日．菌．目．370. 1954)

Agaricus leucophyllus ALB. et SCHW. Consp. Fung. 163. 1805.

Agaricus ustale FR. Obs. Myc. 2:122. 1818; Syst. Myc. 1:37. 1821; Epicr. Myc. 29. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:57. 1857; Hymen. Eur. 51. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:562. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:23. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 88 (no. 72). 1883—WINTER, Pilze, 1:826. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:664. 1889—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):688. 1912.

子実体は孤生或はやや叢生；傘は径 4—10 cm，広き丸山形～扁平，鈍頭或はやや中丘あり；表面は粘性，帯赤褐色～暗栗褐色，往々淡色，無毛，平坦，縁は常に内屈す；肉は白色，のち赤色を帯ぶ，緊緻，厚し，粉臭なし；褶は彎入或は直生，初め純白色，のち赤色となる，傷時赤褐色，密，やや広幅，稜は腐蝕す；茎は 5—8×0.8—1.5 cm，殆ど同幅，或は不規則に圧辺さる，上方白色，下方帯赤色，綿絮粉状，時に捩曲す，往々有根，充塞，のち往々中空；胞子は楕円状卵形，平滑，6—8×4—5 μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地

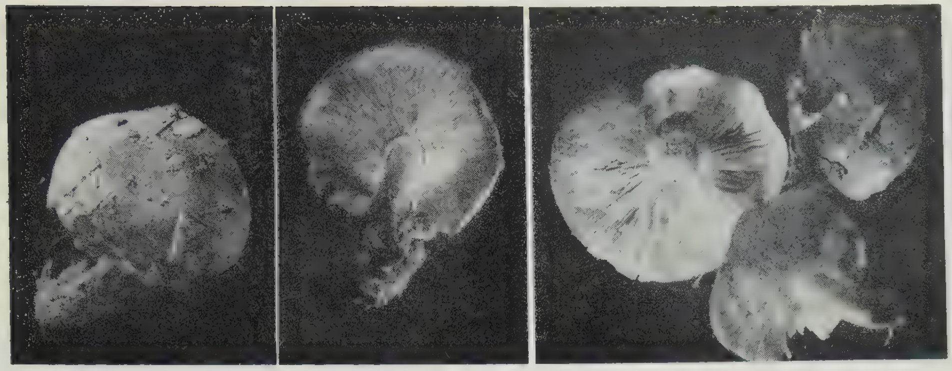
林内腐木或は腐葉上—秋　本州—欧

和名 カキシメジタケ（柿湿地茸）〔川村〕

Tricholoma pessundatum (FR.) QUÉL.

オオカキシメジタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:77. 1872—GILLET, Champ. Fr. 92, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:34. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 52. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:94. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 117. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 45, pl. 28, f. 9–11. 1890—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:184. 1893; Brit. Fungi, 103. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 159. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 34. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 26, f. 39. 1910—RICKEN, Blätterp. 333, pl. 88, f. 1. 1915—REA, Brit. Basid. 218. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 2:pl. 65. 1927—KONRAD



a　b　c



d

第59図　オオカキシメジタケ Tricholoma pessundatum
a. b. c.　子実体　×1/3　　d．胞子　×550　（大谷氏）

& MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3: pl. 244. 1932; Agaricales, 1:349. 1848—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:49, pl. 16, f. D. 1935—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Uuiv. 43: 68. 1938—SINGER, Agaricales, 228. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 152. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:298. 1957.

（原，日．菌．目．370. 1954）

Agaricus pessundatus FR. Syst. Myc. 1:38. 1821; Epicr. Myc. 29. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:58. 1857; Hymen. Eur. 52. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:562. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:23. 1871—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:36. 1876—WINTER, Pilze, 1:826. 1884—SCHROETER, Pilze Schles 1:664. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL. Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 268. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 689. 1912.

子実体は群生；傘は径 6—12cm，丸山形，のち開張し，鈍き中丘あり，遂に扁平或は少しく圧低さる；表面は粘性，栗褐色〜赤銹色，中央に黒色乳頭状鱗片を被むり，のち無毛となる，縁は綿絮状；肉は白色，やや柔軟，味苦く，臭は類穀粉様；褶は彎入し殆ど離生，白色、のち橙黄肉桂色〜暗褐色の斑紋を生ず，密，広幅；茎は 5—8×1—2cm，同幅，基部やや肥大，上部白色にて粉状，下部傘面と同色にて淡く，繊維状鱗片或は粒を被むる，充塞，のち中空；胞子は類楕円形，平滑，5—6×3.5—4μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地

林地—秋　　北海道，本州—欧

和名　オオカキシメジタケ（大柿湿地茸）〔今井〕

Tricholoma imbricatum (FR.) QUÉL.

アカゲシメジタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:79. 1872—GILLET, Champ. Fr. 99, c. ic. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:101. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 127. 1915—KARSTEN, Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 53. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:192. 1893; Brit. Fungi, 105. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 35. 1908—RICKEN, Blätterp. 341, pl. 90, f. 1. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 693. 1918—REA, Brit. Basid. 222. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 2: pl. 72. 1927—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3: pl. 261. 1934; Agaricales, 1:356. 1948—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:49, pl. 18, f. B. 1935—SINGER, Agaricales, 227. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 153. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:298, f. 217, B. 1957.

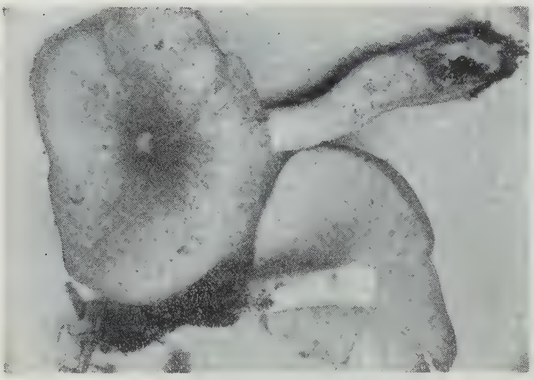
Agaricus imbricatus FR. Obs. Myc. 1:27. 1815; Syst. Myc. 1:42. 1821; Epicr. Myc. 33. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:64. 1857; Hymen. Eur. 56. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:560. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 99, pl. 4, f. 3. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:25. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1: pl. 199 (no. 79). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:38. 1876—WINTER, Pilze, 1: 822. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:662. 1889—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 685, pl. 126 B. 1912.

Cortinellus imbricatus KARST. Hattsv. 1:27. 1879—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:62. 1938.

（原，日．菌．目．93. 1954）

Gyrophila imbricata QUÉL. Enchir. Fung. 12. 1886.

子実体は群生或は孤生；傘は径 5—10cm，丸山形，のち開張扁平となり，鈍頭或はやや中丘を存す；表面は乾燥，帯褐赤色〜淡赤焦茶色，内生繊維鱗片



a



第 60 図　アカゲシメジタケ
Tricholoma imbricatum
a．子実体 ×1/2　　b．胞子 ×500 　b
（大谷氏）

を被むり，中央裂けたる鱗片となる，縁は薄く，初め内屈し，細軟毛あるも，のち消失す；肉は白色，傷時淡赤色となる，緊緻，厚し，味及臭温和；褶は彎生或は僅か狭生，初め白色，老時帯赤色或は淡赤斑を生ず；茎は 5—9×1—2 cm，同幅或は殆ど同幅，時に便腹状或は基部狭細，上部白色粉状，その他は纎維状にて基部赤褐色，中実；胞子は広楕円形，平滑，5—7×4—5 μ；胞子紋は白色；可食。

所 在 及 産 地

林地—秋　　　北海道，本州，九州—欧．北米

和 名　アカゲシメジタケ（赤毛湿地茸）〔今井〕

Tricholoma vaccinum (PERS. ex FR.) QUÉL.

クダアカゲシメジタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:79. 1872—GILLET, Champ. Fr. 97, c. ic. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:102. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 127. 1915—KARSTEN, Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 53. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:191, 1893; Brit. Fungi, 105. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 159. 1900—ROLLAND, Atl. Champ. 23, pl. 16, f. 28. 1910—RICKEN, Blätterp. 340, pl. 90, f. 4. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 693. 1918—REA, Brit. Basid. 222. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 2:pl. 73. 1927—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:52, pl. 18, f. A. 1935—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1: 355. 1948—SINGER, Agaricales, 228. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 153. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:298, f. 217, A. 1957.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，25, f. 48, pl. 8, f. 48. 1957）

Agaricus vaccinus PERS. Syn. Meth. Fung. 293. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:42. 1821; Epicr. Myc. 33. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1: 65. 1857; Hymen. Eur. 56. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:560. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:26. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 60 (no. 80). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:39. 1876—WINTER, Pilze, 1:822. 1884.

Agaricus inodermius FR. Monogr. Hymen. Suec. 1:66, (Monogr. Trich. 18). 1857; Hymen. Eur. 57. 1874.

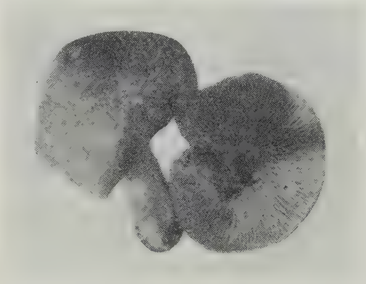
Cortinellus vaccinus ROZE, Bull. Soc. Bot. Fr. 23:113. 1876—KARSTEN, Hattsv. 1:28. 1879—SCHROETER, Pilze Schles. 1:667. 1889—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):692. 1912—MURRILL, N. Am. Fl. 10:35. 1914—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:61. 1938.

（原，日．菌．目. 93. 1954）

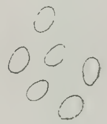
Gyrophila vaccina QUÉL. Enchir. Fung. 12. 1886.

Tricholoma inodermeum SACC. Syll. Fung. 5:103. 1887.

子実体は群生或は類叢生；傘は径 3—8 cm，円錐形～鐘形，のち開張し，中丘を有す；表面は乾燥，肉桂赤色～赤褐色，縁に向つて淡色となる，全面に圧着せる纎維鱗片を密布し，中央部の鱗片は密にし



a



b

第 61 図　クダアカゲシメジタケ
Tricholoma vaccinum
a．子実体 ×1/3　　b．胞子 ×550 （大谷氏）

て暗色，縁は初め内捲し，淡黄鮭肉色の軟毛を有す；肉は中盤以外はやや薄く，初め白色，老時及傷時赤色となる，味は幾分不快にて収斂性，臭微なり；褶は類直生にて，のち彎生，淡色，或は帯黄色，老時及傷時赤色となる，むしろ疎，広幅；茎は 5—8×0.6—1.5 cm，同幅，幾分不規則にて基部太く，紡錘形となる，上部白色或は帯白色，粉状，下部赤褐色，傷時赤色となる，纎維状，中空；胞子は類球形或は広楕円形，平滑，6—8×4—6 μ；胞子紋は白色；可食。

所 在 及 産 地

林地，殊に針葉樹林地—秋
　　　北海道，本州，九州—欧．北米

和 名　クダアカゲシメジタケ
（管赤毛湿地茸）〔今井〕

Tricholoma acerbum (BULL. ex FR.) QUÉL.

オオニガシメジタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:77. 1872—GILLET, Champ. Fr. 123, c. ic. 1874—BARLA, Champ. Alp. Marit. 57, pl. 44, f. 1–5. 1888—SACCARDO, Syll. Fung. 5:129. 1889; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 151. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3: 182. 1893; Brit. Fungi, 101. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 42. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 24, pl. 18, n. 33. 1910—KAUFFMAN, Agar. Mich. 705, pl. 151. 1918—REA, Brit. Basid. 235. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 2:pl. 58. 1927—RICKEN, Blätterp. 342, pl. 91, f. 2. 1915—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:61, pl. 23, f. A. 1935—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:349. 1948—SINGER, Agaricales, 227. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 61, pl. 13, f. 2. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 153, f. 214. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:300, f. 218, A. 1957.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，27, pl. 10, f. 54. 1957）

Agaricus acerbus BULL. Herb. Fr. pl. 571, f. 2. 1791—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 328. 1801; Myc. Eur. 3:167. 1828—DECANDOLLE, Fl. Fr. 2: 175. 1815—FRIES, Syst. Myc. 49. 1821; Epicr. Myc. 49. 1838; Hymen. Eur. 71. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 105. 1860—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:555. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:33. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 76 (no. 67). 1883—WINTER, Pilze, 1:811. 1884.

Gyrophila acerba QUÉL. Enchir. Fung. 11. 1886.

子実体は群生，粗大；傘は径 6—12cm，扁平丸山形，鈍頭，のち遂に幾分圧低；表面は淡黄褐色にて中央やや濃色，乾燥，光沢なく，レンズ下にて微細絨毛あり，縁は初め内屈し，淡色，常に短き条溝を存す；褶は垂下歯を有して陥入，密，狭細，初め白色，漸次クリーム色となり，僅か赤味を呈す；肉は白色，緊緻，特別なる臭なし，味は甚だ苦くして辛味あり；茎は太くして丈夫，4—9×1—3cm，初め基部太く上部狭細，のち殆ど同幅，殆ど白色，のち下方汚黄褐色，頂部綿絮状，基部の方繊維状，充実；胞子は広卵形，大油球あり，4—6×3.5—4μ；嚢状体なし。

所在及産地

広葉樹林内—夏秋　　本州—欧．北米

和名 オオニガシメジタケ（大苦湿地茸）〔本郷〕

Tricholoma orirubens QUÉL.

ケショウシメジタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 2:327. 1873—SACCARDO, Syll. Fung. 5:104. 1887—RICKEN, Blätterp. 337, pl. 92, f. 3. 1915—REA, Brit. Basid. 224. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3:pl. 255, 1925; Agaricales, 1:353. 1948—BRESADOLA, Icon. Myc. 2:pl. 81. 1927—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:53, pl. 22, f. A. 1935—SINGER, Agaricales, 227. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 154. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:300. 1957.

（今関及土岐，林．試．研．報．67:48, f. 7. 1954）

Agaricus terreus var. *orirubens* COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 31. 1883; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 90 (no. 86). 1883.

Tricholoma terreus var. *orirubens* MASS. Brit. Fung. Fl. 3:195. 1893; Brit. Fungi, 105. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 36. 1908.

子実体は群生；傘は径 4—6cm，丸山形にて，のち扁平となる，中丘を有して全形市女笠状を呈す；表面は灰褐色，中央部黒褐色，初め平滑，のち毛ばだち小粒状或は小鱗片状となる；肉は白色，空気に触れて淡紅色となる，薄く，脆し，臭弱く，後味幾分苦し；褶は彎入，白色にて稜は赤く縁どられ，遂に全部桃赤色となる，やや疎，広幅；茎は 5—7×0.5—1cm，同幅或は基部に向つて肥大，白色にて基部桃赤色を帯ぶ，頂部粉状，その他は綿毛状繊維あり，充実；胞子は楕円形，平滑，4.5—5.5×3.5—4μ；胞子紋は白色。

所在及産地

林内地上—秋　　本州—欧

和名 ケショウシメジタケ

（化粧湿地茸）〔今関及土岐〕

Tricholoma virgatum (FR.) GILL.

ネズミシメジタケ

GILLET, Champ. Fr. 106. 1872—KARSTEN, Hattsv. 1:39. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 54. 1889—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 10: 662. 1880—SACCARDO, Syll. Fung. 5:110. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 135. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:201. 1893; Brit. Fungi, 108. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 38. 1908—RICKEN, Blätterp. 339, pl. 93, f. 2. 1915—REA, Brit. Basid. 228. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 2:pl. 89. 1927—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3: pl. 258. 1927; Agaricales, 1:354. 1948—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:55, pl. 23, f. D. 1935—SINGER, Agaricales, 226. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 155. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:302, pl. 31, f. 1. 1957.

（川村，日．菌．図鑑，4:456, f. 440. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，27, pl. 10, f. 53. 1957）

Agaricus virgatus FR. Syst. Myc. 1:48. 1821; Epicr. Myc. 39. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1: 75. 1857; Hymen. Eur. 62. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:41. 1876—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 35. 1883; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 167 (no. 95). 1883—SCHROETER, Pilze Schles. 1:661. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:268. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. Pilze, 2(2):682. 1912.



第 62 図　ネズミシメジタケ
Tricholoma virgatum
a. 子実体　×2/3
b. 胞子　×750　（大谷氏）

子実体は孤生，時に群生；傘は径 3—7 cm，初め円錐状鐘形，のち丸山形～扁平，常に中丘を有して市女笠状をなし，縁辺少しく下屈す；表面は乾燥，灰色～灰緑或は銀灰色，中央暗色，初め平滑無毛にて黒色放射線或は内生黒色鱗片を有し，のち僅か綿架鱗片状となる；肉は白色，緻密，中盤以外は薄く，臭弱く，幼時強き苦味あるも老時消失す；褶は彎入，白色，のち僅か灰白色，密，広幅，稜は異質；茎は 4—8×0.8—1.5 cm，同幅或は基部太くして球根状，白色～帯灰白色，平滑或は線条あり，繊維状，充実；胞子は広楕円形～類球形，平滑，6—7×4—5 μ；胞子紋は白色；苦味強きにより食用に適せず。

所在及産地

林内—夏秋　　本州，九州—欧

和名　ネズミシメジタケ（鼠湿地茸）〔川村〕

Tricholoma boninensis S. ITO et IMAI
チチシマシメジタケ

S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:11. 1939.

子実体は孤生；傘は径 4—6 cm，丸山形，のちやや扁平となる；表面乾燥，中央菫灰色，縁辺帯白色，やや粉状，内屈す；肉は白色，乾時やや赤色となり，厚く，固く，臭なく，味僅か苦し；褶は彎生或はやや直生，甚だ密，狭幅；茎は 3.5—6.5×0.5—0.8 cm，殆ど同幅，白色，頂部に僅か褶の垂下線あり，上部粉状，下部繊維状，中実；胞子は楕円形或は類球形，平滑，6.5—7.5×4—5 μ；胞子紋は白色。

所在及産地

林内落葉間地上—秋　　小笠原島

和名　チチシマシメジタケ（父島湿地茸）〔今井〕

Tricholoma terreum (SCHAEFF. ex FR.) QUÉL.
クマシメジタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:79. 1872—GILLET, Champ. Fr. 100, c. ic. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:104. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 129. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 49, pl. 39, f. 1–13. 1890—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:195. 1893; Brit. Fungi, 105, pl. 8, f. 1. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 159. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 36. 1908—RICKEN, Blätterp. 339, pl. 92, f. 4. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 696, pl. 149. 1918—REA, Brit. Basid. 223. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 2:pl. 75. 1927—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 56, pl. 19. 1927—LANGE, Agar. Denm. 9:21. 1933; Fl. Agar. Dan. 1:54, pl. 22, f. c. 1935—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:350. 1948—SINGER, Agaricales, 227. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 58, pl. 9, f. 3. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 154. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:301, f. 79(5), pl. 29, f. 3. 1957.

（今関及土岐，林. 試. 研. 報. 67:51. 1954）

Agaricus terreus SCHAEFF. Fung. Bavar. 4: Ind. 28, pl. 64. 1774—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, pl. 76. 1797—FRIES, Epicr. Myc. 34. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:67. 1857; Hymen. Eur. 57. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:560. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:27. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 50 (no. 83). 1883—WINTER, Pilze, 1:821. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:662. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:268. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):685, pl. 126c. 1912.

Agaricus argyraceus BULL. Herb. Fr. pl. 423, f. 1, pl. 513, f. 2. 1791.

Gymnopus myomyces S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:608. 1821.

Cortinellus terreus KARST. Hattsv. 1:29. 1879—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:61. 1938.

（原，日. 菌. 目. 93. 1954）

Gyrophila tristis QUÉL. Enchir. Fung. 12. 1886.

Cortinellus multiformis MURR. N. Am. Fl. 10

34. 1914.

子実体は群生或はやや叢生; 傘は径 3—8 cm, 丸山形～鐘形, のち殆ど扁平となり, 鈍き中丘を存す; 表面は乾燥, 灰色, 灰褐色或は鼠色にて中央殆ど黒色, 内生繊維或は繊維状綿絮ありて鱗片状となる; 肉は白色にて皮下灰色を帯ぶ, やや薄く, 柔軟, 脆し, 臭は穀粉様にて味温和; 褶は彎入或は狭生, 白色にて, のち灰色となる, やや密, やや広幅; 茎は 4—8×0.7—1.5 cm, 同幅, 白色～灰色, 頂部白粉状, その他は綿絮繊維あり, 中実或は充塞; 胞子は楕円形, 平滑, 5—6×4—5 μ; 胞子紋は白色; 可食。

所在及産地

林地—夏秋　　北海道—欧・北米

和名 クマシメジタケ (熊湿地茸) 〔今井〕

Tricholoma squarrulosum Bres.
クロゲシメジタケ

Bresadola, Fung. Trid. 2:47, pl. 152. 1893; Icon. Myc. 2: pl. 80. 1927—Saccardo. Syll. Fung. 16:21. 1902; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 128. 1915—A. L. Smith & Rea, Trans. Brit. Myc. Soc. 2: 62, pl. 4, f. 1. 1904—W. G. Smith, Brit. Basid. 36. 1908—Rolland, Atl. Champ. 25, pl. 19, f. 34. 1910—Rea, Brit. Basid. 225. 1922—Konrad & Maublanc, Agaricales, 1:352. 1948—Singer, Agaricales, 227. 1949—Heim, Champ. Eur. 2:301. 1957.

(今関及土岐, 林. 試. 研. 報. 67:51, f. 10. 1954—川村, 日. 菌. 図鑑, 4:455, f. 439. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 27. 1957)

Tricholoma atrosquamosum subsp. *squarrulosum* Konrad, Bull. Soc. Myc. Fr. 45:59. 1929; & Maublanc, Icon. Sel. Fung. 3: pl. 257. 1932—Kühner & Romagnesi, Fl. Analyt. Champ. Super. 154. 1953. (sub forma)

Cortinellus squarrulosus Imai, Jour. Facul. Agr. Hakkaido Imp. Univ. 43:60. 1938.

(原, 日. 菌. 目. 93. 1954)

子実体は孤生或は散生; 傘は径 4—8 cm, 丸山形, のち開張扁平となり, 鈍き中丘あり, 圧低すること少し; 表面は乾燥, 地色は帯白色或は僅か淡褐色～帯黄色, 無数の著しき黒色鱗片を密布す, 鱗片は互に附着斜立し, 中心に於て密集し黒色を呈す, 縁は綿絮鱗片を有し淡色; 肉は帯白色或は灰色, 無味無臭; 褶は彎入し殆ど離生, 灰白色, 接触により褐色となる, 密, 広幅; 茎は 4—10×0.6—1 cm, 同幅或は基部やや球根状となる, 傘面と同色にて同様の鱗片を有す, 中実或は僅か中空となる; 胞子は核子形或は楕円形, 平滑, 7—9×4—5 μ; 胞子紋は白色; 稜嚢体は担子柄形, 無色, 屢々灰色となる, 15—25×7 μ; 可食。

所在及産地

林地—秋　　北海道, 本州—欧

和名 クロゲシメジタケ (黒毛湿地茸) 〔今井〕
ササクレシメジタケ (逆皮湿地茸) 〔川村〕

Tricholoma scalpturatum (Fr.) Quél.
アクゲシメジタケ

Quélet, Champ. Jura Vosg. 1:232. 1872—Gillet, Champ. Fr. 104. 1874—Saccardo, Syll. Fung. 5:100. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 123. 1915—Massee, Brit. Fung. Fl. 3:191. 1893; Brit. Fungi, 104. 1911—W. G. Smith, Brit. Basid. 35. 1908—Ricken, Blätterp. 337, pl. 92, f. 2. 1915—Rea, Brit. Basid. 222. 1922—Konrad & Maublanc, Icon. Sel. Fung. 3: pl. 254. 1924; Agaricales, 1:351. 1948—Bresadola, Icon. Myc. 2: pl. 74. 1927—Singer, Agaricales, 226. 1949—Kühner & Romagnesi, Fl. Analyt. Champ. Super. 154. 1953—Heim, Champ. Eur. 2:300, pl. 29, f. 4. 1957.

Agaricus scalpturatus Fr. Epicr. Myc. 31. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:61. 1857; Hymen. Eur. 55. 1874—Berkeley, Outl. Brit. Fung. 101. 1860—Cooke, Handb. Brit. Fungi, 1:24. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1: pl. 215 (no. 78). 1883—Winter, Pilze, 1:823. 1884—P. Hennings, in Engler & Prantl, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:268. 1900—Migula, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):686. 1912.

Cortinellus scalpturatus Karst. Hattsv. 1:27. 1876—Imai, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:59. 1938.

(原, 日. 菌. 目. 93. 1954)

子実体は群生; 傘は径 3—8 cm, 丸山形, のち扁平となり, やや中丘を存す; 表面は乾燥, 帯白色～灰色, 中央暗色, 灰色の圧着せる綿絮或は綿絮鱗片を被むり, 中央に於て密集す, 縁は繊維状, 綿毛を有す; 肉は白色或は帯白色, 味及臭温和; 褶は彎入し, 狭生或は直生, 灰白色, のち黄色或は黄点を有す, 密, 広幅, 便腹状; 茎は 3—7×0.4—1 cm, 同幅或は不同にて基部太く或は細し, 蜘網膜の残物を存す, その膜は灰色にて早失性, これより上部は白色にて繊維状, 下部はやや灰色にて繊維状, 中実; 胞子は楕円形, 平滑, 5—7×3—4 μ; 胞子紋は白色; 可食。

所在及産地

林内腐蝕土上—秋　　北海道—欧

和名 アクゲシメジタケ (灰毛湿地茸) 〔今井〕

疑問種

Tricholoma chrysenterum

(原, 日. 菌. 目. 369. 1954. オニタケ)

Tricholoma periporphyrum (BERK. et CURT.) SACC. Syll. Fung. 5:115. 1887. (松村, 植. 名鑑, 1: 177. 1904—白井, 日. 菌. 目. 100. 1905; ed. 2. 665. 1917; ed. 3. 397. 1927—原, 日. 菌. 目. 369. 1954) =*Agaricus periporphyrus* BERK. et CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4:111. 1860. 小笠原島

(Ⅲ) Leucopaxilleae SING. オオイチョウタケ族

SINGER, Sydowia, 2:29. 1948.

子実体はカヤタケ (*Clitocybe*) 或はシメジタケ (*Tricholoma*) 型, 稀にヒラタケ (*Pleurotus*) 型; 胞子は糊性; 肉は糊性或は非糊性; 菌絲は存在或は欠如; 膠質層なし; 托実質は両側型ならずして類不整型〜整型; 稜嚢体は存在或は欠如; 大嚢体存在或は欠如; 弱嚢体は存在或は欠如; 分泌嚢体, 粘嚢体, 剛毛体欠如; 傘の表皮層は有突起の菌糸, 皮嚢体, 箒状細胞にて作られたる分化せる上表皮層を有せず; 被膜なきか甚だ僅か発達す; 土壌上, 材上稀に草根上, 蟻塚上等に生ず。

SINGER 氏 (1949) は 4 属を収む。

本邦既知属検索表

A. 胞子は平滑, 或は若し有疣ならば臍部平滑盤所謂胞子盤なし; 菌絆は存在或は欠如。

a. 胞子は楕円状円壔形〜紡錘状円筒形或は短円筒形, 稀に楕円状卵形, 明かに糊性, 平滑; 菌絆は存在或は欠如; 褶は多くは明かに垂生, 屢々叉状をなす; 傘は中位の厚肉, 強靱にて再生す, 吸水性或は非糊性, 通常薄黒色或は肉桂色の色彩を帯ぶ。

クロサカズキシメジタケ属 **Cantharellula** (148)

b. 胞子は短楕円形〜類球形, 有疣にて甚だ強き糊性, 若し平滑なれば屢々甚だ僅か糊性; 菌絆は常に存在; 褶は明かに垂生, 或は彎状狭生, 直生, 凹入等; 傘は屢々寧ろ厚く, 肉質或は強靱にて往々再生す, 非吸水性, 或は稀に吸水性の点を有す, 薄黒色ならず。

α. 擬嚢体欠如; 稜は通常全縁; 菌糸は非糊性; 子実体は稀に明かに側生。

オオイチョウタケ属 **Leucopaxillus** (150)

β. 擬嚢体存在; 褶は通常明かに鋸歯状, 菌糸の全部或は1部は通常明かに糊性; 子実体は屢々側茎。

ミミナミハタケ属 **Lentinellus** (151)

B. 胞子は有疣或は微細有点, 所謂胞子盤あり; 菌絆なし。

ザラミノシメジタケ属 **Melanoleuca** (154)

Cantharellula SING.
クロサカズキシメジタケ属

SINGER, Ann. Mycol. 34:331. 1936; Agaricales, 235. 1949.

Omphalius ROUSSEL, Fl. Calvados, ed. 2. 66. 1806—EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5:432. 1929.

子実体はカヤタケ (*Clitocybe*) 型, 稀にシメジタケ (*Tricholoma*) 型; 色素は常に存在し, 細胞内或は膜を被う; 傘は肉質にて薄く; 放射状圧着繊維を有し, 不透明〜殆ど軟毛を被むり, 屢々亀裂す, 或は無毛平滑にて屢々吸水性, 無線条或は湿時縁辺に僅か透明線条を有す, 丸山形〜深き漏斗形; 上表皮層は長き普通の菌糸よりなり, 細胞状ならず; 褶は直生或は類垂生又は垂生, 往々強く彎生, 最も屢々明かに深く垂生す, 密或は疎, 屢々多少叉状をなす, 時に再三叉状をなす, 屢々有色, 稀に白色, 屢々HCN を生ず; 胞子紋は純白; 胞子は無色, 平滑, 明かに糊性, 円筒形或は楕円状円壔形, 短円筒状類楕円形, 稀に楕円状卵形, 内外両側凸面ならずして長幅の比 2 より小なり; 担子柄は正常なるも比較的長く, 通常 4 胞子; 時に稜嚢体を有するものあるも甚だ分散し往々不定, 不明瞭; その他の嚢状体なし; 托実質は類整型, 或は類整型〜殆ど不整型; 子実下層は細胞状〜類細胞状錯綜; 茎は中心生, 肉質〜肉状繊維質にて軟骨質, 管状ならず; 被膜なし; 肉は不変化, 或は赤変するものあり; 菌絆は存在或は欠如; 肉は沃度液にて帯紫色或は淡黄色となるものもあり; 地上或は材上生, 多くは温帯産, 約 10 種を知らる, 食用菌あるも価値少し。

(本属名は Cantharellus (属名), 即ち kanthoros 〔希〕(水飲盃) より出づ)

基準種 *C. umbonata* (GMELIN ex FR.) SING.

本邦既知種検索表

A. 傘径 3—7 cm; 茎は多くは充塞。

クロサカズキシメジタケ

C. cyathiformis (149)

B. 前種と酷似するも小形にて傘径 2.5—4.5 cm,

黒味多く；茎は中空。

クロサカズキタケ　**C. obbata**　(149)

Cantharellula cyathiformis (BULL. ex FR.) SING.

クロサカズキシメジタケ

SINGER, Ann. Myc. 34:331. 1936; Agaricales, 239. 1949.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，29, pl. 11, f. 58. 1957）

Agaricus cyathiformis BULL. Herb. Fr. pl. 575, f. m. 1791—DECANDOLLE, Fl. Fr. 2:170. 1815—FRIES, Syst. Myc. 1:173. 1821; Epicr. Myc. 73. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:128, (Monogr. Clit. 32). 1857; Hymen. Eur. 100. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:42. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 113 (no. 166). 1883—KARSTEN, Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 3:60. 1876—WINTER, Pilze, 1: 791. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:651. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 266. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):658. 1912.

Clitocybe cyathiformis QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:89. 1872—GILLET, Champ. Fr. 148, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:77. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 68. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:176. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 198. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 76, pl. 62, f. 6–10. 1892—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:433. 1893; Brit. Fungi, 190. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 155. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 55. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 31, pl. 27, f. 52. 1910—RICKEN, Blätterp. 376, pl. 104, f. 1. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 739, pl. 159. 1918—REA, Brit. Basid. 285. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 4:pl. 175. 1928—LANGE, Agar. Denm. 8:53. 1930; Fl. Agar. Dan. 1:82, pl. 38, f. E. 1935—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:86. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:401. 1948—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 70, pl. 17, f. 3. 1950—HEIM, Champ. Eur. 2:276, pl. 34, f. 2. 1957.

（今関，原色きのこ，pl. 34(右). 1942; 及土岐，林．試．研．報．67:36. 1954—原，日．菌．目．74. 1954）

Omphalia cyathiformis QUÉL. Enchir. Fung. 24. 1886—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 129. 1953.

子実体は群生，やや叢生或は孤生；傘は径 3—7 cm，初め丸山形にて中窩を有し強く内捲せる縁をもつも，のち広漏斗形或は盃形となる；表面は吸水性，幼時及湿時煤褐色，或は焦茶色，乾時及老時褐灰色となる，平滑或は内生細纖維を有す，縁は内屈す；肉は水潤状，傘面と同色，海綿状纖維質，臭及味なし；



a



b

第63図　クロサカズキシメジタケ
Cantharellula cyathiformis
a．子実体× 2/3　　b．胞子 ×450
（大谷氏）

褶は直生，のち垂生，煙灰色，疎，狭幅，基部に於て結着し，時に分岐す；茎は 4—8×0.4—0.8 cm，上方に漸細或は同幅，傘面と同色或は淡色，網状纖維を有し，基部に白軟毛あり，弾性，充塞；胞子は楕円形～楕円状卵形，平滑，7—10×4.5—6 μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地

林内腐木上或は地上—秋

本邦全土—欧．北米．亜(小亜)

和名　クロサカズキシメジタケ

(黒盃湿地茸)〔今井〕

Cantharellula obbata (FR.) BOUSSET

クロサカズキタケ

BOUSSET, Bull. Soc. Myc. Fr. 55:123, c. ic. 1739—SINGER, Agaricales, 239. 1949.

Agaricus obbatus BUXB. Cent. 4:pl. 3, f. 1. 1733—FRIES, Epicr. Myc. 74. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:129, (Monogr. Clit. 33). 1857; Hymen. Eur. 101. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 58. 1883; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 230 (no. 168). 1883—WINTER, Pilze, 1:790. 1884—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:266. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):659. 1912.

Agaricus tardus ※ *cinereus* PERS. Myc. Eur. 3: 81. 1828.

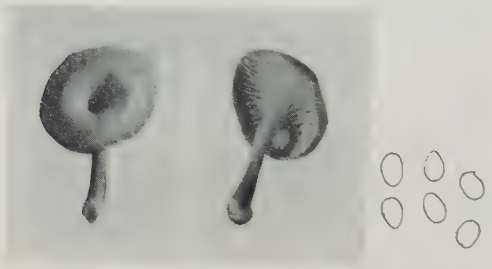
Clitocybe obbata QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1: 90. 1872—GILLET, Champ. Fr. 146. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:78. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:177. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 200. 1915

—BARLA, Bull. Soc. Myc. Fr. 5:19. 1889; Champ. Alp. Marit. 76. pl. 62, f. 13–19. 1892—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:434. 1893; Brit. Fungi, 191. 1911 —W. G. SMITH, Brit. Basid. 55. 1908—RICKEN, Blätterp. 377. 1915—REA, Brit. Basid. 286. 1922 —BRESADOLA, Icon. Myc. 4:pl. 178, f. 1. 1927—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:402. 1948 —HEIM, Champ. Eur. 2:276. 1957.

(KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, 1:pl. 1, f. 33–35. 1912—白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 145. 1917; ed. 3. 86. 1927—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:117. 1931—松浦, 茸類辞典, 122, f. 143. 1933; 応用菌蕈学, f. 806 (p. 1191). 1941—原, 日. 菌. 目. 74. 1954)

Omphalia obbata KÜHN. et ROMAGN. Fl. Analyt. Champ. Super. 129. 1953.

傘は径 2.5—4.5 cm, 丸山形～扁平にて広き中窩あり, のち漏斗形となる; 表面は吸水性, 灰褐色～褐黒色, 乾時淡色となる, 無毛, 平滑, 中部迄有線



a b c

第 64 図 クロサカズキタケ Cantharellula obbata
a. 子実体 b. 同裏面 ×1/2
c. 胞子 ×450 (大谷氏)

条, 類膜質; 肉は灰色, 味温和, 臭なし; 褶は直状垂生, 灰色, 疎, 広幅, 厚く, 時に叉状並に横脈あり; 茎は 4—5×0.2—0.4 cm, 同幅或は上方に僅か狭細, 基端やや球根状, 傘面と同色或は淡色, 往々屈曲, 中空; 胞子は楕円形, 平滑, 8—11×6—7.5 μ; 胞子紋は白色; 可食。

所在及産地

林内—秋 本州, 九州—欧

和名 クロサカズキタケ (黒盃茸) 〔川村〕

Leucopaxillus BOURSIER
オオイチョウタケ属

BOURSIER, Bull. Soc. Myc. Fr. 41:391. 1925, em. SINGER, Rev. Myc. 4:69. 1939; Ann. Myc. 34: 331. 1936; Agaricales, 240. 1949.

Aspropaxillus KÜHNER et MAIRE, Bull. Soc. Myc. Fr. 50:13. 1934.

子実体はカヤタケ(*Clitocybe*)キシメジタケ(*Tricholoma*) 或は甚だ稀に幾分ヒラタケ (*Pleurotus*) 型; 傘は不透明, 非吸水性, 稀に吸水性の点を有し, 非粘性, 平滑或は短畦～鈍鋸歯状, 初め内捲縁を有し, 厚く, 肉質なるも水潤状ならず; 上表皮層は分化少し; 褶は垂生或は彎生, 或は彎入彎生, 或は狭生～直生; 屢々 HCN を生ず; 胞子紋は純白色; 胞子は無色, 粗面～有疣にて臍上平滑盤なし, 或は平滑にて甚だ僅か糊性 (但し有疣の胞子は強き糊性), むしろ小形～中形 (長さ 10 μ に及ぶ), むしろ短楕円形, 類球形, 卵形; 担子柄は正常形; 嚢状体欠如; 然し稜嚢体は往々存在するも小形にて著しからず; 托実質は整型～類不整型 (老時不整型多し); 子実下層は糸状, 薄し; 茎は中心生, 甚だ稀に偏心生, 通常太くして肉質～幾分強靱; ベール欠如; 色素は細胞内に存し, 或種に於て上表皮層中に結晶す, 肉眼的には屢々鮮色を呈し, 或種に於て欠如す; 肉は傷時変色す; 菌糸は糊性にて多数菌絆を有す; 腐蝕物特に葉片腐蝕物上, 時に蟻巣上に生ず; 裸実; 温帯, 亜熱帯地方に産す, 約 13 種を知らる, オオイチョウタケ等を薬用に供せらると記するものあり。

(本属名は leukos 〔希〕(白色), Paxillus (属名) より出づ)

基準種 *L. tricolor* (PECK) KÜHNER

本邦既知種

オオイチョウタケ ***L. giganteus*** (150)

Leucopaxillus giganteus (SOW. ex FR.) SING.
オオイチョウタケ

SINGER, Schweiz. Zeitschr. Pilzk. 17:14. 1939; Agaricales, 241. 1949; & SMITH, Pap. Mich. Acad. Sci. Arts. Lett. 28:97. 1943—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 144, f. 205. 1953.

(本郷, 滋賀大. 学芸. 研. 論集. 4:54. 1955—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 29, f. 59, pl. 11, f. 59. 1957)

Agaricus giganteus SOW. Col. Fig. Engl. Fungi, pl. 244, 1803—FRIES, Monogr. Hymen. Suec. 1: 118, (Monogr. Clit. 22). 1857—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:39. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 106 (no. 150). 1883—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):281. 1912.

Clitocybe gigantea QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:88. 1872—GILLET. Champ. Fr. 143, c. ic. 1874 —KARSTEN, Hattsv. 1:70. 1879—BARLA, Champ. Alp. Marit. 70, pl. 56. 1892—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:423. 1893; Brit. Fungi, 187, pl. 16, f. 3. 1911 —KAUFFMAN, Agar. Mich. 719. 1918—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 59, pl. 21. 1927—LANGE, Agar. Denm. 8:42. 1930; Fl. Agar. Dan. 1:73, pl. 33, f. F. 1935—IMAI, Jour. Facul. Agr.

Hokkaido Imp. Univ. 43:87. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:394. 1948—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 65, pl. 16, f. 1. 1950.

（沢田，東北生物研究，1:79. 1949—小林，植．研．雑．28:277, f. 1–3. 1953—原，日．菌．目．74. 1954）

Paxillus giganteus FR. Hymen. Eur. 401. 1874—WINTER, Pilze, 1:574. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:983. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 665. 1915—RICKEN, Blätterp. 93. 1915—REA, Brit. Basid. 549. 1922.

（伊藤篤．植．研．雑．7:1. 1931）

子実体は孤生，群生或は叢生；傘は大形にて径3—20 cm，或はそれ以上に及び，34 cm のものありという，初め丸山形，速に開張扁平となり，更に漏斗形となる，中丘を存せず；表面は乾燥，白色にて淡渋色或は粘土色を帯ぶ，柔軟の触感を有し，往々中部絹状微細鱗片を有す，縁は初め甚だ内屈し密軟毛あり，のち開平し殆ど平滑となり，更に反転し粗縦溝あり，屢々裂く；肉は白色，中央厚く，縁は薄し，柔軟，肉質，味及臭温和；褶は垂生，白色，のち淡渋色，甚だ密，むしろ狭幅，屢々叉状をなし，基部に於て纒絡す，傘肉より剝離するを得；茎は短大頑丈，2—7×2—5 cm，同幅，或は下部蕪状，帯白色にてほぼ傘面と同色或はやや暗色，平滑或は微細軟毛を有し，老時有溝或は裂く，中実；胞子は楕円形～卵形，平滑，糊性，5.5—7×3.5—4 μ（或は 6—7×3—4 μ）；胞子紋は白色；担子柄は普通 2 胞子；褶側嚢体は棍棒形，22—25×5 μ，先端に長さ約 7 μ の 1 長突起あり；可食。

所在及産地

林地及路傍，庭園内—夏秋

北海道，本州—欧．北米

和名 オオイチョウタケ（大銀杏茸）〔伊藤篤〕

Lentinellus KARST.
ミミナミハタケ属

KARSTEN, Hattsv. 1:246. 1879—SINGER, Agaricales, 243. 1949.

Hemicybe KARSTEN, l. c. 248. 1879.

Lentinellus FAYOD, Ann. Sci. Nat. Bot. VII, 9: 336. 1889.

Lentinaria PILÁT, Ann. Mycol. 39:73. 1941.

子実体はカヤタケ—ヒラタケ（*Clitocybe-Pleurotus*），ヒダサカズキタケ—ヒラタケ（*Omphalia-Pleurotus*）型，又は真のヒラタケ（*Pleurotus*）型；傘は有茎或は無茎；褶は通常多少細鋸歯～細鈍鋸歯を有す；胞子紋は白色或は類白色；胞子は小形にて，球形，類球形，卵形或は甚だ広き楕円形，微細粗面，有細疣或は殆ど平滑又は全く平滑，著しく糊性；担子柄は何れの点よりも正常；大嚢体或は少くとも油脂菌糸の末端が子実層中に介入し，他の嚢状体は存在せず；托実質は類整型～類非整型，或は老時殆ど不整型；茎は偏心生或は叢生又は欠如；ベールなし；肉は寧ろ強靱，幾分再生能あり，屢々強き芳香を有し，屢々辛味あり，屢々一部糊性の菌糸により作られ，菌絆あり，寧ろ多数の油脂菌糸あり，これ等のものは厚膜を有す；新伐採或は腐朽せる材上及び草根上に生ず；裸実；約 10 種を知らる，木材腐朽菌，食用菌を含む。

（本属名は Lentinus（属名），ella（縮小詞）より出づ）

基準種 *L. cochleatus*（FR.）KARST.

本邦既知種検索表

A．胞子は明かに有疣粗面；傘は小形にて径 1—3.5 cm，丸山形にて著しき中窪あり，淡黄褐色；茎は痕跡的；群生～畳生。

ヒメオオギナミハタケ ***L. flabelliformis***（151）

B．胞子は平滑或は甚だ僅か粗面。

a．有茎；傘は中形にて径 3—9 cm，類漏斗形，無毛，淡黄土色～赤褐色；茎は不同幅，有溝；癒着叢生。

ミミナミハタケ ***L. cochleatus***（152）

b．無茎；畳生。

α．傘は大形にて 5—10 cm，或はそれ以上に及び，貝殻状，肉色～藁色，放射状粗毛脈を有す。キツネナミハタケ ***L. vulpinus***（153）

β．傘は径 5 cm 以下，貝殻状にて厚く，赤褐色～類藁色，暗褐色の粗軟毛を被むる；辛味。

イタチナミハタケ ***L. ursinus***（153）

Lentinellus flabelliformis（BOLT. ex FR.）
ヒメオオギナミハタケ

Agaricus flabelliformis BOLT. Hist. Fung. 4: pl. 157. 1791—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 479. 1801; Myc. Eur. 3:23. 1828—FRIES, Syst. Myc. 1:185. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1: 514. 1844.（non SCHAEFFER）

Lentinus flabelliformis FR. Syst. Orb. Veg. 1: 78. 1825; Epicr. Myc. 395. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:239. 1863; Hymen. Eur. 487. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 226. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:243. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7:148, f. b.（no. 1095）. 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 3:450. 1875; Enchir. Fung.

153. 1886—WINTER, Pilze, 1:497. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 610. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 487. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1: 555. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:317. 1893; Brit. Fungi, 220. 1911—W.G. SMITH, Brit. Basid. 310. 1908—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:225. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1):374, pl. 68, f. 4–5. 1912—RICKEN, Blätterp. 87. 1915—REA, Brit. Basid. 540. 1922—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 147. 1938.

(原, 日. 菌. 目. 176. 1954)

Hemicybe flabelliformis KARST. Hattsv. 1:250. 1879.

Lentinus flabellinus QUÉL. Fl. Myc. 326. 1888.

Lentinellus flabellinus KONR. et MAUBL. Icon. Sel. Fung. 4:pl. 315. 1937; Agaricales, 1:435. 1948—SINGER, Agaricales, 244. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 66. 1953.

Lentinus omphalodes FR. var. *flabelliformis* PILÁT, Monogr. Eur. Lentinus, 36, pl. 24, 25b. 1946.

子実体は群生或は畳生; 傘は径 1—3.5 cm, 通常偏心的にて腎臓形, 稀に円形にて丸山形, のち扁平となり, 茎の着部に著しき中窩を生ず; 表面は僅か吸水性, 淡黄褐色, 乾時淡色, 無毛, 縁は薄く, 初め内捲, のち円く, 遂に鈍鋸歯状となる; 肉は薄く, 強靱, 多くは白色, 味苦く, 臭弱し; 褶は狭着垂生, 白色, のちクリーム色, 疎, 広幅, 稜に鋸歯あり; 茎は短かく, むしろ痕跡的, 甚だ偏心的にて往々側生, クリーム藁色, 基部多少褐色を帯ぶ, 無毛, 屈曲, 革質; 胞子は卵状楕円形, 微疣を有し, 糊性, 5.5—7×4—5 μ; 胞子紋は白色; 嚢状体は僅か多生, 狭紡錘形, 無色, 30—35×4—6 μ。

所在及産地

林内枯木上—秋 北海道—欧. 北米

和名 ヒメオオギナミハタケ(姫扇波稜茸)〔今井〕

Lentinellus cochleatus (PERS. ex FR.) KARST.

ミミナミハタケ

KARSTEN, Hattsv. 1:247. 1879—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:434. 1948—SINGER, Agaricales, 245. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 65, f. 73. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:231, f. 78(2). 1957.

Agaricus cornucopioides BOLT. Hist. Fung. Half. 8, pl. 8. 1788.

Agaricus cochleatus PERS. Disp. Fung. 22. 1797; Syn. Meth. Fung. 450. 1801; Myc. Eur. 3:51. 1828—FRIES, Syst. Myc. 1:177. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:518. 1844.

Agaricus confluens SOW. Col. Fig. Engl. Fungi, 2:pl. 168. 1899.

Lentinus cochleatus FR. Syst. Orb. Veg. 1:78. 1825; Epicr. Myc. 394. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:235. 1863; Hymen. Eur. 484. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 226, pl. 19, f. 4. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:242. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7:pl. 1142 f. a(no. 1093). 1890; Handb. Austr. Fungi, 93. 1892—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:225. 1872; Enchir. Fung. 150. 1886—GILLET, Champ. Fr. 381, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:234. 1876; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 139. 1889—WINTER, Pilze, 1:498. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 594. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 489. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2: 315. 1893; Brit. Fungi, 219. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 310. 1908—PATOUILLARD, Ess. Tax. 136. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 373. 1912—RICKEN, Blätterp. 86, pl. 26, f. 1. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 55. 1918—HARPER, Trans. Wisc. Acad. Sci. Arts Lett. 20:379, pl. 23. 1921—REA, Brit. Basid. 539. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 122, pl. 58. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 11:pl. 513. 1929—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:145. 1938—PILÁT, Monogr. Eur. Lentinus, 26, pl. 4b, 16–18, 19a; f. 7, 1946—LANGE, Fl. Agar. Dan. 5:88, pl. 197, f. H. 1950—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 104, pl. 69, f. 5. 1950.

(原, 日. 菌. 目. 176. 1954)

Lentinus cornucopioides SCHROET. Pilze Schles. 1:555. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 225. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):375. 1912.

Lentinellus cornucopioides MURR. N. Am. Fl. 9:295. 1915.

子実体は密に叢生し基部癒着し, 屢々畳生; 傘は径 3—9 cm, 不正形にて甚だ不等, 撓曲し, 耳状, 箆状をなし, 扁平或は圧低され類漏斗形となる; 表面は無毛, 淡赤黄土色, 帯紅肉桂色〜赤褐色或は栗褐色, 乾時淡色, 縁は浅裂し或は捩曲す; 肉は帯白色或は傘面とほぼ同色となる, 薄く, 臭はよく, 味温和; 褶は垂生, 帯白色にて肉色を帯び, 密, むしろ広幅, 稜は鋸歯状, 薄し; 茎は 2—8×0.5—1.5 cm, 偏心生, 殆ど側生或は中心生, 分岐或は基部にて癒着す, 深溝を有し, 無毛, 幅は不規則, 傘面と同色或は僅か暗色, 堅緻, 中実; 胞子は類球形, 平滑, 径 3—5 μ; 胞子紋は白色。

所在及産地

林内古株及埋木上—夏秋

北海道, 本州一欧. 北米. 濠. 亜(小亜)

和名 ミミナミハタケ (耳波稜茸) 〔今井〕

Lentinellus vulpinus (FR.) KONR. et MAUBL.

キツネナミハタケ

KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 6:384. 1936; Agaricales, 1:435. 1948—SINGER, Agaricales, 245. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 66. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:233, f. 184, A. 1957.

Agaricus vulpinus SOW. Col. Fig. Engl. Fungi, pl. 361. 1803—FRIES, Syst. Myc. 1:273. 1821.

Lentinus vulpinus FR. Syn. Gen. Lentin. 12. 1836; Epicr. Myc. 395. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:238. 1863; Hymen. Eur. 486. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 226. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:243. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7:pl. 1142, f. b (no. 1093). 1890; Handb. Austr. Fungi, 95. 1892—QUÉLET, Enchir. Fung. 151. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5:609. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 487. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:317. 1893; Brit. Fungi, 220. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:225. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 137. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 134, f. 131. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 310. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):375. 1912—RICKEN, Blätterp. 87. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 56. 1918—HARPER, Trans. Wisc. Acad. Sci. Arts Lett. 20:383, pl. 27. 1921—REA, Brit. Basid. 540. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 124, pl. 60. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 11:pl. 516. 1929—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:146. 1938—PILÁT, Monogr. Eur. Lentinus, 29, pl. 15, 19b, 20; f. 8. 1946. pr. p. (原, 日. 菌. 目. 177. 1954)

Hemicybe vulpina KARST. Hattsv. 1:249. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 141. 1889.

Panellus vulpinus MURR. N. Am. Fl. 9:246. 1915.

子実体は坐生, 多数叢生し畳生; 傘は径 5—10cm, 無茎, 腎臓状貝殻形にて丸山形, 基部癒着す; 表面は殆ど肉色～藁色, 放射状の粗畦条を有し, 綿絮状粗面, 老時褪色す, 縁は内屈し, 全縁; 肉は肉質～幾分強靱, 白色, のちやや藁色, 臭は菌臭, 味辛し; 褶は放射状, 白色, のち帯赤色, 密, 広幅, 基部にて合流す, 稜は鋸歯状; 胞子は類球形, 平滑, 4—4.5×2.5—3.5μ; 胞子紋は白色。

所在及産地

広葉樹株及材上—秋　　北海道—欧. 北米. 濠

和名 キツネナミハタケ (狐波稜茸) 〔今井〕

Lentinellus ursinus (FR.) KÜHNER

イタチナミハタケ

KÜHNER, Le Botaniste, 100. 1926—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 6:383. 1936; Agaricales, 1:436. 1948—SINGER, Agaricales, 245. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 66. 1953.

Agaricus ursinus FR. Syst. Myc. 1:185. 1821.

Lentinus ursinus FR. Epicr. Myc. 395. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:237. 1863; Hymen. Eur. 486. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:235. 1876—WINTER, Pilze, 1:498. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:608. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 488. 1915—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:225. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 137. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):373. 1912—RICKEN, Blätterp. 84. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 56. 1918—HARPER, Trans. Wisc. Acad. Sci. Arts Lett. 20:383, pl. 28. 1921—BRESADOLA, Icon. Myc. 11:pl. 515, f. 1. 1929—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:146. 1938.

(S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:20. 1939 —原. 日. 菌. 目. 177. 1954)

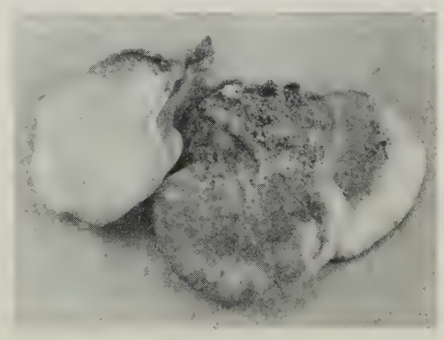
Hemicybe ursina KARST. Hattsv. 1:248. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 140. 1889.

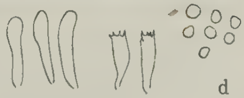
Lentinus hyracinus KALCHBR. Grev. 10:pl. 143, f. 18. 1882—SACCARDO, Syll. Fung. 5:608. 1887.

Panellus ursinus MURR. N. Am. Fl. 9:246. 1915.

Lentinus vulpinus PILÁT, Monogr. Eur. Lentinus, 29. 1946. pr. p.

子実体は坐生, 多数畳生; 傘は径 1—4cm 或はそれ以上に及び, 無茎, 類腎臓形或は貝殻状～半球形にて丸山形; 表面は帯紅肉桂色, 淡赤褐色或は類藁色, 暗褐色の粗軟毛を被むり, 縁辺は淡色, 無毛,





第 65 図 イタチナミハタケ Lentinellus ursinus
a. 子実体 ×2/3
b. 嚢状体　c. 担子柄　d. 胞子 ×500
(大谷氏)

時に房毛あり；肉は類肉質或は強靱肉質，帯白色或は帯褐色，臭なし；褶は放射状，やや密或は密，広幅，帯白色，のち帯褐色或は桃色となる，稜は鋸歯状；胞子は類球形～広楕円形，平滑，3.5—4.5×3—4μ；胞子紋は白色；稜囊体は類頭状円筒形，先端1—3歯を有す。

所在及産地

広葉樹株及材上—秋

北海道，本州，小笠原島—欧．北米

和名 イタチナミハタケ（鼬波稜茸）〔今井〕

Melanoleuca PAT.
ザラミノシメジタケ属

PATOUILLARD, Cat. Rais. Pl. Cell. Tunisie, 22: 1897; Ess. Tax. 159. 1900—SINGER, Agaricales, 246. 1949.

Melaleuca PATOUILLARD, Hymen. Eur. 96. 1889. (non LINNÉ, 1767)

子実体はキシメジタケ（*Tricholoma*）型にて稀にエノキタケ—キシメジタケ（*Collybia–Tricholoma*）或はカヤタケ（*Clitocybe*）型；色素は薄黒或は淡灰色，暗褐色，焦茶色等，或は色素なし；傘は無毛，或は粉状又は内生繊維あり，多く屢々完全に無毛，吸水性或は非吸水性，上表皮層は僅か分化し，纏絡，匍匐，伸長せる放射状に配列せざる菌糸より成る；褶は白色，クリーム色，或は灰色，通常密生～群生，凹入～垂生；胞子紋は純白色～クリーム色；胞子は無色，やや平滑～甚だ僅か糊性なる本来の膜上に甚だ糊性なる外被が存在し之れによつて疣状となる，胞子の内側に臍上盤所謂 plage を有す，疣は種々なる型の飾りをなす，完全なる胞子の外形は楕円状円壔形，楕円形，稀に短楕円形，疣は中位に高し；担子柄は正常，寧ろ短く，4胞子；弱囊体或は小囊体は通常存在し，僅少の種は囊状体を欠く，これ等の囊状体は寧ろ特異的のものにて，多くは薄膜を有し，分泌作用ありて屢々頂部に薄き結晶或は顆粒を附し矢形を呈す，突錐形～紡錘形；托実質は整型或は殆ど整型，僅か纏絡せる中層を有す，殊に褶の脊に近き部分に於て明かなり；子実下層は細胞状類錯綜なり；茎は隆起或は稀に不明瞭乃至明瞭なる寧ろ不完全なる鍔を有す，通常中心生，甚だ稀に偏心生，寧ろ繊維状肉質にて真の軟骨質或は強靱ならず；肉は白色，或は茎の基部より漸次灰色，褐色或は殆ど黒色となる（これ本属に特有なる細胞間隙膜上に存する褐色色素による），或は初めよりこの色を呈す；すべての菌糸に菌絆なし；林の内外，施肥牧場，庭園，冷床，温室，平原，山地等の地上に生ず，汎布，約29種を知らる，食用菌。

（本属名は melanos〔希〕（黒色の），lekos〔希〕皿より出づ）

基準種 *M. melaleuca* (PERS. ex FR.) PAT.

本邦既知種検索表

A．傘は乾燥，乳白色，絹状，径 2.5—10 cm；茎は繊維状肉質，暗色の点状鱗片疣を有す。

ツブエノシメジタケ ***M. verrucipes*** (154)

B．傘は吸水性，暗色；茎は類軟骨質。

a．大形にて傘径 7—15 cm，暗褐色；茎は帯白色にて黒褐～褐色線条あり。

オオザラミノシメジタケ ***M. grammopodia*** (155)

b．中形にて傘径 3—10 cm，煙褐或は煤色；茎は白色にて煤色線条あり。

コザラミノシメジタケ ***M. melaleuca*** (155)

Melanoleuca verrucipes (FR. ex QUÉL.) SING.
ツブエノシメジタケ

SINGER, Schweiz. Zeitschr. Pilzk. 17:56. 1939; Agaricales, 247. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:374. 1948—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 146, f. 209. 1953.

（本郷，滋．大．学芸．研．論．3:47, f. J. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，28, f. 55, pl. 10, f. 55. 1957）

Armillaria verrucipes FR. in QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 1:317. 1872; 2:pl. 2, f. 1. 1873—SACCARDO, Syll. Fung. 5:78. 1887—PATOUILLARD, Ess. Tax. 158. 1900—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:279. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):697. 1912.

Agaricus verrucipes FR. Hymen. Eur. 43. 1874—WINTER, Pilze, 1:832. 1884.

Gyrophila verrucipes QUÉL. Enchir. Fung. 10. 1886.

Tricholoma verrucipes QUÉL. Fl. Myc. 272. 1888—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 141. 1915—RICKEN, Blätterp. 330. 1915—BRESADOLA, Icon. Myc. 2:pl. 68. 1927—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:72. 1938.

（原，日．菌．目．370. 1954）

Mastoleucomyces verrucipes KUNTZE, Rev. Gen. pl. 2:861. 1891.

子実体は群生或は孤生，時にやや叢生；傘は 2.5—10 cm，或はそれ以上に及び，類円錐形～広丸山形，のち開張し中丘を存し，或は扁平となり，遂に小丘の周囲僅かに圧低さる；表面は乾燥，乳白色，

のち中央僅か黄色〜褐色を帯ぶ，絹状，無毛，平滑，或は甚だ僅か綿絮あり，縁は内屈し，短絨毛あり；肉は白色，中盤厚く，柔軟，臭は穀粉状にてむしろ強く，味温和；褶は彎生或は狭生，又は殆ど直生し小垂下歯を有す，白色，のち汚黄色，密，茎に近く屢々叉状；茎は 5—8×0.6—1 cm，或はそれ以上，殆ど同幅にて基部太し，白色，屢々縦溝ありて絹状纖維を有し，暗褐〜帯黒色の点状鱗片疣を被むる，中実，のち中空；胞子は楕円形，有疣，6—8×4—5.5 μ；胞子紋は白色；棱嚢体なし；可食。

所在及産地

林内或は樹下庭園地上—夏秋

北海道，本州—欧

和名 ツブエノシメジタケ（粒茎湿地茸）〔今井〕

Melanoleuca grammopodia (BULL. ex FR.) PAT.

オオザラミノシメジタケ

KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3: pl. 269. 1930; Agaricales, 1:371. 1948—SINGER, Agaricales, 249. 1949—MURRILL, N. Am. Fl. 10: 7. 1914—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 147. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2: 291, f. 212. 1957.

Agaricus grammopodium BULL. Herb. Fr. pl. 548. 1791—FRIES, Syst. Myc. 1:93. 1821; Epicr. Myc. 50. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:92, (Monogr. Trich. 44). 1857; Hymen. Eur. 74. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 106. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:33. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 98 (no. 118). 1883—WINTER, Pilze, 1:810. 1884—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:267. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):673. 1912.

Agaricus tabularis PERS. Myc. Eur. 3:73. 1828.

Tricholoma grammopodium QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:83. 1872—GILLET, Champ. Fr. 129. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:51. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 57. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:133. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 154. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 60, pl. 60, pl. 46, f. 1-7. 1890—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:219. 1893; Brit. Fungi, 114. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 43. 1908—RICKEN, Blätterp. 354, pl. 96, f. 3. 1915—REA, Brit. Basid. 239. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 3:pl. 124. 1927—LANGE, Agar. Denm. 9: 32. 1933; Fl. Agar. Dan. 1:64, pl. 29, f. c. 1935—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 74. 1938.

（原，日. 菌. 目. 369. 1954）

Gyrophila grammopodia QUÉL. Enchir. Fung. 17. 1886.

子実体は孤生或は群生；傘は径 7—15 cm，鐘形〜丸山形，のち扁平となり，鈍き中丘あり，遂に圧低さる；表面は吸水性，無毛，平滑，外皮剝げ易し，暗褐色，中央暗色，縁は初め内屈す；肉は帯白色，外皮下淡褐色，傘に於てやや緻密，茎に於て纖維質，味なく，臭は穀粉様或は黴臭；褶は垂下歯ありて直生，狭生或は彎生，灰白色，のち帯褐色，甚だ密，広幅，稜は波状或は細牙歯あり，屢々茎に近く叉状；茎は 7—10×1—2 cm，同幅にて基端太く或は球根状，白色にて黒褐色或は褐色の纖維ありて縦線条あり，弾性，緊緻，中実；胞子は楕円形，有疣，7—8×5—6 μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地

林地—秋　　北海道—欧．阿．北米

和名 オオザラミノシメジタケ

（大粗実湿地茸）〔今井〕

Melanoleuca melaleuca (PERS. ex Fr.) PAT.

コザラミノシメジタケ

PATOUILLARD, Ess. Tax. 159. 1900—MURRILL, Mycologia, 3:167, pl. 49, f. 4. 1911; N. Am. Fl. 10:7. 1914—RAMSBOTTOM, Trans. Brit. Myc. Soc. 25:436. 1942—SINGER, Agaricales, 249. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 147, f. 65. 1953.

Agaricus melaleucus PERS. Syn. Meth. Fung. 355. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:114. 1821; Epicr. Myc. 51. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:93, (Monogr. Trich. 45). 1857; Hymen. Eur. 74. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:34. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 106. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:34. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 119 (no. 119). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:46. 1876—WINTER, Pilze, 1:809. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:658. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:267. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):674. 1912.

Tricholoma melaleucum QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:83. 1872—GILLET, Champ. Fr. 128, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv, 1:52. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 57. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:134. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 155. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 60, pl. 46, f. 8-15. 1890—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:218. 1893; Brit. Fungi, 114, pl. 7, f. 1. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 43. 1908—RICKEN, Blätterp. 355, pl. 93, f. 4. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 713. 1918—REA, Brit. Basid. 239. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 3:pl. 125. 1927—LANGE, Agar. Denm. 9: 32. 1933; Fl. Agar. Dan. 1:65, pl. 29, f. A. 1935

—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:75. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 64, pl. 13, f. 1. 1950.

(P. HENNINGS, Bot. Jahrb. 32:41. 1903—松村, 植. 名鑑, 1:177. 1904—白井, 日. 菌. 目. 100. 1905; ed. 2. 665. 1917; ed. 3. 397. 1927—原, 日. 菌. 目. 369. 1954)

Gyrophila melaleuca QUÉL. Enchir. Fung. 17. 1886.

Melaleuca vulgaris PAT. Hym. Eur. 96. 1887.

Melanoleuca vulgaris PAT. Ess. Tax. 159. 1900 —HEIM, Champ. Eur. 2:291, f. 211, A, pl. 33, f. 2. 1957.

子実体は孤生或は散生；傘は径 3—10 cm, 丸山形，のち開張扁平となり，更に圧低さるるも常に鈍き中丘を存す；表面は吸水性，無毛，幾分剝げる外皮あり，湿時煙褐色或は煤色，乾時褪色し，黄土淡色～灰褐色，中央暗色，縁は幼時内屈し，通常全縁；肉は白色，薄く，老時暗色となる，柔軟，臭は微穀粉様，味温和；褶は狭生にて彎入，白色，のち黄色を帯ぶ，密，むしろ狭幅，稜は波状；茎は 4—10×0.4—1 cm，同幅にて基部少しく肥大し類球根状，上部白色粉状，その他は煤色繊維ありて線状，基部暗色，老時やや褪色，弾性，やや類軟骨質，常に中実；胞子は楕円形，有疣，6—8×4—5 μ；胞子紋は白色；褶側嚢体及稜嚢体は突錐形，先端顆粒を附す，60—75×10—12 μ；可食。

所在及産地

林内及草原，圃場等—秋

北海道，本州—欧．北米．濠

和名 コザラミノシメジタケ

（小粗実湿地茸）〔今井〕

(IV) Resupinateae SING. シジミタケ族

SINGER, Sydowia, 2:30. 1948; Agaricales, 251. 1949.

科の性に同じ；子実層托は褶状，担子柄は正常にてカーミン着色顆粒を含まず；胞子は無色，非糊性，球形～短楕円形，或種に於ては腸詰形或は楕円状円壔形にて内側扁平，或は卵形；稜嚢体は通常存在するも常に著しからず；metuloid は屢々褶側に存在す；茎は稀に正常に発達し，屢々側生しその為め子実体は特別なる箆形となる，或は屢々擬茎となる，即ち傘の後部少しく伸長し茎状をなし上方よりは寧ろ下方より認めらる，或は只盤状となる；肉は柔軟，生時撓曲性にて強靱ならず，常に少くとも一部膠化せる非糊性の組織より成る，多くの種の托実質も亦同じ，膠質層の菌糸は細く，蠟質，薄膜，菌絆を有す；最も屢々腐木上，稀に腐朽に傾きつつある植物上に生ず；SINGER 氏 (1949) は 2 属を収む。

属検索表

A．分泌嚢体欠如

シジミタケ属 **Resupinatus** (156)

B．分泌嚢体存在

ムキタケ属 **Hohenbuehelia** (158)

Resupinatus NEES ex S. F. GRAY

シジミタケ属

S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:617. 1821—SINGER, Agaricales, 252. 1949.

Phyllotus KARSTEN, Hattsv. 1:92. 1879.

Urospora FAYOD, Ann. Sci. Nat. Bot. VII, 9: 338. 1889—Earle, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5:418. 1909—SINGER, Beih. Bot. Centralbl. 56, B:145. 1936.

Dendrosarcus PAULET (±1800) ex O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):462. 1898.

Scylinotopsis SINGER, Ann. Mycol. 34:335. 1936.

Geopetalum PATOUILLARD, Hym. Eur. 127. 1887.

族の性に同じ；子実体は常に背着或は擬茎を有す；metuloid 欠如；稜嚢体は屢々樹枝糸状体状なり；材上及び枯草上，稀に生植物上に生ず；汎布，約 7 種を知らる，経済関係なし。

（本属名は resupinus〔羅〕(背着の) より出づ）

基準種

R. applicatus (BATSCH ex FR.) S. F. GRAY

本邦既知種検索表

A．胞子は球形～類球形。

a．傘表中盤部の毛は灰色～淡褐色にて黒色ならず；子実体は背着。

アクゲシジミタケ ***R. applicatus*** (157)

b．傘表中盤部の毛は暗褐～類黒色；子実体は側着。クロゲシジミタケ ***R. rhacodium*** (157)

B．胞子は円壔状楕円形にて僅か一方圧辺さる；子実体は背着しアクゲシジミタケと酷似す。

ナガミノシジミタケ ***R. silvanus*** (158)

Resupinatus applicatus (BATSCH ex FR.) S. F. GRAY

アクゲシジミタケ

S. F. GRAY, 1:617. 1821—MURRILL, N. Am. Fl. 9:242. 1915—SINGER, Agaricales, 253. 1949.
(今関及本郷，原色日．菌．図鑑，28. 1957)

Agaricus applicatus BATSCH, Elench. Fung. Cont. 1:171, pl. 24, f. 125. 1786—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi. 3:pl. 301. 1803—NEES, Syst. Pilze Schw. 197, pl. 22, f. 183. 1817—FRIES, Syst. Myc. 1:192. 1821; Epicr. Myc. 137. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:257. 1857; Hymen. Eur. 180. 1874. pr. p. —RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:513. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 139. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:160. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:52. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 244, f. c (no. 291). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:98. 1876—WINTER, Pilze, 1:731. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:623. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 260. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):608. 1912.

Agaricus epixylon BULL. Herb. Fr. pl. 581, f. 2. 1793—DECANDOLLE, Fl. Fr. 2:135. 1815—PERSOON, Myc. Eur. 3:15. 1828.

Agaricus tephromelas PERS. Obs. Myc. 2:47. 1799.

Agaricus epigaei β. PERSOON, Syn. Meth. Fung. 484. 1801.

Agaricus striatulus var. *hirsutulus* ALB. et SCHW. Consp. Fung. 232. 1805.

Pleurotus applicatus QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:114. 1872. pr. p. —GILLET, Champ. Fr. 335, c. ic. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:379. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 309. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:381. 1893; Brit. Fungi, 212. 1911—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 109, f. 114. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 96. 1908—RICKEN, Blätterp. 454. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 674. 1918—BRESADOLA, Icon. Myc. 6:pl. 296, f. 1. 1928—LANGE, Agar. Denm. 8:31. 1930; Fl. Agar. Dan. 2:72, pl. 66, f. B. 1936—JOSSERAND, Bull. Soc. Myc. Fr. 49:362, f. 9, A. 1933—PILÁT, Atl. Champ. Eur. 2, Pleurotus, n. 21, f. 20. 1935—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 102, pl. 31, f. 5. 1950.

(P. HENNINGS, Bot. Jahrb. 31:738. 1902—松村，植．名鑑，1:162. 1904—白井，日．菌．目．40. 1905; ed. 2. 467. 1917; ed. 3. 285. 1927—原，日．菌．目．278. 1954)

Phyllotus applicatus KARST. Hattsv. 1:94. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 113. 1889.

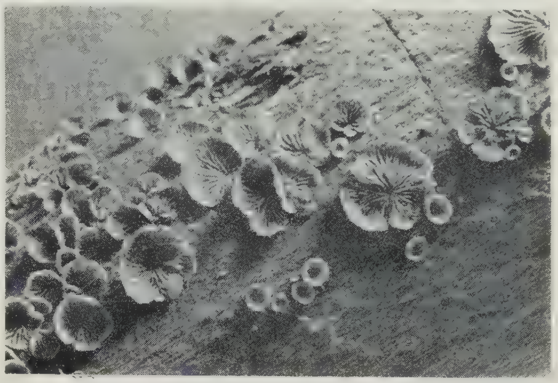
Dendrosarcus applicatus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):463. 1898.

Acanthocystis applicatus KÜHNER, Et. Hym. 112. 1926—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4:pl. 309, f. 1. 1937; Agaricales, 1:425. 1948.

Scytinotopsis applicatus SING. Ann. Myc. 34: 335. 1936.

Geopetalum striatulum var. *applicatum* KÜHN. et ROMAGN. Fl. Analyt. Champ. Super. 68. 1953.

子実体は群生，坐生；傘は径 5—12 mm，脊面の中心，偏心或は側点にて着生物に附着し，盃形にて，のち開張し，外囲円形，卵形或は腎臓形をなす，類膜質，緊緻；表面は非吸水性，絨毛に被われ，暗灰色，縁は薄く，初め内屈し，白粉状，湿時線条あり；肉は甚だ薄く，膠質，帯褐黒色，臭及味なし；褶は着生点より放射状をなし，暗灰色，やや疎，比較的広幅，不等長，稜は全縁，白粉状；茎は欠如；胞子は球形，平滑，径 4—5.5 μ；胞子紋は白色；褶側嚢体なく，稜嚢体あり。



a



b

第 66 図　アクゲシジミタケ
Resupinatus applicatus
a．子実体　×2　　b．胞子　×600
（大谷氏）

所在及産地　林内広葉樹枯枝上—夏秋
北海道，本州—欧．北米．濠

和名　アクゲシジミタケ（灰毛蜆貝茸）

Resupinatus rhacodium (BERK. et CURT.) SING.

クロゲシジミタケ

SINGER, Agaricales, 253. 1949—HONGO, Jour. Jap. Bot. 30:75, f. 1, F. 1955.
(今関及本郷，原色日．菌．図鑑，28, f. 56, pl. 10, f. 56. 1957)

Agaricus Rhacodius BERK. et CURT. Ann. Mag. Nat. Hist. III, 4:284. 1859—P. HENNINGS,

in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 260. 1900.

Pleurotus Rhacodium SACC. Syll. Fung. 5: 380. 1887—LANGE, Fl. Agar. Dan. 2:72, pl. 66, f. A. 1936.

Dendrosarcus Rhacodium O.KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):464. 1898.

Geopetalum rhacodium KÜHN. et ROMAGN. Fl. Analyt. Champ. Super. 68. 1953.

子実体は群生昼生; 傘は径5—12mm, 直立着生物に水平に生じ, 外囲円形, 半円形或は扇形にて多少丸山形をなす; 表面は灰色にて基部に密なる暗褐～類黒色の粗豪毛を有す, 縁は屢々放射状の皺条を有す; 肉は薄く, 傘面と同色, 上層膠質; 褶はやや疎, 薄く, 側点或は甚だ偏心なる1点より放射状をなし, 灰色, 狭幅, 稜は帯白色; 胞子は球形, 平滑, 非糊性, 無色, 径 4.5—5.5μ; 胞子紋は白色; 担子柄は 18—22×4—5μ, 4胞子。

所在及産地

広葉樹(トネリコ等)枯幹上—夏秋

本州—北米. 欧

和名 クロゲシジミタケ (黒毛蜆貝茸)〔本郷〕

Resupinatus silvanus (SACC.) SING.

ナガミノシジミタケ

SINGER, Agaricales, 253. 1949.

Agaricus striatulus FR. Syst. Myc. 1:193. 1821; Epicr. Myc. 137. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:257. 1857; Hymen. Eur. 181. 1874. pr. p. —P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:260. 1900.

Pleurotus striatulus Auct. pr. p.

(LLOYD, Myc. Writ. 5, Lett. 66:7. 1917)

Pleurotus applicatus QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:114. 1872. pr. p. —REA, Brit. Basid. 451. 1922 (non FRIES et Auct.)

(川村, 日. 菌. 図鑑, 4:411, f. 406. 1954. シジミタケ)

Pleurotus silvanus SACC. Michlelia, 1:1. 1877; Syll. Fung. 5:379. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 309. 1915—JOSSERAND, Bull. Soc. Myc. Fr. 49: 363, f. 9. B–C. 1933—PILÁT, Atl. Champ. Eur. 2, Pleurotus, n. 22, f. 21. 1935.

Calathinus applicatus QUÉL. Enchir. Fung. 47. 1886.

Dendrosarcus silvanus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):464. 1898.

Acanthocystis silvanus KONR. et MAUBL. Icon. Sel. Fung. 4:pl. 309, f. 2. 1937; Agaricales, 1: 425. 1948.

Geopetalum silvanum KÜHN. et ROMAGN. Fl. Analyt. Champ. Super. 68. 1953.

子実体は群生し, 坐生; 傘は径 5—15mm, 脊面の中心或は偏心点にて着生物に附着し, 盃形にて, のち開張し, 外囲円形或は卵形, 類膜質, 緊緻, 弾性あり; 表面は非吸水性にて湿時湿潤, 絨毛に被われ, 灰黒色にて灰緑色の光沢あり, 乾時中央微粉状, 往々全部全く黒色を呈す, 縁は薄く, 初め内屈し, 線条あり; 肉は薄く, 絨毛の被下著しく膠化す, 灰黒色～黒色, 味温和, 臭なし; 褶は着生点より放射状をなし, 灰褐, 帯黒鼠色, のち黒色, やや密, 広幅, 不等長, 稜は淡白色; 茎は欠如或は殆どなし; 胞子は円壔状楕円形にて往々僅か一方圧辺され, 平滑, 7—9×4—5μ; 胞子紋は白色; 褶側嚢体なく, 稜嚢体あり。

所在及産地

広葉樹(ナラ)枯枝上—夏秋 本州—欧

和名 ナガミノシジミタケ (長実蜆貝茸)

シジミタケ (蜆貝茸)〔川村〕

Hohenbuehelia SCHULZER

ムキタケ属

SCHULZER, Verh. Zool. Bot. Ges. Wien, 16:45. 1866—SINGER, Agaricales, 253. 1949.

Pleurotus sect. *Acanthocystis* FAYOD, Ann. Sci. Nat. Bot. VII, 9:338. 1889.

Sarcomyxa KARSTEN, Soc. Flor. Faun. Fenn. 18:62. 1891.

Phyllotremella LLOYD, Mycol. Writ. 6:1007. 1920.

Acanthocystis KÜHNER, Contrib. Hymen. 111. 1926.

族の性に同じ; 分泌嚢体存在, これ等の分泌嚢体は甚だ特異的にて, 深く根を下し, 無色～藁色, 膜甚だ厚くして屢々明かに数層より成る, 頂端或は全外面は通常粗なる結晶に被わる; 先端は鈍頭或は屢々鋭頭; これ等の分泌嚢体は稜及び褶側に生ず; 汎布, 約 28 種を知らる, 林木, 果樹に寄生, 或物は食用となる。

(本属名は墺国菌学者 FREIHERR von HOHENBÜHEL (von HEUFLER) 氏の姓より出づ)

基準種 *H. petaloides* (BULL. ex Fr.) SCHULZER

本邦既知種検索表

A. 嚢状体は永く薄膜; 傘は 3—8cm 或はそれ以上, 半円腎臓形或は類円形, 種々の色を呈し, 汚黄, 赤褐, 緑褐或はオリーブ色等, 茎に微細絹毛或は鱗片あり; 胞子 4—6×1—1.5μ。

ムキタケ ***H. serotina*** (159)

B. 嚢状体は厚膜; 傘は小形, 幅 1.2—1.7cm, 杓

子形，帯褐鼠色；茎は基部に白毛あり；胞子 7—9.5×3.5—5μ。ヒメムキタケ ***H. reniformis*** (159)

Hohenbuehelia serotina (SCHRADER ex FR.) SING.

ムキタケ

SINGER, Agaricales, 254. 1949.

(今関及本郷，原色日．菌．図鑑，28, f. 57, pl. 11, f. 57. 1957)

Agaricus serotinus SCHRADER, Spic. Fl. Germ. 140. 1794—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 479. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:187. 1821; Epicr. Myc. 135. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 176. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:515. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 136. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:49. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 258, f. b (no. 284). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:95. 1889—WINTER, Pilze, 1:734. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:625. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:260. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):610. 1912.

Agaricus serotinoides PECK, Rep. N. Y. St. Cab. 23:86. 1872.

Pleurotus serotinus GILL. Champ. Fr. 337. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:89. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 78. 1889—QUÉLET, Enchir. Fung. 149. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5:363. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 314. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:374. 1893; Brit. Fungi. 209. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 152. 1900—W.G.SMITH, Brit. Basid. 94. 1908—RICKEN, Blätterp. 451, pl. 112, f. 3. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 668. 1918—REA, Brit. Basid. 447. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 107, pl. 49. 1927—LANGE, Agar. Denm. 8:27. 1930; Fl. Agar. Dan. 2:69, pl. 64, f. A. 1936—PILÁT, Bull. Soc. Myc. Fr. 49: 281. 1933; Atl. Champ. Eur. 2, Pleurotus, n. 29, f. 29. 1935—BRESADOLA, Icon. Myc. 25:pl. 1247. 1933—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:95. 1938.

(佐々木，尾瀬ヶ原，552. 1954)

Dendrosarcus serotinus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):464. 1898.

Crepidotus serotinus MURR. Mycologia, 4:216. 1912; N. Am. Fl. 9:304. 1916.

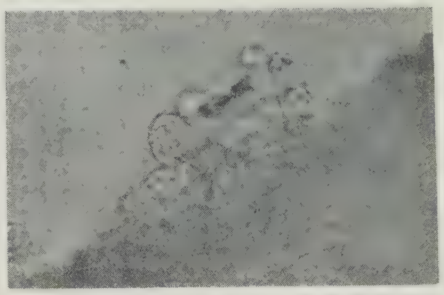
Acanthocystis serotinus R. MAIRE—KONR. et MAUBL. Icon. Sel. Fung. 6:364. 1937; Agaricales, 1:424. 1948.

Panellus serotinus KÜHN. et ROMAGN. Fl. Analyt. Champ. Super. 67. 1953.

子実体は畳生或は群生；傘は径 3—8cm，或は更に甚だ大形に至る，丸山形～扁平にて半円腎臓形或は類円形；表面は膠皮ありて湿時粘性，外皮は剝離し易し，種々の色を呈し，汚黄色，赤褐色，緑褐色或はオリーブ色等あり，屢々短き密毛に被わる，縁は初め内屈し，遂に反転す；肉は白色，柔軟，幼時むしろ緻密，厚く，味温和，臭よし；褶は垂生，帯白色にて黄土色或は渋色を帯ぶ，密，広幅，前方狭く，薄し；茎は甚だ短かく，1.5—3.5×1.5—4cm，側生，甚だ稀に偏心生，上端傘に移行す，帯黄色，微細綿毛或は細鱗片を被むり，時に帯黒或は帯褐色の鱗点を有す；胞子は腸詰形，屈曲，4—6×1—1.5μ；胞子紋は白色；嚢状体は紡錘形，帯黄色，長さ約 25μ；可食。



a



b



c

第 67 図　ムキタケ
Hohenbuehelia serotina
a．子実体　×1/2
b，c．分泌嚢体　×800
(大谷氏)

所在及産地

楡その他広葉樹幹上一秋

北海道，本州一欧．北米．濠．亜(小亜．西比)

和名　ムキタケ（剝茸）〔古名〕

Hohenbuehelia reniformis (FR.) SING.

ヒメムキタケ

SINGER, Agaricales, 255. 1949.

Pleurotus reniformis FR. Icon. Hymen. 1:pl. 89, f. 3. 1874; Hymen. Eur. 177. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:90. 1879—COOKE, Handb. Brit. Fungi,

ed. 2. 108. 1883; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 276, f. c. (no. 286). 1883—QUÉLET, Enchir. Fung. 149. 1886—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:376. 1893; Brit. Fungi, 210. 1911—SACCARDO, Syll. Fung. 5:365. 1887—W. G. SMITH, Brit. Basid. 94. 1908—REA, Brit. Basid. 448. 1922—PILÁT, Atl. Champ. Eur. 2, Pleurotus, n. 33, f. 30, 94–96, pl. 3, f. 1, 3, 23, 24. 1935.

Dendrosarcus reniformis O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):464. 1898.

Acanthocystis reniformis KÜHNER, Contr. Hymen. 1926—KONRAD & MAUBLANC Agaricales, 1:424. 1948.

(今関及土岐, 林. 試. 研. 報. 87:50, f. 1. 1956)

Geopetalum reniforme KÜHN. et ROMAGN. Fl. Analyt. Champ. Super. 69. 1953.

子実体は群生; 傘は幅 1. 2—1. 7cm, 幼時茎長くして匙形, のち杓子形; 表面は平滑, 帯褐鼠色, 微細絨状を呈す; 肉は白色, 薄し; 褶は垂生, 淡灰色, 密, 狭幅, 茎は側生, 0. 4—1. 2×0. 3—0. 8cm, 淡灰褐色, 基部に白毛あり; 胞子は白色, 楕円形, 有嘴, 平滑, 非糊性, 7—9. 5×3. 5—5μ; 嚢状体は多生, 紡錘形, 厚膜, 先端部に結晶の鞘を有す, 40—77×8. 5—14. 5μ; 傘嚢体は褶側嚢体より細長, 76—91×5—7μ, 棒状～長紡錘形, 結晶質の鞘を中央部まで深く被むり, 往々結晶により数本宛頭部に於て結着す; 肉は厚き膠層あり, その中を菌糸は垂直に平行に走る。

所 在 及 産 地

広葉樹(ポプラ)上—春 本州—欧

和 名 ヒメムキタケ (姫剝茸) 〔今関及土岐〕

(V) Panelleae SING. ワサビタケ族

SINGER, Agaricales, 256. 1949.

科の性に同じ; 子実体はヒラタケ (*Pleurotus*) 型; 質は多少強靱にて再生能あり; 通常一部膠質, 稀に膠質ならず; 胞子は小～中形, 円筒形, 腸詰形或は楕円形, 平滑, 糊性; 材上及び草本上に生ず; SINGER 氏 (1949) は 2 属を収む。

属 検 索 表

A. 托は蜂窩状; 主に熱帯産。

スズメタケ属 ***Dictyopanus*** (160)

B. 托は褶状; 主に温帯及び北帯産。

ワサビタケ属 ***Panellus*** (161)

Dictyopanus PAT.
スズメタケ属

PATOUILLARD, Ess. Tax. 137. 1900—SINGER, Agaricales, 256. 1949.

子実体はヒラタケ (*Pleurotus*) 型, サルノコシカケ(*Polyporus*)型; 傘の上表皮層及び孔の稜は著しき有突起菌糸を有し, 往々明かなる樹枝状糸状体構造を示す; 托は蜂窩状或は管孔状; 孔壁の実質は膠質或は非膠質にてその時は不規則に纒絡す; 担子柄は小～中形, 4 胞子; 褶側嚢体は欠如; 稜嚢体は著しく分化せず, 或は樹枝状糸状体構造によつて置換えらる; 小担子柄は紡錘形; 胞子紋は白色; 胞子は無色, 糊性, 平滑, 小～中形 (7. 5μ に及ぶ), 楕円形, 円壔状楕円形或は楕円状円筒形; 茎は側生なるも屢々一見偏心生, 比較的短く, 屢々只下部だけ分化し上方より認められず, 或は能く特立す; 肉の味は温和或は収斂性; 材上及び草本上に生ず, 熱帯産, 稀に温帯産, 約 2 種を知らる, 経済的価値なし。

(本属名は diktyon 〔希〕(網), Panus (属名) より出づ)

基準種 *D. pusillus* (LÉV.) SING.

〔附記〕 本属の托は蜂窩状を呈するがためにサルノコシカケ科に収むるもの多く, 現に本書に於ても已にこの基準種を *Favolus Rhipidium* var. *pusillus* として記載せしところなり, 今玆に改めて PATOUILLARD, SINGER 氏等に従つて分類せり。

本 邦 既 知 種 検 索 表

A. 材上生; 傘は大体径 6 mm 或はそれ以上に及ぶ; 管孔発光す。

a. 粘嚢体及び明かなる二叉糸状体を有す。

スズメタケモドキ ***D. gloeocystidiatus*** (160)

b. 粘嚢体及び二叉糸状体なし。

スズメタケ ***D. pusillus*** (161)

B. 葉上生; 甚だ小形にて径 1—2 mm; 菌糸及子実体発光す。

コノハスズメタケ ***D. follicolus*** (161)

Dictyopanus gloeocystidiatus CORNER
スズメタケモドキ

CORNER, Trans. Brit. Myc. Soc. 37:258, f. 1–2. 1954.

傘は径 6 mm に及び, 丸山形, のち扁平となる, 白色, 白堊状粉を有す; 茎は長さ及び厚さ 0. 5—1. 3 mm, 粉状; 管孔は長さ 0.5 mm に及び, 孔は径 70—

120μ，縁に於てやや長し，孔壁は厚さ 70—140μ; 胞子は類円筒形，鈍頭，殆ど糊性ならず，3.2—4×2—2.3μ; 担子柄は棍棒形，15—19×3.5—4μ，しかし幼時は針状；粘嚢体は長さ 60μ に及び，幅 3.5—4.5μ，稜嚢体，傘嚢体及茎嚢体と共に表生粉を作り，類円筒形，鈍頭或は先端に 1～2 の細片を有し，屡々上方に 1～2 隔膜あり，薄膜，褶側嚢体なし；二叉糸状体は表生粉内に存し，柄部は径 1.5—2.5μ，反覆類2叉し，先枝は径 0.5μ，密に錯綜し，枝は開張形，甚だ厚し，管孔は夜光を発つ。

所在及産地

材上　　八丈島

和名 スズメタケモドキ（擬雀茸）

〔因記〕 前記の記載はCORNER氏に従いたるものにて，氏は *D. pusillus* とは粘嚢体及明かなる二叉糸状体の存在により異なり，管孔の光ることは小林氏の *pusillus* の如し，但し小林氏の *pusillus* は多分この種なるべしと記せり。

Dictyopanus pusillus (LÉV.) SING.
スズメタケ

SINGER, Lloydia, 8:224. 1945; Agaricales, 257. 1949—DENNIS, Kew Bull. 326. 1952—CORNER, Trans. Brit. Myc. Soc. 37:258, f. 3. 1954.

Gloeoporus pusillus LÉV. Ann. Sci. Nat. III, 2:105. 1844.

Polyporus subpulverulentus BERK. et CURT. Jour. Linn. Soc. Bot. 10:306. 1869.

Favolus Rhipidium var. *subpulverulentus* SACC. Syll. Fung. 6:397. 1888.

Favolus Rhipidium f. *minor* P. HENN. Bot. Jahrb. 18, Beibl. 44:32. 1894.

Polyporus diminutus MASS. Jour. Bot. 39:153, pl. 357, f. 17-18. 1896.

Dictyopanus subpulverulentus PAT. Ess. Tax. 137. 1900.

Polyporus pusillus PERS. in LLOYD, Myc. Writ. 3. Polyp. Iss. 2:24, f. 260, E. 1909.

Polyporus Rhipidium var. *pusillus* LLOYD, in YASUDA, Bot. Mag. Tokyo, 34:194. 1920—KOBAYASI, Bull. Biogeogr. Soc. Jap. 7:3, pl. 2. 1937.

Polyporus Rhipidium f. *pusillus* S. ITO et IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:121. 1940.

Favolus Rhipidium var. *pusillus* IMAZ. Bull. Takyo Sci. Mus. 6:95. 1943—S. ITO, Myc. Fl. Jap. 2(4):324. 1955.

傘は径3—14mmにて其性状は已に前巻に記せり，茲にCORNER氏の記せる顕微鏡的性状を転載すれば次の如し。

"胞子は 3.5—3.7×2.3—2.8μ; 担子柄は 13—15×4.5—5μ，小柄は 4；稜嚢体は 40×4—6.5μ，類棍棒形，薄膜或は僅か厚く，上半部は短き単一或は僅か分岐せる突起（1—6×1—1.5μ）にむしろ密に被われ，時々短裂片となり，密に結晶を被むる；褶側嚢体なし；菌糸は幅 2—5.5μ，或ものは傘及茎中にて除々に膨大し 11μ に及び，菌絆を有す，単一菌糸型，膜は厚さ 1—4μ，不均一にて捩曲し，密に纒れ，太き或は細き菌糸がからまり，茎に縦に走る，多少粒状物に被われ，隔膜部は幅 2—4μ，膠質ならず；茎嚢体は稜嚢体の如く，弛き柵状となり，密に結晶を被むる；傘嚢体は稜嚢体の如きも，多くは病的にて屡々傾臥し，或は単に僅少の短片又は突起を有する菌糸端として認めらるるに過ぎず".

所在及産地

枯枝枯幹上　本州，四国，小笠原島一濠，中南米，南洋，亜（錫）

和名 スズメタケ（雀茸）〔安田〕

ヒナノウチワタケ（雛団扇茸）〔小林〕

Dictyopanus follicolus KOBAY.
コノハスズメタケ

KOBAYASI, Jour. Hattori Bot. Lab. 5:3, f. 1, B, f. 3. 1951.

傘は甚だ小形にて径 1—2mm，丸山形；表面は粉状，白色，縁は初め内捲し，のち真直；肉は膠状肉質，甚だ薄く，半透明，平滑或は乳房状，厚さ 45—90μ; 孔口は幾分放射状に列び，初め円形，のち伸長或は多角形；茎は中心生或は偏心生，屈曲，1—1.5×0.1mm，白色，無毛；傘は擬柔組織状，膠質層なし；孔の縁に無定形物あり；担子柄は 15—18×5μ，2稀に4胞子；胞子は卵形，平滑，無色，3—3.5×2μ; 褶側嚢体は棍棒形或は円筒形，径 6μ; 菌糸及子実体は発光す。

所在及産地

常緑広葉上一夏　　九州

和名 コノハスズメタケ（木葉雀茸）〔小林〕

〔因記〕 本属菌は褶側嚢体を欠如するものなるも本菌の原記載には前記の如くこれを存す，この点につきては更に一考を要す。

Panellus KARST.
ワサビタケ属

KARSTEN, Hattsv. 1:96. 1879—SINGER, Agaricales, 257. 1949.

Scytinotus KARSTEN, l. c. 97. 1879.

Urospora FAYOD, Ann. Sci. Nat. Bot. VII, 9: 338. 1889.

傘は稀に中心生（短き），屢々偏心生或は側生茎を有し，或は類坐生；上表皮層は糸状菌糸より成る，その菌糸は多少分岐し，或は単一にて分岐せず，往々螺旋状に捩曲す；胞子紋は白色或は類白色；胞子は無色，円筒形，平滑，通常小形，稀に中等大，屢々多少腸詰形；担子柄は凡ての点に於て正常，4胞子；嚢状体は欠如；稜嚢体は屢々存在するも，甚だ著しからず；茎は欠如，或は側生又は偏心生，屢々明かなる限界なき不規則に分岐せる子坐より生ず，又屢々直接着生材より生ず；肉は味温和或は収歛性，寧ろ強靱にて原位置に於て湿気によりて明かに再生す；肉は明かなる膠層を有す，菌糸は甚だ厚き膜を有す，すべて糊性にて菌絆あり；汎布，特に温帯に多く産す；約5種を知らる，傷部寄生し他病原菌と共同し樹木に害を与うるものあり。

（本属名は *Panus*（属名），ella（縮小詞より出づ）

基準種　*P. stypticus* (BULL. ex FR.) KARST.

本邦既知種　　ワサビタケ　***P. stypticus***　(162)

Panellus stypticus (BULL. ex FR.) KARST.

ワサビタケ

KARSTEN, Hattsv. 1:96. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 141. 1889—MURRILL, N. Am. Fl. 9:244. 1915—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1: 429. 1948—SINGER, Agaricales, 258. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 67, f. 114–115, 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:227, f. 78(1). 1957.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，30, pl. 11, f. 60. 1957）

Agaricus semipetiolatus SCHAEFF. Fung. Bavar. 4:Ind. 47, f. 208. 1774.

Agaricus stipticus BULL. Herb, Fr. pl. 140. 1782—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 481. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:188. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:515. 1844.

Crepidotus stypticus S.F.GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:616. 1821.

Panus stipticus FR. Epicr. Myc. 399. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2: 241. 1863; Hymen. Eur. 489. 1873—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 227. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:212. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:245. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7:pl. 1144, f. a (no. 1097). 1890; Handb. Austr. Fungi, 97. 1892—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:227. 1872; Enchir. Fung. 152. 1886—GILLET, Champ. Fr. 383, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:237. 1876—WINTER, Pilze, 1:495. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:622. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:309. 1893—W. G. SMITH, Brit. Basid. 312. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 51, pl. 51, f. 111. 1910—MURRILL, Mycologia, 3:105, pl. 40, f. 16. 1911—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):372, pl. 67, f. 3–5. 1912—RICKEN, Blätterp. 88, pl. 26, f. 3. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 48. 1918—REA, Brit. Basid. 535. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 126, pl. 61. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 11:pl. 521. 1929—MALKOVSKY, Ann. Myc. 30:29, f. 7. 1932—PILÁT, Bull. Soc. Myc. Fr. 49:286. 1933—LANGE, Fl. Agar. Dan. 2:75, pl. 67, f. A. 1936—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:149. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 103, pl. 25, f. 6. 1950.

（安田，植．雑．26:419. 1912—LLOYD, Myc. Writ. 5, Lett. 63:9. 1916—川村，日．菌．図説，n. 6. 1929; 食用菌及有毒菌，f. 40 (p. 33). 1931; 日．菌．図鑑，3:322, f. 317. 1954—松浦，茸類辞典，149, f. 172. 1933; 応用菌蕈学，f. 766（右）(p. 1143). 1941—小林，日．隠．植．図．527, pl. 254, f. 2. 1939—今関，原色きのこ，pl. 38（左）. 1942—原，日．菌．目．235. 1954—今関及七岐，林．試．研．報．67:46. 1954—佐々木，尾瀬ヶ原，552. 1954）

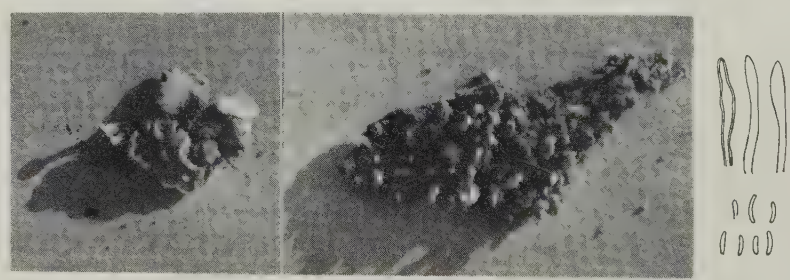
Lentinus stipticus SCHROETER, Pilze Schles. 1:554. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:224. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilz, 2(1):372, pl. 67, f. 3–5. 1912.

（安田，植．雑．30:395. 1916—白井，日．菌．目．ed. 2. 315. 1917; ed. 3. 183. 1927—原，日．菌．目．177. 1954）

Pocillaria stiptica O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):506. 1898.

Panus semipetiolatus SACC. Fl. Ital. Crypt. Hymen. 498. 1915.

子実体は群生或は叢生して畳生；傘は径 1—3 cm,



第68図　ワサビタケ Panellus stypticus
a, b. 子実体 ×1/2　　c. 嚢状体　　d. 胞子 ×800　　（大谷氏）

強靱，腎臓形にて丸山形，後方圧低されて急に細まる；表面は乾燥，種々の色を呈し，淡肉桂色或は木材色，褪色して帯白色となる，微細粉状鱗片を生ず，縁は内屈し，稀に波状；肉は白色～淡黄色，味は苦く収斂性，湿時再生；褶は帯黄色或は淡肉桂色，乾時暗色，密，甚だ狭細，薄く，脈にて連絡す；茎は短かく，2—4×2—4mm，側生，上方に拡がり，急に褶にて終り，傘の表面よりは明かならず，圧辺，斜上，粉状，灰色或は傘面と同色にて淡色，強靱，中実；胞子は狭円壔形，平滑，糊性，4—5×2—2.5μ；胞子紋は白色；稜嚢体は披針形，30—50×2.5—3.5μ；有毒と称せらる。

所在及産地

腐木及古切株上—夏秋

北海道，本州，九州—欧.北米.濠.亜(小亜.西比)

和名 ワサビタケ（山葵茸）〔川村〕

ヒメカワキタケ（姫皮黄茸）〔安田〕

(VI) Schizophylleae P. HENN. スエヒロタケ族

P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 221. 1900—SINGER, Agaricales, 259. 1949.

子実体はヒラタケ（*Pleurotus*）型；托は甚だ特異的のものにて褶は縦に托実質内に裂け入り各片は外側に開きて巻捲し，湿時は巻度少く乾時は著し；胞子紋は白色～帯ピンク色；胞子は無色，円筒形，腸詰形或は楕円形，非糊性；托実質は両側型或は逆型ならず；担子柄は正常；肉は寧ろ革質～類革質，湿時再生して強靱肉質となる，寧ろ薄し；菌糸は厚膜，非糊性，菌絆を有す；褶の裂開面に托実質菌糸の末端が毛状を呈す；材上及び生死の有機物上に生ず；只1属を含む。

Schizophyllum FR.
スエヒロタケ属

FRIES, Syst. Mycol. 1: 330. 1821—SINGER, Agaricales, 259. 1949.

Apus NEES ex S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1: 617. 1821.

Schizonia PERSOON, Myc. Eur. 3: 14. 1828.

Rhipidium WALLROTH, Fl. Crypt. Germ. 2: 742. 1833.

Hyponeuris PAULET ex EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5: 411. 1909.

族の性質と同じ；裸実；汎布，約6種を知らる，農林業に多少の害を与う。

（本属名はschizo〔希〕（裂ける），phyllon〔希〕（葉）より出ず）

基準種 *S. commune* FR.

本邦既知種 スエヒロタケ *S. commune* (163)

Schizophyllum commune FR.
スエヒロタケ

FRIES, Obs. Myc. 1: 103. 1915; Syst. Myc. 1: 330. 1821; Epicr. Myc. 403. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2: 244. 1863; Hymen. Eur. 492. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1: 444. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 228. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2: 213. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1: 247, f. 60. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7: pl. 1114, f. b (no. 1099). 1890; Handb. Austr. Fungi, 100. 1892—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1: 228. 1872; Enchir. Fung. 154. 1886—GILLET, Champ. Fr. 375, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1: 245. 1879—WINTER, Pilze, 1: 493. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 655. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2: 302. 1893; Brit. Fungi, 223, pl. 30, f. 3. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 151. 1900—W.G. SMITH, Brit. Basid. 314, f. 71. 1908—LLOYD, Myc. Writ. 3: 3, f. 213–215. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 49, pl. 49, f. 105. 1910—RICKEN, Blätterp. 90, pl. 26, f. 6. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 43. 1918—REA, Brit. Basid. 452. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 11: pl. 522. 1922—LINDER, Am. Jour. Bot. 20: 555, pl. 33, f. 3; pl. 34, f. 1; pl. 35, f. 1–6. 1933—LANGE, Agar. Denm. 11: 43. 1936; Fl. Agar. Dan. 5: 89, pl. 198, f. F. 1940—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 152. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1: 416. 1948—SINGER, Agaricales, 260. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 104, pl. 69, f. 3. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 63, f. 111. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2: 57, f. 78(3). 1957.

(MIQUEL, Prol. Fl. Jap. 392. 1867—大久保，植. 雑. 2: 1, pl. 1. 1888—白井，日. 菌. 目. 90, 1905; ed. 2. 599. 1917; ed. 3. 351. 1927—LLOYD, Myc. Writ. 3, Lett. 38: 10. 1911; 41: 2. 1912; 42: 13, 16. 1912; 63: 7. 1916; 65: 6. 1917; 68: 7. 1918; 69: 7. 1919; 7: 1296. 1924; 1345. 1925—KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 15, f. 4–7. 1915; 日. 菌. 図説, n. 74. 1929; 日. 菌. 図鑑, 3: 320, f. 316. 1954—梅村，富士. 植. 志. 372. 1923—北島，林. 試. 報. 28; pl. 5, f. 37–38; pl. 8, f. 26. 1928—MATSUURA & KANADA,

Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:114. 1931—笠井，鉄道大臣官房研究所，業務研究資料，20(9):1–19. 1932—松浦，茸類辞典，146, 149, f. 169-171. 1933; 応用菌蕈学，1140, f. 763–766. 1941—小林，日. 隠. 植. 図. 525, pl. 253, f. 1–8. 1939—S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:20. 1939—今関，植. 研. 雑. 17:184. 1941; 原色きのこ，pl.38(右). 1942—逸見，病虫. 雑. 29:66–71. 1942; 及赤井，木. 腐. 菌学，421, f. 222–223. 1945—千葉及寺本，東大. 演. 林. 報. 43:34. 1952—原，日. 菌. 目. 325. 1954—平田，青島綜合調. 報. 76. 1954—佐々木，尾瀬ヶ原，552. 1954—今関及本郷，原色日. 菌. 図鑑，30, f. 61, pl. 11, f. 61. 1957)

Agaricus alneus L. Sp. Pl. 2:1176. 1753—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, 2:pl. 183. 1799—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 485. 1801.

Apus alneus S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1: 617. 1821.

Schizonia vulgaris PERS. Myc. Eur. 3:14. 1828.

Schizophyllum alneum SCHROET. Pilze Schles. 1:533. 1889—O.KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):478, 516. 1898—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:221. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1):367. 1912—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 511. 1915—MURRILL, N. Am. Fl. 9:237. 1915.

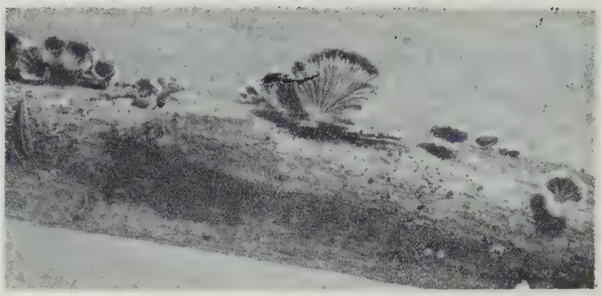
(P. HENNINGS, Bot. Jahrb. 28:270. 1901; 32: 40. 1903—松村，植. 名鑑，1:172. 1904—梅村，植. 雑. 26:153. 1912—安田，植. 雑. 26:20. 1912—中路，植. 雑. 30:102. 1916—沢田，台. 菌. 調. 報. 1:515. 1919)

Hyponevris alneus EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5:412. 1909.

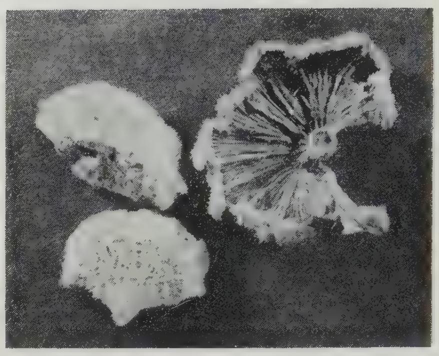
Schizophyllum vulgare LLOYD, Myc. Writ. 3, Lett. 29:4. 1910.

Schizophyllum commune var. *palmatum* (白井，日. 菌. 目. 90. 1905; ed. 2. 599. 1917; ed. 3. 351. 1927—原，日. 菌. 目. 351. 1954)

子実体は群生，叢生し，屢々畳生す；傘は径 1—3 cm，薄くして革質，扇形或は腎臓形，又は屢々裂片となる，基部狭細となり着生物に附着し或は全く坐生す，屢々懸垂す；表面は密なる軟毛或は剛毛に蔽われ，帯白色，灰色或は帯褐色，時に環紋あり，縁は初め内屈す；肉は帯白色或は帯褐色，甚だ乾性，乾燥後吸水し複原す；褶は着生点より放射状をなし，短褶を交ゆ，帯白色，灰色或は灰褐色，狭幅，各褶は湿時単一なるも乾時稜は縦裂し各片は反転する特性を有す，各裂開面即ち子実層なき面に長き剛毛を叢生す，各毛は単一，無色，厚膜にて外面に屢々粒を散布し，長さ 800—1400 μ に及ぶ；胞子は円壔形，斜嘴を有し，平滑，4—7.5×1.5—2 μ；胞子紋は白色；死物或は活物寄生性。



a



b

第 69 図 スエヒロタケ Schizophyllum commune
a. 子実体 ×1 b. 同 ×1.5 (大谷氏)

所在及産地

枯木及生幹上—全季 日本全土—温帯汎布

和名 スエヒロタケ (末広茸) 〔大久保〕

(VII) Lentineae FAYOD マツオオジタケ族

FAYOD, Ann. Sci. Nat. Bot. VII, 9:335. 1889. (ut *Lentinês*)—HEIM, Treb. Mus. Cienc. Nat. Barcelona, 15:88. 1934—IMAI, Jour. Fac. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:141. 1938—SINGER, Agaricales, 260. 1949.

Tricholomataceae subfam. *Pleurotoideae* SINGER, Ann. Mycol. 34:334. 1936.

Pleuroteae KÜHNER, Contr. 98. 1926 (ut *Pleurotés*)—IMAI, l. c. 92. 1938.

子実体は多少ヒラタケ (*Pleurotus*) 型，中心茎 (樹上生にて茎は屈曲或は不正形，又は不定的中心生)～坐生或は背着懸垂し，背着拡布するものなし；胞子は平滑，非糊性，薄膜～寧ろ薄膜，常に伸長 (幅の

2倍或はそれ以上），円筒形〜円筒状類腸詰形，或は円筒状楕円円壔形〜紡錘形；胞子紋は白色，クリーム，淡灰色或は帯ピンク灰色，又は薔薇色；担子柄は正常；嚢状体（多くは分泌嚢体）は往々存在；傘の表皮層は往々二叉糸状体構造によつて作らる；肉は厚膜菌糸を有す，非糊性，菌絆を有し，甚だ稀に之れを欠く；托実質は両側型或は逆型ならず；多くは樹上生なるも死植物上にも生ず，SINGER 氏（1949）は7属を収む。

本邦既知属検索表

A．表皮層には二叉糸状体状構造なし。

a．胞子紋は生時ピンク色，乾燥品にては白色に漂白さる；胞子は小形にて腸詰形；傘は吸水性の毛被に被わる。

キヒラタケ属 **Phyllotopsis** (165)

b．胞子紋はピンク色ならず；胞子は屡々小形なるも通常著しき腸詰形ならず；傘は屡々細軟毛を有するも吸水性ならず。

α. 肉の菌糸は永存的に薄膜，著しく且つ甚だ不規則に絡る；褶は垂生；茎は甚だ発達し，中心或は偏心生にて明かなる被膜を有す。

ヒラタケ属 **Pleurotus**（一部）(166)

β. 肉の菌糸は往々初め薄膜なるも速に厚膜となる；褶は垂生或は垂生ならず；茎は能く発達し或は欠如；被膜は屡々欠如，或は稀に存在。

I．托実質は完全に不整型にて子実下層は甚だ不明瞭にて殆どなし；分泌嚢体は存在或は欠如；托は脈状ならず。

カワキタケ属 **Panus** (170)

II．托実質は完全に不整型にて子実下層は能く分化し広層を作り，或は托実質は整型又は類整型；托は褶状，稀に脈状なれば分泌嚢体なし。

1．托実質は不整型；子実下層は能く分化し広し；傘は類白色，或は類灰色〜焦茶色，稀に青色，緑色，赤色，黄色或はライラック色；胞子紋は屡々淡灰色。

ヒラタケ属 **Pleurotus**（一部）(166)

2．托実質は充分不整型ならざるも，少くとも明かなる軸を有し，少くとも多くの菌糸は平行なり；子実下層は能く発達し，或は然らず；傘は銹色〜鈍褐色，蜜色，淡色，或は黄褐，稀に何等の色素なし。

マツオオジタケ属 **Lentinus** (174)

B．表皮層は二叉糸状体状構造を有す。

Asterotus (178)

Phyllotopsis (GILBERT et DONK, in PILÁT) SING.
キヒラタケ属

SINGER, Rev. Myc. 1:76. 1936; Agaricales, 263. 1949.

Pleurotus sect. *Phyllotopsis* GILBERT et DONK, in PILÁT, Atl. Champ. Eur. Pleurotus, 14–15: 169. 1935.

傘は吸水性の密なる毛被に被われ，毛被は湿時腊葉品にてもその色を復活す，無茎，通常側着；托は褶状；褶は白色ならず；胞子紋はピンク色，腊葉品にては白色に褪色す；胞子は無色，小形，円壔状腸詰形，非糊性，類平滑，薄膜；担子柄は全然正常，4胞子；嚢状体なし；若し稜嚢体が存在すれば小形，不顕著，糸状にて菌糸状なり；托実質は整〜類整型，類平行〜多少纒絡する菌糸より成り明かなる中軸配列を有す；子実下層は僅か分化し実質の細胞より小にて短くして実質のものより充分に分つ能わず；肉はむしろ厚く，肉状強靱；菌糸は非糊性にて多数の隔膜及菌絆を有す；材上生，温帯産，約2種を知らる，強力なる木材腐蝕を起す。

（本属名は phyllon〔希〕（葉），opsis〔希〕（類似）より出ず）

基準種 *P. nidulans* (PERS. ex FR.) SING.

本邦既知種 キヒラタケ ***P. nidulans*** (165)

Phyllotopsis nidulans (PERS. ex FR.) SING.
キヒラタケ

SINGER, Rev. Myc. 1:76. 1936; Ann. Myc. 34: 335. 1936; Agaricales, 264. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:416. 1948—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 63, f. 112. 1953.

Agaricus nidulans PERS. Ic. Descr. Fung. 19, pl. 6, f. 4. 1798; Syn. Meth. Fung. 482. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:189. 1821; Epicr. Myc. 136. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:253. 1857; Hymen. Eur. 178. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1: 514. 1844—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:97. 1876—WINTER, Pilze, 1:732. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:624. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:260. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):609. 1912.

（安田，植. 雑. 29:263. 1915）

Pleurotus nidulans GILL. Champ. Fr. 334. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:375. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 311. 1915—LLOYD, Myc. Writ. 3:440. 1909—RICKEN, Blätterp. 455, pl. 112, f. 6. 1915—BRESADOLA, Icon. Myc. 6:pl. 295, f. 2. 1928—PILÁT, Atl. Champ. Eur. 2, Pleurotus, n. 64, f. 57, 112, phot. 70–71. 1935—LANGE, Fl. Agar. Dan. 2:69, pl. 95, f. D. 1936; Agar. Denm. 12: 77. 1938.

(LLOYD, Myc. Writ. 4, Lett. 54:3. 1915—白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 467. 1917; ed. 3. 286. 1927—広江, 応用菌蕈学, 1183. 1941—原, 日. 菌. 目. 278. 1954)

Crepidotus nidulans QUÉL. Enchir. Fung. 108. 1886—REA, Brit. Basid. 454. 1922.

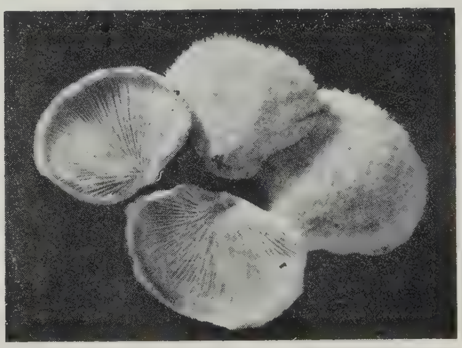
Dendrosarcus nidulans O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):464. 1898.

Panus nidulans PILÁT, Mykologia, 7:90. 1930—MALKOVSKY, Ann. Myc. 30:44, f. 13–16. 1932.

Claudopus? nidulans KARST. Hattsv. 1:288. 1879.

Claudopus nidulans PECK—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 149, f. 144. 1903—KAUFFMAN, Agar. Mich. 591, pl. 65. 1918—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 138, pl. 68. 1927.

子実体は群生或は畳生；傘は径 1—7 cm，無茎或は往々基部短茎状に狭細す，殆ど円形，半球形或は腎臓形；表面は吸水性，粗毛或は軟毛を被むり，或は縁の方鱗片状となる，鮮黄色或は軟皮色，縁は初め内捲し，平坦；肉は柔軟，むしろ強靱，臭は生時甚だ不快，味はのち温和となる；褶は直生或はやや垂生，橙黄色，中位の幅を有し，密～やや疎；茎は欠如或は傘の基部短茎状にて褶のところまで軟毛あり；胞子は長くして屈曲し，腸詰形，類平滑，非糊性，6—8×3—4 μ；胞子紋はピンク色。



a



b

第70図 キヒラタケ Phyllotopsis nidulans
a．子実体 ×1/2
b．胞子 ×450 （大谷氏）

所在及産地

広葉樹腐材上―夏秋 本州―欧．北米

和名 キヒラタケ（黄平茸）〔安田〕

Pleurotus (FR.) QUÉL. em. SING.

ヒラタケ属

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:62. 1872—SINGER, Agaricales, 264. 1949.

Agaricus trib. *Pleurotus* FRIES, Syst. Mycol. 1:178. 1821.

Crepidotus NEES ex S.F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:616. 1821.

Dendrosarcus PAULET (±1800) ex O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):462. 1898.

Lentodiopsis BUBÁK, Hedwigia, 43:169. 1904.

Lentodiellum MURRILL, Mycologia, 7:216. 1915.

色素は欠如或は存在し灰色～焦茶色，稀に青，緑，赤，黄或はライラック色；托は褶状；托実質は完全なる不整型，薄膜或は厚膜の菌糸より成る（初めの場合にはベール存在して分泌嚢体なく，次の場合には被膜存在或は欠如し分泌嚢体も存在或は欠如す）；胞子紋は純白色或はクリーム色，或は甚だ屢々淡灰色，胞子は無色，平滑，常に円筒形，寧ろ小～大形，甚だ薄く～寧ろ薄き，単一，非糊性の膜を有す；担子柄はすべての点に於て正常；分泌嚢体は屢々存在；棱嚢体は通常存在；子実下層は常によく発達分化して広く，不整型托実質より形の小なること又屢々その色により異なり，更にアルカリ液中にて僅か圧を加うれば各自分離す；茎は存在，稀に欠如，少くとも上方より見れば欠如坐生；肉は肉質～中位の強靱にて，湿気を与うれば再生に傾く，非糊性，菌糸は多数の菌絆を有す。樹上生，稀に他植物組織上に死或は活物寄生す；半被実或は擬被実；汎布，約 16 種を知らる，有価値の食用菌を含む。

（本属名はpleura〔希〕(側或は肋脈)，ous, otos〔希〕(耳)より出ず）

基準種 *P. ostreatus* (JACQ. ex FR.) QUÉL.

本邦既知種検索表

A．茎に早失性の被膜を存す；傘は明かに鱗片に被われ，鈍白～灰白色；托菌糸は薄膜。

ツバヒラタケ ***P. dryinus*** (167)

B．茎に被膜なし；傘面は無毛或は殆ど無毛；托菌糸は厚膜。

a．茎は明かなるも短かく，基部癒着し畳生す；傘は幼時帯青灰色～殆ど黒色，速に淡暗褐黄色となる，径 5—13 cm 或は以上。

ヒラタケ ***P. ostreatus*** (167)

b．茎は明かにて通常分岐す；傘は白黄色，レモン黄色或は帯白色，屢々灰色或は褐色を帯ぶ，

径 4—12cm。

タモギタケ ***P. cornucopiae*** (169)

Pleurotus dryinus (PERS. ex FR.) QUÉL.

ツバヒラタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:111. 1872; Enchir. Fung. 146. 1886—GILLET, Champ. Fr. 340. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:340. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:365. 1893; Brit. Fungi, 204. 1911—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 105, f. 109–110. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 91. 1908—RICKEN, Blätterp. 445. 1915—REA, Brit. Basid. 442. 1922—PILÁT, Atl. Champ. Eur. 2, Pleurotus, n. 35, f. 32. 1935—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:420. 1948—SINGER, Agaricales, 270. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 72. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:225, f. 180. 1957.

Agaricus dimidiatus SCHAEFF. Fung. Bavar. 4:Ind. 57, pl. 233. 1774.

Agaricus dryinus PERS. Syn. Meth. Fung. 478. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:180. 1821; Epicr. Myc. 129. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:237. 1857; Hymen. Eur. 167. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:517. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 134. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:45. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 226 (no. 269). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:92. 1876—WINTER, Pilze, 1:739. 1884.

Agaricus corticatus FR. Syst. Myc. 1:179. 1821; Epicr. Myc. 129. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:236. 1857; Hymen. Eur. 166. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:517. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:45. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 290 (no. 268). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:92. 1876—WINTER, Pilze, 1:739. 1884.

Pleurotus corticatus QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:111. 1872—GILLET, Champ. Fr. 339. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:339. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 317. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:364. 1893; Brit. Fungi, 204. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 91. 1908—RICKEN, Blätterp. 446, pl. 112, f. 5. 1915—REA, Brit. Basid. 441. 1922—LANGE, Agar. Denm. 8:25. 1830; Fl. Agar. Dan. 2:67, pl. 62, f. H. 1936—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 99, pl. 31, f. 2. 1950.

Armillaria corticata KARST. Hattsv. 1:22. 1879—SCHROETER, Pilze Schles. 1:668. 1889—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):694. 1912—KAUFFMAN, Agar. Mich. 655. 1918—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:50. 1938. (原, 日. 菌. 目. 20. 1954)

Armillaria dryina KARST. Hattsv. 1:23. 1879—KAUFFMAN, Agar. Mich. 654. 1918.

Armillaria dimidiata SCHROET. Pilze Schles. 1:667. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:269, 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):695. 1912.

Armillariella dryina KARST. Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 46. 1889—PATOUILLARD, Ess. Tax. 156. 1900.

Armillariella corticata KARST. Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 46. 1889—PATOUILLARD, Ess. Tax. 156. 1900.

Dendrosarcus dimidiatus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):463. 1898.

Pleurotus dimidiatus MURR. N. Am. Fl. 10:35. 1914—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 318. 1915.

子実体は孤生或は叢生; 傘は径 5—15cm, 或はそれ以上に及び, 半円形～類円形にて丸山形～扁平, 鈍頭或は圧低さる; 表面は乾燥, 鈍白色或は灰白色, 時に黄色を帯ぶ, 初め密なる灰色微細軟毛に被われ, のち外皮は鱗状片に裂け或は灰色～褐色の綿絮鱗片に密に被わる, 縁は初め内捲し, 縁膜片を有す; 肉は白色, 厚く, 緊緻, 臭は類穀粉様, 味温和; 褶は深く垂生, 茎上にて纒絡す, 白色, のち帯黄色, むしろ疎, やや広幅, 後方狭細, 稜は全縁或は僅か波状; 茎は偏生或は殆ど側生, 2—12×1—3cm, 往々頑丈にて短し, 同幅或は下方狭細, 白色或は黄色を帯び, 細密軟毛或は綿絮を被むり, 緊緻～剛直, 中実; 鍔は茎の頂部に近く存在し, 薄き綿絮膜状, 早失性; 胞子は円壔形, 有嘴, 平滑, 9—14×3.5—5μ; 胞子紋は白色; 可食。

所在及産地

林内腐木及幹上—夏秋

北海道—欧. 北米. 濠. 亜(西比)

和名 ツバヒラタケ（鍔平茸）〔今井〕

Pleurotus ostreatus (JACQ. ex FR.) QUÉL.

ヒラタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:112. 1872; Enchir. Fung. 148. 1886—GILLET, Champ. Fr. 346, c. ic. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:335. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 332. 1915—KARSTEN, Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 75. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:371. 1893; Brit. Fungi, 207, pl. 17, f. 6. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 152. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 104, f. 107. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 93. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 44, pl. 43, f. 93. 1910—RICKEN, Blätterp. 450, pl. 112, f. 1. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 663, pl. 142. 1918—REA, Brit. Basid. 445. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 104, pl. 48. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 6:pl. 290. 1928—LANGE, Agar. Denm. 8:25. 1930; Fl.

Agar. Dan. 2:68, pl. 63, f. c. 1936—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1:89. 1934—PILÁT, Bull. Soc. Myc. Fr. 49:280. 1933; 52:321. 1936; Atl. Champ. Eur. 2, Pleurotus, n. 36, f. 33. 1935 —IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:94. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:417. 1948—SINGER, Agaricales, 270. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 100, pl. 31, f. 1. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 72. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:221, pl. 26, f. 2. 1957.

(P. HENNINGS, Hedwigia, 39, Beibl. 156. 1900—白井, 日. 植. 図説, 1(下):pl. 3. 1900; 日. 菌. 目. 71. 1905; ed. 2. 467. 1917; ed. 3. 286. 1927; 植. 研. 雑. 5:284. 1928—松村, 植. 名鑑, 1:162. 1904—LLOYD, Myc. Writ. 4, Lett. 60:8. 1904—KAWAMURA, Illus. Jap. Fung. pl. 8, f. 1–2. 1913; 日. 菌. 図説, n. 184. 1929; 食用菌及有毒菌, 16, f. 17–18. 1931; 日. 菌. 図鑑, 4:407, f. 402. 1954—安田, 植. 雑. 28:389. 1914—中路, 植. 雑. 30:102. 1916—梅村, 富士.植.志. 370. 1923—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:116. 1931—松浦, 蕈類辞典, 25, f. 22–23. 1933; 応用菌蕈学, 439, 1183, f. 337–342, 344–345. 1941—小林, 日. 隠. 植. 図. 549, pl. 265, f. 1–4. 1939—S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:13. 1939—牧野, 日. 植. 図鑑, 1021, f. 3061. 1940—今関, 原色きのこ, pl. 36(左). 1942; 及土岐, 林. 試. 研. 報. 87:53. 1956—逸見及赤井, 木. 腐. 菌学, 430, f. 229–230. 1945—千葉及寺本, 東. 大. 演. 林. 報. 43:34. 1952—原, 日. 菌. 目. 278. 1954—平田, 青島綜. 調. 報. 78. 1954—佐々木, 尾瀬ヶ原, 552. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 31, f. 64, pl. 12, f. 64. 1957)

Agaricus ostreatus JACQ. Fl. Austr. 3:pl. 288. 1775—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 477. 1801—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, 3:pl. 241. 1803—FRIES, Syst. Myc. 1:182. 1821; Epicr. Myc. 133. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:245. 1857; Hymen. Eur. 173. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:516. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 135. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2: 158. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:48. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 195(no. 279). 1883; Handb. Austr. Fungi, 31. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:93. 1889—WINTER, Pilze, 1:735. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:649. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:260. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 654. 1912.

(安田, 植. 雑. 28:389. 1914)

Crepidopus ostreatus S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:616. 1821—MURRILL, N. Am. Fl. 9:304. 1916.

Agaricus subfunereus BERK. Jour. Linn. Soc. Bot. 16:50. 1878.

(松村, 植. 名鑑, 1:130. 1904—白井, 日. 菌. 目. 7. 1905)

Clitocybe ostreatus KARST. Hattsv. 1:87. 1879.

Agaricus parthenopeius COMES, Atti Soc. Crittog. Ital. 3:38, pl. 2. 1881.

Pleurotus columbinus QUÉL. in BRESADOLA, Fung. Trid. 1:10, pl. 6. 1881—SACCARDO, Syll. Fung. 5:357. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 330. 1915.

Pleurotus parthenopeius SACC. Syll. Fung. 5: 360. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 331. 1915.

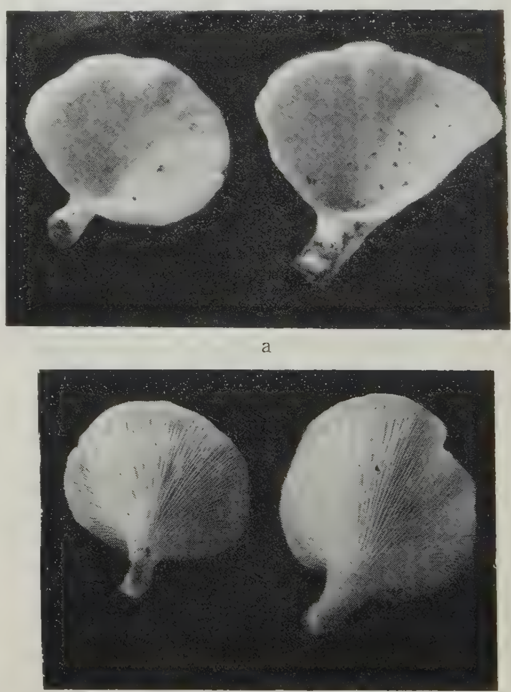
Pleurotus subfunereus SACC. Syll. Fung. 5: 373. 1887.

(白井, 日. 菌. 目. 71. 1905; ed. 2. 469. 1917; ed. 3. 286. 1927—原, 日. 菌. 目. 279. 1954)

Dendrosarcus ostreatus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):463. 1898.

Crepidopus subsapidus Murr. Mycologia, 4: 216. 1912.

子実体は叢生，畳生；傘は径 5—15 cm，或はそれ以上に及び，貝殻状，類半球形～長形にて丸山形～扁平或は圧低さる；表面は湿潤，幼時帯青灰色～殆ど黒色，速に淡暗褐黄色となり，老時黄色に移る，無毛或は微細鱗片に被わる，縁は薄く，平坦，内屈し，時にやや裂く；肉は白色，皮下帯灰色，柔軟，味及臭よし；褶は深く垂生，時に茎上にて纒絡する隆起線となる，白色，のち帯黄色～灰色となる，広幅，



a

b

第71図 ヒラタケ Pleurotus ostreatus
a．子実体表面　b．同裏面 ×1/3 （大谷氏）

むしろ疎，時に互に纒絡し，後方にて合流す；茎は1—4×1—2cm，側生，時に偏心生，短きか或は欠如，緊緻，屢々密軟毛或は基部に剛毛あり，帯白色，中実；胞子は円壔形，平滑，8—12×3—4μ；胞子紋は白色〜淡菫色；可食。

所在及産地

広葉樹，稀に針葉樹切株，枯幹上—春〜秋

本邦全土—汎布

和名 ヒラタケ（平茸）〔古名〕

アワビタケ（鮑茸）〔方言〕

Pleurotus cornucopiae (PAUL. ex PERS.) ROLL.

タモギタケ

ROLLAND, Atl. Champ. 45, pl. 44, f. 95. 1910—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 324. 1915—BRESADOLA, Icon. Myc. 6:pl. 288. 1928—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:93, pl. 3, f. 1. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:418. 1948—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 72, f. 124. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:222, f. 79(8), pl. 26, f. 1. 1957.

（今井，動. 植. 4:1131, f. 1–2. 1936—今関，原色きのこ, pl. 36（右）. 1942—原，日. 菌. 目. 278. 1954—川村，日. 菌. 図鑑，4:409, f. 404. 1954—今関及本郷，原色日. 菌. 図鑑，31, pl. 12, f. 65. 1957）

Dendrosarcos cornucopiae PAUL. Traite Champ. 2 : 119. pl. 28. 1793.

Agaricus cornucopiae PERS. Myc. Eur. 3:37. 1828.

Agaricus sapidus SCHULZ. in KALCHBRENNER, Icon. Hymen. Hung. pl. 8, f. 1. 1873—FRIES, Hymen. Eur. 171. 1874—WINTER, Pilze, 1:737. 1884—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):612. 1912.

Agaricus cornucopioides FR. Hymen. Eur. 172. 1874.

Pleurotus cornucopioides GILL. Champ. Fr. 345. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:348. 1887—RICKEN, Blätterp. 447. 1915.

（小林，日. 隠. 植. 図. 549, pl. 265, f. 5–6. 1939—千葉及寺本，東. 大. 演. 林. 報. 43:34. 1952—佐々木，尾瀬ヶ原，552. 1954）

Pleurotus ostreatus var. *cornucopiae* QUÉL. Enchir. Fung. 148. 1886.

Pleurotus sapidus SACC. Syll. 5:348. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:370. 1893; Brit. Fungi, 207. 1911—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 104, f. 108. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 92. 1908—KAUFFMAN, Agar. Mich. 665. 1918—REA, Brit. Basid. 444. 1922—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 100, pl. 30, f. 2. 1950.

（梅村，富士. 植. 志. 369. 1927—白井，日. 菌. 目. ed. 3. 286. 1927—原，日. 菌. 目. 279. 1954）

Dendrosarcus cornucopioides O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):463. 1898.

子実体は叢生，畳生；傘は径4—12cm，茎の位置により形状変化し，正形〜偏心形或は半円形となり，丸山形〜扁平，更に圧低され，往々漏斗形となる；表面は白黄色，レモン黄色或は帯白色にて屢々灰色



第72図　タモギタケ Pleurotus cornucopiae ×1/3　（大谷氏）

或は褐色を帯ぶ，無毛，平滑，稀に白短毛を存す，縁は波状にて往々裂く；肉はむしろ薄く，白色，緊緻，味温和，臭は類穀粉様；褶は深く垂生，往々茎部に溝状の観を呈し，その基部に於て稀に纒絡す，白色或は帯白色，やや疎，広幅；茎は偏心生，側生或は殆ど無茎，2—10×0.5—1.5cm，やや同幅或は上方に狭細し傘に移行す，白色或は帯黄色，子実体叢を生ずる肉塊より分岐し，屈曲或は真直，斜上す，全然無毛或は基部僅か有毛，緊緻，中実；胞子は狭円壔形，平滑，8—19×4—4.5μ；胞子紋は淡菫色；可食。

所在及産地

ニレ等広葉樹切株及枯幹上—夏秋

北海道，本州—欧. 北米. 亜（支. 小亜. 西比）

和名 タモギタケ（榆木茸）〔今井〕

（ニレタケ，ヒメヒラタケ，ワカイ等の名あり）

〔**因記**〕 本菌は記載上の字句より見れば前種ヒラタケとは明かに異種なるが如く見ゆるも，已に川村氏が其著日本菌類図鑑(4:409. 1954)に"本菌（タモギタケ）の胞子は顕微鏡下に透過光線に依れば無色であるが多数粉状に堆積せるものは肉眼にて白色に見える。併しながら本菌の胞子は之を白紙上に落下堆積せしめたる後時間を経て淡紫色を帯ぶるに至る性質がある。ヒラタケでも幾分此傾向はあるが本菌はこれが特に顕著に認められる。往々ヒラタケと区別し難い形質を現わせることがあつても胞子の此性質で区別し得られる程である"と記せる如く実物に於て往々区別し難き場合あり。多くの菌学者は別種と

なし居るもSINGER氏はヒラタケの異名となしたり，本書に於ては暫く之を別種とし後来の研究を俟つこととせり。

疑 問 種

Pleurotus alopecius (BERK. et CURT.) SACC. Syll. Fung. 5:345. 1887—S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:12. 1939. (松村, 植. 名鑑, 1:162. 1904—白井, 日. 菌. 目. 70. 1905; ed. 2. 465. 1917; ed. 3. 285. 1927—原, 日. 菌. 目. 278. 1954) = *Agaricus alopecius* BERK. et CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4:115. 1858. ムニンヒメヒラタケ. 小笠原島

P. cyatheae S. ITO et IMAI, l. c. 13. 1939. ヘゴシロカタハ. 小笠原島

P. guepiniiformis (BERK.) SACC. l. c. 5:382. 1887. (白井, l. c. 70. 1905; ed. 2. 467. 1917; ed. 3. 285. 1927—原, l. c. 278. 1954) = *Agaricus guepiniiformis* BERK. Linn. Soc. Jour. Bot. 14:50. 1878. (松村, l. c. 130. 1904—白井, l. c. ed. 2. 31. 1917—原, 日. 菌. 目. 9. 1954)

P. leiophyllus (BERK. et CURT.) SACC. l. c. 5: 371. 1887. (松村, l. c. 162. 1904—白井, l. c. 70. 1905; ed. 2. 467. 1917; ed. 3. 285. 1927—原, l. c. 278. 1954) = *Agaricus leiophyllus* BERK. et CURT. l. c. 115. 1858. 小笠原島

P. limpidus (安田, 植. 雑. 36:228. 1922—白井, l. c. ed. 3. 286. 1927—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:116. 1931—松浦, 茸類辞典, 154, f. 182. 1933; 応用菌蕈学, 1183, f. 343, 797. 1941—原, l. c. 278. 1954) ヒメヒラタケ. 本州, 九州

P. lividulus (BERK. et CURT.) SACC. l. c. 5:376. 1887—S. ITO & IMAI, l. c. 12. 1939. (松村, l. c. 162. 1904—白井, l. c. 70. 1905; ed. 2. 467. 1917; ed. 3. 285. 1927—原, l. c. 278. 1954) = *Agaricus lividulus* BERK. et CURT. l. c. 115. 1858. オガサワラヒメカタハ. 小笠原島

P. minutonigrus LLOYD, in STEVENSON & CASH, New Fung. Names Lloyd, 153. 1936. (LLOYD, Myc. Writ. 7:1345. 1925)

P. pulchellus IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 53:395. 1939. (原, l. c. 279. 1954) ケンボウカタハ. 北海道

P. russaticeps (BERK.) SACC. l. c. 9:48. 1891. (白井, l. c. 71. 1905; ed. 2. 469. 1917; ed. 286. 1927—原, l. c. 279. 1954) = *Agaricus russaticeps* BERK. in COOKE, Grev. 16:106. 1888. (松村, l. c. 130. 1904—白井, l. c. ed. 2. 33. 1917; ed. 3. 13. 1927)

P. squamula (BERK. et CURT.) SACC. l. c. 5: 381. 1887. (松村, l. c. 162. 1904—白井, l.c. 71. 1905; ed. 2. 469. 1917; ed. 3. 286. 1927—原, l. c. 279. 1954) = *Agaricus squamula* BERK. et CURT. l. c. 115. 1858. 小笠原島

Pleurotus griseus

(安田, 植. 雑. 31:198. 1917—白井, l. c. ed. 3. 285. 1927—広江, 応用菌蕈学, 1182. 1941—原, l. c. 278. 1954) ツメタケ. 四国

Pleurotus Harmandi HAR. et PAT. Bull. Mus. Hist. Nat. 2:131. 1902—SACCARDO, Syll. Fung. 17:25. 1905. (白井, l. c. ed. 2. 467. 1917; ed. 3. 285. 1927—原, l. c. 278. 1954) 東京

Panus FR. em. SING.
カワキタケ属

FRIES, Epicr. Mycol. 396. 1838—SINGER, Agaricales, 273. 1949.

Pleuropus (PERS.) ex S.F.GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:615. 1821.

Scleroma FRIES, Epicr. Mycol. 387. 1838.

Pocillaria B. BROWNE (1756) ex O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2:865. 1898.

Lentodium MORGAN, Jour. Cinn. Soc. Nat. Hist. 18:36. 1895.

Lentinopanus PILÁT, Ann. Mycol. 39:73. 1941.

子実体はヒラタケ (*Pleurotus*) 型なるも屢々中心茎を有す，但しその際は肉甚だ強靱にて再生能を有し且つ樹上生なるによりて他のヒラタケ型ならざる諸属より区別するを得；色素は存在するもライラック色のもの以外は通常鮮色ならず；托は褶状；褶は若し茎あるものならば垂生す；托実質は完全に不整型，厚膜菌糸より成る；胞子紋は白色；胞子は無色，平滑，非糊性，常に円筒形，寧ろ小形〜中形（多くは長さ 8μ 以下），甚だ薄き〜寧ろ薄き単一膜を有す；担子柄はすべての点に於て正常；分泌嚢体は屢々存在し，先端通常鈍頭にて寧ろ短く，甚だ厚き膜を有し，多くは中位に多数なり；子実下層は甚だ僅か発達し，殆ど認められず；稜は不斉分裂–細牙歯–鈍鋸歯状或は全縁；茎は存在，稀に欠如し坐生；肉は甚だ強靱にて湿気によりて再生す；菌絆は多数に存在す；樹上生；裸実，半被実；汎布，約8種を知らる，木材腐蝕菌。

（本属名は C. PLINIUS 氏が牧場の神 Pan により木生菌に与えたる名称）

基準種 *P. conchatus* (BULL. ex FR.) FR.

本邦既知種検索表

A. 褶稜は常に全縁

a. 傘は径 2—8 cm, 粗剛毛を被むり，淡肉菫色，淡黄褐灰色〜赭褐色。

アラゲカワキタケ ***P. rudis*** (171)

b. 傘は径 5—10 cm, 幼時繊細毛あるも速に無毛となり，帯菫葡萄色，淡黄褐肉色，茶褐色。

カワキタケ ***P. conchatus*** (172)

B. 褶稜は鋸歯状；傘は径 3—8 cm, 白色〜クリー

ム色にて黒褐色の鱗片を豹紋状に附く。

ケガワタケ **P. tigrinus** (173)

○附．不完全記載種

アシブトカワキタケ **P. japonicus** (173)

Panus rudis FR.

アラゲカワキタケ

FRIES, Epicr. Myc. 398. 1838; Hymen. Eur. 489. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:226, pl. 14, f. 1. 1872—GILLET, Champ. Fr. 383. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:96. 1876—WINTER, Pilze, 1:496. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:616. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 500. 1915—MASSEE, Brit. Fungi, 221. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 135. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 312. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):373. 1912—RICKEN, Blätterp. 88, pl. 26, f. 4. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 48, pl. 5. 1918—REA, Brit. Basid. 535. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 11:pl. 519. 1929—MALKOVSKY, Ann. Myc. 30:36, f. 9, pl. 1–2. 1932—PILÁT, Bull. Soc. Myc. Fr. 49:286. 1933—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:148. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:429. 1948—SINGER, Agaricales, 275. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 70, f. 123. 1953.

(安田，植．雑．27:305. 1913—松浦，蕈類辞典，201, f. 238. 1933—松浦，日．植．病．報．3:105. 1934—今関，植．研．雑．17:184. 1941; 原色きのこ，pl. 38(中). 1942—逸見及赤井，木．腐．菌学, 426, f. 225. 1945—原，日．菌．目．235. 1954—川村，日．菌．図鑑，3:323, f. 318. 1954—佐々木，尾瀬ヶ原，552. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，30, f. 62, pl. 11, f. 62. 1957)

Agaricus crinitus SCHW. Schr. Nat. Ges. Leipzig, 1:89. 1822.

Lentinus Lecomtei FR. Syst. Orb. Veg. 1:77. 1825—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 135. 1903.

Lentinus strigosus FR. l. c. 77. 1825—MURRILL, N. Am. Fl. 9:292. 1915—SACCARDO, Syll. Fung. 5:573. 1887.

(LLOYD, Myc. Writ. 4, Lett. 60:6. 1915; 61:5. 1916; 65:5. 1917—堀川，台．博．学．報．37:136. 1918—沢田，台．菌．調．報．5:87. 1931)

Agaricus hirtus SECR. Myc. Suec. no. 1073. 1833.

Lentinus chaetophorus LÉV. Ann. Sci. Nat. Bot. III, 2:177. 1844—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 578. 1887.

? *Panus levis* BERK. et CURT. Ann. Mag. Nat. Hist. II, 12:427. 1853—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 620. 1887.

Lentinus sparsibarbis BERK. et CURT. Jour. Linn. Soc. Bot. 10:301. 1863.

Panus hirtus QUÉL. Enchir. Fung. 152. 1886.

Pocillaria rudis O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2): 506. 1898.

Lentinus substrigosus P. HENN. et SHIRAI, Bot. Jahrb. 28:270. 1900—SACCARDO, Syll. Fung. 16: 64. 1902.

(白井，日．菌．目．46. 1905; ed. 2. 315. 1917; ed. 3. 184. 1927—原，日．菌．目．177. 1954)

Lentinus rudis P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:224. 1900; Bot. Jahrb. 32: 40. 1902.

(松村，植．名鑑，1:150. 1904—白井，日．菌．目．46. 1905; ed. 2. 313. 1917; ed. 3. 183. 1927—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:114. 1931—原，日．菌．目．177. 1954)

子実体は群生或は叢生；傘は径 2—8 cm，茎の着生状によつて形状変化し，丸山形，洋盃形或は漏斗形，又は扇形等となる，何れも茎に近き部分は圧低さる；表面は絨毛或は粗剛毛を密生し，淡肉菫色，淡黄褐灰色～赭褐色，周辺に毛茸密生す，縁は僅か



第 73 図　アラゲカワキタケ
Panus rudis ×1/3
(大氏谷)

内屈し，或はやや開平す，乾時褪色し形質を著しく変ず；肉は甚だ薄く初め柔軟，のち革質，乾時木栓質となる，味温和，時に僅か苦し，臭なし；褶は垂生，白色にて微紅色を帯び，のち淡黄褐色となる，密，狭幅，稜は殆ど全縁，纏絡せず；茎は短かく，偏心生，時に欠如，1—3×0.2—0.7 cm，淡黄褐色，粗剛毛を密生し，屢々淡青紫色を帯ぶ，強靱，中実；胞子は円壔状棍棒形，僅か屈曲し，平滑，6—8×3—4 μ；胞子紋は白色；稜嚢体は棍棒形或は頭状，厚膜，45—50×10—13 μ；可食。

所在及産地

広葉樹切株，枯枝幹上—夏秋

北海道,本州,九州—欧.北米.阿.亜(支.小亜.西北)
和名 アラゲカワキタケ(荒毛乾茸)〔安田〕

Panus conchatus (BULL. ex FR.) FR.
カワキタケ

FRIES, Epicr. Myc. 398. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:240. 1863; Hymen. Eur. 488. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 227. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:244. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7:pl. 1149, f. a (no. 1096). 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:226. 1872; Enchir. Fung. 152. 1886—GILLET, Champ. Fr. 384. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:236. 1876; Hattsv. 1:96. 1879—WINTER, Pilze, 1:496. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:615. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:308. 1893; Brit. Fungi, 220. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 135. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 311. 1908—RICKEN, Blätterp. 89. 1915—REA, Brit. Basid. 535. 1922—LANGE, Agar. Denm. 9:41. 1933; Fl. Agar. Dan. 2:75, pl. 67, f. D. 1936—PILÁT, Atl. Champ. Eur. 2, Pleurotus, 159, pl. 67–68, f. 54. 1935—SINGER, Agaricales, 275. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 70, f. 122. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:226. 1957.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 31, pl. 12, f. 63. 1957)

Agaricus flabelliformis SCHAEFF. Icon. Fung. 4:20, pl. 43. 1774. (non BOLTON)

Agaricus carneotomentosus BATSCH, Elench. Fung. 90, pl. 8, f. 33. 1783.

Agaricus conchatus BULL. Herb. Fr. pl. 298. 1786—FRIES, Obs. Myc. 2:224. 1818; Syst. Myc. 1:181. 1821; Elench. Fung. 1:23. 1828—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:515. 1844.

Agaricus torulosus PERS. Syn. Meth. Fung. 475. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:181. 1821.

Agaricus inconstans PERS. Syn. Meth. Fung. 475. 1801; Myc. Eur. 3:45. 1828—FRIES, Syst. Myc. 1:181. 1821.

Agaricus fornicatus * *torulosus* PERS. Myc. Eur. 3:44. 1828.

Panus torulosus FR. Epicr. Myc. 397. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:240. 1863; Hymen. Eur. 489. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 226. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:244. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7:pl. 1149, f. b (no. 1096). 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:226. 1872; Elench. Fung. 152. 1886—GILLET, Champ. Fr. 383, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:236. 1876; Hattsv. 1:96. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 141. 1889—WINTER, Pilze, 1:496. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:615. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:308. 1893; Brit. Basid. 220, pl. 18, f. 5. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 135. 1900—W.G.SMITH, Brit. Basid. 311, f. 63. 1908—KAUFFMAN, Agar. Mich. 47. 1918—REA, Brit. Basid. 535. 1922—LANGE, Agar. Denm. 9:40. 1933; Fl. Agar. Dan. 2:75, pl. 67, f. c. 1936—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4:pl. 310. 1937; Agaricales, 1:428. 1948—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 103, pl. 25, f. 5. 1950.

(松村, 植. 名鑑, 1:157. 1904—白井, 日. 菌. 目. 61. 1905; ed. 2. 405. 1917—今関, 植. 研. 雑. 17:184. 1941—川村, 日. 菌. 図鑑, 3:324, f. 319. 1954—原, 日. 菌. 目. 235. 1954)

Panus flabelliformis QUÉL. Fl. Myc. 325. 1888—BRESADOLA, Ann. Myc. 1:69. 1903; Icon. Myc. 11:pl. 520. 1929—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 500. 1915—MALKOVSKY, Ann. Myc. 30:22. f. 1–6. 1932.

(松浦, 茸類辞典, 150, f. 174–175. 1933—今関, 原色きのこ, pl. 37 (左). 1942)

Lentinus carneotomentosus SCHROET. Pilze Schles. 1:554. 1889—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1):372. 1912.

(白井, 日. 菌. 目. ed. 3. 183. 1927—原, 日. 菌. 目. 176. 1954)

Lentinus conchatus SCHROET. Pilze Schles. 1:555. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:224. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1):373, pl. 67, f. 6–7. 1912.

(三宅, 蚕. 試. 報. 1(5):336. 1916—白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 313. 1917; ed. 3. 183. 1927—原, 日. 菌. 目. 176. 1954)

Pocillaria Krombholzii O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):506. 1898.

Lentinus torulosus LLOYD. Myc. Writ. 4, Lett. 47:13. 1913; STEVENSON & CASH, New Fung. Names Lloyd, 152. 1936.

(LLOYD, Myc. Writ. 7:1296. 1924)

Panus carneotomentosus RICKEN, Blätterp. 88. 1915—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 501. 1915.

(安田, 植. 雑. 36:83. 1922—広江, 応用菌蕈学, 1142. 1941)

Panus torulosus var. *conchatus* KAUFFM. Agar. Mich. 47. 1918.

Pleurotus conchatus PILÁT, Atl. Champ. Eur. 2, Pleurotus, n. 60, f. 54. 1935.

子実体は叢生; 傘は径 5—10 cm, 初め肉質, のち強靱, 初め扁平, 速に漏斗形, 稀に貝殻状となる; 表面は幼時繊細の毛あるも速に無毛となり, 往々粗豪となり或は僅か環紋を生ず, 色は変化に富み, 初め帯菫葡萄色, 淡黄褐肉色, 茶褐色等を呈し, 老時褪色し, 帯褐黄土色となる, 縁は薄く, 初め淡菫色にて粉絨状, のち稀に線条を生ず; 肉は白色, 初め強靱, のち革状栓質となる, 味温和, 臭不良ならず; 褶は深く垂生, 淡色〜菫赤色, のち黄土色, 密或は

やや疎，狭幅，単一，稀に叉状，茎上にて往々纏絡す，稜は平坦；茎は短く，2—3×1—3cm，偏心生，時に側生，菫色或は灰色の軟毛に被わる，強靱，中実；胞子は卵状楕円形，平滑，非糊性，6—7×3—3.5μ；胞子紋は白色；嚢状体は夥生，円筒形，棍棒形或は紡錘形，無色，36—50×8—15μ。

所在及産地

広葉樹腐株，材幹上—夏秋

本州—欧．北米．濠．南洋

和名 カワキタケ（乾茸）〔安田〕

カワキジョウゴタケ（乾漏斗茸）〔川村〕

Panus tigrinus (BULL. ex FR.) SING.

ケガワタケ

SINGER, Agaricales, 275. 1949.

Agaricus tigrinus BULL. Herb. Fr. pl. 70. 1781—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, pl. 68. 1797—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 458. 1801; Myc. Eur. 3:53. 1828—DECANDOLLE, Fl. Fr. 2:169. 1815—FRIES, Syst. Myc. 1:176. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:518. 1844.

Omphalia tigrina S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:613. 1821.

Lentinus tigrinus FR. Epicr. Myc. 389. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:233. 1863; Hymen. Eur. 481. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 224. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:241. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7: pl. 1138, 1139, f. a (no. 1089, 1090). 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:225, pl, 13, f. 8. 1872; Enchir. Fung. 150. 1886—GILLET, Champ. Fr. 380, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:245. 1879—WINTER, Pilze, 1:501, f. 1–2 (p. 488). 1844—SACCARDO, Syll. Fung. 5:580. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 492. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1:556. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2: 312. 1893; Brit. Fungi, 218. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:226. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 136. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 308. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1):377, pl. 68 B, f. 1–2. 1912—RICKEN, Blätterp. 83, pl. 26, f. 2. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 51. 1918—REA, Brit. Basid. 537. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 11: pl. 509. 1929—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4: pl. 312. 1937; Agaricales, 1:431. 1948—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 71, f. 75. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:231. 1957.

(KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 10, f. 16–18. 1914; 日．菌．図説，n. 24. 1929; 日．菌．図鑑，3: 327, f. 320. 1954—白井，日．菌．目．ed. 2. 315. 1917; ed. 3. 184. 1927—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:114. 1931—原，日．菌．目．117. 1954—平田，青島綜合調．報．78. 1954)

Lentodium squamulosum MORG. Jour. Cinc. Soc. Nat. Hist. 18:36. 1895.

Lentodium tigrinum EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5:434. 1909—MURRILL, N. Am. Fl. 9:296. 1915.

子実体は群生，叢生；傘は径 3—8cm，肉革質，初め球状，のち丸山形～扁平にて中窩を存す；表面は白色～クリーム色にて黒褐色の毛状鱗片を全面に散生し，豹紋の如く，中央に於て各鱗片は密集す，縁は下屈し，遂に波状となり屢々裂く；肉は薄く，白色，臭は穀粉様，味温和；褶は垂生，白色にてやや黄色を帯び，密，幾分狭幅，稜は初め僅か，のち深き鋸歯状をなす；茎は 3—5×0.5—1.5cm，中心生～偏心生，同幅，屢々屈曲，白色，基部褐色，微細鱗片あり，緊緻，中実；初め纖細の白色ベールあるも早失す；胞子は円壔形にて僅か屈曲し，平滑，6—8×2.5—3μ；胞子粉は白色。

所在及産地

広葉樹枯木上—春～秋　本州，九州—欧．北米．濠

和名 ケガワタケ（毛皮茸）〔川村〕

Panus japonicus YAS.

アシブトカワキタケ

YASUDA, Bot. Mag. Tokyo, 35:239. 1921; 36: 89, f. 1–2. 1922.

(LLOYD, Myc. Writ. 5, Lett. 66:7. 1917; 7: 1162. 1922—広江，応用菌蕈学，1141. 1941)

Lentinus japonicus YAS. l. c. 36:89. 1922.

(白井，日．菌．目．ed. 3. 183. 1927—原，日．菌．目．176. 1954)

子実体は叢生，偏心茎を有し，肉状革質，乾時硬化す；傘は径 0.5—1cm，外囲円形，扁平にて丸山形，中央圧低，薄し；表面は黄褐色を帯び，小形の糠状鱗片を被むり，無環紋，縁は内捲す；肉は同色；褶は狭生，黄褐色，密，狭幅，稜は全縁にて糠状鱗片を有す；茎は 1—3×0.07—0.15cm，円筒形，基部肥大し根状となり褐色の密毛を帯ぶ，径 1.5—3mm；胞子は楕円形，平滑，淡黄色，5×2.5μ；嚢状体なし。

所在及産地

腐材上—秋　本州

和名 アシブトカワキタケ（足太乾茸）〔安田〕

〔因記〕 前記々載は安田氏に従う。本菌に就て後来の研究を要す。

疑問種

Panus tahitensis

(LLOYD, Myc. Writ. 6, Lett. 67:11. 1918; 68: 8. 1918; 7:1128. 1922)

Lentinus FR. em. SING.
マツオオジタケ属

FRIES, Syst. Orb. Veg. 1:77. 1825; Elench. Fung. 1:45. 1829—SINGER, Agaricales, 276. 1949.
Lentinula EARLE, Bull. N.Y. Bot. Gard. 9:416. 1909.

性質前属の如し；色素は存在するも屢々傘の鱗片にのみ存し，並びに，或は老時乾燥せる子実体に表わる，渋色，黄褐色，栗色，帯褐淡黄色等；托は通常褶状，例外的に歯牙状，或は直生又は垂生せる褶間に著しく纒絡じ網目となることあり；稜は細牙歯，不斉分裂，鈍鋸歯，或は細鋸歯を有す，少くとも老時に於て明かなり；托実質は完全なる不整型ならず，幼品にては整型～類整型，其菌糸は類平行或は纒絡するも常に明かに軸を有す，多くは初め薄膜なるも一様に少くとも多くのものは厚膜となる（膜の厚さ 1μ 或は以上）；担子柄はすべての点に於て正常；胞子紋は白色，胞子は無色，平滑，非糊性，楕円状円壔形～円筒形，或は紡錘形，小～大形，甚だ薄き～寧ろ薄き単一膜を有す；分泌嚢体は欠如或は存在し，中位の厚膜を有し，先端鈍頭，多くの場合かなり抽出す；子実下層は甚だ貧弱の発達なるか或は多少分化す；茎は常に存在し，中心生～著しき偏心生；被膜往々存在す；肉は肉質，速に寧ろ強靭となり，原位置にて湿潤により再生す；菌糸は少くとも一部厚膜，非糊性，菌絆を有す；材上及び埋木上に生ず，汎布，約8種を知らる，食用菌，樹木，用材の害菌あり。

（本属名は lentus〔羅〕（柔靭の）より出ず）
基準種 *L. lepideus* FR.

本邦既知種検索表

A. 分泌嚢体を有し，傘面，茎及褶稜に樹脂を分泌す；傘面は粉絨状，のち粘質，傘は径 3.5—6 cm，帯白，黄土色，のち帯黒黄褐色；胞子は円筒状，6—8(10)×2.5—3(4)μ。
ナミハタケ **L. adhaerens** (174)

B. 分泌嚢体なし；傘面は暗色大鱗片に被わる。
a. 胞子は 8—15×3.5—5.5μ；傘は大形，径 5—15 cm。 マツオオジ **L. lepideus** (175)
b. 胞子は 6—7×3.5—4μ；傘は通常中形，4—10 cm。 シイタケ **L. edodes** (176)

Lentinus adhaerens (ALB. et SCHW. ex FR.) FR.
ナミハタケ

FRIES, Epicr. Myc. 391. 1838; Hymen. Eur. 483. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 225. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:242. 1871—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 3:441. 1875; Enchir. Fung. 151. 1886—WINTER, Pilze, 1:499. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:589. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 492. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1: 555. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:315. 1893; Brit. Fungi, 219. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:225. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 309. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1):376. 1912—RICKEN, Blätterp. 84. 1915—REA, Brit. Basid. 538. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 11:pl.512. 1929—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4:pl. 314. 1937; Agaricales, 1:433. 1948—PILÁT, Ann. Myc. 39: 73. 1941; Atl. Champ. Eur. Lentinus, 10, f. 1, pl. 1–4a. 1946—SINGER, Agaricales, 279. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 71. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:230. 1957.

Agaricus pulverulentus SCOP. Fl. Carn. ed. 2. 2:432. 1772.

Agaricus adhaerens ALB. et SCHW. Consp. Fung. 186. 1805—FRIES, Syst. Myc. 1:96. 1821.

Agaricus resinaceus TROG, Flora, 15:525. 1832—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:518. 1844.

Lentinus pulverulentus FR. Epicr. Myc. 391. 1838; Hymen. Eur. 483. 1874—WINTER, Pilze, 1:500. 1884—QUÉLET, Enchir. Fung. 151. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5:588. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:314. 1893; Brit. Fungi, 219. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:225. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 309. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1):376. 1912—REA, Brit. Basid. 538. 1922—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 144. 1938—PILÁT, Ann. Myc. 39:91. 1941.

Lentinus pulverulentus * *resinaceus* FR. Epicr. Myc. 391. 1838; Hymen. Eur. 483. 1874.

Lentinus resinaceus KALCHBR. Icon. Hymen. Hung. 3:47, pl. 21, f. 3. 1875—WINTER, Pilze, 1: 500. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:589. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:314. 1893; Brit. Fungi, 219. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:225. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1):376. 1912—PILÁT, Ann. Myc. 39:92. 1941.

Lentinus adhaerens var. *resinaceus* W. G. SMITH, Brit. Basid. 309. 1908.

Lentinus adhaerens f. *pulverulentus* PILÁT, Ann. Myc. 39:92. 1941; Atl. Champ. Eur. Len-

tinus, 12. 1946.

子実体はやや叢生；傘は径 3.5—6cm，幼時半球形にて丸山形となり，のち開張し，圧低され，更に盃形に至る；表面は粉絨状にて成熟せば樹脂様物質の分泌によりて粘性となる，帯白色，黄土色，のち帯黒黄褐色となる，縁は初め内捲，のち内屈，波状，遂に裂片となる；肉は革質，弾性，白色，皮下帯黒黄褐色，のち全部黄褐色となる，臭は樹脂様，味は収斂性，苦し；褶は彎入し垂下歯を有し，茎上に長き垂下線を存す，白色，のち黄土色，かなり疎，広幅，稜は鋸歯状にて樹脂状膠性；茎は 4—6×1—2cm，中心生或は屢々多少偏心生，同幅にて有根，粉毛状，黄土色，基部より漸次黄褐色となる，基部僅か屈曲，靱肉質，老時樹脂分泌物によりて粘性，中実；胞子は初め楕円形にて，のち円筒形となり，屢々屈曲，有嘴，非糊性，6—8(10)×2.5—3(4)μ；胞子紋は白色；褶側嚢体は紡錘形，無色，顆粒状，35—60×7—10μ，稜嚢体は円筒形，無色，顆粒状，75—115×3—4.5μ，これ等は所謂分泌嚢体に属するものにて樹脂を分泌す，樹脂は傘表，茎及褶稜を蔽い，時に老後美しき赤色を呈す。

所在及産地

林内材上生—春～秋

北海道—欧．亜(小亜)．北米

和名 ナミハタケ（波歯茸）〔今井〕

〔因記〕 *Lentinus resinaceus* は比較的早く同物異名と認められ，色僅か淡く広葉樹林材上に生ずるものを *L. pulverulentus* として別種となしたるも，之れ唯習性上の差に過ぎず，従つて只その1形(form)とするに至れり，北海道産ナミハタケは針葉樹林材上に於て見出さる。

Lentinus lepideus FR.

マツオオジ

FRIES, Epicr. Myc. 390. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:233. 1863; Hymen. Eur. 481. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 225. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:242. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7:pl. 1140(no. 1091). 1890; Handb. Austr. Fungi, 91. 1892—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:225. 1872; Enchir. Fung. 150. 1886—GILLET, Champ. Fr. 381, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:234. 1876; Hattsv. 1:245. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 138. 1889—WINTER, Pilze, 1:501. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:581. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:313. 1893; Brit. Fungi, 218, pl. 18, f. 3. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 309. 1908—RICKEN, Blätterp. 83. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 53, pl. 6. 1918—HARPER, Trans. Wisc. Acad. Sci. Arts Lett. 20:371, pl. 14–17. 1921—REA, Brit. Basid. 537. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 124, pl. 59. 1927—LANGE, Agar. Denm. 9:38. 1933—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4:pl. 313. 1937; Agaricales, 1:432. 1948—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:143. 1938—PILÁT, Ann. Myc. 39:86. 1911; Atl. Champ. Eur. Lentinus, 18, f. 5; pl. 12, 29–31. 1946—SINGER, Agaricales, 279, 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 103, pl. 69, f. 4. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 71. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:229, pl. 13, f. 1. 1957.

（川村，植．雑．23:356. 1909; Illus. Jap. Fungi, pl. 15, f. 13–15. 1914; 日．菌．図説, n. 99–100. 1929; 食用菌及有毒菌, f. 15–16 (p. 15). 1931; 日．菌．図鑑, 3:325, f. 320. 1954—白井，日．菌．目．ed. 2. 313. 1917; ed. 3. 183. 1927—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:114. 1931—松浦，茸類辞典, 189–190, f. 221, 223. 1933; 応用菌蕈学, f. 767–769 (p. 1143). 1941—小林，日．隠．植．図. 527, 529, pl. 254, f. 1, pl. 255, f. 5. 1939—逸見及赤井，木．腐．菌学, 424, f. 224. 1945—原，日．菌．目．177. 1954—今関及土岐，林．試．研．報．67:45. 1954—MATSUDA & HONGO, Jour. Jap. Bot. 30:153. 1955—今関及本郷，原色日．菌．図鑑, 32, f. 67, pl. 13, f. 67. 1957）

Agaricus squamosus SCHAEFF. Fung. Bavar. 4:Ind. 15, pl. 29–30. 1774.

Agaricus lepideus FR. Obs. Myc. 1:21. 1815; Syst. Myc. 1:176. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:518. 1844.

Lentinus suffrutescens FR. Syst. Orb. Veg. 1: 78. 1825; Epicr. Myc. 393. 1838.

Lentinus squamosus QUÉL. Fl. Myc. 328. 1888 SCHROETER, Pilze Schles. 1:556. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:226, f. 112, F. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):376, pl. 68B, f. 3–5. 1912—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen, 495. 1915—HEIM, Bull. Soc. Myc. Fr. 41:440, pl. 27. 1925—BRESADOLA, Icon. Myc. 11:pl. 510. 1929—PILÁT, Ann. Myc. 39:91. 1911.

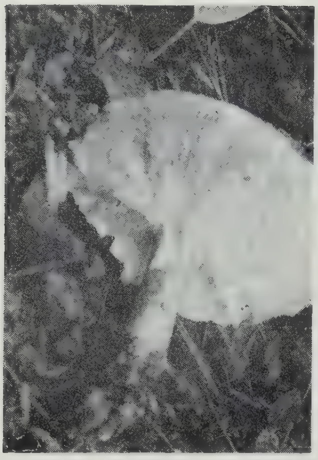
(P. HENNINGS, Bot. Jahrb. 31:737. 1902—松村，植．名鑑，1:150. 1904—白井，日．菌．目．46. 1905)

Lentinus magnus PECK, Bull. Torr. Bot. Club, 23:413. 1896.

Lentinus spretus PECK, Bull. N. Y. St. Mus. 105:24. 1906.

Lentodium squamosum MURR. Mycologia, 3: 27. 1911; 7:119, pl. 158, f. 6. 1915; N. Am. Fl. 9: 296. 1915.

子実体は孤生或は叢生；傘は径 5—15cm，稀に18cm に及ぶ，丸山形，のち開張扁平となり，時に中央僅か圧低され，或は中丘を存す，正形或は不正



a



b

第74図 マツオオジ Lentinus lepideus
a．子実体 ×1/3
b．胞子 ×550
（大谷氏）

形；表面は乾燥，白色～淡黄土色にて，外皮破れてやや同心円的に並ぶ帯褐色～殆ど黒色の大なる圧着せる鱗片となる，縁は多くは大波状をなす；肉は白色，厚く，肉質，強靱，乾時堅し，樹脂臭あり；褶は彎入し，小歯により垂生，白色，のち淡黄色，時に縁の方橙黄色を帯ぶ，やや疎，広幅，稜は鋸歯状にて屢々裂く；茎は 2—8×1—1.5 cm，中心生，時に偏心生，殆ど同幅にて，基端屢々尖りて根状，傘面と同色，基部黒色，多くは鱗片に被われ繊維状，時に無毛となる，初め被膜を有す，緊緻，弾性，中実；鍔はかなり稀に存在し，白色，薄く，反転垂下，綿絮状，外側有溝，通常著しからず；胞子は長円壔形，平滑，非糊性，8—15×3.5—5.5 μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地

マツ株及材上，稀に他針葉樹上—夏秋

本邦全土—欧．北米．濠．亜（支．小亜．西比）

和名 マツオオジ（松旺子）〔古名〕

Lentinus edodes (BERK.) SING.

シイタケ

SINGER, Agaricales, 279. 1949.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，33, f. 68, pl. 13, f. 68; phot. VII, f. 34-41. 1957）

Agaricus edodes BERK. Jour. Linn. Soc. Bot. 16:50. 1878.

Collybia Schiitake SCHROET. Gartenfl. 35:105. 1886.

（白井，日．菌．目．24. 1905; ed. 2. 165. 1917—原，日．菌．目．84. 1954）

Armillaria edodes SACC. Syll. Fung. 5:79. 1887 —P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:270. 1900.

（白井，日．菌．目．9. 1905—川村，日．菌．図鑑，4: 466, f. 447-448. 1954）

Lepiota Shiitake TANAKA, Bot. Mag. Tokyo, 3:159, f. 1-2. 1889.

Mastoleucomyces edodes KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2:861. 1891.

Cortinellus Shiitake P. HENN. Not. Königl. Bot. Gart. Mus. Berl. 2:385. 1899; Bot. Jahrb. 28:270. 1901.

（白井，日．隠．植．図．3:pl. 46. 1900; 日．菌．目．26. 1905; ed. 2. 177. 1917—草野，植．雑．14:225. 1900—松村，植．名鑑，1:137. 1904—梅村，植．雑．26:152. 1912; 富士．植．志．366. 1923—KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 10, f. 1 4. 1914; 日．菌．図説，n. 1, 40. 1929; 食用菌及有毒菌，f. 20(p. 19). 1931—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:118. 1931—松浦，蕈類辞典，13, f. 9. 1933; 応用菌蕈学，336, f. 282-286, 295, 299-300. 1941—小林，日．隠．植．図．559, pl. 270, f. 1-7. 1939—牧野，日．植．図鑑，1022, f. 3063. 1940）

Tricholoma Shiitake LLOYD, Myc. Writ. 5, Lett. 67:11; 68:8. 1918; STEVENSON & CASH, New Fung. Names Lloyd, 155. 1936—RAMSBOTTOM, Handb. Larger Brit. Fungi, 73. 1923.

Shitaker cortinellus LLOYD, Myc. Writ. 7:1266. 1924.

Cortinellus Berkeleyanus S. ITO et IMAI, Jour. Soc. Agr. For. Sapporo, 17:161. 1925; Bot. Mag. Tokyo, 39:326, pl. 6. 1925.

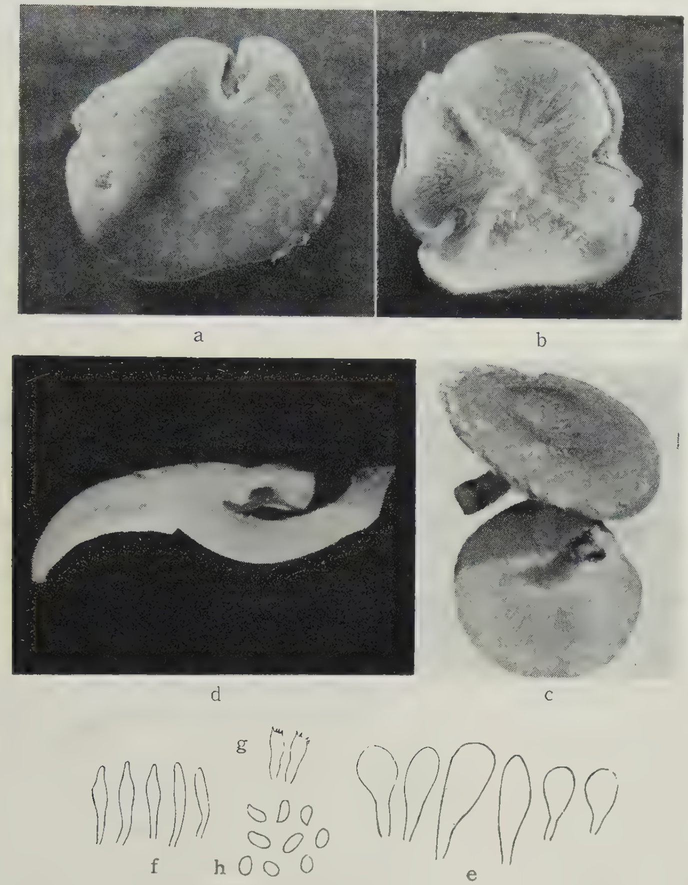
（白井，日．菌．目．ed. 3. 104. 1927）

Lentinus shiitake SING. Ann. Myc. 34:332. 1936.

Cortinellus edodes S. ITO et IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:55. 1938. (non. P. HENNINGS, 1900)

（沢田，台．博．学．報．26:264. 1936—今関，原色きのこ，pl. 9(左). 1942—千葉及寺本，東．大．演．林．報．43:34. 1952—原，日．菌．目．93. 1954—今関及土岐，林．試．研．報．67:37. 1954—佐々木，尾瀬ヶ原，552. 1954）

子実体は群生；傘は通常 4—10 cm なるも，20 cm 或はそれ以上に及ぶものあり，丸山形，のち開張扁平となり，時に僅か中窩あり；表面は茶褐色～黒褐色の鱗被を被むり，屢々不規則なる多少網状の深き罅裂を生ず，幼時白色或は淡黄色の密綿毛を周辺に有し，熟時周辺にベールの残片を存す；肉は白色，屢々帯褐色となる，厚肉，肉質，緻密，やや靱性，味良く，臭少きも乾時甚だ強し；褶は彎入，白色，老時及傷時黒変す，やや密，むしろ広幅，稜は全縁或は少しく波状；茎は 3—10×0.8—2 cm，本来中心生なるも着生物との関係により偏心生となり斜上屈曲す，同幅或は下方に僅か漸細，稀に基部球根状，鍔より上部は白色，下部は茶褐色にて繊維状，幼時被膜の残物を傘縁と共に有す，中実；鍔は線毛状，幼時著しきも早失性；胞子は楕円形，一端やや尖り，



第75図　シイタケ Lentinus edodes
a．子実体表面　b．同裏面　c．子実体 ×1/2
d．子実体切断面 ×1/2　e．稜嚢体　f．嚢状体
g．担子柄　h．胞子 ×500　（大谷氏）

6—7×3.5—4μ; 胞子紋は白色; 稜嚢体は広棍棒形或は頭状，無色，顆粒を含む，幅 9—14μ; 可食，栽培さる。

所在及産地

シイ其他多くの広葉樹枯幹，切株上—春及秋
本邦全土—亜（支．朝．台．セレベス）

和名 シイタケ（椎茸）〔古名〕

小林義雄，清永大典両氏は「シイタケの学名，新分布，畸形など」（植物研究雑誌，26:29-31, f.1-2. 1951）中に次の1品種3畸形を記述されたり。

品種 forma *sterilis* IWADE フジシイタケ—"栽培中に出来た品種で柄の上部が膨大し傘縁と接し，ヒダが全然退化したもの"。

畸形(1)．脊中合せのシイタケ（f.1，左）—"一般にキノコの子実体の傘面上に上向きになつた今一つの小形のキノコが癒着状をなしているのは稀に見られる。この場合菌柄は残存しているが，ここに示すものは柄らしいものが全然見られない。高さ5.7糎傘面は濃暗褐色，癒着傘の部分に細かな皺がある。ヒダは上下とも白色，上部のヒダ中には浅く分岐せる不規則なものが認められる"。

畸形(2)．天上にヒダの出来る花シイタケ（f.1，右）—"高さ3.6糎，不規則な塊状で側面は繊維質，暗紫褐色，上方に裂目がある。上面は截断状をなし偏心状のヒダが発達し，白色である"。

畸形(3)．ノウタケ形の皺シイタケ（f.2）—"ヒダが全然退化変形したもので高さ6.8糎，柄は倒円錐形，繊維質，淡黒褐色である。頭部は半球状に膨れ，全表面に皺がある。その深さは中央部のものが深く，縁辺に至つて次第に浅く点状となる。又中央部の皺中には長い突起があり先端が淡焦褐色を呈し，その他は暗褐色である。この皺面の一部には子実層が見られ棍棒状の側糸及び二本の担子梗を具えた担子基（17×5μ）がある。胞子は不整卵形で 3.7—4×2.5—3μ である。普通のシイタケは担子梗が4本であるのにこの畸形のシイタケは数が半減しているのは丁度野生のハラタケに対する栽培マッシュルームの如き関係に似て共通の理由があるように思われる"。

疑　問　種

Lentinus lamelliporus HAR. et PAT. Bull. Mus. Hist. Nat. 2:130. 1902—SACCARDO, Syll. Fung. 17:49. 1905.

（白井，日．菌．目．ed. 2. 313. 1917; ed. 3. 183. 1927—原，日．菌．目．176. 1954）本州

L. revelatus BERK. (LLOYD, Myc. Writ. Lett. 49:10. 1914—安田，植．雑．28:150. 1914—白井，l. c. ed. 2. 313. 1917; ed. 3. 183. 1927—原，l. c. 177. 1954) シロコカワキタケ．九州

L. subnudus BERK. (LLOYD, l. c. Lett. 49:10. 1914; 61:6. 1916—安田，l. c. 28:91. 1914—白井，l. c. ed. 2. 315. 1917; ed. 3. 184. 1927—広江，応用菌蕈学，1145. 1941—原，l. c. 177. 1954）シロカワキ

タケ．九州

Asterotus Sing.

Singer, Mycologia, 35:161. 1943; Agaricales, 282. 1949.

子実体はヒラタケ（*Pleurotus*）型；傘は扇形；傘の表面層は二叉糸状体層によつて作らる，即ち凡ての方向に直角に短かき群生する側枝を有する菌糸が層をなすこと *Asterostromella* の構造を想起せしむ，その先端小枝は上より見たる時は屢々星形を呈す；托は褶状；胞子は無色，円筒形，類紡錘形或は類腸詰形，平滑，非糊性，甚だ薄き膜を有す；胞子紋は白色或は殆ど白色；担子柄は正常，屢々その先端に部分的に厚き膜を有し屢々擬糸状体或は不明瞭の小嚢体に転移するも真の嚢状体及び擬嚢体は欠如す；茎は側生にて圧辺さる；肉は柔軟，殆ど革質；菌糸は一部薄く，一部厚き膜を有し，非糊性，菌絆を有し，無色；樹上生，北米産，約1種を知らる，経済的価値なし。

（本属名は aster〔希〕（星），ous, otos（耳）より出ず）

基準種　*A. dealbatus* (Berk.) Sing.

〔因記〕 本基準種が本邦産として記述されあるも稍不明なる所あり，そのため暫く疑問種として整理したり。

疑　問　種

Panus dealbatus Berk. (Lloyd, Myc. Writ. 4. Lett. 42:15. 1912)=*Lentinus dealbatus* (non Fries)（安田，植．雑．26:419. 1912—白井，日．菌．目．ed. 2. 313. 1917—原，日．菌．目．176. 1954）

（Ⅷ） Hemimyceneae Sing. ヒナノヒガサタケ族

Singer, Sydowia, 2:30. 1948; Agaricales, 284. 1949.

担子柄は正常，即ちカーミン着色顆粒を含まず；子実体はエノキタケ（*Collybia*），ヒダサカズキタケ（*Omphalia*），クヌギタケ（*Mycena*）或はホウライタケ（*Marasmius*）型，後者の場合は屢々多少ヒラタケ（*Pleurotus*）型，即ち偏生或は退歩せる茎を有す，（或物にては托が退歩し全子実体は有柄嚢或はコップ形（ワンタケ *Peziza* 型）となる）；傘の表皮層は糊性或は擬糊性菌糸を含まず；肉は非糊性；胞子は非糊性；傘及び茎の表皮層は屢々能く分化す（毛，有突起菌糸，子実層状構造，皮嚢体等）；粘嚢体は往々存在；傘の表皮層は往々膠質層に埋在する菌糸より成る；黒色の根状束は往々存在す；菌糸は少くとも正常形のものに於ては通常菌絆を有す；乳汁は存在或は屢々欠如；甚だ種々なる基物上に生じ，生死の植物質，甚だ屢々樹上，葉上，死草茎上，砂上及び腐蝕物上，根上，又深蘚中等に生ずるも他の菌に寄生することなし。

Singer 氏（1949）は9属及び退化属として3属（*Cymatella, Flagelloscypha, Physalacria*）を収む。本書に於ては *Physalacria* 属を前号に収録せり。

本邦既知属検索表

A．胞子紋は純白或は僅かクリーム色。

a．傘は粘性，表皮層は子実層状或は短細胞被より成り，屢々一部被膜に被わる；傘及茎上に毛なし，エノキタケ型にて往々大形多肉。

ツエタケ属　**Oudemansiella** (179)

b．傘は乾燥なるか或は表皮層は子実層状或は短細胞被より成らず；被膜なし；毛は屢々存在す。

α．傘の表皮層は子実層状或は短細胞被，又は明かなる有突起菌糸（刷毛状）或は皮嚢体を有す，但し後者に於て傘は全く粘性ならず。

Ⅰ．傘及茎に肉眼的に認めらるる長毛或は綿絮状鱗片（粉状）あり，顕微鏡的にはこの毛は子実層状表皮層間に分散す；担子柄及嚢状体は甚だ大；胞子は平滑，甚だ幅広く，類球形或は洋梨状楕円形，エノキタケ或はホウライタケのむしろ大形なるものの型なり。 ビロウドツエタケ属　**Xerula** (182)

Ⅱ．傘及茎は肉眼的に認めらるる長毛或は綿絮状鱗片なきか，然らざれば子実層状層なくして胞子，担子柄及嚢状体は前記の如くならず—表皮層は只突起を有する匍匐する不規則の糸状菌糸或は多少伸長せる菌糸，又は不規則の分岐体，稀に毛状体或は皮嚢体より成る；隔膜は通常4胞子の物にては菌絆を有す；エノキタケ，ホウライタケ，ヒダサカズキタケ或はヒラタケ型のものあり。

ヒナノヒガサタケ属　**Marasmiellus** (184)

β．傘は子実層状表皮及有突起菌糸を有せず，

粘性，柔肉質；茎は多少絨状；傘上に皮嚢体を有す，エノキタケ型。

エノキタケ属 **Flammulina** (188)

B．胞子紋はピンク色；傘は非粘性，表皮層は匍匐糸状菌糸より成り，多数の大なる皮嚢体を有す；エノキタケ，クヌギタケ型。

クリイロムクエタケ属 **Macrocystidia** (190)

Oudemansiella Speg. em. v. Höhn.
ツエタケ属

Spegazzini, An. Soc. Cient. Arg. 12:24. 1881—vonHöhnel, Sitzb. Akad. Wien, 117(1):1007. 1908—Singer, Agaricales, 286. 1949.

Oudemansia Spegazzini, l. c. 10:280. 1880.

Mucidula Patouillard, Hymen. Eur. 95. 1887.

Phaeolimacium P. Hennings, Monsunia, 1:14. 1899.

Chamaemyces Earle, Bull. N.Y. Bot. Gard. 5:446. 1909. (non Battarra)

子実体はエノキタケ（*Collybia*）型；子実体は寧ろ大形，屢々色素なきか殆どなく，或は褐色～オリーブ色素を有す；傘は屢々寧ろ大形，粘性～膠性；傘の表皮層は上方膠質層となる広き細胞よりなる子実層状被より成る；上表皮層は屢々一部被膜層に被わる；全表皮層（膠皮 pellicle）は傘肉より容易に剝離す；褶は厚く，幼時屢々鈍稜，離生又は垂生ならず，広幅；胞子紋は白色；胞子，担子柄及び嚢状体は皆巨大；胞子は球形或は類球形，平滑或は有刺，非糊性，屢々厚きも連続せる膜を有す；担子柄は正常；嚢状体は太し；托実質は整型；茎は通常大部分白色，屢々擬根を有す，ベールを有し或は欠く，若し被膜あれば屢々2重；肉は柔肉質，白色，不変化，非糊性，菌絆を有し稀にこれを欠く菌糸より成る；半被実；熱帯及び温帯産，約4種を知らる，弱き寄生菌，及び食用菌あり。

（本属名は和蘭菌学者 C. A. J. A. Oudemans 氏の姓より出ず）

基準種　*O. pratensis* (Speg.) Speg.

本邦既知種検索表

A．被膜あり。

a．常に鍔を有し，傘面に被膜の残物なく，甚だ粘性。

α．傘は甚だ軟弱にて腐敗し易く，中央焦茶色，成時淡色となり淡鼠～白色；褶は網状纒絡脈ありて著しき皺状；胞子 20—22×18—20 μ。

ヌメリツバタケモドキ **O. venosolamellata** (179)

β．傘は前者より硬く，純白～灰色；褶は皺状ならず；胞子径 16—21 μ，多くは 18 μ 内外。

ヌメリツバタケ **O. mucida** (179)

b．稀に鍔を有し，通常傘上に被膜の残物あり，黄白～灰褐色，粘性；胞子径 12.5—22.5 μ。

ネッタイヌメリタケ **O. canarii** (180)

B．被膜なし；傘は灰褐色，放射状～網状皺脈あり；茎は長き根を有す；胞子 12—18×9—12 μ。

ツエタケ **O. radicata** (181)

Oudemansiella venosolamellata (Imaz. et Toki) Imaz. et Hongo
ヌメリツバタケモドキ

Imazeki & Hongo, Jour. Jap. Bot. 32:146. 1957.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，34. 1957）

Mucidula venoso-lamellata Imaz. et Toki, Bull. Gov. For. Exp. St. 79:1, fig. 1, pl. 1, f. 3. 1955.

Armillaria mucida Kawam. Icon. Jap. Fungi, 4:468, f. 449. 1954. (non Quélet)

子実体は叢生或は群生；傘は径 2—13 cm，初め半球形或は鐘形，のち扁平となり，質甚だ軟弱，多湿にて腐り易く速に縁は垂下す；表面は著しく粘性，幼時中央焦茶色，熟時淡色となり淡鼠色～白色を呈す，平滑；肉は白色，薄し；褶は彎生，長く鍔迄線状に垂下す，雪白色，密，広幅，厚く，多くの著しき皺あり，底部に横脈あり，粉状，軟質；茎は 1.5—5×0.3—1.5 cm，同幅，絹糸状繊維質，鍔より上部は白色，線状，下部焦茶色，甚だ硬く，中実；鍔は上位，白色，極めて薄き膜状；胞子は球形～類球形，平滑，非糊性，20—22×18—20 μ；胞子紋は白色；嚢状体は細頸纓形～紡錘形，薄膜，無色，120—227×32—46 μ；菌絆なし。

所在及産地

ブナ幹上—春～秋　本州

和名　ヌメリツバタケモドキ

（擬滑鍔茸）〔今関及土岐〕

Oudemansiella mucida (Schrader ex Fr.) v. Hoehn.
ヌメリツバタケ

von Hoehnel, Sitzb. Akad. Wien, 119(1):885. 1910—Bresadola, Icon. Myc. 12:pl. 600. 1929—Singer, Agaricales, 288. 1949.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，34, f. 70, pl. 13, f. 70. 1957）

Agaricus valens Scop. Fl. Carn. ed. 2. 2:430. 1772.

Agaricus mucidus SCHRAD. Spec. Fl. Germ. 116. 1794—FRIES, Syst. Myc. 1:28. 1821; Epicr. Myc. 24. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:46, (Monogr. Armill. 14). 1857; Hymen. Eur. 46. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:569. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 96. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 23. 1883; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 16 (no. 58). 1883—WINTER, Pilze, 1:829. 1884.

Armillaria mucida QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:75. 1872—GILLET, Champ. Fr. 77, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:24. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:85. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 92. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 40, pl. 23, f. 4-8. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:230. 1893; Brit. Fungi, 99, pl. 6, f. 1. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:270. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 30. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):696, pl. 128, f. 1-3. 1912—REA, Brit, Basid. 110. 1922—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:54. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 55, pl. 9, f. 1. 1950.

(MATSUURA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 2: 135. 1930; & KANADA, l. c. 3: 119. 1931—松浦, 蕈類辞典, 193, f. 255. 1933—今関, 原色きのこ, pl.7(右). 1942—原, 日. 菌. 目. 20. 1954—佐々木, 尾瀬ヶ原, 552. 1954)

Collybia mucida QUÉL. Enchir. Fung. 27. 1886—RICKEN, Blätterp. 401, pl. 106, f. 5. 1915—LANGE, Agar. Denm. 2:15. 1915; Fl. Agar. Dan. 2:8, pl. 41, f. E. 1936—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 95, f. 159, A. 1953.

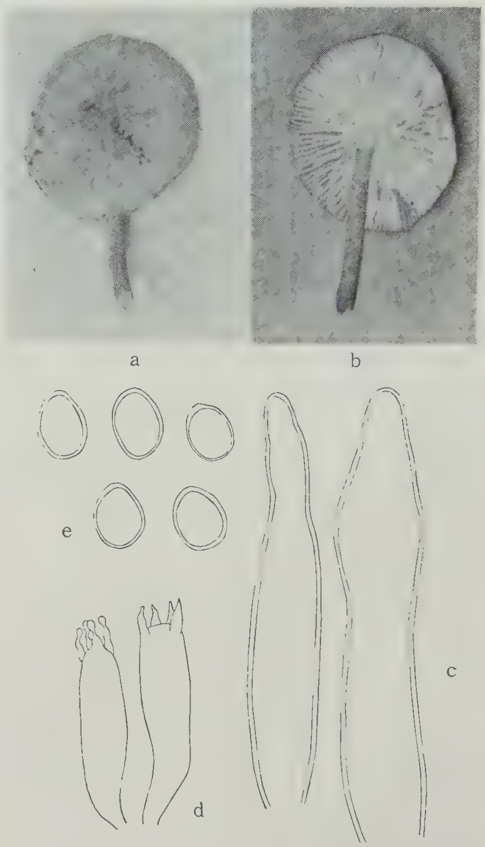
Mastoleucomyces mucidus KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2:861. 1891.

Mucidula mucida PAT. Hymen. Eur. 95. 1887; Ess. Tax. 148. 1900—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:273. 1948—HEIM, Champ. Eur. 2: 271. 1957.

Lepiota mucida SCHROET. Pilze Schles. 1:671. 1889.

Chamaemyces mucida EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5:446. 1909.

子実体は群生或は叢生; 傘は径 3—6 cm, 或はそれ以上に及び, 初め半球形, のち丸山形～扁平; 表面は純白色, 或は灰色, 中央は淡黄褐色, 湿時甚だ粘性にて透明質, 乾時僅か粉状にて絹光沢あり, 無毛, 平滑, 外皮剝ぎ易し, 縁辺は往々有線条, 初め内屈す, 外皮は直立する膠質膜の棍棒形細胞より成る; 肉は白色, 柔軟にて膠質, 味及臭よし; 褶は直生或は垂下歯を有し, 白色, のち帯黄色, 疎, 甚だ広幅, 半透明質にて粘性; 茎は 3—12×0.3—0.8 cm, 上方に漸細, 基部肥大, 着生物の関係上彎曲すること多し, 白色, 灰色或は帯黄色, 強靱にてやや軟骨質, 中実, 上部に鍔を有す; 鍔は白色, 或は帯黄色, 膜質, 水平或は垂下し, 屢々有溝, 永存性, 甚だ稀に早失す; 胞子は類球形, 甚だ大形にて厚膜, 平滑, 径 16—21 μ, 多くは 18 μ 内外; 胞子紋は白色; 嚢状体は散生し, 紡錘形或は円筒形, 90—140×15—30 μ; 弱き寄生性を有す, 可食。



第 76 図 ヌメリツバタケ Oudemansiella mucida
a. 子実体表面 b. 同裏面 ×1/2 c. 嚢状体
d. 担子柄 e. 胞子 ×100 (大谷氏)

所在及産地

広葉樹の枯幹及生立木上一夏秋

北海道, 本州, 九州一欧. 北米. 亜(小亜)

和名 ヌメリツバタケ (滑鍔茸) 〔今井〕

Oudemansiella canarii (JUNGH.) v. HOEHN.

ネッタイヌメリタケ

von HOEHNEL, Sitzb. Akad. Wien. 118(1):276. 1909; 119(1):885. 1910—SINGER, Agaricales, 288. 1949.

Agaricus Canarii JUNGH. Crypt. Jav. 82. 1838.

Agaricus alphitophyllus BERK. et CURT. Proc.

Am. Acad. Arts Sci. 4:112. 1858.

Agaricus leucoconis BERK. et CURT. l. c. 113. 1858.

Agaricus rhodoconis BERK. et CURT. l. c. 113. 1858.

Agaricus cubensis BERK. et CURT. Jour. Linn. Soc. Bot. 10:282. 1868.

Agaricus cheimonophyllus BERK. et CURT. l. c. 10:284. 1868.

Agaricus apalosarcus BERK. et CURT. l. c. 11: 520. 1871.

Agaricus magisterium BERK. et CURT. l. c. 11: 520. 1871.

Agaricus euphyllus BERK. et CURT. l. c. 11: 520. 1871.

Amanitopsis Cubensis SACC. Syll. Fung. 5:25. 1887.

Amanitopsis Canarii SACC. l. c. 5:86. 1887.

Collybia euphylla SACC. l. c. 5:229. 1887.

Collybia Magisterium SACC. l. c. 5:230. 1887.

Collybia hapalosarca SACC. l. c. 5:230. 1887.

Mycena rhodoconis SACC. l. c. 5:273. 1887.

（松村，植．名鑑，1:156. 1904—白井，日．菌．目．58. 1905; ed. 2. 377. 1917; ed. 3. 224. 1927）

Mycena leucoconis SACC. l. c. 5:273. 1887.

（松村，l. c. 156. 1904—白井，l. c. 58. 1904; ed. 2. 377. 1917; ed. 3. 224. 1927）

Mycena alphitophylla SACC. l. c. 5:305. 1887.

（松村，l. c. 155. 1904; 白井，l. c. 57. 1905; ed. 2. 377. 1917; ed. 3. 223. 1927）

Phaeolimacium bulbosum P. HENN. Monsunia, 1:14. 1899.

Pluteus macrosporus P. HENN. l. c. 57. 1899.

Mucidula cheimonophylla PAT. Bull. Soc. Myc. Fr. 15:192. 1899.

Oudemansiella apalosarca v. HOEHN. Sitzb. Akad. Wien, 117(1):1007. 1908—PETCH, Ann. Roy. Bot. Gard. Perad. 4:387. 1910.

Mucidula alphitophylla PAT. Bull. Soc. Myc. Fr. 25:9. 1909.

Oudemansiella cheimophylla v. HÖHN. Sitzb. Akad. Wien, 119(1):885. 1910.

Chamaemyces alphitophyllus MURR. Mycologia, 3:91. 1911.

Armillaria alphitophylla MURR. N. Am. Fl. 10: 39. 1914.

Collybia alphitophylla S. ITO et IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:15. 1939.

Oudemansiella alphitophylla BOEDIJN, Bull. Jard. Bot. Buitenz. III, 16:398. 1940.

子実体は群生或は孤生；傘は径 1.5—5 cm 或はそれ以上に及び，初め半球形，のち広丸山形，中央僅か圧低され，遂に殆ど扁平となる；表面は粘液の厚層に被われ，平坦或は通常被膜の残物を存す，帯白色，淡黄白色或は灰褐色，通常中央暗色，幾分透明，縁は平滑なるも湿時線条を認めらる，初め僅か内屈す；肉は白色，厚さ 7 mm に及ぶ；褶は狭生にて垂下歯を有し，純白色，やや膠状の肉質，むしろ厚く，のちクリーム色或は帯褐色となる，粉状，疎，便腹状，茎は 1.5—5×0.15—0.8 cm，同幅，基部やや球根状，往々偏心生，白色，やや粘性，無毛，粉状或は幾分粗面，軟骨質，充塞或は中実，稀にやや中空，稀に鍔を存す；胞子は球形，平滑，無色，径 12.5—22.5 μ；胞子紋は白色；嚢状体は紡錘形或は壜形，長さ 150 μ に及び，最も広き部分は幅 40 μ に至る，無色，むしろ薄膜。

所 在 及 産 地

林内枯木上一秋　小笠原島一南洋其他熱帯地方

和 名　ネッタイヌメリタケ（熱帯滑茸）〔今井〕

Oudemansiella radicata (RELH. ex FR.) SING.

ツエタケ

SINGER, Agaricales, 288. 1949.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，34, f. 69, pl. 13, f. 69. 1957）

Agaricus macrourus var. 1. SCOP. Fl. Carn. ed. 2. 2:423. 1772—SCHROETER, Pilze Schles. 1: 648. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:265. 1900 -MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):652, pl. 122, f. 1-3. 1912.

（安田，植．雑．23:403. 1909; 30:67. 1916—白井，日．菌．目．ed. 2. 31. 1917; ed. 3. 13. 1927）

Agaricus macrorhizus PERS. Obs. Myc. 1:47. 1796.

Agaricus radicatus RELH. Fl. Cantabr. n. 1040. 1785—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, pl. 48. 1797—FRIES, Syst, Myc. 1:118. 1821; Epicr. Myc. 81. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:146, (Monogr. Collyb. 2). 1857; Hymen. Eur. 109. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:537. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 114, pl. 5, f. 4. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:145. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:53. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2: pl. 140(no. 181). 1883; Handb. Austr. Fungi, 17. 1892—WINTER, Pilze, 1:783. 1884.

（白井，日．菌．目．ed. 2. 33. 1917）

Gymnopus radicatus S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:605. 1821—MURRILL, N. Am. Fl. 9: 366. 1916.

Collybia radicata QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1: 92. 1872; Enchir. Fung. 27. 1886—GILLET, Champ. Fr. 311, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:140. 1879 —SACCARDO, Syll. Fung. 5:200. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:120. 1893; Brit. Fungi, 139, pl. 12, f. 1. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 149. 1900 —ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 92, f. 94. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 59. 190∞—ROLLAND,

Atl. Champ. 46, pl. 45, f. 98. 1910—MURRILL, Mycologia, 6:221, pl. 137, f. 1, pl. 138. 1914—RICKEN, Blätterp. 406, pl. 106, f. 1. 1915—LANGE, Agar. Denm. 3:14. 1917; Fl. Agar. Dan. 2:8, pl. 41, f. D. 1936—KAUFFMAN, Agar. Mich. 766, pl. 167. 1918—REA, Brit. Basid. 326, 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 113, pl. 54, 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 4:pl. 189. 1928—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1:73, f. 11, c. 1934—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:115, pl. 3, f. 5. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 74, pl. 21, f. 1. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 95, f. 52. 1953.

(KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 3, f. 1-4. 1912; 日. 菌. 図説, n. 106. 1929; 日. 菌. 図鑑, 4: 419, f. 412. 1954—白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 163, 1917; ed. 3, 96. 1927—梅村, 富士. 植. 志. 366. 1923—松浦, 茸類辞典, 61, f. 61. 1933; 応用菌蕈学, 1189, f. 805. 1941—今関, 原色きのこ, pl. 32(左). 1942—小林, 日. 隠. 植. 図. 567, pl. 274, f. 4-5. 1939—原, 日. 菌. 目. 84. 1954—今関及土岐, 林. 試. 研. 報. 67: 36. 1954—平田, 青島綜合調. 報. 77. 1954)

Collybia macroura GRAMBERG, Pilze Heimat, 1:38, pl. 39. 1913—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 230. 1915.

Mucidula radicata BOUSIER, Bull. Soc. Myc. Soc. 40:332. 1924—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 2:199. 1932 (forma *marginata*)—HEIM, Champ. Eur. 2:271, pl. 36, f. 3. 1957.



第 77 図 ツエタケ Oudemansiella radicata ×1/3 (大谷氏)

子実体は孤生或は群生; 傘は径 5—11 cm, 丸山形, のち開張し殆ど扁平となり, 往々中丘あり; 表面は湿時粘性, 灰褐色, 黄灰色或は黄褐色, 稀に帯白色, 中央に放射状或は網状の皺脈を有す, 縁は僅か内屈し, 纒絡せる皺脈あるか或は平坦なり; 肉は白色, 臭及味温和; 褶は直生, 狭生, 時に小歯あり, 白色或は帯黄色, 疎, 広幅; 茎は地上 7—20×0.5—1.5 cm, 上方に漸細, 真直, 無毛, 往々捩曲線～溝あり, 基部膨大す, 上部白色, その他は帯褐～灰褐色, 甚だ強靱にて軟骨質, 地中に長き尾状の根を生ず, 中空; 胞子は類球形或は広楕円形, 有嘴, 平滑, 12—18×9—12 μ, 胞子紋は白色; 嚢状体は褶側及稜に存在, 紡錘形或は頭状, 60—120×20—30 μ; 可食。

所在及産地

林内地上, 枯根に連る一夏秋

北海道,本州,九州一欧.北米.阿.濠.亜(支.小亜)

和名 ツエタケ (杖茸) 〔川村〕

イッポンササゴ (方言)

疑問種

Armillaria tympanitica (BERK. et CURT.) SACC. Syll. Fung. 5:86. 1887. (松村, 植. 名鑑, 1:131. 1904—白井, 日. 菌. 目. 9. 1905; ed. 2. 53. 1917; ed. 3. 23. 1927—原, 日. 菌. 目. 20. 1954) = *Agaricus tympaniticus* BERK. et CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4:111. 1860. (白井, l. c. ed. 2. 35. 1917; ed. 3. 14. 1927—原, 日. 菌. 目. 10. 1954) = *Mastoleucomyces tympaniticus* KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2:861. 1891. 小笠原島

Xerula P. MAIRE
ビロウドツエタケ属

P. MAIRE, Publ. Junta Cienc. Nat. Barcelona, 66. 1933—SINGER, Agaricales, 288. 1949.

子実体はエノキタケ (*Collybia*) 型; 傘及茎は長毛或は綿絮を有し, 粘性ならず, 色素あり; 褶は狭生; 表皮層は子実層状にて長き毛を有し, その多くは肉眼にて認め得; 胞子紋は白色; 胞子は無色, 平滑, 中形或は大形, 球形～洋梨状楕円形, 非糊性, 単一の一様なる膜を有す; 担子柄は正形にてむしろ大; 嚢状体は褶側に存す; 托実質は類整型にて菌絆を有する非糊性の幾分纒絡せる菌糸より成る; 肉は多くは白色, 肉質～僅か強靱; 腐蝕物, 埋木及丸太上生, 熱帯及温帯産, 約 4 種を知らる。

(本属名は xeros 〔希〕(乾燥) より出ず)

基準種 **X. pudens** (PERS. ex S. F. GRAY) SING.

本邦既知種検索表

A. 傘は径 3—5 cm, 或はそれ以上, 地色黄色にて銹褐色の絨毛を被むる; 茎は長くして基端根状; 胞子 9—13×9—11 μ。

ビロウドツエタケ ***X. pudens*** (182)

B. 傘は径約 1.7 cm, 鮮黄色, 綿絮状; 茎は短くして根状ならず; 胞子 6.7—9.3×5.7—6.4 μ。

ダイダイガサタケ ***X. chrysopepla*** (183)

Xerula pudens (PERS. ex S. F. GRAY) SING.
ビロウドツエタケ

SINGER, Agaricales, 289. 1949.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 32. 1957)

Agaricus macrourus var. 2. SCOP. Fl. Carn. 2:423. 1772.

Agaricus longipes BULL. Herb. Fr. pl. 232. 1775—Fries, Epicr. Myc. 81. 1838; Hymen. Eur. 110. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:537. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 114. 1860—COOKE, Handb. Brit, Fungi, 1:53. 1871: Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 201(no. 182). 1883; Handb. Austr. Fungi, 18. 1892—WINTER, Pilze, 1:783. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:647. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:265. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):652, pl. 122, f. 4-6. 1912.

Agaricus radicatus β. pudens PERS. Syn. Meth. Fung. 313. 1801.

Gymnopus pudens S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:605. 1821.

Agaricus pudens PERS. Myc. Eur. 3:140. 1828.

Agaricus costatus WALLR. Fl. Crypt. Germ. 709. 1833.

Collybia longipes QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1: 92. 1872: Enchir. Fung. 27. 1883—GILLET, Champ. Fr. 311, c. ic. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 202. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 230. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:120. 1893; Brit. Fungi, 139. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 149. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 93. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 59. 1908—RICKEN, Blätterp. 406. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 770. 1918—REA, Brit. Basid. 327. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 113, pl. 52, f. 2. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 4:pl. 190. 1928—LANGE, Fl. Agar. Dan. 2:9, pl. 41, f. A. 1936—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 95. 1953.

(今関, 原色きのこ, pl. 32(右). 1942; 及土岐, 林. 試. 研. 報. 87:51, f. 2. 1956)

Marasmius longipes QUÉL. Fl. Myc. 321. 1888—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3: pl. 217. 1934.

Mucidula longipes BOURS. Bull. Soc. Myc. Fr. 40:333. 1926—HEIM, Champ. Eur. 2:271, f. 201, c. 1957.

Xerula longipes K. MAIRE, l. c. 1933—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:274. 1948.

子実体は孤生或は群生; 傘は径 3—5cm, 時に 8cm に及ぶ, 肉質, 鐘状丸山形, のち開張し, 中丘を有す; 表面は乾燥, 時に放射状の皺あり, 地色黄色の上に銹褐色の毛を有し密絨状を呈し, 中央屢々無毛, 縁は薄く, 内屈し, 甚だ毛状; 肉は薄く, 緊緻, 白色にて皮下黄褐色を呈す; 褶は狭生にて殆ど離生, 乳白色, やや疎, 広幅, 便腹状, 厚し, 不等長, 稜に房毛あり; 茎は 8—12×0.4—0.5cm, 上方に狭細, 下方便腹状をなして基端長き根状となり先端尖る, 傘面と同色, 褐色毛を拡布す, のち捩曲して溝を生ず, 剛直, 強靱, 軟骨質, 中実, 充塞, のち中空; 胞子は球形或は類球形短嘴を有し, 平滑, 中に1油球或は顆粒を含む, 9—13×9—11μ; 胞子紋は白色; 担子柄は棍棒形, 45—50×7—8μ; 傘及茎上の毛は子実層状表皮層より抽出し, 長くして尖頭, 波曲, 厚膜, 黄褐色, 300×15μ に及ぶ, 褶側及稜の嚢状体は紡錘形, 厚膜, 柄部細長, 先端屢々厚し, 無色, 80—140×20—32μ; 可食。

所在及産地

樹根上—夏秋　　　本州—欧. 北米. 濠. 亜(支)

和名 ビロウドツエタケ

(天鵞絨杖茸)〔今関及土岐〕

アシナガタケ (足長茸)〔今関〕

(異物同名の先名あり)

Xerula chrysopepla (BERK. et CURT.) SING.

ダイダイガサタケ

SINGER, Mycologia, 35:156. 1943; Agaricales, 289. 1949—HONGO, Jour. Jap. Bot. 31:146, f. 2, a-c. 1956.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 32, f. 66, pl. 12, f. 66. 1957)

Lentinus chrysopeplus BERK. et CURT. Jour. Linn. Soc. 10:301. 1869—SACCARDO, Syll. Fung. 5:585. 1887.

Agaricus scabriusculus PECK, Rep. N. Y. St. Cab. 23:85. 1872.

Agaricus lacunosus PECK, Bull. Buffalo Soc. Nat. Sci. 1:43. 1873; Rep. N. Y. St. Mus. 26:51. 1874.

Tricholoma lacunonosum SACC. Syll. Fung. 5: 113. 1887.

Omphalia scabriuscula SACC. Syll. Fung. 5: 336. 1887.

Collybia lacunosa PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 44:176. 1891.

Marasmius aculeatus PAT. Bull. Soc. Myc. Fr. 16:175. 1900—SACCARDO, Syll. Fung. 16:59. 1902.

Gymnopus chrysopeplus MURR. N. Am. Fl. 9: 359. 1916.

Collybia Costesi SPEG. Rev. Chil. Santiago, 21: 117, pl. 9, f. 1-5. 1917—SACCARDO, Syll. Fung. 28:66. 1925.

Collybia chrysopepla PEARSON, Trans. Brit. Myc. Soc. 33:297, pl. 17 (above). 1950.

傘は鐘状丸山形, 径約 1.7cm; 表面は乾燥, 鮮橙色, 粉状綿架状, 光沢あり, 縁辺線条あり; 褶は通常直生まれに僅か垂生, 白色～淡黄色, 疎, 広幅; 茎は約 1.5×0.2cm, 帯黄色, 基部傘面と同色, 同

幅或は下方に狭細，微細鱗被あり，緊緻，中実或は充塞；胞子は甚だ広きレモン形，平滑，無色，1油球を含み，非糊性，6.7—9.3×5.7—6.4μ；担子柄は4胞子；稜嚢体は多生，褶側嚢体は散在，円筒形〜やや便腹状，先端鈍頭或はやや頭状，50—83×7—9μ；傘面上の綿絮は厚膜嚢状に膨れたる黄金色の菌糸より成る；菌絆あり。

所在及産地

広葉樹落枝上—夏秋

本州—中南.北米.南阿,亜,比）

和名 ダイダイガサタケ（橙笠茸）〔本郷〕

Marasmiellus MURR. em. SING.
ヒナノヒガサタケ属

MURRILL, N. Am. Fl. 9:243. 1915—SINGER, Agaricales, 292. 1949.

Mycena subgen. *Hemimycena* SINGER, Ann. Mycol. 34:350. 1938; Beih. Bot. Centralbl. Abt. B, 56:160. 1936.

Mycena subgen. *Paramycena* KÜHNER, C. R. Acad. Sci. 203:1287. 1936.

Hemimycena (SING.) SINGER, Rev. Mycol. 3: 194. 1938.

子実体はクヌギタケ(*Mycena*),ヒダサカズキタケ(*Omphalia*)，エノキタケ〜ホウライタケ（*Collybia*〜*Marasmius*）型,寧ろ稀にヒラタケ(*Pleurotus*)型にて小形,偏生屈曲茎を有す；色素は存在或は欠如,色素は鮮色或は鈍色，細胞内或は細胞膜上，又はその両者なり；傘は通常寧ろ薄くして膜状をなし，多少透明線条あり，通常吸水性，非粘性，或は甚だ僅か滑かなり；傘の表皮層は有突起細胞，或は毛又は皮嚢体を有す；褶は上昇，水平或は傾下，類離生，彎生，狭生，直生，或は垂生；屢々単なる脈或は皺に退歩す；疎褶の種に於ては托実質は整型〜不整型,或は往々寧ろ混同型となる（然し内部の整型なる中層と外部の不整型層とに分化せず)；胞子は無色,平滑，稀に角形〜星形，非糊性；担子柄は正常にてカーミン着色顆粒なし；稜嚢体は存在或は稀に欠如；嚢状体は褶側に存在或は欠如；粘嚢体は子実体中の唯一の嚢状体として存在することなし；茎は細く，脆く或は強靱，通常髄部柔き充塞物を有し，或は細き空洞あり，乳汁なし，屢々小形菌糸より成る分離層によつて傘より分離す；傘肉は肉状膜質〜強靱膜質，再生或は非再生，菌糸は非糊性；茎の菌糸は稀に僅か糊性，クレシール青にてライラックピンク色に染色され或はされず；肉は屢々導管を有す，菌糸は菌絆を有し或は欠如；樹上，草茎，落葉，果実等死或は生植物上に生じ，深蔭中，稀に地上に生ず；汎布，約 58 種を知らる，甘蔗根腐病，椰子その他の害菌を含む；本属は従来のクヌギタケ属(*Mycena*)の内胞子の非糊性のものを収む。

（本属名は *Marasmius*（属名），ella（縮小詞）より出ず）

基準種　*M. juniperinus* MURR.

本邦既知種検索表

A．茎は傘肉と連続す。

a．褶は深き垂生ならず。

α．白色種。

I．全茎白色。

1．稜嚢体は円筒形，棍棒形或は幾分便腹状，屢々頭状；茎の菌糸は非糊性にてクレシール青にて赤染されず；傘は径 5—8 mm；胞子はやや円形。

シラウメタケモドキ　***M. lactea***（185）

2．嚢状体は棍棒形或は長洋梨形にて先端刺状；傘は径 1—2 cm；胞子は円壔形〜楕円形。

シラウメタケ　***M. paralactea***（185）

II．茎の下部暗褐色；傘径 0.4—1.5 cm；胞子約 9×3 μ。　シロホウライタケ

M. albus-corticis（185）

β．有色種；茎の菌糸は多少糊性にてクレシール青にて赤染さる。

I．傘は灰褐色〜黒褐色，中央殆ど黒色，径 1—2 cm；茎は白色にて暗色痂粒を散布す；胞子は類球形，大なる長嘴あり，6.5—8×5—7 μ；嚢状体の頸は広大。

ニセアシナガタケ　***M. floccipes***（186）

II．傘は濃ピンク或は赤珊瑚色,径7—10 mm；茎は白色；胞子は類円筒形，7—8.5×3—3.5 μ；嚢状体の頸は細長。

コウバイタケ　***M. adonis***（186）

b．褶は弧状深き垂生；茎の菌糸は非糊性にて美紫菫色に染まる；傘は橙色，径 3—8 mm；茎は帯白色〜藁色；胞子は楕円形，3.9—6.5×2.3—2.6 μ。

ヒナノヒガサタケ　***M. fibula***（187）

B．茎は傘とは区分され細き菌糸の分離層あり；傘は鮮橙色，中央朱色，径 7—10 mm；茎は鮮黄色，その菌糸は非糊性にてクレシール青にて唯淡菫色となるのみ；胞子はボート形，9—12×2.5—4.5 μ。

ベニカノアシタケ　***M. acicula***（188）

Marasmiellus lactea (PERS. ex FR.)

シラウメタケモドキ

Agaricus nanus BULL. Herb. Fr. pl. 563, f. N–O. 1791—SCHROETER, Pilze Schles. 1:637. 1889—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):634. 1912.

Agaricus lacteus PERS. Syn. Meth. Fung. 394. 1801—FRIES, Obs. Myc. 1:38. 1815; Syst. Myc. 1:152. 1821; Epicr. Myc. 113. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:205. 1857; Hymen. Eur. 135. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:527. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 123. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:66. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 159 (no. 222). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:77. 1876—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:264. 1900.

Agaricus lacteus * *pithyus* ALB. et SCHW. Consp. Fung. 198. 1805—FRIES, Hymen. Eur. 135. 1874.

Mycena lactea QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1: 104. 1872; Enchir. Fung. 35. 1886—GILLET, Champ. Fr. 285, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:103. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 84. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:259. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 262. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3: 109. 1893; Brit. Fungi, 131. 1911—v. HOEHNEL, Sitzb. Akad. Wien, 122(1):269. 1913—LANGE, Agar. Denm. 1:25, pl. 2, f. 21a. 1914; Fl. Agar. Dan. 2:42, pl. 53, f. F. 1936—REA, Brit. Basid. 381. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 5:pl. 224, f. 3. 1928—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3:pl. 230, f. 2. 1934; Agaricales, 1:328. 1948—KÜHNER, Gen. Mycena, 625. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 89, pl. 28, f. 10. 1950—HEIM, Champ. Eur. 2:251. 1957. (non RICKEN, A. H. SMITH)

(P. HENNINGS, Bot. Jahrb. 32:41. 1903—松村, 植. 名鑑, 1:155. 1904—白井, 日. 菌. 目. 57. 1905; ed. 2. 377. 1917.)

Agaricus delicatellus PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 30:39. 1878.

Mycena lactea var. *pithya* QUÉL. Enchir. Fung. 35. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5:260. 1887—LANGE, Agar. Denm. 1:25. 1914; Fl. Agar. Dan. 2:42, pl. 53, f.c. 1936—REA, Brit. Basid. 381. 1922.

Collybia delicatella SACC. Syll. Fung. 5:224. 1887.

Mycena crystallina PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 41:63. 1888.

Agaricus nanus var. *pithyus* SCHROET. Pilze Schles. 1:636. 1889.

Mycena pithya RICK. Blätterp. 435. 1915.

Prunulus crystallinus MURR. N. Am. Fl. 9:322. 1916.

Gymnopus delicatellus MURR. N. Am. Fl. 9: 354. 1916.

Mycena delicatella A. H. SMITH, N. Am. Sp. Mycena, 161, f. 15(3-6), pl. 11, f. D. 1947—HONGO, Jour. Jap. Bot. 29:87, f. 1(1-2). 1954.

Marasmiellus delicatellus SING. Agaricales, 298. 1949.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 35, f. 71, pl. 14, f. 71. 1957)

子実体は群生或は散生；傘は径 5—8 mm, 鐘状丸山形, のち開張して扁平となり, 時に僅か小丘を有す；表面雪白色, 老時中盤多少クリーム色を呈す, 僅か線条あり；肉は薄く, 白色, 臭及味著しからず；褶は僅か狭生, やや疎, 狭幅, 稜は異質；茎は 2—3×0.05—0.1 cm, 傘と連続, 同幅, 白色, 上部やや粉状, 基部に屢々白放射毛あり；胞子はやや円筒形, 平滑, 非糊性, 7.5—9.5×2.5—3.5 μ；胞子紋は白色；稜囊体は円筒形, 棍棒形或は幾分便腹状, 屢々頭状, 18.5—22×5—7.5 μ, 時に無定形の結晶を被むる, 褶側囊体なし；茎の菌糸は非糊性, クレシール青にて赤染せず。

所在及産地

針葉樹林落葉間—秋　　本州—欧. 北米

和名 シラウメタケモドキ（擬白梅茸）〔本郷〕

Marasmiellus paralactea (IMAI)

シラウメタケ

Mycena paralactea IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 55: 449. 1941.

子実体は群生；傘は径 1—2 cm, 丸山形, のち開張す, 粘性ならず, 白色或は帯白色, 中央僅か灰色, 長き線条あり；褶は直生或は直状垂生, 白色, 密；茎は 6—8×0.1—0.15 cm, 上部白色或は帯白色, 下部灰色, 無毛, 光沢あり, 基部に白色剛毛あり；担子柄は 4 胞子；胞子は円壔形或は楕円形, 斜に嘴あり, 平滑, 8—10×3—5 μ；稜囊体は棍棒形或は長洋梨形, 先端刺状, 無色, 20—35×8—10 μ。

所在及産地

林内地上—秋　　本州

和名 シラウメタケ（白梅茸）〔今井〕

Marasmiellus albus-corticis (SECR.) SING.

シロホウライタケ

SINGER, Agaricales, 300. 1949. (non *Marasmiellus candidus* (BRES.) SING.)

Agaricus candidus BOLT. Hist. Fung. 39, pl. 39, f. D. 1788.

Agaricus albus-corticis SECR. Monogr. Suisse, n. 801. 1833.

Marasmius candidus FR. Epicr. Myc. 381. 1838; Hymen. Eur. 474. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 222. 1860—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1: 222. 1872; Enchir. Fung. 144. 1886—GILLET, Champ. Fr. 374. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3: 231. 1876; Hattsv. 1:174. 1879—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 350. 1883; Illus. Brit. Fungi, 7:1127, f. c (no. 1082). 1890—WINTER, Pilze, 1: 506. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:533. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 466. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1:559. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:167. 1893; Brit. Fungi, 150. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 305. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1):386, pl. 69 E. f. 7. 1912—RICKEN, Blätterp. 78. 1915—REA, Brit. Basid. 528. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 6:255. 1934; Agaricales, 1:293. 1948—LANGE, Fl. Agar. Dan. 2:25, pl. 47, f. c. 1936—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 86, f. 148. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:259, f. 194, c. 1957.

(安田, 植. 雑. 28:91. 1914—LLOYD, Myc. Writ. 5, Lett. 68:7. 1918—白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 339. 1917; ed. 3. 199. 1927—松浦, 蕈類辞典, 106, f. 125. 1933; 応用菌蕈学, 1146. 1941—原, 日. 菌. 目. 191. 1954)

Chamaceras candidus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):455. 1898.

傘は径 0.4—1.5 cm, 半円形, のち扁平或は圧低さる, 透明, 類膜質, 白色, 遂に皺を生じ, 有溝; 肉は白色; 褶は狭生, 白色, 疎, 便腹状; 茎は 0.5—1.5×0.1—0.2 cm, 白色, 下部淡暗褐色, 微粉状, 基端に密毛あり, 屈曲, 軟骨質, 中実; 胞子は長卵円形, 多油球を含み, 約 9×3 μ; 外皮の菌糸は纏絡し, 幅 6—8 μ, 先端細胞は類棍棒形。

所 在 及 産 地

松の落枝葉, 広葉樹落葉上—秋 本州—欧. 北米

和 名 シロホウライタケ (白蓬萊茸)〔安田〕

Marasmiellus floccipes (FR.) SING.
ニセアシナガタケ

SINGER, Agaricales, 301. 1949.

Agaricus floccipes FR. Epicr. Myc. 87. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:157. 1857; Hymen. Eur. 116. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 368. 1883; Illus. Brit. Fungi, 8:pl. 1168 (no. 1142). 1891.

Collybia floccipes GILL. Champ. Fr. 319. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:148. 1879—QUÉLET, Enchir. Fung. 29. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5:215. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:128. 1893; Brit. Fungi, 140. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 62. 1908—RICKEN, Blätterp. 416. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 771, pl. 169. 1918—REA, Brit. Basid. 333. 1922.

Mycena atribrunnea MURR. Mycologia, 8:220. 1916—A. H. SMITH, Mycologia, 27:592. 1935; 28:428. 1936.

Prunulus atribrunneus MURR. N. Am. Fl. 9: 329. 1916.

Mycena maura R. MAIRE, Bull. Soc. Myc. Fr. 44:41, pl. 2, f. 12-15; pl. 3, f. 20-24. 1928. (non *Omphalia*)

Mycena floccipes KÜHNER, Gen. Mycena, 540, f. 186-187. 1938—A. H. SMITH, N. Am. Sp. Mycena, 380, f. 46 (1-3, 8), pl. 87, f. A. 1947—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:323. 1948—HONGO, Jour. Jap. Bot. 28:333. 1953—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 112. 1953.

子実体は群生, 散生或はやや叢生; 傘は径 1—2 cm, 円錐状鐘形〜円錐形, 時に開張し扁平となり, 中丘を有す; 表面は灰褐色〜黒褐色, 中丘は殆ど黒色, 老時褪色後湿時中盤迄線条あり, 時に僅か光沢あり, 無毛, レンズ下にて微細繊維あり, 縁は初め内屈す; 肉は薄く, 無臭無味; 褶は狭生, 白色, やや疎, 中位に広幅, やや便腹状, 時に僅か横脈あり, 稜に粉房毛あり; 茎は 2.5—8×0.1—0.15 cm, 傘と連続, 糸状, 同幅, 時に有根, 白色, レンズ下にて全面に散布する汚灰褐色の痂粒を有す, 基部に白色繊維あり, 強靱, 中位; 胞子は球形, 或は類球形, 大なる長嘴 (長さ約 1 μ) を有す, 平滑, 非糊性, 6.5—8×5—7 μ; 胞子紋は白色; 稜嚢体は多生, やや便腹状〜やや円筒形, 頸は広大, 先端鈍頭, 薄膜, 60—90×10—18.5 μ, 褶側嚢体は多生, 前者に等しきも多少厚膜, 48—115×9.5—20 μ; 茎の菌糸は甚だ弱き糊性を示し, クレシール青によつて赤紫〜酒赤色に染まる。

所 在 及 産 地

広葉樹根際地上—夏秋 本州—欧. 北米. 阿

和 名 ニセアシナガタケ (贋足長茸)〔本郷〕

Marasmiellus adonis (BULL. ex FR.) SING.
コウバイタケ

SINGER, Agaricales, 301. 1949.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 35, f. 74, pl. 14, f. 74. 1957)

Agaricus adonis BULL. Herb. Fr. pl. 560, f. 2. 1791—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 391. 1801—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, 3:pl. 385, f. 2-3. 1803—DECANDOLLE, Fl. Fr. 2:164. 1815—FRIES, Syst. Myc. 1:152. 1821; Epicr. Myc. 102. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:202. 1857; Hymen. Eur. 134. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:528. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 123.

1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:66. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 185, f. a (no. 221). 1883—WINTER, Pilze, 1:765. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:637. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:264. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):634, pl. 119, f. 7-8. 1912.

Mycena adonis S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:620. 1821—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:103. 1872; Enchir. Fung. 35. 1886—GILLET, Champ. Fr. 283. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:101. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 83. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:258. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 262. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:112. 1893; Brit. Fungi, 131. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 150. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 73. 1908—LANGE, Agar. Denm. 1:25, pl. 2, f. 22. 1914; Fl. Agar. Dan. 2:41, pl. 53, f. A. 1936—RICKEN, Blätterp. 431, pl. 109, f. 6. 1915—REA, Brit. Basid. 378. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 5:pl. 224, f. 1. 1928—A. H. SMITH, Mycologia, 28:417. 1936; N. Am. Sp. Mycena, 177, f. 17(7, 9), pl. 19, f. B. 1947—KÜHNER, Gen. Mycena, 555. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:324. 1948—HONGO, Jour. Jap. Bot. 30:74, f. 1(D-E). 1955—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 113. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:250. 1957.

Mycena rubella Auct. nonnull.

子実体は群生; 傘は径 7—10 mm, 円錐状鐘形にて先端は鈍円頭, 扁平に開張せず; 表面は濃ピンク色或は赤珊瑚色, 周辺淡色, 湿時透明線条あり, 無毛; 肉は薄く, 傘面と同色, 膜質, 脆く, 無臭; 褶は上昇着生或は小歯を有し, 白色, やや疎, 狭幅, 甚だ微細の横脈あり; 茎は 3—4.5×0.1—0.12 cm, 傘と連続, 同幅, 全部白色, 撓曲, 脆く, 無毛, 光沢あり, 基部僅か粗渋, 中空; 胞子は類円筒形にて有嘴, 平滑, 非糊性, 7—8.5×3—3.5 μ; 胞子紋は白色; 嚢状体は褶側及稜に多生, 便腹状紡錘形にて頂部伸長し細長頸となり, 屢々先端に粘球を被むる, 50—60×7.5—10 μ; 乳管を存するも多からず; 茎の菌糸はクレシール青にて酒赤色或は酒赤紫色に染色さる。

所在及産地

林間落葉上—春～秋　　本州—欧. 北米

和名 コウバイタケ (紅梅茸)〔本郷〕

Marasmiellus fibula (BULL. ex FR.) SING.

ヒナノヒガサタケ

SINGER, Agaricales, 300. 1949.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 35, f. 72, pl. 14, f. 72. 1957)

Agaricus fibula BULL. Herb. Fr. pl. 186. 1783; pl. 550, f. 1. 1791—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, 1:pl. 45. 1797 -PERSOON, Syn. Meth. Fung. 471. 1801; Myc. Eur. 3:67. 1828—FRIES, Syst. Myc. 1:163. 1821; Epicr. Myc. 127. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:192. 1857; Hymen. Eur. 164. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:519. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 133. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:157. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:82. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 274, f. b (no. 265). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:90. 1876—WINTER, Pilze, 1:741. 1884—SCHROETER, Deut. Krypt. Fl. 1:626. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 262, f. 122, B. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):616. 1912.

Microphale fibulare S.F.GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:623. 1821.

Omphalia fibula QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1: 101, pl. 4, f. 3. 1872—GILLET, Champ. Fr. 300, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:138. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 95. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:400. 1893; Brit. Fungi, 202. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 157. 1900—W.G.SMITH, Brit. Basid. 88. 1908—RICKEN, Blätterp. 396, pl. 105. f. 9. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 821. 1918—REA, Brit Basid. 433. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 6:pl. 275. 1928—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1:86. 1934—LANGE, Fl. Agar. Dan. 2: 62, pl. 61, f. G. 1936—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:326. 1948—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 98, pl. 29, f. 2. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 124, f. 190. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:238, f. 79(2), pl. 15, f. 2. 1957.

(小林, 日. 隠. 植. 図. 539, pl. 260, f. 6 8. 1939—本郷, 植. 分. 地. 14:73, f. 1(5). 1951—原, 日. 菌. 目. 229. 1954—今関及土岐, 林. 試. 研. 報. 87:53. 1956)

Omphalina fibula QUÉL. Enchir. Fung. 46. 1886.

Mycena fibula KÜHNER, Gen. Mycena, 607. 1938—A. H. SMITH, N. Am. Sp. Mycena, 121, f. 9(5-9). 1947.

(MATSUDA & HONGO, Jour. Jap. Bot. 30:153. 1955)

Omphalopsis fibula MURR. Mycologia, 10:179, pl. 8, f. 6. 1918.

子実体は群生; 傘は径 3—8 mm, 類半球形或は深網笠状にて, 開張扁平となること少く, 中窩を有す, 不明瞭なる線条を有す; 表面は吸水性, 橙色にて周辺淡色, レンズ下にて微に産毛あり, 縁は往々波状; 肉は薄く, 傘面と同色, 無味, 無臭; 褶は孤状垂下, 白色或は底部黄色, 密, 狭幅, 稀に叉状, 粉毛状, 稜は全縁; 茎は 2—5×0.1 cm, 同幅或は上方僅か拡がり傘に移行し, 基部に白色根を有し, 時に僅か球

根状，帯白色～藁色，レンズ下にて微に産毛あり，弾性，強靱，乾時軟骨質，中実或は中空；胞子は楕円形，平滑，非糊性，3.9—6.5×2.3—2.6μ；胞子紋は白色；嚢状体は褶側及稜に散生，便腹状紡錘形，有柄，先端鈍円頭，往々頭状，58—72×10.5—17μ；茎は傘と連続す，菌糸は非糊性，茎の菌糸はクレシール青にて美なる紫菫色に染まる。

所在及産地

庭園，山林，路傍蘚間—春～秋

本州—欧．北米．阿．濠

和名 ヒナノヒガサタケ（雛日傘茸）〔小林〕

Marasmiellus acicula (SCHAEFF. ex FR.) SING.

ベニカノアシタケ

SINGER, Agaricales, 301. 1949.

(今関及本郷，原色日．菌．図鑑，135, pl. 14, f. 73. 1957)

Agaricus coccineus SCOP. Fl. Carn. ed. 2. 2: 436. 1772.

Agaricus aciculus SCHAEFF. Fung. Bavar. 4: Ind. 52, pl. 222. 1774—FRIES, Epicr. Myc. 114. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:223. 1857; Hymen. Eur. 147. 1874—RABENHORST. Deut. Krypt. Fl. 1:524. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 127. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2: 155. 1867—WINTER, Pilze, 1:754. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:633. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:263. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):627 1912. (non COOKE)

Mycena acicula QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1: 107. 1872; Enchir. Fung. 39. 1886—GILLET, Champ. Fr. 277. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:117 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:288. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:90. 1893; Brit. Fungi, 132. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax, 150. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 97, f. 100. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 79. 1908—RICKEN, Blätterp. 431, pl. 109, f. 7. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 812. 1918—REA, Brit. Basid. 393. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 6:pl. 255. 1928—LANGE, Fl. Agar. Dan. 2:42, pl. 53, f. D. 1936—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:128. 1938—KÜHNER, Gen. Mycena, 602, f. 11-12, 213. 1938—A. H. SMITH, N. Am. Sp. Mycena, 119, f. 9(1-4), pl. 8, f. E. 11, f. E. 1947—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:326. 1948—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 93, pl. 27, f. 6. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 113. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2: 250. 1957.

(今関，原色きのこ，pl. 43(中). 1942—原，日．菌．目．213. 1954)

Agaricus amabillissimus PECK, Rep. N.Y. Bot. Mus. 39:39. 1887.

Mycena amabillissima SACC. Syll. Fung. 9:37. 1891—MURRILL, Mycologia, 5:pl. 92, f. 8. 1913.

Prunulus amabillissimus MURR, N. Am. Fl. 9: 324. 1916.

Mycena occinea SACC. Fl. Ital. Crypt. Hymen. 276. 1915.

子実体は群生或は散生；傘は径 7—10 mm，膜質，鐘形，半球形或は丸山形にて往々中丘を有す；表面は無毛或は白粉に蔽われ，鮮橙色，のち中央部朱色，周辺部黄色にて長き線条あり，屢々線条不明瞭となる；肉は甚だ薄く，傘面と同色，無味無臭；褶は狭生或は殆ど離生，底の方黄色にて稜の方クリーム白色或は白色，疎或はやや疎，むしろ広幅，便腹状，稜に微細鋸歯あり；茎は 2—5×0.05—0.1 cm，糸状，透明的鮮黄色，のち淡色，同幅，無毛或は初め微細粉状，特に上方著し，光沢あり，基端長き根となり，白色繊維を密生す，中空；胞子は半面紡錘状にてボート形をなし，平滑，非糊性，9—12×2.5—4.5μ；胞子紋は白色；嚢状体は褶側及稜にかなり多生，棍棒形或は紡錘形にて往々便腹状，23—33×5.5—7.5μ，稜のもの僅か小形，先端狭細，黄色粘球を被むる；茎と傘肉の菌糸は明かに異り，傘の細き菌糸層に境せらる，凡ての菌糸は非糊性，菌絆を有す，茎の菌糸膜はクレシール青にて唯淡菫色となるのみ。

所在及産地

腐木，針葉又は草原地上—秋

北海道，本州—欧．北米．阿．亜(支)

和名 ベニカノアシタケ（紅蚊足茸）〔今井〕

キカノアシタケ（黄蚊足茸）〔今関〕

Flammulina KARST.

エノキタケ属

KARSTEN, Medd. Soc. Fauna. Fl. Fenn. 18:62. 1891—SINGER, Agaricales, 306. 1949.

Collybidium EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5: 428. 1909.

Myxocollybia SINGER, Beih. Bot. Centralbl. Abt. B, 56:162. 1936.

子実体はエノキタケ (*Collybia*) 型；色素は通常存在；傘は粘性，無毛，皮嚢体を有す；褶は通常帯黄色，円く狭生或は彎状直生，中空に厚し；胞子紋は純白色；胞子は無色，平滑，非糊性；担子柄は正常；嚢状体は褶側に存在；傘肉は肉質，菌糸は非糊性，

菌絆あり；樹上生；多分半被実；温帯産，約1種を知らる，良好食用菌。

（本属名は flamma〔羅〕（焔）より出ず）

基準種　*F. velutipes* (CURT. ex FR.) SING.

本邦既知種　エノキタケ　***F. velutipes*** (189)

Flammulina velutipes (CURT. ex FR.) SING.

エノキタケ

SINGER, Agaricales, 307. 1949.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，36, f. 75, pl. 14, f. 75. 1957）

Agaricus velutipes CURT. Fl. Lond. pl. 70. 1778—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, pl. 384, f. 3. 1803—FRIES, Syst. Myc. 1:119. 1821; Epicr. Myc. 86, 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:154. 1857; Hymen. Eur. 115. 1874—RABENHORST. Deut. Krypt. Fl. 1:536. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 116. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:148. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:55. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 184, f. a(no. 191). 1883; Handb. Austr. Fungi, 19. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:67. 1876—WINTER, Pilze, 1:779. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:646. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:265, f. 122, F. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):649. 1912.

Agaricus nigripes BULL. Champ. Fr. pl. 344. 1791.

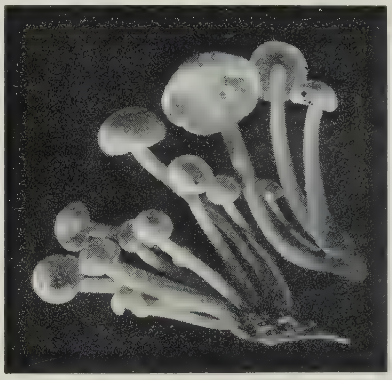
Gymnopus velutipes S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:605. 1821—MURRILL, N. Am. Fl. 9:361. 1916.

Collybia velutipes QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:94. 1872—GILLET, Champ. Fr. 318, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:147. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:212. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 235. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:127. 1893—PATOUILLARD, Ess. Tax. 149. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 92, f. 95. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 62. 1908—MURRILL, Mycologia, 1:39, pl. 3, f. 6. 1909—ROLLAND, Atl. Champ. 48, pl. f. 103. 1910—RICKEN, Blätterp. 415, pl. 108, f. 5. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 769, pl. 168. 1918—REA, Brit. Basid. 332. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 116, pl. 53, f. 2. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 5:pl. 201. 1928—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1:75. 1934—LANGE, Fl. Agar. Dan. 2:11, pl. 43, f. B–B′. 1936—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:120. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:278. 1948—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 76, pl. 21, f. 4. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 95, f. 160. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:270, pl. 35, f. 3. 1957.

（P. HENNINGS, Bot. Jahrb. 32:41. 1903—松村，植．名鑑，1:137. 1904—白井，日．菌．目．24. 1905; ed. 2. 165. 1917; ed. 3. 96. 1927—KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 10, f. 5-6. 1914; 日．菌．図説，n. 236. 1929; 食用菌及有毒菌，f. 1 (p. 4). 1931; 日．菌．図鑑，4:419, f. 411. 1954—梅村，植．雑．28:358. 1914; 富士．植．志．366. 1923—安田，植．雑．35:270. 1921—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:117. 1931—松浦，茸類辞典，29-30, f. 25-27. 1933; 応用菌蕈学，397, 1190, f. 310-316. 1941—松濤，日．植．病．学．報．5:94. 1935—小林，日．隠．植．図鑑，507, f. 1-4. 1939—北島，林．試．彙報，47:31-52. 1939—赤井，植．動．8:687. 1940—牧野，日．植．図鑑，1020, f. 3059. 1940—今関，原色きのこ，pl. 12(左). 1942—逸見及赤井，木．腐．菌学，432, f. 231-232. 1945—佐々木，尾瀬ヶ原，552. 1954）

Myxocollybia velutipes SING. Beih. Bot. Centr. 56, Abt. B:162. 1936.

子実体は叢生；傘は径 2—10 cm，初め小球状，のち丸山形～扁平となり，往々不正形；表面は甚だ粘性，黄褐色，中央渋色，無毛，平滑，縁は初め少しく内屈し，のち反転し或は波状，僅か線条あり；肉は帯白色或は帯黄色，中盤厚く，周辺薄く，水潤状，



第78図　エノキタケ Flammulina velutipes ×1/2　（大谷氏）

柔軟，味温和，臭よし；褶は狭生にて彎入し，白色或は帯黄色，やや疎～密，広幅；茎は 3.5—12×0.3—1.5 cm，同幅或は上方にやや狭細，上部は黄褐色，下部は黒褐色の密絨毛に被われ，強靱，軟骨質，充塞のち中空；胞子は円壔形～楕円形，平滑，7—9×3—4 μ；胞子紋は白色；稜嚢体は紡錘状棍棒形，50—55×10—11 μ；可食，栽培さる。

所在及産地

腐木，埋木及エノキ，カキ，ニレ等広葉樹生幹上—全季，殊に秋

本邦全土—欧．北米．阿．濠．亜（支．小亜．西北）

和名　エノキタケ（榎茸）〔古名〕

（ナメタケ，ナメコ，ナメススキ，ナメラッ

コ，ユキナベ，ユキノシタ等多くの方言あり）

Macrocystidia HEIM
クリイロムクエタケ属

HEIM, Treb. Mus. Cienc. Nat. Barcelona, 15: 127. 1934—SINGER, Agaricales, 307. 1949.

Macrocystis HEIM, Gen. Inocybe, 71. 1931.

Naucoria sect. *Macrocystis* KONR. et MAUBL. Icon. Sel. Fung. 6:200. 1932.

Agaricus subgen. *Hypomnema* BRITZ. Hym. Südb. 3b, Ber. Naturh. Ver. Augsburg, 27:196. 1883.

子実体はエノキタケ（*Collybia*）或は殆どクヌギタケ（*Mycena*）に同じ；色素は存在；傘は非粘性，無毛，吸水性，鐘形にて反転縁を有す；褶は殆ど離生，薄し；胞子紋は黄土赤色（ピンク色）；胞子は鏡下にて淡藁桃色，平滑，先端に狭細，楕円状円壔形，単一の僅か厚き膜を有し，非糊性；単核（Kühner）；担子柄は比較的小形にて其他は正常なり；嚢状体は大形，便腹状，初め類球形，のち伸長し，薄膜，無色；托実質は整型；外皮は匍匐糸状菌糸より成り，多数の大なる皮嚢体を有し，破片的上表皮を作る；茎は中心生，剛直，細長にて偽根を有さず，無毛，皮嚢体に蔽わる；肉は有色，傘にては強靱ならず，膠化部なし；実質は非糊性；菌糸は菌絆を有す；草本腐茎及材上生，温帯及亜熱帯地方産，約3種を知らる，経済的価値なし。

（本属名は makros〔希〕（長き，大なる），kystis〔希〕（嚢）より出ず）

基準種　*M. cucumis* (PERS. ex FR.) HEIM

本邦既知種検索表

A．傘は後者より大形（径 1—6 cm），暗褐色；褶幅狭し。

クリイロムクエタケ　***M. cucumis*** (190)

B．傘は小形（1.3—2 cm），橙褐色；褶幅広し。

ヒロハクリイロムクエタケ　var. ***latifolia*** (191)

Macrocystidia cucumis (PERS. ex FR.) HEIM
クリイロムクエタケ

HEIM, Treb. Mus. Cienc. Nat. Barcelona, 15: 1934; Champ. Eur. 2:392, f. 266. 1957—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:162. 1948—SINGER, Agaricales, 308. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 170. f. 235, B. 1953. （今関及本郷，原色日．菌．図鑑，37. 1957）

Agaricus cucumis PERS. Obs. Myc. 1:45. 1876; Syn. Meth. Fung. 316. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:231. 1821; Epicr. Myc. 193. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:368. 1857; Hymen. Eur. 255. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:476. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 159. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:127. 1871; Illus. Brit. Fungi, 4:pl. 452 (no. 493). 1886.

Agaricus nigripes TROG, Flora, 15:527. 1834—FRIES, Epicr. Myc. 156. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:295. 1857; Hymen. Eur. 207. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:504. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 372. 1883; Illus. Brit. Fungi, 8:pl. 1170, f. a (no. 1160). 1891.

Agaricus fuscipes SOW. Col. Fig. Engl. Fungi, 3:pl. 344. 1803.

Agaricus pisciodorus CESATI, Comm. Soc. Critt. Ital. 1:61, pl. 3, f. 2. 1861—FRIES, Hymen. Eur. 208. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 134. 1883; Illus. Brit. Fungi, 3:pl. 378, f. a (no. 364). 1886.

Nolanea pisciodora GILL. Champ. Fr. 420, c. ic. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:720. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 567. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:260. 1893; Brit. Fungi, 239. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 116. 1908.

Naucoria cucumis GILL. Champ. Fr. 545. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:831. 1887; 17:72. 1905; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 765. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:154. 1893; Brit. Fungi, 279. 1911—BRESADOLA, Icon. Myc. 1:pl. 71. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 155. 1908—RICKEN, Blätterp. 217, pl. 59, f. 1. 1915—REA, Brit. Basid. 350. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 2:pl. 176. 1926—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 172, pl. 67, f. 2. 1950.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 55:516. 1941)

Simocybe cucumis KARST. Hattsv. 1:419. 1879.

Hylophila cucumis QUÉL. Enchir. Fung. 100. 1886.

Derminus Cucumis SCHROET. Pilze Schles. 1: 581. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:241. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):438, pl. 86, f. 3-4. 1912.

Nolanea nigripes MASS. Brit. Fung. Fl. 2:262. 1893; Brit. Fungi, 239, pl. 24, f. 7. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 16. 1908.

Galera cucumis BRES. Icon. Myc. 17:pl. 810. 1931.

子実体は群生或は散生；傘は径 1—6 cm，多少円錐形，或は鐘形，鈍頭或は中丘あり；表面は吸水性，栗褐色～殆ど黒色，縁辺赤褐色，乾時淡黄～淡渋色となる，無毛或は僅か粉毛あり，縁は僅か内屈し，湿時透明にて線条あり；肉は褐色，中盤以外は薄く，水潤状，不快なる臭あり；褶は狭生にて彎入，のち離生，淡色～桃色，やや密，便腹状；茎は 3—6×0.2

—0.3cm，細長，同幅或は下方に僅か狭細，暗褐色～帯黒色，無毛，頂部淡色にて粉状，基部に細毛あり，緊緻，軟骨質，中空；胞子は楕円状紡錘形，平滑，8—10×3—4μ；胞子紋は帯桃黄色；褶側及稜に嚢状体あり，大形，広円錐形，下方便腹状，先端鋭尖，無色，70—100×18—22μ，茎及傘面にも存在す。

所在及産地

重に針葉林内，落葉間地上—秋　　本州—欧

和名　クリイロムクエタケ（栗色尨柄茸）〔今井〕

var. **latifolia** (LANGE) IMAZ. et HONGO

ヒロハクリイロムクエタケ

HONGO, Bull. Facul. Lib. Arts Educ. Shiga Univ. 7:42, f. 1, d–e. 1957.
（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，36, f. 76, pl. 14, f. 76. 1957）

Naucoria cucumis (FR.) GILL. var. *latifolia* LANGE

傘は径13—20mm，鐘形～饅頭形，中心に小乳頭状突起あり；表面は橙褐色，湿時線条あり；縁は褶より突出す；褶は殆ど離生，初め白色，のちやや肉色，中央部幅広くしてほぼ三角形；茎は3×0.15cm，下部暗褐色，上部淡色にて微毛を密生す；胞子は狭楕円形～円筒形，7—10.5×3.5—4μ；嚢状体は44—67×12—16μ。

所在及産地

林内地上，路傍草間—夏秋　　本州—欧

和名　ヒロハクリイロムクエタケ
（広褶栗色尨柄茸）〔今関及本郷〕

（IX） Marasmieae FAYOD ホウライタケ族

FAYOD, Ann. Sci. Nat. Bot. VIII, 9:340. 1889 (ut *Marasmiês*)—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl. Fam. 1, 1**: 222. 1900—SINGER, Agaricales, 314. 1949.

Mycenês FAYOD, l. c. 310. 1889.

Myceneae R. MAIRE, Publ. Junte Ciènc. Nat. Barcelona, 56. 1933.

担子柄は正常にてカーミン着色顆粒を含まず；子実体の習性は通常クヌギタケ（*Mycena*），クヌギタケ-ホウライタケ（*Mycena–Marasmius*），エノキタケ-ホウライタケ（*Collybia–Marasmius*），ヒダサカズキタケ-ホウライタケ（*Omphalia–Marasmius*）型，或は稀に多少ヒラタケ（*Pleurotus*）型となる（この場合は子実体は極めて小形にて薄くして型的のホウライタケの茎を有し，若し無茎なれば擬糊性なる疎長毛の上表皮層を有す）（或は退歩して子実体はコップ形（ワンタケ *Peziza* 型）或有茎のウロコタケ *Stereum* 型となる）。傘の上表皮層の菌糸は屢々擬糊性或は糊性，然らざれば長毛又は皮嚢体を有する子実層状層なるか，或は1層又は多層の短細胞被なり，更に上表皮層が上記の如くならざれば傘肉及び胞子は共に或は何れか糊性なり；肉は稀に幾分膠化し，菌糸は通常厚膜にて強靱，或は薄膜にて脆肉質；黒色根状束は存在或は欠如，存在せば傘肉は糊性なり；菌糸は少くとも正常形のものに於ては菌絆を有す；乳汁は存在或は欠如，存在する時は傘肉は糊性なり；甚だ種々なる基物上に生じ，生死の植物体上，砂上及び腐蝕物上，深蘚中に生じ，他菌上に寄生するものなし；菌核を有せず。

SINGER 氏は2亜族 13 属及び退歩属として3属（*Hymenogloea*, *Lachnella*, *Merismodes*）を収む。

亜族検索表

A．胞子は非糊性；子実体は乾燥後湿気を得れば復元す；上表皮層は擬糊性或は糊性の毛，或は不規則有突起なる菌糸，又は上皮の柵状配列より成る；エノキタケ，ホウライタケ或はヒラタケ型をなす。
　（1）ホウライタケ亜族　**Marasmiinae** (191)

B．胞子は糊性或は稀に非糊性；上表皮層は擬糊性ならず；平滑，匍匐，無色の糸状菌糸より成り，或は他の構造をもつ，ヒラタケ型ならず。
　（2）クヌギタケ亜族　**Myceninae** (202)

（1） Marasmiinae SING. ホウライタケ亜族

SINGER, Agaricales, 317. 1949.

胞子は非糊性或は幾分擬糊性；菌糸は糊性或は非糊性；嚢状体は存在或は欠如，存在せば非糊性或は擬糊性；上表皮層の菌糸は擬糊性或は非糊性にて，この層は決して平滑，匍匐，無色，糸状の菌糸より成らず；4属及び3退歩属を含む。

本邦既知属検索表

A．上表皮層は非糊性にて，本質的には擬糊性ならず；肉は糊性或は非糊性。

a．上表皮層は子実層状の層より成り，これより長毛或は皮嚢体を生ずるも，傘は肉眼的には毛状ならず；胞子はむしろ小形；嚢状体存在；菌絆は屢々欠如；肉は非糊性。

マツカサキノコ属 **Pseudohiatula** (192)

b．上表皮層は不整或は子実層状に配列する菌糸或は短細胞被より成り，その間に分化せる毛或は皮嚢体なし；胞子は形及大さ変化；嚢状体存在；菌絆あり。

ホウライタケ属 **Marasmius** (194)

B．上表皮層は擬糊性或は糊性；肉は非糊性。

a．エノキタケ或はホウライタケ型；茎は往々偏心生となることあるも明かに存在；胞子は擬糊性ならず；嚢状体は擬糊性ならず。

ニセホウライタケ **Crinipellis** (200)

b．ヒラタケ型にて無茎；胞子或は嚢状体の何れか擬糊性。 **Chaetocalathus** (202)

Pseudohiatula (SING.) SING.
マツカサキノコ属

SINGER, Notulae Crypt. e Sect. Crypt. As. Sc. U. S. S. R. 10-12:8. 1938; Agaricales, 318. 1949.

Mycena subgen. *Pseudohiatula* SING. Beih. Bot. Centralbl. 56, Abt. B:165. 1936.

子実体はクヌギタケ (*Mycena*) 或はエノキタケ (*Collybia*) 型；傘は非粘性，丸山形，肉眼的に見ゆる毛なきも，レンズ或は顕微鏡下にて毛或は皮嚢体は甚だ著し；外皮の色素はセピア～暗褐色，帯黄-黄土-蜜色或は欠如；托は褶状；褶は垂生ならず；胞子紋は純白色；胞子は無色，平滑，非糊性，小形，洋梨形，楕円形，類円筒形或は卵形，薄膜；嚢状体は褶側及稜に存在す；托実質は整型或は類整型；茎は細くして軟骨質，或標品にては幾分剛直，屢々偽根を有す，皮嚢体に被わる；傘肉は甚だ薄く，生時柔肉質；実質は非糊性，温帯種に於ては菌絆なく，熱帯種にては往々菌絆を有するも甚だ少数にて分散す；羊歯の生或は死体，毬果，落果及熱帯樹皮，腐木上等に生ず；約5種を知らる，食用菌。

（本属名は pseudo-〔羅〕(偽の)，hio〔羅〕(開く) より出ず）

基準種 *P. Cyatheae* (SING.) SING.

本邦既知種検索表

A．松柏類の毬果に着生す。

a．嚢状体はやや頭状にて，少くとも尖鋭ならず。

α．嚢状体は長形，膜甚だ厚く；味温和。

マツカサキノコ ***P. esculenta*** (192)

β．嚢状体は短大，膜前者より薄し；味温和。

マツカサキノコモドキ ssp. ***pini*** (193)

b．嚢状体は紡錘形，先端むしろ鋭く，膜薄し；味苦し。

マツカサシメジタケ ssp. ***tenacella*** (193)

B．針葉樹，多くは杉の埋土枝に着生；嚢状体は有柄楕円形或は広棍棒形，厚膜。

スギエダタケ ***P. ohshimae*** (194)

Pseudohiatula esculenta (WULF. ex FR.) SING.
マツカサキノコ

SINGER, Agaricales, 320. 1949.

Agaricus esculentus WULF. in JACQUIN, Miscell. 2:103, pl. 14, f. 4. 1778—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 388. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1: 131. 1821; Epicr. Myc. 92. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:166. 1857; Hymen. Eur. 121. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl, 1:533. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 118. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:60. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 152, f. a (no. 204). 1883; Handb. Austr. Fungi, 20. 1892—WINTER, Pilze, 1:774. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:644. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:264. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):645. 1912.

Agaricus clavus PERS. Myc. Eur. 3:150. 1828.

Collybia esculenta QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:97. 1872—GILLET, Champ. Fr. 325. 1874—KARSTEN, Hattsv. 3:154. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 103. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 227. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 221. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:138. 1893; Brit. Fungi, 144. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 65. 1908—RICKEN, Blätterp. 414, pl. 109, f. 1. 1915—BRESADOLA, Icon. Myc. 5:pl. 210, f. 1. 1928—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ, 43:121, pl. 3, f. 6. 1938—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 94. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2: 268. 1957.

（今関，原色きのこ，pl. 32(中). 1942—原，日．菌．目．84. 1954）

Collybia clavus QUÉL. Enchir. Fung. 30. 1886.

Pseudohiatula esculenta ssp. *typica* SING.(1943); Agaricales, 320. 1949.

Pseudohiatula esculenta ssp. *esculenta* IMAZ. et HONGO, 原色日．菌．図鑑，37, f. b. 1957.

子実体は孤生，群生或はやや叢生；傘は1—2.5cm,

初め円錐状鐘形或は丸山形，のち扁平或はやや中丘あり；表面は無毛，色変化し，帯白色，黄土色～暗褐色，通常中央暗色；肉は白色或は淡色，縁に於て薄し，味及臭殆どなし；褶は彎状狭生或は円状狭生，白色，密，狭幅；茎は長さ 2—6 cm，或はそれ以上に及び，幅 2—3 mm，同幅，黄土色～粘土色，或は傘面とほぼ同色，頂部白粉状，基部は長く伸びて根状をなし，根毛状軟毛繊維を有し，屢々土粒を点綴し，埋在毬果に連る；胞子は楕円形，平滑，5—7.5×3—4.5 μ；胞子紋は白色；嚢状体は褶側及稜に存し同形，嚢状棍棒形，多くは中部に僅か縊れありて頭状，甚だ厚膜；可食。

所在及産地

林内埋在毬果上—春～夏

北海道，本州—欧．北米．濠

和名 マツカサキノコ（毬果蕈）

ssp. **pini** SING.

マツカサキノコモドキ

SINGER (1943); Agaricales, 320. 1949.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，37，f. 77，f. a，pl. 14，f. 77. 1957）

Agaricus conigenus FRIES, Syst. Myc. 1:132. 1821; Epicr. Myc. 89. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:158. 1857; Hymen. Eur. 118. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:535. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:57. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 130 (no. 196). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:69. 1876—WINTER, Pilze, 1:776. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:645. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:265. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):647. 1912.

Collybia conigena QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:95. 1872; Enchir. Fung. 30. 1886—GILLET, Champ. Fr. 321. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:151. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:223. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 237. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:132. 1893; Brit. Fungi, 141. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 149. 1900—W.G. SMITH, Brit. Basid. 63. 1908—(non BRESADOLA, RICKEN, LANGE)

Marasmius conigenus FAVRE, Schw. Zeits. Pilzk. 17:164. 1936—WAKEFIELD et DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 79, pl. 25, f. 2. 1950—MATSUDA & HONGO, Jour. Jap. Bot. 30:152, f. 3. 1955.

Marasmius tenacellus ssp. *conigenus* KONR. et MAUBL. Agaricales, 1:296. 1948.

Collybia stephanocystis KÜHN. et ROMAGN. Fl. Analyt. Champ. Super. 94. 1953.

本菌の肉眼的諸性質は原種と殆ど同様にて区分し難きこと多し，只顕微鏡的性質に於て明かに異る；胞子は楕円形，平滑，5—6×2.5—3 μ（或は 3.5—5.5×2—3 μ）；稜及褶側嚢体は散生し同形，広棍棒形或は有柄楕円形，往々上部に僅か縊れありて，やや頭状となり，決して尖鋭ならず，膜はやや厚きも著しからず，時に先端に結晶を付す，40—46×12—14 μ；茎嚢体は 57—235×11—15 μ；稜嚢体は48—80×6.5—9.5 μ。

所在及産地

林内埋在毬果上—晩秋～春　　本州—欧

和名 マツカサキノコモドキ（擬毬果蕈）

ssp. **tenacella** SING.

マツカサシメジタケ

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，f. c. 1957）

Agaricus tenacellus PERS. Obs. Myc. 1:50. 1796; Syn. Meth. Fung. 387. 1801; Myc. Eur. 3:152. 1828—FRIES, Syst. Myc. 1:131. 1821; Epicr. Myc. 92. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1: 165. 1857; Hymen. Eur. 121. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:533. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:60. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 152, f. b (no. 204). 1883; 8:pl. 649, (no. 1145). 1851—SCHROETER, Pilze Schles. 1:643. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:264. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 645. 1912.

（安田，植．雑．28:30. 1914—中路，植．雑．30:102. 1916）

Agaricus conigenus PERS. Syn. Meth. Fung. 388. 1801. (non FRIES)

Collybia tenacella QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:97. 1872—GILLET, Champ. Fr. 325, c. ic. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:227. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 223. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:139. 1893; Brit. Fungi, 144. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 65. 1908—KONRAD, Bull. Soc. Myc. Fr. 47:129. 1931; & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3:pl. 206. 1932—LANGE, Fl. Agar. Dan. 2: 13, pl. 44, f. F. 1936—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 94. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:268. 1957.

（白井，日．菌．目．ed. 2. 165. 1917; ed. 3. 97. 1927）

Marasmius conigenus KARST. Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 102. 1889—REA, Brit. Basid. 521. 1922. (non FRIES)

Collybia conigena RICKEN, Blätterp. 413, pl. 109, f. 3. 1915—BRESADOLA, Icon. Myc. 5:pl. 210, f. 2. 1928.

Marasmius tenacellus KÜHNER—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:296. 1948—SINGER, Agaricales, 320. 1949.

(川村, 日. 菌. 図説, n. 8. 1929; 日. 菌. 図鑑, 4: 421, f. 415. 1954—牧野, 日. 植. 図鑑, 1021, f. 3060. 1940—広江, 応用菌蕈学, 1188. 1941—原, 日. 菌. 目. 83. 1954)

Marasmius esculentus WAKEFIELD et DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 79, pl. 25, f. 1. 1950.

本菌の肉眼的諸性質は原種と殆ど同様にて区分し難きこと多し; 只顕微鏡的性質に於て明かに異る; 胞子は楕円形, 時に僅か腎臓形, 平滑, 5—8×3—4μ; 褶側稜嚢体は紡錘形にて先端鋭頭, 薄膜, 50—70×10—15μ。

所在及産地

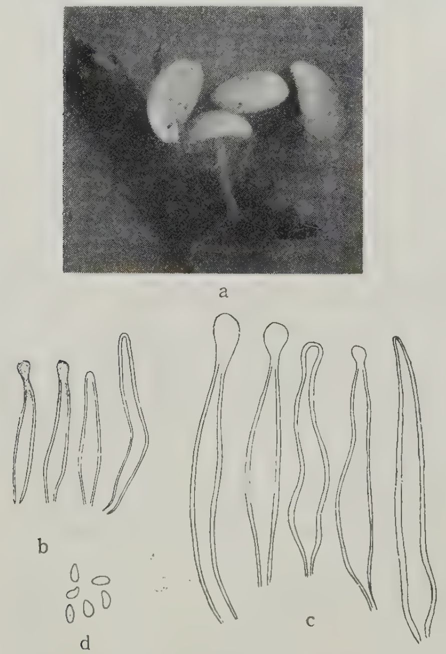
林内埋在毬果上—冬　本州—欧

和名 マツカサシメジタケ (毬果湿地茸)〔安田〕
マツカサツエタケ (毬果杖茸)〔川村〕

Pseudohiatula ohshimae HONGO et MATSUDA
スギエダタケ

HONGO & MATSUDA, Jour. Jap. Bot. 30:76, f. 2. 1955.
(今関及本郷, 原色日, 菌. 図鑑, 37. 1957)
Marasmius ohshimae HONGO et MATSUDA, l.c. 76. 1955.

子実体は孤生或は群生; 傘は径 1—5 cm, 丸山形, のち開張し, 屢々鈍中丘あり, 遂に中央僅か圧低さる; 表面は類吸水性にて粘性ならず, 純白色, 或は



第 79 図　スギエダタケ Pseudohiatula ohshimae
a. 子実体 ×1/2　b. 嚢状体 ×400
c. 同拡大 ×800　d. 胞子 ×400 (大谷氏)

中央の方灰色或は鼠色を帯ぶ, 無毛, レンズ下にては毛状, 往々放射状皺ありて特に中央に於て著し, 縁は平坦, 湿時僅か線条あり; 肉はやや薄く, 傘に於て白色或は皮下灰色を帯び, 茎に於て淡黄土色, 臭は微弱, 味温和; 褶は狭生, 白色, やや密或はやや疎, 広幅, 便腹状, 稜は平坦; 茎は 3—7×0.15—0.4 cm, 同幅, 往々圧辺, 屢々長根を有す, 粉状〜微細絨状, 暗黄色〜黄土色, 頂部白色, 軟骨質, 中空; 胞子は楕円形〜円筒形, 平滑, 非糊性, 4.5—6.5×2—3μ (或は 3.5—5.5×1.5—2.5μ); 褶側及稜の嚢状体は同形, 散生, 楕円形にて急激に細き柄を有し, 或は往々広棍棒形, 拡大部は厚膜, 結晶を被むり, 32—50×15—29μ, 傘の上表皮層は子実層状をなし, 長き傘嚢体を混生す, その嚢体は 80—230×10—29μ, 上方狭細し, 先端通常頭状をなす, 幾分厚膜なり, 茎嚢体は 22—225×4.5—18μ。

所在及産地

針葉樹(多くは杉)の埋れる落枝上—秋〜冬
本州, 九州

和名 スギエダタケ (杉枝茸)〔本郷及松田〕

Marasmius FR.
ホウライタケ属

FRIES, Gen. Hymen. 9:1836—SINGER, Agaricales, 321. 1949.

Heliomyces LÉV. Ann. Sci. Nat. III, 2:117. 1844.

Androsaceus PATOUILLARD, Hymen. Eur. 105. 1887.

Chamaeceras REBENT. (1804) ex O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):454. 1893.

Mycenitis EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5: 414. 1909.

Scorteus EARLE, l. c. 415. 1909.

Collybiopsis (SCHROET.) EARLE, l. c. 415. 1909.

Marasmius sect. *Collybiopsis* SCHROETER, Pilze Schles. 1:559. 1889.

Polymarasmius MURRILL, N. Am. Fl. 9:286. 1915.

子実体はエノキタケ (*Collybia*), クヌギタケ (*Mycena*), 或は殆どヒダサカズキタケ (*Omphalia*) 型にて強靱にて再生の質を有す, 茎に於てこの性著しく, 茎は屢々暗色にて紐状或は馬の毛状をなす; 傘の上表皮層は不整或は子実層状に配列する菌糸或は短細胞被より成り, その間に分化せる毛又は皮嚢体の抽出を見ず; 甚だ古き子実体にては上表皮層は擬糊性ならざるか或は僅かこの性を有す; 屢々上表皮層菌糸の最上端に細き附属物が担子嚢に於ける小柄の如く直立し, 箒様の観を呈す; 胞子は無色, 薄膜, 形

及び大さに変化あり，形は円筒形或は楕円形なるを最も普通とするも，類球形～棍棒形，或は三カ月形（*Fusarium* 型）のものあり，平滑，単一，非糊性の膜を有す；担子柄は正常；嚢状体，或は棱嚢体，或は両者共に存在す，褶側嚢状体は屢々厚膜を有す；小担子柄は紡錘形；茎は強靱軟骨状，軟骨状細形或は馬毛状，往々黒色根状束より起る，仮根様繊維，或は小形の擬根，或は少くとも往々基部に於て裂けて繊維状となり基物に着生，又は基部に盤なく直接挿入す，傷時乳汁を出さず；肉は屢々厚膜の菌糸を含む；すべての菌糸は菌絆を有し，糊性或は非糊性，若しも非糊性なれば上表皮層は通常球形細胞より成る；基物に種々あり，林の内外に於ける地上，落葉其他生死植物体上に生ず；半被実；汎布，約66種を知らる，菌根を作るもの，食用とさるるものあり。

（本属名は maraino〔希〕（乾枯）より出ず）

基準種 *M. rotula* (L. ex FR.) FR.

本邦既知種検索表

A．茎は幾分偽根を有し，或は菌糸によりて着生物に附着す；中形種にて傘径 1.5cm 以上。

a．茎は強靱なるも真の軟骨質或は角質ならず；傘の上表皮層は繊維状，傘は径 2—6cm，赤褐色～黄肉色；茎は汚白色基部に微に絨毛あり或は殆ど無毛；褶は疎にて厚し；蒜臭なし；地上生。 シバフタケ ***M. oreades*** (195)

b．茎は軟骨質，下部赤褐色にて密毛あり；傘の上表皮層は細胞状，傘は径 2—4cm，淡褐～黄土褐色，乾時帯白色；褶は密～やや疎；強き蒜臭を有す；落葉上。

シロカレハタケ ***M. prasiosmus*** (196)

B．茎は無根或は附着菌糸なく直接着生物に即着す；一般にむしろ小形或は微小種にて針金状茎を有す。

a．褶末に襟帯を有し茎より離生す；褶は茎周に車のこしき状をなす。

α．傘は白色或はクリーム色，径 2—5mm。

シロヒメホウライタケ ***M. rotula*** (197)

β．傘は赤褐色，径 2—5mm。

ヒメホウライタケ ***M. graminum*** (197)

＊基本種とは重に細き黒色根状菌糸束より子実体の生ずるにより異る。

ウマノケタケ var. ***equicrinis*** (198)

b．褶末に襟帯なし；褶は茎周に蓮葉脈状をなす。

α．傘は黄土色，肉桂色或は淡紅色，径 5—15mm。

ハリガネオチバタケ ***M. siccus*** (198)

β．傘は赤褐色～茶褐色，径 5—10mm。

オチバタケ ***M. androsaceus*** (199)

Marasmius oreades (BOLT. ex FR.) FR.

シバフタケ

FRIES, Epicr. Myc. 375. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:218. 1863; Hymen. Eur. 467. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 219, pl. 14, f. 5. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:210. 1867—COOKE, Hankb. Brit. Fungi, 1:233. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7: pl. 1118 (no. 1072). 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:219. 1872; Enchir. Fung. 142. 1886—GILLET, Champ. Fr. 368, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:229. 1876; Hattsv. 1: 166. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 107. 1889—WINTER, Pilze, 1:512. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:510. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3: 156. 1893; Brit. Fungi, 148, pl. 13, f. 5. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 45. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 131, f. 129. 1903—W. G. SMITH, Brit Basid. 301. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 50, pl. 50, f. 107. 1910—MURRILL, Mycologia, 2: 44, pl. 19, f. 3. 1910—RICKEN, Blätterp. 75, pl. 24, f. 5. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich 61. 1918—LANGE, Agar. Denm. 4:17, f. 4. 1921; Fl. Agar. Dan. 2:22, pl. 46, f. F. 1936—REA, Brit. Basid. 519. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 122, pl. 57. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 10:pl. 490. 1929—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:138. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:302. 1948—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 79, pl. 24, f. 10. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 85, f. 56. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:266, pl. 36, f. 1. 1957.

（原，日．菌．目．191. 1954—川村，日．菌．図鑑，3: 330, f. 323. 1954—MATSUDA & HONGO, Jour. Jap. Bot. 30:153. 1955）

Agaricus caryophyllaeus SCHAEFF. Fung. Bavar. 4:Ind. 33, pl. 77. 1774.

Agaricus oreades BOLT. Hist. Fung. Halif. pl. 151. 1791—FRIES, Syst. Myc. 1:127. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:534. 1844.

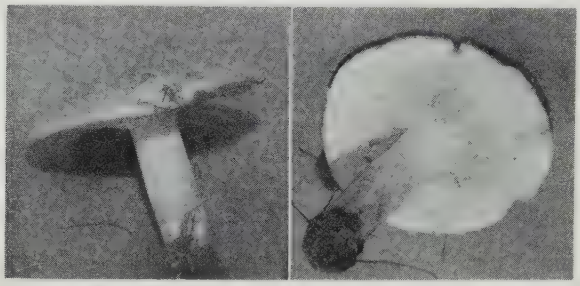
Agaricus pratensis SOW. Col. Fig. Engl. Fungi, 3:pl. 247. 1803.

Marasmius caryophylleus SCHROET. Pilze Schles. 1:561. 1886—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL. Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:229, f. 113. G. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):390, pl. 69 H, f. 1-2. 1912—MURRILL, N. Am. Fl. 9:271. 1915—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 472. 1915.

Chamaeceras caryophylleus O. KUNTZE, Rev. Gen. 3(2):455. 1898.

Scorteus oreades EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5:415. 1909.

子実体は群生し屢々菌輪を作る；傘は径 2—6 cm, 丸山形～鐘形，鈍頭或は広き中丘あり；表面は吸水性，幼時及湿時赤褐色，乾時黄肉色或は帯白色に褪色す，無毛，平坦或は湿時線条あり，縁は老時往々



a b



c

第 80 図 シバフタケ Marasmius oreades
a．子実体表面 b．同裏面 ×1/2
c．胞子 ×400 （大谷氏）

波状をなす；肉は中盤に於てやや厚く，淡色或は黄色，幾分強靱にて肉質，臭及味よし；褶は後方円く或は殆ど離生，蒼白色或は微に藁色を帯ぶ，むしろ疎，広幅，屢々横脈あり；茎は 4—8×0. 2—0. 5 cm, 同幅，汚白色，微に絨毛を被むり或は殆ど平滑，甚だ強靱なるも軟骨質ならず，多くは中実；胞子は卵状紡錐形，平滑，7—9×4—5 μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地
芝生，路傍，庭園等地上一夏秋
北海道,本州,九州一欧.北米.濠.亜(小亜.西比)

和名 シバフタケ（芝生茸）〔今井〕

Marasmius prasiosmus (FR. ex FR.) FR.
シロカレハタケ

FRIES, Epicr. Myc. 376. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:219. 1863; Hymen. Eur. 468. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:197. 1872; Enchir. Fung. 143. 1886—GILLET, Champ. Fr. 340, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:229. 1876; Hattsv. 1:167. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 108. 1889—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 346. 1883; Illus. Brit. Fungi, 7:pl. 1120 (no. 1074). 1890—WINTER, Pilze, 1:511. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:515. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 468. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1:561. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:158. 1893; Brit. Fungi, 150. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:229. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 302. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1):387. 1912—PENNINGTON, N. Am. Fl. 9:269. 1915—RICKEN, Blätterp. 73, pl. 24, f. 4. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 68. 1918—LANGE, Agar. Denm. 4:19, f. 9. 1921; Fl. Agar. Dan. 2: 24, pl. 47, f. D. 1936—REA, Brit. Basid. 520. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3: pl. 214. 1925; Agaricales, 1:295. 1948—SINGER, Agaricales, 325. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 85, f. 56. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:259, f. 195, B. 1957.（川村，日．菌．図鑑，3:334, f. 325. 1954）

Agaricus alliaceus SCOP. Fl. Carn. ed. 2, 2:454. 1772.

Agaricus prasiosmus FR. Obs. Myc. 2: 153. 1818; Syst. Myc. 1:148. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:524. 1844.

Chamaeceras prasiosmus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):456. 1898.

Marasmius alliatus (non SCHROETER) (KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 5, f. 22-25. 1913—白井, ed. 2. 339. 1917; ed. 3. 199. 1927—原，日．菌．目．190. 1954）

子実体は群生；傘は径 2—4 cm，鐘形～丸山形，のち扁平となる，鈍頭；表面は僅か吸水性，湿時淡褐色～黄土褐色，乾時帯白色～藁黄色，中央濃色，多少皺を有す，縁辺波状；肉は薄く，淡色，臭は強



a



b

第 81 図 シロカレハタケ Marasmius prasiosmus
a．子実体 ×2/3
b．胞子 ×300
（大谷氏）

く，蒜臭；褶は直状垂生，のち離生，不明瞭なる襟帯となる，傘面と同色或は淡色，密～やや疎，狭幅，厚し；茎は 5—8×0. 2—0. 3 cm，同幅，上方白色にて無毛，下半部赤褐色にて天鵞絨状の密毛を被むり棍棒形の観を呈す，往々下端部肥大して彎曲し腐葉に附着す，通常捩曲し，強靱，軟骨質，中空；胞子は長楕円形にて基端狭細にて尖り，やや屈曲す，平滑，9—12×3. 5—5 μ；胞子紋は白色；嚢状体なし．

所在及産地
広葉落葉上一夏秋 本州，九州一欧．北米

和名 シロカレハタケ（白枯葉茸）〔川村〕

Marasmius rotula (L. ex FR.) FR.

シロヒメホウライタケ

FRIES, Epicr. Myc. 385. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:229. 1863; Hymen. Eur. 477. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 222. pl. 14, f. 7. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:211. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:238. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7:pl. 1129, f. a (no. 1084). 1890; Handb. Austr. Fungi, 86. 1892—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:223. 1872; Enchir. Fung. 145. 1886—GILLET, Champ. Fr. 363, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc, Fenn. 3:232. 1876; Hattsv. 1:176. 1879—WINTER, Pilze, 1:505. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:541. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 482. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1:558. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:168. 1893; Brit. Fungi, 151. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:228, f. 113, c. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 305. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 50, pl. 51, f. 109. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):382. 1912—PENNINGTON, N. Am. Fl. 9:282. 1915—RICKEN, Blätterp. 80, pl. 25, f. 10. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 78. 1918—LANGE, Agar. Denm. 4:20, f. 13. 1921; Fl. Agar. Dan. 2:26, pl. 48, f. H. 1936—BRESADOLA, Icon. Myc. 11:pl. 502, f. 1. 1929—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3:pl. 220, f. 1. 1934; Agaricales, 1:299. 1948—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:140. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 83, pl. 24, f. 6. 6. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt, Champ. Super. 83. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2: 258, f. 33. 1957.

(原，日．菌．目．191. 1954)

Agaricus rotula SCOP. Fl. Carn. ed. 2. 2:456. 1772—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, pl. 95. 1797—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 467. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:136. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:530. 1844.

Micromphale collariatum S. F. GRAY, Nat Arr. Brit. Pl. 1:622. 1821.

Androsaceus rotula PAT. Hymen. Eur. 105. 1887; Ess. Tax. 141. 1900—KARSTEN, Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 110. 1889—REA, Brit. Basid. 531. 1922.

Chamaeceras Rotula O. KUNTZE, Rev. Gen. 3(2):455. 1898.

子実体は群生或は散生；傘は径 2—5 mm，或はそれ以上に及び，半球形～丸山形，中窩を有し，薄膜質；表面は白色或はクリーム色，中窩部暗色，無毛，放射状に襞を有し車のこしきの如し，光沢なし，縁は海扇状に凹凸す；肉は傘に於て白色，茎に於て帯黒色，臭及味なし；褶は襟帯に附着し，襟帯は茎より離生す，白色，乾時帯黒色となる，甚だ疎，広幅，通常凡て同長；茎は 2—5×0.1 cm，糸状，同幅，黒色或は黒褐色，頂部淡色，無毛，光沢あり，角質，中空；胞子は長核子形，平滑，6—9×3—4 μ；胞子紋は白色；嚢状体は紡錘形，30—35×4—5 μ。

所在及産地

林内落葉枝上及生幹根隙—夏秋

北海道，本州—欧．北米．阿．濠．亜（小亜．西比）

和名 シロヒメホウライタケ（白姫蓬萊茸）〔今井〕

Marasmius graminum (LIB.) BERK. et BR.

ヒメホウライタケ

BERKELEY & BROOME, Outl. Brit. Fung. 222, pl. 14, f. 8. 1860—FRIES, Monogr. Hymen. Suec. 2:229. 1863; Hymen. Eur. 477. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:239. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7:pl. 1129, f. b (no. 1084). 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:223. 1872; Enchir. Fung. 145. 1886—GILLET, Champ. Fr. 363, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:232. 1876; Hattsv. 1: 176. 1879—WINTER, Pilze, 1:504. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 542. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 481. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1:557. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:169. 1893; Brit. Fungi, 151. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:228. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 305. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1):383. 1912—RICKEN, Blätterp. 80, pl. 25, f. 9. 1915—PENNINGTON, N. Am. Fl. 9: 283. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 79. 1918—LANGE, Agar. Denm. 4:21, f. 16. 1921; Fl. Agar. Dan. 2:26, pl. 48, f. D. 1936—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:141. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:300. 1948—SINGER, Agaricales, 337. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 83, pl. 24, f. 9. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 83. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:258, f. 194, B. 1957.

（安田，植．雑．29:169. 1915—白井，日．菌．目．ed. 2. 339. 1917; ed. 3. 200. 1927—広江，応用菌蕈学，1147, 1941—原，日．菌．目．191. 1954—MATSUDA & HONGO, Jour. Jap. Bot. 30:153. 1955—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，37, f. 78, pl. 14, f. 78. 1957)

Agaricus graminus LIBERT, Pl. Crypt. Ard. Exs. n. 119. 1832.

Androsaceus graminum PAT. Hymen. Eur. 105. 1887—KARSTEN, Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 110. 1889—REA, Brit. Basid. 531. 1922.

Chamaeceras graminum O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):456. 1898.

子実体は群生；傘は径 2—5 mm，或はそれ以上に及び，丸山形～扁平，中丘あり；表面は赤褐色にて放射状の溝あり，溝は淡色，中丘は暗色；肉は極め

て薄く紙の如し；褶は茎より離れたる襟帯に附着，クリーム色，甚だ疎にて11—13，車のこしき状をなす，やや便腹状，横脈あり；茎は長さ 1—4cm，糸状，黒色～濃褐色，光沢あり，頂部白色，無毛，中空；胞子は核子形，平滑，8—10×4—5μ；胞子紋は白色。

所在及産地

禾本及莎草枯稈及葉上—夏秋

北海道，本州—欧．北米．阿

和名 ヒメホウライタケ（姫蓬萊茸）〔安田〕

var. **equicrinis** (MUELL.) DENNIS

ウマノケタケ

DENNIS, Trans. Brit. Myc. Soc. 34:416. 1951.

Marasmius equicrinis MUELLER, Grev. 8:153. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:553. 1887—COOKE, Handb. Austr. Fungi, 87, pl. 6, f. 44. 1892.

(PETCH, Diseases of Tea Bush, 16, 85, 203, f. 11(4–5), f. 31. 1923—HINO & HIRATA, 栃内，福士．還暦記念文集，17. 1955—安部及河野，西京大学学術報告，農学，9:41, pl. 1. 1957)

Chamaeceras Equicrinis O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):456. 1898.

? *Capillaria* sp.—白井光太郎，植物妖異考，249, f. 1925.

? *Marasmius* sp. カミゲタケ—松浦勇，茸類辞典，110, f. 131. 1933.

基本種とは重に細き黒色根状菌糸束より子実体を生ずるにより異なる。根状菌糸束は枝に着生し多数群生す，黒色にて光沢あり馬毛に酷似し互に纒絡し乱髪の如し，各菌糸束はその長さ不定なるも 60cm 以上に及ぶものあり，屢々分岐し，各所より数個の子実体を散生す；子実体は径 6—7mm，半球形～丸山形，褶に該当する放射状の深き溝あり，膜質，中央白黄色，周辺白色，のち黄褐色となる；褶は甚だ疎にて 7—8，車のこしき状をなし，襟帯に連る，傘面より淡色；茎は糸状，長さ 1—2.5cm，黒色，光沢あり；胞子は核子形，平滑，8.5—11×3—5μ；紋は白色。

所在及産地

チャ其他の枝上—夏秋

本州，九州—濠．亜(印)．欧

和名 ウマノケタケ（馬毛茸）

茶髪の毛病菌〔安部及河野〕

？カミゲタケ（髪毛茸）〔松浦〕

Marasmius siccus (SCHW.) FR.

ハリガネオチバタケ

FRIES, Epicr. Myc. 382. 1838—SACCARDO, Syll. Fung. 5:535. 1887—PENNINGTON, N. Am. Fl. 9: 283. 1915—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:139. 1938—SINGER, Agaricales, 326. 1949.

(KAWAMURA, Ill. Jap. Fungi, pl. 4, f. 24–28. 1912; 日．菌．図説，n. 63. 1929; 日．菌．図鑑，3: 335, f. 326. 1954—LLOYD, Myc. Writ. 4, Lett. 54: 3. 1915—安田，植．雑．29:192. 1915—白井，日．菌．目．ed. 2. 341. 1917; ed. 3. 201. 1927—松浦，茸類辞典，105, f. 121. 1933; 応用菌蕈学，1149. 1941—牧野，日．植．図鑑，1024, f. 3069. 1940—今関，原色きのこ，pl, 43(右). 1943; 及土岐，林．試．研．報．67:46. 1954—原，日．菌．目．191. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，38, f. 79, pl. 14, f. 79. 1957)

Agaricus siccus SCHW. Schr. Nat. Ges. Leipzig, 1:84. 1822.

Marasmius campanulatus PECK, Rep. N.Y. Sta. Cab. 23:126. 1872—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 535. 1887—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:228. 1900.

Marasmius fulviceps CLEMENTS, Bot. Surv. Nebr. 4:20. 1896.

Chamaeceras siccus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):457. 1898.

Marasmius Clementsianus SACC. et SYD. Syll. Fung. 14:101. 1899.



第82図 ウマノケタケ Marasmius graminum var. equicrinis ×1 （大谷氏）

子実体は群生或は孤生；傘は径 5—15 mm，時に 2cm 以上に及ぶも 3cm を超すものを見ず，円錐形或は鐘形，中央低山形，薄膜質；表面は乾燥，黄土色，肉桂

色或は淡紅色，中央濃色，放射状に濃色の線ありて蓮葉様なり；褶は殆ど離生，白色，両端狭細，少数にて僅かに 13—15 内外，甚だ疎；茎は 3.5—10×0.05—0.1 cm，細き針金状，黒色～黒褐色，無毛，光沢あり，往々波曲，強靱，中空；胞子は核子形，平滑，18—22×4—5.5 μ；胞子紋は白色。

所 在 及 産 地

広葉林内落葉上—夏秋　北海道，本州—北米

和 名　ハリガネオチバタケ（針金落葉茸）〔川村〕

Marasmius androsaceus (L. ex FR.) FR.

オチバタケ

FRIES, Epicr. Myc. 385. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:229. 1863; Hymen. Eur. 477. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 222. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:211. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:239. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7: 1129, f. c(no. 1084). 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:223. 1872; Enchir. Fung. 145. 1886—GILLET, Champ. Fr. 363, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:232. 1876; Hattsv. 1:177. 1879—WINTER, Pilze, 1:504. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:543. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 480. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1:557. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:169. 1893; Brit. Fungi, 151. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:228. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 306. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):382. 1912—PENNINGTON, N. Am. Fl. 9: 284. 1915—RICKEN, Blätterp. 81, pl. 25, f. 6. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 79. 1918—LANGE, Agar. Denm. 4:21, f. 17. 1921; Fl. Agar. Dan. 2: 27, pl. 48, f. A. 1936—BRESADOLA, Icon. Myc. 11: pl. 505, f. 2. 1929—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:298. 1948—SINGER, Agaricales, 325. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 83, pl. 24, f. 4. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Cnamp. Super. 82, f. 138. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:257, f. 192, B. 1957.

（川村，日. 菌. 図説，n. 78. 1929；日. 菌. 図鑑，3: 336, f. 327. 1954—IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 55:450. 1941—原，日. 菌. 目. 190. 1954—今関及土岐，林. 試. 研. 報. 67:45. 1954）

Agaricus androsaceus L. Sp. Plant. 2:1175. 1753—FRIES, Syst. Myc. 1:137. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:530. 1844.

Agaricus epiphyllus BULL. Herb. Fr. pl. 569, f. 2. 1791.

Micromphale perforans S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:622. 1821.

Androsaceus vulgaris KARST. Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 110. 1889.

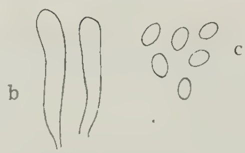
Chamaeceras androsaceus O. KUNTZE, Rev. Gen. 3(2):454, 478. 1898.

Androsaceus androsaceus PAT.—REA, Brit. Basid. 531. 1922.

子実体は群生或は散生；傘は径 5—10mm，稀に 15 mm に及ぶ，薄膜質，初め類半球形，速に開張し丸山形～扁平となり，中窩を存し，更に周縁反転し蓮葉状となる；表面は乾燥，赤褐色～茶褐色，時に紫色を帯び，中央濃色，往々帯白色を呈す，無毛，隔りたる放射状の皺条あり；肉は傘に於て白色，茎に於て帯黒色，味及臭なし；褶は直生，初め帯白色，のち汚肉色，疎，中位の幅を有し，厚く，往々叉状；茎は 3—5×0.1 cm，糸状，同幅，黒色或は赤黒褐色，上部淡色，無毛，光沢あり，屢々屈曲し，乾時捩れ，強靱にて堅し，中空；往々馬毛状黒色菌糸束より起る；胞子は倒卵形，平滑，6—7×3—4 μ；胞子紋は白色；嚢状体は長棍棒形，30—35×4—5 μ。



a



第 83 図　オチバタケ
Marasmius androsaceus
a．子実体 ×1　b．嚢状体
c．胞子 ×500　（大谷氏）

所 在 及 産 地

雑木林内枯葉枝上—夏秋　本州，九州—欧. 北米

和 名　オチバタケ（落葉茸）〔川村〕

オオヒメホウライタケ（大姫蓬莱茸）〔今井〕

疑 問 種

Marasmius acicola BERK. et CURT. Proc. Am. Acad. Sci. 4:121. 1858—SACCARDO, Syll. Fung. 5:547. 1887. (MIQUEL, Prol. Fl. Jap. 392. 1867—松村，植. 名鑑，1:49. 1904—白井，日. 菌. 目. 49. 1905; ed. 2. 337. 1917; ed. 3. 199. 1927—原，日. 菌. 目. 190. 1954) = *Chamaeceras acicola* O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):455. 1898. 本土

M. acicularis BERK. et CURT. l. c. 120. 1860—SACCARDO, l. c. 529. 1887. (松村, l. c. 151. 1904—白井, l. c. 49. 1905; ed. 2. 339. 1917; ed. 3. 199. 1927—原, l. c. 190. 1954) = *Ch. acicularis* KUNTZE, l. c. 455. 1898. 小笠原島

M. alphitodes BERK. et CURT. l. c. 120. 1858—SACCARDO, l. c. 560. 1887. (松村, l. c. 151. 1904—白井, l. c. 49. 1905; ed. 2. 339. 1917; ed. 3. 199. 1927—原, l. c. 190. 1954) = *Ch. alphitodes* O. KUNTZE, l. c. 455. 1898. 小笠原島

M. bicolor SACC. l. c. 555. 1887. (松村, l. c. 151. 1904—白井, l. c. 49. 1905; ed. 2. 339. 1917; ed. 3. 199. 1927—原, l. c. 190. 1954) = *M. dichorus* BERK. et CURT. l. c. 120. 1860 = *Ch. bicolor* O. KUNTZE, l. c. 455. 1898. 小笠原島

M. cremoriceps BERK. et CURT. l. c. 119. 1858—SACCARDO, l, c. 514. 1887. (*Miquel*, l. c. 392. 1867—松村, l. c. 151. 1904—白井, l. c. 50. 1905; ed. 2. 339. 1917; ed. 3. 199. 1927—原, l. c. 191. 1954) = *Ch. cremoriceps* O. KUNTZE, l. c. 458. 1898. 本土

M. Cryptomeriae IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 55: 450. 1941. スギノハヒメホウライタケ. 本州

M. excentripes S. ITO et IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:19. 1939. ムニンホウライタケ. 小笠原島

M. exustus BERK. et CURT. l. c. 120. 1858—SACCARDO, l. c. 547. 1887. (松村, l. c. 151. 1904—白井, l. c. 49. 1905; ed. 2. 339. 1917; ed. 3. 200. 1927—原, l. c. 191. 1954) = *Ch. exustus* O. KUNTZE, l. c. 456. 1898. 小笠原島

M. glabrescens BERK. et CURT. l. c. 120. 1858 SACCARDO, l. c. 537. 1887. (松村, l. c. 152. 1904—原, l. c. 191. 1954) = *Ch. glabrescens* O. KUNTZE, l. c. 456. 1898. 小笠原島

M. lateritiosulcatus S. ITO et IMAI, l. c. 19. 1939. カラカサホウライタケ. 小笠原島

M. Livistoniae HINO

(平田, 青島綜合調査報告, 77, f. 2. 1954--日野及平田, 栃内, 福士. 還歴記念文集, 19. 1955) ビロウカミノケタケ. 九州

M. longi UMEMURA, 富士. 植. 志. 365. 1923. (白井, l. c. ed. 3. 200. 1927—原, l. c. 191. 1954) アシナガカレハ. 本州

M. luteofuscus BERK. et CURT. l. c. 119. 1858—SACCARDO, l. c. 509. 1887. (松村, l. c. 152. 1904—原. l. c. 191. 1954) 小笠原島

M. luteolus BERK. et CURT. l. c. 119. 1858—SACCARDO, l. c. 509. 1887. (松村, l. c. 152. 1904—白井, l. c. 50. 1905; ed. 2. 339. 1917; ed. 3. 1927—原, l. c. 191. 1954) = *Ch. luteolus* O. KUNTZE, l. c. 456. 1898. 小笠原島

M. petalinus BERK. et CURT. l. c. 119. 1858—SACCARDO, l. c. 509. 1887. (松村, l. c. 152. 1904—白井, l. c. 50. 1905; ed. 2. 339. 1917; ed. 3. 200. 1927—原, l.c. 191. 1954) = *Ch. petalinus* O. KUNTZE, l. c. 456. 1898. 小笠原島

M. sarmentosus BERK. (茶業界 16(7)—白井, 日. 菌. 目. ed. 3. 200. 1917—原, 日. 菌. 目. 191. 1954. ヤマウバノカミノケ)

M. sordescens BERK. et CURT. l. c. 120. 1858—SACCARDO, l. c. 558. 1887. (松村, l. c. 152. 1904—白井, l. c. 50. 1905; ed. 2. 339. 1917; ed. 3. 200. 1927—原, l. c. 191. 1954) = *Ch. sordescens* O. KUNTZE, l. c. 457. 1898. 小笠原島

M. tener BERK. et CURT. l. c. 121. 1858—SACCARDO, l. c. 546. 1887. (松村, l. c. 152. 1904—白井, l. c. 50. 1905; ed. 2. 339. 1917; ed. 3. 201. 1927—原, l. c. 192. 1954) = *Ch. tener* O. KUNTZE, l. c. 457. 1898. 小笠原島

M. tosensis P. HENN. Hedwigia, 43:151. 1904—Bot. Jahrb. 34:599. 1905—SACCARDO, l. c. 17:46. 1905. (吉永, 植. 雑. 19:32. 1905—白井, l. c. 50. 1905; ed. 2. 341. 1917; ed. 3. 201. 1927—原, l. c. 192. 1954) 四国

M. tropicaerotula S. ITO et IMAI, l. c. 19. 1939. ネッタイシロヒメホウライタケ. 小笠原島

M. umbonifer BERK. et CURT. l. c. 120. 1858—SACCARDO, l. c. 542. 1887—S. ITO & IMAI, l. c. 18. 1939. (松村, l. c. 152. 1904) シマヒメホウライタケ. 小笠原島

Crinipellis PAT. em. EARLE
ニセホウライタケ属

PATOUILLARD, Jour. Bot. 3:336. 1889—EARLE, Bull. N.Y. Bot. Gard. 5:414. 1909—SINGER, Agaricales, 334. 1949.

子実体はエノキタケ (*Collybia*) 或はホウライタケ (*Marasmius*) 型, 稀に僅かヒラタケ (*Pleurotus*) 型; 傘及び茎は通常明かなる毛状にて擬糊性～殆ど糊性の厚膜菌糸に被われ, 平滑にてその層は傘肉より能く分離す; 托は能く発達し褶状; 稜嚢体を有す; 褶

側嚢状体は種類によつて屢々存在し，非糊性；胞子は白色或は殆ど白色；胞子は無色，諸形あり，平滑，非糊性，薄膜，熟後子実体上に残存せる胞子は幾分厚膜となり，稀に隔膜を生ずるものあり；担子柄は正常にてカーミン着色顆粒なく，4胞子，稀に小柄数少く，屢々多少変形す；茎は中心生或は偏心生，乳頭状に退歩せず；菌糸は菌絆を有す；生死植物，特に禾本科及び種々なる喬木，灌木の幹，根，枝，果実等の上に生ず，汎布，約35種を知らる，寄生菌。

（本属名は crinis〔羅〕（毛），pellis〔羅〕（皮）より出ず）

基準種 *C. stipitaria* (FR.) PAT.

本邦既知種

ニセホウライタケ ***C. stipitaria*** (201)

Crinipellis stipitaria (FR.) PAT.

ニセホウライタケ

PATOUILLARD, Jour. Bot. 3:336. 1889; Ess. Tax. 143. 1900—REA, Brit. Basid. 534. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3:pl. 221. 1934; Agaricales, 1:302. 1948—SINGER, Agaricales, 336. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 84, pl. 24, f. 3. 1950—HONGO, Jour. Jap. Bot. 27:368, f. 1(5-6). 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 80, f. 137. 1953.

(今関及土岐，林. 試. 研. 報. 67:39. 1954—今関及本郷，原色日. 菌. 図鑑，38, f. 80, pl. 14, f. 80. 1957)

Agaricus caulicinalis BULL. Herb. Fr. pl. 522, f. 2. 1790—PERSOON, Myc. Eur. 3:156. 1828—FRIES, Monogr. Hymen. Suec. 1:158, (Monogr. Collyb. 14).. 1857—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:56. 1871—SCHROETER, Pilze Schles. 1:645. 1889—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):649. 1912. (non WITHERING)

Agaricus scabellus ALB. et SCHW. Consp. Fl. 189, pl. 9, f. 6. 1805. (non FRIES)

Agaricus stipitarius FR. Syst. Myc. 1:138. 1821; Epicr. Myc. 87. 1838; Hymen. Eur. 116. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 116, pl. 5, f. 6. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 66. 1883; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 149, f. b (no. 193). 1883—WINTER, Pilze, 1:778. 1884—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:265. 1900.

Marasmius gramineus PASSERINI, Nouvo Giron. Bot. Ital. 4:111. 1872—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 483. 1915.

Marasmius epichloe FR. Hymen. Eur. 479. 1874 COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 353. 1883; Illus. Brit. Fungi, 7:pl. 1136, f. a (no. 1087). 1890—SACCARDO, Syll. Fung. 5:559. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:172. 1893; Brit. Fungi, 153. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 307. 1908.

Collybia stipitaria GILL. Champ. Fr. 319. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:149. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:216. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:129. 1893; Brit. Fungi, 140. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 62. 1908—RICKEN, Blätterp. 417, pl. 108, f. 6. 1915—LANGE, Agar. Denm. 3:19. 1917—KAUFFMAN, Agar. Mich. 776. 1918.

Collybia caulicinalis QUÉL. Champ. Jura Vosg. Suppl. 12:498. 1883; Enchir. Fung. 29. 1886.

Marasmius caulicinalis QUÉL. Fl. Myc. 315. 1888—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 476. 1915—BRESADOLA, Icon. Myc. 10:pl. 496, f. 2. 1929. (non FRIES)

(川村，日. 菌. 図鑑，3:337, f. 328. 1954)

Marasmius caulicinalis var. *scabellus* QUÉL. Fl. Myc. 315. 1888.

Marasmius stipitarius KARST. Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 102. 1889—LANGE, Fl. Agar. Dan. 2:28, pl. 49, f. E. 1936—HEIM, Champ. Eur. 2:256, f. 192, A. 1957.

Chamaeceras epichloa KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):456. 1898.

Marasmius scabellus MORGAN, Jour. Myc. 11: 202. 1905.

Androsaceus epichloe REA, Brit. Basid. 533. 1922.

Crinipellis caulicinalis REA, Brit. Basid. 534. 1922.

子実体は群生；傘は径 1—2cm，丸山形～広丸山形，開張し扁平となり圧低され小丘を存す，薄膜質；表面は乾燥，中央濃褐色にて，その周りに幾分環紋あり，地色は帯白色～帯褐色，微細の圧着束状褐色繊維を被むる，放射状線条あり，縁は初め内屈す；肉は薄く，白色，味温和，臭なく，腐敗せず；褶は直状狭生或は離生，密～やや疎，便腹状，白色，稜は平坦；茎は 2—4.5×0.1cm，同幅，褐色，下方帯黒色剛直の毛を有す，強靱，充塞のち中空；胞子は楕円状卵形，平滑，非糊性，8—10×4—5μ；胞子紋は白色；稜嚢体は夥生，棍棒形，鈍頭，無色，35—44×5—6.5μ；傘及茎上の毛は著しく長く，円筒形，厚膜，強靱，中空，有隔，鏡下にて淡黄色，250—370×4.5—7μ。

所 在 及 産 地

枯草稈，莎草及禾本根際—春～秋

本州—欧．北米

和 名 ニセホウライタケ（贋蓬莱茸）〔本郷〕

カヤネダケ（萱根茸）〔川村〕

Chaetocalathus SING.

SINGER, Lilloa, 8:518. 1942; Agaricales, 340. 1949.

子実体はヒラタケ (*Pleurotus*) 型; 傘面長毛を被むる，その毛は厚膜，平滑，擬糊性～殆ど糊性にて甚だ長くして下毛層によつて傘肉から明かに分離さるるものなり; 托は能く発達し，褶状; 胞子は無色，薄膜，往々一様に幾分厚膜となる，平滑，非糊性或は擬糊性; 担子柄はカーミン染色粒なく，4胞子或は稀に不定的少数の小柄を有す; 稜嚢体は常に存在，褶側嚢体も亦屢々存在し，分岐せずして著しく結晶を被むり或は種々に分岐す，甚だ屢々擬糊性; 茎は痕跡的なるか或は稀に欠如し，決して直接着生物に附着せず，かくの如くその作用を失えるが故に傘は直接着生物に附着す; 実質は非糊性; 菌糸は多数の菌絆を有す; 材上，竹稈，葉，樹皮，枝幹等上生，熱帯産，約11種を知らる，経済的価値なし。

(本属名は chaite〔希〕(毛)，klao(破れる) より出ず)

基準種 *C. craterellus* (DUR. et LÉV.) SING.

疑問種

Marasmius galeatus BERK. et CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4:119. 1858—SACCARDO, Syll. Fung. 5:567. 1887. (MIQUEL, Prol. Jap. Fl. 392. 1867—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 226. 1900—松村，植. 名鑑，1: 151. 1905—白井，日. 菌. 目. 50. 1905; ed. 2. 339. 1917; ed. 3. 200. 1927—原，日. 菌. 目. 191. 1954) =*Chamaeceras galeatus* O. Kuntze, Rev. Gen. Pl. 3(2):456. 1898=? *Chaetocalathus geleatus* SING. Agaricales, 342. 1949. 本上

(2) Myceninae SING. クヌギタケ亜族

SINGER, Agaricales, 346. 1949.

胞子は糊性或は稀に非糊性; 菌糸は糊性或は非糊性; 嚢状体は存在或は欠如，若し存在せば非糊性; 上表皮層は擬糊性ならず，平滑，匍匐，無色の糸状菌糸より成り，或は他の構造をもつ; 托の菌糸はすべての正常形にては菌絆を有す; 9属を含む。

本邦既知属検索表

A. 胞子は非糊性; 肉は糊性; 傘は平滑無色匍匐糸状菌糸より成る上表皮層，或は同様なる有突起菌糸より成る上表皮層，或は中盤上に不規則に配列する皮嚢体を有す。
  a. 傘は上皮に蔽われ，或は膠質層を有す; 茎も亦屢々上皮に蔽われ，或は然らざれば基盤より起る; 傘の上皮は屢々有突起菌糸より成る. (クヌギタケ属の一部)
  b. 傘は上皮に蔽われず; 茎の基端に基盤なし; 上表皮層の菌糸は平滑 (**Poromycena**)

B. 胞子は糊性; 肉は糊性或は非糊性。
  a. 肉は糊性，少くとも僅かながらも糊性 (平滑の上表皮層菌糸と同時に非糊性の肉を有することなし) クヌギタケ属 **Mycena** (203)
  b. 肉は非糊性，表皮層の菌糸は匍匐，分岐し，平滑。
    α. 褶は甚だ狭き狭生，或は殆ど離生; 胞子は小形にて円筒状 (長さ 5μ より長からず) ニセマツカサシメジタケ属 **Baeospora** (217)
    β. 褶は垂生或は少くとも広く着生，或は然らざれば托は褶状ならず。
      I. 托は褶状。
        1. 傘の外皮の色素は汚暗色或は欠如; 外皮の菌糸は通常明かに放射状に並ぶ; 托実質の菌糸は銹褐色の色素に被われず; 茎はホウライタケの如く軟骨質或は強靱ならず; 胞子は通常短楕円形～類球形或は球形，稀にやや長き胞子を混在す，膜は幾分厚く，多少複合にて，一部或は全部甚だ糊性; 嚢状体は欠如或は存在。 ヒメヒロヒダタケ属 **Fayodia** (202)
        2. 色素はむしろ鮮色; 外皮の菌糸は多少放射状に並ぶ; 托実質の菌糸は色素を被むる; 茎はホウライタケの如く著しく軟骨質或は強靱にて屢々基部鮮色の剛毛を有す; 胞子は楕円形～楕円状円壔形にて常に薄き単一の平滑膜を有す; 常に褶側嚢体あるも，著しきものならず。 ヒメカバイロタケ属 **Xeromphalina** (218)
      II. 托は孔状 アミヒカリタケ属 **Filoboletus** (220)

Fayodia KÜHNER em. SING.
ヒメヒロヒダタケ属

KÜHNER, Bull. Soc. Linn. Lyon, 9:68. 1930—

SINGER, Rev. Myc. 1:279. 1936; Agaricales, 347. 1949.

子実体はエノキタケ (*Collybia*), ヒダサカズキタケ (*Omphalia*) 或はカヤタケ (*Clitocybe*) 型; 色素は暗色, 薄黒にて鈍色 (灰色, 焦茶色, セピア-黄褐色〜殆ど類黒色), 或は稀に何等の色素なし, 傘の上表皮層は平滑にて匍匐する菌糸より成り, 稀にある分散せる毛状菌糸端は斜上或は直立して上表皮層の一般水平より抽出す; 褶は類離生, 彎状狭生, 直生或は直状類垂生, 又屢々率直に垂生; 胞子は無色, 短楕円形〜球形, 稀に少数楕円形, 幾分厚き, 往々複合膜を有す; 膜の最外層は平滑, 糊性; 托実質は整型〜類整型; 子実下層は類細胞状; 担子柄は正常なるも往々2胞子; 嚢状体は存在或は欠如 (往々只稜嚢体存在, 他の場合には何等の嚢状体なし), 然し屢々不鮮明; 茎は中位に太く, 通常中心生, 中実或は管状; 肉は通常非糊性 (但し或時はある菌糸が弱き糊性を有す); すべての菌糸は菌絆を有し, 鮮色の色素によつて被われず; 腐株, 丸太, 落枝, 土及び腐葉上に生ず, 温帯及び亜熱帯産, 約10種を知らる。

(本属名は瑞西菌学者 VINCENT FAYOD 氏の姓より出ず)

基準種　*F. bisphaerigera* (LANGE) KÜHN.

本邦既知種

ヒメヒロヒダタケ　***F. lacerata***　(203)

Fayodia lacerata (SCOP. ex LASCH) SING.

ヒメヒロヒダタケ

SINGER, Agaricales, 349. 1949.

Agaricus laceratus SCOP. Fl. Carn. 2:439. 1772—LASCH, in Epicr. Myc. 97. 1838; Hymen. Eur. 127. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 120. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:62. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 269 (no. 213). 1883? Handb. Austr. Fungi, 21. 1892—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:264. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):642. 1912.

Agaricus microlepideus PERS. Myc. Eur. 3:205. 1828.

Collybia lacerata GILL. Champ. Fr. 310. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 10:662. 1880; Enchir. Fung. 33. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5:247. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 214. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:149. 1893; Brit. Fungi, 147. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 149. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 341. 1908—RICKEN, Blätterp. 405. 1915—REA, Brit. Basid. 341. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 5:pl. 217. 1928—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:117. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:277. 1948—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 93. 1953.

(原, 日. 菌. 目. 84. 1954)

Collybia grammocephala var. *lacerata* QUÉL. Fl. Myc. 228. 1888.

Collybia platyphylla subsp. *lacerata* KONR. et MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3:pl. 204. 1932.

子実体は叢生或は密に群生; 傘は径 2—5 cm, 鐘状-半球形, のち扁平となり, 中窩あり; 表面は幾分湿潤, 煙灰色〜灰褐色にて中央暗色, 放射状栗褐色の内生繊維を有す, 縁は薄く, 屢々裂け, 或は房毛状; 肉は薄く, 灰白色, 強靱, 臭は弱く, 味温和或は僅か苦し; 褶は直生, 白色〜灰白色, やや密, 広幅; 茎は 3—8×0.3—0.5 cm, 殆ど同幅或は基部僅か太く, 傘面と殆ど同色或は淡色, 頂部粉状にて白色, 他は殆ど無毛或は細繊維ありて有線条, 基部に白色綿毛あり, 屢々屈曲し捩る, 容易に裂け, 中空; 胞子は類球形〜球状卵形, 平滑, 5—7×5—6 μ; 胞子紋は白色; 可食。

所在及産地

針葉樹枯材上一秋

北海道一欧. 北米? 濠. 亜(小亜)

和名　ヒメヒロヒダタケ (姫広襞茸) 〔今井〕

Mycena (PERS. ex FR.) S. F. GRAY

クヌギタケ属

S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:619. 1821—SINGER, Agaricales, 350. 1949.

Gymnopus (PERS.) ex S.F. GRAY, l. c. 604. 1821.

Mycenula KARSTEN, Medd. Soc. Fauna Fl. Fenn. 16:89. 1889.

Prunulus CAESALPINI ex S.F. GRAY-EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5:427. 1909.

Insiticia EARLE, l. c. 425. 1909.

Basidopus EARLE, l. c. 426. 1909.

Collopus EARLE, l. c. 426. 1909.

Galactopus EARLE, l. c. 426. 1909.

Stereopodium EARLE, l. c. 426. 1909.

Linopodium EARLE, l. c. 427. 1909.

Pseudomycena CEJP, Publ. Fac. Sci. Univ. Charles, 138. 1930.

Phlebomycena HEIM, Rev. Mycol. 10:26. 1945.

子実体はクヌギタケ (*Mycena*) 原型の外ヒダサカズキタケ (*Omphalia*) 型 (この場合には傘の上表皮層は平滑糸状菌糸より成らず); 色素は存在或は欠如, 鮮色或は鈍色; 傘は通常薄くして透明, 線条あり; 傘の上表皮層は通常突起を有する糸状或は伸長せる不規則なる菌糸より成る, 稀にこれ等の菌糸

は毛状となり，或は糸状なるも平滑，又は球形にて平滑なり；若しも上表皮層菌糸が平滑であるならば胞子は明かに糊性なり；下表皮層及び中表皮層は多少特定化さる，上表皮層の下層の一つは屢々膠化（この時は傘は粘性），或は大形の短き菌糸より成る；托は通常明かに褶状；褶は斜上，水平，或は傾下，類離生～垂生；托実質は類整型～整型，或は殆ど類細胞状にて寧ろ大形にて短き細胞より成る，通常甚しく糊性，稀に甚だ僅か糊性にて胞子も亦僅か糊性のことあり，その時には茎の基端に基盤を有するか或は傘茎共に粘性或は膠性なり；胞子紋は通常純白色，稀に淡クリーム色；胞子は無色，平滑，一様に薄膜，糊性或は稀に非糊性；担子柄は正常なるも屢々1—3胞子並に4胞子；稜嚢体は存在，他の嚢状体も亦屢々存在；茎は中心生，往々乳汁を有す，通常甚だ細く，脆く～類軟骨質，通常管状；被膜なし；肉は肉質，再生せず；茎の組織は通常糊性；多数の菌絆を有す，子実体は基盤によつて基物に着生，或は直接又は擬根を以て着生す；菌糸は菌根を作らず；黒色根状束に連絡なし，屢々発光す；樹皮，生或は腐木，羊歯，蘚，枯葉，球果，枝，腐蝕物，砂上，地上等に生ず；裸実；汎布，約153種を知らる，多くの経済関係なし。

（本属名は mykes〔希〕（菌）より出ず）

基準種 *M. galericulata* (SCOP. ex FR.) QUÉL.

本邦既知種検索表

A．発光性なし。

a．傘と茎との間に分離層あり。

α．傘面に膠皮なくして乾燥，密なる疣状或は箒状の突起を有する傘嚢体を有す。
(*Sacchariferae* 節)

I．傘は径3—6mm；茎嚢体は棍棒形にて著しき疣を有す，茎の基端やや肥大するも盤状とならず；胞子糊性；カラマツ落葉上生。
シロコナカブリタケ
M. osmundicola (205)

II．傘は径1—1.5mm；茎の毛は基部膨れ先端細く，平滑にて傘面嚢状体に混在する毛と同形なり，茎の基端盤状；胞子非糊性；スギ落葉上生。
ココナカブリタケ
M. cryptomeriaecola (206)

β．傘面に膠皮ありて剝げ易し；茎の基端盤状ならずして屢々青緑色を帯ぶ，レンズ下にて軟毛を有す（Viscipellis 節）—傘は径 0.5—1.5cm，厚き膠皮あり，青色を帯び；茎に微軟毛ありて基部鮮青色；胞子糊性。
アオミノアシナガタケ **M. amicta** (206)

b．傘と茎との間に分離層なし。

α．茎は乳汁を含み或は外囲に膠層あり。

I．茎は白色或は有色の乳汁を含み；傘及茎は粘性ならず。(*Lactipedes* 節)

1．稜嚢体は先端刷毛状；乳汁は橙色～朱色；傘は径 2—4cm，灰，灰褐或は粘土色，外皮は子実層状ならず；茎は黄～橙黄色；褶は白色，のち橙色。
アカチシオタケ **M. crocata** (206)

2．稜嚢体は刷毛状ならず；乳汁は褐血赤色或は黒赤色；外皮は子実層状をなす。

甲．小形（傘径 5—7mm）褐赤色或は淡褐色，無毛，傘縁は著しく抽出せず；茎は傘と同色；褶は白色にて稜は褐色。
ヒメチシオタケ
M. sanguinolenta (207)

乙．前者より大形（傘茎 2—3.5cm），灰褐紅色，傘縁は幼時著しく抽出す；茎は全部褐赤色或に褐紫色又は帯白桃色；褶は白色，のち桃色或は灰菫色，稜は同色。
チシオタケ **M. haematopus** (208)

II．茎の外囲に膠層を有し，そのため生時粘性或は往々厚き膠皮を有す。
(*Glutinipedes* 節)

1．茎は灰褐色，のち灰白色となり，黄或は鮮色を呈せず；傘は小形（径 7—15mm），暗褐色或は灰色；褶は白色～灰色。
ハイイロナメアシタケ **M. vulgaris** (209)

2．茎は黄色或は鮮色。

甲．傘は小形（径 5—15mm），シトロン黄色；茎は同色或は帯褐黄色，粘性なるも速に乾燥す；褶は白色。
キナメアシタケ **M. citrinella** (209)

乙．前者より大形（傘径 1—3cm）。

イ．傘は灰褐色，周辺白色；茎は黄金色或は硫黄色，老後赤褐色に変ず；褶は白或は灰白色にて乾時桃色となる；強き腐臭あり；針葉林内に限らる。
アカハナメアシタケ
M. viscosa (210)

ロ．傘は汚褐色，周辺帯黄色，時に全面蜜黄色，茎はシトロン黄，時に灰或は帯白色；褶は白色，のち灰或は灰桃色；臭弱し；広葉林内生。

ナメアシタケ ***M. epipterygia*** (210)

β．茎は乳汁も外囲に膠層もなし。

I．上表皮層は発達し，有突起菌糸より成る (*Rigidipedes* 節)

1．稜嚢体は嚢状〜棍棒形にて先端に短き或は長き円筒形突起を有す。

甲．傘縁は抽出せず。

い．褶は白色，稜は屢々バラ色；傘は1—1.7cm，吸水性，灰色〜帯褐灰色，時に淡酒赤色；茎は同色。

ウスベニフチタケ

M. roseomarginata (211)

ろ．褶は灰〜灰白色；傘は 2—6cm，乾燥，灰褐色；茎は淡灰，褐或は汚黄色。 クヌギタケ

M. galericulata (211)

乙．傘縁は幼時抽出す；傘は 1.5—4cm，乾燥，灰褐〜栗褐色；茎は鮮赤褐色；褶は帯白〜淡肉色。

センボンアシナガタケ

M. inclinata (212)

2．稜嚢体は常に平滑にて単一或は分岐す。

甲．子実体はヒダサカズキタケ(*Omphalia*)型にて胞子糊性；傘は径0.7—1.5cm，中央暗褐〜黒褐；茎は同色；褶は白色；臭なし。

サカズキガサタケ

M. hypnorum (213)

乙．ヒダサカズキタケ型ならず。

い．著しき強きアルカリ臭あり；傘は径 2—5cm，茶褐色，灰褐〜黒褐色；茎は淡黄，鼠或は銹黄色；褶は白色，のち灰白，遂に赤褐色となる。

アクニオイタケ ***M. alcalina*** (213)

ろ．臭なし；傘は径 2—5cm，灰褐或は灰色；茎は灰褐或は青藍色；褶は白色，微かに桃色を帯ぶ。

アシナガタケ

M. polygramma (213)

II．上表皮層は発達不良にて平滑菌糸より成り，嚢状体は平滑。(*Purae* 節)

1．傘は径 2—5cm，鮮桃紅色，帯桃紫色或は淡菫色；茎は同色；褶は白色，桃色〜菫色。 サクラタケ ***M. pura*** (214)

2．傘は小形にて径 1.5—2.5cm，汚黄白色，茎は同色；褶は帯白色。

シロサクラタケ ***M. subaquosa*** (215)

B．発光性を有す。

a．茎の基端急に拡大し基盤となる。

α．傘は径 1—3cm，淡暗褐色或は鼠色；胞子 7—8.5×5—6μ；枯枝及材上。

ヤコウタケ ***M. chlorophos*** (216)

β．傘は甚だ小形 (径 1.5—2.5mm)，殆ど白色にて中盤淡灰色；胞子 4—4.5×2.5μ；イチイガシ葉上。 ***M. pseudostylobates*** (216)

b．茎に基盤なし。

α．傘は径1.5—2.5cm，淡紫褐色；担子柄4胞子；胞子 8.5—12×6.5—9μ；茎は白色，基部絨毛を有す；シイの樹皮及材上。

M. luxcoeli (217)

β．傘は甚だ小形 (径 2.5—5mm)，白色；担子柄は2胞子；胞子は 6—7×2.5—3μ；広葉樹枝上。 ***M. daisyogunensis*** (217)

Mycena osmundicola LANGE

シロコナカブリタケ

LANGE, Agar. Denm. 1:35, pl. 1, f. J. pl. 2, f. 51. 1914; Fl. Agar. Dan. 2:49, pl. 57, f. A. 1936—KÜHNER, Gen. Mycena, 209, f. 68. 1938—A. H. SMITH, N. Am. Sp. Mycena, 47, f. 1 (4–7), pl. 1, f. B. 1947—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:306. 1948—SINGER, Agaricales, 357. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 96. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 101. 1953—HONGO, Bull. Facul. Lib. Arts Educ. Shiga Univ. 6:32, f. 2, A–D. 1957. (今関及土岐，林．試．研．報．79:8, f. 10, pl. 1, f. 2. 1955—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，89, f. 82, pl. 15, f. 82. 1957)

子実体は散生或は群生；傘は径 2—8mm，円錐形〜丸山形，のち幾分開張す；表面は砂糖様の被いのため乾燥にて粉状に見ゆ，純白色，殆ど頂点まで放射状溝あり；肉は透明白色，甚だ薄し，柔軟，無味無臭；褶は離生或は僅か歯ありて附着し，白色，やや疎，縁は一様，やや便腹状，幅 0.5—1.2mm；茎は1—2×0.05—0.1cm，屢々波曲，基部に向つて僅か太く，白色，管状，各部微細毛あり；胞子は楕円

形, 平滑, 僅か糊性, 6—8.5×3—4μ; 担子柄は4胞子, 19—21×6.5—7μ; 棱囊体は多生, 13—19×6.5—9μ, 棍棒形, 微小なる疣或は刺にて飾らる; 傘表の細胞（傘囊体）は球状或は類球状, 20—35×23—31μ, 微小の疣或は指状突起（長さ 5—11μ）に密に蔽わる; 茎上の毛（茎囊体）は棍棒形～円筒形, 32—210×6.5—15.5μ, 密に疣あり, 先端に屢々数個の針状突起を存す。

所在及産地

ヒノキの落葉枝及落果上一夏　本州一欧. 北米

和名 シロコナカブリタケ

（白被粉茸）〔今関及土岐〕

Mycena cryptomeriaecola IMAZ. et TOKI
ココナカブリタケ

IMAZEKI & TOKI, Bull. Gov. For. Exp. St. 79: 8, f. 11, pl. 1, f. 1, pl. 2, f. 3. 1955.

子実体は群生; 傘は1—1.5mm, 半球形, のち扁平となる, 薄膜状; 表面は白色, 粉状, 郭大鏡下にて針状毛を認む, 縁辺櫛歯状線条あり; 褶は殆ど離生, 白色, 甚だ疎（6—7 片）, 稜は粉状; 茎は長さ4mm 以下にて, 針状にて甚だ細し, 基端に基盤を存す, 白色半透明, 表面に針状毛あり; 胞子は楕円形, 平滑, 非糊性, 7—9×4—5μ; 胞子紋は白色; 担子柄は4胞子; 傘の表面は囊状細胞の間より菌糸状毛突出す, 囊状細胞は径 6.5—13μ, 表面に疣を密生す, 毛は基部膨れて径 6.5—9μ, 次第に細まり表面平滑; 肉は球状細胞より成る; 茎囊体は傘毛と同様, 茎の細胞は長円筒形, 頂部他より太く, 菌絆あり; 茎の基盤は球状細胞より成り, 下面に傘と同じ疣ある細胞を作る; 稜細胞は径 4.5—9μ の紡錘形にて先端1—2の毛状に伸び粗面なり。

所在及産地

スギ枯葉上一夏　本州

和名 ココナカブリタケ(小被粉茸)〔今関及土岐〕

Mycena amicta (FR.) QUÉL.
アオミノアシナガタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:243. 1872—GILLET, Champ. Fr. 277, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:114. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 86. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:284. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 277. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:93. 1893; Brit. Fungi, 134. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 78. 1908—v. HOEHNEL, Frag. Myk. 15:262. 1913—RICKEN, Blätterp. 431, pl. 111, f. 8. 1915—REA, Brit. Basid. 391. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 6:pl. 252, f. 2. 1928—JOSSERAND, Bull. Soc. Myc. Fr. 49:343, f. 2. 1933—LANGE, Fl. Agar. Dan. 2:36. 1936—A. H. SMITH, Mycologia, 28:417, f. 2(3). 1936; N. Am. Sp. Mycena, 61, f. 2(6, 8), pl. 3, A–B. 1947—KÜHNER, Gen. Mycena, 196, f. 6-7, 18, 62–64. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:305. 1948—SINGER, Agaricales, 357. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 92, pl. 28, f. 5. 1950—HONGO, Jour. Jap. Bot. 31:147, f. 2, d–e. 1956—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 100. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:245. 1957.

Agaricus amictus FR. Syst. Myc. 1:141. 1821; Epicr. Myc. 112. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1: 219. 1857; Hymen. Eur. 144. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 85. 1883; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 286 (no. 239). 1883—WINTER, Pilze, 1:756. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:634. 1889—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):629, pl. 119, f. 1–2. 1912.

Agaricus Iris BERK. Engl. Fl. 5:56. 1836.

Mycena iris QUÉL. var. *amicta* QUÉL. Enchir. Fung. 38. 1886.

Mycena caerulescens SCHROET. Pilze Schles. 1:634. 1889.

Mycena vestita VELEN. Ceské Houby, 307 1920.

子実体は群生; 傘は径 0.5—1.5cm, 鈍頭円錐形, のち丸山形となり, 往々円錐状中丘あり; 表面は初め微かに粉状, 速に無毛平滑乃至やや粘性となる, 膠皮は剝げ易し, 幼時中盤は殆ど帯藍黒色, 周辺淡藍灰色, 屢々強き緑青或は青色の色彩を帯ぶ, 速に褪色して中盤汚小豆色, 周辺汚白色となる; 肉は薄く, 軟骨質, 味及臭温和; 褶は狭く着生, 帯白色, のち淡小豆色となり, 密, 狭幅; 茎は 4—8×0.1—0.15mm, 汚帯褐灰色, 同幅, 密に粉状軟毛を被むり, 下方は初め暗緑色を呈し, のち速に汚褐灰色となる, 基端は僅かに根を存し, 鮮青色の纖維に被わる; 胞子は楕円形, 平滑, 糊性, 5.5—7.5×3—4.5μ, 担子柄は4胞子; 囊状体は褶稜にのみ存在し, 密生, 類円筒形～狭紡錘形, 先端鈍頭或はやや鋭頭, 薄膜, 無色, 29—35×4—6μ。

所在及産地

針葉樹林株周針葉上一秋　本州一欧. 北米

和名 アオミノアシナガタケ

（青味足長茸）〔本郷〕

Mycena crocata (SCHRAD. ex FR.) GILL.
アカチシオタケ

GILLET, Champ. Fr. 260. 1874—QUÉLET, Cha-

mp. Jura Vosg. Suppl. 3:435. 1875; Enchir. Fung. 39. 1886—KARSTEN, Hattsv. 1:118. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:292. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:88. 1893; Brit. Fungi, 128. 1911—W.G.SMITH, Brit. Basid. 79. 1908—von HOEHNEL, Frag. Myk. 15:264, f. 2(6). 1913—LANGE, Agar. Denm. 1:28, pl. 34. 1914; Fl. Agar. Dan. 2:44, pl. 55, f. D. 1936—RICKEN, Blätterp. 421. 1915—REA, Brit. Basid. 395. 1922—SINGER, Beih. Bot. Centralbl. 46:92. 1929; Agaricales, 361. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3:pl. 226, f. 2. 1934; Agaricales, 1:307. 1948—KÜHNER, Gen. Mycena, 213, f. 69. 1938—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:132. 1938—A. H. SMITH, N. Am. Sp. Mycena, 139. 1947—KÜHNER & ROMAGNESI, Fr. Analyt. Champ. Super. 110. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:243. 1957.

(原，日．菌．目．213. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，39, f. 84, pl. 15, f. 84. 1957)

Agaricus crocatus SCHRAD. Spic. Fl. Germ. 127. 1794—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 380. 1801—FRIES, Obs. Myc. 1:32. 1815; Syst. Myc. 1:148. 1821; Epicr. Myc. 115. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:226. 1857; Hymen. Eur. 148. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:524. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 127. 1860—COOKE, Handb.Brit. Fungi, 1:73. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 163, f. b(no. 243). 1883—WINTER, Pilze, 1:753. 1884—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:263. 1900—MIGULA, Krypt. Fl.3, Pilze, 2(2):626. 1912.

Agaricus chelidonius FR. Epicr. Myc. 115. 1836; Monogr. Hymen. Suec. 1:226. 1857; Hymen. Eur. 148. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 127. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:73. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 207, f. A.(no. 244). 1883—WINTER, Pilze, 1:753. 1884—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:263. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):626. 1912.

Mycena chelidonia QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:245. 1872; Enchir Fung. 35. 1886—GILL. Champ. Fr. 260. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:102. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:292. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:88. 1893; Brit. Fungi, 128. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 79. 1908—REA, Brit. Basid. 380. 1922.

子実体は孤生或は群生；傘は径 2—4 cm，円錐形，のち鐘形，最後にやや中丘あり；表面は乾燥，湿時光沢あり，帯灰色，灰黄色，汚褐色或は粘土色，中央濃褐橙色，長き線条あり，縁甚だ薄し；肉は甚だ薄く，白色，速に乳汁のために橙朱色となる，糊性，味温和，臭なし；褶は彎入直生或は僅か垂下歯あり，初め白色，傷により橙朱色，老時全部橙色となる，



第84図　アカチシオタケ
Mycena crocata　×2/3（大谷氏）

むしろ疎，前方便腹状；茎は 10—15×0.2—0.35 cm，傘とかなり連続，同幅，基部根状となり白色の粗毛を有す，其他は無毛，上方淡色，下方黄色～橙黄色，傷により橙朱色となる，軟骨質，中空；乳汁は甚だ多量にて体の全部に含まれ，空気に触れて橙色～朱色となる；胞子は広楕円形，平滑，糊性，8—9.5×5—6 μ，褶面にて容易に発芽す；胞子紋は白色；担子柄は 25—30×7.5—9 μ；褶稜は膠状肥大することなく，稜囊体は多生，長棍棒形，幅 5.5—8 μ，先端円形にて疎なる不規則の刷毛状毛あり；褶側囊体は棍棒形にて先端鈍頭，平滑或は僅か単一糸状突起あり。

所 在 及 産 地

林内腐蝕土或は腐木上一秋

北海道，本州一欧．北米．亜(小亜)

和 名　アカチシオタケ（赤血汐茸）〔今井〕

Mycena sanguinolenta (ALB. et SCHW. ex FR.) QUÉL.

ヒメチシオタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:244. 1872; Enchir. Fung. 39. 1886—GILLET, Champ. Fr. 259. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:118. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 87. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:291. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 253. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:89. 1893; Brit. Fungi, 127. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 150. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 79. 1908—v. HOEHNEL, Frag. Myk. 15:274, f. 3(1). 1913—LANGE, Agar. Denm. 1:19, pl. 2, f. 6. 1914; Fl. Agar. Dan. 2: 36, pl. 50, f. A. 1914—RICKEN, Blätterp. 422, pl. 110, f. 8. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 784. 1918—REA, Brit. Basid. 394. 1922—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1:84, f. 14, c. 1934—

KÜHNER, Gen. Mycena, 216, f. 5, 70. 1938—A. H. SMITH, N. Am. Sp. Myc. 146, f. 13 (1–2), pl. 16, f. B. 1947—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:315. 1948—SINGER, Agaricales, 361. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 93, pl. 28, f. 4. 1950—HONGO, Jour. Jap. Bot. 28: 332, f. 2 (1–2). 1953—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 110, f. 60. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:243. 1957.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 40, f. 86, pl. 15, f. 86. 1957)

Agaricus sanguinolentus ALB. et SCHW. Consp. Fung. 196. 1805—FRIES, Syst. Myc. 1:147. 1821; Epicr. Myc. 115. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:225. 1857; Hymen. Eur. 148. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:524. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 127. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:72. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 163, f. a(no. 243). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:82. 1876—WINTER, Pilze, 1:753. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:633. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:263. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):626. 1912.

Galactopus sanguinolentus MURR. N. Am. Fl. 9:319. 1916.

子実体は散生或は群生; 傘は径 5—7mm, 或はそれ以上に及び, 円錐形或は円錐状鐘形にて完全に扁平とならず; 表面は乾燥, 無光沢, 褐赤色或は淡褐色にて, 中盤紫色を帯ぶ, 無毛, 長線条或は溝を有す, 湿時透明; 肉は甚だ薄く, 糊性, 蕪菁臭あり, 傷時暗赤色の乳汁を出す; 褶は上昇直生, 帯白色にて往々多少灰肉色を呈し, 稜は褐色, やや疎〜疎, 中位に広幅, 多少明かなる中間脈あり; 茎は長さ 2.5—4cm, 或はそれ以上に及び, 幅 0.05—0.1cm, 傘と連続, 殆ど同幅, 糸状, 基部に長き根を有し白色剛毛あり, 葉に附着す, 傘面と同色或は淡色, 管状, 脆し, 傷により褐血赤色の乳汁を出す; 胞子は楕円形, 平滑, 糊性, 7.5—9.5×4—5.5μ; 胞子紋は白色; 担子柄は 22—30×6.5—7.5μ, 4胞子; 稜嚢体に甚だ夥生, 多少便腹状, 鋭頭, 29—44×6.5—8μ; 褶側嚢体は散生, 同形, 33—44×6.5—10μ。

所在及産地

主に針葉林内朽葉, 落枝上—春〜秋

本州—欧. 北米. 濠. 阿

和名 ヒメチシオタケ (姫血汐茸) 〔本郷〕

Mycena haematopus (PERS. ex FR.) QUÉL.

チシオタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:244. 1872; Enchir. Fung. 39. 1886—GILLET, Champ. Fr. 260, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:117. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 87. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:291. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 253. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:90. 1893; Brit. Fungi, 127, pl. 11, f. 1. 1911—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 98, f. 102. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 79, 1908-v. HOEHNEL, Frag. Myk. 15: 268. 1913—LANGE, Agar. Denm. 1:20. 1914; Fl. Agar. Dan. 2:36, pl. 50, f. G. 1936—RICKEN, Blätterp. 421. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 783. 1918—REA, Brit. Basid. 394. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 120, pl. 56, f. 2. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 5:pl. 247, f. 2. 1928—KONRAD & MAUBLANC, 3:pl. 226, f. 1. 1934; Agaricales, 1:315. 1948—KÜHNER, Gen. Mycena. 219, f. 71. 1938—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:131. 1938—A. H. SMITH, N. Am. Sp. Mycena, 140, f. 12(1, 7), pl. 13, 14, f. A. 1947—SINGER, Agaricales, 361. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 93, pl. 28, f. 7. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 110, f. 60. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:243. f. 188, A. 1957.

(川村, 日. 菌. 図説, n. 60. 1929; 日. 菌. 図鑑, 4: 412, f. 407. 1954—松浦, 茸類辞典, 129, f. 150. 1933; 応用菌蕈学, f. 802 (p. 1186). 1941—小林, 日. 隠. 植. 図. 547, pl. 264, f. 4–6. 1939—S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:17. 1939—今関, 原色きのこ, pl. 33(右). 1942—原, 日. 菌. 目. 213. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 40, f. 85, pl. 15, f. 85. 1957)

Agaricus haematopus PERS. Obs. Myc. 2:56. 1799; Syn. Meth. Fung. 379. 1801—FRIES, Obs. Myc. 1:33. 1815; Syst. Myc. 1:149. 1821; Epicr. Myc. 114. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:224. 1857; Hymen. Eur. 148. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:524. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:72. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 162, f. a(no. 242). 1883; Handb. Austr. Fungi, 24. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:81. 1876—WINTER, Pilze, 1:754. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1: 633. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:263. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):626 1912.

Galactopus haematopus EARLE, Bull. N.Y. Bot. Gard. 5:426. 1909—MURRILL, N. Am. Fl. 9:319. 1916.

子実体は叢生, 群生或は孤生; 傘は径 2—3.5cm, 初め卵形或は楕円形にて傘縁著しく伸びて茎を包む, のち鐘形或は円錐形となり屢々歯牙状縁を有す; 表面は吸水性, 湿時灰褐紅色, 線条あり, 乾時白色となり平滑, 大部分粉状にて, のち速に無毛となる; 肉は薄く, 乳汁によりて濃褐色〜褐血赤色となる, 白紙状となることなし, 糊性, 無味無臭; 褶はやや

広く直生し，小垂下歯を存す，白色，のち桃色或は灰堇色となり，稜は同色，やや疎，僅か便腹状；茎は 9—11×0.2—0.3cm，同幅，傘面と同色，初め白粉を有するも，のち平滑，基部に白色綿絮あり，傷時濃血赤汁を滲出す，剛直，軟骨質，中空；胞子は卵状円筒形，9—11×5.5—6.5 μ；胞子紋は白色；担子柄は 4 胞子；稜嚢体は長頸罎形，下部膨大，上部細長にて鋭頭，40—70×10—15 μ；褶側嚢体は多生，同形。

所在及産地

林内腐朽木，枯枝，切株上一夏秋

本邦全土一欧. 北米. 濠

和名 チシオタケ（血汐茸）〔川村〕

Mycena vulgaris (PERS. ex FR.) QUÉL.

ハイイロナメアシタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:108, pl. 4, f. 7. 1872; Enchir. Fung. 40. 1886—GILLET, Champ. Fr. 258, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:120. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 88. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:295. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 247. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:85. 1893; Brit. Fungi, 129. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 150. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid, 80. 1908—v. HOEHNEL, Frag. Myk. 15:278. 1913—LANGE, Agar. Denm. 1:36, pl. 2, f. 53. 1914; Fl. Agar. Dan. 2:50, pl. 58, f. B. 1936—RICKEN, Blätterp. 420, pl. 109, f. 8. 1915—REA, Brit. Basid. 397. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 6:pl. 254, f. 1. 1928—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3:pl. 228, f. 1. 1934; Agaricales, 1:313. 1948—KÜHNER, Gen. Mycena, 358, f. 24-25, 112 1938—A. H. SMITH, N. Am. Sp. Mycena, 433, f. 52(3, 5), pl. 93, f. A. 1947—SINGER, Agaricales, 362. 1949—HONGO, Jour. Jap. Bot. 26:142, f. 1(1-2). 1951—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 110, f. 172. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2: 245. 1957.

(今関及本郷，原色日. 菌. 図鑑，40, f. 87, pl. 15, f. 87. 1957)

Agaricus vulgaris PERS. Tent. Disp. Fung. 24. 1797; Syn. Meth. Fung. 394. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:156. 1821; Epicr. Myc. 116. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:228. 1857; Hymen. Eur. 150. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:523. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 128, pl. 6, f. 4. 1860—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:83. 1876—WINTER, Pilze, 1:752. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1: 632. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:263. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):625. 1912. (non COOKE, Illus.)

Prunulus vulgaris MURR. N. Am. Fl. 9:326. 1916.

子実体は屢々甚だ多数群生；傘は径 7—15 mm，半球形或は鐘形，のち丸山形，中窩あり，遂に殆ど扁平となり，時に中丘を存す；表面は暗褐色或は灰色，時に類白色，中央濃色，湿時粘性，外被は透明にて容易に剝げる，縁に僅か線条あり，無毛，乾時微粉状；肉は類白色，薄し，臭は弱くして腐臭；褶は直生にて多少垂生，白色，のち多少帯灰色，疎，広幅，薄し；茎は 2.5—5×0.07—0.15 cm，同幅，甚だ粘性にて透明粘液鞘となり頂部粉状，初め灰褐色，のち灰白色，無毛，基部白色剛毛あり，基端時に根状となる，強靱弾性あり，中空；胞子は卵状楕円形，平滑，5—7×2.5—5 μ；胞子紋は白色；担子柄は 4 胞子；褶稜は著しく膠化す。



a



b

第85図 ハイイロナメアシタケ Mycena vulgaris
a. 子実体 ×1
b. 胞子 ×650
（大谷氏）

所在及産地

林内松の落葉上或は蘚間一夏秋

本州，九州一欧. 北米. 亜(西比)

和名 ハイイロナメアシタケ(灰色滑足茸)〔本郷〕

Mycena citrinella (PERS. ex FR.) QUÉL.

キナメアシタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:108. 1872; Enchir. Fung. 40. 1886—GILLET, Champ. Fr. 258. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:120. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 88. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:296. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:84. 1893; Brit. Fungi, 129. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 150. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 80. 1908—v. HOEHNEL, Frag. Myk. 15:264. 1913—RICKEN, Blätterp. 419. 1915—REA, Brit. Basid. 397. 1922—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 130. 1938—HEIM, Champ. Eur. 2:246. 1957.

(原，日. 菌. 目. 213. 1954)

Agaricus tenellus BATSCH, Elench. Fung. Cont. 1:103, pl. 18, f. 88. 1786.

Agaricus citrinellus PERS. Icon. Descr. 2:44, pl. 11, f. 3. 1800; Syn. Meth. Fung. 384. 1801—

FRIES, Syst. Myc. 1:155. 1821; Epicr. Myc. 116. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:229. 1857; Hymen. Eur. 150. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:523. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:74. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 248, f. a (no. 247). 1883—WINTER, Pilze, 1:751. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:631. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:263. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 624. 1912.

Mycena tenella SACC. Fl. Ital. Crypt. Hymen. 245. 1915.

子実体は叢生；傘は径 5—15 mm，鐘形或は円錐状鐘形，のち半球形或は丸山形に開張す；表面はシトロン黄色にて中央暗色，のち淡色或は殆ど白色となる，剝げ易き膠皮を被むる，周辺線条あり；肉は白色，薄し；褶は殆ど離生にて垂下歯を有し，白色，やや疎，むしろ広幅；茎は 4—9×0.08—0.12 cm，殆ど同幅，傘面と同色或は帯褐黄色，粘性なるも速に乾燥し，膠皮を作らず，乾時殆ど絨毛状となり，基部は根なく，屢々屈曲し，白色繊維毛あり，中空；胞子は円壔形～楕円形，平滑，7.5—10×4—5 μ；胞子紋は白色；稜嚢体は糸状棍棒形或は紡錘形，30—40×5—6 μ。

所在及産地

林内針葉落葉間及切株上—夏秋

北海道，本州—欧

和名 キナメアシタケ（黄滑足茸）〔今井〕

Mycena viscosa (SECR.) R. MAIRE
アカハナメアシタケ

R. MAIRE, Bull. Soc. Myc. Fr. 26:162, f. 1 B. 1910; 27:411. 1911—von HÖHNEL, Frag. Myk. 15:277. 1913—REA, Brit. Basid. 396. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3:pl. 227. 1935; Agaricales, 1:313. 1948—A. H. SMITH, Am. Jour. Bot. 22:872. 1935; N. Am. Sp. Mycena, 421, f. 51 (3, 9), pl. 92. 1947—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:129. 1938—SINGER, Agaricales, 362. 1949.
(原，日．菌．目．214. 1954)

Agaricus plicatus SCHAEFF. Fung. Bavar. p. 31, f. 4. 1762.

Agaricus alcalinus viscosus SECR. Myc. Suisse, 2:312. 1833.

Mycena epipterygia var. *laevigata* R. MAIRE, Bull. Soc. Myc. Fr. 24:56. 1908.

Mycena splendidipes PECK, Bull. N.Y. St. Mus. 167:28, pl. 10. 1913.

Mycena epipterygia var. *viscosa* RICKEN, Blätterp. 419. 1915—KÜHNER, Gen. Mycena, 351, f. 110, v. 1938; & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 110. 1953.

Prunulus splendipes MURR. N. Am. Fl. 9:330. 1916.

子実体は群生或は叢生；傘は径 1—3 cm，初め卵形，のち鐘形～丸山形；表面は吸水性，初め灰褐色にて屢々周辺白色，或は灰白色にて，のち多少濃き灰褐色，時に全部白色透明，老時赤褐色或は斑点を生ず，長き線条溝を有す，外皮は粘性にて光沢あり，全部剝げ易く，縁に歯状或は鈍鋸歯状の残物を残す；肉は帯白色，老時赤褐色，甚だ薄く，糊性，臭は強き腐臭；褶は上昇直生或は垂下歯を存し，白色～灰白色，乾時桃色を帯ぶ，かなり密或は多少疎；茎は 4—10×0.1—0.3 cm，同幅，黄金色或は硫黄色，上方褪色し白色となる，粘性なるも微粉を有し，最後に往々褐赤色となる，中空；胞子は短楕円形或は卵形，平滑，糊性，8—10×6—8 μ；胞子紋は白色；担子柄は34—40×7—10 μ，4 胞子；稜嚢体は不規則棒形，褶稜は膠質肥大す。

所在及産地

針葉樹腐木周囲或は切株又は落葉間—秋

北海道—欧

和名 アカハナメアシタケ（赤褶滑足茸）〔今井〕

Mycena epipterygia (SCOP. ex FR.) S.F. GRAY
ナメアシタケ

S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:619. 1821—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:108. 1872—GILLET, Champ. Fr. 259, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:119. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 88. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:294. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 246. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:86. 1893; Brit. Fungi, 130. 1911—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 96, f. 98. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 80. 1908—R. MAIRE, Bull. Soc. Myc. Fr. 26:161, f. 1 A. 1910—v. HOEHNEL, Frag. Myk. 266. 1913—LANGE, Agar. Denm. 1:36, pl. 2, f. 52. 1914; Fl. Agar. Dan. 2:49, pl. 58, f. A. 1936—RICKEN, Blätterp. 419, pl. 109, f. 12. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 787. 1918—BRESADOLA, Icon. Myc. 5:pl. 252, f. 2. 1928—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1:84. 1934—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:128. 1938—KÜHNER, Gen. Mycena, 347, f. 20, 110, T. 1938—A. H. SMITH, N. Am. Sp. Mycena, 425, f. 51(6–7), pl. 95, f. A. 1947—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:313. 1948—SINGER, Agaricales, 262. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 94, pl. 27, f. 5. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 110, f. 173. 1953—HEIM, Champ. Eur.

2:245, f. 188, D. 1957.
（原，日．菌．目．213. 1954）

Agaricus epipterygius SCOP. Fl. Carn. ed. 2, 2:453. 1772—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 382. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:155. 1821; Epicr. Myc. 116. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:227. 1857; Hymen. Eur. 149. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:523. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:73. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 208, f. a (no. 245). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:83. 1876—WINTER, Pilze, 1:754. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:632. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:263. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):625. 1912.

Agaricus nutans SOW. Col. Fig. Engl. Fungi, 1:pl. 92. 1797.

Prunulus epipterygius MURR. N. Am. Fl. 9: 335. 1916.

子実体は群生或は叢生；傘は径 1—3 cm，初め卵形，のち鐘状円錐形，鐘形或は半球形となる，鈍頭；表面はやや粘性にて剝げ易き外被あり，吸水性，中盤汚褐色，周辺帯黄色，のち帯白色，時に全面蜜褐色或はクリーム色となる，長き線条及び溝を有す，縁は明かに歯牙状；肉は薄く白色，糊性，味及臭は殆どなし；褶は上昇広く直生或は垂下歯あり，白色，老時灰色或は灰桃色，比較的広幅，やや疎；茎は 5—10×0.1—0.2 cm，同幅，基部白色繊維を有す，其他は粘性，微粉ありて，のち光沢あり，シトロン黄色，時に灰色或は帯白色，中空；胞子は楕円形，平滑，糊性，8—11×4—5 μ；胞子紋は白色；担子柄は 33—42×6.5—8 μ，4 胞子；稜囊体は甚だ多生，棍棒形，大形にて甚だ不規則の枝或は箒毛を生ず；茎は明かに傘に連結す。

所在及産地

広葉樹林内蘚間—秋
北海道—欧．北米．濠．亜（西比．小亜）

和名　ナメアシタケ（滑足茸）〔今井〕

Mycena roseomarginata HONGO
ウスベニフチタケ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 32:208, f. D–F. 1957.

子実体は群生；傘は径 1—1.7 cm，初め卵形，のち鐘形或は円錐状丸山形，鈍頭，吸水性，灰色～帯褐灰色，時に淡酒赤色を帯ぶ，中央暗色，周縁白色，湿時透明線条あり；肉は薄く，上部同色，無味無臭；褶は直生，上昇，やや疎，幅 2.5—3.5 mm，便腹状，白色，稜は霜粉状にて又屢々バラ色，横脈あり；茎は 2—3×±0.1 cm，同幅，光沢ありて無毛，傘面と同色，頂部淡色，管状，基部白色硬先粗渋；胞子紋は白色；胞子は楕円形～類卵形，平滑，7.5—10×4.5—6.5 μ，弱糊性；担子柄は 4 胞子，26—32×7—8 μ；稜囊体は群生，28—42×10.5—21 μ，棍棒形或は便腹状，先端部に 1—数個の棒状或は指状の突起を有す；褶側囊体は欠如或は甚だ稀に存す；菌糸は菌絆を有す。

所在及産地

ヒノキ植林内腐蝕物或は落木上—春　　本州

和名　ウスベニフチタケ（淡紅縁茸）〔本郷〕

Mycena galericulata (SCOP. ex FR.) S.F.GRAY
クヌギタケ

S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:619, 1821—QUÉLET, Champ Jura Vosg, 1:104, 1872; Enchir. Fung. 36, 1886—GILLET, Champ. Fr. 276, c. ic. 1874 KARSTEN, Hattsv. 1:106, 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 84, 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:268 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 274, 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:107, 1893; Brit. Fungi, 136, 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 150, 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2, 94, 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 75, 1918—ROLLAND, Atl. Champ. 51, pl. 51, f. 112, 1910—V. HOEHNEL, Frag. Myk. 15:267, f. 3 (3). 1913—LANGE, Agar. Denm. 1:33, pl. 2, f. 46. 1914; Fl. Agar. Dan. 2:47, pl. 56, f. c. 1936—RICKEN, Blätterp. 439, pl. 111, f. 1. 1915—REA, Brit. Basid. 383. 1922—GÜSSOW. & ODELL, Mushr. Toadst. 118, pl. 55, f. 2. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 5:pl. 234. 1928—KÜHNER, Gen. Mycena, 324, f. 3–4, 9, 13, 22, 27, 102–103. 1938—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:126. 1938—A. H. SMITH, N. Am. Sp. Mycena, 347, f. 41(11), 43(1), pl. 83. 1947—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:311, 1948—SINGER, Agaricales, 359. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 89, pl. 29, f. 3. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 108, f. 170, 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:252, f. 191, B. 1957. (non KAUFFMAN)（原，日．菌．目．213. 1954—今関及本郷，原色日菌．図鑑，39，f. 83，pl. 15，f. 83，1957）

Agaricus galericulatus SCOP. Fl. Carn. ed. 2. 2: 455. 1772—FRIES, Syst. Myc. 1:143. 1821; Epicr. Myc. 106. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:209. 1857; Hymen. Eur. 138. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:526. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 124. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:153. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:67. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 222(no. 227). 1883; Handb. Austr. Fungi, 23. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:78. 1876—WINTER, Pilze, 1:761. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:641. 1889—P. HEN-

NINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1. 1**:264, f.122, D. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):632. 1912.

Prunulus galericulatus MURR. N. Am. Fl. 9:336. 1916; Mycologia, 10:179, pl. 8, f. 5. 1918.

Mycena rugosa v. HÖHN. Sitzb. Akad. Wien, 122:273. 1913—REA, Brit. Basid. 383. 1922.

Collybia ligniaria PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 54:145, pl. 54. 1901.

Prunulus lignarius MURR. N. Am. Fl. 9:333. 1916.



第 86 図 クヌギタケ
Mycena galericulata
×1/3 (大谷氏)

子実体は叢生或は往々群生；傘は径2-6 cm 鐘形，のち多少開張し，低丸山形，丸山形或は扁平となり，時に鈍き中丘を有す；表面は乾燥，灰色，灰藁色，或は灰褐色，屢々褐色或は黒銹色の汚斑を有し，周辺時に甚だ淡色，幼時一般に暗色，老時及乾時灰白色，無毛，光沢なく，長き線条及溝を有す；肉は帯白色，薄く，傘に於て膜質，茎の外皮は角質，糊性，臭は蕪菁臭，多少腐臭或は穀粉様，味は明かに穀粉様，褶は常にかなり広く直生し，屢々垂下歯あり，初め灰色或は灰白色，のち多少ピンク色或は肉色となる．むしろ疎，広幅，便腹状，強く横脈あり，稜は全縁或は鈍鋸歯あり；茎は 4—10×0.2—0.5 cm，同幅，円筒形或は帯白色，無毛，光沢あり，基部白軟毛あり，往々紡錘状根となる．時に屈曲或は捩れ，甚だ強靱にて軟骨質，基端屢々互に癒着す，中空；胞子は卵状円壔形；平滑，糊性，8—11×6—8μ；胞子紋は白色；担子柄は 38—43×8.5—10μ，4 胞子（2胞子のものもあり）；稜嚢体は棍棒形，径 12—16μ，先端に多数の短或は長毛を散着す；可食。

所在及産地

林間腐木，古材，切株上（クヌギ其他）夏秋

北海道，本州—欧．北米．濠．阿．亜(小亜)

和名 クヌギタケ（櫟茸）〔古名〕
オオアシナガタケ（大足長茸）〔今井〕

Mycena inclinata (FR.) QUÉL.
センボンアシナガタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:105. 1872; Enchir. Fung. 36. 1886—GILLET, Champ. Fr. 273, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:107. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:270. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 271. 1915—v. HÖHNEL, Frag. Myk. 15:269. 1913—LANGE, Agar. Denm. 1:29, pl. 2, f. 35, 1914; Fl. Agar. Dan. 2:45, pl. 55, f. E-E'. 1936—REA, Brit. Basid. 384, 1922—BRESADOLA. Icon. Myc. 5; pl. 236. 1928—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3: pl. 231, 1934; Agaricales, 1:312. 1948—KÜHNER, Gen. Mycena, 340. f. 2, 108. 1938—A. H. SMITH, N. Am. Sp. Mycena, 338, f. 41(2, 4–5), pl. 77–79. 1947—SINGER, Agaricales, 359. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 90, pl. 27, f. 1. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 107. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2: 251, f. 191, A. 1957.
(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 55;449. 1941)

Agaricus inclinatus FR. Epicr. Myc. 107. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:210. 1857; Hymen. Fr. 139. 1874—SCHROETER, Pilze Schles, 1:640. 1889—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):632. 1912.

Agaricus galericulatus var. *calopus* FR. Hymen. Eur. 139. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 80. 1883; Illus. Brit. Fungi. 2: pl. 223, f. a (no. 228) 1883.

Mycena galericulata var. *calopoda* KARST. Hattsv. 1:105. 1879—QUÉLET, Enchir. Fung. 36. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5:268. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 275. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:108. 1893; Brit. Basid. 136. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 75. 1908—KAUFFMAN, Agar. Mich. 798. 1918—REA, Brit. Basid. 384. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 5: pl. 235. 1928.

Mycena calopus RICKEN, Blätterp. 437, pl. 111, f. 3. 1915—BRESADOLA, Icon. Myc. 5: pl. 235. 1928.

Agaricus alcalina COOKE, Illus. Brit. Fungi, 2: pl. 234. (no. 225). 1883.

子実体は密に叢生；傘は径 1.5—4 cm，円錐形～鐘形，のち開張し，広き中央あり；表面は乾燥，灰褐色～汚栗褐色，中盤まで有線，縁は初め褶外に抽出し，歯状をなす；肉は傘に於て帯白色，茎に於て帯褐色，薄し，臭弱く，味なし；褶は直生，初め帯白色，のち淡肉色，やや疎，広幅；茎は 8—9×0.2—0.3 cm，同幅，上方帯白色，下方鮮赤褐色，基部

の方濃色，屢々捩曲し斜上す，むしろ強靱，繊維状幾分有根，基部に長毛を有す，中空；胞子は球形或は広卵形，平滑，8.5—9.5×6—6.5μ；胞子紋は白色；嚢状体は広棍棒形，頂部に比較的少数の長毛を有す。

所在及産地

広葉樹(カシワ)切株上—秋．本州—欧．北米．阿

和名 センボンアシナガタケ(千本足長茸)〔今井〕

Mycena hypnorum Hongo
サカズキガサタケ

Mycena umbilicata Hongo, Jour. Jap. Bot. 32: 141, f. a-d. 1957 (non Dennis, Trans. Brit. Myc. Soc. 34:469. 1951)

子実体は群生；傘は径 7—15mm，丸山形～類扁平，のち中窩を生じ，或は類乳頭状，線条なく，内生繊維或はやや裂目あり，中央暗褐～黒褐色，縁に向つて淡色となり帯オリーブ灰色或は灰色を呈す；外皮の肉は暗褐色，他は水潤灰色，臭及味なし；褶は長く垂生，疎，幅 1—2mm，白色，屢々叉状，連結脈あり；茎は 2—4×0.1—0.2cm，同幅，屢々圧辺，軟骨質，傘面と同色にて頂部白色，管状；胞子紋は白色；胞子は卵形，平滑，7—8(9)×4.5—5(5.5)μ，糊性；担子柄は4胞子，26—39×6.5—7μ；稜嚢体は多生，25—45×9.5—12.5μ，便腹状紡錘形にて鈍頭或はやや鋭頭，薄膜，無色；褶側嚢体は散生，稜嚢体と同様或は大，45—55(68)×11—21μ；茎嚢体は 29—53(67)×8.5—13(29)μ，頭状或はやや便腹状，僅か灰色～無色，薄膜；菌絆あり。

所在及産地

針葉樹下蘚 (*Hypnum*) 間—夏　本州

和名 サカズキガサタケ (盃傘茸)〔本郷〕

Mycena alcalina (Fr. ex Fr.) Quél.
アクニオイタケ

Quélet, Champ. Jura Vosg. 1:105. 1872; Enchir. Fung. 37. 1886—Gillet, Champ. Fr. 268. 1874—Karsten, Hattsv. 1:109. 1879—Saccardo, Syll. Fung. 5:277. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 264. 1915—Massee, Brit. Fung. Fl. 3:99. 1893; Brit. Fungi, 132. 1911—W. G. Smith, Brit. Basid. 76.1908—v. Hoehnel, Frag. Myk. 15:202, f. 3(2). 1913—Lange, Agar. Denm. 1:21, pl. 2, 10a. 1914; Fl. Agar. Dan. 2:37, pl. 51, f. H. 1936—Kauffman, Agar. Mich. 803. 1918—Rea, Brit. Basid. 387. 1922—Bresadola, Icon. Myc. 5:pl. 242. 1928—Singer, Beih. Bot. Centralbl. 48, Abt. 2:527. 1931; Agaricales, 361. 1949—Konrad & Maublanc, Icon. Sel. Fung. 3: pl. 232. 1934; Agaricales, 320, 1948—A. H. Smith, Am. Jour. Bot. 22:858. 1935; N. Am. Sp. Mycena, 314, f. 38(3-4), 39(1-2), pl. 70—71. 1947—Wakefield & Dennis, Comm. Brit. Fungi, 92, pl. 27, f. 7. 1950—Kühner & Romagnesi, Fl. Analyt. Champ. Super. 106. 1953—Heim, Champ. Eur. 2:253. 1957. (non Ricken)
(川村，日．菌．図鑑，4:414, f. 409. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，41, f. 90, pl. 16, f. 90. 1957)

Agaricus alcalinus Fr. Obs. Myc. 2:153. 1818; Syst. Myc. 1:142. 1821; Epicr. Myc. 109. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:214. 1857; Hymen. Eur. 141. 1874—Persoon, Myc. Eur. 3:253. 1828—Berkeley, Outl. Brit. Fung. 125. 1860—Cooke, Handb. Brit. Fungi, 1:69. 1871. (non Illus.)—Karsten, Myc. Fenn. 3:79. 1876—Winter, Pilze, 1:759. 1884—Schroeter, Pilze Schles. 1:635. 1889—P. Hennings, in Engler & Prantl, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:264. 1900—Migula, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 629, pl. 119, f. 3-4. 1912.

子実体は叢生或は群生；傘は径 2—5cm，稀に 6cm に及び，円錐形～浅き鐘状，鈍中丘を存す；表面は茶褐色，灰褐色或は黒褐色，時にオリーブ或は銹褐色を帯び，中央濃色，のち全部淡色となる．中央まで著しき線条あり，無毛，乾時光沢あり，縁は薄く，最後に少しく高まる；肉は薄く，脆く，傘にては白色或は淡色，茎の下部は淡灰褐色，臭は強き滲透性にて明かにアルカリ臭なり；褶は直生，或は幾分彎生，白色，のち灰白色となり，遂に赤褐色となる，やや疎，かなり広幅，僅か便腹状，連結横脈あり，稜はやや淡色，茎は 4—8×0.15—0.3cm，同幅，淡黄色，鼠色或は銹黄色，頂部淡色，無毛，光沢あり，基部白絨毛を有す，脆く，剛直，真直，時に屈曲，中空；胞子は 8—10×5—6μ，稀に 11×7μ，橢円状卵形，平滑；胞子紋は白色；担子柄は4胞子；稜嚢体は多生，無色，紡錘形～便腹状，先端鈍頭，50—80×10—18μ，稀に 100×20μ。

所在及産地

針葉樹切株上及周囲-春～秋　本州-欧．北米．阿

和名 アクニオイタケ (灰汁臭茸)〔川村〕

Mycena polygramma (Bull. ex Fr.) S. F. Gray.
アシナガタケ

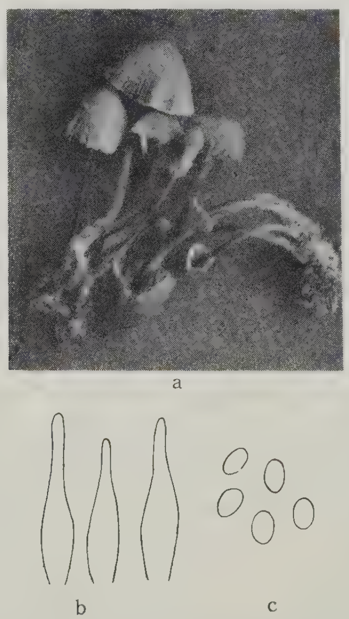
S. F. Gray, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:619. 1821—Quélet, Champ. Jura Vosg. 1:104. 1872; Enchir. Fung. 36. 1886—Gillet, Champ. Fr. 272. 1874—Karsten, Hattsv. 1:106. 1879; Krit. Oefv.

Finl. Basidsv. 84. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:269. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 269. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:108. 1893—PATOUILLARD, Ess. Tax. 150. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 94, f. 96. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 75. 1908—V. HOEHNEL, Frag. Myk. 15:272. 1913—LANGE, Agar. Denm. 1:23. pl. 2, f. 15a. 1914; Fl. Agar. Dan. 2;39, pl. 52, f. F. 1936—RICKEN, Blätterp. 438, pl. 111, f. 7. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 801. 1918—REA, Brit. Basid. 384. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 5:237. 1928—A. H. SMITH, Mycologia, 29:350, f. 2. a. 1937; N. Am. Sp. Mycena, 292, f. 34(8—9), pl. 58—59. 1947—KÜHNER, Gen. Mycena, 498, f. 169. 1938—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:126. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:321. 1948—SINGER, Agaricales, 361. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 90, pl. 26, f. 4. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 108. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:253, f. 191, c. 1957.

(川村, 日. 菌. 図説, n. 89. 1929; 日. 菌. 図鑑, 4: 413, f. 408. 1954—今関, 原色きのこ, pl. 43 (左), 1942; 及土岐, 林. 試. 研. 報. 67:46. 1954—原, 日. 菌. 目. 213. 1954)

Agaricus polygrammus BULL. Herb. Fr. pl. 395. 1791—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, 2: pl. 222. 1799—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 377. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:146. 1821; Epicr. Myc. 107, 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:209. 1857; Hymen Eur. 139. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:526. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 124. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:153. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1: 68. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 223, f. b(no. 228). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:78. 1876—WINTER, Pilze, 1: 761. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1:641. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 264. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3. Pilze, 2(2):633. 1912.

Mycena parabolica RICKEN, Blätterp. 439. 1915.



第 87 図 アシナガタケ Mycena polygramma a. 子実体×1/2 b. 嚢状体 c. 胞子×500 (大谷氏)

子実体は叢生, 群生或は孤生; 傘は径 2—5 cm, 鐘形, 或は円錐状鐘形にてやや中丘あり; 表面は乾燥, 灰褐色, 灰色或は帯白色, 無毛, 稀に粉状, 周縁には溝条を有す; 肉は傘にて帯白色, 茎にて帯灰色, 薄し, 無臭, 無味; 褶は狭く直生, 或は殆ど離生, 上昇或は有歯, 白色にて微に桃色を帯ぶ, やや疎, 中部むしろ広幅, 稜は全縁; 茎は 5—10×0. 2—0. 4 cm, 或はより以上長し, 同幅或は上方僅か狭細, 灰褐色或は青藍色, 全部或は上部に明かなる線条あり, 真直或は屈曲, 時に捩曲し, 軟骨質, 緊緻, 剛直なるも脆し, 無毛, 光沢あり, 基部有毛にて長根を存す, 中空; 胞子は広楕円形, 平滑, 9—12×6—8μ; 胞子紋は白色; 嚢状体は狭纒形にて波状頸を有し, 往々分岐す。

所在及産地

腐木, 落葉上一夏秋

北海道, 本州, 九州一欧. 北米. 亜 (小亜, 西比)

和 名 アシナガタケ (足長茸) 〔川村〕

Mycena pura (PERS. ex FR.) QUÉL.

サクラタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:103. 1872; Enchir. Fung. 34, 1886—GILLET, Champ. Fr. 282, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:100. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 83. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:256. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 259. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:113. 1893; Brit. Fungi, 132, pl. 11, f. 4, 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 150. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 95, f. 97. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 72. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 52, pl. 52, f. 113. 1910—V. HOEHNEL, Frag. Myk. 15:273, f. 2(2). 1913—LANGE, Agar. Denm. 1:24, pl. 2, f. 17. 1914; Fl. Agar. Dan. 2:40, pl. 52, f. G. 1936—MURRILL, Mycologia, 7:117, pl. 158, f. 3. 1915—RICKEN, Blätterp. 432, pl. 110, f. 2. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 794. 1918—REA, Brit. Basid. 377. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 5: pl. 226. 1928—KÜHNER, Gen. Mycena, 448, f. 150

1938—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 124. 1938—A. H. SMITH, N. Am. Sp. Mycena, 187, f. 10(1, 2), pl. 23, 24, f. A. 1947—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:318. 1948—SINGER, Agaricales, 363. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 87, pl. 26, f. 2. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 105. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:254, f. 190, D. 1957.

(本郷, 植. 分. 地. 14:72, f. 1(4). 1951—原, 日. 菌. 目. 213. 1954—今関及土岐, 林. 試. 研. 報. 67:46. 1954—MATSUDA & HONGO, Jour. Jap. Bot. 30: 153. 1955—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 40, f. 88, pl. 15, f. 88. 1957)

Agaricus roseus BULL. Herb. Fr. pl. 507. 1791—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, 72. 1797—SCHROETER, Pilze Schles. 1:637. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:264. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2 (2):634. 1912.

Agaricus purus PERS. Tent. Disp. Fung. 21. 1797; Syn. Meth. Fung. 339. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:151. 1821; Epicr. Myc. 102. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:201, (Monogr. Mycen. 9). 1857; Hymen. Eur. 133. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:528. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 122. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2: 152. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:65. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2: pl. 157(no. 219). 1883; Handb. Austr. Fungi, 22. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:76. 1876—WINTER, Pilze, 1:765. 1884.

Gymnopus purus S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:608. 1821.

Prunulus purus MURR. N. Am. Fl. 9:332. 1916; Mycologia, 9:258, pl. 11, f. 3. 1917.

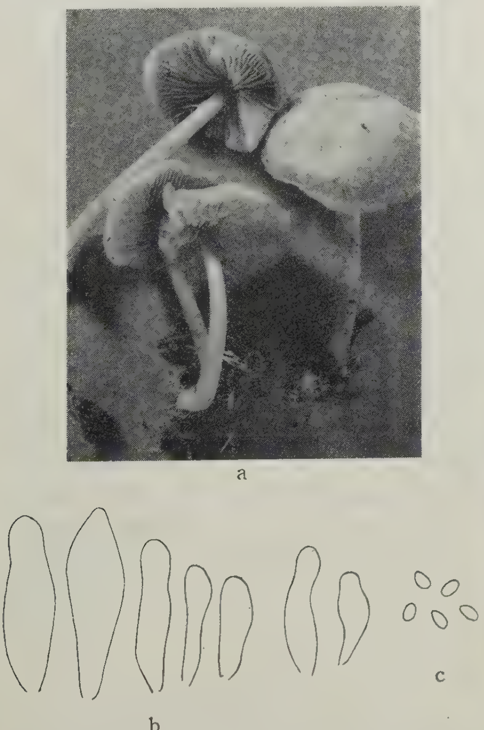
子実体は叢生，散生或は孤生；傘は径 2—5 cm 或はそれ以上に及び，鐘形～丸山形，のち開張し，多少鈍中丘或は広き中丘を存す，表面は湿潤，鮮桃紅色，帯桃紫色，淡菫色或は帯白色等に変化し，縁に線条あり；肉は帯桃色，薄く，湿潤，臭味幾分大根様；褶は直生或は彎生，白色，桃色，菫色等，やや疎～密，広幅，便腹状，屢々脈により連結，稜は波状或は鈍鋸歯あり，時に白色；茎は 5—8×0.2—0.7 cm，或はそれ以上長く，同幅或は上方僅か狭細，傘面と同色或は淡色，屢々圧辺捩曲す，平滑，光沢あり，時に絹状綿絮を有し，基部に絨毛あり，緊緻，中空；胞子は長楕円形，5.5—7.5×3—4 μ；胞子紋は白色；嚢状体は大形，鈍頭紡錘形或は広棍棒形，49—66×15—17 μ，時に上部短広頸状は狭細す，可食

所在及産地

林内枯葉間或は腐朽材上—春～秋

北海道，本州，九州—欧. 北米. 濠. 阿. 亜(小亜)

和名 サクラタケ (桜茸)〔今井〕

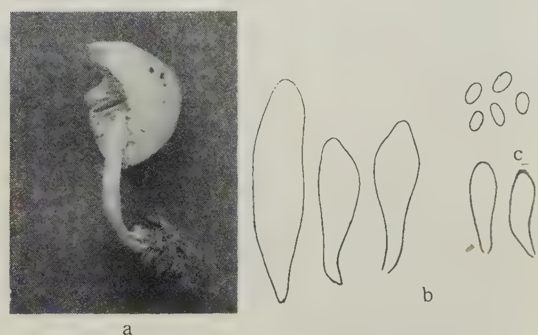


第 88 図 サクラタケ Mycena pura a. 子実体×2/3 b. 嚢状体 c. 胞子×500 (大谷氏)

Mycena subaquosa A. H. SMITH
シロサクラタケ

A. H. SMITH, Mycologia, 31:278. 1939; N. Am. Sp. Mycena, 186, pl. 22, 1947—SINGER, Agaricales, 363. 1949—HONGO, Jour. Jap. Bot. 28:332, f. 2(3—5), 1953.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 40, f. 89, pl. 15, f. 89. 1957)



第 89 図 シロサクラタケ Mycena subaquosa a. 子実体×2/3 b. 嚢状体 c. 胞子×500 (大谷氏)

子実体は散生; 傘は径 1.5—2.5cm, 丸山形～広丸山形, のち殆ど扁平となる; 表面は吸水性, 無毛, 汚黄白色, 湿時多少透明, 乾時褪色し不透明, 褶は直生～狭生, 屢々垂下歯を有す, やや疎, 中間脈あり, 稜は平坦, 帯白色; 茎は 4—5×0.2cm, 同幅, 水様白色或は傘面と同色, 無毛, 頂部屢々粉状, 中空; 担子柄は4胞子, 22—25×5.5—6.5μ; 胞子は狭楕円形, 平滑, 糊性, 4—8×2.5—3.5μ; 胞子紋は白色; 褶側嚢体は多生, 広便腹状紡錘形, 円頭或は長頸あり, 無色, 43—70×8—20μ。

所在及産地

松林内落葉間—秋　本州, 九州—北米

和名 シロサクラタケ (白桜茸) 〔本郷〕

Mycena chlorophos (Berk. et. CURT.) SACC.

ヤコウタケ

SACCARDO, Syll. Fung. 5:301. 1887—KOBAYASI, Bull. Biogeogr. Soc. Jap. 7:6. 1937—S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:16. 1939—CORNER, Trans. Brit. Myc. Soc. 37:261. f. 6. 1954.

(松村, 植. 名鑑, 1:155. 1904—白井, 日. 菌. 目. 57. 1905; ed. 2. 377. 1917; ed. 3. 224. 1927—原, 日. 菌. 目. 213. 1954)

Agaricus chlorophos BERK. et CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4:113. 1858.

(白井, 日. 菌. 目. 57. 1905)

Agaricus cyanophos BERK. et CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4:113. 1860.

(白井, 日. 菌. 目. 57. 1905)

Mycena cyanophos SACC. Syll. Fung. 5:301. 1887—KOBAYASI, Bull. Biogeor. Soc. Jap. 7;4, f. 1, pl. 1, f. 3, pl. 3. 1937.

(松村, 植. 名鑑, 1:155. 1904—白井, 日. 菌. 目. 57. 1905; ed. 2. 377. 1917; ed. 3. 224. 1927—小林, 日. 隠. 植. 図. 547, pl. 264, f. 1—3. 1939; Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo, 26:3—9, f. 1—2. 1949; 服部植. 研. 報. 8:17. 1953—羽田, 科学南洋, 4:226. 1942—原, 日. 菌. 目. 213. 1954—平田, 青島綜合調査報告, 78. 1954)

Mycena photogena KOMINAMI, 植物及動物, 1: 575. 1933. (原, 日. 菌. 目. 213. 1954)

Mycena cyanophos f. *carolinensis* KOBAY. Bot. Mag. Tokyo, 53:161. 1939.

Mycena phospora KAW.

(羽田, 科学南洋, 1: f. 3. 1939)

Mycena chlorophos var. *virescens* KAW. Icon. Jap. Fungi, 4:415, f. 410. 1954.

子実体は孤生或は群生; 傘の径 1—3cm, 初め半球形, のち丸山形となり, 遂に扁平となり中窩あり; 表面は淡暗褐色或は鼠色にてやや粉状, 開張して淡色或は帯褐色, のち帯白色にて, やや粘性, 中盤まで放射状溝あり, 縁は鈍鋸歯牙状; 肉は甚だ薄く, 同色, 膜質, 臭むしろ強し; 褶は離生或は僅や狭生, 頂部に線をなす, 白色, のち灰色, むしろ密, 幅 0.3—1mm, 稜は雲母状; 茎は0.6—3×0.03—0.1cm, 同幅, 基部に円形の基盤あり, 上部白色, 透明, 微産毛あり, 基部剛毛或は細絨毛あり, 幅 2.5mm に及ぶ, 強靱, 中空; 胞子は楕円形, 平滑, 内容は曇り, 僅か糊性, 7—8.5×5—6μ; 胞子紋は白色; 担子柄は 17—23×7.5—10μ, 4胞子; 稜嚢体は60×7—21μ, 無色, 円錐形或は便腹状, 鈍頭～鋭頭或は短かき附属突起を有し, 稀に分岐, 薄膜或は僅か厚膜; 褶側嚢体なし; 傘嚢体は 25—60×13—25μ, 棍棒形, 多少厚膜, 短き単一の突起を有す, 互に多少癒合し幼傘上に層を作る, 開傘後互に分る; 茎嚢体は 300×10—25μ, 円錐形或は披針形, やや鋭頭, 無色, 平滑, 薄膜或は僅か厚膜, 茎の上方のものは稜嚢体の形に移行す; 茎の菌糸は多くは菌絆なく, 傘及褶の菌糸には菌絆あり; 傘の膠層は厚さ 50—100μ, 子実下層の菌糸は細くして類膠質; 傘及褶は鮮青緑色の光を放ち, 茎及菌糸は殆ど光らず。

所在及産地

林内枯枝, 樹皮及材上生—秋

小笠原島, 八丈島, 九州, 本州—南洋諸島

和名 ヤコウタケ (夜光茸) 〔小林〕

Mycena pseudostylobates KOBAY.

KOBAYASI, Jour. Hattori Bot. Lab. 5:4, f. 1, c. f. 4. 1951.

子実体は散生; 傘は径 1.5—2.5mm, 老時丸山形, 中盤扁平, 放射状溝あり; 表面は殆ど白色, 或は中盤甚だ淡き灰色, 縁は薄く, 波状, 短刺を散生す; 肉は薄し; 褶は直生, 不同, 幾分疎; 茎は 6—9×0.2—0.3mm, 半透明, 同幅, 無毛, 基端に基盤あり, 基盤は径 5—7mm, 丸山形, 放射状線条あり, 縁に房毛を有す; 傘肉は薄き菌糸層を有して擬柔組織状; 担子柄は 17—22×6—7μ, 4胞子; 胞子は卵形, 平滑, 無色, 4—4.5×2.5μ; 傘嚢体は嚢状にて微突起を散布す; 褶側及茎嚢体なし; 傘縁の細胞は嚢状にて束生, 7.5—10×15—25μ. 菌糸は発光す, 子実体の発光性は未詳。

所在及産地

イチイガシ (*Cyclobalanopsis gilba*) 葉上—夏

九州

和名

Mycena luxcoeli CORNER

CORNER, Trans. Brit. Myc. Soc. 37:264, f. 8, pl. 1. 1954.

傘は径 1.5—2.5cm，円錐形，屢々中丘あり；表面は微粉を被むり，淡紫褐色，線条あり，縁は鈍鋸歯状；褶は上昇直生，白色，稜は紫褐色，やや疎，幅 2—2.5mm，僅か横脈あり；茎は 2—4.5×0.1—0.15cm，全部微粉を被むり，白色，基部絨毛ありて径 1.5—2.5mm，類棍棒形，中空；胞子は広楕円形，鈍頭，無色，非糊性，8.5—12×6.5—9μ；担子柄は 30—40×9.5—12μ，小柄は 4，長さ 7—9μ；稜嚢体は湿時紫褐色，多少棍棒形或は便腹状，屢々諸形の小片を附す，小片は長さ 25μ に及び，幅 2—6μ にて鈍頭，薄膜，40—100×7—32μ；褶側嚢体なし；傘嚢体は棍棒形，鈍頭，薄膜，湿時紫褐色，初め密なるも開張傘にては開く，13—25×3—9μ，稀に稜嚢体の如く大形；茎嚢体は傘嚢体の如くにて，屢々伏臥し，茎の頂部のものは稜嚢体と同じ；菌糸は有節隔膜あり，膨大し，薄膜，茎の菌糸は幅 25μ に及び，隔膜は隔る，傘及褶の菌糸は幅 35μ に及ぶ，褶及茎は青光を放つ。

所在及産地

シイ（*Shiia sieboldii*）の樹皮及材上—夏　八丈島

和名

Mycena daisyogunensis KOBAY.

KOBAYASI, Jour. Hattori Bot. Lab. f. 1, D. f. 5. 1951

傘は径 2.5—5mm，老時扁平或は反転し，透明線条あり；表面は白色，無毛，縁は真直或は波状；肉は薄く，膜質；褶は狭生，白色，疎，広幅，不同；茎は長さ 15—20mm，甚だ細く，白色，無毛，基部に於て基盤及毛なし，中空；傘肉は細長菌糸の擬柔組織よりなり，菌糸の表面は顆粒を有す；担子柄は 12—15×3.7—4.2μ，2胞子；胞子は楕円形，屈曲，平滑，無色，2.5—3×6—7μ；子実体は発光す。

所在及産地

広葉樹枝上—夏　九州

和名

疑問種

Mycena dicranophora (BERK. et CURT.) SACC. Syll. Fung. 5:305. 1887.（松村，植．名鑑，1:155. 1904—白井，日．菌．目．57. 1905; ed. 2. 377. 1917; ed. 3. 224. 1927—原，日．菌．目．213, 1954）= *Agaricus dicranophyllus* Berk. et Curt. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4:113. 1858。小笠原島

M. Fuyoensis IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 55:448. 1941. ヒメフヨウタケ。本州

M. hemileuca (BERK. et CURT.) SACC. l. c. 5: 273. 1887.（松村，l. c. 155. 1904—白井，l. c. 57. 1905; ed. 2. 377. 1917; ed. 3. 224. 1927—原，l. c. 213. 1954）= *Agaricus hemileucus* BERK. et CURT. l. c. 113. 1858。小笠原島

M. leucoconis (BERK. et CURT.) SACC. l. c. 5: 273. 1887.（松村，l. c. 155. 1904—白井，l. c. 58. 1905—原，l. c. 213. 1954）= *Agaricus leucoconis* BERK. et CURT. l. c. 113. 1858. 小笠原島

M. pityrodes (BERK. et CURT.) SACC. l. c. 5:299. 1887.（松村，l. c. 155. 1904—白井，l. c. 58. 1905; ed. 377. 1917; ed. 3. 224. 1927—原，l. c. 213. 1954）= *Agaricus pityrodes* BERK. et CURT. l. c. 114. 1858. 小笠原島

M. rhodoconis (BERK. et CURT.) SACC. l. c. 5: 273. 1887.（松村，l. c. 156. 1904—白井，l. c. 58. 1905—原，l. c. 214. 1954）= *Agaricus rhodoconis* BERK. et CURT. l. c. 1858. 小笠原島

M. Umeae IMAI, l. c. 450. 1941. ウメタケ。本州

M. viscalba S. ITO et IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:18. 1939. ムニンシロナメアシタケ. 小笠原島

M. Wrightii S. ITO et IMAI, l. c. 18. 1939. シマシロヒメタケ. 小笠原島

M. sp. KOBAYASI, Jour. Hattori Bot. Lab. 5: 5, f. 1E, 6. 1951

Baeospora SING.

ニセマツカサシメジタケ属

SINGER, REV. Myc. 3:193. 1938; Agaricales, 366. 1949.

性質はエノキタケ（*Collybia*）に類似す；傘は初め内屈縁を有し，吸水性或は類吸水性；色素は細胞内或は間隙に存して結晶となりて附着し，褐色～蜜色，或は（肉眼的に）菫色；上表皮層及下皮層は良く或は僅か分化す，上表皮層は多少放射状に配列する匍匐性糸状菌糸より成るも，或菌糸端は屢々斜上或は直立し，のち時に皮嚢体状となるも傘面に甚し

く分散せり；下皮層は幾分大なる菌糸より成る；托は褶状，褶は狭生～殆ど離生，密，蒼白或は幾分淡菫色を呈す；托実質は不整類混淆～整形，伸長せる菌糸より成る；担子柄は小形にて正形；嚢状体は存在するも屢々褶側に甚だ分散し，のちこれ等は稜嚢体の性となり稜に表わる；胞子は無色，平滑，甚だ小形，円壔形或は円筒形，糊性，薄き単一膜を有す；子実下層は薄くして混淆せる類細胞状にて甚だ小形要素より成る；茎は中心生にて偽根を有し或はこれを欠き，基物より上部は殆ど同幅，皮嚢体（毛）を有す；肉は蒼白～淡菫色，菌絆を有する非糊性の菌糸より成る；材上，毬果上或はこれに類似せる地中埋在物上に生ず，北温帯産，約2種1変種を知らる，経済的価値なし．

（本属名は baeos〔希〕（小なる），spora〔希〕（種子，胞子）より出づ）

基準種 *B. myosura* (FR.) SING.

Baeospora myosura (FR.) SING.
ニセマツカサシメジタケ

SINGER, Rev. Myc. 3:191. 1938; Agaricales 367. 1949—HONGO, Jour. Jap. Bot. 28:330, f. 1(2—5). 1953.

(MATSUDA & HONGO, Jour. Jap. Bot. 30:153, f. 2(B—F). 1955—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 38, f. 81, pl. 15, f. 81. 1957)

Agaricus myosurus FR. Syst. Myc. 1:132. 1821; Epicr. Myc. 89. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:158, (Monogr. Collyb. 14). 1857; Hymen. Eur. 118. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:69. 1876—WINTER, Pilze, 1:777. 1884—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:265. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2); 647. 1912.

Collybia myosura QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:95. 1872—GILLET, Champ. Fr. 321. 1871—KARSTEN, Hattsv. 1:151. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:223. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 237. 1915—RICKEN, Blätterp. 416, pl. 109, f. 4. 1915 BREBINAUD, Bull. Soc. Myc. Fr. 42:126. 1926—KONRAD, Bull. Soc. Myc. Fr. 47:129. 1931; & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3:pl. 206, f. 2. 1932; Agaricales, 1:280. 1948.

Collybia Friesii BRES. Icon. Myc. 5:pl. 214, f. 2. 1928.

Mycena myosura KÜHNER, Gen. Mycena, 526, f. 182. 1938.

Collybia conigena LANGE, Agar. Denm. 3:18, pl. 1, f. 14. 1917; Fl. Agar. Dan. 2:14, pl. 44, f. c. 1936—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 94, f. 58. 1953. (non QUÉLET)

子実体は群生；傘は径 8—23mm，或はそれ以上に及び，丸山形，のち開張して殆ど扁平となる，往々多少中丘あり；表面は非粘性，無毛，平滑，鈍赤褐色～淡褐色，のち周縁部白茶けたる狐色に褪色す，縁は初め内屈す；肉は薄く，傘面と殆ど同色，臭弱く，味幾分穀粉状；褶は狭生，甚だ密，狭幅，薄く帯白色～淡色，同長，屢々褐色斑を有す；茎は 2.5—5×0.1—0.25cm，帯白色～微汚肉色，粉状にて頂部特に著し，同幅，基端屢々長根となり，白色軟毛を存す；胞子は無色，楕円形，平滑，糊性，(3.5) 4.5—5(7)×2.5—3(3.5)μ；胞子紋は白色；担子柄は4胞子，14—16(17)×(3)3.5—4μ；稜嚢体は棍棒形～便腹状，鈍頭，薄膜，無色，16—22×5.5—8.5μ（或は 20—30×5—9.5μ）。

所在及産地

クロマツの落果上—秋冬　　本州—欧

和名 ニセマツカサシメジタケ（贋松果湿地茸）〔本郷〕

〔因記〕本菌胞子は欧洲産菌に比しやや大形なるも，本郷氏は暫く本菌名を採用せられたり．

Xeromphalina KÜHN. et MAIRE
ヒメカバイロタケ属

KÜHNER & MAIRE, Bull. Soc. Mycol. Fr. 50: 18. 1934—SINGER, Agaricales, 367. 1949.

Omphalopsis EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5: 425. 1909. (non GREV. 1863).

子実体はヒダサカズキタケ (*Omphalia*)，ヒダサカズキタケ—ホウライタケ(*Omphalia-Marasmius*)型；色素は細胞間隙及び膜を被う，鮮色；傘は初め幾分内屈する縁を有す；上表皮層は放射状に配列する匍匐，非分岐菌糸より成り，皮嚢体或は柵状菌糸なし；傘の色は黄褐色，酒赤色等；下表皮層，肉，托実質の菌糸は色素被を有し，屢々アルカリによつてピンク～赤色に変る；托は褶状にて時に僅か側脉を有す；褶は広く直生～深く垂生，有色；托実質は整型，各菌糸は密，寧ろ太く，類平行にて中軸に配列し，僅か厚き膜を有す；担子柄は正常；稜嚢体及び褶側嚢体を有し，少数にて著しからざるもの或は多数にて著しきものあり，無色；茎は多少中心生，白色ならず，膠質ならず，常に基部に有色の毛被を有す，この毛被は屢々著しくして粗剛毛よりなり，茎上を上昇し茎の中部に向つて漸次短かくなり上部

にては黄色粉末となる；被膜なし；肉は幾分強靱にて往々再生す，非糊性；菌糸は菌絆を有す；落葉，落枝，生死の材幹，埋木，腐蝕物上に生ず；温帯産約3種を知らる。

（本属名は Xeros〔希〕(乾燥)，*Omphalia*（属名）より出づ）

基準種 *X. campanella* (BATSCH ex FR.) KÜHN. et MAIRE。

本邦既知種検索表

A．肉は KOH にて赤変せず；傘は径 8—20 mm，黄銹色にて鈍橙黄色或は赤色を帯ぶ；褶は直状垂生～深く垂生す。
　　ヒメカバイロタケ　***X. campanella***（219）

B．肉は KOH にて赤変す；傘は径 1—1.8 cm，帯褐黄色，中央暗褐色；褶は単に直状類垂生。
　　キチャホウライタケ　***X. cauticinalis***（220）

Xeromphalina campanella (BATSCH ex FR.) KÜHNER et MAIRE
ヒメカバイロタケ

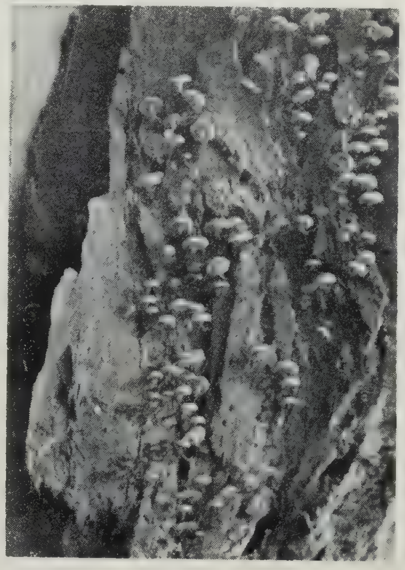
KÜHNER & R. MAIRE, Bull. Soc. Myc. Fr. 50: 18. 1934—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:331. 1948—SINGER, Agaricales, 368. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 80. 1953.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，41，pl. 16，f. 91. 1957）

Agaricus fragilis SCHAEFF. Fung. Bavar. 4: Ind. 56, pl. 230. 1774—SCHROETER, Pilze Schles. 1:627. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 262. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2); 617. 1912.

Agaricus campanella BATSCH, Enchir. Fung. 74. 1783—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 469. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1: 166. 1821; Epicr. Myc. 126. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:189, (Monogr. Omph. 13). 1857; Hymen. Eur. 162. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:519. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 133. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:81. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2: pl. 273, f. a (no. 263). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:89. 1876—WINTER, Pilze, 1:742. 1884.

Omphalia campanella QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:240. 1872—GILLET, Champ. Fr. 299. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:135. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 94. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5; 327. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:397. 1893; Brit. Fungi, 201. 1911—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 101, f. 103. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 87. 1908—RICKEN, Blätterp. 397. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 823, pl. 172. 1918—REA, Brit. Basid. 431. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 6: pl. 273. 1928—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 118, pl. 55, f. 1. 1927—PILÁT, Bull. Soc. Myc.



a



b



c

第 90 図　ヒメカバイロタケ
Xeromphalina campanella
a．子実体群生の状　×1/2　b．同拡大　×2
c．胞子　×650　　　　（大谷氏）

Fr. 49:278. 1933—LANGE, Agar. Denm. 8:15. 1930—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:134. 1933—HEIM, Champ. Eur. 2:240. 1957.

(MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:117. 1931—松浦, 茸類辞典, 198, f. 235. 1933; 応用菌蕈学, f. 800(p. 1185). 1941—本郷, 植. 分. 地. 14:73, f. 1(6). 1951—原, 日. 菌. 目. 229. 1954—今関及土岐, 林. 試. 研. 報. 67:46. 1954)

Omphalina campanella QUÉL. Enchir. Fung. 45. 1886.

Omphalia fragilis SACC. Fl. Ital. Crypt. Hymen. 297. 1915.

Omphalopsis campanella MURR. Mycologia, 4: 168, pl. 68, f. 10. 1912; N. Am. Fl. 9:313. 1916.

子実体は叢生或は多数群生; 傘は径 8—20 mm, 丸山形—鐘形, 開張し中窩を有し, 或はやや漏斗形となる; 表面は黄銹色, 鈍橙黄色或は赤色を帯ぶ, 無毛, 中窩に及ぶ線条あり, 湿時水潤状, 乾時淡色; 肉は黄色, 薄く, 膜質, 味及臭なし; 褶は直状垂生〜深く垂生, 弧状, 黄白色, 幾分密〜やや疎, 狭幅, 著しく脈によつて連結さる; 茎は 1—3×0.05—0.2 cm, 同幅, 初め上部帯黄色, 下部栗褐色, のち全部栗褐色, 無毛〜粉状, 基部に帯白或は帯黄色の剛毛あり, 真直或は屈曲, 剛直, 角状軟骨質, 中空; 胞子は楕円形, 有嘴, 平滑, 糊性, 5—6.5×3—4μ; 胞子紋は白色; 嚢状体は褶側に散生, 稜に多生, 紡錘形, 40—50×8—10μ; 実質は KOH にて赤変せず。

所在及産地

林内針葉樹腐材上—夏秋

北海道, 本州—欧. 北米. 亜(小亜, 西比)

和名 ヒメカバイロタケ(姫樺色茸)〔松浦及金田〕

Xeromphalina cauticinalis (FR.) KÜHNER et R. MAIRE
キチャホウライタケ

KÜHNER & R. MAIRE, Bull. Soc. Myc. Fr. 50:18. 1934—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:330. 1948—SINGER, Agaricales, 368. 1949 (ut *caulicinalis*)—HONGO, Bull. Fac. Lib. Arts Sci. Educ. Shiga Univ. 5:57. 1956.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 41, f. 92, pl. 16. f. 92. 1957)

Agaricus caulicinalis WITH. (1796)—SWARTZ, Sv. Vet. Akad. Nya Handl. 29:82. 1808. (non BULLIARD. 1790).

Marasmius cauticinalis FR. Epicr. Myc. 383. 1883; Monogr. Hymen. Suec. 2:57. 1863; Hymen. Eur. 476. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1: 238. 1871 (*caulicinalis*); Illus. Brit. Fungi, 7: pl. 1134, f. b(n. 1081). 1890; Handb. Austr. Fungi. 85. 1892—GILLET, Champ. Fr. 362. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:175. 1879—BRESADOLA, Fungi Trid. 1:39, pl. 41, f. 2. 1883—WINTER, Pilze, 1:505. 1884—QUÉLET, Enchir. Fung. 145. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5:536. 1887 (*caulicinalis*)—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:167. 1893; Brit. Fungi, 150. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 145. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 305. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1); 384, pl. 69 D, f. 7—9. 1912—RICKEN, Brit. Basid. 529. 1922.

Marasmius tomentosipes PECK, Bull. Torr. Bot. Club, 29:71. 1902—MURRILL, N. Am. Fl. 9:278. 1915.

Omphalia Sphagnorum KOBAY. Sci. Res. Ozegahara Moor, 557, f. 4, pl. 1, f. 1. 1954.

Xeromphalina fulvobulbillosa KÜHN. et ROMAGN. 80. 1953.

子実体は群生; 傘は径 1—1.8 cm, 丸山形, のち扁平となりて幾分中窩あり, 屢々中心に小乳頭あり; 表面はやや吸水性, 無毛, 放射状線溝を有し, 帯褐黄色, 中央暗褐色なり, 縁は全縁或は不規則波状; 肉は甚だ薄く, 革膜質, 傘面と同色, 臭なし; 褶は直状類垂生, クリーム色〜黄土色, 疎, 網状脈にて連結され, 後方最も広く, 幅約 1 mm; 茎は 2—3 ×0.05—0.1 cm, 角質, 剛直, 帯黒褐色, 頂部淡色微細産毛あり, 基部塊状にて黄土渋色綿絮毛に密に被わる; 胞子は楕円形, 平滑, 無色, 糊性, 5—6× 2.5—3μ; 担子柄は 20—22×4—5μ, 4 胞子; 実質は KOH にて赤色を呈す; 茎の毛は帯褐銹色, 屢々不規則に屈曲し, 往々分岐し, 厚膜, 隔膜を有し或は欠如す, 25—55×3.5—5μ; 菌糸は菌絆を有す。

所在及産地

松林落葉, 水蘚上—秋 本州—欧. 北米

和名 キチャホウライタケ (黄茶蓬莱茸)〔本郷〕
ヤチハリガネタケ (谷地針金茸)〔小林〕

疑問種

Omphalia campanella var. *myriadea* KALCHBR. (松浦, 茸類辞典, 159, f. 184. 1933; 応用菌蕈学, f. 820 (左). (1207). 1941—原, 日. 菌. 目. 229. 1954) ヒメカバイロタケモドキ

Filoboletus P. HENN. em. v. HOEHN.
アミヒカリタケ属

P. HENNINGS, Monsunia, 1:146. 1900—v. HOEHNEL, Sitzb. Akad. Wien, 117(1):1013. 1908—

SINGER, Agaricales, 370. 1949.

Laschia, sect. *Porolaschia* PAT. Jour. Bot. 1: 231. 1887. pr. p.

Leucoporus, sect. *Gelatinosi* PAT. Ess. Tax. 82. 1900.

Leucoporus, sect. *Filipedes* PAT. l. c. 82. 1900.

Bactroboletus CLEMENTS, Gen. Fung. 108. 1909.

Mycenoporella VAN OVEREEN, Icon. Fung. Malay. 14—15: 2, pl. 15. 1926.

子実体は多孔菌の如き托を有し，ホウライタケ—ヒダサカズキタケ（*Marasmius-Omphalia*）或はホウライタケ—クヌギタケ（*Marasmius-Mycena*）型；傘は丸山形；上表皮層は細き匍匐糸状菌糸より成立つ；下皮の分化は少きも傘肉よりも密にて相当の厚さを有す；托は明かに孔状にて孔口は通常褶より移行せることを示すが如き放射状配列をなさず，むしろ深きか或は甚だ浅き層を作る；胞子紋は白色或は帯白色；胞子は無色，平滑，楕円～短楕円形，往々楕円状円壔形或は類球形，糊性，膜は同質；担子柄は正常形；稜嚢体は擬糸状体と常に明かに分化されず；同様なる嚢状体様物或は棍棒状有刺の物が稜に近く或は或標品にては中盤上に皮嚢体の形をとる；茎は中心或は僅か偏心生，基物に多少接木状或は偽根の痕跡もなし，類無毛～粉状或は綿絮状にて往々基部丈けに軟毛あることあり；肉は厚膜の菌糸より成る（少くとも菌糸の多くが厚膜），甚だ屢々幾分膠化し，茎以外の子実体の或部分に於て然り，非糊性，菌絆を有す；枯材或は稀に葉等の植物残屍上に生ず；熱帯産，約5種を知らる，経済的価値なし

（本属名は filum〔羅〕(繊維)，Boletus（属名）より出づ）

基準種　*F. mycenoides* P. HENN.

本邦既知種　　　　***F. manipularis*** (221)

Filoboletus manipularis (BERK.) SING.

アミヒカリタケ

SINGER, Lloydia, 8:215. 1945; Agaricales, 372. 1949—DENNIS, Kew Bull. 325. 1952.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，41, f. 93, pl. 16, f. 93. 1957）

Favolus manipularis BERK. in HOOK. Jour. Bot. 6:229. 1854.

Favolus caespitosus BERK. Jour. Linn. Soc. Bot. 13:167. 1873.

Laschia caespitosa BERK. et BR. Linn. Soc. Lond. 2(2):62. 1883—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 184. 1900—LLOYD, Myc. Writ. 5:646, f. 921—923. 1917.

Polyporus mycenoides PAT. Bull. Soc. Myc. Fr. 3:169, f. 1. 1887.

Laschia caespitosa var. *gegolensis* P. HENN. Bot. Jahrb. 18, Beibl. 44:33. 1894.

Laschia Lauterbachii P. HENN. Bot. Jahrb. 18, Beibl. 44:33. 1894; in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 184. 1900.

Porolaschia manipularis PAT. Ess. Tax. 138. 1900.

Polyporus Hanedai KAWAM. in HANEDA, Kwagaku-Nanyo, (科学南洋) 1:120. pl. 2, f. 8 A–C. 1939; 4:226, f. d. 1942; Icon. Jap. Fungi, 1:139. 1954.

Promycena pallescens BOEDIJN, Bull. Jard. Bot. Buitenz. III, 16:398, f. 8. 1940.

Promycena manipularis HEIM, Rev. Myc. 10: 35, f. 21—23, pl. 3, f. 1—3. 1945.

Mycena manipularis MÉTROD, Prod. Fl. Myc. Madagascar, III, Des Mycènes, 87, f. 51. 1949—CORNER, Trans. Brit. Myc. Soc. 37:267, f. 12, 1954.

Poromycena Hanedai KOBAY. Jour. Hattori Bot. Lab. 5:1, f. 1, A. f. 2. 1951.

（平田，青島綜合調査報告，78, f. 3. 1954）

Filoboletus hanedai HONGO, Jour. Jap. Bot. 30: 75, f. 1, F. 1955.

子実体は叢生或は密に束生；傘は径 0.5—3.5 cm，丸山形或は円錐状鐘形，中丘あり，のち扁平となる；表面は吸水性，幾分透明，裏面管孔のために方眼状の溝を存す，最後に白粉状となり，やや粘性を呈す，幼時セピア，暗褐或は汚小豆色，開張して淡色～帯灰色或は殆ど白色となり，老時屢々帯黄色，或はピンクに褪色，のち周辺に向つて煉瓦色となる，縁は初めむしろ強く内屈す；肉は中央に於て厚さ 0.5—2.5 mm，柔軟，吸水性，淡色，臭はむしろ蠟の如し，緑色の燐光を放つ，光は茎の下方に於て特に著し；托は管孔状，管孔は長さ 1.5—5 mm，直生或は僅か垂生歯を有し，各管孔は規則正しき放射状列をなし，其間に短き列を介在す，傘面と同色にて淡く，蠟質；孔口は多角形，大形，径 0.5—1 mm，第一次孔は 12—18，主放射列には 5—10，白色，のち淡クリーム色；茎は中心生，0.4—6×0.5—2.5 mm，同幅或は基部に於て急に或は徐々に拡大して径 3.5 mm に及ぶ，屢々圧辺され，全部白粉状にて，のち平滑となり，傘面と同色にて淡し，屢々基部より，帯褐色，ピンク或は帯赤色に褪色す，脆く，中空；胞子は広き鈍き楕円形，稀に核子形，光を屈折し，無油球，糊性（青色），6—8.5×4—5.5 μ；胞子紋は白色；担子柄は短く，棍棒形，20—28×6—8 μ，4 胞子，小柄長さ 6—8 μ，繊細ならず；稜嚢体は類棍

棒形〜類便腹状或は広披針形，鋭頭，屢々短片或は突起を有す，薄膜，無色；褶側嚢体欠如；茎嚢体は95×5—16μ，茎の下方にては伸長し150μに及ぶ，多少棍棒形或は披針形にて，やや便腹状に変化し，多くは不規則なる小片を有す（15×2—4μ），甚だ変化し，膜は往々僅か厚し；傘嚢体は茎嚢体に同じ，傘の開張後頗廃し，傘面をやや粘性となす；菌糸は菌絆を有す，茎，傘の表面及び子実下層以外にては甚だ膨大し，膜は薄く或は僅か厚し；発光菌として著し。

所在及産地

林内枯木，腐木上—夏秋

小笠原島，本州，九州—濠．南洋．阿．亜（錫．馬．比．台）

和名 アミヒカリタケ（網光茸）〔小林〕

(X) Biannularieae SING. モミタケ族

SINGER, Ann. Mycol. 34:330, 347. 1936; Agaricales, 374. 1949.

Armillarieae IMAI, Jour. Fac. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:46. 1938.

褶は垂生或は直生〜鷲状狭生，短褶介入或は甚だ少数存在す；托実質は幼品にては両側型，非糊性；胞子は円壔形にて大形，平滑，無色，或は短楕円形〜楕円形にて中形，常に糊性，平滑，薄膜；茎は肉質；被膜存在し，多くの種に於て多少明かに二重鍔なるも，然し基部に壺を作らず。

本族は両側型の托実質を有する特異なるものにて2属モミタケ属（*Catathelasma*），及び *Armillaria* 属を収む．前者は垂生褶を有し，2重鍔明かにして胞子の甚だ長きもの，後者は褶の着生状これと異なり，被膜あるも2重ならず，胞子著しき長きことなし，従来 *Armillaria* 属は多数の種類を含みたる重要なる属なりしも前記の如く限定されたるにより僅かに 2—3 種を含むに留まり，本邦に於て産するものなきが如し。

本邦既知属

モミタケ属 **Catathelasma** (222)

Catathelasma LOVEJ.

モミタケ属

LOVEJOY, Bot. Gaz. 50:383. 1910—SINGER, Ann. Myc. 34:330. 1936; Agaricales, 375. 1949.

Biannularia G. BECK, Pilze- u. Kräuterfr. 5: 231. 1922.

褶は垂生；胞子は円壔形（楕円状円壔形，楕円状円筒形）；被膜は明かに2重；針葉樹林内地上；半被実；欧．北米等産，約4種を知らる，良食用菌．

（本属名は Kata〔希〕（下る），thele〔希〕（乳頭より出づ）

基準種 *C. evanescens* LOVEJ.

本邦既知種検索表

A．傘の表面は濃褐色にて淡色の小痂を密布す；胞子は長楕円形，12—16×5—7μ；2重鍔明瞭

オオモミタケ ***C. imperiale*** (222)

B．傘の表面は汚白色，淡黄色或は淡褐色，小痂なし；胞子は楕円形，9—11×5—6μ；2重鍔前者の如く明瞭ならず．

モミタケ ***C. ventricosum*** (223)

Catathelasma imperiale (FR.) SING.

オオモミタケ

SINGER, Rev. Mycologie, 5:9. 1940; Agaricales, 375. 1949.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，42, pl. 16, f. 94. 1957）

Agaricus imperialis FR. in LUND, Consp. Hymen. Holm. 5:1846; Monogr. Hymen. Suec. 1: 42, (Monogr. Armil. 10). 1857; Hymen. Eur. 43. 1874.

Armillaria imperialis QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:75. 1872—GILLET, Champ. Fr. 78, c. ic. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:79. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 96. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 37. pl. 20, f. 1—3. 1888—ROLLAND, Bull. Soc. Myc. Fr. 18: xxxiii, fig. 1902—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 695. 1912—BRESADOLA, Icon. Myc. 2: pl. 51. 1927.

（今井，植．動．9:19. 1941; Bot. Mag. Tokyo, 55: 444. 1941—原，日．菌．目．20. 1954）

Omphalia imperialis QUÉL. Enchir. Fung. 19. 1886.

Mastoleucomyces imperialis O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2:861. 1891.

Armillaria nobilis MURR. N. Am. Fl. 10:38. 1914.

Clitocybe imperialis RICKEN, Blätterp. 361, pl. 98, f. 1. 1915—HEIM, Champ. Eur. 2:284. 1957.

Armillariella imperialis KONR. & MAUBL. Icon. Sel. Fung. 3:pl. 280. 1926; Agaricales, 1:384. 1948.

Biannularia imperiale G. BECK, Pilze- u. Kräu-

terfr. 5:1922—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 143, f. 204. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:234. 1957.

子実体は群生；傘は径 10—20 cm，初め半球形，開張して丸山形となり，中央扁平，遂に中央圧低さる；表面は湿時少しく粘性，中央部暗褐色にて淡色或は白色のベールの綿絮状残片を散着す，周辺部は淡色，縁は内屈す；肉は白色，緊緻，厚く，味温和，臭弱し；褶は長く垂生，白色～淡黄色，やや密，狭幅，時に叉状；茎は 8—16×2—3 cm，上方に僅か狭細，基部根状にて狭細す，鍔より上部は白色にて平滑或は粉状，下部は白色にて淡褐色の膜質鱗被が環状に存在す，中実；鍔は膜質，大形，中位，上面は白色，放射状線あり，下面は褐色，壺となるべき部分は壺状とならずして茎を包み殆ど鍔の下迄に及び2重の鍔となる，その上縁は遊離し裂開す；胞子は長楕円形，基部狭細，平滑，12—16×5—7 μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地

針葉樹林地—秋　　本州—欧．北米

和名　オオモミタケ（大樅茸）〔今井〕

Catathelasma ventricosum (PECK) SING.

モミタケ

SINGER, Rev. Mycologie, 5:9. 1940; Agaricales, 375. 1949.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，42，f. 94. 1957）

Lentinus ventricosus PECK, Bull. Torr. Bot. Club, 23:414. 1896.

Armillaria ventricosa PECK, Bull. Torr. Bot. Club. 34:104. 1907—MURRILL, N. Am. Fl. 10:37. 1914—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:53, pl. 2, f. 1. 1938.

（川村，日．菌．図説，n. 190. 1929；日．菌．図鑑，4: 460, f. 443. 1954—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3: 119. 1931—松浦，蕈類辞典，37, f. 36. 1933；応用菌蕈学，1200. 1941—小林，日隠．植．図．557, pl. 269, f. 1-3. 1939—牧野，日．植．図説，1020, f. 3057. 1940—今井，植．動．9:19, f. 19-20. 1941—今関，原色きのこ，pl. 8（右）．1942—原，日．菌．目．20. 1954）．

Armillaria gigantea YASUDA, Bot. Mag. Tokyo, 32:204. 1918; 36: 90, f. 3. 1922.

（LLOYD, Myc. Writ. 5, Lett. 67:11. 1918—白井，日．菌．目．ed. 3. 23. 1927）．

子実体は孤生或は群生；傘は径 8—20 cm，或はそれ以上に及び，初め半球形，開張して丸山形となり更に中央殆ど扁平となる；表面は白色，淡黄色或は淡褐色，時に中央褐色なり，湿時やや粘性，乾時光沢あり，無毛，平滑，或はやや絹状繊維を周縁に存す；縁は内屈し，幼時白色綿絮状縁膜片あり；肉は白色，多肉なるも縁に於て薄し，緊緻，味温和，臭僅か存す；褶は長く垂生，白色～帯黄色，密，狭幅，屢々分岐す，稜は多少小歯状を呈す；茎は長さ 19—21 cm 或はそれ以上に及び，頗る太く，地表部の下方膨大し，細き部の径 3—4 cm，膨大部の径 4—6 cm，地表より以下は急に狭細し尖るを特徴とす，鍔より上部は白色，繊維状，下部は傘面と同色にて灰褐色の小鱗片を被むる，中実；鍔は上位，綿絮状膜質，上面白色，下面微かに黄色を帯ぶ，やや永存性；胞子は楕円形，平滑，9—11×5—6 μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地

針葉樹林地上—夏秋

北海道，本州，四国—北米．亜（樺太）

和名　モミタケ（樅茸）〔川村〕

センダイサマツ（仙台早松茸）〔安田〕

ニシヤマサマツ，サマツ，シロボウズ［方言］



第 91 図　モミタケ Catathelasma ventricosum　×1/3　（大谷氏）

Amanitaceae ROZE テングタケ科

ROZE, Bull. Soc. Bot. Fr. 23:51. 1876—SINGER, Agaricales, 377. 1949.

Volvariaceae ROZE, l. c. 51. 1876.

子実体はシカタケ (*Pluteus*) 型, 稀にシカタケ—ヒラタケ (*Pluteus—Pleurotus*) 型; 色素は存在或は欠如, 色及所在は種類の異なるに従つて甚だ異る; 傘は屢々中丘あり, 縁は屢々櫛歯状; 托は褶状; 褶は離生或は殆ど離生にて往々不定的に茎の頂部に多少附着し或は隔生又は離生なるも褶に続く茎上に微細なる線条が下行すること等あり; 小褶は規則正しく介在し, 多くの種に於て甚だ多数にて彎状狭細或は直角に截頭; 褶及び小褶は共に甚だ薄し; 胞子は多少薄膜, 糊性或は非糊性, 双核, 無色, 膜は単一にて大部分平滑, 稀に微細なる刺を有す; 胞子紋は純白色, クリーム色, 帯緑色, 帯灰色或はピンク色; 担子柄は正常形, 通常4胞子, 稀に2胞子のものあり; 稜嚢体は通常存在するも屢々甚だ弛く附着し不規則なる嚢状をなす; ピンク色胞子紋を有する属 (フクロタケ *Volvariella*, シカタケ *Pluteus*) に於ては他の嚢状体も亦屢々存在す; 托実質は少くとも幼子実体にては常に両側型にて, 然らざれば逆型; 茎は通常中心生にて甚だ稀に幾分偏心生, 屢々鍔を有し, 屢々壺或は壺の未成物を有す; 肉は往々甚だ特性ある構造を有す, 非糊性, 不均一ならず; 菌糸は菌絆を有し或はこれを欠く; 林内地上或は材上に生じ, 稀に他菌上に寄生するものあり; SINGER 氏は2族7属を収む。

本科はハラタケ科 (*Agaricaceae*) 及びシメジタケ科 (*Tricholomataceae*) と近縁と認められ, 前科は托実質が両側型でないこと, 胞子は寧ろ厚膜, 多くは擬糊性なる等によりて異なり, 又後科は托実質が両側型又逆性でなく, 褶が広く茎に附着することにより区分さる, 只一族モミタケ族(*Biannularieae*)丈は幼時両側型の実質を有し混乱さるるが如きも, 褶の着生及び発芽前の胞子は単核なるを異なれりとす。

本邦既知族及属検索表

A. 托実質は両側型

(I) テングタケ族 **Amaniteae** (224)

a. 胞子紋は白色, クリーム色或は帯緑色.

α. 茎は壺を有し或は壺の未成物あり, 或は傘面に明かなる壺の残片が3稜形或は鈍頭の疣或は扁平破片となりて存在す; その他頂鍔は本然的に存し, 多くの種類に著し; 菌絆存在或は欠如; 胞子は糊性或は非糊性にて非糊性なれば傘縁に溝あり.

テングタケ属 **Amanita** (224)

β. 壺なきか或は膠質被あり; 鍔は通常存在; 胞子は非糊性にて傘縁に溝なし.

ヌメリカラカサタケ属 **Limacella** (251)

b. 胞子紋は帯クリーム色のピンク色; 子実体はヒラタケ型; 胞子類球形, 有刺粗面; 菌絆存在; 樹上生.

ホシアンズタケ属 **Rhodotus** (252)

B. 托実質は逆型; 胞子紋はピンク色; 子実体は何れの部も膠化せず; 往々樹上或は他菌上生; ヒラタケ型ならず.

(II) シカタケ族 **Pluteeae** (253)

a. 壺はコップ形にて常に能く発達す.

フクロタケ属 **Volvariella** (253)

b. 鍔及壺なし.

シカタケ属 **Pluteus** (257)

(I) Amaniteae FAYOD テングタケ族

FAYOD, Ann. Sci. Nat. Bot. VII, 9:314. 1889 (ut *Amanitacés*)—R. MAIRE, Publ. Junta Ciènc. Nat. Barcelona, 85. 1933—SINGER, Agaricales, 381. 1949.

托の実質は両側型なり; 4属を収む, 本邦テングタケ属 *Amanita*, ヌメリカラカサタケ属 *Limacella* ホシアンズタケ属 *Rhodotus* の3属を産す, 前記検索表参照.

Amanita PERS. ex S. F. GRAY テングタケ属

PERSOON, Syn. Meth. Fung. 246. 1801—S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:599. 1821—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:65. 1872—SINGER, Agari-

cales, 381. 1949.

Leucomyces BATTARRA, Fung. Agari. Arim. Hist. 27. 1755—EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5:451. 1909.

Agaricus subgen. *Vaginata* NEES, Syst. Pilze Schw. 191. 1817.

Agaricus trib. *Amanita* FRIES, Syst. Mycol. 1: 12. 1821.

Vaginata S. F. GRAY, l. c. 601. 1821.

Agaricus subgen. *Amanita* FRIES, Epicr. Mycol. 3. 1838.

Amanitopsis ROZE, Bull. Soc. Myc. Fr. 23:50. 1876.

Pseudofarinaceus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2: 867. 1891.

Amanitella EARLE, l. c. 449. 1909.

Venenarius EARLE, l. c. 450. 1909.

Lepidella GILBERT, Bull. Soc. Myc. Fr. 41:293. 1925. (non VAN TIEGHUM, 1911).

傘縁有溝なれば胞子は非糊性，縁平坦或は殆ど平坦なれば胞子は糊性なり；少くとも壺の未成なる破片を有するものにて，多くは壺は膜質～肉質にて能く発達す，傘の表面或は茎の基部の何れか或はその両者に存在す；頂鍔は存在或は稀に欠如；褶は小褶と交互し，小褶は恰も切断せる如く鋭く凹入し，或は狭細す；褶は離生或は殆ど離生（往々僅か狭生するも老時分離し，老時破れる歯を以て垂生し，或は茎の上部に垂下する線条を有す）；胞子紋は純白色，クリーム色，帯緑色，或はピンク色（稀に起るものにてその時は胞子は糊性なるにより通常のピンク胞子を有する属より区別さる）；胞子は平滑，中～大形，薄膜，双核，球形～円筒形；担子柄寧ろ大形，カーミン着色粒なし，4胞子，稀に常に2胞子；嚢状体なきも稜嚢体は存在す，但し後者は真の嚢状体或は擬嚢体でなく，寧ろ頂鍔の断片が傘の開張に当り褶稜に附着せるものなり；托実質は寧ろ広き菌糸を有する両側型；茎の基部球根状部は存在或は欠如；肉は肉質，傷時不変化或は変化し，特有の構造を有す，非糊性；菌糸は菌絆を有し或は屢々欠如す；地上或は甚だ稀に他基物上に生ず，通常林内に生じ，屢々菌根を作る；半被実；汎布するも小区域に発生す，約102種を知らる，良好なる食用菌並に猛烈なる毒菌あり。

（本属名は小亜細亜の山脈 Amanus より出でしものならん）

基準種　*A. Phalloides* (VAILL. ex FR.) SECR.

本邦既知亜属及種検索表

A．胞子は非糊性；傘縁有溝.

a．鍔は通常能く発達す；壺は袋状，膜質，広き遊離せる縁を有し，或は帯状又は同心円状の輪環を作るも粉状或は刺状となることなし。

(1)　タマゴタケ亜属　**Pseudoamanita**　(225)

b．鍔は通常欠如す；壺は発達良好或は稀に不良，基部膜質或は殆ど肉質なるも遊離せる上部は甚だ脆くして永存せず。

(2)　ツルタケ亜属　**Vaginaria** (*Amanitopsis*)　(226)

B．胞子は糊性；傘縁通常無線条，但し時に内生繊維或は有色縞筋あることあるも溝を作らず，或は老品に於て僅か線条あり；鍔は通常存在し時に欠如す；壺は袋状にて肉質～膜質，屢々遊離部は脆くして只基部に著しき有縁球根部を残し或は全く消失し，全部粉状或は茎上に何物をも残さずして只傘面に疣を残す。

(3)　テングタケ亜属　**Amanita** (*Euamanita*)　(226)

(1)　タマゴタケ亜属　**Pseudoamanita**

A．傘の地色は橙黄色～緋色。

a．壺は発達良好にてコップ状袋となる；茎及褶は黄色；傘面通常平滑；胞子 8—12×6—7μ；可食。　タマゴタケ　**A. caesarea**　(228)

b．壺は袋状ならずして輪環となる；傘は壺残物を附し；茎及褶は白色～帯黄色。

α．大形菌にて傘径 6—15 cm；胞子も大形，10—12×8—9μ；猛毒あり。

ベニテングタケ　**A. muscaria**　(229)

β．前者より著しく小形にて傘径2.5—3.5 cm；胞子も小形，7—8.5×6—7.5μ。

ヒメベニテングタケ　**A. rubrovolvata**　(230)

B．傘は鼠色，焦茶色或は暗褐色。

a．壺は発達良好にてコップ形，袋形或は鞘状。

α．褶は白色。

I．褶稜は同色；傘は鼠～褐灰色，径 3～6 cm；茎は殆ど無毛；胞子10—13×7—10μ。

ツルタケダマシ　**A. spreta**　(230)

II．褶稜は灰色；傘は煤焦茶色，径 4—8 cm；茎に繊維状鱗被あり；胞子 10.5—14×7—8.5μ；可食。

ドウシンタケ　**A. esculenta**　(231)

β．褶は白色なるも肉色となる；傘は類煤色にて長き線条あり，径 5—10 cm；茎は殆ど無

毛；胞子 11—15×10—13μ。

タマゴテングタケモドキ

A. longistriata (231)

γ. 褶は淡桃色；傘は帯褐鼠色，中央黒褐色，径 4—8cm；茎は白色或は淡鼠色の蛇紋を有す；胞子 10—14×7—10μ。

アカハテングタケ **A. rhodophylla** (231)

b．壺は袋状とならずして輪環となる；傘は淡褐～暗褐色，径 8—12cm 或はそれ以上；茎は平滑或は鱗片あり；褶は白色；胞子 9—12×6.5—9μ。 テングタケ **A. pantherina** (232)

(2) ツルタケ亜属 **Vaginaria (Amanitopsis)**

A．胞子は球形或は類球形。

a．壺は灰色にて傘上に小疣となりて残るも容易に洗い去られ，茎の基部を苞状に包むも脆くして早失し，往々輪環を作る；傘は焦茶色，径 5—15cm；茎に斑紋あり；胞子径 10—13μ；可食。 テングツルタケ **A. inaurata** (233)

b．壺は甚しく脆きことなく永存性にてコップ形～袋状，灰色ならず。

α. 傘は赤褐色，中央やや暗色，径 4—10cm；茎は白色にて粉状鱗片あり，中空；胞子径 12—14μ；可食。

カバイロツルタケ **A. fulva** (233)

β. 傘は灰色或は白色。

I．傘は灰色～褐灰色，径 5—8cm；茎は脆く，早く中空となる；胞子径 9—12μ；可食。 ツルタケ **A. vaginata** (234)

II．傘は白色，径 5—10cm；茎は緊緻にて中実，甚だ遅く中空となる；胞子径 10—12.5μ；可食。

シロツルタケ **A. nivalis** (235)

B．胞子は卵形～楕円形：傘は灰色，粉状，径 3—5.5cm；壺は粉状，菫灰色；胞子 6—7×5.5—6.5μ。

ヒメコナカブリツルタケ **A. farinosa** (236)

(3) テングタケ亜属 **Amanita (Euamanita)**

A．胞子は球形或は類球形。

a．壺は袋状～鞘状をなし，大形，深く，上部遊離し裂片となる。

α. 傘及茎は白色。

I．傘は径 6—15cm；初め円錐形，のち開張し中高の扁平となる；茎は著しき鱗被を有す；鍔は幾分裂く；胞子径 8—10μ；猛毒。 ドクツルタケ **A. virosa** (236)

II．傘は径 5—8cm，初め半球形，のち開張し，純丸山形となり更に圧低さる；鍔は全縁；茎は殆ど平滑；胞子径 7—10μ 猛毒。

シロタマゴテングタケ **A. verna** (238)

β. 傘は汚橙黄色～黄土色，径 3—7cm；茎は白～帯黄色にて帯褐色の鱗被あり；胞子 7—8μ。 タマゴタケモドキ

A. subjunquilla (239)

γ. 傘は灰，煤，緑褐色等。

I．傘は径 7—15cm；灰緑，緑黄或は灰色；茎は鍔より以下傘面と同色，平滑；胞子径 9—10μ；猛毒。

タマゴテングタケ **A. phalloides** (239)

II．傘は径 3—5cm；煤色にて中央殆ど黒色；茎は傘と同色にて淡し，繊維状鱗片あり；胞子径 7.5—9μ。

クロタマゴテングタケ

A. fuliginea (240)

b．壺は浅く，初めより或は早く有縁球根の肩に稜となる。

α. 傘は径 3—8cm，淡緑黄色，淡硫黄色或はシトロン色，有色の壺残物を有し，のち平滑となる；鍔は硫黄色；胞子 7.5—10μ；猛毒.

コタマゴテングタケ **A. citrina** (240)

β. 傘は径 5—8cm，灰褐色～鼠色或は褐色；壺残片なきか或は存在す；鍔は灰色或は赤紫灰色；胞子 10—12.5μ；有毒。

コテングタケ **A. porphyria** (241)

c．壺は球根部に同心円輪環となる；傘は径 6—10cm，暗褐色～黒褐色，小疣状壺残物を有す；鍔は白色；胞子 8—10μ。

テングタケモドキ **A. sepiacea** (242)

B．胞子は長形にて楕円或は円筒形。

a．鍔は常に存在す。

α. 傘面は平滑或は粉状，疣状，痂皮状の壺残物を存するも，著しき高きダイヤモンド～ピラミッド形瘤或は大鱗被を有せず。

I．壺は永存性，膜質，半離生。

1．瘤は黄土色～黄色，或は栗色；傘は径 9—15cm，白色～藁色；胞子 10—12×6.5—7.5μ；可食。

シロタマゴタケ **A. ovoidea** (242)

2．壺は白色；傘は径 3—11cm，灰色，中

央暗色；胞子 7.5—8.5×4.5—5.5μ；食毒不明。

コテングタケモドキ

A. pseudoporphyria (243)

II．壷は粉状或は破片状；傘面に壷残物を存す。

1．傘は黄色～帯褐黄色。

甲．傘は径 6.5cm 内外，帯褐黄色；硫黄色小粉状塊の壷残物あり；茎は黄色粉状，鍔は淡黄色；壷は粉状；胞子 8—9×6—7μ。

コガネテングタケ

A. flavipes (243)

乙．傘は径 2.5—5cm，黄色～淡橙黄色，卵黄色粉状塊の壷残物あり；茎は白色，卵黄粉あり；鍔は卵黄色，壷は粉状塊；胞子 7.5—10×5—6μ。

ココガネテングタケ

A. pulchella (243)

2．傘は帯褐色，褐色，赤褐色或は暗褐色。

甲．壷は黄色粉状層にて球根部肩の周囲にあり，傘は灰褐，淡黄灰或はオリーブ灰色，粉状又は綿絮状疣の壷残物あり，径 2.5—8cm；茎は帯白～帯褐色；鍔は白色～帯褐色；壷は粉状層；胞子 7.5—11×7—9.5μ；有毒。

ザラツキテングタケ **A. aspera** (244)

乙．壷は灰色粉状又は破片状。

イ．肉は老時或は傷時赤変す；傘は径 8—12cm，或はそれ以上，赤褐色，多数の厚き灰色～帯赤褐色の疣なる壷残物あり；茎は帯赤白色～類赤色；鍔は白色，下面類赤色；壷は粉状層，胞子 8—9×6—7μ；可食。

ガンタケ **A. rubescens** (244)

ロ．肉は赤変せず。

い．傘は径 8—15cm，淡褐灰色～灰褐色，類白色小疣の壷残物あり；茎は白色；鍔は白色～類灰色；壷は 1—2 破片輪となる；胞子 9—11×6—8μ。

キリンタケ **A. excelsa** (245)

ろ．傘は径 4—10cm，濃灰色～銹灰色或は灰黄褐色，粉状疣の壷残片を存す；鍔は白色～灰色；壷は粉状層；胞子 8—10×7—8μ；可食。

ヘビキノコ **A. spissa** (246)

は．傘は径 6—10cm，菫灰色～暗褐色，小角形疣或は砕片の壷残物を存す；茎は鍔より以下に濃菫灰色の鱗片あり；鍔は帯白色，壷は粉状にて 1—3 同心円輪環を作る，胞子 8—9.5×6.5—7.5μ。

ヘビキノコモドキ

A. spissacea (247)

β．傘面に著しき高きダイヤモンド形～ピラミッド形の瘤或は大鱗片の壷残物を存す。

I．傘面に著しき角形瘤を存す．白色～灰色，径 6—16cm；茎は白色；鍔は白色；壷は粉状鱗片の同心環となる；胞子 9—13×7—9μ；可食。

マツカサモドキタケ

A. solitaria (247)

II．傘面に著しき角形大鱗片を存す，径 6—12cm，白色或は暗褐色；茎は白色，鱗片を被むり；鍔は白色；壷は同心環状；胞子 8—11×6.5—7.5μ。

シロオニタケ **A. vittadinii** (248)

b．鍔は不明瞭，不定或は早失す；壷は大形，袋状，上端遊離す。

α．傘は径 2—8cm，鈍白～帯黄，稀に中央或は全部赤褐色，鱗片状或は大形の壷残物あり；茎は白色；肉は傷時淡紅色となる；胞子 8—12×5—8μ。

フクロツルタケ **A. agglutinata** (249)

β．傘は径 4—6cm，鈍白，帯黄，淡肉桂或は汚濃桃色，繊維状鱗片の壷の残物あり；茎は白～帯褐色；肉は白色或は帯桃色；胞子 10—15×5—6μ。

シロウロコツルタケ

A. clarisquamosa (250)

γ．傘は径 5—10cm，淡汚桃色～菫灰色，鱗片を被むる；茎は傘面と殆ど同色；胞子 9—10.5×5—6μ。

アクイロウロコツルタケ

A. avellaneosquamosa (250)

(1) **Pseudoamanita** SING. (1936)
タマゴタケ亜属

Amanita caesarea (SCOP. ex FR.) PERS. ex SCHW.

タマゴタケ

PERSOON, Syn. Meth. Fung. 252. 1801—SCHWEINITZ, Schr. Nat. Ges. Leipzig, 1:79. 1822—QUÉLET, Champ. Jura. Vosg. 1:66. 1872; Enchir. Fung. 2. 1886—GILLET, Champ. Fr. 33, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:1. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:8. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 53. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 9. 1888—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 275. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 167. 1900—BOUDIER, Bull. Soc. Myc. Fr. 18:252. 1902—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 70, f. 72. 1903—ROLLAND, Atl. Champ. 10, pl. 1. f. 1. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(2):724, pl. 138. 1912—RICKEN, Blätterp. 307. 1915—COKER, Jour. Elisha Mitch. Sc. Soc. 33:19, pl. 10, 11. 1917—GILBERT, Genre Amanita, 18. 1918—KAUFFMAN, Agar. Mich. 600. 1918—BRESADOLA, Icon. Myc. 1: pl. 1. 1927—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 23, pl. 5. 1927—VESELY, Ann. Mycol. 31:214. 1933—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:9, pl. 1, f. 1. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:58. 1948—SINGER, Agaricales, 385. 1949—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 25. 1956—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 433. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:438, pl. 52. 1957.

(P. HENNINGS, Hedwigia, 39, Beibl. 156. 1900—松村, 植. 名鑑, 1:130. 1904—白井, 日. 菌. 目. 8. 1905; ed. 2. 41. 1917; ed. 3. 17. 1927—KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 7, f. 15—17. 1913; 日. 菌. 図説, n. 228—229. 1929; 食用菌及有毒菌, 70, f. 4, 63. 1931; 日. 菌. 図鑑, 4:482, f. 460. 462. 1954—安田, 植. 雑. 34:68. 1920—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:119. 1931—松浦, 茸類辞典, 46, f. 45—46. 1933; 応用菌蕈学, 1202. 1941—IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 47:423. 1933; 植. 動. 1:1440. 1933—小林, 日. 隠. 植. 図. 569, pl. 275, f. 4. 1939—牧野, 日. 植. 図鑑, 1019, f. 3054. 1940—今関, 原色きのこ, pl. 1(左). 1942; 及土岐, 林. 試. 研. 報. 67:34. 1954—原, 日. 菌. 目. 14. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 44, f. 95, pl. 17, f. 95. 1957)

Agaricus Caesareus SCOP. Fl. Carn. ed. 2, 2: 419. 1772—FRIES, Syst. Myc. 1:15. 1821; Epicr. Myc. 3:1838; Hymen. Eur. 17. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1: 578. 1844—BARLA, Champ. Nice, 5, pl. 1, f. 1—9. 1859—WINTER, Pilze, 1: 851. 1884.

Agaricus aureus BATSCH, Elench. Fung. 57. 1783.

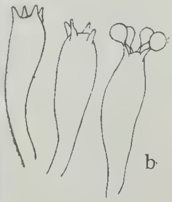
Amanita aurantiaca PERS. Syn. Meth. Fung. 252. 1801; Champ. Comest. 174. 1819—S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:599. 1821.

Amanita pellucida BANN. et PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 66. 1892.

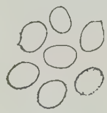
Venenarius Caesareus MURR. Mycologia, 5:73. 1913; N. Am. Fl. 10:69. 1914.



a



b



c

第 92 図 タマゴタケ
Amanita caesarea
a. 子実体 ×1/3
b. 担子柄
c. 胞子 ×500
(大谷氏)

子実体は孤生或は散生; 傘は径 6—20 cm, 卵形或は鐘形, のち丸山形となり, 遂に周縁反転す; 表面は橙黄色, 緋色或は黄色, 稀に淡黄色を呈し, 中央暗色, 周辺淡色にて著しき線条あり, 平滑, 湿時稍々粘性, 乾時光沢あり, 稀に壺の残片を不規則に散在す; 肉は相当厚く, 皮下黄色, 内部白色或は帯黄色, 味温和, 臭なし; 褶は離生, 稍々密或は稍々疎, 鮮黄色或は黄金色にて茎と同色, 前方広幅, 稜は全縁或は少しく波状; 茎は 10—17×0.6—2 cm, 上方に漸細, 基端甚しき球根状とならずして僅か太きのみ, 黄色, 橙黄色或は帯黄色, 絹糸様光沢あり, 平滑或は僅か綿絮あり, 充塞, のち中空; 鍔は頂生, 広く, 垂下, 柔軟, 膜質或は類紙質にて薄し, 上下面共に黄色, 全部線条あり, 永存性; 壺は白色, 大形のコップ状袋となり, 高さ 5 cm に達し, 縁は裂片或は歯状に裂け, 膜質, 緊緻, 上方約 4/5 は茎より遊離す, 永存性; 胞子は楕円形或は卵状楕円形, 平滑, 無色, 非糊性, 8—12×6—7 μ; 胞子紋

は白色～類帯黄色；可食。

所在及産地

林地一夏秋　　全土一欧.北米.阿.亜(印.小亜)

和名　タマゴタケ（卵茸）〔古名〕

オオベニタケ（大紅茸）〔白井〕

Amanita muscaria (L. ex FR.) PERS. ex S. F. GRAY

ベニテングタケ

PERSOON, Syn. Meth. Fung. 253. 1801—S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:600. 1821—QUÉLET. Champ. Jura Vosg. 1:67. 1872; Enchir. Fung. 3. 1886—GILLET, Champ. Fr. 39, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:3. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 39. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:13. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 48. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 14. 1888—SCHROETER, Pilze Schles. 1:680. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3: 262. 1893; Brit. Fungi, 83, pl. 2, f. 5. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 167. 1900—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1. 1**:275. 1900—BOUDIER, Bull. Soc. Myc. Fr. 18:263. 1902—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 52, pl. 1, f. 1. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 16. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 14, pl. 5, f. 7. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):720, pl. 136. 1912—LANGE, Agar. Denm. 2:8, pl. 2, f. 6a. 1915; Fl. Agar. Dan. 1:14, pl. 3, f. B. 1935—RICKEN, Blätterp. 311, pl. 79. 1915—COKER, Jour. Elisha Mitch. Sc. Soc. 33:49, pl. 27—28. 1917—GILBERT, Genre Amanita, 81. 1918—KAUFFMAN, Agar. Mich. 610. 1918—REA, Brit. Basid. 100. 1922. —BRESADOLA, Icon. Myc. 1:pl. 8. 1927—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 36, pl. 1. 1927—VESELY, Ann. Myc. 31:250, f. 5. 1933—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1:48. 1934—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:16. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:59. 1948—SINGER, Agaricales, 386. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi. 45, pl. 2, f. 1. 1950—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 26. 1956—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 433. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:445, pl. 50. 1957.

(田中, 植. 雑. 3:50. 1889—白井, 植. 雑. 3:156. 1889; 日. 菌. 目. 8. 1905; ed. 2. 43. 1917; ed. 3. 18. 1927—P. HENNINGS, Hedwigia, 39, Beibl. 156. 1900—松村, 植. 名鑑, 1:131. 1904—KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 2, f. 14—18. 1912; 日. 菌. 図説, n. 1—2. 1929; 食用菌及有毒菌, 65, f. 30, 59—60, 1931; 日. 菌. 図鑑, 4:478, f. 458 459. 1954—安田, 植. 雑. 28: 476. 1914—梅村, 富士. 植. 志. 365. 1923—IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 47: 425. 1933; 植. 動. 1:1614. 1933—松浦, 茸類辞典, 69, f. 70. 1933; 応用菌蕈学, 784, 1203. 1941—牧野, 日. 植. 図鑑, 1018, f. 3051. 1940—今関, 原色きのこ, pl. 1 (右)1942; 及土岐, 林. 試. 研. 報. 67:35. 1954—原, 日. 菌. 目. 15. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 44, pl. 17, f. 97. 1957)

Agaricus muscarius L. Sp. Plant. 2:1172. 1753—FRIES, Syst. Myc. 1:16. 1821; Epicr. Myc. 5. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:7. 1857; Hymen. Eur. 20. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1: 577. 1844—BARLA, Champ. Nice, 6, pl. 2, f. 1—9. 1859—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 90. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:128. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:8. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 117(no. 5). 1883; Handb. Austr. Fungi, 3, 1892—WINTER, Pilze, 1:848. 1884.

Venenarius muscarius EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5:450. 1909—MURRILL, Mycologia, 4:240. 1912; 5:75, pl. 85; 94, pl. 87, f. 3. 1913; N. Am. Fl. 10:74. 1914.

Amanitaria muscaria GILBERT, Icon. Myc. 27, Suppl. 1:76. 1941.

子実体は孤生或は群生；傘は径 6—15 cm, 初め球形, のち丸山形～扁平に開張し, 遂に中部圧低さる；表面は鮮紅色, 暗緋色, 赤橙色或は橙黄色, 湿時僅か粘性, 周辺に老時短線条を生ず, 白色～帯黄色の３面或は多面の角錐形の疣或は薄膜片の壺の残物を密に附着す, これ等の残物は容易に剝離す, 時に全面平滑なり；肉は傘皮下黄金色にて黄赤帯を認められ, その他は白色, 厚く, 味及臭著しからず；褶は離生, 白色, 稀に帯黄色, 密, 前方広幅, 稜は



第 93 図　ベニテングタケ
Amanita muscaria　×1/3　（大谷氏）

粉状；茎は 10—24×1—3 cm, 上方に僅か漸細, 基端球形にて幅 4 cm 以上に及ぶ, 白色或は淡黄色, 初め白色の綿絮を存し, 老時繊維線条あり；中実に

て，のち中空となる；鍔は上位，垂下，薄膜質，白色～帯黄色，平滑或は微綿綮を有し，縁は多くは厚く，黄縁を有す；壺は茎に附着し袋状ならず，通常 3～6 段の同心円状或は螺旋状の瘤輪環を作る；胞子は類楕円形，平滑，無色，非糊性，10—12×8—9μ；胞子紋は白色；猛毒。

所在及産地

山林地—夏秋

北海道，本州—欧．北米．濠．阿．亜(支．土．小亜)

和名 ベニテングタケ（紅天狗茸）〔川村〕

キテングタケ（黄天狗茸）〔川村〕

アシタカベニタケ（足高紅茸）〔白井〕

アカハエトリタケ（赤蠅取茸）〔川村〕

Amanita rubrovolvata IMAI em. HONGO
ヒメベニテングタケ

IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 53:392. 1939—HONGO, Jour. Jap. Bot. 30:216, f. 1, (4—6). 1955.

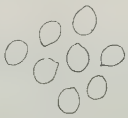
（原，日．菌．目．15. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，46, f. 107, pl. 19, f. 107. 1957）

Amplariella rubrovolvata GILBERT, Icon. Myc. 27, Suppl. 1:79. 1941.

子実体は孤生或は群生；傘は径 2.5—3.5 cm，或はそれ以上に及び，初め卵状鐘形，のち丸山形～広丸山形，遂に扁平となりて中央多少圧低さる；表面は湿時僅かに粘性，中央緋色～朱色，周辺淡色にて



a



b

第 94 図 ヒメベニテングタケ Amanita rubrovolvata
a．子実体 ×1/2
b．胞子 ×500
（大谷氏）

帯黄橙色，橙黄色或は淡黄色にて線条あり，傘面に赤色，橙色或は帯黄色の綿綮粉状にてむしろ砕け易き小塊の壺残物を附着す，外被剝げ易し；肉は帯黄色～白色，屢々外被下帯赤色，むしろ薄く，柔軟，臭及味なし；褶は離生，白色～僅か帯黄色，密，新月形，幅 3 mm，稜に房毛あり，短褶は切断せるが如く彎入す；茎は 4.5—11×0.4—0.6 cm，上方に僅か狭細，基部球根状にて径 1—1.5 cm，帯黄橙色，鍔より下部は帯黄色或は殆ど白色にて多少粉状鱗片を被むり，上部は黄白～純白色にて粉状，充塞或は中空；鍔は中位或は上位，膜質，上面白色，下面帯黄色，縁は綿綮粉状にて黄色或は緋色，永存性；壺は綿綮粉状，むしろ消失性，傘面の残物と同色，往々茎端球根部上 2～4 の部分的或は完全なる輪環を作る；胞子は類球形～球形，平滑，1 大中球を含み，非糊性 7—8.5×6—7.5μ，或は径 6.5—8μ：胞子紋は白色；担子柄は 22—46×(7.5)10—11.5μ； 食毒不明。

所在及産地

林間，特に広葉樹下地上—夏秋　　本州

和名 ヒメベニテングタケ（姫紅天狗茸）〔今井〕

Amanita spreta (PECK) SACC.
ツルタケダマシ

SACCARDO, Syll. Fung. 5:12. 1887—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 276. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 69, f. 71. 1903—GILBERT, Genre Amanita, 59. 1918—KAUFFMAN, Agar. Mich. 606, pl. 118. 1918—COKER, Jour. Elisha Mitch. Sc. Soc. 33:20, pl. 12, 63. 1917—VESELY, Ann. Myc 31:228. 1933—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:59. 1948—SINGER, Agaricales, 385. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 434, f. 614. 1953.

Agaricus spretus PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 32: 24. 1879.

Amanita cinerea BRES. Fung. Trid. 1:7. 1881; Icon. Myc. 1: pl. 5. 1927—QUÉLET, Enchir. Fung. 2. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5:12. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 54. 1915—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):723. 1912—RICKEN, Blätterp. 308. 1915.

（川村，日．菌．図鑑，4:496, f. 468. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，45. 1957）

Amanita spreta var. *parva* BEARDSLEE, Jour. Elisha Mitch. Sc. Soc. 24:118. 1908.

Venenarius spretus MURR. Mycologia, 5:73. 1913; N. Am. Fl. 10:69. 1914.

Venenarius virginianus MURR. N. Am. Fl. 10: 71. 1914.

Amanita spreta var. *cinerea* GILBERT, Genre Amanita, 365. 1918.

子実体は孤生或は散生；傘は径 3—6 cm，初め鐘形～円錐形，のち丸山形～扁平に開張し，稍々中丘を存す；表面は稍々粘性，乾燥して稍々光沢あり，鼠色～褐灰色，中央暗色，周辺淡色にて線条あり，平滑，時に壺の残物を附着す；肉は白色，薄く，味

及臭なし；褶は離生，白色，薄く，稍々密，前方広幅，稜に房毛あり；茎は 5—8×0.5—1 cm，同幅或は上方僅か漸細，基端膨大せず，平滑，殆ど無毛，上部稍々粉状，白色或は傘面と稍々同色，充塞，のち中空となる；鍔は上位，垂下，薄膜質，上面無線条にて白色，下面淡焦茶色，永存性；壺は薄膜質，白色，コップ形〜鞘形，茎に癒着せず，縁は不規則に浅裂す；胞子は橢円形，平滑，無色，非糊性，10—13×7—10μ；胞子紋は白色。

所在及産地

林地，庭園，畑地—夏秋　　本州—欧．北米

和名　ツルタケダマシ（欺鶴茸）〔川村〕

Amanita esculenta HONGO et MATSUDA
ドウシンタケ

MATSUDA & HONGO, Jour. Jap. Bot. 30:148, f. 1. 1955—HONGO, Bull. Facul. Lib. Arts Educ. Shiga Univ, 5:57. 1956.
（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，46，f. 106，pl. 19，f. 106. 1957）

子実体は群生；傘は径 4—8 cm，半球形〜丸山形，のち開張し，更にやや圧低さる；表面は湿時粘性，無毛，時に壺の破片を有す，煤焦茶色，周縁に僅か線条あり；肉は白色，やや薄く，味及臭なし；褶は離生，白色，やや密，やや便腹状，稜は灰色；茎は 6—9×0.6—1.3 cm，上方にやや狭細，基部球根状ならず，鍔より上部は類灰色にて線条あり，下部は鼠灰色，繊維状鱗被あり，中空；鍔は鼠灰色，膜質，上位或はやや隔り，上面線条あり，下面線絮状，永存性；壺は白色，半離性，広く，膜質；胞子は広橢円形，平滑，1大中心油球を有し，無色，非糊性，10.5—14×7—8.5μ；胞子紋は白色；担子柄は 38—55×12—14μ，4胞子；托実質は分出性，非糊性；傘肉は膠状の外被下は同質にて非糊性；菌糸は菌絆を有す；可食。

所在及産地

松林内砂土上—夏秋　　本州

和名　ドウシンタケ〔方言〕

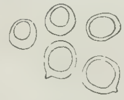
Amanita longistriata IMAI
タマゴテングタケモドキ

IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:11. 1938—HONGO, Jour. Jap. Bot. 30:77. 1955.
（原，日．菌．目．15. 1954—松田及本郷，植．研．雑．31:197. 1956）
Amanitopsis longistriata GILBERT, Icon. Myc. 27, Suppl. 1:75. 1941.

子実体は群生，傘は径 5—10 cm，丸山形，のち扁平となる；表面は粘性，類煤色，無毛，周辺淡色にて長き線条あり；肉は白色，やや薄く，無味無臭；



a



b

第 95 図　タマゴテングタケモドキ　Amanita longistriata
a．子実体　×1/2
b．胞子　×500
（大谷氏）

褶は離生，白色，のちやや肉色となる；茎は 10—18×0.8—1.5 cm，上方に漸細，基部球根状ならず，白色，殆ど無毛或は綿絮状細鱗片を存す，充塞〜中空；鍔は上位，白色，広幅，膜質；壺は鞘状，弛く，白色，2—5×1—3.5 cm；胞子は球形〜類球形，平滑，無色，非糊性，11—15×10—13μ；胞子紋は白色。

所在及産地

樹下草間地，砂地—夏　　北海道

和名　タマゴテングタケモドキ（擬卵天狗茸）〔今井〕

Amanita rhodophylla IMAZ. et TOKI
アカハテングタケ

IMAZEKI & TOKI, Bull. Gov. For. Exp. St. 79: 2, f. 2, pl. 2, f. 2. 1955.

子実体は孤生或は 3, 4 群生，傘は径 4—8 cm，初め半球形，のち扁平となり，中央やや凸出す；表面は非粘性，帯褐鼠色，中央黒褐色；平滑，光沢あり，縁辺に線条あり；肉は薄く，白色，無味，清涼臭あり；褶は狭生，淡桃色，やや密；茎は 12—15×1—1.5 cm，下方に漸次太く，白色にて白色或は淡鼠色の蛇紋あり，鍔を有す，充塞或は中空；鍔は上位，白色，膜状，永存性；壺は白色，薄く，深し；胞子は橢円形，非糊性，大さ変化し，10—14×7—10μ。

所在及産地

林地—夏秋　　本州

和名 アカハテングタケ（赤褶天狗茸）〔今関及土岐〕

〔因記〕 本郷氏は前種タマゴテングタケモドキと同一種なるべしと称せらる。

Amanita pantherina (D.C. ex FR.) SECR.

テングタケ

SECRETAN, Myc. Suisse, 1:20. 1883—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:68. 1872; Enchir. Fung. 3. 1886—GILLET, Champ. Fr. 41, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:3. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 39. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 14. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 49. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 15, pl. 3, f. 1—4. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:261. 1893; Brit. Fungi, 83. 1911—BOUDIER, Bull. Soc. Myc. Fr. 18:264. 1902—W. G. SMITH, Brit. Basid. 16. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 16, pl. 7, f. 10. 1910—LANGE, Agar. Denm. 2:9, pl. 2, f. 7. 1915; Fl. Agar. Dan. 1:15, pl. 3, f. A. 1935—RICKEN, Blätterp. 309, pl. 78, f. 1. 1915—GILBERT, Genre Amanita, 104. 1918—REA, Brit. Basid. 103. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 1:pl. 13. 1927—VESELY, Ann. Myc. 31:270, f. 6, pl. 25. 1933—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:17, pl. 1, f. 5. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:61. 1948—SINGER, Agaricales, 386. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm, Brit. Fungi, 46, pl. 3, f. 2. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 433, f. 613. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 26, A. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2:446, pl. 51, f. 2. 1957.

(田中, 植. 雑. 2:170. 1888; 3:50. 1889; Mycogr. Nippon. 1:pl. 1. 1890—白井, 日. 菌. 目. 8. 1905; ed. 2. 43. 1917; ed. 3. 18. 1927—川村, 植. 雑. 23: 461. 1909; Illus. Jap. Fungi, pl. 16, f. 13—15. 1915; 日. 菌. 図説, n. 3. 1929; 食用菌及有毒菌, 61, f. 10, 57—58. 1931; 日. 菌. 図鑑, 4:484, f. 463. 1954—梅村, 富士. 植. 志. 365. 1923—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sc. 3:119. 1931—松浦, 茸類辞典, 73, f. 75. 1933; 応用菌蕈学, 787, f. 623—624. 1941—IMAI, Bot. Mag. Tokyo. 47:426. 1933; 植. 動. 1:1615. 1933—小林, 日. 隠植. 図. 569, pl. 275, f. 1—3. 1939—牧野, 日. 植. 図鑑, 1018, f. 3052. 1940—今関, 原色きのこ, pl. 2 (中). 1942—原, 日. 菌. 目. 15. 1954—松田及本郷, 植. 研. 雑. 30:148. 1955—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 44, f. 96, pl. 17, f. 96. 1957)

Amanita umbrina PERS. Syn. Meth. Fung. 254. 1801—S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 600. 1821—SCHROETER, Pilze Schles. 1:679. 1889—P. HENNINGS in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:275. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) 721, pl. 136, C-D. 1912.

(田中, 植. 雑. 2:170. 1888—P. HENNINGS, Hedwigia, 39, Beibl. 156. 1900—松村, 植. 名鑑, 1:131. 1904—白井, 日. 菌. 目. 8. 1907; ed. 2. 43. 1917; ed. 3. 18. 1927—原, 日. 菌. 目. 15. 1954)

Agaricus pantherinus D. C. Fl. Fr. 6:52. 1815—FRIES, Syst. Myc. 1:16. 1821; Epicr. Myc. 5. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:9. 1857; Hymen. Eur. 21. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:577. 1844—BARLA, Champ. Nice, 12, pl. 7, f. 1—3. 1859—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 90. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:128. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:9. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 6 (no. 6). 1883—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:25. 1876—WINTER, Pilze, 1:847 1884.

Venenarius pantherinus MURR. Mycologia, 5: 80. 1913.

Amanitaria pantherina GILBERT, Icon. Myc. 27, Suppl. 1:77. 1941.

子実体は群生或は孤生; 傘は径 8—12 cm, 時にそれ以上に至り 26 cm にも達す, 幼時は殆ど球形, のち丸山形〜扁平となり, 更に中央やや圧低さる; 表面は湿時やや粘性, 乾時やや光沢あり, 淡褐色, 焦茶色, 或は暗褐色, 中央暗色, 周辺淡色にて線条あり, 白色綿絮状の角錐形或は板状の疣を散布す, 各疣は初め同心円的に配列され容易に剝離し, のち各所に分散するに至る; 肉は白色, 味及臭殆どなし; 褶は離生, 白色, 密, 柔軟, 広幅, 両端に漸細, 稜は房毛を有す; 茎は 6—15×0.5—1.5 cm, 時に 35×3 cm に及ぶ, 上方に漸細或は殆ど同幅, 基部蕪菁根状, 時に擬根あり, 白色, のち帯褐色, 平滑或は綿絮又は纖維状鱗片を被むり, 充塞, のち中空となる; 鍔は茎の中央或はやや上部に存し, 垂下, 綿膜質, 白色, のち帯黄色或は帯褐色, 時に縁は 2 重, 永存或はやや消失性; 壺は茎に癒着し蕪菁部の肩に



a



b

第 96 図 テングタケ
Amanita pantherina
a. 子実体 ×1/3
b. 胞子 ×600 (大谷氏)

鋭或は鈍縁の襟を生じ，更に茎上に 1—3 個の輪環を作る；胞子は楕円形，平滑，無色，非糊性，9—12×6.5—9μ；胞子紋は白色；嚢状体は有柄棍棒形，50×10μ；猛毒。

所在及産地

林地(主に松林)—夏秋

北海道，本州—欧．北米．阿

和名 テングタケ（天狗茸）〔川村〕
ハエトリタケ（蠅取茸）〔川村〕
ヒヨウタケ（豹茸）〔池野〕

(2) **Vaginaria** FORQUINGNON (1888) *Amanitopsis* (ROZE ut genus) BARBIER (1907) ツルタケ亜属

Amanita inaurata SECR. テングツルタケ

SECRETAN, Myc. Suisse, 1:36. 1833—GILLET. Champ. Fr. 41, c. ic. 1874—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1: pl. 2. 1929; Agaricales, 1:58. 1948—SINGER, Agaricales, 386. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 434, f. 13. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:444, f. 294. 1957.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，45, f. 100, pl. 18 f. 100. 1957）

*Agaricus solitarius * strangulatus* FR. Epicr. Myc. 6. 1836.

Agaricus strangulatus FR. Monogr. Hymen. Suec. 1:3. 1857; Hymen. Eur. 27. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 10. 1883; Illus. Brit. Fungi, 1: pl. 13 (no. 17). 1883—WINTER, Pilze, 1:842. 1884.

Agaricus Ceciliae BERK. et BR. Outl. Brit. Fung. 92, pl. 3, f. 5. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:6. 1871.

Amanita strangulata QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:66. 1872—BARLA, Champ. Alp. Marit. 18, pl. 7, f. 1—3. 1888—PATOUILLARD, Ess. Tax. 167. 1900—RICKEN, Blätterp. 462, pl. 82, f. 4. 1915—BRESADOLA, Icon. Myc. 1: pl. 18. 1927—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:12, pl. 7, f. c. 1935.

Amanitopsis strangulata ROZE, in KARSTEN, Hattsv. 1:7. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:23. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 61. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:258. 1893; Brit. Fungi, 88. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl. -fam. 1, 1**:273. 1900—PECK, Mem. N. Y. St. Mus. 4:134, pl. 44. f. 1—10. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 19. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):722, pl. 137 E. 1912—COKER, Jour. Elisha Mitch. Sc. Soc. 33:8, pl. 4. 1917—KAUFFMAN, Agar. Mich. 624. 1918—REA, Brit. Basid. 93. 1922—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:28. 1938.

（安田，植．雑．36:146. 1922—白井，日．菌．目．ed. 3. 19. 1927—広江，応用菌蕈学，1209. 1941—原，日．菌．目．16. 1954）

Amanita vaginata var. *strangulata* QUÉL. Enchir. Fung. 5. 1886.

Pseudofarinaceus strangulatus KUNTZE, Rev. Gen. 2:868. 1891.

Vaginata strangulata KUNTZE, Rev. Gen. 3 (2):539. 1898.

Amanitopsis inaurata BOUDIER, Bull. Soc. Myc. Fr. 18:270. 1902—GILBERT, Genre Amanita, 152. 1918.

Amanita vaginata f. *inaurata* VESELY, Ann. Myc. 31:280. 1933.

子実体は孤生或は散生；傘は径 5—15 cm，初め円筒状鐘形，のち丸山形～扁平となり中丘あり，遂に中部圧低さる；表面は湿時やや粘性，乾時鈍き或は微かなる光沢あり，淡焦茶色，中部濃色，周辺淡色，著しき深き溝あり，屢々厚き角形或は不正形の灰～灰黄褐色の疣を附着す，疣は容易に剝落す；肉は白色，脆く，柔軟，味温和，臭なし；褶は離生，白色，密，前方広幅，薄く，稜は稀に褐色を呈し，異質にて大なる球形細胞あり；茎は細長，8—15×0.8—1.5 cm，上方に漸細，基部膨大せず，灰色綿絮鱗片にて斑紋付けらる，灰白色，充塞，早く中空となる；壺は厚く，脆く，綿質にて膜質ならず，濃灰色，初め茎を苞状に包み，上端反転し裂片となるも消失性なり，又茎の下方に同心円的に完全或は不完全の輪環を作る；胞子は類球形，平滑，無色，非糊性，10—13μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地

林地或は樹下—夏秋

北海道，本州—欧．北米．亜(支)

和名 テングツルタケ（天狗鶴茸）〔安田〕

Amanita fulva (SCHAEFF.) PERS. ex SING. カバイロツルタケ

PERSOON, Champ. Comest. 184. 1818—SINGER, Agaricales, 386. 1949.

Agaricus fulvus SCHAEFF. Fung. Bavar. 4: Ind. 41, pl. 95. 1774.

Agaricus trilobus BOLT. Hist. Fung. 1:38, f. 2. 1788.

Amanita spadicea β. fulva PERS. Syn. Meth. Fung. 248. 1801.

Agaricus vaginatus e. *pileofulvo* FR. Syst. Myc. 1:14. 1821.

Agaricus vaginatus var. *fulvus* FR. Monogr. Hymen. Suec. 1:2. 1857; Hymen. Eur. 27. 1874—WINTER, Pilze, 1:843. 1884.

Amanita vaginata var. *fulva* GILL. Champ. Fr. 51, c. ic. 1874—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:17, pl. 7, f. B. 1935—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:58. 1948—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 434. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:441, pl. 53, f. 2. 1957.
(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 45, f. 101'. 1957)

Amanitopsis plumbea var. *fulva* SCHROET. Pilze Schles. 1:677. 1889—GILBERT, Genre Amanita, 143. 1918.

Amanitopsis fulva P. HENN. Bot. Jahrb. 31: 738. 1902—W. G. SMITH, Brit. Basid. 18. 1908—REA, Brit. Basid. 93. 1922—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:26. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 48, pl. 4, f. 2. 1950.
(松村, 植. 名鑑, 1:131. 1904—白井, 日. 菌. 目. 8. 1905; ed. 2. 45. 1917; ed. 3. 19. 1927—川村, 日. 菌. 図説, n. 107. 1929—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori. Soc. Agr. Sc. 3:119. 1931—松浦, 茸類辞典, 113, f. 133. 1933; 応用菌蕈学, 1209, f. 817. 1941—Imai, Bot. Mag. Tokyo, 47:429. 1933—今関, 原色きのこ, pl. 4(中). 1942—原, 日. 菌. 目. 16. 1954)

Amanitopsis vaginata var. *fulva* SACC. Syll. Fung. 5:21. 1887—MASSEE, Brit. Fungi, 88, pl. 2, f. 4. 1911.

Amanita vaginata subsp. *fulva* KONR. et MAUBL. Icon. Sel. Fung. 6:33. 1924.

Amanitopsis vaginata f. *fulva* KOBAYASI, 日. 隠. 植. 図. 567, pl. 274, f. 3. 1939.
(原, 日. 菌. 目. 16. 1954)

本菌は通常ツルタケ (*A. vaginata*) の一型と認めらるるところのものにて子実体全部赤褐色を呈するものなり, 子実体は孤生或は散生; 傘は径 4—10 cm, 鐘形, のち開張扁平となり中丘を有す; 表面は赤褐色, 中央やや暗色, 湿時僅か粘性, 平滑, 無毛, 時に早失性の壺の残片を附す, 周辺に線条あり; 肉は白色, 薄く, 味及臭なし; 褶は離生, 白色, 便腹状, やや密, 稜は甚だ僅か鋸歯状; 茎は細長, 7—15×0.5—1 cm, 上方に漸細, 基部膨大せず, 同色或は淡色の粉状細鱗片を被むる, 白色にて中空; 壺は膜質, 茎と同色或は白色にて黄或は褐色の小点を有す, 茎の基部を包み, 高さ 4—5 cm に及ぶ, 永存性; 胞子は球形, 平滑, 無色, 径 12—14μ; 胞子紋は白色; 可食。

所在及産地

林地—夏秋　　北海道, 本州, 九州—欧. 北米

和名 カバイロツルタケ (樺色鶴茸) 〔川村〕

Amanita vaginata (BULL. ex FR.) QUÉL.

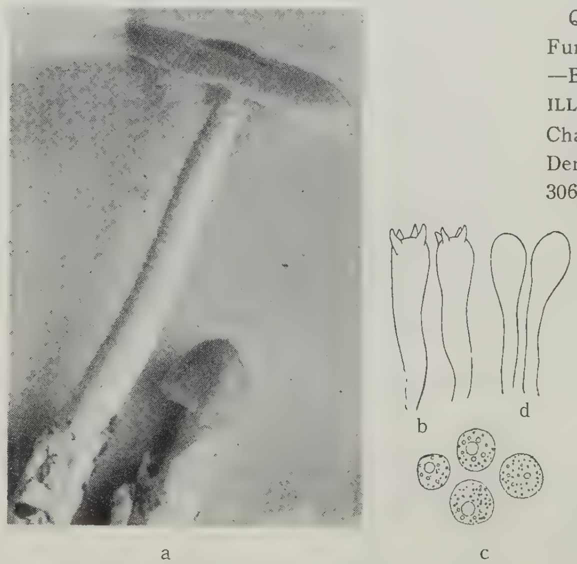
ツルタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:66. 1872; Enchir. Fung. 5. 1886—GILLET, Champ. Fr. 50, c. ic. 1874—BARLA, Champ. Alp. Marit. 18. 1888—PATOUILLARD, Ess. Tax. 167. 1900—ROLLAND, Atl. Champ. 18, pl. 10, f. 14. 1910—LANGE, Agar. Denm. 2:11, pl. 2, f. 12. 1915—RICKEN, Blätterp. 306, pl. 75, f. 1. 1915—VESELY, Ann. Myc. 13: 274, f. 7. 1933—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:58. 1948—SINGER, Agaricales, 386. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 434, f. 615. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 24, A. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2:441. 1957.
(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 45, f. 101, pl. 18, f. 101. 1957)

Agaricus plumbeus SCHAEFF. Fung. Bavar. 4:Ind. 37, pl. 85—86. 1774.

Pseudofarinaceus specior BATT. Fung. Hist. 29, pl. 5. 1775—KUNTZE, Nat. Arr. Brit. Pl. 2:867. 1891.

Agaricus vaginatus BULL. Herb. Fr. pl. 98. 1782; pl. 512. 1790—DECANDOLLE, Fl. Fr. 2:211. 1815—FRIES, Syst. Myc. 1:14. 1821; Epicr. Myc. 11. 1838; Monogr. Hym-



第 97 図 カバイロツルタケ Amanita fulva
a. 子実体 ×1/2　　b. 担子柄
c. 胞子　　d. 嚢状体 ×500
(大谷氏)

en. Suec. 1:2. 1857; Hymen. Eur. 27. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:575. 1844—BARLA, Champ. Nice, 9, pl. 5, f. 1—10. 1859, —BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 91, pl. 1, f. 4. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:5. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1: pl. 12(excl. f. dext.)(no. 16). 1883; Handb. Austr. Fungi, 4. 1892—WINTER, Pilze, 1:842. 1884.

Amanita livida PERS. Syn. Meth. Fung. 247. 1801.

Vaginata livida S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:601. 1821.

Amanitopsis vaginata ROZE, Bull. Soc. Bot. Fr. 23:111. 1876—KARSTEN, Hattsv. 1:6. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 40. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:21. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 62. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:256. 1893; Brit. Fungi, 87, pl. 2, f. 3. 1911—PECK, Rep. N. Y. Bot. Mus. 48:159, pl. 17. 1897—W. G. SMITH, Brit. Basid. 18, f. 11. 1908—MURRILL, Mycologia, 1:85, pl. 7, f. 5. 1909—COKER, Jour. Elisha Mitch. Sc. Soc. 33:6, pl. 3. 1917—GILBERT, Genre Amanita, 136. 1918—KAUFFMAN, Agar. Mich. 623, pl. 125-126. 1918—REA, Brit. Basid. 92. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 38, pl. 8. 1927—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 52. 1934—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:25, pl. 1, f. 7. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 47, pl. 4, f. 1. 1950.

(白井, 日. 菌. 目. 9. 1905; ed. 2. 45. 1917; ed. 3. 19. 1927—KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 3, f. 14—17. 1912; 日. 菌. 図説, n. 51. 1927; 食用菌及有毒菌, f. 31, 46. 1931; 日. 菌. 図鑑, 4:497, f. 469-470. 1954—梅村, 富士. 植. 志. 365. 1923—MASTUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sc. 3:119. 1931—IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 47:429. 1933—松浦, 茸類辞典, 114, f. 135. 1933; 応用菌蕈学, 1201. 1941—小林, 日. 隠. 植. 図. 567, pl. 274, f. 1—2. 1939—今関, 原色きのこ, pl. 4(左) 1942; 及土岐, 林. 試. 研. 報. 67:35. 1954—原, 日. 菌. 目. 16. 1954)

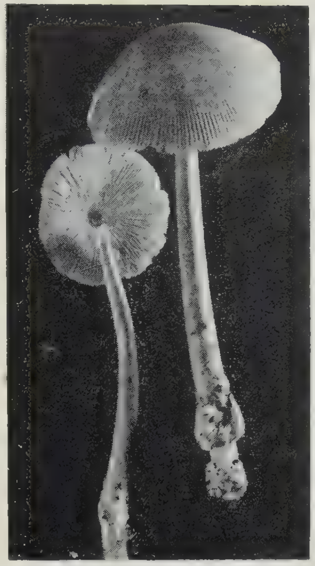
Amanitopsis plumbea SCHROET. Pilze Schles. 1: 676. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:273. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):715, pl. 135c. 1912.

Vaginata vaginata EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5:450. 1909—MURRILL, Mycologia, 3:80. 1911.

Vaginata plumbea MURR. Mycologia, 5:82. 1913; N. Am. Fl. 10:65. 1914.

Amanita vaginata subsp. *plumbea* KONR. et MAUBL. Icon. Sel. Fung. 6:33. 1924.

子実体は孤生或は散生；傘は径 5—8 cm，初め円錐状鐘形，のち開張扁平となり，多くは中高にて遂に周辺反転す；表面は灰色，灰褐色或は淡褐灰色，周辺淡色にて著しき深き長き線条あり，無毛，平滑なるも幼時或は暫時白色不定形なる壺の残片を附着す，湿時やや粘性，光沢あり，縁は薄し；肉は白色，やや薄く，脆く，水潤状，味及臭なし；褶は離生，白色，やや密，便腹状，稜は異質；茎は細長，8—15×1—2 cm，上方に漸細，基部膨大せず，白色或は淡色，脆し，上部粉状，下部綿絮細鱗毛あり，のち無毛となる，脆し，早く中空となる；鍔は胎原時代には存するも消失す；壺は長くして鞘状，薄膜質，白色，上半遊離し，裂片となる，永存性，地中に深く埋まることなし；胞子は球形，平滑，無色，非糊性，径 9—12 μ；胞子紋は白色；可食。



第 98 図　ツルタケ
Amanita vaginata
×1/2　（大谷氏）

所在及産地

林地—夏秋

北海道，本州，九州—欧. 北米. 濠. 亜(支. 小亜)

和名　ツルタケ（鶴茸）〔白井〕

Amanita nivalis GREV.
シロツルタケ

GREVILLE, Scot. Crypt. Fl. 1: pl. 18. 1823—BERKELEY, Engl. Fl. 5(2):3. 1836—SINGER, Agaricales, 386. 1949—HEIM, Cham. Eur. 2:441. 1957. (non PECK).

Agaricus fungites BATSCH, Elench. Fung. Cont. 1:85, f. 79. 1786.

Agaricus vaginatus a. *pileo albido* FR. Syst. Myc. 1:14. 1821.

Agaricus vaginatus var. *albida* FR. Epicr. Myc. 11. 1838.

Agaricus vaginatus b. *tota alba* FR. Hymen. Eur. 27. 1874.

Agaricus vaginatus var. *albida* COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:5. 1871.

Amanita vaginata var. *alba* GILL. Champ. Fr.

51. 1874—GILBERT, Genre Amanita, 142. 1918—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:58. 1948.
(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 45. 1957)

Agaricus vaginatus var. *alba* WINT. Pilze, 1: 843. 1884.

Agaricus vaginatus var. *nivalis* COOKE, Illus. Brit. Fungi, 8, Suppl. pl. 940 (no. 1104). 1891.

Pseudofarinaceus nivalis KUNTZE, Rev. Gen. 2:868. 1891.

Vaginata nivalis KUNTZE, Rev. Gen. 3(2):539. 1898.

Amanitopsis vaginata f. *alba* P. HENN. Hedwigia, 39, Beibl. 156. 1900.
(松村, 植. 名鑑, 1:131. 1904)

Amanitopsis vaginata var. *nivalis* W. G. SMITH, Outl. Brit. Fung. Suppl. 4. 1891; Brit. Basid. 18. 1908—MASSEE, Brit. Fungi, 88. 1911.
(白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 45. 1917; ed. 3. 19. 1927—原, 日. 菌. 目. 16. 1954 (err. typ. var. *nives*)

Amanitopsis vaginata var. *alba* KAWAM. Illus. Jap. Fungi, pl. 6, f. 1—3. 1913.
(白井, 日. 菌. 目. ed. 3. 19. 1927—川村, 日. 菌. 図鑑, 4:498, f. 471. 1954)

Amanitopsis nivalis REA, Brit. Basid. 93. 1922.
(川村, 日. 菌. 図説, n. 113. 1929)

Amanita vaginata subsp. *plumbea* var. *alba* KONR. et MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 6:33. 1924.

Amanita vaginata f. *nivalis* VESELY, Ann. Myc. 31:279. 1933.

Amanitopsis albida IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 47: 429. 1933; Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:27. 1938.
(広江, 応用菌蕈学, 1208. 1941—原, 日. 菌. 目. 16. 1954)

本菌は通常ツルタケ (*A. vaginata*) の一型と認めらるるところにて子実体全部白色なるものなり, 子実体は孤生或は散生; 傘は径 5—10 cm, 鐘形, のち丸山形～扁平となり中丘あり; 表面は白色, 中央屢々淡黄褐色を帯ぶ, 白色或は灰色の壺の残片を附す, 周辺線条あり; 肉は白色, 薄く, 味及臭なし; 褶は離生, 白色, 前方広幅, やや密; 茎は細長, 10—18×0.8—1.2 cm, 上方に少しく漸細或は殆ど同幅, 基部膨大せず, 白色, 緊緻にて中実, 甚だ遅く中空となる; 壺は膜質, 大形, 茎より遊離し, 白色永存性; 胞子は類球形, 平滑, 無色, 径 10—12.5 μ; 胞子紋は白色; 可食。

所在及産地

林地—夏秋　　北海道, 本州, 九州—欧. 北米

和名 シロツルタケ (白鶴茸) 〔川村〕
ユキツルタケ (雪鶴茸) 〔今井〕

Amanita farinosa SCHW.
ヒメコナカブリツルタケ

SCHWEINITZ, Schr. Nat. Ges. Leipzig, 1:79. 1822—SINGER, Agaricales, 387. 1949.
(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 44, f. 99, pl. 17, f. 99. 1957)

Agaricus farinosus FR. Epicr. Myc. 11. 1838.

Amanitopsis farinosa ATKINS. Mushrooms, ed. 2. 76, f. 78. 1900—COKER, Jour. Elisha Mitch. Sc. Soc. 23:14, pl. 7. 1917—GILBERT, Genre Amanita, 156. 1918—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:31. 1938.
(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 47:430. 1933—広江, 応用菌蕈学, 1208. 1941—原. 日. 菌. 目. 16. 1954)

Amanitella farinosa EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5:449. 1909.

Vaginata farinosa MURR. Mycologia, 4:3, pl. 56, f. 5. 1912; 5:84. 1913; N. Am. Fl. 10:67. 1914.

子実体は孤生或は散生; 傘は径 3—5.5 cm, 類球形～丸山形, のち開張し殆ど扁平となり, 遂に中央圧低さる; 表面は乾燥, 灰色～灰褐色或は鼠色, 灰色の粉末, 綿絮に被われ, 中部暗色にて毛状細鱗片あり, 周辺淡色にて深き線条あり, 粉末は壺の残物にて拭取し易し; 肉は白色, 肉質, 薄く, 味及臭なし; 褶は離生, 白色, 寧ろ疎; 茎は 4—7×0.5—0.6 cm, 殆ど同幅或は上方僅か漸細, 基部球根状にて厚さ 1 cm 以上に及ぶも甚だ稀に球根状ならず, 白色或は帯白色にて灰色或は黄色を帯び, 上部殆ど無毛, 下部幾分粉状, 肉質, 脆く, 中空或は充塞; 壺は粉状, 菫灰色, 消失性; 胞子は卵形～楕円形, 平滑, 無色, 非糊性, 径 6—7×5.5—6.5 μ; 胞子紋は白色; 食毒不詳。

所在及産地

林間草地, 殊に針葉樹下—夏秋

北海道, 本州—北米. 亜(支)

和名 ヒメコナカブリツルタケ (姫粉被鶴茸)
〔今井〕

(3) Amanita (*Euamanita* LANGE (1915)) *Lepidella* (GILBERT ut genus) VEŠELEY (1934)
テングタケ亜属

Amanita virosa LAM. ex SECR.
ドクツルタケ

SECRETAN, Mycogr. Suisse, 1:5. 1833—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:66. 1872—GILLET, Champ. Fr. 38, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:

1. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 38. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:9. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 55. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 11, pl. 3, f. 1—4. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:259. 1893; Brit. Fungi, 81, pl. 1, f. 1. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:276. 1900—BOUDIER, Bull. Soc. Myc. Fr. 18:258. 1902—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 61, f. 62. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 15. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): pl. 135 E. 1912—LANGE, Agar. Denm. 2:7, pl. 2, f. 1. 1915; Fl. Agar. Dan. 1:12, pl. 2, f. A. 1935—COKER, Jour. Elisha Mitch. Sc. Soc. 33:83. 1917—KAUFFMAN, Agar. Mich. 603. 1918—GILBERT, Bull. Soc. Myc. Fr. 41:288. 1925—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1: pl. 1. 1927; Agaricales, 1:64. 1948—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:6. 1938—SINGER, Agaricales, 387. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 432, f. 610. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 33, B. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2:437, pl. 48, f. 2. 1957.

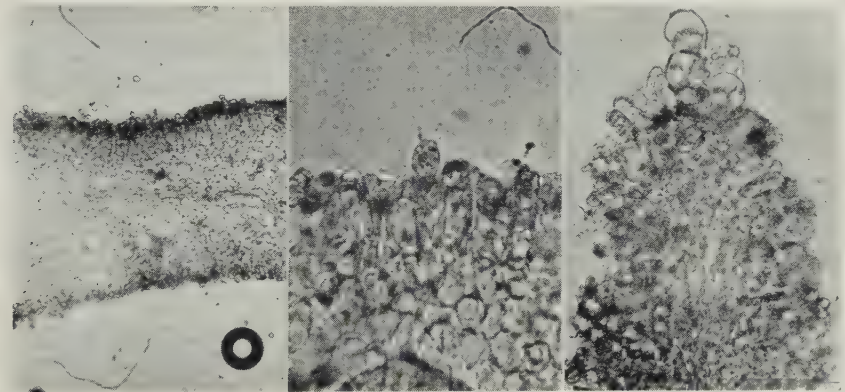
(KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 2, f. 1—3. 1912—安田, 植. 雑. 30:51. 1916—白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 43. 1917; ed. 3. 19. 1927—IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 47:424. 1933; 植. 動. 1:1439, f. 6. 1933—広江, 応用菌蕈学, 788, 1205. 1941—今関, 原色きのこ, pl. 3(右). 1942; 及土岐, 林. 試. 研. 報. 67: 35, pl. 3, f. 2. 1954—原, 日. 菌. 目. 15. 1954)

Agaricus virosus LAMARCK, Encycl. 1:113. 1783—FRIES, Epicr. Myc. 3. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:3. 1857; Hymen Eur. 18. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:578. 1844—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:22. 1879—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 6. 1883: Illus. Brit. Fungi, 1: pl. 1 (no. 1). 1883.

Venenarius virosus MURR. Mycologia, 5:81. 1913.

Amanita phalloides subsp. *virosa* GILBERT, Genre Amanita, 52. 1918—VESELY, Ann. Myc. 31:227. 1933.

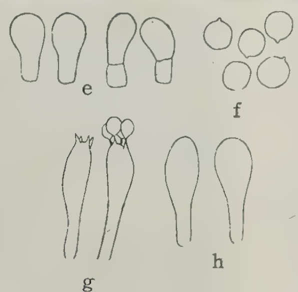
Amanitina virosa GILBERT, Icon. Myc. 27, Suppl. 1:78. 1941.



b　c　d



a



第 99 図　ドクツルタケ
Amanita virosa

a. 子実体　×1/3
b. 褶横断面の一部　×200
c. 同上子実層の拡大　×500
d. 同上褶稜部拡大　×500
e. 稜嚢体　f. 胞子　g. 担子柄
h. 嚢状体　×550

(大谷氏)

子実体は孤生或は散生; 傘は径 6—15 cm, 円錐形～鐘形, のち開張し中高の扁平となるも圧低せず; 表面は湿時粘性, 乾時光沢あり, 純白色にて時に中央僅か赭色となる, 幼時壺の残物に被わるるも, のち裸出し通常破片及内生繊維なく, 平坦, 皮は剝げ易し, 縁辺に線条なく, 薄くして時に僅か丸く切れ込む, 初め下屈し, 屢々鍔の残物を存す; 肉は白色, 味臭殆どなきか不良; 褶は離生, 白色, 密, 寧ろ狭幅, 薄く, 稜は異質にて無色球形, 卵形又は倒卵形の 20—25×12—15 μ 或はそれ以上の細胞ありて, 綿絮或は房毛状をなす; 茎は 8

—25×0.8—2.5 cm，殆ど同幅或は上方僅に漸細，基部膨大し類球根状，白色，縦走する毳毛状繊維，綿綮状小鱗片を有す，充塞殆ど中実；鍔は上位，膜質，垂下，白色，上面に線条を有し，下面に綿綮あり，屢々裂け，永存性；壺は膜質，大形，約6×5 cm に及ぶ，鞘状或は嚢状，先端裂け，白色或は帯黄色，永存性；胞子は球形，平滑，無色，糊性，径 8—10 μ；胞子紋は白色；猛毒。

所在及産地

林地—夏秋　　北海道，本州—欧．北米

和名 ドクツルタケ（毒鶴茸）〔川村〕

Amanita verna (LAM. ex FR.) PERS. ex VITT.

シロタマゴテングタケ

PERSOON, Syn. Meth. Fung. 250. 1801—VITTADINI, Descr. Fung. Mang. pl. 44. 1835—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:230. 1872; Enchir. Fung. 2. 1886—GILLET, Champ. Fr. 37, c. ic. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:10. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 56. 1915—BOUDIER, Bull. Soc. Myc. Fr. 18:256. 1902—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 60, f. 59—61. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 15. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 13, pl. 3, f. 4. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): pl. 139. 1912—RICKEN, Blätterp. 307. 1915—COKER, Jour. Elisha Mitch. Sc. Soc. 33:30, pl. 15. 1917—KAUFFMAN, Agar. Mich. 602, pl. 116. 1918—BRESADOLA, Icon. Myc 1:pl. 4. 1927—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:7. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:63. 1948——SINGER, Agaricales, 387. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 431. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 33, A. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2:437, pl. 48, f. 1. 1957.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 47:424. 1933; 植．動．1:1440, f. 7. 1933—広江，応用菌蕈学，1205, 1941—今関及土岐，林．試．研．報．67:35. 1954—原，日．菌．日．15. 1954)

Agaricus bulbosus SCHAEFF. Fung. Bavar. 4:Ind. 61, pl. 241. 1774.

Agaricus bulbosus vernus BULL. Herb. Fr. pl. 108. 1782.

Agaricus vernus LAMARCK, Encycl. 113. 1783—DE CANDOLLE, Fl. FR. 2:210. 1815—FRIES, Syst. Myc. 1:13. 1821; Monogr. Hymen. Suec. 1:474. 1857—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:578. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 89. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:127. 1867—COOKE, Handb. Brit. Basid. 1:7. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 3(no. 3). 1883; Handb. Austr. Fungi, 2. 1892.

Agaricus virosus var. *vernus* FR. Epicr. Myc. 4. 1838.

Agaricus phalloides var. *vernus* FR. Hymen. Eur. 18. 1874.

Agaricus phalloides subsp. *vernus* WINT. Pilze, 1:850. 1884.

Amanita phalloides var. *verna* BARLA, Champ. Alp. Marit. 12, pl. 1, f. 7—9; pl. 4, f. 1—4. 1888—REA, Brit. Basid. 98. 1922—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:12. 1935.

(川村，日．菌．図鑑，4:491, f. 465. 1954)

Amanita bulbosa var. *alba* SCHROET. Pilze Schles. 1:681. 1889.

Amanita phalloides subsp. *verna* GILBERT, Genre Amanita, 49. 1918—VESELY, Ann. Myc. 31:225, pl. 11(sinistra)—13. 1933.

Amanitina verna GILBERT, Icon. Myc. 27, Suppl. 1:78. 1941.

子実体は孤生或は散生；傘は径 5—8 cm，或はそれ以上に及び，丸山形～開張扁平，のち中央圧低さる；表面は湿時粘性，のち乾燥，純白色或は中央僅か黄色を帯ぶ，通常周辺平坦，壺の残物を存せず；肉は白色，臭は初めなく，のち悪く，味は温和或は鋭し；褶は離生，白色，密，茎は 7—10×1—1.5 cm 上方に漸細，基部球根状，純白色，絹糸様光沢あり鍔より下部に綿綮状粉末あるも無毛となる，充塞，のち中空；鍔は上位，垂下，広膜質，白色，上面線条あり；壺は袋状白色，膜質，茎の基部を包み，半



a　　b



c

第100図　シロタマゴテングタケ
Amanita verna
a．b．子実体　×1/3　c．胞子　×550
（大谷氏）

ば遊離し，上端裂片となる；胞子は球形或は類球形，平滑，無色，径 7—10μ；胞子紋は白色；猛毒。

所在及産地

林地—夏秋　　北海道，本州，九州—欧．北米．濠

和名 シロタマゴテングタケ（白卵天狗茸）〔今井〕

Amanita subjunquilla IMAI
タマゴタケモドキ

IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 47:424. 1933; Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:10, pl. 1, f. 2. 1938.

（今井，植．動．1:1441, f. 8. 1933—今関，原色きのこ，p. 2(左). 1942; 及土岐，林．試．研．報．67:35. 1954—原，日．菌．目．15. 1954）

Amanitina subjunquilla GILBERT, Icon. Myc. 27, Suppl. 1:78. 1941.

子実体は孤生或は散生；傘は径 3—7 cm，円錐状丸山形，のち殆ど扁平となる；表面は平滑，無毛，湿時僅か粘性，乾時少しく絹糸状光沢あり，中央汚橙黄色或は黄土色，周辺淡色にて平坦或は時に僅か線条あり，屢々白色綿絮状の壺の破片を存す；肉は白色，皮下黄色，寧ろ薄く，味及臭なし；褶は離生，白色，やや密，稜は全縁ならず；茎は 6—11×0.6—1 cm，上方に漸細或は殆ど同幅，基部やや球根状乾燥，纖維状，帯白或は帯黄色，帯黄或は帯褐色の小形なる纖維状鱗片を有す，殆ど中実；鍔は頂生，膜質，薄く，白色，上面有線，下面帯黄色，永存性；壺は白色或は帯褐色，上部不規則なる 2〜3 裂片に分れ，茎の基部を包む，膜質，下部厚くして上部に向つて漸次薄し，大さ 3×2.5 cm に及ぶ；胞子は球形〜類球形，無色，糊性，7—8μ，或は 7.5×7μ；胞子紋は白色，食毒不詳。

所在及産地

林地—秋　　北海道，本州

和名 タマゴタケモドキ（擬卵子茸）〔今井〕

Amanita phalloides (VAILL. ex FR.) SECR.
タマゴテングタケ

SECRETAN, Myc. Suisse, 1:8. 1833—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:67. 1872; Enchir. Fung. 2. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5:9. 1887. pr. p. —MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:260. 1893. pr. p.; Brit. Fungi, 81. 1911. pr. p.—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:275, f. 125, B. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 167. 1900—BOUDIER, Bull. Soc. Myc. Fr. 18:256. 1902—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 55, f. 55—58. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 15, f. 10. 1908—MURRILL, Mycologia, 1:258, pl. 15, f. 2. 1909—ROLLAND, Atl. Champ. 12, pl. 3, f. 3. 1910—RICKEN, Blätterp. 307, pl. 75, f. 2. 1915—LANGE, Agar. Denm. 2:7, pl. 2, f. 2a. 1915; Fl. Agar. Dan. 1:12, pl. 1, f. D. 1935—COKER, Jour. Elisha Mitch. Sc. Soc. 33:27, pl. 14. 1917—GILBERT, Genre Amanita, 38. 1918—KAUFFMAN, Agar. Mich. 600. 1918—REA, Brit. Basid. 98. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 1:pl. 3. 1927—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 36. pl. 2. 7. 1927—VESELY, Ann. Myc. 31:222. f. 4. pl. 11(dextra). 1933—IMAI. Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:10. pl. 1, f. 3. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:63. 1948—SINGER, Agaricales, 387. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 43, pl. 1, f. 1. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. f. 431, f. 12, 609. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 32. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2:437, pl. 47, f. 1. 1957.

（川村，植．雑．23:460. 1909; Illus. Jap, Fungi, pl. 7, f. 24—25. 1913; 日．菌．図説，n. 33. 1929; 食用菌及有毒菌，67, f. 7, 61. 1931; 日．菌．図鑑，4:488, f. 465. 1954—白井，日．菌．目．ed. 2. 43. 1917; ed. 3. 18. 1927—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sc. 3:119. 1931—IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 47:424. 1933; 植．動．1:1442. 1933—牧野，日．植．図鑑，1018, f. 3053. 1940—広江，応用菌蕈学，781, f. 620—621, 1941—今関，原色きのこ，pl. 3(左)，1942; 及土岐，林．試．研．報．67:35, pl. 3, f. 1. 1954—原，日．菌．目．15. 1954—今関及本郷，原色日．菌 図鑑，44, pl. 17, f. 98. 1957）

Fungus phalloides VAILLANT, Bot. Paris, 74, pl. 5. 1727.

Agaricus bulbosus BULL. Champ. Fr. pl. 2. 1791.

Amanita viridis PERS. Disp. Meth. Fung. 67. 1797; Syn. Meth. Fung. 251. 1801.

Agaricus verrucosus D.C. Fl. Fr. 2:209. 1815.

Agaricus phalloides FR. Syst. Myc. 1:13. 1821. Epicr. Myc. 4. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1: 4. 1857; Hymen. Eur. 18. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:578. 1844—BARLA, Champ. Nice, 8, pl. 4, f. 1—8. 1859—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 89, pl. 3, f. 1. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:127. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:7. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 2(no. 2). 1883—WINTER, Pilze, 1:850. 1884.

Agaricus virescens KROMBH. Abbild. 4:19, pl. 28, f. 1—3. 1836.

Agaricus viridis KROMBH. Abbild. 9:22, pl. 69, f. 10—17. 1845.

Amanita bulbosa PERS. Syn. Meth. Fung. 250. 1801—S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:599. 1821—GILLET, Champ. Fr. 36, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:2. 1879—SCHROETER, Pilze Schles.

1:681. 1889—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 723, pl. 135B. 1912—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 57. 1915.

Amanita lignophila ATKINS. Ann. Myc. 7:366. 1909.

Venenarius phalloides MURR. Mycologia, 4: 240. 1912; 5:74, 93, pl. 87, f. 1. 1913; 8:233, pl. 190, f. 5. 1916; N. Am. Fl. 10:70. 1914.

Amanitina phalloides GILBERT, Icon. Myc. 27, Suppl. 1:78. 1941.

子実体は孤生或は散生；傘は径 7—15 cm, 鐘形, のち丸山形より多少扁平となる；表面は湿時やや粘性, 乾時絹糸様光沢あり, 灰緑色, オリーブ褐色或は淡緑黄又は灰色, 中部暗色, 不明瞭の放射状纖維あり, 周辺淡色にて平坦, 皮は剝げ易し, 稀に壺の薄き残片を存す；肉は白色, やや厚く, 臭は初めなきも, のち悪臭となり, 味著しからず；褶は離生, 白色, 密, 広幅, 便腹状, 稜は全縁或は少しく波状；茎は 8—20×1—3 cm, 或は更に長きことあり, 上方に漸細, 基部球根状, 白色, 往々鍔より下部は傘面の色を帯ぶ, 平滑或は小形の絹糸様軟毛鱗片を存す, 充塞, のち中空；鍔は上位, 垂下, 膜質, 薄く上面多くは白色にて線条あるも屢々線条不明となる, 下面白黄色, 永存性；壺は大形, 袋状, 白色, 膜質, 半ば迄茎より遊離し, 上端裂片となる；胞子は球形, 平滑, 無色, 糊性, 径 9—10.5 μ; 胞子紋は白色；猛毒。

所 在 及 産 地

林地—夏秋

北海道, 本州—欧. 北米. 阿. 亜(支. 小亜)

和 名 *タマゴテングタケ*（卵天狗茸）〔川村〕

Amanita fuliginea HONGO
クロタマゴテングタケ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 28:69, f. 1. 1953.
(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 45, f. 103, pl. 18, f. 103. 1957.

子実体は群生；傘は径 3—5 cm, 初め卵状鐘形, のち丸山形～扁平；表面は湿時やや粘性, 乾時光沢あり, 煤色にて中央殆ど黒色, 無毛, 平滑, 速に内生縦纖維を生じ, 老時縁は屢々裂く, 線条なし；肉は白色, 臭微なり；褶は離生, 中部広幅, 幅 3 mm 或はそれ以上, 白色, 密, 稜は平坦；茎は 6—9×0.6—0.8 cm, やや同幅或は上方に僅か漸細, 基部やや球根状, 傘面より淡色, 纖維状鱗被あり；鍔は上位, 類白色, のち汚色となり, 幾分線条あり, 膜質, 永存性；壺は袋状, 深さの半分遊離し, 膜質, 3—5 裂片に裂く, 白色, 永存性；胞子は球形, 平滑, 無色, 糊性, 径 7.5—9 μ; 胞子紋は白色；担子柄は 4 胞子, 26—33×8—11 μ; 食毒不明。

所 在 及 産 地

林地—夏 本州

和 名 *クロタマゴテングタケ*(黒卵天狗茸)〔本郷〕

Amanita citrina (SCHAEFF.) PERS. ex. S. F. GRAY
コタマゴテングタケ

PERSOON, Syn. Meth. Fung. 251. 1801; Champ. Comest. 180. 1819—S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:599. 1821—BOUDIER, Bull. Soc. Myc. Fr. 18:261. 1902—W. G. SMITH, Brit. Basid. 16. 1908—MASSEE, Brit. Fungi, 87. 1911—GILBERT, Genre Amanita, 61. 1918—VESELY, Ann. Myc. 31:236, pl. 15. 1933—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:65. 1948—SINGER, Agaricales, 387. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 432, f. 611. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 31. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2:448, f. 81(3), pl. 49, f. 1. 1957.
(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 46, f. 104, pl. 19, f. 104. 1957)

Agaricus citrinus SCHAEFF. Fung. Bavar. pl. 20. 1762.

Agaricus Mappa BATSCH, Elench. Fung. 57. 1783—FRIES, Epicr. Myc. 6. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:5. 1857; Hymen. Eur. 19. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 90. 1860—KICKX. Fl. Crypt. Flandr. 129. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:7. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1: pl. 4(no. 4). 1883; Handb. Aust. Fungi, 2. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:23. 1876—WINTER, Pilze, 1:849. 1884.
(白井, 日. 菌. 目, ed. 2. 33. 1917)

Amanita citrina β. Mappa PERS. Syn. Meth. Fung. 251. 1801.

Amanita citrina var. *mappalis* S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:599. 1821.

Amanita mappa QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1: 67. 1872—SACCARDO, Syll. Fung. 5:10. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 52. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 12, pl. 1, f. 10—12. 1888—KARSTEN, Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 38. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:261. 1893; Brit. Fungi, 81. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:275. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 167. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 15. 1908——ROLLAND, Atl. Champ. 14, pl. 4, f. 5. 1910—RICKEN, Blätterp. 309, pl. 77, f. 2. 1915—LANGE, Agar. Denm. 2:8, pl. 2, f. 5. 1915; Fl. Agar. Dan. 1:13, pl. 2, f. B. 1935—KAUFFMAN, Agar.

Mich. 609. 1918—BRESADOLA, Icon. Myc. 1:pl. 7. 1927—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:12, pl. 1, f. 4. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 44, pl. 1, f. 2. 1950. (KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 7, f. 21-23. 1913; 日. 菌. 図説, n. 95. 1929; 食用菌及有毒菌, 69, f. 62. 1931; 日. 菌. 図鑑, 4:494, f. 466-467. 1954—安田, 植. 雑. 29:117. 1915—白井, 日. 菌 目. ed. 2. 41. 1917; ed. 3. 18. 1927—IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 47:425. 1933; 植. 動. 1:1441. 1933—松浦, 茸類辞典, 65, f. 65. 1933; 応用菌蕈学, 783. 1203, f. 622(左). 1941—今関, 原色きのこ, pl. 2 (右). 1942; 及土岐, 林. 試. 研. 報. 67:35. 1954——原, 日. 菌. 目. 14. 1954)

Amanita venenosa GILL. Champ. Fr. 44, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:2. 1879.

Amanita citrina f. *mappa* QUÉL. Fl. Myc. 308. 1888—VESELY, Ann. Myc. 31:239. 1933.

Amanita bulbosa c. *citrina* SCHROET. Pilze Schles. 1:681. 1889.

Amanitina citrina GILBERT, Icon. Myc. 27, Suppl. 1:78. 1941.

子実体は孤生或は散生；傘は径 3—8 cm，初め半球形或は半卵形，のち丸山形より殆ど扁平となる；表面は湿時僅か粘性，絹糸様光沢あり，淡緑黄色，淡硫黄色，或はシトロン色にて，屢々淡色となり白色に至る，不正形の低き白色，淡褐又は硫黄色の壺残物を不規則に散布するも，のち平滑となる，周辺線条なし；肉は白色にて傘皮下淡色，やや薄く，脆し，臭は悪臭，味初め著しからざるも，のち不良；褶は離生，白色，密，広幅，稜に細微房毛あり；茎は細長，5—12×0.5—1.5 cm，上方に僅か漸細，或は同幅，基部半球形，帯黄色或は帯白色にて硫黄色の繊維を有し，絹糸様光沢あり，屢々基部に小形硫黄色の鱗片あり，充塞，のち中空；鍔は上位，寧ろ広く，垂下，膜質，硫黄色，上面平滑，下面細密綿毛あり，永存性；壺は茎に癒着し，上端球根の肩の辺にて遊離し，狭き襟状をなし，茎の周囲に溝を作る，早失性；胞子は球形，平滑，無色，糊性，径 7.5——10 μ；胞子紋は白色；猛毒。

所在及産地

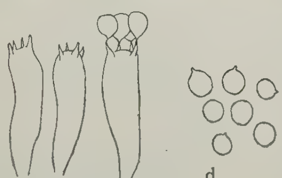
林地—夏秋

北海道，本州—欧．北米．濠．亜(小亜)

和名 コタマゴテングタケ（小卵天狗茸）〔川村〕シロコタマゴテングタケ（白小卵天狗茸）〔川村〕



a　　b



c　　d

第101図　コタマゴテングタテ Amanita citrina
a. b. 子実体　×1/2
c. 担子柄　d. 胞子
×500　（大谷氏）

Amanita porphyria (ALB. et SCHW. ex FR.) SECR.

コテングタケ

ALBERTINI & SCHWEINITZ, Consp. Fung. 142, pl. 11, f. 1. 1805—SECRETAN, Myc. Suisse, 1:4. 1833—GILLET, Champ. Fr. 35, c. ic. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 5:2, 1877; Enchir. Fung. 2. 1886—KARSTEN, Hattsv. 1:2. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 38. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:11. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 54. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 12, pl. 3, f. 5—6. 1888—SCHROETER, Pilze Schles. 1:680. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 275. 1900—BOUDIER, Bull. Soc. Myc. Fr. 18:259. 1902—W. G. SMITH, Brit. Basid. 15. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):722, pl. 135 D. 1912—LANGE, Agar. Denm. 2:8, pl. 2, f. 3. 1915; Fl. Agar. Dan. 1:12, pl. 1, f. A. 1935—RICKEN, Blätterp. 308, pl. 75, f. 3; pl. 76, f. 1. 1915—GILBERT, Genre Amanita, 54. 1918; Bull. Soc. Myc. Fr. 40:212, pl. 11. 1925—KAUFFMAN, Agar. Mich. 604, pl. 117. 1918—REA, Brit. Basid. 99. 1922—BRESADODA, Icon. Myc. 1:pl. 6. 1927—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1:pl. 3. 1929; Agaricales, 1:64, 1948—VESELY, Ann. Myc. 31:233, pl. 14. 1933—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:13. 1938—SINGER, Agaricales,

387. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 432. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2: 450. 1957.

（松浦，菌類，1:98, f. 2. 1931; 茸類辞典，73, f. 76. 1933; 応用菌蕈学，f. 818(p. 1204). 1941—IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 47:425. 1933; 植．動．1:1613. 1923—原，日．菌．目．15. 1954）

Agaricus porphyrius FR. Syst. Myc. 1:14. 1821; Epicr. Myc. 4. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:5. 1857; Hymen. Eur. 19. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:577, 1844—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:23. 1876—WINTER, Pilze, 1:849. 1884.

Agaricus recutitus FR. Epicr. Myc. 6, 1838; Monogr. Amanit. Suec. 6. 1854; Hymen. Eur. 19. 1874—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:129. 1867—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:24. 1876—WINTER, Pilze, 1:849. 1884.

Amanita recutita GILL. Champ. Fr. 42. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:3. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 38. 1889—QUÉLET, Enchir. Fung. 3. 1886; Champ. Jura Vosg. Suppl. 22:494. 1901—SACCARDO, Syll. Fung. 5:11. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 50. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 13, pl. 8, f. 1—4. 1888—BOUDIER, Bull. Soc. Myc. Fr. 18:259. 1902—W. G. SMITH, Brit. Basid. 15. 1908—MASSEE, Brit. Fungi, 85. 1911—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):723, pl. 139 B. f. 1—2. 1912—RICKEN, Blätterp. 309. 1915—REA, Brit. Basid. 99. 1922.

Amanita porphyria var. *recutita* QUÉL. Fl. Myc 308. 1888—GILLET, Genre Amanita, 57. 1918.

Venenarius porphyrius MURR. Mycologia, 5: 81. 1913; N. Am. Fl. 10:70. 1914.

Amanita porphyria f. *recutita* VESELY, Ann. Myc. 31:235. 1933.

Amanitina porphyria GILBERT, Icon. Myc. 27, Suppl. 1:78. 1941.

子実体は孤生或は散生；傘は径 5—8 cm，鐘形～丸山形，のち扁平となり，僅か中高なり；表面は初め甚だ湿潤なるも粘性ならず，乾燥し，やや無毛或は細軟毛あり，内生纖維によりて微細の線を認む，壺の残片なきか或は白～灰褐色の砕片を存す，灰褐色～鼠色或は褐色，縁は少しく内屈し，薄く，線条なし；肉は白色，強靱，味微弱，臭僅か不良；褶は殆ど離生，白色，柔軟，密，稜は異質にて洋梨形無色の細胞あり；茎は 9—13×0.6—1 cm，同幅或は上方に僅か漸細，基部蕪菁形，初め白色，のち灰褐色を帯ぶ，鍔より下部に微細絹糸様軟毛を有す，充塞，のち中空；鍔はやや低く，垂下，薄く，膜質，白色にて鼠色～赤紫灰色となり，上面微細線条あり永存性；壺は帯白或は帯褐色，初め嚢状，のち球根部肩の処にて割断せられ，溝を作る；胞子は球形，平滑，無色，糊性，径 10～12.5 μ；胞子紋は白色，有毒。

所在及産地

林地—夏秋　北海道，本州—欧．北米．亜(小亜)

和名 コテングタケ（小天狗茸）〔松浦〕

Amanita sepiacea IMAI
テングタケモドキ

IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 47:426. 1933; Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:18. 1938.（今井，植．動．1:1615, f. 10. 1933—原，日．菌．目．15. 1954）

Amplariella sepiacea GILBERT, Icon. Myc. 27, Suppl. 1:78. 1941.

子実体は孤生；傘は径 6—10 cm，丸山形，のち扁平となる；表面は暗褐色～黒褐色，中央暗色，湿時やや粘性，平滑，灰色或は帯褐色の多角或は角錐形の小疣を具う，周辺に線条なし，肉は白色，肉質，寧ろ薄く，味及臭なし，傷によりて変色せず；褶は辛うじて離生或は幾分着生，白色，両端に漸細し，密，稜は全縁ならず；茎は 15—18×1—1.5 cm，上方に狭細，基部倒卵球根状にて幅 3 cm に及ぶ，灰色或は淡褐色，纖維状或は綿絮状細鱗片を有し，中実或は充塞；鍔は膜質，頂生，白色，上面有線，下面菫灰色，永存性；壺は球根部に 1～4 の同心円輪環となり，半永存或は早失性，帯白或は帯褐色；胞子は球形或は類球形，無色，8—10 μ；胞子紋は白色，食毒不詳。

所在及産地

林地—秋　北海道

和名 テングタケモドキ（擬天狗茸）〔今井〕

Amanita ovoidea (BULL. ex FR.) QUÉL.
シロタマゴタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:230. 1872—GILLET, Hymen. Fr. 37, c. ic. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:8. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 56. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 10, pl. 2, f. 1-4. 1888—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:276. 1900—BOUDIER, Bull. Soc. Myc. Fr. 18:253. 1902—ROLLAND, Atl. Champ. 12, pl. 2, f. 2. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):722. 1912—RICKEN, Blätterp. 307. 1915—GILLET, Genre Amanita, 27. 1918—BRESADOLA, Icon. Myc. 1:pl. 2. 1927—VESELY, Ann. Myc. 31:217, pl. 8-10. 1933—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:61. 1948—SINGER, Agar-

icales, 387. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 431. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 30. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2:438. 1957.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 53:392. 1939—原, 日. 菌. 目. 15. 1954)

Agaricus ovoideus BULL. Herb. Fr. pl. 364. 1787—DE CANDOLLE, Fl. Fr. 6:53. 1815—FRIES, Syst. Myc. 1:15. 1821; Epicr. Myc. 3. 1838; Hymen. Eur. 18. 1874—BARLA, Champ. Nice, 11, pl. 6, f. 1—6. 1859—WINTER, Pilze, 1:851. 1884—COOKE, Handb. Austr. Fungi, 2. 1892.

Amanita alba PERS. Champ. Comest. 177. 1819.

Amidella ovoidea GILBERT, Icon. Myc. 27, Suppl. 1:77. 1941.

子実体は孤生或は散生；傘は径 9—15 cm，半球形～饅頭形，老時開張す；表面は白色，のち藁色，乾燥，初め粉状，のち平滑にてやや光沢あり，周辺線条なく，縁は褶端より伸出し，著しく房毛を存す；肉は厚く，白色，無臭，味は特殊的なり；褶は離生，白色，密，便腹状，稜は異質にて綿絮あり；茎は 10—15×3—5 cm，同幅，基部球根状，偽根あり，白色，綿絮鱗被を被むり，のち粉状となる，中実；鍔は上位，垂下，広く，上面線条なく，下面綿絮状，のち脱落す；壺は大形にて高く，膜質，黄土色～黄色，或は栗色半ば遊離し，上端裂片となる，永存性；胞子は楕円形，平滑，無色，糊性，10—12×6.5—7.5 μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地

林地—夏秋　　本州—欧. 濠

和名 シロタマゴタケ（白卵茸）〔今井〕

Amanita pseudoporphyria HONGO
コテングタケモドキ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 32:141, f. 2, a-c. 1957.

子実体は散生或は群生；傘は径 3—11 cm，丸山形～扁平，のちやや圧低さる，平滑，時に被膜(壺)の残片を散在す，やや内生繊維あり，灰色，中央暗色，周縁平滑，白色膜片あり；肉は白色，やや薄く無味無臭；褶は離生にて垂線を存し，白色，密，やや便腹状，稜に白綿絮あり；茎は 5—12×0.6—1.8 cm，上部狭細或は殆ど同幅，下部肥大，充塞～充実，白色，鍔上はやや線条を有し，鍔下は綿絮状鱗被あり；頂鍔は白色，膜質，線条あり，僅か綿絮状永存性；壺は白色，膜質，鞘形，弛く，半離性，永存す；胞子紋は白色；胞子は広卵形或は楕円形，平滑，7.5—8.5(9.5)×4.5—5.5(7) μ，糊性；担子柄は 4 胞子，23—37×8—10.5 μ；縁細胞は有柄球形，嚢状或は棍棒形，13—30×10—20 μ，薄膜，無色；食毒不明。

所在及産地

松林地上—夏　　本州

和名 コテングタケモドキ（擬小天狗茸）〔本郷〕

Amanita flavipes IMAI
コガネテングタケ

IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 47:428. 1933; Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:19. 1938.

(今井, 植. 動. 1:1616, f. 12. 1933—広江, 応用菌蕈学, 1202. 1941—原, 日. 菌. 目. 14. 1954)

Amplariella flavipes GILBERT, Icon. Myc. 27, Suppl. 1:79. 1941.

子実体は孤生；傘は径 6.5 cm 内外，丸山形，のち扁平となり，遂に中央少しく圧低さる；表面は中部帯褐黄色，周辺淡色，湿時僅か粘性, 平滑, 無毛にて硫黄色の小粉状塊をなせる壺の残物を撒布さる，周辺に僅か短線条あり；肉は甚だ薄く，無味無臭；褶は離生，白色或は淡黄色，寧ろ密，前方幅広し，稜は綿絮状鋸歯あり；茎は約 10×1 cm，上方に漸細或は殆ど同幅にて，基部少しく肥大し，鍔より下部は黄色の粉状物にて密に被われ，基部に向つて淡色となる，鍔より上部は黄色粉状鱗片を有す, 中実；鍔は膜質，上位，淡黄色にて上面少しく有線，永存性；壺は粉状，茎の基部を包み，鮮黄色，脆く，消失性，胞子は類球形～広楕円形，無色，糊性，8—9×6—7 μ；胞子紋は白色。

所在及産地

林地—秋　　北海道

和名 コガネテングタケ（黄金天狗茸）〔今井〕

Amanita pulchella IMAI
ココガネテングタケ

IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 47:427. 1933; Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:19. 1938. (non *Agaricus*) (*Amanitopsis*) *pulchellus* COOKE et MASS.)

(今井, 植. 動. 1:1617, f. 13. 1933—広江, 応用菌蕈学, 1204. 1941—原, 日. 菌. 目. 15. 1954)

子実体は孤生或は散生；傘は径 2.5—5 cm，丸山形，のち扁平，遂に縁は反転す；表面は黄色～淡橙黄色，周辺淡色，湿時粘性，無毛，これに卵黄色粉状塊の壺の残物を撒布す，老時周辺に短線条を生ず；肉は白色，薄く，無味無臭；褶は離生，白色，

のち黄色を帯ぶ，寧ろ密，狭幅にて中部幅広し；茎は 8—10×0.4—0.7cm，上方に僅か漸細，或は殆ど同幅にて基部やや肥大す，白色或は卵黄色粉を存す，充塞；鍔は膜質，上位，卵黄色，永存性；壺は卵黄色粉状塊となり，茎の基部を包み，脆し；胞子は広楕円形，平滑，無色，7.5—10×5—6μ；胞子紋は白色。

所在及産地

林地—夏秋　北海道

和名　ココガネテングタケ(小黄金天狗茸)〔今井〕

Amanita aspera PERS. ex S. F. GRAY
ザラツキテングタケ

PERSOON, Obs. Myc. 2:33. 1799; Syn. Meth. Fung. 256. 1801—S. F. GRAY, Nat. Arrang. Brit. Fungi, 600. 1821—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:70. 1872; Enchir. Fung. 4. 1886—GILLET, Champ. Fr. 48, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1: 6. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:19. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 46. 1915—BARLA, Champ Alp. Marit. 17. 1888—SCHROETER, Pilze Schles. 1:678. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:267. 1893; Brit. Fungi, 85, pl. 1, f. 4. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 275. 1900—BOUDIER, Bull. Soc. Myc. Fr. 18:266. 1902—W. G. SMITH, Brit. Basid. 17. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 16, pl. 7, f. 11. 1910 MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2(2):719, pl. 137 B. 1912—RICKEN, Blätterp. 314, pl. 80, f. 3. 1915—LANGE, Agar. Denm. 2:10, pl. 2, f. 10. 1915; Fl. Agar. Dan. 1:16, pl. 5, f. B. 1935—REA, Brit. Basid. 104. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 1:pl. 10. 1927—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1:pl. 8. 1930; Agaricales, 1:67. 1948—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 20. 1938—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 432. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:448. 1957.

(松村，植. 名鑑，1:130. 1904—白井，日. 菌. 目. 8. 1905; ed. 2. 41. 1917; ed. 3. 17. 1927—今井，植. 動. 1:1617, f. 14. 1933—原，日. 菌. 目. 14. 1954)

Agaricus asper FR. Syst. Myc. 1:18. 1821; Epicr. Myc. 9. 1836; Monogr. Hymen. Suec. 1:12. 1857; Hymen. Eur. 24. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:575. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 91. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:10. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 10 (no. 13). 1883.

Amanita virescens GILLET, Champ. Fr. 46, c. ic. 1874.

Amanita rubens f. *aspera* VESELY, Ann. Myc. 31:244. 1933.

Amplariella aspera GILBERT, Icon. Myc. 27, Suppl. 1:78. 1941.

子実体は孤生或は散生；傘は径 2.5—8cm，初め球形，のち丸山形〜扁平となり，更に僅か圧低さる；表面は光沢あり，乾燥し，殆ど平滑，灰褐色，淡黄灰色或はオリーブ灰色，屢々中部暗色，黄或は褐色にて多角或は不正形の粉状又は綿架状疣を有す，通常中央のもの大にて密，皮は剝げ易く，縁は薄く，線条なく，最後に僅か線条あることあるも本質的のものならず；肉は白色，傘皮下淡褐黄色，薄く，緊緻，味臭弱く不良ならず；褶は離生，白色，密，前方僅か広幅，稜は異質にて無色球形の細胞あり，茎は 4—8×0.3—1cm，上方に漸細，基部倒卵形，偽根あり，帯白或は帯褐色，微細綿架を有し，頂部に於て微細線あり，鍔より下部に屢々硫黄色の切片列生す，充塞，のち時に中空；鍔は上位，広く，垂下，白色或は帯褐色，膜質，上面線条あり，縁に黄色房毛あり；壺は粉状層をなし，膜質ならず，球根部の肩の周囲にあり，黄色，のち帯褐色となり，剝落す；胞子は楕円状卵形，平滑，無色，糊性，7.5—11×7—9.5μ；胞子紋は白色；有毒。

所在及産地

林地—秋　北海道，本州—欧. 北米

和名　ザラツキテングタケ(粗豪天狗茸)〔白井〕

Amanita rubescens (PERS. ex FR.) S. F. GRAY
ガンタケ

PERSOON, Syn. Meth. Fung. 254. 1801—S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:600. 1821—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:69. 1872; Enchir. Fung. 4. 1886—GILLET, Champ. Fr. 45. c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:4. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 39. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 16. 1887—BARLA, Champ. Alp. Marit. 17, pl. 5, f. 1—6. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:265. 265. 1893; Brit. Fungi, 85, pl. 3, f. 5. 1911—PECK, Rep. N. Y. Bot. Mus. 48:159, pl. 16. 1897—PATOUILLARD, Ess. Tax. 167. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 71, f. 73—74, pl. 19, f. 1. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 16. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 17, pl. 9, f. 1. 1915—LANGE, Agar. Denm. 2:10, pl. 2, f. 11. 1915; Fl. Agar. Dan. 1:16, pl. 6, f. c. 1935—COKER, Jour. Elisha Mitch. Sci. Soc. 33:59, pl. 36—38. 1917—KAUFFMAN, Agar. Mich. 617, pl. 121. 1918—REA, Brit. Basid. 104. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 1:pl. 15, 1927—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 48. 1934—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:21. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agar-

icales, 1:66. 1948—SINGER, Agaricales, 388. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 45, pl. 2, f. 2. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 432, f. 612. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 29, 1956—HEIM, Champ. Eur. 2:446, pl. 51, f. 1. 1957.
（川村，食用菌及有毒菌，f. 25(p. 22). 1931；日．菌．図鑑，4:487, f. 464. 1954—IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 47:426. 1933；植，動．1:1618. 1933—今関及土岐，林．試．研．報．67:35. 1954—原，日．菌．目．15. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，46, f. 105, pl. 19, f. 105. 1957）

Agaricus rubens SCOP. Fl. Carn. ed. 2. 2:416. 1772.

Agaricus pustulatus SCHAEFF. Fung. Bavar. 4:Ind. 39, pl. 91. 1774. (non SCOP.)

Agaricus rubescens FR. Syst. Myc. 1:18. 1821; Epicr. Myc. 7. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1: 10. 1857; Hymen. Eur. 23. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:576. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 90. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:129. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:9. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 9(no. 10). 1883; 8, Suppl. pl. 1163(no. 1103). 1891—WINTER, Pilze, 1:846. 1884.

Amanita rubens QUÉL. Enchir. Fung. 4. 1886—BOUDIER, Bull. Soc. Myc. Fr. 18:267. 1902—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 44. 1915 GILBERT, Genre Amanita, 116. 1918—VESELY, Ann. Myc. 31:240. 1933. pr. p.

Amanita pustulata SCHROET. Pilze Schles. 1: 678. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:274, f. 125, A. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):719, pl. 137 D. 1912—RICKEN, Blätterp. 313, pl. 80, f. 1. 1915,

Venenarius rubens MURR. Mycologia, 5:75. 1931; 6:1, pl. 113, f. 1. 1914; N. Am. Fl. 10:73. 1914.

Amplariella rubescens GILBERT, Icon. Myc. 27, Suppl. 1:78. 1941.

子実体は孤生或は散生；傘は径 8—12 cm，或はそれ以上に及び，初め半球形にて，のち丸山形となり扁平に至る；表面は湿潤，帯赤褐色～暗赤褐色又は帯褐赤色，中央暗色，周辺淡色にて平坦，時に微細の線条あり，多数の厚き灰色或は帯赤褐色の剝落性の疣を有す；肉は傘皮下初め白色，最後に多少赤色或は赤褐色にてその他は白色，老時或は空気に触れて赤色或は赤褐色に変色す，中部厚く，縁辺薄し，味及臭なし；褶は離生，白色，時に赤褐色の汚斑を生ず，密，広幅，軟し；茎は 6—12×1.5—3 cm，或はそれ以上の長さに及び，上方に漸細，基部倒卵状球根形，径 4.5 cm に及ぶ，帯赤白色，類赤色，



第 102 図　ガンタケ
Amanita rubescens
×1/3　（大谷氏）

鍔より上部には細鱗片，下部には繊維状鱗片あり，中実；鍔は上位，垂下，膜質，上面白色にて線条あり，下面多くは類赤色，消失性；壺は灰色粉質の薄層にて早失性；胞子は楕円形，8—9×6—7 μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地

林地—夏秋

北海道，本州—欧．北米．濠．阿．亜(小亜)

和名 ガンタケ（雁茸）〔川村〕
イロガワリテングタケ(変色天狗茸)〔今井〕

Amanita excelsa (FR.) QUÉL.

キリンタケ

QUÉLET, Champ. JuraVosg. 1:68. 1872—SACCARDO, Syll. Fung. 5:14. 1887—BARLA, Champ. Alp. Marit. 15. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:263. 1893; Brit. Fungi, 85. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:275. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 16. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):721, pl. 136 B. 1912—RICKEN, Blätterp. 312. 1915—LANGE, Agar. Denm. 2:9, pl. 2, f. 8 a. 1915; Fl. Agar. Dan. 1:15, pl. 4, f. A. 1935—REA, Brit. Basid. 102. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 1:pl. 12. 1927—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:65. 1948 SINGER, Agaricales, 388. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 433. 1953.
（松村，植．名鑑，1:131. 1904—白井，日．菌．目．8. 1905; ed. 2. 41. 1917; ed. 3. 18. 1927—今井，植．動．1:1618, f. 15. 1933—原，日．菌．目．14. 1954）

Agaricus pustulatus SCOP. Fl. Carn. ed. 2. 2: 416. 1772.

Amanita ampla PERS. Syn. Meth. Fung. 255. 1801—GILLET, Champ. Fr. 47, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:4. 1879—QUÉLET, Enchir. Fung. 3. 1886—BOUDIER, Bull. Soc. Myc. Fr. 18:264. 1902—ROLLAND, Atl. Champ. 15, pl. 6, f. 8. 1910 SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 52. 1915—GILBERT, Genre Amanita, 102. 1918—HEIM, Champ. Eur. 2:446, f. 298. 1957.

Agaricus excelsus FR. Syst. Myc. 1:17. 1821; Epicr. Myc. 8. 1938; Monogr. Hymen. Suec. 1:8.

1857; Hymen. Eur. 21. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:576—1844—BARLA, Champ. Nice, 13, pl. 7, f. 4—8. 1859—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:8. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 7(no. 7). 1883—WINTER, Pilze, 1:847. 1884.

Amanita spissa var. *ampla* VESELY, Ann Myc. 31:268. 1933.

Amplariella ampla GILBERT, Icot. Myc. 27, Suppl. 1:78. 1941.

子実体は孤生或は散生；傘は径 8—15 cm, 或はそれ以上に及び，僅か丸山形にて，のち扁平となり，更にやや圧低さる；表面は湿時粘性，淡褐灰色或は灰褐色，無毛，平滑，周辺線条なし，白色〜類白色の小形疣を散布す，疣は容易に剝脱す；肉は傘皮下類灰色，他は白色，老時赤変せず，味及臭弱し；褶は離生，白色，密，便腹状；茎は 8—12×2—3 cm, 或はそれ以上の長さとなり，白色或は淡色，同幅，基部やや肩ある球根状，或は殆ど膨大せず，鍔より下部に細鱗片あり，のち平滑となる，深く地中に埋まり，充塞，のち中空；鍔は上位，垂下，膜質，白色或は類灰色，平滑或はやや線条あり，縁に房毛を有す，永存性；壺は灰白色にて容易に消失し 1—2 の破片輪を残す；胞子は楕円形，平滑，無色，9—11×6—8 μ；胞子紋は白色。

所 在 及 産 地

林地—夏秋　　本州—欧·北米

和 名 キリンタケ（麒麟茸）〔安田〕

セイタカテングタケ（背高天狗茸）〔今井〕

Amanita spissa (FR.) QUÉL.

ヘ ビ キ ノ コ

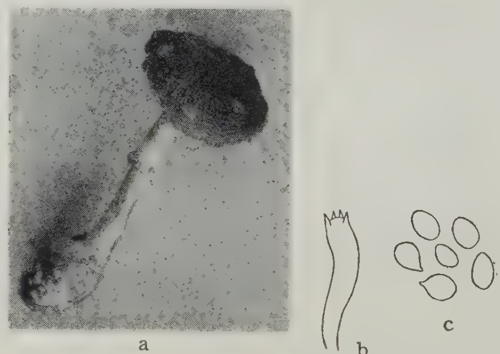
QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:69. 1872; Enchir. Fung. 4. 1886—GILLET, Champ. Fr. 47, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:5. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:17. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 47. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 17. pl. 5, f. 7—11. 1888—SCHROETER, Pilze Schles. 1:678. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:266, 1893; Brit. Fungi, 85. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:275. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 167. 1900—BOUDIER, Bull. Soc. Myc. Fr. 18:265. 1902—W. G. SMITH, Brit. Basid. 16. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 16, pl. 6, f. 9. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2 (2):720, pl. 137 c. 1912—RICKEN, Blätterp. 313, pl. 80, f. 2. 1915—LANGE, Agar. Denm. 2:10, pl. 2, f. 9. 1915; Fl. Agar. Dan. 1:15, pl. 5, f. c. 1935—COKER, Jour. Elisha Mitch. Sc. Soc. 33: 53, pl. 30—31. 1917—GILBERT, Genre Amanita, 108. 1918—KAUFFMAN, Agar. Mich. 620. pl. 124. 1918—REA, Brit. Basid. 103. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1:pl. 4. 1924; Agaricales, 1:65. 1948—VESELY, Ann. Myc. 31: 263, pl. 23. 1933. pr. p. — IMAI, Jour. Facul. Agr Hokkaido Imp. Uuiv. 43:22. 1938—SINGER, Agaricales, 388. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 46, pl. 3, f. 1. 1950—KUHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 433. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 28, B. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2:446, f. 297. 1957.

(P. HENNINGS, Hedwigia, 39, Beibl. 156. 1900—松村，植. 名鑑，1:131. 1904—白井，日. 菌. 目. 8. 1905; ed. 2. 43. 1917; ed. 3. 18, 1927—IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 47:427. 1933; 植. 動. 1:1619, f. 16. 1933—広江，応用菌蕈学，1205. 1941—原，日. 菌. 目. 15. 1954)

Agaricus spissus FR. Epicr. Myc. 9. 1838; Monogr. Hymen Suec. 1:12. 1857; Hymen. Eur. 23. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1: 575. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:10. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 69 (no. 11)1883; Handb. Austr. Fungi, 3. 1892—WINTER, Pilze, 1:845. 1884.

Venenarius spissus MURR. Mycologia, 5:81. 1913.

子実体は孤生或は群生；傘は径 4—10 cm, 或はそれ以上に及び，丸山形にて，のち殆ど扁平に開張す；表面は初め濃灰色，のち銹灰色或は灰黄褐色，



第 103 図　ヘビキノコ　Amanita spissa
a．子実体　×1/3　　b．担子柄
c．胞子　×550　　（大谷氏）

中央暗色，周辺淡色にて平坦，最後に漠然たる小線条を生ずることあるも本然的のものならず，粉状白色或は灰色にて乾時固くなる疣を被むる；肉は白色緊緻，湿潤，味温和，臭はなきか或はやや強き蕪菁臭あり；褶は離生，垂生線を有し，白色，密，広幅にて前方広し，稜は異質にて大なる球形或は洋梨形の細胞あり；茎は 7—15×0.7—1.6 cm, 上方に漸

細，基部根状，白色或は灰色，鍔より上部は粉状鱗片あり，鍔より下部は纖維状線条あり，緊緻，中実；鍔は上位，垂下，甚だ広く，膜質，白色或は灰色，上面に細線条あり，永存性；壺は灰色粉質の層となりて茎の基部膨大部上に存す；胞子は卵形或は短楕円形，平滑，無色，糊性，8—10×7—8μ；胞子紋は白色，可食。

所在及産地

林地—夏秋

北海道，本州—欧．北米．濠．亜(小亜)

和名 ヘビキノコ（蛇茸）〔白井〕

Amanita spissacea IMAI

ヘビキノコモドキ

IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 47:427. 1933; Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:23, pl. 1, f. 6. 1938.

（今井，植．動．1:1620, f. 17. 1933—原，日．菌．目．15. 1954—HONGO, Bull. Facul. Lib. Arts Educ. Shiga Univ. 3:48, f. 1. 1954）

Amplariella spissacea GILBERT, Icon. Myc. 27, Suppl. 1:78. 1941.

子実体は孤生；傘は径 6—10 cm, 丸山形，のち開張す；表面は菫灰色〜暗褐色，中央暗色，暗褐或は黒鼠色の多角或は角錐形の小なる粉状或は粉状綿絮様疣或は砕片が同心円状に配列す；肉は白色，寧ろ厚く，緻密，味及臭なし；褶は隔生，白色，やや密，中部便腹状にて両端に狭細；茎は 10—15×1—2 cm, 上方に漸細，基部倒卵球根状，鍔より上部は灰色にて綿絮状或は粉状の鱗片あり，鍔より下部は濃菫灰色粉状鱗片あるも球根上にては同色纖維状に見ゆ，中実；鍔は膜質，上位，上面帯白色にて有線，下面灰白色にて綿絮状，縁は濃菫灰色；壺は粉状，黒鼠色，茎の球根部上に 1—3 同心円的輪環を作る，早失性；胞子は楕円形，無色，有嘴，糊性，8—9.5×6.5—7.5μ, 或は 5.5—8×5.5—7.5μ；胞子紋は白色，食毒不詳。

所在及産地

林地—秋　　北海道，本州

和名 ヘビキノコモドキ（擬蛇茸）〔今井〕

Amanita solitaria (BULL. ex FR.) KARST.

マツカサモドキタケ

KARSTEN, Hattsv. 1:4. 1879—QUÉLET, Enchir. Fung. 3. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5:15. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 51. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 15, pl. 4, f. 5—8. 1888—SCHROETER, Pilze Schles. 1:679. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:265. 1893; Brit. Fungi, 87. 1911—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2, 72, f. 75—76. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 16. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 17, f. 12. 1910—RICKEN, Blätterp. 312. 1915—COKER, Jour. Elisha Mitch. Sci. Soc. 33:68, pl. 45—47. 1917—GILBERT, Gen. Amanita, 89. 1918—KAUFFMAN, Agar. Mich. 614. 1918—REA, Brit. Basid. 101. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 1:pl. 11. 1927—IMAI, Jour. Facul. Agric. Hokkaido Imp. Univ. 43:14. 1938—KUHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 430. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:448, f. 301. 1957.

（原，日．菌．目．15. 1954）

Agaricus solitarius BULL. Champ. Fr. 48. 1791—FRIES, Syst. Myc. 1:17. 1821; Epicr. Myc. 6. 1838; Hymen. Eur. 22. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:577. 1844—WINTER, Pilze, 1: 846. 1884.

Hypophyllum pellitum PAULET, Traite Champ. pl. 156, bis. 1793.

Agaricus nitidus FR. Obs. Myc. 1:4. 1815; Epicr. Myc. 8. 1838; Hymen. Eur. 24. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:576. 1844—WINTER, Pilze, 1:845. 1884.

Agaricus strobiliformis VITT. Fung. Mang. 59, pl. 9. 1835—FRIES, Epicr. Myc. 5. 1838; Hymen. Eur. 21. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:577. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 90, pl. 3, f. 2. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:9. 1871; Illus, Brit. Fungi, 1:pl. 8(no. 8). 1883; 8, Suppl. pl. 277(no. 9)1891—WINTER, Pilze, 1: 847. 1884.

Agaricus polypyramis BERK. et CURT. Ann. Mag. Nat. Hist. II, 12:417. 1853.

Agaricus monticulosus BERK. et CURT. l. c. 418. 1853.

Agaricus daucipes BERK. et. MONT. in MONT. Syll. Crypt. 96. 1856.

Agaricus Ravenelii BERK. et CURT. Ann. Nat. Hist. III, 4:1. 1859.

Amanita strobiliformis QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:68. 1872; Enchir. Fung. 3. 1886—GILLET, Champ. Fr. 43, c. ic. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:15. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 50. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 15, pl. 4 bis, f. 1—9. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:264. 1893; Brit. Fungi, 87, pl. 3, f. 1. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:275. 1900—BOUDIER, Bull. Soc. Myc. Fr. 18:268. 1902 W. G. SMITH, Brit. Basid. 16. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):722, pl. 134E. 1912—RICKEN, Blätterp. 311, pl. 81, f. 1. 1915—COKER, Jour. Elisha Mitch. Sc. Soc. 33:73, pl. 50—53.

1917—GILBERT, Genre Amanita, 93. 1918—REA, Brit. Basid. 101. 1922—VESELY, Ann. Myc. 31: 247, pl. 17—18. 1933—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1: 13. 1935—SINGER, Agaricales, 388. 1949.

(松村, 植. 名鑑, 1:131. 1904—白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 43. 1917; ed. 3. 18. 1927—今井, 植. 動. 1: 1613, f. 9. 1933—原, 日. 菌. 目. 15. 1954)

Amanita nitida QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:69. 1872—GILLET, Champ. Fr. 49, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:6. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:18. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 47. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 16, pl. 6, f. 1—3. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:266. 1893; Brit. Fungi, 87. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 17. 1908—COKER, Jour. Elisha Mitch. Sc. Soc. 33: 87, pl. 69. 1917—REA, Brit. Basid. 104. 1922.

(安田, 植. 雑. 38:122. 1924—白井, 日. 菌. 目. ed. 3, 18. 1927—今井, 植. 動. 1:1616, f. 11. 1933—広江, 応用菌蕈学, 1203. 1941—原, 日. 菌. 目. 15. 1954)

Amanita pellita GILL. Champ. Fr. 43, c. ic. 1874—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 6:35. 1926.

Agaricus onustus HOWE, Bull. Torr. Bot. Club, 5:42. 1874.

Amanita prairiicola PECK, Bull. Torr. Bot. Club, 24:138. 1897.

Amanita multisquamosa PECK, 53 Ann. Rep N. Y. St. Mus. 840. 1900.

Amanita radicata PECK, Bull. Torr. Bot. Club. 27:609. 1900.

Amanita cinereoconia ATKINS. Ann. Myc. 7: 366. 1909.

Venenarius solitarius MURR. Mycologia, 4: 240. 1912; N. Am. Fl. 10:76. 1914.

Amanita strobiliformis var. *nitida* GILB. Gen. Amanita, 95. 1918.

Amanita pellita var. *strobiliformis* KONR. et. MAUBL. Icon. Sel. Fung. 6:35. 1926.

子実体は孤生; 傘は径 6—16 cm, 球形, 丸山形となり, のち開張し, 中央圧低さる; 表面は乾燥, 白色～灰色, 中央灰色, 厚き大なる剝げ易き角形～角錐状灰色疣瘤の壺の残片を存す, 周辺に線条なし, 縁に粉綿質の著しき膜片を存す; 肉は白色, 軟く, 無臭, 味よし; 褶は離生或は狭生, 白色或はクリーム色を帯び, 密, 稜に房毛あり; 茎は 7—15×1—3 cm, 殆ど同幅或は上方に僅か漸細, 基部球根状にて球形或は偽根あり, 白色或は帯白色, 初め厚き綿絮状或は粉状の鱗片に被われ, のち消失し細鱗片を残す, 中実; 鍔は上位, 垂下, 類膜質, 白色, のち汚黄色, 上面有線, 下面綿絮状, 屢々裂け, 消失性; 壺は白色或は灰色, 初め茎膨大部上に剝げ易き粉状



第 104 図 マツカサモドキタケ
Amanita solitaria
×1/3 (大谷氏)

鱗片の同心環となるも, のち消失す; 胞子は楕円形, 平滑, 無色, 糊性, 9—13×7—9μ; 胞子紋は白色; 可食。

所在及産地

林地—夏秋 北海道, 本州—欧. 北米. 濠. 亜(支)

和名 マツカサモドキタケ (擬松果茸) 〔安田〕
ウロコテングタケ (鱗天狗茸) 〔今井〕

〔因記〕 本菌の分類については著書により異なるにより暫く前記の如く整理せり。

Amanita vittadinii (MORET.) VITT.
シロオニタケ

VITTADINI, Tent. Myc. 31, pl. 1, 1826—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 5:317. 1877—REA, Brit. Basid. 102. 1922—VESELY, Ann. Myc. 31: 280. 1933—SINGER, Agaricales, 388. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 430, f. 603, 1953—HONGO, Jour. Jap. Bot. 29:88, f. 1(3). 1954—HEIM, Champ. Eur. 2:448, f. 299. 1957.

Agaricus Vittadinii MORETTI, Bot. Ital. 4, pl. 1. 1826—FRIES, Epicr. Myc. 16. 1838; Hymen. Eur. 33. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:572. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 94. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:16. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1: pl. 36(no. 33). 1883—WINTER, Pilze, 1:838. 1884.

Lepiota Vittadinii KROMBH. Abbild. 4:17, pl. 27. 1836—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 2:338. 1873—SACCARDO, Syll. Fung. 5:41. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 78. 1915—GILLET, Champ. Fr. 70. 1874—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:244. 1893

—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 272. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 23. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2 (2): 707. 1912—RICKEN, Blätterp. 321. 1915.

（安田, 植. 雑. 35: 67. 1921—白井, 日. 菌. 目. ed. 3. 186. 1927—松浦, 茸類辞典, 90, f. 103. 1933; 応用菌蕈学, 1025, f. 819. 1941—小林, 日. 隠. 植. 図. 563, pl. 272, f. 1—2. 1939—今関及土岐, 林. 試. 研. 報. 67: 45. 1954—原, 日. 菌. 目. 179. 1954）

Amanita umbella QUÉL. Enchir. Fung. 4. 1886; Fl. Myc. 307. 1888—BATAILLE, Bull. Soc. Myc. Fr. 26: 138. 1910—GILBERT, Genre Amanita, 98. 1918.

Lepidella Vittadinii GILBERT, Bull. Soc. Myc. Fr. 41: 304, pl. 7. 1925.

（本郷, 滋賀大. 研究論集, 1: 93. 1952）

Aspidella Vittadinii GILBERT, Icon. Myc. 27, Suppl. 1: 79. 1941—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1: 69. 1948.

子実体は孤生；傘は 6—12 cm，更にそれ以上(20 cm) に及び，初め球形，のち半球状鐘形～丸山形，やがて中高の扁平，稀に周辺反転す；表面は乾燥，白色或は暗褐色，同色の直立する厚き大なる多角或はピラミッド形鱗片の壺の残片を密布す，剝離し易し，周辺に線条なく，縁に屢々膜片を存す；肉は白色，柔軟，味温和，臭よきも乾時寧ろ強くして不快；



第 105 図　シロオニタケ
Amanita vittadinii
×1/2　　(大谷氏)

褶は離生，幾分クリーム色となり，密，便腹状，厚く，稜は殆ど平坦；茎は長さ 15—22×2—2.5 cm，同幅，基部球根状，綿架状鱗片を被むり，白色；鍔は上位，垂下，膜質，上面平坦，白色，下面鱗片状疣あり，消失性；壺は茎膨大部上に白色或は灰色の疣よりなる数個の同心環となる；胞子は広楕円～類球形，平滑，無色，糊性，8—11×6.5—7.5 μ；胞子紋は帯緑色；有毒と称せらる。

所在及産地

林地一夏秋　　本州，九州一欧

和名　シロオニタケ（白鬼茸）〔安田〕

Amanita agglutinata (BERK. et CURT.) SING.

フクロツルタケ

SINGER, Agaricales, 387. 1949.

（今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 45, f. 102, pl. 18, f. 102. 1957）

Agaricus agglutinatus BERK. et CURT. in HOOKER, Jour. Bot. 1: 97. 1849.

Agaricus volvatus PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 24: 59. 1872.

Agaricus soleatus HOWE, Bull. Torr. Bot. Club, 5: 42. 1874.

Amanitopsis agglutinata SACC. Syll. Fung. 5: 1887—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 273. 1900—COKER, Jour. Elisha Mitch. Sc. Soc. 23: 11, pl. 6. 1917—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 29. 1938.

（今関, 菌類の研究, 1(2): 40, f. 1. 1935; 原色きのこ, pl. 4(右). 1942; 及土岐, 林. 試. 研. 報. 67: 35. 1954—本郷, 植. 分. 地. 14: 72, f. 1(1). 1951—原, 日. 菌. 目. 16. 1954）

Amanitopsis volvata SACC. Syll. Fung. 5: 23. 1887—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.—fam. 1, 1**273. 1900—KAUFFMAN, Agar. Mich. 622. 1918.

Pseudofarinaceus agglutinatus O. KUNTZE, Rev. Gen. 2: 863. 1891.

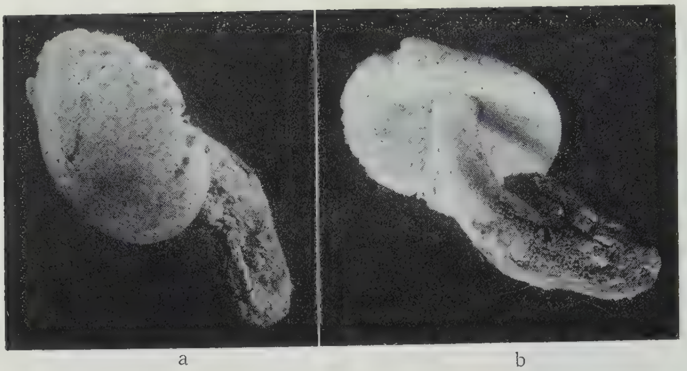
Pseudofarinaceus volvatus O. KUNTZE, Rev. Gen. pl. 2: 863. 1891.

Vaginata agglutinata O. KUNTZE, Rev. Gen. pl. 3(2): 539. 1898—MURRILL, Mycologia, 5: 83, pl. 86; 94, pl. 87, f. 2. 1913; N. Am. Fl. 10: 66. 1914.

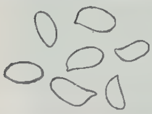
Vaginata volvata O. KUNTZE, Rev. Gen. pl. 3 (2): 539. 1898.

Amanita baccata BRES. Icon. Myc. 1: pl. 19. 1927.

子実体は孤生或は散生；傘は径 2—8 cm，半球形，のち扁平となり，往々僅か圧低さる；表面は乾燥，純白色或は帯黄色，稀に中央或は全部赤褐色となり，周辺は平坦或は僅か線条あり，白色或は褐赤色の粉



a b



c

第 106 図　フクロツルタケ
Amanita agglutinata
a, b．子実体　×1/2　　c．胞子　×550
（大谷氏）

末或は綿架状鱗片を有し，時に大形の壺の残片を附す；肉は軟く，白色或は淡クリーム色，傷時淡紅色となる，味及臭なし；褶は離生，白色，傷時淡紅色となる，密，広幅；茎は 6—14×0.5—1 cm，同幅或は上方に漸細，基部膨大，白色，微細なる白色，褐色或は帯紅色の綿架状鱗片或は破片を存す，充塞或は中実；鍔なく，壺は通常大形，嚢状，緊緻，膜質，白色或は淡褐色，上端多少裂片となる，永存性；胞子は長楕円形，平滑，無色，糊性，8—12×5—8 μ；胞子紋は白色；有毒と称せらる。

所 在 及 産 地

林地—夏秋

北海道，本州，九州—

欧．北米．亜(支)

和 名　フクロツルタケ（袋鶴茸）〔今関〕

Amanita clarisquamosa (IMAI) IMAI

シロウロコツルタケ

Amanitopsis clarisquamosa IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 47:430. 1933; Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:29, pl. 1, f. 8. 1938.

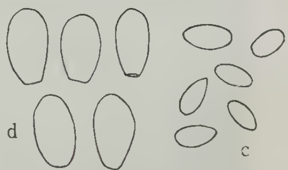
（広江，応用菌蕈学，1208．1941—原，日．菌．目．16．1954）

Amidella clarisquamosa GILBERT, Icon. Myc. 27, Suppl. 1:77. 1941.

子実体は孤生或は散生；傘は径 4—6 cm，半球形〜丸山形，表面は乾燥，純白色，帯黄色，淡肉桂色或は汚濃桃色，絹糸状繊維ありて中央平坦，周辺白色にて僅に細線条あり，桃色或は赤褐色の繊維鱗片を被むる；肉は帯白或は帯桃色，肉質，味及臭なし；褶は離生，白色，密，広幅，後方円く前方広し，茎は 6—10×0.8—1.2 cm，上方に僅か漸細，帯白或は帯褐色，壺より上部は粉末綿架状鱗片或は尨毛に被われ，鱗片は淡紅色或は赤桃色，充塞或は中実；壺は膜質，大形，4.5×2.5 cm に及ぶ，緊緻或は柔軟，茎の基部を包み，約 3/4 は茎より遊離し，先端は裂片となる，帯褐色或は帯白色，永存性；胞子は楕円状



a b



d c

第 107 図　シロウロコツルタケ
Amanita clarisquamosa
a．b．子実体　×2/3
c．胞子　×500
d．同拡大　×1000（大谷氏）

円壔形或は類円筒形，平滑，無色，糊性，10—15×5—6 μ；胞子紋は白色，食毒不詳。

所 在 及 産 地

林地—秋　　北海道，本州，九州

和 名　シロウロコツルタケ（白鱗鶴茸）〔今井〕

Amanita avellaneosquamosa (IMAI) IMAI

アクイロウロコツルタケ

Amanitopsis avellaneosquamosa IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 47:430. 1933; Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:30. 1938.

（広江，応用菌蕈学，1208．1941—原，日．菌．目 16．1954）

Amanita volvata PECK f. *avellaneosqamosa* GILBERT, Icon. Myc. 27, Suppl. 1:304. 1941.

子実体は孤生或は散生；傘は径 5—10 cm，丸山形～扁平，遂に中央窪む；表面は乾燥，淡汚桃色～菫灰色にて容易に剝離する鱗片に被わる，鱗片は中央に於て密に癒合す，縁辺に線条あり；肉は白色，厚く，肉質，味及臭なし；褶は離生或は隔生，白色，のち黄色を帯び，中位に密，前方広幅にてやや便腹状，稜は少しく波状；茎は 9—11×0.6—2 cm，同幅或は上方に漸細し，鱗片を有し，傘色と殆ど同色或は淡色，幾分粉末綿絮状，充塞或は中空；壺は膜質，大形，茎の基部を包み，上方約 2/3 は茎より遊離し，5×4 cm に及ぶ，帯白色或は鈍桃色，永存性；胞子は楕円形，平滑，無色，糊性，9—10.5×5—6 μ；胞子紋は白色；食毒不詳。

所在及産地

林地—夏秋　　北海道

和名　アクイロウロコツルタケ（灰色鱗鶴茸）

〔今井〕

Limacella EARLE

ヌメリカラカサタケ属

EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5:447. 1909—SINGER, Agaricales, 393. 1949.

Amanitella R. MAIRE, Ann. Mycol. 11:357. 1913.

Amanita subgen. *Lepiotopsis* LANGE, Dansk Bot. Ark. 2:6. 1915.

Amanita subgen. *Limacella* GILBERT, Genre Amanita, 174. 1918.

傘は多少粘性，壺の残片なし；上表皮層は種々に変形し或は変化せざる菌糸の先端部より成る，この菌糸は膠質塊内に匍匐し或は上昇又は直立す；褶は全く或は殆ど離生；小褶は截頭ならず，胞子紋は白色；胞子は小形，稀に中形，平滑或は甚だ微細に粗面～やや有点，有色，一様の膜を有し，卵形或は短楕円形，然らざれば楕円形～類球形或は球形，非糊性；担子柄は正常形；嚢状体なし；擬糸状体は屢々稜に存在す；子実下層は細胞状；托実質は幼時，明かに両側型，後に多少不整型となる；茎は乾燥或は粘性，膠質の帯を有するか或は蜘網状，肉質或は膜質の鍔を有するも膜状肉質或は粉状の壺なし，常に中心生，肉は肉質；組織は非糊性；菌絆なし；地上稀に腐木上に生ず；多分全種半被実；汎布，約 12 種を知らる，或種は食用とさる。

（本属名は limax，limacis〔羅〕（なめくじ）より出づ）

基準種 *L. delicata* (FR.) EARLE ex H. V. SMITH

本邦既知種検索表

A．傘は甚だ粘性；茎は鍔下黄色の粘皮を被むる；傘は帯黄色～淡橙色。

ヌメリカラカサタケ　***L. subglischra***　(251)

B．傘は粘性，栗褐色；茎は乾燥にて纎維状綿絮あり；強き穀粉臭あり。

チャヌメリカラカサタケ

L. glioderma　(251)

Limacella subglischra (IMAI)

ヌメリカラカサタケ

Lepiota subglischra IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:45. 1938.

（原，日．菌．目．179．1954）

子実体は孤生；傘は径 2.5—3.5 cm，丸山形にてやや中丘を有し，のち開張し中丘を存す；表面は甚だ粘性，帯黄色或は淡橙色，周辺淡色，平滑，無毛，皮は剝げ易し；ベールは粘質，同色；肉は灰色，肉質，味及臭なし；褶は離生，帯黄色，密，幅 3 mm 内外；茎は 3.5—5.5×0.3—0.5 cm，殆ど同幅或は上方に僅か漸細．鍔より上部は乾燥，白色，下部は帯黄色の粘皮に包まる，中実或は充塞；胞子は球形或は類球形，径 3—4.5 μ；胞子紋は白色。

所在及産地

林地—夏　　北海道

和名　ヌメリカラカサタケ（粘傘茸）〔今井〕

Limacella glioderma (FR.) EARLE

チャヌメリカラカサタケ

EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5:447. 1909—KÜHNER, Bull. Soc. Myc. Fr. 52:200, f. 2(2), 4(3), 8(4). 1936—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:71. 1948—SINGER, Agaricales, 395. 1949—HONGO, Jour. Jap. Bot. 32:210. 1957—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 435, f. 617. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:152. 1957.

Agaricus gliodermus FR. Monogr. Hymen. Suec. 1:15. 1857; Hymen. Eur. 39. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:18. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 118 a(no. 45). 1883.

Lepiota glioderma GILL. Champ. Fr. 73. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:16. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:70. 1888; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 68. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:255. 1893; Brit. Fungi, 95, pl. 1, f. 6. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 26. 1908—RICKEN, Blätterp. 316.

1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 629. 1918—REA, Brit. Basid. 81. 1922.

Armillaria glioderma QUÉL. Champ. Jura Vosg. 3:541. 1875; Enchir. Fung. 9. 1886—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:41. 1935.

Trichoderma subpessundata MURR. Mycologia, 5:223. 1913.

Tricholoma subvelatum MURR. l. c. 223. 1913.

Melanoleuca subpessundata MURR. l. c. 222. 1913; N. Am. Fl. 10:30. 1914.

Melanoleuca subvelata Murr. l. c. 222. 1913; l. c. 27. 1914.

子実体は孤生或は小群をなす；傘は径 2—5 cm, 鈍丸山形, 粘性, 栗褐色にて鈍銹色に褪色す, 無毛, 平坦, 皮は剝げ易し；肉は薄く, 白色にて赤色を帯ぶ, 褶は密, 広幅, やや便腹状, 白色, 離生にて茎の先端に達す, 稜は平坦；茎は 5—7×0.4—0.6 cm, 乾燥, 蜘網状被膜ありて僅か鍔帯あり, 之れより以下は繊維状綿絮を有す, 同幅或は下方に狭細, 中実, 繊維質, 味及臭は穀粉状；担子柄は 4 胞子, 嚢状体なし；胞子は球形, 平滑, 径 3.5—4.5μ; 非糊性。

所在及産地

林内腐蝕地上—夏　　本州—欧. 北米

和名 チャヌメリカラカサタケ（茶粘傘茸)〔本郷〕

Rhodotus R. MAIRE
ホシアンズタケ属

R. MAIRE, Bull. Soc. Myc. Fr. 40:308. 1928—SINGER, Agaricales, 398. 1949.

子実体はシカタケ-ヒラタケ（*Pluteus-Pleurotus*）型；傘は直立せる嚢状或は細頸壜形の厚膜なる細胞より成る上表皮層を有す, この細胞には柄を有し, その柄は下方膠質層に達す；褶は離生或は類離生；胞子紋はクリーム色を帯ひたるピンク色；胞子は薬色, 類球形, 微細の有刺粗面, 中位の薄膜を有す；非糊性, 一様の膜を有す；担子柄は正常型；嚢状体は通常欠如, 稜にも存在せず；托実質は幼時明かに両側型, 後に幾分不明瞭となる；茎は殆ど中心生～偏心生；ベール及び擬根なし；肉は吸水性にて屢々水潤状なるも傘の表皮下層の直近に於ては主に膠質なり, 組織は非糊性；すべての菌糸に菌絆あり, 枯広葉樹材上生, 濠洲以外各地産, 約 1 種を知らる, 経済的関係なし。

（本属名は rhodon〔希〕(ばら), ous, otos〔希〕(耳) より出づ)

基準種 *R. palmatus* (BULL. ex FR.) R. MAIRE.

本邦既知種

ホシアンズタケ　***R. palmatus*** (252)

Rhodotus palmatus (BULL. ex FR.) R. MAIRE
ホシアンズタケ

R. MAIRE, Bull. Soc. Myc. Fr. 40:308. 1924—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4: pl. 303, f. 2. 1937; Agaricales, 1:415. 1945—SINGER, Agaricales, 399. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 169, f. 233. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:233, 309. 1957.

Agaricus palmatus BULL. Champ. Fr. pl. 216, 1784—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, 1:pl. 62. 1797—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 474. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:186. 1821; Epicr. Myc. 209. 1836; Monogr. Hymen. Suec. 1:398. 1857; Hymen. Eur. 275. 1874—BERKELEY, Engl. Fl. 5(2):73. 1836—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:517. 1844.

Agaricus subpalmatus FR. Epicr. Myc. 131. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:240. 1857; Hymen. Eur. 168. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 135. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:46. 1871; Illus. Brit. Fungi, 2:pl. 255 (no. 273). 1883—WINTER, Pilze, 1:738. 1884.

Pleurotus subpalmatus GILL. Champ. Fr. 343. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:343. 1887—MASSEE Brit. Fung. Fl. 2:367. 1893; Brit. Fungi, 205. 1911—LLOYD, Myc. Writ. 1:51, f. 23—24. 1901—W. G. SMITH, Brit. Basid. 91. 1908—RICKEN, Blätterp. 449. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 662. 1918.

Crepidotus palmatus GILL. Champ. Fr. 558. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:876. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 753. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1: 117. 1893; Brit. Fungi, 315. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 167. 1908—RICKEN, Blätterp. 230. 1912.

Clitocybe subpalmatus KARST. Hattsv. 1:85. 1879.

Gymnopilus palmatus KARST. Hattsv. 1:401. 1879.

Pleurotus palmatus QUÉL. Enchir. Fung. 147. 1886—REA, Brit. Basid. 443. 1922—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 100, pl. 31, f. 3. 1950.

Gyrophila palmata QUÉL. Fl. Myc. 273. 1888.

Derminus palmatus P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl-fam. 1, 1**:241. 1900.

Rhodotus subpalmatus IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:237, pl. 4, f. 6. 1938. (原, 日. 菌. 目. 317. 1954)

子実体は叢生, 群生稀に孤生；傘は径 1—6 cm, 或はそれ以上に及び, 丸山形, のち開張扁平となる, 幼時ピンクのち橙肉色或は乾杏色, 僅か粉状,

のち無毛，皮は厚くして膠質，剝げ易し，平滑或は網目状皺縮あり，縁は初め内屈，薄く，多くは畦状皺あり；肉は白色，のち淡鮭肉色，厚く，緊緻，膠状肉質，吸水性，臭よく，味は苦辛；褶は彎生～離生，時にカラー状に結合す，傘面と同色或は淡色，やや密，広幅，往々結脈あり，弾性，稜は異質にて稜嚢体は紡錘形，無色，45—60×6—8μ；茎は 3.5—10×0.5—1cm，多少偏心性，着生物より屈曲斜上す，繊維状肉質，殆ど同幅，帯白色，のち赭肉色，傘面より淡色，粉状，のち無毛となり，繊維状線を有す，中実或は一部中空；胞子は球形，有嘴，有刺，帯黄色，6—7×5.5—6.5μ；胞子紋は帯クリームピンク色；厚膜胞子は傘及褶中に生じ，楕円状卵形，屢々側辺圧低，平滑，12—15×8—10μ；可食。

所在及産地

腐木，殊にニレの切株及落枝上一夏秋

北海道一欧．北米

和名 ホシアンズタケ（乾杏茸）〔今井〕

（Ⅱ） Pluteeae FAYOD シカタケ族

FAYOD, Ann. Sci. Nat. Bot. VII, 9:363. 1889 (ut *Pluteidés*)—R. MAIRE, Publ. Junta Ciènc. Nat. Barcelona, 1933:89. 1933 (ut *Pluteae*)—SINGER, Agaricales, 399. 1949.

Agaricaceae subfam. *Volvarioideae* IMAI, Jour. Fac. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:159. 1938.

托実質は逆型；胞子紋はピンク色；SINGER 氏 (1949) は 3 属を収む，本邦 2 属を座す；前記検索表参照 (224)

Volvariella SPEG.
フクロタケ属

SPEGAZZINI, Anal, Mus. Buenos Aires 6:118. 1899—SINGER, Agaricales, 400. 1949.

Volvarius ROUSSEL, Fl. Calvados, ed. 2. 59. 1806.

Agaricus trib. *Volvaria* FRIES, Syst. Mycol. 1:277. 1821.

Volvaria QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:114. 1872.

Pseudofarinaceus BATTARRA, in EARLE, Bull. N. Y. Bót. Gard. 5:449. 1909. (non O. KUNTZE, 1891)

Volvariopsis MURRILL, Mycologia, 3:280. 1911.

子実体はシカタケ (*Pluteus*) 型；色素は存在或は欠如；褶は離生；実質は逆型；胞子紋は汚ピンク色～帯褐ピンク色；胞子は平滑，非糊性，藁色，中位の厚膜を有す；担子柄は正常形；嚢状体は屢々存在，茎は中心生，常に基部に明かなる壺を有す，林内外地上，材上，植物残屍上，腐蕈上等に生ず；半被実汎布，約 13 種を知らる，食用菌。

（本属名は *Volvaria*（属名），即ち Volva〔羅〕(包皮，子宮，菌壺)，ella（縮小詞）より出づ）

基準種 *V. argentina* SPEG.

本邦既知種検索表

A．傘面乾燥。

a．傘は大形，白色にて白色～帯褐色の絹糸状繊維を被むる；樹幹上生。

キヌオオフクロタケ ***V. bombycina*** (253)

b．傘は中～大形，圧着せる黒褐色繊維を密布す。

α. 傘は径 5—10cm；壺は白色～銹色；地上生。

フクロタケ ***V. volvacea*** (254)

β. 傘は径 7—20cm；壺は初め白色，のち黒褐色；腐熟稲藁上。

クロフクロタケ var. ***nigricans*** (255)

B．傘面多少粘性。

a．傘は中～大形；地上生。

α. 傘は白色にて中央灰色～焦茶色，無毛，周辺平坦。

シロフクロタケ ***V. speciosa*** (255)

β. 傘は灰色にて圧着せる暗褐色繊維線に被わる，周辺短線条あり。

オオフクロタケ var. ***gloiocephala*** (256)

b．傘は小～中形，淡オリーブ褐色，絹糸様綿毛を被むる；腐木上生。

ムニンヒメフクロタケ

V. microspira (256)

Volvariella bombycina (SCHAEFF. ex FR.) SING.
キヌオオフクロタケ

SINGER, Agaricales, 401. 1949—HONGO, Bull. Facul. Lib. Arts Educ. Shiga, Univ. 3:48, f. 1, C-E. 1954.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，46, f. 108, pl. 19, f. 108. 1957）

Agaricus bombycinus SCHAEFF. Fung. Bavar. 4:Ind. 42, pl. 98. 1774—FRIES, Syst. Myc. 1:277.

1821; Epicr. Myc. 138. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:259. 1857; Hymen. Eur, 182. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:512. 1844—BARLA, Champ. Nice, 50, pl. 25, f. 1—5. 1859—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 139, pl. 7, f. 1. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:84. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3: pl. 293 (no. 293). 1886; Handb. Austr. Fungi, 37. 1892—WINTER, Pilze. 1:730 1884.

Agaricus incarnatus BATSCH, Elench. Fung. 51. 1873.

Amanita incarnata PERS. Syn. Meth. Fung. 248. 1801.

Volvaria bombycina QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:114. 1872; Enchir. Fung. 54. 1886—GILLET, Champ. Fr. 387, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:250. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:656. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 518. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1:621. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:292. 1893; Brit. Fungi, 226. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 259. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 165. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 140, f. 137. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 98. 1908—RICKEN, Blätterp. 275. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 527, pl. 100. 1918—REA, Brit. Basid. 94. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 128, pl. 62, f. 1. 1927—LANGE, Agar. Denm. 7:4. 1928; Fl. Agar. Dan. 2:78, pl. 68, f. E. 1936—BRESADOLA, Icon. Myc. 11: pl. 526. 1929—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 154, pl. 3, f. 8. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:92. 1948—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 426, f. 18. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:454, f. 81(1), pl. 46, f. 2. 1957.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 47:431. 1933—S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:45. 1940—今関, 原色きのこ, pl. 5(右). 1942—原, 日. 菌目. 393. 1954—川村, 日. 菌. 図鑑, 5:598, f. 564. 1954)

Volvariopsis bombycina MURR. Mycologia, 3: 281. 1911; N. Am. Fl. 10:143. 1917.

Volvaria bombycina var. *maxima* PILÁT, Bull. Soc. Myc. Fr. 48:293, pl. 30—31. 1932.

子実体は孤生；傘は径 5—20 cm，或はそれ以上に及び，初め球形，のち鐘形～丸山形，鈍き中丘を有す；表面は乾燥，白色にて白色～帯褐色の絹糸状繊維を密布し，中央部稀に平滑にて暗色を呈し，周辺幾分細鱗片状絨毛となる，縁は平坦，多少綿絮を有す；肉は中盤部厚く，縁に向つて急に薄く，白色～帯黄色，柔軟，臭弱く，味温和；褶は離生～隔生，初め白色，のち肉色，密，広幅，便腹状，稜は腐蝕し幾分粉状，屢々透明液を出す；茎は 10—20×0.8—2 cm，上方僅か漸細，下端球根状，通常屈曲，白色，無毛或は多少絹糸状，中実；壺は大形，広き嚢状或はコップ状鞘として永存し，厚き膜質，高さ約 5—8 cm，或はそれ以上に及び，基部約 1/4 癒着し，上部遊離し，上端通常 3—5 裂す，表面汚白色～帯褐色にて往々亀裂す；胞子は卵形～広楕円形，平滑，6—8×5.5—6.5 μ；胞子紋は肉色；稜嚢体は密集，紡錘便腹形～棍棒形，先端に毛状或は乳頭状突起を有し或は鈍頭，薄膜，42—110×17—37 μ，褶側嚢体は同形，30—92×7.5—30 μ；可食。



第 108 図　キヌオオフクロタケ
Volvariella bombycina
a．子実体　×1/5　　b．担子柄
c．胞子　×700　　（大谷氏）

所在及産地

主に広葉樹生枯幹上—夏秋

北海道, 本州. 小笠原島—欧. 北南米. 阿. 濠. 亜(小亜. 西比)

和名　キヌオオフクロタケ（絹大袋茸）〔今井〕
オオフクロタケ（大袋茸）〔川村〕

Volvariella volvacea (BULL. ex FR.) SING.

フクロタケ

SINGER, Agaricales, 401. 1949.

Agaricus volvaceus BULL. Herb. Fr. pl. 262. 1785—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, 1: pl. 1. 1797—FRIES, Syst. Myc. 1:278. 1821; Enchir. Myc. 138. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:260. 1857; Hymen. Eur. 182. 1874—RABENHORST. Deut. Krypt. Fl. 1:512. 1844—BARLA, Champ. Nice, 51, pl. 25, f. 6—13. 1859—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 140. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2: 161. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:84. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3: pl. 294 (no. 294). 1886—

WINTER, Pilze, 1:730. 1884.

Amanita virgata PERS. Syn. Meth. Fung. 249. 1801.

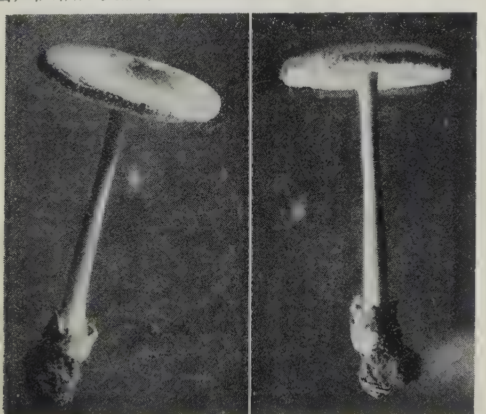
Volvaria volvacea QUÉL. Enchir. Fung. 54. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5:657. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 517. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1:621. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:293. 1893; Brit. Fungi, 227, pl. 15, f. 2. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:259, f. 121, c. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 165. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 98. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 56, f. 122. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):585. 1912—RICKEN, Blätterp. 273. 1915—REA, Brit. Basid. 94. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1:pl. 18, f. 2. 1927; Agaricales, 1: 92. 1948—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:155. 1938—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 426. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:454, f. 304, B. 1957.

(川村, 食用菌及有毒菌, f. 45(p. 38). 1931; 日. 菌. 図鑑, 5:594, f. 562, 1954—IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 47:431. 1933—広江, 応用菌蕈学, 1180. 1941—今関, 原色きのこ, pl. 5(左). 1942—原, 日. 菌. 目. 393. 1954)

Volvaria virgata QUÉL. Champ. Jura Vosg. 2: 344. 1873—GILLET, Champ. Fr. 387. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:250. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 142. 1889.

Volvariopsis volvacea MURR. N. Am. Fl. 10: 144. 1917.

子実体は孤生或は散生；傘は径 5—10 cm, 鐘形～丸山形, のち開張し, 鈍丘を存す；表面は乾燥, 煤色, 中央暗色, 圧着せる黒色或は黒褐色の纖維を以て密に被われ, 乾時黒色となる；肉は綿架質にて白色, 無臭；褶は甚だ離生, 初め白色, のち肉色, 密, 広幅, 便腹状, 稜は異質；茎は 5—12×0.5—1 cm, 殆ど同幅, 基端僅か肥大, 白色或は帯黄色, 平滑, 無毛或は白絨毛あり, 中実；壺は大形, 膜質, 厚く, 上端不規則に裂け, 白色～銹色, 永存性；胞子は楕円形, 平滑, 5—8×3—5 μ; 胞子紋は桃色；稜嚢体は棍棒形, 先端に細き突起あり, 薄膜, 無色, 75—100×16—35 μ。



第 109 図　フクロタケ
Volvariella volvacea ×1/3　(大谷氏)

所在及産地

地上—秋

北海道, 本州—欧. 北米. 亜(支. 鮮. 台)

和名　フクロタケ (袋茸) 〔川村〕

var. **nigricans** KAWAM.

クロフクロタケ

KAWAMURA, Icon. Jap. Fungi, 5:596, f. 563. 1954.

子実体は群生；菌蕾は大さ形ともに雞卵に似, 裂開して菌体を出す, 傘は径 7—20 cm, 初め円錐形, のち扁平となり中央山形中丘あり；表面は放射状黒褐色絹糸状被覆を有して黒褐色を呈し, 中央部濃色裂目には白肉を現わす；肉は純白色にて, 中部厚く, 周辺は極めて薄し, 褶は著しく隔生, 初め白色, のち鮭肉色, 密, 幅約 15 mm に及び, 前方広し；茎は 10—20×1—2 cm, 上方に狭細, 基端球状, 白色, 平滑, 真直或は弓状に屈曲, 中実；壺は甚だ顕著, 厚膜質, 初め白色, のち黒褐色を帯び, 内面白色, 遊離す, 高さ 5—9 cm; 胞子は広楕円形, 平滑, ピンク色, 1～3 油球を包む。

所在及産地

広熟稲藁上—夏　本州

和名　クロフクロタケ (黒袋茸) 〔川村〕

Volvariella speciosa (FR.) SING.

シロフクロタケ

SINGER, Agaricales, 401. 1949.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 47. 1957)

Agaricus speciosus FR. Syst, Myc, 1:278. 1821; Epicr. Myc. 139. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:260. 1857; Hymen. Eur. 183. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:512. 1844—COOKE, Handb, Brit. Fungi, 1:85. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3:pl. 297(no. 297). 1886; Handb. Austr. Fungi, 38. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn, 3:99. 1876—WINTER, Pilze, 1:729. 1884.

Volvaria speciosa GILL. Champ. Fr. 388. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:251. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 143. 1889—QUÉLET, Enchir. Fung. 54. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5:661. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 515. 1915—SCHROETER,

Pilze Schles. 1:621. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:295. 1893; Brit. Fungi, 227, 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 165. 1900—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 259. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 98. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 56, pl. 55, f. 123. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):584, pl. 116. 1912—RICKEN, Blätterp. 274, pl. 70, f. 1. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 528. 1918—REA, Brit. Basid. 95. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 128, pl. 62, f. 2. 1927—LANGE, Agar. Denm. 7:3. 1928; Fl. Agar. Dan. 2:77, pl. 69, f. D. 1936—BRESADOLA, Icon. Myc. 11:pl. 528. 1929—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:156, pl. 3, f. 9. 1938—KONRAD & MAUBLANC Agaricales, 1:91. 1948—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 133, pl. 50, f. 3. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 426. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2: 453. 1957.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 47:431. 1933—広江. 応用菌蕈学, 1180. 1941—原, 日. 菌. 目. 393. 1954)

Volvariopsis speciosa MURR. N. Am. Fl. 10: 143. 1917.

子実体は孤生或は群生; 傘は径 7—10 cm, 或はそれ以上に及び, 初め球形～卵形, のち鐘形, 最後に扁平となる, 鈍頭或は鈍中丘を有す; 表面は粘性, 無毛, 白色にて中央灰色～焦茶色, 周辺平坦; 肉は白色, 薄く, 柔軟, 臭強く, 時に不快, 味なし; 褶は離生, 白色, のち濃肉色～桃色, 密, 寧ろ広幅, 便腹状; 茎は 10—20×1—2 cm, 同幅或は上方僅か漸細, 基端球根状, 白色, 初め絨状, のち無毛, 基部軟毛あり, 中実; 壺は大形, 膜質, 白色, 茎に密接するも遊離し, 上端不規則に裂く; 胞子は広楕円形, 平滑, 12—18×8—10 μ, 大さ変化す; 胞子紋は桃色; 嚢状体は棍棒形, 便腹状, 鈍頭或は短毛状突起あり, 55—85×20—25 μ。

所在及産地

林地及圃場地上—夏秋

北海道—欧. 北米. 濠

和名 シロフクロタケ (白袋茸) 〔今井〕

var. **gloiocephala** (D. C. ex FR.) SING.

オオフクロタケ

SINGER, Agaricales, 401. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 426. 1953.

(HONGO, Jour. Jap. Bot. 29:83. 1954—今関及本郷, 原色. 日. 菌. 図鑑, 47, f. 109, pl. 20, f. 109. 1957)

Agaricus gloiocephalus D. C. Fl. Fr. 6:52. 1815—FRIES, Syst. Myc. 1:278. 1821; Epicr. Myc. 140. 1838; Hymen. Eur. 183. 1874—BARLA, Champ. Nice, 52, pl. 26, f. 1—8. 1859—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:86. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:86. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3:pl. 298 (no. 298). 1886—WINTER, Pilze, 1:729. 1884.

Volvaria gloiocephala GILL. Champ. Fr. 387. 1874—QUÉLET, Enchir. Fung. 54. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5:662. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 514. 1915—KARSTEN, Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 143. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:295. 1893; Brit. Fungi, 227. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:259. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 165. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 98. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 57, pl. 56, f. 124. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):585. 1912—RICKEN, Blätterp. 272, pl. 70, f. 2. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 529. 1918—REA, Brit. Basid. 95. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 11:pl. 529. 1929—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1: 92, f. 17. 1934—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:157, pl. 3, f. 10. 1938—HEIM, Champ. Eur. 2:453, pl. 46, f. 1. 1957.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 47:432. 1933—広江, 応用菌蕈学, 1180. 1941—原, 日. 菌. 目. 393. 1954)

Volvariopsis gloiocephala MURR. N. Am. Fl. 10:144. 1917.

子実体は孤生; 傘は径 5—10 cm, 或はそれ以上に及び, 初め卵形, のち鐘形, 更に開張扁平となり, 鈍頭, 時に鈍小丘を有す; 表面は湿時粘性, 乾時光沢あり, 平滑, 灰色, 暗褐色の圧着せる纖維線に密に被わる, 周辺に短線条あり; 肉は薄く, 柔軟, 白色, 臭及味不快にて甚し; 褶は離生, 初め白色, のち肉色, 寧ろ密, 便腹状; 茎は 8—16×1—1.5 cm, 上方に漸細, 基部やや球根状, 白色, 初め平滑或はやや無毛, のち絨毛状に変色す, 中実; 壺は大形ならず, 膜質, 寧ろ薄し, 白色～帯黄色, 上端不規則或は円状に切れ, 外面絨毛を有す; 胞子は楕円形, 平滑, 10—14×6—8 μ, 胞子紋は桃色; 稜嚢体は多生, 便腹状～嚢状, 屢々先端に糸状或は乳頭状突起あり, 26—74×13—37 μ。

所在及産地

林地—秋 北海道, 本州—欧. 北米. 阿. 濠

和名 オオフクロタケ (大袋茸) 〔今井〕

Volvariella microspira (BERK. et CURT.)

ムニンヒメフクロタケ

Agaricus microspilus BERK. et CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4:115. 1860.

Volvaria microspira SACC. Syll. Fung. 5:660. 1887—S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:45. 1940.
（松村，植. 名鑑，1:183. 1904—白井，日. 菌. 目. 114. 1905; ed. 2. 729. 1917; ed. 3. 425. 1927—原.，日. 菌. 目. 393. 1954）
? *Agaricus pseudovolvaceus* BERK. et CURT. Jour. Linn. Soc. Bot. 11:530. 1871.
? *Agaricus apalotrichus* BERK. et CURT. l. c. 530. 1871.
? *Agaricus coleatus* BERK. et. CURT. l. c. 530. 1871.
? *Volvaria pseudovolvacea* SACC. Syll. Fung. 5: 657. 1887—PETCH, Ann. Roy. Bot. Gard. Perad. 9:203. 1924.
? *Volvaria hapalotricha* SACC. l. c. 659. 1887.
? *Volaria coleata* SACC. l. c. 659. 1887.

子実体は孤生；傘は径約 3.2cm 内外，鐘形～丸山形，のち開張し殆ど扁平となる；表面は僅か粘性にて純然たる乾燥ならず，中央淡オリーブ褐色，縁辺淡色，絹糸様綿毛を被むる；肉は白色，褶は隔生，白色，のち淡赤褐色～汚桃色，密，幅 4mm 内外，稜に微鋸歯あり；茎は約 5×0.3cm，同幅或は上方に僅か漸細，基端著しく肥大し類球根状，白色或は微かに黄色を帯ぶ，絹糸様綿毛を有し，僅か粘性，中実；壺は鞘状，約 1.2×1cm，上端3裂片に裂く，各裂片は殆どオリーブ褐色にて下部白色；胞子は広円壔形～広楕円形，平滑，3.5—5×3—4μ；胞子紋は鮭肉桃色。

所在及産地
陰林腐木上—秋　　小笠原島—亜(錫？)
和名 ムニンヒメフクロタケ(無人姫袋茸)〔今井〕

Pluteus FR.

シカタケ属

FRIES, Gen. Hymen. 6. 1836—SINGER, Agaricales, 403. 1949.
Agaricus subgen. *Pluteus* FRIES, Epicr. Mycol. 140. 1838.
Rhodoporus subgen. *Pluteus* SCHROETER, Pilze Schles. 1:618. 1889.

傘は子実層状或は細胞状の上表皮層を有し，或は該層の菌糸は糸状，腸詰形或は円筒状紡錘形にて子実層状ならず；褶は離生；胞子は通常卵形或は短楕円形，稀に類円筒形或は球形，中位の薄き平滑なる非糊性藁色一様の膜を有し，通常寧ろ小形或は中形，稀に寧ろ大形；担子柄は正常形，嚢状体は屢々存在し，往々特有の鈎を有し，或種にては只稜嚢体のみを有す；托実質は逆型；茎は中心生，通常肉状類繊維質；肉は最も屢々白色，非糊性の組織より成る；菌絆は存在或は欠如；種々なる基物上に生じ，死或は生植物体上，腐蝕物及砂土上，最も屢々林内腐木上に生ず；汎布，約 28 種を知らる。
（本属名は pluteus〔羅〕(差掛小屋) より出づ）
基準種　*P. cervinus* (SCHAEFF. ex FR.) QUÉL.

本邦既知種検索表

A. 傘面繊維状，綿絮状，絨状或は小疣状。
　a. 傘は灰，帯褐～セピヤ色。
　　α. 傘は中形；茎は緑青色とならず。
　　　I. 傘面に繊維及鱗片あり。
　　　　1. 褶稜は同色；傘は灰褐～類煤色，径 5—9cm；胞子 6.5—7.5×5—6μ。
　　　　　シカタケ　***P. cervinus***　(258)
　　　　2. 褶稜は黒褐色に縁取らる；傘はセピヤ色，径 6—8cm；胞子 6.5—8×4.5—5.5μ。クロフチシカタケ
　　　　　P. nigroflocculosus　(259)
　　　II. 傘面に小疣を有し，縁辺に線条あり，類煤色，径約 7cm；胞子径 6—8μ。
　　　　ムニンシカタケ　***P. verruculosus***　(259)
　　β. 傘は小～中形，径 2—5cm；灰～焦茶色；茎は灰白色にて基部より緑青色となる；胞子 7—9×5—7μ。
　　　ビロウドベニヒダタケ
　　　P. salicinus　(259)
　b. 傘は帯黄色，周辺オリーブ褐色の繊維を有す，中形，径約 7cm，胞子 7.5—10μ，或は 7.5—10×7.5—9μ。
　　ダイドウベニヒダタケ　***P. daidoi***　(260)
　c. 傘は白色，絹状。
　　α. 傘は小～中形，径 2—5cm；胞子 6—8×4.5—5.5μ。
　　　ハナヨメタケ　***P. pellitus***　(260)
　　β. 傘は中形，径約 8cm；胞子大形，14—15.5×8—10μ。
　　　シロベニヒダタケ　***P. macrosporus***　(261)
B. 傘面粉状。
　a. 傘は焦茶色。
　　α. 傘は小形，中央に放射状皺あり；茎は同幅；胞子 5—7.5×5—6μ。
　　　ヒメベニヒダタケ　***P. nanus***　(261)
　　β. 傘は中形，皺なく，周辺に短線条あり；茎の基部球根状；胞子径 6.5—7.5μ。
　　　ホテイベニヒダタケ　***P. bulbosus***　(262)

b．傘は中形，淡黄色，中央に不規則の皺あり，縁に膜片或はやや粗豪の房毛あり；胞子5—7.5×3—5μ。

フサベニヒダタケ

P. horridilamellus (262)

c．傘は中形，白色，皺及縁に房毛なし；胞子 5—6μ，或は 6—7.5×5—6μ。

マチダベニヒダタケ ***P. machidae*** (262)

C．傘面無毛。

a．傘は小形，黒褐色； 胞子径 6μ 内外，或は 6—8×6—7μ。

オカベベニヒダタケ ***P. okabei*** (263)

b．傘は中形。

α. 傘は焦茶色或は暗肉桂色，黒色肋脈ありて皺多し，周辺無線条，胞子 6—7μ，或は 6—8×6—7μ。

コシワベニヒダタケ

P. phlebophorus (263)

β. 傘は黄色，緑黄色或は朱色，周辺線条あり；胞子 5—7×5—6μ。

ベニヒダタケ

P. leoninus (263)

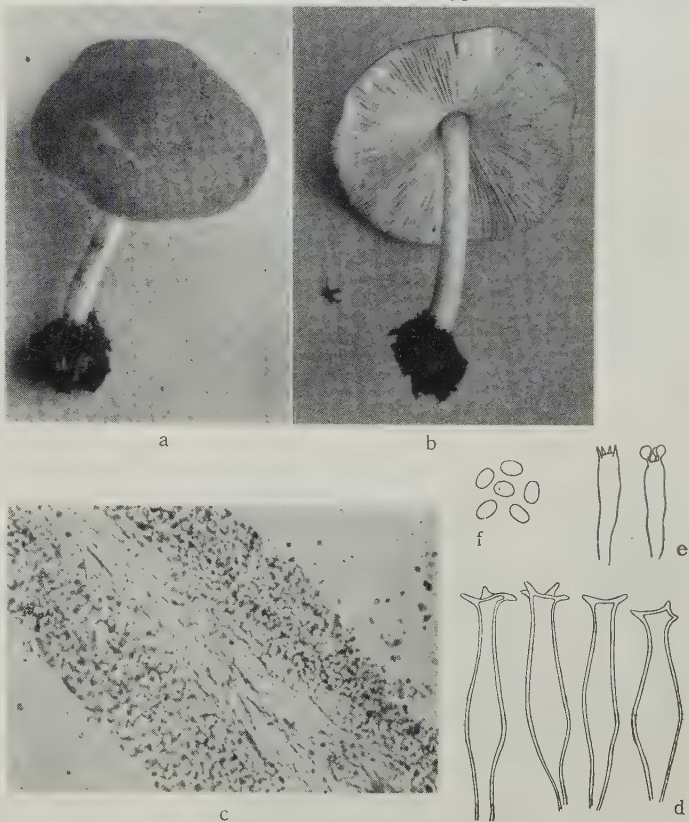
Pluteus cervinus (SCHAEFF. ex FR.) QUÉL.

シカタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:115. 1872; Enchir. Fung. 55. 1886—GILLET, Champ. Fr. 392, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:252. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 144. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:665. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 525. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:284. 1893; Brit. Fungi, 229, pl. 19, f. 4. 1911—PATOUILLARD. Ess. Tax. 166. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 138, f. 135, 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 100. f. 23. 1908—MURRILL, Mycologia, 1: 38, pl. 3, f. 2. 1909; N. Am. Fl. 10:134. 1917—ROLLAND, Atl. Champ. 57, pl. 56, f. 125. 1910—RICKEN, Blätterp. 276, pl. 71, f. 1. 1915—LANGE, Agar. Denm. 3:5, pl. 1, f. 1. 1917; Fl. Agar. Dan. 2:83, pl. 69, f. A. 1936—KAUFFMAN, Agar. Mich. 537, pl. 103. 1918—REA, Brit. Basid. 56. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 11: pl. 534. 1929—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1:92. 1934—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:159. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:93. 1948—SINGER, Agaricales, 404. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 134, pl. 50, f. 1—2. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 418, f. 591. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 36. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2:456. 1957.

(今関，原色きのこ，pl. 29(右). 1942—原，日．菌．目．279. 1954—川村，日．菌．図鑑，5:593, f. 561. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，47, f. 110, pl. 20、f. 110. 1957)

Agaricus cervinus SCHAEFF, Fung. Bavar. 4: Ind. 6, pl. 10. 1774—FRIES, Epicr. Myc. 140. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:263. 1857; Hymen. Eur. 185. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:511. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 141. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:161. 1867



第 110 図 シカタケ Pluteus cervinus

a．子実体表面 b．同裏面 ×1/2

c．褶横断面の一部 ×200 d．嚢状体

e．担子柄 f．胞子 ×400 （大谷氏）

—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:87. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3:pl. 301 (no. 301). 1886; Handb. Austr. Fungi, 38. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:100. 1876—WINTER, Pilze, 1:728. 1884.

Agaricus lividus BULL. Champ. Fr. pl. 382. 1787.

Agaricus latus BOLT. Hist. Fung. Halif. 2, pl. 2. 1788—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, pl. 108. 1797.

Agaricus pluteus PERS. Syn. Meth. Fung. 357. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:199. 1821—BERKELEY, Engl. Fl. 5(2):79. 1836.

Rhodosporus cervinus SCHROET. Pilze Schles. 1:620. 1889.

Hyporhodius cervinus P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Natürl. Pfl.-fam. 1, 1**:258. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):582, pl. 110 B. 1912.

子実体は孤生或は散生；傘は径 5—9cm，鐘形，のち広丸山形～開張殆ど扁平，幾分中高；表面は湿時僅か粘性，灰褐色～類煤色，中央暗色，殆ど平滑或は放射状繊維又は小鱗片を有す；肉は白色，寧ろ薄く，柔軟，臭及味幾分不快；褶は離生，白色，のち桃色～肉色となる，密，広幅，後方円し；茎は 6—12×0.6—1.2cm，広幅，基端やや球根状，上部白色，下部傘面と同色，殆ど無毛或は黒色繊維を有す，中実；胞子は広楕円形，平滑，6.5～7.5×5—6 μ；胞子紋は鮭肉色；稜囊体は紡錘形，先端に 3—5 の鈎を有す；可食。

所在及産地

林地及腐木上一春～秋

北海道，本州，九州一欧・北米・濠・亜(小亜)

和名 シカタケ（鹿茸）〔今井〕

ウラベニガサタケ（裏紅傘茸）〔川村〕

Pluteus nigroflocculosus (SCHULZ.) KÜHNER
クロフチシカタケ

KÜHNER, Fl. Anal. Champ. Supér. 420. 1953; & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 420. 1953.

(今関及土岐，林．試．研．報．87:53, f. 3. 1956)

?*Agaricus umbrosus* PERS. Icon. Descr. Fung. 1:8, pl. 2, f. 5. 1801; Syn. Meth. Fung. 385. 1801—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 141. 1860(ut *umbrinus*)—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:88. 1871; Illus. Brit. Fungi. 3:304, f. a (no. 306). 1886—FRIES, Hymen. Eur. 186. 1874.

Pluteus umbrosus QUÉL. Champ. Jura. Vosg. 3: 437. 1873—GILLET, Champ. Fr. 393. 1874(?)—SACCARDO, Syll. Fung. 5:667. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 524. 1915—BRESADOLA, Fung. Trid. 2:pl. 116. 1892. (non RICKEN, LANGE, REA)

Pluteus cervinus var. *umbrosus* QUÉL. Fl. Myc. 187. 1888.

Pluteus cervinus var. *b.* RICKEN, Blätterp. 276, pl. 71, f. 1b. 1915—LANGE, Agar. Denm. 3:5. 1917.

Pluteus cervinus ssp. *atromarginatus* KONR. Bull. Soc. Myc. Fr. 43:148. 1927; & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1:pl. 19. 1927.

Pluteus atromarginatus KÜHNER, in KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:96. 1948—SINGER, Agaricales, 404. 1949.

子実体は叢生；傘は径 6—8cm，鐘形～丸山形となり，鈍き中丘あり，のち開張す；表面は中央鱗片状，縁辺繊維状，セピヤ色，縁は薄く，線条なく，全縁；肉は白色，皮下帯褐黒色，柔軟；褶は離生，白色～淡橙褐色，稜は綿絮状にて黒褐色なるを特長とす，やや密，広幅，便腹状，薄し；茎は 4—6×0.7—1cm，殆ど同幅，傘面と同色或は淡色，繊維細条あり，下部鱗片状，中実；胞子は楕円形或は広楕円形，平滑，6.5—8×4.5—5.5μ；胞子紋は淡肉色を帯びたる桃色；褶側囊状体は紡錘形にて先端に 2～3 の鈎状突起あり，無色，76—86×12—24μ，稜無性細胞は気球形にて褐色の内容を含み，これによりて肉眼的に稜は黒褐色を呈す，40—50×15—20μ；可食。

所在及産地

針葉樹倒木上一夏秋　　本州一欧

和名 クロフチシカタケ(黒縁鹿茸)〔今関及土岐〕

Pluteus verruculosus S. ITO. et. IMAI
ムニンシカタケ

S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:47. 1940.

子実体は孤生；傘は径約 7cm，丸山形，のち開張し，中丘あり；表面は類煤色，小疣を有し，周辺に線条あり；肉は白色；褶は離生，白色，のち肉色，密，茎は約 7×0.6cm，上方に僅か漸細，白色，光沢あり，やや繊維を有し或はやや溝を存す，僅か捩曲す；胞子は球形，或は類球形，平滑，径 6—8μ；胞子紋は肉色；囊状体なし。

所在及産地

林地一秋　　小笠原島

和名 ムニンシカタケ（無人鹿茸）〔今井〕

Pluteus salicinus (PERS. ex FR.) QUÉL.
ビロウドベニヒダタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:115. 1872; Enchir. Fung. 55. 1886—GILLET, Champ. Fr.

393. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:254. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:668. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:286. 1893; Brit. Fungi, 230. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 166. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 101. 1908—RICKEN, Blätterp. 280, pl. 70, f. 5. 1915—LANGE, Agar. Denm. 3: 5, pl. 1, f. 2. 1917; Fl. Agar. Dan. 2:83, pl. 69, f. c. 1936—KAUFFMAN, Agar. Mich. 539. 1918—REA, Brit. Basid. 59. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1:pl. 21, f. 1, 1930; Agaricales, 1:94. 1948—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:159. 1938—SINGER, Agaricales, 404. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 135, pl. 50, f. 4. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 420. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:456. 1957. (原, 日. 菌. 目. 280. 1954)

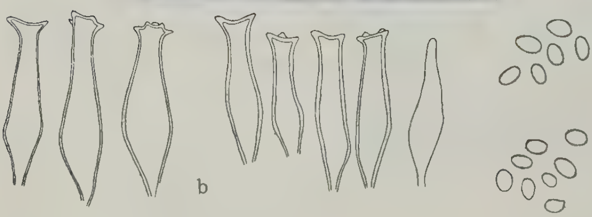
Agaricus salicinus PERS. Icon. Descr. Fung. 1:9. 1798; Syn. Meth. Fung. 344. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:202. 1821; Epicr. Myc. 141. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:264. 1857; Hymen. Eur. 186. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:511. 1844—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:101. 1876—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 371. 1883; Illus. Brit. Fungi, 8:pl. 1169, f. a. (no. 1157). 1891, WINTER, Pilze, 1:727. 1884.

Rhodosporus salicinus SCHROET. Pilze Schles. 1:620. 1889.

Hyporhodius salicinus P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Natürl. Pfl.-fam. 1, 1**: 259. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2);582. 1912.

子実体は群生或は小叢生; 傘は径 2—5 cm, 丸山形, のち開張し扁平となり, 広き中丘を存す; 表面は絨毛ありて, 青灰色, のち灰色～焦茶色, 中央暗色にて綿架あり, 縁辺はやや無毛にて平坦或は僅に線条あり; 肉は白色, 僅か淡緑灰色を帯び, 臭及味弱し; 褶は離生, 白色, のち紅肉色, 密, 広幅, 便腹状; 茎は 2—5×0.2—0.6 cm, 殆ど同幅, 基端肥大, 往々偏心生, 普通屈曲す, 光沢あり, 絹糸様繊維を有し, のち無毛となる, 初め灰白色, 基部より緑青色となる, 脆く, 中実; 胞子は広楕円形, 7—9×5—7 μ; 胞子紋は肉色; 稜及褶側嚢体は棍棒状紡錘形, 無色, 先端に 2—4 小鈎を有す, 75—90×15—17 μ。


a


b c

第111図 ビロウドベニヒダタケ
Pluteus salicinus
a. 子実体 ×1/2 b. 嚢状体 c. 胞子 ×500
(大谷氏)

所在及産地

腐木上—夏 北海道—欧. 北米

和名 ビロウドベニヒダタケ (天鵞絨紅褶茸)

〔今井〕

Pluteus daidoi S. ITO et IMAI

ダイドウベニヒダタケ

S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:47. 1940.

子実体は孤生; 傘は約 7 cm 内外, 丸山形, のち開張, 鈍頭中丘あり; 表面は湿時やや粘性, 中央部帯黄色, 無毛, 周辺はオリーブ褐色の繊維を有す; 肉は白色, 厚く, 臭及味なし; 褶は離生～隔生, 肉色, 密; 茎は約 7×0.6 cm, 上方に僅か漸細, 基部僅か肥大, 白色, 光沢あり, 殆ど無毛, 中実; 胞子は広楕円形, 卵形或は球形, 平滑, 径7.5—10 μ, 或は 7.5—10×7.5—9 μ; 胞子紋は肉色; 嚢状体は類紡錘形或は便腹状, 先端に鈎ありて星芒状, 無色, 厚膜。

所在及産地

林地—秋 小笠原島

和名 ダイドウベニヒダタケ (大道紅褶茸)〔今井〕

Pluteus pellitus (PERS. ex FR.) QUÉL.

ハナヨメタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:115, pl. 5, f. 4. 1872; Enchir. Fung. 56. 1886—GILLET, Champ. Fr. 392, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:255, 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:668. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 522. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:287. 1893; Brit. Fungi, 230. 1911—W. G. SMITH,

Brit. Basid. 101. 1908—LANGE, Agar. Denm. 3:6, pl. 1, 4a. 1917; Fl. Agar. Dan. 2:84, pl. 70, f. A. 1936—REA, Brit. Basid. 59. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 11:pl. 536. 1929—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1:pl. 21, f. 2. 1930; Agaricales, 1:95. 1948—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:161. 1938—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 420. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:456, f. 305, B. 1957.

（原, 日. 菌. 目. 280. 1954）

Agaricus fuliginatus BATSCH, Elench. Fung. 81, pl. 6, f. 26. 1783.

Agaricus pellitus PERS. Syn. Meth. Fung. 366. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:198. 1821; Epicr. Myc. 141. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:262. 1857; Hymen. Eur. 187. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:511. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 116. 1883; Illus. Brit. Fungi, 3:pl. 597 (no. 308). 1886—WINTER, Pilze, 1:727. 1884.

Rhodosporus pellitus SCHROET. Pilze Schles. 1:619. 1889.

Hyporhodius pellitus P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Natürl. Pfl.-fam. 1, 1**:259. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):581, pl. 115, f. 5—6. 1912.

子実体は孤生；傘は径 2—5cm, 丸山形, のち扁平となり, 僅か中丘あり；表面は乾燥或は粘性, 白色, 絹糸状絨毛〜纖維を被むり, 光沢あり, のち汚色となる, 皮剝げ易し, 縁辺平坦；肉は白色, 柔軟味温和, 臭微なり；褶は離生〜隔生, 白色にて遂に肉色となる, 密, 広幅, 便腹状にて後方やや円し, 稜に鈍鋸歯あり；茎は 4—12×0.4—0.8cm, 上方に僅か漸細, 基部少しく肥大, 屢々屈曲す, 白色にて光沢あり, 無毛或はやや綿絮あり, 線条を存し, 脆く, 中実；胞子は広楕円形, 平滑, 6—8×4.5—6 μ；胞子紋は肉色, 嚢状体は褶側にやや多生, 紡錘形, 先端に 2—3 鈎を有す, 60—90×15—20μ。

所在及産地

ニレ幹上—夏秋　　　北海道—欧. 亜(小亜)

和名 ハナヨメタケ（花嫁茸）〔今井〕

Pluteus macrosporus IMAI
シロベニヒダタケ

IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:160. 1938.

（原, 日. 菌. 目. 279. 1954）

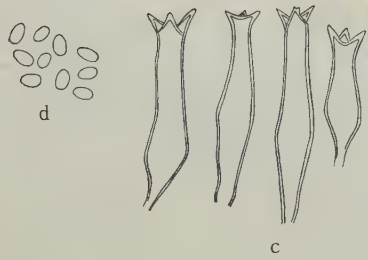
子実体は孤生；傘は径約 8cm, 類円錐形, のち開張し, 中丘あり；表面は乾燥, 平滑, 絹糸状纖維あり, 中央部帯白色或は煙色, 周辺白色, 平坦或は僅か有溝；肉は帯白色, 柔軟, 厚し；褶は離生, 白色, のち桃色, 疎, 稜は僅か鋸歯状；茎は 15×1cm に及び, 上方に漸細, 帯白色, 上部綿絮あり, 下部纖維或は綿絮あり, 中実；胞子は楕円形, 平滑, 14—15.5×8—10μ；胞子紋は桃色。

所在及産地

林地—秋　　　北海道

和名 シロベニヒダタケ（白紅褶茸）〔今井〕





第112図 ハナヨメタケ
Pluteus pellitus
a. 子実体表面　b. 同裏面 ×2/3
c. 嚢状体　d. 胞子 ×400
（大谷氏）

Pluteus nanus (PERS. ex FR.) QUÉL.
ヒメベニヒダタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:116. 1872; Enchir. Fung. 56. 1886—GILLET, Champ. Fr. 394. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:256. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 145. 1889—SACCARDO. Syll. Fung. 5:672. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 527. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:287. 1893; Brit. Fungi, 230. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 166. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 101. 1908—RICKEN, Blätterp. 279 pl. 70, f. 6. 1915—LANGE, Agar. Denm. 3:9, pl. 1, f. 14a. 1917; Fl. Agar. Dan.

2:87, pl. 72, f. G. 1936—KAUFFMAN, Agar. Mich. 542. 1918—REA, Brit. Basid. 60. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1:pl. 22. 1926; Agaricales, 1:98. 1948—BRESADOLA, Icon. Myc. 11:pl. 542, f. 2. 1929—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:161. 1938—SINGER, Agaricales, 405. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 135, pl. 51, f. 1. 1950.

(原, 日. 菌. 目. 279. 1954)

Agaricus pyrrhospermus BULL. Herb. Fr. pl. 547, f. 3. 1791.

Agaricus nanus PERS. Syn. Meth. Fung. 357. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:200. 1821; Epicr. Myc. 141. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:266. 1857; Hymen. Eur. 187. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:511. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 141. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:88. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3:pl. 305 (no. 309). 1886—WINTER, Pilze, 1:726. 1884.

Rhodosporus pyrrhospermus SCHROET. Pilze Schles. 1:619. 1889.

Hyporhodius pyrrhospermus P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Natürl. Pfl.-fam. 1, 1**:257, f. 121 A. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze 2 (2):580. 1912.



第 113 図 ヒメベニヒダタケ
Pluteus nanus ×2/3 (大谷氏)

子実体は孤生或は散生; 傘は径 2—3cm, 丸山形, のち開張し扁平となり, 鈍頭或は僅か中丘あり; 表面は初め黒褐色にてのち栗褐色, 煤色或は焦茶色, 絨粉状, 粒状或は粉状, 中央に放射状皺あり, 縁辺は平坦或は殆ど平坦; 肉は白色, 薄し; 褶は離生, 初め白色, のち肉色, 便腹状, 稜に白色房毛あり; 茎は 2—4×0, 2—0. 4cm, 同幅, 白色, 無毛, 僅か細線条を有し, 剛直にて屢々屈曲, 中実; 胞子は類球形或は広楕円形, 平滑, 5—7. 5×5—6μ; 胞子紋は肉色; 嚢状体は褶側及稜に存し, 紡錘状壜形にて先端に狭細し, 鈎状突起なし, 長さ 75—80μ。

所 在 及 産 地

林地及腐木上—夏秋

北海道—欧. 北米. 亜(小亜)

和 名 ヒメベニヒダタケ (姫紅褶茸) 〔今井〕

Pluteus bulbosus IMAI
ホテイベニヒダタケ

IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:162. 1938.

(原, 日. 菌. 目. 279. 1954)

子実体はやや群生; 傘は径 3—5cm, 丸山形〜扁平, 狭く圧低さる; 表面は焦茶色, 粉状, 縁に短き線条あり; 肉は白色, 甚だ薄し; 褶は離生, 初め白色, のち肉色となる, 便腹状にて両方狭細; 茎は 4—7×0. 3—0. 4cm, 下方肥大し基端球根状, 帯白色或は帯黄色, 線条あり, 無毛, 基部粉状; 胞子は球形或は類球形, 平滑, 径 6. 5〜7. 5μ; 胞子紋は肉色。

所 在 及 産 地

林間腐木上—秋 北海道

和 名 ホテイベニヒダタケ (布袋紅褶茸) 〔今井〕

Pluteus horridilamellus S. ITO et IMAI
フサベニヒダタケ

S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:46. 1940.

子実体は孤生; 傘は径約 4cm, 丸山形, のち扁平となり, やや中丘を有す; 表面は淡黄色, 褐色粉を密布す, 中心部に不規則の皺を有す, 縁に膜片或はやや粗豪の房毛あり; 肉は白色, 縁薄し; 褶は離生, 白色, のち肉色, 密, 稜は黄褐色; 茎は約 11×0. 4 cm, 上方に僅か漸細, やや繊維を有し, 捩曲, 鈍黄色; 胞子は広楕円形, 平滑, 5—7. 5×3—5μ; 胞子紋は肉色; 嚢状体は便腹状, 尖頭, 無色〜帯黄褐色。

所 在 及 産 地

陰林腐木上—秋 小笠原島

和 名 フサベニヒダタケ (房紅褶茸) 〔今井〕

Pluteus machidae S. ITO et IMAI
マチダベニヒダタケ

S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:47. 1940.

子実体は群生; 傘は径 3. 5—5cm, 丸山形, のち開張し, 鈍頭中丘を有す; 表面は乾燥, 白色, 中央褐色粉に被わる; 肉は白色, 中央部厚く, 縁部薄し臭及味よし; 褶は離生, 肉色, 密, 広幅; 茎は 4—8×0. 4—0, 6cm, 上方に僅か漸細, 基部肥大, 白色繊維を有し, 光沢あり, 僅か捩曲, 中空; 胞子は広楕円形, 卵形, 類球形或は球形, 平滑, 径 5—6μ, 或は 6—7. 5×5—6μ; 胞子紋は銹色。

所 在 及 産 地

林間枯株上—秋 小笠原島

和名 マチダベニヒダケ（町田紅褶茸）〔今井〕

Pluteus okabei S. ITO et IMAI
オカベベニヒダタケ

S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:46. 1940.

子実体は孤生；傘は径約 1cm，丸山形，のち扁平となる；表面は乾燥，黒褐色，平滑，無毛；肉は甚だ薄く，白色；褶は殆ど離生；淡赤褐色，密；茎は約 3×0.15cm，同幅，白色，中実；胞子は球形，類球形，卵形或は広楕円形，平滑，径 6μ 内外，或は 6—8×6—7—μ；胞子紋は桃色；嚢状体は便腹状，先端無鉤或はやや星芒状に鉤あり，無色。

所在及産地

林間腐木上—秋　　小笠原島

和名 オカベベニヒダタケ（岡部紅褶茸）〔今井〕

Pluteus phlebophorus (DITM. ex FR.) GILL.
コシワベニヒダタケ

GILLET, Champ. Fr. 397. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 3:542. 1875; Enchir. Fung. 56. 1886—KARSTEN, Hattsv. 1:257. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 145. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:676. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 529. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:291. 1893; Brit. Fungi, 231. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 102. 1908—RICKEN, Blätterp. 280, pl. 71, f. 6. 1915—LANGE, Agar. Denm. 3:8. 1917; Fl. Agar. Dan. 2:87, pl. 72, f. E. 1936—REA, Brit. Basid. 61. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 11:pl. 545. 1929—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:164. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:98. 1948.

（原，日. 菌. 目. 280. 1954）

Agaricus phlebophorus DITM. in STURM, Deut. Fl. 3:31, pl. 15. 1813—FRIES, Syst. Myc. 1:200. 1821; Epicr. Myc. 142. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:267. 1857; Hymen. Eur. 188. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:510. 1844—BERKELEY, Outl. Brit Fung. 142. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fung. 1:89. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3:pl. 422, f. a(no. 31—5). 1886—WINTER, Pilze, 1:725. 1884.

Hyporhodius phlebophorus P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Natürl. Pfl.-fam. 1, 1**:257. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):579. 1912.

Pluteus chrysophaeus FR. KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 424. 1953.

子実体は孤生；傘は径 3—5cm，丸山形～類半球形，のち開張し，やや中丘を有す；表面は焦茶色，のち暗肉桂色となる，無毛，黒色肋脈を有して皺多く中央は殆ど平坦，周辺線条なし；肉は帯白色，脆く，臭及味なし；褶は離生，白色，のち肉色，密，寧ろ広幅，便腹状；茎は 3—6×0.4—0.5cm，殆ど同幅，基部少しく肥大して時に屈曲す，白色，無毛絹糸様光沢あり，中空；胞子は類球形～広楕円形，平滑，径 6—7μ，或は 6—8×6—7μ；胞子紋は肉色；褶側嚢体は広円筒形～広頸壜形，40—60×16—22μ，稜嚢体は更に変化す。

所在及産地

林内腐木上—夏秋　　北海道. 本州—欧. 亜(錫)

和名 コシワベニヒダタケ（小皺紅褶茸）〔今井〕

Pluteus leoninus (SCHAEFF. ex FR.) QUÉL.
ベニヒダタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:115. 1872; Enchir. Fung. 56. 1886—GILLET, Champ. Fr. 396, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:257. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:675. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 530. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:290. 1893; Brit. Fungi, 231. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 166. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 102. 1908—RICKEN, Blätterp. 278, pl. 71, f. 5. 1915—MURRILL, N. Am. Fl. 10:132. 1917—KAUFFMAN, Agar. Mich. 545. 1918—REA, Brit. Basid. 61. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1:pl. 20. 1925; Agaricales, 1: 97. 1948—BRESADOLA, Icon. Myc. 11:pl. 541. 1929—LANGE, Fl. Agar. Dan. 2:86. 1936—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:163. 1938—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 421. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2: 457. 1957.

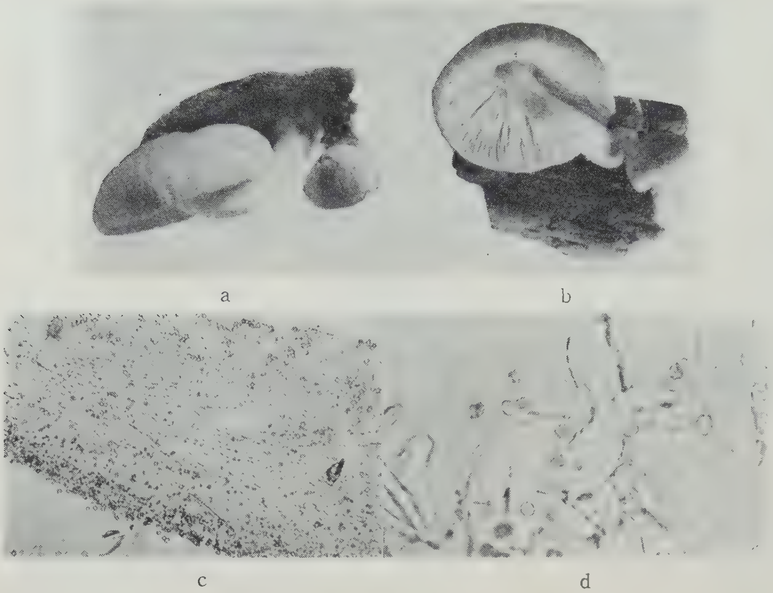
（今関，原色きのこ，pl. 29(中). 1942—原，日. 菌. 目. 279. 1954—今関及本郷，原色日. 菌. 図鑑，47, f. 111, pl. 20, f. 111. 1957）

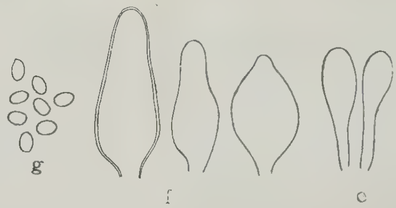
Agaricus leoninus SCHAEFF. Fung. Bavar. 4:Ind. 21, pl. 48. 1774—PERSOON, Icon. Descr. Fung. 22, pl. 7, f. 3—4. 1798; Syn. Meth. Fung. 337. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:199. 1821; Epicr. Myc. 142. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:266. 1857; Hymen. Eur. 188. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:510. 1884—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 142, pl. 7, f. 4. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:88. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3:pl. 421(no. 313). 1886—WINTER, Pilze, 1:726. 1884.

Rhodosporus leoninus SCHROET. Pilze. Schles. 1:619. 1889.

Hyporhodius leoninus P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Natürl Pfl.-fam. 1, 1**:257. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):579. 1912.

子実体は群生或は叢生；傘は径 2—8cm，鐘形～丸山形，のち開張し，僅か中丘あり；表面は湿潤，





第114図　ベニヒダタケ
Pluteus leoninus
a．子実体　×1/2　b．同裏面　×1/2
c．褶切断面の一部　×200
d. g. 胞子　×500
e．稜囊体　f．囊状体　×500
（大谷氏）

黄色，帯緑黄色，橙黄色或は朱色，幼時鮮かなり，無毛，絹糸様光沢あり，周辺に線条あり；肉は白色或は淡黄色，傘の朱色のものに於ては皮下赤色を呈す，薄く，脆く，味温和，臭はなきか或は稍々不快；褶は離生，初め白色にて時に黄縁を有し，のち肉色，密，広幅，便腹状；茎は 3.5—7.5×0.3—1 cm，同幅或は上方僅か漸細，基部僅か肥大，透明白色～帯白色或は黄白色，時に基部朱色，無毛或は絹糸様繊維ありて有線条，脆く，中実；胞子は類球形～広楕円形，平滑，5—7×5—6μ；胞子紋は肉色；囊状体は多生，殊に稜に多く，紡錘形，先端細くして時に鈎状に曲るも鈎状突起なし。

所在及産地

広葉樹枯幹，腐木上—春～秋
北海道—欧．北米．亜(小亜)

和名　ベニヒダタケ（紅褶茸）〔今井〕

疑問種

Agaricus arenulosus BERK. et CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4:115. 1860.

=*Pluteus arenulosus* SACC. Syll. Fung. 5: 673. 1887.

（松村，植．名鑑，1:162. 1904—白井，日菌．目．71. 1905; ed. 2. 469. 1917; ed. 3. 286. 1927—原，日．菌．目．279. 1954）

Agaricaceae (FR.) COHN　ハラタケ科

COHN, Hedwigia, 11, 17. 1872; emend. SINGER, Agaricales, 406. 1949.

Lepiotaceae ROZE, Bull. Soc. Bot. Fr. 23:51. 1876.

Leucocoprinaceae SINGER, Ann. Myc. 34:323. 1936.

子実体はシメジタケ（*Tricholoma*）型或はエノキタケ（*Collybia*）型，或は最も屢々シカタケ（*Pluteus*）型なるも，通常粉状～鱗片状の傘面（屢々中盤部平滑）及び鍔の存在によりそれ自身の甚だ特有なる外観を示す；上表皮層は甚だ屢々柵毛被よりなるも，亦屢々子実層状なり，更に又短細胞被或は平行菌糸被又は単一の球嚢を取り巻く錯綜する菌糸より成るもの等極めて種々あり；托は褶状，褶は薄く，離生，或は稀に狭生，直生或は垂生，托実質は整型或不整型なるも決して両側型又は逆型ならず；担子柄は正常形即ちカーミン着色粒なく，比較的寧ろ小形，多くは4胞子；嚢状体は存在或は欠如；胞子紋は甚だ変化し，純白色，クリーム色，帯褐淡黄色，緑～オリーブ色，ピンク色，紫色或はセピア色，往々脱水によつて変色す；胞子は無色～藁色，帯褐色，栗色或は蜜色，平滑或は有刺，有疣，有点，有刺粗面等，比較的厚き単膜或は複合膜にて厚し，発芽孔は存在或は欠如，クレシール青に染色する内膜を有し或は有せず，永存的外被膜を有し或は欠如，糊性或は非糊性にて甚だ屢々強弱の擬糊性反応を呈す，通常双核にて極めて稀に単核；茎は中心生，屢々襟

帯ありて托より隔たる，屢々柔肉質の傘肉よりは纖維質にて傘より容易に分離す，膜質或は蜘蛛巣状の被膜を有す(通常膜質にて漏斗形)，この被膜は多くの場合に少くとも一部緣膜片となり，或属にては甚だ早く可動鍔となる；壺も亦存在し，或はその未成物となり或は欠如す；肉は肉質，糊性或は屢々非糊性の菌糸より成り，菌絆は存在或は欠如；傘及び肉は普通の試薬に対し強く且つ速に反応す；林の内外の地上，腐蝕物上，蘚間，温室内等に生ず；SINGER 氏（1949）は4族に分つ。

本科は淡色系胞子紋アカヤマタケ科（*Hygrophoraceae*），シメジタケ科（*Tricholomataceae*），テングタケ科（*Amanitaceae*）と暗色系胞子紋のヒトヨタケ科（*Coprinaceae*），オキナタケ科（*Bolbitiaceae*）モエギタケ科（*Strophariaceae*）との中間に位するが為めに分類上特に注意を要す，内淡色系にてはテングタケ科に近くその区別は已に述べたり，暗色系にてはヒトヨタケ科に近くその区分点につき論議せられあるも其の問題となる種類は本邦に未だ知られず。

族検索表

A．胞子紋は淡色系。

a．褶は離生〜隔生。

α．胞子は甚だ広き著しき発芽孔を有し，擬糊性，内膜はクレシール青にて一様に（1属オオシロカラカサタケ属）或は異性染色さる；胞子紋は純白，クリーム，ピンク色，或は緑又はオリーブ色を呈し，乾燥するも決して帯褐紫色とならず；褶は全く離生し，屢々隔生し襟帯を有す。

（Ⅰ）キヌカラカサタケ族 **Leucocoprineae** （265）

β．胞子は発芽孔なし，多少に拘らず擬糊性，内膜はクレシール青にて異性染色せず；胞子紋は白，屢々クリーム，淡褐〜焦茶色，時に青緑或はピンク色，乾燥により紫色を帯びず，褶は離生。

（Ⅱ）キツネノカラカサタケ族 **Lepioteae** （272）

b．褶は狭生〜直生，稀に垂生し，離生の小属（*Drosella* 及 *Smithiomyces*）あるも邦産なし；胞子は発芽孔なし，非糊性，糊性或は弱き擬糊性；胞子紋は白色〜黄土色。

（Ⅲ）シワカラカサタケ族 **Cystodermateae** （280）

B．胞子紋は暗色系にて帯褐紫色(少くとも乾燥時)或はセピア色，屢々生時緑色；褶は離生；胞子は非糊性，発芽孔は存在或は欠如。

（Ⅳ）ハラタケ族 **Agariceae**（284）

（Ⅰ）**Leucocoprineae** SING. キヌカラカサタケ族

SINGER, Pap. Mich. Acad. Sci. 32:141. 1946; Agaricales, 411. 1949.

胞子は複雑の膜及び発芽孔を有し，擬糊性，クレシール青にて完全に濃青色となり，或は明かに異性染色す（多くは後者），その時は胞子紋は通常純白色，クリーム色或はピンク色なり，壺は能く発達せずして屢々未成的，或は能く発達し，或は欠如す。

SINGER 氏（1949）は5属を収む。

本邦既知属検索表

A．胞子紋は緑色；肉は傷時赤変す—壺なく，胞子中〜大形。

オオシロカラカサタケ属 **Chlorophyllum** （265）

B．胞子紋は緑色ならず。

a．菌絆を有す—傘は鱗片を有し，中盤は通常明かなる柵状構造を有す，肉質にて脆からず，全然櫛歯状溝なく，鮮黄色ならず。

カラカサタケ属 **Macrolepiota** （266）

b．菌絆を有せず—傘は甚だ薄肉，放射状にて皺溝あり，肉は通常変色せず，傘は往々球嚢に被われ，茎は屢々細長。

キヌカラカサタケ属 **Leucoprinus** （269）

Chlorophyllum MASS.
オオシロカラカサタケ属

MASSEE, Kew Bull. 1898;135. 1898—SINGER, Agaricales, 414. 1949.

傘は鱗片を被むり，上表皮層は直立菌糸柵状に並び，速に破れ，傘緣に於て束状に絡れ或は内方に向つて消失す；褶は通常老時緑色となり，茎より離生或は隔生す；胞子紋は緑色なるも，甚だ稀に淡卵黄色となる；胞子は平滑にて厚き複合膜を有し，クレシール青にて染色さる，広き発芽孔を存す；嚢状体は褶側に存せず，稜嚢体は存在す；托実質は殆ど整型なるも老時不整となる；茎は傘径に比して長く，

基部球根状，コップ形の壺なく，鍔は幼時幾分固定するも乾時可動となる；肉は傷時赤色に傾き，有毒物質を含む；菌糸は非糊性，菌絆なし；肥沃土上生；半被実；只1種を知らる，有毒菌と認めらる。

（本属名は chloros〔希〕（緑色），phyllon.〔希〕（葉）より出づ）

基準種 *C. molybdites*（MEYER ex FR.）MASS.

本邦既知種 オオシロカラカサタケ

C. molybdites（266）

Chlorophyllum molybdites

（MEYER ex FR.）MASS.

オオシロカラカサタケ

MASSEE, Kew Bull. 1898:136. 1898—SINGER, Agaricales, 415. 1949.

Agaricus molybdites MEYER, Fl. Esseq. 300. 1818—FRIES, Hymen. Eur. 30. 1874.

Lepiota Morgani PECK, Bot. Gaz. 4:137. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:31. 1887—LLOYD, Myc. Writ. 1:4. 1898—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:273. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 80. 1903—MORGAN, Jour. Myc. 13:8. 1907—KAUFFMAN, Agar. Mich. 644, pl. 133—134. 1918—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 47, pl. 13. 1927.

（川村，日．菌．図鑑，4:471, f. 451. 1954）

Lepiota molybdites SACC. Syll. Fung. 5:30. 1887—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:273. 1900.

Mastocephalus molybdites O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2:860. 1891.

Mastocephalus Morganii O. KUNTZE, l. c. 860. 1891.

子実体は群生し，往々菌輪を作る；傘は巨大にて通常径 10—15 cm，時に 30 cm に及ぶ，初め球形，のち丸山形～扁平となる；表面は初め淡褐色或は淡黄色の上皮に被われ，速に中央部以外の上皮は細裂し，大なる不規則の毳毛状鱗片或は破片となり，皮下の白色肉を露出す，縁に幼時著しき綿絮状膜片あり；肉は厚く，緊緻，白色，傷時空気に触れて僅か紅色となり，のち淡黄色となる；褶は隔生，白色，のち淡緑色となる，密，広幅，便腹状；茎は通常長さ 10—20 cm，時に 40 cm に及び，頑丈，幅上部 1—2 cm，下部 2—4 cm，基部棍棒状に肥大し，上方に漸細す，平滑，灰白色，淡黄色或は淡褐色，堅くして緊緻，充塞；鍔は上位，2重，上鍔は厚く，大形，堅靱にて軟く，可動，下鍔は茎面と同様；胞子は類楕円形，斜に有嘴，平滑，淡緑色，8—10×6—8 μ；胞子紋は緑色，有毒と認めらる。

所在及産地

草原及陽林地—夏秋

本州—北南米．南洋．亜（比）

和名 オオシロカラカサタケ（大白傘茸）〔川村〕

Macrolepiota SING.

カラカサタケ属

SINGER, Pap. Mich. Acad. Sci. 32:141. 1946; Agaricales, 415. 1949.

Leucocoprinus subgen. *Eu-Coprinus* LOCQUIN, Bull. Soc. Linn. Lyon. 14:30. 1945.

族の性質に同じ；胞子紋は純白色；胞子はクレシール青にて明かに且つ強く異性反応を呈し如何なる条件下に於ても一様に濃青色とならず，広き発芽孔を有す，平滑，甚だ大形（長さ 10 μ をこし，往々 20 μ に及ぶ），嚢状体は褶側に存せず，傘は鱗片状或は稀に単に粒状にて，中盤部は平滑なり，中盤部は長き通常真直なる柵状菌糸より成る表皮層を有す（然し往々この柵状菌糸は匍匐する多少膠着せる菌糸束にて圧着さる）；鍔は可動にて菌絆を有する菌糸より成る；壺は本然的には存在するも不明瞭にて永存せず；林の内外に於ける地上に生ず；半被実；殆ど汎布，約6種を知らる，食用菌。

）本属名は makros〔希〕（長き，大なる），*Lepiota*（属名）より出づ）

基準種 *M. procera*（SCOP. ex FR.）SING.

本邦既知種検索表

A．胞子大形にて 12×7 μ 以上に及ぶ；傘は明かなる中丘を有し，暗褐色大鱗片を存す；茎には細鱗片ありて蛇紋状，基部球根状；肉は赤変せず。

カラカサタケ ***M. procera***（266）

B．胞子中形にて 12×7 μ 以下を多しとす。

a．傘は中丘なく，大褐色鱗片を存す；茎に蛇紋なく基部球根状；肉は赤変す。

カラカサタケモドキ ***M. rachodes***（267）

b．傘は中丘なく，白色，通常鱗片なし；茎平滑，基部球根状ならず；肉は赤変せず。

シロカラカサタケ ***M. naucina***（268）

Macrolepiota procera（SCOP. ex FR.）SING.

カラカサタケ

SINGER, Agaricales, 417. 1949.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，48, f. 112, pl. 21, f. 112; phot. IV, f. 20. 1957）

Agaricus procerus SCOP. Fl. Carn. ed. 2. 2: 418. 1772—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, pl. 190. 1799—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 257. 1801

—FRIES, Syst. Myc. 1:20. 1821; Epicr. Myc. 12. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:19. 1857; Hymen. Eur. 29. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:574. 1844—BARLA, Champ. Nice, 14, pl. 8, f. 1—8. 1859—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 92. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2: 130. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:12. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 21(no. 19). 1883; Handb. Austr. Fungi, 5. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:27. 1876—WINTER, Pilze, 1:842. 1884.

Lepiota procera S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:601. 1821—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:70. 1872; Enchir. Fung. 5. 1886—GILLET, Champ. Fr. 56, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:7. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:27. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 74. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1:675. 1889—BARLA, Champ. Alp. Marit. 21, pl. 9, f. 1—4. 1889—ROLLAND, Bull. Soc. Myc. Fr. 7:11, pl. 1, f. 2. 1891; Atl. Champ. 19, pl. 11, f. 15. 1910—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3: 324. 1893; Brit. Fungi, 88, pl. 4. f. 1. 1911—LLOYD, Myc. Writ. 1:5. 1898—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:273, 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 79, f. 81. 1903—MORGAN, Jour. Myc. 13:7. 1907—W. G. SMITH, Brit. Basid. 20, f. 12. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):713. 1912—MURRILL, Mycologia, 5:257, pl. 92, f. 2. 1913; N. Am. Fl. 10:63. 1914—RICKEN, Blätterp. 317, pl. 83, f. 1. 1915—LANGE, Agar. Denm. 2:22. 1915; Fl. Agar. Dan. 1:24, pl. 8, f. B. 1935—KAUFFMAN, Agar. Mich. 643, pl. 132. 1918—REA, Brit. Basid. 64. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 1:pl. 20. 1927—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 50, pl. 15. 1927—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1:54. 1934—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:33, pl. 1, f. 9. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:76. 1948—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 49, pl. 5, f. 1. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 407. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 43. 1956.

(川村, 植. 雑. 23:67, f. 1. 1909; Illus. Jap. Fungi, pl. 12, f. 1—4. 1941; 日. 菌. 図説, n. 32. 1929; 食用菌及有毒菌, f. 5, 11(p. 8, 12). 1931; 日. 菌. 図鑑, 4:469, f. 450. 1954—白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 319. 1917; ed. 3. 186. 1927—梅村, 富士. 植. 志. 368. 1923—MATSUURA & KANADA, Tran. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:119. 1931—松浦, 茸類辞典, 45, f. 44. 1933; 応用菌蕈学, 518, f. 395—398. 1941—小林, 日. 隠. 植. 図. 563, pl. 272, f. 3. 1939—牧野, 日. 植. 図鑑, 1019, f. 3055. 1940—今関, 原色きのこ, pl. 6(左). 1942; 及土岐, 林. 試. 研. 報. 67:45, pl. 2, f. 3. 1954—原, 日. 菌. 目. 173. 1954)

Mastocephallus procerus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2:860. 1891.

Mastocephallus extinctriusu O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):478. 1898.

Leucocoprinus procerus PAT. Ess. Tax. 171. 1900—HEIM, Champ. Eur. 2:414, pl. 43, f. 3. 1957.

子実体は孤生或は群生；傘は径 8—15 cm, 或は時に 25 cm に及ぶ, 初め楕円状卵形, のち鐘形～丸山形, 遂に殆ど扁平となる, 中丘を有す；表面は初め平滑にて赤褐色或は焦茶色なるも, 開張に伴つて中丘部以外は大形不規則の褐色鱗片に裂け, その鱗片間に綿絮状小鱗片あり, のち散在し徐々に剝離す, 鱗片の下は白色, 周辺淡色にて尨毛状, 縁に房毛あり；肉は厚く, 柔軟, 弾性, 白色, 臭及味よし；褶は離生或は隔生. 襟帯を作る, 白色或は桃色にて老時褐色となる, 密, 広幅, 後方僅か狭く, 薄し, 稜に綿絮あり；茎は 15—35×1.5—2 cm, 時に 50 cm に及ぶ, 上方に漸細, 基部球根状, 綿絮状, 赤褐色, 褐色の細鱗片に裂け蛇紋様を呈す, 中空或は充塞；鍔は上位にて著し, 2重, 上鍔は白色, 綿毛状にて柔軟, 可動, 下鍔は褐色, 類革質にて堅靱, 表面に小褐色鱗片を存し傘皮との連結を表示す, 永存性；胞子は楕円形, 平滑, 12—18×8—12 μ；胞子紋は白色；稜嚢体は多生, 類円筒形, 35—45×10—15 μ；可食。

所在及産地

草原及林間陽地—夏秋

北海道, 本州—欧. 北米. 阿. 濠. 亜(支. 小亜)

和名 カラカサタケ（傘茸）〔川村〕

ニギリタケ（握茸）〔方言〕

キジタケ（雉茸）〔方言〕

Macrolepiota rachodes (VITT.) SING.

カラカサタケモドキ

SINGER, Agaricales, 417. 1949.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 48. 1957)

Agaricus rachodes VITT. Fung. Mang. 158, pl. 20. 1835—FRIES, Epicr. Myc. 13. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:20. 1857; Hymen. Eur. 29. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 92, pl. 3, f. 6. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:130. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:12. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 22(no. 20). 1883; Handb. Austr. Fungi, 5. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:28. 1876—WINTER, Pilze, 1:841. 1884.

Agaricus procerus var. *rachodes* RABENH. Deut. Krypt. Fl. 1:574. 1844.

Lepiota rachodes QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:70. 1872—GILLET, Champ. Fr. 57, c. ic. 1874

—KARSTEN, Hattsv. 1:8. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:29. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 70. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1:675. 1889—BARLA, Champ. Alp. Marit. 22, pl. 9, f. 1—5. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:273. 1900—MORGAN, Jour. Myc. 13:8. 1907—W. G. SMITH, Brit. Basid. 20. 1908—MASSEE, Brit. Fungi, 88, pl. 4, f. 5. 1911—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):713 B. 1912—MURRILL, N. Am. Fl. 10:64. 1914—LANGE, Agar. Denm. 2:23, f. 4 a. 1915; Fl. Agar. Dan. 1:25, pl. 9, f. c. 1935—RICKEN, Blätterp. 317, pl. 84, f. 1. 1915—REA, Brit. Basid. 65. 1922—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:35. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:77. 1948—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 49, pl. 6. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 407, f. 21. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 44. 1956.

(本郷, 滋. 大. 学芸. 論集. 1:93. 1952—原, 日. 菌. 目. 179. 1954)

Lepiota procera var. *rachodes* QUÉL. Enchir. Fung. 5. 1866—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:234. 1893.

Mastocephalus rhacodes O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2:860. 1891.

Leucocoprinus rachodes PAT. Ess. Tax. 171. 1900—HEIM, Champ. Eur. 2:415, f. 278. 1957.

子実体は孤生或は群生; 傘は径 7—14cm, 初め球形, のち丸山形〜やや扁平となり, 中央圧低さる; 表面は乾燥, 幼時平滑にて灰褐色, 開張に伴つて中央以外は甚だ粗剛なる幾分覆瓦状をなす大鱗片に裂く; 肉は白色, 傷時空気に触れて赤変す, その程度は中盤部及茎部に於て著し, 味及臭よし; 褶は離生或は隔生, 白色, 密, 広幅; 茎は 7—20×1—2cm, 同幅或は上方に漸細, 基部著しき球根状, 白色〜微赤色, 平滑にて鱗片なし, 中空; 鍔は上位にて著しく, 2重, 上鍔は可動, 白色, 下鍔帯褐色; 胞子は楕円形, 平滑, 9—12×6—7μ; 胞子紋は白色; 可食。

所 在 及 産 地

樹下殊に針葉樹下地上—秋

北海道, 本州—欧. 北米. 濠

和 名 カラカサタケモドキ (擬傘茸) 〔今井〕

Macrolepiota naucina (FR.) SING.

シロカラカサタケ

SINGER, Agaricales, 417. 1949.

Agaricus spherosporus KROMBH. Abbild. 4:10, pl. 24, f. 19—23. 1836.

Agaricus laevis KROMBH. Abbild. 4:16, pl. 26, f. 16—17. 1836.

Agaricus naucinus FR. Epicr. Myc. 16. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:27. 1857; Hymen. Eur. 34. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl 1:572. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 94. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:133. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:16. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 15(no. 35). 1883; Handb. Austr. Fungi, 8. 1892—WINTER, Pilze, 1:838. 1884.

Agaricus laevis FR. Hymen. Eur. 184. 1874.

Lepiota naucina QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1: 73. 1872—GILLET, Champ. Fr. 59, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:11. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:43. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 86. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 28, pl. 15, f. 1—4. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:245. 1893; Brit. Fungi, 93. 1911—LLOYD, Myc. Writ. 1:7. 1898—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:272. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 166. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 77, f. 79—80. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 23. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 19, f. 17. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 708, pl. 133. 1912—MURRILL, Mycologia, 6:165, pl. 133. 1914; N. Am. Fl. 10:49. 1914—RICKEN, Blätterp. 319, pl. 84, f. 2. 1915—LANGE, Agar. Denm. 2:23, f. 5. 1915; Fl. Agar. Dan. 1:25, pl. 9, f. A. 1935—KAUFFMAN, Agar. Mich. 646. 1918—REA, Brit. Basid. 72. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 1:pl. 25. 1927—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 47, pl. 14. 1927—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:39. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:77. 1948—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 52, pl. 7, f. 3. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 406. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 45. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2:403, pl. 42, f. 1. 1957.

(原. 日. 菌. 目. 179. 1954)

Agaricus naucinoides PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 29:66. 1876.

Lepiota pudica QUÉL. Enchir. Fung. 7. 1886.

Mastocephalus naucinus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2:860. 1891.

Lepiota naucinoides MORG. Jour. Myc. 13:10. 1907.

子実体は孤生或は群生; 傘は径 5—8cm, 或はそれ以上に及び, 初め類球形〜卵形, のち丸山形, 遂に中央圧低さる; 表面は白色, 時に淡白色或は帯黄色, 平滑, 絹様光沢あり, 時に中部裂け, 粉状; 肉は肉質, 厚く, 白色, 臭及味温和; 褶は離生, 白色漸次桃色となり, 遂に汚褐色となる, 密, 中位に広幅; 茎は 8—15×0.75—1.7cm, 殆ど同幅或は上方僅か漸細, 基部やや太し, 白色, 平滑, 無毛, 充塞,

のち中空；鍔は上位，白色，2重，狭く，幾分厚く，可動，永存或は消失性；胞子は卵状楕円形，平滑，無色～微かに桃色を帯ぶ，8—10×5—6μ，変化性に富む；胞子紋は白色；可食。

所在及産地

草原地，路傍等地上—夏秋

北海道—欧.北米.濠

和名 シロカラカサタケ（白傘茸）〔今井〕

Leucocoprinus PAT.
キヌカラカサタケ属

PATOUILLARD, Bull. Soc. Myc. Fr. 4:26. 1888—SINGER, Agaricales, 423. 1949.

Mastocephalus BATTARRA, (1755) in O. KUNTZE Rev, Gen. 2:857. 1891.

? *Hiatula*(FR.) MONTAGNE, Ann. Sci. Nat. Ⅳ, 1:107. 1854.

? *Leptomyces* MONTAGNE, Syll. Cryptog. 128. 1856.

族の性質に同じ；子実体は薄きヒトヨタケ（*Coprinus*）に甚だ類似し，傘肉は少くともその縁の半分は放射状に裂けて櫛歯状となり，内方半分に於ても甚だ薄肉なり；傘の上表皮層は細胞及菌糸の異なる型の混同より成り，一様なる柵状或は子実層状をなすことなし；褶は薄くして柔軟，往々やや液化す；胞子紋は純白色～帯黄色；胞子は多少明かなる発芽孔を有す，内膜は常にクレシール青にて異性染色さる，膜に刻紋なし，臍上扁部或は凹みなく或は不明瞭扁部を有す；嚢状体は褶側に欠如或は多からず；稜嚢体は通常多数；菌絆通常欠如；組織は非糊性；托実質は多少整型；茎は通常鍔あり，鍔は通常少くとも老時に於て可動；コップ形の壺なし；地上或は種々なる基物上に生ず，多分常に半被実，熱帯及び暖地産，約9種を知らる，本属には猛毒菌を含む。

（本属名は leukos〔希〕（白色），*Coprinus*(属名)より出づ）

基準種 *L. flavipes* PAT.

本邦既知種検索表

A．傘は白色。

a．傘は時に帯黄或は帯褐色，鱗片は白色なるも往々褐色を呈す。

キヌカラカサタケ ***L. cepaestipes*** (269)

b．傘は中央に向つて僅か紅褐色を帯ぶ，鱗片は暗褐色，茎甚だ長し。

ミイノヒガサタケ ***L. otsuensis*** (270)

B．傘は黄色。

a．茎は寧ろ短く，基部球根状；胞子 8—10×6—7.5μ。 コガネキヌカラカサタケ

L. luteus (270)

b．茎は長く，基部球根状ならず；胞子 10—12×6—8μ。 キツネノハナガサタケ

L. fragilissimus (271)

* 前種に似て淡色；胞子 5—6.5×4—5.5μ。 ウスキハナガサタケ

L. denudatus* f. *major (271)

C．傘は赤褐色；茎の基部球根状ならず。

アカキツネガサタケ ***L. japonicus*** (272)

Leucocoprinus cepaestipes (SOW. ex FR.) PAT.
キヌカラカサタケ

PATOUILLARD, Ess. Tax. 171. 1900—SINGER, Agaricales, 424. 1949.

Agaricus cretaceus BULL. Champ. Fr. pl. 374. 1791.

Agaricus cepaestipes SOW. Col. Fig. Engl. Fungi, 1:pl. 2. 1797—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 416. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:280. 1821; Epicr. Myc. 17. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:27. 1857; Hymen. Eur. 35. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:572. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 95. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:134. 1867—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:30. 1876—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:16. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 5(no. 36). 1883; Handb. Austr. Fungi, 9, 1892—WINTER, Pilze, 1:837. 1884.

Agaricus cepaestipes var. *cretaceus* PERS. Syn. Meth. Fung. 416. 1801—FRIES, Hymen. Eur. 35. 1874—COOKE, Illus. Brit. Fungi, 8:pl. 942. (no. 1109). 1891.

Lepiota cepaestipes QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:73. 1872; Enchir. Fung. 7. 1886—GILLET, Champ. Fr. 65, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:13. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 43. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:43. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 69. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1:673. 1889—BARLA, Champ. Alp. Marit. 29, pl. 15, f. 7—11. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:246. 1893—LLOYD, Myc. Writ. 1:6. 1898—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:272. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):708. 1912—RICKEN, Blätterp. 320. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 640, pl. 130. 1918—REA, Brit. Basid. 74. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 44, pl. 11. 1927—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:37, pl. 14, f. F. 1935—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:43. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:73. 1948.

(川村, 日. 菌. 図鑑, 4:473, f. 453. 1954)

Lepiota cepaestipes var. *cretacea* SACC. Syll. Fung. 5:44. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 69. 1915—REA, Brit. Basid. 74. 1922.

(川村, 日. 菌. 図鑑, 4:474, f. 454. 1954)

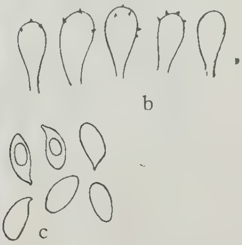
Mastocephalus cepaestipes O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2:859. 1891.

Lepiota mammaeformis UNDERW. Bull. Torr. Bot. Club, 24:82. 1897.

Lepiota cretacea MORG. Jour. Myc. 13:3. 1907 —MURRILL, N. Am. Fl. 10:49. 1914—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 405. 1953.

Hiatula cepaestipes HEIM, Champ. Eur. 2:418, f. 280, A. 1957.





第 115 図　キヌカラカサタケ Leucocoprinus cepaestipes
a. 子実体　×1/2
b. 嚢状体
c. 胞子　×750
（大谷氏）

子実体は群生或は叢生; 傘は径 2—5 cm, 初め類卵形, 鈍頭, のち鐘形〜開張し中丘を有す; 表面は乾燥, 白色, 帯黄色或は帯褐色, 中央暗色, 初め無毛, のち中丘以外は小形多数の粉末或は繊維状又は綿架状早失性の鱗片に被わる, 鱗片は往々褐色を呈し, 幾分同心円的にならび縁辺に於ては疎開す, 縁辺に櫛歯状溝を有し, 裂け易し; 肉は薄く, 白色, 臭及味殆どなく, 或は苦し; 褶は離生, 白色〜帯白色, 密, 狭幅, 薄し, 稜は粉状; 茎は 5—8×0.4—0.8 cm, 上方に漸細, 基部のみ膨大し玉葱花茎形或はラッキョウ形, 白色, 無毛或は早失性繊弱の綿架に被わる, 中空; 鍔は白色, 薄膜質, 固定, 下位, 半永存性; 胞子は橢円形, 平滑, 7.5—9×4—5 μ; 胞子紋は白色; 嚢状体は洋梨形或は幾分棍棒形, 幅約 5 μ, 先端に毛状突起を存し或は欠如す; 可食。

所在及産地

樹下或は林内腐蝕土, 温室, 温床土上—夏秋　　北海道—欧. 北米. 濠

和名　キヌカラカサタケ (絹傘茸)〔今井〕
シロキツネガサタケ (白狐傘茸)〔川村〕
ヒメカラカサタケ (姫傘茸)〔川村〕

Leucocoprinus otsuensis HONGO
ミイノヒガサタケ

HONGO Jour. Jap. Bot. 28:70, f. 2. 1953.
(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 48, f. 114, pl. 21, f. 114. 1957)

子実体はやや叢生或は群生; 傘は径 3—6 cm, 初め卵形, のち円錐形〜丸山形, 遂に開張し, 通常鈍中丘を有す; 表面は乾燥, 白色, 中央に向つて僅か紅褐色を帯ぶ, 絹糸状繊維あり, 中央以外に多少消失性の暗褐色綿架状小鱗片を同心円的に散在す, 鱗被は縁に向つて淡色〜白色となる, 周辺に襞状線条を有す; 肉は薄く, 白色, 臭なし; 褶は隔生, 密〜やや疎, 白色, 薄く, 幅 2—5 mm, 稜は平坦; 茎は 5—15×0.2—0.5 cm, 上方に漸細, 基部やや球根状, 上部白色, 基部多少赤褐色, 脆く, 中空; 鍔は寧ろ隔り, 膜質, 薄く, 白色, 消失性; 胞子は橢円形, 先端に扁平の発芽孔あり, 平滑, 9—11×6.5—7.5 μ, 或は 10—13×6—8 μ, 擬糊性; 胞子紋は白色; 稜嚢体は多生, 棍棒形〜便腹状, 鈍頭, 無色, 薄膜, 28—48×7.5—19 μ。

所在及産地

林内土上, 朽木上—秋　　本州

和名　ミイノヒガサタケ (三重日傘茸)〔本郷〕

Leucocoprinus luteus (BOLT. ex SECR.) LOCQUIN
コガネキヌカラカサタケ

SINGER, Agaricales, 424. 1949.

Agaricus luteus BOLT. Hist. Fung. Halif. 1: pl. 50. 1788.

Agaricus cepaestipes var. *luteus* PERS. Syn. Meth. Fung. 416. 1801—SECRETAN, Mycogr. Suisse, 1:56. 1833—FRIES, Hymen. Eur. 35. 1874.

Agaricus flammula ALB. et. SCHW. Consp. Lusat. 149. 1805—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:133. 1867.

Agaricus flos-sulphuris SCHNIZLEIN, in STURM, Deut. Fl. 3, (31):1, pl. 1. 1851.

Lepiota lutea GODFRIN, Bull. Soc. Myc. Fr. 13:33. 1897—MORGAN, Jour. Myc. 13:4. 1907 —GUEGUEN, Bull. Soc. Myc. Fr. 24:121. 1908 REA, Brit. Basid. 74. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1:pl. 15. 1930; Agari-

cales, 1:74. 1948—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1: 37, pl. 14, f. G. 1935—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:44. 1938—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 405, f. 576. 1953.

(S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:9. 1939—原, 日. 菌. 目. 179. 1954.)

Lepiota flammula GILL. Champ. Fr. 63, c. ic. 1874.

Lepiota cepaestipes var. *lutea* QUÉL. Enchir. Fung. 7. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5:44. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 70. 1915.

Hiatula lutea HEIM, Champ. Eur. 2:419, f. 280, B. 1957.

Agaricus cepaestipes Auct. nonnul. pr. p.

Lepiota cepaestipes Auct. nonnul. pr. p.

子実体は群生或は叢生；傘は径 1—3cm，或はそれ以上に及び，初め円錐形，のち鐘形～丸山形，遂に圧低さる，中丘を有す；表面は乾燥，硫黄色，のち中央濃色，頂部殊に粉状にて同色の小粒状早失の綿絮に被わる，周辺に長き襞状溝あり；肉は甚だ薄く，乾燥，柔軟，膜質，裂け易く，味なく，臭はなきか或は不快；褶は離生～隔生，同色，やや密，寧ろ狭幅，薄し；茎は 4—8×0.2—0.4cm，上方に漸細，基部球根状，同色，粉綿状，のち無毛，中実，のち中空；鍔は初め上位，茎の伸長に伴つて隔る，膜質，同色；胞子は卵形，平滑，8—10×6—7.5μ；胞子紋は白色；稜嚢体は紡錘形，25—55×10—15μ。

所在及産地

羊歯，椰子繊維腐蝕土上

北海道，本州，小笠原島—欧. 亜(錫?)

和名 コガネキヌカラカサタケ(黄金絹傘茸)〔今井〕

Leucocoprinus fragilissimus (BERK. et RAV.) PAT.

キツネノハナガサタケ

PATOUILLARD, Ess. Tax. 171. 1900—SINGER, Agaricales, 424. 1949.

Hiatula fragilissima BERK. et. RAV. Cent. N. Am. Fungi, n. 16—SACCARDO, Syll. Fung. 5:308. 1887.

Agaricus licmophorus BERK. et BR. Jour. Linn. Soc. 11:500. 1871—COOKE, Handb. Aust. Fungi, 8. 1892.

Mastocephalus licmophorus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2:860. 1891.

Lepiota licmophora SACC. Syll. Fung. 5:44. 1887—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:272. 1900.

(KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 4, f. 20—23. 1912; 日. 菌. 図説, n. 47. 1930; 日. 菌. 図鑑, 4:472, f. 452. 1954—原, 日. 菌. 目. 179. 1954)

Agaricus fragilissimus P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:263. 1900.

Lepiota fragilissima MORGAN, Jour. Myc. 13: 5. 1907.

Leucocoprinus licmophorus PAT. Bull. Soc. Myc. Fr. 29:216. 1913.

Hiatula licmophora PETCH

(小林, 日. 隠. 植. 図. 565, pl. 273, f. 7—11. 1939—原, 日. 菌. 目. 153. 1954)

Lepiota pseudolicmophora REA, Brit. Basid. 74. 1922—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:45. 1938.

子実体は孤生或は群生；傘は径 2—5cm，初め円錐形，のち鐘形，更に扁平となり，時に圧低され，僅か中丘あるか或は窪める小円板状となる，膜質，甚だ薄く，脆し；表面は濃黄色或は時に帯黄色，殆ど中心迄放射状隆起線あり，線上に同色或は暗色の綿絮を存す，縁は鋸歯状；褶は隔生，淡黄色，疎，狭幅，やや便腹状，薄し；茎は 7—12×0.2—0.3cm 上方に僅か漸細，基部やや太く，黄色，殆ど無毛或は粉状，基部細軟毛あり，縦裂し易く，中空；鍔は中位，薄膜質，黄色，消失性；胞子は楕円形，平滑，10—12×6—8μ；胞子紋は白色；褶側嚢体は散生，棍棒形にて便腹状。

所在及産地

樹下草地及温室内地上—夏秋

北海道，本州—欧. 北米. 濠. 亜(錫. 支)

和名 キツネノハナガサタケ（狐花傘茸）〔川村〕

Leucocoprinus denudatus (RAB.) SING. f. major HONGO

ウスキハナガサタケ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 31:250, f. 2, a-d. 1956.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 48, f. 115, pl. 21, f. 115. 1957)

基本種に比し顕微鏡的には差異なく，只子実体は大形なり，淡黄色にて短命，基本種は通常温室内に生ずるも，本形はマツの腐皮及材の破片上に多数束生す。全体淡黄色；傘は径 3—4cm，初め卵形にて鈍頭，遂に開張扁平，通常小形の鈍き多少濃色の中丘を有す；表面は乾燥，剝げ易き微細粒状同色の綿絮に中丘以外部を蔽われ，縁に向つて放射状線条ありて屢々裂ける；肉は黄白色，膜質，脆く，無味無臭；褶は離生～隔生，密，薄く，やや便腹状，寧ろ狭幅(± 3mm)，稜は全縁；茎は 6—8×0.25—0.35

cm，幾分下方太く，傘面の如く微細綿架を散在す，中空，基端に多数の淡黄色根状束を有す；鍔は膜質，隔り，早失性；胞子は卵形，平滑，無色，擬糊性，5—6.5×4—5.5μ，発芽孔なし；担子柄は4胞子，10—12.5×6.5—7μ；稜嚢体は多生，20—32×7—10.5μ；薄膜，便腹紡錘形，速に廃頽す；傘上の綿架は球形の細胞（径 16—32μ）より成る。

所在及産地

マツの残屍上一秋　本州

和名　ウスキハナガサタケ（淡黄花傘茸）〔本郷〕

Leucocoprinus japonicus (KAWAM.)
アカキツネガサタケ

Lepiota japonica KAWAM. Icon. Jap. Fungi, 4:475, f. 455. 1954.

子実体は孤生或は叢生；傘は径 4—8cm，初め類球形，のち開張し扁平となり，鈍中丘あり，往々周縁反転す，時に縦裂す；表面は初め平滑にて赤褐色，開張に伴つて中央部以外は赤褐色鱗被となりて散在す，中央濃色；肉は甚だ薄く，空気に触れて赤変せず；褶は離生，白色，密，便腹状；茎は 6—12×0.4—1cm，上方に漸細，基部肥大，多くは屈曲，白色，往々褐色を帯ぶ，平滑，充塞；鍔は上位，白色，柔軟；胞子は類楕円形或は殆ど広紡錘形，平滑，6—9×3—4.5μ；胞子紋は白色。

所在及産地

芝生及路傍地上一秋　本州

和名　アカキツネガサタケ（赤狐傘茸）〔川村〕

疑問種

Hiatula boninensis BERK et CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci, 4:118. 1860.
（松村，植．名鑑，1:146. 1904—白井，日．菌．目．41. 1905; ed. 2. 279. 1917; ed. 3. 162. 1927—原，日．菌．目．153. 1954）

Hiatula gracilis BERK. et. CURT. l. c. 118. 1860.
（松村，植．名鑑，1:147. 1904—白井，日．菌．目．41. 1905; ed. 2. 279. 1917; ed. 3. 163. 1927—原，日．菌．目．153. 1954）

Hiatula luteola BERK. et CURT. l. c. 118. 1860.

（Ⅱ） Lepioteae FAYOD　キツネノカラカサタケ族

FAYOD, Ann. Sci. Nat. Bot. VII, 9:349. 1889(ut *Lepiotés*)—R. MAIRE, Publ. Junta Ciènc. Nat. Barcelona, 1933:81. 1933—SINGER, Agaricales, 436. 1949.

子実体の習性，托実質及び大部分の性質は科の記載に同じ；胞子は常に多少擬糊性，明かなる発芽孔を有せず，クレシール青にて認識し得べき異性染色せず；茎は多くは鍔を有し，通常壺なく，甚だ僅かの種に於て何等のベールなし；褶は常に明かに離生；胞子紋は脱水により緑色～紫色に変ぜず，多くは白色なるも亦屢々クリーム色，淡褐～焦茶色にて多分屢々青緑色或はピンク色；地上及び生或は死植物上，蘚間に生ず。

SINGER 氏（1949）は2属を収む。

本邦既知属

Lepiota (PERS.) S. F. GRAY em SING.
キツネノカラカサタケ属

S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:601. 1821—SINGER, Agaricales, 438. 1949.

Agaricus sect. *Lepiota* PERSOON, Syn Meth. Fung. 257. 1801.

Agaricus ser. *Leucosporus* trib. *Lepiota* FRIES, Syst. Mycol. 1:19. 1821.

Fusispora FAYOD, Ann. Sci. Nat. Bot. VII, 9: 351. 1889.

Mastocephalus BATTARRA(1755)ex O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2:859. 1891.

Micropsalliota HÖHNEL, Fragm. Myk. 16:31. 1914.

Lepiotula R. MAIRE in LOCQUIN, Bull. Soc. Linn. Lyon, 14:28. 1945.

族の性質に同じ；然し上表皮層の菌糸は稀に匍匐し糸状；傘肉は稀に糊性；菌絆は存在或は欠如；子実体は明かなる鍔片の存在，雲母状或は繊維状質の鱗片を被むり，往々平滑の中盤部を残し，その周囲を回つて上表皮層は裂片となり，その裂片は傘肉より屢々濃色となりある等により特徴づけらる；嚢状体は時に褶側に存するも大多数の種類に於てはこれを欠如す；地上及び種々の生或は死基物上に生ず；半被実；汎布，約 24 種を知らる，多量に食用とさるるものなく，猛毒を有するものあり。

（本属名は lepis〔希〕（鱗片），ous, otos〔希〕（耳）より出づ）

基準種　*L. colubrina* (PERS.) S. F. GRAY

本邦既知種検索表

A. むしろ小形～甚だ小形なる菌；傘面は粉粒状或

は雲母粉状。

a．傘及茎は粉粒状。

α. 傘は径 1.5—3.5(4.5)cm，汚白色，のち灰汚褐色；茎は 4.5—6×0.3cm；胞子 6—7×2.5—3μ。

コナカラカサタケ ***L. hetieri*** (273)

β. 傘は径 1.3—1.7(2)cm，純白色～汚クリーム色，中盤赤味を帯ぶ；茎は 2—2.5(4)×0.15—0.2cm；胞子 4.5—5.5×2.5—3μ。

コナカラカサタケモドキ

L. pseudogranulosa (274)

b．傘面は雲母粉状，帯白色にて肉黄色～桃色を帯ぶ。

α. 傘は径 1—2.5cm。

ヒメコナカラカサタケ ***L. seminuda*** (274)

β. 傘は 0.8—1.1cm。

イシヤマコナカブリガサタケ

f. ***minima*** (275)

B．むしろ大形～甚だ小形菌；傘及茎に鱗片あり，まれに平滑；鍔は多くは早失性にて永存性のもの少し，胞子は橢円～紡錘或は倒洋独楽形又は砲弾形。

a．中形～むしろ大形菌；傘は初めより鈍凸頭の円錐状内生鱗片に全面を蔽わる。

α. 褶は叉状；茎は只僅か鱗片を散生す；傘は径 7—10cm，表面の鱗片は脱落性。

オニタケ ***L. acutesquamosa*** (275)

β. 褶は叉状ならず；茎は鍔より以下及鍔の下面に傘面と同様なる粗大鱗片を被むる，鱗片は永存性；傘径 4—5cm；茎の上部より暗色の水滴を出す。

ツノカラカサタケ ***L. hystrix*** (276)

b．中形～甚だ小形菌；傘面の外皮は裂けて鱗被を作る，まれに繊維状平滑。

α. 胞子はむしろ大形（11—15×4—6μ）にて紡錘形；傘面は帯褐色鱗被を有し，径 3—7cm。

ワタカラカサタケ ***L. clypeolaria*** (276)

β. 胞子は長さ 10μ 以上のもの少くして狭く，多少砲弾形。

I．茎は殆ど平滑；傘は径 1.5—4.5cm，表面は赤褐色。

キツネノカラカサタケ

L. cristata (277)

II．茎は平滑ならず。

1．傘は径 1.5—3cm，栗褐色；茎は同色の小鱗被を点在す；褶は白色，のちクリーム色，更に赤味を帯ぶ。

クリイロカラカサタケ

L. castanea (278)

2．傘は径 2.5—3cm，類シトロン色，灰褐鱗被を有し，茎に同鱗被あり；褶はシトロン色にて藍色に変ず。

キヒダカラカサタケ

L. subcitrophylla (278)

γ. 胞子は中形或は小形，卵形～橢円形。

I．傘面に有色の小鱗被を密布す。

1．茎の基部著しき球根状ならず。

甲．傘面に黒褐色小鱗片を密布す；傘径甚だ小にて 0.5—1.2cm；胞子 5—6×2.5—3μ。

ナカグロヒメカラカサタケ

L. neglecta (278)

乙．傘面に黒色小鱗片を密布す；傘径 1—2cm；胞子 5—7×3—5μ。

ゴマキツネガサタケ

L. micropholis (278)

丙．傘面に赤褐～褐色の小鱗片を密布す；傘径 3—4.5cm；胞子 6—10×4—6μ。

ドクキツネノカラカサタケ

L. helveola (279)

丁．傘面に栗褐色の小鱗片を密布す；傘径 3—4cm；胞子 10—12.5×6—7.5μ。

ムニンヒメカラカサタケ

L. boninensis (279)

2．茎の基部急に球根状となる；傘径 3.5—5.5cm，赤褐色の小鱗片を密布す；胞子 6—10.5×3—5μ。

ホテイカラカサタケ

L. subamanitiformis (279)

II．傘面白色絹糸繊維状，径 0.8—1.1cm；胞子 5—6.5(7.5)×3—3.5μ。

シロヒメカラカサタケ

L. cygnea (280)

Lepiota hetieri BOUDIER
コナカラカサタケ

BOUDIER, Bull. Soc. Myc. Fr. 18:137, pl. 6, f. 1. 1902—SACCARDO, Syll. Fung. 17:5. 1905—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:35, pl. 14, f. j. 1935—KÜHNER, Bull. Soc. Myc. Fr. 52:205. 1936—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:86. 1948

—SINGER, Agaricales, 441. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 396. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:412. 1957.
(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 53:393. 1939)

子実体は孤生或は散生；傘は寧ろ小形にて径 1.5—3.5cm，時に 4.5cm に及び，半球状鐘形，のち丸山形に開張す；表面は初め汚白色，のち灰汚褐色となり，老時及湿時幾分赤色を帯ぶ，密に粉粒を被むる，縁は多くは粉状膜質の膜片を有す；肉は白色，茎に於て基部より上方に向つて赤色となる，味及臭なし；褶は離生，帯白色，のち幾分灰色を帯び，寧ろ密；茎は寧ろ高くして細く，4.5—6×0.3cm，基部明に類球根状，表面は傘面の如く粉状，稀に只粉状菌糸の被膜を被むる；胞子は円墻形，截頭の基部を有し斜に嘴あり，6—7×2.5—3μ；胞子紋は白色。

所在及産地

湿林樹下生—秋 北海道—欧

和名 コナカラカサタケ（粉傘茸）〔今井〕

Lepiota pseudogranulosa (BERK. et BR.) SACC

コナカラカサタケモドキ

SACCARDO, Syll. Fung. 5:53. 1887—REID, Trans. Brit. Myc. Soc. 38:389. 1955—HONGO, Jour. Jap. Bot. 32:142, f. 1, e-g. 1957.

Mastocephalus pseudogranulus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2:860. 1891.

子実体は群生；傘は径 1.3—1.7(2)cm，円錐状丸山形～広丸山形，表面乾燥，綿絮粉状の類ピラミッド形早失性鱗片に蔽われ，老時一様に粉状或は粒状となる，純白色～汚クリーム色，各所殊に中盤に於て桃色或は淡肉桂色を帯ぶ；縁は初め粉質膜片を存す；肉は薄く，傘部にては白色，茎部にては帯褐色，無味無臭；褶は離生，密，白色，のち褐点を生じ，便腹状，稜は全縁，薄く，幅 1.5—3.5mm；茎は 2—2.5(4)cm×1.5—2mm，同幅或は基部幾分肥大，管状，鍔より以下は傘面と同じく粉状，頂部只僅かに霜粉状，基端に白色根状束あり；鍔は粉状，早失性，上位；胞子紋は白色；胞子は楕円形，平滑，4.5—5.5×2.5—3μ 或は 3.5—4×2—2.5μ；擬糊性；担子柄は4胞子，12.5—14.5—6.5×8μ；稜嚢体は棍棒形，薄膜，14—25×6.5—8μ；傘及茎上の粉は円筒形～骨形細胞より成り，30—72(93)×5—14(19)μ，屢々分岐す。

所在及産地

針葉樹林地上—夏 本州—錫，ベネゼラ

和名 コナカラカサタケモドキ（擬粉傘茸）〔本郷〕

Lepiota seminuda (LASCH) GILL.

ヒメコナカラカサタケ

GILLET, Champ. Fr. 71. 1874—QUÉLET, Enchir. Fung. 8. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5:50. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 88. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 31. 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:252. 1893; Brit. Fungi, 95. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:272. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 166. 1900—MORGAN, Jour. Myc. 12:157. 1906—W. G. SMITH, Brit. Basid. 25. 1908—MURRILL, N. Am. Fl. 10:48. 1914—LANGE, Agar. Denm. 2:30, f. 28. 1915; Fl. Agar. Dan. 1:36, pl. 14, f. B. 1935—RICKEN, Blätterp. 324. 1915—REA, Brit. Basid. 78. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1:pl. 16, f. 1. 1928—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:40. 1938—SINGER, Agaricales, 441. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 53, pl. 8, f. 2. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 395, f. 22, 563. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:412. 1957.
(原，日．菌．目．179. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，50，f. 122，pl. 22，f. 122. 1957)

Agaricus seminudus LASCH, Linn. 3:157. 1828—FRIES, Epicr. Myc. 18. 1838; Hymen. Eur. 38. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:572. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 18. 1883; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 19, f. a. (no. 43). 1883—WINTER, Pilze, 1:835. 1884.

Lepiota sistrata var. *seminuda* QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:231. 1872.

Mastocephalus seminudus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2:860. 1891.

Lepiota sistrata KONR. et MAUBL. Agaricales, 1:86. 1942.

子実体は群生；傘は小形，径 1—2.5cm，半球形～円錐形，のち丸山形，鈍頭，更に開張しやや中丘を有す；表面は初め厚き綿絮状類白色にて消失性のベールに包まれ，のち裸となり光沢あり，白色，のち肉黄色或は桃色，中央暗色，乾燥，雲母粉状，縁は薄く，粉状綿絮白色の膜片を有す；肉は白色，中央肉質，味及臭なし；褶は離生，白色，のちクリーム色，密，広幅，便腹状，後方丸く，薄し；茎は 2.5—3.5×0.15—0.2cm，同幅，基部球状ならず，上部白色或は桃色，下部淡銹紅色～暗褐色，早失性の被膜に包まれて鍔を作る，この鍔は早失し下部に白色粉末となりて残る，やや弾性，剛直，類革質，充塞のち中空；胞子は円墻形～楕円形，平滑，4.5—5×2—2.5μ；胞子紋は白色；嚢状体なし。

所在及産地

林間肥土上—夏秋　北海道—欧. 北米

和名　ヒメコナカラカサタケ（姫粉傘茸）〔今井〕

f. **minima** LANGE

イシヤマコナカブリガサタケ

LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:36, pl. 14, f. A. 1935—HONGO, Jour. Jap. Bot. 27:159, f. 1, d-f. 1952.（今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 51. 1957）

子実体は群生或は孤生，原種より更に小形，傘は径 8—11 mm，僅か中丘を有し，白色或は中央淡肉色を帯ぶ，茎は細長にて 2—3.5×0.07—0.1 cm, 胞子は 4—5×2.5—3μ, 早失性被膜を看過せばクヌギタケ（*Mycena*）或はエノキタケ（*Collybia*）と誤たるべし。

所在及産地

スギ林落葉間—秋　本州—欧

和名　イシヤマコナカブリガサタケ（石山（寺）粉傘茸）〔本郷〕

Lepiota acutesquamosa (WEINM.) GILL.

オニタケ

GILLET, Champ. Fr. 60, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:9. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 34. 1887—BARLA, Champ. Alp. Marit. 24, pl. 12, f. 4—7. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3: 236. 1893; Brit. Fungi, 89. 1911—LLOYD, Myc. Writ. 1:7. 1898—PATOUILLARD, Ess. Tax. 166. 1900—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 272. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 21. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 20, pl. 13, f. 20. 1910—LANGE, Agar. Denm. 2:28, f. 20. 1915; Fl. Agar. Dan. 1:25, pl. 10, f. F. 1935—KAUFFMAN, Agar. Mich. 633. 1918—REA, Brit. Basid. 67. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1:pl. 14. 1930; Agaricales, 1: 78. 1948—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:35. 1938—SINGER, Agaricales, 442. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 50, pl. 7, f. 1. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 397, f. 23. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:405, f. 271. 1957.

(KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 11, f. 8—10. 1914; 日. 菌. 図説, n. 16. 1929—白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 319. 1917; ed. 3. 185. 1927—小林, 日. 隠. 植. 図. 561, pl. 271, f. 1—2. 1939—今関, 原色きのこ, pl. 6(右). 1942; 及土岐, 林. 試. 研. 報. 67: 45. 1954—原, 日. 菌. 目. 178. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 52, f. 125, pl. 23, f. 125. 1957)

Agaricus acutesquamosus WEINM. Syll. Pl. Nov. 1:70. 1824—FRIES, Epicr. Myc. 14. 1883; Monogr. Hymen. Suec. 1:22. 1857—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:573. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 93. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:131. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:14. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 14(no. 24). 1883—WINTER, Pilze, 1:840. 1884.

Agaricus Friesii LASCH, Linn. 3:155. 1828—FRIES, Epicr. Myc. 14. 1838; Hymen. Eur. 31. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:573. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 361. 1883; Illus. Brit. Fungi, 8:pl. 941 (no. 1105). 1891—WINTER, Pilze, 1:840. 1884.

Agaricus Mariae KLOTZCH, Linn. 7:196, pl. 8. 1832.

Agaricus aculeatus VITT. Fung. Mang. 348. 1836.

Lepiota Friesii QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1: 72. 1872—GILLET, Champ. Fr. 60, c. ic. 1874—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:237. 1893; Brit. Fungi, 89, pl. 5, f. 5. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:34. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 76. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 24, pl. 12, f. 1—3. 1889—SCHROETER, Pilze Schles. 1:674. 1889—PATOUILLARD, Ess. Tax. 166. 1900—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 272. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 21. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 711. 1912—RICKEN, Blätterp. 322, pl. 86, f. 1. 1915—REA, Brit. Basid. 67. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 1:pl. 27. 1927—HEIM, Champ. Eur. 2:405, f. 272, A. 1957.

（川村, 日. 菌. 図鑑, 4:476, f. 456. 1954）

Lepiota Friesii var. *acutesquamosa* QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:72. 1872.

Agaricus Friesii acutesquamosus* FRIES, Hymen. Eur. 31. 1874.

Mastocephalus acutesquamosus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2:859. 1891.

Mastocephalus Friesii O. KUNTZE, l. c. 860. 1891.

Lepiota acutesquamosa var. *Friesii* KONR. & MAUBL. Icon. Sel. Fung. 6:45. 1926; Agaricales, 1:78. 1948.

Lepiota acutesquamosa forma *furcata* KÜHNER, Bull. Soc. Myc. Fr. 52:210. 1936.

子実体は孤生或は群生；傘は径 7—10 cm，或はそれ以上に及び，初め円錐形，のち丸山形～扁平，鈍頭或はやや中丘を有す；表面は初め柔軟なる黄褐色或は淡焦茶色の圧着せる軟毛に表われ，これは通常褐色或は赤褐色の密なる尖りてピラミッド形直立の脱落性鱗片或は疣となり，その先端は黒色となり中盤に特に密集して暗色を呈す，それ等の間の割目は皮下の白色繊維状組織を露出す，縁は初め内屈し小形白色の縁膜片を有し，のち展開，遂に反転し，縁膜片不明となる；肉は白色，やや厚く，不快臭あ



第 116 図 オニタケ
Lepiota acutesquamosa
×1/3 （大谷氏）

り；褶は離生，白色にて帯黄色となり，密，寧ろ狭幅，薄し，叉状をなす，稜に細鋸歯あり；茎は8—10×0.8—1.2cm，同幅或は上方に漸細，基部類球根状，帯白色，下方帯褐色にて分散せる褐色鱗片あり，充塞〜中空；鍔は白色にて淡紅肉桂色となり，絹糸状光沢を有し，被膜の破片を存す，寧ろ消失性；胞子は類円壔形，平滑，5—7.5×3.5μ；胞子紋は白色；嚢状体は倒卵類球形，径 8—16μ；可食。

所 在 及 産 地

林地或は腐木上，庭園，路傍等—夏秋
北海道，本州—欧．北米．亜（小亜）

和 名 オニタケ（鬼茸）〔川村〕

Lepiota hystrix MOLLER et LANGE
ツノカラカサタケ

LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:26, pl. 10, f. E. 1935—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 397, f. 566. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2: 406. 1957.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，52，pl. 23，f. 126. 1957）

Lepiota acutesquamosa forma *typica* KÜHNER, Bull. Soc. Myc. Fr. 52:209. 1936.

子実体は群生或は孤生；傘は径 4—5cm，丸山形，初めより内生のピラミッド形の寧ろ粗き鱗片に蔽わる，鱗片は黒褐色にて基部灰褐色，繊維状，永存性なり，縁に近き所にては鱗片小形となり，皮下組織は白色なり，傘縁は褶をこす；褶はむしろ密，叉状ならず，レンズ下にて黒く縁取らる；茎は 5—6×0.6—1cm，同幅，鍔より上部は白色にて屢々暗褐色の液を分泌す，鍔より以下及鍔の下面は直立せる黒褐色鱗片を被むり，ほぼ傘面と同様の観を呈す；担子柄は4胞子，17—22×5.5μ；胞子は狭楕円形，平滑，6.5×2.5μ；嚢状体は棍棒形，先端幾分頭状，内容幾分暗褐色。

所 在 及 産 地

林内地上—秋 本州—欧

和 名 ツノカラカサタケ（角傘茸）〔今関及本郷〕

Lepiota clypeolaria (BULL. ex FR.) QUÉL.
ワタカラカサタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:72. 1872; Enchir. Fung. 6:1886—GILLET, Champ. Fr. 61, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:10. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:36. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 82. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1: 674. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:240. 1893; Brit. Fungi, 91. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 166. 1900—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:272. 1900—MORGAN, Jour. Myc. 12:197. 1906—W. G. SMITH, Brit. Basid. 22. 1908—RICKEN, Blätterp. 323, pl. 85, f. 2. 1915—LANGE, Agar. Denm. 2:24, f. 7. 1915; Fl. Agar. Dan. 1:27, pl. 11, f. D. 1935—KAUFFMAN, Agar. Mich. 631, pl. 128. 1918—REA, Brit. Basid. 69. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 1:pl. 31. 1927—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:36. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:79. 1948—SINGER, Agaricales, 442. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 51, pl. 8, f. 1. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 402, f. 574. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 46, B. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2:406. 1957.

（原，日．菌．目．179. 1954—今関及土岐，林．試．研．報．67:45. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，51，f. 123，pl. 23，f. 123. 1957）

Agaricus clypeolarius BULL. Champ. Fr. pl. 405, f. 2. 1791—FRIES, Syst. Myc. 1:21. 1821; Epicr. Myc. 15. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:24. 1857; Hymen. Eur. 32. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:573. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung 94. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:132. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:15. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 38(no. 29). 1883; Handb. Austr. Fungi, 6. 1892—WINTER, Pilze, 1:839. 1884.

Mastocephalus clypeolarius O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2:860. 1891.

Lepiota magnispora MURR. Mycologia, 4:237. 1912.

子実体は散生或は孤生；傘は径 3—7cm，鐘形，のち丸山形より扁平となり，鈍頭或は中丘を有す；表面は初め外皮薄くして帯黄色，帯赤黄色或は帯褐色なるも速に中央部以外は綿絮状小鱗片に裂け，割目は白色肉を露出す，老時鱗被下の縁辺は平坦或は

線条あり，縁に屢々被膜の残片なる縁膜片を有す；肉は白色，薄く，軟弱，味及臭よし；褶は離生，白色或は帯黄色，やや密，やや広幅，軟く，稜に細鋸歯あり；茎は 5—10×0.3—0.8 cm，同幅，或は基部僅か肥大し，同色，鍔より下は軟き弛き白或は帯黄色の鱗片或は軟毛に包まれ，上部は絹糸状，脆く，中空；鍔は綿絮状，同色，消失性；胞子は紡錘形或は長楕円形，平滑，11—15×4—6μ；胞子紋は白色；稜嚢体は膨大袋形，幅 10—20μ；可食。

所在及産地

林地—秋　　北海道，本州—欧. 北南米. 濠

名和　ワタカラカサタケ（綿傘茸）〔今井〕

Lepiota cristata (BOLT. ex FR.) QUÉL.

キツネノカラカサタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:72. 1872; Enchir. Fung. 6. 1886—GILLET, Champ. Fr. 61. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:10. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 43. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:39. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 77. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1:673. 1889—BARLA, Champ. Alp. Marit. 27, pl. 14, f. 1—4. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:242, f. 6—7(p. 3). 1893; Brit. Fungi, 92, pl. 4, f. 7. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 166. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 23. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 20, pl. 12, f. 19. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):712. 1912—RICKEN, Blätterp. 222, pl. 84, f. 3. 1915—LANGE, Agar. Denm. 2:26, f. 14. 1915; Fl. Agar. Dan. 1:31, pl. 12, f. A. 1935—KAUFFMAN, Agar. Mich. 641, pl. 131. 1918—REA, Brit. Basid. 71. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 1:pl. 34. 1927—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 44, pl. 12. 1927—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1:55, f. A. 1934—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:37. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:80. 1948—SINGER, Agaricales, 442. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 51, pl. 8, f. 3. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 399, f. 570, A. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 46, A. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2:410, f. 81(4), pl. 42, f. 2. 1957.

(P. HENNINGS, Hedwigia, 39, Beibl. 156. 1900—松村, 植. 名鑑, 1:150. 1904—白井, 日. 菌. 目. 47. 1905; ed. 2. 319. 1917; ed. 3. 186. 1927—小林, 日. 隠. 植. 図. 565, pl. 273, f. 1—6. 1939—広江, 応用菌蕈学, f. 820(右中)(p. 1207). 1941—原, 日. 菌. 目. 179. 1954—今関及土岐, 林. 試. 研. 報. 67: 45. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 50, f. 119, pl. 22, f. 119. 1957)

Agaricus conspurcatus WILLD. Prodr. Fl. Berl. 382. 1787.

Agaricus cristatus BOLT. Hist. Fung. Halif. 1:7. 1788—ALBERTINI & SCHWEINITZ, Consp. Fung. 145. 1805—FRIES, Syst. Myc. 1:22. 1821; Epicr. Myc. 15. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:25. 1857; Hymen. Eur. 32. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:573. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 94, pl. 3, f. 7. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:132. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:15. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1: pl. 29(no. 31). 1883; Handb. Austr. Fungi, 7. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:29. 1876—WINTER, Pilze, 1:839. 1884.

Agaricus miamensis MORG. Jour. Cincinn. Soc. Nat. Hist. 6:63, pl. 3. 1883.

Lepiota miamensis SACCARDO, Syll. Fung. 5: 40. 1887—MORGAN, Jour. Myc. 12:242. 1906—KAUFFMAN, Agar. Mich. 642. 1918.

(原, 日. 菌. 目. 179. 1954)

Mastocephalus cristatus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2:860. 1891.

Mastocephalus miamensis O. KUNTZE, l. c. 860. 1891.

Lepiota castaneidisca MURR. Mycologia, 4: 232. 1912.

子実体は群生或は孤生；傘は 1.5—4.5 cm，類卵形，のち鐘形～丸山形或は扁平となり，鈍頭或は中丘あり；表面は初め鈍赤或は赤褐色の外皮に被われ，のち暗色の中央以外は小形赤褐色鱗片に裂け，同心円的に配列し，割目は白色なり；肉は白色，薄く，無味にて臭は不快；褶は離生，白色にて，のち黄色を帯び，密，狭幅～類便腹状，稜は微細鈍鋸歯状；茎は 3.5—6.5×0.25—0.5 cm，同幅，白色或に淡灰褐色を帯び，無毛或は絹糸様繊維あり，充塞或は中空；鍔は白色，屢々赤色を帯び，膜質，狭くして不動，半永存性；胞子は砲弾形，平滑，5.5—7.5×2.5—4.5μ；胞子紋は白色；



第 117 図　キツネノカラカサタケ Lepiota cristata

嚢状体は膨大倒卵形，密生す。

所在及産地

肥土及林地一夏秋

北海道，本州一欧．北米．濠．亜(支．小亜)

和名 キツネノカラカサタケ（狐傘茸）〔白井〕

Lepiota castanea QUÉL.

クリイロカラカサタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 10 Suppl. 661, pl. 8, f. 1. 1880; Enchir. Fung. 6. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5:39. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 79. 1915—RICKEN, Blätterp. 325, pl. 84, f. 4. 1914—LANGE, Agar. Denm. 2:26. 1915; Fl. Agar. Dan. 1:31, pl. 12, f. G. 1935—REA, Brit. Basid. 72. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1:pl. 12, f. 2. 1929; Agaricales, 1:81. 1948—KÜHNER, Bull. Soc. Myc. Fr. 53:Atlas, pl. 74, f. 2. 1937—KÜHNER & RONAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 398. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:410, f. 275, A. 1957.

(今関及本郷，原色日．菌．図鑑，50, f. 120, pl. 22, f. 120. 1957)

Mastocephalus castaneus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2:859. 1891.

子実体は群生或は孤生；傘は径 1.5—3cm，僅か肉質，鐘状丸山形にて中丘あり，縁は最後に高まる，表面は乾燥，微細なる綿毛を被むり，ビロード状となり，栗褐色，殊に中盤に於て著しく，縁の方は細裂して粒状の鱗被となり，地色は淡色なり；褶は離生，密，便腹状，初め白色，のちクリーム色となり，更に赤味を帯ぶることあり，稜は異質；茎は同幅にて基部僅かに球根状，鍔より上部は帯白色にて光沢あり，鍔下は淡橙褐色の地に傘と同様の小鱗被を点在す，充塞，のち中空；鍔は膜状，薄く，白色，消失性，肉は薄く，傘に於てはクリーム色，茎に於ては淡黄褐色，変色せず，味温和，臭弱し；胞子紋は白色；胞子は砲弾形にて，横下側に嘴あり，顆粒を含み，平滑，無色，9—13×4—5μ；稜嚢体は紡錘形にて便腹状，無色，32—50×8—10μ。

所在及産地

林内地上一秋 本州一欧

和名 クリイロカラカサタケ（栗色傘茸）

〔今関及本郷〕

Lepiota subcitrophylla HONGO

キヒダカラカサタケ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 31:148. 1956.

(今関及本郷，原色日．菌．図鑑，50, f. 121, pl. 22. f. 121. 1957)

傘は径 2.5—3cm，円錐状丸山形，のち開張，屢々凸頭；表面は乾燥，類黄橙色，微細灰褐色鱗被を密布し，中央鱗片は合着す，縁に線条なし；肉は薄く，淡黄色，傷により藍色に変ず，無味無臭；褶は離生，黄橙色，藍色となる，やや疎，便腹状，幅 4—5mm；茎は 3—5.5×0.2—0.3cm，同幅或は基部僅か肥大，淡黄橙色，灰褐色鱗被を点在し，基部粗剛，管状；鍔は上位，綿絮状，不明瞭にて早失性；胞子は砲弾形，無色，擬糊性，8.5—10.5(12.5)×3.5—4μ；担子柄は4胞子；稜嚢体は群生，棍棒形〜類円筒形或は幾分紡錘形，薄膜，無色或は淡黄色 19—31×6—14μ；傘面の鱗被は外層の如く柵状；皮嚢体は円筒形〜棍棒形，薄膜，灰褐色，35—70×9.5—16μ；菌絆あり。

所在及産地

針葉林（モミ）地上一秋 本州

和名 キヒダカラカサタケ（黄褶傘茸）〔本郷〕

Lepiota neglecta HONGO

ナカグロヒメカラカサタケ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 31:251, f. 2, e-g. 1956.

子実体は散生；傘は径 0.5—1.2cm，円錐状丸山形〜扁平，鈍中丘あり：表面は乾燥，絹糸状，黒褐色の微細綿絮状鱗片を密布し，中央にては鱗片合着す，縁には鱗被なくして線条あり；肉は白色，不変化，中盤やや厚く，縁は薄く，無味無臭；褶は離生，密，白色，幅 1—2mm，便腹状；茎は 1—2×0.05—0.2cm，上部狭細，基端太く，屢々屈曲，やや絹糸状，白色，中空；鍔は中位，膜質，白色，薄く，直立，癒着；胞子は楕円〜卵形，平滑，無色，擬糊性，5—6×2.5—3μ；担子柄は4胞子，16—19×6.5μ；稜嚢体は群生，(16)22—33×7.5—11μ，便腹状，薄膜，無色，乾燥標品にては観過する程に速に廃頽す；鱗片は円筒形〜骨形細胞（約 17—50×4—10μ）の繊維より成り，焦茶色色素凝結を有す。

所在及産地

ヒノキ林腐蝕物上一夏 本州

和名 ナカグロヒメカラカサタケ（中黒姫傘茸）

〔本郷〕

Lepiota micropholis (BERK. et. BR.) SACC.

ゴマキツネガサタケ

SACCARDO, Syll. Fung. 5:61. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:243. 1893; Brit. Fungi, 93. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 25. 1908—REA,

Brit. Basid. 71. 1922—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 401. 1953.
（川村，日.菌.図鑑，4:477，f. 457. 1954）

Agaricus micropholis BERK. et BR. Jour. Linn. Soc. 11:505. 1871—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 362. 1883; Illus. Brit. Fungi, 8:pl. 943, f. B. (no. 1108). 1891.

Mastocephalus micropholis O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2:860. 1921.

子実体は群生或は散生；傘は小形にて径 1—2cm，初め円錐形，のち開張扁平となる；表面は白色，黒色細鱗片を有す，各鱗片は中部に於て互に連結し，周辺に至るに従つて散在し，縁辺に微線条あり；肉は甚だ薄く，白色；褶は離生，白色，やや密，幅 2 mm 内外，便腹状；茎は 2—3×0.2cm，上方に僅か漸細，下部少しく屈曲，基部僅か肥大，白色，無毛，中空；鍔はやや上位，扁平或は僅か下屈し，上面白色，下面少しく黒褐色を帯ぶ；胞子は楕円形，平滑，5—7×3—5μ；胞子紋は白色。

所在及産地

庭園，温室腐蝕土上—夏　　本州—亜(錫)欧

和名 ゴマキツネガサタケ（胡麻狐傘茸）〔川村〕

Lepiota helveola BRES.

ドクキツネノカラカサタケ

BRESADOLA, Fungi Trid. 1:15, pl. 16, f. 2. 1882; Icon. Myc. 1:pl. 32, f. 2. 1927—PATOUILLARD, Ess. Tax. 166. 1900—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:272. 1900—SACCARDO, Syll. Fung. 5:38. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 81. 1915—REA, Trans. Brit. Myc. Soc. 4:307, pl. 8. 1914; Brit. Basid. 70. 1922—RICKEN, Blätterp. 326. 1915—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:39. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:82. 1948—SINGER, Agaricales, 443. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 399. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 47. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2:408, pl. 43, f. 1. 1957.
（原，日.菌.目. 179. 1954—今関及本郷，原色日.菌.図鑑，50. 1957）

Mastocephalus helveotus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2:860. 1891.

子実体は群生或は孤生；傘は径 3—4.5cm，初め円錐形，のち丸山形～扁平，やや中丘を有す；表面は赤褐或は褐色の鱗片を密布す，縁に綿絮あり；肉は白色，薄く，皮下赤色を帯ぶ，味及臭なし；褶は離生，白色，のちやや黄色を帯ぶ，密，幅約 3mm，便腹状，稜に房毛あり；茎は 4—6×0.4—0.8cm，同幅或は上方に漸細，上方帯白色或は帯桃色にて繊維状，下方傘面と殆ど同色にて鱗片を被むる；鍔はやや低位，垂下し或は鱗片状，上面白色，下面同色，胞子は楕円形或は類腎臓形，平滑，6—10×4—6μ；胞子紋は白色；有毒と称せらる。

所在及産地

草原或は樹下肥土上—夏秋　　北海道—欧

和名 ドクキツネノカラカサタケ（毒狐傘茸）

〔今井〕

Lepiota boninensis S. ITO et IMAI

ムニンヒメカラカサタケ

S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:10. 1939.

子実体は孤生；傘は径 3—4cm，丸山形にて中丘を有す；表面は乾燥，淡汚桃色～淡黄白色，栗褐色の小鱗片を被むる，中央部一様に鱗片あるも，周辺にはこれを欠き線条あり；肉は白色或は灰色，薄し；褶は離生，白色，のち褪色す，密，前方広し；茎は 5—6×0.25—0.3cm，上方に僅か漸細，基部肥大，淡灰褐色～淡桃白色，粉状，中空；鍔は上位，膜質，細く，固定，淡灰褐色；胞子は楕円形，平滑，10—12.5×6—7.5μ；胞子紋は白色。

所在及産地

林地—秋　　小笠原島

和名 ムニンヒメカラカサタケ（無人(島)姫傘茸）

〔今井〕

Lepiota subamanitiformis IMAI

ホテイカラカサタケ

IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:38, pl. 1, f. 10. 1938.
（原，日.菌.目. 179. 1954）

子実体は孤生；傘は径 3.5～5.5cm，円錐状丸山形，中丘を有し，のち開張扁平となる；表面は乾燥，放射繊維あり，初め上皮一様にて赤褐色，のち破れて鱗片となり，白色の肉を露出す，縁にやや軟毛あり；肉は白色，薄く，味及臭よし；褶は離生，白色，密，幅約 5mm，便腹状；茎は 3.5—5.5×0.3—0.5 cm，上方に漸細，基部急に球根状となり径 1cm に及ぶ，白色，やや粉状或は殆ど無毛，中空；鍔はやや下位，白色，桃色の縁を有し，固定，薄膜質，永存性；胞子は円壔状楕円形或は円壔形，平滑，6—10.5×3—5μ；胞子紋は白色。

所在及産地

林間陽地—夏秋　　北海道

和名 ホテイカラカサタケ（布袋傘茸）〔今井〕

Lepiota cygnea LANGE

シロヒメカラカサタケ

LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:35, pl. 13, f. A. 1935—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:86. 1948—SINGER, Agaricales, 443. 1949—HONGO, Jour. Jap. Bot. 27:159, f. 1, a-c. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 405. 1953.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 51, f. 124, pl. 23. 124. 1957)

子実体は孤生或は群生；傘は甚だ小形，径 8—11 mm，鐘形，のち開張扁平となり，屢々中丘あり；表面は白色，時に中央部僅かに鞣皮色，絹糸状纎維あり，稜は遂に微細に罅裂す；肉は白色，臭及味なし；褶は隔生，白色，密或はやや密，狭幅；茎は 2—3.5×0.05—0.2 cm，基部僅か肥大，白色，初め多少綿絮状，のち無毛，中空；鍔は全縁，膜質，水平；胞子は楕円形，平滑，5—6.5(7.5)×3—3.5 μ；胞子紋は白色；稜嚢体は棍棒形，鈍頭，乳頭状或は頭状，30—33×7.5—11 μ。

所在及産地

混淆林埴土上，特にハンノキ或はシイノキ樹下—夏秋　本州—欧. 北米

和名 シロヒメカラカサタケ（白姫傘茸）〔本郷〕

疑問種

Lepiota depravata (BERK. et CURT.) SACC. Syll. Fung. 5:47. 1888＝*Agaricus depravatus* BERK. et CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4:111. 1858.

(松村, 植. 名鑑, 1:150. 1904—白井, 日. 菌. 目. 47. 1905; ed. 2. 319. 1917; ed. 3. 186. 1927—原, 日. 菌. 目. 179. 1954)

Lepiota hemisoodes (BERK. et CURT.) SACC. Syll. Fung. 5:45. 1887—S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:10. 1939＝*Agaricus hemisoodes* BERK. et. CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4:111. 1858.

(松村, 植. 名鑑, 1:150. 1904—白井, 日. 菌. 目. 47. 1905; ed. 2. 319. 1917; ed. 3. 186. 1927—原, 日. 菌. 目. 179. 1954)

Lepiota atrovinosa IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 55:444. 1941.

Lepiota inconspicua S. ITO et. IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:11. 1939.

(Ⅲ) Cystodermateae SING. シワカラカサタケ族

SINGER, Agaricales, 444. 1949.

胞子は単一或は一見単一の寧ろ薄き膜を有し，発芽孔なく，平滑，或は稀に有刺，非糊性或は糊性，稀に僅か擬糊性（但しその時は褶は直状垂生）；胞子紋は白色～帯褐淡黄色；コップ状壺は存在せず；褶は離生或は狭生～直生，稀に垂生；肉の菌糸に菌絆なし。

SINGER 氏 (1949) は 5 属を収む，本邦 2 属を産す。

本邦既知属検索表

A. 胞子紋は全然或は殆ど白色；胞子は完全に平滑にて著しき或は永存的の外被なし。
　　シワカラカサタケ属 **Cystoderma** (280)

B. 胞子紋は黄土色；胞子は屢々微かなる点を有し寧ろ永存的の外被を存す。
　　コガネタケ属 **Phaeolepiota** (283)

Cystoderma FAYOD

シワカラカサタケ属

FAYOD, Ann. Sci. Nat. Bot. VII, 9:351. 1889—SINGER, Agaricales, 447. 1949.

茎及び傘は成時被膜層或は上表皮層に被わる，上表皮層は球嚢（短細胞被）より成る，短細胞被は屢々長形のものを著しく混ずるも，他の場合には殆ど純然たる擬細胞組織状をなす；稀に只茎だけ細胞状被を有す；褶は狭生，直生，往々歯を有してやや垂生す，往々彎生，往々老時茎より分離す；托実質は整型或は類整型；胞子紋は白色；胞子は無色，平滑，楕円形～類球形，或は中部膨大～類菱形，糊性或は非糊性，又は弱き擬糊性；嚢状体は往々存在；茎は不明瞭なる鍔を有し，稀に鍔は能く発達し，外曲す；肉は肉質，柔軟，水潤状；組織は非糊性；菌絆あり；蘚上，地上或は腐木上に生ず，半被実；汎布；約 15 種を知らる，経済的関係なし。

（本属名は kystis〔希〕（嚢），dermis〔希〕（皮）より出づ）

基準種　*C. amianthinum* (SCOP. ex FR.) FAYOD

本邦既知種検索表

A. 胞子楕円形。
　a. 傘は赤或は褐色；嚢状体あり。
　　α. 傘は赤褐色；茎は纎細，基部球根状ならず。
　　　ヒメオニタケ ***C. granulosum*** (281)
　　β. 傘は褐赤色；茎は頑健，基部やや太し。
　　　チャヒメオニタケ ***C. cinnabarinum*** (281)

b．傘は赭黄色；嚢状体なし。

シワカラカサタケ *C. amianthinum* (282)

B．胞子は長く，骨形；傘はオリーブ黒色。

ヒメアオオニタケ *C. ossaeiformisporum* (282)

Cystoderma granulosum (BATSCH ex FR.) FAYOD

ヒメオニタケ

KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:88. 1848—SINGER, Agaricales, 448. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 393. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:442. 1957.

Agaricus granulosus BATSCH, Elench. Fung. 1:79. 1873—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 264. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:24. 1821. pr. p; Epicr. Myc. 17. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:28. 1857; Hymen. Eur. 36. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:572. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 95. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:17. 1871; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 18 (no. 39). 1883; Handb. Austr. Fungi, 9. 1892—WINTER, Pilze, 1:837. 1884.

Lepiota granulosa S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:602. 1821—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:73. 1872. pr. p.—GILLET, Champ. Fr. 71, c. ic. 1874. pr. p—KARSTEN, Hattsv. 1:14. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 44. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:47. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 84. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1:672. 1889—BARLA, Champ. Alp. Marit. 30, pl. 16, f. 5—8. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:248. 1893; Brit. Fungi, 92, pl. 3, f. 2. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 166. 1900—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:272. 1900—MORGAN, Jour. Myc. 12:196. 1906—W. G. SMITH, Brit. Basid. 24. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):706. 1912—RICKEN, Blätterp. 327, pl. 81, f. 3. 1915—LANGE, Agar. Denm. 2:29, f. 24. 1915; Fl. Agar. Dan. 1:38, pl. 15, f. E. 1935—KAUFFMAN, Agar. Mich. 638. 1918—REA, Brit. Basid. 75. 1922—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:41. 1938.

（原，日．菌．目．179. 1954—今関及土岐，林．試．研．報．67:45. 1954)

Mastocephalus granulosus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2:860. 1891.

子実体は群生或は孤生；傘は 3—5 cm，卵形，のち丸山形～開張，鈍頭或はやや中丘あり；表面は乾燥，淡赤褐色にて，周辺淡色，黒褐色の粗粒を密布す，中央の粒は長く密なり，縁は初め内屈す；肉は薄く，帯白色，不快臭あり，味僅か苦し；褶は殆ど離生或は狭生，白色，のち帯黄色，やや密；茎は3. 5—5×0. 3—0. 7 cm，上方に漸細，鍔より上部は褐色繊維を有し，下部は傘面と同様の粒を密布す，2—4の溝条あり，乾燥，中空；鍔はやや上位，小片に裂け，やや垂下し，粒と同色，やや永存性；胞子は卵形，平滑，4—5. 5×2. 5—2. 3μ；胞子紋は白色；嚢状体は毛状，鋭頭，小形，幅 2—3μ；可食。

所在及産地

林地或は樹下地上—夏秋

北海道，本州—欧．北米．濠

和名 ヒメオニタケ（姫鬼茸）〔今井〕

Cystoderma cinnabarinum (ALB. et. SCHW. ex SECR.) FAYOD

チャヒメオニタケ

KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:88. 1948—SINGER, Agaricales, 448. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 393. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:422, f. 283, A. 1957.

Agaricus granulosus var. *cinnabarinus* ALB. et SCHW. Consp. Lusat. 147. 1805.

Agaricus granulosus FR. Syst. Myc. 1:24. 1821. pr. p.

Agaricus granulosus a. *cinnabarinus* FR. Monogr. Hymen. Suec. 1;29. 1857; Hymen. Eur. 36. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:31. 1876—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 16. 1883; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 43(no. 38). 1883—WINTER, Pilze. 1:837. 1884.

Lepiota cinnabarina KARST. Hattsv. 1:14. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 43. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:46. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 83. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1:672. 1889—BARLA, Champ. Alp. Marit. 30, pl. 16, f. 1—4. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:247. 1883; Brit. Fungi, 91. 1911—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):706, pl. 131, f. 1—3. 1912—RICKEN, Blätterp. 327, pl. 81, f. 2. 1915—LANGE, Agar. Denm. 2:29, f. 23. 1915; Fl. Agar. Dan. 1:38, pl. 15, f. E. 1935—REA, Brit. Basid. 76. 1922—BRESADOLA. Icon. Myc. 1:pl. 36. 1927.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 53:393. 1939—原，日．菌．目．178. 1954)

Mastocephalus cinnabarinus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2:860. 1891.

Armillaria granulosa KAUFFM. Papers Mich. Acad. Sci. 2:60. 1923.

Lepiota granulosa Auct. plur. pr. p.

子実体は散生；傘は径 5—8 cm，丸山形，のち扁平となり，鈍頭，肉質；表面は褐赤色；粗粒を被む

る；縁に膜片を有す；肉は帯黄色，皮下赤色を帯ぶ，味よし；褶は殆ど離生，白色，密，広幅，やや便腹状；茎は 短大，4—7×1—2cm，上方に漸細，基部やや太し，鍔より上部は帯白色，下部は傘面と同色或は淡色，帯赤色粒を密布す；鍔は同色，薄く，狭く，下位，消失性；胞子は楕円形，平滑，4—4.5×2.5—3μ；胞子紋は白色；嚢状体は毛状，鋭頭，或は箭形，小形；可食。

所在及産地

林地—秋　　本州—欧. 北米

和名 チャヒメオニタケ（茶姫鬼茸）〔今井〕

Cystoderma amianthinum
(SCOP. ex FR.) FAYOD
シワカラカサタケ

KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:88. 1948—SINGER, Agaricales, 449. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 392, f. 559. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:422. 1957.
（松田及本郷，植. 研. 雑. 30:150. 1955—今関及本郷，原色日. 菌. 図鑑，52，f. 127, pl. 23, f. 127. 1957）

Agaricus amianthinus SCOP. Fl. Carn. II, 2: 434. 1772—FRIES, Hymen Eur. 37. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:31. 1876—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 17. 1883; Illus. Brit. Fungi, 1:pl. 213, f. 2(no. 40). 1883—WINTER, Pilze, 1: 836. 1884.

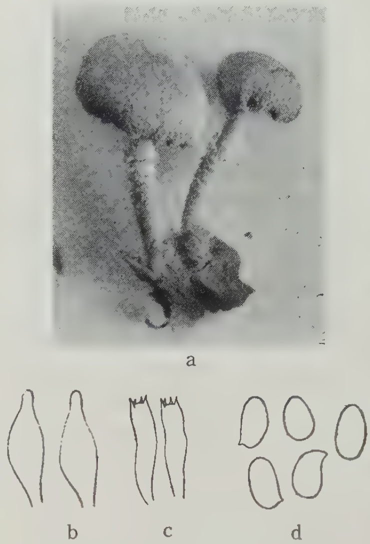
Agaricus granulosus FR. Syst. Myc. 1:24. 1821. pr. p.

Agaricus granulosus var. *amianthinus* FR. Epicr. Myc. 18. 1838—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:572. 1844.

Lepiota amianthina KARSTEN, Hattsv. 1:15. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 44. 1889—QUÉLET, Enchir. Fung. 7. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5:48. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 84. 1915—BARLA, Champ. Alp. Marit. 30, pl. 16, f. 9—11. 1889—SCHROETER, Pilze Schles. 1:672. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3:249. 1893; Brit. Fungi, 92, pl. 1, f. 2. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:272. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 66. 1900—MORGAN, Jour. Myc. 12:195. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 25. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):706. 1912—MURRILL, N. Am. Fl. 10: 45. 1914; Mycologia, 7:118, pl. 158, f. 5. 1915—RICKEN, Blätterp. 327, pl. 81, f. 4. 1915—LANGE, Agar. Denm. 2:30, f. 25. 1915; Fl. Agar. Dan. 1:39, pl. 15, f. c. 1935—REA, Brit. Basid. 75. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 1:37. 1927—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:42. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 52, pl. 8, f. 4. 1950.
（本郷，植. 分. 地. 14:53, f. 2—3. 1950—原，日. 菌. 目. 178. 1954）

Mastocephalus amianthinus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2:859. 1891.

子実体は孤生或は散生；傘は径 2—5cm，丸山形，のち開張し広中丘或はやや中丘を有す；表面は乾燥，淡赭黄色，中央暗色，全面粒状にて放射状の皺あり，縁に屢々膜片あり；肉は帯黄色或は黄色，やや厚く，臭なし；褶は狭生，白色，のち帯黄色，密；茎 は 2—6×0.3—0.5 cm，上方に僅か漸細，或は同幅，鍔より上部は白色或は帯黄色，無毛，下部は黄色粒状鱗片を密布す；鍔は同色，外側は茎表面と同一，中位；胞子は楕円形，平滑，6—8×3—4μ；胞子紋は白色，可食と称せらる。



第 118 図　シワカラカサタケ
Cystoderma amianthinum
a．子実体　×2/3　　b．嚢状体
c．担子柄　×500
d．胞子　×1000　　　（大谷氏）

所在及産地

針葉樹林地—夏秋　　北海道，本州—欧. 北米. 濠

和名 シワカラカサタケ（皺傘茸）〔今井〕

Cystoderma ossaeiformisporum (IMAI)
ヒメアオオニタケ

Lepiota ossaeiformispora IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:431938.
（原，日. 菌. 目. 179. 1954）

子実体は群生；傘は径 2—3cm，円錐形，のち開張し中丘を有す；表面は乾燥，帯オリーブ黒色，密に粒状細鱗片を被むる，縁辺淡色；肉は白色，薄し，味なく臭悪し；褶は殆ど離生，白色，のち類黄色となる，密；茎は 4—7×0.3—0.4cm，殆ど同幅，白色或はオリーブ灰色，纎維或は細鱗片を有す，中空；

鍔は下位，軟毛を有し，オリーブ黒色の細鱗片を有す；胞子は骨形，平滑，10—12×3—4μ；胞子紋は白色。

所在及産地

林地—秋　北海道

和名　ヒメアオオニタケ（姫青鬼茸）〔今井〕

Phaeolepiota R. MAIRE
コガネタケ属

R. MAIRE, Bull. Soc. Myc. Fr. 27:441. 1911—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 6: 111. 1928—SINGER, Agaricales, 450. 1949.

Pholiota (FR.) QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1: 124. 1872. pr. p.

傘，茎及鍔の下面は球嚢より成る剝げ易き粗粉に蔽わる；褶は狭生；胞子紋は暗褐蜜色或は黄土色；胞子は鏡下にて寧ろ淡黄～藁色，平滑或は熟時不明瞭の点を有す，屢々外被を存す，長形，臍上窩あり，中～大形，非糊性；担子柄は正常形，嚢状体は稜にもなし；托実質は幼体にて全然或は殆ど整型；茎は中心生，広膜質の鍔を有す；傘及茎の肉は厚く，肉質；組織は非糊性；菌糸は菌絆を有す，林地上生；半被実，温帯，約1種を知らる。

（本属名は phaios〔希〕（褐色），*Lepiota*（属名）より出づ）

基準種　*P. aurea* (MATT. ex FR.)

本邦既知種　コガネタケ　***P. aurea***　(283)

Phaeolepiota aurea (MATT. ex FR.) KONR. et MAUBL. (ut R. MAIRE)
コガネタケ

KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 6: 112. 1928; Agaricales, 1:154. 1948—SINGER, Agaricales, 451. 1949.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，52, pl. 23, f. 128. 1957）

Agaricus aureus MATTUSCHKA, Fl. Siles. 2: 351. 1779—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, 1: pl. 77. 1797—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 269. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:241. 1821; Epicr. Myc. 160. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:303. 1857; Hymen. Eur. 214. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 140. 1883; Illus. Brit. Fungi, 3: pl. 346 (no. 373). 1886.

Agaricus Vahlii SCHUM. Fl. Dan. pl. 1496. 1813—FRIES, Syst. Myc. 1:240. 1821; Epicr. Myc. 161. 1838.

Agaricus aureus var. *Vahlii* FR. Hymen. Eur. 214. 1874.

Agaricus caperatus COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2, 140. 1883; Illus. Brit. Fungi, 3:348 (no. 348). 1886. (non FRIES).

Agaricus aureus var. *Herefordensis* COOKE, Illus. Brit. Fungi, 3: pl. 347 (no. 374). 1888.

Pholiota aurea GILL. Champ. Fr. 435. 1874 (non QUÉLET)—KARSTEN, Hattsv. 1:291. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:736. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 677. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1:610. 1889—MASSEE. Brit. Fung. Fl. 2:210. 1893; Brit. Fungi, 254. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:253. 1900—R. MAIRE, Bull. Soc. Myc. Fr. 27:438, pl. 14. 8. 2. 1911—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):545. 1912—RICKEN, Blätterp. 197, pl. 55, f. 1. 1915—REA, Brit. Basid. 111. 1922—OVERHOLTS, Ann. Missouri Bot. Gard. 14:121, pl. 12. 1927.

Lepiota pyrenaea QUÉL. Champ. Jura Vosg. Suppl. 16:1, pl. 21, f. 1. 1887.

Pholiota aurea var. *Vahlii*, SACC. Syll. Fung. 5:736. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:210. 1893.

Pholiota aurea var. *Herefordensis* SACC. Syll. Fung. 5:736. 1887.

Togaria aurea W. G. SMITH, Brit. Basid. 122. 1908.

Pholiota Vahlii LANGE, Agar. Denm. 4:5, f. 1. 1921; Fl. Agar. Dan. 3:53, pl. 105, f. c. 1938—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:183, pl. 4, f. 1. 1938.

（原，日．菌．目．251. 1954—川村，日．菌．図鑑，5: 546, f. 531. 1954）

Cystoderma aureum KÜHN. et ROMAGN. Fl. Analyt. Champ. Super. 393. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:420, f. 281. 1957.

子実体は群生或はやや叢生；傘は径 5—15 cm，或はそれ以上に及び，初め半球形或は円錐形，のち丸山形より扁平に至り，往々やや中丘を有す；表面は乾燥，黄色～汚黄金色或は帯褐橙黄色，周辺淡色，容易に剝脱する殆ど同色或は灰色又は褐色の粉末或は針状細粒を密布す，時に中央に皺あり；縁は初め内屈し，厚膜の被膜にて下面を覆わる，被膜は縁に近く切離す；肉は帯白色，のち帯黄色，緊緻，厚く，味温和，臭よし；褶は殆ど離生或は少しく狭生，寧ろ狭幅，白色，のちクリーム色～黄土色，密，稀に叉状，稜は波状或は鋸歯状；茎は長さ 5—15 cm，或はそれ以上に及び，幅 1.5—3 cm，殆ど同幅或は上方にやや狭細，屢々基部肥大，鍔より上部は黄色にて無毛，下部は傘表と同色或は僅か淡色，粉末或は細粒を被むりて往々縦皺あり；鍔は甚だ大形，上



a　　　　b
第119図　コガネタケ　Phaeolepiota aurea
a．子実体発生の状　×1/6　b．子実体縦断面　×1/3　（大谷氏）

位，厚膜質，上面白色，下面は茎面と同様，往々皺あり，永存性；胞子は楕円形或は類紡錘形，殆ど平滑或は粗疣を有す，11—12.5×4—6μ；胞子紋は殆ど粘土色；嚢状体なし；可食。

所在及産地
樹下，路傍，草原地上一秋
北海道，本州一欧．北米．亜(小亜)

和名　コガネタケ
（黄金茸）〔今井〕
キナコタケ
（黄粉茸）〔川村〕

（IV） Agariceae PAT. em. KONR. et MAUBL. ハラタケ族

PATOUILLARD, Hymen. Eur. 75. 1887 (ut. *Agaricées*)—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl. fam. 1, 1**: 230. 1898—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 6:57. 1924—SINGER, Agaricales, 427. 1949.

Psalioteae FAYOD, Ann. Sci. Nat. Bot. VII. 9:352. 1889 (ut. *Psalliotes*)—R. MAIRE, Publ. Junt. Ciènc. Nat. Barcelona, 1933:83. 1933.

Psaliotoideae (subfam. *Coprinacearum*) SINGER, Ann. Mycol. 34:340. 1936.

胞子は明かに擬糊性でも又糊性でもなき複合膜を有す；発芽孔は存在或は欠如．脱水の時は常に強色あり（屢々緑色より帯褐紫色に変る)，或は新鮮時は帯褐紫色～セピア色；膜は往々不均一にて有点；胞子紋は決して白色，クリーム色或は淡ピンク色ならず；壺は往々能く発達しコップ形嚢を作り，或は傘縁膜に近く又はそれに附着する鍔を作り，更に又壺は余りに薄く成時には殆ど認められざるものあり。

SINGER 氏 (1949)は3属を収む，本邦2属を産す。

本邦既知属検索表

A．傘の上表皮層は細胞状ならず；胞子は平滑；菌糸に通常菌絆なし；胞子紋は緑色～オリーブ色ならず。
ハラタケ属 **Agaricus** (284)

B．傘の上表皮層は短細胞より成る；胞子は微細点を有す；菌糸は菌絆を有す；胞子紋は緑色～オリーブ色，脱水せば暗褐紫色となる。
アカヒダカラカサタケ属 **Melanophyllum** (293)

Agaricus L. ex FR. em. KARST.
ハラタケ属

LINNE, Sp. Plant. 2:1171. 1753—FRIES, Syst. Mycol. 1:8. 1821—KARSTEN, Hattsv. 1:482. 1879—SINGER, Agaricales, 428. 1949.

Agaricus ser. *Pratella* trib. *Psalliota* FRIES, Syst. Mycol. 1:280. 1821.

Pratella S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1: 626. 1921.

Psalliota QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:139. 1872.

Pratella subgen. *Psalliota* QUÉLET, Enchir. Fung. 109. 1886.

Fungus AD. (1763) ex O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):477. 1898.

傘は裸或は鱗片を有し，又は三稜形或は網目状の疣を有し，或は平滑，乾燥，白色，或は有色；上表皮層は細胞状ならず，最も屢々圧着せる長き菌糸或は柵状菌糸より成る；褶は離生，襟帯なし，一様に附着胞子の為に濃色なり；胞子紋は紫褐色～セピア色；胞子は褐色，平滑，擬糊性ならぬ複膜を有す，明かなる或は寧ろ不明瞭の発芽孔を有し，屢々大形よりも寧ろ小形（稀に 10μ 以上)；担子柄は正常形なるも屢々定規的に2胞子を有す，寧ろ小形；嚢状体は或種に於て中位に多生する稜嚢体を除けば存在せず，稜嚢体は嚢状或は幅広く，下部に隔膜ありて

有柄，多くの場合成熟せる乾燥品にては不明瞭となる；托実質は整型，後不整型；茎は細胞状被なく，通常薄膜消失性或は厚き殆ど肉質の鍔を有し，往々2重鍔となる，その下鍔は圧着して茎の基部に於てコップ状とならざりし壺を表示す；肉は非糊性，屢々傷時赤変し，或は接触により黄変す；菌糸は通常菌絆なく，稀に存在す；林の内外の耕土，腐蝕土，糞上等に生ず；半被実；汎布，約 20 種を知らる，只2種程時に微毒ありと称せらるるも，殆ど全種類食用とされ，有名なる培養種を含む。

（本属名は黒海の北 Sarmatia の町 Agaria により J. P. TOURNEFORT 氏がきのこに用いし名称なりという）

基準種　*A. campestris* L. ex FR.

本邦既知種検索表

A．大形～寧ろ大形種。
　a．傘面無毛平滑，或は微細繊維状鱗片あるも著しからず。
　　α．肉は淡紅色～褐色に変化す。
　　　I．陽地生；担子柄は4胞子；傘は白色，のち帯黄或は帯赤色。
　　　　ハラタケ　***A. campestris***　(285)
　　　II．栽培種；担子柄は2胞子；傘は白色，灰色或は鈍褐色；茎寧ろ短し。
　　　　ツクリタケ　***A. bisporus***　(286)
　　β．肉は黄変或は不変化。
　　　I．陰地生；傘は白或はクリーム白色，乾時全部濃黄色；茎は長し。
　　　　シロモリノカサタケ　***A. silvicola***　(287)
　　　II：陽地生。
　　　　1．乾時不変色，その他前種に同じ。
　　　　　チチジマオオハラタケ　f. ***immutatus***　(288)
　　　　2．乾時帯黄色～褐色；傘は白色，或は中央帯赤黄色。
　　　　　シロオオハラタケ　***A. arvensis***　(288)
　　　　3．傘は黄褐色，やや同心円に配列する圧着細鱗片を被むり平滑，その他前種に同じ。
　　　　　オオハラタケ　var. ***fulvus***　(289)
　b．傘面粉状，帯赤黄色；肉は不変化；陽地生。
　　　キハラタケ　***A. jezoensis***　(289)
　c．傘面繊維或は繊維状鱗片著し；陰地生。
　　α．肉は幼時赤変す；傘は灰或は灰褐色，褐色鱗片あり。
　　　オオモリノカサタケ　***A. silvaticus***　(289)
　　β．肉は不変化或は僅か変色す。
　　　1．傘は酒赤色～紫褐色。
　　　　ザラエノハラタケ　***A. subrutilescens***　(290)
　　　2．傘は酒赤色～紫褐色ならず。
　　　　甲．傘は白色にて褐色繊維状鱗片を被むる
　　　　　ハラタケモドキ　***A. placomyces***　(290)
　　　　乙．傘は淡渋色の繊維状鱗片に被われ著しく粗面。
　　　　　ニセモリノカサタケ　***A. subrufescens***　(291)
　　　　丙．傘は黄色或は帯赤黄色にて褐色繊維あり。
　　　　　ハハジマモリノカサタケ　***A. hahashimensis***　(291)
　d．傘面は網目に区劃され各区内に頂の平なる突起を有し鍔皮状，淡灰褐色，傘縁裂けて花弁状；胞子は他に比して大形。
　　　ワニガワタケ　***A. crocodilioides***　(292)
B．寧ろ小形～甚だ小形種。
　a．傘は白色，帯白色或は帯黄色。
　　α．傘径 3—4 cm。
　　　コハラタケ　***A. comtulus***　(292)
　　β．傘径 1.5—2.2 cm，茎長し。
　　　ヒメシロモリノカサタケ　***A. comptulellus***　(293)
　b．傘は赤褐色の鱗片を有す。
　　α．傘径 2.5—5 cm。
　　　コモリノカサタケ　***A. diminutivus***　(293)
　　β．傘径 1—2.5 cm；茎長し。
　　　ヒメモリノカサタケ　***A. semotellus***　(293)

Agaricus campestris L. ex. FR
ハラタケ

LINNÉ, Sp. Plant. 2:1173. 1753—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 418. 1801—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, 3:pl. 305. 1803—FRIES, Syst. Myc. 1:281. 1821; Epicr. Myc. 213. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:406. 1857; Hymen. Eur. 279. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1: 469. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 165, pl. 10, f. 2. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2: 171. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:137. 1871; Illus. Brit. Fungi, 4:pl. 526(no. 544). 1886; Handb. Austr. Fungi, 60. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:136. 1876; Hattsv. 1:484. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 234. 1889—WINTER, Pilze, 1:658. 1884—SACCARDO, Syll. Fnng. 5:997. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 799. 1916(ut *A. camp-*

ester)—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:410. 1892; Brit. Fungi, 323, pl. 24, f. 10. 1911—PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 68:134, pl. 6. 1895—PATOUILLARD, Ess. Tax. 173. 1900 (ut *campester*)—MURRILL, Mycologia, 1:37, pl. 3, f. 1. 1909; 1:260, pl. 15, f. 4. 1909; 14:205. 1922—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:256. 1938—HOTSON & STUNTZ, Mycologia, 30:231. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:101. 1948 (ut *A. campester*)—SINGER, Agaricales, 431. 1949.

(THUNBERG, Fl. Jap. 346. 1874—MIQUEL, Consp. Fl. Jap. 392. 1867—田中, 植. 雑. 2:159. 1889—松村, 植. 名鑑, 1:130. 1904—白井, 日. 菌. 目. 7. 1905; ed. 2. 31. 1917—小林, 日. 隠. 植. 図. 543, pl. 262, f. 1—2. 1939—原, 日. 菌. 目. 9. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 49. 1957)

Pratella campestris S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:626. 1821—GILLET, Champ. Fr. 561, c. ic. 1874—QUÉLET, Enchir. Fung. 110. 1886.

Psalliota campestris QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:140. 1872—SCHROETER, Pilze Schles. 1:574. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**, f. 116, A. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 172. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 69, pl. 70, f. 157. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):430, pl. 84 B. 1912—RICKEN, Blätterp. 237, pl. 61, f. 6. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 240. 1918—REA, Brit. Basid. 87. 1922—LANGE, Agar. Denm. 6:9. 1926; Fl. Agar. Dan. 4:59, pl. 138, f. c. 1939—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 159, pl. 80. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 17:pl. 823. 1931—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 183, pl. 71, f. 2. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 411, f. 25. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 38. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2:425, pl. 44, f. 2. 1957.

(P. HENNINGS, Bot. Jahrb. 32:41. 1903—松村, 植. 名鑑, 1:165. 1904—白井, 日. 菌. 目. 76. 1905; ed. 2. 495. 1917; ed. 3. 304. 1927—川村, 日. 菌. 図説, n. 165. 1929; 食用菌及有毒菌, f. 34 (p. 29). 1931; 日. 菌. 図鑑, 5:581, f. 552. 1954—牧野, 日. 植. 図鑑, 1023, f. 3067. 1940—松浦, 茸類辞典, 38, f. 37. 1933; 応用菌蕈学, 528, f. 404. 1941—原. 日菌. 目. 285. 1954)

Pratella campestris GILL. Champ. Fr. 561, c. ic. 1874—QUÉLET, Enchir. Fung. 110. 1886.

Fungus campestris O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):478. 1898.

(KAEMPFER, Amoen. Exot. 5:832. 1712)

子実体は群生或は孤生; 傘は径 5—10 cm, 初め殆ど球形, のち丸山形, 更に開張し遂に殆ど扁平となる, 緊緻; 表面は乾燥, 白色, のち帯黄色或は帯赤色となる, 無毛, 絹糸様光沢あり, 又は微細綿絮状或は微細繊維状の鱗片を被むる, 縁は幼時内屈し, 絹糸様白色の膜片を有す; 肉は厚く, 白色, 空気に触れて微かに淡紅色或は淡茶褐色となる, 肉質, 緊緻, のち柔軟となる, 味及臭よし; 褶は離生, 殆ど初めより淡桃色, のち紫褐色～黒褐色となる, 密, 広幅, 便腹状; 茎は 5—10×0.7—2 cm, 殆ど同幅或は下方に漸細, 基部稀にやや球根状, 通常寧ろ短かくして緊緻, 白色, 無毛平滑, 中実; のち幾分中空; 鍔は上位～中位, 薄膜質, 垂下, 1重, 上面は白く, 平滑, 下面は茶褐色, 綿絮状, 屢々老時消失す; 担子柄は 4 胞子; 胞子は広楕円形, 平滑, 紫褐色, 6—9.5×4.5—7 μ; 胞子紋は黒褐色; 稜嚢体なし; 可食。

所在及産地

草原地及畑地—夏秋

北海道, 本州, 九州—欧. 北米. 濠. 亜(支. 西比)

和名 ハラタケ (原茸) 〔田中〕

Agaricus bisporus (LANGE) SING.

ツクリタケ

SINGER, Agaricales, 431. 1949.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 49, f. 116, pl. 22, f. 116; Phot. VIII, f. 42—45. 1957)

Agaricus campestris var. *hortensis* COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:138. 1871; Illus. Brit. Fungi, 4:pl. 527 (no. 545). 1886—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:412. 1892; Brit. Fungi, 323. 1911.

Psalliota arvensis var. *hortensis* W. G. SMITH, Brit. Basid. 171. 1908—REA, Brit. Basid. 84. 1922.

Agaricus campester hortensis MURR. Mycologia, 6:165, pl. 134. 1914.

Psalliota hortensis var. *bispora* LANGE, Agar. Denm. 6:8. 1926.

Agaricus campestris subsp. *hortensis* KONR. et. MAUBL. Icon. Sel. Fung. 6:60. 1927.

Agaricus hortensis IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:258. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Aagricales, 1:101. 1948. (non *A. hortensis* PERS. ex FR.)

(原, 日. 菌. 目. 9. 1954)

Psalliota bispora SCHAEFF. et. MOELLER, Ann. Myc. 36:69. 1938—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 411, f. 582. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 37. 1956.

Psalliota hortensis LANGE, Fl. Agar. Dan. 4:58, pl. 139, f. A. 1939—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 184, pl. 71, f. 1. 1950—HEIM, Champ. Eur. 2:425. 1957.

子実体は群生或は叢生; 傘は径 8—11 cm, 丸山形, のち開張し扁平となる; 表面は乾燥, 白色, 灰



第 120 図　ツクリタケ　Agaricus bisporus ×1/3 （大谷氏）

色，或は鈍褐色，平坦或は中央に裂目を有す，縁は初め内屈し，膜片を有す；肉は肉質，甚だ厚く，白色，緊緻，のち帯赤色，傷時帯褐色となる；褶は離生，初め桃色，のち紫褐色，密，便腹状にて両端狭く，寧ろ狭幅；茎は寧ろ短くして頑丈，5—7×1.4—2.5cm，同幅或は上方僅か狭細，基部幼時球根状，白色，鍔より上部僅か粉状，下部平滑或は微細鱗片を被むる，中実；鍔は薄膜質，白色，中位或はやや下位，単一，速に消失す；担子柄は常に 2 胞子；胞子は楕円形，平滑，紫褐色，6—8×4.5—6μ，時に楕円形となり，長さ 10μ に及ぶ；胞子紋は暗紫褐色；稜嚢体は棍棒形，頂部幅 10—12μ；可食。

所在及産地

栽培，時に圃場—秋

和名　ツクリタケ（作茸）〔今井〕

Agaricus silvicola (VITT.) SACC.

シロモリノカサタケ

SACCARDO, Syll. Fung. 5:998. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 801. 1916—PATOUILLARD, Ess. Tax. 173. 1900—MURRILL, Mycologia, 6:222, pl. 139. 1914; 14:209. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1:pl. 291. 1929; Agaricales, 1:105. 1948—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:257. 1938—HOTSON & STUNTZ, Mycologia, 30:231, f. 12; 1 d. 1938—SINGER, Agaricales, 432. 1949.

（白井，日．菌．目．ed. 2. 31. 1917—原，日．菌．目．10. 1954—今関及土岐，林．試．研．報．67:34. 1954）

Agaricus campestris var. *silvicola* VITT. Fung. Mang. 49, pl. 7, f. 7—9. 1835—FRIES, Epicr. Myc. 213. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:406. 1857; Hymen. Eur. 280. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 166. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:138. 1871; Illus. Brit. Fungi, 4:pl. 529 (no. 547). 1886—KARSTEN, Hattsv. 1:485. 1879—WINTER, Pilze, 1:658. 1884—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:412. 1892; Brit. Fungi, 323. 1911.

Psalliota campestris var. *silvicola* QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:140. 1872—W. G. SMITH, Brit. Basid. 172. 1908

（田中，植．雑．2:170. 1888）

Pratella campestris var. *silvicola* GILL. Champ. Fr. 562, c. ic. 1874.

Fungus silvicola O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):480. 1893.

Agaricus abruptus PECK, Mem. N. Y. St. Mus. 3:163, pl. 59, f. 8—14. 1901.

Agaricus abruptibulbus PECK, Bull. N. Y. St. Mus. 94:36. 1905.

Psalliota silvicola ROLL. Atl. Champ. 70, pl. 72, f. 160. 1910—REA, Brit. Basid. 88. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 164. 1927—LANGE, Fl. Agar. Dan. 4:57, pl. 138, f. B. 1939—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 185, pl. 73, f. 1. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 415. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:429. 1957.

（白井，日．菌．目．ed. 3. 304. 1927—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3: 115. 1931—広江，応用菌蕈学，531, f. 406, d. 1941—原，日．菌．目．285. 1954）

Psalliota abruptibulba KAUFFM. Agar. Mich. 237, pl. 47. 1918.

Psalliota arvensis var. *silvicola* LANGE, Agar. Denm. 6:7. 1926—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 40. 1956.

子実体は孤生；傘は径 5—12cm，類球形，のち丸山形となり，僅か中丘を有し或はなし；表面は帯白色或はクリーム白色，中央或は傷時藁色を呈し，乾時殆ど全部濃黄色となる，平滑，光沢を有し，無毛或は小形繊維状鱗片又は繊維を僅かに存す，縁は初め内屈，膜片あり；肉は相当厚く，擦傷時黄色となる，味及臭よし；褶は離生，初め淡肉色或は淡菫灰色，のち紫褐色となる，密，寧ろ狭細；茎は 6—15×0.6—1.5cm，上方に僅か漸細，基部明かなる球根状，白色，老時黄褐色，平滑，中空；鍔は薄膜質，広大，上位，垂下，屢々 2 重，上面は白色，下面は軟き綿絮状破片を有す；胞子は楕円形，平滑，紫褐色，6—7×3—4μ；胞子紋は暗褐色；稜嚢体は卵形或は洋梨形，幅 15—20μ；可食。

所在及産地

林内地上—夏秋　　北海道，本州—欧．北米

和名　シロモリノカサタケ（白森笠茸）〔今井〕

ナガエノハラタケ（長柄原茸）〔池野〕

シロモリハラタケ（白森原茸）〔川村〕



第121図 シロモリノカサタケ Agaricus silvicola ×1/2 (大谷氏)

RILL, Mycologia, 6:222, pl. 137, f. 2. 1914—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:260. 1938—HOTSON & STUNTZ, Mycologia, 30:231, f. 11; 1 c. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:105. 1948—SINGER, Agaricales, 432. 1949.

(今関, 原色きのこ, pl. 20(左). 1942; 及土岐, 林. 試. 研. 報. 67:34. 1954—原, 日. 菌. 目. 9. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 49, f. 117, pl. 22, f. 117. 1957.)

Agaricus pratensis SCOP. Fl. Carn. ed. 2. 2:419. 1772—MURRILL, Mycologia, 14:208. 1922.

Agaricus edulis BULL. Herb. Fr. pl. 514. 1790—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 418. 1801.

Agaricus Georgii WITH. Bot. Arr. Brit. Pl. 4:206. 1796—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, 3:pl. 304. 1803.

Pratella edulis S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:626. 1821.

Agaricus exquisitus VITT. Descr. Fung. Mang. 146, pl. 18. 1833.

Psalliota arvensis QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:139. 1872—SCHROETER, Pilze Schles. 1:575. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:239. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 171. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 69, pl. 71, f. 159. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):430, pl. 86. 1912—RICKEN, Blätterp. 238, pl. 62, f. 2. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 236, pl. 46. 1918—REA, Brit. Basid. 84. 1922—LANGE, Agar. Denm. 6:7. 1926; Fl. Agar. Dan. 4:57, pl. 138, f. A. 1939—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 159, pl. 79. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 17:pl. 821. 1931—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 184, pl. 72, f. 1. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 414. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:428, pl. 44, f. 1, pl. 45, f. 1. 1957.

(川村, 日. 菌. 図説, n. 131. 1929—松浦, 茸類辞典, 178, f. 211. 1933; 応用菌蕈学, 530, f. 405. 1941—原, 日. 菌. 目. 285. 1954)

Pratella arvensis GILL. Champ. Fr. 563, c. ic. 1874—QUÉLET, Enchir. Fung. 109. 1886.

Fungus arvensis O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3:(2):479. 1898.

子実体は孤生或は群生; 傘は大形, 径 6—16 cm, 初め殆ど球形, のち円錐形或は丸山形, 更に開張し中盤扁平, 緊緻; 表面は乾燥, 白色, 或は中央淡帯

f. **immutatus** S. ITO et IMAI
チチジマオオハラタケ

S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:51. 1940.

原種と性状同一なるも, 老時及乾時も常に白色にて黄色に変ずることなく, 且つ陽地に生ずるを異点とす。

所在及産地

庭園陽地上—秋 小笠原島

和名 チチジマオオハラタケ(父島大原茸)〔今井〕

Agaricus arvensis SCHAEFF. ex FR.
シロオオハラタケ

SCHAEFFER, Fung. Bavar. 4:Ind. 73, pl. 310—311. 1774—FRIES, Epicr. Myc. 213, 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:405. 1857; Hymen. Eur. 278. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:468. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 166, pl. 10, f. 4. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:172. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:137. 1871; Illus. Brit. Fungi, 4:pl. 523(no. 540). 1886; Handb. Austr. Fungi, 62. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3;136. 1876; Hattsv. 1:483. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 234. 1889—WINTER, Pilze, 1:659. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:994. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 802. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:412. 1892; Brit. Fungi, 323. 1911—PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 68:140, pl. 8. 1895—PATOUILLARD, Ess. Tax. 173. 1900—MUR-

赤黄色を帯ぶ，無毛，やや光沢あり，或は圧着せる微細の繊維状鱗片を被むる，老時，乾時或は擦傷時帯黄色～褐色に変ず往々網目に裂く；肉は厚く，白色，のち帯黄色となる，緊緻，遂に柔軟となる，味温和，臭よし；褶は離生，初め帯白色，のち徐々に灰桃色となり遂に黒褐色，密，寧ろ狭幅，稜は全縁；



第122図　シロオオハラタケ Agaricus arvensis ×1/3　（大谷氏）

茎は 5—15×0.8—2cm，頑丈，同幅，基部短小球根状，白色，屢々淡黄色を帯び，絹糸様光沢あり，無毛或は微細繊維状鱗片あり，充塞，のち中空；鍔は厚く，寧ろ大形，2重，上位，膜質，上鍔は帯白色，下鍔は寧ろ大なる淡黄色或は褐色の破片に放射状に裂く；胞子は広楕円形，平滑，帯紫褐色，7—10×4.5—5μ；胞子紋は黒褐色；稜嚢体は棍棒形，約18×8μ，往々長毛を混ず；可食。

所在及産地

草原及林側地上—夏秋

北海道，本州—欧．北米．濠．阿．亜(小亜)

和名　シロオオハラタケ（白大原茸）〔川村〕

var. **fulvus** KAWAM.

オオハラタケ

KAWAMURA, Icon. Jap. Fungi, 5:583. f. 553. 1954.

Psalliota campestris var. *silvicola* KAWAM. Illus. Jap. Fungi, pl. 14, f. 1—2. 1915.

傘面黄褐色，周辺淡色，中央濃色，中央部以外はやや同心円状に配列する圧着せる細鱗片を被むり平滑，茎は黄褐色；胞子の形状大さ等原種に同じ。

所在及産地

原野及疎林地上—秋　本州

和名　オオハラタケ（大原茸）〔川村〕

Agaricus jezoensis IMAI

キハラタケ

IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:258. 1938.

（原，日．菌．目．9．1954）

子実体は群生或は叢生；傘は径 8—18cm，類球形，のち丸山形或はやや中丘を有し，遂に殆ど扁平となる；表面は乾燥，帯赤黄色，粉状；肉は帯白色或は帯黄色，空気に触れて変色せず，厚し，臭及味なし；褶は離生，白色，のち桃色，遂に黒紫色となる，密；茎は 10—18×1—2.5cm，殆ど同幅，下部僅か肥大，白色或は帯白色，絹糸様，充塞，のち中空；鍔は膜質，広く，下側黄粉状，上位；胞子は楕円形，平滑，6.5—8×4—5μ；胞子紋は黒褐色，可食。

所在及産地

林間陽地或は草原地上—秋　北海道

和名　キハラタケ（黄原茸）〔今井〕

Agaricus silvaticus SCHAEFF. ex FR.

オオモリノカサタケ

SCHAEFFER, Fung. Bavar. 4:Ind. 62, pl. 242, 1774—FRIES, Epicr. Myc. 214. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:406. 1857; Hymen. Eur. 280. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:468. 1844—BERKELEY Outl. Brit. Fung. 167, 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:173. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:138. 1878; Illus. Brit. Fungi, 4:pl. 530(no. 549). 1886; Handb. Austr. Fungi, 60. 1892—KARSTEN, Hattsv. 1:485. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 234. 1889—WINTER, Pilze, 1:658. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 1000. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 800. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:413. 1892; Brit. Fungi, 324. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 173. 1900—MURRILL, Mycologia, 14:218. 1922—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 259. 1938—HOTSON & STUNTZ, Mycologia, 30: 223. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:103. 1948—SINGER, Agaricales, 432. 1949.

（小林，日．隠．植．図．543, pl. 262, f. 3—4. 1939—原，日．菌．目．10. 1954—今関及土岐，林．試．研．報．87:51. 1956）

Psalliota silvatica QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:140. 1872—SCHROETER, Pilze Schles. 1:575. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:239. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 173. 1903—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2);429. 1912—RICKEN, Blätterp. 237, pl. 62, f. 4. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 242. 1918—REA, Brit. Basid. 89. 1922—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 187, pl. 74, f. 2. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 413. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 39. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2: 427, f. 285. 1957.

（川村，日．菌．図説，n. 205. 1929；日．菌．図鑑，5: 585, f. 554. 1954—原，日．菌．目．286. 1954）

Pratella silvatica GILL. Champ. Fr. 564, c. ic. 1874—QUÉLET, Enchir. Fung. 110. 1886.

Psalliota sanguinaria KARST. Hattsv. 2:232. 1882—LANGE, Agar. Denm. 6:9. 1926; Fl. Agar. Dan. 4;60, pl. 137, f. B. 1939.

Fungus silvaticus. O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2);480. 1898.

子実体は孤生或は群生；傘は径 7—10cm, 卵形～鐘形，のち開張し扁平となり，屢々幾分中丘を有し，甚だ稀に中心僅か圧低され縁辺反転す；表面は初め灰色或は灰褐色，のち黄白色，褐色綿絮状鱗片に被われ，中央平坦にて濃煉瓦色或は暗銹色を呈す；肉は縁以外は寧ろ厚く，白色，空気に触れて幼時桃色に変じ，皮下は褐色を呈す，味及臭よし；褶は離生，初め白色，のち桃色，遂に暗褐色となる，密，寧ろ狭幅，便腹状，薄し；茎は 6—10×0.8—1.5cm，同幅或は基部膨大，白色或は汚白色，鍔より上部無毛，下部繊維あり；鍔は広膜質，白色，隔位，下側綿絮状，灰色或は帯褐色，永存性；胞子は楕円形，平滑，淡褐色，5—6.5×3.5—4μ；胞子紋は暗褐色；稜嚢体は棍棒形或は洋梨形，約 20×8μ；可食。



第123図 オオモリノカサタケ Agaricus silvaticus ×1/2 （大谷氏）

所在及産地

林地—夏秋　北海道，本州—汎布

和名 オオモリノカサタケ（大森笠茸）〔今井〕
モリハラタケ（森原茸）〔川村〕

Agaricus subrutilescens (KAUFFM.) HOTSON et STUNTZ
ザラエノハラタケ

HOTSON & STUNTZ, Mycologia, 30;219. 1938—A. H. SMITH, Pap. Mich. Acad. Sci. Arts Lett. 25:pl. 3, p. 123, f. 2, c. 1939—HONGO, Jour. Jap. Bot. 32;210. 1957.

Psalliota subrutilescens KAUFFM. Pap. Mich. Acad. Sci. Arts Lett. 5:141, pl. 10. 1925.

子実体は孤生或は群生；傘は通常径 6.5—10cm，時に 20cm 以上に及ぶ，肉質，緊緻，初め半球状卵形，遂に広丸山形となり，鈍頭或はやや中丘あり，初め一様に圧着せる帯紫褐色繊維に密に蔽われ，のち開張に従つて甚だ多数の小なる毛状亀裂を生じ漸次徐々に酒赤色に転移す，中盤は暗色に残り，縁は平坦，不明瞭の線あり；褶は離生，密，狭幅，初め淡桃色，のち褐色より濃色に至り，光沢あり；茎は 8—12×0.7—1cm，上方に狭細，基部やや棍棒形，鍔より上部は平坦，絹糸状或は微細に裂け，鍔下は寧ろ厚き密なる白色綿絮状繊維の鞘を被むり，のち裂けて鱗片となる，充塞或は中空；鍔は初め直立，のち垂下し，白色，厚し，上面平滑，下面は密なる綿毛状，広き綿絮状縁を有す，二重，上位，永存性；臭なく，味やや悪し；担子柄は4胞子，18—22×5—6.5μ；胞子は楕円形，平滑，帯暗褐色，5.5—6.5×3.5μ；褶側嚢体なく，稜嚢体は散生，棍棒形，薄膜，無色，10—19×6—9μ；菌糸に菌絆なし。

所在及産地

松林及竹林内—秋　本州—北米

和名 ザラエノハラタケ（粗豪柄原茸）〔本郷〕

Agaricus placomyces PECK
ハラタケモドキ

PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 29:40. 1878; 48:142, pl. 9, f. 7—12. 1895—SACCARDO, Syll. Fung. 5:1003. 1887—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 23, f. 21—23. 1903—MURRILL, Mycologia, 14:218. 1922—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43;261, pl. 4, f. 7. 1938—HOTSON & STUNTZ, Mycologia, 30:222, f. 6. 1938.

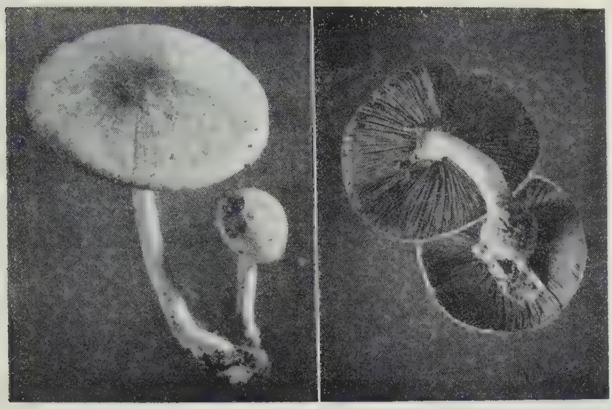
(KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 2, f. 5—7. 1914—白井, 日. 菌. 目. ed. 2:33. 1917; ed. 3. 13. 1927—小林, 日. 隠. 植. 図, 545, pl. 263, f. 6—9. 1939—今関, 原色きのこ, pl. 20(右). 1942; 及土岐, 林. 試. 研. 報. 67:34. 1954—原, 日. 菌. 目. 9. 1954)

Fungus placomyces O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):480. 1898.

Psalliota placomyces P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl. -fam. 1, 1**:240. 1900—KAUFFMAN, Agar. Mich. 238. 1918—GÜSSOW & ODELL. Mushr. Toadst. 162, pl. 81, f. 1. 1927—KAWAMURA, Icon. Jap. Fungi, 5:586, f. 555. 1954.

（川村, 日. 菌. 図説, n. 202. 1929—松浦, 茸類辞典, 181, f. 212. 1933; 応用菌蕈学, 531. 1941—原, 日. 菌. 目. 285. 1954）

子実体は群生或は孤生；傘は径 5—15cm，初め広卵形，のち丸山形～扁平となり，往々やや中丘あり，時に縁辺反転し殆ど漏斗状となる；表面は乾燥，帯白色にて褐色繊維状鱗片を被むり，鱗片は中央に向つて密となり中盤黒褐色となる；縁に白色の膜片



a　b



c

第124図　ハラタケモドキ　Agaricus placomyces　a．子実体表面　b．同裏面 ×1/3　c．胞子 ×600　（大谷氏）



第125図　ニセモリノカサタケ　Agaricus subrufescens ×1/3

を有す；肉は白色或は皮下帯黄色となる，中盤以外は寧ろ薄く，味及臭なし；褶は離生，帯白色，のち桃色，遂に黒褐色となる，密，前方広幅，薄し，稜は全縁；茎は 5—15×0.6—2 cm，同幅或は上方に漸細，基部棍棒球根状，白色，のち帯褐色となる，絹糸様，鍔より上部は粉状，下部線条あり，中空；鍔は大形，膜質，上位，垂下，2重，下鍔は放射状に裂け破片を残す；胞子は広楕円形，平滑，紫褐色，4.5—6×3—3.5 μ；胞子紋は黒褐色；可食。

所 在 及 産 地

林地—夏秋　　北海道，本州—北米．亜(支)

和 名　ハラタケモドキ（擬原茸）〔川村〕

Agaricus subrufescens PECK
ニセモリノカサタケ

PECK, Rep. N.Y. St. Mus. 46;25. 1893; 48: 138, pl. 7. 1895—SACCARDO, Syll. Fung. 11;70. 1895—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 23. 1903—MURRILL, Mycologia, 14:219. 1922—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43;262. 1938—HOTSON & STUNTZ, Mycologia, 30:223, f. 7. 1938.

Fungus subrufescens O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):480. 1898.

Psalliota subrufescens KAUFFM. Agr. Mich. 239, pl. 48—49. 1918—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 164, pl. 82. 1927.

（原，日．菌．目．285. 1954）

子実体は孤生，群生或は叢生；傘は径 5—15 cm，初め半球形，のち丸山形となり，遂に扁平となる，時に周辺波状となりて裂く；表面は初め絹糸様繊維を被むり，のち速に甚だ多数の圧着せる淡渋色の繊維状鱗片に破れ著しく粗面となる，中央は鱗片なく濃煉瓦色なり；肉は白色，変色せず，寧ろ薄く，柔軟，老時脆し，味及臭よし；褶は離生，白色，のち桃色，遂に黒褐色となる，密，狭幅，稜に初め房毛あり；茎は 6—15×1—1.5 cm，上方に狭細，基部球根状にて往々幅2倍に至る，鍔より上部は白色にて殆ど無毛，下部は綿架繊維～幾分鱗片状，充塞，のち中空；鍔は広大，膜質，寧ろ下位，垂下，2重，上鍔は平滑にて白色，下鍔は柔軟綿架状にて淡渋色鱗片を有す；胞子は楕円形，平滑，暗紫褐色，6—7.5×4—5 μ；胞子紋は黒褐色；稜嚢体は類円筒形，甚だ細く，無色；可食。

所 在 及 産 地

林内腐蝕土上—秋　北海道，本州—北米．亜(支)

和 名　ニセモリノカサタケ（贋森笠茸）〔川村〕

Agaricus hahashimensis S. ITO et. IMAI
ハハジマモリノカサタケ

S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:51. 1940.

子実体は孤生：傘は径約 8 cm，丸山形，のち扁平となる；表面は黄色或は帯赤黄色にて褐色繊維を有し，中央部暗色，やや無毛，周辺淡色，縁に白色膜片あり；肉は白色，厚く，柔軟，臭及味よし；褶は離生，黒紫色となり，密，便腹状；茎は約 9×0.8 cm，上方僅か漸細，基部肥大，白色或は帯白色，鍔より上部は殆ど無毛，下部は繊維状小鱗片を被むり基部殆ど無毛，中空；鍔は上位，膜質，やや厚く，白色，縁はやや2重，やや永存性；胞子は楕円形，円壔形或は広楕円形，平滑，5—7×3—4.5 μ；胞子

紋は黒褐色。

所在及産地

林地—秋 小笠原島

和名 ハハジマモリノカサタケ（母島森笠茸）

〔今井〕

Agaricus crocodilioides KOBAY.

ワニガワタケ

KOBAYASI, Nippon Inkwashokubutu Dukan, 545. pl. 263, f. 1—5. 1939.

"傘は開きて殆ど平となり，径 8 cm 程に及び，縁に花弁状の凹凸あり，表面は淡灰褐色を帯び，多くの網状の溝ありて多角形の区劃を生じ，各区劃内に多角形にして頂の平なる突起を生ず，褶は暗紫褐色にして密生し，茎に離生す，茎は長さ 8 cm 程，上部は隆起して太く径 2 cm に及べども，下部は細く円柱状にして径 1 cm 程なり；繊維状肉質にして殆ど中実，表面は平滑にして淡灰白色を呈し，中央部に膜状の鍔あり；担子柄は棍棒状，30×8.3--10 μ，4 本の小柄を出す；胞子は卵状，或は楕円状，12.5—14×7.5—8.3 μ，褐色なり；嚢状体は子実層面に疎に生じ中央の膨れたる棍棒状にして，55×17—18 μ，無色，上半部は子実層上に突出す；有機物多き土上に生ず；日本固有種，北米産の *A. crocodilinus* *Murr.* に似たり"。

和名 ワニガワタケ（鰐皮茸）〔小林〕

〔因記〕 前記載は全部小林氏による，但し用語に多少の変化あり。

Agaricus comtulus FR.

コハラタケ

FRIES, Epicr. Myc. 215. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1;407. 1857; Hymen. Eur. 281. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:486. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 235. 1889—WINTER, Pilze, 1:657. 1884—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 196. 1886; Illus. Brit. Fungi, 4; pl. 533 (no. 552). 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 1006. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 797. 1916 (ut *A. comptulus*)—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1; 416, f. 2 (p. 351). 1892 (ut *A. comptulus*); Brit. Fungi, 325. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 173. 1900—MURRILL, Mycologia, 14:202. 1922—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:262. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1: 107. 1948.

（原，日．菌．目．9. 1954）

Psalliota comtula QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:140, pl. 24, f. 2. 1872—W. G. SMITH, Brit. Basid. 173. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):428, pl. 83, f. 3—4. 1912—KAUFFMAN, Agar. Mich. 244. 1918—REA. Brit. Basid. 90. 1922—LANGE, Agar. Denm. 6:11. 1926; Fl. Agar. Dan. 4; 62, pl. 136, f. A. 1939—BRESADOLA, Icon. Myc. 17: pl. 833. 1931—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 416, f. 588. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:433, f. 289, B. 1957.

Pratella comtula GILL. Champ. Fr. 565. 1874—QUÉLET, Enchir. Fung. 110. 1886.

Fungus comtulus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3 (2):479. 1898.

Psalliota rusiophylla RICKEN, Blätterp. 238, pl. 62, f. 1. 1915.

子実体は孤生或は幾分群生；傘は径 3—4 cm，円錐形〜丸山形，のち扁平となり，やや中丘あるか或はなし；表面は乾燥，白色，クリーム白色〜灰白色，往々赤色を帯び，中央暗色，圧着せる絹糸状繊維を被むる；肉は薄く，中盤厚し，類肉質，白色にて黄色を帯ぶ，味及臭温和；褶は離生，肉色，のち桃色，遂に暗褐色となる，密，便腹状；茎は 3—5×0.3—0.7 μ，殆ど同幅或は基部僅か肥大，白色にて黄色或は桃色を帯び，平滑，鍔より上部には絹糸様の筋あり，下部には絹糸様の綿毛を有す，中空；鍔は薄膜質，繊細，やや上位，帯黄白色，屢々消失性，不規則に破る；胞子は広楕円形，平滑，紫褐色，4.5—5×3—3.5 μ；胞子紋は煤褐色；稜嚢体は膨大棍棒形

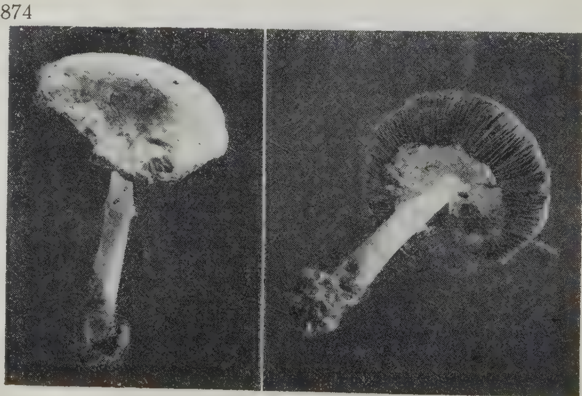
可食。

所在及産地

林地及樹下草間—秋

北海道—欧．北米

和名 コハラタケ（小原茸）〔今井〕



第 126 図 コハラタケ Agaricus comtulus ×1

（大谷氏）

Agaricus comptulellus IMAI

ヒメシロモリノカサタケ

IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:263. 1938.
(原, 日. 菌. 目. 9. 1954)

子実体は群生或は孤生; 傘は小形, 径 1.5—2.2 cm, 円錐形〜丸山形, のち扁平となり, 遂に僅か圧低さる; 表面は乾燥, 白色, 圧着する繊維を被むり, 乾時帯赤黄色となる; 褶は離生, 白色より桃色となり, 遂に暗褐色となる; 茎は 2—4×0.2—0.25 cm, 同幅, 白色, 乾時帯黄色となる, 鍔より上部無毛, 下部繊維を被むる; 鍔は上位, 薄膜質, 帯白色, 消失性; 胞子は広楕円形, 平滑, 5—6×3—4 μ; 胞子紋は暗褐色。

所在及産地

林内広葉樹腐葉上—夏秋　　　北海道

和名 ヒメシロモリノカサタケ (姫白森笠茸)

〔今井〕

Agaricus diminutivus PECK

コモリノカサタケ

PECK, Bull. Buff. Soc. Nat. Sci. 1:53. 1873—KAUFFMAN, Agar. Mich. 245, pl. 50, f. 2. 1918—MURRILL, Mycologia, 14:214. 1922—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Uuiv. 43:264. 1938—HOTSON & STUNTZ, Mycologia, 30:214, f. 2. 1938—HONGO, Bull. Facul. Lib. Arts Educ. Shiga Univ. 2:50, f. 7. 1953.
(原, 日. 菌. 目. 9. 1954)

Fungus diminutivus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):479. 1898.

Psalliota diminutiva P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:238. 1900.

子実体は孤生或は小群生; 傘は径 2.5—5 cm, 丸山形或は円錐状丸山形, のち開張しやや中丘を有し或は扁平となる; 表面は乾燥, 白色, 圧着せる赤褐色の絹糸様鱗片を被むるも中央平坦なり; 肉は帯白色, 変色せず, 薄く, 味及臭なし; 褶は離生, 白色, のち桃色〜帯褐色, 遂に暗褐色となる, 密, やや広幅, 便腹状, 薄し, 稜は全縁; 茎は 3—5×0.3—0.7 cm, 上方に漸細, 基部僅か肥大, 白色或は帯黄色, 屢々老時及傷時褐色を帯ぶ, 無毛或は内生絹糸様綿絮を有す, 中実; 鍔は上位, 薄膜質, 狭く, 白色, 消失性; 胞子は楕円形, 平滑, 4.5—6.5×3—4 μ; 胞子紋は紫褐色; 稜嚢体なし。

所在及産地

樹下及林内落葉間—秋　　北海道, 本州—北米

和名 コモリノカサタケ (小森笠茸) 〔今井〕

Agaricus semotellus IMAI

ヒメモリノカサタケ

IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:264. 1938.
(原, 日. 菌. 目. 10. 1954—今関及土岐, 林. 試. 研. 報. 67:34. 1954)

子実体は群生或は孤生; 傘は小形, 径 1—2.5 cm, 円錐形〜丸山形, のち中丘を有し, 遂に扁平となる, 表面は乾燥, 繊維或は繊維状細鱗片を被むり, 褐色或は栗褐色, 周辺淡色; 肉は白色, 甚だ薄し; 褶は離生, 白色〜暗黄色, のち類栗褐色, 甚だ狭幅; 茎 2—6×0.15—0.3 cm, 上方に僅か漸細, 白色, やや黄色或は暗黄色となる, 鍔より上部は無毛にて絹糸様光沢あり, 下部は繊維を存す; 鍔は上位, 白色, 膜質, 消失性; 胞子は広楕円形, 平滑, 5—6×3—4 μ; 胞子紋は黒紫色。

所在及産地

林内落葉間—夏秋　　　北海道

和名 ヒメモリノカサタケ (姫森笠茸) 〔今井〕

疑問種

Agaricus primipilus BERK. et. CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4:117. 1860—SACCARDO, Syll. Fung. 5:995. 1888.
(松村, 植. 名鑑, 1:130. 1904—白井, 日. 菌. 目. 7. 1905; ed. 2 33. 1917; ed. 3. 13. 1927—原, 日. 菌. 目. 9. 1954)

Agaricus porphyrophyllus BERK. et. CURT. l. c. 118. 1860. (MIQUEL, Prol. Fl. Jap. 392. 1867=*Stropharia porphyrophylla* SACC. Syll. Fung. 5: 1019. 1887=*Psalliota porphyrophylla* P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 238. 1900. (松村, l. c. 1:165. 1904—原, l. c. 285. 1954)

Melanophyllum VELEN.

アカヒダカラカサタケ属

VELENOVSKY, Ceské Houby, 3:569. 1921—SINGER, Agaricales, 434. 1949.

Chlorospora MASS. Kew Bull. 1898:136. 1898 (non SPEGAZZINI 1891).

Chlorosperma MURR. Mycologia, 14:96. 1922.

Glaucospora REA, Brit. Basid. 62. 1922.

子実体はシカタケ (*Pluteus*) 型にてカラカサタケ (*Lepiota*) を想起せしむ; 傘及茎は短細胞被に被わる; 褶は離生, 鮮色を呈す; 胞子紋は青緑色, 或はオリーブ〜緑色を呈するを特長とし, その色は脱水せば屢々暗褐紫色となる; 胞子は表面微細点状に見え, 楕円形にて, 縦面より見れば屢々角形をなす, 臍凹な

く，発芽孔を有せず；褶側に嚢状体なし；疣実質は整型；茎は中心生，やや鍔あるか，少くとも短細胞被によつて基部粉状～尨毛状をなし，傘の場合と同様にその球形細胞は暗褐色の色素を充す；肉は肉質，非糊性，胡瓜臭を有す，菌糸は菌絆を有す；地上，腐皮，堆肥等上に生ず，約2種を知らる。

（本属名は melanos〔希〕(黒色の)，phyllon.〔希〕(葉) より出づ)

基準種　*M. echinatum* (ROTH ex FR.) SING.

本邦既知種　アカヒダカラカサタケ

M. echinatum (294)

Melanophyllum echinatum (FR.) SING.

アカヒダカラカサタケ

SINGER, Agaricales, 436. 1949—HONGO, Jour. Jap. Bot. 31:147, f. 2, f-g. 1956.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 49, f. 118, pl. 22. f. 118. 1957)

Agaricus echinatus ROTH, Catalecta botanica, 2:155, pl. 9, f. 1. 1791—1806—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 419. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1: 286. 1821; Epicr. Myc. 215. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:408. 1857; Hymen. Eur. 282. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:467. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 167. 1860; —COOKE, Handb. Brit. Fungi, 167. 1860; Illus. Brit. Fungi, 3:pl. 395(no. 422). 1886—KARSTEN, Hattsv. 1:487. 1879—A. H. SMITH, Papers Mich. Acad. Sci. Arts Lett. 25:134, f. 4a. 1939.

Agaricus fumosopurpureus LASCH, Linnaea, 3:420. 1828.

Agaricus haematophyllus BERK. Mag. Zool. Bot. n. 38, pl. 15, f. 1. 1837(?).

Agaricus eximius PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 24:70. 1872. (non. LAEST. 1860)

Psalliota echinatus QUÉL. Champ. Jura Vosg. 3:536, pl. 1, f. 3. 1873—W. G. SMITH, Brit. Basid. 174. 1908—KAUFFMAN, Agar. Mich. 245. 1918.

Pratella echinata GILL. Champ. Fr. 565, c. ic. 1874.

Lepiota echinata QUÉL. Enchir Fung. 8. 1886—BRESADOLA, Icon. Myc. 1:pl. 40, f. 2. 1927—KÜHNER, Bull. Soc. Myc. Fr. 52:Atl. 72, f. 1. 1936—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:87. 1948—HEIM, Champ. Eur. 2:411, f. 275, B. 1957.

Inocybe ecninata SACC. Syll. Fung. 5:773. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 718. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:190. 1893; Brit. Fungi, 273. 1911—RICKEN, Blätterp. 113, pl. 31, f. 6. 1915.

Naucoria echinata SCHROET. Pilze Schles. 1: 607. 1889—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 530. 1912.

Agaricus olivaesporus ELL. et EV. Jour. Myc. 50:27. 1889.

Lepiota haematosperma BOURDIER, Bull. Soc. Myc. Fr. 9:6. 1893; 17:175. 1901—LANGE, Fl. Agar. Dan. 1:37, pl. 14, f. C, E. 1935.

Pratella eximia P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:235. 1900.

Hypholoma vinosum KAUFFM. Agar. Mich. 261. 1918.

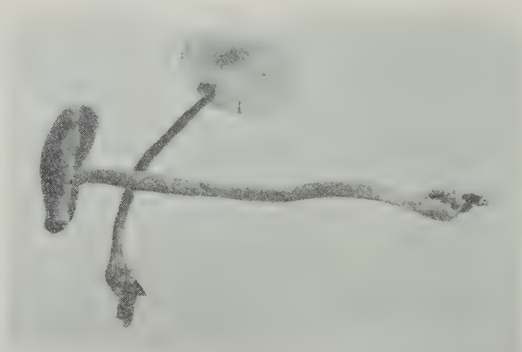
Pilosace Peckii HOUSE, Bull. N. Y. St. Mus. 205—206:39. 1919.

Melanophyllum Canali VELEN. Ceské Houby, 3:569. 1921.

Chlorosperma olivaespora MURR. Mycologia, 14:97. 1922.

Cystoderma echinata SING. Ann. Myc. 34: 338. 1936.

子実体は散生或は群生；傘は径 1—2.5cm，或はそれ以上に及び，円錐状丸山形～丸山形，のち開張し，屢々隆丘あり；表面は乾燥，赤褐色，肉桂色，栗褐色或は黄褐色，周辺僅か淡色，全面粒粉状，屢々不明瞭なる皺あり，縁にベールの残片を附す；肉は薄く，傘にては白色，茎にては煉瓦色，味なく，臭むしろ明かにて良し；褶は離生，後方円形，やや便腹状，密，広幅，初め濃煉瓦色，速に汚小豆色～汚栗褐色，稜は全縁；茎は 1—4×0.1—0.2cm，同幅或は基部僅か太く，鍔より下部消失性の淡肉桂色粉に被われ，基部に白毛あり，軟骨質，管状；鍔は上位，外側綿架粒あり，裂け，消失性；胞子は楕円形，微細点を有し，淡灰黄土色，5.4—6.4×2.6—3.2μ；胞子紋は乾時暗褐紫色；担子柄は 16—18×5.5—6μ，4胞子；稜及褶側嚢体なし；菌糸は菌絆を有す；傘及茎上の粒粉の細胞は球形にて僅か黄土色，径 18—30μ；食毒不明。



第127図　アカヒダカラカサタケ

Melanophyllum echinatum ×1　(大谷氏)

所在及産地

檜林腐蝕物或は蘚間—秋　本州—欧. 南北米

和名　アカヒダカラカサタケ (赤褶傘茸)〔本郷〕

Coprinaceae ROZE ヒトヨタケ科

ROZE, Bull. Soc. Bot. Fr. 23:51. 1876—SINGER, Agaricales, 452. 1949.

Scotosporaceae ROMAGNESI, Rev. Myc. 2:23. 1937.

托は褶状；褶は全面同時に胞子の成熟する平等子実層型(aequihymeniiferous type)或は異時に成熟する不平等子実層型 (inaequihymeniiferous type) のものありて，褶の断面両側平行のものと楔形のものとあり；(1) 平等子実層型及び楔形の褶を有する属に於ては傘の上表皮層は常に特殊なる細胞状にて屢々幾分圧迫され球状ならざる稍々等径,幾分有色，或は鎖状に配列する細胞より成るも，多くは粉状を呈せず，寧ろ稀に被膜層に被わる；(2) 不平等子実層型或は両側平行又は類平行の褶を有する属に於ては褶は常に液化に傾き，寧ろ普通に全傘液化し，その滴は胞子の混入によつて黒色，稀に暗褐色等を呈す；胞子紋は通常暗色にて，黒，暗褐，帯紫暗褐，鈍紫色或は煉瓦色等あり；胞子は多くは寧ろ暗色にて稀に淡色のものあり，通常明かに2重膜，更に複雑なる膜を有するものあり,発達せる発芽孔を有し，稀に欠如，平滑，有疣，有刺或は網状突起を有す，球形，楕円形，円筒形，扁桃形，レモン形，角形等あり，通常同幅，稀に圧辺さる，寧ろ小形〜甚だ大形；担子柄は正常形なるも,一般的には寧ろ短くし，て太し；褶は離生〜類垂生，壺を有せざる種及び液化せざる褶を有する種に於ては充分離生ならず；托実質は整型にて老時類整型となる；茎は中心生，被膜を有し或は欠如；肉は成時幾分乾燥，或は通常肉質〜膜質，屢々甚だ脆し；菌絲を有し稀にこれを欠く。林の内外，建築物中の壌土，砂土，腐蝕物，枯木，糞，落葉等，更に他の蕈菌上等極めて種々なる着生物上に生ず；3亜科に分たる。

本科は3亜科に分たるるも何れも互に親近にて何れも其子実層は所謂ヒトヨタケ型をなし或は上表皮層は細胞状被より成る，且つ菌絲を有し，胞子は発芽孔を有し，又或は熟後液化する等極めて特殊の科にて，一方ハラタケ科 (*Agaricaceae*)，他方オキナタケ科 (*Bolbitiaceae*) に近縁するものと認めらる。

亜科検索表

A. 褶の断面は両側平行或は類平行；傘は屢々少くとも縁に於て深き櫛歯状襞あり；托及び縁或は全子実体は屢々液化す。

(Ⅰ) ヒトヨタケ亜科 **Coprinoideae** (295)

B. 褶の断面は多少楔形；液化せず。

a. 胞子は濃硫酸によつて淡スレート色に変ず，若しも胞子が水中にて黒色不透明なる際に於ても尚之れを認めらる。

(Ⅱ) ナヨタケ亜科 **Psathyrelloideae**(303)

b. 胞子は硫酸によつて変色せず。

(Ⅲ) ヒカゲタケ亜科 **Panaeoloideae** (312)

(Ⅰ) Coprinoideae (FAYOD) SING. ヒトヨタケ亜科

SINGER, Ann. Myc. 34:339. 1936; Agaricales, 454. 1949.

Coprinoideae FAYOD, Ann. Sci. Nat. Bot. VII, 9:379. 1889. (ut subtrib.)

Coprineae P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:204. 1898.

褶の両面は平行し，不平等子実層型，肉質，脆弱にて液化す，然らざれば乾燥せる幾分強靱なる質にて稍々液化す；上表皮層は常に細胞状でなく，単に放射状繊維より成り，或は二叉糸状体状構造等を有す；菌絲を有し，稀にこれを欠く；地上或は種々の基物上に生ず；SINGER 氏は2属を収む。

本邦既知属

ヒトヨタケ属 **Coprinus** (295)

Coprinus PERS. ex S. F. GRAY
ヒトヨタケ属

PERSOON, Tent. Disp. Fung. 62. 1797—S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:632. 1821—FRIES, Syst. Orb. Veg. 1:75. 1825—SINGER, Agaricales, 456. 1943.

Agaricus sect. *Coprinus* PERSOON, Syn. Meth. Fung. 395. 1801.

Agaricus subgen. *Coprinus* FRIES, Syst. Mycol. 1:306. 1821.

Onchopus KARSTEN, Hattsv. 1:526. 1879.

Pselliophora KARSTEN, l. c. 528. 1879.

Coprinellus KARSTEN, l. c. 542. 1879.

Coprinopsis KARSTEN, Acta Soc. Faun. Fl. Fenn. 2(1):27. 1881.

Lentispora FAYOD, Ann. Sci. Nat. Bot. VII,

9:379. 1889.

Ephemelocybe FAYOD, l. c. 380. 1889.

Annularius ROUSSEL, Fl. Calvados, ed. 2. 61. 1801—EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5:443. 1909.

傘は幼時通常円錐形或は鐘形，稀に類球形，のち多くは開張し，特に小形のものに於て著し；上表層及び被膜層の構造は甚だ種々あり；縁或は屢々狭き中盤部を除きたる全傘に亘り褶の背に沿うて屢々深き襞溝を有す；褶は両側面平行にて，老時稜より上方に向つて液化し消滅す，離生或は彎生，或は狭生又は直生；托は隔離せる担子柄を有し，其間に無性細胞即ち擬糸状体が規則正しく外囲に配列し，型的の不平等子実層模様を作る；特有の大型の嚢状体が甚だ屢々褶側に存在す；純正の稜嚢体は多くは存在せぬも，大形の弛く附着する球嚢が存在し稜は異質となる；胞子紋は黒色或は暗褐色，稀に紫黒色；胞子は類黒色にて不透明，稀に暗褐色不透明，或は透明なるも色素によつて甚だ濃色を呈す，色素は容易に濃硫酸にて抽出破壊されて胞子膜は淡きスレート色となる，発芽孔を有し，平滑，稀に疣状，刺状，網状突起を有し或は角形となる，屢々圧辺されて殆ど扁豆形をなし，不等側なり，膜は複雑にて，屢々外被を有す；担子柄は正常形なるも稀に棍棒形なり，通常円筒形或は更に中部狭きものもあり，(1)2(3)4胞子を生ず；托実質は整型；茎は中心生にて多少真直，被膜は存在或は欠如，若し存在せば屢々不明瞭なる２重鍔となり，或は茎の下部に鍔を作りて被膜は壺に類似す，通常傘上に綿絮等となりて存し，稀に真によく発達せるコップ形の壺を作る；肉は通常白色或は類白色，肉質，或は甚だ薄くして脆し，最も薄き種にては殆ど欠如す：菌絲は屢々存在す；林の内外又は建築物内，温室等の地上，糞上，生幹の周周，枯木上，稀に他菌上等に生じ，屢々小なる菌核を有す，半被実；汎布，幼時食用とす。

(本属名は kopros〔希〕(糞) より出づ)

基準種 *C. comatus*(MOELLER ex FR.)S.F.GRAY

本邦既知種検索表

A．幼傘は絨毛，鱗片或は纖維に蔽わる。

a．茎に狭き可動性の鍔を有す；傘は大形，大なる鱗片を有し，円筒状楕円形，白色；胞子 12—15×6—8 μ；野外生。

ササクレヒトヨタケ ***C. comatus*** (297)

b．茎に明かなる鍔なく，稀に基部に環状層を存す。

α．傘は殆ど裸にて不明瞭の圧着せる絹糸状纖維或は微細粉を有するのみ；傘は中～稍々大形，灰色；胞子 9—11×5—6 μ；林内，野外生。

ヒトヨタケ ***C. atramentarius*** (298)

β．幼傘は完全に白色絨毛或は鱗片を被むる。

Ⅰ．胞子紋は黒色；傘は中形。

1．茎は初め基部膨大，のち細くなり，主根状の偽根あり；傘は灰色，僅か灰褐色を帯ぶ。

甲．胞子 10—13×6—7 μ；堆厩肥上。

ネナガヒトヨタケ ***C. macrorhizus*** (299)

乙．胞子小形，7.5—11.5×5.5—7.5 μ；牛糞，堆肥上。

ウシグソヒトヨタケ ***f. microsporus*** (299)

2．茎の基部膨大せず，草本根の如き根状菌糸束を有す；傘は白色，のち灰色，遂に褐色となる；胞子 6—7×4—5 μ；林野，畑地上に著しく叢生。

ホソネヒトヨタケ ***C. rhizophorus*** (300)

Ⅱ．胞子紋は紫黒色；傘は小形，中盤淡色，周辺褐色；胞子 7.5×5—6 μ；腐草上。

ムニンヒトヨタケ ***C. boninensis*** (300)

Ⅲ．胞子紋は暗栗褐色；傘は甚だ小形，初め白色，のち灰色，中盤軟皮色；胞子 7.5—9.5×6—7 μ；禾本草及びヒメムカショモギ茎上。

ヒメヒトヨタケ ***C. friesii*** (300)

B．幼傘は粉或は光沢ある雲母粒に被わる。

a．幼傘は殆ど平滑なる淡灰色の粉被に包まる；傘は稍々小形；胞子 8—10×5—6 μ；菌核より生ず；馬糞，施肥土上。

バフンヒトヨタケ ***C. stercorarius*** (300)

b．傘には小形光沢雲母粒を密布す。

α．傘は中形，藁黄色～鮮渋色；茎 5—10 cm；胞子 8—10×4—5 μ；古株上或は根際に叢生。

キララタケ ***C. micaceus*** (301)

β．傘は前者より小形，黄褐色；茎 2—4 cm；胞子 7—9×4—5 μ；茎の基端に放射状渋色尨毛状菌糸塊を有す；古株，古丸太上。

コキララタケ ***C. radians*** (302)

C．傘は裸にて被膜なし，小形，淡灰色，中央褐色を帯び，放射状扇状襞あり；褶は襟帯を有す，

凋枯す；胞子心臓形或は球状三角形，9—11×7.5—9μ；野外に孤生。

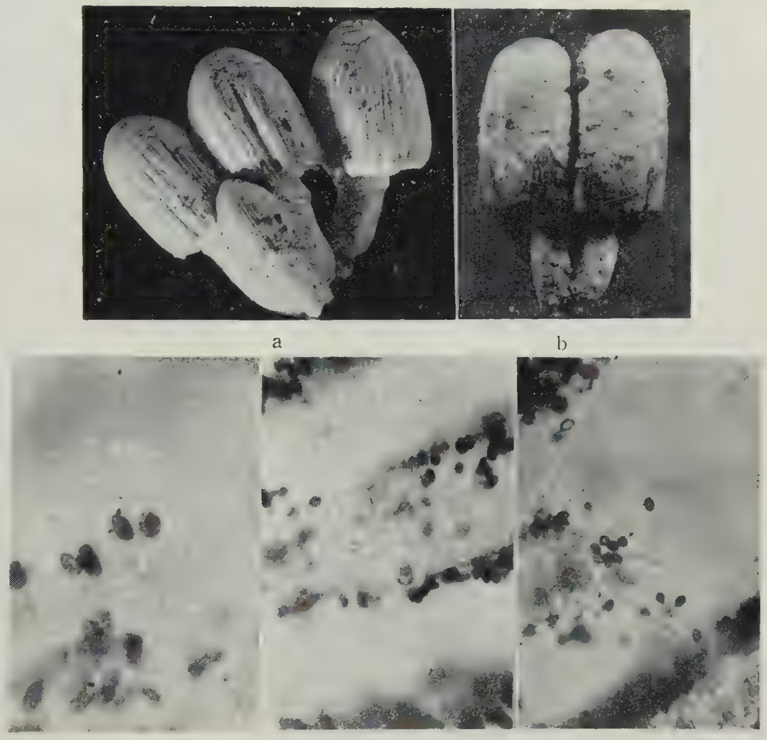
ヒメヒガサヒトヨタケ

C. plicatilis　(303)

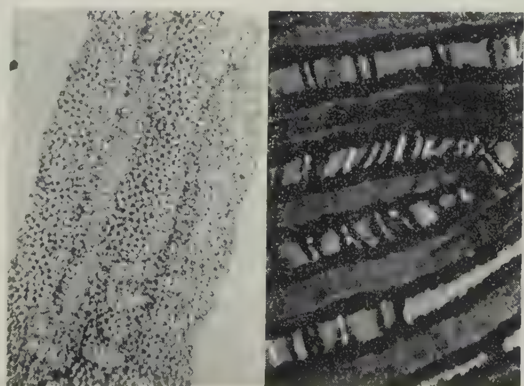
Coprinus comatus (MUELLER ex FR.) S. F. GRAY
ササクレヒトヨタケ

S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:633. 1821—FRIES, Epicr. Myc. 242. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:452. 1857; Hymen. Eur. 320. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 177. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:181. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:161. 1871; Illus. Brit. Fungi, 5: pl. 658(no. 644). 1888; Handb. Austr. Fungi, 68. 1892—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:154. 1872; Enchir. Fung. 121. 1886—GILLET, Champ. Fl. 601, c. ic. 1874—KARSTEN Myc. Fenn. 3:153. 1876—WINTER, Pilze, 1:633. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 1079. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:305. 1892; Ann. Bot. 10:142. 1896; Brit. Fungi, 344, pl. 24, f. 3. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 175. 1900—ATKINSON, Mushrooms. ed. 2. 33, f. 31—38. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 203. 1908—MURRILL, Mycologia, 1:38, pl. 3. f. 3. 1909—ROLLAND, Atl. Champ. 73, pl. 76, f. 170. 1910—RICKEN, Blätterp. 56, pl. 20, f. 1. 1915—LANGE, Agar. Denm. 2: 39, pl. 2, f. 1. 1915; Fl. Agar. Dan. 4:108, pl. 156, f. E. 1939—KAUFFMAN, Agar. Mich. 209. 1918—REA, Brit. Basid. 499. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 173, pl. 86, f. 2. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 18: pl. 874. 1931—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1:157, f. 29. 1934—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:295, pl. 5, f. 1. 1938—LANGE, Fl. Agar. Dan. 4:108, pl. 156, f. E. 1939—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:110. 1948—SINGER, Agaricales, 459. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 205, pl. 82, f. 2. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 389. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 48. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2:483, pl. 41, f. 1. 1957.

(KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 3, f. 18—22. 1912; 日. 菌. 図説, n. 88. 1929; 日. 菌. 図鑑, 5: 557, f. 537. 1954—梅村, 植. 雑. 28:358. 1914—白井, 日. 菌. 目. ed. 2, 171. 1917; ed. 3. 100. 1927—



a　b　f　e　g



d　c

第 128 図　ササクレヒトヨタケ Coprinus comatus
a. b. 子実体 ×1/5
c. 褶横断面の一部 ×100　d. 若き褶の横断面の一部 ×250
e. 子実層拡大 ×300
f. 担子柄並に胞子 ×300　g. 稜嚢体 ×250　(大谷氏)

松浦, 茸類辞典, 182, f. 214. 1933; 応用菌蕈学, 1156. 1941—今関, 原色きのこ, pl. 41(右). 1942—小林, 日. 隠. 植. 図. 517, pl. 249, f. 1—6. 1939—牧野, 日. 植. 図鑑, 1025, f. 3074. 1940—原, 日. 菌. 目. 87. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 54, pl. 24, f. 133. 1957.

Agaricus porcellaneus SCHAEFF. Fung. Bavar. 4:Ind. 21, pl. 46—47. 1774.

Agaricus comatus MUELL. Fl. Dan. pl. 834. 1870—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 395. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:307. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:485. 1844.

Agaricus cylindricus SOW. Col. Fig. Engl. Fungi, pl. 189. 1799.

Pselliophora comata KARST. Hattsv. 1:528. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 257. 1889.

Coprinus porcellanus SCHROET. Pilze Schles. 1:522. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 208, f. 108, G. 1900——MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1): 299, pl. 50. 1912—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 898. 1916.

(松村, 植. 名鑑, 1:137. 1904—白井, 日. 菌. 目. 25. 1905; ed. 2. 171. 1917; ed. 3. 101. 1927—原, 日. 菌. 目. 86. 1954)

子実体は群生, 稀に孤生; 傘は高さ 7—12 cm, 円筒状楕円形, のち鐘形となる, 肉質, 脆し; 表面は白色, 羊毛絨状被を被むり之れに大形の反転性の鱗片を存す, 中盤は平滑にて帯白色～黄褐色, 各鱗片は先端屢々帯赤黄色或は褐色を呈す, 周辺は平坦なるも最後に線条を生ず, 縁は初め僅か内屈し, のち真直となり, 遂に反転し, 屢々数裂片に裂く; 肉は白色, 中盤部厚く, 他は薄し, 味温和; 褶は離生, 白色, のち前方より桃色となり, 遂に黒色となり, 順次黒液となる, 密, 広幅にて 1 cm に及ぶ; 茎は 15—25×0.8—1.5 cm, 殆ど同幅, 或は上方僅か漸細, 基部多少球根状, 白色にて光沢あり, 中空にて球根部は中実; 鍔は初め存在し, 白色, 薄膜質, 狭く, 可動, 速に消失す; 胞子は楕円形, 平滑, 黒色, 12—15×6—8 μ; 胞子紋は黒色; 嚢状体は小胞状, 40—60×18—25 μ; 幼時可食。

所在及産地

草原, 庭園, 路傍等地上—春～秋

全土—欧. 北米. 濠. 阿

和名 ササクレヒトヨタケ (細裂一夜茸) 〔川村〕

Coprinus atramentarius (BULL. ex FR.) FR.

ヒトヨタケ

FRIES, Epicr. Myc. 243. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:455. 1857; Hymen. Eur. 322. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 177, pl. 12, f. 1. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:182. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:162. 1871; Illus. Brit. Fungi, 5: pl. 622(no. 648). 1888—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:155. 1872—GILLET, Champ. Fr. 602, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:154. 1876—WINTER, Pilze, 1:632. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:1081. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 855. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1:521. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:308. 1892; Ann. Bot. 10:143. 1896; Brit. Fungi, 346, pl. 25, f. 1. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 175. 1900—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 208. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 40, f. 39—42. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 204. 1908—MURRILL, Mycologia, 1:39, pl. 3, f. 4. 1909—ROLLAND, Atl. Champ. 73, pl. 77, f. 172. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1)300, pl. 50 E, f. 1—2. 1912—RICKEN, Blätterp. 62, pl. 22, f. 1. 1915—LANGE, Agar. Denm. 2: 39, pl. 2, f. 3. 1915; Fl. Agar. Dan. 4:108, pl. 157, f. H. 1939—KAUFFMAN, Agar. Mich. 212. 1918—REA, Brit. Basid. 501. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 173, pl. 87. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 18: pl. 877. 1931—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1: 159. 1934—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 299. 1938—LANGE, Fl. Agar. Dan. 4:108, pl. 157, f. H. 1939—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:110. 1948—SINGER, Agaricales, 459. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 206, pl. 82, f. 1. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 390, f. 555—556. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 49. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2: 484, pl. 41, f. 3. 1957.

(川村, 日. 菌. 図説, n. 223. 1930; 日. 菌. 図鑑, 5: 555, f. 536. 1954—小林, 日. 隠. 植. 図. 519, pl. 250, f. 2—3. 1939—今関, 原色きのこ, pl. 41(左). 1942—原, 日. 菌. 目. 86. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 53, f. 129, pl. 24, f. 129. 1957.

Agaricus atramentarius BULL. Herb. Fr. pl. 164. 1791—FRIES, Syst. Myc. 1:308. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:457. 1844.

Agaricus fimetarius SOW. Col. Fig. Engl. Fungi, 1: pl. 188. 1799.

Pselliophora atramentaria KARST. Hattsv. 1: 529. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 257. 1889.

Coprinus fuscescens QUÉL. Enchir. Fung. 121. 1886—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1: pl. 32. 1925.

子実体は群生或は叢生; 傘は高さ 4—5 cm, 初め卵形, のち鐘形或は幾分円錐形, 稍々中丘を存す, 肉質; 表面は帯灰色, のち暗色となる, 絹糸様繊維



第129図 ヒトヨタケ Coprinus atramentarius ×1/2

（大谷氏）

1:533. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 260. 1889—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 228. 1883; Illus. Brit. Fungi, 5: pl. 670 (no. 657). 1888; Handb. Austr. Fungi, 69. 1892—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1: 315. 1892; Ann. Bot. 10: 162, pl. 10, f. 1—2. 1896; Brit. Fungi, 347. 1911—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 1087. 1887—W. G. SMITH, Brit. Basid. 205. 1903—KAUFFMAN, Agar. Mich. 215. 1918.

（白井，日．菌．目．ed. 2. 171. 1917; ed. 3. 100. 1927—原，日．菌．目．87. 1954）

Coprinus cinereus KONR. et MAUBL. Icon. Sel. Fung. 1: pl. 35. 1929. (non FR.) pr. p.

Coprinus fimetarius LANGE, Agar. Denm. 2: 41, f. 10a. 1915; Fl. Agar. Dan. 4: 110, pl. 158. f. G. 1939—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1: 112. 1948. pr. p. —WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 207, pl. 80, f. 4. 1950.

或は微細粉状，中盤帯黄或は帯褐色にて屢々微細鱗片を有す，殆ど中盤に至る迄放射状に溝ありて肋脈状，縁は初め僅か内屈，屢々裂片となる，最後に褶の液化する頃反転す；肉は帯灰色，中盤部稍々厚く他は薄く，脆し，味温和；褶は離生，白色，のち黒色となり屢々紫色の色彩を帯ぶ，密，広幅，便腹状，速に液化す，稜に綿絮あり；茎は 8—18×0.8—1.5 cm，初め便腹状，上下に漸細，白色，絹様光沢あり，上部平滑，基部屢々僅かの淡色鱗片あり；中空；鍔は往々茎の基部に環状層となる；胞子は楕円形，平滑，黒褐色，9—11×5—6 μ；胞子紋は黒色；嚢状体は多生，円筒形，170×20—30 μ；幼時可食，但し海外の著には酒と共に食せば害ありとの記事あり。

所在及産地

林内，野外，庭園等肥沃土上，但し糞上に生ぜず一春～秋　　全土—欧．北米．阿．亜(支)

和名 ヒトヨタケ（一夜茸）〔川村〕

Coprinus macrorhizus (PERS. ex FR.) REA

ネナガヒトヨタケ

REA, Brit. Basid. 503. 1922—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 388. 1953.

（本郷，植．分．地．14: 55, f. 12—15. 1950—松田及本郷，植．研．雑．31: 197. 1956—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，54, f. 134, pl. 24, f. 134. 1957）

Agaricus macrorhizus PERS. Syn. Meth. Fung. 398. 1801.

Agaricus cinereus var. *macrorhizus* FR. Syst. Myc. 1: 311. 1821.

Coprinus fimetarius var. *macrorhizus* FR. Epicr. Myc. 245. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1: 460. 1857; Hymen. Eur. 324. 1821—KARSTEN, Hattsv.

子実体は群生或は叢生；傘は高さ 1.5—4.5 cm，初め卵形或は団栗形，のち鐘形となる；表面は初め密なる白色鱗被に蔽わる，鱗被は速に不規則破片となりて脱落す，灰色，のち僅か灰褐色を帯び，中盤平滑，周辺に放射状線条あり，縁は不規則粗鋸歯状をなす，傘開張後縁は反転し液化し線条に沿うて裂く；肉は薄く，帯白色，殆ど膜質；褶は離生，白色，のち速に黒色となり，液化す，密，便腹状，稜は白色；茎は長さ変化し，3—10×0.4—1.3 cm，上方に漸細，基部少しく膨大するも再び細くなり主根状に伸長す（長さ 3—5 cm），表面白色，絹糸状細鱗片を被むる，寧ろ緊緻，中空；胞子は楕円形，平滑，10—13×6—7 μ；胞子紋は黒色；稜嚢体は嚢状，35—40×20—25 μ；幼時可食。

所在及産地

堆肥，厩肥上一春～秋

北海道，本州—欧．北米．濠

和名 ネナガヒトヨタケ（根長一夜茸）〔本郷〕

f. microsporus HONGO

ウシグソヒトヨタケ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 27: 161, f. 2. 1952.

（松田及本郷，植．研．雑．31:197．1956—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，54．1957）

原種に比し胞子小形にて（6.5）7.5—11.5×（4.5）5.5—7.5μ（9.78±0.05×6.47±0.02μ．400 個測定結果）なり。

所在及産地

牛糞或は堆肥上—春～秋　本州

和名 ウシグソヒトヨタケ（牛糞一夜茸）〔本郷〕

Coprinus rhizophorus KAWAM.

ホソネヒトヨタケ

KAWAMURA, Icon. Jap. Fungi, 5:559, f. 538. 1954.

子実体は著しく叢生（約60個に及ぶ）；傘は径 2—6 cm．初め卵形，のち鐘形となり，更に開張し低き中丘を有し，周辺反転し放射状に裂け液化するに至る；表面は初め白色，漸次灰色となり褐色を帯ぶ，上皮は細裂して鱗被となり，各鱗片は褐色にて先端立ち上り，脱落し易く，脱落後放射状線条を現わし，周辺は扇襞状をなす，縁は不規則に細かく凹凸し，往々裂く；肉は白色，全部甚だ薄く，膜質；褶は離生，白色，のち紅色を帯び，遂に黒色となり液化す，幅 6—8 mm；茎は 5—15×0.4—0.7 cm，殆ど同幅，最下部漸細して尖り，黒褐色の根状菌糸束に連結するを特徴とす，白色，絹糸状繊維を被り，のち平滑となる，屢々屈曲，繊維質，中空；胞子は梨種子形，平滑，暗銹褐色，6—7×4—5μ；胞子紋は黒色。

所在及産地

林野，路傍，畑地等の肥土上—夏　本州

和名 ホソネヒトヨタケ（細根一夜茸）〔川村〕

Coprinus boninensis S. ITO et. IMAI

ムニンヒトヨタケ

S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:54. 1940.

子実体は群生；傘は径約 3 cm，開張し，稍々中丘を有す；表面は湿時僅か粘性，中盤に渋色の小鱗片を有し，周辺褐色或は帯白色の繊維を有す；肉は白色，甚だ薄し；褶は離生，初め白色，のち帯紫灰色或は褐黒色となる，液化す，密，甚だ薄し；茎は 5—8×0.3—0.6 cm，上方に漸細，繊維状細鱗片を被むる，中空；胞子は広楕円形或は類球形，平滑，紫褐色，約 7.5×5—6μ；胞子紋は紫黒色。

所在及産地

腐草上—秋　小笠原島

和名 ムニンヒトヨタケ（無人一夜茸）〔今井〕

〔因記〕習性及び胞子紋の色等の特徴あるも将来の研究を要するものと認めらる。

Coprinus friesii QUÉL.

ヒメヒトヨタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:159, pl. 23, f. 5. 1872; Enchir. Fung. 125. 1886—KARSTEN, Hattsv. 1:540. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 268. 1889—WINTER, Pilze, 1:625. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:1106. 1888—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 207. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 176. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1):296. 1912—RICKEN, Blätterp. 61. 1915—REA, Brit. Basid. 514. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:114. 1948—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 208, pl. 80, f 5. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 387, f. 540. 1953—HONGO, Bull. Facul. Lib. Arts Educ. Shiga Univ. 6:32, f. A. 1957—HEIM, Champ. Eur. 2:485, f. 315, D. 1957.

Coprinus Friesii var. LANGE, Fl. Agar. Dan. 4:112, pl. 158, f. D. 1939.

子実体は群生，甚だ小形；傘は卵状楕円形，のち開張して反転し，径 5—10 mm 或はそれ以上；表面は純白色に幼時綿絮様粉状，のち灰色となり周縁部に線条を生じ中盤幾分軟皮色；肉は白色，甚だ薄し；褶は離生，白色，のち暗褐色にて僅か菫色の色彩を帯ぶ，密，狭幅；茎は 1—2 cm，或はそれ以上，幅 ±1 mm，白色，同幅，微粉あり，基部有縁球根状にて放射状の毛を有す；胞子は卵形～類球形，平滑，7.5—9.5×6—7μ，淡褐色にて菫色を帯ぶ（苛性加里液中），無色の明かなる頂孔を有す；胞子紋は暗栗褐色；担子柄は 4 胞子，無色，15—17×6.8—8μ；褶側嚢体は散生，37—75×11.5—13.5μ，棍棒形～便腹状，先端鈍頭～鈍凸頭，無色，薄膜；稜嚢体は多生，22—58×16μ，棍棒形，類円筒形或は鑵形，無色，薄膜；傘表の綿絮（被膜）は分岐せる或は幾分珊瑚状なる多少厚膜無色幅 2.5—6μ の菌糸より成る。

所在及産地

禾本草或はヒメムカシヨモギ（*Erigeron canadensis*）の枯茎上—夏　本州—欧

和名 ヒメヒトヨタケ（姫一夜茸）〔本郷〕

Coprinus stercorarius (SCOP.) FR.

バフンヒトヨタケ

FRIES, Epicr. Myc. 251. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:467. 1857; Hymen. Eur. 330. 1874

—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:187. 1867—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:159. 1872—GILLET, Champ. Fr. 613. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:264. 1876; Hattsv. 1:539. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 264. 1889—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 232. 1883; Illus. Brit. Fungi, 5: pl. 685, f. a(no. 673). 1888; Handb. Austr. Fungi, 70. 1892—WINTER, Pilze, 1:625. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:1103. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 853. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1:520. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:326. 1892; Ann. Bot. 10:167. 1896; Brit. Fungi, 351, pl. 25, f. 2. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:207, f. 108, E. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 176. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 210. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1):294, pl. 50 D, f. 4—6. 1912—LANGE, Agar. Denm. 2:44, pl. 2, f. 19. 1915; Fl. Agar. Dan. 4:114, pl. 159, f. A. 1939—KAUFFMAN, Agar. Mich. 220. 1918—REA, Brit. Basid. 513. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1:pl. 36, f. 3. 1930; Agaricales, 1: 116. 1948—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1:159. 1934(?)—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:302. 1908—LANGE, Fl. Agar. Dan. 4:114, pl. 159, f. A. 1939—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 385. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:487, f. 315 E. 1957.

（松浦，茸類辞典，182，f. 215. 1933—原，日．菌．目．87. 1954）

Agaricus stercorarius SCOP. Fl. Carn. ed. 2, 2:427. 1722.

Coprinus tuberosus QUÉL. Champ. Jura Vosg. Suppl. 6:289, pl. 3, f. 2. 1878; Enchir. Fung. 126. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5:1110. 1887—MASSEE, Ann. Bot. 10:164, pl. 11, f. 26—30. 1896; Brit. Fungi, 353. 1911—REA, Brit. Basid. 513. 1922—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:303. 1938.

（原，日．菌．目．87. 1954）

子実体は孤生或は群生；傘は高さ 0.5—1.5 cm，卵形，のち鐘形となり，往々開張し縁より捲き上り，甚だ薄く，膜質；表面は帯白色，透明，初め淡灰色の殆ど平滑なる粉被に包まるるも，のち消失し僅かに中盤部に残存す，周辺に線条あり，縁は屢々裂く；肉は甚だ薄く，中盤稍々厚し，白色；褶は狭生，初め白色，速に黒色となり，液化す，疎，幅 2—3 mm，便腹状；茎は細長にて 4—10×0.1—0.3 cm，上方に漸細，初め卵状球根あるも茎の伸長に伴つて不明瞭となる，白色，初め粉状，のち平滑，中空，基端に短き或は長き偽根を有し，常に（?）球状，径 2—5 mm の黒色菌核に連る；胞子は卵形～広楕円形，平滑，8—10×5—6 μ；胞子紋は黒色；嚢状体は嚢状。

所在及産地

施肥土，馬糞上—春～秋

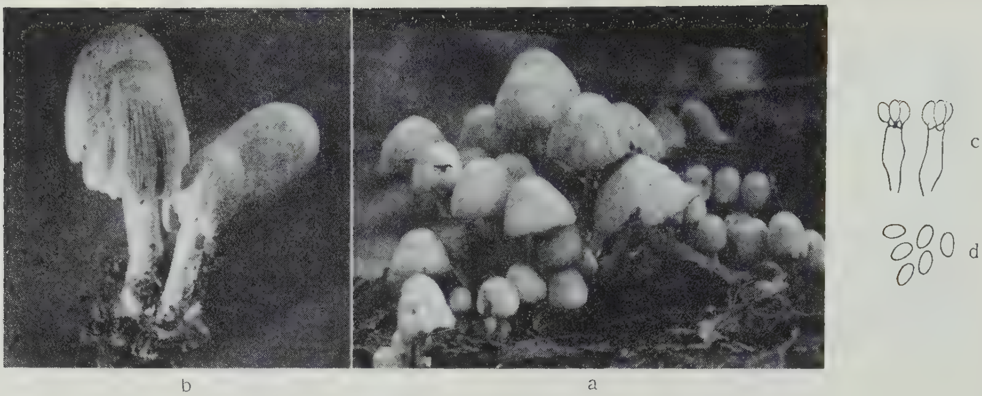
北海道，本州，九州—欧．北米．濠．亜（小亜）

和名 バフンヒトヨタケ（馬糞一夜茸）〔今井〕

Coprinus micaceus (BULL. ex FR.) FR.
キララタケ

FRIES, Epicr. Myc. 217. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:461. 1857; Hymen. Eur. 325. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 179. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:185. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:165, f. 39. 1871; Illus. Brit. Fungi, 5:pl. 673(no. 660). 1888; Handb. Austr. Fungi, 69. 1892—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:156. 1872; Enchir. Fung. 123. 1886—GILLET, Champ. Fr. 606, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:156. 1876; Hattsv. 1:537. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 264. 1889—WINTER, Pilze, 1:629. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:1090. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 861. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:317. 1892; Ann. Bot. 10:166. 1896; Brit. Fungi, 348, pl. 25, f. 10. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 175. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 42, f. 43—44. 1903—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:207. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 206. 1908—MURRILL—Mycologia, 1:39, pl. 3, f. 5. 1909—ROLLAND, Atl. Champ. 73, pl. 75, f. 169. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1): 295, pl. 50 G, f. 3—4. 1912—RICKEN, Blätterp. 63, pl. 22, f. 4. 1915—LANGE, Agar. Denm. 2: 46, pl. 2, f. 24. 1915; Fl. Agar. Dan. 4:116, pl. 160, f. I. 1939—KAUFFMAN, Agar. Mich. 218, pl. 39—40. 1918—REA, Brit. Basid. 506. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 175, pl. 88. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 18:pl. 880. 1931—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1:160, f. 30. 1934—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:301. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:117. 1948—SINGER, Agaricales, 460. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 210, pl. 81, f. 2. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 382, f. 524. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 50. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2:485, f. 314, H. f. 315 A. 1957.

（P. HENNINGS, Bot. Jahrb. 34:600. 1905—白井，日．菌．目．25. 1905; ed. 2. 171. 1917; ed. 3, 100. 1927—安田，植．雑．37:204. 1923—梅村，富士植．志．374. 1923—川村，日．菌．図説，n. 46. 1929; 日．菌．図鑑，5:561，f. 539. 1954—小林，日．隠．植．図．523，pl. 252，f. 2—3. 1939—広江，応用菌蕈学，



第 130 図 キララタケ Coprinus micaceus a. 子実体群生の状 ×1/3
b. 子実体 ×1/2 c. 担子柄 d. 胞子 ×400 (大谷氏)

1157, f. 742. 1941—今関, 原色きのこ, pl. 42(左). 1942—原, 日. 菌. 目. 87. 1954—松田及本郷, 植. 研. 雑. 31:197. 1956—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 53. f. 130, pl. 24, f. 130. 1957)

Agaricus micaceus BULL. Herb. Fr. pl. 246. 1791—FRIES, Syst. Myc. 1:309. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:456. 1844.

子実体は叢生; 傘は高さ 2.5—3.5 cm, 初め卵形, のち鐘形, 鈍頭或は稍々中丘あり, 肉質, 脆し; 表面は藁黄色～鮮渋色, 中盤濃色, 遂に暗色となり, 乾時銹黄色となる, 初め光沢ある雲母状粉粒を薄く被むるも速に脱落し, 約 3/4 程放射状溝を生じ, 液化する際には裂く, 縁は襞状をなし不正なり; 肉は甚だ薄く, 淡黄色, 味温和; 褶は狭生, 初め淡色, のち甚だ暗褐色, 密, 披針形, 液化す; 茎は 5—10×0.3—0.8 cm, 同幅或は上方に僅か漸細, 白色, 平滑, 中空; 胞子は幾分レモン形, 平滑, 発芽孔あり, 7—10×4—5.5 μ; 胞子紋は褐黒色; 嚢状体は甚だ大形, 卵形, 幅 65 μ に及ぶ, 可食。

所 在 及 産 地

広葉樹古株上或は周囲地上—春～秋

全土—欧. 北米. 濠. 亜(小亜. 支. 西比)

和 名 キララタケ (雲母茸) 〔川村〕

ツブヒトヨタケ (粒一夜茸) 〔安田〕

Coprinus radians (DESM.) FR.

コキララタケ

FRIES, Epicr. Myc. 248. 1838; Hymen. Eur. 326. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 179. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:186. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:166. 1871; Illus. Brit. Fungi, 5: pl. 676, f. a(no. 663). 1888—GILLET, Champ. Fr. 607. 1874—QUÉLET, Enchir. Fung. 123. 1886—SACCARDO, Syll. Fung, 5:1092. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 860. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:319. 1892; Ann. Bot. 10:167. pl. 10, f. 6—8. 1896; Brit. Fungi, 348. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl. -fam. 1, 1**: 207, 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 206. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1): 293. 1912—RICKEN, Blätterp. 64. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 219. 1818—REA, Brit. Basid. 507. 1922—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:301. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:117. 1948—SINGER, Agaricales, 460. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 209, pl. 82, f. 4. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 383. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:485, f. 314, J. f. 315 c. 1957.

(HONGO, Jour. Jap. Bot. 28:335, 1953—原, 日. 菌. 目. 87. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 53, f. 131, pl. 24, f. 131. 1957)

Agaricus radians DESM. Ann. Sci. Nat. Bot. 13:214, pl. 10, f. 1. 1828.

子実体は叢生; 傘は高さ 2.5 cm に及び, 卵形, のち鐘形～開張す; 表面は黄褐色, のち淡色となる, 殆ど中盤に至る迄放射状溝及び線条あり, 小褐色雲母粒に蔽わる, 粒は中盤に於て著し; 肉は薄く, 白色, 皮下及び茎部は渋色を呈す; 褶は着生, 白色, のち紫黒色, 密, 狭幅; 茎は 2—4×0.4—0.8 cm, 同幅或は基部僅か太く, 白色, 平滑或は初め微細粉状, 基端に放射状渋色粍毛様菌糸塊 (ozonium) を有するを特徴とす; 胞子はレモン形にて明かなる発芽孔あり, 平滑, 褐黒色, 6.5—8.5×3—4.5 μ; 胞子紋は黒色。

所 在 及 産 地

切株, 古丸太, 鋸屑等上—夏秋

北海道, 本州—欧, 北米, 亜, (支)

和 名 コキララタケ (小雲母茸) 〔今井〕

Coprinus plicatilis (W. CURT. ex FR.) FR.

ヒメヒガサヒトヨタケ

FRIES, Epicr. Myc. 252, 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:468. 1857; Hymen. Eur. 331. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 181. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:189. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:169. 1871; Illus. Brit. Fungi, 5: pl. 686, f. a(no. 674). 1888; Handb. Austr. Fungi, 70. 1892—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:156. 1872; Enchir. Fung. 125, 1886—GILLET, Champ. Fr. 612, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3: 158. 1876; Hattsv. 1:541. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 265. 1889—WINTER, Pilze, 1:624. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:1108. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 850. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:328. 1892; Ann. Bot. 10:177, pl. 11, f. 23—25. 1896; Brit. Fungi, 351, 353, 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 176. 1900—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 205, f. 108, B. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 210. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1): 290, pl. 50E, f. 3—4. 1912—RICKEN, Blätterp. 65, pl. 23, f. 2. 1915—LANGE, Agar. Denm. 2:48, pl. 2, f. 31. 1915; Fl. Agar. Dan. 4:119, pl. 160, f. A. 1939—KAUFFMAN, Agar. Mich. 226. 1918—REA, Brit. Basid. 516. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 18: pl. 884. 1931—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1:161. 1934—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:304. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:119. 1948—SINGER, Agaircales, 460. 1949—WAKEFIELD & DENNIS. Comm. Brit. Fungi, 210, pl. 81, f. 3. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 376, f. 515. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:490, f. 314, B. m; f. 317, c. 1957.

(松村, 植. 名鑑, 1:137. 1904—白井, 日, 菌. 目. 25, 1905; ed. 2. 171. 1917; ed. 3. 101. 1927—小林, 日. 隠. 植. 図. 521, pl. 251, f. 4—5. 1939—S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:53. 1940—今関, 原色きのこ, pl. 42(右). 1942—原, 日. 菌. 目. 87. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 54, f. 132, pl. 24, f. 132. 1957)

Agaricus plicatilis CURT. Fl. Lond. pl. 200. 1777—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fung. 3: pl. 264, 1803—FRIES, Syst. Myc. 1:312. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:454. 1844.



第131図 ヒメヒガサヒトヨタケ
Coprinus plicatilis ×1.2 (大谷氏)

子実体は孤生; 傘は高さ 0.9—1.3cm, 団栗形, のち開張して殆ど扁平となり, 圧低せる中盤を有す; 表面は初め幾分帯黄色, のち淡灰色にて黄味或は褐色味を帯び, 殊に中盤部に於て褐色を帯ぶ, 中盤部の縁より放射状の扇状襞を有し, 甚だ薄く, 膜質にて殆ど透明; 肉は帯白色或は淡色, 甚だ薄し; 褶は離生, 襟帯を作る, 灰色にて速に灰黒色となる, 疎, 狭幅, 凋枯するも液化せず; 茎は細長にて脆く, 4—7×0.1—0.2cm, 同幅或は上方に僅か漸細, 平滑, 上部帯白色, 下部帯褐色, 基部に於て稍々絨毛あり, 中空; 胞子は幾分扁平にて心臓形或は球状三角形, 平滑, 褐黒色, 9.5—11×7.5—9μ; 胞子紋は黒色; 嚢状体は嚢状或は気球状, 幅約 25μ。

所在及産地

芝生, 野外, 路傍, 堆肥上—春〜秋

北海道, 本州—欧. 北米. 濠. 阿

和名 ヒメヒガサヒトヨタケ(姫日傘一夜茸)

〔今井〕

疑問種

Coprinus modestus BERK. et. CURT. Proc. Acad. Arts Sci. 4:118. 1860.

(松村, 植. 名鑑, 1:137, 1904—白井, 日. 菌. 目. 25. 1905; ed. 2. 171. 1917; ed. 3. 100. 1927—原, 日. 菌. 目. 87. 1954)

(II) Psathyrelloideae (KÜHNER) SINGER ナヨタケ亜科

SINGER, Agaricales, 461. 1949.

Psathyrellés KÜHNER, Bull. Soc. Myc. Fr. 52: 33. 1936.

Scotospores ROMAGNESI, Rev. Myc. 1(1):33. 1936.

Scotosporaceae ROMAGNESI, Rev. Myc. 2(6): 245. 1937.

Scotosporoideae SINGER, Ann. Myc. 34:339. 1936.

褶は断面楔形にて液化せず; 胞子は硫酸にて変色せず; SINGER 氏 (1949) は3属を収む。

本邦既知属検索表

A. 傘は小形，扇面状襞溝を有す；胞子紋は黒色或は濃暗褐色；

イヌセンボンタケ属 **Pseudocoprinus** (304)

B. 傘は中形，扇面状襞溝なし；胞子紋は帯紫暗褐色～殆ど黒色。

ナヨタケ属 **Psathyrella** (305)

Pseudocoprinus KÜHNER
イヌセンボンタケ属

KÜHNER, Le Botaniste, ser. XX:155. 1928—SINGER, Agaricales, 461. 1949.

傘は薄く，膜質，甚だ脆し，襞溝を有し，褶の背の上にて裂ける；褶は薄く，直生，初め直上す，液化せず；胞子は褐色或は黒褐色にて発芽孔を有す，紋は黒色或は濃暗褐色；傘及び茎の表面及び褶稜には薄膜大形の直立せる毛を有す；嚢状体は褶側面には存在せず；半被実；殆ど汎布，約2種，経済的関係なし。

(本属名は pseudo〔希〕(偽の)，*Coprinus*(属名)より出づ)

基準種 *P. disseminatus*(PERS. ex FR.)KÜHNER

本邦既知種 イヌセンボンタケ *P. disseminatus* (304)

Pseudocoprinus disseminatus (PERS. ex FR.) KÜHNER
イヌセンボンタケ

KÜHNER, Le Botaniste, ser. XX:156. 1928—LANGE, Fl. Agar. Dan. 4:103, pl. 156, f. A. 1939—SINGER, Agaricales, 462. 1949.

(今関及本郷，原色日. 菌. 図鑑，54, f. 135, Pl. 25, f. 135; pl. 68. f. 403. 1957)

Agaricus minutulus SCHAEFF. Fung. Bavar. 4:Ind. 72, pl. 308. 1774.

Agaricus disseminatus PERS. Syn. Meth. Fung. 403. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:305. 1821; Epicr. Myc. 240. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 451. 1857; Hymen. Eur. 316. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:458. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 176. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:180. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:160. 1871; Illus. Brit. Fungi, 5:pl. 657, f. b (no. 641). 1888; Handb. Austr. Fungi, 68. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:153. 1876—WINTER, Pilze, 1:635. 1884.

Coprinus disseminatus S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:634. 1821—RICKEN, Blätterp. 67, pl. 23, f. 4. 1915—LANGE, Agar. Denm. 2:46, pl. 2, f. 26. 1915—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:120. 1948—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 381. 1953.

Psathyrella disseminata QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:153, pl. 8, f. 5. 1872—GILLET, Champ. Fr. 618, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:524. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 255. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:1134. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:345. 1892; Brit. Fungi, 337. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 176. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 48, f. 49. 1903——W. G. SMITH, Brit. Basid. 201. 1908—MURRILL, Mycologia, 6:166, pl. 132. 1914—KAUFFMAN, Agar. Mich. 227. 1918—REA, Brit. Basid. 422. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 18:pl. 889, f. 2. 1931—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1:148, f. 27. 1934—LANGE, Agar. Denm. 11:17. 1936—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:295, pl. 4, f. 10. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 203, pl. 79, f. 5. 1950.

(川村，日. 菌. 図説，n. 135. 1929；日. 菌. 図鑑，5:562, f. 540. 1954—沢田，台. 菌. 調. 報. 5:81. 1931—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:115. 1931—松浦，茸類辞典，89, f. 100—101. 1933；応用菌蕈学，f. 775—776. 1941—小林，日. 隠. 植. 図. 539, pl. 260, f. 1—5. 1939—S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:54. 1940—今関，原色きのこ，pl. 42(中). 1942 原，日. 菌. 目. 286. 1954)

Coprinarius disseminatus QUÉL. Enchir. Fung. 120. 1886—SCHROETER, Pilze, Schles. 1:563. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:233, f. 114, A. 1900—MIGULA. Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1):393, pl. 70 B, f. 1—2. 1912.

Psathyrella minutula SACC. Fl. Ital. Crypt. Hymen. 868. 1916.

Coprinellus disseminata LANGE, Agar. Denm. 12:93. 1938.

Drosophila disseminata HEIM, Champ. Eur. 2:478, f. 81(9). 1957.

子実体は著しく群生或は多数叢生；傘は径1—1.5 cm，時に 2 cm に及ぶ，初め卵形，のち鐘形，遂に幾分開平す；表面は初め白色或は帯黄色，のち灰色～灰褐色となる，中央小形皮色の中丘に至る迄著しき扇襞状溝を有す，初め顕微鏡的の直立一室の毛に被われ，フケ状，のち無毛となる；肉は甚だ薄く，膜質；褶は着生，初め白色，のち暗灰色，遂に黒色となる，稍々疎，寧ろ広幅，便腹状，液化せず，稜は同質；茎は 2—4×0.1—0.2 cm，同幅或は上方に僅か漸細，往々屈曲し，白色，稍々透明，初め微細毛あ



第132図 イヌセンボンタケ
Pseudocoprinus disseminatus (大谷氏)

るも，のち無毛となり，基部に尖毛ありて粗荒，中空；胞子は楕円形，平滑，6—8×4—5μ；胞子紋は褐黒色。

所在及産地

林内地上，切株上一春～秋

全土一欧．北米．濠．阿．亜(台．小亜)

和名 イヌセンボンタケ（犬千本茸）〔川村〕

Psathyrella (FR.) QUÉL. em. KÜHN.
ナヨタケ属

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:152. 1872—KÜHNER, Le Botaniste, ser. XX:1928—SINGER, Agaricales, 463. 1949.

Agaricus ser. *Pratella* trib. *Hypholoma* FRIES, Syst. Mycol. 1:287. 1821.

Agaricus ser. *Pratella* trib. *Psathyra* FRIES, l. c. 295. 1821.

Agaricus subgen. *Psathyra* FRIES, Epicr. Mycol. 231. 1838.

Agaricus subgen. *Psathyrella* FRIES, l. c. 237. 1838.

Agaricus subgen. *Hypholoma* FRIES, l. c. 221. 1838.

Hypholoma QUÉLET, l. c. 143. 1872.

Psathyra QUÉLET, l. c. 148. 1872(non SPRENGEL. 1818)

Pannucia KARSTEN, Hattsv. 1:512. 1879.

Drosophila QUÉLET, Enchir. Fung. 115. 1886.

Lacrymaria PATOUILLARD, Hymen. Eur. 122. 1887.

Atylospora FAYOD, Ann. Sci. Nat. Bot. VII. 9:376. 1889.

Glyptospora FAYOD, l. c. 377. 1889.

Pluteopsis FAYOD, l. c. 377. 1889.

Cortiniopsis SCHROETER, Pilze Schles. 1:566. 1889.

Gymnochilus CLEMENTS, Bot. Surv. Nebr. 4:23. 1896 (non BLUME).

Hypholomopsis EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5:436. 1909.

傘は鐘形，円錐形或は初め白玉鍵形，通常明かに吸水性，屢々乾時光沢あり，明かなる細胞状の上表皮層を有す，稀にその上を繊維状被膜にて一部被わる；褶は離生ならずして狭生～直生，稀に直状垂生す；托実質は整型或は類整型，苛性加里にて有色或は無色；担子柄は正常形にて，往々2胞子を生ず；嚢状体は存在するも往々稜に限らる；子実層はヒトヨタケ属と異り，担子柄は屢々互に接触し，擬糸状体は規則正しく担子柄を中断隔離せしむることなし；褶は楔形にて不平等子実層型なり；胞子紋は帯紫暗褐色～濃暗褐色～黒色，稀に鈍銹色；胞子は透明或は不透明，発芽孔を有す，平滑にて何等の突起なきも往々僅か長方形或は方形をなす，小形（6μ以下)～大形（20μに至る)，複雑膜を有す；茎は中心生，通常確然たる管状，波曲或は真直，被膜は存在或は欠如，存在せば往々鍔となるも通常茎上に強き痕跡を残さず，常にコップ状壺を作らず；往々擬根及び白色の短かき根状束を有す；肉は白色或は幾分有色；菌糸は通常菌絆を有す；林の内外に於ける地上，生又は死植物上，糞上，他菌上等に生ず；多分全部半被実；汎布，約 25 種を知らる，良好食用菌あるも利用さるること少し，6亜属に分たる。

（本属名は *Psathyra*〔属名〕，即ち〔希〕（こわれ易き)，ella（縮小詞）より出づ）

基準種 *P. gracilis* (FR.) QUÉL.

本邦既知亜属及種検索表

A．傘はむしろ肉質にて内屈する縁を有し，明かに被膜を有し，屢々縁膜片を存す。

a．胞子はレモン形にて有疣，殆んど不透明，胞子紋は殆ど黒色；茎上に被膜を残存するも正常の鍔を作らず；地上生。

(1) ムジナタケ亜属 **Lacrimaria** (306)

b．胞子は楕円形にて平滑，透明，胞子紋は紫褐色～暗褐紫色；茎上に被膜の残物なし；腐木及びその周囲に叢生。

(2) イタチタケ亜属 **Hypholoma** (307)

B．傘は類膜質にて真直の縁を有し，裸或は微小消失性の被膜あり，屢々透明線条あり，茎は多くは細長；胞子は長さ 10μ 以上，レモン形ならず；胞子紋は黒色；地上生。

(3) ナヨタケ亜属 **Psathyrella**
(*Eu-Psathyrella*) (310)

(1) ムジナタケ亜属 **Lacrimaria**

A. 傘は黄褐色, 初め圧着せる羊毛状繊維を被むり, 径 5—11 cm; 胞子 8—12×5—7.5 μ; 孤生。
ムジナタケ ***P. velutina*** (306)

B. 傘は赤褐～灰褐色, 皺ありて粗面, 径 3—5 cm; 胞子 8—10×5—6 μ; 群生或はやや叢生。小笠原島産。
オガサワライタチタケ
P. boninense (307)

(2) イタチタケ亜属 **Hypholoma**

A. 肉は白色; 傘は淡蜜黄～淡褐色, 吸水性, 径 3—6 cm; 褶は灰菫色, のち暗褐紫色; 胞子 6—8×3.5—5 μ。
イタチタケ ***P. candolleana*** (307)

B. 肉は傘面と同色。
a. 傘は雲母粒を被むり, 中央星形糅粉状, 灰褐色, 殆ど非吸水性, 径 1.5—2.5 cm; 褶は帯褐灰色; 胞子 7—8×4—5 μ; 小笠原島産。
キラライタチタケ
P. stellatifurfuracea (308)
b. 傘に著しき雲母粒なし, 吸水性。
α. 傘は褐色～暗褐色, 径 2.5—5 cm; 褶は灰褐色, のち暗褐色; 胞子 5—6×3—3.5 μ。
ムササビタケ ***P. hydrophila*** (308)
β. 傘は湿時焦茶色, 乾時帯赤淡黄色, 径 1.5—3 cm; 褶は暗紫色となり; 胞子 7—9×3.5—5 μ。
センボンクズタケ ***P. multissima*** (309)
γ. 傘は湿時汚黄褐色, 乾時周辺黄白色, 中央黄色, 微粒あり; 褶は栗褐色; 胞子 5—6.5×3—4 μ。
コツブクズタケ ***P. microspora*** (310)

(3) ナヨタケ亜属 **Psathyrella**
(*Eupsathyrella*) (310)

A. 偽根を有す。
a. 茎は真直, 頂部粉状ならず; 傘は 1.5—2.5 cm, 色変化す, 大体黄褐～赤褐; 肉白色。
ナヨタケ ***P. gracilis*** (310)
b. 茎は往々屈曲, 頂部粉状; 傘は 2—2.5 cm, 赤褐～汚赤褐; 肉は有色。
ナガネクズタケ ***P. microrhiza*** (311)

B. 偽根なし。
a. 茎多少波曲, 頂部粉状; 傘は 0.8—3 cm, 褐黄色にて往々桃色を帯ぶ; 肉は白色～淡色。
キラライヌセンボンタケ
P. atomata (311)
b. 茎は真直, 頂部粉状ならず; 傘は 2—4 cm, 黒褐色; 肉は白色; 傘面に剛毛あり。
オオナヨタケ ***P. subatrata*** (312)

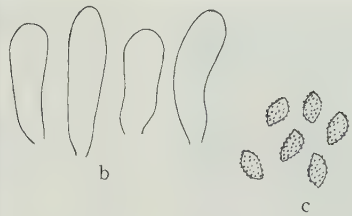
(1) Lacrimaria (Pat.) Smith et Sing. (1949)
Lacrymaria Pat. (1887)
ムジナタケ亜属

Psathyrella velutina (Pers. ex Fr.) Sing.

ムジナタケ

Singer, Agaricales, 466. 1949.
(松田及本郷, 植. 研. 雑. 30: 262. 1955—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 55, f. 136, pl. 25, f. 136. 1957)
Agaricus velutinus Pers. Syn. Meth. Fung. 408. 1801—Fries, Epicr. Myc. 223. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1: 424. 1857; Hymen. Eur. 293. 1874—Rabenhorst, Deut. Krypt. Fl. 1: 465. 1844—Berkeley, Outl. Brit. Fung. 170, pl. 11, f. 2. 1860—Cooke, Handb. Brit. Fungi, 1: 145. 1871; Illus. Brit. Fungi, 4: pl. 563(no. 582). 1886—Karsten, Myc. Fenn. 3: 142. 1876—Winter, Pilze, 1: 650. 1884.
Agaricus lacrymabundus β. velutinus Fr. Syst. Myc. 1: 288. 1821.
Coprinus velutinus S. F. Gray, Nat. Arr. Brit. Pl. 1: 633. 1821.
Hypholoma velutinum Quél. Champ. Jura Vosg. 1: 145. 1872—Gillet, Champ. Fr. 569, c. ic. 1874—Karsten, Hattsv. 1: 499. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 240. 1889—Saccardo, Syll. Fung. 5: 1034. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 817. 1916—Massee, Brit. Fung. Fl. 1: 388. 1892; Brit. Fungi, 332. 1911—P. Hennings, in Engler & Prantl, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 237. 1900—W. G. Smith, Brit. Basid. 182. 1902—Harper, Trans. Wisc. Acad. Arts Lett. 17: 1154, pl. 79. 1914—Kauffman, Agar. Mich. 260, pl. 53. 1918—Rea, Brit. Basid. 265. 1922—Parker, Mycologia, 25: 200, pl. 31, f. 38. 1933—Imai, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 282. 1938—Wakefield & Dennis, Comm. Brit. Fungi, 193, pl. 76, f. 3. 1950.
(今関, 原色きのこ, pl. 19(左). 1942; 及土岐, 林. 試. 研. 報. 67: 43. 1954—原, 日. 菌. 目. 160. 1954—川村, 日. 菌. 図鑑, 5: 580, f. 551. 1954)
Lacrymaria velutina Pat. Ess. Tax. 173. 1900—Konrad & Maublanc, Agaricales, 1: 129. 1948—Heim, Champ. Eur. 2: 479. 1957.
Lacrymaria lacrymabunda var. *velutina* Lange.





第133図　ムジナタケ
Psathyrella velutina
a．子実体 ×1/3　b．嚢状体
c．胞子 ×400　（大谷氏）

Fl. Agar. Dan. 4:72. 1939.

Drosophila velutina KÜHN. et ROMAGN. Fl. Analyt. Champ. Super. 371, f. 513, B. 1953.

Hypholoma lacrymabunda Auct. plur. (non FRIES).

子実体は孤生，群生或は叢生；傘は径 5—11 cm, 鐘形，のち丸山形となり，往々鈍中丘あり；表面は暗黄色～黄褐色，中央暗色，初め圧着せる羊毛状纖維或はその纖維の結合せる鱗片に蔽われ，後速に平滑となる，往々放射状の皺あるも線条なし，時に罅裂を生ず，縁は初め内屈し，早失性の縁膜片は帯白色にて裂け房毛状となる；肉は中盤厚く，柔軟，帯黄色或は帯褐色，味温和或は稍々不快，臭は特性なし；褶は狭生～彎状直生等変化し，後方広幅，前方狭く，暗褐色，胞子により殆ど黒色となる，密，稜に白色綿絮あり，通常乳状或は無色の小滴を附す；茎は 5—14×0.5—1.4 cm，同幅或は下部稍々肥大，傘面とほぼ同色，頂部淡色にて粉状，下部纖維或は鱗片状，脆く，中空；鍔は纖維状，白色，のち胞子により帯黒色を呈す；胞子はレモン形，有疣，濃帯紫暗褐色にて殆ど黒色，頂に発芽孔あり，8—12×5—7.5 μ；胞子紋は殆ど黒色；稜嚢体は円筒状棍棒形，先端頭状，幅約 10 μ。

所在及産地

林内，野外草間，路傍地上—夏秋

北海道，本州，九州—欧．北米．阿

和名　ムジナタケ（貉茸）〔川村〕

Psathyrella boninense (S. ITO et IMAI)

オガサワライタチタケ

Hypholoma boninense S. ITO et IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:52. 1940.

子実体は群生或はやや叢生；傘は径 3—5 cm，円錐形，のち開張す；表面は吸水性，中部赤褐色，周辺湿時栗褐色，皺ありて粗面，縁は波状；肉は薄く，皮下淡小豆色，他は白色，臭及び味なし；褶は直生～狭生，密，狭幅，小豆色，のち黒褐色；茎は 4—8×0.4—0.8 cm，同幅，帯白色～帯褐色，纖維状，捩曲，中空；胞子はレモン形～扁桃形，有疣，8—10×5—6 μ；胞子紋は殆ど黒色。

所在及産地

林地上—秋　小笠原島

和名　オガサワライタチタケ（小笠原鼬茸）〔今井〕

(2) Hypholoma (FR.) ROMAGNESI (1944)

イタチタケ亜属

Psathyrella candolleana (FR.) A. H. SMITH

イタチタケ

A. H. SMITH, Contr. Univ. Mich. Herb. 5:41. 1941—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1: 126. 1948—SINGER, Agaricales, 467. 1949.（本郷，植．研．雑．27:192, f. 2(6—7). 1952—松田及本郷，植．研．雑．30:262. 1955—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，55, f. 137, pl. 25, f. 137. 1957）

Agaricus violaceo-lamellatus DC. Fl. Fr. 2: 143. 1815.

Agaricus Candolleanus FR. Obs. Myc. 2:182. 1818; Syst. Myc. 1:296. 1821(ut *Candollianus*); Epicr. Myc. 224. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:426. 1857; Hymen. Eur. 295. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:465. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 170. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:145. 1871; Illus. Brit. Fungi, 4: pl. 546(no. 586). 1886; Handb. Austr. Fungi, 63. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:143. 1876—WINTER, Pilze, 1:649. 1884.

Hypholoma Candolleanum QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:146. 1872—GILLET, Champ. Fr. 570. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:501. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 241. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:1038. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 819. 1916—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 237. 1900—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:391. 1892; Brit. Fungi, 332. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 174. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 183. 1908—HARPER, Trans. Wisc. Acad. Sci. Arts Lett. 17:1156, pl. 80. 1914—MURRILL, Mycologia, 7:120, pl. 158, f. 7. 1915—RICKEN, Blätterp. 246, pl. 64, f. 4. 1915—REA, Brit. Basid. 266. 1922—LANGE, Agar. Denm. 5:42. 1923; Fl. Agar. Dan. 4:77, pl. 146, f. B.

1939—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1: pl. 43. 1926—BRESADOLA, Icon. Myc. 18: pl. 852. 1931—PARKER, Mycologia, 25: 177, pl. 26, f. 12; pl. 27, f. 18; pl. 28, f. 29. 1933—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 279. 1938 (?)—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 193, pl. 77, f. 1. 1950.

Drosophila Candolleana QUÉL. Enchir. Fung. 115. 1886—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 368, f. 502, c. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 51, A. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2: 477. 1957.

Psathyra Candolleana SING. Ann. Myc. 34: 339. 1936.

Hypholoma appendiculatum Auct. nonnul.

(P. HENNINGS, Bot. Jahrb. 31: 738. 1902; 32: 40. 1903; 34: 600. 1905—松村, 植. 名鑑, 1: 148. 1904—白井, 日. 菌. 目. 43. 1905; ed. 2. 289. 1917; ed. 3. 169. 1927—KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 16, f. 1—5. 1915; 日. 菌. 図説, n. 25. 1929; 日. 菌. 図鑑, 5: 578, f. 550. 1954—梅村, 富士, 植. 志. 373. 1923—松浦, 茸類辞典, 161—162, f. 189—191. 1933; 応用菌蕈学, f. 779. 784. 1941—今関及土岐, 林. 試. 研. 報. 67: 43. 1954—原, 日. 菌. 目. 162. 1954)

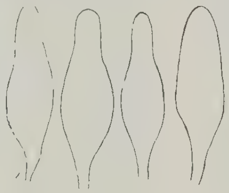
Hypholoma stipatum IMAI (non SCHROETER), Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 280. 1938.

(S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16: 53. 1940—今関, 原色きのこ, pl. 19(右). 1942—原, 日. 菌. 目. 160. 1954)

子実体は叢生或は密に群生; 傘は径 3—6 cm, 鐘形, のち丸山形となり, 鈍頭, 更に扁平となり, 縁辺反転し中丘を存す, 薄くして脆し; 表面は吸水性, 初め淡蜜黄色或は褐色, のち褪色して帯白色となり, 中盤帯赤淡黄色となる, 無毛なるもレンズ下に光粒を認めらる, 平坦或は乾時皺を生じ, 老時深く罅裂す, 縁は初め白色早失性の房毛を有し, 開張後深く割裂す; 肉は白色, 甚だ薄し, 味及び臭なし; 褶は狭生にて, のち離れ, 初め帯白色, 寧ろ速に帯灰菫色となり, 遂に暗褐紫色となる, 密, 狭幅, 稜に初め白色房毛あり; 茎は 4—7×0.4—0.8 cm, 同幅, 白色, 繊維を有し, 頂部有線条にて粉状, 剛直にて脆く, 中空; 胞子は楕円形, 平滑, 発芽孔あり, 6—8×3.5—5 μ; 胞子紋は暗褐紫色; 褶側嚢体なく, 稜嚢体は嚢状〜稍々円筒形, 鈍頭, 25—40×6.5—11 μ, 或は 37—50×9—13 μ; 可食。



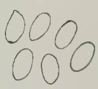
a



b



c



d

第 134 図　イタチタケ
Psathyrella candolleana
a. 子実体 ×1/2　b. 稜嚢体
c. 担子柄　d. 胞子 ×550
(大谷氏)

所在及産地

枯幹材上又は周囲—夏秋　北海道, 本州, 九州—欧. 北米. 濠. 阿. 亜(小亜. 西比)

和名 イタチタケ (鼬茸)〔川村〕

Psathyrella stellatifurfuracea (S. ITO et IMAI)
キラライタチタケ

Hypholoma stellatofurfuraceum S. ITO et IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16: 53. 1940.

子実体は密に群生或は叢生; 傘は径 1.5—2.5 cm, 円錐形, のち丸山形となり, 更に扁平となる; 表面は殆ど吸水性ならず, 幼時淡桃色, のち淡灰褐色〜灰褐色となり, 中央暗色, 僅か皺あり, 雲母粒を被むり, 中央星芒状穀粉あり, 縁は初め綿絮状縁膜片あり, のち消失す, 長き線条を有す; 肉は薄く, 傘面と同色, 臭及び味なし; 褶は狭生, 帯褐灰色, 中位に密; 茎は 2.5—5×0.15—0.3 cm, 同幅, 白色, 絹状光沢あり, 基部白色粗毛あり, 中空; 胞子は楕円形, 平滑, 7—8×4—5 μ; 胞子紋は暗紫褐色。

所在及産地

陰林枯木上—秋　小笠原島

和名 キラライタチタケ (雲母鼬茸)〔今井〕

Psathyrella hydrophila (BULL. ex FR.) A. H. SMITH
ムササビタケ

A. H. SMITH, Contr. Univ. Mich. Herb. 5: 53. 1941—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1: 125. 1948—SINGER, Agaricales, 468. 1949.

(本郷, 植. 研. 雑. 27: 193. 1952—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 56, f. 138, pl. 25, f. 138. 1957)

Agaricus hydrophilus BULL. Herb. Fr. pl. 511. 1791—FRIES, Epicr. Myc. 225. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1: 427. 1857—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1: 146. 1871; Illus. Brit. Fungi, 4: pl. 605, f. b.

(no. 589). 1886.

Agaricus stipatus β. hydrophilus FR. Syst. Myc. 1:296. 1821.

Hypholoma hydrophilum QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:146. 1872—KARSTEN, Hattsv. 1:502. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 242. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:1041. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 821. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:394. 1892; Brit. Fungi, 333. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 174. 1900 (ut *hydrophyllum*) —W. G. SMITH, Brit. Basid. 184. 1908—RICKEN, Blätterp. 247, pl. 64, f. 6. 1915—HARPER, Trans. Wisc. Acad. Sci. Arts Lett. 18:417. pl. 24. 1916 —KAUFFMAN, Agar. Mich. 266, 1918—REA, Brit. Basid. 268. 1922—LANGE, Agar. Denm. 5:43. 1923; Fl. Agar. Dan. 4:78, pl. 146, f. A. 1939—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1:42. 1926—BRESADOLA, Icon. Myc. 18: pl. 854. 1931—PARKER, Mycologia, 25:181, pl. 26, f. 10; pl. 27, f. 22; pl. 28, f. 28; pl. 30, f. 36. 1933—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:281. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 194, pl. 77, f. 2. 1950.

(S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:52. 1940—本郷, 植. 分. 地. 14:74, f. 1(13) 1951)

Bolbitius hydrophilus FR. Hymen. Eur. 333. 1874—GILLET, Champ. Fr. 594, c. ic. 1874.

Drosophila hydrophila QUÉL. Enchir. Fung. 116. 1886—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 51, B. 1956.

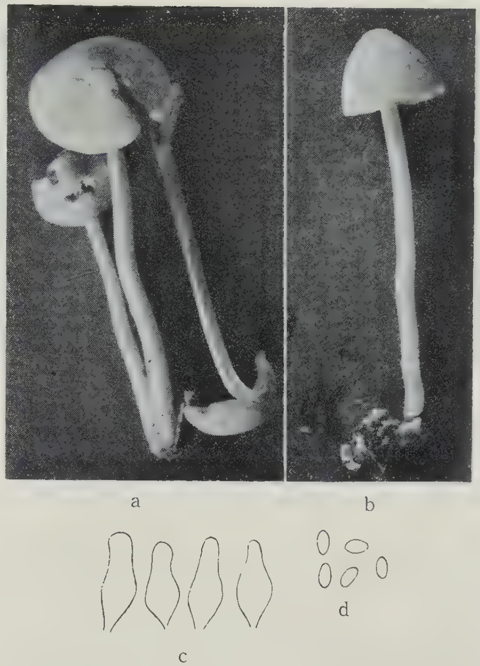
Psathyra hydrophila SING. Ann. Myc. 34:339. 1936.

Hypholoma appendiculatum Auct. nonnul.

Drosophila appendiculata KÜHNER. et ROMAGN. Fl. Analyt. Champ. Super. 365, f. 493. 1953.

Drosophila appendiculata QUÉL. Enchir. Fung. 116. 1886—HEIM, Champ. Eur. 2:477, f. 81(8). 1957.

子実体は叢生或は密に群生；傘は径 2.5—5 cm, 鐘状丸山形，鈍頭或は僅か中丘を有し，のち開張す，薄く，脆し；表面は吸水性，湿時褐色～暗褐色，乾時淡渋色或は黄渋色，稍々粉状，平坦或は周辺に稍々線条あり，乾時皺を生ず；縁は初め全縁，のち屢々波状を呈し，裂ける，白色の甚だ早失性の被膜の残片を有す；肉は薄く，同色，味及び臭殆どなし；褶は直生，初め灰褐色，のち暗褐色となる，密，稍々広幅，便腹状，薄し，稜は幼時微細白色房毛あり；茎は 3—6×0.25—0.5 cm，同幅，光沢あり，白色或は帯白色，のち下方幾分帯褐色，無毛にて頂部粉状，下部繊維を有す，剛直にて脆く，中空；胞子は楕円形，平滑，淡紫褐色，5—6×3—3.5 μ；胞子紋は紫褐色；稜嚢体は便腹棍棒形，30—33×10—11 μ；可食。



第 135 図　ムササビタケ Psathyrella hydrophila
a. b. 子実体 ×1/2　c. 嚢状体　d. 胞子 ×500
（大谷氏）

所在及産地

広葉樹腐株上及びその周囲—夏～初冬

北海道，本州，九州，小笠原島—欧．北米

和名　ムササビタケ（鼯茸）〔今井〕

Psathyrella multissima (IMAI) HONGO
センボンクズタケ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 27:193. 1952.

Psathyra multissima IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:293, pl. 5, f. 2. 1938.

(原, 日. 菌. 目. 286. 1954)

子実体は密に叢生；傘は径 2—5 cm，高さ 1.5—3 cm，円錐形，のち円錐状鐘形；表面は吸水性，湿時焦茶色，乾時帯赤淡黄色，有皺，縁に白色消失性の膜片あり；肉は薄く，同色；褶は直生，密，幅 3—5 mm，最後に暗紫色となる，稜に白色房毛あり；茎は 10—17×0.2—0.4 cm，殆ど同幅，剛直にて脆く，撓曲，時に捩曲す，白色光沢あり，淡色となり，上部無毛，下部白色軟毛あり；胞子は楕円形，平滑，7—9×3.5—5 μ；胞子紋は暗褐紫色；稜嚢体は類紡錘形，鈍頭，無色。



第 136 図　センボンクズタケ Psathyrella multissima × 1/2 （大谷氏）

所在及産地

林内腐木上一秋　北海道

和名 センボンクズタケ（千本屑茸）〔今井〕

Psathyrella microspora (IMAI) HONGO

コツブクズタケ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 27:194. 1952.

Psathyra microspora IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:294. 1938.

（原, 日. 菌. 目. 286. 1954）

子実体は孤生或は群生するも密に叢生せず；傘は径 1—2 cm, 円錐形，のち鐘形となるも丸山形とならず；表面は無毛，皺あり，吸水性，湿時汚黄褐色，乾時周辺帯黄白色にて中盤黄色，湿時線条あり，乾時微粒ありて稍々光沢を有す；肉は同色，薄し；褶は狭生，栗褐色，密，稜に白色房毛なし；茎は 2—3.5×0.15—0.2 cm, 同幅或は基部僅か肥大, 帯白色或は帯黄色，光沢あり，無毛，基部に軟毛あり，中空；胞子は楕円形，両端鈍頭，平滑，5—6.5×3—4μ；胞子紋は暗褐紫色。

所在及産地

林内腐木上一秋　北海道

和名 コツブクズタケ（小粒屑茸）〔今井〕

(3) **Psathyrella** (*Eu-Psathyrella*) SING. (1949).

ナヨタケ亜属

Psathyrella gracilis (FR.) QUÉL.

ナヨタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:152. 1872—GILLET, Champ. Fr. 615, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:521. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 253. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:1127. 1887: Fl. Ital. Crypt. Hymen. 870. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:340. 1892; Brit. Fungi, 335. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 176. 1900—RICKEN, Blätterp. 264, pl. 68, f. 2. 1915—REA, Brit. Basid. 419. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1: pl. 39. 1929; Agaricales, 1:122. 1948—HONGO, Jour. Jap. Bot. 28:74, f. 3 (6—8). 1953—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 202, pl. 79, f. 4. 1950.

（今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 56, f. 139, pl. 25, f. 139. 1957）

Agaricus gracilis PERS. Syn. Meth. Fung. 425. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1: 299. 1801; Epicr. Myc. 238. 1836; Monogr. Hymen. Suec. 1:448. 1857; Hymen. Eur. 313. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:459. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 176. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:138. 1871; Illus. Brit. Fungi, 5: pl. 634 (no. 635). 1888—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:152. 1872—WINTER, Pilze, 1:637. 1884.

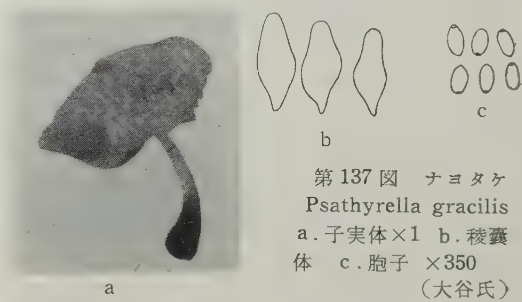
Prunulus gracilis S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 3(2):630. 1821.

Coprinarius gracilis QUÉL. Enchir. Fung. 119. 1886—SCHROETER, Pilze Schles. 1:563. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:233. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1):339, pl. 71, f. 3—4. 1912.

Drosophila gracilis QUÉL. Fl. Myc. 57. 1888—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 357, f. 471. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:475, f. 311, B. 1957.

Psathyra gracilis BERTRAND, Bull. Soc. Myc. Fr. 17:277. 1901—LANGE, Agar. Denm. 11:15. 1936; Fl. Agar. Dan. 4:100, pl. 154, f. B. 1939.

子実体は屢々群生；傘の径 1.5—2.5 cm, 或はそれ以上に及び，鈍円錐形，のち鐘形～広丸山形，鈍頭或は僅か中丘あり；表面は無毛，吸水性，色は甚だ変化性に富み，湿時渋赭褐色或は淡赤褐色，乾時淡渋色, 細き透明線条の為めに周辺部は灰色を呈す，のち淡皮色となり，屢々桃色を帯ぶ；肉は薄膜質，白色，臭なし；褶は広く直生し，淡色，のち帯紫灰色，遂に暗褐色となり，稍々疎或は疎，広幅，薄く，



第 137 図　ナヨタケ Psathyrella gracilis a. 子実体×1　b. 稜嚢体　c. 胞子 ×350 （大谷氏）

稜は通常幾分桃色を呈し，平坦或は房毛あり；茎は7—9×0.15—0.2cm，同幅，白色，平滑，真直，脆く，基部に長き白色毛を疎生し，短き主根状偽根を有す，中空；胞子は楕円形，平滑，11—14.5×6—7.5μ，発芽孔あり；胞子紋は黒色；褶側及稜嚢体は同形，棍棒形～便腹状，屢々先端に乳頭或は糸状突起を有す，29—56×9—15μ。

所在及産地

林内落枝落葉間一秋 本州，九州一欧．北米．阿

和名 ナヨタケ（嫋茸）〔本郷〕

Psathyrella microrhiza (LASCH) SING.
ナガネクズタケ

SINGER, Agaricales, 469. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:123. 1948.

Agaricus microrhizus LASCH, Linn. 3:426. 1828—FRIES, Epicr. Myc. 234. 1838; Hymen. Eur. 309. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:461. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 217. 1883; Illus. Brit. Fungi, 4:pl. 596, f. a (no. 622). 1886—WINTER, Pilze, 1:641. 1884.

Drosophila microrhiza QUÉL. Enchir. Fung. 118. 1886.

Psathyra microrhiza SACC. Syll. Fung. 5: 1073. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 841. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:362. 1892; Brit. Fungi, 339. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 194. 1908—RICKEN, Blätterp. 257. 1915—REA, Brit. Basid. 419. 1922.

(P. HENNINGS, Bot. Jahrb. 31:738. 1902—松村，植．名鑑，1:165. 1904—白井，日．菌．目．76. 1905; ed. 2. 495. 1917; ed. 3. 304. 1927—原，日．菌．目．286. 1954)

Psilocybe microrhiza P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 235. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):415. 1912.

Drosophila microrhiza KÜHN. et ROMAGN. Fl. Analyt. Champ. Super. 358. 1953.

子実体は群生；傘は径 2—2.5cm，円錐状鐘形～鐘形，のち陣笠形，鈍頭，膜質；表面は吸水性，赭色，或は汚赤褐色，のち淡色，乾時光沢粒あり，初め黄色毛状繊維あり，往々周辺に線条あり，縁に初め早失性白色房毛を存す；肉は有色；褶は狭生，初め淡色，のち黒褐色となる，疎，狭幅；茎は 6—8×0.2—0.4cm，同幅，基部主根状偽根となるを特徴とす，帯白色～淡色，絹糸状繊維あり，頂部粉状，剛直にて脆く，往々屈曲，中空；胞子は広楕円形，平滑，透明褐色，10—12×6—7μ；胞子紋は暗褐色，褶側及び稜嚢体は披針形，鈍頭，45—50×10—12μ。

所在及産地

林内外地上一秋 本州一欧

和名 ナガネクズタケ（長根屑茸）

Psathyrella atomata (FR.) QUÉL.
キラライヌセンボンタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:153. 1872—GILLET, Champ. Fr. 617. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:524. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 254. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:1132. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 869. 1916—PATOUILLARD, Ess. Tax. 176. 1900—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:344. 1892; Brit. Fungi, 336. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 200. 1908—RICKEN, Blätterp. 265, pl. 68. f. 5. 1915—REA, Brit. Basid. 421. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 18: pl. 889, f. 1. 1931—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:296. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:123. 1948—SINGER, Agaricales, 469. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 203, pl. 80, f. 3. 1950.

(原，日．菌．目．286. 1954)

Agaricus atomatus FR. Syst. Myc. 1:298. 1821; Epicr. Myc. 239. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:450. 1857; Hymen. Eur. 315. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 176. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:159. 1871; Illus. Brit. Fungi, 5: pl. 638(no. 642). 1888—KARSTEN, Myc. Fenn. 3: 153. 1876—WINTER, Pilze, 1:636. 1884.

Coprinarius atomatus QUÉL. Enchir. Fung. 120. 1886—SCHROETER, Pilze Schles. 1:563. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:233. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1):397, pl. 70B, f. 6—9. 1912.

Psathyra atomata LANGE, Agar. Denm. 11: 17. 1936; Fl. Agar. Dan. 4:102, pl. 156, f. c. 1939.

Drosophila atomata KÜHN. et ROMAGN. Fl. Analyt. Champ. Super. 355. 1953.

子実体は群生或は孤生；傘は径 0.8—3cm，半球状鐘形，のち鐘状丸山形，鈍頭；表面は僅か吸水性，湿時淡灰色，乾時黄味を増して往々桃色を帯ぶ，レンズ下にて光粒の散存せる観を呈し，湿時周辺に僅か線条あるも，乾時は皺あるのみにて線条なし；肉は薄く，白色或は淡色，脆く，味及び臭なし；褶は広く直生，灰色，寧ろ疎，広幅，薄し；茎は 4—6×0.1—0.3cm，同幅，上部白色にて殆ど透明，下部黄色を帯ぶ，平滑，頂部粉状，屢々撓曲，脆く，中空；胞子は楕円形或は卵形，平滑，11—13×6—8μ；胞子紋は黒色；稜嚢体は罎形，幅 12—14μ。

所在及産地

路傍草間一春～秋 北海道｜欧．北米

和名 キララキヌセンボンタケ（雲母犬千本茸）〔今井〕

Psathyrella subatrata (BATSCH ex FR.) GILL.
オオナヨタケ

GILLET, Champ. Fr. 616, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:521. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 1126. 1888; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 872. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1;339. 1892; Brit. Fungi, 335. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 199, f. 50. 1908—RICKEN, Blätterp. 264, pl. 68, f. 3. 1915—REA, Brit. Basid. 419. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 18: pl. 887. 1931—A. H. SMITH, Pap. Mich. Acad. Sci. Arts Lett. 23:216, pl. 2. 1937—KONRAD & MAUBLANC Agaricales, 1: 122. 1948—SINGER, Agaricales, 470. 1949—HONGO Jour. Jap. Bot. 32:210, f. 2, A-B. 1957.

Agaricus subatrata BATSCH, Elench. Cont. 1: 103, pl. 18, f. 89. 1786—FRIES. Epicr. Myc. 238. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:305. 1863; Hymen. Eur. 313. 1874—WINTER, Pilze, 1:637. 1884—COOKE, Illus. Brit. Fungi, 5: pl. 633(no. 634). 1888.

Drosophila subatrata QUÉL. Enchir. Fung. 117. 1886—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 354, f. 30. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:475, f. 311. A. 1957.

Psathyra conopilea var. *subatrata* LANGE, Fl. Agar. Dan. 4:100, pl. 155, f. E. 1939.

子実体は群生或は 2—3 叢生；傘は径 2—4 cm, 初め卵形，のち円錐状鐘形，鈍頭，無毛，吸水性，湿時黒褐色，肉桂色或は渋色，乾時赤味を増す，縁は湿時有線，老時褪色，皺を生じ，光沢ある微粒あり；肉は水潤状，白色，甚だ脆くして薄し，臭及び味温和；褶は密，狭幅，初め着生，速に離れ，淡肉桂色，速に暗黒褐色となり，稜に白毛あり；茎は長く，10—15×0.3—0.5 cm，同幅，真直，脆く，裂け易く，無毛或は絹糸状，鈍白色，中空；胞子は楕円形，平滑，無色の頂孔を有す，11—15×6—7.5 μ，顕微鏡下苛性加里液にて灰褐色；稜嚢体は多生，やや便腹状，長頸にて円頭，或物はやや頭状，平滑，厚膜，無色，33—60×7—12 μ；傘面の剛毛は暗褐色，厚膜，60—300×3.5—7.5 μ，かくの如き剛毛の在存は本種の特徴なり。

所在及産地

林内地上—春〜秋　　本州一欧．北米

和名 オオナヨタケ（大嫋茸）〔本郷〕

疑　問　種

Psathyra fusco-nivea (BERK. et CURT.) SACC. Syll. Fung. 5:1064. 1887=*Agaricus fusco-niveus* BERK. et CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4: 118. 1860.

（松村，植．名鑑，1:165. 1904—白井，日．菌．目．76 1905; ed. 2. 495. 1917; ed. 3. 304. 1927—原，日．菌．目．283. 1954）

Psathyra obtusata

（P. HENNINGS, Bot. Jahrb. 31:738. 1902—松村植．名鑑，1:165. 1904—白井，日．菌．目．76. 1905; ed. 2. 497. 1917; ed. 3. 304. 1927—原，日．菌．目．286. 1954）

Psathyrella hiascens

（P. HENNINGS, Bot. Jahrb. 31:40. 1903—松村，植．名鑑，1:165. 1904—白井，日．菌．目．76. 1905; ed. 2. 497; ed. 3. 304. 1927—原，日．菌．目．286. 1954）

（Ⅲ） Panaeoloideae SINGER ヒカゲタケ亜科

SINGER, Ann. Myc. 34:339. 1936; Agaricales 470. 1949.

Panaeoleae ROMAGNESI, Rev. Myc. 2:23. 1937.

Panaeolês KÜHNER, Bull. Soc. Myc. Fr. 52: 33. 1936.

傘は特有なる鐘形にて稀に開張す，稀に半球形にて開張せず，細胞状の上表皮層を有す；褶は液化せず，成時甚だ不平等に胞子を以て粉づけられ，そのために側面より見れば寧ろ点状に見ゆるも平等子実層型に属す；胞子は屢々レモン形，濃硫酸にて処理するも変色せず，SINGER 氏(1949)は 4 属を収む。

本邦既知属検索表

A．嚢状体は褶側に在存せず。

a．胞子紋は濃き帯紫暗褐色；胞子は有疣。
　　ヒメシバフタケ属 **Panaeolina** (313)

b．胞子紋は黒色；胞子は平滑。
　　ヒカゲタケ属 **Panaeolus** (314)

B．嚢状体は褶側に在存す，黄金嚢体に類似するもアンモニアによつて内容は明かに黄色とならず，無色，薄膜にして広円頂を有す；子実体は型的のヒカゲタケと異り，それより肉質にて厚く，吸水性ならず；茎は屢々中実にて白色；表皮層は粘性。
　　ジンガサタケ属 **Anellaria** (317)

Panaeolina R. MAIRE
ヒメシバフタケ属

R. MAIRE, Publ. Junta Ciènc. Nat. Barcelona, 1933: 109. 1933—SINGER, Agaricales, 471. 1949.
Psilocybe FAYOD, Ann. Sci. Nat. Bot. VII, 9: 377. 1889.

一般性質は亜科の記載に同じ；胞子紋は濃き帯紫暗褐色，胞子は疣或は微疣を有す；陽地土上に生ず；只１種を知らる。

（本属名は *Panaeolus*（属名）より出づ）

基準種 *P. foenisecii* (PERS. ex FR.) R. MAIRE

本邦既知種 ヒメシバフタケ *P. foenisecii* (313)

Panaeolina foenisecii (PERS. ex FR.) R. MAIRE
ヒメシバフタケ

KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1: 133. 1948—SINGER, Agaricales, 471. 1954.

Agaricus foenisecii PERS. Ic. Descr. Fung. 2: 42, pl. 11, f. 1. 1800; Syn. Meth. Fung. 411. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1: 295. 1821; Epicr. Myc. 227. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1: 437. 1857; Hymen. Eur. 303. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1: 464. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 171, pl. 11, f. 5. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2: 177. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1: 149. 1871: Illus. Brit. Fungi, 4: pl. 590 nec. 608). 1886; Handb. Austr. Fungi, 64. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3: 148. 1867—WINTER, Pilze, 1: 644. 1884.

Prunulus foenisecii S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit Pl. 1: 631. 1821.

Psilocybe foenisecii QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1: 147. 1872—GILLET, Champ. Fr. 583, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1: 508. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 1055. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 833. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1: 377. 1892—PATOUILLARD, Ess. Tax. 174. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 189. 1908—MURRILL, Mycologia, 3: 99, pl. 40, f. 5. 1911—RICKEN, Blätterp. 256, pl. 66, f. 8. 1915—KAUFFMAN, Agr. Mich. 283, pl. 54. 1918—REA, Brit. Basid. 369. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 171, pl. 86, f. 1. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 18: pl. 862. 1931—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1: 143. 1934—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 287. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 199, pl. 78, f. 4. 1950.
（原．日．菌．日．236. 1954）

Drosophila foenisecii QUÉL. Enchir. Fung. 117. 1886.

Psathyra foenisecii KARST. Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 248. 1889—MASSEE, Brit. Fungi, 344. 1911.

Coprinarius foenisecii SCHROET. Pilze Schles. 1: 565. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 234. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 401. 1912.

Panaeolus foenisecii KÜHNER, Contr. Etude Hymen. 187. 1926; & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 349. 1953—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1: pl. 50, f. 2. 1929—LANGE, Agar. Denm. 11: 24. 1936; Fl. Agar. Dan. 4: 88, pl. 150, f. c. 1939—HEIM, Champ. Eur. 2: 471, f. 310, A. 1957.

子実体は群生或は散生；傘は 1—2.5 cm，鐘状丸山形或は類半球形，鈍頭，通常開張せず；表面は吸水性，平滑，無毛，湿時鈍汚褐色，乾時淡赭褐色或は淡肉桂色，周縁に暗色の帯を寧ろ永存す，縁膜片なし；肉は白色或は淡色，薄く，味及び臭なし；褶は直生，初め淡褐色にて斑紋あり，のち焦茶色或は暗褐色，稍々疎，広幅，前方広し，稜に白色房毛あり；茎は 3—8×0.15—0.4 cm，同幅，無毛，平滑，頂部粉状，傘面より淡色，脆し，中空；胞子は狭レモン形，微疣を有し，鈍褐色，発芽孔あり，12.5—16×7.5—9 μ；胞子紋は帯紫暗褐色；稜嚢体は毛状


a



第 138 図 ヒメシバフタケ
Panaeolina foenisecii
a．子実体 ×1 b．嚢状体
c．担子柄 d．胞子 ×450
（大谷氏）

或は棍棒形，波状，幅 5—6μ。

所在及産地

草原及び路傍—夏秋　　北海道—欧.北米.濠

和名　ヒメシバフタケ（姫芝生茸）〔今井〕

Panaeolus (FR.) QUÉL.
ヒカゲタケ属

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:151. 1872—SINGER, Agaricales, 471. 1949.

Campanularius ROUSSEL, Fl. Calvados, ed. 2, 64. 1806.

Agaricus subgen. *Panaeolus* FRIES, Epicr. Mycol. 234. 1838.

Chalymmota KARSTEN, Hattsv. 1:518. 1879.

Coprinarius subgen. *Panaeolus* QUÉLET, Enchir. Fung. 118. 1886.

傘は鐘形，稀に円錐形，通常色素を有し，稀に初め色素なし，老時開張せざるか或は僅か開張す，屢々多少吸水性，白色或は類白色にて一様に黒斑を有する被膜が縁に附着し，或は裸縁なり，粘性或は乾燥；上表皮層は細胞状；褶は小部分的に成熟する担子柄のために著しく斑色となる，少くとも幼時に於て直上す；稜嚢体を有す；その他の嚢状体なし；胞子はレモン形，稀に一様なる楕円形，平滑，黒色，不透明，寧ろ大形（すべての既知種は 10μ 以上），明かなる広き発芽孔を有す，厚き複雑の膜を有す；茎は通常傘径に比して甚だ長く，寧ろ細く，通常少くとも有色，管状，中心生なり；土上，糞上に生ず；多くは半被実；汎布，約 6 種を知られ，薬用となるものあり。

（本属名は Pan（牧場の神の名）より出づ）

基準種　*P. sphinctrinus* (FR.) QUÉL.

本邦既知種検索表

A. 傘縁は褶より長く抽出し，縁膜片を存す，傘の周辺に暗色の帯なし。

a. 傘は鐘状丸山形或は半球形，湿時帯灰色，乾時藁色にて淡色系，平滑或は不規則破片に罅裂す。

ワライタケ　***P. papilionaceus***　(314)

b. 傘は鐘形或は円錐状鐘形，渋色～赭色にて暗色系。

α. 傘は通常網状脈を有す。

サイギョウガサタケ　***P. retirugis***　(315)

β. 傘は網状脈を有せず，屢々不規則に罅裂し，光沢を有す。

ヒカゲタケ　***P. campanulatus***　(316)

B. 傘縁は褶より抽出せずして，周辺に多少暗色の帯を有す。

a. 傘は鐘形～半球形，灰褐色或は灰白色。

マグソタケ　***P. fimicola***　(316)

b. 傘は開張し中丘を有し，暗赤褐色，寧ろ大形。

センボンサイギョウガサタケ

P. subbalteatus　(317)

Panaeolus papilionaceus
(BULL. ex FR. em. FR.) QUÉL.
ワライタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:152. 1872—GILLET, Champ. Fr. 622. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:1122. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 876. 1916—KARSTEN, Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 252. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:335. 1892; Brit. Fungi, 334. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 197. 1908—RICKEN, Blätterp. 267, pl. 69, f. 3. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 231. 1918—REA, Brit. Basid. 371. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1:pl. 49. 1929; Agaricales, 1:131. 1948—LANGE, Agar. Denm. 11: 22. 1936; Fl. Agar. Dan. 4:86, pl. 149, f. G. 1939—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:291. 1938—SINGER, Agaricales, 472. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 196, pl. 78, f. 3. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 351. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:471, f. 309, B. 1957.

（川村，食用菌及有毒菌，f. 67(p. 79). 1931；日.菌図鑑，5:565，f. 543. 1954—広江，応用菌蕈学，815. 1941—今関，原色きのこ，pl. 40(右). 1942—原，日.菌.目．233. 1954—今関及本郷，原色日.菌.図鑑，56. 1957）

Agaricus papilionaceus BULL. Herb. Fr. pl. 561, f. 2, m, n. 1791—FRIES, Syst. Myc. 1. 301. 1821. pr. p. ; Epicr. Myc. 236. 1838; Hymen. Eur. 311. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:460. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 175. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:179. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:157. 1871; Illus. Brit. Fungi, 5:pl. 630(no. 631). 1888; Handb. Austr. Fungi, 67. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:151. 1876—WINTER, Pilze, 1:639. 1884.

Coprinus papilionaceus S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:633. 1821.

Chalymmota papilionacea KARST. Hattsv. 1: 519. 1879—SCHROETER, Pilze Schles. 1:567. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:234. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):405, pl. 74, f. 4—6. 1912.

(P. HENNINGS, Bot. Jahrb. 32:40. 1903—松村, 植. 名鑑, 1:134. 1904—白井, 日. 菌. 目. 19. 1905; ed. 2. 127. 1917; ed. 3. 77. 1927—原, 日. 菌. 目. 63. 1954)

Coprinarius papilionaceus QUÉL. Enchir. Fung. 119. 1886.

Copelandia papilionacea BRES. Hedw. 53:51. 1913; Icon. Myc. 18:pl. 897. 1931.

子実体は孤生或は群生；傘は径 2—3 cm，半球形或は鐘状丸山形，最後に開張す，時に僅か中丘を有す；表面は無毛，吸水性ならず，湿時帯灰色，乾時帯黄赭色或は藁色にて光沢あり，中央は赤褐色を帯ぶ，老時屢々不規則破片に罅裂す，縁は初め内屈し褶より抽出し，消失性の淡色膜片を有す；肉は淡色，薄く，味及臭なし；褶は直生，胞子により灰黒斑を，生じ遂に黒色となる，密，甚だ広幅，便腹状，稜に白色房毛あり；茎は 4—8×0.2—0.5 cm，同幅，帯白色或は傘と同色，基部褐色を帯び，上部粉状，強靱，中空；胞子はレモン形，平滑，暗褐色，11—16×8—11 μ；胞子紋は黒色；稜嚢体は毛状或は棍棒形，35—45×5—7 μ；有毒。

所在及産地

施肥草原及圃場等—夏秋

北海道，本州—欧．北米．濠．亜（西比）

和名 ワライタケ（笑茸）〔川村〕

チョウタケ（蝶茸）〔安田〕

Panaeolus retirugis (FR.) GILL.

サイギョウガサタケ

GILLET, Champ. Fr. 621, c. ic. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:1120. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:334. 1892; Brit. Fungi, 334, pl. 26, f. 4. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 176. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 45, f. 45—48. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 169. 1908—MURRILL, Mycologia, 3:100; pl. 40, f. 7. 1911—RICKEN, Blätterp. 268, pl. 69, f. 6. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 229. 1918—REA, Brit. Basid. 370. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 175, pl. 89, f. 1. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 18:pl. 892. 1931—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1:146, f. 26. 1934—LANGE, Agar. Denm 11:22. 1936; Fl, Agar. Dan. 4:86, pl. 149, f. E. 1993—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:290. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1: 132. 1948—SINGER, Agaricales, 472. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 350. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:471, f. 309, c. 1957.

(KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 16, f. 6—8. 1915; 日. 菌. 図説, n. 22. 1929; 日. 菌. 図鑑, 5:564, f. 542. 1954—白井, 日. 菌. 目. ed. 3. 243. 1927—松浦, 茸類辞典, 162, f. 192. 1933—小林, 日. 隠. 植. 図. 521, pl. 251, f. 1—3. 1939—今関, 原色きのこ, pl. 40(中). 1942—原, 日. 菌. 目. 233. 1954.

Agaricus carbonarius BATSCH, Elench. Cont. 1:107, pl. 18, f. 91. 1786.

Agaricus retirugis FR. Epicr. Myc. 235. 1838; Hymen. Eur. 310. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 175. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:156. 1871; Illus. Brit. Fungi, 5:pl. 627(no. 628). 1888; Handb. Austr. Fungi, 66. 1892——WINTER, Pilze, 1:639. 1884.

Coprinarius campanulatus var. *retirugis* QUÉL. Enchir. Fung. 119. 1886.

Panaeolus carbonarius SACC. Fl. Ital. Crypt. Hymen. 875. 1916.

Chalymmota retirugis P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:234, f. 114 c. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):404. 1912.



第 139 図 サイギョウガサタケ
Panaeolus retirugis ×1/2 （大谷氏）

子実体は孤生或は群生；傘は径 1—3 cm，初め楕円状卵形或は類球形，のち鐘状半球形～鐘形，鈍頭或は稍々中丘を有す，表面は無毛，吸水性なし，幼時及湿時暗煙色，のち淡色となり，或は乾時灰色，淡赭色或はクリーム白色，往々中央に網状脈を有し，時に中盤平坦なり，縁は初め内屈し膜によりて茎に連結し，傘の成長に伴つて膜は破れて膜片となりて縁に残存す；肉は寧ろ薄く，淡色，味及臭なし；褶は直生，白色，のち胞子によりて黒斑を生じ，黒色となる，密，広幅，便腹状，稜に白色房毛あり；茎は 5—15×0.2—0.6 cm，同幅，往々撓曲，傘面と

同色，上部淡色，粉状，中空；胞子はレモン形，平滑，12—16×8—10 μ；胞子紋は黒色；稜嚢体は円筒状棍棒形，鈍頭，幅約 7 μ。

所在及産地

厩肥及び施肥土上—夏秋

北海道，本州，九州—欧．北米．濠．亜（支

和名 サイギョウガサタケ（西行笠茸）〔川村〕

Panaeolus campanulatus (L. ex FR.) QUÉL.

ヒカゲタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:151. 1872—GILLET, Champ. Fr. 622, c. ic. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:1121. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 877. 1816—KARSTEN, Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 252. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:336. 1892; Brit. Fungi, 334. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 176. 1900—W. G. SMITH, Brit Basid. 197. 1908—RICKEN, Blätterp. 267, pl. 69, f. 8. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 230. 1918—REA, Brit. Basid. 371. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1:pl. 48. 1929; Agaricales, 1:130. 1948—BRESADOLA, Icon. Myc. 18:pl. 893. 1931—LANGE, Agar. Denm. 11:22. 1936; Fl. Agar. Dan. 4:86, pl. 150, f. D. 1939—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 196, pl. 78, f. 2. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 350, f. 292. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:469, f. 9, 36. 1957.

Agaricus campanulatus L. Sp. Plant. 2:1175. 1753—FRIES, Epicr. Myc. 236. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:446. 1857; Hymen. Eur. 311. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:460. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 175. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:179. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:157. 1871; Illus. Brit. Fungi, 5:pl. 629(no. 630). 1888; Handb. Austr. Fungi, 67. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:150. 1876—WINTER, Pilze, 1:639. 1884.

Agaricus papilionaceus FR. Syst. Myc. 1:301. 1821. pr. p.

Chalymmota campanulata KARST. Hattsv. 1: 519. 1879—SCHROETER, Pilze Schles. 1:566. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:234. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):405, pl. 74, f. 1—3. 1912.

（安田，植．雑．28:476. 1914—白井，日．菌．目．ed. 2. 127. 1917; ed. 3. 77. 1927—広江，応用菌蕈学，1159. 1941—原，日．菌．目．63. 1954）

Coprinarius campanulatus QUÉL. Enchir. Fung. 118. 1886.

Panaeolus Linnaeanus IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:289. 1938.

（原，日．菌．目．233. 1954）

? *Panaeolus sphinctrinus* (FR.) QUÉL. —Auct. plur.

子実体は群生或は孤生；傘は径 1.5—3 cm，円錐状鐘形，開張扁平となることなし，往々中丘を有す；表面は帯褐灰色，帯黄灰色或は稍々赤色を帯ぶ，屢々絹糸状光沢を有し，無毛，吸水性なし，乾時屢々不規則に罅裂す，縁に寧ろ永存的の膜片或は房毛を存す；肉は白色或は稍々赤色を帯び，薄く，臭及び味なし；褶は直生或は狭生となり，密，広幅，便腹状，胞子によりて灰色〜黒色斑を生ず，稜は白色房毛を有す；茎は 6—10×0.1—0.3 cm，同幅或は下方に僅か漸細，真直，強靱，赤褐色或は傘面と同色，粉状，頂部に線条あり，中空；胞子はレモン形，平滑，12—18×8—12 μ；胞子紋は黒色；稜嚢体は毛状，鈍頭，基部膨大，幅 4—5 μ。



第 140 図 ヒカゲタケ Panaeolus campanulatus ×1
（大谷氏）

所在及産地

堆肥及施肥圃場，草原地上—夏秋

北海道，本州—欧．北米．濠．亜（小亜）

和名 ヒカゲタケ（日陰茸）〔安田〕

Panaeolus fimicola (PERS. ex FR.) QUÉL.

マグソタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:257. 1872—GILLET, Champ. Fr. 621, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:520. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 252. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:1124. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:338. 1892; Brit. Fungi, 335. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 198. 1908—RICKEN, Blätterp. 269, pl. 69, f. 2. 1915

—REA, Brit. Basid. 372. 1922—LANGE, Agar. Denm. 11:23. 1936; Fl. Agar. Dan. 4:87, pl. 150, f. F. 1939—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:292. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:131. 1948—SINGER, Agaricales, 472. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 350. 1953—HEIM, Champ Eur. 2:470. 1957.

(川村, 日. 菌. 図説, n. 119. 1929; 日. 菌. 図鑑, 5: 563, f. 541. 1954—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:114. 1931—松浦, 茸類辞典, 170, f. 203. 1933; 応用菌蕈学, 825, f. 635. 1941—小林, 日. 隠. 植. 図. 519, pl. 250, f. 1. 1939—原, 日. 菌. 目. 233. 1954—平田, 青島綜合調査報告書 78. 1954—松田及本郷, 植. 研. 雑. 31;197. 1957)

Agaricus varius BOLT. Fung. Halif. 66, pl. 66, f. 1. 1788.

Agaricus fimicola PERS. Syn. Meth. Fung. 412. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:301. 1821; Epicr. Myc. 237. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:447. 1857; Hymen. Eur. 312. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:459. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 175. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:180. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:158. 1871; Illus. Brit. Fungi, 5:pl. 632, f. b (no. 633). 1888; Handb. Austr. Fungi, 67. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:151. 1876—WINTER, Pilze, 1:638. 1884.

Coprinarius fimicola QUÉL. Enchir. Fung. 119. 1886—SCHROETER, Pilze Schles. 1:564. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:234, f. 114, B. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):401, pl. 72, f. 4—6. 1912.

Panaeolus varius SACC. Fl. Ital. Crypt. Hymen. 879. 1916.

子実体は群生或は孤生；傘は径 1—2.5 cm, 時にそれ以上に及び, 半球形〜鐘形, 通常扁平とならず, 鈍頭或は僅か中丘あり；表面は平滑, 灰褐色或は灰白色, 中央黄褐色或は茶褐色, 半乾時縁周に褐色の帯を有す, 時に線条あり, 縁に白色の被膜の残片を有するも早失す；肉は灰白色にて甚だ薄し；褶は直生, 灰褐色, 速に黒色となる, 稍々疎, 甚だ広幅(約 3 mm), 便腹状, 稜に白色房毛あり；茎は細長にて, 5—15×0.1—0.3—0.3 cm, 同幅, 汚淡白色或は茶褐色, 不明瞭に僅か絹糸様線条あり, 頂部白粉状, 中空；胞子はレモン形, 平滑, 帯褐灰色, 10—12×7—8 μ；胞子紋は黒色；嚢状体は幾分罎形或は鈍頭円筒形, 幅 9 μ に及ぶ。

所在及産地

馬糞及施肥土上—春〜秋　　北海道, 本州, 九州—欧. 北南米. 濠

和名 マグソタケ（馬糞茸）〔川村〕

Panaeolus subbalteatus (BERK. et BR.) SACC.

センボンサイギョウガサタケ

SACCARDO, Syll. Fung. 5:1124. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:337. 1892; Brit. Fungi, 335. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 198. 1908—RICKEN, Blätterp. 270, pl. 69, f. 1. 1915—LANGE, Agar. Denm. 11:24. 1936; Fl. Agar. Dan. 4: 87, pl. 149, f. H. 1939—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:132. 1948—SINGER, Agaricales, 472. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 350. 1953.

(本郷, 植. 研. 雑. 26:25, f. I-K. 1951—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 56, f. 140, pl. 25, f. 140. 1957)

Agaricus subbalteatus BERK. et BR. Ann. Mag. Nat. Hist. III, 7:n. 923. 1861—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 220. 1883; Illus. Brit. Fungi, 5:pl. 631, f. b(no. 632). 1888(?)

Coprinarius subbalteatus P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:234. 1900.

子実体は束生或は叢生；傘は 2.5—4.5 cm, 鐘状丸山形, 鈍頭, のち開張扁平となり, 幾分中丘あり, 寧ろ肉質；表面は吸水性, 暗赤褐色, 乾時赭褐色, 周縁に暗色の帯を有す, 縁は初め僅か内屈, 被膜の残片なし；肉は淡色, 味及び臭なし；褶は僅か着生, 幼時幾分肉色にて徐々に暗褐色となり, 遂に黒色となる, 密, 相当広幅, 厚く, 僅か便腹状, 稜は白色, 鋸歯状；茎は 6—8×0.3—0.5 cm, 同幅, 肉褐色, 絹糸繊維あり, 頂部粉状, 屢々波曲, 中空；胞子は広レモン形, 平滑, 不透明帯黒色, 無色の小嘴あり, 10.5—13.5×6.5—9 μ；胞子紋は黒色；稜嚢体は嚢状或は円筒形にて先端僅か肥大し円形, 20—40×9—13 μ。

所在及産地

施肥圃場地上—夏秋　　本州—欧. 北米. 阿

和名 センボンサイギョウガサタケ（千本西行笠茸）〔本郷〕

Anellaria KARST. em SING.

ジンガサタケ属

KARSTEN, Hattsv. 1:517. 1879—SINGER, Agaricales, 474. 1949.

傘は比較的肉質にてヒカゲタケより遙に肉質, 甚だ僅か有色にて殆ど白色或は中盤部に僅か帯褐淡黄色の色彩あり, 粘性, 広き無性の縁を突出す, 鐘形, 僅か開張するも老時扁平とならず, 能く発達せる短

細胞被を有す；褶はヒカゲタケに於けるが如く斑色なり；托実質は整型なるもその菌糸はすべて真の平行ならず，かつ其大さも不等にて或物は寧ろ短し；担子柄は正常なる棍棒形，4胞子；稜嚢体は異形；褶側小嚢体は甚だ大にて嚢状，モエギタケ亜科（*Strapharioideae*）の黄金嚢体を想起せしむるもアンモニアによつて明かなる黄色とならず，クレシール青によつても明かなる青色とならず，確実に無色なり；胞子紋は黒色；胞子は濃紫暗褐色～黒色，不透明，平滑，常に甚だ大形，複雑の膜を有し，広き明かなる発芽孔を有す，硫酸にて褪色せず，楕円形～レモン形；茎は被膜の痕跡を存し，被膜の一部或は全部は屢々傘縁に房状をなして残り，或は傘縁に残らずして鍔となること，更に両方に存すること等あり，茎は寧ろ肉質にて殆ど色素なく，中心生，寧ろ長く，往々粘性；肉は白色にて不変化，肉質，菌絆を有する菌糸より成る；糞上及び耕土上に生ず，多分半被実；汎布，約2種を知られ，食用菌。

（本属名は anellus〔羅〕（小輪）より出づ）

基準種　*A. semiovata* (SOW. ex FR.) PEARSON et DENNIS

本邦既知種　ジンガサタケ　*A. semiovata*　(318)

Anellaria semiovata (SOW. ex FR.) PEARS. et DENN.

ジンガサタケ

PEARSON & DENNIS, Trans. Brit. Myc. Soc. 31: 1948—SINGER, Agaricales, 475. 1949.

Agaricus separatus L. Sp. Plant. 2: 1175. 1753—FRIES, Epicr. Myc. 234. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1: 444. 1857; Hymen. Eur. 310. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1: 460. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 174, pl. 11, f. 7. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1: 155, pl. 6, f. 33. 1871; Illus. Brit. Fungi, 5: pl. 623(ns. 623). 1888—KARSTEN, Myc. Fenn. 3: 150. 1876—WINTER, Pilze, 1: 640. 1884.

Agaricus semiovatus SOW. Col. Fig. Brit. Fungi, 2: pl. 131. 1799—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 408. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1: 300. 1801.

Coprinus semiovatus S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1: 632. 1821.

Panaeolus separatus GILL. Champ. Fr. 620, c. ic. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 4: 328—XLIV. 1876—PATOUILLARD, Ess. Tax. 176. 1900—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 132. 1948—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 351. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2: 472. 1957.

Anellaria separata KARST. Hattsv. 1: 517. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 251. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 6: 1125. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 842. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1: 567. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1: 330, f. 2, 5(p. 303). 1892; Brit. Fungi, 328. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 234, f. 114, D. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 195, f. 48. 1903—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 405, pl. 75, f. 1—2. 1912—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 194, pl. 77, f. 3. 1950.

（安田，植．雑．32: 50. 1918—白井，日．菌．目．ed. 3. 20. 1927—小林，日．隠．植．図．523, pl. 252, f. 1. 1939—広江，応用菌蕈学，1161. 1941—原，日．菌．目．17. 1954）

Coprinarius separatus QUÉL. Enchir. Fung. 118. 1886.

Stropharia separata LANGE, Agar. Denm. 5: 34. 1923; Fl. Agar. Dan. 4: 67. pl. 142, f. F, F′, 1939.



第141図　ジンガサタケ
Anellaria semiovata ×1/2
（大谷氏）

子実体は孤生或は小群生；傘は2—5 cm，卵状鐘形～鐘形，扁平に開張せず；表面は汚白色～淡赭色にて春季には屢々暗赭褐色を呈す，平滑，湿時粘性，乾時光沢あり，老時屢々皺或は罅裂を生ず，縁は初め被膜の残物たる房毛あり；肉は帯白色，傘の皮下及び茎の下部黄色を帯ぶ，薄し；褶は直生なるも速に茎より離る，灰色～黒色，斑紋あり，密，便腹状；茎は 8—12×0.6—1.2 cm，或は更に長く，上方に漸細，真直，帯白色，下部帯黄色，基部白色綿絮あり，レンズ下にて線条あり；鍔は茎の中部辺に存し，膜質，直生す；胞子は卵形，平滑，暗褐色，16—20×9—11 μ；胞子紋は殆ど黒色；褶側嚢体は毛状円筒形，先端幅約 7 μ。

所在及産地

馬糞上—早春～秋　　北海道，本州—欧．北米

和名　ジンガサタケ（陣笠茸）〔安田〕

Bolbitiaceae Singer オキナタケ科

SINGER, Pap. Mich. Acad. Sci. Arts Lett. 32:147. 1946; Agaricales, 475. 1949.

子実体托は褶状～脈状或は斜に連結す；上表皮層は屢々匐匍平行せる長き菌糸より成るも，肉質のものに於ては常に直立せる洋梨形或は球形細胞より成りて，その時は傘は通常吸水性にて乾時光沢あり；皮囊体はこの上表皮層より分化し，或は欠如；囊状体は多くは只稜にのみ存在し，時に褶側にも存するものもあり；胞子紋は甚だ濃き鮮銹色を呈し，稀に銹暗褐色或は汚褐色にてアセタケ（*Inocybe*）の胞子紋色に近づくも決してヒトヨタケ亜科（*Coprinoideae*）に於けるが如くならず又ピンク色，帯褐黄色或は緑色を呈せず；胞子は蜜色～銹色，平滑，甚だ稀に粗面或は有疣，常に発芽孔を有するも或種に於ては甚しく不明瞭なり；担子柄は比較的短くして広く，1, 2, 或は 4 胞子にて 2 胞子の種普通なり；茎は肉質～脆弱，常に中心生，屢々皮囊体を有す；菌絆あり；林の内外の腐触物，地上，糞上等，庭園，温室内等に生ず；SINGER 氏（1949）は 7 属を収む。

本邦既知属検索表

A．胞子紋は銹色。

a．傘は粘性，扇襞状溝を有す；托実質は整型；稜囊体は頭状ならず。

オキナタケ属 Bolbitius (323)

b．前記総合性と異る。

α．托実質の中層は退化し，両側の子実脚層よく発達す；被膜は多少不明瞭，縁に弱き線絮のある程度にて鍔を作らず；傘面に扇襞状溝なく，湿時線条或は幾分溝状をなすことあり；稜囊体は有柄頭を頂生す。

コガサタケ属 Conocybe (319)

β．托は整型；被膜は多少明瞭にて縁膜片或は鍔を作る；傘面に扇襞溝なし；稜囊体は稀に頭状なるも前者の如き著しき形ならず。

ツチイチメガサタケ属 Pholiotina (321)

B．胞子紋は暗褐色或は汚褐色；傘肉比較的厚く，縁辺有溝ならずして線条を有す；被膜は欠如或は能く発達し鍔を作る；稜囊体は頭状ならず。

フミヅキタケ属 Agrocybe (324)

Conocybe FAYOD
コガサタケ属

FAYOD, Ann. Sci. Nat. Bot. VII, 9:357. 1889—SINGER, Agaricales, 482. 1948.

Galerula KARSTEN, Hattsv. 1:442. 1879. pr. p.

子実体はクヌギタケ（*Mycena*）型，稀にシメジタケ（*Tricholoma*）の外観をとり，褶の色によつてフウセンタケ（*Cortinarius*）に甚だ類似す；傘は吸水性乾時光沢あり；上表皮層は洋梨形～類球形の細胞より成り，著しき膠化をなさず；茎上には屢々皮囊体を有するも傘上には存在せず；褶は初め直上し，傘は褶背に沿うて襞溝を有せざるも透明なる放射状線条～幾分溝状を呈す；被膜は欠如或は傘縁に僅か存在し，茎上に存せず；胞子は濃き鮮銹色を呈す；胞子は平滑或は微疣を有し，発芽孔あり，アンモニアによりて濃銹色となる，レモン形，扁豆形或は大部分橢円形，扁豆形胞子は屢々外囲六角形となる；担子柄は広くして短く，小柄の数に変化ありて 2 胞子のもの多し；褶側に囊状体を欠如するも稜囊体は常に存在し，甚だ特徴ありて下部膨大し有柄の球頭を有す；擬糸体は屢々甚だ著し；托はアンモニア液にて無色長針結晶を作る物質を含む；托実質は僅かの菌糸より成る甚だ薄き中層を有し，其両側に大形菌糸より成る異常的発達をなせる子実脚層即ち子実下層の次の層あり，この両側の脚層は殆ど互に接触し実質は両側型の観を呈するも該層は拡散的ならずして寧ろすべての菌糸は互に多少平行に配列されあり；茎は毛或は皮囊体の存在によつて絨状或は粉状を呈す，（皮囊体の形は稜囊体に類似す），白色或は有色，擬根を有し或はこれを欠く；菌糸は菌絆を有す；林の内外，圃場，庭園，温室等の地上，腐木糞上等に生ず；汎布，約 23 種を知らる，経済的価値なし。

（本属名は konos〔希〕（毬果，円錐），kybos〔希〕（六面体，骰子，頭）より出づ）

基準種 *C. tenera* (SCHAEFF ex. FR.) FAYOD

本邦既知種検索表

A．茎の全面に有柄頭球の茎囊体を有す。

a．小形（1.5—2.5 cm），傘に長時線条あり；茎の基端僅かに球根状；稜囊体の頭球は小形（多くは径 4—5μ）。

コガサタケ ***C. tenera*** (320)

b．前者より大（2.5—3.5 cm），傘は殆ど常に無線条；茎端屢々急に類球形に膨大す；稜囊体の頭球は大（5—6.5μ）；褶は前者より広幅。

ヒロハコガサタケ var. ***subovalis*** (320)

B. 茎面に有柄頭球の茎嚢体なし；傘は径 3.5—4.5 cm，僅か線条あり；茎は白色，基端球根状；稜嚢体の頭球は 3.5—4μ。

キコガサタケ *C. lateritia* (321)

Conocybe tenera (SCHAEFF. ex FR.) FAYOD

コガサタケ

FAYOD, Ann. Sci. Nat. VII, 9:357. 1889—MURRILL, Mycologia, 3:100, pl. 40, f. 6. 1911—KÜHNER, Gen. Galera, 68. 1935; & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 348. 1953—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:170. 1948—SINGER, Agaricales, 484. 1949—HEIM, Champ. Eur. 2:398, f. 269, A. 1957.

(今関及本郷，原色日．菌．図鑑，57. 1957)

Agaricus tener SCHAEFF. Fung. Bav. 4: Ind. 31, pl. 70, f. 6–8. 1774—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, 1: pl. 33. 1797—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 386. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:265. 1821; Epicr. Myc. 204. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1: 391. 1857; Hymen. Eur. 267. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1: 473. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 162. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:170. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:133. 1871; Illus. Brit. Fungi, 4: pl. 461 (no. 518). 1886; Handb. Austr. Fungi, 56. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:132. 1876—WINTER, Pilze, 1:668. 1884.

Galera tenera QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:136. 1872; Enchir. Fung. 106. 1886—GILLET, Champ. Fr. 553. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:437. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 227. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:860. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 785. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:144. 1893; Brit. Fungi, 283, pl. 19, f. 1. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 169. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 155. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 163, f. 38, A. 1908—RICKEN, Blätterp. 225, pl. 60, f. 12. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 498. 1918—REA, Brit. Basid. 407. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 17: pl. 801. 1931—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1:123. 1934—LANGE, Agar. Denm. 12:36. 1938; Fl. Agar. Dan. 4:34, pl. 129, f. H. 1939—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 176, pl. 68, f. 2. 1950.

(川村，日．菌．図鑑，5:529, f. 520. 1954)

Derminus tener SCHROET. Pilze Schles. 1:580. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:241. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):438, pl. 85, f. 7–8. 1912.

Galerula tenera MURR. N. Am. Fl. 10:166. 1917—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:251. 1938.

(今関，原色きのこ，pl. 40 (左). 1942—原，日．菌．目．131. 1954)

子実体は孤生或は群生；傘は径 1—2.5(3.5)cm, 円錐形～鐘形或は半球形，鈍頭；表面は吸水性，湿時淡黄褐色～帯赤褐色，中央暗色，長時線条あり，乾時淡卵黄色，平滑，無毛，微粒あり；肉は類膜質



a



第142図 コガサタケ
Conocybe tenera
a．子実体 ×2/3
b．担子柄
c．胞子 ×600

(大谷氏)

にて甚だ薄く，中盤稍々厚く，帯黄色，脆し；褶は上昇着生，赭色，のち肉桂色，密或は稍々密，寧ろ狭幅，略一様の幅を有す；茎は 7—10×0.1—0.2cm，殆ど同幅，基端少しく肥大するも著しからず，傘面と同色，上部淡色，下部暗色，光沢を有し，寧ろ脆し，線条を有し，微粉状を呈す，中空；胞子は楕円形～卵形，平滑，黄褐色，発芽孔あり，10—12.5×5—7.5μ；胞子紋は銹色；担子柄は 4 胞子；稜嚢体は倒卵形にて先端に有柄の頭球を有し，16—25×7—10μ，頭は多くは径 4—5μ，茎嚢体は多生し全面を蔽い頭球を有す。

所在及産地

林野，路傍地上—夏秋　北海道，本州—汎布

和名 コガサタケ（小笠茸）〔川村〕

var. **subovalis** KÜHNER

ヒロハコガサタケ

KÜHNER, Gen. Galera, 69, f. 16. 1935.

Agaricus campanulatus BULL. Champ. Fr. pl. 552, f. 1. 1791—FRIES, Syst. Myc. 1:295, 1821; Epicr. Myc. 205. 1838.

Agaricus ovalis FR. Monogr. Hymen. Suec. 1: 389. 1857; Hymen. Eur. 268. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 162. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:132. 1871; Illus. Brit. Fungi, 4: pl. 462 (no. 519). 1886—WINTER, Pilze, 1:668. 1884.

Galera ovalis GILL. Champ. Fr. 554. 1874—QUÉLET, Enchir. Fung. 106. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5:862. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen.

786. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:146. 1893; Brit. Fungi, 285. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 169. 1900—ATKINSON, Mashrooms, ed. 2. 155. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 163. 1908—REA, Brit. Basid. 408. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 16: pl. 808. 1931.

Galerula ovalis KARST. Hattsv. 1:443. 1879.

Galera campanulata MASS. Brit. Fung. Fl. 2: 145. 1893; Brit. Fungi, 283. 1911.

Derminus ovalis P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 241. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 439. 1912.

Galera tenera subsp. *ovalis* KONR. & MAUBL. Icon. Sel. Fung. 2: pl. 172, f. 1. 1927.

Galerula campanulata IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 252. 1938.

（原，日．菌．目．131. 1954）

Conocybe subovalis KÜHN.-KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 347. 1953.

子実体は孤生或は小群生；傘は径 2.5—3.5(5)cm，円錐状鐘形～或は半球形，鈍頭，稀に鈍中丘あり；表面は吸水性，湿時濃銹色，乾時淡色となりクリーム色，殆ど常に線条を有せず，縁は真直にて薄し，初め茎に接着す；肉は甚だ薄く，帯褐色，臭なし；褶は上昇着生，のち離生，赤銹色，密，広幅，便腹状，稜は異質；茎は 4—12.5×0.15—0.25 cm，殆ど同幅，茎端肥大して屢々類球形をなし，時に多少肩を有す，径 4—6 mm，真直，時に多少屈曲斜上或は僅か捩曲す，上部白色～蜜黄色，下部蜜褐色～暗褐色，線条を有し，時に多少光沢あり，中空；胞子は楕円形，平滑，発芽孔あり，約 10×6μ；胞子紋は銹色；担子柄は 4 胞子；稜嚢体は倒卵形にて有柄頭球を有し，20—29×7—14μ，頭球は多くは径 5—6.5μ，茎嚢体は多生，頭球を有す，稀に円筒形。

所在及産地

路傍草原及び林内—夏秋　　北海道—欧．北米

和名　ヒロハコガサタケ（広褶小笠茸）〔今井〕

Conocybe lateritia (FR.) KÜHNER
キコガサタケ

KÜHNER, Gen. Galera, 121, f. 37. 1935—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1: 171. 1948—HONGO, Bull. Facul. Lib. Arts Educ. Shiga Univ. 5: 58, f. 1, b, c. 1956.

Agaricus lateritius FR. Syst. Myc. 1: 265. 1821; Epicr. Myc. 204. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1: 390. 1857; Hymen. Eur. 267. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1: 473. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 162. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1: 132. 1871; Illus. Brit. Fungi, 4: pl. 460 (no. 517). 1886—WINTER, Pilze, 1: 668. 1884.

Galera lateritia QUÉL. Cham. Jura Vosg. 2: 348. 1873; Enchir. Fung. 106. 1886—GILLET, Champ. Fr. 555. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1: 437. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 860. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 784. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2: 144. 1893; Brit. Fungi, 284. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 169. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 155. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 162. 1908—RICKEN, Blätterp. 224, pl. 60, f. 11. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 496. 1918—REA, Brit. Basid. 407. 1922—KÜHNER, Bull. Soc. Myc. Fl. 49: Atlas pl. 56. 1933—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 177, pl. 67, f. 4. 1950.

（今関及土岐，林．試．研．報．79: 6, f. 8. 1955; 87: 53. 1956）

Derminus lateritius SCHROET. Pilze Schles. 1: 580. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 241. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 2, Pilze, 2(2): 437, pl. 85, f. 5–6. 1912.

? *Galera lactea* LANGE, Fl. Agar. Dan. 4: 33, pl. 128, f. F. 1939.

Conocybe lactea METROD—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 345. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2: 398, f. 80(10). 1957.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，57, f. 141, pl. 26, f. 141. 1957）

子実体は孤生或は群生；傘は径 3.5—4.5 cm，円筒状鐘形或は団栗形，のち鐘形，老時縁辺幾分反転して屢々裂ける；表面は非粘性，非吸水性，無毛，中心黄土色，周辺淡色にて幾分汚色，縁に僅か線条あり；肉は甚だ薄く，膜質，中盤に於て同色，脆く，味及び臭殆どなし；褶は上昇直生，薄く，狭幅にて幅 2.5—3 mm，線形，密，濃銹色；茎は 11—13×0.3—0.4 cm，上方に僅か狭細，基端球根状，全部帯白色，頂部特に粉状，微細線条あり，真直，脆く，中空；胞子は楕円形～卵形，平滑，無色平坦の発芽孔あり，KOH 中にて黄土色，12—15×7—8.5μ，或は 11—18×6.5—11μ；担子柄は 19—24×11—14μ，4 胞子；胞子紋は銹色；稜嚢体は多生，罎形にて頭球を有す，薄膜，無色，18—22×6—7.5μ，頭球は径 3.5—4μ；菌絆あり。

所在及産地

圃場，草原地，稲積上—夏　　本州—欧．北米

和名　キコガサタケ（黄小笠茸）〔今関及土岐〕
　　　ウスキコガサタケ（淡黄小笠茸）〔本郷〕

Pholiotina FAYOD
ツチイチメガサタケ属

FAYOD, Ann. Sci. Nat. Bot. VII, 9: 359. 1889—

SINGER, Agaricales, 486. 1949.

性質はConocybe の如きも托実質は正常的に整型にて，彼れよりも中層よく発達し子実脚層の発達は劣る；胞子は常に平滑；稜嚢体は通常細頸罎状にて球頭なく，稀に有頭なるも彼の如く甚しからず；傘上に屢々皮嚢体を有す；被膜は屢々存在す；落葉，腐木，地上；多分全部半被実；汎布，約14種を知らる，経済的価値なし。

本属名は Pholiota (属名) より出づ)

基準種 *P. blattaria* (FR.) GILLET

本邦既知種検索表

A. 傘は開張し鈍き中丘を有し，遂に縁辺反転す，周辺に明かなる溝を有す；胞子小形 (10μ 以下)，発芽孔僅か明かなり。
ツチイチメガサタケ ***P. blattaria*** (322)

B. 傘は鐘形にて周辺有溝ならず，鈍頭にて多くは開張せず；胞子大形 (10μ 以上)，発芽孔明瞭。
クサアジロガサタケ ***P. togularis*** (322)

Pholiotina blattaria (FR. sensu RICKEN) FAYOD

ツチイチメガサタケ

FAYOD, Ann. Sci. Nat. VII, 9:359. 1889—SINGER, Agaricales, 487. 1949.

Agaricus blattarius FR. Syst. Myc. 1:246. 1821—COOKE, Illus. Brit. Fungi, 8: pl. 1172, f. a (no. 1173). 1891.

Pholiota blattaria QUÉL. Champ. Jura Vosg. Suppl. 1:319. 1872—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:253. 1900—RICKEN, Blätterp. 199, pl. 56, f. 3. 1915—BRESADOLA, Icon. Myc. 14: pl. 688. 1930—Auct. plur.

Conocybe blattaria KÜHNER, Gen. Galera, 150, f. 47. 1935 (f. *typica*); & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 343, f. 448. 1953—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:171. 1948.

Pholiota togularis LANGE, Agar. Denm. 4:7, f. 6. 1921; Fl. Agar. Dan. 3:62, pl. 106, f. A-A′. 1938—KONRAD et MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1: pl. 69, f. 1. 1929.

Pholiota Arrhenii IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:185. 1938.

(原，日．菌．日．250. 1954)

子実体は稍々群生；傘は径 2—4cm，鐘形，のち丸山形となり，鈍頭或は大なる鈍き中丘あり，最後に扁平或は縁辺反転す；表面は吸水性，湿時赤褐色，乾時赭黄色，中央暗色，無毛，周辺に明かなる溝を有す；肉は甚だ薄く，中盤僅か厚く，傘面と同色，茎部褐色，味温和，臭なし；褶は僅か広く着生，のち離れ，粘土黄色，稍々密，便腹状；茎は 4—6×0.15—0.25cm，同幅或は上方に僅か狭細，基端肥大し類球根状，白色或は帯白色にて下方帯褐色，圧着せる繊維を有し，粉状或は綿絮状，中空；鍔は常に良く発達し，中位或は下位，大形にて膜質，クリーム色，垂下，切片を組合せたる如く溝を有して上下に突出し，破片として脱落す；胞子は紡錘状楕円形，平滑，卵黄色，不明瞭なる発芽孔あり，7—9×4—5μ；胞子紋は銹色；担子柄は4胞子；稜嚢体は多生，多少糸状にて長く，屢々先端棍棒形，幅 2—5μ。

所在及産地

林地及草原地—春〜秋　　北海道—欧. 北米. 濠

和名 ツチイチメガサタケ (土市女笠茸) 〔今井〕

Pholiotina togularis (BULL. ex FR. sensu RICKEN) FAYOD

クサアジロガサタケ

FAYOD, Ann. Sci. Nat. VII, 9:356, pl. 6, f. 6, h. 1889—SINGER, Agaricales, 487. 1949.

Agaricus togularis BULL. Champ. Fr. pl. 595, f. 2. 1793—FRIES, Hymen. Eur. 216. 1874—COOKE, Illus. Brit. Fungi, 3: pl. 350 (no. 379). 1886.

Pholiota togularis GILL. Champ. Fr. 435, c. ic. 1874—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:253. 1900—RICKEN, Blätterp. 199, pl. 56, f. 5. 1915—BRESADOLA, Icon. Myc. 14: 687. 1930—Auct. plur.

Conocybe togularis KÜHNER, Gen. Galera, 161, f. 53. 1935; & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 343, f. 447. 1953—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:172. 1948.

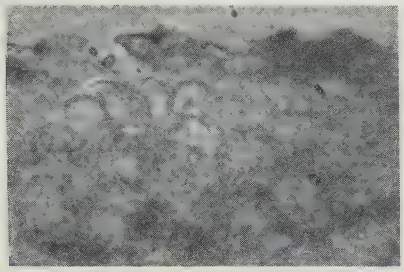
Pholiota blattaria KONR. et MAUBL. Icon. Sel. Fung. 1: pl, 69, f. 2. 1929—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:184. 1938.

(原，日．菌．日．250. 1954)

子実体は孤生或は稍々群生；傘は径 2—3cm，円錐状鐘形〜鐘形，鈍頭，殆ど開張せず；表面は吸水性，湿時黄銹色，乾時淡色，中央暗色，無毛，屢々皺あり，周辺に溝なし；肉は薄く，傘面と同色にて淡く，茎下部黄褐色，味温和，臭なし；褶は上昇着生，淡黄褐色，のち肉桂色，稍々密，僅か便腹状，稜に白色房毛あり；茎は 3.5—6×0.15—0.25cm，殆ど同幅，時に基部僅か球根状，下部傘面と同色，上部淡色，殆ど無毛，繊維状線条あり，粉状，中空；鍔は良く発達し，約中位，肉膜質，白色或は淡色，初め漏斗形にて，のち拡がり，上面線状襞あり，下面平滑；胞子は楕円形，平滑，黄色，発芽孔明かなり，10—12×5—6μ；胞子紋は銹色；担子柄は4胞子；稜



a



b

第143図　クサアジロガサタケ
Pholiotina togularis
a．子実体　×1
b．傘の上面の断面の一部　×200
（大谷氏）

嚢体は多生，紡錘形，上部狭細或は鈍頭嘴を有す，幅 6—8μ。

所在及産地

林内外草間地上—夏　　北海道—欧.北米.濠

和名　クサアジロガサタケ（草網代笠茸）〔今井〕

Bolbitius Fr.
オキナタケ属

FRIES, Epicr, Mycol. 253. 1838.

Agaricus sect. *Mycena* PERS, Syn, Meth. Fung. 375. 1801.

Mycena ROUSSEL, Fl. Calvados, ed, 2:64, 1806—MURRILL, N. Am. Fl. 10:190. 1917.

Agaricus subgen. *Pluteolus* FR. Hymen. Eur. 266. 1874.

Pluteolus GILLET, Hymen. Fr. 549. 1876.

本科の他属と異り，襞溝或は溝を有する傘縁，粘性の傘表，頭状ならざる稜嚢体，及び白色の茎を有す；糞上，地上，腐株上，藁上，沼地上等に生ず；多分半被実；多分殆ど汎布，約5種を知らる，経済関係なし。

（本属名は bolbiton〔希〕（牛糞）より出づ）

基準種　*B. fragilis* (L. ex FR.) FR.

本邦既知種検索表

A．傘の中盤に著しき褐色網状皺脈あり。
　　キオキナタケ　***B. variicolor***　(323)

B．傘に褐色網皺なし。
　a．傘は卵黄色。
　　シワナシキオキナタケ　***B. vitellinus***　(323)
　b．傘は帯紅灰色。
　　オキナタケ　***B. coprophilus***　(324)

Bolbitius variicolor ATK.
キオキナタケ

ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 164, f. 158. 1903—SINGER, Agaricales, 490. 1949.

（今関及土岐，林．試．研．報. 79:3, f. 3, pl. 2, f. 1. 1955—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，57, f. 142, pl. 26, f. 142. 1957）

Mycena variicolor MURR. N. Am. Fl. 10:191. 1917.

子実体は群生；傘は径 5—6 cm，鐘形，のち市女笠状となり，遂に扁平となる；表面は中央濃汚褐色，周辺幼時緑色を帯ぶるも，熟時灰黄褐色となり，地色は全体硫黄色を呈す，中央部に粘皮を被むり，幼時平滑乃至中央部に斑点あるも，のち大なる褐色網状の著しき皺脈となる，縁辺に扇面状裂目あり；肉は淡黄色，薄く，殊に縁は膜状にて萎凋し易し；褶は離生，幼時硫黄色，のち褐色を帯び，密，稜に鋸歯あり；茎は 7—9×0.5—0.7 cm，殆ど同幅，黄褐色，白色小鱗片あり，甚だ軟弱，傘より離れ易し；肉は硫黄色，中空；胞子は楕円形，平滑，発芽孔あり，10—13.5×7.5—9μ；胞子紋は銹褐色；稜嚢体は膀胱状或は頭部突出し，無色，径 18—29μ；傘面に膀胱状細胞密生す。

所在及産地

ブナ鋸屑上，イネ，コムギ等藁堆積上—夏秋
本州—北米

和名　キオキナタケ（黄翁茸）〔今関及土岐〕

Bolbitius vitellinus (PERS. ex FR.) FR.
シワナシキオキナタケ

FRIES, Epicr. Myc. 254. 1836; Hymen. Eur. 333. 1874—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:190. 1867—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:161, pl. 9, f. 3. 1872—GILLET, Champ. Fr. 594, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:158. 1876; Hattsv. 1:447. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 231. 1889—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2:235. 1883; Illus. Brit, Fungi, 5:pl. 928, f. a (n. 678). 1888—WINTER, Pilze, 1:622. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5:1074. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 791. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:209. 1893; Brit. Fungi, 261. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:205. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 172. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 212. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze. 2(1):284. 1912—RICKEN, Blätterp. 69, pl. 23, f. 9. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 504. 1918—REA, Brit. Basid. 497. 1922—KONRAD & MAUB-

LANC, Icon. Sel. Fung. 2: pl. 170. 1927; Agaricales, 1:177. 1948—BRESADOLA, Icon. Myc. 17: pl. 818. 1931—LANGE, Fl. Agar. Dan. 4:42, pl. 132, f. A, A′. 1939—SINGER, Agaricales, 490. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 179, pl. 80, f. 6. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 348, f. 290. 1953(var. *typicus*)—HEIM, Champ. Eur. 2:400, f. 80(11). 1957.

(今関及本郷，原色日．菌．図鑑，58. 1957.)

Agaricus vitellinus PERS. Syn. Meth. Fung. 402. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:303. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:461. 1844.

Pluteolus vitellinus QUÉL. Enchir. Fung. 104. 1886.

子実体は群生或は叢生；傘は径 2—5 cm，初め卵形，鈍頭にて卵黄色，のち鐘状に開張し，縁に向つて灰色となり，卵黄色の鈍き中丘に達する溝襞を有す，粘性，無毛，縁は初め真直；肉は甚だ薄し；褶は狭く着生，密，傘の充分開張せる時はやや疎，狭幅，柔軟，幼時黄土粘土色にて白色稜を有し，老時銹黄土色，湿潤天候下にて僅かに液化し，乾燥時には縮む；茎は 6—12×0.2—0.4 cm，同幅或は上方に僅か狭細，細く，脆く，頂部或は全部粉痂を有す，白色或は僅か硫黄色を帯び，屢々透明状光沢あり，平坦或は内生繊維あり；胞子は楕円形，平滑，10—12.5×6—7.5 μ，銹黄土色；子実層に大形の膨大無性細胞を担子柄の間に混在す，長さ担子柄の如くにて幅は甚だ広し；無味無臭。

所在及産地

野外林内動物特に牛の糞上に生ず—春夏

本州—欧．北米

和名 シワナシキオキナタケ

(無皺黄翁茸)〔今関及本郷〕

Bolbitius coprophilus (PECK) "SING."
オキナタケ

"SINGER, Agaricales, 490. 1949."

Pluteolus coprophilus PECK, Rep. N.Y. St. Mus. 46:59. 1893—MURRILL, N. Am. Fl. 10:187. 1917—KAUFFMAN, Agar. Mich. 506. 1918—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:253. 1938.

(原，日．菌．目．43, 253. 1938)

Bolbitius radians MORG. Jour. Cinc. Soc. Nat. Hist. 18:37. 1895.

Derminus coprophilus P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**243. 1900.

子実体は孤生或は群生；傘は径 2—4 cm，円錐状鐘形，のち開張し殆ど扁平となり，更に中央圧低さる；表面は湿時粘性，初め白色，速に帯紅灰色或は帯紫肉桂色となる，周辺に小線条あり；肉は帯白色，甚だ薄く，類肉質，味及臭なし；褶は離生，淡肉桂色，密，狭幅，胞子によりて斑点を作らる；茎は 4—8×0.2—0.4 cm，同幅，基部に向つて僅かに太く，純白色，上部粉状，下部粉状或は綿絮状，真直或は撓曲，中空；胞子は楕円形，平滑，12.5—15×6—8 μ；胞子紋は肉桂色。

所在及産地

堆肥或は馬糞上，施肥土上—夏秋

北海道—北米

和名 オキナタケ（翁茸）〔今井〕

疑 問 種

Bolbitius Oryzae BERK. et CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4:118. 1860—SACCARDO, Syll. Fung. 5:1077. 1887.

(MIQUEL, Consp. Fl. Jap. 392. 1867—松村，植．名鑑，1:132. 1904—白井，日．菌．目．15. 1905; ed. 2. 95. 1917; ed. 3. 54. 1927—MIYAKE, Jour. Coll. Agr. Tokyo, 2:266. 1910—原，日．菌．目．34. 1954)

Agrocybe FAYOD
フミヅキタケ属

FAYOD, Ann. Sci. Nat. Bot. VII, 9:358. 1889—SINGER, Agaricales, 490. 1949.

Bulla BATTARRA, Fung. Agri Arim. Hist. 57. 1755—EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5:424. 1909.

Togaria W. G. SMITH, Brit. Basid. 122. 1908—ROMAGNESI, Rev. Myc. 2:178. 1937.

Pseudodeconica VAN OVEREEN, Bull. Jard. Bot. Buitenzorg, 9:19. 1927.

傘は比較的肉質，溝襞なし，然し全長に亘り線条を有するか，或は縁に短き細微の透明線条あり；上表皮層を作る子実層状被を有し，或は球形，短洋梨形細胞より成る；褶は広く，褶側及び稜の両者に嚢状体を有するか，或は稜嚢体のみを有す；担子柄は正常形，2，3或は4胞子；胞子紋は焦茶色，チョコレート色；胞子は蜜色にて暗栗褐銹色の線を有す，平滑，厚き二重膜を有し，発芽孔あり，或種には大多数の発芽孔なき胞子を混じ，又発芽孔の2，3あるものを稀に認めらる；茎は白色或は有色，平滑或は粗面，被膜を有し或はこれを欠く，被膜は屢々能く発達し成熟茎上に鍔を残す，基端に屢々細き菌糸束を存す；肉は菌絆ある菌糸より成る；殆ど汎布，

約17種を知らる，良食用菌を含む。

（本属名はagros〔希〕(耕野)，kybos〔希〕(六面体，骸子，頭）より出づ)

基準種 *A. praecox* (PERS. ex FR.) FAYOD

本邦既知種検索表

A. 鍔は欠如或は痕跡的；傘は黄土色，黄土褐色等；樹上生ならず。

a. 傘は径 2—5 cm；茎は 3—8×0.4—0.8 cm；嚢状体の先端に屢々分泌物を被むる。

ツバナシフミヅキタケ ***A. farinacea*** (325)

b. 傘は径 0.6—2 cm；茎は 2—5×0.1—0.2 cm；嚢状体に分泌物を被むらず。

α. 褶側嚢体の頂端に数個の指状突起を有す；通常菌核を有す。

タマムクエタケ ***A. arvalis*** (326)

β. 嚢状体に指状突起なし；菌核を有せず。

ハタケキノコ ***A. pediades*** (325)

B. 鍔を有す。

a. 樹上に生ず；傘は淡黄褐色，径 5—15 cm；茎は 8—15×1.5—2.5 cm；胞子発芽孔不明瞭。

ヤナギマツタケ ***A. cylindracea*** (326)

b. 地上，糞上，堆肥上，沼沢地等に生ず。

α. 傘は湿時暗灰褐色，乾時褪色，径 2—5 cm；茎 3—6×0.4—1 cm；胞子発芽孔不明瞭。

ツチナメコタケ ***A. erebia*** (327)

＊前種の大形なるもの，傘径 4—8 cm。

オオツチナメコタケ ***A. ombrophila*** (328)

β. 傘はクリーム色～淡黄土色，乾時甚しく褪色せず；胞子の発芽孔は明瞭。

Ⅰ. 傘径 4—8 cm；茎 5—10×0.7—1 cm；林地，路傍，草地等に生ず。

フミヅキタケ ***A. praecox*** (328)

Ⅱ. 傘径1.5—4 cm；茎6—10×0.25—0.4 cm；沼沢地又は畑地，草原等に生ず。

コフミヅキタケ

A. sphaleromorpha (329)

Agrocybe farinacea HONGO

ツバナシフミヅキタケ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 32:143, f. 1, h-k. 1957.

(今関及本郷，原色日．菌．図鑑，59，1957—本郷，日．菌学会報．4:2. 1957)

子実体は群生或はやや叢生；傘は径 2—4(5)cm，丸山形，のち開張，鈍頭，縁は初め内屈，乾燥，無毛，僅か粗炎，黄土色，中央帯褐黄土色，殆ど或は全く線条なし；肉は厚く淡黄土色或は白色，香味穀粉状；褶は直生にてやや垂下する歯あり，密，淡色～銀暗褐色，稜に甚だ小なる房毛あり，幅 3—4(6) mm；茎は 3—6(8)×0.4—0.8 cm，同幅或は基部肥大，繊維線あり，頂部粉状，無鍔，傘と殆ど同色，充塞～中空，基部白綿毛ありて根状菌糸は白色；胞子紋は汚褐色；胞子は淡蜜色，卵形～楕円形，平滑，8.5—10.5(12)×6—8(8.5)μ，扁平無色の頂発芽孔あり；稜嚢体は多生，33—57×12—19μ，便腹状紡錘形にて円頭，無色或は黄色，屢々先端に無定形の黄色分泌物を有す；褶側嚢体は散生，40—52×19—26μ，稜嚢体は同形或は嚢状，無色，薄膜；菌絆あり。

所在及産地

堆肥上，籾殻上—春　　本州

和名 ツバナシフミヅキタケ(無鍔文月茸)〔本郷〕

Agrocybe pediades (FR.) FAYOD

ハタケキノコ

KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:161. 1948—SINGER, Agaricales, 492. 1949—HONGO, Bull. Fac. Lib. Arts Educ. Shiga Univ. 6:33, f. 3, B-C. 1957—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 341, f. 442-443. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:385, f. 262, B. 1957.

(今関及本郷，原色日．菌．図鑑，58，f. 144，pl. 26，f. 144. 1957—本郷，日．菌学会報，4:2. 1957)

Agaricus pusillus SAHAEFF. Icon. 4:45, pl. 203. 1774.

Agaricus pediades FR. Syst. Myc. 1:290. 1821; Epicr. Myc. 197. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:376. 1857; Hymen. Eur. 260. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:475. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 160. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:170. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:129. 1871; Illus. Brit. Fungi, 4: pl. 492 (n. 505). 1886—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:130. 1876—WINTER, Pilze, 1:673. 1884.

Agaricus pumilus PERS. Myc. Eur. 3:163. 1825.

Naucoria pediades QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:132. 1872—GILLET, Champ. Fr. 545, c. ic. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:844. 1887—KARSTEN, Krit. Oefv. Finl. Basid. 223. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:162. 1893; Brit. Basid. 278. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 169. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 158. 1908—REA, Brit. Basid. 356. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 2: pl. 175. 1932.

(LLOYD, Myc. Writ. 5, Lett. 65:5. 1917)

Simocybe pediades KARST. Hattsv. 1:427. 1879.

Hylophila semiorbicularis QUÉL. Enchir. Fung. 102. 1886. pr. p.

Derminus semiorbicularis SCHROET. Pilze Schles. 1:582. 1889—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):439, pl. 86, f. 5-7. 1912. pr. p.

Naucoria pusilla SACC. Fl. Ital. Crypt. Hymen. 769. 1919.

Naucoria semiorbicularis LANGE, Fl. Agar. Dan. 4:23, pl. 126, f. H. 1939. pr. p.

Agrocybe arvalis sensu HONGO, Jour. Jap. Bot. 28:73, f. 3(2-3). 1953.

子実体は群生～類叢生; 傘は径 6—18mm, 半球形～丸山形, のち開張扁平となり, 鈍頭; 傘面無毛, 湿時多少粘性, 黄土色, 中盤往々帯褐色; 縁は初め内屈し, 線条なし; 肉は淡黄土色, 縁は薄し, 柔軟, 臭は穀粉状; 褶は淡黄土色, のち暗褐色, 直生或は狭生, 時に垂生歯を有す, やや疎, 広幅(2—5mm), 稜に房毛あり; 茎は 3—4×0.1—0.2cm, 同幅にて基部太く, 傘と同色或は淡色, 先端帯白色, 微細なる繊維状鱗被あり, やや波曲, 中空或は充塞, 基端に白色偽根あり; 胞子は楕円形～卵形, 平滑, 扁平無色, 発芽孔あり, 淡蜜色, 11—14.5×7.5—8.5μ; 担子柄は 4 胞子, 27—35×9—10.5μ; 稜嚢体は群生, 25—38×6—8.5μ, 便腹状紡錘形～狭紡錘形にて細長の頸を有し, 無色, 薄膜; 褶側嚢体は散生, 稜嚢体と同様或は大形, 37—70×11—14.5μ。

所在及産地

畑地, 砂地, 草地或は腐熟稲藁上—春秋

本州—欧. 北米. 濠. 亜(西比. 錫. 印)

和名 *ハタケキノコ* (畑茸)〔本郷〕

Agrocybe arvalis (FR.) FAYOD

タマムクエタケ

SINGER, Beih. Bot. Centr. 56, Abt. B:167. 1937; Schweiz. Zeits. Pilzk, 17:97. 1939; Agaricales, 492. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:161. 1948—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 341. 1953.

(本郷, 日. 菌学会報, 4:2. 1957)

Agaricus arvalis FR. Syst. Myc. 1:263. 1821; Epicr. Myc. 197. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1: 377. 1857; Hymen. Eur. 261. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 176. 1883; Illus. Brit. Fungi, 4: pl. 479(n. 506). 1886—WINTER, Pilze, 1:673. 1884.

Naucoria arvalis QUÉL. Champ. Jura Vosg. 2: 347. 1873—SACCARDO, Syll. Fung. 5:845. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 772. 1916—KARSTEN, Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 224. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:162. 1893; Brit. Fungi, 278. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 158. 1903—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2). 1912—RICKEN, Blätterp. 211. 1915—REA, Brit. Basid. 356. 1922—LANGE, Agar. Denm. 12:23. 1938; Fl. Agar. Dan. 4:24, pl. 126, f. D. 1939.

Simocybe arvalis KARST. Hattsv. 1:428. 1879.

Hylophila arvalis QUÉL. Enchir. Fung. 102. 1886.

Galera arvalis var. *tuberigena* QUÉL. Champ. Jura Vosg. Suppl. 17:4, pl. 15, f. 10. 1889.

Naucoria tuberosa P. HENN. Hedwigia, 42:311, c. ic. 1903—SACCARDO, Syll. Fung. 17:71. 1905.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 53:398. 1939—原, 日. 菌. 目. 222. 1954)

Naucoria arvalis var. *tuberigera* KONR. et MAUBL. Icon. Sel. Fung. 6:198. 1932—LANGE, Agar. Denm. 12:23. 1938; Fl. Agar. Dan. 4:24, pl. 126, f. E. 1939.

Agrocybe tuberosa SING. Beih. Bot. Centr. 56, Abt. B:167. 1937; Schweiz. Zeits. Pilzk. 17:97. 1939; Agaricales, 492. 1949—HONGO, Jour. Jap. Bot. 28:74, f. 3(4-5). 1953.

Agrocybe arvalis var. *tuberigena* KONR. et MAUBL. Agaricales, 1:162. 1948.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 58, f. 143, pl. 143. 1957)

子実体は孤生或は群生; 傘は径 1—2cm 或はそれ以上に及び, 丸山形, のち開張して殆ど扁平となる; 表面は無毛, 中央に僅か渓流状線あり, 黄土色～黄土褐色, 屢々周辺に幾分透明なる線条あり; 肉は苦味あり; 褶は直生或は狭生, 類白色, のち暗褐色となる, やや疎, 稜に房毛あり; 茎は 2—5×0.1—0.2 cm, 同幅, 下部傘面と同色, 上部淡色或は類白色にて粉状, 基端狭細の偽根となり, 通常褐黒色の球形なる菌核に連る; 胞子は楕円形, 平滑, 苛性加里液にて淡黄褐色, 発芽孔明瞭なり, 8.5—11.5×4.5—6.5μ; 担子柄は 4 胞子; 褶側嚢体は紡錘形又は纓形, 無色, 33—55×11—22μ, 先端に通常長さ 11—22μ の指状附属物を有す。

所在及産地

庭園, 路傍, 畑地等—秋　　本州—欧. 阿

和名 *タマムクエタケ* (玉尨柄茸)〔今井〕

Agrocybe cylindracea (D. C. ex FR.) R. MAIRE

ヤナギマツタケ

KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:160. 1948.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 58, f. 145, pl. 26, f. 145. 1957—本郷, 日. 菌学会報, 4:2. 1957)

Agaricus cylindraceus D. C. Fl. Fr. 6:51. 1815

—FRIES, Syst. Myc. 1:247. 1821 (*cylindricus*); Epicr. Myc. 164(n. 653). 1838; Hymen. Eur. 218. 1874.

Agaricus aegerita BRIG. Funghi Litogr. 1: pl. 1. 1824—FRIES, Epicr. Myc. 164 (n. 654). 1838; Hymen. Eur. 219. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 143. 1883; Illus. Brit. Fungi, 3: pl. 453(no. 386). 1886—WINTER, Pilze, 1:702. 1884.

Pholiota aegerita QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1: 249. 1872—GILLET, Champ. Fr. 440, c. ic. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:743. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 683. 1916—PATOUILLARD, Ess. Tax. 168. 1900—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:217. 1891; Brit. Fungi, 257. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:253. 1900—ROLLAND, Atl. Champ. 60, pl 60, f. 133. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):543. 1912—RICKEN, Blätterp. 192. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 296. 1918—REA, Brit. Basid. 116. 1922—OVERHOLTS, N. Am. Fl. 10:274. 1924; Ann. Missouri Bot. Gard. 14:139, f. 98–99. 1927—LANGE, Fl. Agar. Dan. 3:62, pl. 107, f. D. 1938—WAKEFIELD, & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 147, pl. 56, f. 3. 1950.

（松村義敏，植．研．雑．9:145, f. 1–11. 1933—広江，応用菌蕈学，1176. 1941—本郷，滋賀大．論集，2: 47, f. 5. 1953—川村，日．菌．図鑑，5:544, f. 530. 1954—原，日．菌．目．250. 1954）

Pholiota cylindracea GILL. Champ. Fr. 439. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:743. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 683. 1916—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1: pl. 68. 1929.

Dryophila aegerita QUÉL. Enchir. Fung. 67. 1886.

Agrocybe Aegerita SING. Agaricales, 493. 1949—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 52. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2:385, f. 262, A. 1957.

Conocybe cylindracea R. MAIRE et KÜHN.-KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 345, f. 451. 1953.

子実体は叢生或は孤生；傘は径 8—15 cm，時に 20 cm に及び，肉質，初め半球形，のち丸山形～扁平となる；表面は藁色～淡黄褐色，周辺帯白色となる，湿時稍々粘性，乾時稍々光沢あり，平滑，屢々皺を生じ，中盤往々亀裂す，縁は内屈す；肉は白色，皮下及茎の基部帯褐色，幾分穀粉臭あり，味温和；褶は殆ど直生，小歯を以て垂生，淡色，のち褐銹色，密，広幅（4—8 mm）；茎は 8—15×1.5—2.5 cm，殆ど同幅，基部狭細，白色，のち下部黄色或は帯褐色，繊維状，斜上，充塞，のち中空；鍔は上位，膜質，寧ろ大形にて水平或は垂下し，白色，上面胞子により暗褐色となる，永存性；胞子は楕円形～卵形，平滑，淡褐色，発芽孔不明瞭，8.5—11×5—7 μ；胞子紋は濃褐色；稜嚢体は散生，19—30×7.5—14 μ，広棍棒形或は洋梨形，可食。

所在及産地

ヤナギ，モミジ，ニレ等広葉樹枯幹及切株上
—春～秋　本州—欧．北米．阿

和名 ヤナギマツタケ（柳松茸）〔松村〕
ヤナギツバタケ（柳鍔茸）〔川村〕

Agrocybe erebia (FR.) KÜHNER

ツチナメコタケ

KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:160. 1948—SINGER, Agaricales, 493. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 342. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:384, f. 261, B. 1957.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，59, f. 146, pl. 26, f. 146. 1957—本郷，日．菌学会報，4:3. 1957）

Agaricus erebius FR. Syst. Myc. 1:246. 1821; Epicr. Myc. 162. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:306. 1857; Hymen. Eur. 216. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 141. 1883; Illus. Brit. Fungi, 3: pl. 358 (no. 377). 1886; Handb. Austr. Fungi, 42. 1892.

Pholiota erebia QUÉL. Champ. Jura Vosg. 3: 437. 1873—GILLET, Champ. Fr. 432. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:292. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:737. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 677. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1:608. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:211. 1893—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:253. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 168. 1900—BATAILLE, Bull. Soc. Myc. Fr. 26:333. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):545. 1912—RICKEN, Blätterp. 198, pl. 56, f. 1. 1915—LANGE, Agar. Denm. 4:6, f. 3. 1921—REA, Brit. Basid. 112. 1922—OVERHOLTS, Ann. Missouri Bot. Gard. 14:118, f. 43–45. 1927—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1: pl. 70. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 14: pl. 685. 1930—LANGE, Fl. Agar. Dan. 3:60, pl. 105, f. B. 1938—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:187. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 146, pl. 55, f. 3. 1950.

（本郷，植．分．地．14:73, f. 1(8). 1951—原，日．菌．目．250. 1954—今関及土岐，林．試．研．報．67:47. 1954）

Dryophila ombrophila ssp. *erebia* QUÉL. Enchir. Fung. 66. 1886.

Hylophila ombrophila ssp. *erebia* QUÉL. Fl. Myc. 96. 1888.

Togaria erebia W. G. SMITH, Brit. Basid. 122. 1908.

子実体は群生或は僅か叢生；傘は径 2—5 cm，丸

山形，のち扁平となり，幾分中丘あり，老時縁は幾分反転す；表面は吸水性にて僅か粘性，平滑，湿時暗灰褐色，乾時淡色となり汚褐色，周辺老時線条あり，縁は初め白色綿絮状繊維を有す；肉は帯白色或



第144図 ツチナメコタケ Agrocybe erebia ×1/2 （大谷氏）

は淡褐色，味及臭なし；褶は垂生歯を有して直生，初め淡色或は灰色，のち銹褐色となる，密或は稍々疎，広幅（4—7mm），稜に初め白房毛あり；茎は3—6×0.4—1cm，同幅或は下部稍々肥大，鍔より上部は帯白色或は淡色にて粉状，下部は汚褐色にて繊維状或は線条あり，中空；鍔は白色，のち帯褐色となり，膜質，垂下し，上面に線条あり，上位～中位；胞子は長楕円形～紡錘形，平滑，褐色，10.5—15×6—7μ，発芽孔不明瞭；胞子紋は鈍褐色；担子柄は通常2胞子；稜嚢体は紡錘形，27—40×11—19μ；可食。

所在及産地

林地，路傍—春～秋

北海道，本州，九州—欧．北米．濠

和名 ツチナメコタケ（土滑子茸）〔今井〕

Agrocybe ombrophila (FR.) KONR. et MAUBL.

オオツチナメコタケ

KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:160. 1948.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，59. 1957）

Agaricus ombrophilus FR. Hymen. Eur. 216. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 141. 1883; Illus. Brit. Fungi, 3: pl. 359(no. 378). 1886.

Pholiota ombrophila KARST. Hattsv. 1:292. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:739. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 674. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:212. 1893; Brit. Fungi, 255, 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 253. 1900—RICKEN, Blätterp. 460. 1915—REA, Brit. Basid. 112. 1922—OVERHOLTS, N. Am. Fl. 10:263. 1924; Ann. Missouri Bot. Gard. 14:120, f. 48–53. 1927.

Pholiota ombrophila var. *brunneola* KARST. Hattsv. 1:293. 1879—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2: 212. 1893—REA, Brit. Basid. 113. 1922.

Dryophila ombrophila QUÉL. Enchir. Fung. 66. 1886.

Agaricus ombrophilus var. *brunneolus* FR. Icon. Hymen. 2, pl. 103, f. 2. 1887.

Pholiota bruneola LANGE, Fl. Agar. Dan. 3:60, pl. 105, f. A. 1938.

Pholiota togularis IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:188. 1938 (non GILLET)

（原．日．菌．目．251. 1954）

子実体は孤生或は群生；傘は 4—8cm，或はそれ以上に及び，円錐状鐘形，のち開張し殆ど扁平となり，中部圧低され，僅かに中丘あり；表面は吸水性にて幾分粘性，湿時褐色～黒褐色，乾時淡色，老時屢々著しき皺を生ず，周辺殆ど線条なし，縁に初め白色綿絮状繊維あり；肉は同色にて淡く，味及臭なし；褶は直生或は僅か垂生，初め灰褐色，のち銹褐色，稍々密，広幅，稜に淡色房毛あり；茎は 5—8×0.5—1cm，同幅或は上方に僅か漸細，基端幾分根状，鍔より上部は汚白色，下部は暗褐色，繊維状或は線条あり，中空；鍔は上位或は中位，白色～帯褐色，薄膜質，垂下，上面に殆ど線条なし；胞子は卵形～紡錘形，平滑，褐色，10—15×5—7.5μ；胞子紋は鈍褐色；担子柄は4胞子；稜嚢体は纏形，幅 12—15μ；可食。

所在及産地

林地，路傍—秋　　北海道—欧．北米

和名 オオツチナメコタケ（大土滑子茸）〔今井〕

Agrocybe praecox (PERS. ex FR.) FAYOD

フミヅキタケ

FAYOD, Ann. Sci. Nat. Bot. VII, 9:358. 1889—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 159. 1948—SINGER, Agaricales, 492. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 341, f. 291. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 53. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2:383. 1957.

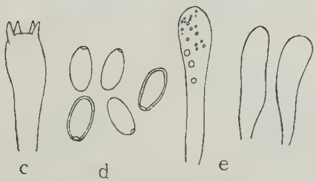
（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，59, pl. 26, f. 147. 1957—本郷，日．菌学会報．4:2. 1957）

Agaricus candicans SCHAEFF. Fung. Bavar. 4: Ind. 50, pl. 217. 1774.

Agaricus praecox PERS. Comm. Fung. Bavar. 89. 1800; Syn. Meth. Fung. 420. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:282. 1821; Epicr. Myc. 162. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:305. 1857; Hymen. Eur.



a　　　　b



c　d　e

第145図　フミヅキタケ
Agrocybe praecox
a．子実体表面
b．同裏面　×1/2
c．担子柄　　d．胞子
e．黄金嚢体　×750
（大谷氏）

217. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:487. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 149, pl. 8, f. 1. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:164. 1870—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:105. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3:pl. 360 (no. 381). 1886; Handb. Austr. Fungi, 43. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:114. 1876—WINTER, Pilze, 1:703. 1884.

Pholiota praecox QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:124. 1872—GILLET, Champ. Fr. 434, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:294. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 161. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:738. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 678. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:214. 1893; Brit. Fungi, 255. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 168. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 150, f. 145. 1903—ROLLAND, Atl. Champ. 60, pl. 60, f. 134. 1910—HARPER, Trans. Wisc. Acad. Sci. Arts Lett. 17:478, pl. 27–28, f. A-B. 1913; 18:397, pl. 14, f. C-D. 1916—RICKEN, Blätterp. 191, pl. 55, f. 4. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 293, pl. 59. 1918—LANGE, Agar. Denm. 4:6, f. 5. 1921—REA, Brit. Basid. 114. 1922—OVERHOLTS, Ann. Missouri Bot. Gard. 14: 106, f. 6–8, pl. 9. 1927—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 140, pl. 70. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 14:pl. 690–691. 1930—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1:102. 1934—LANGE, Fl. Agar. Dan. 3:61, pl. 106, f. G. 1938.（今関，原色きのこ，pl. 14(右). 1942—原，日．菌．目．250. 1954）

Dryophila praecox QUÉL. Enchir. Fung. 67. 1886.

Pholiota candicans SCHROET. Pilze Schles. 1:608. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1,1**:253. 1900—MURRILL, Mycologia, 3: 165, pl. 49, f. 1. 1911—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze. 2(2):544, pl. 106 B, f. 1–3. 1912—OVERHOLTS, N. Am. Fl. 10:264. 1924.

Togaria praecox W.G.SMITH, Brit. Basid. 124. 1908.

子実体は群生或は孤生；傘は径 3—8 cm，丸山形，のち扁平となる；表面は無毛，平滑，成時時に中央に僅かの裂目を生ず；クリーム色或は藁色，中央濃色，乾時帯白色，類吸水性，縁は初め内屈し，白綿状の膜片を有す；肉は傘部白色，茎部帯黄～帯褐色，肉質，厚く，味及臭なし；褶は狭生或は垂下歯を有し直生，初め淡色，のち赤褐色，密，広幅（3—5 mm）；茎は 5—10×0.7—1 cm，同幅，初め白色或はクリーム色，粉状，のち線条ありて帯褐色，基部は屢々僅か肥大し白毛を有す，中空；鍔は上位，白色，膜質，垂下，永存或は早失；胞子は卵状楕円形，平滑，褐色，発芽孔明瞭，7.5—9×4.5—5 μ；胞子紋は鈍褐色；褶側及稜嚢体は稀生，便腹状纏形，30—50×20—23 μ；可食。

所在及産地

林内外草地—夏

北海道，本州—欧．北米．阿．亜（支．西比．小亜）

和名　フミヅキタケ（文月茸）〔今井〕

Agrocybe sphaleromorpha (BULL. ex FR.) FAYOD
コフミヅキタケ

FAYOD, Ann. Sci. Nat. VII, 9:358. 1889—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:159. 1948—HONGO, Bull. Fac. Lib. Arts Educ. Shiga Univ. 7:43, f. 1, (f-g), 2(I). 1957—HEIM, Champ. Eur. 2:383. 1957.

Agaricus sphaleromorphus BULL. Champ. Fr. pl. 540, f. 1. 1791—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 266. 1801—FRIES, Epicr. Myc. 163. 1836; Monogr. Hymen. Suec. 1:305. 1857; Hymen Eur. 217. 1874—WINTER, Pilze, 1:703. 1884.

Agaricus praecox β? sphaleromorphus FR. Syst. Myc. 1:283. 1821.

Pholiota sphaleromorpha QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:124. 1872—GILLET, Champ. Fr. 433. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:295. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:739. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 673. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:214. 1893;

Brit. Fungi, 255. 1911—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1):544. 1912—RICKEN, Blätterp. 192, pl. 55, f. 3. 1912—REA, Brit. Basid. 114. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 14: pl. 692. 1930.

Dryophila sphaleromorpha QUÉL. Enchir. Fung. 67. 1886.

Hylophila praecox var. *sphaleromorpha* QUÉL. Fl. Myc. 97. 1888.

Pholiota praecox var. *paludosa* LANGE, Fl. Agar. Dan. 3:62, pl. 106, f. E-E′. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 6:113. 1929.

Pholiota praecox subsp. *sphaleromorpha* KONR. et MAUBL. Icon. Sel. Fung. 1: pl. 67. 1929.

Agrocybe paludosa KÜHN. et ROMAGN. Fl. Analyt. Champ. Super. 341. 1953.

（本郷，日．菌学会報，4:2. 1957）

子実体は群生或は散生；傘は径 1.5—4 cm，半球形〜丸山形，のち開張し扁平となり，屢々多少凸面，遂に広く圧低さる；表面は無毛，湿時僅か粘性，蜜黄色，中盤帯褐色，乾時淡色となる；縁は全縁，殆ど線条なし；肉は寧ろ薄く，淡色，味及臭は穀粉状；褶は狭生〜彎生，密，便腹状，幅 2.5—6 mm，初め帯白色，のち淡帯褐灰色，遂に鈍褐色，縁は帯白房毛あり；茎は 6—10×0.25—0.4 cm，同幅にて通常基部膨大す，多少波状，傘の色彩を有し，管状，基端に白色根状束あり；鍔は上位，水平，膜質，帯白色，線条あり，胞子によつて暗褐色となる；胞子は鏡下にて蜜色，広楕円形〜卵形，平滑，先端に無色扁平の頂孔あり，9.5—12.5×6—8.5 μ；胞子紋は暗栗褐色；担子柄は 4 胞子，22—25×8.5—10.5 μ；褶側嚢体は粗生，32—54×16—23.5 μ，罎形或は便腹状にて円頭を有す；稜嚢体は群生，27—38×8—14.5 μ，棍棒形，褶側嚢体と同様なるものを僅か混在す；外皮細胞はやや球形，径 13—16 μ，速に頽廃す；菌絆を有す。

所在及産地

畑地，草原或は沼地上一春　　本州一欧

和名　コフミヅキタケ（小文月茸）〔本郷〕

Strophariaceae v. OVEREEN　モエギタケ科

v. OVEREEM, Bull. Jard. Bot. Buitenzorg, 9: 19. 1927—SINGER & SMITH, Mycologia, 38:503. 1946—SINGER, Agaricales, 495. 1949.

傘の上表皮層は常に細き無色，糸状にて菌絆なき匍匐する菌糸より成る；下表皮層は屢々類細胞状；托は褶状；褶は狭生，彎生，直生或は直状垂生；胞子紋は濃ライラック色〜帯黒ライラック色，或は肉桂褐色，濃銹肉桂色，或は濃暗褐セピア色，多分僅か紫色彩を帯ぶ；胞子は蜜色〜栗褐色，屢々外膜の周囲に濃き帯赤栗褐色の線を有す，膜は常に内膜及び平滑の外膜に能く分化し，稀に頂部に於て連結す，通常多少広き発芽孔を有し，往々殊にライラック胞子紋をもつ諸属に於ては明かに截頭；稜嚢体のみを有し，然らざれば褶側にも又分散〜多数存在す，後者の場合に於ては最も屢々嚢状体の特別なる型の所謂黄金嚢状体なり，この嚢状体はその最も広き部分に無定形の物ありてアンモニアにて多少強く黄色を呈す，この嚢状体の形は常に特徴ありて，棍棒形或は微凸頭棍棒形なり；肉は常に柔肉質，軽くならずして乾燥し，強靱ならず，味は屢々苦し；すべての菌糸に菌絆あり；非常に種々なる基物上に生し，林内，野外，庭園，沼地等の生及び腐木，根茎，果実上及び地上，糞上等に生ず；2亜科に分たる。

本科はヒトヨタケ科（*Coprinaceae*）とは楔形にて液化せざる褶或は明かに短細胞状被を有せざるにより，又胞子紋の色に於ても異なる。本科は又フウセンタケ科（*Cortinariaceae*）に近縁なるも発芽孔の存在及び或は上表皮の構造により区分さる。

亜科検索表

A．胞子紋は濃ライラック〜帯黒ライラック色或は濃セピア色にて，多分僅かの紫色彩を帯ぶ；胞子はアルカリ液にて屢々オリーブ或は暗褐色に傾き，或は外膜に沿うて赤栗色の線を有す，往々扁豆形にて屢々六角形となる。

（Ｉ）モエギタケ亜科　**Stropharioideae**　(330)

B．胞子紋は肉桂色，濃銹肉桂色，銹暗褐色；胞子は NH_4OH にて通常蜜色，稀に不明瞭なる扁豆形にて稀に六角形。

（II）スギタケ亜科　**Pholiotoideae**　(343)

（I） Stropharioideae SING.　モエギタケ亜科

SINGER, Ann. Myc. 34:340. 1936; Agaricales, 497. 1949.

本亜科は胞子紋の色を大なる特徴とし，濃ライラック～帯黒ライラック色，或は濃セピア色にて僅かの紫彩を帯び，次のスギタケ亜科の褐色にて紫色を帯びざるものとは異なれり；SINGER 氏（1949）は之れに5属を収む，本邦4属を知らる。

属検索表

A．黄金嚢状体を有す。

a．下表皮層は上表皮層の菌糸よりも太く長き菌糸より成る；被膜は常に鍔となり，鍔は単一或は2重，乾燥或は膠性；胞子は通常小形（長さ10μ 以下）なるも僅少の種に於て長きものあり；稜嚢体は最も屢々棍棒形；地上或は糞上生にて稀に他物上に生ず。

モエギタケ属 **Stropharia** (331)

b．下表皮層は類細胞状にて，錯雑せる菌糸及び稍々等径の細胞或は球嚢より成る；鍔は単一或は欠如して傘縁片に限られ，稀に甚だ消失性にて認められず；胞子は小形或は大形；地上，蘚上或は材上等に生ず。

クリタケ属 **Naematoloma** (335)

B．黄金嚢状体を有せず。

a．胞子は10μ より大；褶側嚢体存在，或は被膜は鍔状，或は胞子は明かに扁豆形ならず（これ等3性質を共有，或は少くともその何れかの2性質を共有す）；茎は中心生にて多少真直或は幾分波曲，通常寧ろ長く，往々仮根を有す；傘は吸水性或は非吸水性。

シビレタケ属 **Psilocybe** (340)

b．胞子は長さ 10μ 以下；茎は僅か発達し傘径より甚だ短じ，屈曲して屢々傘縁に接着し，偏心生；胞子は甚だ僅か扁豆形或は然らず。

Melanotus (342)

Stropharia (FR.) QUÉL.

モエギタケ属

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:141. 1872—SINGER, Agaricales, 498. 1949.

Agaricus subgen. *Stropharia* FRIES, Summa Veg. Scand. 295. 1849.

Geophila subgen. *Stropharia* QUÉLET, Enchir. Fung. 111. 1886.

Psalliota subgen. *Stropharia* SCHROETER, Pilze Schles. 1:573. 1889.

Fungus Ad. (1763) ex O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):477. 1898.

Stereophila ROMAGNESI, Rev. Myc. 1:36. 1936.

傘は湿潤或は粘性；上表皮層は匍匐菌糸より成る；下表皮層は類細胞状ならず；褶は狭生～直生，通常広し；托実質は整型なるも老時不整型となる；稜嚢体存在，稀に欠如しその時は膠質の被膜に被わる；稜嚢体は能く分化し稜は異質となる；胞子紋は濃ライラック～帯黒ライラック色，乾燥標品にては鈍色となる；胞子幼時ライラック色なるも後暗褐色或はオリーブ色に傾き，屢々外膜に沿うて栗色の線を有す，平滑，甚だ著しき2重膜，膜は厚くして少くとも外膜と内膜とより成り，常に明かなる発芽孔を有す，頂に於て強く截頭，稀に截頭ならず，通常小形なるも，僅少の種に於て甚だ大形；茎は中心生，真直或は幾分波曲，傘径より長し，常に鍔を有し，被膜は通常膜質なるも，僅少の種に於て膠質にて膠質物内に糸状菌糸埋在す；地上及び糞上，稀に他の基物上に生ず；半被実；殆ど汎布，約9種を知らる，利用さるるものなし。

（本属名は strophion〔希〕（帯）より出づ）

基準種 *S. aeruginosa* (CURT. ex FR.) QUÉL.

本邦既知種検索表

A．胞子小形（長さ 10μ 以下）

a．傘は粘被に被われ，寧ろ大形（4—8 cm）；緑青色にて屢々白色鱗片あり；林内外腐蝕物上。

モエギタケ ***S. aeruginosa*** (331)

b．傘はやや粘性，中形（2—5 cm）；傘は黄土黄色；林地，草原及施肥土上

コシワツバタケ ***S. coronilla*** (332)

B．胞子大形（長さ約15—20μ）；褶は広く直生；糞上。

a．傘はシトロン色～藁色，中形（約2—5 cm）．

α．傘は永存的に半球形，鈍頭。

キバフンタケ ***S. semiglobata*** (333)

β．傘は丸山形～殆ど扁平，稍々中丘あり。

シコンアジロガサタケ

S. stercoraria (334)

b．傘は黄土褐色，小形（1—2.5 cm），鐘状丸山形，乳頭状中丘を有す。

シコンツヅラガサタケ ***S. luteonitens*** (334)

Stropharia aeruginosa (CURT. ex FR.) QUÉL.

モエギタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:141. 1872—GILLET, Champ. Fr. 577, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:488. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 236. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:1013. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:397. 1892; Brit.

Fungi, 326. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 173. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 176. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 72, f. 167. 1910—HARPER, Trans. Wisc. Acad. Sci. Arts Lett. 17:1017, pl. 64. 1914—RICKEN, Blätterp. 239, pl. 63, f. 4. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 247. 1918—REA, Brit. Basid. 125. 1922—LANGE, Agar. Denm. 5:32. 1923—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 164, pl. 83. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 17:pl. 835. 1931—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 266. 1938—LANGE, Fl. Agar. Dan. 4:64, pl. 140, f. A. 1939—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:136. 1948—SINGER, Agaricales, 501. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 189, pl. 75. f. 4. 1950—HEIM, Champ. Eur. 2:461, f. 306, A. 1957.

（川村，日．菌．図説，n. 57. 1929; 日．菌．図鑑，4: 569, f. 544. 1954—広江，応用菌蕈学，1166. 1941——今関，原色きのこ，pl. 21（左）. 1942; 及土岐，林．試．研．報．67:47. 1954—原，日．菌．目．355. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，60, f. 149, pl. 27, f. 149, 1957）

Agaricus acuminatus SCOP. Fl. Carn. II, 2:447. 1772.

Agaricus viridulus SCHAEFF. Fung. Bavar. 4: Ind. pl. 1. 1774.

Agaricus aeruginosus CURT. Fl. Lond. 70. 1788—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 419. 1801—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, 3: pl. 264. 1803—FRIES, Syst. Myc. 1: 286. 1821; Epicr. Myc. 218. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:411. 1857; Hymen. Eur. 284. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:467. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 168. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:173. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:140. 1871; Illus. Brit. Fungi, 4: pl. 551 (no. 555). 1886—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:138. 1876—WINTER, Pilze, 1:656. 1884.

Pratella aeruginosa S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:626. 1821.

Geophila aeruginosa QUÉL. Enchir. Fung. 111. 1886—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 337, f. 435. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 54. 1956.

Psalliota rividula SCHROET. Pilze Schles. 1: 573. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:238, f. 115, D. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):426, pl. 81. 1912.

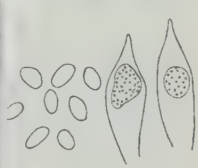
Fungus viridulus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):479. 1898.

Stropharia acuminata SACC. Fl. Ital. Crypt. Hymen. 813. 1916—MURRILL, Mycologia, 14:128. 1922.

子実体は孤生或は群生；傘は径 4—8 cm，鐘形～丸山形，のち扁平となり，鈍き中丘を有し，時に稍々窪む；表面は初め淡藍色の粘被に包まれて濃緑青色を呈し，雨後或は老時粘液失われて帯黄色～黄緑色となる，中央は往々黄褐色，平滑，粘性，幼時屢々表面，特に周辺部に小形早失性の白色綿架状鱗片



a



c　　b

第146図　モエギタケ Stropharia aeruginosa
a．子実体× 1/3
b．黄金嚢体
c．胞子 ×500
（大谷氏）

を散在し，縁に於て著し；肉は帯白色にて表皮下青色を帯び，中盤以外は薄く，寧ろ柔軟，味及臭なし；褶は直生或は彎生，初め帯白色，速に菫灰～帯褐灰色となり，遂に紫褐色となる，稍々密，寧ろ広幅，稜に微細なる白色綿架あり；茎は 5—10×0.5—1.5 cm，上方に漸細或は同幅，緑青色を帯ぶるも傘面より淡く，初め粘性，鍔より上部は殆ど平滑，下部は白色早失性の綿架状鱗片を被むる，基端に粗き白色菌糸束を有す，中空；鍔は寧ろ下位，上面白色，下面淡緑色，狭く，膜質にて綿架を有し，稍々早失性；胞子は楕円形，平滑，7.5—9×4.5—6 μ；胞子紋は帯紫暗褐色；稜嚢体は棍棒形或は披針形；有毒と称せらる。

所在及産地

林内外腐蝕物上—秋

北海道，本州—欧．北米．亜（小亜）

和名　モエギタケ（萌黄茸）〔古名〕

Stropharia coronilla (BULL. ex FR.) QUÉL.

コシワツバタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:255. 1872—GILLET, Champ. Fr. 578, c. ic. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:1014. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 812. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:399. 1892; Brit. Fungi, 326. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 177. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 72, f. 168. 1910

—RICKEN, Blätterp. 241, pl. 63, f. 5. 1915—KAUFFMAN, Agr. Mich. 250. 1918—REA, Brit. Basid. 127. 1922—LANGE, Agar. Denm. 5:33. 1923—BRESADOLA, Icon. Myc. 17: pl. 836. 1931—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:270. 1938—LANGE, Fl. Agar. Dan. 4:65, pl. 141, f. F. 1939—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1: 137. 1948—SINGER, Agaricales, 501. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 190, pl. 75, f. 1. 1950—HEIM, Champ. Eur. 2:462. 1957.

(原，日．菌．目．356．1954)

Agaricus coronillus BULL. Champ. Fr. pl. 597. 1793.

Agaricus coronillus FR. Syst. Myc. 1:282. 1821; Hymen. Eur. 285. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 198. 1883; Illus. Brit. Fungi, 4: pl. 535 (no. 558). 1886—WINTER, Pilze, 1:655. 1884.

Fungus coronillus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2): 479. 1898.

Psalliota coronilla P. HENN, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 238. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 427, pl. 83, f. 3–4. 1912.

Geophila coronilla KÜHN. et ROMAGN. Fl. Analyt. Champ. Super. 336, f. 293. 1953.

子実体は孤生；傘は径 2—5 cm，丸山形，のち開張し時に僅か圧低され縁は波状となる；表面は無毛，平滑，稍々粘性にて殆ど乾燥，帯白色～黄土黄色，縁は初め白色綿絮あり；肉は白色，寧ろ厚く，緊緻，臭は微にて不快；褶は直生或は彎生，淡褐菫灰色，のち紫黒色となる，密，寧ろ広幅，便腹状，稜に白房毛あり；茎は 3—5×0.3—0.7 cm，同幅或は基部僅か狭細，白色，老時帯黄色，乾燥，鍔より上部は平滑或は綿絮状，下部は繊維状，充塞，のち中空；鍔は中位，厚膜質，白色，狭く，上面に線条あり，永存性；胞子は楕円形，平滑，菫色，8—10×4—5 μ；胞子紋は紫褐色；嚢状体は短く，広棍棒形，有嘴。

所在及産地

林地，草原地及施肥土上—夏秋

北海道—欧．北米

和名 コシワツバタケ（小皺鍔茸）〔今井〕

Stropharia semiglobata (BATSCH ex FR.) QUÉL.

キバフンタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:143. 1872—GILLET, Champ. Fl. 576, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:492. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 238. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:1022. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 809. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:404. 1892; Brit. Fungi, 327, pl. 24, f. 1. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 173. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 31, f. 30. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 178. 1908—MURRILL, Mycologia, 4:2, pl. 56, f. 3. 1912; 14:132. 1922—HARPER, Trans. Wisc. Acad. Sci. Arts Lett. 17: 1022. 1914—RICKEN, Btätterp. 242, pl. 63, f. 2. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 252. 1918—REA, Brit. Basid. 129. 1922—LANGE, Agar. Denm. 5: 34. 1923—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 167, pl. 84, f. 1. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 17: pl. 839. 1931—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:272. 1938—LANGE, Fl. Agar. Dan. 4:67, pl. 142, f. A. 1939—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2:139. 1948—SINGER. Agaricales, 501. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 191, pl. 75, f. 3. 1950—HEIM, Champ. Eur. 2:462. 1957.

(原，日．菌．目．356．1954—川村，日．菌．図鑑，5: 574，f. 547．1954)

Agaricus semiglobatus BATSCH, Elench. Fung. Cont. 1:141, pl. 21, f. 110. 1786—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, 3: pl. 248. 1803—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 407. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:284. 1821; Epicr. Myc. 220. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:416. 1857; Hymen. Eur. 287. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:142. 1871; Illus. Brit. Fungi, 4: pl. 539 (no. 567). 1886; Handb. Austr. Fungi, 62. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:140. 1876—WINTER, Pilze, 1:653. 1884.

Geophila semiglobata QUÉL. Enchir. Fung. 112. 1886—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 336, f. 430. 1953.

Anellaria semiglobata SCHROET. Pilze Schles. 1:568. 1889—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 406. 1912.

Fungus semiglobatus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2): 480. 1898.

Fungus glutinosus O. KUNTZE, l. c. 479. 1898.

Psalliota semiglobata P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 238. 1900.

子実体は孤生或は群生；傘は径 1—4 cm，半球形～饅頭形にて扁平となること少し，表面はシトロン色～藁色，無毛，湿時甚だ粘性，乾時光沢あり，平坦，老時褪色す，屢々胞子により紫黒色に汚染さる；肉は淡色，中盤厚く，他は薄し，柔軟，味及臭なし；褶は直生，白色～鼠色，速に胞子によりて暗紫褐色となる，密或は稍々疎，甚だ広幅にて幾分三稜形，稜に白色綿絮あり；茎は 5—10×0.2—0.4 cm，同幅，稀に基部肥大，真直，平滑，粘性，鍔下綿絮状，淡黄色，中空；鍔は上～中位，狭く，不完全にて黒色帯となる；胞子は楕円形，平滑，菫紫色，16—20×10—12 μ；胞子紋は紫褐色；稜嚢体は短糸状，幅 5—6 μ。



a



b c

第 147 図 キバフンタケ Stropharia semiglobata
a. 子実体 ×2/3
b. 黄金嚢体
c. 胞子 ×500
(大谷氏)

所在及産地
馬糞, 堆肥及施肥圃上—春～秋
北海道.本州—欧.米.濠.亜(小亜.支.西比)

和名 キバフンタケ (黄馬糞茸) [方言]
シコンマンジュウガサタケ
(紫金饅頭笠茸) [今井]

Stropharia stercoraria (BULL. ex FR.) QUÉL.

シコンアジロガサタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:143. 1872—GILLET, Champ. Fr. 577. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:492. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 237. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:1021. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 810. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:404. 1892; Brit. Fungi, 327. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 178. 1908—HARPER, Trans. Wisc. Acad. Sci. Arts Lett. 17:1021, pl. 67. 1914—RICKEN, Blätterp. 242. 1915—REA, Brit. Basid. 129. 1922—LANGE, Agar. Denm. 5: 34, f. 9. 1923—BRESADOLA, Icon. Myc. 17: pl. 838. 1931—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1:136. 1932—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:273. 1938—SINGER, Agaricales, 501. 1949—HEIM, Champ. Eur. 2:463. 1957.

(原, 日. 菌. 目. 356. 1954)

Agaricus adnatus HUDS. Fl. Angl. 2:619. 1778.

Agaricus stercorarius BULL. Champ. Fr. pl. 566, f. 4. 1791—FRIES, Syst. Myc. 1:291. 1821; Epicr. Myc. 220. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1: 416. 1857; Hymen. Eur. 287. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:142. 1871; Illus. Brit. Fungi, 4:538(no.566). 1886—WINTER, Pilze, 1:654. 1884.

Geophila stercoraria QUÉL. Enchir. Fung. 112. 1886.

Psalliota stercoraria SCHROET. Pilze Schles. 1: 573. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 238. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 425, pl. 83, f. 1–2. 1912.

Fungus stercorarius O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2): 480. 1898.

Stropharia adnata MURR. Mycologia, 14:133. 1922.

Stropharia semiglobata var. *stercoraria* LANGE, Fl. Agar. Dan. 4:67, pl. 142, f. D. 1939.

子実体は孤生或は群生; 傘は径 2—5 cm, 円錐状鐘形～半球形, のち広丸山形或は殆ど扁平に開張し, 幾分中丘を有す; 表面は粘性, シトロン色～藁色, 乾時黄色或は帯白色にて光沢あり, 無毛, 平坦, 屡々胞子により汚染さる, 時に裂目を生ず; 肉は白色或は帯黄色, 中盤厚く周辺薄し, 柔軟, 味稍々辛く, 臭なし; 褶は直生にて垂下歯を有し, 帯褐色或は帯緑黒色, 密, 甚だ広幅, 稜に白色綿絮あり; 茎は 6—14×0.2—0.6 cm, 同幅或は基部僅か肥大, 真直, 鍔より上部は白粉状, 下部は帯緑黄色或は黄白色の綿絮を有す, 粘性, 中空; 鍔は上位, 狭く, 不完全にて黒色帯となる; 胞子は長楕円形, 平滑, 菫紫色, 15—20×7.5—10 μ; 胞子紋は紫黒色; 嚢状体は褶側及稜に存在, 披針形, 50—70×12—18 μ。

所在及産地
馬糞及堆肥上—春～秋
北海道, 本州—欧. 北米. 濠

和名 シコンアジロガサタケ
(紫金網代笠茸) [今井]

Stropharia luteonitens (VAHL. ex FR.) QUÉL.

シコンツヅラガサタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:142. 1872—GILLET, Champ. Fr. 576. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:491. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 237. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:1019. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:402. 1892; Brit. Fungi, 327. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 177. 1908—RICKEN, Blätterp. 242, pl. 63, f. 6. 1915—REA, Brit. Basid. 128. 1922—LANGE, Agar. Denm. 5:33. 1923; Fl. Agar. Dan. 4:68, pl. 141, f. A. 1939—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1: pl. 54, f. 1. 1930; Agaricales, 1:138. 1948—SINGER, Agaricales,

501. 1949.

Agaricus nitens VAHL. Fl. Dan. pl. 1057, f. 1. 1792—FRIES, Syst. Myc. 1:284. 1821.

Agaricus luteonitens FR. Epicr. Myc. 220. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:414. 1857; Hymen. Eur. 286. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 200. 1883; Illus. Brit. Fungi, 4:pl. 604(n. 564). 1836—WINTER, Pilze, 1:654. 1884.

Agaricus umbonatescens PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 30:41. 1878.

Geophila luteonitens QUÉL. Enchir. Fung. 111. 1886.

Stropharia umbonatescens SACC. Syll. Fung. 5:1021. 1887(ex err. typ. *umbonescens*)—HARPER, Trans. Wisc. Acad. Sci. Arts Lett. 17:1023, pl. 65, f. B. 1914—KAUFFMAN, Agar. Mich. 252, pl. 51. 1918—MURRILL, Mycologia, 14:128. 1922—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1:136. 1934—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:274. 1938.

(原, 日. 菌. 目. 356. 1954)

Fungus luteonitens O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):480. 1898.

Fungus umbonescens O. KUNTZE, l.c. 480. 1898.

Psalliota umbonescens P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:238. 1900.

Psalliota luteonitens MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):425, pl. 83, f. 5-6. 1912.

Geophila umbonatescens KÜHN. et ROMAGN. Fl. Analyt. Champ. Super. 336. 1953.

子実体は群生或は孤生; 傘は 1—2.5 cm, 或はこれ以上に及び, 鐘状丸山形, のち乳頭状中丘を存す; 表面は粘性外皮を有し, 剝げ易し, 淡黄土褐色或は灰色, 中央は鮮黄土橙色〜赤褐色, 無毛, 平坦, 或は不明瞭の線条あり, 光沢を有す, 縁に屢々早失性ベールの房毛を在す; 肉は薄く, 淡色, 臭不良, 味温和; 褶は直生或は垂下歯を有し, 僅か密, 広幅, 初め白色, のち灰色, 遂に紫褐〜帯黒褐色となる, 稜は淡色; 茎は 5—10×0.1—0.3 cm, 同幅或は基部やや肥大, 屢々長根を有す, 僅か粘性, 黄土色を帯ぶ, 堅直, 初め鍔より下部薄き不明瞭なる鱗片状ベール残物を有す, 充塞, のち中空; 鍔は白色, 不完全, 早失性; 担子柄は 2 胞子; 胞子は橢円状卵形, 平滑, 帯紫褐色, 16—20×9—11 μ, 発芽孔あり; 胞子紋は紫黒色; 稜は異質, 縁細胞は無色, 類円筒形, 25—40×5—8 μ, 真の嚢状体なし。

所在及産地

馬糞, 堆肥及施肥土上—秋

北海道, 本州—北米. 濠. 亜(支)

和名 シコンツヅラガサタケ

(紫金葛籠笠茸) 〔今井〕

Naematoloma KARST.

クリタケ属

KARSTEN. Hattsv. 1:495. 1879—SINGER, Agaricales, 502. 1949.

傘は非吸水性或は縁部に於て僅か吸水性, 通常寧ろ鮮色にて黄色, 黄褐色, オリーブ黄色, 紫色を呈し, 粘性ならず, 稀に粘性のものあり, 通常傘縁片を有す; 上表皮層は無色糸状匍匐, 菌絆ある僅か膠化せる菌糸より成る; 下表皮層は多くの種に於て類細胞状, 稀に伸長せる菌糸の薄層より成る; 短かき菌糸を僅か混在す; 褶は多少狭生, 直生或は垂生歯を有し, 長垂生又は離生のことなし; 嚢状体は殆どすべて褶側に存し, 所謂黄金嚢体と称する型に属し, 棍棒形或は鈍凸頭棍棒形, 最も広き部分に NH_4OH にて黄色となる無定形の物を有す; 托実質は確然たる整型にて老時も寧ろ明かに整型を存す; 胞子紋は重にモエギタケ (*Stropharia*) の如し; 茎は中心生, 成時屢々寧ろ長し, 通常鍔なきも少数のものに狭き〜能く発達せる鍔を有す, 幾分繊維質にて僅か強靱〜正常なる肉状繊維質, 通常老時中空となる, 屢々基部より上方に向つて帯褐色或は濃黄褐色となる, 往々仮根を有し, 往々密に叢生す; 肉は屢々苦く, 屢々菌糸間に黄色無定形の色素塊を存す, すべての菌糸は菌絆を有す; 生及び死植物, 草茎, 針葉上, 埋在枝及丸太上, 地上等に生ず; 半被実; 殆ど汎布, 約 14 種を知られ, 時に木材腐朽を起し, 或種は食用とさるるも, 多くは苦味ありて利用されず。

(本属名は nēma〔希〕(糸), loma〔希〕(房, 房毛, 縁) より出づ)

基準種 *N. sublateritium* (FR.) KARST.

本邦既知種検索表

A. 胞子は中〜大形にて屢々長さ 10 μ 以上; 鍔は発達良好にて厚膜質; 地上生, 稀に腐株上生。

a. 傘は銹橙色或は赤銹色, 表面に分散せる淡黄色綿絮状鱗片あり。

カバイロタケ

N. squamosa* var. *thrausta (336)

b. 傘は圧着せる繊維を被むる。

α. 茎の基部球根状; 傘は帯白或は帯黄色にて褐色繊維を有す。

ホテイシワツバタケ ***N. bulbosa*** (336)

β. 茎の基部球根状ならず。

I．傘は赤褐色。

サケツバタケ *N. rugosoannulata* (337)

II．傘は汚黄色。

キサケツバタケ *f lutea* (337)

c．傘は無毛，平坦，淡汚褐色にて菫色を帯び，大形；茎に著しき纖維状鱗片を被むる。

ツヅレタケ *N. hornemanni* (337)

B．胞子は小形にて長さ 10μ 以下；鍔は欠如或は発達甚だ不良にて早失す；材上に密に叢生す。

a．寧ろ大形にて傘径 3—10 cm 或はそれ以上に及び，中央濃煉瓦赤色，厚肉，緊緻；苦味著しからず。 クリタケ *N. sublateritium* (338)

b．中形にて傘径 3—7 cm，淡黄色にて中盤暗色；褶は初め黄色；臭強し。

カチグリタケ *N. epixanthum* (339)

c．寧ろ小形にて傘径 2—5 cm，淡黄色，中央黄褐色，薄肉，褶は緑色を帯ぶる特徴あり；苦味著し。 ニガクリタケ *N. fasciculare* (339)

Naematoloma squamosa (PERS. ex FR.) SING. var. **thrausta** (KALCHBR. ex FR.) IMAZ. et HONGO

カバイロタケ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 32:146. 1957.
(今関及本郷，原色日．菌．図鑑，61，f. 151，pl. 27，f. 151. 1957)

Agaricus thraustus KALCHBR. Icon. Hymen. Hung. pl. 15, f. 4. 1873. (non COOKE)

Agaricus squamosus ssp. *thraustus* FR. Hymen. Eur. 286. 1874.

Agaricus thraustus var. *aurantiaca* COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 199. 1883; Illus. Brit. Fungi, 4:555. 1886.

Stropharia Percevali var. *aurantiaca* SACC. Syll. Fung. 5:1016. 1887.

Stropharia squamosa var. *thrausta* MASS. Brit. Fung. Fl. 1:402. 1892; Brit. Fungi, 327. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 177. 1908—REA, Brit. Basid. 128. 1922—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 191. 1950—HEIM, Champ. Eur. 2:461, f. 81(6). 1957.

Stropharia squamosa var. *aurantiaca* MASS. Brit. Fung. Fl. 1:402. 1892; Brit. Fungi, 327. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 177. 1908—REA, Brit. Basid. 128. 1922.

Stropharia aurantiaca IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:267. 1938.
(本郷，植．分．地．14:55，f. 11. 1950—原，日．菌．目．356. 1954—松田及本郷，植．研．雑．30:262. 1955)

Geophila squamosa var. *thrausta* KÜHN. et ROMAGN. Fl. Analyt. Champ. Super. 336. 1953.

子実体は群生或は孤生；傘は径 3—7 cm，半球形，のち開張し，稍々中丘を有す；表面は稍々粘性～乾燥，銹橙色或は赤銹色，早失性表生の鱗片を同心円状に散生す，鱗片は長毛の束より成り淡黄色を呈す；



第 148 図　カバイロタケ Naematoloma squamosa var. thrausta　×1/2　(大谷氏)

肉は白色，皮下僅か帯赤色，寧ろ薄し；褶は直生或は彎生，灰色，のち帯褐黒色，密，便腹状，稜に白色房毛あり；茎は 6—12×0. 4—0. 6 cm，同幅或は上方に漸細，鍔より上部は白色，下部は纖維状反転する同色の鱗片，或は密なる同色の粗豪毛を有し，基部暗色を呈す，充塞或は中空；鍔は薄膜質，中位，永存性；胞子は長楕円形，平滑，9—13×5—6. 5μ；胞子紋は紫褐色；担子柄 40×13μ；稜嚢体は長棍棒形，65×6. 5μ；可食。

所在及産地

林地，野外，庭園地上—秋

北海道，本州—欧．北米．阿

和名 カバイロタケ（樺色茸）〔今井〕

Naematoloma bulbosa (IMAI)

ホテイシワツバタケ

Stropharia bulbosa IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:268. 1938.
(原，日．菌．目．356. 1954)

子実体は孤生；傘は径約 6 cm，丸山形，のち扁平となり，僅か圧低さる；表面は稍々粘性，速に乾燥，帯白色，帯黄色或は帯暗褐色，周縁は白色にて暗褐色鱗片を圧着す；肉は白色，厚し；褶は狭生，初め白色，のち紫灰色，甚だ密，稜は白色鈍鋸歯状；茎は約 6×1 cm，基部球根状に膨大し径 2 cm に及ぶを特徴とす，白色，絹様光沢あり，無毛，頂部僅か穀粉

状，充塞；鍔は白色，狭く，上面有溝，永存性；胞子は広楕円形，平滑，11—12.5×6—7.5μ；胞子紋は黒紫色。

所在及産地

野外草間—秋　北海道

和名 ホテイシワツバタケ（布袋皺鍔茸）〔今井〕

Naematoloma rugosoannulata (FARL.)

サケツバタケ

Stropharia rugosoannulata FARLOW, in MURRILL, Mycologia, 14:139. 1922—BURT, Icon. Farlowiana, pl. 65. 1929—OVERHOLTS, Mycologia, 22:243, pl. 30. 1930—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:268. 1938—PEARSON, Trans. Brit. Myc. Soc. 29:201, pl. 9, A; pl. 10, A-C. 1946.（原，日．菌．目．356. 1954）

Stropharia Ferri BRES. in FERRI, Natura, Milano, 19:17. 1928; Icon. Myc. 17:pl. 842. 1931—MÉTROD, Bull. Soc. Myc. Fr. 53:231. 1937—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:138. 1948.（今関，原色きのこ，pl. 21(右)．1942; 及土岐，林．試．研．報．87:55. 1956—川村，日．菌．図鑑，5:571, f. 545. 1954）

Naematoloma Ferrei SING. Agaricales, 503. 1949.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，60, f. 150, pl. 27, f. 150; pl. 68, f. 402. 1957）

子実体は弧生或は群生；傘は 3—17 cm，丸山形，のち扁平となり，遂に縁辺反転するに至る；表面は湿時稍々粘性，乾時光沢あり，密に赤褐色或は暗褐色の容易に剝ぎ得る繊維状鱗被を被むり，時に淡色の鱗片あり，或は内生繊維にて全面を被わる，周辺淡色にて，縁に初め明かなる白色膜片を有す；肉は白色，柔軟，寧ろ厚く，味及臭なし；褶は直生，初め帯白色，のち暗紫灰色となる，密，薄く，傘肉より広幅；茎は 3—15×0.5—2.5 cm，上方に漸細，鍔より上部は平滑，白色，下部は淡黄色，絹糸様繊維ありて光沢を有し，僅か有条，充塞或は中空，時に基端に白色根状束あり；鍔は2重，上位或は中位，白色或は帯黄色，狭幅，厚膜質，剝離し易く，縁は放射状に裂く；胞子は円壔状楕円形或は楕円形，平滑，12—14×7—8μ；胞子紋は紫褐色；稜及褶側嚢体は略ぼ同様，棍棒形にて先端に細き突起を有す，30—50×6—18μ；食毒不明。

所在及産地

草原地，耕地，塵芥及馬糞上—春～秋

北海道，本州—欧．北米

和名 サケツバタケ（裂鍔茸）〔今井〕

オオウラムラサキ（大裏紫茸）〔川村〕

f. **lutea** HONGO

キサケツバタケ

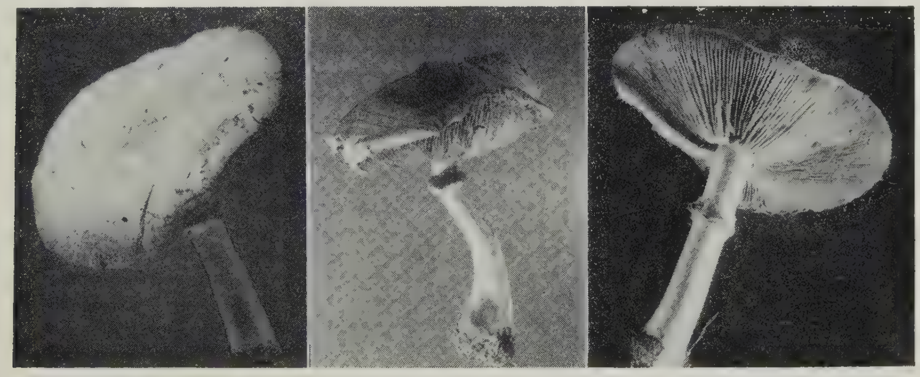
HONGO, Jour. Jap. Bot. 27:371, f. 2(1). 1952.（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，61. 1957）

原種より傘が汚黄色なるにより区別さる，顕微鏡的特徴は両者殆ど同様なり。

所在及産地

路傍草間に弧生—春　本州

和名 キサケツバタケ（黄裂鍔茸）〔本郷〕



第149図　サケツバタケ Naematoloma rugosoannulata　×1/3　（大谷氏）

Naematoloma hornemanni (FR. ex FR.) SING.

ツヅレタケ

SINGER, Agaricales, 503. 1949.

Agaricus depilatus PERS. Syn. Meth. Fung. 408. 1801—FRIES, Hymen. Eur. 283. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:137. 1876.

Agaricus Hornemanni FR. Syst. Myc. 1:285. 1821; Epicr. Myc. 218. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:410. 1857.

Agaricus Hornemanni β. depilatus FR. Syst.

Myc. 1:285. 1821.

Stropharia depilata KARST. Hattsv. 1:487. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 236. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:1012. 1887—HARPER, Trans. Wisc. Acad. Sci. Arts Lett. 17:1016, pl. 62-63. 1914—KAUFFMAN, Agar. Mich. 249. 1918—REA, Brit. Basid. 125. 1922—LANGE, Fl. Agar. Dan. 4:66. 1939.

Geophila depilata QUÉL. Enchir. Fung. 111. 1886—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 336. 1953.

Fungus squarrosus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):479. 1898.

Stropharia Hornemanni LUNDELL et NANNFELDT, Fung. Exs. Suec. 1:n. 19. 1934—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:269. 1938.

(原, 日. 菌. 目. 356. 1954)

子実体は弧生, 群生或はやや叢生; 傘は径 3—15 cm, 或はそれ以上に及び, 丸山形〜扁平, 或は広き中丘あり, 鈍頭; 表面は粘性, 無毛, 淡汚褐色にて菫色を帯ぶ, 縁は幼時内屈し, ベールの残物あり; 肉は緊緻, 帯白色, 縁以外は厚し, 臭なく, 味は幾分不良; 褶は直生し, 屢々垂下歯を有す, 初め淡色にて速に淡紫灰色或は灰色となり遂に紫黒色, 密, 広幅; 茎は 4—20×0.8—1.5 cm, 殆ど同幅, 鍔以上は白色〜淡黄色, 綿架状鱗片あり, 下部は白色或はクリーム黄色繊維状鱗片に被わる, 基部は屢々深く着生物中に埋まる, 充塞〜中空; 鍔は上位, 類膜質, 白色, 緊緻, 直立, のち垂下し黒褐色となる, 上面放射溝あり, 下面綿架状, 永存性; 胞子は楕円形, 平滑, 9—12×5—6.5 μ; 胞子紋は紫褐色; 稜嚢体は嚢状。

所在及産地

主に針葉樹腐株及その周囲—秋

北海道—欧. 北米

和名 ツヅレタケ (襤褸茸) 〔今井〕

Naematoloma sublateritium (FR.) KARST.

クリタケ

KARSTEN, Hattsv. 1:495. 1879—PATOUILLARD, Ess. Tax. 174. 1900—SINGER, Agaricales, 503. 1949.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 61, f. 152, pl. 27, f. 152. 1957)

Agaricus lateritium SCHAEFF. Fung. Bavar. 4:Ind. 22, pl. 49, f. 6-7. 1774. pr. p.—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 421. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:288. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:466. 1844—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:174. 1867.

Pratella lateritium S.F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:627. 1821.

Agaricus sublateritius FR. Epicr. Myc. 221. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:421. 1857; Hymen. Eur. 290. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 169. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:143. 1871; Illus. Brit. Fungi, pl. 557. (no. 572). 1886—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:140. 1876—WINTER, Pilze, 1:652. 1884.

Hypholoma sublateritium QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:143. 1872—GILLET, Champ. Fr. 572. c. ic. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:1028. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:380. 1892; Brit. Fungi, 329. 1911—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 62, f. 25. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 180. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 70, f. 162. 1910—HARPER, Trans. Wisc. Acad. Sci. Arts Lett. 17:1147, pl. 72. 1914—RICKEN, Blätterp. 248, pl. 65, f. 2. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 256. 1918—REA, Brit. Basid. 261. 1922—LANGE, Agar. Denm. 5:40. 1923—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 169, pl. 85. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 17:pl. 843. 1931—PARKER, Mycologia, 25:192, pl. 26, f. 8. 1933—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1:138. 1934—LANGE, Fl. Agar. Dan. 4:74. pl. 145, f. D. 1939—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:142. 1948—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 192, pl. 76, f. 1. 1950.

(川村, 植. 雑. 23:166, f. 1. 1909; Illus. Jap. Fungi, pl. 1, f. 24-26. 1912; 食用菌及有毒菌, 75, f. 21, 65. 1931—白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 291. 1917; ed. 3. 170. 1927—梅村, 富士. 植. 志. 373. 1923—松浦, 茸類辞典, 45, f. 43. 1933; 応用菌蕈学, f. 785 (p. 1167). 1941—小林, 日. 隠. 植. 図. 541, pl. 261, f. 4-7. 1939—牧野, 日. 植. 図鑑, 1023, f. 3068. 1940—原, 日. 菌. 目. 160. 1954)

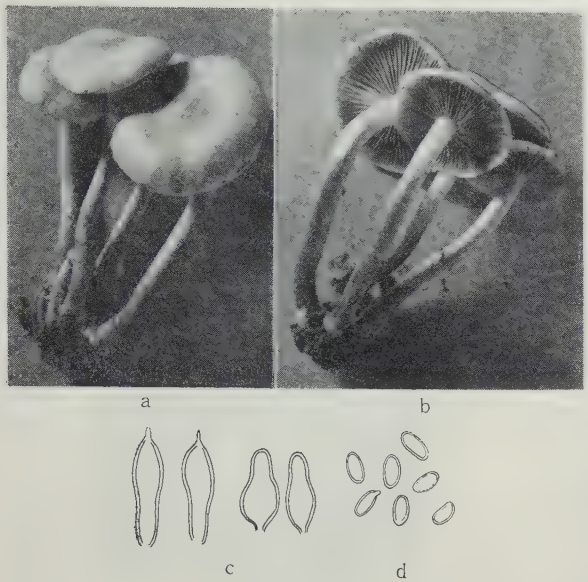
Geophila sublateritia QUÉL. Enchir. Fung. 113. 1886—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 335, f. 428. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 55, B. 1956.

Naematoloma lateritium KARST. Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 242. 1889.

Hypholoma lateritium SCHROET. Pilze Schles. 1:572. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:237. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):421, pl. 80. 1912—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 288. 1916—IMAI, Jour. Facul. Agr. 43:276, pl. 4, f. 9. 1938.

(P. HENNINGS, Hedwigia, 39, Beibl.:156. 1900—松村, 植. 名鑑, 1:148. 1904—白井, 日. 菌. 目. 43. 1905; ed. 2. 291. 1917; ed. 3. 169. 1927—今関, 原色きのこ, pl. 18(右). 1942; 及土岐, 林. 試. 研. 報. 67:43. 1954—川村, 日. 菌. 図鑑, 5:575, f. 548. 1954—原, 日. 菌. 目. 160. 1954—佐々木, 尾瀬ケ原, 552. 1954)

子実体は多数束生; 傘は径 3—10 cm, 或はそれ以



第 150 図　クリタケ Naematoloma sublateritium
a．子実体表面　　b．同嚢面 ×1/3
c．嚢状体　　d．胞子 ×700　　（大谷氏）

上に及び，半球形，のち丸山形となり，遂に扁平となる，鈍頭；表面は乾燥或は湿時僅か粘生，中央濃暗煉瓦赤色，周辺淡色にて黄色を帯ぶ，平滑，無毛なるも時に周辺に綿毛状鱗片を疎生す，縁は初め内屈し，屢々被膜の残片を有す；肉は厚く，緊緻，白色，のち帯黄色，味温和或は僅か苦く，臭微なり；褶は直生或は彎生，初め汚黄色，のち暗褐色，或は僅かオリーブ色を帯ぶ，密，寧ろ広幅；茎は 5—12×0.8—1.5 cm，下方或上方に漸細，時に同幅，上部帯黄色，下部傘面と同色にて繊維状或は鱗片状繊維を被むる，緊緻，屈曲，充塞，のち中空；鍔は上位，綿毛状，白色或は帯黄色，速に消失す；胞子は楕円形，平滑，6—8×4—5 μ；胞子紋は紫褐色；稜嚢体は小形，棍棒形；可食。

所在及産地

広葉樹切株，根際及埋木上一秋

北海道，本州一欧．北米．亜（小亜．支．西比）

和名　クリタケ（栗茸）〔古名〕

キジタケ（雉子茸）〔白井〕

アカンボウ（赤坊）〔方言〕

Naematoloma epixanthum (FR.) KARST.

カチグリタケ

KARSTEN, Hattsv. 1:495. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 243. 1889—PATOUILLARD, Ess. Tax. 174. 1900—SINGER, Agaricales, 503. 1949—HEIM, Champ. Eur. 2:464. 1957.

Agaricus epixanthus FR. Epicr. Myc. 122. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:422. 1857; Hymen. Eur. 291. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:143. 1871; Illus. Brit. Fungi, pl. 560 (no. 575). 1886—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:141. 1876—WINTER, Pilze, 1:651. 1884.

Hypholoma epixanthum QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:144. 1872—GILLET, Champ. Fr. 574. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 1029. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 823. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:381. 1892; Brit. Fungi, 330. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 237. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 180. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 420. 1912—REA, Brit. Basid. 262. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 17: pl. 846. 1931—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 277. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 143. 1948.

Geophila epixantha QUÉL. Enchir. Fungi, 113. 1886—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 335. 1953.

子実体は叢生；傘は径 3—7 cm，丸山形～扁平，鈍頭或は広中丘あり，時に中央圧低さる；表面は湿潤，淡黄色，通常中盤暗色，僅か絹糸状，のち平滑となる，縁に早失性の白色絹糸状ベールあり；肉は帯黄色，茎の基部は屢々銹色，臭不良；褶は彎状直生，黄白色或はシトロン黄色，のち灰色或は灰紫色，密，寧ろ広幅，稜に白色房毛あり；茎は 5—10×0.6—1 cm，殆ど同幅或は基部肥大，屢々圧辺，上部淡色，粉状，下部暗褐色，綿絮状繊維あり，中空；胞子は楕円形，平滑，7—8×4—5 μ；胞子紋は暗褐紫色；嚢状体は棍棒形にて鋭頭，36—40×9—12 μ。

所在及産地

切株及その周囲一秋　　北海道一欧

和名　カチグリタケ（勝栗茸）〔今井〕

Naematoloma fasciculare (HUDS. ex FR.) KARST.

ニガクリタケ

KARSTEN, Hattsv. 1:496. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 243. 1889—PATOUILLARD, Ess. Tax. 174. 1900—SINGER, Agaricales, 504. 1949—HEIM, Champ. Eur. 2:463, pl. 40, f. 2. 1957.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，62, f. 153, pl. 27, f. 153. 1957）

Agaricus lateritius SCHAEFF. Fung. Bavar. 4: Ind. 22, pl. 49, f. 1–5. 1774. pr. p.

Agaricus fascicularis HUDS. Fl. Angl. 2:615. 1778—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, 3: pl. 285. 1803—FRIES, Syst. Myc. 1:288. 1821; Epicr. Myc. 122. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:422. 1857; Hymen. Eur. 291. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:465. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 169, pl. 11, f. 1. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:175. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:144. 1871; Illus. Brit. Fungi, pl. 561. (no. 576). 1886; Handb. Austr. Fungi, 62. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:141. 1876—WINTER, Pilze, 1:651. 1884.

Pratella fascicularis S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:627. 1821.

Hypholoma fasciculare QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:144. 1872—GILLET, Champ. Fr. 573, c. ic. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:1029. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 823. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1:572. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:382. 1892; Brit. Fungi, 330, pl. 26, f. 11. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:237, f. 115, c. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 181. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 71, f. 163. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):421, pl. 80 B, f. 1–2. 1912—HARPFR, Trans. Wisc. Acad. Sci. Arts Lett. 17:1149, pl. 75. 1914—RICKEN, Blätterp. 249, pl. 65, f. 1. 1915—REA, Brit. Basid. 262. 1922—LANGE, Agar. Denm. 5: 40. 1923; Fl. Agar. Dan. 4:74, pl. 144, f. E. 1939—BRESADOLA, Icon. Myc. 17: pl. 847. 1931—PARKER, Mycologia, 25:194. 1933—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1:137, f. 24, A. 1934—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 278. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:142. 1948—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 192, pl. 76, f. 2. 1950.

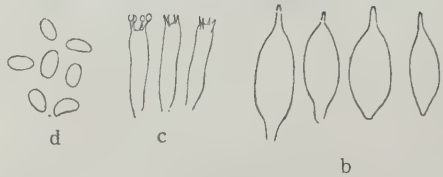
(P. HENNINGS, Hedwigia, 39, Beibl. 156. 1900; Bot. Jahrb. 32:40. 1903—松村, 植. 名鑑, 1:148. 1904—白井, 日. 菌. 目. 43. 1905; ed. 2. 289. 1917; ed. 3. 169. 1927—梅村, 植. 雑. 26:152. 1912—KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 16, f. 16–17. 1915; 日. 菌. 図説, n. 101. 1929; 食用菌及有毒菌, 70, f. 26, 66. 1931; 日. 菌. 図鑑, 5:577, f. 549. 1954—安田, 植. 雑. 37:205. 1923—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori. Soc. Agr. Sci. 3:115. 1931—松浦, 蕈類辞典, 129, f. 148–149. 1933; 応用菌蕈学, 1163, f. 628, 780(左)-781. 1941—小林. 日. 隠. 植. 図. 541, pl. 261, f. 1–3. 1939—S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soç. 16:51. 1940—今関, 原色きのこ, pl. 18(左). 1942—逸見及赤井, 木. 腐. 菌学, 429, f. 228. 1945—千葉及寺本, 東大. 演. 林. 報. 43:34. 1952—原, 日. 菌. 目. 160. 1954—今関及土岐, 林. 試. 研. 報. 67:43. 1954—佐々木, 尾瀬ケ原, 552. 1954)

Geophila fascicularis QUÉL. Enchir. Fung. 113. 1886—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 335, f. 295. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 55, A. 1956.

子実体は多数束生; 傘は径 2—5 cm, 丸山形にて, のち開張し, 鈍頭或は往々僅か中丘あり; 表面は淡黄色にて稍々緑色を帯び, 中央濃黄褐～淡赭褐色, 乾燥, 無毛, 平滑, 時に中央に放射状皺あり, 縁は初め内屈し, 屢々繊維状のベールの残物を附す; 肉は黄色, 薄く, 強き苦味あり; 褶は彎生, 初め硫黄色, のちオリーブ緑色, 遂にオリーブ暗褐色となる, 甚だ密, 幅 2—3 mm, 線形; 茎は 5—12×0.3—0.7 cm, 同幅, 傘面と同色, 無毛, 下方僅か繊維状, 屢々波曲或は基部屈曲上向す, 繊維質にて強靱, 中空; 鍔は上位, 綿毛状黄白色にて裂け易く速に消失す; 胞子は楕円或は卵形, 平滑, 6—7×3.5—4.5 μ; 胞子紋は紫褐色; 嚢状体は棍棒形, 30—40×7—10 μ; 有毒。



a



第 151 図　ニガクリタケ Naematoloma fasciculare
a. 子実体 ×1/2　b. 嚢状体
c. 担子柄　d. 胞子 ×500 (大谷氏)

所在及産地

古切株, 腐木及埋木上—夏秋　　全土—汎布

和名 ニガクリタケ (苦栗茸) 〔川村〕
ヤナギタケ (柳茸) 〔白井〕

Psilocybe (FR.) QUÉL. em. SING.
シビレタケ属

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:147. 1872—

SINGER, Agaricales, 504. 1949.

Agaricus trib. *Psilocybe* FRIES, Syst. Mycol. 1:289. 1821.

Agaricus subgen. *Psiolocybe* FRIES, Epicr. Myc. 225. 1838.

Pholiotella SPEGAZZINI, Bol. Acad. Cordoba, 11: 412. 1889.

傘は円筒状円錐形或は類球形乃至丸山形，鐘形，屢々中丘或は乳頭を有す；類粘性，粘性，吸水性或は乾燥等；上表皮層は細き無色糸状匍匐し幾分甚しく膠化する薄膜にて菌絆ある菌糸より成る；下表皮層は前層に比し幾分太き菌糸より成り，常に等径的なる細胞ならず，色素を有し，寧ろ厳密に放射状に配列す；中表皮層は傘肉の如く錯綜不整の菌糸より成る；被膜は僅かにて，傘縁部に繊維状をなし，屢々消失性，或は縁片となり，然らざれば欠如す；褶は広く，狭生～直生，往々僅か垂生歯を有す；稜囊体は存在；褶側囊体は存在或は欠如，然し黄金囊体は稜或は褶側の何れにも存在せず；托実質は類整型；胞子紋は濃ライラック～暗褐セピア色；胞子は2重膜にて発芽孔あり，平滑，小～大形；茎は乾燥，無毛或は繊維被を有し，屢々明かに能く発達せる鍔を有す，通常著しく伸長して狭き中空なるも或種にては太くして繊維状肉質，往々偽根を有す；肉は往々青変し，その時は monomethylparamidophenol に強く反応し，他の種に於ては不変にて反応なし；臭は大根或は穀粉様；すべての菌糸に菌絆あり；枝幹，泥土，腐蝕物，糞土，地上等に生ず；少くとも或種は半被実；殆ど汎布，約8種を知らる，毒性あり。

（本属名は psilos〔希〕（裸の），kybos〔希〕（六面体，骰子，頭）より出づ）

基準種　*P. semilanceata* (FR.) QUÉL.

本邦既知種検索表

A．肉は傷によりて変色せず；傘は湿時汚渋色～煉瓦色，径 2.5—5 cm；胞子 10—12.5×5—7.5 μ。
　　カワリコシワツバタケ　***P. merdaria*** (341)

B．肉は傷により変色す。

　a．傘は淡黄白色～淡柔皮色，径 1.5～6 cm；胞子 7—10.5×4.25—7 μ；有毒。
　　シビレタケ　***P. venenata*** (342)

　b．傘はオリーブ褐色，径 1—3 cm；胞子 9.5—11×5—6 μ；密に叢生。
　　アイセンボンタケ　***P. fasciata*** (342)

Psilocybe merdaria (FR.) RICKEN
カワリコシワツバタケ

RICKEN, Blätterp. 251, pl. 66, f. 1. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 274. 1918—SINGER, Agaricales, 506. 1949.

Agaricus merdarius FR. Syst. Myc. 1:291. 1821; Epicr. Myc. 220. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 415. 1857; Hymen. Eur. 286. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 200. 1883; Illus. Brit. Fungi, 4: pl. 537. (no. 565). 1886; Handb. Austr. Fungi, 62. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:139. 1876.

Stropharia merdaria QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:142. 1872—GILLET, Champ. Fr. 576, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:491. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 237. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:1020. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 810. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1:403. 1892; Brit. Fungi, 327. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 178. 1908—REA, Brit. Basid. 129. 1922—MURRILL, Mycologia, 14:138. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1: pl. 54, f. 2. 1930; Agaricales, 1:139. 1948—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1:136. 1934—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:271. 1938—LANGE, Fl. Agar. Dan. 4:68, pl. 143, f. c. 1939—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:139. 1948—HEIM, Champ. Eur. 2: 463. 1957.

（原，日．菌．目．356. 1954)

Fungus merderius O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):480. 1898.

Psalliota merdaria P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:238. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):425. 1912.

Stropharia merdaria var. *major* REA, Brit. Basid. 129. 1922.

（川村，日．菌．図鑑，5:573, f. 546. 1954)

Geophila merdaria KÜHN. et ROMAGN. Fl. Analyt. Champ. Super. 336. 1953.

子実体は群生或はやや叢生；傘は径 2.5—5 cm，丸山形にて，のち扁平，鈍中丘あり；表面は無毛，粘皮を有し，湿時汚渋色～煉瓦色，乾時黄土色，縁は消失性白色のベール残物を有す；肉は白色，中盤以外は薄し，臭は温和；褶は直生，茎上に微細線を垂下す，初め帯黄色のち紫褐色～暗褐色となる，やや密，甚だ広幅，水平；茎は 4—7×0.3—0.6 cm，同幅，強靱，上部白色，下部黄褐或は赤褐色，初め繊細なる綿絮状繊維あり，のち無毛，乾燥，充塞或は中空，基端往々主根状に伸長す；鍔は中位，不完全，裂け，茎に附着す；胞子は広楕円形，平滑，帯紫褐色，10—12.5×5—75. μ；胞子紋は帯紫褐黒色。

所在及産地

馬糞及施肥耕土上—秋

北海道，本州—欧．北米．濠．亜（小亜）

和名 カワリコシワツバタケ（変小皺鍔茸）〔今井〕

アシナガウラムラサキ（足長裏紫茸）〔川村〕

Psilocybe venenata (IMAI) IMAZ. et HONGO

シビレタケ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 32:146. 1957.
（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，60, pl.26, f. 148.1957）
Stropharia caerulescens IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 12:148, f.1. 1932.(non(PAT.)SING.)
（松浦，茸類辞典，181, f. 213. 1933；応用菌蕈学，820, f. 631-632. 1941）
Stropharia venenata IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:270, pl. 4, f. 8. 1938.
（原，日．菌．目．356. 1954）

子実体は群生或は叢生；傘は径 1.5—6 cm，或はそれ以上に及び，類円錐形或は丸山形，やや中丘を有し，遂に扁平となり，縁部僅か反転す；表面は湿時僅か粘性，初め淡黄白色或は淡桃白色～帯褐柔皮色，のち淡色となる，無毛，平滑，周辺殆ど無線条；肉は帯白色或は灰色，傷時青空色に変ずるを特徴とす，味及臭なし；褶は直生或は狭生，帯白色或は汚黄色，のち紫褐色となる，密，稜に白色綿絮あり；茎は 3—9×0.5—0.9 cm，同幅，屢々圧辺され，平坦ならず，絹状白色，乾燥，鍔より以下特に繊維状，充塞或は中空，基端に白色偽根を有す；鍔は上位，膜質或は繊維質，甚だ薄く，白色，絹状，早失性；胞子は橢円形，類紡錘形或は広橢円形，平滑，7—10.5×4.25—7 μ；胞子紋は紫褐色；嚢状体なし；有毒。

所在及産地

腐木，腐稈及馬糞上—春～秋　　北海道，本州

和名 シビレタケ（痺茸）〔今井〕

「因記」 SINGER 氏は青変菌 *Psoilocybe cubensis* (EARLE)SINGER＝*Naematoloma caerulescens* PAT. と同一菌とせるも本菌と異り胞子著しく大形（13—16×9—10 μ）なり。

Psilocybe fasciata HONGO

アイセンボンタケ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 32:144, f. d-f. 1957; Bull. Fac. Lib. Arts Educ. Shiga Univ. 7:43. 1957.

子実体は密に叢生；傘は径 1-3 cm，円錐状鐘形～丸山形，粘性，無毛，やや吸水性，オリーブ褐色，湿時僅か線条あり，縁は屢々不正形；肉は薄く，同色，傷により青変す，無味無臭；褶は直生～やや垂生，やや疎，淡色～暗褐紫色，幅 1.5—3.5 mm，稜に白毛あり；茎は 5—7×0.2—0.4 cm，同幅或は上方にやや狭細，中空，乾燥，白色，絹毛あり，頂部粉状，触るれば青変す，基部粗豪；被膜は白繊維状，早失性；胞子紋暗褐紫色；胞子は苛性加里にて淡褐色，橢円形～僅か卵形，平滑，無色の頂発芽孔あり，9.5—11×5—6 μ；担子柄は無色，4 胞子，19—22×7—7.5 μ；稜嚢体は多生，稜上に無性帯を作る，21—28×6.5—8 μ，便腹状にて細頸を有し，先端やや鋭く，無色；膠質外皮よく発達し，細き（2.5—3.5 μ）無色菌糸より成る；菌絆あり。

所在及産地

地上—秋　　本州

和名 アイセンボンタケ（藍千本茸）〔本郷〕

疑問種

Agaricus porphyrophyllus BERK. et CURT. Proc. Am. Arts Sci. 4:118. 1860. (MIQUEL, Prol. Fl. Jap. 392. 1867—白井，日．菌．目．ed. 2. 33. 1917; ed. 3. 13. 1927—原，日．菌．目．9. 1954)＝*Stropharia* SACC. Syll. Fung. 5:1019. 1888＝*Fungus* O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2):479. 1898＝*Psalliota* P. HENN. in ENGLER-PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:238. 1900.（松村，植．名鑑，1:165. 1904—原，日．菌．目．285. 1954）

Psilocybe uda (P. HENNINGS, Bot. Jahrb. 32:40. 1902—松村，植．名鑑，1:165. 1904—白井，日．菌．目．76. 1905; ed. 2. 501. 1917; ed. 3. 307. 1927—原，日．菌．目．286. 1954）

Melanotus PAT.

PATOUILLARD, Ess. Tax. 175. 1900—SINGER, Agaricales, 510. 1949.

傘は褐色或は褐赤色，乾時屢々殆ど帯白色；褶は直生；胞子は僅か扁豆形或は全く扁豆形ならず，長さ 9 μ 以下，胞子紋は濃菫色或は紫暗褐色～暗褐セピア色；褶側嚢体なく，稜嚢体は多生にて稜を異質とす；托実質は整型～類整形；茎は常に傘径より短く，常に屈曲し，通常偏心生にて屢々傘縁に接着す，時に著しく退化して殆ど欠如す；肉は菌絆を有する薄膜非糊性の菌糸より成り，非膠性；植物残屍，材及建築材上；多くは亜熱帯及熱帯産，約 10 種を知らる。

（本属名は melas〔希〕（黒色），ous, otos〔希〕（耳）より出づ）

基準種　*M. bambusinus* PAT.

本邦既知種　　*M. flavolivens* (343)

Melanotus flavolivens (BERK. et CURT.) SING.

SINGER, Agaricales, 511. 1949.

Agaricus flavolivens BERK. et CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4:117. 1860.

Crepidotus flavolivens SACC. Syll. Fung. 5:887. 1887.

（松村，植. 名鑑，1:138. 1904—白井，日. 菌. 目. 26. 1905; ed. 2. 179. 1917; ed. 3. 106. 1927—原，日. 菌. 目. 94. 1954)

Derminus flavolivens P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 240. 1900.

傘は扇形，黄色，粉状；茎は欠如；褶は狭く，紫白色。

所在及産地

枯木上—秋　　小笠原島

〔**因記**〕 著者等は小笠原島に於て本菌を採集し得ざりしにより，ここには原記載を訳して揚ぐ。

(II) Pholiotoideae SINGER スギタケ亜科

SINGER, Ann. Myc. 34:341. 1936; Agaricales, 511. 1949—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:179. 1938.

胞子紋は肉桂褐色，濃銹肉桂色，銹暗褐色；胞子はアンモニア液にて通常蜜色を呈す。

SINGER 氏 (1949) は3属を収む。

属検索表

A. 傘は鱗片を被むり；或は黄金嚢体を有す；傘は真の吸水性なく；茎は中心生。

スギタケ属 Pholiota (343)

B. 傘は鱗片なし；黄金嚢体は通常欠如；傘は全部強く吸水性；茎は中心生；傘の平均幅より長し；胞子は明かなる発芽孔ありて截頭；胞子膜は蜜色。

センボンイチメガサタケ属 Kuehneromyces (353)

Pholiota (FR.) QUÉL.

スギタケ属

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:124. 1872—SINGER, Agaricales, 512. 1949.

Agaricus trib. *Pholiota* FRIES, Syst. Mycol. 1: 240. 1821.

Agaricus trib. *Flammula* FRIES, Syst. Mycol. 1:250. 1821.

Flammula QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:129. 1872. (non D. C. 1818)

Dryophila subgen. *Pholiota* QUÉL, Enchir. Fung. 66. 1886.

Flammopsis FAYOD, Ann. Sci. Nat. Bot. VII, 9:356. 1889.

Visculus EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5:437. 1909.

Hypodendrum PAULET ex EARLE, l. c. 445. 1909.

傘は鱗片を被むり，或は裸，粘性或は乾燥，非吸水性；褶は種々に附着し，屢々彎生或は狭生；托実質は幼品にては整型；胞子紋は屢々明かなる銹色彩を有するもコガサタケ (*Conocybe*) 或はチャツムタケ (*Gymnopilus*) の如きは鮮銹色にあらず，かくの如く幾分色彩に於て変化するも帯紫暗褐色或はライラック色ならず；胞子は蜜色～黄褐色（アンモニア液にて)；稀に苛性加里にて暗褐色；平滑，橢円状円壔形或は橢円状紡錘形～短橢円形，狭くして屢々不明瞭なる発芽孔を有す；黄金嚢体存在或は鱗片を有する或種に於てはこれを欠く；稜嚢体は常に存在す；茎は鱗片を被むり或は裸，乾燥或は粘性，中心生；被膜は屢々傘縁片或は鍔を作り，又両者を共存す；肉は屢々苦味，菌糸は屢々アンモニアに溶ける細胞間隙の鮮黄色の色素によつて染色さる，常に多数の菌絆を有す；生或は死木上，林内植物残屍上，稀に林外草根上等に生ず，半被実；温帯産多し，約30種を知らる，4亜属に分たる，本邦3亜属あり；多くは強力なる寄生菌にて木材腐蝕を起す，或種は食用とされ，市場価値あるものはナメコ一種なり。

（本属名は pholis〔希〕(鱗) より出づ)

基準種 *P. squarrosa* (PERS. ex FR.) QUÉL.

本邦既知亜属及種検索表

A. 褶側嚢体欠如，或は稀に散生するも黄金嚢体ならず，又黄色～銹蜜色の樹脂様被覆物を被むらず。

(1) シブイロスギタケ亜属 **Hemipholiota** (344)

B. 褶側嚢体は稀生或は多生，その最も広き部分に強く光を屈折する無定形物を存し，アンモニアによりて黄色となる，又嚢状体全内容は屢々クレシール青にて青色となり，更に又黄～濃蜜銹色の樹脂様被覆物を被むる。

a. 傘は大～小の鱗片，鱗被を有す；茎も亦屢々鱗片あり；鍔を有するも往々不明瞭のことあり；胞子の大さ種々あり；通常生死材上生にて地上生のもの甚だ少し。

(2) スギタケ亜属
Pholiota(*Eupholiota*) (344)
b．傘面無毛，被膜の綿絮状残物を存するものも老時脱落して裸となる；茎も亦被膜の残物を除けば鱗片なし；胞子通常小形(10.5μ以下)；地上，腐木，稀に生木の傷部及根際に生ず。
(3) ツムタケ亜属 Flammula (344)

(1) シブイロスギタケ亜属 Hemipholiota
傘は多少粘性；胞子の先端やや鋭頭—傘は寧ろ大形，粘性，黄褐～煉瓦色，やや直立する褐～黒色の鱗片を被むる；胞子長さ 10—13μ；ニレ等幹上生。
シブイロスギタケ ***P. albocrenulata*** (344)

(2) スギタケ亜属 Pholiota(*Eupholiota*)
A．傘は粘性ならず。
a．材上生。
α．傘の鱗片は硫黄色。
ハナガサタケ ***P. flammans*** (345)
β．傘の鱗片は赤褐色。
スギタケ ***P. squarrosa*** (346)
b．地上生；傘の鱗片は肉桂色。
ツチスギタケ ***P. terrestris*** (347)
B．傘は粘性。
a．傘面に直立尖頭栗褐色鱗片を有す；胞子長さ 4—6μ。
スギタケモドキ ***P. squarrosoides*** (347)
b．傘面に圧着せる類三角形の銹褐色鱗片あり。
α．胞子は長さ約 7μ 以下；ブナ其他に生ず。
ヌメリスギタケ ***P. adiposa*** (347)
β．胞子は長さ約 8μ 以上；ヤナギ其他に生ず。
ヌメリスギタケモドキ ***P. aurivella*** (348)

(3) ツムタケ亜属 Flammula
A．傘は湿潤或は乾燥にて，やや粘性を帯ぶることあるも剝ぐるが如き粘被なし；ベールは通常貧弱にて鱗片なし。
a．傘は帯褐赤色或はサフラン赤色，周辺黄色，径 3—8cm；茎は黄色。
アカツムタケ ***P. astragalina*** (349)
b．傘は淡黄褐色或は灰褐色，径約 2cm；茎は肉桂色。 ニセムクエタケ ***P. abstrusa*** (350)
B．傘は粘性或は膠性の粘被を有し，屢々ベールの残物たる早失性帯白小鱗片を有す。
a．茎は初め白色。
α．傘は 3—8cm，汚白色～柔皮色，中央僅か暗色；茎に逆生の白色鱗片あり。
シロナメツムタケ ***P. lenta*** (350)
β．傘は 4—10cm，煉瓦赤色或は鮮肉桂色，中央渋色；茎に鱗片なし。
チャナメツムタケ ***P. lubrica*** (351)
b．茎は初期にても白色ならず。
α．傘は 3—7cm，硫黄色，往々緑味を帯び中央黄褐色。
キナメツムタケ ***P. spumosa*** (352)
β．傘は 1—4cm，赤暗褐色，中央銹黄色；焼跡材上及周囲に生ず。
ヤケアトツムタケ ***P. carbonaria*** (352)

(1) Hemipholiota SING.
シブイロスギタケ亜属

Pholiota albocrenulata (PECK) SACC.
シブイロスギタケ

SACCARDO, Syll. Fung. 5:760. 1887—HARPER, Trans. Wisc. Acad. Sci. Arts Lett. 17:490, pl. 42—43. 1913—KAUFFMAN, Agar. Mich. 301. 1918—OVERHOLTS, Ann. Missouri Bot. Gard. 14:150, f. 120—126, pl. 19. 1927—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:191, pl. 4, f. 3. 1938—SINGER, Agaricales, 515. 1949. (原, 日. 菌. 目. 250. 1954)

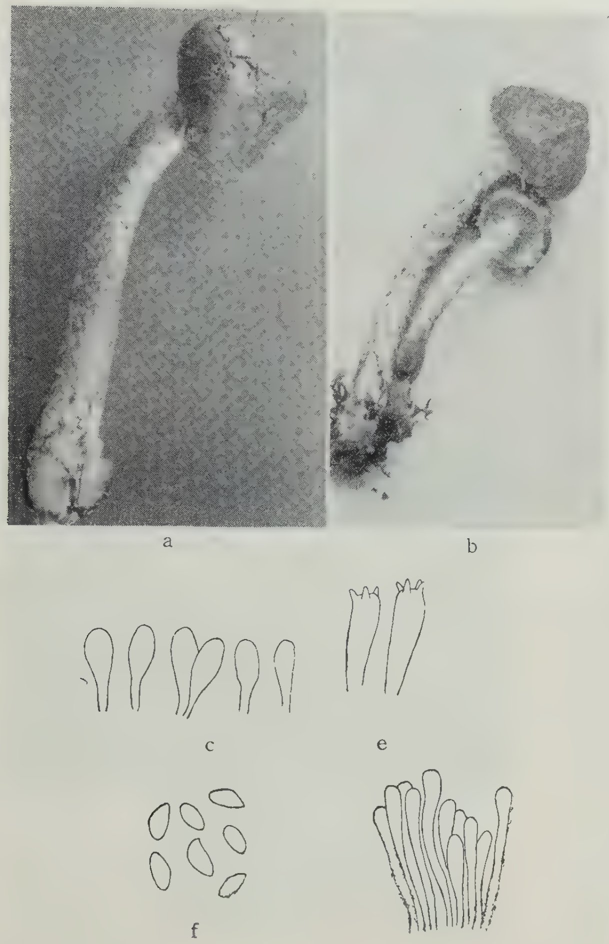
Agaricus albocrenulatus PECK, Bull. Buffalo Soc. Nat. Sci. 1:49. 1873.

Pholiota fusca QUÉL. Champ. Jura Vosg. Suppl. 4:327, pl. 3, f. 12. 1876.

Hypodendrum albocrenulatum OVERH. N. Am. Fl. 10:281. 1932.

Dryophila fusca KÜHN. et ROMAGN. Fl. Analyt. Champ. Super. 327. 1953.

子実体は弧生或は 2—3 叢生；傘は径2.5—12cm，緊緻，円錐状鐘形～丸山形，屢々中丘を有し，最後に殆ど扁平となる；表面は帯黄褐色～赤褐色或は汚褐色，周辺淡色，中丘或は中央暗色，粘性，直立或は稍々直立する褐色或は帯黒色の容易に剝脱する綿絮鱗片を有し，老時往々鱗片なし，縁は平坦，遂に反転し，屢々一部に淡肉桂色の綿絮状膜質のベール残物を存す；肉は帯白色，厚し；褶は垂下歯を有して直生或は彎状直生，灰色或は帯黄色，銹色或は肉桂褐色，密，広幅，稜に明かなる白色鈍鋸歯ありて乾時少くとも一部に残存す；茎は 5—15×0.5—1.5 cm，同幅或は基部幾分肥大，鍔より上部は白色或は帯褐色にて粉状，下部は夥多の纖維状鱗片に被われ肉桂色或は汚肉桂色，中空；鍔は頂位，早失性；胞子は紡錘状楕円形或は広楕円形， 平滑， 10—13×6



第152図　シブイロスギタケ Pholiota albocrenulata
a．b．子実体 ×1/3　　c．嚢状体　　d．稜嚢体
e．担子柄　　f．胞子 ×600　　（大谷氏）

--7.5μ; 胞子紋は銹色; 嚢状体なし。

所 在 及 産 地

広葉樹, 殊にニレ生幹上一夏秋

北海道, 本州一欧. 北米

和 名　シブイロスギタケ（渋色杉茸）〔今井〕

(2) Pholiota (*Eupholiota* LANGE, 1938) スギタケ亜属

Pholiota flammans (FR.) QUÉL.
ハナガサタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 4:3. 1876—KARSTEN, Hattsv. 1:301. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 163. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:753. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:224. 1893; Brit. Fungi, 259. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 129. 1908—HARPER, Trans. Wisc. Acad. Sci. Arts. Lett. 17:488, pl. 41, f. c. 1913—RICKEN, Blätterp. 196, pl. 55, f. 5. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 306. 1918—LANGE, Agar. Denm. 4:10, f. 13. 1921; Fl. Agar. Dan. 3:56, pl. 109, f. c. 1938—REA, Brit. Basid. 120. 1922—OVERHOLTS, Ann. Missouri Bot, Gard. 14:148, f. 116—119, pl. 19. 1927—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:192. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:157. 1948—SINGER, Agaricales, 515. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 145, pl. 56, f. 2. 1950—HEIM, Champ. Eur. 2:376, f. 257. 1957.

(KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 10, f. 11—12. 1914; 日. 菌. 図説, n. 61. 1929; 日. 菌. 図鑑, 5:552, f. 533. 1954—白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 429. 1917; ed. 3. 258. 1927—原, 日. 菌. 目. 250. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 68. 1957)

Agaricus flammans BATSCH, Elench. Fung. 87, pl. 7, f. 3. 1873—FRIES, Syst. Myc. 1:244. 1821; Epicr. Myc. 167. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:315. 1857; Hymen. Eur. 222. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:485. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 151. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:108. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3: pl. 368(no. 396). 1886—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:117. 1876—WINTER, Pilze, 1:698. 1884.

Dryophila flammans QUÉL. Enchir. Fung. 68. 1886—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 327. 1953.

Hypodendrum flammans MURR. Mycologia, 4:261. 1912—OVERHOLTS, N. Am. Fl. 10:278. 1932.

子実体は叢生, 群生或は孤生; 傘は径 2—10 cm, 丸山形, のち扁平, 往々中丘を有す; 表面は乾燥, レモン黄色或は渋黄色, 幾分同心円状に配列する硫黄色の表生綿架状繊維の鱗片を有す, 老時鱗片は大部分剝失す, 縁にベールの残物あり; 肉は硫黄色, 薄く或は厚く, 緊緻; 褶は直生或は僅か波曲, 黄色, のち銹色, 密, 狭幅, 薄し; 茎は 4—8×0. 4—1. 2 cm, 同幅, 時に波曲, 黄色にて, 黄色の反転せる綿架状鱗片を以て鍔より下部を蔽わる, 乾燥, 充塞のち中空; 鍔は頂位, レモン黄色, 綿架質, 早失性; 胞子は円壔形, 平滑, 褐色, 3—6×2—3μ; 胞子紋は銹色; 嚢状体は多生, 壜形或は棍棒状紡錘形, 褐色或は無色。

所在及産地

枯木，切株上—秋

北海道，本州—欧. 北米. 亜(小亜)

和名 ハナガサタケ（花笠茸）〔川村〕

Pholiota squarrosa (MÜLL. ex FR.) QUÉL.

スギタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:126. 1872—GILLET, Champ. Fr. 441. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:298. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 163. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:749. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 689. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1:611. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:220. 1893; Brit. Fungi, 259, pl. 21, f. 3. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:252, f. 119, A. 1900—PATOUILLARD, Ess Tax. 168. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 128. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 61, f. 137. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 541. 1912—RICKEN, Blätterp. 195, pl. 54, f. 3. 1915—LANGE, Agar. Denm. 4:9, f. 12. 1921; Fl. Agar. Dan. 3:56, pl. 110, f. D, D′. 1938—REA, Brit. Basid. 117. 1922—OVERHOLTS, Ann. Missouri Bot. Gard. 14:157, f. 143—145, pl. 21. 1927—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 144, pl. 71. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 14:pl. 697. 1930—PILÁT, Bull. Soc. Myc. Fr. 51:390. 1935; 52:322. 1936—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:193. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:156. 1948—SINGER, Agaricales, 515. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 144, pl. 54, f. 2. 1950—HEIM, Champ. Eur. 2:376, f. 256. 1957.

(KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 8, f. 13—14. 1913; 日. 菌. 図鑑, 5:532, f. 523. 1954—白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 429. 1917; ed. 3. 258. 1927—松浦, 茸類辞典, 137, f. 158. 1933; 応用菌蕈学, f. 334(p. 425). 1941—小林, 日. 隠. 植. 図. 537, pl. 259, f. 2—4. 1939—今関, 原色きのこ, pl. 11(右). 1942; 及土岐, 林. 試. 研. 報, 87:53. 1956—原, 日. 菌. 目. 250. 1954—松田及本郷, 植. 研. 雑. 30:259. 1955—佐々木, 尾瀬ヶ原, 552. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 63, pl. 28, f. 156. 1957)

Agaricus floccosus SCHAEFF. Fung. Bavar. 4: Ind. 27, pl. 61. 1774—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, 3:pl. 284. 1803.

Agaricus squarrosus MÜLL. Fl. Dan. pl. 491. 1783—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 268. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:243. 1821; Epicr. Myc. 165. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:310. 1857; Hymen. Eur. 221. 1874—RAEBNHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:486. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 150. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2: 165. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:107. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3:pl. 367(no. 391). 1886—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:116. 1876—WINTER, Pilze, 1:699. 1884.

(白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 35. 1917; ed. 3. 13. 1927—原, 日. 菌. 目. 9. 1954)

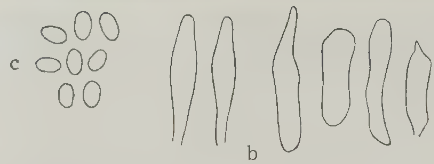
Dryophila squarrosa QUÉL. Enchir. Fung. 68. 1886—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 328, f. 418. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 57. 1956.

Hypodendrum floccosum OVERH. N. Am. Fl. 10:280. 1932.

子実体は通常叢生；傘は径 3—10 cm, 鐘形～丸山形, のち扁平となり, 低き中丘を有す；表面は黄土色～黄銹色，反転せる暗赤褐色のむく毛状鱗片に被わ



a



第 153 図 スギタケ Pholiota squarrosa
a. 子実体 ×1/2 b. 嚢状体 c. 胞子 ×400
(大谷氏)

る, 乾燥, 縁にベール残物あり；肉は帯黄色, 味及臭温和；褶は彎状直生或は垂下歯を有して直生, 藁黄色, のち銹色，密，幅 3—6 mm；茎は 5—20×0. 5—1. 6 cm，同幅，或は下方に漸細，鍔より上部は平滑, 帯黄色，下部は密集せる反転暗色階段状をなす鱗片に蔽わる，中実；鍔は上位，小形，暗褐色，繊維質にて屢々裂け，永存性；胞子は円壔或は楕円形, 平滑, 6—8×3. 5—5 μ；胞子紋は銹色；嚢状体は 2 型あり，無色にて多生，便腹状棍棒形，鈍頭或は鋭頭にて突出せるものと，褐色にて鈍頭或は截頭にて多くは突出せるものとあり；可食。

所在及産地

広葉樹枯幹及切株上—夏秋

北海道，本州—欧. 北米. 阿. 亜(西比)

和名　スギタケ（杉茸）〔川村〕

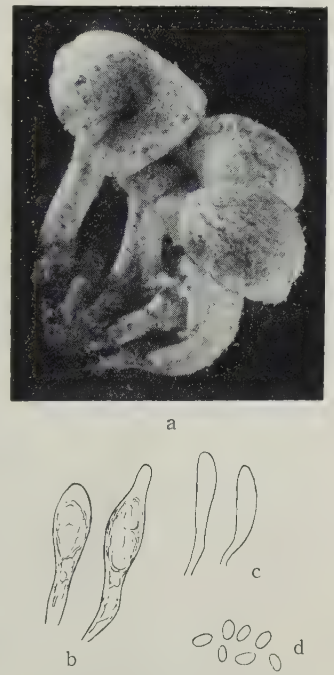
〔因記〕

var. *verruculosa* (LASCH ex FR.) GILL.—Auct. plur.（川村，日．菌．図鑑，5:533，f. 524．1954．ヒメスギタケ）は傘面濃黄色にて赤褐色の鱗片を有し，茎に軟毛状鱗被を有する等の性質により一変種として取扱うもの多きも，只その一形に過ぎざるものの如く，且つ固定性ありや否や疑問とせらる，従つて更に後来の研究をまつ。

Pholiota terrestris OVERH.
ツチスギタケ

OVERHOLTS, N. Am. Fl. 10:268. 1924; Ann. Missouri Bot. Gard. 14:126, f. 65-67. 1927—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:189. 1938.

子実体は叢生或は群生；傘は径 2—8 cm，丸山形或は類円錐形，のち開張す，鈍頭；表面は乾燥，クリーム色或は藁黄色にて肉桂色或は汚肉桂色の三角形繊維状鱗片を有す，鱗片は中央部に於ては直立し，周辺に於ては圧着す；肉は帯黄色，味及臭温和；ベールは綿架状膜質，明かなる鍔を作らずして往々傘縁に相当附着す；褶は直生或は狭生にて小垂下歯を有し，又は稍々彎生，初め帯黄色，後オリーブ銹色，密；茎は 2.5—8×0.3—1.3 cm，同幅，傘面と同色，尖頭の肉桂色或は汚肉桂色の繊維状鱗片を被むる，鍔より上部は帯白色或は帯黄色にて稍々粉状，充塞，のち中空；鍔は薄く，繊維質，裂く；胞子は円壔状楕円形，平滑，5.5—6.5×3.5—4.5 μ；胞子紋は銹色；嚢状体は諸形あり，或物は黄褐色或は黄褐色塊を包む；可食。



第 154 図　ツチスギタケ
Pholiota terrestris
a．子実体 ×1/2　b．黄金嚢体
c．嚢状体　d．胞子 ×500
（大谷氏）

所在及産地

林間及草原地上—夏秋　北海道，本州—北米

和名　ツチスギタケ（土杉茸）〔今井〕

Pholiota squarrosoides (PECK) SACC.
スギタケモドキ

SACCARDO, Syll. Fung. 5:750. 1887—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:253. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 152, f. 148. 1903—HARPER, Trans. Wisc. Acad. Sci. Arts Lett. 17:486, pl. 36-37. 1913—KAUFFMAN, Agar. Mich. 299. 1918—MURRILL. Mycologia, 11:290, pl. 13, f. 2. 1919—OVERHOLTS, Ann. Missouri Bot. Gard. 14:155, f. 139-142, pl. 22. 1927—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:190. 1938.

（原，日．菌．目．251. 1954—川村，日．菌．図鑑，5: 535，f. 525．1954）

Agaricus squarrosoides PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 31:33. 1879.

Hypodendrum squarroides OVERH. N. Am. Fl. 10:278. 1932.

子実体は多数叢生；傘は径 3—13 cm，初め類球形，のち丸山形～扁平となる；表面は粘性，淡色にて，通常淡桃柔皮～淡褐柔皮色，直立尖頭の肉桂色～栗褐色の鱗片に蔽わる，鱗片は中央に於て密生し，周辺にて疎或は欠如す；肉は帯白色或は僅か黄色を帯び，厚く，味及臭なし；褶は彎状直生，帯白色，のち肉桂色，密，幅 4—7 mm；茎は 5—15×0.5—1.4 cm，同幅，帯褐色，鍔より上部は帯白色にて無毛，下部は多数の淡肉桂色或は肉桂色の厚き綿架状鱗片を有す，中実或は充塞；鍔は綿架状膜質，淡褐柔皮色，早失性；胞子は楕円形或は円壔形，平滑，4—6×3—4 μ；胞子紋は銹褐色；嚢状体に 2 型あり，無色尖頭にて少しく突出するものと帯黄色の内容を有し鈍頭或は鋭頭のものとあり；可食。

所在及産地

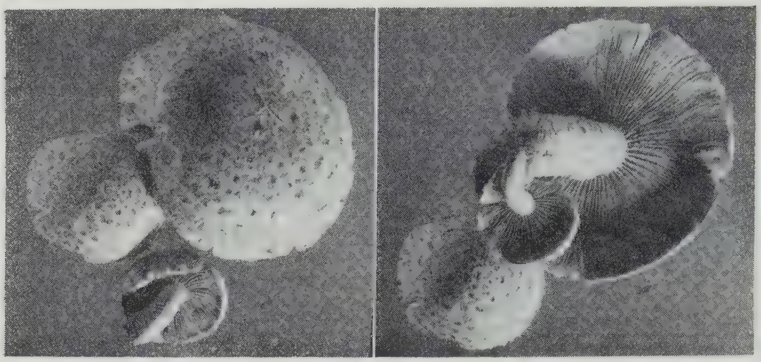
広葉樹幹及切株上—秋

北海道，本州—北米．亜（支）

和名　スギタケモドキ（擬杉茸）〔今井〕

Pholiota adiposa (FR.) QUÉL.
ヌメリスギタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:126. 1872—GILLET, Champ. Fr. 442. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:300. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:752. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 685. 1916—SCHROETER,



第 155 図　ヌメリスギタケ Pholiota adiposa　×1/3　（大谷氏）

Pilze Schles. 1:612. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:251. 1900—MURRILL, Mycologia, 1:83. pl. 7, f. 1-2. 1909—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):540. 1912—RICKEN, Blätterp. 194. 1915—LANGE, Agar. Denm. 4:9, f. 10. 1921; Fl. Agar. Dan. 3:54, pl. 107, f. A. 1938—KONRAD, Bull. Soc. Myc. Fr. 43: 153. 1927; et MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1:pl. 75. 1928; Agaricales, 1:156. 1945—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:191. 1938—SINGER, Agaricales, 515. 1949—HEIM, Champ. Eur. 2:376. 1957. (non Auct. nonnull. = *P. aurivella*)

(KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 8, f. 15-16. 1913; 食用菌及有毒菌, f. 48 (p. 40). 1931; 日. 菌. 図鑑, 5:536, f. 526. 1954—白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 427. 1917; ed. 3. 258. 1927—笠井, 鉄道大臣官房研究所, 業務研究資料, 19(37):1-27. 1931—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3:115. 1931—松浦, 茸類辞典, 33, f. 30. 1933; 応用菌蕈学, 398, 429, f. 330-332. 1941—IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 47:385. 1933—今関, 原色きのこ, pl. 11(左). 1942—逸見及赤井, 木. 腐. 菌学, 427, f. 226-227. 1945—本郷, 植. 研. 雑. 27:191. 1951—千葉及寺本, 東. 大. 演. 林. 報. 43:34. 1952—原, 日. 菌. 目. 250. 1954—今関及土岐, 林. 試. 研. 報. 67:46. 1954—佐々木, 尾瀬ヶ原, 552. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 63, f. 165, pl. 28, f. 165; pl. 68, f. 400. 1957) (non Auct. nonnull. = *P. aurivella*)

Agaricus adiposus FR. Syst. Myc. 1:243. 1821; Epicr. Myc. 166. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:312. 1857; Hymen. Eur. 222. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:486. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 151, pl. 8, f. 2. 1860—WINTER, Pilze, 1:698. 1884.

Dryophila adiposa QUÉL. Enchir. Fung. 68. 1886—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 328, f. 296. 419. 1953.

子実体は叢生或は孤生；傘は径 8—12 cm，丸山形，のち開張し，鈍き中丘あり；表面は膠性，乾時光沢あり，シトロン黄色～黄金黄色，中央黄褐色，扁平にて圧着せる類三角形銹褐色の鱗片を多少同心円状に散生す，鱗片は中央に於て密，老時脱落す，縁は初め内屈し，繊維状ベールを附す；肉は淡黄色，茎に於て黄色，基部僅か銹色，繊維状肉質，味温和，臭なし；褶は狭生，黄色，のち汚黄褐銹色，稍々密，広幅，稜は異質；茎は長くして 15 cm に及び，同幅，或は基部寧ろ細し，表面はシトロン黄色～銹褐色，基部濃色，鍔より下部は傘面同様の鱗片に被わる，膠性，屈曲斜上，充塞のち中空；鍔は蜘網膜状にて，同色，早失性；胞子は楕円状卵形，平滑，5—6.5×3—4 μ；胞子紋は銹色；稜嚢体は棍棒形或は紡錘形，20—30×6—9 μ；可食。

所 在 及 産 地

ブナ等の切株，枯幹及その周囲—春～秋

北海道，本州—欧. 北米. 亜(小亜)

和 名　ヌメリスギタケ（滑杉茸）〔川村〕

Pholiota aurivella (BATSCH ex FR.) QUÉL.

ヌメリスギタケモドキ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 2:346. 1873—GILLET, Champ. Fr. 441, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:297. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 168. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:748. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 690. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1:611. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:253. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):540. 1912—RICKEN, Blätterp. 195. pl. 54, f. 2. 1915—LANGE, Agar. Denm. 4:9, f. 11. 1921; Fl. Agar. Dan. 3: 55, pl. 108. f. D. 1938—REA, Brit. Basid. 117. 1922—KONRAD, Bull. Soc. Myc. Fr. 41:46. 1925; & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1:pl. 74. 1926; Agaricales, 1:156. 1948—SINGER, Agaricales, 515. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 145, pl. 54, f. 1. 1950—HEIM, Champ. Eur. 2:378, f. 80(7). 1957.

(今関及土岐. 林. 試. 研. 報. 79:5, f. 6. 1955)

Agaricus aurivellus BATSCH, Elench. Fung. Cont. 1:23, f. 115. 1786—FRIES, Syst. Myc. 1:242. 1821; Epicr. Myc. 165. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:311. 1857; Hymen. Eur. 220. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:486. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 150. 1860—KICKX, Fl.

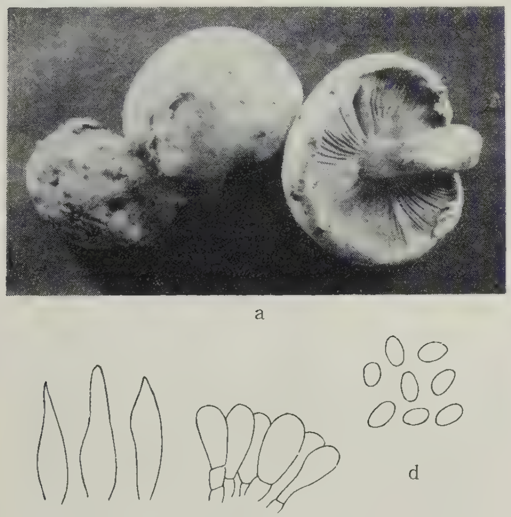
Crypt. Flandr. 2:116. 1876—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:116. 1876—WINTER, Pilze, 1:700. 1884.

Dryophila aurivellus QUÉL. Enchir. Fung. 68. 1886—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 328. 1953.

Hypodendrum aurivellum OVERH. N. Am. Fl. 10:279. 1932.

Pholiota adiposa Auct. nonnull.

子実体は叢生或は孤生; 傘は 8—14 cm, 丸山形, のち開張し, 鈍き中丘あり; 表面は粘性, 光沢あり, 黄色, のち黄銹色, 中央濃色, 扁平にて圧着せる類三角形褐色の鱗片を多少同心円状に散在す, 鱗片は中央に於て密なり, 老時脱落す, 縁は初め内屈し, 纖維状被膜を附す; 肉は淡色, のちシトロン黄色, 茎の下部の方赤褐色, 纖維状肉質, 味温和, 臭なし; 褶は狭生, クリーム黄色, のち黄銹色, 遂に褐色となる, 密, 稜は異質; 茎は傘径より長くして 15 cm 或はそれ以上に及び, 殆ど同幅或は基部に於て僅か



第 156 図　ヌメリスギタケモドキ
Pholiota aurivella
a. 子実体 ×1/3　b. 嚢状体　c. 稜嚢体
d. 胞子 ×400　(大谷氏)

肥大し, 屢々偽根を有す, 表面は時季により多少乾燥, 上部黄色, 下部銹褐色, 初め鍔より下方は栗褐色の反転する鱗片を段階状に附し, のち消失す, 屈曲斜上, 中実; 鍔は蜘網膜状にて速に消失す; 胞子は楕円形, 平滑, 6.5—9×4—5 μ; 胞子紋は銹色; 稜嚢体は棍棒形, 無色, 22—30×5.5—9 μ; 褶側嚢体は少数, 紡錘形, 19—49×4.5—8 μ; 可食。

所在及産地

ヤナギ等広葉樹幹上—春〜秋

北海道, 本州—欧・北米

和名　ヌメリスギタケモドキ (擬滑杉茸)
ヤナギモタセ (方言)

(3) Flammula SING. (1948)
ツムタケ亜属

Pholiota astragalina (FR.) SING.
アカツムタケ

SINGER, Agaricales, 516. 1949—HEIM, Champ. Eur. 2:379, f. 258. 1957.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 62, f. 154, pl. 27, f. 154. 1957)

Agaricus astragalinus FR. Syst. Myc. 1:251. 1821; Epicr. Myc. 186. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:356. 1857; Hymen. Eur. 248. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:478. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 169. 1883; Illus. Brit. Fungi, 4: pl. 435 (no. 479). 1886—WINTER, Pilze, 1:681. 1884.

Agaricus Neesii BARLA, Champ. Nice, 46, pl. 23. 1859.

Flammula astragalina QUEL. Champ. Jura Vosg. Suppl. 2:347. 1873—GILLET, Champ. Fr. 537. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:405. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 167. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:819. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 746. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:135. 1893; Brit. Fungi, 289. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 168. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 151. 1908—RICKEN, Blätterp. 206. 1915—REA, Brit. Basid. 318. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1: pl. 62. 1926; Agaricales, 1:149. 1948—LANGE, Agar. Denm. 7:12. 1928; Fl. Agar. Dan. 4:8, pl. 121, f. D. 1939—BRESADOLA, Icon. Myc. 16: pl. 776. 1930.

Dryophila astragalina QUÉL. Enchir. Fung. 71. 1886—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 330. 1953.

Naucorina astragalina SCHROET. Pilze Schles. 1:602. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 251. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 531. 1912.

Gymnopilus astragalinus IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:234. 1938.

(原, 日. 菌. 目. 143. 1954)

子実体は稍々叢生, 群生或は孤生; 傘は径 3—8 cm, 丸山形, のち開張, 鈍頭; 表面は帯褐赤色或はサフラン赤色, 周辺黄色, 湿時幾分湿潤無毛, 初め縁周に絹糸状纖維あり, 縁に白色蜘網状膜あり, 早失す; 肉は緊緻, 寧ろ厚く, 稍々同色, 茎肉は大黄色, 傷時黒変す, 味辛し; 褶は直生, 稜部帯黄色,



a



b

第 157 図 アカツムタケ
Pholiota astragalina
a. 子実体 ×1/2 b. 胞子 ×600
(大谷氏)

上部傘面と同色，密，稍々広幅，稜は異質にて綿絮あり；茎は 5—10×0.4—0.8 cm，同幅或は下方狭細，波曲，帯黄色或は淡色，綿絮状繊維あり，のち殆ど無毛となる，中空；胞子は楕円形，平滑，6—7.5×3—4.5 μ；胞子紋は淡銹色；稜嚢体は長披針形，50—60×5—6 μ。

所 在 及 産 地

針葉樹枯幹上—春～秋　　北海道，本州—欧

和 名 アカツムタケ（赤紡錘茸）〔今井〕

Pholiota abstrusa (Fr.) Sing.
ニセムクエタケ

Singer, Agaricales, 516. 1949.

Agaricus abstrusus Fr. Epicr. Myc. 194. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:370. 1857; Hymen. Eur. 257. 1874—Cooke, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 175. 1883; Illus. Brit. Fungi, 4: pl. 456. (no. 497). 1886.

Naucoria abstrusa Sacc. Syll. Fung. 5:835. 1887—Massee, Brit. Fung. Fl. 2:156. 1893; Brit. Fungi, 280. 1911—W.G. Smith, Brit. Basid. 156. 1908—Ricken, Blätterp. 216. 1915—Rea, Brit. Basid. 351. 1922—Imai, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:249. 1938—Lange, Fl. Agar. Dan. 4:17, pl. 123, f. c. 1939.

(原，日．菌．目．221. 1954)

Simocybe abstrusa Karst. Hattsv. 1:421. 1879.

Dryophila graminis Kühn. et Romagn. Fl. Analyt. Champ. Super. 330. 1953.

子実体は群生或は孤生；傘は径約 2 cm，丸山形或は僅か中丘を有し，のち扁平となる；表面は長雨の際やや粘性，無毛，平滑，剝げず，乾時稍々光沢あり，乾燥季には淡黄褐色或は灰褐色，中央暗色；肉は略々同色，のち淡色となる；褶は直生或は狭生，淡黄色～肉桂色；茎は 3—4×0.15—0.2 cm，同幅，乾季肉桂色，基部暗色，軟骨質，無毛，光沢あり，中空；胞子は楕円形，平滑，8.5—11×4—5 μ；胞子紋は肉桂色；稜嚢体は壜形，鋭尖頭，25—30×7.5—10 μ。

所 在 及 産 地

林地—夏　　北海道—欧

和 名 ニセムクエタケ（贋むく柄茸）〔今井〕

Pholiota lenta (Pers. ex Fr.) Sing.
シロナメツムタケ

Singer, Agaricales, 516. 1949—Heim, Champ. Eur. 2:381. 1957.

Agaricus lentus Pers. Syn. Meth. Fung. 287. 1801—Fries, Syst. Myc. 1:253. 1821; Epicr. Myc. 184. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:352. 1857; Hymen. Eur. 246. 1874—Rabenhorst, Deut. Krypt. Fl. 1:479. 1844—Berkeley, Outl. Brit. Fung. 158. 1860—Cooke, Handb. Brit. Fungi, 1: 121. 1871; Illus. Brit. Fungi, 4: pl. 439-440. (no. 469-470). 1886—Karsten, Myc. Fenn. 3:125. 1876—Winter, Pilze, 1:682. 1884.

Flammula lenta Gill. Champ. Fr. 533, c. ic. 1874—Karsten, Hattsv. 1:401. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 167. 1889—Saccardo, Syll. Fung. 5:815. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 739. 1916—Massee, Brit. Fung. Fl. 2:130. 1893; Brit. Fungi, 288. 1911—W. G. Smith, Brit. Basid. 149. 1908—Ricken, Blätterp. 202, pl. 57, f. 3, 1915—Kauffman, Agar. Mich. 487. 1918—Lange, Agar. Denm. 7:11. 1928; Fl. Agar. Dan. 4:7, pl. 121, f. E. 1939—Bresadola, Icon. Myc. 16: pl. 769. 1930—Konrad & Maublanc, Agaricales, 1:147. 1948.

(Imai, Bot. Mag. Tokyo, 47:386. 1933—広江，応用菌蕈学，1175. 1941)

Dryophila lenta Quél. Enchir. Fung. 70. 1886—Kühner & Romagnesi, Fl. Analyt. Champ. Super. 330. 1953—Romagnesi, Nouv. Atl. Champ. pl. 58, A. 1956.

Naucoria lenta Schroet. Pilze Schles. 1:606. 1889—P. Hennings, in Engler & Prantl, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:251. 1900—Migula, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):533. 1912.

Flammula betulina Peck, Bull. Torr. Bot. Club, 34:100. 1907.

Hebeloma glutinosum REA, Brit. Basid. 254. 1922.

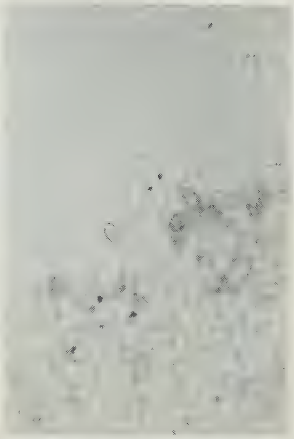
Gymnopilus lentus MURR. N. Am. Fl. 10:204. 1917—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:232. 1938.

（原，日．菌．目．143. 1954）

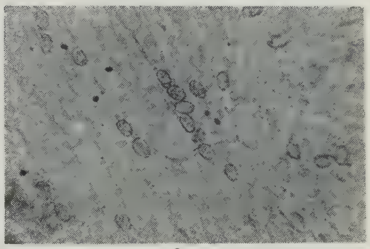
子実体は群生或は少数叢生；傘は径 3—8 cm，丸山形，のち扁平となり，鈍頭；表面は膠性，汚白色～柔皮色，中央僅か暗色，白色の早失性表生鱗片を散布す；肉は帯白色，のち淡黄色となり，中盤厚し，味温和，臭不快なり；褶は直生或は垂下歯を有する狭生又は彎状直生，初め白色，のち淡黄色，遂に帯赭肉桂色となる，密，広幅，便腹状，稜に微細白色綿架あり；茎は 4—8×0.5—1 cm，同幅，基部稍々球根状，鍔より上部は白粉状，下部は白色綿架状鱗片を有し，老時帯褐色となる，充塞；ベールは著し，早失性；胞子は橢円形，平滑，5—7×3.5—4 μ；胞子紋は淡肉桂色；褶側及稜嚢体は多生，披針形，便腹状，鈍頭；可食。



a



b



c

第 158 図　チャナメツムタケ　Pholiota lubrica
a．子実体 ×2/3　b．嚢状体
c．胞子 ×600　（大谷氏）

所在及産地

枯幹上或はその周囲地上—秋

北海道—欧．北米

和名 シロナメツムタケ（白滑紡錘茸）〔今井〕

Pholiota lubrica (PERS. ex FR.) SING.

チャナメツムタケ

SINGER, Agaricales, 516. 1949.

Agaricus lubricus FR. Syst. Myc. 1:252. 1821; Epicr. Myc. 185. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:352. 1857; Hymen. Eur. 246. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:479. 1844—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:125. 1876—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 168. 1883—WINTER, Pilze, 1:682. 1884.

Flammula lubrica QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:251. 1872—GILLET, Champ. Fr. 534. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:402. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 167. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:815. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 739. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:131. 1893; Brit. Fungi, 288. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 168. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 149. 1908—RICKEN, Blätterp. 203, pl. 57, f. 4. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 486. 1918—REA, Brit. Basid. 315. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 16: pl. 770. 1930——KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:148. 1948.

（IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 47:386. 1933—広江，応用菌蕈学，1175. 1941）

Dryophila lubrica QUÉL. Enchir. Fung. 70. 1886—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 331. 1953.

Naucoria lubrica SCHROET. Pilze Schles. 1: 606. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 251. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 532. 1912.

Gymnopilus lubricus IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:231. 1938.

（原，日．菌．目．143. 1954）

子実体は群生，往々少数叢生；傘は径 4—10 cm，丸山形，のち開張し，鈍頭或は中丘あり，往々圧低されて反転す；表面は煉瓦赤色或は鮮肉桂色，往々淡色にて中盤淡色，往々膠化せる軟毛鱗片を点在す，縁は淡色にて往々線条あり；肉は白色，中盤厚く，強靱，味温和，臭寧ろ強し；褶は直生，類垂生或は類彎生，淡色，のち赭色，密，中幅，稜に微細房毛あり；茎は 5—10×0.5—1 cm，同幅或は上方に僅か狭細，基部稍々球根状，帯白色，遂に暗褐色となる，乾燥，弛き繊維あり，基部に軟毛を有す；

胞子は楕円形，平滑，5—6×3—3.5 μ；胞子紋は銹褐色；褶側及稜嚢体は多生，披針形，便腹状，鈍頭；可食。

所在及産地

枯幹上及その周囲—秋

北海道—欧．北米．亜(西比)

和名 チャナメツムタケ（茶滑紡錘茸）〔今井〕

Pholiota spumosa (FR.) SING.

キナメツムタケ

SINGER, Agaricales, 517. 1949—HEIM, Champ. Eur. 2:381. 1957.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，63, f. 157, pl. 28, f. 157. 1957）

Agaricus spumosus FR. Syst. Myc. 1:252. 1821; Epicr. Myc. 185. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:354. 1857; Hymen. Eur. 247. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:478. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:122. 1871; Illus. Brit. Fungi, 4: pl. 476(no. 474). 1886—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:125. 1876—WINTER, Pilze, 1: 682. 1884.

Flammula spumosa KARST. Hattsv. 1:404. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 167. 1889—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 12:499. 1883—SACCARDO, Syll. Fung. 5:817. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 740. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:132. 1893; Brit. Fungi, 288. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 150. 1908—RICKEN, Blätterp. 204, pl. 57, f. 5. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 489. 1918—REA, Brit. Basid. 316. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1: pl. 60. 1928; Agaricales, 1:148. 1948—BRESADOLA, Icon. Myc. 16: pl. 773. 1930—LANGE, Fl. Agar. Dan. 4:8, pl. 121, f. c. 1939.

（今関及土岐，林．試．研．報．87:53. 1956）

Dryophila spumosa QUÉL. Enchir. Fung. 70. 1886—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 331. 1953.

Naucoria spumosa P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:251. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):532, pl. 105, f. 8—9. 1912.

Gymnopilus spumosus MURR. Mycologia, 4: 254. 1911; N. Am. Fl. 10:198. 1917—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:233. 1938.

（今関，原色きのこ，pl. 13(右). 1942—原，日．菌．目．143. 1954）

子実体は叢生或は群生，傘は径 3—7 cm，丸山形，のち扁平となり，遂に僅か圧低さる；表面は硫黄色，往々緑色の色彩を帯び，中央黄褐色，周辺淡色，湿時甚だ粘性にて外皮剝げ易し，初め無毛，老時外皮小片に裂けて褐色細鱗片となる，縁は幼時内屈し早失性黄白色綿絮状蜘網膜を有す，のち膜は消失し，縁は僅か反転するに至る；肉は帯黄色，味なく，臭微なり；褶は直生或は垂下歯を有して直生，初め帯白色或は帯黄色，のち淡褐色となる，密，中位に広し；茎は 4—8×0.5—1 cm，同幅，或は基部僅か肥大す，帯黄色，頂部白粉状，下部帯褐色，纖維状，充塞；胞子は円壔形或は楕円形，平滑，6—8×3—4.5 μ；胞子紋は淡銹色；褶側及稜嚢体は披針形，便腹状，無色；可食。

所在及産地

地上，腐幹上及その周囲—夏秋

北海道，本州—欧．北米．亜(小亜)

和名 キナメツムタケ（黄滑紡錘茸）〔今井〕

Pholiota carbonaria (FR.) SING.

ヤケアトツムタケ

SINGER, Agaricales, 517. 1949—MATSUDA & HONGO, Jour. Jap. Bot. 31:197, f. 1, A-B. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2:382. f. 259, B. 1957.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，63, f. 158, pl28, f. 158. 1957）

Agaricus carbonarius FR. Syst. Myc. 1:252. 1821; Epicr. Myc. 186. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:355. 1857; Hymen. Eur. 247. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:478. 1844——COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:122. 1871; Illus. Brit. Fungi, 4: pl. 422(n. 475). 1886—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:126. 1876—WINTER, Pilze, 1:681. 1884.

Flammula carbonarius QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:251. 1872—GILLET, Champ. Fr. 534. 1874—KARSTEN. Hattsv. 1:404. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 167. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:817. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 741. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:133. 1893; Brit. Basid. 289. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 168. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 150. 1908—RICKEN, Blätterp. 204, pl. 58, f. 3. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 488. 1918—MELENCON, Bull. Soc. Myc. Fr. 16: Atlas, pl. 31. 1921—REA, Brit. Basid. 317. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 16: pl. 775. 1930—LANGE, Fl. Agar. Dan. 4:8, pl. 121, f. B. 1939—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:148. 1948—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 170, pl. 66, f. 2. 1950.

Dryophila carbonaria QUÉL. Enchir. Fung. 70. 1886—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 331. 1953.

Naucoria carbonaria SCHROET. Pilze Schles. 1:605. 1889—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 532, pl. 103, f. 3—4. 1912.

Gymnopilus carbonarius R. MAIRE, Bull. Soc. Hist. Nat. Afrique Nord. 8:254. 1917.

Flammula spumosa ssp. *carbonaria* KONRAD et MAUBL. Icon. Sel. Fung. 1:pl. 61. 1928.

子実体は孤生，群生或は叢生；傘は径 1—4 cm，かなり肉質にて軟韌，丸山形，のち扁平となり，老時多くは圧低さる，粘性或はやや粘性，乾けば光沢あり，外被は幾分剝げる，帯赤暗褐色，中盤は銹黄色，無毛，平滑，初め縁は内屈し，黄色にて屢々蜘網膜状残物を存す；肉は淡黄色，茎の基部褐色を帯び，むしろ薄し，臭味は僅か或は温和；褶は直状類垂生，老時彎生，密，かなり広幅，初め淡色，のち淡灰褐色～褐色，稜に白色房毛あり；茎は 1.5—5×0.3—0.5 cm，上方太く，下方に狭細，粗豪，堅く弾性あり，繊維状鱗片あり，頂部平滑，暗汚褐色或は灰暗褐色，基端屈曲或は小球根状となり菌糸によつて着生物に着く，中空；鍔は蜘網状綿絮にて早失性；胞子は卵形，平滑，淡灰褐色，6.5—7×4—4.5 μ；胞子紋は汚灰褐色；稜嚢体は群生，便腹紡錘形或は纏形，薄膜，淡黄色，屢々無定形の黄色沈澱物を存す，30—48×10.5—16 μ；褶側嚢体は多生，稜嚢体に同じ。

所在及産地

森林焼跡，焚火跡焼材及株の周囲—秋

本州—欧．北南米．阿

和名 ヤケアトツムタケ（焼跡紡錘茸）〔本郷〕

疑問種

Agaricus micromegas BERK. Linn. Soc. Jour. Bot. 16:51. 1878＝*Flammula micromegala* SACC. Syll. 5:827. 1887.（松村，植．名鑑，1:242. 1904—白井，日．菌．目．34. 1905; ed. 2. 237. 1917; ed. 3. 137. 1927）＝*Naucoria micromegala* P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 251. 1900.（松村，l. c. 156. 1904—白井，l. c. 58. 1905; ed. 2. 387. 1917）

Pholiota(?) *livistonae* S. ITO et IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16:49. 1940. ビロウスギタケ．小笠原島。

Pholiota tabacinirugosa S. ITO et IMAI, l. c. 48. 1940. シワスギタケ．小笠原島。

Kuehneromyces SING. et SMITH
センボンイチメガサタケ属

SINGER & A. H. SMITH, Mycologia, 38:504. 1946—SINGER, Agaricales, 518. 1949.

傘は無毛，類粘性なるも膠性ならず，全面吸水性，縁には湿潤状態に於ては透明線条あり，肉桂褐色或はそれに近き隈あり，多分亦それより黄，オリーブ或は赤色を帯ぶ；上表皮層は不規則なる寧ろ太くして一様に屢々厚膜なる菌糸より成り，皮嚢体なし；褶は種々に附着するも離生なることなし；胞子紋は肉桂色或は褐色；胞子は蜜色，2重膜を有す，内膜は色沢なく外膜とほぼ同厚，平滑，寧ろ小形，卵形～楕円形，扁豆形ならざるか甚だ僅か扁豆形，先端截頭，発芽孔を有す；担子柄はすべての点に於て正常；稜嚢体は存在し，時に2型を有し或は一型にて散生～群生し稜を異質となす；黄金嚢体及び一般に擬嚢体のすべての種類は多くは欠如す；托実質は整型；茎は中心生，傘径より遙かに長し，真直或は波曲，直立する基物の表面に生じたる子実体の場合には屈曲す，髄部充塞或は一様に中空，鱗片を有し或は裸；ベールは存在し往々鍔状，又は甚しく消失性，肉は菌絆ある菌糸より成る；材上，鋸屑上に生じ，屢々早熟性；半被実；温帯産にて時に亜熱帯及び熱帯に産す，約6種を知られ，食用となる。

（本属名は仏菌学者 ROBERT KÜHNER 氏の姓より出づ）

基準種 *K. mutabilis* (SCHAEFF. ex FR.) SING. et SMITH

本邦既知種検索表

A．傘面に著しき膠粘被を被り，無毛，平滑。

ナメコタケ ***K. nameko*** (355)

＊基種に比し茎細長，鍔より下部に鱗毛を有し，傘茎肉は白色にて区別さる。

チュウナメコタケ var. ***squamopes*** (355)

B．著しき膠粘被なくして粘性。

a．茎に著しき鱗被あり；傘面は平滑，多少鱗被あり；嚢状体あり；密に叢生。

センボンイチメガサタケ ***K. mutabilis*** (353)

b．茎は繊維状；傘面は無毛；嚢状体なし；群生或は孤生。

ヒメアジロタケモドキ ***K. vernalis*** (354)

Kuehneromyces mutabilis (SCHAEFF. ex FR.) SING. et SMITH
センボンイチメガサタケ

SINGER & A. H. SMITH, Mycologia, 38:505. 1946—SINGER, Agaricales, 519. 1949.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，64, f. 160, pl. 28, f. 160. 1957）

Agaricus mutabilis SCHAEFF. Fung. Bavar. 4;Ind. 6, pl. 9. 1774—FRIES, Syst. Myc. 1:245.

1821; Epicr. Myc. 169. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1: 319. 1857; Hymen. Eur. 225. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1: 484. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 151, pl. 8, f. 3. 1860—KARSTEN, Myc. Fenn. 3: 119. 1876—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1: 109. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3: pl. 355 (no. 402). 1886.

Agaricus caudicinus PERS. Syn. Meth. Fung. 21. 1801.

Pholiota mutabilis QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1:126. 1872—GILLET, Champ. Fr. 437, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:304. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 164. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:758. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 680. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1:609. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:229. 1893; Brit. Fungi, 260. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 168. 1900—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 251. 1900—ROLLAND, Atl. Champ. 61, f. 135. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2 (2): 537, pl. 108, f. 1—2. 1912—RICKEN, Blätterp. 201, pl. 56, f. 6. 1915—LANGE, Agar Denm. 4: 10. 1921—REA, Brit. Basid. 122. 1922—OVERHOLTS, Ann. Missouri Bot. Gard. 14:138, f. 96—97. 1927; N. Am. Fl. 10:703. 1930—LANGE, Fl. Agar. Dan. 3:59, pl. 110, f. A. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 158. 1948—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 147, pl. 55, f. 2. 1950—HEIM, Champ. Eur. 2:382, f. 260. 1957 (v. *Hygrophana m.*)

(川村, 日. 菌. 図説, n. 230. 1929—松浦, 茸類辞典, 33, f. 29—31. 1933; 応用菌蕈学, 398. 426, f. 326—329, 335. 1941—IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 53: 397. 1939—今関, 原色きのこ, pl. 13(左). 1942; 及土岐, 林. 試. 研. 報. 67:47. 1954—原, 日. 菌. 目. 250. 1954)

Dryophila mutabilis QUÉL. Enchir. Fung. 69. 1886—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 326, f. 413. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 56, B. 1956.

子実体は密に叢生; 傘の径 3—6 cm, 丸山形, のち開張扁平となり, 時に鈍中丘あり; 表面は吸水性, 黄褐或は茶褐色等にて濃部は稍々赤褐色を帯ぶ, 湿時濃色, 粘性, 乾時淡色, 平滑, 時に多少の鱗被あるも著しからず; 肉は帯白色或は褐色を帯ぶ; 褶は直生或は僅か垂生, 初め淡色, のち黄褐色となる, 密, 広幅, 薄し; 茎は 3—7×0.3—0.5 cm, 同幅, 鍔より上部は黄褐色, 粉状, 下部は黒褐色にて著しき鱗被を有す, 中空; 鍔は上位, 拡張, 膜質, 下面鱗片状; 胞子は卵形, 截頭, 平滑, 6.5—7.5×4—5 μ; 胞子紋は銹色; 稜嚢体は便腹状円柱形, 無色, 21—30×5.2 μ; 可食。

所在及産地

広葉樹切株上—夏秋

本州—欧. 北米. 亜(西比. 小亜. 瓜)

和名 センボンイチメガサタケ (千本市女笠茸) 〔今井〕 ツツエ (古名)

Kuehneromyces vernalis (PECK) SING. et SMITH

ヒメアジロタケモドキ

SINGER & A. H. SMITH, Mycologia, 38:514. 1946—SINGER, Agaricales, 519. 1949.

Agaricus vernalis PECK, Rep. N. Y. St. Cab. 23:91. 1872.

Agaricus lignicola PECK, Rep. N. Y. St. Cab. 23: 91. 1872.

Naucoria vernalis SACC. Syll. Fung. 5:838. 1887—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 154, f. 150. 1903.

Naucoria lignicola SACC. Syll. Fung. 5:838. 1887—KAUFFMAN, Agar. Mich. 512. 1918.

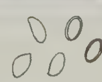
Pholiota marginella PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 51:289, pl. B, f. 12—20. 1893; Bull. N. Y. St. Mus. 122:157. 1908—OVERHOLTS, N. Am. Fl. 10:272. 1924; Ann. Missouri. Bot. Gard. 14: 137, f. 94—95. 1927.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 55:514. 1941)

Naucoria praecox MURR. N. Am. Fl. 10:174. 1917.



a



b

第 159 図 ヒメアジロタケモドキ
Kuehneromyces vernalis
a. 子実体 ×2/3 b. 胞子 500
(大谷氏)

子実体は群生或は孤生; 傘は径 1—4 cm, 丸山形, のち開張し, 殆ど扁平となる; 表面は幼時及湿時黄褐色或は帯黄赤色, 乾時帯白色或は黄柔皮色, 吸水性, 時に稍々粘性, 無毛, 幼時縁辺に線条あり, 白色繊維ありて僅か絹状; 褶は彎状狭生或は彎曲生, 容易に茎より離る, 帯白色にて, のち暗銹色となる, 中位に密, 幅 1—4 mm, 稜は異質; 茎は 3—10×0.1—0.6 cm, 同幅, 鍔より上部は粉状, 下部は繊維状,

帯白色或は淡色，往々基部に白色軟毛あり，充塞或は中空；鍔は僅か或は能く発達し，早失性；胞子は楕円形或は卵形，僅か截頭，平滑，6—8×3.5—4μ；胞子紋は褐色；嚢状体なし。

所在及産地

腐株上一秋　　本州，九州一北米

和名　ヒメアジロタケモドキ（擬姫網代笠茸）

〔今井〕

Kuehneromyces nameko (T. ITO)
ナメコタケ

Collybia Nameko T. ITO, Proc. Imp. Acad. 5: 145. 1929.

（原，日．菌．目．84. 1954）

Pholiota nameko S. ITO et IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 47:388. 1933; Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:197, pl. 4, f. 4. 1938.

（今関，原色きのこ，pl. 12(右). 1942—原，日．菌．目．250. 1954—佐々木，尾瀬ヶ原，552. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，63，pl. 28，f. 159. 1957）

Pholiota glutinosa KAWAM. Icon. Jap. Fungi, 5:538, f. 527. 1954.

子実体は密に叢生或は群生；傘は径 2.5—10 cm，半球形，のち丸山形～扁平となる；表面は膠粘被に被われ，中央部赭褐色，周辺黄褐色，老時淡色となる，平滑，無毛，周辺に線条なし，縁は薄く，初め内屈す，往々膠質の膜片を存す；肉は帯黄色，のち肉桂色，皮下赤褐色，軟肉質，緊緻，中央厚く縁は薄し，味及臭よし；褶は垂下歯ありて直生，灰色，のち銹色，甚だ密，広幅，稜は屢々波状；茎は 2.5—8×0.3—1.5 cm，同幅或は上方に僅か漸細，鍔より上部は汚白色にて淡褐色を帯び，絹様繊維あり，下部は傘面と同色或は淡色，鱗片なく，殆ど平滑，膠粘性，中実或は僅か中空；鍔は上位，薄膜質，膠粘性，脱落し易し；胞子は楕円形，円壔形或は倒卵形，5—6×3—4μ；胞子紋は暗褐色；稜嚢体は棍棒状円筒形或は円筒形，無色，25—33×5.5—6.5μ；可食，栽培さる。

所在及産地

ブナ等の枯幹及切株上一秋　　全土

和名　ナメコタケ（滑子茸）〔方言〕

　　ナメスギタケ（滑杉茸）〔川村〕

var. **squamopes** KAWAM.
チュウナメコタケ

KAWAMURA, Icon. Jap. Fungi, 5:541, f. 528. 1954.

本変種は茎細長，鍔より下部に鱗毛を有し，傘茎肉は白色なるが故に区別さる；

子実体は叢生；傘は径 2.5—10 cm，鐘形～低山形，のち扁平となる；表面は平滑，膠粘液を被むり，淡褐色～黄褐色，中央濃色；肉は白色にて稍々黄色を帯ぶ，緻密；褶は初め灰色，のち銹褐色，垂下歯ありて直生；茎は 4—12×0.3—1.5 cm，殆ど同幅，淡黄褐色，鍔より下部に黄褐色の鱗毛を有し，湿時粘性，繊維質強靭，充塞；鍔は薄膜質，暗赤褐色，軟弱，脱落し易し；胞子は広楕円形～卵形，肉桂色，5—7×4μ；胞子紋は暗褐色；可食。

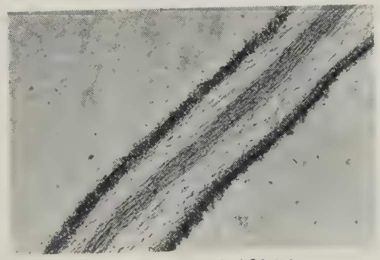
所在及産地

ブナ等の幹及切株上一秋　　本州

和名　チュウナメコタケ（中滑子茸）〔川村〕



a



b



c　d

第160図　ナメコタケ　Kuehneromyces nameko　a．子実体 ×1/2　b．褶横断面の一部 ×200　c．担子柄　d．胞子×400　（大谷氏）

Cortinariaceae ROZE　フウセンタケ科

ROZE, Bull. Soc. Bot. 23:51. 1876—SINGER, Agaricales, 522. 1949.

上表皮層の構造は変化し稀に細胞状のものあるも最も屢々毛被より成り皮嚢体を有し，或は平行菌糸被なり；托は褶状；托実質は明かに整型；胞子紋は帯褐赭色～鮮銹黄褐色；胞子は2重膜にて有疣，往

々寧ろ永存的の外被を有し，発芽孔なきも屢々乳頭あり；担子柄はすべての点に於て正常；嚢状体は屢々存在し，存在する場合は稜に多くして稀に褶側に存す，又フウセンタケ属（*Cortinarius*）の多くの種類並にショウゲンジタケ属（*Rozites*）に於ては両者共に存在せず；茎は中心生にて稀に偏心生，側生或は欠如；被膜は存在或は欠如；肉は殆ど常に菌絆を有する菌糸より成る；林内地上，稀に材上，草根，落葉上等に生ず；2族を含む。

本科は一方モエギタケ科（*Strophariaceae*），他方チャヒラタケ科（*Crepidotaceae*）に近く，前科は発芽孔の存在，及び或は褶側に黄金嚢体の存在によりて異り，後科は胞子膜の分化低く屢々単核なるにより異る。

族検索表

A．胞子紋は帯褐赭色或は汚黄暗褐色；胞子は屢々有瘤類角形，或は星形に至り，然らざれば平滑或は疣状粗面，胞子の内面に非糊性平滑なる胞子盤を存せず；稜嚢体は常に存在す。

（Ⅰ）アセタケ族 **Inocybeae** （356）

B．胞子紋は銹褐色～鮮銹暗褐色，稀に黄土色；胞子は決して有瘤或は星形ならず；胞子は屢々胞子盤を有す；稜嚢体は存在或は欠如。

（Ⅱ）フウセンタケ族 **Cortinarieae**（382）

（Ⅰ） Inocybeae Fayod アセタケ族

Fayod, Ann. Sci. Nat. Bot. VII, 9:361. 1889—Singer, Agaricales, 524. 1949.

胞子紋は帯褐赭色或は汚黄暗褐色；胞子は屢々有瘤類角形或は星形，然らざれば平滑或は疣状粗面，胞子盤なし；稜嚢体は常に存在；4属を収む。

本邦既知属検索表

A．傘は皮嚢体なし．（但し甚だ稀にアセタケ型の皮嚢体を散生することあり，然しこの時には傘面放射繊維状なることを注意すべし)。

a．傘は乾燥にて繊維状，稀に粘性（この時は褶側嚢体は厚膜にて，同時に或は単独にその胞子は有瘤類角形，或は精液臭あることに注意すべし)；若し褶側嚢体なき時は胞子は通常菜豆形なり；胞子は決して疣状粗面ならず。

アセタケ属 **Inocybe** （356）

b．傘は粘性，稀に膠化せる上表皮層の脱落により乾燥となる；稜嚢体は常に存在して褶稜を異質となす，分泌嚢体（アセタケ型）なし；胞子は有瘤類角形ならずして，杏仁形～楕円状円壔形或は楕円形，疣状粗面，稀に平滑。

ワカフサタケ属 **Hebeloma** （375）

B．傘は皮嚢体を有す；吸水性；胞子は平滑。

チャニセムクエタケ属 **Naucoria** （381）

Inocybe (Fr.) Fr.

アセタケ属

Fries, Monogr. Hymen. Suec. 2:346. 1863—Singer, Agaricales, 525. 1949.

Agaricus trib. *Inocybe* Fr. Syst. Mycol. 1:254. 1821.

Astrosporina Schroeter, Pilze Schles. 1:576. 1889.

Clypeus (Britz.) Fayod, Ann. Sci. Nat. Bot. VII, 9:562. 1889.

Agaricus subgen. *Clypeus* Britzmeyer, Hymen. Südb. 3a:4. 1882; 3b. 1883.

Agmocybe Earle, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5: 439. 1909.

Inocibium Earle, l. c. 440. 1909.

傘は繊維状，繊維は放射状に並ぶ，屢々放射状に割れ，その時は特徴的に裂け，或は崩れて不規則に裂け，屢々又鱗片状をなして往々壺より由来せる色沢なき繊維状破片を有す，傘の最高部は匍匐或は何れにしても柵状ならざる菌糸より成る，その菌糸は常に伸長～糸状にて通常放射状に配列し，稀に膠状物に埋在す；皮嚢体は稀に存在し，その時は甚だ分散し褶嚢体と同形なり；褶は狭生～広く直生，屢々彎生，通常殆ど成熟せる時は淡色の稜を有す；胞子紋は殆どワカフサタケ属（*Hebeloma*）のものと同色にて，明かなる銹色ならず，稀に殆ど淡白色；胞子は平滑にて粗面或は疣状ならず，然し往々有瘤類角形或は星芒形に及ぶ；菜豆-腎臓形，杏仁形，伸長類楕円形或は円筒形，2重膜，発芽孔なし；嚢状体は常に存するも或種に於ては稜嚢体のみを有し，通常棍棒状嚢形なり，然らざれば所謂分泌嚢体の特徴を示し，屢々厚き幾分藁色の膜を有し，多くの場合細頸壜形を呈し，寧ろ大形にて甚だ著し，この場合には通常褶側にも生ず，柄は深く根をおろし，先端は屢々鈍凸形となり，無定形（樹脂様）或は結晶の被覆物を有す（以上述ぶる嚢状体は所謂分泌嚢体にて又アセタケ（*Inocybe*）型嚢状体とも称せらる)；茎は

中心生；屢々皮嚢体を汎布し，これが為めに外見粉状なり，皮嚢体は大部分茎の先端に存し，他種にては基部に及ぶ，これ茎に附着する蜘網膜片の位置に関係するものなり；該膜片は屢々甚だ多量，他の場合は少量にて消失性，茎の頂部或は上部に附着し，或は亦茎の基部に附着し球根部の縁に連続す，この最後の場合に於て茎は全面粉状となる，纖維状肉質或は肉質，稀に壺あり；蜘網膜片は通常傘の表皮層に連結し或はそれに固着す；肉は傘に於て肉質，屢々強き特有の臭を有す；すべての菌糸に菌絆あり；半被実；汎布，約100種以上を知らる，食用菌並に毒菌を含み，菌根を有する多くの種を報告さる。

（本属名は is, inos〔希〕(力，筋肉，腱の)，kybos〔希〕(六面体，骰子，頭）より出づ)

基準種　*I. trechispora* (BERK.) KARST.

本邦既知種検索表

A．胞子平滑。

(1) アセタケ亜属　**Inocybe** (*Eu-Inocybe*)

a．嚢状体は厚膜にて結晶を冠す。所謂分泌嚢体なり。

α．傘は反転鱗片を有す。

I．胞子球形。

タマアセタケ　***I. sphaerospora***　(359)

II．胞子球形ならず。

1．胞子長形にて円筒形。

クロトマヤタケ　***I. lacera***　(359)

2．胞子卵形或は楕円形。

甲．胞子甚だ小形，5—6×3—4 μ；傘は小 (5—17 mm)，淡黄土色；茎の基部球根状；褶側嚢体は厚膜。

I. neomicrospora　(360)

乙．胞子大形，長さ 7 μ 以上。

い．傘は淡黄土色，3—4 cm；茎は同幅，基部黴状；褶側嚢体は厚膜。

ササクレアセタケ

I. rimosa f. ***squarrosa***[1)]　(365)

ろ．傘は黄土色ならず。

イ．茎に著しき反転鱗片あり；傘は暗褐色～鼠色。

ササクレトマヤタケ

I. hystrix　(360)

ロ．茎に著しき反転鱗片なし。

◦ 傘は帯紫灰褐色，1—1.5cm；茎の基部僅か球根状；褶側嚢体薄膜。

クロトマヤタケモドキ

I. cincinnata　(361)

◦◦ 傘は灰褐色ならず。

* 傘は白色，1.5—2.5 cm；茎は同幅；褶側嚢体は厚膜。

ササクレシロトマヤタケ

I. geophylla f. ***squamosa***　(363)

** 傘はオリーブ紫色，のち帯紫黄土色，2—2.5 cm；茎は同幅；褶側嚢体は厚膜。

I. ozeensis　(361)

β．傘は纖維状。

I．傘は綿絮状縁膜片を有し，黄褐色．2 cm；茎は同幅，基端黴状；褶側嚢体は薄膜或は厚膜。　***I. neoflocculosa***　(361)

II．傘は縁膜片を有さず。

1．傘は白色，1—1.8 cm；茎は同幅；褶側嚢体は厚膜。

シロトマヤタケ　***I. geophylla***　(362)

2．傘は白色ならず。

甲．傘は紫色。

い．傘は中央紫色，1—2 cm；茎は同幅或は基部太し；褶側嚢体は薄膜。

ウスムラサキアセタケ

I. lilacina　(363)

ろ．前者と同様にて子実体全部鮮紫色

ムラサキアセタケ

I. lilacina f. ***violacea***　(363)

乙．傘は黄土色或は褐色。

い．傘は汚黄色或は黄土色，纖維状，罅裂なきも微細鱗片を被むる，1.5—2.5 mm；茎の基部球根状；褶側嚢体は薄膜　***I. lucifuga***　(363)

ろ．傘は罅裂す；褶側嚢体は厚膜。

イ．傘は黄土色，微かに割裂，2—4 mm；茎は基部類球根状；胞子 8—10×5—5.5 μ。

アセタケ　***I. rimosa***　(364)

ロ．前種と同様なるも傘面に著しき鱗片あり。

ササクレアセタケ

I. rimosa f. ***squarrosa***[2)]　(365)

ハ．傘は暗褐色，2—2.5 cm；茎の基部球根状；胞子は小形，6—7.5×4—4.5 μ。

コアセタケ ***I. microspora*** (365)

b．囊状体は薄膜にて結晶を冠せず。

α．傘は反転鱗片を有す。

コツノアセタケ ***I. hirsuta*** (365)

β．傘は繊維状。

I．傘は帯黄黄土色。

1．傘は大形，2.5—4 cm，著しく割裂す；茎の基部球形ならず。

オオキヌハダトマヤタケ

I. fastigiata (366)

2．傘は小形，1.5—3 cm，明かなる割裂なし；茎の基部球状。

キヌハダトマヤタケ ***I. cookei*** (366)

II．傘は褐色～灰色。

1．傘は淡灰黄土色．1.5—2.5 cm；茎は基部太し。 ***I. avellanea*** (367)

2．傘色前者と異る。

甲．傘は帯紫褐色，白斑を有し，1.8—4 cm；茎は同幅。

シラゲアセタケ ***I. maculata*** (367)

乙．傘色を異にす。

い．傘は鮮褐色，3—4 cm；茎は同幅，鮮橙褐色。カバイロトマヤタケ

I. aureostipes (367)

ろ．傘は灰褐色。

イ．傘は灰褐色或は淡褐色，2.5—6 cm，放射線条あり，のち割裂す；茎は殆ど白色，基部截頭或は球根状。 オオトマヤタケ

I. umbrinella (368)

ロ．傘は灰褐色，縁の方オリーブ黄土色或は帯白色に褪色す。

I. umbrinella f. ***pallidula*** (368)

B．胞子は多角形，或は瘤，粒又は刺を有す。

(2) ニセトマヤタケ亜属 **Clypeus**

a．胞子は多角形或は瘤又は粒を有す。

α．傘は鱗片或は産毛を有す。

I．山地に生ず。

1．傘は小形，5—11 mm，暗褐色，密に灰色産毛にて被われ，縁は房毛あり；茎甚だ短く，基部球状；褶側囊体は厚膜；地上生。

ミヤマアセタケ ***I. montana*** (368)

2．傘は中形，1.8—2.3 cm，暗褐色にて紫色を帯び，密なる反転鱗片を有す；茎は基部太し，褶側囊体は薄膜；腐幹上生。

クロニセトマヤタケ ***I. plumosa*** (369)

II．低地に生ず。

1．傘は灰褐色，16—30 mm，細微の開展せる鱗片を有し，屢々網目となる；茎は太く，幅2—3(—5)mm；褶側囊体は厚膜。

ハイチヤトマヤタケ

I. lanuginella (369)

2．傘栗褐色或は帯菫褐色，10—20 mm，細微の反転する灰色鱗片を有し，網目とならず；茎は細長，幅 1—1.8 mm；褶側囊体は厚膜。

ケダチアセタケ ***I. squamulosa*** (369)

β．傘は繊維状。

I．胞子は甚だ小形，多角形にて瘤なし；傘は橙褐色，7—20 mm；茎は基部類球形；褶側囊体は厚膜。

I. polycystidiata (370)

II．胞子は瘤粒を有す。

1．胞子の瘤は低くして鈍頭。

甲．傘は白色，2—3.5 cm；茎の基部球根状；褶側囊体は厚膜。

シロニセトマヤタケ

I. umbratica (370)

乙．傘は白色ならず。

い．傘は帯黄色。

イ．傘は橙黄色，粘性ならず，1.5—4 cm；茎の基部球根状，中空；褶側囊体は厚膜。

キイロアセタケ ***I. lutea*** (370)

ロ．茎は藁色，粘性，1.5—2.5 mm；茎は同幅，中実；褶側囊体は厚膜。

I. trechispora (371)

ろ．傘は黄土色～褐色。

イ．傘は大形，3—6 cm。

°．傘は灰褐色，老時中部藍色となる；茎は基部球根状；褶側囊体は厚膜，結晶なし。

アオフアセタケ

I. coerulescens (371)

°°．茎は帯黄黄土色或は黄土色；茎は凹頭球根を有す；褶側囊体は厚膜，結晶なし。

ニセアセタケ

I. praetervisa (371)

°°°．傘は黄褐～帯紫赤褐色；茎は

有縁球根を有す；褶側嚢体は厚膜，結晶を被むる；胞子の瘤は不明瞭。
スナジアセタケ
I. ammophila (372)

ロ．傘は径 2.5 cm 以下。
。．傘は小形，径約 1 cm。
＊．傘は帯紫褐色，8—12 mm；茎は同幅，淡黄土色；褶側嚢体は薄膜。
I. neoumbrina (372)

＊＊．傘は淡黄或は殆ど白色，8—17 mm；茎は基部は太く，クリーム色；褶側嚢体は甚だ厚膜。
ヒメアセタケ
I. senkawaensis (372)

。。．傘は中形。
＊．傘は黄土色。
□．傘は黄土色或は灰褐色；茎は同幅，淡黄色，桃色を帯ぶ，褶側嚢体は厚膜。
I. putilla (372)

□□．傘は黄土色，中丘褐灰色；茎は基部球根状，黄土色或は殆ど白色；褶側嚢体は厚膜。 ***I. inaensis*** (373)

＊＊．傘は褐色或は暗色。
□．褶側嚢体は薄膜；傘は栗褐色，或は暗褐色，割裂す；茎の基部球根状。
アセタケモドキ
I. umbrina (373)

□□．褶側嚢体は厚膜。
△．傘は灰褐色；茎は凹頭球根部を有し，淡橙桃紅色；褶側嚢体は大形
I. titibuensis (373)

△△．傘は暗紫色，のち暗灰色；茎は基部球根状，淡紫灰色；褶側嚢体は小形，長さ 40—50 μ。
I. nikkoensis (373)

2．胞子の瘤は倒円錐形にて著し。
甲．傘は大形，4.5—6.5 cm，暗褐色；茎の基部は球根状，白色或は淡黄土色；褶側嚢体は厚膜。
カブラアセタケ
I. asterospora (374)

乙．傘は中形，1.5—2 cm，灰褐色；茎は球根状基部を有し，灰褐色；褶側嚢体は薄膜。 ***I. nodulosospora*** (374)

b．胞子は著しき刺を有す。
α．傘は 1—3 cm；嚢状体 27—57×8—19 μ，多くは 40—50×8.5—10.5 μ。
アシボソトマヤタケ ***I. calospora*** (374)

β．傘は 0.4—0.8 cm；嚢状体は 27—37×10—12 μ。
ハリアセタケ I. **calospora** f. ***minor*** (375)

(1) Inocybe (*Eu-Inocybe* LANGE, 1917)
アセタケ亜属

Inocybe sphaerospora KOBAY.
タマアセタケ

KOBAYASI, Nagaoa, 2:80, f. 27, pl. 1, f. L. 1952—HONGO, Jour. Jap. Bot. 31:252. 1956.
(今関及本郷，原色日．菌．図鑑，67, f. 164, pl. 29, f. 164. 1957)

子実体は散生；傘は径 1—5.5 cm，丸山形～開張或は中丘あり，周辺は放射状に裂け，有髮；表面は甚だ絹状にて光沢あり，淡黄土色；肉は薄く，肉質，シトロン黄色；褶は狭生，初めシトロン黄色，のち暗褐色となる，広幅，便腹状；茎は 4×0.7—0.9 cm，同幅，傘面と同色，繊維質，中実；担子柄は 4 胞子，褶側嚢体は多生，便腹状紡錘形，僅か厚膜，屢々結晶を冠す，帯黄色，80—85×12—13 μ；褶嚢体は同形，叢生，35—37×8 μ；胞子は球形，亜球形或は広レモン形，平滑，黄土色，1 油球を有し，6.5—7.5(8)×5.5—6.5 μ；傘嚢体は束生，褶側嚢体は多生，便腹紡錘形，先端僅か結晶を附し，膨大部より上部の膜は只僅か厚し。

所在及産地
林内地上—秋　本州
和名 タマアセタケ（玉汗茸）〔小林〕

Inocybe lacera (FR.) QUÉL.
クロトマヤタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:180. 1872; Enchir. Fung. 95. 1886—GILLET, Champ. Fr. 516. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:457. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 208. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:76. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 711. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:187. 1893; Ann. Bot. 18:483. 1904; Brit. Fungi, 270. 1911—W. G. SMI-

TH, Brit. Basid. 135. 1908—RICKEN, Blätterp. 108, pl. 30, f. 4. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 452. 1918; N. Am. Fl. 10:246. 1924—REA, Brit. Basid. 200. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 15:731. 1930—HEIM, Gen. Inocybe, 239. f. 157-158, pl. 19, f. 1-4. 1931—LANGE, Fl. Agar. Dan. 3:78, p. 111, f. D. 1938—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:221. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:239. 1948—SINGER, Agaricales, 530. 1949—KOBAYASI, Nagaoa, 2:81, f. 26, A, f. 28-29. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 226. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2: 363. 1957.

(原，日．菌．目．165. 1954—今関及土岐，林．試．研．報．67:44. 1954—松田及本郷，植．研．雑．30: 259, f. 1, F. G. 1955—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，66, f. 162, pl. 29, f. 162. 1957)．

Agaricus cristatus SCOP. Fl. Carn. 2:449. 1772.

Agaricus rimosus β. vialis PERS. Syn. Meth. Fung. 310. 1801.

Agaricus lacerus FR. Syst. Myc. 1:257. 1821; Epicr. Myc. 173. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:339. 1857; Hymen. Eur. 229. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:483. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 154. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:115. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3: pl. 538. (no. 415). 1886—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:120. 1876—WINTER, Pilze, 1:693. 1884.

Inocybe cristatus SCHROET. Pilze Schles. 1: 587. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:244. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):459. 1912.

子実体は群生或は孤生；傘は径 1—2.2 cm，幼時半球形，のち開張し鐘形となり，中丘あり；表面は乾燥，暗褐色，絹状ならず，微細の暗褐色に反転せる鱗片を被むる，縁に房毛あり，初め淡灰色の蜘網膜によりて茎と連結す；褶は狭生，褐色，密；茎は 2—3.5×0.2—0.3 cm，上方太く，或は同幅，基部同大或は稍々太し，傘面と同色，鱗片あり，緊緻，強靱，充塞或は幾分中空；担子柄は4胞子，30—35×8—10 μ；胞子は円筒形，菜豆形或は基部僅か狭細，平滑，淡黄土色，10—15×4.5—6.5 μ；褶側嚢体は散生，有柄菱形或は洋独楽形，円頭，中位の薄膜，無色，先端に黄土色の結晶を附す，50—60×15—17 μ，稜嚢体は多生，棍棒形無性細胞と混在す；有毒か。

所在及産地

林内砂地，川原，砂丘，路傍地上—夏秋

北海道，本州—欧．北米

和名 クロトマヤタケ（黒苫屋茸）〔今井〕

Inocybe neomicrospora KOBAY.

KOBAYASI, Nagaoa, 2:82, f. 26, B, f. 30, pl. 1, f. M. 1852.

傘は小形，径 5—17 mm，開張し，殆ど扁平或は幾分中丘あり，縁は真直或は反転す；表面は微細鱗片を有し，鱗片は中盤に於て密なり，乾燥，光沢なし，淡黄土色，鱗片は幾分褐色；肉は寧ろ緊緻，帯白色；褶は狭生或は直生，灰褐色，甚だ狭幅，密，稜は細鋸歯あり，帯白色；茎は 1.5—3×0.15—0.3 cm，殆ど同幅にて基部球根状，無毛，絹様白色或は幾分粉状，中実；実質は有隔菌糸より成る；担子柄は4胞子，甚だ短かく，15—17×3.5—4 μ；胞子は甚だ小形，卵形，平滑，5—6×3—4 μ；褶側嚢体は散生，特有の形を有し，紡錘形にて基端截頭，厚膜，無色，40—50×15—20 μ，稜の無性細胞は嚢状，薄膜，無色，稀に稜嚢体を混ず。

所在及産地

地上—夏 本州

和名

Inocybe hystrix (FR.) KARST.

ササクレトマヤタケ

KARSTEN, Hattsv. 1:453. 1879—QUÉLET, Enchir. Fung. 94. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 762. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:181. 1893; Brit. Fungi, 270. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:244. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 132. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3. Pilze, 2(2):460. 1912—RICKEN, Blätterp. 110. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 447. 1918; N. Am. Fl. 10:243. 1924—REA, Brit. Basid. 200. 1922—HEIM, Gen. Inocybe, 148, f. 113, pl. 3, f. 1. 1931—LANGE, Fl. Agar. Dan. 3:72, pl. 111, f. E. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:237. 1948—SINGER, Agaricales, 529. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 227. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:358. 1957.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 55:515. 1941)

Agaricus Hystrix FR. Epicr. Myc. 171. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:334. 1854; Hymen. Eur. 227. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2:149. 1883; Illus. Brit. Fungi, 3: pl. 424 (no. 406). 1886—WINTER, Pilze, 1:695. 1884.

子実体は散生或は孤生；傘に径 2—5 cm，丸山形～開張，広き中丘を有す；表面は暗褐～鼠色にて汚灰褐色の直立或は反転する結合繊維より成る先端尖れる鱗片を密に被むる，亀裂することなく，線条を有せず；肉は帯白色にて皮下褐色を帯ぶ，臭なし；褶は直生，初め淡藁色，のち褐色となり，密，広幅ならず，稜は白綿架状；茎は殆ど 5×0.5 cm，同幅

或は下方に太く，反転する黄土褐色の傘と同じ著しき鱗片を有す，頂部白色，無鱗片，中実；胞子は楕円状卵形，両側不同，平滑，褐色，9—13×5—5.5μ；稜及褶側嚢体は紡錘状長頸壜形，鈍頭，先端に僅か結晶を冠す。70—90×12—17μ，無性稜細胞は多数，卵形，幅約 12μ。

所在及産地

林地—秋　　本州—欧．北米

和名　ササクレトマヤタケ（逆皮苫屋茸）〔今井〕

Inocybe cincinnata (FR.) QUÉL.

クロトマヤタケモドキ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:179, 1872; Enchir. Fung. 94. 1886—GILLET, Champ. Fr. 514. 1876—KARSTEN, Hattsv. 1:456. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:764. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 707. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2: 184. 1893; Ann. Bot. 18:489. 1904; Brit. Fungi, 272. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 134. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):461. 1912—RICKEN, Blätterp. 109, pl. 30, f. 5. 1915—LANGE, Agar. Denm. 3:32. 1917; Fl. Agar. Dan. 3:72, pl. 111, f. H. 1938—KAUFFMAN, Agar. Mich. 443. 1918; N. Am. Fl. 10:243. 1924—REA, Brit. Basid. 203. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1:pl. 97, f. 1. 1929; Agaricales, 1:240. 1948—BRESADOLA, Icon. Myc. 15:pl. 732, f. 2. 1930—HEIM, Gen. Inocybe. 269, f. 171, pl. 22, f. 3, 6. 1931—SINGER, Agaricales, 531. 1949—KOBAYASI, Nagaoa, 2:83, f. 31, pl. 1, f. P. 1952—HEIM, Champ. Eur. 2:363. 1957.

（今関及上岐，林．試．研．報．87:53. 1956—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，66, f. 163, pl. 29, f. 163. 1957）

Agaricus cincinnatus FR. Syst. Myc. 1:256. 1821; Epicr. Myc. 172. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:338. 1857; Hymen. Eur. 228. 1876—PERSOON, Myc. Eur. 3:193. 1825—COOKE, Handb. Brit. Eungi, ed. 2. 151. 1883; Illus. Brit. Fungi, 3:pl. 425, f. b (no. 409). 1886(?); Handb. Austr. Fungi, 46. 1892—WINTER, Pilze, 1:694. 1884.

Agaricus alienellus BRITZM. Derm. Melanosp. Südbay. 154, f. 19. 1883.

Inocybe alienella SACC. Syll. Fung. 5:764. 1887—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):458. 1912.

Inocybe cincinnatula KÜHN.-KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 228. 1953.

傘は径 1—1.5cm，円錐形或は丸山形，鈍頭，幾分緊緻，縁は真直或は内屈す；表面は乾燥，帯紫灰褐色，帯紫褐色の反転鱗片に密に被わる，鱗片は暗色にて特に著し，周辺には無沢の圧着せる繊維あり，稀に割裂す；肉は帯白色或は淡紫色；褶は彎状狭生，初め淡帯紫灰色，のち更に暗色となる，中位に密，広幅，稜に房毛あり；茎は 2.5—3.5×0.18—0.3cm，上方に漸細，基部僅か球根状，繊維状の小鱗片を有し，淡紫色，充塞或は狭腔を有す；担子柄は 4 胞子，25×5—6μ；胞子は類卵形或は紡錘形，両側不同，平滑，顆粒を含む，淡褐色，7—10×3.7—5μ；褶側嚢体は多生，類披針形或は類紡錘形，鈍頭或は頭状，寧ろ薄膜，顆粒状内容を含む，50—70×8.5—13μ，稜嚢体は同形，甚しく叢生せず。

所在及産地

林内地上—夏秋　　本州—欧．濠．北米

和名　クロトマヤタケモドキ（擬黒苫屋茸）〔今関〕

Inocybe ozeensis KOBAY.

KOBAYASI, Nagaoa, 2:84, f. 26, c, f. 32-33. 1952.

傘は径 2—2.5cm，開張し殆ど扁平或は幾分圧低され，中丘を存せず，縁は裂片状或は割裂す；表面は小鱗片を有し，中央部網目状鱗片となる，各鱗片は反転し放射状に並ぶ，乾燥，周辺部は幾分縛裂す，帯紫色，のち帯紫黄土色となる；肉は帯白色，厚し；褶は狭生，帯灰褐色，稍々疎，広幅，著しき便腹状，稜は殆ど全縁にて粉状；茎は 3—3.5×0.4cm，同幅，基部球根状ならず，絹糸状毛に被われ，淡紫色，中実；担子柄は 2 或は 4 胞子，19—22×5—6μ；胞子は卵形，両側不同，基端鋭頭，平滑，7.5—9×5μ；実質は菌糸組織より成る；褶側嚢体は散生，稜嚢体は群生，棍棒形，便腹状にて短柄を有す，多くは頭状，無色，厚膜，40—50×12—14μ。

所在及産地

泥炭地—秋　　本州

和名

Inocybe neoflocculosa KOBAY.

KOBAYASI, Nagaoa, 2:85, f. 26, D. f. 34. 1952.

Inocybe flocculosa IMAI, Bot. Mag, Tokyo, 55: 515. 1941. (non SACCARDO)

傘は径約 2cm，丸山形，広き中丘を有し；縁は内捲す；表面は淡黄褐色，明かに繊維状軟毛を有し，縁辺は稍々割裂し，綿架状のベール残物を附す；肉は緊緻，帯白色；褶は直生にて茎上に線条を附す，淡黄土色，稍々疎，広幅，稜は白色，粉状；茎は 5×0.45—0.5cm，同幅，基部球根状ならず，淡黄褐色，綿架状，上部類白色，殆ど平滑，基端黴状をなす；担子柄は 2 或は 4 胞子，30—37×7—8.5μ；胞

子はシトロン形，褐色，平滑，6—8×4.5—5μ；実質は長き有隔菌糸より成り柔組織状ならず；褶側嚢体は著しく，薄或は厚膜，甚だ長く，85—100×14—16μ；紡錘形，屢々結晶を冠す，無色，稜嚢体は散生，稜無性細胞は密集し，棍棒形或は嚢状，薄膜，無色，15—50×7—12μ。

所在及産地

カラマツ林地上一秋　本州

和名

Inocybe geophylla (SOW. ex FR.) QUÉL.

シロトマヤタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:182. 1872; Enchir. Fung. 97. 1886—GILLET, Champ. Fr. 520, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1: 464. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 211. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:784. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 727. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1:585. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:199. 1893; Ann. Bot. 18:477, pl. 32, f. 1. 7—10. 1904; Brit. Basid. 267. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 244. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 163. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 140. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 453, pl. 91, f. 5—6. 1912—MURRILL, Mycologia, 105, pl. 137, f. 6. 1914—RICKEN, Blätterp. 105, pl. 30, f. 2. 1915—LANGE, Agar. Denm. 3:34. 1917; Fl. Agar. Dan. 3:75, pl. 112, f. E. 1938. pr. p.—KAUFFMAN, Agar. Mich. 465. 1918; N. Am. Fl. 10:252. 1924—REA, Brit. Basid. 195. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1: pl. 100. 1928; Agaricales, 1:236. 1948—BRESADOLA, Icon. Myc. 16: pl. 752. 1930—HEIM, Gen. Inocybe, 139, f. 110, pl, 1, f. 1—2. 1931—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:220. 1938—SINGER, Agaricales, 529. 1849—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 165, pl. 65, f. 4. 1950—KOBAYASI, Nagaoa, 2:86, f. 35, pl. 1, f. N. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 221. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:357. 1957.

(本郷，植．研．雑．26:24, f. L-M. 1915—今関及土岐，林．試．研．報．67:44. 1954)

Agaricus inodorus BULL. Champ. Fr. pl. 524, f. 2. 1790.

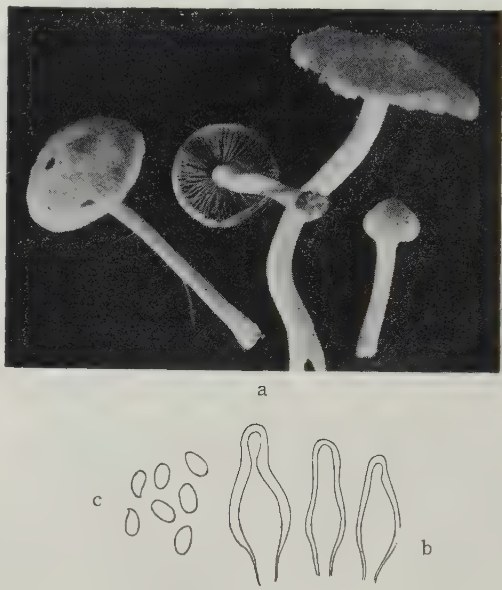
Agaricus geophyllus SOW. Col. Fig. Engl. Fungi, 2: pl. 124. 1799—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 340. 1818—FRIES, Obs. Myc. 2:86. 1818; Syst. Myc. 1:258. 1821; Epicr. Myc. 176. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:346. 1857; Hymen. Eur. 235. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:482. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 156. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:119. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3: pl. 401(no. 440). 1886—KARSTEN, Myc. Fenn. 3: 122. 1876—WINTER, Pilze, 1:688. 1884.

Agaricus argillaceus PERS. Syn. Meth. Fung. 372. 1801.

Agaricus albus SCHM. Enum. Pl. Saell. 309. 1803.

Gymnopus geophilus S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:608. 1821.

子実体は群生或は散生；傘は径 1—1.8cm，開張扁平，中丘あり；表面は乾燥，絹白色或は中央淡黄灰色，幾分光沢あり，放射状繊維を有し，反転鱗片なし，縁に微細鋸歯あり；褶は狭生，帯灰泥土色，稍々疎，肉は臭なし；茎は 2—6×0.2—0.3cm，細長，同幅，絹白色，綿絮状，頂部粉状，充塞或は幾分中空；担子柄は2或は4胞子，20—22×5—6μ；胞子は類卵形，両側不同，平滑，顆粒を含む，淡褐色，7—8×5μ；褶側嚢体は多生，便腹紡錘形，中位の厚膜，50—60×16—18μ，稜嚢体は叢生，嚢状，無色，薄膜或は中位の厚膜。



第161図　シロトマヤタケ
Inocybe geophylla
a．子実体 ×1　b．嚢状体　c．胞子 ×500
（大谷氏）

所在及産地

林地上一夏秋

北海道，本州一欧．北米．阿．亜(小亜．西北)

和名　シロトマヤタケ（白苫屋茸）〔今井〕

f. **squamosa** KOBAY.

ササクレシロトマヤタケ

KOBAYASI, Nagaoa, 2:87, f. 36, pl. 1, f. 0. 1952.

原種とは傘面に鱗片を有するにより異る。

傘は径 1.5—2.5cm，円錐形；表面は乾燥，白色，中央部は淡黄土色，中丘は白色の密集せる小鱗片を有す；褶は直生，淡灰色，のち灰褐色，初め密，便腹状，稜は殆ど全縁；傘は 3—4×0.25—0.4cm，同幅，白色繊維あり，不規則に中空；実質は太き有隔菌糸より成り，柔組織状；担子柄は4胞子，25×7—7.5μ；胞子は斜卵形，平滑，7—7.8×4—4.5μ；褶側嚢体は便腹状，寧ろ厚膜，特に頂部厚し，密生，50—64×12—15μ；稜嚢体は叢生，褶側嚢体より短く，30—42×12—16μ.

所在及産地

地上—秋　本州

和名 ササクレシロトマヤタケ（逆皮白苫屋茸）〔小林〕

Inocybe lilacina (BOUD.) KAUFFM.

ウスムラサキアセタケ

KAUFFMAN, Agar. Mich. 466. 1918; N. Am. Fl. 10:250. 1924—KOBAYASI, Nagaoa, 2:88, f. 37 pl. 1. Q, 1952.

Inocybe geophylla var. *lilacina* BOUD. Icon. Myc. 1:13. 1905—HEIM, Gen. Inocybe, 141, pl. 2, f. 1—2. 1931—LANGE, Fl. Agar. Dan. 3:76, pl. 112, f. G. 1938—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 221. 1953.

傘は径 1—2cm，鐘形～開張丸山形，中丘あり，肉質；表面は放射状線条或は皺を有し，幾分縁は反転す，橙黄土色，中央淡紫色；褶は直生，初め灰色，のち灰褐色，密或は稍々疎，不同，稜は白色房毛あり；茎は 2—3.5×0.15—0.3cm，同幅或は基部太く，傘面と同色にて淡色，繊維状，充塞或は僅か中空；担子柄は4胞子，18—21×7—8μ；胞子は斜楕円形或は卵形，平滑，褐色，8—9×4.4—5μ；実質は細菌糸より成る；褶側嚢体は多生，紡錘形，寧ろ厚膜，44—66×15—17μ；稜嚢体は密生，前者に同じ。

所在及産地

松林地上—秋　本州—北米

和名 ウスムラサキアセタケ（淡紫汗茸）〔小林〕

f. **violacea** KOBAY.

ムラサキアセタケ

KOBAYASI, Nagaoa, 2:88, pl. 1, f. R. 1952.

? *Inocybe geophylla* var. *violacea* (PAT.) HEIM. Gen. Inocybe, 141, pl. 2, f. 4. 1931.

原種とは子実体全部鮮紫色なるにより異る。

所在及産地

地上—秋　・・

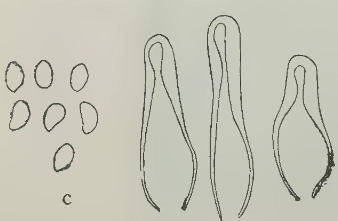
和名 ムラサキアセタケ（紫汗茸）〔小林〕

Inocybe lucifuga (FR. ex FR.) GILL.

GILLET, Champ. Fr. 520, 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 3:544. 1875; Enchir. Fung. 97. 1886—KARSTEN, Hattsv. 1:464. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 211. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:783. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 724. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:198. 1893; Ann. Bot. 18:481. 1904; Brit. Fungi, 269. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:244. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 140. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):454, pl. 89, f. 5—6. 1912—RICKEN, Blätterp. 106. 1915—REA, Brit. Basid. 199. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1:pl. 99, f. 1. 1928; Agaricales, 1:237. 1948—BRESADOLA, Icon. Myc. 16:pl. 751. 1930—HEIM, Gen. Inocybe, f. 135, pl. 13, f. 1—4. 1931—SINGER, Agaricales, 530. 1949—KOBAYASI, Nagaoa, 2:89, f. 38. 1952—HEIM, Champ. Eur. 2:360. 1957.

Agaricus lucifugus FR. Obs. Myc. 2:50. 1818; Syst. Myc. 1:258. 1821; Elench. Fung. 1:32. 1828; Epicr. Myc. 177. 1838; Monogr. Hymen.





第162図 Inocybe lucifuga
a．子実体 ×2/3
b．嚢状体
c．胞子 ×500
（大谷氏）

Suec. 1:345. 1859; Hymen. Eur. 234. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:119. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3: pl. 429, f. a(no. 439). 1886—WINTER, Pilze, 1:689. 1884.

傘は径 1.5—2.5cm, 開張鐘形, 広き中丘を有す, 縁は厚く, 内屈す; 表面は乾燥, 汚黄色或は黄土色, 繊維状, 暗色の圧着せる鱗片を被むる, 縁部は幾分割裂す; 肉は厚し; 褶は直生, 灰色, 密, 不同, 広幅, 稜に細鋸歯あり, 白色, 粉状; 茎は 2.5—5×0.3—0.4cm, 同幅, 基部僅か球根状, 淡藁色或は淡色, 絹状繊維あり, 稀に微細の繊維状鱗片あり; 担子柄は4胞子; 胞子は卵形或は楕円形, 両側不同, 基端鋭し, 平滑, 顆粒を含む, 淡褐色, 7—9×4.5—5μ; 褶側嚢体は散生, 稜嚢体は群生, 小形, 棍棒形, 無色, 37—40×9—13μ。

所在及産地

地上—秋　　本州, 九州—欧

和名

Inocybe rimosa (BULL. ex FR.) QUÉL.

アセタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:180. 1872; Enchir. Fung. 96. 1886—GILLET, Champ. Fr. 519, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:462. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 210. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:775. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 736. 1916—SCHROETER Pilze Schles. 1: 585. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:194. 1893; Ann. Bot. 18:475. 1904; Brit. Fungi, 266, pl. 24, f. 8. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 163. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 137. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):455, pl. 30, f. 3—4. 1912—MURRILL, Mycologia, 4:4, pl. 56, f. 7. 1912—RICKEN, Blätterp. 111, pl. 30, f. 8. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 455. 1918; N. Am. Fl. 10:249. 1924—REA, Brit. Basid. 195. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 150, pl. 74, f. 2. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 15: pl. 741. 1930—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:219. 1938—KOBAYASI, Nagaoa, 2:89, f. 26, E, 39, pl. 1, f. s. 1952.

(P. HENNINGS, Hedwigia, 39, Beibl. 156. 1900—松村, 植. 名鑑, 1:148. 1904—白井, 日. 菌. 目. 44. 1905; ed. 2. 299. 1917; ed. 3. 174. 1927—KAWAMURA, Illus. Jap. Fung. pl. 7, f. 1—4. 1913; 日. 菌. 図説, n. 9. 1929; 食用菌及有毒菌, 72, f. 6, 64. 1931; 日. 菌. 図鑑, 5:505, f. 504. 1954—松浦, 茸類辞典, 122, f. 142. 1933; 応用菌蕈学, 809, f. 626. 1941—小林, 日. 隠. 植. 図. 535, pl. 258, f. 1—3. 1939—牧野, 日. 植. 図鑑, 1023, f. 3066. 1940—今関, 原色きのこ, pl. 17(左). 1942; 及土岐, 林. 試. 研. 報. 67:44. 1954—原, 日. 菌. 目. 165. 1954)

Agaricus rimosus BULL. Champ. Fr. 388. 1791—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 310. 1801—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, 3:323. 1803—FRIES, Syst. Myc. 1:258. 1821; Epicr. Myc. 174. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:342. 1857; Hymen. Eur. 232. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:482. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 155, pl. 8, f. 5. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:168. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi. 1:118. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3: pl. 384(no. 429). 1886—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:121. 1876—WINTER, Pilze, 1:691. 1884.

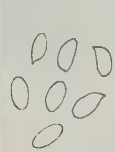
Gymnopus rimosus S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1:604. 1821.

Inocybe virgatula KÜHN. in KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 225. 1953.

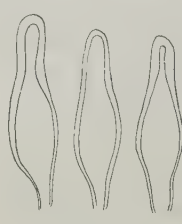
子実体は群生或は散生; 傘は径 2—4cm, 円錐状鐘形, のち開張し中丘を有す, 縁は時に放射状に破れ, 内屈す; 表面は乾燥, 初め淡黄土色, のち濃色なり, 往々紫色を帯ぶるも褐色とならず, 内生繊維あり, 微かに罅裂す; 肉は寧ろ薄く, 白色; 褶は狭生或は歯を有し彎生, 灰褐色, 密, 著しく広幅, 不同, 稜は微かに鋸歯状, 白色房毛あり; 茎は 7—10×0.4—0.6cm, 同幅, 基部稍々球根状, 絹白色或は初め淡紫色, 頂部粉状, 遂に淡黄土色を帯ぶ, 中実; 担子柄は4胞子, 22—26×7—7.5μ; 胞子は長楕円形, 基部狭細, 時に中部溢れ, 基端尖る, 平滑, 8—10×5—5.5μ; 褶側嚢体は密生, 長棍棒形或は鈍頭紡錘形, 厚膜, 無色, 60—74×12—17μ, 稜嚢体は多生或は散生, 前者と同形。



a



c



b

第163図 アセタケ
Inocybe rimosa
a. 子実体 ×2/3　b. 嚢状体
c. 胞子 ×550　(大谷氏)

所在及産地

林地上—夏秋　北海道, 本州, 九州—欧. 北米. 亜(西比)

和名 アセタケ（汗茸）〔川村〕
ドクスギタケ（毒杉茸）〔白井〕

f. squarrosa KOBAY.

ササクレアセタケ

KOBAYASI, Nagaoa, 2:90, f. 26, F, f. 40. 1952.

原種より傘面に著しき鱗片あるを異なれりとす。

傘は径 3—4cm，開張円錐形或は丸山形，縁は真直，有襞にて裂く；表面は淡黄土色，繊維状，中央部に反転する鱗片を被むりて幾分網目あり；肉は白色，厚し；褶は便腹状狭生，灰色，稍々疎，広幅，稜は鋸歯状，白色，粉状；茎は 7—9×0，4—0.6cm，同幅或は基部に向つて太く，細微繊維状，帯白色或は淡黄土色，上方粉状，充塞，基端黴状；担子柄は4胞子；胞子はレモン形或は両側不同，平滑，基端尖り，顆粒を含む，淡黄土色，7—9×4.5—5μ；褶側嚢体は群生，稜嚢体は叢生，紡錘形，幾分厚膜，無色，56—68×12—15μ。

所在及産地

カラマツ植林地上一秋　本州

和名 ササクレアセタケ（逆皮汗茸）〔今関及土岐〕

Inocybe microspora LANGE

コアセタケ

LANGE, Agar. Denm. 3:38, pl. 3, f. 8. 1917; Fl. Agar. Dan. 3:74, pl. 113, f. c. 1938—KOBAYASI, Nagaoa, 2:91, f. 41, pl. 1, f. T. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 227. 1953.

（今関及土岐，林．試．研．報．67:44. 1954）

Inocybe descissa var. *microspora* HEIM, Gen. Inocybe, 236, f. 156, pl. 20, f. 2—3. 1931—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:239. 1948.

傘は径 2—2.5cm，開張し広き中丘あり，縁は真直；表面は内生繊維あり，鱗片なし，暗褐色，縁に向つて淡色となる，僅か割裂す；肉は白色；褶は狭生，灰褐色，密或は稍々疎，狭幅，稜は白色，粉状；茎は 4.5—6×0.3—0.4cm，同幅，基部球根状，絹状，殆ど平滑，淡黄土色，上部帯紫色，下部帯白色，捩曲，中実；担子柄は4胞子，25×6—7μ；胞子は小形，卵形或は楕円形，両側不同，基端尖る，平滑，淡褐色，6—7.5×4—4.5μ；褶側嚢体は多生，紡錘形にて鈍頭，厚膜，無色，50—56×12—15μ。

所在及産地

地上一秋　本州一欧

和名 コアセタケ（小汗茸）〔今関及土岐〕

Inocybe hirsuta (LASCH) QUÉL.

コツノアセタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:178. 1872; Enchir. Fung. 94. 1886—GILLET, Champ. Fr. 513. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:454. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:764. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 709. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:182. 1893; Brit. Fungi, 273. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. pfl.-fam. 1, 1**: 244. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 133. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):461. 1912—RICKEN, Blätterp. 112. 1915—REA, Brit. Basid. 206. 1922—LANGE, Agar. Denm. 5:52. 1923; Fl. Agar. Dan. 3:80, pl. 114, f. F. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1:pl. 90. 1929; Agaricales, 1:232. 1948—HEIM, Gen. Inocybe, 151. 1931—BRESADOLA, Icon. Myc. 15:pl. 721, f. 2. 1933—SINGER, Agaricales, 529. 1949—HEIM, Champ. Eur. 2:358. 1957.

（今関及土岐，林．試．研．報．79:4, f. 5. 1955）

Agaricus hirsutus LASCH, Linnaea, 4:546. 1829—FRIES, Epicr. Myc. 171. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:336. 1857; Hymen. Eur. 227. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:484. 1884—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 150. 1883—WINTER, Pilze, 1:695. 1884.

Agaricus cervicolor PERS. Syn. Meth. Fung. 325. 1801.

Agaricus mutatus PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 24:69. 1872.

Hebeloma mutatum SACC. Syll. Fung. 5:797. 1887.

Inocybe mutata MASSEE, Ann. Bot. 18:496. 1904—KAUFFMAN, N. Am. Fl. 10:255. 1924—KOBAYASI, Nagaoa, 2:92, f. 42. 1952.

Inocybe relicina RICK. Blätterp. 112, pl. 31, f. 2. 1915.

Inocybe cervicolor KÜHN. et ROMAGN. Fl. Analyt. Champ. Super. 219, f. 329. 1953.

傘は径 1—2cm，初め円錐状鐘形，のち丸山形～開張，鈍き中丘あり；表面は乾燥，赤褐～黒褐色，繊維状にて多少反転する密なる鱗片を被むる，縁は僅か内屈或は真直，繊維状，薄し；肉は緊緻，白色，空気に触れて僅か桃色となる，味むしろ苦し；褶は直生，初め淡色，のち暗褐色となる，かなり広幅，甚だしく密ならず，稜は白粉状にて微細鋸歯あり；茎は 4—6×0.2—0.3cm，同幅，基部やや太く，傘面と同色或は淡色，反転する微細褐色鱗片あり，頂部白粉状，基部白色軟毛あり，緊緻，充塞；胞子は楕円状円壔形，扁桃形或は類腎臓形，平滑，淡灰褐色，9—12×5—6.5μ；褶側嚢体なし，稜嚢体は叢生，

棍棒形，薄膜，26—40×7—12μ。

所在及産地

山地林内地上一夏秋　　本州一欧.北米

和名 コツノアセタケ（小角汗茸）〔今関及土岐〕

Inocybe fastigiata (SCHAEFF. ex FR.) QUÉL.

オオキヌハダトマヤタケ

QUÉLET, Champ, Jura Vosg. 1:180. 1872; Enchir. Fung. 96. 1886—GILLET, Champ. Fr. 519. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:461. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:779. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 731. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:192. 1893; Ann. Bot. 18:495. 1904; Brit. Fungi, 273. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:244, f. 117, E. 1900—W. G, SMITH, Brit. Basid. 137. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):449, pl. 91, f. 1—2. 1912—RICKEN, Blätterp. 110, pl. 31, f. 1. 1915—LANGE, Agar. Denm. 3:40. 1917; Fl. Agar. Dan. 3:82, pl. 114, f. B. 1938—KAUFFMAN, Agar. Mich. 457. 1918; N. Am. Fl. 10:258. 1924—REA, Brit. Basid. 206. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1: pl. 92. 1925; Agaricales, 1:233. 1948—BRESADOLA, Icon. Myc. 15:744. 1930—HEIM, Gen. Inocybe, 174, f. 124. pl. 8. 1931—SINGER, Agaricales, 530. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 167, pl. 65, f. 5. 1950—KOBAYASI, Nagaoa, 2:92, f. 26, G, 43, pl. 1, f. A. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 219. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:359, f. 246. 1957.

（今関及土岐，林. 試. 研. 報. 67:44. 1954—今関及本郷，原色日. 菌. 図鑑，66，f. 161，pl. 29，f. 161. 1957）

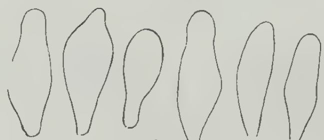
Agaricus fastigiatus SCHAEFF. Fung. Bavar. 1:pl. 26. 1762—FRIES, Epicr. Myc. 174. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:342. 1857; Hymen. Eur. 231. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 155. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:167. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:117. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3:pl. 383(no. 426). 1886—WINTER, Pilze, 1:691. 1884.

Clypeus fastigiatus KARST. Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 212. 1889.

傘は径 2.5—4.5cm，円錐状鐘形，のち稍々開張し，通常尖る中央あり；表面は乾燥，帯黄黄土色，中丘暗褐色，内生放射状纎維あり，細微の割裂あり，縁部裂く，内屈或は真直；肉は白色；褶は狭生或は線垂生，灰褐色，密，狭幅，稜に細鋸歯あり；茎は 3.5—6×0.4—0.7cm，稍々同幅或は上方に漸細，傘面と同色或は淡帯白色，細鱗片を有し或は纎維状，通常基部球根状ならず；担子柄は2或は4胞子，7—8×2.5—3μ；胞子は楕円形，平滑，8—10×5—6μ；褶側嚢体なし，稜無性細胞は密に叢生，棍棒形，薄膜，25—32×10—12μ；有毒。



a



b



c

第164図　オオキヌハダトマヤタケ
Inocybe fastigiata
a. 子実体 ×2/3　b. 嚢状体　c. 胞子 ×550
（大谷氏）

所在及産地

林地，草原地上一夏秋

本州，九州一欧.北米.南米

和名 オオキヌハダトマヤタケ（大絹肌苫屋茸）〔小林〕

Inocybe cookei BRES.

キヌハダトマヤタケ

BRESADOLA, Fungi Trid. 2:17, pl. 121. 1892; Icon. Myc. 15:pl. 748. 1930—SACCARDO, Syll. Fung. 11:52. 1895; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 735. 1916—MASSEE, Ann. Bot. 18:492. 1904; Brit. Fungi, 274. 1911—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):457. 1912—LANGE, Agar. Denm. 3:39, 1917; Fl. Agar. Dan. 3:83, pl. 114, f. A. 1938—KAUFFMAN, Agar. Mich. 458. 1918; N. Am. Fl. 10:257. 1924—REA, Brit. Basid. 205. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1:pl. 91. 1927; Agaricales, 1:234. 1948—BRESADOLA, Icon. Myc. 15:748. 1930—HEIM, Gen. Inocybe, 194, f. 133, pl. 3, f. 3. 1931—SINGER, Agaricales, 530. 1949—KOBAYASI, Nagaoa, 2: 93, f. 26, H, 44. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI,

Fl. Analyt. Champ. Super. 218. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:380. 1957.
(今関, 原色きのこ, pl. 17(右). 1942—今関及本郷 原色日. 菌. 図鑑, 66. 1957)

傘は径 1.5—3cm, 円錐形, のち開張し, 殆ど扁平となる; 表面は乾燥, 淡黄色, 黄土色, 絹状繊維あり, 放射状線条あるも明なる割裂せず, 縁は真直; 褶は狭生, 灰褐色, 密, 狭幅, 薄し, 稜は細鈍歯あり, 帯白色; 肉は白色, 寧ろ厚し; 茎は 3—4×0.25—0.4cm, 同幅, 基部球状, 殆ど白色或は淡黄土色, 絹状光沢あり, 繊維あり, 中実; 担子柄は 4, 稀に 2 胞子, 17—23×6—8μ; 胞子は楕円形, 幾分屈曲し, 平滑, 淡灰褐色, 6.5—8×3.7—4.5μ; 褶側嚢体なし, 稜無性細胞は嚢状, 薄膜。

所在及産地

地上—夏秋　　本州—欧. 北中米

和名 キヌハダトマヤタケ (絹肌苫屋茸)〔小林〕

Inocybe avellanea KOBAY.

KOBAYASI, Nagaoa, 2:94, f. 45, pl. 1. u. 1952.

傘は径 1.5—2.5cm, 開張し中丘を有し, 或は稍々円錐形; 表面は淡灰黄土色, 中央暗色, 初め無毛, のち放射状繊維を生じ, 或は縁に向つて割裂す; 褶は狭生, 初め淡黄色, のち灰黄土色, 密, 稜は鋸歯状; 茎は 3—4×0.4cm, 同幅, 基部に於て僅か太く, 淡灰色或は殆ど白色, 稍々繊維状, 中空; 担子柄は 4 胞子, 30×8μ; 胞子は卵形或は楕円形, 両側不同, 平滑, 黄土色, 7—11×5—7μ; 嚢状体なし, 稜の無性細胞は叢生, 棍棒形, 無色, 25—44×7—15μ。

所在及産地

地上—秋　　本州

和名

Inocybe maculata BOUD.
シラゲアセタケ

BOUDIER, Bull. Soc. Myc. Fr. 32:283, pl. 9, f. 2. 1885—SACCARDO, Syll. Fung. 5:775. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 715. 1916—MASSEE, Ann. Bot. 18:497. 1904—HEIM, Gen. Inocybe, 196, f. 134, pl. 12, f. 2. 1931—LANGE, Agar. Denm. 12:87. 1938; Fl. Agar. Dan. 3:82, pl. 116, f. E. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:233 1948—SINGER, Agaricales, 530. 1949—KOBAYASI, Nagaoa, 2:95, f. 26, I, 46, pl. 1, f. c. 1952—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 75. 1956—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 218. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:360, f. 247. 1957.

傘は径 1.8—4cm, 円錐形, のち開張し稍々円錐形, 縁は内屈或は真直; 表面は乾燥, 著しく繊維あり, 最後に割裂す, 紫褐色, 中丘は同色にて濃色ならず, 圧着せる鱗片によつて白斑を生ず; 褶は狭生, 初め藍灰色, のち灰褐色, 密, 薄し, 稜は厚く, 帯白色; 茎は 3—5.5×0.3—0.4cm, 同幅, 白色～黄土色, 絹状光沢を有し, 細線条あり, 粉状, 上部にて特に著し; 担子柄は 4 胞子, 22—26×5—7μ; 胞子は広楕円形或は菜豆形, 平滑, 顆粒を含む, 7—8.5×5—5.5μ; 嚢状体なし, 稜無性細胞は棍棒形, 或は類紡錘形, 幾分厚膜或は薄膜, 無色, 叢生, 50—60×12—15μ。

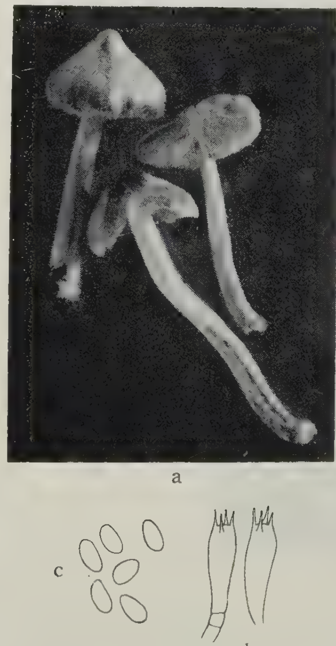
所在及産地

地上—夏　　本州—欧. 北米

和名 シラゲアセタケ (白髪汗茸)〔小林〕

Inocybe aureostipes KOBAY.
カバイロトマヤタケ

KOBAYASI, Nagaoa, 2:95, f. 47, pl. 1, f. E. 1952.



第165図　カバイロトマヤタケ
Inocybe aureostipes
a. 子実体 ×1/2　b. 担子柄
c. 胞子 ×500　（大谷氏）

傘は径 3—4cm, 円錐形, のち幾分開張す, 縁は真直; 表面は鮮褐色, 繊維状, 絹様, 細微割裂あり; 肉は淡黄土色; 褶は狭生, 灰褐色, 密, 狭幅, 稜は細鋸歯ありて粉状; 茎は 5—6×0.4—0.7cm, 同幅, 繊維あり, 殆ど無毛, 上半部鮮橙褐色, 基部の方絹白色; 担子柄は 2 或は 4 胞子, 20—27

×7μ; 胞子は卵形或は楕円形，平滑，基端尖り或は鈍し，淡黄土色，7—9×4.5—5μ; 嚢状体なし，稜の無性細胞は嚢状，幾分伸長し，有柄，叢生，無色，12—15×20—27μ。

所 在 及 産 地

地上—秋　　本州

和 名　カバイロトマヤタケ（樺色苫屋茸）

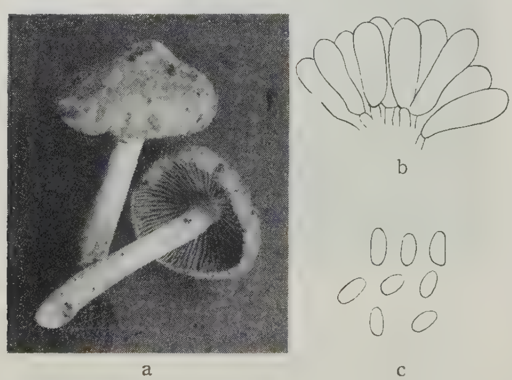
〔今関及土岐〕

Inocybe umbrinella BRES.
オオトマヤタケ

BRESADOLA, An. Myc. 3:161. 1905; Icon. Myc. 15:pl. 738. 1930—SACCARDO, Syll. Fung. 21: 158. 1912; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 733. 1916 —KAUFFMAN, N. Am. Fl. 10:259. 1924—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:233. 1948—KOBAYASI, Nagaoa, 2:96, f. 48. 1952.

Inocybe fastigiata var. *umbrinella* HEIM, Gen. Inocybe, 188, f. 125, d-f. 128, pl. 10, f. 2. 1931.

子実体は群生；傘は径 2.5—6cm，薄肉質，初め類円錐形，のち開張し中丘あり；表面は細繊維あり，灰褐或は淡褐色，放射状線条あり，のち割裂す，中丘は濃色，縁は真直，時に内屈或は反転す；肉は白色，幾分脆し，臭なし；褶は狭生，淡灰褐色，密，薄く，不同，稜は小鋸歯あり，穀粉状；茎は 4—9×0.5—0.8cm，同幅，截頭或は幾分球根状の基部を有す，殆ど白色或は淡黄土色，無毛，光沢あり；担子柄は4胞子，25×10μ; 胞子は菜豆形，平滑，



第166図　オオトマヤタケ Inocybe umbrinella
a．子実体 ×1/2　b．稜無性細胞　c．胞子 ×550
（大谷氏）

顆粒を含み，淡黄土色，8—11×5μ; 嚢状体なし，稜無性細胞は叢生，薄膜，無色，34—60×10—15μ。

所 在 及 産 地

混淆林地上—夏秋　　本州，九州—欧．北米

和 名　オオトマヤタケ（大苫屋茸）〔小林〕

f. pallidula KOBAY.

KOBAYASI, Nagaoa, 2:97, f. 49, pl. 1, f. J. 1952.

? *Inocybe fastigiata* var. *umbrinella* HEIM, Gen. Inocybe, pl. 11, f. 2. 1931.

原種より傘は縁に向つて帯オリーブ黄土色～帯白色に褪色せるを異点とす。

傘は径約 3cm，開張円錐形，縁は真直；表面は繊維状，細割裂あり，中丘は灰褐色，縁に向つて帯オリーブ黄土色に褪色す，周辺は帯白色，幾分絹様光沢あり，肉は帯黄色，厚し；褶は狭生，藍灰色，密，甚だ狭幅にて幅約 1.5—2mm，稜は帯白色，房毛あり；茎は 7×0.6cm，僅か上方に漸細，絹白色，基部汚褐色，捩曲す，中実；担子柄は4胞子，25—27×8.5—10μ; 胞子は類菜豆形，7—10×5—5.5μ; 嚢状体なし，稜無性細胞は棍棒形，薄膜，無色，密に叢生，30—40×9—10μ。

所 在 及 産 地

広葉樹林地上—秋　　本州

和 名

(2) Clypeus (KARST.) LANGE
ニセトマヤタケ亜属

Inocybe montana KOBAY.
ミヤマアセタケ

KOBAYASI, Nagaoa, 2:97, f. 50. 1952.

子実体は群生，傘は甚だ小形，径 5—11mm，通常 8—9mm，凹形或は殆ど扁平，中丘なし；表面は乾燥，褐色の地色上に放射状に並ぶ灰色の産毛を密布す，老時無毛となる，光沢並に粘性なし，縁に幾分房毛あり；肉は淡褐色；褶は狭生，灰褐色，疎，広幅，稜に鋸歯あり，灰色；茎は甚だ短く，1.2—1.5×0.08—0.12cm，稍々同幅，幾分基部球状，暗褐色，密なる茎嚢体のために痂皮状をなす，屈曲；傘の上表菌糸は稍々厚膜にて殆ど無色，分岐し，菌絆を有す；担子柄は甚だ小形，2—4 胞子，12—15×5—6μ; 胞子は大体に於て卵形或は楕円形にて瘤を有し，淡褐色，6—6.5×4.5—5μ; 褶側嚢体は散生，便腹状或は截頭紡錘形，厚膜，屢々結晶を冠す，無

色，46—66×11—13μ，稜嚢体は幾分群生，茎嚢体は著しく，側嚢体と同形，叢生或は散生，嚢状薄膜の無性細胞と混在す。

所在及産地

山岳針葉樹林地上—夏　本州

和名 ミヤマアセタケ（深山汗茸）〔小林〕

Inocybe plumosa (BOLT. ex FR.) QUÉL.
クロニセトマヤタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:179. 1872; Enchir. Fung. 94. 1886—GILLET, Champ. Fr. 515. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:455. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 207. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:763. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2: 183. 1893—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 244. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 133. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 460. 1912—RICKEN, Blätterp. 109, 1915—LANGE, Agar. Denm. 3: 45. 1917—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 2: pl. 103. 1926 (?)—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 224. 1938—KOBAYASI, Nagaoa, 2: 99, f. 51. 1952.

（原，日．菌．目．165．1954）

Agaricus plumosus BOLTON, Hist. Fung. 33, pl. 33. 1788—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 347. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1: 256. 1821; Epicr. Myc. 172. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1: 337. 1857; Hymen. Eur. 228. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 153. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1: 114. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3: pl. 425, f. a (no. 409). 1890; Handb. Austr. Fungi, 46. 1892—WINTER, Pilze, 1: 694. 1884.

Gymnopus plumosus S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1: 609. 1821.

Inocybe carpta BRES. Fungi, Trid. 1: 50, pl. 54. 1884; Icon. Myc. 16: pl. 756. 1930—RICKEN, Blätterp. 102, pl. 29, f. 2. 1915—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 723. 1916.

Astrosporina plumosa REA, Brit. Basid. 214. 1922.

子実体は群生或は孤生；傘は径 1.8—2.3cm，鐘状円錐形，中丘を有す，縁は真直或は幾分反転す；表面は暗褐色にて紫色を帯び，中央殆ど黒色，明かに反転する鱗片を密に放射状に並列す，光沢なく，割裂せず；肉は淡色或は帯白色，味なく土臭あり；褶は狭生，灰褐色，密，不同，稜に房毛あり，帯白色；茎は 3—3.5×0.2—0.3cm，上方に漸細し，基部太きも盤状ならず，淡黄土色，綿絮状或は纖維状，光沢なし，充塞；担子柄は2或は4胞子，25×7μ；胞子は歪方形にて通常 4—6 稜，数個の明かなる円錐形の突起を有す，6—8×5—6μ；嚢状体は褶側及稜に散生，棍棒形，幾分薄膜，無色，42—51×11—15μ。

所在及産地

山地腐株上蘚間—夏秋　北海道，本州—欧．中米

和名 クロニセトマヤタケ（黒贋苫屋茸）〔今井〕

Inocybe lanuginella (SCHROET.) MIGULA
ハイチャトマヤタケ

MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 451. 1912—KAUFFMAN, Agar. Mich. 449. 1918—LANGE, Fl. Agar. Dan. 3: 87, pl. 117, f. A. 1938—KOBAYASI, Nagaoa, 2: 99, f. 52. 1952.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，67，f. 168，pl. 29，f. 168．1957）

Astrosporina lanuginella SCHROET. Pilze Schles. 1: 577. 1889—REA, Brit. Basid. 209. 1922.

? *Inocybe cicatricata* ELL. et EV. Jour. Myc. 5: 25. 1889—KAUFFMAN, N. Am. Fl. 10: 236. 1924.

子実体は群生；傘は径 16—30mm，円錐形，開張し殆ど扁平，通常中丘あり，縁は真直或は往々内屈し，4—6 裂す；表面は乾燥，光沢なく，灰褐色，周辺淡色，細かき纖維或は鱗片あり，中丘は屢々網目ありて暗紫褐色を呈す；肉は白色；褶は直生，淡灰色，中位に密，不同，稜は全縁，細微の房毛あり；茎は 3—4.5×0.2—0.3(0.5)cm，基部盤状ならずして幾分有毛，表面に絹状纖維あり，淡褐色，上方光沢ありて淡色；担子柄は2或は4胞子，30×7μ；胞子は長多角形，不明瞭なる粒を有し，黄土色或は幾分帯紫色，7—11×5—6μ；褶側嚢体は散生，紡錘形或は細頸壜形，厚膜，往々長柄あり，37—67×16—17μ；稜嚢体は叢生。

所在及産地

広葉樹下地上，苗圃—夏秋　本州—欧．北米．阿

和名 ハイチャトマヤタケ（灰茶苫屋茸）
〔今関及本郷〕

Inocybe squamulosa KOBAY.
ケダチアセタケ

KOBAYASI, Nagaoa, 2: 100, f. 26, J. f. 53. 1952.

傘は径 1—2cm，円錐形，のち開張し扁平或は中丘あり；表面は栗褐色或は菫褐色，細微の反転せる灰色の小鱗片に被わる，周辺は裂け，稍々割裂す；肉は薄く，淡栗褐色；褶は狭生，淡灰色或は黄土色，幾分密，広幅，便腹状，稜に細鋸歯あり；茎は 2—3.5×0.1—0.18cm，同幅，基部球状ならず，或は

菌糸塊を有して幾分太し，淡黄土色，細微穀粉状；担子柄は 4 或は 2 胞子，23—26×7μ；胞子は大体に於て卵形，円壔形或は多角形にて明かなる瘤を有す，黄土色，7.5—8.5×5—6μ；褶側嚢体及稜嚢体は散生，紡錘形にて基端截頭，無色，厚膜，44—50×10—12μ。

所在及産地
地上—夏秋　　　　本州
和名　ケダチァセタケ（毛立汗茸）〔小林〕

Inocybe polycystidiata KOBAY.

KOBAYASI, Nagaoa, 2:101, f. 54. 1952.

子実体は小形なるも頑丈にて緊緻，傘は径 0.7—2cm，円錐形或は丸山形，のち開張し扁平となり，中丘を有す，縁は厚く，真直或は内捲す；表面は幾分軟毛ありて，稍々粘性，橙褐色，中丘濃色；褶は狭生，初め淡灰色，のち淡赤褐色，幾分疎，狭幅，厚く，緊緻，裂ける，稜は鈍き鋸歯あり；茎は中心或は偏心生，同幅，基部稍々球状，無毛，線条あり，黄土色，緊緻，中実；胞子は甚だ小形にて多角形，瘤を有せず，淡赤褐色，5—6.5×4.5—5μ；褶側嚢体及稜嚢体は著しく，洋独楽形或は紡錘形，厚膜，屢々結晶を冠す，無色，50—70×10—15μ，茎嚢体は明かにて褶側嚢体に同じ。

所在及産地
地上—秋　　　　本州
和名

Inocybe umbratica QUÉL.

シロニセトマヤタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 12:500. pl. 6, f. 7. 1883—SACCARDO, Syll. Fung. 5:787. 1887—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:243. 1900—RICKEN, Blätterp. 101. 1915—KAUFFMAN, N. Am. Fl. 10:241. 1924—BRESADOLA, Icon. Myc. 15:pl. 734, f. 2. 1930—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 2: pl. 104, f. 3. 1903; Agaricales, 1, 244. 1948—HEIM, Gen. Inocybe, 143, f. 111. 1931—IMAI, Jour. Facul. Agar. Hokkaido Imp. Univ. 43: 222. 1938—SINGER, Agaricales, 529. 1949—KOBAYASI, Nagaoa, 2:102, f. 55, pl. 1, f. D. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 230. 1953.
（今関，原色きのこ，pl. 17(中). 1942；及土岐，林. 試. 研. 報. 67:44. 1954—原，日. 菌. 目. 165. 1954—松田及本郷，植. 研. 雑. 30:261. 1955）

Inocybe commixta BRES. Fung. Trid. 1:53, 103, pl. 58, f. 2. 1884—SACCARDO, Syll. Fung 5:787. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 727. 1916.

Inocybe leucocephala BOUD. Bull. Soc. Bot. Fr. 32:282, pl. 9, f. 1. 1885—SACCARDO, Syll. Fung. 5:765. 1887—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:244. 1900.

Inocybe geophylla var. *umbratica* QUÉL. Enchir. Fung. 97. 1886.

Inocybe umbratica var. *leucocephala* QUÉL. Fl. Myc. 103. 1888.

Inocybe infida MASS. Ann. Bot. 18:467. 1904; Brit. Fungi, 264. 1911.

Astrosporina infida REA, Brit. Basid. 209. 1922.
（川村，日. 菌. 図鑑，5:509, f. 505. 1954）

子実体は孤生；傘は径 2—3.5cm，円錐状鐘形，のち開張し中丘あり，放射状に割裂し，縁は内捲或は反転す；表面は平滑，絹白色にて微かに灰色を帯ぶ，乾燥；肉は白色，臭悪く，味殆どなし；褶は離生，淡菫褐色，密，稜は微細鋸歯ありて粉状；茎は 2.5—5×0.4—0.8cm，同幅，通常基部洋独楽形，白色にて青色を帯び，平滑，無毛，中実；担子柄は 4 胞子，21—23×5.5—7μ；胞子は大体方形或は多角形，有粒，黄土色，7—7.5×3—5μ；褶側嚢体は散生或は多生，中等大，嚢状，紡錘形或は不規則に屈曲す，無色，厚膜，46—74×11—20μ，稜嚢体は同様なるか或は嚢状，叢生。

所在及産地
林地上—秋　　　　北海道，本州—欧．北米
和名　シロニセトマヤタケ（白贋苫屋茸）〔今井〕
　　　シロアセタケ（白汗茸）〔川村〕

Inocybe lutea KOBAY. et HONGO

キイロアセタケ

KOBAYASI, Nagaoa, 2:103, f. 56, pl. 1, f. H. 1952—HONGO, Bull. Facul. Lib. Arts Educ. Shiga Univ. 3:50, f. 1, G-I. 1954.
（今関及本郷，原色日. 菌. 図鑑，68, f. 169, pl. 29. f. 169. 1957）

子実体は散生或は群生；傘は径 2.5—3cm，或はそれ以上に及び，鈍円錐形，のち丸山形～開張，通常鈍中丘あり，縁は初め内屈す；表面は橙黄色にて放射状に並ぶ黄土色～褐色の纖維を有す，周辺屢々割裂し，中盤は網目状に割裂す，縁に幼時黄色，纖維状にて寧ろ早失性の蜘網膜あり；肉は淡黄色，中盤に於て中位に厚く，縁に於て薄し，緻密，臭は明かにて幾分沃度の如し；褶は狭生，初め黄色，速にオリーブ色となる，密，幅 2—3mm，稜は平坦；茎は 2.5—3.5×0.3—0.5cm，同幅或は上方に僅か

漸細，基部球根状，橙黄色，屢々球根部より上部に縦の褐色線条あり，頂部粉状，中実或は中空；胞子は不規則なる円壔形にて瘤を有し，黄土色，7—8×4.5—5.5μ；担子柄は4胞子，26—30×6.5—7.5μ；褶側嚢体は散生～多生，棍棒形～紡錘形，厚膜，先端に往々粒状分泌物を附す，淡黄色，43—62×13.5—22μ；稜嚢体は叢生，前者に同じ，35—55×11—21μ；食毒不明。

所在及産地
林内地上—夏秋　本州

和名　キイロアセタケ（黄色汗茸）〔小林〕

Inocybe trechispora (BERK.) KARST.

KARSTEN, Hattsv. 1:465. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:789. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 707. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2: 201. 1893; Ann. Bot. 18:468. 1904; Brit. Fungi, 263. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 243. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 141. 1903—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 447, pl. 88, f. 3—4. 1912—RICKEN, Blätterp. 101. 1915—BRESADOLA, Icon. Myc. 16: pl. 766, f. 1. 1930—HEIM, Gen. Inocybe, 137, f. 109. 1931—LANGE, Fl. Agar. Dan. 3:88, pl. 118, f. B. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:243. 1948—SINGER, Agaricales, 529. 1949—KOBAYASI, Nagaoa, 2:104, f. 57. 1952.

Agaricus trechispora BERK. Outl. Brit. Fung. 156, pl. 8, f. 6. 1860—FRIES, Hymen. Eur. 236. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:118. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3: pl. 403, f. a(no. 443). 1886.

Astrosporina trechispora REA, Brit. Basid. 209. 1922.

Inocybe mixtilis BRITZ. KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 231. 1953.

傘は径 1.5—2.5cm，初め円錐形，のち開張し扁平となり，中丘を有す，縁は真直或は反転し，裂く表面は稍々粘性，中丘は淡黄土色，他は藁色或は帯黄淡褐色，圧着せる纎維あり；褶は直生或は線条を有する垂生，帯紅灰色或は灰褐色，密或は稍々疎，寧ろ狭幅，稜は微かに穀粉状；茎は 3—4×0.2—0.3cm，同幅，淡黄土色，無毛或は細粉状，真直或は撓曲，中実；担子柄は4胞子，24—26×6—7μ；胞子は多角形，明かなる鈍き瘤を有す，褐色，6—9×5—6μ；実質は厚角組織状，褶側嚢体は多生，長紡錘形，厚膜，無色，著しく抽出し，42—60×10—15μ，稜嚢体は叢生。

所在及産地
地上　本州—欧

和名

Inocybe coerulescens KOBAY.
アオフアセタケ

KOBAYASI, Nagaoa, 2:104, f. 58. 1952.

傘は径約 6cm，開張し，幾分漏斗形，縁は内捲す；表面は灰褐色，放射状褐色纎維の線条及び細鱗片を被むり，熟時中央著しく藍色を呈す；肉は幾分悪臭あり；褶は直生，暗灰色，密；茎は約 7.5×0.9cm，同幅，基部幾分球根状，微細の紐状鱗片あり，充塞；担子柄は4胞子，19—23×6—7.5μ；胞子は多角形にて瘤を有し，黄土色，7—11×6.5—7μ；褶側嚢体は甚だ大形，散生，紡錘形或は便腹状，厚膜，74—80×20—22μ，稜嚢体は同形。

所在及産地
地上—夏　本州

和名　アオフアセタケ（青斑汗茸）〔小林〕

Inocybe praetervisa QUÉL.
ニセアセタケ

in BRESADOLA, Fung. Trin. 1:35, pl. 38. 1883—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 12:500. 1883; Enchir. Fung. 96. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5:782. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 729. 1916—REA, Trans. Brit. Myc. Soc. 2:62, pl. 5, f. 2. 1903—MASSEE, Ann. Bot. 18:466. 1904; Brit. Fungi, 264. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 138. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 449. 1912—RICKEN, Blätterp. 100, pl. 29, f. 3. 1915—KAUFFMAN, N. Am. Fl. 10: 238. 1924—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 2: pl. 106. 1930; Agaricales, 1:245. 1948—BRESADOLA, Icon. Myc. 16: pl. 760. 1930—HEIM, Gen. Inocybe, 315, f. 187, pl. 30, f. 1—2. 1931—LANGE, Fl. Agar. Dan. 3:84, pl. 115, f. A. 1938—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:223. 1938—SINGER, Agaricales, 531. 1949—KOBAYASI, Nagaoa, 2:105, f. 59. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 231. 1953.

（原，日．菌．目．165. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，67, f. 166, pl. 29, f. 166. 1957）

Agaricus devulgatus BRITZ. Derm. Melanosp. 149, pl. 232, f. 140. 1883.

Inocybe devulgata SACC. Syll. Fung. 5:782. 1887.

Astrosporina praetervisa SCHROET. Pilze Schles. 1:576. 1889—REA, Brit. Basid. 209. 1922.

子実体は孤生；傘は径 3—6 cm，円錐状鐘形，のち開張し中丘あり；表面は湿時稍々粘性，帯黄黄土色或は黄土色，内生繊維あり，中央無毛，細かく割裂す，縁は縦線ありて屢々裂く；肉は白色，臭不快，味なし；褶は狭生，灰褐色，密，稜に白色房毛あり；茎は 4—8×0.4×0.8 cm，同幅，基部凹頭球根を有す，帯白色或は藁色，絹状，頂部白粉状，中実；胞子は楕円形にて瘤を有し，8—10×6—7 μ；褶側及稜嚢体は便腹状紡錘形，厚膜，45—60×17—19 μ；有毒か。

所在及産地

針葉樹林地上—秋　北海道，本州—欧．北中米

和名 ニセアセタケ（贋汗茸）〔小林〕
アセタモドキ（擬汗茸）〔今井〕
（異物同名あり）

Inocybe ammophila Hongo et Matsuda
スナジアセタケ

Matsuda & Hongo, Jour. Jap. Bot. 31:198. f. 2. 1956.
（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，67，f. 167，pl. 29，f. 167. 1957）

子実体は散生或は群生；傘は径 2—5 cm，円錐状鐘形或は円錐状丸山形，のち扁平となり中丘を存す，乾燥，放射状繊維或は微細鱗被あり，黄褐色，赤褐色，帯紫赤褐色，幼時白色にて絹糸状；肉は白色，皮下藁色，臭不快，無味；褶はやや密，離生或は狭生，便腹状，白色，のち灰褐色，幅 3—7 mm，稜は白色房毛あり；茎は 2—8×0.35—0.7 cm，同幅或は上方にやや狭細，基部有縁球根状，有線条，頂部霜粉状，他は帯紫紅色，内部淡色，中実；胞子は狭楕円形，やや角形にて不明瞭瘤状，淡黄土色，7—11×4—5.5 μ；担子柄は 4 胞子，19—34×7.5—9.5 μ；稜嚢体は多生，便腹紡錘形，厚膜，先端鈍頭にて結晶を被むり，48—80×11—20(23) μ；褶側嚢体は多生或は散生，稜嚢体に同じ，食毒不明。

所在及産地

松林蘚間砂地上—夏秋　本州

和名 スナジアセタケ（砂地汗茸）〔松田及本郷〕

Inocybe neoumbrina Kobay.

Kobayasi, Nagaoa, 2:107, f. 26, k, f. 60. 1952.

傘は径 8—12 mm，円錐形，中丘あり；表面は乾燥，紫褐色，灰色の内生繊維あり，微細に割裂す，中丘は暗灰色，穀粉状；肉は白色；褶は直生，褐色稍々疎，広幅，不同，著しき嚢状体の為に微細粗面なり，稜は全縁；茎は約 2×0.1 cm，同幅，淡黄土色，白色繊維状毛ありて幾分絹様光沢あり，中実；担子柄は 2 或は 4 胞子，21—24×6.5—7 μ；胞子は有稜円壔形にて瘤を有し，褐色，7—7.5×4.5—5 μ；褶側嚢体は中位に散生或は部分的に群生，太き紡錘形或は細頸壜形，屢々結晶を冠す，薄膜，42—50×15—22 μ。

所在及産地

地上—秋　本州

和名

Inocybe senkawaensis Kobay.
ヒメアセタケ

Kobayasi, Nagaoa, 2:107, f. 26, L, f. 61, pl. 1, f. B. 1952.

傘は小形，径 8—17 mm，初め鐘形，のち開張し円錐形或は扁平となり中丘を有す，縁は初め内捲し，のち真直或は反転す；表面は淡黄色，黄土色或は殆ど帯白色，乾燥せる圧着繊維あり，細微の明瞭ならざる罅裂あり，縁に幾分房毛あり；褶は狭生，黄土色にて淡桃色を帯ぶ，密，狭幅，不同，稜は厚く，房毛あり；肉は臭なし；茎は 2—3.5×0.15—0.25 cm，同幅，基部僅か太し，クリーム色，一見無毛なるも微細の圧着せる白毛あり，中実；担子柄は小形，4 胞子，25—27×6 μ；胞子は多角形にて幾分伸長，瘤を散生す，淡黄土色，6—7×4.5—5 μ；褶側嚢体は稍々群生，紡錘形，甚だ厚膜，屢々結晶を冠す，無色，37—40×10—11 μ，稜嚢体は叢生，同形。

所在及産地

地上—夏　本州

和名 ヒメアセタケ（姫汗茸）〔小林〕

Inocybe putilla Bres.

Bresadola, Fungi, Trid. 1:81, pl. 88. 1887; Icon. Myc. 16: pl. 764. 1930—Saccardo, Syll. Fung. 11:50. 1895; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 732. 1916(ut *pusilla*)—Massee, Ann. Bot. 18: 469, 1904—Ricken, Blätterp. 100. 1915—Lange. Fl. Agar. Dan. 3:87, pl. 117, f. B. 1938—Kobayasi, Nagaoa, 2:108, f. 26, M, 62, pl. 1, f. F. 1952.

傘は径 0.8—2 cm，丸山形，のち開張低山形；表面は黄土色或は灰褐色，光沢なし，内生絹状繊維毛

を密に被むり，熟時幾分割裂す；肉は臭幾分不快；褶は直生，初め淡紅色，のち灰褐色，稍々疎，不同，稜は鋸歯あり，細粉状；茎は頑丈，絹状，圧着せる繊維あり，上部に著しき繊維ありて桃色；茎肉は淡紫褐色，褶側嚢体は群生，紡錘形，著しく便腹状，厚膜，屢々結晶を冠す，無色，上半部子実層より抽出す，34—74×11—17μ，通常 45×15μ，稜無性細胞は嚢状，薄膜，11—17×8—11μ，淡褐或は無色の稜嚢体を混在す。

所在及産地

広葉樹苗圃落葉間—夏　　本州—中米．欧

和名

Inocybe inaensis KOBAY.

KOBAYASI, Nagaoa, 2:109, f. 63, pl. 1, I. 1952.

傘は径約 17 mm，丸山形，中丘あり，縁は内屈す；表面は黄土色，中丘は帯褐灰色，周辺淡色，光沢なし，繊維状に裂け，淡黄土色の内部組織を露わす；褶は狭生，暗紫灰色，甚しく密ならず，稜は微細房毛あり，類白色；茎は 2.5×0.25 cm，同幅，基部球根状，淡黄土色或は殆で白色，繊維あり，光沢なし，肉眼にては平滑なるも微細の穀粉を有す；担子柄は 4 胞子；胞子は楕円形，有瘤，褐色，6.5—9×4.5—6μ；褶側嚢体は散生，細長紡錘形，厚膜，42—56×8.5—12μ，稜嚢体は群生，頑丈，厚膜，37—44×12—17μ。

所在及産地

広葉樹林地上—秋　　本州

和名

Inocybe umbrina BRES.

アセタケモドキ

BRESADOLA, Fungi, Trid. 1:50, pl. 55. 1884; Icon. Myc. 16: pl. 758. 1930—SACCARDO, Syll. Fung. 5:772. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 733. 1916—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 244. 1900—MASSEE, Ann. Bot. 18:471. 1904—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 450. 1912—RICKEN, Blätterp. 99, pl. 29, f. 5. 1915—LANGE, Agar. Denm. 3:45. 1917; Fl. Agar. Dan. 3:86, pl. 118, f. G. 1952—KAUFFMAN, Agar. Mich. 461. 1918; N. Am. Fl. 10:238. 1924—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 2: pl. 104, f. 1. 1930; Agaricales, 1:247. 1948—HEIM, Gen. Inocybe, 357, f. 204, pl. 32, f. 2. 1931—SINGER, Agaricales, 532. 1949—KOBAYASI, Nagaoa, 2:109, f. 64. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 230. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:367, f. 250, B. 1957.
（小林，日．隠．植．図．535, pl. 258, f. 4—7. 1939—IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 55:516. 1941—原，日．菌．目．165. 1954）

Inocybe carpta var. *umbrina* QUÉL. Enchir. Fung. 95. 1886.

Inocybe castaneoides PECK, Bull. N. Y. Bot. Mus. 167:43. 1913.

傘は径 2—2.5 cm，開張，稍々中丘あるか殆ど扁平，表面は乾燥或は稍々粘性，栗褐色或は暗褐色，中央濃色，圧着せる繊維あり，中央に往々細鱗片あり，長く割裂す；肉は黄土色；褶は直生，灰褐色，密，広幅，不同，稜は全縁；茎は 4×0.25—0.3 cm 同幅にて基部幾分球根状，淡褐色，殆ど無毛，充塞；担子柄は 4 胞子，24—26×6—7μ；胞子は長形，多角形，不分明の瘤を有す，淡黄土色，6—8×4—5μ；褶側嚢体は散生，稜嚢体は左程群生ならざるか或は殆どなし，紡錘形或は棍棒形，薄膜，鈍頭，無色，50—70×12—16μ。

所在及産地

地上—秋　　本州—欧．北米

和名 アセタケモドキ（擬汗茸）〔小林〕

Inocybe titibuensis KOBAY.

KOBAYASI, Nagaoa, 2:110, f. 65.

傘は径 1.5—2.5 cm，開張鐘形或は殆ど扁平，屢々裂く；表面は乾燥，灰褐色，中央濃色，時に網目状に裂け，圧着せる繊維あり，一見無毛，縁の方細微の割裂あり；褶は狭生或は殆ど離生，灰褐色，密，狭幅，稜は殆ど全縁；茎は 3—4×0.4 cm，稍々同幅或は上方に漸細，基端に明かなる凹頭球根を有す，淡橙桃色，光沢あり，充塞〜中空；担子柄は 2 或は 4 胞子，23—27×7μ；胞子は円壔状多角形，明かに有瘤，7—10×5—7μ；褶側嚢体は散生或は群生，洋独楽形或は紡錘形，厚膜，太く，無色，稜嚢体は叢生，幾分短く，のち同様となる。

所在及産地

地上—夏　　本州

和名

Inocybe nikkoensis KOBAY.

KOBAYASI, Nagaoa, 2:111, f. 66. 1952.

傘は径 1.5—2.5 cm，丸山形，開張して殆ど扁平，放射状に裂く；表面は暗紫色，のち暗灰色，圧着繊維あり，中部は幾分反転鱗片あり，暗色；褶は狭生，黄土色，密，便腹状，稜は殆ど全縁，粉状ならず；茎は 2.5—3×0.2—0.3 cm，上方幾分狭細，基部球状，淡紫灰色，絹状光沢あり，上部僅か穀粉

状，中空；担子柄は4胞子；胞子は方形にて明かに有柄，微細の瘤を有し，6.5—8×4.5—5μ；褶側嚢体は散生，比較的小形，紡錘形，厚膜，無色，40—50×10—12μ，稜嚢体は殆どなし。

所在及産地

地上—秋　本州

和名

Inocybe asterospora QUÉL.
カブラアセタケ

QUÉLET, Bull. Soc. Myc. Fr. 26:50. 1879; Enchir. Fung. 96. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5:780. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 732. 1916.—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:194, f. 14(p. 3). 1893; Ann. Bot. 18:465. 1904; Brit. Fungi, 263. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:244. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 163. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 138. 1908—RICKEN, Blätterp. 99, pl. 29, f. 1. 1915—LANGE, Agar. Denm. 3:1917; Fl. Agar. Dan. 3:84, pl. 117, f. G. 1938—KAUFFMAN, Agar. Mich. 462. 1918; N. Am. Fl. 10:233. 1924—KONRAD & MAUBLANC. Icon. Sel. Fung. 2:pl. 105. 1929; Agaricales, 1:248. 1948—BRESADOLA, Icon. Myc. 15:pl. 766, f. 2. 1930—SINGER, Agaricales, 532. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 167, pl. 65, f. 6. 1950—HONGO, Jour. Jap. Bot. 27:370, f. 1(4). 1952—KOBAYASI, Nagaoa, 2:112, f. 67. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 231, f. 302 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:365, f. 80(4). 1957. (松田及本郷，植. 研. 雑. 30:261. 1955—今関及本郷，原色日. 菌. 図鑑，67, f. 165, pl. 29, f. 165. 1957)

Agaricus asterospora COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 156. 1883; Illus. Brit. Fungi, 3: pl. 385(no. 430). 1886.

Clypeus subrimosus KARST. Symb. Myc. Fenn. 28:38. 1888.

Clypeus asterosporus KARST. Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 213. 1889.

Inocybe subrimosa SACC. Syll. Fung. 9:100. 1891.

Astrosporina asterospora REA, Brit. Basid. 210. 1922.

子実体は群生或は散生；傘は径 4.5—6.5cm，鐘形～丸山形，のち殆ど扁平となり，更に圧低され中丘を有す，放射状に割裂す，縁は真直或は波状，或は反転す；表面は乾燥，暗褐色，繊維あり，微細鱗片を被むり，鱗片は中央に於て密となり濃色なり；褶は狭生或は離生，淡灰褐色，中位に密，広幅，稜は細鋸歯或は全縁；茎は 5—6×0.5—0.8cm，同幅，基部は球状，絹様，白色或は淡黄土色，穀粉状，中実；担子柄は小形，4胞子；胞子は多角或は楕円形，著しき瘤を有し，淡灰褐色，7—8.5×6.5—7μ，瘤は倒円錐形；褶側嚢体は散生，太き紡錘形或は便腹状，或は嚢状，厚膜，殊に上部厚し，無色，42—54×16—20μ，稜嚢体は嚢状薄膜無性細胞を混ず，叢生；有毒か。

所在及産地

林内及庭園地上—夏秋　本州—欧. 北米. 濠

和名 カブラアセタケ（蕪汗茸）〔小林〕

セイタカアセタケ（丈高汗茸）〔今関〕

サザナミニセトマヤタケ（漣贋苫屋茸）〔本郷〕

Inocybe nodulosospora KOBAY.

KOBAYASI, Nagaoa, 2:113, f. 68, pl. 1, f. K. 1952.

傘は径 1.5—2cm，開張し中丘あり；表面は灰緑褐色，中丘濃色，内生繊維あり；褶は狭生，暗褐色，幾分疎，不同；茎は長く，4.5×0.2—0.25cm，同幅，基部球根状，内生絹状繊維あり，傘面と同色；担子柄は大形，4胞子；胞子は球形或は楕円形，著しき瘤を有し，7—11×6—8.5μ，瘤は倒円錐形にて稍々鋭頭，高さ 2.5μ に及ぶ，黄土形；実質は多隔の菌糸より成る；褶側嚢体は散生或は密生，便腹状紡錘形，淡褐色，幾分薄膜，56—76×18—25μ，稜無性細胞は叢生，嚢状，稜嚢体と混在す。

所在及産地

地上—秋　本州

和名

Inocybe calospora QUÉL.
アシボソトマヤタケ

in BRESADOLA, Fung. Trid. 1:19, pl. 21. 1882; Enchir. Fung. 96. 1886—GILLET, Champ. Fr. Suppl. c. ic. (non descrip.) 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:773. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 721. 1916—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:244. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 163. 1900—MASSEE, Monogr. Inocybe, 469. 1904; Brit. Fungi, 264. 1911—A. L. SMITH, Trans. Brit. Myc. Soc. 2: 95. 1905—W. G. SMITH, Brit. Basid. 133. 1908—RICKEN, Blätterp. 103. 1915—LANGE, Agar. Denm. 3:41. 1917; Fl. Agar. Dan. 3:89, pl. 115, f. c, c′. 1938—KAUFFMAN, Agar. Mich. 450, pl. 91. 1918; N. Am. Fl. 10:233. 1924—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 2:pl. 104, f. 2. 1930; Agaricales, 1:249. 1948—

BRESADOLA, Icon. Myc. 16: pl. 754, f. 1. 1930—HEIM, Gen. Inocybe, 378, f. 216, a, c. 1931—KÜHNER & BOURSIER, Bull. Soc. Myc. Fr. 48: 152, f. 26-27. 1932—SINGER, Agaricales, 532, 533. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 228. 1953—HONGO, Jour. Jap. Bot. 30: 261, f. 1, H-J. 1955—HEIM, Champ. Eur. 2: 367. 1957.

(今関及本郷，原色日．菌．図鑑，68, f. 170, pl. 29, f. 170. 1957)

Agaricus calosporus WINTER, Pilze, 1: 853. 1884.

Inocybe rigidipes PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 51: 289. 1898—SACCARDO, Syll. Fung. 16: 89. 1902.

Inocybe echinospora EGELAND, Nyl. Mag. Naturvid. 51. 1912.

Astrosporina calospora REA, Brit. Basid. 211. 1922.

子実体は群生；傘は径 1—3 cm，初め円錐状鐘形，のち開張し，中丘を存す；表面は乾燥，暗褐赤色にて黄土色に褪色し，中丘暗色，中央以外は弛き或は反転せる纖維状鱗片に被わる，縁は纖維状にて淡色；肉は薄く淡色，茎に於ては纖維状肉質にて褐赤色，無臭或は不快の弱き臭あり，味少しく酸し；褶は狭生或は殆ど離生，淡色，のち淡肉桂色，かなり密，便腹状，稜は白色，房毛あり；茎は 3—4×0.2—0.3 cm，同幅，基端小球根状，淡褐色にて，のち赤色を帯び，無毛或は甚だ微細なる纖維あり，緊緻，弾性，充塞，のち中空；胞子は広楕円～類球形，著しき刺を有し，黄土褐色，7—9.5×6—8μ，刺は円筒形にて鈍頭，長さ 1.5—3μ；胞子紋は黄銹色；稜及褶側嚢体は同形，便腹状紡錘形，中位に厚膜，無色，先端に褐色結晶を附す，27—57×8—19μ，多くは 40—45×8.5—10.5μ；可食か。

所在及産地

林内蘚間—夏秋　　本州—欧．北米

和名 アシボソトマヤタケ

(足細苫屋茸)〔松田及本郷〕

f. **minor** KOBAY.
ハリアセタケ

KOBAYASI, Nagaoa, 2: 114, f. 26, N, f. 69, pl. 1, f. G. 1952.

(今関及本郷，原色日．菌．図鑑，68. 1957)

原種より小形の子実体及短かき嚢状体によりて異る。

傘は径 4—8 mm，円錐形，中丘あり，薄し，縁は真直或は内屈す；表面は乾燥，菫褐色或は淡褐色にて，暗菫褐或は暗褐色の反転鱗片に密に被われ，殊に中丘は濃色にて鱗片も密なり；褶は狭生，初め緑黄色，のち帯褐色，稍々疎，不同，稜は淡色，房毛あり；茎は 15—25×1 mm，同幅，淡菫褐色，纖維状，無毛或は上部粉状，緊緻；担子柄は 2 或は 4 胞子，15×6μ；胞子は楕円形，著しき刺を有し，黄土色，1 油球を含む，7—7.5×6—7μ，或は刺を合せて 10—12×8.5—9.5μ，刺は基部に於て太く，先端鈍頭；褶側嚢体は散生，紡錘形，中位の厚膜，屢々結晶を冠す，無色或は淡菫色，27—37×10—12μ，稜嚢体は同じ，無性細胞は嚢状，叢生，薄膜，この細胞の或物は伸長し，長さ 30—35μ ありて淡菫色の内容を有す。

所在及産地

地上—夏秋　　本州

和名 ハリアセタケ（針汗茸）〔小林〕

トゲミノアセタケ（刺実汗茸）〔今関〕

疑問種

Inocybe squamosa

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 53: 398. 1939—原，日．菌．日．165. 1954)

Inocybe subvatricosa IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 55: 516. 1941.

Hebeloma (FR.) QUÉL.
ワカフサタケ属

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1: 128. 1872—SINGER, Agaricales, 535. 1949.

Agaricus ser. *Derminus* trib. *Hebeloma* FRIES, Syst. Mycol. 1: 249. 1821.

Roumegueria KARSTEN, Hattsv. 1: 471. 1879.

Hylophila subgen. *Hebeloma* QUÉLET, Enchir. Fung. 98. 1886.

Myxocybe FAYOD, Ann. Sci. Nat. Bot. VII, 9: 361. 1889.

Picromyces BATTARRA, ex EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 438. 1909.

Hebelomatis EARLE, l. c. 430. 1909.

傘は粘性；上表皮層は甚だ膠質にて主に水平に走る甚だ細き糸状菌糸より成り，無色，最端部は皮嚢体状ならず；中表皮層は前者より不正にて色素の蜜色～銹色の被覆物を有す；褶は初め淡赭色～より淡色，後濃き帯褐色となるも老時鮮美或は濃銹色とならず，屢々稜嚢体多生の為に房状或は少くとも白稜と

なる；胞子は蜜色，通常疣状粗面，通常紡錘形～ボート形，稀に楕円状円壔形，或は楕円形，屢々両端鋭頭，先端に乳頭を有するも発芽孔なく，胞子盤なし，往々2胞子の種に於ては殆ど平滑なり；担子柄は4胞子なるも2胞子を有するもの稀ならず；褶側嚢体は欠如；稜嚢体は無色，諸形，常に明瞭，群生，褶稜を異質とす；托実質は整型；茎は寧ろ肉質～繊維状肉質，中実或は中空又は充塞，屢々純白色，少くとも幼時頂部白色，決してライラック色或は菫色ならず；頂部は屢々小鱗片状或は粉状，蜘網膜片を有し或は明かなる被膜なきか或は時に明かなる膜質の被膜を有するものあり，この被膜は少くとも2胞子担子柄の種に於ては鍔となる，時に蜘網膜片が鍔の形をとる物もあり；肉は無臭或は屢々特有の臭を有す；仮根は往々存在す；肉は通常少くとも1部白色；すべての菌糸は菌絆を有す；地上，枯葉上，稀に腐木上或は密蘚中等に生ず；多分すべて半被実；殆ど汎布，約13種を知らる，毒菌を含む。

（本属名は hebe〔希〕（思春期，青年），loma〔希〕（房，房毛，縁）より出づ）

基準種　*H. fastibile* (FR.) QUÉL.

本邦既知種検索表

A. 茎上に蜘網膜或は鍔を有し，屢々傘縁に残片を存す。

a. 茎上に明かに鍔を存す；傘は径 5—10 cm，多少粘土色，中盤帯褐色；茎に偽根あり；胞子 8—12×5—6.5 μ。

ナガエノスギタケ　***H. radicosum***　(376)

b. 茎上或は傘縁に蜘網膜を存す。

α. 茎に偽根なし。

I. 傘は径 3—5 cm，中盤帯赤栗褐色，縁に黄色残片あり；茎は黄色；胞子 6.5—10×4.5—6 μ。

トモエタケ　***H. tomoeae***　(377)

II. 傘は径 2—5 cm，中盤栗褐色，縁に帯白色早失の残片あり；茎は帯白色；胞子 8—10×5—6 μ。

ワカフサタケ　***H. mesophaeum***　(377)

III. 傘は径 1.5—3 cm，中盤黄土渋色，縁に白色早失の残片あり；茎は帯黄色；胞子 12.5—16.5×8—10 μ。

ババワカフサタケ　***H. fimicolum***　(378)

β. 茎は偽根あり，長さ 15 cm に及び淡赤褐色；傘は径 3—8 cm，中盤暗茶褐色～淡褐色；胞子 7—10×4—5 μ。

アシナガヌメリタケ　***H. radicatum***　(378)

B. 傘は平滑，蜘網膜なし。

a. 褶稜は湿時小滴を滲出す；傘は径 3—8.5 cm，淡渋色，中盤赤褐色；大根臭あり；胞子 10—13.5×6—7.5 μ。オオワカフサタケ

H. crustuliniforme　(378)

b. 褶稜は小滴を滲出せず。

α. 臭は焦糖臭ならず。

I. 大形種，傘径 7.5—15 cm，淡煉瓦色～帯紅粘土色；胞子 10—13×5—7 μ；傘縁波曲す。

ナミワカフサタケ　***H. sinuosum***　(379)

II. 中形種。

1. 傘は径 3—6 cm，淡黄土渋色，中盤往々暗褐色；胞子 10—12.5×5—7.5 μ；茎長し。　ナガエノワカフサタケ

H. longicaudum　(379)

2. 傘は径 4—8 cm，肉桂色；胞子 8—10×4—5 μ。

コワカフサタケ　***H. helvolescens***　(380)

3. 傘は径 3—7 cm，密黄色；胞子 10—11.5×7—8 μ。

キワカフサタケ　***H. humosum***　(380)

β. 強き焦げたる砂糖臭あり；傘は径 2—4 cm，鹿の子色；胞子 11—16.5×5—6.5 μ。

ヒメワカフサタケ　***H. sacchariolens***　(380)

Hebeloma radicosum (BULL. ex FR.) RICKEN

ナガエノスギタケ

RICKEN, Blätterp. 115, pl. 33, f. 1. 1915—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1: 180. 1948—SINGER, Agaricales, 538. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 244. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 70. 1956.

Agaricus radicosus BULL. Champ. Fr. pl. 160. 1791—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 266. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1: 242. 1821; Epicr. Myc. 163. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1: 308. 1857; Hymen. Eur. 218. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1: 487. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 150. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2: 165. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1: 105. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3: pl. 361 (no. 382). 1886—WINTER, Pilze, 1: 702. 1884.

Pholiota radicosa QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1: 125. 1872—GILLET, Champ. Fr. 438, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1: 295. 1879—SACCARDO, Syll Fung. 5: 741. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 684.

1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1:610. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:215. 1893; Brit. Fungi, 255, pl. 21, f. 3. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 168. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 126. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 61, pl. 61, f. 136. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):542, pl. 108, f. 1-2. 1912—LANGE, Agar. Denm. 4:8. 1921; Fl. Agar. Dan. 3:58, pl. 109, f. E. 1938—REA, Brit. Basid. 115. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 14: pl. 693. 1930—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:196. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 146, pl. 55, f. 1. 1950.

（本郷，植．分．地．14:73, f. 1(10). 1951—原，日．菌．目．250. 1954）

Dryophila radicosa QUÉL. Enchir. Fung. 67. 1886.

Myxocybe radicosa HEIM, Champ. Eur. 2:285, f. 263. 1957.

子実体は孤生或は群生；傘は径 5—10 cm，或はそれ以上に及び，丸山形にて鈍頭，のち殆ど扁平となる；表面は初め粘性，乾時光沢あり，多少粘土色，中央帯褐色，のち紅斑を生ず，無毛，平坦；肉は帯白色，厚く，緊緻，臭良好，味やや温和；褶は後方円くして幾分離生，淡色にて，のち淡紅銹色となる，密，広幅，稜は白粉ありてやや鋸歯状；茎は 8—15×1—2 cm，基部膨大し紡錘形の偽根に伸長す，傘面と殆ど同色或は帯白色，鍔より上部は白粉に被われ，下部は同心円的に直立淡紅色の綿絮状鱗片を有す，中実，のちやや中空となる；鍔は中位或は下位，膜質，寧ろ直立し，全縁，鱗片を有し，帯白色；胞子は楕円形或は幾分不正紡錘形，殆ど平滑，8—12×5—6.5 μ；胞子紋は鈍褐色；棱嚢体は円筒棍棒形。

所在及産地

広葉樹切株附近—秋　　北海道，本州—欧

和名 ナガエノスギタケ（長柄杉茸）〔今井〕

Hebeloma tomoeae IMAI
トモエタケ

IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:226. 1938.

（原，日．菌．目．146. 1954）

子実体は叢生或は群生；傘は径 3—5 cm，円錐状丸山形，のち扁平となり，やや中丘を有し，鈍頭；表面は粘性，無毛，平滑，淡帯赤栗褐色，縁は淡色，黄色繊維あり；肉は黄色，臭よし；褶は狭生或は殆ど離生，淡色～類銹色，密，披針形；茎は 3—6×0.5—1 cm，基部やや球根状，シトロン色或は卵黄色，綿絮状鱗被を有し，頂部黄色にて粉状，基部黄褐色，中実～中空；蜘網膜はシトロン色，初め類膜質，早失性；胞子は楕円形，平滑，6.5—10×4.5—6 μ；胞子紋は黄褐色；棱嚢体は紡錘形，便腹状，無毛或は帯黄色，30—60×10—15 μ。

所在及産地

庭園，路傍樹下地上及腐木上—夏秋

北海道，本州

和名 トモエタケ（ともえ茸）〔今井〕

Hebeloma mesophaeum (PERS. ex FR.) QUÉL.
ワカフサタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:128. 1872—GILLET, Champ. Fr. 524. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:795. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 700. 1916—KARSTEN, Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 216. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:174. 1893; Brit. Fungi, 276. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 163. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 144. 1908—RICKEN, Blätterp. 115, pl. 32, f. 3. 1915—MURRILL, N. Am. Fl. 10:220. 1917—KAUFFMAN, Agar. Mich. 473. 1918—REA, Brit. Basid. 256. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 16: pl. 712. 1930—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1:119, f. 21. 1934—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:226. 1938—LANGE, Agar. Denm. 12:5. 1938; Fl. Agar. Dan. 3:92, pl. 119, f. c. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:181. 1948—SINGER, Agaricales, 538. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 169, pl. 67, f. 6. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 245, f. 378, A. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 71, B. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2: 371, f. 252, c. 1957.

（原，日．菌．目．146. 1954）

Agaricus fastibilis var. *mesophaeus* PERS. Myc. Eur. 3:173. 1828.

Agaricus mesophaeus FR. Epicr. Myc. 179. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:327. 1857; Hymen. Eur. 240. 1874—BERKELEY & BROOME, Ann. Mag. Nat. Hist. II, 7:374. 1861—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:112. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3: pl. 412 (no. 452). 1886; Handb. Austr. Fungi, 48. 1892—WINTER, Pilze, 1:685. 1884.

Inocybe mesophaea KARST. Hattsv. 1:470. 1879.

Hylophila mesophaea QUÉL. Enchir. Fung. 99. 1886.

Hylophila versipellis var. *mesophaea* QUÉL. Fl. Myc. 95. 1888.

Hebeloma versipelle subsp. *mesophaeum* KONR. et MAUBL. Icon. Sel. Fung. 1: pl. 78, f. 1. 1929.

子実体は群生或はやや叢生；傘は径 2—5cm，初め鐘形或は類円錐形，のち丸山形～扁平，やや中丘あり，或は圧低さる；表面は初め粘性，帯褐粘土色或は淡渋色，中央栗褐色，無毛，平坦，絹状光沢あり，周縁淡色，幼時帯白色の蜘網膜残物を存す，縁は初め内屈し，往々波状；肉は傘にては帯白色，茎の下部帯褐色，味及臭微なり；褶はやや直生，速に彎入，淡色～汚肉色，遂に汚褐色，密，むしろ広幅，薄し；茎は 4—8×0.4—0.7cm，同幅，上部帯白色にて粉状，下部帯褐繊維あり；蜘網膜は白色，初め繊維状膜質，早失性，往々茎上に帯を作る；胞子は楕円形，僅か粗面，8—10×5—6μ；胞子紋は淡銹色；稜嚢体は短かく，鈍頭，約 40×6μ。

所在及産地

林地—秋　　北海道—欧．北米．濠．亜(小亜)

和名 ワカフサタケ（若房茸）〔今井〕

Hebeloma fimicolum IMAI

ババワカフサタケ

IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:227. 1938.

（原，日．菌．目．146. 1954）

子実体はやや叢生或は群生；傘は径 1.5—3cm，半球形～丸山形，のち殆ど扁平となる；表面は粘性，無毛，黄土渋色，縁は淡色にて無毛或は僅か白色絹糸あり；肉は帯白色～帯黄色，薄く，臭は類穀粉様，味なし；褶は彎生，白色～肉桂色，密，便腹状，稜に房毛あり；茎は 4—6×0.4—0.5cm，殆ど同幅，帯黄色，繊維状，中空；蜘網膜は白色，早失性；胞子は広楕円形，平滑，12.5—16.5×8—10μ；胞子紋は黄褐銹色；稜嚢体は紡錘形，無色。

所在及産地

樹下馬糞上—夏　　北海道

和名 ババワカフサタケ（馬場若房茸）〔今井〕

Hebeloma radicatum (COOKE) R. MAIRE

アシナガヌメリタケ

R. MAIRE, Bull. Soc. Myc. Fr. 24:LVII. 1908—REA, Brit. Basid. 258. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 15:pl. 717. 1930—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:1893. 1948.

（川村，日．菌．図鑑，5:531，f. 522. 1954）

Agaricus longicaudus var. *radicatus* COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 164. 1883; Illus. Brit. Fungi, 4:pl. 416(no. 459). 1886.

Hebeloma longicaudum var. *radicatum* SACC. Syll. Fung. 5:801. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:177. 1893—W. G. SMITH, Brit. Basid. 146. 1908.

Hylophila elata QUÉL. Fl. Myc. 93. 1888. (non BATSCH)

子実体は群生或は叢生；傘は径 3—8cm，丸山形，のち開張扁平となり，更に圧低され，鈍頭；表面は瓦だ粘性，地色は白色にて茶色放射状繊維を被むり，中央暗茶褐色或は渋褐色，周辺淡色にて白色の地色を現わす，縁は初め内屈し，蜘網膜を有す；肉は帯白色，柔軟，中盤厚し，臭良く，味苦し；褶は小歯を有して狭生し，彎入す，初め帯白色，のち淡茶色～淡褐色となる，疎，広幅，波状；茎は細長，5—15×0.3—0.7cm，同幅，基部やや紡錘状をなし主根状に伸長す，頂部僅か白粉状，他は赤褐色繊維を被むり淡赤褐色を呈す，往々少しく捩曲，強靱，肉は黄褐色を帯び，中空；胞子は楕円形，平滑，銹褐色，7—10×4—5μ。

所在及産地

林地—夏秋　　本州—欧

和名 アシナガヌメリタケ（足長粘茸）〔川村〕

Hebeloma crustuliniforme (BULL. ex FR.) QUÉL.

オオワカフサタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:128. 1872—GILLET, Champ. Fr. 525, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:471. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 216. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:799. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 692. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:176. 1893; Brit. Fungi, 276. 1911—PATOUILLARD, Fss. Tax. 163. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 145. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 66, pl. 68, f. 152. 1910—RICKEN, Blätterp. 119, pl. 32, f. 2. 1915—MURRILL, N. Am. Fl. 10:223. 1917—KAUFFMAN, Agar. Mich. 476, pl. 97. 1918—REA, Brit. Basid. 257. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 15:pl. 714. 1930—LANGE, Agar. Denm. 12: 7. 1938; Fl. Agar. Dan. 3:94, pl. 119, f. A. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:182. 1948—SINGER, Agaricales, 538. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 169, pl. 67, f. 7. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 247. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 71, c. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2:368. 1957.

Agaricus crustuliniformis BULL. Champ. Fr. pl. 308, 546. 1876—FRIES, Epicr. Myc. 180. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:328. 1857; Hymen.

Eur. 241. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 157, pl. 9, f. 1. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:168. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:112. 1871; Illus. Brit. Fungi, 4:pl. 414(no. 456), 507(no. 457 var. *minor*). 1886—KARSTEN, Myc. Fenn. 3:124. 1876—WINTER, Pilze, 1:685. 1884.

Hylophila crustuliniformis QUÉL. Enchir. Fung. 99. 1886.

Derminus crustuliniformis SCHROET. Pilze Schles. 1:583. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:243. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2):441, pl. 87, f. 1-2. 1912.

Hebeloma fastibile IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:228. 1938. (non FRIES 1838, nec QUÉLET 1872)

子実体は群生或は孤生；傘は径 3—8.5 cm，丸山形，のち扁平に開張し，鈍頭或は僅か広き中丘あり；表面は初め僅か粘性，淡渋色，中央赤褐色，無毛，平坦，縁は初め内屈す；肉は白色，厚く，むしろ緊緻，大根臭あり，味辛し；褶は彎生，帯白色，のち粘土色，遂に鈍褐色となる，密，広幅，幼時或は湿時水滴を滲出す，稜に鈍鋸歯あり；茎は 4—10×0.5—1.5 cm，同幅，基部僅か球根状，白色，上部白粉或は綿絮を被むり，下方無毛，充塞；胞子は楕円形或は幾分扁桃形，微疣あるか或は殆ど平滑，10—13.5×6—7.5 μ；胞子紋は淡褐色；稜囊体は円筒形，27—35×7—8 μ。

所在及産地

林地—秋　　北海道—欧. 北米. 亜(小亜)

和名　オオワカフサタケ（大若房茸）〔今井〕

Hebeloma sinuosum (FR.) QUÉL.

ナミワカフサタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 2:345. 1873—GILLET, Champ. Fr. 524. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5:792. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 699. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:170. 1893; Brit. Fungi, 143. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 275. 1908—RICKEN, Blätterp. 116, 458. 1915—REA, Brit. Basid. 253. 1922—KONRAD, Bull. Soc. Myc. Fr. 34:94. 1923; & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1:pl. 80. 1925; Agaricales, 1:182. 1948—SINGER, Agaricales, 538. 1949—HEIM, Champ. Eur. 2: 374, f. 255. 1957.

（今関及本郷，原色日. 菌. 図鑑，69, pl. 30, f. 171. 1957）

Agaricus sinuosus BULL. Herb. Fr. pl. 579, f. 1. 1793—FRIES, Epicr. Myc. 178. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:323. 1857; Hymen. Eur. 237. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:481. 1844—WINTER, Pilze, 1:687. 1884.

Inocybe sinuosa KARST. Hattsv. 1:467. 1879.

Hylophila sinuosa QUÉL. Enchir. Fung. 98. 1886.

Agaricus senescens sensu COOKE, Illus. Brit. Fungi, 3:pl. 407(no. 447). 1886.

Hebeloma sinapizans sensu LANGE, Fl. Agar. Dan. 3:94, pl. 119, f. D. 1938.

子実体は群生；傘は肉質，緊緻，径 7.5—15 cm，丸山形，のち開張扁平となり，中盤僅か隆起す，縁は不規則に波曲す；表面は平滑，湿時やや粘性，淡煉瓦色或は帯紅粘土色，周辺に短き条溝を有す；肉は白色，厚く，柔軟，臭よく，辛味；褶は陥入，殆ど離生，密，広幅，初め白色，クリーム色より遂に銹色となる，稜は異質；茎は 5—15×2.5—3.5 cm，同幅或は基端やや太く，纎維状条線あり，白色～淡粘土色，頂部に綿毛状鱗被あり，中空；胞子は卵形，屢々鈍尖頭，有刺，黄土色，10—13×5—7 μ；稜囊体は線状棍棒形，薄膜，40—50×2—3 μ，先端は径 5—7 μ；無毒なるも辛くして食用に不適。

所在及産地

針葉樹林内—夏秋　　本州—欧

和名　ナミワカフサタケ（波若房茸）〔今関及本郷〕

Hebeloma longicaudum (PERS. ex FR.) QUÉL.

ナガエノワカフサタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 2:345. 1873—GILLET, Champ. Fr. 526, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1:472. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 217. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5:800. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 694. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2:176. 1893; Brit. Fungi, 276. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 146. 1908—RICKEN, Blätterp. 119, pl. 33, f. 2. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 478. 1918—REA, Brit. Basid. 258. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1:pl. 79. 1929; Agaricales, 1:182. 1948—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:229. 1938—LANGE, Agar. Denm. 12:7. 1938; Fl. Agar. Dan. 3:95, pl. 119, f. E. 1938—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 246. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2:370. 1957.

（原，日. 菌. 目. 146. 1954）

Agaricus longicaudus PERS. Syn. Meth. Fung. 332. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1:248. 1821; Epicr. Myc. 181. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:331. 1857; Hymen. Eur. 241. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:480. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 157, pl. 9, f. 2. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1:113. 1871; Illus. Brit. Fungi, 4:

pl. 415 (no. 458). 1886—WINTER, Pilze, 1:684. 1884.

Hylophila crustuliniformis var. *longicauda* QUÉL. Enchir. Fung. 99. 1886.

Hylophila longicauda QUÉL. Fl. Myc. 93. 1888.

Derminus longicaudus P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**:243. 1900.

子実体は孤生或は群生；傘は径 3—6 cm，丸山形，のち開張し，稍々中丘を有し，遂に反転す；表面は粘性，淡黄土渋色，中盤往々暗褐色，のち帯白色と



第 167 図 ナガエノワカフサタケ
Hebeloma longicaudum ×1/2 (大谷氏)

なる，無毛，平坦，縁は薄く，粉状にて帯白色；肉は白色，柔軟，水潤，味及臭殆どなし；褶は弓状着生，のち彎入，帯白色，のち淡粘土色，密，中幅，稜に微細房毛あり；茎は 5—10×0.5—1 cm，同幅，基部やや球根状，頂部粉状，下方繊維線条あり，帯白色，基部淡黄褐色，脆し，充塞或は幾分中空，蜘網膜なし；胞子は卵状扁桃形，微細疣あり，10—12.5×5—7.5 μ；胞子紋は帯褐黄色；稜嚢体は線状棍棒形，50—90×10—12 μ。

所 在 及 産 地

主に針葉樹林地—秋　　北海道—欧．北米

和 名 ナガエノワカフサタケ（長柄若房茸）〔今井〕

Hebeloma helvolescens IMAI
コワカフサタケ

IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:229. 1938.

（原，日．菌．目．146．1954）

子実体は叢生；傘は径 4—8 cm，円錐状丸山形，のち中丘を存す；表面は無毛，非粘性，肉桂色，縁は淡色；肉は帯桃色，臭はやや穀粉様，味辛し；褶は彎入或は狭生，初め淡灰褐色，のち黄褐色，密；茎は 5—8×0.8—1.6 cm，同幅或は狭細，白色，不明瞭なる繊維状，頂部粉状，中空；胞子は楕円形，平滑，8—10×4—5 μ；胞子紋は黄銹色；稜嚢体は披針形～類円筒状棍棒形，屢々結晶を有し，殆ど無色，50—72.5×10—14 μ。

所 在 及 産 地

林内切株周囲地上—夏　　北海道

和 名 コワカフサタケ（小若房茸）〔今井〕

Hebeloma humosum IMAI
キワカフサタケ

IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:230. 1938.

（原，日．菌．目．146．1954）

子実体は群生或はやや叢生；傘は径 3—7 cm，半球形～丸山形にて広き中丘を有し，のちやや扁平となる；表面は稀に吸水性，類蜜黄色，平滑，縁は無毛；肉は帯白色，味やや辛く，臭は類穀粉様；褶は彎生或は彎入，初め灰色，のち肉桂色，密，稜に白房毛あり；茎は 2.5—6×0.3—1 cm，同幅にて基部肥大，帯白色或は傘面と殆ど同色，繊維状，頂部やや粉状，中空；胞子は楕円形，有刺，10—11.5×7—8 μ；胞子紋は肉桂色；稜嚢体は類紡錘形，便腹状。

所 在 及 産 地

腐木及腐蝕物上—夏　　北海道

和 名 キワカフサタケ（黄若房茸）〔今井〕

Hebeloma sacchariolens QUÉL.
ヒメワカフサタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 9:158, pl. 1, f. 2. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5:804. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 694. 1916—REA, Brit. Basid. 259. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1:pl. 81, f. 1. 1928; Agaricales, 1: 183. 1948—BRESADOLA, Icon. Myc. 15:pl. 719. 1930—LANGE, Fl. Agar. Dan. 3:96, pl. 120, f. E. 1938—SINGER, Agaricales, 538. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 246, f. 380. 1953—HONGO, Jour. Jap. Bot. 30:217, f. 2(2-3). 1955—HEIM, Champ. Eur. 2:370. 1957.

Hylophila sacchariolens QUÉL. Enchir. Fung. 100. 1886.

子実体は群生；傘は径 2—4 cm，鐘状丸山形，僅か鈍中丘あり；表面は粘性，無毛，初め縁辺は白色，中央鹿の子色，老時全部一色となり，周辺やや淡色，

無線条；肉は中盤以外は薄く，帯白色或は淡色，味温和，臭は特異にて，強きこげたる砂糖の如し；褶は彎状直生，初め帯白色，のち銹色となり，稜は白色にて鈍鋸歯あり，広幅，密；茎は 4—5×0.4—0.6 cm，上方及下部狭細，或は殆ど同幅，絹状線条あり，頂部粉状にて帯白色，下部黄褐色の纖維に被わる，中実，のちやや充塞；蜘網膜なし；胞子は広紡錘形～扁桃形，微細疣を有し，KOH 液中にて暗黄土色，11—16.5×5—6.5μ；担子柄は 19—23×7—7.5μ，4 胞子；稜嚢体は密生，円筒形，円頭，無色，薄膜，23—40×5.5—7.5μ。

所在及産地

林地一夏秋　　本州一欧

和名　ヒメワカフサタケ（姫若房茸）〔本郷〕

Naucoria (Fr.) Quél.
チャニセムクエタケ属

Quélet, Champ. Jura Vosg. 1:131. 1872—Singer, Agaricales, 541. 1949.

Agaricus trib. *Naucoria* Fries, Syst. Mycol. 1:60. 1821.

Simocybe Karsten, Hattsv. 1:416. 1879.

子実体は小形のクヌギタケ（*Mycena*）或はエノキタケ（*Collybia*）型，寧ろ脆くして薄く，屡々材上及び他の植物の残屍上に生ず；傘は吸水性，半球形～反転し幼時内屈縁或は真直縁を有す；上表皮層は柵毛被或は普通の毛被を作る多数の皮嚢体をもつ直立菌糸より成る；褶は直生～直状類離生；胞子紋は一般にワカフサタケ（*Hebeloma*）のそれと多く異ならず；胞子は蜜色，平滑，発芽孔なきも屡々明かなる乳頭あり，腎臓，菜豆形～楕円形，楕円円壔形，或は殆どボート形なるも通常狭細鈍頭或は円形端を有す，中位に厚くして不明瞭～明瞭なる 2 重膜を有し，小～寧ろ大形；担子柄は全く正常なるも往々 2 胞子；稜嚢体は常に存在，通常褶稜明かに異質なり；褶側嚢体なし；托実質は整型；菌糸は通常菌絆を有す；茎は細く，甚だ僅かにて消失性の被膜を有し，或は幼時に於てすら殆ど裸なり；仮根は存在せず；多分半被実，殆ど汎布，約 7 種を知らる，経済的関係なし。

（本属名は naucum〔羅〕（つまらぬ物）より出づ）

基準種　*N. centunculus* (Fr.) Quél.

本邦既知種　チャニセムクエタケ *N. temulenta* (381)

Naucoria temulenta (Fr.) Quél.
チャニセムクエタケ

Quélet, Champ. Jura Vosg. 1:253. 1872—Saccardo, Syll. Fung. 5:849. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 777. 1916—Massee, Brit. Fung. Fl. 2:165, f. 8—9 (p. 3). 1893; Brit. Fungi, 281, pl. 19, f. 3. 1911—W. G. Smith, Brit. Basid. 159. 1908—Rea, Brit. Basid. 357. 1922—Heim & Romagnesi, Bull. Soc. Myc. Fr. 50:175, pl. 10, f. 1. 1934—Konrad & Maublanc, Agaricales, 1:168. 1948.

(Imai, Bot. Mag. Tokyo, 53:398. 1939—原，日．菌．目．222. 1954)

Agaricus temulentus Fr. Syst. Myc. 1:268. 1821; Epicr. Myc. 199. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1:379. 1857; Hymen. Eur. 262. 1874—Cooke, Handb. Birt. Fungi, ed. 2. 180. 1883; Illus. Brit. Fungi, 4: pl. 459 (no. 509). 1886.

Hylophila temulenta Quél. Enchir. Fung. 102. 1886.

? *Agrocybe tuberosa* (P. Henn.) Sing. Agaricales, 492. 1949.

子実体は散生；傘は径 1—3 cm，類膜質，鐘形，のち丸山形～扁平となり，僅か中丘あり，稀に圧低さる；表面は吸水性，黄褐黄金色，中央鈍赤褐色，湿時著しき透明的線条あり，乾時淡色となり線条不明瞭となる，無毛，縁は初め内屈し，僅か波状；肉は薄く，黄褐色，無臭；褶は殆ど離生，黄褐黄金色，やや密，前方狭く，稜は異質；茎は 5—6×0.2—0.3 cm，同幅にて基端小球根状，上方淡色，中部黄褐色，下方渋色，基部以外は小線条あり，基部に白色絨毛あり，時に僅か撓曲，強靱，中実，のち充塞；胞子は倒卵形，黄土色，平滑，6—9×4—4.5μ；胞子紋は黄褐色；稜嚢体は卵形，紡錘形或は球形にて頂部に細長の有頭突起あり，25—40×5—12μ。

所在及産地

林内腐蝕土上一夏秋　　北海道一欧

和名　チャニセムクエタケ（茶贋尨柄茸）〔今井〕

疑問種

Agaricus stellulatus Berk. et Curt. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4:116. 1860. (白井，日．菌．目．ed. 2. 35. 1917; ed. 3. 14. 1927—原，日．菌．目．10. 1954) = *Naucoria stellulatus* Sacc. Syll. Fung. 5:855. 1887. (P. Hennings, in Engler & Prantl, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 250. 1900—松村，植．名鑑，1:156. 1904—白井，日．菌．目．58. 1905; ed. 2. 389. 1917; ed. 3. 232. 1927—原，日．菌．目．222. 1954)

(Ⅱ) Cortinarieae FAYOD フウセンタケ族

FAYOD, Ann. Sci. Nat. Bot. VII, 9 : 371, 1889-SINGER, Agaricales, 544. 1949.

科の性質に同じくして，胞子紋は銹褐色～鮮銹暗褐色；胞子は有瘤類角形或は星芒状ならず，所謂胞子盤（plage）は屢々存在；稜嚢体は存在或は欠如；SINGER 氏（1949）は9属を収む。

本邦既知属検索表

A. 被膜は明かに膜質，2重にて熟時頂鍔とその下に鍔状壺（annular volva）あり，両者共に類白色；嚢状体は欠如；胞子は広扁桃形，有疣，胞子盤なし；胞子紋は鮮銹色。

ショウゲンジタケ属 **Rozites** (382)

B. 被膜が2重であるならば少くとも内側のものは蜘網膜片なり，その時は外側は膜質膠性なるか，或はこれまた蜘網膜片なり；若しも被膜が単一ならば膜質か或は蜘網膜片なり；嚢状体は存在或は欠如。

a. 胞子は粗面～有疣，有刺或は有網。

α. 胞子に胞子盤なし。

Ⅰ. 蜘網膜を有す。

1. 菌糸体は林内地中に生育し，通常菌根を作る；稜及褶側嚢体は屢々欠如し，特に KOH にて黒変する種或は樹上生(極めて稀)の種には全く欠如す。

フウセンタケ属 **Cortinarius** (384)

2. 菌糸体は通常樹材，草根上に生じ，稀に蘭に内生菌根を作る；稜嚢体は常に存在，褶側嚢体は欠如或は寡生にて稜嚢体と異ならず；多くの種の傘は KOH にて黒変し，殊に胞子粉に被われたる場合に著し。

チャツムタケ属 **Gymnopilus** (408)

Ⅱ. 蜘網膜欠如，被膜は膜質或は欠如。

1. 被膜存在或は欠如，傘は粘性（被膜あるもの）或は乾燥，外見（*Pholiota*）の如し，（チャツムタケ属の1部）

2. 被膜欠如，傘は粘性，外見エノキタケ（*Collybia*）の如し，屢々偽根を有す；胞子紋は鮮銹色。

カワムラジンガサタケ属 **Phaeocollybia** (412)

β. 胞子は胞子盤を有す。

ケコガサタケ属 **Galerina** (413)

b. 胞子は完全に平滑。

α. 茎の基部球根及凹頭球根状ならず。

ヒメスギタケ属 **Phaeomarasmius** (420)

β. 茎は太く，肉質，球根状，凹頭球根状。

ヒダホテイタケ属 **Leucocortinarius** (408)

Rozites KARST.
ショウゲンジタケ属

KARSTEN, Hattsv. 1 : 290. 1879—SINGER, Agaricales, 545. 1949.

傘の上表皮層は平行匍匐糸状の菌糸より成り，寧ろ厚く，何等の皮嚢体を有せず；褶は淡銹色，直生；胞子紋は淡き鮮かなる栗銹色；胞子は蜜色にて銹褐色の疣を有し，広扁桃形，寧ろ大形，胞子盤なく，発芽孔なし；担子柄は正常にて4胞子；褶側嚢体は欠如；稜嚢体は散生し，不明瞭或は不定にて褶稜を異質となさず；托実質は整型；茎は色素殆どなく，2重の被膜を有し，上方膜質被膜は頂鍔を作り，外側の被膜は僅か明かにて通常茎の下部に於て壺状となり或は鍔状となる，両被膜共に類白色にて膜質なり；子実体は寧ろ大形にて肉質，すべての菌糸は菌絆を有す；半被実；北温帯産，只1種を知らる，種々なる樹木に菌根を作る，食用菌。

（本属名は仏国菌学者 E. ROZE 氏の姓より出づ）

基準種 *R. caperata* (PERS. ex FR.) KARST.

本邦既知種 ショウゲンジタケ ***R. caperata***(382)

Rozites caperata (PERS. ex FR.) KARST.
ショウゲンジタケ

KARSTEN, Hattsv. 1 : 295. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 158. 1889—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 612. 1889—PATOUILLARD, Ess. Tax. 168. 1900—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 253, f. 119, c. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 547, pl. 109. 1912—SINGER, Ann. Myc. 20 : 296. 1922; Agaricales, 547. 1954—REA, Brit. Basid. 111. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1 : pl. 65. 1928; Agaricales, 1 : 153. 1948—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 180. 1938—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 249. f. 319. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 72. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2 : 388. pl. 38, f. 1. 1957.
（今関，原色きのこ，pl. 14(左). 1942—原，日. 菌. 目. 318. 1954—今関及本郷，原色日. 菌. 図鑑，69，f. 172，pl. 30，f. 172. 1957）

Agaricus caperatus PERS. Obs. Myc. 1 : 48. 1796; Syn. Meth. Fung. 273. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1 : 241. 1821; Hymen. Eur. 215. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 113. 1876—WINTER, Pilze, 1 : 704. 1884.

Cortinarius caperatus FR. Epicr. Myc. 256. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 3. 1863—RABENHORST, Krypt. Fl. 1 : 502. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 183. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi. 1 : 172, 1871.

Pholiota caperata GILL. Champ. Fr. 435, c. ic. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 7 : 49. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 736. 1887 ; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 676. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 210. 1893; Brit. Fungi, 254. 1911—ROLLAND, Atl. Champ. 60, pl. 59, f. 132. 1910—HARPER, Trans. Wisc. Acad. Sci. Arts Lett. 17 : 476, pl. 24. 1913—RICKEN, Blätterp. 197, pl. 55, f. 2. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 294. 1918—LANGE, Agar. Denm. 4 : 5. 1921; Fl. Agar. Dan. 3 : 54, pl. 104, f. E. 1938—OVERHOLTS, Ann. Missouri Bot. Gard. 14 : 123, pl. 13. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 14 : pl. 683. 1930.

(KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 9, f. 11-13. 1914; 日. 菌. 図説, n. 15. 1929; 食用菌及有毒菌, f. 8 (p. 11). 1931; 日. 菌. 図鑑, 5 : 542, f. 529. 1954—白井, 日. 菌. 目. ed. 2, 429. 1917; ed. 3, 258. 1927—松浦, 茸類辞典, 62, f. 63. 1933—今関及上岐, 林. 試. 研. 報. 67 : 46. 1954)

Dryophila caperata QUÉL. Enchir. Fung. 66. 1886.

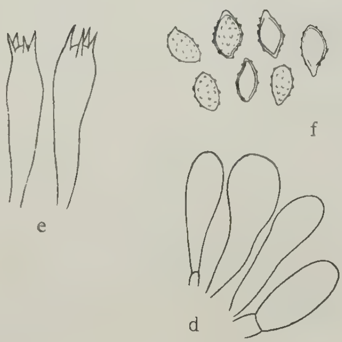
Hylophila caperata QUÉL. Fl. Myc. 98. 1888.

Togaria caperata W. G. SMITH, Brit. Basid. 122. 1908.

子実体は群生或は孤生；傘は 4—10cm, 或はそれ以上に及び，初め卵形或は半球形，のち鐘形或は丸山形～殆ど扁平となり．鈍頭；表面は乾燥或は湿潤，黄土皮色～黄土渋色，乾時中央は往々帯黒色なり，初め圧着せる白色繊維状ベールの残物に被われ傘面灰色の観を呈するも漸次多少鱗片状となり遂に殆ど無毛となる，のち著しく皺或は凹凸を生ず，縁は平坦，初め内屈し，時に裂く；肉は白色. 皮下やや茶褐色を帯ぶ，中盤厚し，味温和；褶は彎状直生，直生～僅か垂生，初め白色，のち粘土色，遂に銹色．乾時肉桂色となる，通常濃淡の帯にて斑入となり横皺の観を呈す，密，中幅，稜は異質にて綿絮状，鋸歯あり；茎は 6—15×0.7—2.5cm, 同幅，白色或はやや黄色，鍔より上部は綿絮状軟毛あり，下部は無毛或は僅か繊維あり，往々基部は壺状をなし白色膜状鍔を有す，中実；鍔は上位或は殆ど中位，白色或は帯黄色, 屢々斜となり，膜質, 上面に往々線条あり，永存性，基部のものは外被膜の残物にて消失或は欠如する場合あり；胞子は広不正楕円形，有疣，黄色，11—19×7—11μ；稜囊体は円筒棍棒形，35—45×7—10μ；可食。



第 168 図　ショウゲンジタケ Rozites caperata
a. b. c. 子実体 ×1/2　d. 稜囊体
e. 担子柄　f. 胞子 ×400 (大谷氏)



所在及産地

林地—秋　　北海道，本州一，欧·北米·亜(小亜)

和名　シウョゲンジタケ (正源寺茸)〔方言〕 ショウウンジ〔方言〕

Cortinarius (PERS.) FR.
フウセンタケ属

FRIES, Gen. Hymen. 7. 1836—SINGER, Agaricales, 547. 1949.
Agaricus sect. *Cortinaria* PERSOON, Syn. Meth. Fung. 276. 1801.
Agaricus trib. *Telamonia* FRIES, Syst. Mycol. 1 : 210. 1821.
Agaricus trib. *Inoloma* FRIES, l. c. 216. 1821.
Agaricus trib. *Phlegmacium* FRIES, l. c. 226. 1821.
Agaricus trib. *Dermocybe* FRIES, l. c. 227. 1821.
Agaricus trib. *Myxacium* FRIES, l. c. 247. 1821.
Cortinaria S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 627. 1821.
Cortinarius subgen. *Hygrocybe* FRIES, Epicr. Fung. 303. 1838.
Gomphos BATTARRA (1755) ex O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 853. 1891.
Inoloma KARSTEN, Medd. Soc. Faun. Fl. Fenn. 18 : 70. 1891.
Hydrocybium EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5 : 440. 1909.
Bulbopodium EARLE, l. c. 441. 1909.
Meliderma VELENOVSKY, Ceské Houby, 399. 1920.

子実体は甚だ変化し，クヌギタケ〜エノキタケ (*Mycena*〜*Collybia*) 型，カヤタケ (*Clitocybe*) 型，シメジタケ (*Tricholoma*) 型乃至殆どシカタケ (*Pluteus*) 型等種々あり；傘は膠性，粘性或は吸水性，更に乾燥にて鱗片，小鱗片，亀裂，繊維，絹糸状或は無毛，往々軟毛或は内生綿絮を有す；褶は類離生〜垂生にて狭く或は広し，幼品にては種々なる色を呈し，後ち通常濃色となり，濃銹色を呈し，多くの場合に於て同色の胞子粉のために粉状となる；胞子は帯褐黄白色〜蜜色にて，通常 NH_4OH にて濃色となる，多少明かに疣状粗面にて真の平滑にあらず，胞子盤も又発芽孔をも有せざるも屢々明かなる乳頭を有す；少くとも内外2膜を有し，刻紋を有す，屢々外被明かなり，球形，類球形，楕円形，楕円状円壔形，円筒状円壔形，扁桃形等あり；担子柄は4胞子，甚だ稀に2胞子；嚢状体は稀に褶側に存在し，屢々稜上に存す；托実質は整性；茎は中心生，基部或は頂部に蜘網膜片を有す，該片は傘表の繊維と結合し，のち屢々銹色胞子によつて粉状を呈す；屢々第2の外側被膜を有す，この被膜は低き下鍔を作る，これは通常茎に附着す，これを環帯 (belt) と呼び，往々数個存在す，その色は白色，鮮色或は褐色〜同色を呈す；屢々茎は紫〜酒赤色，或は類青色〜菫色を呈し，又幼褶及び傘も往々前色を呈す；茎が膠状の外側被膜に被わるる場合は傘と共に膠性なり；肉の菌糸は菌絆を有す，菌糸膜には褐色，赤色及び黄色色素が通常附着す；屢々特徴ある臭を有し；味は温和或は苦し；林中及び木に近き地上に生じ，菌根を作るものなるべし；半被実；北半球温帯に多く産し，南米，阿弗利加及び濠州等にも産す，食用菌あるも大量に利用さるるもの少し；6亜属に分たる。（本属名は cortina［羅］（蜘網膜）より出づ）
基準種 *C. violaceus* (L. ex FR.) FR.

本邦既知亜属及種検索表

A. 傘の表面は膠性の被膜或は外皮に被われ，湿時常に著しく或は僅か粘性或は膠性なり。
- a. 茎もまた初め粘性或は膠性。
  - (1)アブラシメジタケ亜属 **Myxacium** (384)
- b. 茎は乾燥。(2)チャフウセンタケ亜属 **Phlegmacium** (385)

B. 傘の表面は粘性ならず。
- a. 傘は吸水性なく常に乾燥。
  - α. 傘面に内生繊維或は鱗片ありて初めより絹状，茎は通常基部棍棒球根状。
    (3)ムラサキフウセンタケ亜属 **Inoloma** (386)
  - β. 傘面に絹糸状〜類絨毛を有し成時無毛となる，茎は同幅或は下方狭細，外皮層強固。
    (4)ササタケ亜属 **Dermocybe** (386)
- b. 傘は吸水性にて湿潤，但し粘性なし。
  - α. 茎に蜘網膜残部の外に被膜ありて鞘状被或は鍔を作る。(5)ツバフウセンタケ亜属 **Telamonia** (386)
  - β. 茎に蜘網膜のみ存在す。
    (6)ニセフウセンタケ亜属 **Hydrocybe** (386)

---

(1) アブラシメジタケ亜属 Myxacium

A. 茎は綿絮鞘を有す，初め綿絮は膠質物に蔽われ，のち鞘は破れて蛇紋状環或は破片を残す；胞子は扁桃形にて大形（長さ 10μ 以上），例外あり。
- a. 稜嚢体あり，気球形（嚢状洋梨形）
  - α. 傘に中央に達する著しき粗皺溝あり，黄褐色等；胞子 12—14×6—7μ.
    アブラシメジタケ ***C. elatior*** (386)
    - * 前者に似て痩形，暗黄褐色；胞子例外的に小形 (8—10×5—6μ)。
      コアブラシメジタケ var. ***microsporus*** (387)
  - β. 傘縁に線条あり，渋褐色；胞子 10-14. 5×6—7μ
    ヌメリササタケ ***C. mucifluus*** (387)

b. 稜嚢体を欠如す；褶は初め青或は菫色を帯ぶ，傘は鮮黄褐橙色；胞子 10—13×6—7μ.

ツバアブラシメジタケ ***C. collinitus*** (388)

B. ベールは全く粘性，そのため茎は綿絮鞘とならず，只粘性にて乾けば光沢あり；胞子は長さ 10μ 以下，卵形或は楕円形。

a. 褶は初め黄土色；傘に菫色を含まず，黄褐黄色；肉は苦味；胞子 10×7.5μ.

キアブラシメジタケ ***C. vibratilis*** (389)

b. 褶は初め菫色；傘は暗菫色～紫色；苦味なし，胞子 8—10×5—6μ。ムラサキアブラシメタケ ***C. iodes*** (389)

（2） チャフウセンタケ亜属 **Phlegmacium**

A. 茎の基部急に膨大し塊茎状となり縁を有し，蜘網膜はその縁と傘縁とを連ぬ。

a. 褶は菫色，紫色，青色或はその色彩を帯ぶ。

α. 褶及肉は傷により紫色に変ず；傘径 5—10 cm，或はそれ以上，表面は成時中部褐色，周辺に菫色を存す；胞子 10—12×6—7.5μ.

フウセンタケ ***C. purpurascens*** (390)

β. 褶及肉は傷により紫変せず。

I. 傘面は主に菫色にて中央黄土褐色。

1. 傘径 5—10cm；胞子 9—12.5×5—6μ.

アサギフウセンタケ ***C. caesiocyaneus*** (391)

2. 傘径 5—7cm；胞子大形，11.5—15×7.5—10μ.

フウセンタケモドキ

C. pseudopurpurascens (391)

II. 傘径 5—9cm，表面は青色強く，青菫色，のち藤色，淡紫色となる；褶は初め美なる青菫色或は藤色にてアサギフウセンタケの如く初め帯白色ならず；胞子10—12×6—7μ.

ムラサキシメジタケモドキ

C. coerulescens (391)

b. 褶は青紫色系の色なし。

α. 褶は初め黄色，のち濃銹橙色となる；傘径 5—10cm，或はそれ以上，表面は鮮橙黄～橙褐色；胞子は長さ 9μ 以上。

コガネフウセンタケ ***C. fulgens*** (392)

β. 褶は初め白色或は淡色にて，のち帯褐黄土色，遂に類銹色となる；傘径 5—10cm，表面は淡黄褐色；胞子は長さ 10μ 以下。

マンジウガサタケ ***C. multiformis*** (393)

B. 茎は多くは基部棍棒形或は球根形となるも縁を有せず；胞子は長さ 10μ 以上。

a. 茎に明かに被膜の鞘を被むり或はその破片が著しき鱗被或は環帯となる。

α. 茎は長く(6—11.5cm)，輪状縞帯あり；傘は径 3—6cm 或は以上，汚黄橙色；胞子 13—16×7—8μ.

チャオビフウセンタケ

C. triumphans (393)

β. 茎は短く (6—9cm)，幼時著しき階段状鱗被あり；傘は径 4—7cm，暗黄褐色；胞子 9—12×5—6μ.

ツガタケ ***C. claricolor*** (394)

b. 茎に明かなる被膜を被むらず。

α. やや小形菌（傘径 1—4cm），全体やや肉桂色；茎は短大 (1—3×0.2—0.8cm)；胞子 10—11.5×6—7μ. 猛毒あり。

ハツゴロウタケ ***C. venenosus*** (395)

β. 中形～やや大形菌。

I. 褶に菫色なし。

1. 傘は径 7—13cm，黄色にて殆ど全面に黄褐色の纎維を密に被むる；褶は初め汚白色，速に黄土色となる；胞子 10—12×5.5—6μ.

オオカシワギタケ ***C. saginus*** (395)

2. 傘は径 7—12cm，渋色；褶は黄色；胞子 10—13×5—7μ.

チャオオフウセンタケ ***C. latus*** (395)

II. 褶は初め淡青紫色。

1. 傘は径 7—12cm，中央褐色，周辺美しき藤色；胞子 9—12×3—7μ.

フジイロタケ ***C. largus*** (396)

2. 傘は径 5—7cm，黄土色；胞子 15—17×8—10μ.

アシナガカシワギタケ ***C. riederi***(396)

C. 茎は殆ど同幅にて多くは基部球根状ならず；胞子は長さ 10μ 以下。

a. 味苦し；褶は傘面と殆ど同色にて暗オリーブ色；傘径 5—10cm；胞子 7—9(10)×6—7.5μ.

ヤブレオオフウセンタケ ***C. infractus***(397)

b. 味苦からず。

α. 傘は径 4—6cm，表面は粘土色，周辺淡色；褶は初め帯青灰色或は淡赭色；胞子 7—8×5—6μ.

チャフウセンタケ ***C. decoloratus***(397)

β. 傘は径 4—8cm 或はそれ以上，表面は黄黄土色，中央僅か褐色；褶は初め白色，のち粘土色；胞子 7—9.5×4—5μ.
オオツガタケ ***C. turmalis*** (398)

---

(3) ムラサキフウセンタケ亜属 **Inoloma**

A. 子実体は菫或は青色系の色を帯ぶ。
a. 茎は暗褐色鱗片を有せず。
α. 全子実体暗菫色； 肉は空気に触れて変色せず；傘径 5—12cm；胞子 12—15×8—10μ.
ムラサキフウセンタケ ***C. violaceus*** (398)
β. 傘径 6—9cm，表面地色は淡碧青色にて銹褐色繊維を被むる；肉は空気に触れて赤変す；胞子 10—12×6—7μ.
アイカシワギタケ ***C. cyanites*** (399)
b. 茎は密なる暗褐色鱗片に被わる；傘は 2—5cm，濃肉桂褐色，粗雑の鱗片を被むる；胞子 6—9×4—6μ.
ササクレフウセンタケ ***C. pholideus*** (400)
B. 子実体は地色黄色にて傘茎共に銹色の反転鱗片を密生す；傘径 4—5cm；胞子 8—10×4.5—5.5μ.
アサクラフウセンタケ ***C. humicola*** (401)

---

(4) ササタケ亜属 **Dermocybe**

A. 初褶は淡色にて僅か暗菫色の色彩あり； 傘及茎は菫灰色；傘径 2—6cm；胞子 9—10×5μ.
ムラサキタケ ***C. subtabularis*** (401)
B. 初褶は黄色。
a. 傘は円錐状鐘形，著しき鋭頭中丘あり，径 1—3cm，帯赤黄褐色；胞子 8—9.5×4—5μ.
コキンタケ ***C. croceoconus*** (401)
b. 傘は鐘状丸山形， 鈍頭中丘あり， 径 2—5cm，黄褐色〜オリーブ褐色；胞子 6—8×4—5μ.
ササタケ ***C. cinnamomeus*** (402)
C. 子実体全部暗血赤色，傘径 2—5cm；胞子 7—9×4—6μ.
アカタケ ***C. sanguineus*** (403)

---

(5) ツバフウセンタケ亜属 **Telamonia**

A. 茎上に数個の朱色の被膜帯を存す； 褶は淡肉桂色，のち暗銹褐色，傘は径 5—12cm， 赤煉瓦色；胞子 9—12×5—6μ.
ツバフウセンタケ ***C. armillatus*** (403)
B. ベールは帯白色。
a. 褶は菫色；傘は径 4—6cm，或はそれ以上，菫褐色，茎に鞘状被膜あり；胞子 8—10.5×5—6.5μ.
ツバムラサキフウセンタケ ***C. torvus*** (404)
b. 褶は菫色の色彩なし。
α. 茎の基部球根状， 汚褐色；傘は径 6—7cm，暗栗褐色；胞子 7.5—10.5×5—6.5μ.
サザナミツバフウセンタケ
C. bovinus (405)
β. 茎は同幅， 長く， 帯白色；傘は径 3—8cm，或はそれ以上，煉瓦色；胞子 8—10×6—7μ.
ナガエノフウセンタケ ***C. macropus*** (405)

---

(6) ニセフウセンタケ亜属 **Hydrocybe**

A. 子実体は頑丈；傘は大体径 3cm 以上，縁は初め内屈す。
a. 茎は基部紡錘形にて根状；傘は径 4—6cm，肉桂褐色；胞子 7—9.5×5—5.5μ.
ニセフウセンタケ ***C. duracinus*** (406)
b. 茎は同幅；傘は径 2—4cm，栗褐色；胞子 7—8.5×5—6.5μ.
チャニセフウセンタケ ***C. jubarinus*** (406)
B. 子実体は繊弱；傘径 3cm 以下，縁は真直。
a. 傘に鋭き中丘あり； 茎は同幅； 傘は径 1.5—3cm，煉瓦色；胞子 6—9×4—5μ；茎に褐色飛斑あり。トビチャニセフウセンタケ
C. fasciatus (406)
b. 傘に鈍き中丘あり；茎は同幅或はやや便腹状；傘は径 1—3cm，赤褐色；胞子 7.5—9×5—6μ；褶稜嚢体を有す。サザナミニセフウセンタケ
C. obtusus (407)

---

(1) Myxacium (Fr.)

Fr. (1838)

アブラシメジタケ亜属

Cortinarius elatior Fr.

アブラシメジタケ

Fries, Epicr. Myc. 274. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 37. 1863; Hymen. Eur. 355. 1874—Berkeley, Outl. Brit. Fung. 186. 1860—Cooke, Handb. Brit. Fungi, 1 : 177. 1871; Illus. Brit. Fungi, 5 : pl. 741 (no. 736), 742 (no. 737). 1888—Quélet, Champ. Jura Vosg. 1 : 167. 1872; Enchir. Fung. 78. 1886—Gillet, Champ. Fr. 456, e. ic. 1874—Karsten, Myc. Fenn. 3 : 170. 1876; Hattsv. 1 : 334. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 188. 1889—Winter, Pilze, 1 : 605. 1884—Saccardo, Syll. Fung. 5 : 917. 1887—Massee, Brit. Fung. Fl. 2 : 87. 1893; Brit. Fungi, 298, pl. 22, f. 1. 1911—P. Hennings,

in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl-fam. 1, 1** : 248. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 162. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 223. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3. Pilze, 2 2 : 498, pt. 101D, f. 1 2. 1912—REA, Brit. Basid. 150. 1922—KAUFFMAN, N. Am. Fl. 10 : 290. 1932—LANGE, Agar. Denm. 10 : 22. 1935; Fl. Agar. Dan. 3 : 23, pl. 89, f. B. 1938—HENRY, Bull. Soc. Myc. Fr. 54 : 236. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 187. 1948—SINGER, Agaricales, 551. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 154, pl. 60, f. 1. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 252. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 60, 1956—HEIM, Champ. Eur. 2 : 328, pl. 31, f. 3. 1957.

(KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 7, f. 18-20. 1913; 日．菌．図説, n. 136. 1929; 日．菌．図鑑, 5 : 517, f. 512. 1954—白井, 日．菌．目．ed. 2, 175. 1917; ed. 3, 104. 1927—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3 : 115. 1931—原, 日．菌．目．92. 1954—今関及本郷, 原色日．菌．図鑑, 70, f. 173. pl. 30, f. 173. 1957—松浦, 茸類辞典, 26, f. 24, 31, 1933; 応用菌蕈学, 503, 1941)

Agaricus elatus PERS. Syn. Meth. Fung. 332, 1801. (non FRIES)

Myxacium elatius RICKEN, Blätterp. 124, pl. 35, f. 1. 1915.

Gomphos elatior O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 853. 1891.

Cortinarius elatus SACC. Fl. Ital. Crypt. Hymen. 605. 1916—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 204. 1938. (?)

(原, 日．菌．目．92. 1954)



第169図　アブラシメジタケ
Cortinarius elatior
a. 子実体　×1/2　b. 稜嚢体
c. 胞子　×600　　（大谷氏）

子実体は群生或は孤生；傘は径 5—10cm，初めほぼ球状，のち鐘形或は鈍円錐形となり，更に開張し盤状或は広き中丘を存す；表面は常に著しき粘液を有し，油を塗りたる観を呈す，色は変化性に富み，黄褐色，或は菫褐色，湿時オリーブの色彩を帯び，乾時褪色して汚黄土黄色となる，周辺は薄膜質，縁より傘面の半ばに至る迄放射状の粗き皺溝あるを特徴とし，縁は屢々裂く；肉は柔軟にて脆く，帯白色にて稍々淡黄色を帯ぶ，中盤厚し，味及臭温和；褶は類直生或は狭生，初め帯白泥土色，灰黄土色，のち肉桂色となる，密，広幅，便腹状，寧ろ厚く，横脈を有す，稜は菫色にて鈍鋸歯あり；茎は 8—18×1—2cm，中部やや太く，両端に漸細，下方深く地中に埋まり，基端尖る，初め粘性，淡菫色，圧着せる綿絮状ベールにて鞘状に包まれ，鞘はのち破れて破片或は環状をなす，頂部及基部白色，鞘より上方に線条あり，中実；胞子は扁桃形，有疣，淡黄褐色，12—14×6—7μ；稜嚢体は嚢状洋梨形，36—45×21—28μ；可食。

所在及産地　広葉樹林落葉間—秋
北海道，本州一欧，北米

和名　アブラシメジタケ，（油湿地茸）〔川村〕
ナメススキ，ノメタケ

var. **microsporus** KAWAM.

コアブラシメジタケ

KAWAMURA, Icon. Jap. Fungi, 5 : 519, f. 513, 1954.

原種に比し胞子は常に小形，子実体は痩形にて傘面暗黄褐色，肉は白色を呈す；傘は径 5—7cm，初めほぼ球状，のち鐘状となり，更に開張し広き中丘あり；表面は湿時栗褐色にて甚だ粘性，乾時暗褐色，周辺は極めて薄肉，膜質，放射状浅皺あり，脆し；肉はほぼ白色；褶は殆ど直生し，やや波状，初め灰色或は粘土色，のち胞子によりて肉桂色となる，やや疎；茎は 8—12×1—1.5cm，普通両端に向つて狭細，殊に下方に伸長して漸細し基端尖る，白色，柔軟，纖維質，湿時粘性，充塞；胞子は扁桃形，細疣を有し，淡黄褐色，8—10×5—6μ；可食。

所在及産地
林地上—秋　　本州

和名　コアブラシメジタケ（小油湿地茸）〔川村〕

Cortinarius mucifluus (FR.) FR.

ヌメリササタケ

FRIES, Epicr. Myc. 274. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2: 37. 1863; Hymen. Eur. 355. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 167. 1872; Enchir.

Fung. 78. 1886—GILLET, Champ. Fr. 457. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 170. 1876; Hattsv. 1 : 333. 1879 ; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 188. 1889—COOKE, Illus. Brit. Fungi, 5 : pl. 740 (no. 735). 1882; Handb. Brit. Fungi, ed. 2 : 249. 1883—WINTER, Pilze, 1 : 605. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 917. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 605. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 87. 1892; Brit. Fungi, 298. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 223. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 498. 1912—REA, Brit. Basid. 150. 1922—KONRAD, Bull. Soc. Myc. Fr. 43 : 164. 1927—KONRAD & MAUBLANC, Icon, Sel. Fung. 2 : pl. 109. 1929; Agaricales, 1 : 187. 1948—HENRY, Bull. Soc. Myc. Fr. 50 : 284, f. AE. 1934—LANGE, Fl. Agar. Dan. 3 : 23, Pl. 90, f. D. 1938—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 252. 1953—HEIM Champ. Eur. 2 : 328. 1957.

(今関，原色きのこ，pl. 15(左). 1942—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，70, pl. 30, f. 174. 1957)

Gomphos mucifluus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 854. 1891.

Cortinarius collinitus var. *mucifluus* BATAILLE, Fl. Monogr. Cortin. 40. 1912.

Phlegmacium mucifluum RICK. Blätterp. 125, pl. 34, f. 4. 1915.

Myxacium mucifluum VELEN. Ceské Houby, 405, 1920.

子実体は群生；傘は径 3—9cm，幾分肉質，鐘形，のち開張し，遂に反転す；表面は蜜色，黄土色，鉛粘土色，乾時渋褐色，剝げる無色の粘被を被むる，縁は膜質，線条あり；肉は帯白色，老時黄或は銹色を帯び，味温和，臭なし；褶は粘土色，のち水潤状肉桂色，彎生～直生，広幅，密，横脈なし，稜に白色綿絮あり；茎は 7—10×1—2cm，下方狭細，白色～淡青紫色，早失性綿絮被膜に被われ粘性，のち破れて環状紋を作り上方蜘網膜に連る，のち乾燥して光沢あり；担子柄は 4 胞子，36—42×9—10μ；胞子は広扁桃形，有疣，12—14×7.5—8μ；紋は銹色；稜に無色気球形嚢体あり，30—40×16—25μ；可食。

所在及産地

林内地上—秋　　本州—欧，北米

和名　ヌメリササタケ（滑笹茸）〔今関〕

Cortinarius collinitus

(PERS. ex FR.) FR.

ツバアブラシメジタケ

FRIES, Epicr. Myc. 274. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 36. 1863; Hymen. Eur. 354. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 186. 1860—COOKE, Hanbd. Brit Fungi, 1 : 177, 1871 ; Illus. Brit. Fungi, 5 : pl. 738 (no 733). 1888—QUÉLET, Champ. Jura Vorg. 1 : 167. 1872 ; Enchir. Fung. 78. 1886—GILLET, Champ. Fr. 457, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 169. 1876; Hattsv. 1 : 332. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 188. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 605. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 3 : 916. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 604. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 597. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 86. 1893; Brit. Fungi, 298. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 248. f. 118, D. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 162. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 161. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 222. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 63, pl. 64, f. 141. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2 (2) : 497. 1912—REA, Brit. Basid. 149. 1922—LANGE, Agar. Denm. 10 : 24. 1935; Fl. Agar. Dan. 3 : 24, pl. 88, f. B. 1938—HENRY, Bull. Soc. Myc. Fr. 51 : 205. 1935—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 186. 1948—SINGER, Agaricales, 551. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 252. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 328, f. 230. 1957.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 53 : 397. 1939—原，日．菌．目．92. 1954—HONGO, Jour. Jap. Bot. 30 : 217, f. 2(4). 1955—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，70, f. 175, pl. 30, f. 175. 1957)

Agaricus senescente BATSCH, Elench. Fung. 35, pl. 197. 1783.

Agaricus mucosus BULL. Champ. Fr. pl. 549, f. D-F. (non FRIES).

Agaricus collinitus (SOW. Col. Fig. Engl. Fungi, 1 : pl. 9. 1797?)—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 281. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1 : 248. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 498. 1844.

Cortinaria collinita S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 628. 1821.

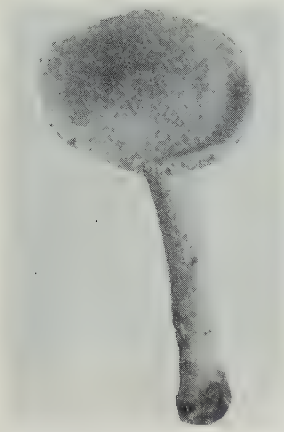
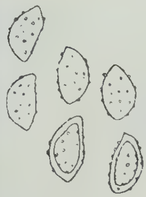
Gomphos collinitus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 853. 1891.

Myxacium collinitum RICK. Blätterp. 124, Pl. 34, f. 1. 1915.

Cortinarius mucifluus KAUFFM. Agar. Mich. 328, pl. 63. 1918; N. Am. Fl. 10 : 291. 1932. (non FRIES)

Cartinarius mucosus HONGO, Jour. Jap. Bot. 27 : 191. 1952. (non KICKX)

子実体は群生或は散生；傘は径 4—10cm，初め丸山形或は鈍丸山形，のち開張鈍頭，或は圧低され中央に著しき中丘を存す；表面は粘土褐色又は黄橙黄褐色にて甚だ粘る剝げる粘被を被むる，縁は平坦；肉は帯白色，のち褐色を帯ぶ，無臭，味温和；褶は直生～やや彎生，初め菫色を帯び，クリーム黄土色或は灰黄色，のち銹褐色，密，中位に広幅，甚だ薄く，僅か便腹状，稜は全縁或は類全縁；茎は 5—10


a

b

第170図 ツバアブラシメジタケ
Cortinarius collinitus
a. 子実体 ×1/2
b. 胞子 ×750
（大谷氏）

×1—1.5cm，同幅或は基部狭細，真直，緊緻，上部白色，下部褐色，初め厚き膠性被膜に包まる，この被膜はのち普通同心円状の破片に裂け，蛇紋を作る，その上端は白色粘性の蜘網膜に連る；胞子は類扁球形，粗面，13—15(17)×6—8μ；紋は銹色；担子柄は4胞子，40—45×10—11μ；嚢状体なし，

所在及産地

松林内—秋 北海道，本州，九州—欧，北米

和名 ツバアブラシメジタケ（鍔油湿地茸）〔今井〕

Cortinarius vibratilis (Fr.) Fr.

キアブラシメジタケ

Fries. Epicr. Myc 277. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 43. 1863; Hymen. Eur. 358. 1874—Quélet, Champ. Jura Vosg. 1 : 351. 1872 ; Enchir. Fung. 79. 1886—Gillet, Champ. Fr. 459, c. ic. 1874—Karsten, Myc. Fenn. 3 : 170. 1876; Hattsv. 1 : 339. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 190. 1889—Cooke, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 251. 1883; Illus. Brit. Fungi, 5 : pl. 744 (no. 743). 1888—Winter, Pilze, 1 : 603. 1884—Saccardo, Syll. Fung. 5 : 922. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 608. 1916—Schroeter, Pilze Schles. 1 : 597. 1889—Massee, Brit. Fung. Fl. 2 : 92. 1893; Brit. Fungi, 298. 1911—P. Hennings, in Engler & Prantl, Nat. Pfl.-fam. 1. 1** : 248. 1900—Patouillard, Ess. Tax. 162. 1900—W. G. Smith, Brit. Basid. 224. 1908—Migula, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 496. 1912—Kauffman, Agar. Mich. 333. 1918; N. Am. Fl. 10 : 293. 1932—Rea, Brit. Basid. 152. 1922—Konrad & Maublanc, Icon. Sel. Fung. 2 : pl. 112. 1926; Agaricales, 1 : 188. 1948—Bresadola, Icon. Myc. 13 : pl. 633. 1930—Henry, Bull. Soc. Myc. Fr. 51 : 210. 1935—Lange, Agar. Denm. 10 : 25. 1935; Fl. Agar. Dan. 3 : 25, pl. 90, f. F. 1938—Imai, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 205. 1938—Kühner & Romagnesi, Fl. Analyt. Champ. Super. 253. 1953—Heim, Champ. Eur. 2 : 330. 1957.

（本郷，植．分．地．14 : 73, f. 1(11). 1951—原，日．菌．目．93. 1954—今関及土岐，林．試．研．報．87 : 52. 1956)

Agaricus vibratilis Fr. Syst. Myc. 1 : 227. 1821—Rabenhorst, Deut. Krypt. Fl. 1 : 498. 1844.

Cortinarius amarus Peck, Rep. N. Y. St. Mus. 32 : 30. 1880.

Myxacium amarum Peck, Bull. N. Y. St. Mus. 1 : 14. 1888.

Gomphos vibratilis O. Kuntze, Rev. Gen. Pl. 2 : 855. 1891.

Myxacium vibratile Ricken, Blätterp. 127, pl. 35, f. 2. 1915.

子実体は群生或は孤生；傘は径 2—5cm，鐘形或は丸山形，のち開張し，広き中丘を存す；表面は甚だ膠性なる皮を有す，吸水性，黄色，黄土黄色～黄褐黄色，乾時淡色となる，光沢あり，無毛，平坦；肉は柔軟，中盤厚く，白色或は淡色，味甚だ辛く，臭不快ならず；褶は直生或は小歯ありて垂生，淡色或は淡黄土色，のち淡黄土肉桂色，密，むしろ狭幅，薄し；茎は 3—8×0.4—1cm，殆ど同幅，類棍棒形或は上下何れかに狭細す，純白色，光沢あり，幼時膠性無色のベールに包まる，これは速に乾燥し基部のみ屢々粘性なり，柔軟，充塞，のち中空；胞子は卵形，殆ど平滑，9—10.5×6.5μ；胞子紋は銹色；可食。

所在及産地

林地—秋 北海道，本州，—欧，北米

和名 キアブラシメジタケ（黄油湿地茸）〔今井〕

Cortinarius iodes Berk. et Curt.

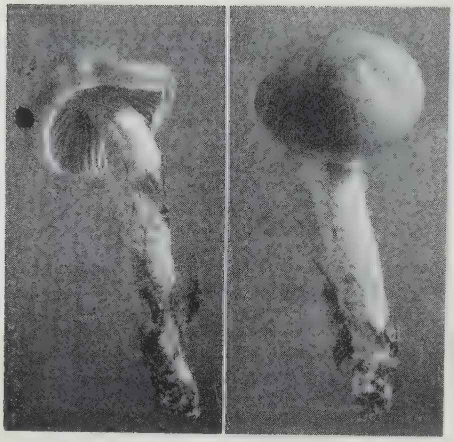
ムラサキアブラシメジタケ

Berkeley & Curtis, Ann. Mag. Nat. Hist. II. 12 : 423. 1853—Saccardo, Syll. Fung. 5 : 920. 1887—P. Hennings, in Engler & Prantl, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 248. 1900—Kauffman, Agar. Mich. 335. 1918; N. Am. Fl. 10 : 294. 1932—Imai, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 205. 1938.

（原，日．菌．目．92. 1954)

Gomphos iodes O. Kuntze, Rev. Gen. Pl. 2 : 854. 1891.

孤生，群生或は類叢生；傘は径 2—5cm，鐘状丸山形，のち開張す；表面は無毛，平坦，粘性の剝げ易き外皮を有す，暗菫色～紫色，遂に中央屢々帯黄色となる；肉は中盤厚く，急に縁に向つて薄く，帯菫色，のち淡色，味又臭なし；褶は直生，初め帯菫色，のち灰肉桂色，乾時灰銹色となる，密，中位に広幅；茎は 5—7×0.4—1cm，同幅，棍棒状或は両方何れかに僅か狭細，粘性，帯菫色，纖維あり，中実；蜘網膜は淡菫色；胞子は広楕円形，有疣，8—10



a b



第 171 図 ムラサキアブラシメジタケ
Cortinarius iodes
a. b. 子実体 ×1/2
c. 胞子 ×750
(大谷氏) c

×5—6μ: 胞子紋は銹色。

所 在 及 産 地

林地一秋 北海道一北米

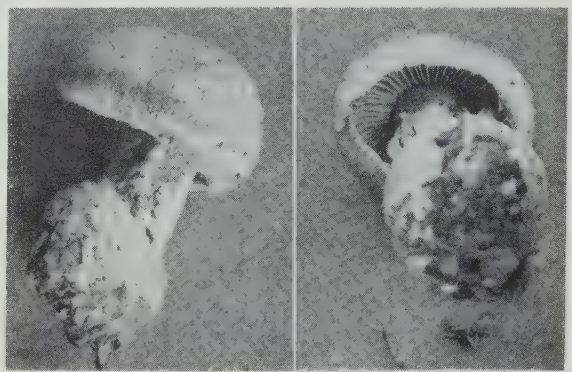
和 名 ムラサキアブラシメジタケ（紫油湿地茸）

〔今井〕

（2） ***Phlegmacium*** (Fr)Fr. (1838) チャフウセンタケ亜属

Cortinarius purpurascens (Fr.)Fr. フウセンタケ

Fries, Epicr. Myc. 265. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 20. 1863; Hymen. Eur. 345. 1874—Berkeley, Outl. Brit. Fung. 185. 1860—Cooke, Handb. Brit. Fungi, 1 : 175. 1871; Illus. Brit. Fungi, 5: pl.723-724(no. 710-711). 1888—Quélet, Champ. Jura Vosg. 1 : 165. 1872; Enchir. Fung. 75. 1886—Gillet, Champ. Fr. 464, c. ic. 1874—Karsten, Myc. Fenn. 3 : 165. 1876; Hattsv. 1 : 319. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 185. 1889—Winter, Pilze, 1 : 613. 1884—Saccardo, Syll. Fung. 5 : 902. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 598. 1916—Schroeter, Pilze Schles. 1 : 600. 1889—Massee, Brit. Fung. Fl. 2 : 106. 1893; Brit. Fungi, 295. 1911 P. Hennings, in Engler & Prantl, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 249. 1900—W. G. Smith, Brit. Basid. 218. 1908—Migula, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 504. 1912—Kauffman, Agar. Mich. 345, pl. 71. 1918; N. Am. Fl. 10 : 297. 1932—Rea, Brit. Basid. 141. 1922—Bresadola, Icon. Myc. 13: pl. 619. 1930—Lange, Agar. Denm. 10 : 14. 1935; Fl. Agar. Dan. 3 : 16, pl. 82, f. A. 1938—Henry, Bull. Soc. Myc. Fr. 51 : 66, f. 6. 1935—Imai, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 209. 1938—Konrad &



a b



第 172 図 フウセンタケ
Cortinarius purpurascens
a. 子実体表面 b. 同裏面 ×1/2
c. 胞子 ×650 (大谷氏)
c

Maublanc, Agaricales, 1 : 190. 1948—Wakefield & Dennis, Comm. Brit. Fungi, 153, pl. 57, f. 4. 1950—Kühner & Romagnesi, Fl. Analyt. Champ. Super. 259. 1953—Romagnesi, Nouv. Atl. Champ. pl. 61. 1956—Heim, Champ. Eur. 2 : 340. 1957. (Kawamura, Illus. Jap. Fungi, pl. 4, f. 7-10. 1912; 日. 菌. 図説, n. 121. 1929; 日. 菌. 図鑑, 5 : 525, f. 517. 1954—白井, 日. 菌. 目. ed. 2, 175. 1917; ed. 3, 104. 1927—安田, 植. 雑. 38 : 148. 1924—広江, 応用菌蕈学, 170. 1941—原, 日. 菌. 目. 93. 1954—今関及土岐, 林. 試. 研. 報. 87 : 52. 1956—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 71. 1957)

Agaricus purpurascens Fr. Obs. Myc. 2 : 70. 1818.

Gomphos purpurascens O. Kuntze, Rev. Gen. Pl. 2 : 854. 1891.

Phlegmacium purpurascens Ricken, Blätterp. 130, pl. 36, f. 3. 1915.

子実体は孤生，群生或は類叢生; 傘は径 5—10cm，或はそれ以上に及び，丸山形，のち開張し，鈍頭; 表面は無毛，湿時甚だ粘性，幼時暗帯紫焦茶色或は菫紫色，速に褪色し，粘土色或は褐色斑を生ず，周辺は永く菫色を残存す，縁は初め内屈す; 肉は厚く，緻密，青空色或は紫色を帯び，老時褪色す，味及臭温和; 褶は凹入，或は円形狭生，初め青空色或は濃紫色，のち褪色して淡紫色，遂に胞子により肉桂色となる，傷時濃紫色に変ずる特徴あり，長時稜に青色を残す，密，むしろ狭幅にて 5mm 内外，稜は幾分有歯，茎は 4—9×1—2cm，通常短かくして頑丈，殆ど同幅，基部著しく膨大，有縁或は無縁の塊茎状，往々算盤玉形，淡青空色或は帯青菫色，傷時肉は濃紫色となる，表面に多くの遊離せる紫色繊維を存す; 蜘網膜は繊維状，菫色，傘の半開時縁より茎に

斜に連結す，中実；胞子は楕円或は扁桃形，黄褐色有疣，10—12×6—7.5μ；胞子紋は銹色，可食。

所在及産地

林地上一秋　北海道，本州，九州一欧，北米

和名　フウセンタケ（風船茸）〔川村〕

Cortinarius caesiocyaneus BRITZ.

アサギフウセンタケ

BRITZELMAYR, Hymen. Sudbay. pl. 114, f. 339, pl. 421, f. 362; Bot. Centralbl. 62 : 307. 1895; 80 : 58. 1899. pr. p.—R. MAIRE, Bull. Soc. Myc. Fr. 26 : 176, f. 5, pl. 8, f. 1-2. 1910—SACCARDO & TROTTER, Syll. Fung. 21 : 186. 1912—KAUFFMAN, Agar. Mich. 342. 1918; N. Am. Fl. 10 : 297. 1932—REA, Brit. Basid. 140. 1922(?)—HENRY, Bull. Soc. Myc. Fr. 51 : 40, f. 2. 1935—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 209, pl. 4, f. 5. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 191. 1948—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 263. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 340. 1957.

（原，日．菌．目．92. 1954—今関及土岐，林．試．研．報，67 : 36. 1954）

Phlegmacium caerulescens. f. *caesiocyaneum* KILLERM. Pilze Bayern, 3 : 12. 1928.

Corticinarius caerulescens subsp. *caesiocyaneus* KONR. et MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 2 : pl. 115. 1932.

Cortinarius caerulescens et *scaurus* GILLET, Champ. Fr. icon. 1874.

子実体は群生或は孤生，傘は径 5—10cm，丸山形，のち開張扁平となり，往々中央圧低さる；表面は粘性の剝げ易き外皮あり，乾時光沢を有す，淡青菫色～菫灰色，中央多少黄土褐色を帯ぶ，平滑，無毛，多少放射状内生纖維を存す，時に壺の残片を有す，縁は初め内屈す；肉は厚く，帯白色～淡黄褐色茎にては僅か青色を帯び，球根内は帯白色なり，味温和，臭弱し；褶は彎状狭生，帯白色，青白色より粘土色となり，遂に肉桂色となる，密，むしろ狭幅，薄く，稜は波状にて鋸歯あり；茎は 5—7×1—1.3 cm，初め纖維状，帯菫白色，のち白色，同幅或は上方僅か狭細，基端明かに塊茎状，大形にて，径 3cm，高さ 2cm に及び，白色，通常有縁にて多くは嚢状をなし，縁に蜘網糸を附す；蜘網膜は白色或は菫色を帯び，纖維状，早失性；胞子は扁桃形或は楕円形，黄褐色，有疣，9—12.5×5—6μ；胞子紋は肉桂色；可食

所在及産地

林内落葉間一秋　北海道，本州一欧，北米

和名　アサギフウセンタケ（浅黄風船茸）〔今井〕

Cortinarius pseudopurpurascens HONGO

フウセンタケモドキ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 28 : 334, f. 3. 1953.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，71，f. 176, pl. 31，f. 176．1957）

子実体は群生；傘は径 5—7cm，丸山形～広丸山形，初め内捲せる縁を有し，のち開張して殆ど扁平となる，往々広き低き中丘を存す；表面は湿時粘性，無毛，中盤帯褐黄土色，周辺菫色，縁に屢々水潤状菫色線条或は飛斑あり；肉は中盤厚く，縁に向つて急減し，淡菫色，臭微，味温和；褶は狭生，菫色，のち胞子により肉桂色となる，傷により変色せず，やや密，幅 5—8mm，稜は平坦；茎は 6—8×1—1.3 cm，同幅，基部に広き有縁塊茎あり，堅緻，充塞～中実，表面は上部菫色，下部帯褐黄土色，絹状纖維を被むる；蜘網膜は早失性；胞子は幾分扁桃形，大形にて広く，11.5—15×7.5—10μ，粗疣を有し，KOH 液中にて淡褐色～黄褐色；嚢状体なし；可食か。

所在及産地

松林内地上一秋　本州

和名　フウセンタケモドキ（擬風船茸）〔本郷〕

Cortinarius coerulescens (SCHAEFF.) FR.

ムラサキシメジタケモドキ

FRIES, Epicr. Myc. 265. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 19. 1863; Hymen. Eur. 345. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 185. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 175. 1871; Illus. Brit. Fungi. 5 : pl. 722. (no. 709), (non pl. 721). 1888—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 165. 1872; Enchir. Fung. 75. 1886—GILLET, Champ. Fr. 465, (non icon). 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 164. 1876; Hattsv. 1 : 319. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basid. 185. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 613. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 902. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 599. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 600. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2: 106. 1893; Brit. Fungi, 295. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL Nat. Pfl-fam. 1, 1** : 249. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 162. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 218. 1908—R. MAIRE, Bull. Soc. Myc. Fr. 26 : 179, pl. 8, f. 3-5. 1910; 27 : 424. 1911—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 504. 1912—KAUFFMAN, Agar. Mich. 349. 1918; N. Am. Fl. 10 : 340. 1932—REA, Brit. Basid. 140. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 2 : pl. 116. 1927; Agaricales, 1 : 190. 1948—BRESADOLA, Icon. Myc. 13 : pl. 617. 1930—HENRY, Bull. Soc. Myc. Fr. 51 : 34, f. 1. 1935—LANGE, Agar. Denm.

10: 15. 1935 ; Fl. Agar. Dan. 3: 16, pl. 82, f. D. 1938—SINGER, Agaricales, 551. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 152, pl. 57, f. 2. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 263. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 340. 1957.

(川村, 日. 菌. 図鑑, 5 : 523, f. 516. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 71. 1957)

Agaricus caerulescens SCHAEFF. Icon. Fung. 4 : 17, pl. 34. 1774

Agaricus cyaneus var. *caerulescens* PERS. Syn. Meth. Fung. 277. 1801.

Corticina cyanea var. *caerulescens* S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 627. 1821.

Gomphos caerulescens O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 853. 1891.

Phlegmacium caerulescens RICKEN, Blätterp. 129. 1915.

子実体は群生或は孤生; 傘は径 5—9cm, 初め半球形, のち低丸山形, 更に殆ど扁平となる; 表面は僅か粘性にて外皮剝げ易し, 無毛, 平滑, 或は僅か纖維あり, 初め青色, 青菫色, 藤色, のち淡紫色となる, 往々中央の方に黄土色の汚点を生ず, 縁は初め内屈し, 蜘網膜を附す; 肉は軟肉質, やや緻密, 中盤厚し, 淡菫色にて茎及皮下に於て著し, のち帯白色或は黄土色, 味温和, 臭弱し; 褶は彎状直生, 初め美なる青菫色或は藤色, 遂に胞子により銹褐色となる, 密, 広幅にて 5mm を超え, 厚し, 稜は幾分鋸歯ありて永く菫色を保つ; 茎は 5—12×1—1.5 cm, 上方僅か狭細, 基部は有縁塊茎状にて径 2.5—3.5cm, 乾燥, 青菫色～菫色, 球根部は白色, 纖維肉質, 中実; 蜘網膜は菫色; 胞子は扁桃形, 黄褐黄土色, 有疣, 10—12×6—7μ; 胞子紋は銹褐色; 可食。

所在及産地

林内落葉間—夏秋　　　本州—欧, 北米

和名 ムラサキシメジタケモドキ (擬紫湿地茸) 〔川村〕

Cortinarius fulgens

(ALB. et SCHW.) FR.

コガネフウセンタケ

FRIES, Epicr. Myc. 267. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 23. 1863; Hymen. Eur. 347. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 176. 1871; Illus. Brit. Fungi, 5 : pl. 716(no. 716). 1888—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 165. 1872; Enchir. Fung. 75. 1886—GILLET, Champ. Fr. 462, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 166. 1876; Hattsv. 1 : 321. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 186. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 611. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 905, 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 594. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 599. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 108. 1893; Brit. Fungi, 296, pl. 22, f. 5. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 162. 1900—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 249. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 219. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 64, pl. 66, f. 145. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 504. 1912—KAUFFMAN, Agar. Mich. 354. 1918; N. Am. Fl. 10:301. 1932—REA, Brit. Basid. 142. 1922—LANGE, Agar. Denm. 10 : 16. 1935; Fl. Agar. Dan. 3 : 17, pl. 83, f. D. 1938—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 210. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 193. 1948—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 266. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 338. 1957.

(原, 日. 菌. 目. 92. 1954)

Agaricus fulgens ALB. et SCHW. Consp. Fung. Lusat. 160. 1850—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 500. 1844.

Gomphos fulgens O. KUNTZE, Rev. GEN. Pl. 2 : 853. 1891.

Phlegmacium fulgens RICKEN, Blätterp. 135. 1915.



a　b

第 173 図 コガネフウセンタケ *Cortinarius fulgens*
a. 子実体 ×1/2
b. 胞 子 ×500
(大谷氏)

子実体は群生; 傘は径 5—10cm, 或はそれ以上に及び, 広丸山形, のち殆ど扁平に開張す; 表面は鮮橙黄色～橙褐色, 中央暗色, 周辺淡色, 湿時粘性, 纖維を被むり, 幾分線条或は細鱗片あり, 縁は初め内屈す; 肉は厚く, 帯黄色, のち藁色, 味及臭温和; 褶は凹入, 初め黄色或は濃黄色, のち濃銹橙色となる, 密, 広幅, 稜は全縁; 茎は 4—8×1.5—2cm, 同幅或は殆ど同幅, 基部に大形の圧低せる有縁塊茎あり, 上部黄黄土色, 下部幾分黄褐色, 蜘網膜の銹色纖維に密に被わる, 緊緻, 中実; 胞子は扁桃形有嘴, 有疣, 9—12×6—7μ; (或は 15—18×8—10μ. 今井) 胞子紋は銹色; 可食。

所在及産地

広葉樹林地—秋　　　北海道—欧, 北米

和名 コガネフウセンタケ (黄金風船茸) 〔今井〕

Cortinarius multiformis (FR.) FR.

マンジウガサタケ

FRIES, Epicr. Myc. 263. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 15. 1863; Hymen. Eur. 343. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 184. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 174. 1871; Illus. Brit. Fungi, 5 : pl. 708(no. 701). 1888—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 164. 1872; Enchir. Fung. 74. 1886—GILLET, Champ. Fr. 466. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 163. 1876; Hattsv. 1 : 315. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 185. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 615. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 898. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 589. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 601. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 102. 1893; Brit. Fungi, 293. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 249. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 162. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2 (2) : 501. 1912—KAUFFMAN, Agar. Mich. 357, pl. 72. 1918; N. Am. Fl. 10 : 302. 1932—REA, Brit. Basid. 138. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 2 : pl. 114. 1928; Agaricales, 1 : 189. 1948—LANGE, Agar. Denm. 10 : 14. 1935; Fl. Agar. Dan. 3 : 15, pl. 81, f. D. 1938—HENRY, Bull. Soc. Myc. Fr. 51 : 93, f. 10. 1935—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 208. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 151, pl. 59, f. 3. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 265. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 338, f. 238. 1957.

(川村, 日. 菌. 図説, n. 132. 1929; 日. 菌. 図鑑, 5 : 514, f. 509. 1954—松浦, 茸類辞典, 113, f. 132. 1933; 応用菌蕈学, f. 789, 790, 793 (p. 1171). 1941—今関, 原色きのこ, pl. 15(右) 1942; 及土岐, 林. 試. 研. 報. 67 : 37. 1954—原, 日. 菌. 目. 93. 1954)

Agaricus turbinatus SOW. Col. Fig. Engl. Fungi, 1 : pl. 102. 1797.

Agaricus multiformis FR. Obs. Myc. 2 : 63. 1818.

Agaricus varius FR. Syst. Myc. 1 : 225. 1821. pr. p.

Gomphos multiformis O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 854. 1891.

Phlegmacium multiforme RICKEN, Blätterp. 136, pl. 39, f. 1. 1915.

子実体は群生; 傘は径 5—10cm, 丸山形, のち開張し, 広き低き中丘あるか殆ど扁平となる; 表面は湿時粘性, 初め白色早失性の絹状被膜を被むる, 剝げる外皮を有し, 乾燥し, やや光沢あり, 殆ど一様に帯褐黄土色或は淡黄褐色, 或は放射状の纎維あり, 縁辺は薄く, 線条なく, 内屈す; 肉は白色, 茎に於て黄色を帯び, 味及臭温和; 褶は凹入或は狭生, 初め白色, のち帯褐黄土色, 遂に類銹色となる, 稜に鋸歯あり; 茎は 5—10×1—2cm, 同幅或は上方僅か狭細, 基部多少有縁或は無縁の球根状又は棍棒形, 絹状纎維を有し, 初め白色, のち基部黄色或は黄褐色となる, 中実; 蜘網膜は白色, 貧弱, 早失性; 胞子は楕円形, 僅か粗面, 8—10×5—6μ; 胞子紋は赭色; 可食。

所在及産地

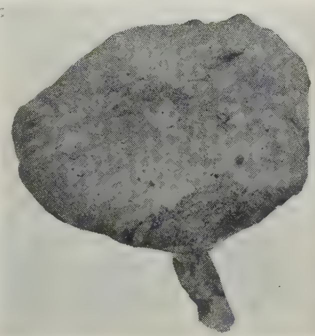
林地—夏秋　　北海道, 本州—欧, 北米

和名 マンジウガサタケ (饅頭笠茸) 〔川村〕

Cortinarius triumphans FR.

チャオビフウセンタケ

FRIES, Epicr. Myc. 256. 1836; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 4. 1863; Hymen. Eur. 336. 1874—GILLET, Champ. Fr. 470, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 160. 1876; Hattsv. 1 : 307. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 183. 1889—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 11 : 394. 1882; Enchir. Fung.



a



b



c



d

第174図 マンジュウガサタケ
Cortinarius multiformis
a. b. c. 子実体 ×1/2
d. 胞子 ×550 (大谷氏)

72. 1886—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 236. 1883; Illus. Brit. Fungi, 5 : pl. 692 (no. 682) 1888—WINTER, Pilze, 1 : 620. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 889. 1887 ; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 582. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 94. 1893; Brit. Fungi, 292. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 250. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 162. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 215. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 506. 1912—R. MAIRE, Ann. Myc. 11 : 344. 1913—KAUFFMAN, Agar. Mich. 360. 1918; N. Am. Fl. 10 : 305. 1932—REA, Brit. Basid. 133. 1929; KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 2 : pl. 129. 1929; Agaricales, 1 : 197. 1948—LANGE, Agar. Denm. 10 : 18. 1935 ; Fl. Agar. Dan. 3 : 19, pl. 85, f. c. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 150, pl. 59, f. 1. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 269, f. 385. 1953—HEIM, Cham. Eur. 2 : 231; f. 231. 1957.

(今関及土岐，林．試．研．報．67 : 37, f. 4. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，72, pl. 31, f. 177. 1957)

Cortinarius crocolitus QUÉL. Champ. Jura Vosg. Suppl. 6 : 288. 1878—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 890. 1887—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL. Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 250. 1900—REA, Brit. Basid. 135. 1922.

Cortinarius triumphans var. *crocolitus* QUÉL. Enchir. Fung. 72. 1886.

Gomphos triumphans O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 854. 1898.

Phlegmacium crocolitum RICKEN, Blätterp. pl. 41, f. 4. 1915. (non *Phl. triumphans* RICKEN)

子実体は群生；傘は径 3—6 cm，或はそれ以上に及び，鈍頭丸山形，のち扁平；表面は僅か粘性，皮剝げ易し，汚黄橙色，中央濃色，往々中央に小鱗片を存す，縁は初め内屈す；肉は厚く，緊緻，白色，味温和，臭なく，のち不快臭あり；褶は凹入着生，或は直生，初め白クリーム色～鼠色，遂に肉桂色となる，稜は細欠刻を有す；茎は 6—11.5×0.7—1 cm，同幅，基部棍棒状或は球状球根となり，幅上部の 2 倍に及ぶ，汚黄色，表面に褐色輪状の破れたる縞帯を有す，頂部稍々藤色を帯ぶ，充寔；蜘網膜は絹糸状，厚く，白色，のち黄褐銹色；胞子は楕円～扁桃形，有疣，黄色，13—16×7—8μ；胞子紋は銹色；可食．

所在及産地

林地—秋　　本州—欧．北米

和名 チャオビフウセンタケ（茶帯風船茸）〔今関及土岐〕

Cortinarius claricolor (FR.) FR.
ツガタケ

FRIES, Epicr. Myc. 257. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 5. 1863 ; Hymen. Eur. 336. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 162. 1872; Enchir. Fung. 72. 1886—GILLET, Champ. Fr. 471, c. ic. 1874 (?)—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 237. 1883; Illus. Brit. Fungi, 5 : pl. 693 (no. 683) 1888—WINTER, Pilze, 1 : 620. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 890. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 583. 1916—KARSTEN, Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 183. 1889—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 603. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 95. 1893 ; Brit. Fungi, 292. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 215. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 506. 1912—KAUFFMAN, Agar. Mich. 363. 1918; N. Am. Fl. 10 : 307. 1932—REA, Brit. Basid. 133. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 13 : pl. 601. 1930—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 2 : pl. 126. 1930; Agaricales, 1 : 198. 1948—LANGE, Agar. Denm. 10 : 19. 1935 ; Fl. Agar. Dan. 3 : 20, pl. 85, f. A. 1938—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 269. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 331. 1957.

(川村，日．菌．図鑑，5 : 515, f. 510. 1954)

Agaricus multiformis var. *claricolor* FR. Obs. Myc. 2 : 65. 1818.

Cortinarius triumphans * *claricolor* KARST. Hattsv. 1 : 307. 1879.

Gomphos claricolor O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 853. 1891.

Phlegmacium claricolor RICKEN, Blätterp. 139. 1915.

子実体は群生或はやや叢生；傘は径 4—7 cm，初め半球形，のち饅頭形となり，更に広丸山形～扁平となり，縁は内屈す；表面は湿時粘性，乾時光沢あり，初め纖維状白色綿架を被むるも周辺以外は速に消失，平滑，無毛，成長後中央部亀裂し密着せる鱗被となる，暗黄褐色，中央栗褐色，線条なし，縁に白色蜘網膜片を存す；肉は緊緻，白色～淡白クリーム色，厚し，幼時微臭，味温和；褶はやや直生，ほぼ離生或は類彎生等種々変化し，初め汚白色，菫灰色，のち粘土色，密，初め狭く，のち多少広幅，6—8mm，稜はやや鋸歯状；茎は 6—9×1.5—2cm，ほぼ同幅，基部屢々球状球根或は棍棒状球根，径 2.5—3cm に及ぶ，上位の蜘網膜より上部は粉状，下部は纖維状にて幼時著しき階段状鱗被を有す，鱗被はのち消失す，白色，のち淡黄黄土色，緊緻，中実；胞子は扁桃形或は卵状紡錘形，黄黄土色，微細粗面，9—10×5—6μ；胞子紋は褐色；可食．

所在及産地

主に山地針葉樹林地上—夏秋　本州—欧．米

和名　ツガタケ（栂茸）〔川村〕

ホンツガタケ（方言）

Cortinarius venenosus KAWAM.

ハツゴロウタケ

KAWAMURA, Icon. Jap. Fungi, 5 : 526, f. 518. 1954.

子実体は叢生；傘は径 1—4 cm，扁平に開張し，表面波状をなす；表面は湿時やや粘性，やや肉桂色を帯び，乾時淡色となる，纎細なる絹糸様内生纎維を被むり，平滑；肉は淡褐色を帯び，極めて薄し；褶は直生にて小歯を有し，銹褐色，やや密，広幅；茎は短大，1—3×0. 2—0. 8 cm，ほぼ同幅，基端球状，往々圧辺され，又波曲し，強靱，傘面と同色，上部白色にて絹糸状，蜘網膜の白色綿毛菌糸を輪状に残存し，胞子によりて褐色を呈す，中空；胞子は楕円形にて両端尖り，1 油球を蔵し，10—11.5×6—7μ，銹褐色；猛毒あり．

所在及産地

鋸屑或は腐朽木上—春～秋　本州

和名　ハツゴロウタケ（初五郎茸）〔川村〕

Cortinarius saginus (FR.) FR.

オオカシワギタケ

FRIES, Epicr. Myc. 260. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 12. 1863 ; Hymen. Eur. 340. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 313. 1879—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 240. 1883; Illus. Brit. Fungi. 5 : pl. 703(no. 695). 1888—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 895. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 100. 1893 ; Brit. Fungi, 296. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 249. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 217. 1908—REA. Brit. Basid. 137. 1922—KAUFFMAN, N. Am. Fl. 10 : 311. 1932—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 200. 1948—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 257. 1953.

（川村，日．菌．図鑑，5 : 511，f. 506，1954）

Agaricus saginus FR. Syst. Myc. 1 : 226. 1821.

Cortinarius cliduchus var. *saginus* QUÉL. Enchir. Fung. 73. 1886.

Gomphos saginus O. KUNTZ, Rev. Gen. Pl. 2 : 854. 1891.

Phlegmacium saginum RICKEN, Blätterp. 140. 1915.

子実体は群生或は類叢生；傘は径 10—13 cm，初め半球形，のち広丸山形～扁平となり，中央僅か高まり或は僅か圧低さる；表面は湿時甚だ粘性，乾時往々落葉を附着す，無毛，平坦，黄色にて放射状に密着せる黄褐色の纎維を被むる，周縁は不規則の波状をなす；肉は傘及茎共に多肉，軟肉質，緻密，白色，皮下稍々淡黄色を帯ぶ，臭及味温和；褶は彎生の状をなす狭生又は稍々直生し，垂生の状を呈すること多し，初め汚白色，速に黄土色より遂に胞子により肉桂色となる，やや疎，厚く，広幅，広き部は 8—10mm なるも両端狭し，稜は不正；茎は 7—10×2.5—3 cm，初め球状球根形，のち伸長し頑丈，同幅或は上端少しく太く，基部球状にて径往々 4 cm 以上に至る，淡黄色，上部は裸出するも蜘網膜残片は纎維状をなして下部に密着し黄褐色を呈するも傘面より淡色なり，胞子は扁桃形，細疣あり，淡黄褐色，10—12×5. 5—6 μ.

所在及産地

山地針葉樹林内—秋　本州—欧．北米

和名　オオカシワギタケ（大柏木茸）〔川村〕

Cortinarius latus (PERS. ex FR.) FR.

チャオオフウセンタケ

FRIES, Epicr. Myc. 260. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 12. 1863; Hymen. Eur. 340. 1874—GILLET, Champ. Fr. 468. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 313. 1879—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 7 : 54. 1879; Enchir. Fung. 73. 1886—WINTER, Pilze, 1 : 617. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 895. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 588. 1916—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl-fam. 1, 1** : 249. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 508. 1912—REA, Brit. Basid. 137. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 13 : pl. 609. 1930—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 206. 1938.

Agaricus latus PERS. Syn. Meth. Fung. 276. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1 : 215. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 501. 1844.

Gomphos latus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 854. 1898.

Phlegmacium latum RICKEN, Blätterp. 141. 1915.

Cortinarius validus J. FAVRE—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 269. 1953.

子実体は群生；傘は径 6—10cm，丸山形，のち開張し鈍頭；表面は渋色，中央暗色，湿時僅か粘性，速に乾燥す，纎維を被むり，のち無毛となる；肉は白色或は帯黄色，味温和，臭良し；褶は凹入し，初め黄色，のち肉桂色或は銹色，密，幅約 6 mm，稜に粗歯あり；茎は 5—7×1—2 cm，同幅，基部卵状，白色，初め幾分鱗片を存し，のち纎維状となる，上部に蜘網膜の残糸を輪状に存す，白色にて早失性，中実；胞子は円壔状楕円形，有嘴，僅か粗面，10—



a b



c

第175図 チャオオフウセンタケ
Cortinarius latus
a. b. 子実体 ×1/2 c. 胞子 ×600 (大谷氏)

13×5—7μ；胞子紋は黄土色.

所在及産地

針葉樹林地上一秋 北海道，本州，九州一欧

和名 チャオオフウセンタケ(茶大風船茸)〔今井〕

Cortinarius largus Fr.

フジイロタケ

FRIES, Epicr Myc. 259. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 10. 1863 ; Hymen. Eur. 339. 1874—GILLET, Champ. Fr. 469, c. ic. 1874—QUÉLET, GREV, 6 : pl. 103, f. 1. 1878—KARSTEN, Hattsv. 1 : 312. 1879—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 239. 1883; Illus. Brit. Fungi, 5 : pl. 701 (no. 693). 1888—WINTER, Pilze, 1 : 618. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 · 893. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 586. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 602. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 99. 1893; Brit. Fnngi, 295, pl. 22, f. 3. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl-fam. 1, 1** : 249. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 162. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 216. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 509. 1912—REA, Brit. Basid. 136. 1922—KONRAD, Bull. Soc Myc. Fr. 43 : 167. 1927 ; & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 2 : pl. 130. 1928; Agaricales, 1: 199. 1948—KAUFFMAN, N. Am. Fl. 10 : 306. 1932—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1 : 106. 1934—HENRY, Bull. Soc. Myc. Fr. 51 : 223. 1935—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 151, pl. 57, f. 3. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 272. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 334, 1957.

(KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 19, f. 15—17, 1925; 日. 菌. 図鑑, 5 : 520, f. 514. 1954—白井, 日. 菌. 目. ed. 3. 104. 1927—原, 日. 菌. 目. 93. 1954)

Gomphos largus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 :854. 1891.

Phlegmacium largum RICKEN, Blätterp. 141, pl. 42, f. 2. 1915.

子実体は群生或は叢生；傘は径 7—12 cm，半球形，のち丸山形より開張扁平となり，広き鈍き中丘あり；表面は湿時粘性，乾時光沢あり，平滑，無毛，初めやや紫色にて漸次汚黄色より褐色となり，周辺に美しき藤色を残す，老時往々縁に渓流状の皺を生ず；肉はむしろ緊緻，中盤厚く，帯白色にて皮下紫色を帯ぶ，臭及味微なり；褶は直生，のち凹入或は彎状狭生，初め淡青紫色，のち肉桂色，密，広幅，稜は多少有歯；茎は 10—15×1. 5—2 cm，幼時太く短く類球形，のち伸長，同幅或は上方やや狭細，基部棍棒形或は卵形，径 3 cm に及ぶ，繊維質，初め鮮藤紫色，のち褪色して白色，下部茶褐色の繊維に包まる，上部は永く淡紫色を保つ，上部に蜘網膜菌糸輪状に残存し，胞子によりて赤褐色となる，中実；蜘網膜は初め絹状にて厚く，白色，のち破れて傘縁及茎上に残る，早失性；胞子は楕円～扁桃形，粗面，9—12×3—7μ：可食。

所在及産地

林地一夏秋 本州一欧. 北米

和名 フジイロタケ (藤色茸)〔川村〕

Cortinarius riederi (WEINM.) Fr.

アシナガカシワギタケ

FRIES, Epicr. Myc. 259. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 339. 1863 ; Hymen. Eur. 339. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 337. 1879—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 239. 1883; Illus. Brit. Fungi, 5 : pl. 702 (no. 694). 1888—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 894. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 99. 1893; Brit. Fungi, 295. 1911—W.G.SMITH, Brit. Basid. 217. 1908—REA, Brit. Basid. 136. 1922—KÜHNER & ROMAGNESI Fl. Analyt. Champ. Super. 270. 1953.

(川村, 日. 菌. 図鑑, 5 : 512, f. 507. 1954)

Agaricus Riederi WEINM. Fl. Ross. 161. 1836.

Gomphos Riederi O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 854. 1891.

Phlegmacium Riederi RICKEN, Blätterp. 143. 1915.

傘は径 5—7 cm，初め鐘形，のち開張して饅頭形となり，更に稍々扁平となり，広き低き中丘を有す；表面は湿時粘性，乾時光沢あり，黄土色，無毛，平滑；肉は水潤状肉質，帯白色，表皮下淡褐色を帯ぶ，中盤厚く，周辺に於て甚だ薄し；褶は直生，初めライラック色，のち胞子によりて肉桂色となる，密，やや広幅；茎は 6—12×0.7—1.3 cm，同幅，通常稍々屈曲，基部棍棒状に膨大す，淡汚褐色の繊維を薄く被むる，初め上部淡紫色にて褪色して汚白色となり，頂部繊維なき処は平滑にて白色，やや粉状，蜘網膜の残片は傘縁及茎の上部に僅かに附着し，茎周のものは胞子により赤褐色綿毛輪として認める，茎肉は初め稍々淡紫色，速に帯白色となり，皮下淡黄色を呈す，繊維質，やや強靱，充塞；胞子は扁桃形，有疣，15—17×8—10μ；胞子紋は銹褐色。

所在及産地

針葉樹林或は雑木林内—秋　　本州—欧

和名　アシナガカシワギタケ（足長柏木茸）〔川村〕

Cortinarius infractus (PERS. ex FR.) FR.

ヤブレオオフウセンタケ

FRIES, Epicr. Myc. 261. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 14. 1863; Hymen. Eur. 341. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 2 : 350. 1873; Enchir. Fung. 74. 1886—GILLET, Champ. Fr. 467. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 314. 1879—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2, 240. 1883; Illus. Brit. Fungi, 5 : pl. 704(no. 697). 1888—WINTER, Pilze, 1 : 616. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 896. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 587. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 601. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 101. 1893; Brit. Fungi, 297. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl-fam. 1, 1** : 249. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 217. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 62, pl. 63, f. 139. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 507. 1912—KAUFFMAN, Agar. Mich. 365, pl. 73. 1918; N. Am. Fl. 10 : 308. 1932—REA, Brit. Basid. 138. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 2 : pl. 133. 1927; Agaricales, 1 : 201. 1948—BRESADOLA, Icon. Myc. 13: pl. 610. 1930—HENRY, Bull. Soc. Myc. Fr. 51 : 237. 1935—LANGE, Agar. Denm. 10 : 21. 1935; Fl. Agar. Dan. 3 : 22, pl. 87, f. c. 1938—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 207. 1938—SINGER, Agaricales, 551. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 257. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 332. 1957.（原．日．菌．目．92．1954）

Agaricus infractus PERS. Obs. Myc. 2 : 42. 1799; Syn. Meth. Fung. 283. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1 : 223. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 501. 1844.

Cortinarius anfractus FR. Epicr. Myc. 262. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2: 14. 1863; Hymen. Eur. 341. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 173. 1871; Illus. Brit. Fungi, 5 : pl. 705 (no. 698). 1888—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 2 : 350. 1873—GILLET, Champ. Fr. 468. 1874—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 101. 1893; Brit. Fungi, 297. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 219. 1908.

Agaricus infractus var. *anfractus* RABENH. Deut. Krypt. Fl. 1 : 501. 1844.

Phlegmacium infractum RICKEN, Blätterp. 143, pl. 43, f. 2. 1915.

子実体は群生；傘は径 5—10cm，丸山形，のち開張扁平となり，広き鈍中丘あり；表面は粘性，無毛，平坦，暗オリーブ色或は煤オリーブ色，のち黄褐色を帯ぶ，色は変化性に富む，屢々最後に内生繊維線を生ず，又屢々縁に近く暗褐色の帯を有す，縁は広く内屈す，開張し，波状をなし，裂開し，遂に反転す；肉は帯白色，茎の上部幾分青色を帯ぶ，縁以外は厚く，緊緻，のち柔軟，臭幾分悪く，味苦し；褶は彎状狭生，時に凹入し，傘面と殆ど同色，遂に焦茶色となる，密或はやや疎，むしろ狭幅或は広幅，稜は波状に縮む；茎は 4—8×0.8—1.5 cm，卵状棍棒形或は伸長，基部やや球根状，傘面とほぼ同色，屢々上方菫色を帯ぶ，圧着せる繊維を被むる，中実；蜘網膜はややオリーブ色を帯び，早失性；胞子は類球形～卵形，有疣，7—9(—10)×6—7.5μ；胞子紋は銹色。

所在及産地

混淆林地上—秋　　北海道—欧．北米

和名　ヤブレオオフウセンタケ（破大風船茸）〔今井〕

Cortinarius decoloratus (FR.) FR.

チャフウセンタケ

FRIES, Epicr. Myc. 270. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 30. 1863; Hymen. Eur. 351. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 166. 1872; Enchir. Fung. 76. 1886—GILLET, Champ. Fr. 475, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 167. 1876; Hattsv. 1 : 327. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 187. 1889—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2, 247. 1883; Illus. Brit. Fungi, 5 : pl. 729(no. 726). 1888—WINTER, Pilze, 1 : 609. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 911. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 602.

1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 598. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 113. 1893; Brit. Fungi, 293. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat Pfl-fam. 1, 1** : 249. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 221. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 499, pl. 101 F, f. 3—4. 1912—KAUFFMAN, Agar. Mich, 365. 1918; N. Am. Fl. 10 : 308. 1932—REA. Brit. Basid. 146. 1922—LANGE, Agar. Denm. 10 : 31. 1935; Fl. Agar. Dan. 3 : 31, pl. 86, f. D. 1938—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 211. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 203. 1948—SINGER, Agaricales, 552. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 283. 1953.

Agaricus decoloratus FR. Syst. Myc. 1 : 224. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 499. 1844.

Gomphos decoloratus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 853. 1891.

Phlegmacium decoloratum RICKEN, Blätterp. 145. 1915.

子実体は群生或は孤生；傘は径 4—6cm, 丸山形, のち開張し扁平となり或は低き広き中丘あり；表面は僅か粘性にて速に乾燥, 粘土色, 中央汚黄褐色, 周縁淡色, 無毛, 平滑, 乾時僅か凹凸を有す. 縁に幼時蜘網を有す；肉は帯白色, 薄く, 柔軟, 水潤状, 臭弱く, 味温和；褶は直生, 彎生, 類垂生等, 初め帯青灰色或は淡赭色, のち肉桂色, やや密, 中位に広幅, 稜は崩る；茎は 5—7×0.4—0.8cm, 同幅或は上方狭細, 白色にて淡菫色を帯び, 帯褐色の繊維あり, 上位に蜘網膜の白色繊維輪状をなし, 早失性, 充塞, のち中空；胞子は類球形～卵形, 微細点を有し, 7—8×5—6μ；胞子紋は肉桂色.

所 在 及 産 地

林地上—秋　北海道, 本州, 九州—欧. 北米

和 名　チャフウセンタケ (茶風船茸)〔今井〕

Cortinarius turmalis FR.

オオツガタケ

FRIES, Epicr. Myc. 257. 1836; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 5. 1863; Hymen. Eur. 336. 1874—GILLET, Champ. Fr. 471, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 161. 1876; Hattsv. 1 : 308. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 183. 1889—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 237. 1883; Illus. Brit. Fungi, 5 : pl. 694(no. 684). 1888—WINTER, Pilze, 1 : 620. 1884—QUÉLET, Enchir. Fung. 72. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 890. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 583. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 95. 1893; Brit. Fungi, 292. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 250. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 215. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 506. 1912—REA, Brit. Basid. 133. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 2 : pl. 136. 1927; Agaricales, 1 : 202. 1948—BRESADOLA, Icon. Myc. 13 : pl. 602. 1930—HONGO, Bull. Facul. Liber. Arts Educ. 2 : 50, f. 6. 1953—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 270. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 331, f. 232. 1957.

(川村, 日. 菌. 図鑑, 5 : 516, f. 511. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 72, f. 178, pl. 31, f. 178. 1957)

Corticium claricolor var. *turmalis* QUÉL. Enchir. Fnug. 72. 1886.

Gomphos turmalis O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 854. 1891.

Phlegmacium turmale RICKEN, Blätterp. 148, pl. 43, f. 6. 1915.

子実体は群生；傘は径 4—8cm, 或はそれ以上に及び, 丸山形, のち殆ど扁平となり, 時に中部鈍頭；表面は湿時粘性, 乾時光沢あり, 縁に沿うて白色繊維の破片を存する以外は平滑無毛, 黄黄土色, 中央僅か褐色, 縁は初め内屈す；肉は白色, 緊緻, 中盤厚くして縁の方薄く, 味及臭なし；褶は直生～狭生, 屢々垂下歯あり, 初め白色, のち粘土色, 密, 幅 3—5mm, 稜は幾分鋸歯状；茎は 6—10×0.7—1.1cm, やや同幅或は下方に狭細, 初め類白色, のち多少黄土色, 著しき白色の蜘網膜の菌糸を密に被むる, 鍔状となれる残片菌糸は胞子によりて黄褐色を呈す, 中実, のち中空となる；胞子は橢円形, 平滑或はやや粗面, 7—9.5×4—5μ；胞子紋は黄褐色；可食。

所 在 及 産 地

主に針葉樹林地落葉間—夏秋

本州—欧. 北米

和 名　オオツガタケ (大栂茸)〔川村〕

(3) Inoloma (FR.), FR. (1838)

ムラサキフウセンタケ亜属

Cortinarius violaceus (L. ex FR.) FR.

ムラサキフウセンタケ

FRIES, Epicr. Myc. 279. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 46. 1863; Hymen. Eur. 360. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 187. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 191. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 179. 1871; Illus. Brit. Fungi, 5 : pl. 770 (no. 747). 1888—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 168. 1872; Enchir. Fung. 79. 1886—GILLET, Champ. Fr. 477, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 171. 1876; Hattsv. 1 : 342. 1879; Krit.

Oefv. Finl. Basidsv. 190. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 602. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 924. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 619. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 596. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 75. 1893; Brit. Fungi, 299, pl. 23, f. 4. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 162. 1900—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 248. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 161. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 226. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2 (2) : 494. 1912—KAUFFMAN, Agar. Mich. 380. 1918; N. Am. Fl. 10 : 312. 1932—REA, Brit. Basid. 155. 1922—GÜSSOW, & ODELL, Mushr. Toadst. 148. 1927—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 2 : pl. 141. 1929; Agaricales, 1 : 205. 1948—BRESADOLA, Icon. Myc. 13 : pl. 635. 1930—LANGE, Fl. Agar. Dan. 3 : 27. 1935—HENRY, Bull. Soc. Myc. Fr. 51 : 317. 1935—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 212. 1938—SINGER, Agaricales, 552. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 155, pl. 58, f. 1. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 279. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 65. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2 : 345, pl. 39, f. 1. 1957.

（今関，原色きのこ，pl. 16（左）1942—川村，日．菌．図鑑，5 : 521, f. 515. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，72, pl. 31, f. 179. 1957）

Agaricus violaceus L. Sp. Plant. 2: 1173. 1753—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 277. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1 : 217. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 497. 1844.

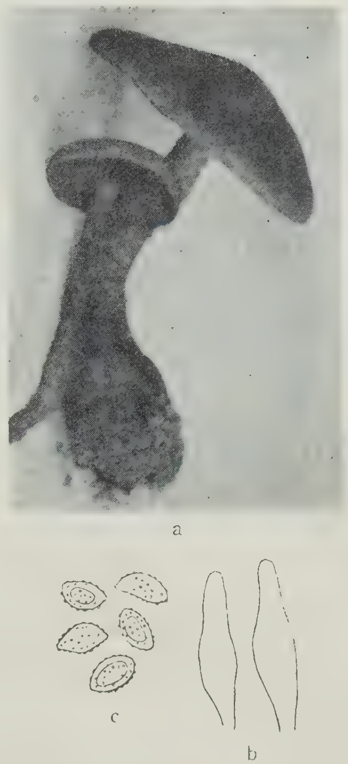
Agaricus hercynicus PERS. Syn. Meth. Fung. 278. 1801.

Cortinaria violacea S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. pl. 1 : 628. 1821.

Gomphos violaceus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 854. 1891; 3(2) : 478. 1898.

Inoloma violaceum RICKEN, Blätterp. 149, pl. 44, f. 4. 1915.

子実体は孤生或は群生；傘は径5—12cm，半球状～丸山形，鈍頭，のちやや開張し正形；表面は乾燥，暗菫色，殆ど黒色に見ゆ，小なる絨毛叢或は鱗片を被むり，遂に金属様光沢を生ず，縁は長時内屈す；肉は寧ろ厚く，灰色～暗菫色，味及臭温和；褶は直生，のち彎生或は凹入，濃暗菫色のち胞子により銹色となる，やや疎，広幅，横脈にて連結さる，稜は異質；茎は 6—10×1—2cm，強固，基部棍棒形或は棍棒状球根形，乾燥，初め細密軟毛あり，のち繊維状，暗菫色，中実；蜘網膜は羊毛状，青菫色，早失性；胞子は広楕円形，有疣，黄褐色，12—15×8—10μ；胞子紋は銹褐色；稜嚢体は紡錘形～壜形，菫色，50—75×13—18μ；可食。



第176図　ムラサキフウセンタケ
Cortinarius violaceus
a. 子実体 1/3　b. 嚢状体　c. 胞子 ×500
（大谷氏）

所在及産地

主に針葉樹林内，蘚，落葉枯木間—秋
北海道—欧．北米

和名　ムラサキフウセンタケ（紫風船茸）〔今井〕
ムラサキカシワギタケ（紫柏木茸）〔川村〕

Cortinarius cyanites FR.

アイカシワギタケ

FRIES, Epicr. Myc. 279. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 47. 1863; Hymen. Eur. 360. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 342. 1879—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 252. 1883—WINTER, Pilze, 1: 602. 1884—QUÉLET, Enchir. Fung. 80. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 925. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 617. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 76. 1893; Brit. Fungi, 299. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl-fam. 1, 1**: 248. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 226. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 493. 1912—REA, Brit. Basid. 155. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 13 : pl. 636. 1930—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 205. 1948—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 272. 1953.

(川村, 日. 菌. 図鑑, 5 : 513, f. 508. 1954)

Agaricus cyaneus SECR. Mycogr. Suisse, n. 147. 1833—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 276. 1801.

Gomphos cyanites O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 853. 1891.

Inoloma cyanites RICKEN, Blätterp. 150, pl. 44, f. 2, 1915.

子実体は群生或は孤生; 傘は径 6—9 cm, 初め球状, のち丸山形となり, 更に開張しほぼ扁平となり, 往々鈍中丘を有す; 表面は乾燥, 地色は淡碧青色にて銹褐色の絹糸様繊維に密に被われて褐色を呈す; 肉は濃碧藍色, 老時やや褪色, 茎の基部淡色, 空気に触れて赤褐斑を生じ, 著しく赤褐色となれる肉を搾れば暗赤色の汁を出す, 味温和, 臭なし; 褶はほぼ直生〜凹入, 暗碧青色, 胞子によりて褐色とならず, やや密, 幅約 6mm, 薄し; 茎は 7—11×1—1.5 cm, 基部棍棒状に膨大し径 2cm 或はそれ以上に及ぶ. 地色は淡碧色にて表面に濃色綿毛状被覆を密着し, やや上方にあるものは落下し胞子により赤褐色を呈す, 充塞; 蜘網膜は碧青色, 繊維状; 胞子は扁桃形, 小疣を存し, 鮮黄色, 10—12×6—7μ ; 胞子紋は銹褐色; 嚢状体なし。

所 在 及 産 地

林地—夏秋 本州—欧

和 名 アイカシワギタケ (藍柏木茸) 〔川村〕

Cortinarius pholideus (FR.) FR.

ササクレフウセンタケ

FRIES, Epicr. Myc. 282. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 55. 1863; Hymen. Eur. 364. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 188. 1860—COOKE. Handb. Brit. Fungi, 1 : 180. 1871; Illus. Brit. Fungi, 5 : pl. 761 (no. 760). 1888—GILLET, Champ. Fr. 480. c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 174. 1876; Hattsv. 1 : 349, 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 192. 1889—QUÉLET, Champ. Jura. Vosg. Suppl. 7 : 53. 1879; Enchir. Fung. 81. 1886—WINTER, Pilze, 1 : 509. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 933. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 83. 1893; Brit. Fungi, 302. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat Pfl.-fam. 1, 1**: 248. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 228. 1908—KAUFFMAN, Agar. Mich. 372, pl. 76. 1918—REA, Brit. Basid. 159. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 2 : pl. 139. 1928; Agaricales, 1 : 207. 1948—LANGE, Agar. Denm. 10 : 28. 1935; Fl. Agar. Dan. 3 : 29, pl. 93, f. F. 1938—HENRY, Bull. Soc. Myc. Fr. 53 : 52. 1937—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 157, pl. 64, f. 4. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 287, f. 307, 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 67. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2 : 347, f. 238, B. 1957.

(今関及土岐, 林. 試. 研. 報. 79 : 6, f. 7. 1955)

Agaricus psammocephalus BULL. Herb. Fr. pl. 586, f. 1. 1793.

Agaricus arenatus PERS. Syn. Meth. Fung. 293. 1801.

Agaricus lepidomyces ALB. et SCHW. Consp. Fung. 155, pl. 12, f. 1. 1805.

Agaricus pholideus FR. Obs. Myc. 2 : 21. 1818; Syst. Myc. 1 : 219. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 496. 1844.

Cortinarius arenatis FR. Epicr. Myc. 283. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 308. 1863; Hymen. Eur. 365. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 188. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 181. 1871; Illus. Brit. Fungi, 5 : pl. 763 (no. 762). 1888—GILLET, Champ. Fr. 481, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 350. 1879—WINTER, Pilze, 1 : 598. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 934. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 613. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 85. 1893; Brit. Fungi, 303. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 247. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 229. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 491. 1912—REA, Brit. Basid. 160. 1922.

Cortinarius lepidomyces SCHROET. Pilze Schles. 1 : 594. 1889—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2 (2) : 492. 1912—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 617. 1916.

Gomphos pholideus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 854. 1891.

Inoloma pholideus RICK. Blätterp. 155, pl. 46, f. 1. 1915.

Inoloma arenatum RICK. Blätterp. 155. 1915.

子実体は群生或は叢生; 傘は径 2—5 cm, 或はそれ以上に及び, 肉質, 円錐状鐘形, のち丸山形〜扁平となり, 鈍き中丘を存す; 表面は濃肉桂褐色, 中丘暗色, 小形の密なる内生直立或は粗雑の暗褐色尖頭の鱗片に被われ, 非吸水性; 肉は中盤以外は薄く, 初め僅か菫色, のち速に帯白或は汚褐色, 緊緻, 味及臭なし; 褶は直生〜凹入〜狭生, 初め菫色, のち速に粘土色〜褐色となる, 密, 広幅 ; 茎は 3—8×0.3—1.2cm, 下方に漸次太く基部肥大す, 蜘網膜以上は淡菫色, 以下は反転する暗褐色のむしろ羊毛状の同心円的鱗片に被われ, 傘面とほぼ同色, 肉は硬く, 灰褐色にて上部菫色を呈す, 中実; 蜘網膜は稀少, 繊維状; 胞子は広楕円形, 有疣, 黄色, 6—9×4—6μ; 胞子紋は銹褐色。

所 在 及 産 地

広葉樹林地上—夏秋 本州—欧. 北米

和 名 ササクレフウセンタケ (逆皮風船茸) 〔今関〕

Cortinarius humicola (QUÉL.) R. MAIRE
アサクラフウセンタケ

R. MAIRE, Bull. Soc. Myc. Fr. 27 : 436, pl. 15, f. 4—5. 1911—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 2 : pl. 138. 1927; Agaricales, 1 : 208. 1948—LANGE, Agar. Denm. 10 : 30. 1935; Fl. Agar. Dan. 3 : 30, pl. 90, f. B. 1938—HONGO, Jour. Jap. Bot. 26 : 144, f. 3. 1951—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 286. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 346, f. 238, A. 1957.

Dryophila humicola QUÉL. Champ. Jura Vosg. Suppl. 18 : 466, pl. 2, f. 10. 1891.

Pholiota humicola LUCAND, Fig. Peintes. Champ. pl. 360. 1894.

Inoloma humicola RICKEN, Blätterp. 458. 1915.



第177図 アサクラフウセンタケ Cortinarius humicola a. 子実体表面. b. 同裏面×1/2 c. 胞子×400（大谷氏）

子実体は群生或は孤生，傘は径 4—5 cm，鐘状円錐形，のち扁平となり，中丘あり；表面は地色黄色にて黄褐銹色の圧着或は反転する鱗片を密布す，この鱗片は内生繊維状にて永存す，縁は初め内屈す，薄し；肉は緻密，殆ど類白色，茎の基部黄土色，味温和，臭弱し；褶は直生～僅か凹入，帯白色～黄土色，のち胞子により銹褐色となる，やや密，かなり広幅；茎は約 7×1 cm，下方に漸細或は時に基部肥大，乾燥，傘面と同色，蜘網膜より下方には暗色の反転鱗片を存し，傘茎鱗片の状及色等によりて一見スギタケ（*Pholiota squarrosa*）の如し，上方は淡色，基部は繊維状，中実；蜘網膜は帯白色，のち鱗片と同色，繊維状；胞子は楕円形，甚だ微細なる疣あり，水中にては殆ど平滑に見ゆ，黄色，8—10×4.5—5.5 μ；胞子紋は黄土色，嚢状体なし。

所在及産地

混淆林地上—秋　　本州—欧

和名 アサクラフウセンタケ〔本郷〕

(4) Dermocybe (FR. 1821) FR. (1838)
ササタケ亜属

Cortinarius subtabularis KAUFFM.
ムラサキタケ

KAUFFMAN, Agar. Mich. 392. 1918; N. Am. Fl. 10 : 325. 1932.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 55 : 515. 1941)

子実体は孤生或は群生；傘は径 2—6 cm，初め鐘状丸山形，のち扁平或は不明瞭なる中丘あり；表面は乾燥，青灰色或は菫灰色，絹糸状繊維ありて光沢を有す，平坦，老時屢々僅か暗色或は汚斑を生ず；肉は薄くして速に淡色となる，味温和，無臭或は微臭；褶は直生，のち彎生，初め淡色にて暗菫色の色彩あり，のち肉桂色となり，菫色或は紫色ならず，密，むしろ広幅，便腹状，稜は全縁；茎は3—5×0.4—0.6 cm，同幅，基部急に小球根状となる，淡菫灰色，先端粉状，絹糸状繊維ありて光沢を有す，初め真直，のち屈曲す，充塞，往々基部に白色蜘網膜を存す；胞子は楕円形，僅か粗面，9—10×5 μ.

所在及産地

濶葉樹林地—秋　　本州—北米

和名 ムラサキタケ（紫茸）〔今井〕

Cortinarius croceoconus FR
コキンタケ

FRIES, Monogr. Hymen. Suec. 2 : 67. 1863; Hymen. Eur. 371. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 352. 1873—GILLET, Champ. Fr. 487, c. ic. 1874—WINTER, Pilze, 1 : 594. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 942. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 628. 1916—COOKE, Illus. Brit. Fungi, 6 : pl. 780, f. b(no. 780). 1888—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 68. 1893; Brit. Fungi, 305. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 247. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 232. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 488, pl. 100 B, f. 3-5. 1912—KAUFFMAN, Agar. Mich. 397. 1918—REA, Brit. Basid. 165. 1922—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 215. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 211. 1948.

(原，日．菌．目．92. 1954)

Cortinarius cinnamomeus var. *croceoconus* QUÉL. Enchir. Fung. 83. 1886.

Gomphos croceoconus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 853. 1891.

子実体は群生；傘は径 1—3 cm，或はそれ以上，円錐形，のち鐘形となり，鋭頭の中丘を永存す；表面

は乾燥，帯赤黄褐色～黄褐肉桂色，絹糸状，平坦，やや光沢あり，縁は内屈す；肉は帯白色，中盤赤色を帯び，茎の方黄色，中盤以外は薄し；褶は直生，初め帯黄色，のち肉桂色，密，むしろ狭幅，稜は微細の不斉牙歯あり；茎は細長，5–12×0.2—0.4 cm，同幅，帯黄色，赤黄褐色の繊維あり，撓曲，充塞，のち中空；蜘網膜は淡赤黄褐色，のち淡色，繊維状；胞子は楕円形，小疣を有し，殆ど平滑，8—9.5×4—5μ；胞子紋は銹色.



第178図 コキンタケ Cortinarius croceoconus ×2/3（大谷氏）

所在及産地

林地—秋　　北海道—欧

和名 コキンタケ（小金茸）〔今井〕

Cortinarius cinnamomeus (L. ex FR.) FR.

ササタケ

FRIES, Epicr. Myc. 288. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 65. 1863; Hymen. Eur. 370. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 190. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 184. 1871; Illus. Brit. Fungi, 6 : pl. 777—778 (no. 777—778). 1888—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 171. 1872; Enchir. Fung. 83. 1886—GILLET, Champ. Fr. 467, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 177. 1876; Hattsv. 1 : 357. 1879 ; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 194. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 594. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 941. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 630. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 593. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 67. 1893; Brit. Fungi, 305, pl. 23, f. 5. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl-fam. 1, 1** : 247. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 162. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2, 162, f. 155. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 232. 1908—ROLLAND. Atl. Champ. 63, pl. 64, f. 142. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2 (2) : 489, pl. 100B, f. 6-7. 1912—KAUFFMAN, Agar. Mich. 396. 1918; N. Am. Fl. 10 : 322. 1932—REA, Brit. Basid. 165. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 146, pl. 73, f. 1. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 13: 647. 1930—LANGE, Agar. Denm. 10 : 35. 1935; Fl. Agar. Dan. 3 : 35, pl. 95, f. F. 1938—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 213. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 210. 1948—SINGER, Agaricales, 552. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi. 159, pl. 61, f. 2. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 288. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 343. 1957.

(P. HENNINGS, Hedwigia, 39, Beibl. 156. 1900—松村，植．名鑑，1 : 137. 1904—川井，日．菌．日．25. 1905 ; ed. 2. 175. 1917; ed. 3. 103. 1927—原，日．菌．目．92. 1954—松田及本郷，植，研．雑．30 : 261. 1955—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，72, f. 180, pl. 31, f. 180. 1957)

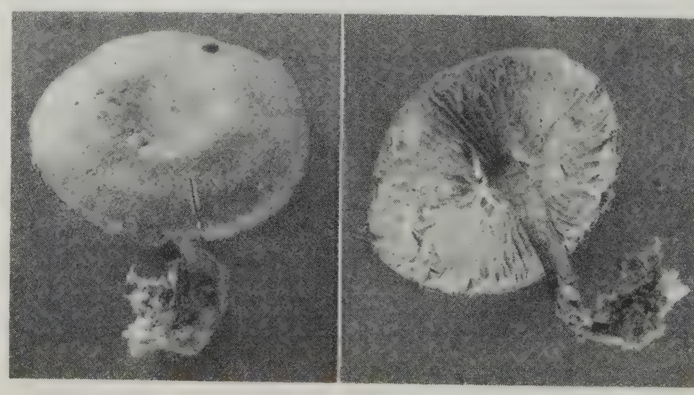
Agaricus cinnamomeus L. Sp. Plant. 2 : 1173. 1753—FRIES, Syst. Myc. 1 : 229. 1821.

Cortinaria cinnamomea S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 630. 1801.

Gomphos cinnamomeus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 853. 1891; 3(2) : 478. 1898.

Dermocybe cinnamomea RICKEN, Blätterp. 160, pl. 47, f. 6. 1915.

子実体は群生或はやや叢生；傘は径 2—5 cm,（多くは 2—3 cm）鐘状丸山形，のち開張し鈍頭中丘あり；表面は乾燥，黄褐色よりオリーブ褐色の間に変化す，放射状繊維ありて光沢を有す，のち平滑となる；肉は黄色，薄く，容易に割れる，味及臭温和；褶は直生にて狭生凹入，或はやや垂生等に変化す，黄色或は橙色，のち肉桂色或は銹褐色，密，むしろ広幅，薄く，光沢あり；茎は細長，3—8×0.3—0.8 cm，同幅，時に屈曲，黄色にて帯褐色の繊維あり，擦傷によりて暗色となる，充塞，のち中空；基部黄色菌糸に連る；蜘網膜は黄色，繊維状；胞子は広楕円形，平滑，6—8×4—5μ；胞子紋は暗黄色～銹色；



第179図 ササタケ Cortinarius cinnamomeus ×2/3（大谷氏）

可食。

所在及産地

針葉樹林内地上，甚しき腐朽材上，蘚間—秋

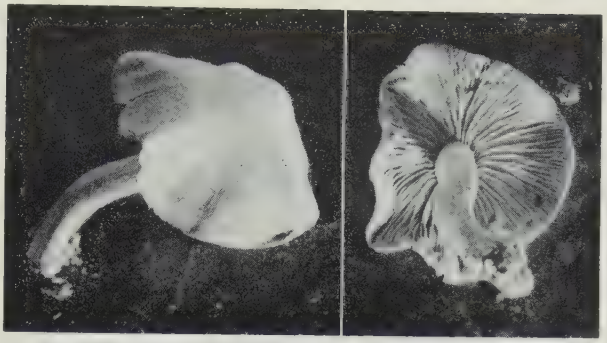
北海道，本州—

欧．北米．阿．亜(小亜)

和名 ササタケ（笹茸）〔白井〕

Cortinarius sanguineus
(WULF. ex FR.) FR.

アカタケ



第180図 アカタケ cortinarius sanguineus 1/2（大谷氏）

FRIES Epicr. Myc. 288. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2: 65. 1863; Hymen. Eur. 370. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 190. 1860—COOKE, Handb. Brit Fungi, 1:183. 1871; Illus. Brit. Fungi, 6: pl. 786(no. 775). 1888—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1: 171. 1872; Enchir. Fung. 82. 1886—GILLET, Champ. Fr. 485, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3: 177. 1876; Hattsv. 1: 356. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 193. 1889—WINTER, Pilze, 1: 505. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 940. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 627. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1: 593. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2: 66. 1893; Brit. Fungi, 304, pl. 23, f. 2. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 247. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 232. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 487. 1912—KAUFFMAN, Agar. Mich. 402. 1918; N. Am. Fl. 10: 321. 1932—REA, Brit. Basid. 164. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 2: pl. 146, f. 2. 1927; Agaricales, 1: 213. 1948—BRESADOLA, Icon. Myc. 13: pl. 645, f. 2. 1930—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1: 113. 1934—LANGE, Agar. Denm. 10: 33. 1935; Fl. Agar. Dan. 3: 33, pl. 94, f. F, F′, 1938—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 214. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 158, pl. 62, f. 3. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 289. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2: 341. 1957.

(P. HENNINGS, Hedwigia, 31, Beibl. 156. 1900—松村，植．名鑑，1: 137. 1904—白井，日．菌．目．25. 1905; ed. 2. 175. 1917; ed. 3. 104. 1927—今関，原色きのこ，pl. 16.（右）. 1942; 及土岐，林．試．研．報．67: 37. 1954—原，日．菌．目．93. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，73, pl. 32, f. 181. 1957)

Agaricus santalinus SCOP. Fl. Carn. ed. 2, 2: 444. 1772.

Agaricus sanguineus WULF. in JACU. Coll. 2: 107, pl. 15, f. 3. 1788—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi. 1: pl. 43. 1797—FRIES, Syst. Myc. 1: 229. 1821.

Cortincria sanguinea S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1: 629. 1821.

Gomphos sanguineus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2: 854. 1891.

Dermocybe sanguinea RICKEN, Blätterp. 159. 1915.

子実体は群生或は散生；傘は径 2—5cm，丸山形，のち開張扁平となり，鈍頭或は僅か中丘を存す，遂に圧低さる；表面は乾燥，暗血赤色～褐紫色，乾時淡色となる，光沢なく，微細綿絮状鱗被あり；肉は血赤色，圧搾すれば血赤汁を滲出す，薄く，臭温和，味僅か大根の如し；褶は直生或は彎生，暗血赤色，のち銹色，密，むしろ広幅；茎は比較的細長，5—10×0.3—0.7cm，同幅或は下方にやや狭細，撓曲，傘面と同色，同色の纖維あり，時に基部僅か淡色，中空；蜘網膜は血赤色，纖維状，早失性；胞子は長楕円形，粗面，7—9×4—6μ；胞子紋は淡銹色。

所在及産地

針葉樹林蘚間生—秋

北海道，本州—欧．北米．亜(土)

和名 アカタケ（赤茸）〔白井〕

Telamonia (Fr) Fr. (1838)

ツバフウセンタケ亜属

Cortinarius armillatus (FR.) FR.

ツバフウセンタケ

FRIES, Epicr. Myc. 295. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2: 78. 1863; Hymen. Eur. 378. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 192. 1860—COOKE, Handb, Brit. Fungi, 1: 186. 1871; Illus. Brit. Fungi, 6: pl. 802(no. 800). 1888—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1: 173. 1872—GILLET, Champ. Fr. 493, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3: 182. 1876; Hattsv. I: 368. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 197. 1889—WINTER, Pilze, 1: 589. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 952. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2: 44. 1893; Brit. Fungi, 308, pl. 23, f. 1. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER &

PRANTL, Nat. Pfl-fam. 1, 1**: 247. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 484, pl. 96, f. 1-3. 1912—KAUFFMAN, Agar. Mich. 413, pl. 85-86. 1918; N. Am. Fl. 10 : 330. 1932—REA, Brit. Basid, 172. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 146, pl. 73, f. 2. 1927—LANGE, Agar. Denm. 10 : 36. 1935; Fl. Agar. Dan. 3 : 36, pl. 97, f. E. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 219. 1948—SINGER, Agaricales, 552. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 160, pl, 62, f. 1. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 295, 1953.

（松浦，茸類辞典，109, f. 126. 1933—JMAI, Bot. Mag. Tokyo, 55 : 514. 1941—原，日．菌．目．92. 1954）

Agaricus armillatus FR. Syst. Myc. 1 : 214. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 492. 1844.

Cortinarius haematochelis var. *armillatus* KARST. Hattsv. 1 : 368. 1879.

Cortinarius haematochelis QUÉL. Enchir. Fung. 85. 1886—HEIM, Champ. Eur. 2 : 347, f. 239. 1957.

Gomphos armillatus O. KUNTZE, Ren. Gen. Pl. 2 : 853. 1891.

Telamonia armillata RICKEN, Blätterp. 164, pl. 48, f. 5. 1915.

子実体は孤生或は群生；傘は径 5—12cm，鐘形にて内屈する縁を有し，のち開張し扁平となり，遂に反転圧低さる；表面は湿潤，赤煉瓦色～渋色，中央暗色，平滑或は内生繊維又は微細の鱗片あり，縁に屢々帯赤色のベールの残片を附す；肉は淡渋色，薄し，味温和，臭は多少大根様；褶は直生，往々彎生，初め淡肉桂色，のち暗銹褐色，疎，甚だ広幅，便腹状；茎は長く，7—14cm，上方円筒形にて幅 1—2cm，下方棍棒形或は長球根状となり径 3.5cm に至る，帯褐或は赤渋色にて傘面より淡色，繊維に被わる，1或は数個の朱色のベール帯を存す，基部に屢々帯赤色繊維あり，緊緻，中実；蜘網膜は初め帯白色，胞子により汚染さる；胞子は楕円或は扁桃形，微細疣あり，9—12×5—6μ；胞子紋は銹褐色。

所在及産地

林地—秋　　本州—欧，北米

和名　ツバフウセンタケ（鍔風船茸）〔今井〕
アシブトツバタケ（足太鍔茸）〔松浦〕

Cortinarius torvus (FR. ex FR.) FR.

ツバムラサキフウセンタケ

FRIES, Epicr. Myc. 293. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 74. 1863; Hymen. Eur. 376. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 185. 1871; Illus. Brit. Fungi, 6 : pl. 801(no. 794). 1888—GILLET, Champ. Fr. 492, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 365. 1879—WINTER, Pilze, 1 : 590. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 950. 1884—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 39. 1893; Brit. Fungi, 307. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl-fam. 1, 1** : 247. 1900 PATOUILLARD, Ess. Tax. 162. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 236. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 64, pl. 65, f. 144. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 485. 1912—KAUFFMAN, Agar. Mich. 404, pl. 83. 1918; N. Am. Fl. 10 : 327. 1932—REA, Brit. Basid. 170. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 2 : pl. 153. 1932; Agaricales, 1 : 217. 1948—LANGE, Agar. Denm. 10 : 36. 1935; Fl. Agar. Dan. 3 : 36, pl. 96, f. c. 1938—SINER, Agaricales, 552. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 159, pl. 63, f. 1. 1950—HONGO, Acta Phytotax. Geobot. 14 : 74, f. 1. (12). 1951—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 303. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 68. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2 : 348, f. 340, A. 1957.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，73, f. 182, pl. 32, f. 182. 1957）

Agaricus torvus FR. Obs. Myc. 2 : 80. 1818; Syst. Myc. 1 : 211. 1821.

Cortinarius impennis QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1 : 173. 1872; Enchir. Fung. 85. 1886.

Gomphos torvus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 854. 1891.

Telamonia torva RICKEN, Blätterp. 171, pl. 49, f. 6. 1915.

子実体は群生或はやや叢生；傘は径 4—6cm，或はそれ以上に及び，丸山形，のち開張扁平となり，鈍頭或はやや中丘を存す；表面はやや吸水性，初め菫褐色，紫褐色或は銅褐色，のち淡色となる，中央は銹褐色，初め微鱗片及繊維ありて粉状，のち無毛平滑となり，往々放射状皺を有す，縁は初め内屈し，永く淡菫色を残す；肉は初め鈍灰紫色，のち帯褐色或は淡色となる，中盤厚し，味温和，臭よし；褶は殆ど直生，菫色，速に紫褐色となり，遂に暗肉菫色となる，やや疎，甚だ広幅，むしろ厚く，脆し；茎は長さ 4—7cm，或はそれ以上に及び，上方に狭細，幅 0.7—1cm，基部棍棒状球根形にて幅 2—3cm，中央或はそれ以上迄帯白色の被膜に鞘状に包まれ，鞘の上端に白色半永存的膜状鍔を存す，鍔より上部に淡菫色にて絹状，下部に繊維状にて綿絮状の鱗片あり，基部に白色絨毛を存し，緊緻，中実，虫害を受くること多し；蜘網膜は白色，絨毛状，のち繊維状；胞子は便腹楕円形，有疣，黄黄土色，8—10.5×5—6.5μ；胞子紋は銹色。

所在及産地

林地—夏秋　　本州—欧，北米

和名 ツバムラサキフウセンタケ（鍔紫風船茸）〔本郷〕

Cortinarius bovinus Fr.

サザナミツバフウセンタケ

FRIES, Epicr. Myc. 297. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 81. 1863; Hymen. Eur. 381, 1874—GILLET Champ. Fr. 496. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 372. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 198. 1889—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 269. 1883; Illus. Brit. Fungi, 6 : pl. 822(no. 807). 1888; Handb. Austr. Fungi, 72. 1892—WINTER, Pilze, 1 : 587. 1884—QUÉLET, Enchir. Fung. 86. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 956. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 640. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 48. 1892; Brit. Fungi, 309. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 239. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 483. 1912—REA, Brit. Basid. 175. 1922—LANGE, Agar. Denm. 10 : 37. 1935; Fl. Agar. Dan. 3 : 37, pl. 98, f. C-D. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 218. 1948—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 306. 1953—HONGO, Jour. Jap. Bot. 28 : 72, f. 3(1). 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 354, f. 243. 1957.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，73，f. 183, pl. 32，f. 183．1957）

Gomphos bovinus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 853. 1891.

Telamonia bovina RICKEN, Blätterp. 173. 1915.

子実体は群生或はやや叢生；傘は径 6—7cm，鈍円錐状丸山形，のち開張し殆ど扁平となり，屢々低き広き中丘を有す；表面は湿潤，暗栗褐色，圧着せる繊維を被むり，乾時幾分絹糸状，縁は内屈し，初め白色繊維を有す；肉は中盤厚く，淡色～淡汚褐色，味及臭殆どなし；褶は深く凹入し狭生，幼時淡灰褐色，速に暗肉桂色となる，密～やや疎，広幅，稜は平坦或は僅か鋸歯あり；茎は長さ 5—8cm，上方同幅或は僅か狭細にて幅 0.7—2cm，基部球根状にて幅 1.5—3.5cm，帯白色絹糸状繊維あり，汚褐色，中位に速に消失する綿架状繊維よりなる白色帯あり；蜘網膜は白色，のち胞子によりて銹色となる；胞子は広楕円形，有疣，7.5—10.5×5—6.5μ.

所在及産地

針葉樹林地—秋

北海道，本州—欧．北米．濠

和名 サザナミツバフウセンタケ（漣鍔風船茸）〔本郷〕

Cortinarius macropus

(PERS. ex FR.) Fr

ナガエノフウセンタケ

FRIES, Epicr. Myc. 291. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 71. 1863; Hymen. Eur. 374. 1874—GILLET Champ. Fr. 490. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 362. 1879—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 10 : 666. 1880; Enchir. Fung. 84. 1886—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2, 263. 1883; Illus. Brit. Fungi, 6 : pl. 788(no. 787). 1888—WINTER, Pilze, 1 : 591. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 947. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 36. 1893; Brit. Fungi, 306. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 247. 1900—W. G. Smith, Brit. Basid. 235. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 482. 1912—REA, Brit. Basid. 168. 1922—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 216. 1938—KONRAD & MAUBLANC Agaricales, 1 : 217. 1948.

Agaricus macropus PERS. Syn. Meth. Fung. 275. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1 : 215. 1821.

Gomphos macropus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 854. 1891.

Telamonia macropus RICKEN, Blätterp. 168. pl. 50, f. 1. 1915.



第 181 図 ナガエノフウセンタケ Cortinarius macropus ×1/4 （大谷氏）

子実体は群生；傘は径 5—8cm，或はそれ以上に及び，丸山形，のち開張し，鈍頭；表面は殆ど吸水性なく，煉瓦色，のち銹色となる，甚だ微細なる鱗片を被むり，のち無毛，縁は初め内屈し，淡色；肉は帯白色にて鈍赭色を帯び，中盤以外は薄し，味温和，臭なし；褶は狭生，淡色，のち肉桂色，甚だ広幅，疎，稜は時に鋸歯状；茎は長く，5—10×0.8—1.5cm，或はそれ以上に及び，殆ど同幅，帯白色，のち傘と殆ど同色，繊維あり，初め著しき膜状の鍔を有するも，のち僅かに纒れたるものとなる，蜘網膜は淡色；胞子は広楕円形，殆ど平滑或は僅かに粗面，8—10×6—7μ；胞子紋は銹色。

所在及産地

林地—秋　北海道—欧

和名 ナガエノフウセンタケ（長柄風船茸）〔今井〕

Hydrocybe Fr. (1838)

ニセフウセンタケ亜属

Cortinarius duracinus Fr.

ニセフウセンタケ

FRIES, Epicr. Myc. 304. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:96. 1863; Hymen. Eur. 388. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 2 : 352. 1873; Enchir. Fung. 88. 1886—GILLET, Champ. Fr. 502. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 383. 1879—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 273. 1883; Illus. Brit. Fungi. 6: pl. 809(no. 829). 1888—WINTER, Pilze, 1 : 582. 1884—SACCARDO, Syll Fung. 5 : 966. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 656. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 19. 1893; Brit. Fungi, 312. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER, & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 246. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 162. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 244. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 477. 1912—KAUFFMAN, Agar. Mich. 430. 1918; N. Am. Fl. 10 : 340. 1932—REA, Brit. Basid. 183. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 2 : pl. 161. 1926; Agaricales, 1 : 223. 1948—BRESADOLA, Icon. Myc. 14 : pl. 663. 1930—LANGE, Agar. Denm. 10 : 43. 1935; Fl. Agar. Dan. 3 : 43, pl. 102, f. D. 1938—HENRY, Bull. Soc. Myc. Fr. 54 : 38. 1938—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 298. 1953.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 53 : 398. 1939—原、日. 菌. 目. 92. 1954)

Gomphos duracinus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 853. 1891.

Hydrocybe duracina RICKEN, Blätterp. 179, pl. 51, f. 2, 1915.

子実体は群生或はやや叢生; 傘は径 4—10cm, 丸山形, のち開張し鈍中丘あり; 表面は吸水性, 湿時肉桂褐色, 中盤に赤味あり, 乾時淡黄土淡色～鞣皮色, 無毛, 平坦, 縁は初め内屈し, のち膝曲し, 往々環溝を生ず, 不明瞭の絹糸状; 肉は白色, のち同色となり, 遂に淡色となる, 脆くして薄し, 味及臭温和; 褶は直生或は類垂生, 初め淡色, 速に肉桂色となる, やや疎, 中位に広幅, 薄し, 稜は平坦或は僅か鋸歯あり; 茎は 4—12cm, 下方に狭細或は基部紡錘状となり急に細く, やや根状をなす, 幅 0.6—1.5cm, 白色, 光沢あり, 初め蜘網膜繊維あり, 剛直, 充塞, のち中空; 蜘網膜は白色, 早失性; 胞子は卵状扁桃形, 僅か粗面, 7—9.5×5—5.5μ.

所在及産地

広葉樹林地一夏秋　北海道, 本州一欧. 北米

和名　ニセフウセンタケ (贋風船茸) 〔今井〕

Cortinarius jubarinus Fr.

チャニセフウセンタケ

FRIES, Epicr. Myc. 309. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 105. 1863; Hymen. Eur. 393. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 176. 1872; Enchir. Fung. 89. 1886—GILLET, Champ. Fr. 507. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 ; 392. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 203. 1889—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2, 279. 1883; Illus. Brit. Fungi, 6 : pl. 797 (no. 842). 1888—WINTER, Pilze, 1 : 580. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 975. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 652. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 27. 1893; Brit. Fungi, 313. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 246. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 246. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 478, pl. 93B. f. 3-4. 1912—KAUFFMAN, Agar. Mich. 436. 1918 (var.); N. Am. Fl. 10 : 343. 1932—REA, Brit. Basid. 188. 1922—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43. 217. 1938—LANGE, Fl. Agar. Dan. 5 : 100, pl. 199, f. G. 1940—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 226. 1948.

(原, 日. 菌. 目. 93. 1954)

Gomphos jubarinus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2: 854. 1891.

Hydrocybe jubarina RICKEN, Blätterp. 179. 1915.

子実体は群生或は孤生; 傘は径 2—4cm, 鐘状丸山形, のち開張扁平となり, 中丘を存し或は不明瞭; 表面はやや吸水性, 湿時栗褐色～肉桂色, 乾時黄土色, 光沢あり, 無毛, 平坦, 縁は初め内屈し, 蜘網膜により白絹状; 肉は薄く, 傘部白色, 茎部傘面と同色, 味及臭なし; 褶は直生, のちやや凹入, 淡褐色, のち肉桂色, やや疎, むしろ広幅, 薄く, のち便腹状, 幾分横脈あり, 稜は同色; 茎は 3—6×0.3—0.5cm, 同幅或は殆ど同幅, 初め淡色, のち帯褐色或は暗褐色, 内生絹状繊維あり, 平坦, 充塞, のち中空; 蜘網膜は白色, 繊維状, 早失性; 胞子は広楕円形, 僅か粗面, 7—8.5×5—6.5μ; 胞子紋は銹色。

所在及産地

主に針葉樹林地一秋　北海道一欧. 北米

和名　チャニセフウセンタケ (茶贋風船茸)

〔今井〕

Cortinarius fasciatus (SCOP.) Fr.

トビチャニセフウセンタケ

FRIES, Epicr. Myc. 315. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 114. 1863; Hymen. Eur. 399. 1874—GILLET, Champ. Fr. 511, c. ic. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 4 : 330-XLVI. 1876; Enchir. Fung. 91. 1886—KARSTEN, Hattsv. 1 : 400.

1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 205. 1889—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2, 282. 1883; Illus. Brit. Fungi, 6: pl. 814 (no. 855). 1888—WINTER, Pilze, 1: 576. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 982. 1887—SCHROETER, Pilze Schles. 1: 588. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2: 35. 1898; Brit. Fungi, 315. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl-fam. 1, 1**: 246. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 249. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 475. 1912—REA, Brit. Basid. 194. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 14: pl. 670. 1930—LANGE, Agar. Denm. 10: 51, 1935; Fl. Agar. Dan. 3: 50, pl. 104, f. D. 1938—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 218. 1938—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 311. 1953.

（原，日．菌．目．92．1954）

Agaricus fasciatus SCOP. Fl. Carn, ed, 2, 2: 456. 1772—RABENHORST. Deut. Krypt. Fl, 1: 488. 1884.

Agaricus acutus ALB. et SCHW. Consp. Fung. Lusat. 166. 1805. (non PERSOON)

Gomphos fasciatus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2: 853. 1891.

Hydrocybe fasciata RICKEN. Blätterp 187, pl. 53, f. 7. 1915. (?)

子実体は群生；傘は径 1.5—3cm，初め鋭円錐形，のち開張扁平となり鋭き中丘あり；表面は吸水性，煉瓦色，中丘は暗褐色，乾時淡色，無毛，絹状；肉は傘面とやや同色，薄く，味及臭なし；褶は彎状直生或は直生，淡黄土色，のち肉桂色，やや疎，便腹状；茎はむしろ長く，4—7×0.2—0.4cm，同幅，真直或は撓曲，淡色にて褐色繊維の飛斑あり，繊維状に裂く，下部帯白色，充塞，のち中空；胞子は楕円形，小疣を有し，6—9×4—5μ（8—12×5—7μ 今井）；胞子紋は銹色。

所在及産地

主に針葉樹林地—秋　　北海道—欧

和名　トビチャニセフウセンタケ（飛茶贋風船茸）〔今井〕

Cortinarius obtusus (FR.) FR.

サザナミニセフウセンタケ

FRIES, Epicr. Myc. 313. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2: 111. 1863; Hymen. Eur. 397. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1: 177. 1872; Enchir. Fung. 91. 1886—GILLET, Champ. Fr. 509, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3: 189. 1876; Hattsv. 1: 397. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 205. 1889—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2, 282. 1883; Illus. Brit. Fungi, 6: pl. 845, f. a. (no. 852). 1888—WINTER, Pilze, 1: 577. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 981. 1887—SCHROETER, Pilze. Schles. 1: 589. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2: 32, f. 5–6, 13 (p. 16). 1893; Brit. Fungi, 315. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRATL, Nat. Pfl-fam. 1, 1**: 245. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 248. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 475. 1912—REA, Brit. Basid. 192. 1922—KAUFFMAN, N. Am. Fl. 10: 344. 1932—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 2: pl. 169. 1932; Agaricales, 1: 228. 1948—LANGE, Agar. Denm. 10: 50. 1935; Fl. Agar. Dan. 3: 49, pl. 104, f. A. 1938—SINGER, Agaricales, 553. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 163, pl. 60, f. 3. 1950—HONGO, Jour. Jap. Bot. 27: 192, f. 2(5). 1951—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 313. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2: 352, f. 242 B. 1957.

（松田及本郷，植．研．雑．30：261．1955）

Agaricus obtusus FR. Syst. Myc. 1: 233. 1821. (non PERSOON)

Gomphos obtusus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2: 854. 1891.

Hydrocybe obtusa RICKEN, Blätterp. 189. 1915.

子実体は群生；傘は径 1—3cm，円錐形，のち鐘形，遂に開張扁平となり中丘を有す；表面は吸水性，湿時赤褐色或は銹色，殆ど中央まで小線条あり，乾時淡黄土皮色にて幾分絹状；肉は傘面と同色，中盤厚し，味及臭僅かなり；褶は直生，時に殆ど離生，粘土色～黄土渋色，遂に肉桂色となる，疎，幅 3—4mm，便腹状，横脈あり，稜は全縁，屢々白房毛あり；茎は 2.5—5×0.2—0.5cm，殆ど同幅或はやや便腹状，撓曲，傘面と同色或は淡色，乾時白色，下部は初めより一般に白色，圧着せる白絹状繊維を被むる，充塞，のち中空；蜘網膜は白色，甚だ早失性；胞子は楕円形，有疣，7.5—9×5—6μ（或は 8—10×5—6.5μ）；胞子紋は銹色；稜囊体は広棍棒形，26—60×9—17μ.

所在及産地

松林蘚間—秋　　本州—欧．北米

和名　サザナミニセフウセンタケ（漣贋風船茸）〔本郷〕

疑問種

Cortinarius variicolor var. *nemorensis*

（梅村，富士．植．志．373．1923—原，日．菌．目．93．1954）ヌメリ

Cortinarius vinosus

（安田，植．雑．38：147．1924—白井，日．菌．目．ed. 3. 104. 1927—広江，応用菌蕈学，1171. 1941—原，日．菌．目．93．1945）ブドウシメジ

Cortinarius Wrightii BERK. et CURT. Proc. Am. Arts Sci. 4: 118. 1860.

（松村，植．名鑑，1：137. 1904—白井，日．菌．目．25．1905；ed. 2. 175. 1917；ed. 3. 104. 1927）

Leucocortinarius (LANGE) SING.

ヒダホテイタケ属

SINGER, Lloydia, 8 : 141. 1945; Agaricales, 554. 1949.

Cortinarius subgen. *Leucocortinarius* LANGE, Dansk Bot. Ark. 8 (7) : 6. 1935.

Cortinellus ROZE sensu KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 6 : 146. 1929. (non sensu KARSTEN)

性質前属の亜属チャフウセンタケ(*Phlegmacium*)に類似するも胞子紋は淡帯褐黄白色にて胞子は平滑なり; 傘の表皮層は錯綜せる菌糸より成り, その菌糸は上表皮層に於て平行となる; 色素は下表皮層に集結し, 細胞内或は少くとも菌糸壁を被わず; 傘は非粘性或は非吸水性; 褶は截頭凹入; 托実質は整型; 胞子は無色, 寧ろ厚膜 (厚さ 0.5—1μ), 膜は明かに2重ならず, 乳頭も発芽孔もなし, 非糊性; 肉の菌糸は錯綜し, 菌絆を有し, 非糊性; 林地上に生じ, 多分菌根を作る; 多分半被実; 欧州産, 只1種を知らる。

(本属名は leukos[希] (白色), *Cortinarius* (属名) より出づ)

基準種 *L. bulbiger* (ALB. et SCHW. ex FR.) SING.

本邦既知種

ヒダホテイタケ ***L. bulbiger*** (408)

Leucocortinarius bulbiger (ALB. et SCHW.) SING.

ヒダホテイタケ

SINGER, Lloydia, 8 : 742. 1945; Agaricales, 555. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ Super. 160, f. 220. 1953.

Agaricus bulbiger ALB. et SCHW. Consp. Lusat. 151. 1805—FRIES, Syst. Myc. 1 : 27. 1821; Epicr. Myc. 20. 1838; Monogr. Armill. Suec. 3. 1857; Hymen. Eur. 40. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 571. 1844—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 32. 1876—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 21. 1883; Illus. Brit. Fungi, 1 : pl. 20 (no. 48). 1883—WINTER, Pilze, 1 : 833. 1884.

Armillaria bulbigera QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1 : 231. 1872—GILLET, Champ. Fr. 80. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 18. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 45. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 73. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 102. 1915—SCHROETER, Pilze. Schles. 1 : 670. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 225. 1893; Brit. Fungi, 97. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl-fam. 1, 1** : 270. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 28. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 698, pl. 128B, f. 1-2. 1912—REA, Brit. Basid. 105. 1922.

Cortinellus bulbiger GILL. Champ. Fr. pl. (non texte). 1874—PATOUILLARD, Ess. Tax. 161. 1900—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 2 : pl. 108. 1924; Agaricales, 185. 1948—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 63, pl. 2, f. 3. 1938.

(原, 日. 菌. 目. 93. 1954)

Gyrophila bulbigera QUÉL. Enchir. Fung. 9. 1886.

Tricholoma bulbigerum RICKEN, Blätterp. 331, pl. 87, f. 1. 1915—HEIM, Champ. Eur. 2 : 295. 1957.

Cortinarius bulbiger LANGE, Agar. Denm. 10 : 13. 1935; Fl. Agar. Dan. 3 : 14, pl. 81, f. A. 1938.

子実体は孤生或は散生; 傘は径 5—10cm, 丸山形, のち殆ど扁平, 鈍頭; 表面は湿潤或は乾燥, 淡帯褐色或は粘土色, 中央暗色, 周辺淡色, 無毛, 殆ど平滑, 光沢あり, 長時縁にベールの白絹状残物を存す; 肉は白色, 肉質, 厚く, 味及臭なし; 褶は狭生或は彎状狭生, 白色, のちクリーム色或は銹色, やや密, 広幅, 便腹状; 茎は 4—8×0.8—1.5cm, 同幅にて基部に幾分扁平なる径 2—3cm に及ぶ有縁の球根を有す, 帯白色或は帯白黄褐色又は灰色, 鍔より上部は綿絮状, 下部は繊維状, 強靱, 中実; 鍔は白色或は灰色, 蜘網状, 早失性; 胞子は卵形或は卵状楕円形, 平滑, 無色, 6.5—8.5×4.5—5.5μ; 胞子紋は淡帯褐黄白色或は帯白クリーム色; 嚢状体なし。

所在及産地

針葉樹林地—秋 北海道—欧

和名 ヒダホテイタケ (襞布袋茸) 〔今井〕

Gymnopilus KARST.

チャツムタケ属

KARSTEN, Hattsv. 1 : 400. 1879—SINGER, Agaricales, 557. 1949.

?*Ryssospora* FAYOD, Ann. Sci. Nat. Bot. VII, 9 361. 1889.

Fulvidula ROMAGNESI, Rev. Myc. 1 : 209. 1936.

傘は通常鮮色にて, 黄色, 黄褐色, 赤色, 青色, ライラック色, 緑色等, 色素は菌糸膜を被う, 粘性, 吸水性或は乾燥, 無毛, 繊維状, 鱗片状, 綿絮状或は亀裂す; 上表皮層は屢々直立する連鎖菌糸より作られたる毛被の1種より成り, 少くとも傘の中心部に於て著しく, その時は毛の先端は皮嚢体の形態をとり, 常に色素によつて被わる; 褶は狭生〜垂生, 狭く乃至広し, 乾燥成熟せる子実体に於ては甚だ鮮なる銹色となる; 胞子紋は甚だ鮮かなる帯銹黄褐色; 胞子は銹蜜色; 2重膜, 発芽孔なし, 楕円形, 短楕

円形或は扁桃状楕円形，油浸装置をもつてアンモニア液にて見るときは明かに有疣；担子柄棍棒形或は頭状先端と基部膨大部との間に縊れ，然らざれば細頸壜形，4或は2胞子；稜嚢体は常に存在し，通常下部膨大し狭細せる先端は屢々類頭形に膨大し，小～中形，稜を異質となす；褶側嚢体は往々担子柄間に分散し，稜嚢体と同一形にて，通常樹脂様色素に強く被わる；托実質は整型；茎は通常黄色或は殆ど黄色，著しく或は固定的に偏心生ならずして，傘径と同長或は長く，能く発達し，有縁球根状ならず，固定的に強く屈曲せずして傘縁に接触す，屢々明かなる蜘蛛巣膜片状～膜質の被膜を有す，この被膜は或種にては能く発達せる鍔として表わる，傘の粘性の時は常に有鍔なり，明かなる仮根を有せざるも往々材中に伸長す；肉は屢々苦し；すべての菌糸は菌絆を有す，傘は胞子によつて強く粉状となりたるとき特に KOH によつて黒変す；樹材上，生蘭上，草根上，稀に葉上或は植物残屍上に生じ，蘭と菌根関係を有する種類あり，多分全種半被実；汎布，約25種を知らる。

（本属名は gymnos[希]（裸），pilos（帽子）より出づ）

基準種　*G. liquiritiae* (PERS. ex FR.) KARST.

本邦既知種検索表

A. 茎に鍔を有し；胞子紋は銹色（スギタケ（*Pholiota*）状のもの）。
- a. 傘は緑色或は灰緑色の色彩を含み，肉も緑色を帯ぶ，径 2—10cm，表面往々網目を有す；鍔は早失性；胞子 6—9.5×3.5—6μ；針（広）葉材上
  - ミドリスギタケ ***G. aeruginosus*** (409)
- b. 傘は橙黄色，肉は黄色，径 4—15cm，表面網目なく；鍔はやや永存性；胞子 9—10×5—6μ；広（針）葉材上；有毒。
  - オオワライタケ ***G. spectabilis*** (410)

B. 茎に鍔なし（ツムタケ（*Flammula*）状のもの）
- a. 熱帯産，広葉枯幹上；胞子紋銹色；傘は中央に小刺を密布す，銹色，径 4—10cm，胞子 6.5—8.5×5—6μ.
  - オガサワラツムタケ ***G. noviholocirrhus*** (410)
- b. 温帯産，針葉材上；胞子紋黄土色；傘は平滑
  - α. 傘は吸水性なし，黄金色，径 3—7cm；胞子 7—9×3.5—5μ.
    - キツムタケ ***G. penetrans*** (411)
  - β. 傘は吸水性，橙黄褐色，径 2—5cm；胞子 5—6×3—4μ.
    - チャツムタケ ***G. liquiritiae*** (412)

Gymnopilus aeruginosus (PECK) SING.
ミドリスギタケ

SINGER, Agaricales, 560. 1949.
（松田及本郷，植．研．雑．30：261．1955—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，73, f. 184, pl. 32, f. 184. 1957）
Pholiota aeruginosa PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 43：81. 1890—KAUFFMAN, Agar. Mich. 308, pl. 62, 1918—OVERHOLTS, N. Am. Fl. 10：269. 1924; Ann. Missouri Bot. Gard. 14：147, pl. 18. 1927—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43：194. 1938.
（原，日．菌．目．250．1954—今関及土岐，林．試．研．報．67：46. 1954）
Flammula viridans MURR. Mycologia, 4：262 1912.

子実体は群生或は叢生；傘は径 2—10cm，丸山形，表面は帯緑色にて黄或は褐色を帯び，菫灰色～肉桂色或は黄土皮色となる，乾燥，初め無毛，通常速に繊維状鱗片を生じ多少網目を生じ，或は往々網目なく完全に鱗片に被わる，縁は薄く，のち僅か反転す；肉は緑色を帯び，乾品にては帯黄色，臭よく，味苦し；褶は直生，彎状直生或は狭生，容易に離る，幼時淡黄土色，のち黄土橙色，幅 3—7mm，後方広し；茎は 3—8×0.3—1cm，中心生或は偏生，同幅或は殆ど同幅，傘面と同色，無毛或は僅か繊維状，往々溝状線条あり，中実；鍔は類膜質，裂け，早失性にてその残物は胞子によりて鮮銹色を呈す；胞子は楕円形，稀に全く平滑，熟時有刺，6—9.5×3.5—6μ；胞子紋は銹色；褶側嚢体なし。

所在及産地

針葉樹及広葉樹腐材上一夏秋



第182図　ミドリスギタケ Gymnopilus aeruginosa ×1/3　（大谷氏）

北海道，本州，九州—北米

和名 ミドリスギタケ（緑杉茸）〔今井〕

Gymnopilus spectabilis (FR.)SING.

オオワライタケ

SINGER, Agaricales, 561. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 322. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 59. 1956.

（松田及本郷，植．研．雑．30 : 262. 1955—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，73, f. 185, pl. 32, f. 185. 1957）

Agaricus spectabilis FR. Elench. Fung. 1 : 28. 1828; Epicr. Myc. 166. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 313. 1857; Hymen. Eur. 221. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 486. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 108. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3 : pl. 352(no. 394). 1886; Handb. Austr. Fungi, 45. 1892—WINTER, Pilze, 1 : 699. 1884.

Pholiota spectabilis GILL. Champ. Fr. 443. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 299. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 751. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 686. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 222. 1893; Brit. Fungi, 259. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 168. 1900—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl-fam. 1, 1** : 251. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 128. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 540. 1912—HARPER, Trans. Wisc. Acad. Sci. Arts Lett. 17 : 490, pl. 44. 1913—KAUFFMAN, Agar. Mich. 304, pl. 61. 1918—LANGE, Agar. Denm. 4 : 10, f. 14. 1921; Fl. Agar. Dan. 3 : 57, pl. 108, f. B. 1938—REA, Brit. Basid. 119. 1922—OVERHOLTS, N. Am. Fl. 10 : 270. 1924; Ann. Missouri Bot. Gard. 14 : 144, pl. 16-17. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 14 : pl. 698. 1930—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 195. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 155. 1948—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 144, pl. 56, f. 1. 1950—HEIM, Champ. Eur. 2 : 379. 1957.

（川村，食用菌及有毒菌，171, f. 151-152. 1931；日．菌．名鑑，5 : 548, f. 532. 1954—小林，日．隠．植．図．537, pl. 259, f. 1. 1939—今関，原色きのこ，pl. 10（右）. 1942—本郷，植．分．地．14 : 73, f. 1 (9). 1951—広江，応用菌蕈学，820, f. 630-632. 1941—原，日．菌．目，250. 1954）

Pholiota lutea PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 51 : 288. 1898.

Pholiota ventricosa EARLE. Bull. N. Y. Bot. Gard. 2 :341. 1902.

子実体は叢生；傘は径 4—15cm，丸山形，のち殆ど扁平となる；表面は乾燥或は湿潤，淡卵黄色～橙黄色或は帯赤橙黄色，乾時往々僅か褐色を増す，微細絹糸状或は甚だ幼時は殆ど無毛なるも，のち明かに粗なる繊維状或は溪流状となり，成品にてはやや鱗被となる，縁は内屈し，羊毛状；肉は黄色，厚く，緻密，苦味；褶は直生或は垂下歯又は垂下線を有す，黄色，のち銹色，密，広幅；茎は 3—15×0.5—3cm，同幅～便腹状，或は基部球根状，基端短根状となる，黄色或は淡色，鍔より上部は黄色にて綿絮状，下部は繊維状或は穀粉状，中実；鍔は頂位或は上位，やや永存性，黄色，のち変色す，往々表面に線条あり；胞子は楕円形，細疣あり，褐色，7—10×5—6μ；胞子紋は銹色～肉桂赤色；稜嚢体は束生，紡錘形， 32×6.5μ；有毒。

所在及産地

広葉樹，稀に針葉樹腐株或は周囲—夏秋

北海道，本州—欧．北米．濠．阿

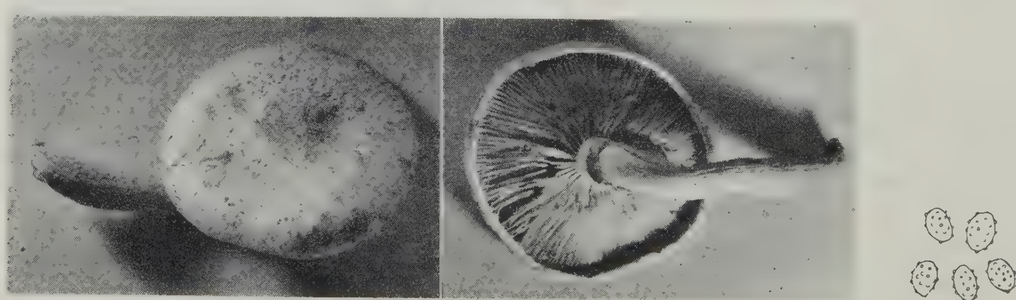
和名 オオワライタケ（大笑茸）〔川村〕

Gymnopilus noviholocirrhus S. ITO et IMAI

オガサワラツムタケ

S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16 : 49. 1940.

Flammula noviholocirrha S. ITO et IMAI, l. c. in nota.



a b c

第183図 オオワライタケ Gymnopilus spectabilis

a. 子実体表面 b. 同裏面 ×1/3 c. 胞子 ×550 （大谷氏）

? *Agaricus holocirrhus* BERK. et CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4 : 116. 1860.

子実体は密に叢生；傘は径 4—10cm，丸山形，のち開張し，扁平或はやや中丘あり；表面は乾燥，湿時銹色，乾時淡色となる，中央に小刺を密布す，縁に繊維あり；肉は黄色或は帯黄色，厚く，臭なく，味苦し；褶は広く狭生，後方広幅，密，広幅，類肉桂色；茎は 4—10×0.5—1cm，同幅，基部屢々肥大す，肉桂色或は褐色，繊維あり，やや弾性ありて撓曲性，充塞；胞子は楕円形，細疣を有し，屢々有嘴，6.5—8.5×5—6μ；胞子紋は銹色。

所在及産地

ムニンエノキ（*Celtis boninensis* KOIDZ.）

枯幹上—秋　　小笠原島

和名　オガサワラツムタケ（小笠原紡錘茸）〔今井〕

Gymnopilus penetrans

(FR. sensu LANGE) MURR.

キツムタケ

MURRILL, Mycologia, 4 : 254. 1912; N. Am. Fl. 10 : 203. 1917—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 235. 1938—SINGER, Agaricales, 561. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 322, f. 321. 1953.

（原，日．菌．目．143. 1954—松田及本郷，植．研．雑．30 : 262. 1955）

Agaricus penetrans FR. Obs. Myc. 1 : 23. 1815; Epicr. Myc. 189. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 360. 1857; Hymen. Eur. 250. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 127. 1876—WINTER, Pilze, 1 : 680. 1884—COOKe, Handb. Austr. Fungi, 52. 1892.

Agaricus sapineus var. *penetrans* FR. Syst. Myc. 1 : 239. 1821.

Flammula penetrans QUÉL. Champ. JuraVosg. 1 : 252. 1872—GILLET, Champ. Fr. 532. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 409. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 168. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 823. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 744. 1916—RICKEN, Blätterp. 207. 1915—REA, Brit. Basid. 321. 1922—LANGE, Agar. Denm. 7 : 12. 1928; Fl. Agar. Dan. 4:9, pl. 121, f. G. 1939—BRESADOLA, Icon. Myc. 16 : pl. 780. 1930 (?)—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 152. 1948.

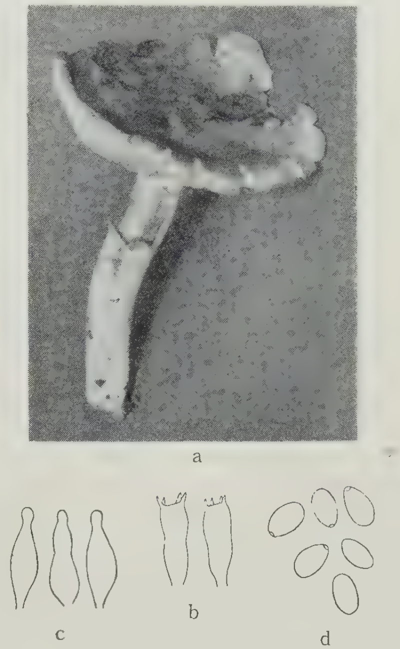
Dryophila penetrans QUÉL. Enchir. Fung. 71. 1886.

Agaricus sapinea COOKE, Illus. Brit. Fungi, 4 : pl. 447, (no. 487), 1886. (non. FRIES)

Naucoria penetrans P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl-fam. 1, 1**: 251. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 530. 1912.

（安田，植．雑．23 : 402. 1909(?)—白井，日．菌．目．ed. 2, 387. 1917; ed. 3. 232. 1927—広江，応用菌蕈学，1174. 1941—原，日．菌．目．221. 1954）

Pholiota penetrans HEIM, Champ. Eur. 2 : 381. 1957.



第184図　キツムタケ　Gymnopilus penetrans
a. 子実体　×2/3　　b. 担子柄
c. 嚢状体　　d. 胞子　×600（大谷氏）

子実体は群生，時に叢生；傘は径 3—7cm，円錐形或は丸山形，のち扁平，鈍頭，屢々不正形，表面は乾燥，鬱金色～黄金色，のち淡色となる，無毛，平滑，幼時鏡下にて産毛あり；肉は帯白色～黄色，中盤厚し，苦味，臭強からず，褶は直生或は凹入，初め帯白色，のち黄色となり，老時渋色の斑点を生ずるか或は銹色～暗褐色となる，密；茎は 4—8×0.3—0.6cm，同幅或は上方に漸細，絹状，白色繊維ありて，黄色或は褐色線条あり，老時屢々下部暗色，基端に白絨毛或は菌糸を存す，地上に生ずるときは基端紡錘状をなし偽根を有す，充塞，のち稍々中空；茎の上部に蜘網膜の残物を残す，白色線絮状，初め類膜質，甚だ早失性なり；胞子は卵状楕円形，平滑，或は微刺あり，7—9×3.5—5μ；胞子紋は黄土色；稜嚢体は毛状壜形，頭状，40—50×8—12μ.

所在及産地

針葉樹腐木上及地上—秋

北海道，本州，九州—欧．北米．濠．亜（小亜．西比）

和名　キツムタケ（黄紡錘茸）〔今井〕

Gymnopilus liquiritiae

(PERS. ex FR.) KARST.

チャツムタケ

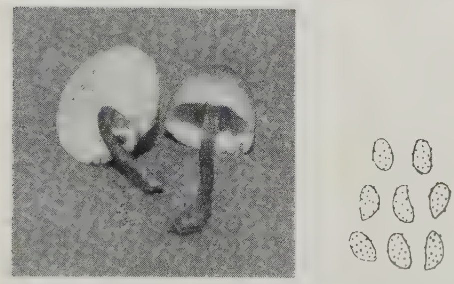
KARSTEN, Hattsv. 1 : 400. 1879—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 236. 1938—SINGER, Agaricales, 561. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 322. 1953. (原, 日. 菌. 目. 143. 1954—松田及本郷, 植. 研. 雑. 30 : 262. 1955)

Agaricus liquiritiae PERS. Syn. Meth. Fung. 306. 1801—FRIES, Epicr. Myc. 190. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 362. 1857; Hymen. Eur. 251. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 477. 1844—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 128. 1876—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 172. 1883.

Flammula liquiritiae QUÉL. Champ. Jura Vosg. Suppl. 2 : 347. 1873—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 825. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 744. 1916—KARSTEN, Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 169. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 140. 1893; Brit. Fungi, 290. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 169. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 152. 1908—RICKEN, Blätterp. 208, pl. 57, f. 2. 1915—REA, Brit. Basid. 322. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 16 : pl. 783. 1930—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 151. 1948.

Dryophila liquiritiae QUÉL. Enchir. Fung. 71. 1886 .

Naucoria liquiritiae P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl-fam. 1, 1** : 251. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 528. 1912.



a b

第 185 図 チャツムタケ Gymnopilus liquiritiae

a. 子実体 ×1/2 b. 胞子 ×700 (大谷氏)

子実体はやや叢生或は散生; 傘は径 2—5cm, 或はそれ以上に及び, 丸山形, のち開張し, 殆ど鈍頭, 遂に扁平となる; 表面は湿潤, 黄金褐色或は橙黄褐色, 無毛, 平滑, のち周縁に線条を生ず; 肉は傘にては黄色, 茎にては赤褐色, 味僅か苦く, 臭微なり; 褶は直生, 初め黄金色, のち肉桂色となる, 密, 広幅; 茎は 4—6×0. 3—0. 6cm, 殆ど同幅或は上方に狭細, 屢々屈曲す, 淡色, のち銹色, 初め白絹状, 繊維線条あり, 基部白色絨状, 蜘網膜の残物なし, 中空; 胞子は楕円形, 平滑或は微刺あり, 5—6×3—4μ; 胞子紋は黄土色; 稜嚢体は便腹円筒形, 50—60×10—15μ,

所在及産地

針葉樹腐木上及地上—秋

北海道, 本州, 九州—欧. 亜(小亜. 西比)

和名 チャツムタケ (茶紡錘茸) 〔今井〕

疑問種

Naucoria micromegala(BERK)SACC. Syll. Fung. 5 : 833. 1887(P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl-fam. 1, 1** : 251. 1900—白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 387. 1917)

Phaeocollybia HEIM

カワムラジンガサタケ属

HEIM, Genre Inocybe, 70. 1931—SINGER, Agaricales, 565. 1949.

性質エノキタケ (*Collybia*) の如し; 傘は通常無毛, 類粘性～膠性, 屢々鋭頭, 円錐形～鐘形, のち開張し屢々中丘を有す; 上表皮層は匍匐せる糸状菌糸より成り, その菌糸は多少膠化し或は少くとも緊結せず; 褶は類離性～狭生, 老時銹褐～濃肉桂色となる, 稜はレンズ下にて淡色; 胞子紋は銹色; 胞子は帯銹色～帯銹蜜色, 有疣にて時に殆ど平滑に近し, 胞子盤, 発芽孔及乳頭なく, 楕円形, 卵状類杏仁形; 担子柄は正常形, 嚢状体は褶側に存せずして稜上に常に存す, 細き頭状糸にて稜を多少異質となす; 托実質は密集せる殆ど平行の菌糸より成る整形なり; 茎は軟骨質なるも, 屢々脆く, 殊に乾燥によりて著し, 内生線状繊維を有し, 或は全然平滑なるもの更に多し; 偽根は多少発達し, 屢々甚だ著しきものあり; 被膜は痕跡的にて, 粉状, 外見的には幼品に於てすら欠如; 凡ての菌糸は菌絆を有す; 地上及腐蝕物上並に腐材上 (多くは針葉樹林内) 生, 多分偽根により埋木等に連結するならん, 温帯産, 経済的価値なし,

(本属名は phaios[希] (褐色), *Collybia* (属名) より出づ)

基準種 *P. festiva* (FR) HEIM ex SING.

本邦既知種検索表

A. 傘は径 2—5cm, 色変化するも通常オリーブ或は緑色を帯ぶ, 偽根短し; 胞子 6—8×4—5μ.

カワムラジンガサタケ ***P. festiva*** (413)

B. 傘は径 1.5—3 cm, 赤褐色或は火焔色; 偽根長し; 胞子 8—10×4.5—6μ.

ナメニセムクエタケ ***P. christinae*** (413)

Phaeocollybia festiva (FR.) HEIM

カワムラジンガサタケ

HEIM, Genre Inocybe, 70. 1931; Champ. Eur. 2 : 392. 1957—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 163. 1948—SINGER, Agaricales, 566. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 325, f. 411. 1953.

Agaricus festivus FR. Epicr. Myc. 192. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 365. 1857; Hymen. Eur. 253. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 173. 1883; Illus. Brit. Fungi, 8 : pl. 966(no. 1170). 1891.

Simocybe festiva KARST. Hattsv. 1 : 416. 1879.

Naucoria festiva BRES. Fung. Trid. 1 : 19, pl. 22. 1882; Icon. Myc. 16 : pl. 792. 1930—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 829. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 771. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 152. 1893; Brit. Fungi, 278. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 155. 1908—RICKEN, Blätterp. 214. 1915.

(川村, 日. 菌. 図鑑, 5 : 530, f. 521. 1954)

Hylophila festiva QUÉL. Enchir. Fung. 100. 1886.

子実体は群生; 傘は径 2—5 cm, 円錐形にて鋭頭中丘ありて陣笠状となる, 稀に鈍頭; 表面は湿時やや粘性, 色変化性に富み, 帯緑黄褐色, オリーブ緑色にて往々暗褐色或は栗褐色等を呈す, 放射状密着繊維あり, 平滑; 肉は白色, 中盤厚し; 褶は凹入離生, 初めほぼ白色, のち黄褐色, 遂に赭褐色, 密, 広幅, 便腹状, 稜に白房毛あり; 茎は 5—9×0.4—0.8cm, 同幅, 基部やや太くして偽根を有す, 色は変化し, 帯オリーブ白色, 縦走する褐色の繊維を被むる, 平滑, 中空; 胞子は殆ど扁桃形, 粗面, 6—8×4—5μ; 胞子紋は銹褐色; 稜嚢体は糸状。

所 在 及 産 地

針葉樹林地草間—秋　本州—欧

和 名　カワムラジンガサタケ (川村陣笠茸)
ジンガサタケ (陣笠茸) 〔川村〕 (異物先名あり)

Phaeocollybia christinae (FR.) HEIM

ナメニセムクエタケ

HEIM, Genre Inocybe, 72. 1931; Champ. Eur. 2 : 392. 1957—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 163. 1948—SINGER, Agaricales, 566. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 325. 1953.

Agaricus Christinae FR. Epicr. Myc. 192. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 365. 1857; Hymen. Eur. 254. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 477. 1844—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 130. 1876.

Simocybe Christinae KARST. Hattsv. 1 : 417. 1879.

Naucoria Christinae QUÉL. Champ. Jura Vosg. Suppl. 9 : 158. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 829. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 766. 1916—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 524. 1912—RICKEN, Blätterp. 215. 1915—MURRILL, N. Am. Fl. 10 : 173. 1917—BERSADOLA, Icon. Myc. 16 : pl. 793. 1930—HEIM, Bull. Soc. Myc. Fr. 46 : Atlas 38. 1900—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 249. 1938—LANGE, Agar. Denm. 12 : 14. 1938; Fl. Agar. Dan. 4 : 16, pl. 123, f. D. 1939.

(原, 日. 菌. 目. 221. 1954)

Hylophila Christinae QUÉL. Enchir. Fung. 100. 1886.

子実体は群生; 傘は径 1.5—3 cm, 円錐形にて著しき鋭頭の中丘を存し陣笠状をなし, のち開張す; 表面は湿潤, 湿時僅か粘性, 鮮赤褐色或は火焔色, 周辺往々急激に濃暗肉桂色を呈す, 中央に放射状線を有す, 縁は初め内屈し, のち開張, 往々裂片となる; 肉は薄く, 帯黄色或は傘面とほぼ同色, 味温和, 臭強し; 褶は殆ど離生, 淡黄色, のち帯紅肉桂色, 密, 甚だ狭幅, 寧ろ薄し; 茎は 6—10×0.3—0.5 cm, 同幅或は下方に狭細, 長き主根状偽根に伸長す, 汚赤褐色, 上部淡色, 無毛, 甚だ強靱, 時に縦裂す, 中空; 胞子は扁桃形, 微疣あり, 淡黄色, 8—10×4.5—6μ; 胞子紋は肉桂色; 稜嚢体は糸状。

所 在 及 産 地

針葉樹林内蘚間地上—秋　北海道—欧. 北米

和名　ナメニセムクエタケ (滑贋むく柄茸) 〔今井〕

Galerina EARLE

ケコガサタケ属

EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5 : 423. 1909—SINGER, Agaricales, 569. 1949.

Agaricus trib. *Galera* FRIES, Syst. Mycol. 1 : 264. 1821.

Galera QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 135. 1872(non BLUME, Bijdr. 415. 1825, Orchid.)

Galerula KARSTEN, Hattsv. 1 : 442. 1879. pr. p.

子実体は通常クヌギタケ (*Mycena*) 型なるも往々エノキタケ (*Collybia*) 或はヒダサカズキタケ (*Omphalia*) 型にて往々普通よりも肉質にて能く発達せる被膜を有す; 傘は通常多少吸水性にて幼時通常鐘

形或は円錐形, 時に半円形或は白玉鍵形, 上表皮層は匍匐菌糸よりなり，皮嚢体は稀に存することあるも通常欠如し，表皮層に球形細胞を存せず；色素は膜を被い，蜜色～栗褐色，渋色，帯褐淡黄色等にて稀に緑色，青色或は赤色なり；褶は狭生～垂生，通常白房毛あり；胞子紋は多少濃き銹色；胞子は蜜色～帯銹黄褐色，アルカリ液にて濃銹色となる，稀に平滑，通常種々なる突起を有す，膜は明かに複雑，発芽孔なきも，往々明かなる乳頭及び胞子盤あり，稀にこれを欠く，この場合には菌絆なし；担子柄は正常なるも，4或は2胞子，更に1或は3胞子のもの等あり；嚢状体は屡々存在し，或種に於ては常に褶側嚢体を有し，他種にては只稜嚢体のみを有す，但し後者は欠如することなし；托実質は整型或は類整型；子実脚層は僅か発達す；茎は蜘網膜片の痕跡を有し，稀に実際的には欠如，屡々膜質にて通常類白色の明なる鍔を有す；皮嚢体は多くは欠如；菌糸体は類白色にて密蘚中に多く，植物残屍，腐蝕質，芝生，砂地等に生ず；半被実；北温帯に多し，約 20 種を知らる.

（本属名は Galera（属名）即ち galerum〔羅〕（帽子）より出づ）

基準種 *G. rubiginosa* (PERS. ex FR.) KÜHNER

本邦既知種検索表

A. 菌糸に菌絆なし，胞子膜は薄く，胞子盤なし；傘は径 0.8—3cm，黄土色～黄褐色；茎は蜜黄色；胞子は 9—15×5.5—7μ，微細粗面；稜嚢体は下部便腹状にて頸あり，先端球嚢あり；冬季蘚間に生ず。

フユノコガサタケ ***G. clavata*** (414)

B. 傘及茎の皮層菌糸に菌絆を有す；胞子の内膜は屡々明かに認められ，屡々胞子盤を存す；褶側嚢体は欠如或は稀生.

a. 水蘚間に生ず.

α. 傘は熟時中央圧低され，稀に中丘あるのみ，径 1～2cm，帯紫褐色或は灰褐色；茎は暗紫褐色，上部に不完全なる鍔を有し，白色綿絮鱗片を存す；嚢状体は褶側及稜に存し球嚢なし；胞子は 7—7.5×5.5μ.

ネズミミズゴケタケ ***G. stagnina***(415)

β. 傘は圧低されずして中丘あり，前種の如く汚色ならず；嚢状体は褶稜のみに存す；鍔なし。

I. 稜嚢体は細頸壜形にて球嚢を有し脛骨状；傘は径 1—3cm，蜜色～黄土褐色；茎は淡黄土色；胞子有疣，9.5—10.5×5—6μ。

ミズゴケタケ ***G. tibiicystis*** (415)

II. 稜嚢体は円筒形～紡錘形或は幾分壜形にて球嚢なし；傘は径 1.5—3.5cm，蜜色或は褐黄色；茎は同色；胞子は 9.5—12×5.5—6.5μ.

ミズゴケタケモドキ ***G. sphagnorum***(416)

b. 通常水蘚ならざる蘚間に生ず；胞子は永存的の外被（外套膜）を有す；傘は径 0.4—1.5cm，先端渋色，周辺黄土色；茎は同色；胞子 10—12×5.5—6.5μ。

ヒメコガサタケ ***G. hypnorum*** (416)

C. 褶側嚢体は常に存在す；菌絆常に存す，被膜は屡々よく発達して鍔を作り，或は茎嚢体ありて茎は産毛を被むる，或は両者なく，褶側嚢体はアセタケ型；水蘚間に生ぜず。

a. 褶嚢体は薄膜にてアセタケ型ならず。

α. 茎上の産毛はレンズ下にて著し；傘は径 0.7—1.7cm，黄土褐色；茎は同色，鍔なし；4或は2胞子形あり。

ケコガサタケ ***G. rubiginosa***(417)

β. 茎上に産毛なく鍔よく発達す。

I. 傘は径 1—7cm，栗褐或は肉桂褐色；褶はむしろ狭幅；茎は傘と同色；胞子 7—10×4.5—6μ。

ヒメアジロガサタケ ***G. marginata***(418)

II. 前者より小形にて傘径 0.5—3cm，淡肉桂色～黄土橙色；褶はむしろ広幅；茎は傘とほぼ同色；胞子 7.5—10×5—6μ。

ヒメイチメガサタケ ***G. unicolor***(419)

b. 褶側嚢体は厚膜微凸頭にて結晶を冠り，アセタケの嚢状体を想起せしむ；傘は径 0.6—1cm，銹色，縁の方黄土色；茎は圧着繊維あり；2胞子，11—13.5×6—7.5μ。

ヒナコガサタケ ***G. nana*** (419)

Galerina clavata (VELEN.) KÜHNER

フユノコガサタケ

KÜHNER, Gen. Galera, 171, f. 56. 1935—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 173. 1948—SINGER, Agaricales, 571. 1949—HONGO, Jour. Jap. Bot. 31 : 149, f. 2, h-j. 1956.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，75, f. 189, pl. 33, f. 189. 1957）

Galera fragilis VELEN. var. *clavata* VELEN. Ceské Houby, 548. 1921.

Galera hypnorum var. *macrospora* R. MAIRE, Bull. Soc. Myc. Fr. 44 : 49. 1928.

Galera clavata LANGE, Fl. Agar. Dan. 4 : 40, pl. 130, f. B. 1939—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 318. 1953.

子実体は散生或は群生；傘は径 0.8—3 cm，初め円錐形にて円頭或は鈍き中丘あり，のち鐘状丸山形～丸山状扁平となり，鈍頭；表面は吸水性，黄土色～黄褐色，乾時淡褐となる，屢々頂部迄著しき放射線条あり，無毛；肉は薄く，傘にては白色，茎にては褐色，臭なく，味温和；褶は直生，黄土黄色，時に美なる蠟黄色，疎，甚だ広幅，便腹状；茎は 3—7×0.07—0.2cm，同幅，多少撓曲，蜜黄色，上部粉状，他は無毛或は蜘網残物を存し，基部に殊に著し，蜘網膜は繊弱にて消失性，中空，むしろ脆し；胞子は卵状楕円形～長楕円形，微細粗面，胞子盤なし，9—15×5.5—7μ；担子柄は 22—34×4—8μ，4 胞子；稜嚢体は束生，27—51×7—14μ，下部便腹状，上部短き或は長き頸状に伸び，通常先端頭状にて径 4—6.5μ，皮嚢体は同形，褶側嚢体なし，菌糸に菌絆なし。

所在及産地

蘚苔間—晩秋～春　　　本州—欧

和名　フユノコガサタケ（冬小笠茸）〔本郷〕

Galerina stagnina (FR.) KÜHNER

ネズミミズゴケタケ

KÜHNER, Gen. Galera, 187, f. 61. 1935—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 173. 1948; 2 : 169. 1952—SINGER, Agaricales, 571. 1949.

Agaricus stagninus Fr. Syst. Myc. 1 : 268. 1821; Epicr. Myc. 209. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 396. 1857; Hymen. Eur. 273. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 471. 1844—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 134. 1876—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 187. 1883; Illus. Brit. Fungi, 4 : pl. 468(no. 530). 1886—WINTER, Pilze, 1 : 663. 1884.

Galera stagninus QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1 : 137. 1872; Enchir. Fung. 105. 1886—RICKEN, Blätterp. 226. 1915—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 320. 1953.

Tubaria stagnina GILL. Champ. Fr. 539. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 445. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 873. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 788. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 124. 1893; Brit Fungi, 286, pl. 19, f. 5. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 166. 1908—REA, Brit. Basid. 439. 1922—KOBAYASI, Sci. Res. Ozegahara Moor, 555, f. 2, pl. 1, f. 4. 1954.

Naucoria stagnina P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 250. 1900.

子実体は孤生；傘は径 1—2 cm，丸山形～開張，のち中央圧低され，稀に中丘を存す；表面は幾分粘性にて吸水性，帯紫褐色或は灰褐色，中央以外に線条あり，縁は真直，鋸歯状をなし，幼時周縁に白色綿架状ベールの残片を存す；肉は薄く，傘面と同色，無味無臭；褶は直生，或は幾分垂生し，灰褐色，やや疎，広幅，稜は殆ど全縁にて粉状；茎は 4—6×0.12—0.2 cm，同幅にて基端肥大，暗紫褐色，白色綿架鱗片を有し，線条あり，捩曲，繊維状，中空；鍔は上位，小形，膜質，帯褐色，消失性；胞子は卵形或はレモン形，平滑，灰褐色，7—7.5×5.5μ；担子柄は 2 或は 4 胞子；褶側嚢体は散生，壜形にて円筒状頸を有し，無色，50—55×12—15μ，頸部径 4—5μ，稜嚢体は叢生，壜形にて短頸を有す。

所在及産地

泥炭地水蘚間—夏秋　　　本州—欧

和名　ネズミミズゴケタケ（鼠水蘚茸）〔小林〕

Galerina tibiicystis (ATK.) KÜHNER

ミズゴケタケ

KÜHNER, Gen. Galera, 176, f. 57—58. 1935—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 73. 1948—SINGER, Agaricales, 571. 1949—HONGO, Jour. Jap. Bot. 30 : 219, f. 2(8—9). 1955.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，74, f. 186, pl. 33, f. 186. 1957）

Galerula tibiicystis ATKINS. Proc. Am. Phil. Soc. 57 : 365. 1918—A. H. SMITH, Pap. Mich. Acad. Sci. Arts. Lett. 20 : 176, pl. 30, f. 1. 1934.

Galera sphagnorum KONR. et MAUBL. Icon. Sel. Fung. 2 : pl. 173, f. 2. 1932—LANGE, Fl. Agar. Dan. 4 : 38, pl. 130, f. E. 1939—KOBAYASI, Sci. Res. Ozegahara Moor, 554, f. 1, pl. 1, f. 3. 1954.

Galera tibicystis ATK.-KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 319. 1953.

子実体は散生或は群生；傘は径 1—3 cm，円錐形～鐘状丸山形，時に開平す，円錐状の広き中丘を有す；表面は吸水性，蜜色～黄土褐色，湿時透明線条あり，乾時線条なく淡黄土色となる，無毛，縁は真直，幼時房毛を存す；肉は薄く，傘面と同色，無味無臭或は弱臭にて味温和；褶は彎状直生，幼時褐色，老時肉桂褐色，広幅，やや疎，便腹状，稜に白色綿架あり；茎は 5—10×0.2—0.3cm，同幅，基部僅か肥大，淡黄土色，初め分散せる繊維に蔽わるるも速に無毛となり，粉状，脆く，中空；胞子は楕円状扁桃形，有疣，plage は不明，KOH 液中にて帯銹黄褐色，9.5—10.5×5—6μ；担子柄は 22—31×8—11

μ, 4 胞子；稜嚢体は密生，幾分壜形或は狭紡錘形にて円筒状頸を有し先端に球頭（径 3.5—5μ）ありて脛骨状をなす，薄膜，無色，30—48×3—10.5μ；菌糸に菌絆あり。

所在及産地

ミズゴケ（*Sphagnum*）間—秋

本州—欧．北米

和名 ミズゴケタケ（水蘚茸）〔小林〕

Galerina sphagnorum (PERS. ex FR. em. ATK.) KÜHNER

ミズゴケタケモドキ

KÜHNER, Gen. Galera, 179, f. 59. 1935—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 173. 1948—SINGER, Agaricales, 571. 1949—HONGO, Jour. Jap. Bot. 30 : 219, f. 2 (8-9). 1955.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，74, f. 187, pl. 33, f. 187. 1957）

Agaricus Hypnorum var. *Sphagnorum* PERS. Syn. Meth. Fung. 386. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1 : 267. 1821; Epicr. Myc. 207. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 394. 1857; Hymen. Eur. 270. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 472. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 134. 1871; Illus. Brit. Fungi, 4 : pl. 465, f. b. (no. 523). 1886—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 133. 1876—WINTER, Pilze, 1 : 666. 1884.

Agaricus sphagnorum LASCH, Linnaea, 3 : 417. 1828.

Galera Hypnorum var. *Sphagnorum* GILL. Champ. Fr. 551. 1874—QUÉLET, Enchir. Fung. 107. 1886—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 149. 1893; Brit. Fungi, 284. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 164. 1908—REA, Brit. Basid. 411. 1922.

Galera sphagnorum KARST. Hattsv. 1 : 441. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 869. 1887—BRESADOLA, Icon. Myc. 17 : pl. 813. 1931—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 319. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 396, f. 267, B. 1957 (non KONRAD & MAUBLANC (1932), LANGE (1939))

Derminus hypni var. *Sphagnorum* SCHROET. Pilze Schles. 1 : 580. 1889.

Conocybe Sphagnorum MURR. Mycologia, 4 : 248. 1912.

Galerula sphagnorum MURR. N. Am. Fl. 10 : 167. 1918—ATKINSON, Proc. Am. Phil. Soc. 57 : 1918.

子実体は散生或は群生；傘は径 1.5—3.5 cm，丸山形～鐘状半球形，中丘あり；表面は吸水性，蜜色或は褐黄色，中央暗色，無毛，透明線条ありて僅か溝状，乾時微かに存す，縁は歯状をなし幼時ベールの残物を存するも速に消失す；肉は薄く，傘面と同色，無臭或は弱臭，味は微或は粉状；褶は直生或は垂下歯を有し，傘面と同色，或は黄土色，やや密，広幅，稜に白色綿絮あり；茎は 4—10×0.15—0.3 cm，殆ど同幅，傘面と同色，微細繊維あり，無毛，粉状，中空；胞子は幾分扁桃形，平滑，plage あり，9.5—12×5.5—6.5μ；担子柄は 22—30×8.5—9.5μ, 4 胞子；稜嚢体は密生，円筒形～紡錘形，或は幾分壜形，鈍頭或は円頭，薄膜，無色，32—50×8—10.5 μ；菌糸に菌絆あり。

所在及産地

ミズゴケ（*Sphagnum*）間—秋

本州—欧．北米

和名 ミズゴケタケモドキ（擬水蘚茸）〔本郷〕

Galerina hypnorum (SCHRANK ex FR.) KÜHNER

ヒメコガサタケ

KÜHNER, Gen. Galera, 194, f. 64—65. 1935—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 174. 1948—SINGER, Agaricales, 572. 1949—HONGO, Bull. Facul. Lib. Arts Sci. Educ. Shiga Univ. 5 : 58, f. 1, D, E. 1956.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，74, f. 188, pl. 33, f. 188. 1957）

Agaricus hypni BATSCH, Elench. Fung. Cont. 1 : 117, pl. 19, f. 96. 1786.

Agaricus hypnorum SCHRANK, Baiersche Fl. 2 : 605. 1789—PERSOON, Syst. Meth. Fung. 385. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1 : 267. 1821; Epicr. myc. 207. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 394. 1857; Hymen. Eur. 270. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 472. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 163. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 171. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 134. 1871; Illus. Brit. Fungi, 4 : 465, f. a (no. 523). 1886; Handb. Austr. Fungi, 56. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 133. 1876—WINTER, Pilze, 1 : 665. 1884.

Galera hypnosum QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1 : 137. 1872; Enchir. Fung. 107. 1886—GILLET, Champ. Fr. 551, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 441. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 228. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 868. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 149. 1893; Brit. Fungi, 284. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 170. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 164. 1908—RICKEN, Blätterp. 229, pl. 60, f. 8. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 501. 1918—BRESADOLA, Icon. Myc. 17 : pl. 811. 1931—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1 : 129. 1934—LANGE, Fl. Agar.

Dan. 4 : 39, pl. 130, f. A. 1939—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 177, pl. 68, f. 4. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 319, f. 399. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 396, f. 80(9). 1957. (non KONRAD & MAUBLANC, 1932, REA, ATKINSON)

Derminus hypni SCHROET. Pilze Schles. 1 : 579. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 241, f. 117, B. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 436. 1912.

Conocybe hypnorum MURR. Mycologia, 4 : 75. 1912.

Galera hypni SACC. Fl. Ital. Crypt. Hymen. 782. 1916.

Galerula Hypni MURR. N. Am. Fl. 10 : 163. 1917.

Galera subhypnorum ATK. Proc. Am. Phil. Soc. 57 . 363. 1918.

子実体は散生或は群生；傘は径 4—5mm, 高さ 3—9mm, 円錐状鐘形～丸山形, 鈍頭或はやや乳頭あり；表面は無毛, 吸水性, 先端渋色, 周辺淡色にて黄土色, 透明線条あり, 乾時淡色にて不透明となる；肉は薄く, 膜質, 殆ど同色, 脆く, 臭なし；褶は上昇直生, 疎, 広幅, 便腹状, 淡黄土色, のち肉桂色, 稜に白色房毛あり；茎は 2—3.5×±0.1 cm, 同幅或は基部太く, 傘面と同色, 頂部特に粉状, 真直或は撓曲, 管状；胞子は扁桃形, 銹黄色, 1 油球を含み, 外面に外套膜あり, 10—12×5.5—6.5 μ, 稀に 12.5×7μ；担子柄は 25—29×7—9μ, 4 胞子；稜嚢体は密生し, 22—47×5—8.5 μ, 円筒形, 通常下部便腹状となり, 無色, 薄膜。

所在及産地

蘚苔間—春・秋・冬　　本州—欧・北米・濠・亜(西比)

和名 ヒメコガサタケ（姫小笠茸）〔本郷〕

Galerina rubiginosa (PERS. ex FR.) KÜHNER

ケコガサタケ

KÜHNER, Gen. Galera, 200, f. 66. 1935—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 174. 1948—SINGER, Agaricales, 572. 1949—HONGO, Bull. Facul. Lib. Arts Sci. Educ. Shiga. Univ. 5 : 58, f. 2, A-C. 1956.

（松田及本郷, 31 : 199. 1956—今関及本郷, 原色日．菌．図鑑, 75, f. 190, pl. 33, f. 190. 1957）

Agaricus rubiginosus PERS. Syn. Meth. Fung. 385. 1801—FRIES, Epicr. Myc. 206. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 394. 1857; Hymen. Eur. 269. 1874—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 170. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 185. 1883; Illus. Brit. Fungi, 4 : pl. 464, f. b. (no. 522). 1886(?)—WINTER, Pilze, 1 : 666. 1884.

Agaricus hypnorum var. *rubiginosus* FR. Syst. Myc. 1 : 267. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 472. 1884.

Galera rubiginosa GILL. Champ. Fr. 552, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 440. 1879—QUÉLET, Enchir. Fung. 106. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 868. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 781. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 148. 1893; Brit. Fungi, 284. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 164. 1908—REA, Brit. Basid. 410. 1922—LANGE, Fl. Agar. Dan. 4 : 39, pl. 130, f. c. 1939—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 319. 1953.

Derminus hypni var. *rubiginosus* SCHROET. Pilze Schles. 1 : 579. 1889.

Derminus rubiginosus P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 241. 1900.

Galera vittaeformis RICKEN, Blätterp. 329. 1915—HEIM, Champ. Eur. 2 : 396, f. 267, A. 1957.

Galera hypnorum ATK. Proc. Am. Phil. Soc. 57 : 360. 1918.

Galera hypnorum REA, Brit. Basid. 410. 1922.

〔四胞子形〕

子実体は散生或は群生；傘は径 7—17 mm, 或はそれ以上に及び, 円錐形, のち丸山形, 屢々鈍き中丘あり；表面は無毛, 吸水性, 黄土褐色, 周辺淡色, 湿時先端まで殆ど透明線条あり, 乾時淡色不透明となる, 縁は全縁或は僅か鋸歯状；肉は薄く, 類膜質, 脆く, 臭弱く, 味なし；褶は上昇直生, 疎, やや便腹状, 幅 1.5—4mm, 淡黄土色, のち肉桂色, 稜に房毛あり；茎は 2.5—5×0.08—0.12 cm, 同幅, 屢々撓曲, 上部傘面と同色, 下部暗銹色, レンズ下にて微細産毛あり, 軟骨質, 管状；胞子は類扁桃形, 粗面, 銹色, 臍盤を有す, 8.5—10×5.5—6.5μ；担子柄は 26—30×6—7.5μ, 4 胞子；稜嚢体は叢生, 便腹紡錘形, 薄膜, 無色, 45—57×7.5—13μ；褶側嚢体は常に存し散生, 稜嚢体に同じ；茎嚢体は 40—70×9.5—13μ；菌絆を有す。

所在及産地

蘚苔類間—春～秋　　本州—欧・北米

和名 ケコガサタケ（毛小笠茸）〔本郷〕

〔二胞子形〕

Galerina muricellospora (ATK.) KÜHNER, Gen. Galera, 203. 1935=*Galera muricellospora* ATK. Proc. Am. Phil. Soc. 57 : 360. 1918.

子実体は群生或は散生；胞子は長扁桃形, 粗面, 銹色, 内側に臍盤あり, 11—13×6.5—7.5 μ 或は 10—12.5×6—7μ；担子柄は 22—28×6—7.5μ, 2

胞子；稜囊体は叢生，褶側囊体は散生，35—66×8.5—14μ，紡錘形にて長頸を有し，薄膜，無色；茎囊体は 35—85×8.5—16μ；菌絆を有す。

所在及産地

蘚間—春　　本州—北米・欧

Galerina marginata (BATSCH ex FR.) KÜHNER

ヒメアジロガサタケ

KÜHNER, Gen. Galera, 225, f. 75. 1935—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 175. 1948—SINGER, Agaricales, 572. 1949—HONGO, Bull. Facul. Lib. Arts. Educ. Shiga Univ. 5 : 59, f. 2, D. E. 1956.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，75, f. 191, pl. 33, f. 191. 1957）

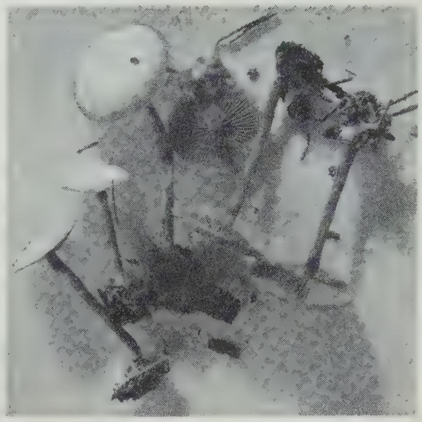
Agaricus marginatus BATSCH, Elench. Fung. Cont. 2 : 65, pl. 37, f. 207. 1789—FRIES, Epicr. Myc. 169. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 319. 1857; Hymen. Eur. 225. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 151. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 109. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3 : pl. 372(no. 403). 1886; Handb. Austr. Fungi, 45. 1892—WINTER, Pilze, 1 : 696. 1884.

Pholiota marginata QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1 : 127. 1872—GILLET, Champ. Fr. 436. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 305. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 164. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 758. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 679. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 609. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 229. 1893; Brit. Fungi, 260. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 251. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 151, f. 147. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 130. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2 (2) : 538, pl. 108, f. 3—4. 1912—HARPER, Trans. Wisc. Acad. Sci. Arts. Lett. 17 : 496, f. 55-56. 1913—RICKEN, Blätterp. 200, pl. 56, f. 7. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 311. 1918—LANGE, Agar. Denm. 4 : 10, f. 16. 1921; Fl. Agar. Dan. 3 : 59, pl. 109, f. B. 1938—REA, Brit. Basid. 123. 1922—OVERHOLT, N. Am. Fl. 10 : 273. 1924; Ann. Missouri Bot. Gard. 14 : 132, pl. 14. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 15 : pl. 704. 1930—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 1 : 104. 1934—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 198. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 148, pl. 54, f. 3. 1950.

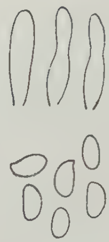
（原，日．菌．目．250. 1954）

Dryophila marginata QUÉL. Enchir. Fung. 69. 1886.

Galera marginata KÜHN. in KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 321. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 56, A. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2 : 397. 1957.



a



b

c

第 186 図　ヒメアジロガサタケ
Galerina marginata
a. 子実体 ×2/3　b. 稜囊体　c. 胞子 ×500
（大谷氏）

子実体は群生；傘は径 1.5—4 cm，円錐状丸山形～広丸山形，のち開張し，鈍頭或は僅か中丘あり；表面は無毛，粘性ならず，吸水性，黄土淡色，周辺淡色，乾時不透明にて淡黄土色となる，縁は湿時透明線条あり，全縁或は僅か鋸歯状；肉は薄きか或は中盤中位に厚く，やや同色，臭は弱く，味なし；褶は直生～狭生，速に分離す，やや疎，淡黄土色，のち肉桂色，稜は全縁或は僅か崩壊し，幅 2—5mm；茎は 2—5×0.1—0.3 cm，同幅或は基部多少太く，鍔より上部は蜜色にて粉状，下方は暗褐色にて圧着纖維状，中空，基部白綿状菌糸に被わる；鍔は膜質，上位，帯黄白色～黄土色，むしろ消失性；胞子は楕円状卵形，微粗面，内側に胞子盤あり，黄銹色，(7.5) 8.5—9.5(10.5)×5—6μ，担子柄は 14—28×6—8.5μ，4 胞子；稜囊体は密生，31—64×6.5—13.5μ，便腹紡錘形，長頸を有し，薄膜，無色；褶側囊体は稜囊体に同じ；菌糸は菌絆を有す；可食。

所在及産地

針葉樹腐木，落葉枝上—全季

北海道，本州―欧．北米．濠．亜(小亜，西比)
和名　ヒメアジロガサタケ(姫網代笠茸)〔今井〕

Galerina unicolor (VAHL ex FR.) SING.

ヒメイチメガサタケ

KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 175. 1948—SINGER, Agaricales, 572. 1949.

Agaricus unicolor VAHL, Fl. Dan. 18 : 7, pl. 1071, f. 1. 1792—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 273. 1801—FRIES, Epicr. Myc. 170. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 320. 1857; Hymen. Eur. 225. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 149. 1883; Illus. Brit. Fungi, 3 : pl. 356, f. b (no. 404). 1886—WINTER, Pilze, 1 : 696. 1884.

Pholiota unicolor GILL. Champ. Fr. 436, c. ic. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 7 : 50. 1879—KARSTEN, Hattsv. 1 : 305. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 165. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 759. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 679. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 609. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 230. 1893; Brit. Fungi, 260. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 251. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 130. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 538. 1912—RICKEN, Blätterp. 200, pl. 56, f. 4. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 311. 1918—LANGE, Agar. Denm. 4 : 10, f. 17, 1921; Fl. Agar. Dan. 3 : 59, pl. 109, f. A, A'. 1938—REA, Brit. Basid. 123. 1922—OVERHOLTS, N. Am. Fl. 10 : 273. 1924; Ann. Missouri Bot. Gard. 14 : 134. 1927—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1 : pl. 73, f. 1. 1929—BRESADOLA, Icon. Myc. 15 : pl. 705, f. 1. 1930—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 199. 1938.

(原，日．菌．目．251．1954)

Dryophila unicolor QUÉL Enchir. Fung. 69. 1886.

Galera marginata f. *unicolor* KÜHN. et ROMAGN. Fl. Anal. Champ. Super. 321. 1953.

Galera unicolor HEIM, Champ. Eur. 2 : 398, f. 268, A. 1957.

子実体はやや叢生或は群生；傘は径 0.5—3 cm，鐘形～円錐状鐘形或は幾分丸山形，屢々やや鋭き中丘を存す；表面は吸水性，淡肉桂色，黄土色或は黄土橙色，無毛，縁は密に線条或は溝あり；肉は薄く，傘面と同色，味は幾分穀粉様，臭は土臭様；褶は直生，屢々傘の開張によりて幾分離生となる，傘面とほぼ同色，密，形やや三稜形をなす；茎は 2.5—5×0.2—0.4 cm，同幅，傘面とほぼ同色或は基部黒褐色，鍔より上部は明かに綿架状粉末を有し，下部は繊維状，基部に白軟毛あり，中空；鍔は永存し，中位或は上位，直立し，漏斗形，淡色；胞子は卵形或は橢円形，平滑或は成時僅か粗面，胞子盤を有す，7.5—10×5—6μ；胞子紋は濃黄土色；褶側嚢体は稀生，稜嚢体は多生，細頸壜形，先端尖り，50—75×10—14μ。

所在及産地

腐木上—夏秋　北海道—欧．北米．亜(小亜)

和名　ヒメイチメガサタケ(姫市女笠茸)〔今井〕

Galerina nana (PETRI) KÜHNER

ヒナコガサタケ

KÜHNER, Gen. Galera, 219, f. 73. 1935—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 175. 1948—SINGER, Agaricales, 572. 1949—HONGO, Bull. Fac. Lib. Arts Educ. Shiga Univ. 7 : 44, f. 3, A-C. 1957.

Naucoria nana PETRI, N. Giron. Bot. It. 10 : 357. 1903; Ann. Mycol. 2 : 9. 1904.

Inocybe Whitei VELEN. Ceske Houby, 371, pl. 63, f. 8. 1920. (non BERK. et Br.)

Galerula Velenovskyi KÜHNER, Bull. Soc. Myc. Fr. 50 : 72, pl. 50. 1934.

Galera nana LANGE, Fl. Agar. Dan. 4 : 41, pl. 127 H. 1939—PEARSON, Trans. Brit. Myc. Soc. 26 : 48. 1943—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 320. 1953.

子実体は散生或は叢生；傘は径 6—10 mm，鈍円錐形～丸山形，のち開張して扁平，屢々小なる鈍頭の小丘を有す；表面は無毛，吸水性，銹色或は中央帯褐黄土色，縁の方黄土色，中盤迄透明線条あり，乾時淡色にて不透明となる；縁は殆ど全縁；肉は薄く，柔軟，表面と同色，臭は微，味なし；褶は直生～僅か垂生，疎，水平，便腹状，幅 1.5—2mm，黄土色～帯黄土銹色，縁は僅か房毛あり；茎は 1.5—3×0.07—0.1 cm，同幅，やや波曲，暗銹色(上方淡色或は黄土色)，下半部は絹糸状白色繊維に包まれ，先端粉状，管状；胞子は鏡下にて帯黄銹色，11—13.5×6—7.5μ(或は 10.5—12.5×5.5—6.5μ)，扁桃形～卵状紡錘形，粗面，臍上盤あり；紋は褐色；担子柄は 2 胞子，21—25×7—8μ；褶側嚢体は散生，32—55×12.5—15.5μ，類紡錘形～便腹状にて幾分膨大せる円形にて結晶ある先端を有し，厚膜，無色；稜嚢体は群生，褶側嚢体は同様或は狭幅，40—60×8—11.5μ；菌絆あり。

所在及産地

地上，針葉樹枯木上—春　本州—欧

和名　ヒナコガサタケ(姫小傘茸)〔本郷〕

〔因記〕アセタケ(*Inocybe*)型の嚢状体を有するを特徴とす，但しアセタケのものは cresyl blue にて青色に染まるも，この種のものは赤紫色に染まり，

アンモニアにて硫黄色となる。

疑 問 種

Agaricus japonicus BERK. et. CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4 : 116. 1860 (MIQUEL, Prol. Fl. Jap. 392. 1867—白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 31. 1917; ed. 3. 13. 1927—原, 日. 菌. 目. 9. 1954) = *Galera japonica* SACC. Syll. Fung. 5 : 860. 1887. (松村, 植. 名鑑, 1 : 144. 1904—白井, 日. 菌. 目. 37. 1905; ed. 2. 253. 1917; ed. 3. 146. 1927—原, 日. 菌. 目. 131. 1954)

Phaeomarasmius SCHERFFEL

ヒメスギタケ属

SCHERFFEL, Hedwigia, 36 : 289. 1897—SINGER, Agaricales, 573. 1949.

Marasmiopsis P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 230. 1898.

Flammulaster EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5 : 435. 1909.

Epicorticium VELENOVSKY, Mykologia, 3 : 72. 1926.

子実体はエノキタケ—ホウライタケ (*Collybia-Marasmius*) 型にて屢々幾分ヒラタケ (*Pleurotus*) 状或は然らざればエノキタケ (*Collybia*) 状; 傘は非粘性にて吸水性よりは屢々非吸水性, 濃色 (黄褐赤色等) の被層の小点, 綿架或は鱗被を被むるか或は一様に類絨状, 又は穀粉状等にて, のち無毛となる; 上表皮層は柵状毛被, 菌糸鎖の先端は大部分皮嚢体状となるか, 或はその多くが甚だ短縮して表皮層状となり, 大部分色素に被わる; 傘は初め丸山形, 屢々半球形, 縁は屢々有溝; 褶は直生〜類離生, 疎, 或はやや疎, 稀にやや密, 常に生時稜は透明にてレンズ下に於て認めらる; 担子柄は正形にて屢々2胞子, 褶側嚢体なく, 稀に分散せる稜嚢体を稜より少し内部に存す; 稜嚢体は常に存在し著し; 胞子紋は銹色; 胞子は銹蜜色, 稀に殆ど無色, 常に完全に平滑, 乳頭あるも発芽孔なし, 膜は2重なるも厚からず, 形は種類及標品によりて変化し, 類腎臓楕円形〜扁桃楕円形, 或は楕円形〜楕円状円壔形, 或は幾分円筒形; 托実質は整型; 茎はむしろ細く, 或は中位に太く, 脆弱〜むしろ強固なるも真の軟骨質ならず, 僅か〜明かの被膜を有して, 多くの種類に於て鍔を作る; 偽根なし, 屢々僅か偏心生にて屢々材上生種に於ては比較的短し; 凡ての菌糸は菌絆を有す; 地上, 植物残屍, 落葉, 材木, 切株上, 或は広葉樹の生或は死幹上, 稀に蘚間に生ず; 多分常に半被実; 欧米及亜細亜産, 約16種を知らる, 経済的価値少し。

(本属名は phaios〔希〕(褐色), *Marasmius* (属名) より出づ)

基準種　*P. excentricus* SCHERFFEL

本邦既知種検索表

A. 傘は乾燥, 渋色, 小形直立刺状鱗片に密に蔽わる, 径 0.5—4 cm; 褶は黄土渋色〜肉桂色; 茎もまた鱗片状; 胞子 6—8×4—5μ; 稜嚢体は棍棒形。
　　ヒメスギタケ ***P. erinaceella***(420)

B. 傘は吸水性, 湿時帯赤肉桂色, 乾時渋色, レンズ下にて微細鱗片或は繊維を認む; 褶は赤褐色; 茎に鱗片なし; 胞子 6—8×4—5μ; 稜嚢体は糸状。
　　ヒメツツエタケ ***P. confragosus*** (421)

Phaeomarasmius erinaceella (PECK) SING.

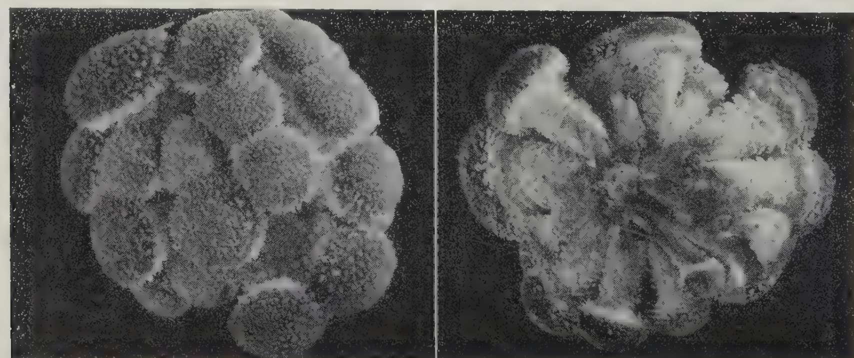
ヒメスギタケ

SINGER, Agaricales, 577. 1949.

Agaricus detersibilis PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 28 : 49. 1876. (non BERKELEY et CURTIS)

Agaricus erinaceellus PECK, Rep, N. Y. St. Mus. 30 : 70. 1878.

Pholiota erinaceella PECK, Bull. N. Y. St. Mus. 122 : 152. 1908—HARPER, Trans. Wisc. Acad. Sci. Arts Lett. 17 : 495, pl. 51. 1913—



第187図　ヒメスギタケ　Phaeomarasmius erinaceella　×1　(大谷氏)

KAUFFMAN, Agar. Mich. 303. 1918—OVERHOLTS, N. Am. Fl. 10 : 269. 1924; Ann. Missouri Bot. Gard. 14 : 161. 1927—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 196. 1938.

子実体は孤生～叢生；傘は径 0.5—4 cm，半球形，のち丸山形～殆ど扁平；表面は乾燥，渋色，鱗片に密に被わる，鱗片は微小，直立，ピラミッド形，棘状或は粒状にて渋色なり；褶は狭生或は直生，初め透明，のち黄土渋色或は肉桂色，密或はやや疎，稜は帯黄色にて微細鋸歯あり；茎は 1.5—4.5×0.1—0.5cm，同幅或は下方僅かに狭細，鍔より上部は平滑にて帯黄色，下部は多数の綿絮状鱗片或は粒を有し渋色，充塞或は中空；鍔は上位，綿絮状，早失性，茎面と同色；胞子は楕円形或はボート形，平滑，6—8×4—5μ；胞子紋は銹色；褶側嚢体なし，稜嚢体は棍棒形。

所在及産地

広葉樹枯幹上—夏　　北海道—北米

和名　ヒメスギタケ（姫杉茸）〔今井〕

Phaeomarasmius confragosus (FR.) SING.

ヒメツツエタケ

SINGER, Agaricales, 577. 1949.

Agaricus confragosus FR. Epicr. Myc. 169. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 318. 1857; Hymen. Eur. 224. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 148. 1883.

Pholiota confragosa KARST. Hattsv. 1 : 304. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 164. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 758. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 228. 1893; Brit. Fungi. 260. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 130. 1908—HARPER, Trans. Wisc. Acad. Sci. Arts Lett. 17 : pl. 41, d e. 1913—RICKEN, Blätterp. 201. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 310. 1918—REA, Brit. Basid. 122. 1922—OVERHOLTS, N. Am. Fl. 10 : 272. 1924—LANGE, Fl. Agar. Dan. 3 : 58. 1938.

（松浦，茸類辞典，158，f. 188. 1933；応用菌蕈学，f. 794 (1176). 1941—原，日．菌．目．250. 1954）

Dryophyla confragosa QUÉL. Enchir. Fung. 69. 1886.

子実体は叢生；傘は径 2—6 cm，丸山形～殆ど扁平；表面は吸水性，湿時帯赤肉桂色，乾時渋色，レンズ下にて密なる微細綿絮状鱗被或は纖維を認む，老時往々幾分剝げる，湿時縁辺に線条あり，縁は初め内屈す；肉は薄く，脆き肉質，淡色，味及臭著しからず；褶は直生或は僅か垂生，赤褐色，中位に密，狭幅，稜に白色鋸歯あり；茎は 3—8×0.2—0.4 cm，同幅或は基部肥大，傘面と同色或は淡色，鍔より上部は綿絮ありて往々線条を有し，下部は著しく纖維状にて基部往々白色毛を存し或は粗渋，充塞～中空；鍔は上位，膜質，開展，下面白色，稀に全く消失す；胞子は楕円形或は広楕円形，平滑，6—8×4—5μ；胞子紋は銹色；褶側嚢体なく，稜嚢体は放射状に叢生し，円筒形，基部時に便腹状，鈍頭。

所在及産地

広葉樹腐材上—夏秋　　本州—欧．北米

和名　ヒメツツエタケ（姫筒柄茸）〔松浦〕

Crepidotaceae (IMAI) SINGER　チャヒラタケ科

SINGER, Agaricales, 584. 1949.

Crepidoteae IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 238. 1938.

胞子紋は帯褐色～淡褐黄色；胞子は発芽孔なく，疣状の外被刻紋なし，胞子盤なく，内外膜の強き分化なく，何れの方向より見るも角形ならず；若し刻紋あれば，それは膜中に埋在する刺によるものにて外面よりは点状をなす，更に有刺のことあるもその際は胞子甚だ小形にて球形なり；子実体はヒダサカズキタケ～エノキタケ（*Omphalia*～*Collybia*）型，或はヒラタケ～カヤタケ（*Pleurotus*～*Clitocybe*）型，菌糸は菌絆を有し或はこれを欠く；通常の試薬は多く作用せずして，子実体に着色反応を起さず；托実質は両側型ならず；組織は往々1部膠化し，非糊性；ベールは薄き膜質乃至蜘蛛巣膜片状，或は欠如；褶は再三叉状に分岐す；稜嚢体は屢々存在するも褶側嚢体は全く存在せず；胞子は単核或は双核；種々なる植物残屍上，材上，腐蝕質上，耕土，砂土，深蘚中等に生ず。

SINGER 氏(1949) は4属を収む，本邦凡て之れを産す。

本科はフウセンタケ科（*Cortinariaceae*）とイッポンシメジタケ科（*Rhodophyllaceae*）との中間に位し，前科とは胞子の構造により，後科よりは角形ならざる胞子を有するにより区別さる。時にヒダハタケ属（*Paxillus*）とチャヒラタケ属（*Crepidotus*）と混乱さるることあるも托実質は全く異型なり。

本邦既知属検索表

A．子実体はカヤタケ（*Clitocybe*），エノキタケ（*Col-*

lybia) 或はヒダサカズキタケ (*Omphalia*) 状にて中心茎を有す。

a. 胞子は 5μ 以上，無刺にて平滑或は膜内に埋在短刺を有す，双核，エノキタケ (*Collybia*) 或はヒダサタズキタケ (*Omphalia*) 状。

チャムクエタケ属 **Tubaria**(422)

b. 胞子は前者より小形，有疣，単核；カヤタケ (*Clitocybe*) 状。

シロクモノスタケ属 **Ripartites**(423)

B. 子実体はヒラタケ (*Pleurotus*) 状にて無茎或は短き側茎を有す。

a. 胞子紋は黄土～銹色，平滑或は有疣，菌絆存在或は欠如。

チャヒラタケ属 **Crepidotus**(423)

b. 胞子紋は淡褐黄色或は僅か桃色を含む，平滑，菌絆欠如。

コナカブリタケモドキ属 **Pleurotellus** (429)

Tubaria (W. G. SMITH) GILL. em. SING.
チャムクエタケ属

GILLET, Champ. FR. 537. 1896—SINGER, Agaricales, 586. 1949.

Agaricus Subgen. *Tubaria* W. G. SMITH, Clavis Agar. 21. 1870.

子実体はヒダサカズキタケ～エノキタケ(*Omphalia*～*Collybia*)型；傘は吸水性，或は非吸水性，非粘性；表皮層は匍匐或は少くとも直立せざる菌糸より成る，何等の皮嚢体或は球嚢を有せず，毛被或は柵毛被を作らず，種類によりて細胞間隙或は膜を被覆する色素を有し，或は顆粒を含む；褶は狭生～垂生，寧ろ狭幅～屡々広幅；托実質は整型～類整型；胞子は不明瞭なる2重或は1重膜にて，平滑或は甚だ短かき埋在する刺を有し，平滑なる胞子は熟後速に頽廃し表面に皺を生ず，腎臓形～扁桃形，楕円形～殆どボート形，或は類球形，発芽孔，乳頭及び所謂胞子盤 (plage) なし，寧ろ小形 (但し 5μ 以上) ～中形(10μ より幾分長し)；胞子紋は帯褐色の種々なる色調を呈す；担子柄は正常なるも往々2胞子；嚢状体は褶側になく，稜には常に存在し，稜を異質或は殆ど異質とす；茎は中心生，傘径と等長或は屡々長し，被膜存在或は欠如，屡々存在し薄き膜質，白色或は類白色なり，甚だ稀に環帯を残す，仮根なし；肉の菌糸は菌絆を有す，種々なる死植物体，落果，落葉，材上，深蘚中，耕土，砂地上に生ず；半被実；多分汎布，約11種を知らる；経済関係なし。

(本属名は tuba〔羅〕(羅馬管楽器，喇叭) より出づ)

基準種 *T. furfuracea* (PERS. ex FR.) GILLET

本邦既知種

チャムクエタケ ***T. conspersa*** (422)

Tubaria conspersa (PERS. ex FR.) FAYOD
チャムクエタケ

KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1:176. 1948—SINGER, Agaricales, 588. 1949.

Agaricus conspersus PERS. Icon. Descr. Fung. 2 : 50, pl. 12, f. 3. 1800; Syn. Meth. Fung. 318. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1 : 260. 1821; Epicr. Myc. 201. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 383. 1857; Hymen. Eur. 264. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 474. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 130. 1871; Illus. Brit. Fungi, 4 : pl. 512, f. a. (no. 514). 1886—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 131. 1876—WINTER, Pilze, 1 : 671. 1884.

Naucoria conspersa QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1 : 133. 1872—GILLET, Champ. Fr. 543. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 443. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 226. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 854. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 762. 1916—SCHROETER, Pilze Schles. 1: 604. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 167. 1893; Brit. Fungi, 283. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl-fam. 1, 1**: 250. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 169. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 160. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 519, pl. 105, f. 3-4. 1912—REA, Brit. Basid. 359. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 16 : pl. 800, f. 2. 1930—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 250. 1938—LANGE, Agar. Denm. 12 : 19. 1938; Fl. Agar. Dan. 4:21, pl. 125. f. G. 1939—HEIM. Champ. Eur. 2 : 391. 1957.

(原，日．菌．目．221. 1954)

Hylophila conspersa QUÉL. Enchir. Fung. 103. 1886.

Naucoria subconspersa KÜHN.——KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 237. 1953.

子実体は孤生或は群生；傘は径 1.5—2.5 cm，類円錐形或は丸山形，のち殆ど扁平となる；表面は乾燥，赤褐色の鱗片或は粒によつて密に被われ，中盤の鱗片は長く，縁辺のものは微細なり，縁辺に線条なし；肉は甚だ薄く，臭は微かなる穀粉様；褶は上昇着生，のち彎入して離れ，便腹状，寧ろ広幅，傘縁に向つて狭細，やや密，粘土色～汚黄褐色，稜に白色鈍鋸歯あり；茎は 2.5—3×0.15—0.2 cm，同幅，殆ど肉桂色，纖維状，やや光沢あり，上部殆ど粉状，充塞或は中空；胞子は円墻形或は楕円形，帯黄色，6—8×3.5—4.5μ；胞子紋は粘土色；稜嚢体

は長洋梨形，広棍棒形或はやや頭状，無色。

所在及産地

湿土或は林内埋没腐木上—夏　北海道—欧

和名　チャムクエタケ（茶尨柄茸）〔今井〕

Ripartites KARSTEN
シロクモノスタケ属

KARSTEN, Hattsv. 1 : 477. 1879—SINGER, Agaricales, 589. 1949.

傘は帯白色～銹褐色或は粘土褐色，屢々圧着せる纎維状鱗片或は房毛ある縁を有す，僅か～甚しき強粘性，老時圧低され，内捲縁を有す，やや吸水性或は非吸水性；表皮層は毛状被或は子実層状の構造なく，皮嚢体及球嚢なし；褶は垂生或は直生；托実質はむしろ整型，幾分纒絡する菌糸より成るも一般に中軸状に配列す，菌糸は糸状；担子柄は甚だ小形，正常形；嚢状体は褶側に欠如するも稜嚢体は幾分発達す；胞子紋は淡赭褐色；胞子は顕微鏡下にて淡褐色，有疣，甚だ小形にて球形，両側不同，非糊性，発芽孔及乳頭なし，単膜，単核；茎は中心生或は殆ど中心生，良く発達す；ベールありて蜘網膜状或は薄膜状，成熟時明かなる跡を残さずに速に消失す；凡ての菌糸は菌絆を有し，非糊性，林内腐残屍，腐植土，砂土及蘚間に生ず；主に北半球温帯産，約4種を知らる，経済的関係なし。

（本属名は riparius〔羅〕（河岸生の）より出づ）

基準種　*R. tricholoma* (ALB. et SCHW. ex FR.) KARST.

本邦既知種

シロクモノスタケ　***R. tricholoma***(423)

Ripartites tricholoma
(ALB. et SCHW. ex FR.) KARST.
シロクモノスタケ

KARSTEN, Hattsv. 1 : 477. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 170. 1889—PATOUILLARD, Hymen. Eur. 118. 1887—KONRAD, Bull. Soc. Myc. Fr. 43 : 154. 1927; & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1 : pl. 83. 1928; Agaricales, 1 : 250. 1948—SINGER, Agaricales, 590. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 175, f. 243. 1953.—HEIM, Champ. Eur. 2 : 374. 1957.

（今関及土岐，林．試．研．報．79 : 3, f. 4. 1955）

Agaricus Tricholoma ALB. et SCHW. Consp. Fung. 188. 1805—FRIES, Syst. Myc. 1 : 270. 1821; Epicr. Myc. 184. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 350. 1857; Hymen. Eur. 236. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 479. 1844—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 122. 1876—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 160. 1883; Illus. Brit. Fungi, 3 : pl. 404, f. b. (no. 444). 1886—WINTER, Pilze, 1 : 688. 1884.

Flammula Tricholoma QUÉL. Champ. JuraVosg. 1 : 251. 1872—GILLET, Champ. Fr. 531, c. ic. 1874—REA, Brit. Basid. 322. 1922—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 172, pl. 66, f. 5. 1950.

Inocybe Tricholoma KALCHBR. Icon. Hymen. Hung. 34, pl. 20, f. 3. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 790. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 706. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 202. 1893—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 243. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 163. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 142. 1903—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 466, pl. 88, f. 1-2. 1912.

Paxillus tricholoma QUÉL. Enchir. Fung. 92. 1886—RICKEN, Blätterp. 97, pl. 28, f. 5. 1915—BRESADOLA, Icon. Myc. 14 : pl. 682. 1930.

Astrosporina tricholoma SCHROET. Pilze Schles. 1 : 577. 1889.

Paxillopsis tricholoma LANGE, Agar. Denm. 12: 57. 1938; Fl. Agar. Denm. 4 : 49, pl. 133, f. D, D′. 1939.

子実体は孤生或は群生；傘は径 1—3 cm，或はそれ以上に及び，丸山形～扁平，速に中央多少圧低され，遂に盃形となる；表面は湿時粘性，乾時光沢あり，繻子状纎維あり，白色～灰白色，擦傷により多少桃色となる，縁は薄く，内捲し，真直なる帯白色の瞼毛状剛毛を有す，この毛は消失性にて，往々全く無毛なり；肉は白色，淡桃色に変る，味苦く，臭なきか弱し；褶は垂生，帯白色，のち赭褐色，密，狭幅，薄し；茎は 2—4×0.2—0.5 cm，殆ど同幅，屢々基部屈曲，帯白色，基部より帯褐色となる，粘性，弾性，頂部粉状，他は小刺毛を有す，中実；胞子は類球形，有疣，淡黄褐色，3—5×3—4.5 μ；胞子紋は黄赭色；嚢状体なし。

所在及産地

林地—秋　本州—欧．阿

和名　シロクモノスタケ（白蜘蛛巣茸）〔今関及土岐〕

Crepidotus (FR.) S. F. GRAY
チャヒラタケ属

S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 616. 1821—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 138. 1872—SINGER, Agaricales, 590. 1949.

Agaricus trib. *Crepidotus* FRIES, Syst. Mycol. 1 : 272. 1821.

Phialocybe KARSTEN, Hattsv. 1 : 415. 1879.

Dochmiopus PATOUILLARD, Hymen. Eur. 113. 1887.

Derminus subgen. *Crepidotus* SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 578. 1889.

Conchomyces VAN OVEREEM, Bull. Jard. Bot. Buitenzorg, 9 : 19. 1927.

子実体はヒラタケ（*Pleurotus*）型；傘は不明確の表皮層を有し，或は能く分化せる表皮層を有す，後者に於ては匍匐或は斜上〜直立せる細き往々叉状となる糸状菌糸より成り，稀に甚だ分散せる皮嚢体を有す，比較的多くの種に於て菌糸は無色なるも，有色の種に於ては表生菌糸の表面或は膜中に色素を有す；表皮層或は表面の層の下に膠化せる菌糸の狭き或は広き層を有するもの多し；褶は基部に於て種々に附着或は合流し，円形或は狭細，若しも茎が存在せば垂生す，纒絡することなく，狭幅或は広幅なり；托実質は整型〜不整型，錯綜〜準平行の菌糸より成り，時に全菌糸は各々異れる方向に走るものあり，但し大部分は厳格に軸に沿うて配列す，通常色素なし；胞子紋は黄土色〜銹色にて濃暗褐色或は濃銹色ならず；胞子は蜜色〜帯褐蜜色，寧ろ屢々淡色にて銹色の色彩を帯ぶ，膜は寧ろ薄くして単一なるも或種にては不明瞭の内膜あり，膜の外層に屢々埋在する短刺ありて外見有点のもの或は全く平滑なり，殆ど正球形，或は円壔形，屢々楕円形或は短楕円形，時に鈍凸頭を有す，発芽孔なきも時に不明瞭なる乳頭あり；担子柄は正常；嚢状体は褶側に存せずして常に稜に存在し常に異質稜をなす程群生せざるも通常寧ろ多数なり，形及び大さは一様ならず；茎は稀に比較的短く多少偏心的に生ずるも，多くは只痕跡的にて下面より其の存在を認めらるるのみ；被膜なきか甚だ不明瞭；肉は菌絆を有し或は之れを有せざる菌糸より成る。材上，草茎上，稀に地上或は落葉上に生ず；汎布，約 36 種を知らる；食用となる種を含む.

（本属名は krepis〔希〕（上靴），ous，otos〔希〕（耳）より出づ）

基準種 *C. mollis* (SCHAEFF. ex FR.) QUÉL.

本邦既知種検索表

A. 傘面無毛
- a. 胞子球形
  - α. 胞子は埋在刺を有し点状に見ゆ；縁に線条あり。
    - I. 褶は狭幅；傘は水潤肉桂色，乾時帯白色，径 1—5cm；胞子径 5—6.5μ。
      マルミノチャヒラタケ **C. applanatus** (425)
    - II. 褶は広幅；傘は水潤白色或は灰白色，径 1.5—3.5cm；胞子径 6.5—7.5μ。
      ヒロハチャヒラタケ **C. nephrodes** (425)
  - β. 胞子は有疣；傘に長き線条あり，表面白色，径 1—2cm；胞子径 6—8μ。
    ザラミノチャヒラタケ **C. longistriatus** (425)
- b. 胞子楕円形，平滑，やや傘面粘性
  - α. 傘は径 2—6cm，汚白，のち黄白或はクリーム色，縁にやや線条あり；胞子 8—10×5—6μ。
    チャヒラタケ **C. mollis** (426)
  - β. 傘は径 0.8—1.3cm，帯白〜帯褐色，半分迄線条あり；胞子多くは 7.5×5μ。
    ムニンヒメチャヒラタケ **C. uber** (426)

B. 傘面は絹糸，綿絮或は鱗被を存す。
- a. 胞子球形或は殆ど球形（長幅の差約 1μ 以内）
  - α. 胞子は有刺
    - I. 傘は褐色細密軟毛鱗被に被わる，径 1—3.5cm；胞子径 5—6.5μ。
      クリゲノチャヒラタケ **C. badiofloccosus** (427)
    - II. 傘は硫黄色粗毛に被わる，径 0.7—13cm；胞子 7—10×6—9μ。
      フジチャヒラタケ **C. sulphurinus** (427)
  - β. 胞子は有疣；傘は白色絹糸状綿絮あり，径 2—7cm；胞子 5—7×5—6μ。
    オガサワラチャヒラタケ **C. palmularis** (427)
- b. 胞子楕円形
  - α. 胞子平滑
    - I. 材上生
      1. 傘はセピア色微細綿絮鱗被を有す，径 0.4—0.8cm；胞子 9—10×6μ。
         セピアコナカブリタケモドキ **C. sepiarius** (427)
      2. 傘は黄白〜ラクダ色，微細褐色軟毛を有す，径 1—3.5cm；胞子 7.5—9×5—6μ。
         キチャヒラタケ **C. viticolus** (427)
    - II. 地上生；傘は帯白色，微細綿絮を被むる，径 0.7—4cm；胞子 7.5—10×5μ。
      ツチチャヒラタケ **C. terrestris** (428)
  - β. 胞子平滑ならず
    - I. 胞子は一見平滑，微細点を存す；傘は白色.

1. 胞子 5—6×3—4μ。

コナカブリタケ ***C. variabilis*** (428)

2. 前者より胞子球状に傾く，6.5—8×5—6μ。

ニセコナカブリタケ

C. subsphaerosporus (428)

II. 胞子有疣，6—7.5×3.5—5μ；傘は紫色。

ムラサキチャヒラタケ

C. subpurpureus (429)

Crepidotus applanatus (PERS. ex FR.) KARST.

マルミノチャヒラタケ

KARSTEN, Hattsv. 1 : 414. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 232. 1889—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 15 : 4. 1885; Enchir. Fung. 108. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 878. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 755. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 117. 1893; Brit. Fungi, 316. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 168. 1908—RICKEN, Blätterp. 231. 1915—MURRILL, N. Am. Fl. 10 : 150. 1917—KAUFFMAN, Agar. Mich. 524. 1918—BRESADOLA, Icon. Myc. 16 : pl. 790, f. 1. 1930—JOSSERAND, Bull. Soc. Myc. Fr. 53 : 216, f. 5. 1937—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ, 43 : 242. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 413. 1948—PILÁT, Atl. Champ. Eur. 6, Crepidotus, 31, f. 6, pl. 2-11. 1948. pr. p. —SINGER, Agaricales, 593. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 76. 1953.

Agaricus applanatus PERS. Obs. Myc. 1 : 8. 1796 —FRIES, Epicr. Myc. 210. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 339. 1857; Hymen. Eur. 275. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 470. 1844—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 136. 1896—WINTER, Pilze, 1 : 661. 1884.

Agaricus planus PERS. Syn. Meth. Fung. 430. 1801.

Derminus applanatus P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 241. 1900—MIGULA. Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 434. 1912.

子実体は群生し畳生；傘は径 1—5cm，形変化し易く，類円形，腎臓形，楔形或は箆形にて上面丸山形，速に扁平となり，屢々後方圧低さる，無茎或は短き圧着白軟毛を有する基部を有す；表面は無毛，吸水性，湿時水潤肉桂色，乾時帯白色，湿時周辺に線条あり；肉は白色，柔軟，水潤状；褶は垂生，帯白色，のち肉桂色，密，甚だ狭幅；胞子は球形或は類球形，有点，径 5—6.5μ：胞子紋は類銹色。

所在及産地

腐木幹上—秋　北海道，本州，九州—欧．北米

和名　マルミノチャヒラタケ（丸実茶平茸）〔今井〕

Crepidotus nephrodes (BERK. et CURT.) SACC.

ヒロハチャヒラタケ

SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 882. 1887—MURRILL, N. Am. Fl. 10 : 152. 1917—SINGER, Agaricales, 593. 1949.

Agaricus nephrodes BERK. et CURT. Ann. Mag. Nat. Hist. II, 12 : 422. 1853.

Agaricus malachius BERK. et CURT. Ann. Mag. Nat. Hist. 3 : 291. 1859.

Crepidotus malachius SACC. Syll. Fung. 5 : 883. 1887—MURRILL, N. Am. Fl. 10 : 151. 1917—KAUFFMAN, Agar. Mich. 523. 1918—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 241. 1938.

（原，日．菌．目．95. 1954）

Crepidotus applanatus PILÁT, Atl. Champ. Eur. 6, Crepidotus, 31. 1948. pr. p.

子実体は群生し畳生；傘は径 1.5—3.5cm，通常扁平，無茎或は甚だ短き不明瞭なる白軟毛を被むる側茎を有す；表面は無毛にて基部に僅か軟毛あり，吸水性，水潤白色或は灰白色，湿時周辺有条にて灰褐色；肉は白色，味及臭なし；褶は後方円く或は垂下歯にて着生，密，むしろ広幅，帯白色，のち灰褐色；胞子は球形，有点，6.5—7.5μ；胞子紋は肉桂色。

所在及産地

腐木，倒木上—夏　北海道—北米

和名　ヒロハチャヒラタケ（広褶茶平茸）〔今井〕

Crepidotus longistriatus IMAI

ザラミノチャヒラタケ

IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 242. 1938.

（原，日．菌．目．95. 1954）

Crepidotus applanatus PILÁT, Atl. Champ. Eur. 6, Crepidotus, 31. 1948. pr. p.

子実体は群生しやや畳生，無茎或は短側茎あり；傘は径 1—2cm，丸山状扁平，のち僅か圧低さる，縁は波状或は浅裂す；表面は白色，無毛，長き縦線条あり；肉は薄く，柔軟；褶は垂生，帯白色～肉桂色，密；茎は欠如或は短かく，側生，白色細密軟毛を有す；胞子は類球形，球形或は卵形，有疣，径 6—8μ；胞子紋は鮮黄土色。

所在及産地

林内腐木上—夏　北海道

和名　ザラミノチャヒラタケ（粗面実茶平茸）〔今井〕

Crepidotus mollis (BULL. ex FR.) S. F. GRAY
チャヒラタケ

S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 616. 1821—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 138, pl. 7, f. 7. 1872; Enchir. Fung. 108. 1886—GILLET, Champ. Fr. 557, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 413. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 232. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 877. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 754. 1916—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 117. 1893; Brit. Fungi, 316. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 152. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 167. 1908—RICKEN, Blätterp. 231, pl. 61, f. 1. 1915—MURRILL, N. Am. Fl. 10 : 151. 1917—KAUFFMAN, Agar. Mich. 519. 1918—REA, Brit. Basid. 454. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 16 : pl. 789. 1930—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 3: pl. 303, f. 1. 1937; Agaricales, 1 : 413. 1948—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 239. 1938. —LANGE, Agar. Denm. 12 : 51. 1938; Fl. Agar. Dan. 4 : 45, pl. 132, f. B. 1939—PILÁT, Ann. Myc. 38 : 82. 1940; Atl. Champ. Eur. 6, Crepidotus, 24, f. 4. 1948—SINGER, Agaricales, 594. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 76. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 236, f. 79(11). 1957.

(原, 日. 菌. 目. 95. 1954—今関及七岐, 林. 試. 研. 報. 67 : 37. 1954—川村, 日. 菌. 図鑑, 4 : 528, pl. 519. 1954)

Agaricus mollis SCHAEFF. Fung. Bavar. 4: Ind. 49, pl. 213. 1774—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, 1 : pl. 98. 1797—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 480. 1801; Myc. Eur. 3 : 24. 1828—FRIES, Syst. Myc. 1 : 274. 1821; Epicr. Myc. 210. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 399. 1857; Hymen. Eur. 275. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 471. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 164, pl. 9, f. 6. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 125. 1871; Illus. Brit. Fungi, 4 : pl. 498 (no. 535). 1886; Handb. Austr. Fungi, 58. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 135. 1876—WINTER, Pilze, 1 : 661. 1884.

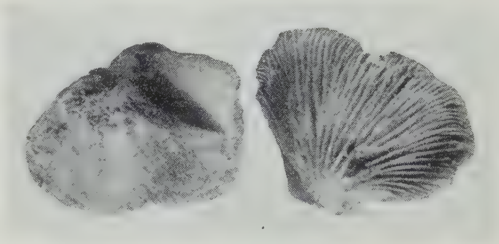
Agaricus haerens PECK, Rep. N. G. St. Mus. 35 : 132. 1884.

Crepidotus haerens SACC. Syll. Fung. 5 : 880. 1887—MURRILL, N. Am. Fl. 10 : 150. 1917—KAUFFMAN, Agar. Mich. 518. 1918—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 240. 1938.

(原, 日. 菌. 目. 95. 1954)

Derminus mollis SCHROET. Pilze Schles. 1 : 578. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 241, f. 117, A. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 435, pl. 85, f. 3-4. 1912.

子実体は群生し畳生; 傘は径 2—6 cm, 或はそれ以上に及び, 無茎或は殆ど無茎, 外囲倒卵形, 腎臓形或はへら形にて上面丸山形, 速に扁平となる; 表面は無毛, 膠状膜を被むり, やや粘性, 汚白色, のち黄白色或はクリーム色, 縁辺平坦或はやや線条あり, 縁は大形品にては波状或は浅裂す; 肉は膜下特に類膠状, 水潤白色, 薄く, 味及臭なし; 褶は垂生, 放射状に走り, 帯白色, のち水潤肉桂色, 密, 狭幅にて殆ど線状; 胞子は楕円形或は円壔形, 平滑. 8—10 ×5—6μ; 胞子紋は黄土色; 可食.



a



b

第 188 図 チャヒラタケ Crepidotus mollis
a. 子実体 ×2/3 b. 胞子 ×500(大谷氏)

所在及産地

林間腐木, 枯幹上—夏秋

北海道, 本州, 九州—欧. 北米. 濠. 亜(小亜. 支)

和名 チャヒラタケ (茶平茸) 〔今井〕

Crepidotus uber (BERK. et CURT.) SACC.
ムニンヒメチャヒラタケ

SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 878. 1887—S. ITO & IMAI, Trans, Sapporo Nat. Hist. Soc. 16 : 50. 1940—SINGER, Agaricales, 594. 1949.

(松村, 植. 名鑑, 1 : 138. 1904—白井, 日. 菌. 目. 26. 1905; ed. 2. 179. 1917; ed. 3. 107. 1927—原, 日. 菌. 目. 95. 1954)

Agaricus uber BERK. et CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4 : 117. 1860.

子実体は畳生或は群生; 傘は径 0.8—1.3×0.7—1 cm, 扇形或は類腎臓形; 表面は生時帯白色, 乾時帯黄色或は帯褐色, 吸水性, 湿時僅か粘性にて傘径の約半分迄暗褐色の線条あり, 乾時線条なし, 殆ど無毛にて基部に白絨毛あり; 褶は垂生, 基部より放射状をなし, 熟時銹色を呈す, 密, 狭幅; 茎は殆どなし; 胞子は楕円形, 平滑, 6—8×3.5—6 μ, 多くは 7.5×5μ; 胞子紋は褐色。

所在及産地

陰林内枯枝及腐木上—秋　　　小笠原島

和名　ムニンヒメチャヒラタケ（無人姫茶平茸）〔今井〕

Crepidotus badiofloccosus IMAI

クリゲノチャヒラタケ

IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 53 : 399. 1939.
（原, 日. 菌. 目. 95. 1954）

子実体は群生，屢々畳生，無茎；傘は径 1—3.5×1—3 cm，丸山形，初め類円形，のち腎臓形～半円形，基部扁平或は僅か圧低さる；表面は湿潤或は乾燥，初め褐色の細密軟毛類鱗片に密に被われ，のちやや無毛となり淡色，基部白色硬尖糙渋，縁は初め内捲，のち屢々浅裂反転し，線条なし；肉は白色，薄し；褶は初め白色にて直生，のち肉桂色にて円状，密或はやや疎，僅か広幅；胞子は球形，有嘴，有刺，5—6.5μ；胞子紋は肉桂色.

所在及産地

腐木上—秋　　　北海道

和名　クリゲノチャヒラタケ（栗毛茶平茸）〔今井〕

Crepidotus sulphurinus IMAZ. et TOKI

フジチャヒラタケ

IMAZEKI & TOKI, Bull. Gov. For. Exp. St. 67 : 38, f. 5, pl. 5, f. 5. 1954.

子実体は多数畳生；傘は径 0.7—1.3 cm，通常外囲扇形或は腎臓形にて丸山状或は介殻状，縁は内屈す；表面は乾燥，粗毛密生し，硫黄色にて，のち褪色す；肉は傘面とほぼ同色，乾時褐色，厚さ 1mm に及び，柔韌にて脆からず；褶は直生，初め黄色，のち黄褐色となる，やや疎，幅約 1 mm，稜に房毛あり；茎は側生，稀に欠如，甚だ短く，0.5—1×1 mm，黄色，粉毛あり；担子柄は 2 胞子；胞子は類球形，有嘴，有刺，黄褐色，7—10×6—9μ；胞子紋は銹色；稜嚢体は棍棒形，鈍頭或は稀に乳頭状，平滑，稀に先端に結晶を附す，31—44×8—13μ，菌絆あり。

所在及産地

フジ（*Wistaria floribunda*）枯幹上—夏秋　　　本州

和名　フジチャヒラタケ（藤茶平茸）
ザラミノチャヒラタケ（粗面実茶平茸）
〔今関及土岐〕（異物同名の先名あり）

Crepidotus palmularis (BERK. et Curt.) SACC.

オガサワラチャヒラタケ

SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 880. 1887—S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16 : 49. 1940—SINGER, Agaricales, 593. 1949.
（松村，植. 名鑑，1 : 133. 1904—白井，日. 菌. 目. 26. 1905; ed. 2. 179. 1917; ed. 3. 106. 1927—原，日. 菌. 目. 95. 1954）

Agaricus palmularis BERK. et CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4 : 117. 1860.

? *Agaricus leucochrysos* BERK. et CURT. l. c. 117. 1860.

? *Crepidotus leucochrysos* SACC. Syll. Fung. 5 : 887. 1887—SINGER, Agaricales, 594. 1949.
（松村，植. 名鑑，1 : 138. 1904—白井，日. 菌. 目. 26. 1905; ed. 2. 179. 1917; ed. 3. 106. 1927）

子実体は畳生或は群生，無茎；傘は径 2—7×2—4 cm，半円形或は腎臓形；表面は白色にて圧着せる絹糸状綿絮あり，やや吸水性，縁辺は湿時帯褐色にて線条あり；肉は白色；褶は直生或は垂歯によりて直生，遂に黄褐色を呈す，密，広幅，稜は全縁；胞子は卵形，類球形或は球形，有疣，5—7×5—6μ；胞子紋は黄土色.

所在及産地

陰林腐木上—秋　　　小笠原島

和名　オガサワラチャヒラタケ（小笠原茶平茸）〔今井〕

Crepidotus sepiarius PECK

セピアコナカブリタケモドキ

PECK, Bull. Torr. Bot. Club, 25 : 324. 1898—SACCARDO, & SYDOW, Syll. Fung. 14 : 110. 1902—MURRILL, N. Am. Fl. 10 : 152. 1917—KAUFFMAN, Agar. MICH. 521. 1918.
（MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3 : 116. 1931—松浦，蕈類辞典，97, f. 111. 1933—原，日. 菌. 目. 95. 1954）

傘は薄く，径 4—8 mm，丸山形，やや中窩あり，平坦，甚だ微細なる綿絮状鱗被を有し，セピア色；褶は狭生，渋色，稜に細鈍鋸歯あり；茎は一般に偏心生，稀に中心生，短かく，長さ 2—4 mm，屈曲，帯褐色，往々粉状；胞子は広楕円形，9—10×6μ。

所在及産地

材上—秋　　　本州—北米

和名　セピアコナカブリタケモドキ（セピア擬粉被茸）〔松浦〕

Crepidotus viticolus IMAI

キチャヒラタケ

IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 240. 1938.
（原，日. 菌. 目. 95. 1954）

子実体は群生或は類叢生にて畳生，殆ど無茎；傘

は径 1—3.5cm，腎臓形或は楔形；表面は淡黄白色或は駱駝色，幼時及縁は淡色，乾燥，微細なる褐色軟毛を有す，基部に白軟毛あり，縁は無線条；肉は類肉質，白色；褶は直生或は白色～暗褐肉桂色，密；胞子は広楕円形，平滑，7.5—9×5—6μ；胞子紋は渋色。

所在及産地

ヤマブドウ（*Vitis Kaempheri*）茎上—秋　北海道

和名　キチャヒラタケ（黄茶平茸）〔今井〕

Crepidotus terrestris IMAI
ツチチャヒラタケ

IMAI, Jour. Facul. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 241. 1938.

（原，日．菌．目．95. 1954）

子実体は群生或は畳生，無茎；傘は径 0.7—4cm，外囲類円形，腎臓形，或は半円形にて楔状或は類鐘状に懸垂す；表面は帯白色，微細綿絮を被むり，基部に白絨毛あり，縁は波状，無線条；肉は帯白色，薄し；褶は白色～灰褐色，やや疎或はやや密，やや広幅；胞子は楕円形，平滑，7.5—10×5μ；胞子紋は類銹色。

所在及産地

林間粘土上—秋　北海道

和名　ツチチャヒラタケ（土茶平茸）〔今井〕

Crepidotus variabilis (PERS. ex FR.) QUÉL.
コナカブリタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 138. 1872; Enchir. Fung. 108. 1886—RICKEN, Blätterp. 233, pl. 61, f. 2. 1915—LANGE, Agar. Denm. 12 : 52. 1938—SINGER, Agaricales, 594. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 180, pl. 69, f. 2. 1950.

Agaricus sessilis BULL. Herb. Fr. pl. 152. 1783; pl. 581, f. 3. 1793.

Agaricus niveus SOW. Col. Fig. Engl. Fungi, 1 : pl. 97. 1797.

Agaricus variabilis PERS. Obs. Myc. 2 : 46, pl. 5, f. 12. 1799; Syn. Meth. Fung. 483. 1801. —DECANDOLLE, Fl. Fr. 2 : 135. 1815—FRIES, Syst. Myc. 1 : 275. 1821; Epicr. Myc. 211. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 401. 1857; Hymen. Eur. 213. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 164. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 171. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 98. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3 : pl. 344, f. a(no. 371). 1886; Handb. Austr. Fungi, 42. 1892—WINTER, Pilze, 1 : 705. 1884—PILÁT, Atl. Champ. Eur. 6. Crepidotus, 52, f. 15, pl. 18—20. 1948—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 76, f. 132. 1953.

Claudopus variabilis GILL. Champ. Fr. 426, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 289. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 733. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 574. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 235. 1893; Brit. Fungi, 247, pl. 17, f. 5. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 119. 1908—REA, Brit. Basid. 453. 1922.

（安田，植．雑．36 : 140. 1922—白井，日．菌．目．ed. 3. 83. 1927—広江，応用菌蕈学，1178. 1941—原，日．菌．目．71. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，76. 1957）

Derminus sessilis SCHROET. Pilze Schles. 1 : 578. 1889.

Hyporhodius variabilis P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl-fam. 1, 1** : 254, f. 120, A. 1900.

Dochmiopus variabilis PAT. Ess. Tax. 150, 1900—KARSTEN, Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 157. 1889—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 414. 1948—HEIM, Champ. Eur. 2 : 236, f. 184, B. 1957.

Hyporhodius sessilis MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 556. 1912.

子実体は群生；傘は径 1—2cm，初め背着し，のち反転す，無茎或は甚だ短き茎を存す，扇形或は腎臓形にて屢々浅裂す；表面は白色にて軟毛を絨状に被むり，縁に房毛あり；肉は白色にて薄し；褶は1側点より放射状をなし，初め白色，のち桃色を呈し，むしろ疎，広幅；胞子は楕円形，微細点或は平滑，5—6×3—4μ；胞子紋は桃色；棱囊体は棍棒状壜形，36—45×7—9μ。

所在及産地

枯枝幹上—春～秋　本州—欧

和名　コナカブリタケ（粉被茸）〔安田〕

Crepidotus subsphaerosporus (LANGE) KÜHN. et ROMAGN.
ニセコナカブリタケ

KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 76. 1953.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，75, f. 192, pl. 33, f. 192. 1957.）

Crepidotus variabilis var. *subsphaerosporus* LANGE, Fl. Agar. Dan. 4 : 46, pl. 133, f. E. 1939.

傘は径 1—3.5cm，背着，腎臓形或は幾分不正形；表面は乾燥，白色，微細綿毛あり；特に基部に於て著し，縁は初め内屈し，老時屢々裂片状；肉は白色，寧ろ薄く，無臭；褶は帯白色，のち帯褐黄土色，背

面の偏心或は殆ど側点より放出し，密或はやや疎，稜は帯白色，房毛あり，幅 1—1.7mm；茎は殆ど或は全く欠如；胞子は鏡下にて淡黄土色，類卵形，微細点あり（油浸装置にて），6.5—8×5—6μ 或は 6—7.5(8.3)×4.5—5.5(5.7)μ；担子柄は4胞子，22×7.5μ；稜嚢体は群生，円筒形，棍棒形或は便腹状，薄膜，無色，35—53×7.5—14.5μ，屢々類球形，便腹状，幅 19—27μ の細胞を混ず；総ての菌糸は菌絆を有す.

所在及産地

広葉樹落木上—夏秋　本州—欧

和名　ニセコナカブリタケ（贋被粉茸）〔本郷〕

Crepidotus subpurpureus S. ITO et IMAI

ムラサキチャヒラタケ

S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16 : 50. 1940.

子実体は群生；傘は径 5—10×4—8mm，半球形，扇形或は腎臓形；表面はやや丸山形，帯紫色，やや絨毛状，縁は内捲す；肉は白色，皮下帯紫色，類肉質；褶は垂生或は直生，灰褐色，稜は稍々紫色を呈し，房毛あり；茎は側生，長さ約 1mm，厚肉，傘面と同色にて絨毛を存す；胞子は広楕円形或は類円壔形，有疣，6—7.5×3.5—5μ；胞子紋は銹色。

所在及産地

林間腐木上—秋　小笠原島

和名　ムラサキチャヒラタケ（紫茶平茸）〔今井〕

疑問種

Agaricus Cacao BERK. et CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4 : 117. 1860 = *Crepidotus Cacao* SACC. Syll. Fung. 5 : 880. 1887.（松村，植．名鑑，1 : 138. 1904—白井．日．菌．目．26. 1905; ed. 2. 179. 1917; ed. 3. 106. 1927—原，日．菌．目．24. 1954）

Agaricus scymnodes BERK. et CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4 : 117. 1858 = *Crepidotus scymnodes* SACC. Syll. Fung. 5 : 887. 1887.（松村，植．名鑑，1 : 138. 1904—白井，日．菌．目．26. 1905—原，日．菌．目．95. 1954）= *Desminus scymnodes* P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl-fam. 1, 1** : 240. 1900.（松村，植．名鑑，1 : 140. 1904—白井，日．菌．目．29. 1905）

Pleurotellus FAYOD

コナカブリタケモドキ属

FAYOD, Prodrome, Ann. Sci. Nat. Bot. VII, 9 : 339. 1889—SINGER, Agaricales, 599. 1949.

? *Calathinus* QUÉL. Enchir. Fung. 46. 1886 (non RAFINESQUE, 1836)

傘には明かなる茎なく偏在或は側面の突出点によつて基物に着生す；表皮層は細き糸状の平行或は類平行に匍匐する無色菌糸より成る；褶は1点に合流す；托実質は類整～混淆型；子実下層は小なる殆ど等径の不規則細胞より成る；胞子紋は淡帯褐黄色或はこれより僅か桃色を帯ぶ；胞子は殆ど無色～淡帯褐黄色，薄膜，平滑，同質の非糊性の膜を有し，何れの位置に於ても角形ならず；担子柄は正常形；褶側嚢体なし；肉は甚だ薄し；凡ての菌糸は菌絆を有せず；種々なる生死植物体上生；多分汎布，約2種を知らる；経済価値少し。

（本属名は *Pleurotus*（属名）より出づ）

基準種　*P. hypnophilus* (BERK.) SACC. sensu FAYOD

本邦既知種

コナカブリタケモドキ ***P. herbarum***(429)

Pleurotellus herbarum (PECK) SING.

コナカブリタケモドキ

SINGER, Agaricales, 601. 1949.

Agaricus herbarum PECK, Bull. Buffalo Soc. Nat. Sci. 1 : 53. 1873.

Crepidotus herbarum SACC. Syll. Fung. 5 : 888. 1887—MURRILL, N. Am. Fl. 10 : 149. 1917—KAUFFMAN, Agar. Mich. 519. 1918—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 240. 1938. (MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3 : 116. 1931—松浦，茸類辞典，158, f. 187. 1933; 応用菌蕈学，f. 791(p. 1172) 1941—原，日．菌．目．95. 1954)

Derminus herbarum P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl-fam. 1, 1** : 240. 1900.

子実体は群生し通常畳生，無茎；傘は径 5—12cm，類円形或は半円形；表面は乾燥，白色，軟絨毛を被むる，縁は幼時内屈し，時に反転す；褶は偏心或は側辺の点より放射状をなし，やや密，白色，のち類銹色；胞子は広楕円形，平滑，6—7.5×3.75—4.5μ。

所在及産地

林内腐木，枯茎等上—夏

北海道，本州—北米・亜(支)

和名　コナカブリタケモドキ（擬粉被茸）〔松浦〕

Rhodophyllaceae SINGER イッポンシメジタケ科

Agaricales, 601. 1949.

Rhodogoniosporaceae HEIM, Treb. Mus. Cienc. Nat. Barcelona, 15 : 86. 1934—SINGER, Cinc. Myc. 34 : 328. 1936.

Jugasporaceae SINGER, Ann. Myc. 34 : 327. 1936.

胞子紋はピンク色；胞子は無色～類藁色，非糊性，角形，各角は屢々鈍くして寧ろ円く，稀に胞子が最早角形に見えざる程に円くなるも通常少くとも僅少の胞子は角形の痕跡をとどむ；子実体の容姿習性は種の異るに従つて甚だ異る；被膜欠如；菌糸は菌絆を有し，或は屢々これを有せず；種々なる基物上に生じ，屢々林の内外に於ける地上に生ず.

SINGER 氏(1949) は3属を収む，本邦すべて之を産す。

本邦既知属検索表

A. 胞子は前面及び横面角形ならざるも屢々粗面～疣状。
- a. 胞子は前面及び横面観にて平滑（但し縦肋のために不平坦となる場合を除く）
  ヒカゲウラベニタケ属 ***Clitopilus***(430)
- b. 胞子は前面及び横面観にて粗面～疣状（膜の波曲のために）
  ムツノウラベニタケ属 ***Rhodocybe***(432)

B. 胞子は前面及び横面観にて角形，粗面或は疣状ならず，甚だ稀に胞子の大部分が角形或は有稜ならず。
  イッポンシメジタケ属 ***Rhodophyllus***(433)

Clitopilus (FR.) QUÉL.
ヒカゲウラベニタケ属

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 120. 1872—SINGER, Agaricales, 604. 1949.

Pleuropus ROUSSEL, Fl. Clavados, ed. 2, 27. 1806—MURRILL, N. Am. Fl. 10 : 102. 1917. (non PERSOON ex S. F. GRAY, 1821)

Agaricus trib. *Mouceron* FRIES, Syst. Mycol. 1 : 193. 1821.

Agaricus trib. *Clitopilus* FRIES, l. c. 194. 1821; Epicr. Mycol. 148. 1836.

Hexajuga FAYOD, Ann. Sci. Nat. VII, 9 : 389. 1889.

Octojuga FAYOD, l. c. 390. 1889.

Orcella BATTARRA, ex EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5 : 430. 1909.

傘は類無毛～絹糸状，平滑或は稀に有脈，非糊性或は極めて僅か糊性，小～寧ろ大形，縁は初め屢々内捲す，色は全子実体に於けるが如く甚だ淡色にて，多くは白色或は類白色，稀に淡灰色，或はクリーム帯褐淡黄色の色彩を帯ぶ；上表皮層は匍匐する無色，平滑の細き糸状菌糸より成る；胞子紋はピンク色；子実層托は正常にて褶状なるも甚だ稀に寧ろ孔状となる；褶は垂生；担子柄は正常なるも稀に1或は3胞子のことあり；嚢状体は褶側に欠如；稜嚢体も亦辛うじて分化す，屢々異常担子柄（小嚢体）を多生す；托実質は多少纏絡せる不規則に配列せる中層より成り，子実脚層との分界は著しからざるも，後者の菌糸は徐々に太くなるにより区別さる；中層の菌糸は弛く，無色なり；胞子は無色～通常淡藁色或は淡桃色，5—6 縦肋或は胞子側に沿うて走る扁平なる筋の間の稜角を有し，然らざれば平滑なり，発芽孔及び乳頭なし，膜は寧ろ薄くして甚だ容易に頽廃す，幼胞子は僅か角形，卵形，楕円状紡錘形，常に左右相称ならず；糊性或は擬糊性ならず；茎は存在或は欠如，若し存在せば屢々短かくして著しからず或は成熟に至るまで永存せず；屢々菌糸体の盤より起り，擬根なく，被膜なし；臭は穀粉様；味は温和或は苦し；肉の菌糸はイグチ類の如く全肉が甚だ僅か膠化するが為に弛く配列され，その為に肉は著しく柔軟にて弱し；すべての菌糸は菌絆を有す；化学反応は弱或はなし；屢々芝生及び陽林中の種々なる生及び死樹材上に生じ，砂地，腐蝕質，蘚上，糞上等に生ず；汎布，約 12 種を知らる；大形のものは食用とさる。

(本属名は klitos〔希〕(傾く)，pilos〔希〕(帽子) より出づ)

基準種 *C. prunulus* (SCOP. ex FR.) QUÉL.

本邦既知種検索表

A. 胞子の長さ 10μ 以上。
- a. 傘は白色～帯白色，径 4—9cm；散生或は群生；胞子 11—14×4—5μ。
  ヒカゲウラベニタケ ***C. prunulus***(431)
- b. 傘は中央暗焦茶色，周辺淡色，径 1.5—4cm；群生或はやや叢生；胞子 9.5—13×4.5—6μ。
  クロウラベニタケ ***C. lignyotus***(431)

B. 胞子長さ 10μ 以下にて 6×4μ；子実体は株となる；傘は汚白色～淡褐色。
  カブウラベニタケ ***C. caespitosus***(432)

Clitopilus prunulus (SCOP. ex FR.) QUÉL.

ヒカゲウラベニタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 120, pl. 5, f. 3. 1872—GILLET, Champ. Fr. 409, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 269. 1879 ; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 149. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 699. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 545. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 243, f. 11 (p. 236) 1893; Brit. Fungi, 243, pl. 17, f. 2. 1911—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 142, f. 138. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 109, f. 25. 1908—KAUFFMAN, Agar. Mich. 568. 1918—REA, Brit. Basid. 310. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 12 : pl. 565. 1929—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 381. 1948—SINGER, Agaricales, 606. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 143, pl. 53, f. 6. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 174, f. 71. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 79, B. 1956.
(今関，原色きのこ，pl. 29(左). 1942—今関及本郷，原色日．菌．図鑑．76. 1957)

Agaricus Prunulus SCOP. Fl. Carn. 2 : 437. 1772—FRIES, Syst. Myc. 1 : 193. 1821; Epicr. Myc. 148. 1938; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 279. 1857; Hymen. Eur. 197. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 508. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 145, pl. 7, f. 7. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 96, pl. 3, f. 14. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3 : pl. 322 (n. 343). 1886—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 105. 1876—WINTER, Pilze, 1 : 719. 1884.

Agaricus obesus BATSCH, Elench. Fung. Cont. 2 : 89, f. 216. 1789.

Agaricus Orcella BULL. Herb. Fr. pl. 573, f. 1. 1791, & pl. 591. 1793—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 473. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1 : 180. 1821; Epicr. Myc. 149. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 280. 1857; Hymen. Suec. 197. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 508. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 126. 1883; Illus. Brit. Fungi, 3 : pl. 323 (no. 344). 1883—WINTER, Pilze, 1 : 719. 1884.

Pleuropus orcellus S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 615. 1821.

Agaricus prunulus var. *Orcella* COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 96. 1871.

Clitopilus Orcella QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1 : 120, pl. 5, f. 2. 1872—GILLET, Champ. Fr. 408, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 269. 1879—SACCARDO Syll. Fung. 5 : 699. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 544. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 244. 1893; Brit. Fungi, 244. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 160. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 143. 1903 W. G. SMITH, Brit. Basid. 109. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. Fr. 59, pl. 58, f. 130. 1910—KAUFFMAN, Agar. Mich. 569. 1918—HEIM, Champ. Eur. 2 : 234. f. 79(10). 1957.

Paxillus prunulus QUÉL Enchir. Fung. 92. 1886—RICKEN, Blätterp. 94, pl. 27, f. 5. 1915.

Paxillus prunulus var. *orcella* QUÉL. Enchir. Fung. 92. 1886.

Rhodosporus Prunulus SCHROET. Pilze Schles. 1 : 618. 1889.

Orcella obesa O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 863. 1891.

Orcella Prunulus O. KUNTZE, l. c. 863. 1891.

Hyporhodius Prunulus P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl-fam. 1, 1** : 257, f. 120. F. 1900—MIGULA Krypt. Fl. 3, Pilze, 2 (2) : 578, pl. 114, f. 1-2. 1912.

Hyporhodius Orcella P. HENN l. c. 257. 1900.

Pleuropus prunulus MURR. N. Am. Fl. 10 : 104. 1917.

Pleuropus obesus MURR. l. c. 105. 1917.

Paxillopsis prunulus LANGE, Fl. Agar. Dan. 4: 48, pl. 133, f. A, A′. 1939.

子実体は孤生或は群生；傘は径 4—9cm，初め丸山形にて速に開張し，のち幾分圧低され，波状或は裂片状の縁を有して不正形となり，屡々偏心的なり；表面は湿時粘性，白色～帯白色，絹状，縁は内屈；肉は白色，臭及味は穀粉様にて強し；褶は深く垂生，白色にて，のち桃色を帯びたる肉色，密或はやや疎，狭細，稜は全縁；茎は 3—5×0.5—1.5cm，殆ど同幅或は下方に狭細し，往々便腹状，往々偏心生，無毛或は僅か綿絮を有し，線条あり，傘面と同色，中実；胞子は楕円状紡錘形，不明瞭の縦溝あり，淡桃色，11—14×4—5μ；胞子紋は淡鮭肉色；可食。

所在及産地

林内外草間—夏秋　　本州—欧．北米

和名 ヒカゲウラベニタケ（日蔭裏紅茸）〔今関〕

Clitopilus lignyotus HONGO

クロウラベニタケ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 29 : 89, f. 2. 1954.
(今関及本郷，原色日．菌．図鑑，76, f. 193, pl. 33, f. 193. 1957)

子実体は群生或は類叢生；傘は径 1.5—4cm，丸山形，のち扁平となり，全形倒円錐状を呈し，屡々中央僅か圧低さる；表面は乾燥，レンズ下にて幾分圧着軟毛を認む，暗焦茶色，周辺淡色或は殆ど白色，縁は幼時内屈す；肉は白色，柔軟，中位に厚く，味なく，臭明かなり；褶は深く垂生，帯白色～僅かクリーム色，のち幾分肉色，密～やや疎，むしろ狭

幅(2—4mm), 屢々叉状或は時に中部に於て多少纒絡す, 稜は平坦, 薄し; 茎は 2—4.5×0.3—0.7cm, 同幅或は上方に狭細, 平滑, 傘面より淡色, 頂部帯白色, 基部に白色綿絮あり, 中空; 胞子は楕円状紡錘形, 6縦溝を有し, 一端より見れば6角形, 1或は多油球を含み, 淡薔色, 非糊性, 9.5—13×4.5—6μ; 担子柄は 26—36×9—10μ, 4胞子; 稜嚢体及褶側嚢体なし; 菌絆なし。

所在及産地

シイ林内地上—夏秋　　本州

和名　クロウラベニタケ(黒裏紅茸)〔本郷〕

Clitopilus caespitosus PECK
カブウラベニタケ

PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 41 : 65. 1888—KAUFFMAN, Agar. Mich. 570, pl. 112-113. 1918—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 172. 1938.

(原, 日. 菌. 目. 75. 1954)

Pleuropus caespitosus MURR. N. Am. Fl. 10 : 101. 1917.

子実体は叢生; 傘は径 2.5—10cm, 初め丸山形, 速に開張し扁平となり, 遂に中央圧低さる; 表面は無毛, 幼時帯白色〜灰色, のち湿時水潤汚白色, 乾時鈍白色〜淡渋色にて絹状光沢あり, 平坦, 縁は初め内屈し, 老時反転し, 裂く; 肉は白色〜淡色, 薄く, 幾分緊緻なるも脆し, 味温和, 臭は僅かよし; 褶は直状垂生或は彎状垂生, 帯白色, のち汚淡肉色, 甚だ密, 薄く, 稜は往々微細鋸歯あり; 茎は 2.5—7×0.3—0.8cm, 同幅或は上方に狭細, 稀に下方に狭細, 絹状繊維あり, 頂部鱗片を存す, 淡色, 老時脆く, 裂け易し, 中実; 胞子は短円壔形, 平滑, 6×4μ; 胞子紋は甚だ淡き桃色; 可食。

所在及産地

樹下地上—夏秋　　北海道—北米

和名　カブウラベニタケ(株裏紅茸)〔今井〕

Rhodocybe R. MAIRE em. SING.
ムツノウラベニタケ属

R. MAIRE, Bull. Soc. Myc. Fr. 40 : 298. 1925—SINGER, Agaricales, 608. 1949.

子実体はエノキタケ (*Collybia*), カヤタケ (*Clitocybe*) 型, 殆どヒダサカズキタケ (*Omphalia*) 或はキシメジタケ (*Tricholoma*) 型; 傘は有色或は稀に類白色; 上表皮層は匍匐する放射状に配列せる菌糸より成る; 褶は狭生〜垂生, 往々彎生; 托実質はヒカゲウラベニタケ (*Clitopilus*) と甚だ同様; 担子柄は正常, 4胞子, 稀に1, 2, 3胞子; 稜嚢体は存在せずして, 特別なる型に属する擬嚢体を多生す, この嚢状体は有色にて乳管嚢体或は粘嚢体ならずして子実脚層に根を下し, 然らざれば肉の菌糸に平行に走る一様色の導管に連続するものなり, 或種に於ては斯くの如き嚢状体及び導管を有せず; 胞子紋はピンク色; 胞子は無色或は淡薔色, 粗面疣状, 中位の薄膜を有す, 発芽孔及び乳頭なく, 非糊性, 1端より見れだ甚しく角形にて, 側面或は正面より見れば胞子の只少数が部分的に角形なるを認めらる; 茎は存在し, 中心生; 肉は菌絆なき非糊性の菌糸より成る; 地上及び植物残屍上に生ず; 温帯及び亜熱帯産, 約 12 種を知らる; 或種は食用とさるるも, 苦きものは利用されず,

(本属名は rhodon [希] (ばら), kybos [希] (六面体, 骰子, 頭) より出づ)

基準種　*R. caelata* (FR.) R. MAIRE

本邦既知種

ムツノウラベニタケ ***R. mundula*** (432)

Rhodocybe mundula (LASCH) SING.
ムツノウラベニタケ

SINGER, Agaricales, 609. 1948—HONGO, Jour. Jap. Bot. 29 : 89, f. 1(7). 1954.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 76, f. 194, pl. 33. 1957)

Agaricus alutaceus BATSCH, Elench. Cont. 1 : 163, f. 119. 1783.

Agaricus mundulus LASCH, Linnaea, 4 : 526. 1829—FRIES, Epicr. Myc. 149. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 280. 1857; Hymen. Eur. 198. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 507. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 96. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3 : pl. 375, f. a (no. 345). 1886(?)—WINTER, Pilze, 1 : 718. 1884.

Clitopilus mundulus GILL. Champ. Fr. 407. 1878—KARSTEN, Hattsv. 1 : 270. 1879—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 7 : 49. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 700. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 548. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 245. 1893; Brit. Fungi, 244. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 160. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 110. 1908—REA, Brit. Basid. 310. 1922—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 173, f. 241. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 234. f. 209. 1957.

Paxillus amarellus var. *mundulus* QUÉL Enchir. Fung. 92. 1886.

Rhodosporus mundulus SCHROET. Pilze Schles. 1 : 618. 1889.

Orcella alutacea O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 863. 1891.

Hyporhodius mundulus P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl-fam. 1, 1** : 257. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 578. 1912.

Paxillus lepista RICKEN, Blätterp. 94, pl. 27, f. 4. 1911 (non FRIES)

Rhodopaxillus mundulus KONR. et MAUBL. Icon. Sel. Fung. 1 : pl. 278. 1926.

Paxillopsis mundula LANGE, Agar. Denm. 12 : 56. 1938; Fl. Agar. Dan. 4 : 48, pl. 133, f. B. 1939.

Clitopilopsis mundulus KÜHNER, Bull. Soc. Myc. Fr. 62 : 183. 1946—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 379. 1948.

子実体は群生；傘は径 2.5—6.5cm，丸山形にて鈍頭，のち漏斗形となる；表面は非粘性，汚白色，のち灰色点を生じ，遂に帯黒色となる，無毛，平滑；肉は中位に厚く，柔軟，淡色，茎にては帯黒色となる，臭は幾分穀粉状，味苦し；褶は垂生，汚白色，のち幾分肉色，密，狭幅，薄し；茎は 1.5—4×0.3—0.8cm，基部多少球根状，傘面と同色，全面綿絮状絨毛あり，中実；胞子は球形～類球形，殆ど平滑，非糊性，径 4—5μ，或は 5—7×4—5.5μ；胞子紋は淡肉色，稜嚢体なし；担子柄は 26—30×6—6.5μ.

所在及産地

ナラ類林内落葉間—秋

本州—欧．亜（小亜．西比）

和名 ムツノウラベニタケ（陸奥裏紅茸）〔本郷〕

Rhodophyllus QUÉL.

イッポンシメジタケ属

QUÉLET, Enchir. Fung. 57. 1886—SINGER, Agaricales, 611. 1949.

Agaricus trib. *Leptonia* FRIES, Syst. Mycol. 1 : 201. 1821.

Agaricus trib. *Nolanea* FRIES, l. c. 204. 1821.

Agaricus trib. *Facilia* FRIES, l. c. 207. 1821.

Agaricus trib. *Entoloma* FRIES, Epicr. Mycol. 143. 1838.

Acurtis FRIES, Summa Veg. Scand. 337. 1849.

Agaricus subgen. *Claudopus* W. G. SMITH, Clavis Agar. 17. 1870.

Entoloma QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1 : 116. 1872.

Leptonia QUÉL. l. c. 121. 1872.

Nolanea QUÉL. l. c. 122. 1872.

Eccilia QUÉL. l. c. 123. 1872.

Claudopus GILLET, Champ. Fr. 426. 1876.

Hyporhodius SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 613. 1889.

Latzinaea O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2:857. 1891.

Leptoniella EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5 : 424. 1909.

胞子は中位の厚き或は寧ろ薄き単一非糊性の膜を有し，通常角形にて，何れの方面より見るも角形なり；胞子紋はピンク色；担子柄は正常或はカーミン着色顆粒を有す，寧ろ稀に 2 胞子なるも常に 2 胞子のものあり；嚢状体は欠如或は存在，存在する時は只稜上或はその附近，又は褶側並に稜上にあり；托は正常形に於ては褶状；托実質は中層に於て整正，子実脚層に於て不整にて密なり；子実下層は甚だ短き菌糸より成る；子実体はヒラタケ（*Pleurotus*），クヌギタケ（*Mycena*），エノキタケ（*Collybia*），ヒダサカズキタケ（*Omphalia*），カヤタケ（*Clitocybe*）或はキシメジタケ（*Tricholoma*）等の諸型あり；褶は完全なる離生ならず；菌糸は非糊性，菌絆を有し或はこれを欠く，往々乳管を混在す，乳汁は只 1 種に存在するを知らる，種々なる基物上に生じ，菌蕈類の子実体上にも生じ，亦深蘚中，樹皮及び材上，落葉上等に生じ，最も屢々耕土上に生ず；裸実のものを知らる；汎布約 106 種を知らる；良好なる食用菌あるも，毒菌もあり。

（本属名は rhodon [希]（ばら），phyllon [希]（葉）より出づ）

基準種 *R. lividus* (BULL. ex FR.) QUÉL.

本邦既知亜属及種検索表

A. 傘は中窩を有し，褶は垂生，むしろ小形菌。

(1) ウツロタケ亜属 **Eccilia** (433)

B. 茎は軟骨質，傘は中窩を有し，多くは鱗被を被むり，縁は初め内屈す，褶は狭生にて離れ易し，むしろ小形菌。

(2) ススタケ亜属 **Leptonia** (434)

C. 茎は軟骨質，傘は屢々中丘を有し，非繊維質，縁は真直，褶は類離生或は彎状狭生，むしろ小形菌。

(3) イボガサタケ亜属 **Nolanea** (434)

D. 茎は太く繊維質又は肉質，傘は厚肉，縁は内屈，褶は陥入，むしろ大形菌。

(4) イッポンシメジタケ亜属 **Entoloma** (434)

(1) ウツロタケ亜属 **Eccilia**

A. 他菌上に生ぜず。

a. 茎はよく発達し，長さ 2—5cm；傘は鐘形～丸山形，径 1.5—3cm，表面白色～黄土色，無毛にて絹糸光沢あり或は微細鱗被あり；胞子 9—11×6—8μ.

キヌモミウラタケ *R. sericellus* (435)

b. 茎は欠如或は短し；初め背着，のち反転し傘を作り類腎臓形，介殻状等，白色にて，のち帯紅或

は帯灰色となる，綿絮状；胞子 7—10×6—7μ.

カクミノコナカブリタケ ***R. depluens*** (436)

B. サルノコシカケ科アズマタケ管孔面上に生ず；傘は白色；茎は幼時中心生，のち側生，長さ 0.3—0.6cm；傘は 1—2cm，丸山形，遂に反転す；胞子 10—7.5μ.

ヒメヤグラタケモドキ ***R. subdepluens***(436)

(2) ススタケ亜属 **Leptonia**

A. 傘に鱗被あり。

a. 褶稜は黒色；傘は青黒～黒褐色，径 1—3cm. 茎は青灰色；胞子 9—11×6—7μ.

ススタケ ***R. serrulatus*** (436)

b. 褶稜は黒色ならず。

α. 茎は白色～帯白色

I. 傘は径約 3cm，褐色；棱嚢体なし；胞子 9—11×6.5—7.5μ.

ムニンチャモミウラタケ

R. brunneolus (437)

II. 傘は 0.7—2cm，淡褐肉色；棱嚢体群生；胞子 10—12.5×7—9μ.

シバフウラベニタケ

R. pulchellus (437)

β. 茎は初め青空色，通常黒青菫色；傘は黒青或は鼠色，径 1—3cm；胞子 9—13×6—8μ.

アオエノモミウラタケ

R. lampropus (437)

B. 傘は無毛，乾燥，径 1.5—5cm，焦茶色；茎はほぼ同色；胞子 10—12.5×7—10μ.

チャモミウラタケ ***R. umbrinellus*** (438)

(3) イボガサタケ亜属 **Nolanea**

A. 傘は黄～白色.

a. 傘は黄色，径 1.5—5cm，無毛；茎長 4—12cm；胞子径 10—12μ；棱嚢体なし

キイボガサタケ ***R. murraii*** (438)

* 前者と異り黄白色，胞子やや小形，9—10.5 (12)μ.

シロイボガサタケ f. ***albus*** (439)

b. 傘は鈍黄色(蜜色)，酒赤色の鱗被あり；径 2—4.5cm；茎長 5—10cm；胞子 9.5—11μ；棱嚢体なし。

トガリウラベニタケ ***R. acutoconicus*** (439)

B. 傘は褐色

a. 中形菌，傘は径 2.5—7cm，茎長 3.5—9cm；傘面暗褐～灰褐色；胞子 9.5—11.5×7.5—9μ；棱嚢体あり。

ミイノモミウラタケモドキ

R. hirtipes (439)

b. 小形菌，茎長 7cm 以下

α. 棱嚢体あり；傘は暗褐色，径 0.6—1.5cm；茎長 2—4cm；胞子 10—12×7—8μ，4 胞子。

エイザンモミウラタケモドキ

R. mycenoides (439)

β. 棱嚢体なし

I. 4 胞子；傘は 1—2.5cm，灰褐色；茎長 2.5—6cm；胞子 9—10.5×6.5—7.5μ 或は 10—11.5×6.5—8μ。

コモミウラタケモドキ

L. mammosus (440)

II. 2 胞子；傘は 0.8—1.5cm，褐色；茎長 1.5—2cm；胞子 9—10.5×6.5—7.5μ。

フタツミウラベニタケ

R. bisporus (440)

C. 傘は黄色或は褐色ならず

a. 傘は濃鮭肉色或はこれに橙色を帯ぶ，径 1—2cm；茎長 5—12cm；胞子 10—12.5×9μ；棱嚢体は少数或は欠如。

アカイボガサタケ ***R. salmoneus*** (440)

b. 傘は青空色，径 2—3cm 茎長 4—5.5cm；胞子 11—12.5×8.5—9.5μ；棱嚢体なし。

ソライロタケ ***R. aeruginosus*** (441)

(4) イッポンシメジタケ亜属 **Entoloma**

A. 子実体は屢々畸形となりホコリタケの如く塊茎状となる；正常体は灰褐色，傘径 3—10cm；褶は垂生。

タマウラベニタケ ***R. abortivus***(441)

B. 畸形体を作らず；褶は垂生ならず，

a. 傘は吸水性ならず，屢々鱗片—繊維状

α. 傘は帯青，帯藍或は帯紫色。

I. 小形～むしろ小形菌。

1. 傘径 0.5—1.3cm，暗青紫色；胞子 8—10×5.5—6.5μ.

ヒメコンイロイッポンシメジタケ

R. coelestinus var. ***violaceus***(442)

2. 傘径 2—3.5cm，灰紫色；胞子 8.5—10×6.5—7.5μ.

コムラサキイッポンシメジタケ

R. violaceus (442)

II. 中形菌

1. 傘は帯紫灰色，径 3—8cm；胞子 8—10

×8—9μ。
ウスムラサキイッポンシメジタケ
R. bloxami (442)
2. 傘は黒紺色，径3—7cm；胞子 10—11.5×6.5—9μ。
コンイロイッポンシメジタケ
R. nitidus (443)
3. 傘は帯菫黒藍色～濃青菫色，径4～7cm；胞子 10—12.5×7.5—10μ。
ムラサキイッポンシメジタケ
R. subnitidus (443)
β. 傘は帯青，藍，紫色ならず
Ⅰ. 褶は初め灰色；傘は帯黄灰色，径2—4cm；胞子 8—10×7.5—8μ。
ヒメイッポンシメジタケ
R. erophilus (443)
Ⅱ. 褶は初め白色
1. 大形菌，傘は径5—16cm，黄灰色；胞子 9—11×6—9μ。
イッポンシメジタケ
R. sinuatus (444)
2. 中形菌，傘は 5—8cm，淡黄褐色；胞子 8—10×7—8μ。
コイッポンシメジタケ
R. prunuloides(445)
b. 傘は吸水性，乾けば光沢あり
α. 褶は初め灰色
Ⅰ. 地上生；傘は暗栗褐色，径 3.5—7cm；胞子 8—9×6.5—7.5μ。
ニセイッポンシメジタケ
R. turbidus (445)
Ⅱ. 水蘚上生；傘は淡灰褐色，径 2.5—4cm；胞子 10—12×5.5—7.5μ。
ヤチイッポンシメジタケ
R. uliginosus (446)
β. 褶は初め白色
Ⅰ. 臭は強く刺激性；傘は径3—6cm，開張更に屢々凹形となる，淡黄灰～類白色；茎は細長5—10×0.3—1cm，中空；胞子 8—10×7—9μ。
コクサウラベニタケ ***R. nidorosus***(446)
Ⅱ. 強臭なく，多くは穀粉臭
1. 茎は繊維状，4—8×0.5—1.5cm，充塞～中空；傘は汚黄褐～暗褐色，径 2—10cm，中丘あり。
シメジタケモドキ ***R. clypeatus***(447)
2. 茎は繊維状ならず。
甲. 茎は比較的細く,5—10×0.5—1.5cm，中空；傘は淡鼠色，径 3—8cm；胞子 10—12×7—8μ。
クサウラベニタケ
R. rhodopolius(448)
乙. 茎は長大，10—18×1.5—2cm，中実；傘は帯褐鼠色，径7—12cm；胞子 10—12(14)×8—10μ。
ウラベニホテイシメジタケ
R. crassipes (448)

（1） Eccilia (Fr) sensu Lange
ウツロタケ亜属

Rhodophyllus sericellus (Fr.) Quél.
キヌモミウラタケ

Quélet, Enchir. Fung. 61. 1886—Patouillard, Ess. Tax. 160. 1900—Lange, Agar. Denm. 4 : 34, f. 8. 1921; Fl. Agar. Dan. 2 : 99, pl. 77, f. E. 1936—Singer, Agaricales, 617. 1949—Kühner & Romagnesi, Fl. Analyt. Champ. Super. 181. 1953—Heim, Champ. Eur. 2 : 320. 1957.

Agaricus sericellus Fr. Syst. Myc. 1 : 196. 1821; Epicr. Myc. 146. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 274. 1857; Hymen. Eur. 194. 1874—Berkeley, Outl. Brit. Fung. 144. 1860—Cooke, Handb. Brit. Fungi, 1 : 93. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3 : pl. 307 (no. 335). 1886—Karsten, Myc. Fenn. 3 : 103. 1876—Winter, Pilze, 1 : 722. 1884.

Entoloma sericellum Quél. Champ. Jura Vosg. 1 : 118, pl. 5, f. 5. 1872—Gillet, Champ. Fr. 405. 1874—Karsten, Hattsv. 1 : 264. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 147. 1889—Saccardo, Syll. Fung. 5 : 691. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 537. 1915—Massee, Brit. Fung. Fl. 2 : 277. 1893; Brit. Fungi, 234. 1911—W. G. Smith, Brit. Basid. 106, 1908—Kauffman, Agar. Mich. 550. 1918—Bresadola. Icon. Myc. 12 : 557. 1929—Wakefield & Dennis, Comm, Brit. Fungi, 138, pl. 52, f. 5. 1950.

Hyporhodius sericellus Schroet. Pilze Schles. 1 : 616. 1889—P. Hennings, in Engler & Prantl, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 257. 1900—Migula, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 570, pl. 113, f. 5-6. 1912.

Leptonia sericella Barbier, Bull. Soc Myc. Fr. 27 : 178. 1911—Ricken, Blätterp. 289, pl. 73, f. 4. 1915—Rea, Brit. Basid. 346. 1922—Imai, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 177. 1938—Konrad & Maublanc, Agaricales, 1 : 260. 1948.

（原，日．菌．目．180．1954）

子実体は群生；傘は径 1.5—3cm，鐘形～丸山形，のち扁平となり，遂に圧低さる；表面は白色或は帯黄白色，往々中央黄土色を帯ぶ，殆ど無毛にて絹状光沢を有し，或は微細鱗被あり，縁は内屈し，綿毛あり；肉は白色，薄く，臭なし；褶は直生，小歯により僅か垂生，のち速に離る，初め白色，のち肉色となる，むしろ疎，広幅；茎は 2—5×0.2—0.3cm，同幅，白色或は淡色，平滑，光沢あり，幾分透明，中空；胞子は卵形或は円壔形にて有稜，9—11×6—8μ；胞子紋は肉色。

所在及産地

林地草原地上—秋　　北海道—欧．北米

和名　キヌモミウラタケ（絹紅絹裏茸）〔今井〕

Rhodophyllus depluens (BATSCH ex FR.) QUÉL.

カクミノコナカブリタケ

QUÉLET, Enchir. Fung. 65. 1886—PATOUILLARD, Ess. Tax. 160. 1900—SINGER, Agaricales, 616. 1949.

Agaricus depluens BATSCH, Elench. Fung. Cont. 1 : 167, pl. 24, f. 122. 1876—NEES, Syst. Pilze Schw. 195, f. 179. 1817—FRIES, Syst. Myc. 1 : 275. 1821; Epicr. Myc. 212. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 401. 1857; Hymen. Eur. 214. 1874—PERSOON, Myc. Eur. 3:29. 1823—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 470. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 165. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 98. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3 : pl. 344, f. b. (no. 371). 1886—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 113. 1876—WINTER, Pilze, 1 : 705. 1884.

Agaricus sinuatus PERS. Obs. Myc. 2 : 46. 1799.

Agaricus epigaeus PERS. Obs. Myc. 2 : 47. 1799; Syn. Meth. Fung. 484. 1801—COOKE, Handb. Austr. Fungi, 59. 1892.

Claudopus depluens Gill. Champ. Fr. 427. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 289. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 157. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 734. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 575. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 237, f. 1-3 (p. 236). 1893; Brit. Fungi, 575. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 120. 1908—MURRILL, N. Am. Fl. 10:78. 1917—KAUFFMAN, Agar. Mich. 592. 1918—REA, Brit. Basid. 453. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 12 : pl. 596. 1930.—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1: 271. 1948.

（広江，応用菌蕈学．1177，f. 795，1941—原，日．菌．目．70．1954—今関及土岐．林．試．研．報．67 : 35．1954）

Crepidotus depluens QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1 : 138. 1872—RICKEN, Blätterp. 232. pl. 61, f. 3. 1915.

Derminus depluens SCHROET. Pilze Schles. 1 : 579. 1889.

Hyporhodius depluens P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 254. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2 (2) : 556. 1912.

Rhodophyllus byssisedus KÜHN. et ROMAGN. Fl. Analyt. Champ. Super. 182. 1953.

子実体は群生；傘は径 1—5cm，初め背着し，のち反転す，類円形，類腎臓形，介殻状等形状変化す，表面は白色綿絮状にてのち帯紅或は帯灰色となる；肉は膜質，甚だ薄し；茎は欠如或は短く，白色，絨状；褶は茎より放射状，熟時桃色，やや疎或は疎，広幅；胞子は有稜，幅より幾分長く，縦観にて球状角形，1油球を含む，7—10×6—7.5μ；胞子紋は桃色；稜囊体は糸状，45—50×4—6μ。

所在及産地

林内腐木或は腐蝕物上—夏秋

本州—欧．北米

和名　カクミノコナカブリタケ（角実粉被茸）〔広江〕

Rhodophyllus subdepluens (FITZP.)

ヒメヤグラタケモドキ

Claudopus subdepluens FITZP. Mycologia, 7 : 37, f. 1, pl. 153. 1915—MURRILL, N. Am. Fl. 10 :78. 1917.

（松浦，蕈類辞典，214, f. 257. 1933；応用菌蕈学，f. 796 (1178). 1941—原，日．菌．目．71．1954）

傘は大なるは 2×1.3cm，多くは 1×0.7cm，丸山形～開張，老時縁部反転し不正形となる；表面は白色；褶は着生或は多少垂生，初め白色，のち赤褐色，疎，全縁；茎は幼時中心生，のち側生，白色，0.3—0.6×0.1cm；胞子は角形，平滑，1油球を含み，10×7.5μ，胞子紋は赤褐色。

所在及産地

アズマタケ（*Onnia orientalis*）の管孔面上

本州—北米

和名　ヒメヤグラタケモドキ（姫擬櫓茸）〔松浦〕

〔因記〕本菌は北米にてオツネンタケ（*Coltricia perennis*）に生ずるものにて原記載によれば遥に小形（傘径 1—4mm）なり。

(2) Leptonia (FR) sensu LANGE

ススタケ亜属

Rhodophyllus serrulatus (FR.) QUÉL.

ススタケ

QUÉLET, Enchir. Fung. 60. 1886—LANGE, Agar.

Denm. 4 : 32, f. 2. 1921; Fl. Agar. Dan. 2 : 98, pl. 77, f. G. G'. 1936—SINGER, Agaricales, 619. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 207. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 319, f. 227, c. 1957.

Agaricus serrula PERS. Syn. Meth. Fung. 463. 1801.

Agaricus serrulatus FR. Syst. Myc. 1 : 204. 1821; Epicr. Myc. 153. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 286. 1857; Hymen. Eur. 203. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 146. 1840—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 108. 1876—WINTER, Pilze, 1 : 714. 1884.

Leptonia serrulata QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1 : 121. 1872—GILLET, Champ. Fr. 412, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 275. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 152. 1889. (sub nom. *serulata*)—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 710. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 556. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 252. 1893; Brit. Fungi, 241. 1911 (?)—W. G. SMITH, Brit. Basid. 113. 1908—MAIRE, Bull. Soc. Myc. Fr. 26 : 174, pl. 6, f. 6-9. 1910. (*f. laevipes*)—RICKEN, Blätterp. 291. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 577. 1918—REA, Brit. Basid. 345. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 12 : pl. 573. 1929—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 1 : pl. 184, f. 1. 1932 (*f. laevipes*): Agaricales. 1 : 1948—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 139, pl. 53, f. 5. 1950.

(川村, 日. 菌. 図鑑, 5 : 587, f. 556. 1954)

Hyporhodius serrula SCHROET. Pilze Schles. 1 : 615. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 256. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze. 2(2) : 568. 1912.

子実体は群生或は散生；傘は径 1—3cm, 半球状丸山形, 幾分中窩あり；表面は帯青黒色, やや光沢あり, のち焦茶色或は暗褐色の鱗被を被むる, 縁辺に僅か線条あり；肉は甚だ薄し, 非吸水性, 帯白色；褶は直生, 初め灰色, のち帯灰肉色, やや疎, 甚だ広幅, 稜は鋸歯状にて帯黒色；茎は 3—6×0.2—0.3cm, 同幅, 青灰色にて傘面より淡色, 頂部黒点或は線あり, 基部白色綿絮を有す, 軟骨質, 中空；胞子は卵形にて有稜, 9—11×6—7 μ; 胞子紋は桃色；稜嚢体は棍棒形, 内容藍青色, 幅 11—12μ。

所在及産地

林内及芝生—夏秋　本州—欧. 北米. 亜(錫)

和名　ススタケ（煤茸）〔川村〕

Rhodophyllus brunneolus (S. ITO et IMAI)

ムニンチヤモミウラタケ

Leptonia brunneola S. ITO et IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16 : 48. 1940.

子実体は孤生；傘は径約 3cm, 圧低されたる丸山形, のち開張す；表面は乾燥, 褐色粉或は褐色粉状細鱗片を被むる, 縁は初め甚だ内捲す；肉は白色, 甚だ薄し；褶は直生；初め白色, のち肉色, 疎, やや狭幅, 茎は約 5×0.4cm, 殆ど同幅, 白色或は帯白色, 繊維あり, 頂部僅か粉状, 中空；胞子は楕円形にて有稜, 9—11×6.5—7.5μ；嚢状体なし。

所在及産地

林地—秋　小笠原島

和名　ムニンチャモミウラタケ（無人島茶紅絹裏茸）〔今井〕

Rhodophyllus pulchellus HONGO

シバフウラベニタケ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 32 : 212, f. F-H. 1957.

子実体は群生；傘は径 0.7—2cm, 丸山形にて中窩あり, やや吸水性, 周縁に多少線条あり, 屢々微細鱗被あり, 特に中央に著し, 淡褐肉色, 中部褐色を帯ぶ, 乾時淡色となりて絹状；肉は薄く, 脆く, 無味無臭；褶は直生或は類垂生, やや疎, 便腹状, 幅 2—4mm, 白色, のち肉色；茎は 2—3×0.15—0.25cm, 同幅, 時に圧辺, 無毛, 白色～帯白色, 管状, 類軟骨質, 基部に白色綿絮あり；胞子紋は肉色；胞子は異径, 稜形, 10—12.5×7—9μ, 通常 1 油球あり；担子柄は 4 胞子, 26—37×9.5—11μ; 稜嚢体は群生, 25—37×13—14.5μ, 棍棒形～頭状, 無色, 薄膜；菌絆は少くとも担子柄の基部には欠如。

所在及産地

芝生地上—夏　本州

和名　シバフウラベニタケ（芝生裏紅茸）〔本郷〕

Rhodophyllus lampropus (FR.) QUÉL.

アオエノモミウラタケ

QUÉLET, Enchir. Fung. 60. 1886—LANGE, Agar. Denm. 4 : 33, f. 4. 1921; Fl. Agar. Dan. 2 : 98, pl. 76, f. c. 1936—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 208. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 318, f. 227, A. 1957.

Agaricus lampropus FR. Syst. Myc. 1 : 203. 1821; Epicr. Myc. 152. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 285. 1857; Hymen. Eur. 202. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 146. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 99. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3 : pl. 331(uo. 353). 1886; Handb. Austr. Fungi, 40. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 107. 1876—WINTER, Pilze, 1 : 715. 1884.

Leptonia lampropus QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1 : 121. 1872—GILLET, Champ. Fr. 416, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 274. 1879; Krit. Oefv.

Finl. Basidsv. 152. 1889. (sub nom. *lampropoda*) —SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 707. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 557. 1915. (sub nom. *lampropoda*) —MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 251. 1893; Brit. Fungi, 241, pl. 17, f. 1. 1911 (sub nom. *lampropoda*)—W. G. SMITH, Brit. Basid. 112. 1908—RICKEN, Blätterp. 293, pl. 73, f. 7. 1915—KAUFFMAN, Agr. Mich. 574. 1918 (sub nom. *lampropoda*)—REA, Brit. Basid. 344. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 12 : pl. 570, f. 1. 1929. (sub nom. *lampropoda*)—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 175. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 259. 1948. (sub nom. *lampropoda*)—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 139, pl. 53, f. 7. 1950.

(S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16 : 48. 1940—原, 日. 菌. 目. 180. 1954)

Hyporhodius lampropus SCHROET. Pilze Schles. 1 : 615. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 256. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 567. 1912.

子実体は群生或は孤生; 傘は径 1—3cm, 鐘形〜丸山形, のち扁平となり, やや中窩を生ずるか或は圧低され, 乳頭状ならず; 表面は非吸水性, 黒青色或は鼠色, のち煤灰色, 絹様綿架状にて, のち暗褐微細鱗被を被むる, 鱗被は中央に於て密なり, 全く線条なく, 往々割裂す, 縁は内捲し, のち開平す; 肉は初め帯青黒色, のち灰色〜白色, やや吸水性, 薄く, 味及臭なし; 褶は直生, 容易に離れ, のち離生, 初め白色, のち桃色, やや疎, 広幅, 便腹状, 稜は平坦にて同色; 茎は 2.5—5×0.2—0.4cm, 細長, 同幅, 或は上方に僅か狭細, 初め青空色にて暗褐色となる, 通常黒青菫色, 無毛, 平坦, 基部白綿架状, 緊緻, 軟骨質, 充塞, のち中空; 胞子は楕円形にて有稜, 大さ変化し, 9—13×6—8μ; 胞子紋は桃色。

所在及産地

林地, 草原地—秋

北海道, 本州, 小笠原島—欧. 北米. 濠

和名 アオエノモミウラタケ (青茎紅絹裏茸) 〔今井〕

Rhodophyllus umbrinellus (IMAI)

チャモミウラタケ

Leptonia umbrinella IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 176. 1938.

(原, 日. 菌. 目. 180. 1954)

子実体は孤生; 傘は径 1.5—5cm, 丸山形, のち開張し, 遂に僅か圧低さる; 表面は乾燥, 淡焦茶色, 中央暗色, 無毛, 線条なし, 縁は初め内屈す; 肉は灰色, 柔靱, 臭なし; 褶は狭生或は彎生, 初め帯白色, のち桃色となる, 密; 茎は 3—7×0.2—0.4cm, 同幅或は基部僅か肥大, 傘面とほぼ同色或は淡色, 絹状繊維を有し, 屢々撓曲す, 中空; 胞子は楕円形或は円壔形にて有稜, 10—12.5×7—10μ; 胞子紋は桃色。

所在及産地

林地—秋 北海道

和名 チャモミウラタケ (茶紅絹裏茸) 〔今井〕

(3) Nolanea (FR) sensu LANGE

イボガサタケ亜属

Rhodophyllus murraii (BERK. et CURT.) SING.

キイボガサタケ

SINGR, Agaricales, 621. 1949.

(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 77, f. 195, pl. 34, f. 195, 1957)

Agaricus Murraii BERK. et CURT. Ann. Mag. Nat. Hist. III, 4 : 289. 1859.

Agaricus cuspidatus PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 24 : 64, pl. 2, f. 14-18. 1872.

Entoloma cuspidatum SACC. Syll. Fung. 5 : 688. 1887—KAUFFMAN, Agar. Mich. 561, pl. 110. 1918.

Entoloma Murraii SACC. Syll. Fung. 14 : 127. 1899—MURRILL, N. Am. Fl. 10 : 113. 1917.

(IMAI. Bot. Mag. Tokyo, 55 : 451. 1941—今関, 原色きのこ, pl. 28(右). 1942—本郷, 植. 研. 雑. 26 : f. c, D. 1951)

Hyporhodius cuspidatus P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 257. 1900

子実体は群生; 傘は径 1.5—5cm, 円錐形或は円錐状鐘形にて開張せず, 高さ 1—3cm, 先端に長き乳頭を有す; 表面は湿潤, 黄色, 無毛, 絹状光沢あり, 平坦或は老時割裂す, 縁は褶より抽出し, 屢々不正形或は僅か浅裂す; 肉は薄し, 味及臭温和; 褶は上昇, 狭く着生, 初め淡黄色, のち肉色となる, やや疎, 広幅, 便腹状, 稜は平坦ならずしてやや歯状; 茎は 4—12×0.2—0.3cm, 同幅, 淡黄色, 無毛, 僅か繊維あり, 往々捩曲す, やや軟骨質の外皮を有す, 中空; 胞子は類球形にて有稜, 著しき嘴あり, 10—12μ; 担子柄は 44—50×10.5—12μ; 胞子紋は桃色; 稜嚢体なし; 食毒不明。

所在及産地

林内地上, 湿地蘚間—夏秋 本州—北米

和名 キイボガサタケ (黄疣笠茸) 〔広江〕

f. **albus** (HIROE) HONGO

シロイボガサタケ

HONGO, Jour, Jap. Bot. 29 : 92. 1954.
(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 77, pl. 34, f. 195. 1957)
(原, 日. 菌. 目. 116. 1954)
Entoloma album f. HIROE, Appl. Mushr. Sci. 4 : 1. 1939.
Entoloma Murraii f. *album* HONGO, Jour. Jap. Bot. 26 : 23, f. E, F. 1951.

原種と異り黄白色菌にて胞子やや小形, 径 6—10.5μ, 時に 12μ に及び, 担子柄 42—47×10—12μ.

所在及産地
混淆林地上—秋　本州

和名 シロイボガサタケ(白疣笠茸)〔広江〕

Rhodophyllus acutoconicus HONGO

トガリウラベニタケ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 31 : 252, f. 3, a-b. 1956.
(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 77. 1957)

子実体は群生; 傘は径 2—4.5cm, 高さ 1.5—3cm, 円錐形〜類鐘形, 屢々先端小乳頭を有す, やや吸水性, 蜜色, 線条あり, 酒赤色の微細鱗片を有す, 中央鱗片は連結し, 周辺は鱗被なく, 屢々不正形; 肉は薄く, 類膜質, 臭はアルカリ様, 味よし; 褶は上昇, 便腹状, 狭生, 疎, 甚だ広幅 (6—12mm), 白色, のち肉色, 横脈あり, 稜は腐蝕; 茎は 5—10×0.3—0.45cm, 同幅, 僅か繊維状線条あり, 屢々捩曲, 蜜色, 酒赤褐色鱗片を散生し, 中空, 内部白色, 基部白綿毛あり; 胞子は等径にて殆ど 8 面体, 1 油球を含み, 甚だ淡き肉色, 径 9.5—11μ; 担子柄は 4 胞子, 29—45×12.5—13μ; 稜及褶側嚢体なし。

所在及産地
笹間地上—秋　本州

和名 トガリウラベニタケ(尖頭裏紅茸)〔本郷〕

Rhodophyllus hirtipes (SCHUM. ex FR.) QUÉL.

ミイノモミウラタケモドキ

QUÉLET, Enchir. Fung. 64. 1886—LANGE, Agar. Denm. 4 : 35, f. 4. 1921; Fl. Agar. Dan. 2 : 101, pl. 78, f. G. 1936—SINGER, Agaricales, 621. 1949.
(今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 78, f. 199, pl. 34, f. 199. 1957)
Agaricus hirtipes SCHUM. Fl. Dan. 29 : pl. 1730, f. 2. 1821—FRIES, Syst. Myc. 1 : 206. 1821; Epicr. Myc. 158. 1838; Hymen. Eur. 209. 1874.
Nolanea hirtipes QUÉL. Champ. Jura Vosg. Suppl. 2 : 344. 1873—GILLET, Champ. Fr. 422. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 284. 1879—KONRAD, Bull. Soc. Myc. Fr. 45 : 47. 1929; & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 2 : pl. 177. 1930; Agaricales, 1 : 264. 1948.
(本郷, 植. 研. 雑. 26 : 24, f. G. H. 1951—今関及土岐, 林. 試. 研. 報. 87 : 53. 1956)
Hyporhodius hirtipes MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 560. 1912.
Latzinaea hirtipes O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2: 857. 1891.
Nolanea pascuus QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1: 122. 1872—REA, Brit. Basid. 401. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 12 : pl. 580. 1929. (non PERSOON, FRIES et Auct.)
(白井, 日. 菌. 目. ed. 3. 235. 1927—原, 日. 菌. 目. 226. 1954)
Rhodophyllus pascuus QUÉL. Enchir. Fung. 63. 1886.
Nolanea acceptandes SACC. Syll. Fung. 5:724. 1887.
Nolanea mammosa BOUDIER, Icon. Myc. 49, pl. 97. 1906—RICKEN, Blätterp. 299, pl. 74, f. 6. 1913—BRESADOLA, Icon. Myc. 12 : pl. 583. 1929. (non FRIES et Auct.)
?(IMAI. Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Nniv. 43 : 178. 1938—原, 日. 菌. 目. 226. 1954)

子実体は群生; 傘は径 2.5—7cm, 円錐状鐘形〜丸山形, 屢々中丘或は小乳頭を有す; 表面は吸水性, 湿時暗褐色, 周縁に透明線条あり, 乾時淡灰褐色となり線条なく絹状光沢あり, 無毛, 縁は初め僅か内屈す; 肉は薄く, 淡色, 臭は多少強くして不快; 褶は直状彎生, のち離る, 灰白色, のち汚肉赤色, やや密, 甚だ広幅, 便腹状, 稜は僅か鋸歯状; 茎は 3.5—9×0.3—0.6cm, 同幅にて基部やや肥大, 銀色にて煙色或は淡渋色を帯ぶ, 絹状繊維を有し, 基部に白色綿絮あり, 微線条あり, 屢々捩曲す, 中空; 胞子は楕円形にて有稜, 9.5—11.5×7.5—9μ, 或は 11—15×7.5—10μ; 胞子紋は桃色; 稜嚢体は棍棒形, 35—55×10—14μ; 可食。

所在及産地
林内蘚間—春秋　本州—欧

和名 ミイノモミウラタケモドキ(三重擬紅絹裏茸)〔本郷〕

Rhodophyllus mycenoides HONGO

エイザンモミウラタケモドキ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 31 : 253, f. 3, c-f. 1956.

子実体は群生; 傘は径 0.6—1.5cm, 高さ 0.4—1cm, 類鋭頭或は鈍頭の円錐形, 無毛, 吸水性, 中央類暗褐色, 縁の方淡色, 湿時透明線条あり, 乾時無線条, 縁は殆ど完全; 肉は脆く, ほぼ同色, 薄く, 膜質; 褶は上昇, 直生, 便腹状, 灰色〜赤褐色, 疎, 屢々やや鋸歯状, 幅 1.5—3mm; 茎は 2—4×0.08—2

cm，同幅或は基部やや肥大，管状，やや繊維状，屢々捩曲，傘の中盤と同色，頂部淡色，基端に白綿毛あり；胞子は不等径にて外囲卵形，有角，普通1油球を含み，甚だ淡き肉色，10—12×7—8μ；担子柄は4胞子，30—38×11—12.5μ；稜嚢体は多生，便腹紡錘形或は狭紡錘形，屢々長或は短頸を有す，薄膜，無色，32—67×9.5—19.5μ；菌絲なし。

所在及産地

蘚間生—秋　本州

和名　エイザンモミウラタケモドキ（叡山擬裏紅絹茸）〔本郷〕

Rhodophyllus mammosus (L. ex FR.) QUÉL.

コモミウラタケモドキ

QUÉLET, Enchir. Fung. 64. 1886; Fl. Myc. 168. 1888—PATOUILLARD, Ess. Tax. 160. 1900—SINGER, Agaricales, 621. 1949—HEIM, Champ. Eur. 2 : 321. 1957.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，78, f. 198, pl. 34, f. 198. 1957）

Agaricus mammosus L. Sp. Pl. 2 : 1174. 1753—FRIES, Epicr. Fung. 156. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 293. 1938; Hymen. Eur. 207. 1874—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2:163. 1867—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 110. 1876—WINTER, Pilze, 1 : 710. 1884. (non COOKE, Illus.)

Nolanea mammosa QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1 : 122, pl. 6, f. 5. 1872—GILLET, Champ. Fr. 419. c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 281. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 155. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 718. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 564. 1915 pr. p.—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 259. 1893; Brit. Fungi, 238. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 115. 1908—MURRILL, N. Am. Fl. 10 : 101. 1917—KAUFFMAN, Agar. Mich. 583. 1918—REA, Brit. Basid. 403. 1922—KONRAD, Bull. Soc. Myc. Fr. 39 : 36, pl. 2, f. 5. 1923; 45 : 50. 1929—BRESADOLA, Icon. Myc. 12 : pl. 582. 1929—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 2 : pl. 180, f. 1. 1932; Agaricales. 1 : 265. 1948. (non BOUDIER, RICKEN, IMAI)

Hyporhodius mammosus SCHROET. Pilze Schles. 1 : 614. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 256. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 564, pl. 110, f. 4-5. 1912.

Latzinaea mammosa O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 857. 1891.

Rhodophyllus infula QUÉLET, sensu HONGO, Jour. Jap. Bot. 29 : 90, f. 1(8). 1954; 31 : 199, f. 1, c. 1956.

子実体は群生；傘は径 1—2.5cm，円錐形～丸山形，のち屢々反転す，通常小なる著しき乳頭を有す；表面は吸水性，水潤灰褐色，湿時透明線条あり，乾時不透明にて幾分絹状；肉は薄く，傘面と同色，臭なし；褶は狭生～殆ど離生，白色，のち肉色，やや疎或は疎，便腹状，稜は平坦或は僅か蝕壊す；茎は 2.5—6×0.1—0.3cm，同幅，傘面と同色，基部に白色綿絮あり，軟骨質，中空；胞子は多角形にて不等径，非糊性，9—10.5×6.5—7.5μ，或は 10—11.5×6.5—8μ；胞子紋は肉色；担子柄は 30—35×7.5—10μ（或は 26—33×9—10μ），4胞子；菌糸は菌絆を有せず。

所在及産地

林地—秋　本州—欧．北米．亜（西比）

和名　コモミウラタケモドキ（小擬紅絹裏茸）〔本郷〕

Rhodophyllus bisporus HONGO

フタツミウラベニタケ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 32 : 212. f. C-E. 1957.

子実体は群生；傘は径 0.8—1.5cm，丸山形～扁平，平滑，淡褐色，中部褐色，湿時透明線条あり，乾時線条なくして光沢あり，縁は初め多少内屈す；肉は薄く，やや同色，吸水性，脆く，臭殆ど無く，味は温和；褶は狭生或は直状狭生，便腹状，幅 1—2mm，疎或はやや疎，白色，のち桃色；茎は 1.5—2×0.1—0.2cm，同幅，無毛，傘と同色或は淡色，頂部霜粉状，基部白色綿毛あり；胞子紋は肉色；胞子は異径，稜形，9—10.5×6.5—7.5μ，1～多油球あり；担子柄は2胞子，34—40×6.5—7.5μ；稜及褶側嚢体なし；菌絆なし。

所在及産地

ヒノ木植林内腐蝕質或は腐木上—春　本州

和名　フタツミウラベニタケ（二胞子裏紅茸）〔本郷〕

Rhodophyllus salmoneus (PECK) SING.

アカイボガサタケ

SINGER, Agaricales, 621. 1949.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，77, f. 196, pl. 34, f. 196. 1957）

Agaricus salmoneus PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 24 : 65, pl. 4. 1872.

Entoloma salmoneum SACC. Syll. Fung. 5:693. 1887—MURRILL, N. Am. Fl. 10 : 113. 1917; Mycologia, 9 : 186, pl. 7, f. 3. 1917—KAUFFMAN, Agar. Mich. 560. 1918.

（今関，原色きのこ，pl. 28(中). 1942—本郷，植．分．地．14 : 55. 1950）

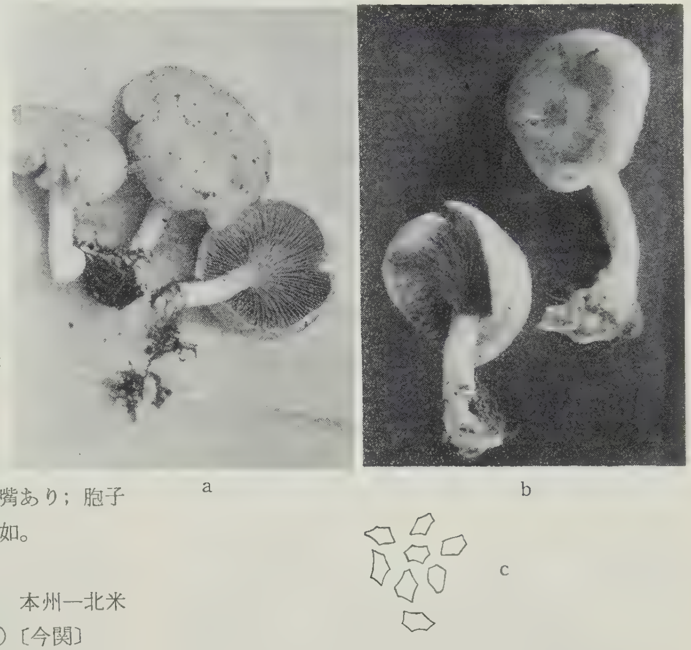
Hyporhodius salmoneus P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl-fam. 1, 1** : 257. 1900.

子実体は群生或は散生；傘は径 1—2 cm, 円錐形或は鐘形にて開張せず，屢々高さ幅より長し，中央は乳頭状或は類鋭頭；表面はやや吸水性或は湿潤，濃鮭肉色或は橙色の色彩を帯ぶ，縁は平坦或は殆ど平坦；褶は上昇，狭生，鮭肉黄色或は鮭肉色, やや疎，広幅，便腹状；茎は 5—12×0.2—0.4cm，細長く，同幅，無毛，頂部粉状，鮭肉色，内生絹状細線条あり，やや軟骨質となる，中空；胞子は瘤のため方形，対角線にて 10—12.5μ，側径約 9μ，著しき嘴あり；胞子紋は帯桃鮭肉色；稜嚢体は少生或は欠如。

所在及産地

林内蘚間—夏秋　本州—北米

和名　アカイボガサタケ（赤疣笠茸）〔今関〕



a　b　c

第 189 図　タマウラベニタケ　Rhodophyllus abortivus
a. b. 子実体 ×1/2　c. 胞子 ×500（大谷氏）

Rhodophyllus aeruginosus (HIROE) HONGO

ソライロタケ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 29 : 92. 1954.
（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，77, f. 197, pl. 34, f. 197. 1957）
Entoloma aeruginosum HIROE, Appl. Mushr. Sci. 4 : 1. 1939—HONGO, Acta Phytotax. Geobot. 14 : 55, f. 10. 1950.
（原，日．菌．目．117．1954）

子実体は群生或は孤生；傘は径 2—3cm，円錐形，のち丸山状扁平，屢々頂部に細小の乳頭を有す，薄し；表面は青空色；小鱗片を被むり，絹状光沢あり，縁は時に不平坦；褶は狭生或は殆ど離生，傘面と同色，のち肉色となる，やや疎，広幅；茎は 4—5.5×0.3—0.4cm，細長，やや同幅，傘面と同色，繊維を有し，幾分捩曲す；胞子は不正多角形，11—12.5×8.5—9.5μ；胞子紋は肉色，擦傷時黄色に変色す。

所在及産地

湿潸林地上—秋　本州

和名　ソライロタケ（空色茸）〔広江〕

(4) Entoloma (FR.) sensu LANGE

イッポンシメジタケ亜属

Rhodophyllus abortivus (BERK. et CURT.) SING.

タマウラベニタケ

SINGER, Agaricales, 617, pl. 6. 1949.
Agaricus abortivus BERK. et CURT. Ann. Mag. Nat. Hist. III, 4 : 289. 1859.
Clitopilus abortivus SACC. Syll. Fung. 5 : 701. 1887—KAUFFMAN, Agar. Mich. 564, pl. 111. 1918—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 136, pl. 66. 1927—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 172. 1938.
（原，日．菌．目．75．1954）
Orcella abortiva O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2: 863. 1891.
Hyporhodius abortivus P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 257. 1900.
Pleuropus abortivus MURR. Mycologia, 3:280. 1911; 4 : 6, pl. 56, f. 12. 1912; N. Am. Fl. 10 : 108. 1917.

子実体はやや叢生，群生或は孤生，屢々畸形となりて傘及褶を作らずして球形～圧球形の白色菌糸塊となり外見ホコリタケの如きも内部常に白色を呈し，その附近に正常体を認め得；傘は径 3—10cm，丸山形，のち扁平～やや圧低され, 正形或は不正形；表面は乾燥，初め繊細なる絹状軟毛を被むるも，のち無毛となり，灰色或は灰褐色, のち黄褐色となる，縁は平坦；肉は白色，味及臭は幾分穀粉様；褶は垂生，只小歯にて直生する迄変化す，初め淡灰色，のち桃色～鮭肉色となる，密，むしろ狭幅，薄し；茎は 3—9×0.4—1cm，殆ど同幅，傘面とほぼ同色或は淡色，僅か綿絮あり，時に繊維線条を有す，中実；

胞子は不正形にて有稜，8—10×5—7μ；胞子紋は淡桃色或は殆ど鮭肉色；嚢状体なし；可食。

所在及産地

地上或は倒腐木上一秋　　　北海道一北米

和名　タマウラベニタケ（玉裏紅茸）〔今井〕

Rhodophyllus coelestinus (FR.) QUÉL. var. **violaceus** (KAUFFM.) A. H. SMITH

ヒメコンイロイッポンシメジタケ

HONGO, Bull. Fac. Lib. Arts Educ. Shiga Univ. 6 : 34, f. 3, F. 1957.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，78，f. 201，pl. 34，f. 201．1957）

Nolanea caelestina var. *violacea* KAUFFM. Mich. Acad. Sci. Rep. 10. 1908；Agar. Mich. 585. 1918.

子実体は散生或は群生；傘は径 0.5—1.3cm，円錐形～円錐状丸山形，最後に殆ど扁平に開張す；表面は乾燥，内生絹糸状繊維あり，老時中盤は多少不明瞭に網目～類鱗被を生じて縁は僅か裂く（レンズ下にて），色は暗青紫色，殆ど褪色せず；肉は薄く，傘表より淡色，脆く，無味無臭；褶は直生～狭生，屢々垂生歯を有す，疎，淡菫色，遂に淡肉色となる，やや便腹状，狭幅或は中位に広く（1—2mm），稜は一様或はやや腐蝕し，通常傘縁に達せず；茎は 2—3×0.07—0.1cm，同幅，レンズ下にて繊維線条あり，屢々捩れ，頂部は霜粉状，暗菫青色，中実，基部は白色綿状菌糸に蔽わる；胞子は異径，有角塊状，1，2或は多油球を含み，8—10×5.5—6.5μ；担子柄は4胞子，往々2胞子，28—37×7.5—10.5μ；稜及び褶側嚢体なし；傘表の菌糸は藍青色，幅 9.5—22μ；菌絆あり。

所在及産地

ヒノキ(*Chamaecypariso btusa*)の植林内蘚間腐蝕物上一春　　　本州一欧

和名　ヒメコンイロイッポンシメジタケ（姫藍色一本湿地茸）〔本郷〕

Rhodophyllus violaceus (MURR.) SING.

コムラサキイッポンシメジタケ

SINGER, Mycologia, 39 : 188. 1947；Agaricales, 623. 1949.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，78．1957）

Agaricus cyaneus PECK, Bull. Buffalo Soc. Nat. Sci. 1 : 49. 1873. (non BULLIARD, 1783)

Entoloma cyaneum SACC. Syll. Fung. 5 : 692. 1887—KAUFFMAN, Agar. Mich. 551. 1918—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 168. 1938.

（原，日．菌．目．117．1954）

Hyporhodius cyaneus P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 257. 1900.

Entoloma violaceum MURR. N. Am. Fl. 10 : 115. 1917.

子実体は孤生或は散生：傘は径 2—3.5cm，丸山形～鐘形にて，中丘あり；表面は乾燥，灰菫色，灰紫色，或は黒菫色，微細鱗被或は粉状鱗被あり，のち淡色となる，縁は平坦；肉は白色，皮下紫色を帯び，薄し；褶は直生，のち離れ，帯白色，のち桃色，密，むしろ広幅，稜に白色房毛あり；茎は 3—6×0.2—0.4cm，同幅或は下方僅か肥大，傘面よりも淡色，両端に於て殆ど白色となる，粉状鱗被あり，時に捩曲す，中空；胞子は倒卵形或は類楕円形にて有稜，8.5—10×6.5—7.5μ；胞子紋は桃色。

所在及産地

林内沃土上一秋　　　北海道一北米

和名　コムラサキイッポンシメジタケ（小紫一本湿地茸）〔今井〕

Rhodophyllus bloxami (BERK. et BR.) ROMAGN.

ウスムラサキイッポンシメジタケ

SINGER, Agaricales, 629. 1949—HEIM, Champ. Eur. 2 : 32, f. 80(1), 1957.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，78．1957）

Agaricus Bloxami BERK. et BR. in BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 143. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 91. 1871；Illus. Brit. Fungi, 3 : 327 no. 326). 1886；Handb. Austr. Fungi, 39. 1892.

Entoloma Bloxami SACC. Syll. Fung. 5 : 684. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 272. 1893；Brit. Fungi, 235. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 105. 1908—REA, Brit. Basid. 245. 1922—KONRAD, Bull. Soc. Myc. Fr. 39 : 34. 1923；& MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 2 : pl. 189. 1925—BRESADOLA, Icon. Myc. 11 : pl. 548, f. 1. 1929.

（川村，日．菌．図鑑，5 : 591, f. 559. 1954）

Rhodophyllus madidus QUÉL.—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 197. 1953.

子実体は群生或は散生；傘は径 3—8cm，初め鐘形，丸山形となり，のち開張し，中丘を存し，縁辺やや下屈す；表面は吸水性なく，帯紫灰色，湿時滑らかにて乾時絹状光沢あり，中央以外は放射状の繊維細条を有す，縁は初め内捲し，波状；肉は中盤厚く，周辺甚だ薄し，白色，皮下傘面と同色，臭よし；褶は甚だしく彎入し，初め帯黄白色，のち桃色，かなり密，広幅；茎は 4—8×0.8—1.3cm，上下に狭細，傘面と同色にて，やや淡色，繊維線条あり，基部白色にて往々黄色を帯ぶ；胞子は球形にて有稜，8—

10×8—9μ；胞子紋は桃色；可食。

所在及産地

林内及草原地上—秋　　本州—欧

和名　ウスムラサキイッポンシメジタケ（淡紫—本湿地茸）〔川村〕

Rhodophyllus nitidus (QUÉL.) QUÉL.

コンイロイッポンシメジタケ

QUÉLET, Enchir. Fung. 58. 1886—LANGE, Fl. Agar. Dan. 2 : 94, pl. 74, f. A. 1936—SINGER, Agaricales, 623. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 198. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 317, f. 226, A. 1957.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，78, f. 200, pl. 34, f. 200. 1957）

Agaricus ardosiacum FR. Icon. Sel. Hymen. pl. 94, f. 4. 1875. (non BULLIARD)

Entoloma nitidum QUÉL. Champ. Jura Vosg. Suppl. 11 : 391, pl. 11, f. 8. 1882—SACCARDO. Syll. Fung. 5 : 685. 1887—RICKEN, Blätterp. 287. 1915—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 254. 1948—HEIM, Champ. Eur. 2 : 317, f. 226, A. 1957.

Hyporhodius nitidus P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 257. 1900.

Entoloma subnitidum f. *cyano-nigrum* HONGO, Jour. Jap. Bot. 29 : 145, f. 3. 1951.

Rhodophyllus subnitidus f. *cyano-nigrum* HONGO, Jour. Jap. Bot. 26 : 92. 1954.



第190図　コンイロイッポンシメジタケ
Rhodophyllus nitidus
a. 子実体表面　b. 同裏面　×1/2
c. 胞子　×550　（大谷氏）

子実体は群生或は孤生；傘は径 3—7 cm，円錐形～丸山形，のち開張し，やや中丘あり；表面は乾燥，無毛絹光沢あり，黒紺色，やや渓流状皺あり，縁は不規則或は正形；肉は白色，縁の方薄し，緊緻，僅か臭あり；褶は多くは離生，初め白色，のち肉色，やや密，広幅，稜は僅か鋸歯状；茎は 4—10×0.4—0.7(1.2)cm，同幅，基部僅か細く，傘面と殆ど同色或は淡く，頂部白色にて粉状，下部纖維あり，基端白色，充塞～中空；胞子は広楕円形にて有稜，有嘴，1～多油球を含む，10.5—11.5×6.5—9μ；胞子紋は肉色。

所在及産地

林地—夏秋　　本州—欧

和名　コンイロイッポンシメジタケ（紺色—本湿地茸）〔本郷〕

〔**因記**〕欧州産に比するに胞子大形なるも暫く本菌名を採用す。

Rhodophyllus subnitidus (IMAI) HONGO

ムラサキイッポンシメジタケ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 29 : 92. 1954.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，78. 1957）

Entoloma subnitidum IMAI, Jour. Facul. Agr. Hok. kaido Imp. Univ. 43 : 168. 1938.

（原，日．菌．目．117. 1954）

子実体は孤生或は群生；傘は径 4—7 cm，円錐形或は丸山形，のち開張，扁平，やや中丘あり；表面は乾燥，帯菫黒藍色，或は濃青菫色，粗面或は絨状；肉は帯白色；褶は彎状狭生，初め白色，のち肉色，疎，広幅，便腹状；茎は 7—10×0.4—0.7cm，同幅，或は基部やや肥大，傘面と同色或は淡色，上部粉状，下部纖維状；胞子は楕円或は倒卵形にて有稜或は有瘤，10—12.5×7.5—10μ；胞子紋は肉色。

所在及産地

林地—夏秋　　北海道

和名　ムラサキイッポンシメジタケ（紫—本湿地茸）〔今井〕

Rhodophyllus erophilus (FR.) KÜHN. et ROMAGN.

ヒメイッポンシメジタケ

KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 198, f. 276. 1953.

Agaricus erophilus FR. Hymen. Eur. 190. 1874.

Entoloma erophilum KARST. Hattsv. 1 : 259. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 681. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 533. 1915—W. G. SMITH, Brit. Basid. 104. 1908—RICKEN, Blätterp. 284. 1915—REA, Brit. Basid. 244. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 11 : pl. 547. 1929—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 167. 1938—KON-

RAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 254. 1948.

子実体は孤生；傘は径 2—4 cm，丸山形，のち開張し，鈍頭；表面は帯黄灰色，無毛，湿時やや粘性，脈状線条ありて縞をなす，縁は内捲す；肉は白色，薄く，僅か肉質；褶は直生，直状類彎生或は直状類垂生，灰色，のち肉色，疎，広幅；茎は 3—5×0.4—0.6 cm，同幅，白色，のち灰色，絹状繊維あり，充塞，のち殆ど中空；胞子は類球形或は広円壔形にて有稜，8—10×7.5—8μ；胞子紋は肉色。

所在及産地

林地—秋　　北海道—欧．亜(西比)

和名 ヒメイッポンシメジタケ（姫一本湿地茸）〔今井〕

Rhodophyllus sinuatus (BULL. ex FR.) PAT.

イッポンシメジタケ

PATOUILLARD, Ess. Tax. 160. 1900—SINGER, Agaricales, 622. 1949.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，80，f. 204，pl. 35，f. 204. 1957）

Agaricus lividus BULL. Herb. Fr. pl. 382. 1791—FRIES, Monogr. Hymen. Suec. 1 : 269. 1857; Hymen. Eur. 189. 1874—WINTER, Pilze, 1 : 725. 1884—COOKE, Illus. Brit. Fungi, 3 : pl. 311, (no. 317). 1886.

Agaricus sinuatus BULL, Herb. Fr. pl. 590. 1793—FRIES, Epicr. Myc. 143. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 268. 1857; Hymen. Eur. 189. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 90. 1871; Illus. Brit. Fungi. 3 : pl. 310 (no. 316). 1886—WINTER, Pilze, 1 : 725. 1884.

Entoloma lividum QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1 : 116, pl. 6, f. 1. 1872—GILLET, Champ. Fr. 401, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 258. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 146. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 680. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 535. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 268. 1893; Brit. Fungi, 233. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 103. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 58, pl. 57, f. 127. 1910—RICKEN, Blätterp. 284, pl. 72, f. 2. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 548. 1918—REA, Brit. Basid. 243. 1922—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 166. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 252. 1948—HEIM, Champ. Eur. 2 : 315, pl. 37, f. 1. 1957.

（川村，食用菌及有毒菌，f. 70 (p. 82). 1931；日．菌．図鑑，5 : 592，f. 560. 1954—松浦，茸類辞典 66，f. 68. 1933；応用菌蕈学，f. 629 (p. 814) 1941—小林，日．隠．植．図. 533，pl. 257，f. 3-4. 1939—今関，原色きのこ，pl. 27 (右)，1942)

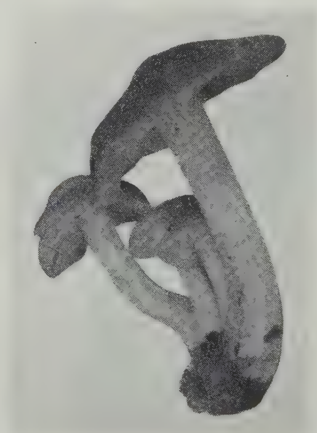
Entoloma sinuatum QUÉL. Champ. Jura Vosg. Suppl. 2 : 344. 1873—GILLET, Champ. Fr. 400, c. ic. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 680. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 534. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 268. 1893; Brit. Fungi, 231. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 103. 1908—REA, Brit. Basid. 243. 1922.

（田中，日．菌．図説，1 (1) : 3，pl. 3. 1890—松村，植．名鑑，1 : 140. 1904—白井，日．菌．目. 31. 1905; ed. 2 : 217. 1917; ed. 3. 129. 1927—KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 6, f. 18-20. 1913；日．菌．図説，n. 36. 1929；食用菌及有毒菌，f. 68 (p. 79). 1931；日．菌．図鑑，5 : 589，f. 557. 1954—安田，植．雑．38 : 21. 1924—松浦，茸類辞典，65，f. 64. 1933；応用菌蕈学，814，1179. 1941—小林，日．隠．植．図. 561，pl. 271，f. 5，1939—牧野，日．植．図鑑，1022，f. 3065. 1940—原，日．菌．目．117. 1954)

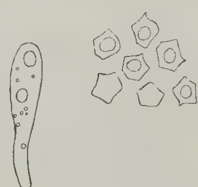
Rhodophyllus lividus QUÉL. Enchir. Fung. 57. 1886—LANGE, Agar. Denm. 4 : 29, f. 6. 1921; Fl. Agar. Dan. 2 : 95, pl. 74, f. c. 1936—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 197. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 315, pl. 37, f. 1. 1957.

Hyporhodius lividus SCHROET. Pilze Schles. 1 : 617. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 257. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pize, 2 (2) : 575. 1912.

Hyporhodius sinuatus MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2 (2) : 575. 1912.



a



b　c

第 191 図 イッポンシメジタケ Rhodophyllus sinuatus

a. 子実体 ×1/3　b. 囊状体

c. 胞　子 ×400（大谷氏）

子実体は群生；傘は径 5—16 cm，丸山形，のち扁平となるも中央広く僅か隆起す；表面は湿時僅か粘性，初め帯黄白色～淡黄灰色，或は鉛色～灰色，平滑，レンズ下にて絹状繊維あり，縁は波状；肉は白色，中盤以外は薄く，脆し，老時やや不快臭あり；褶は著しく彎入し離る，初め白色，のち肉色，やや疎，広幅；茎は 8—15×1.5—3.5 cm，同幅，白色，平滑，やや光沢あり，上部微かに粉状，僅かに線条あり，時に屈曲或は捩曲す；胞子は球形或は楕円形にて有稜，9—11×6—9μ；胞子紋は桃色；有毒。

所在及産地

広葉樹林地及庭園地—秋　北海道，本州—欧．北米

和名　イッポンシメジタケ（一本湿地茸）〔田中〕
ニセシメジタケ（贋湿地茸）〔川村〕

Rhodophyllus prunuloides (FR.) QUÉL.
コイッポンシメジタケ

QUÉLET, Enchir. Fung. 57. 1886—LANGE, Agar. Denm. 4 : 30, f. 7. 1921; Fl. Agar. Dan. 2 : 95, pl. 73, f. B. 1936—SINGER, Agaricales, 622 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 197. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 315, pl. 37, f. 3, 1957.

Agaricus prunuloides FR. Syst. Myc. 1 : 198. 1821; Epicr. Myc. 143. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 269. 1857; Hymen. Eur. 189. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 143. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 90. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3 : pl. 312(no. 319). 1886—WINTER, Pilze, 1 : 724. 1884.

Entoloma prunuloides QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1 : 117. 1872—GILLET, Champ. Fr. 400, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 259. 1879—SACCARDO, Syll. Funng. 5 : 680. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 536. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 269. 1893; Brit. Fungi, 233, pl. 20, f. 2. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 104. 1908—RICKEN, Blätterp. 285. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 548. 1918—REA, Brit. Basid. 244. 1922—BRESADOLA Icon. Myc. 11 : pl. 548, f. 2. 1929—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 166. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 253. 1948—HEIM, Champ. Eur. 2 : 315, pl. 37, f. 3. 1957.

（梅村，植．雑．26 : 152. 1912—安田，植．雑．37 : 208. 1923—白井，日．菌．目．ed. 3. 129. 1927—広江，応用菌蕈学，1179. 1941—原，日．菌．目．117. 1954—川村，日．菌．図鑑，5 : 590, f. 558. 1954）

Hyporhodius prunuloides P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 257. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 575. 1912.

子実体は孤生；傘は径 5—8 cm，初め鐘形，のち丸山形～扁平，低き中丘あり，遂に圧低さる；表面は湿時やや粘性，初め汚白色，次第に淡黄褐色を帯び又鉛色を呈するに至る，平滑，絹状光沢あり，殆ど無毛なるも僅か絹状繊維を有する観を呈す，縁は平坦或は波状又は浅裂し，内屈す；肉は白色．中盤以外は甚だ薄く，味温和，臭は穀粉様；褶は幼時接着，彎入して離る，初め白色，のち鮭肉色，疎，広幅，稜は僅か波状；茎は 5—10×0.5—0.8 cm，同幅にて基部狭細，白色，僅か綿絮状或は繊維状，少しく光沢あり，基部は綿絮或は絨毛あり，殆ど充塞或は中空；胞子は球状卵形或は類楕円形にて有稜，8—10×7—8μ；胞子紋は煉瓦色。

所在及産地

林地，庭園地—春～秋　北海道，本州—欧

和名　コイッポンシメジタケ（小一本湿地茸）〔安田〕

Rhodophyllus turbidus (FR.) QUÉL.
ニセイッポンシメジタケ

QUÉLET, Enchir. Fung. 59. 1886—LANGE, Agar. Denm. 4 : 30, f. 11. 1921; Fl. Agar. Dan. 2 : 96, pl. 76, f. H. 1936 (forma)—SINGER, Agaricales, 617. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 196. 1953.

Agaricus turbidus FR. Syst. Myc. 1 : 205, 1821. pr. p.; Epicr. Myc. 147. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 276. 1854; Hymen. Eur. 195. 1847—WINTER, Pilze, 1 : 720. 1884.

Entoloma turbidum QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1 : 119. 1872; Suppl. 7 : 49. 1879—GILLET, Champ. Fr. 404. 1887—KARSTEN, Hattsv. 1 : 266. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 695. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 539. 1915—RICKEN, Blätterp. 286, pl. 72, f. 4. 1915—BRESADOLA, Icon. Myc. 12 : pl. 561. 1929—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 2 : pl. 196. 1932; Agaricales, 1 : 258. 1948.

（IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 55 : 514. 1941—今関及上岐，林．試．研．報．67 : 41. 1954）

Hyporhodius turbidus P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 256. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 573. 1912.

子実体は群生；傘は径 3.5—7 cm，鐘状丸山形～丸山形，中丘あり，のち開張し，中丘以外は圧低さる；表面は吸水性なるも粘性なし，無毛，暗栗褐色にて透明線条あり，中央濃色にて線条なし，乾時鉛

灰色にて光沢あり，縁は初め内屈し，薄く，最後に割裂し波状となる，褶より僅か抽出す；肉は淡灰白色，薄し，臭なく，味温和，褶は彎入直生，のち離る，初め灰色，最後に褐赤灰色となる，密，かなり広幅，稜は波状，茎は 5—7×0.7—1.5 cm，殆ど同幅或は基部肥大，銀灰色，無毛，光沢あり，線条あり，往々捩曲す，頂部淡色，基部に白色綿絮を存す；充塞或は中空；胞子は類球形にて有稜，有嘴，8—9×6.5—7.5μ；胞子紋は桃色；可食。

所在及産地

林地—夏秋　本州—欧

和名　ニセイッポンシメジタケ（贋一本湿地茸）〔今井〕

Rhodophyllus uliginosus (KOBAY.)

ヤチイッポンシメジタケ

Entoloma uliginosum KOBAY. Sci. Res. Ozegahara Moor, 556, f. 3, pl. 1, f. 6. 1954.

子実体は群生：傘は径 2.5—4 cm，円錐形，のち幾分開張す；表面は僅か粘性，淡灰褐色，微細なる線条あり，幾分光沢あり，薄肉質或はやや膜質，縁は真直或は幾分反転す；肉は臭なし；褶は便腹状狭く着生，初め淡緑灰色，のち鮭肉色，中位に密，幾分狭幅，稜に粗鋸歯あり；茎は 7—9×0.4—0.9cm，同幅にて上方に僅か狭細，淡灰黄色にて帯白色線条を有し，光沢あり，捩曲，基端菌糸を有し，繊維状，中空；胞子は長多角形にて通常 4—5 角，淡桃色，有嘴，10—12×5.5—7.5μ；担子柄は棍棒形，7—10×32—40μ，4 胞子；嚢状体なし。

所在及産地

水蘚上—秋　本州

和名　ヤチイッポンシメジタケ（谷地一本湿地茸）〔小林〕

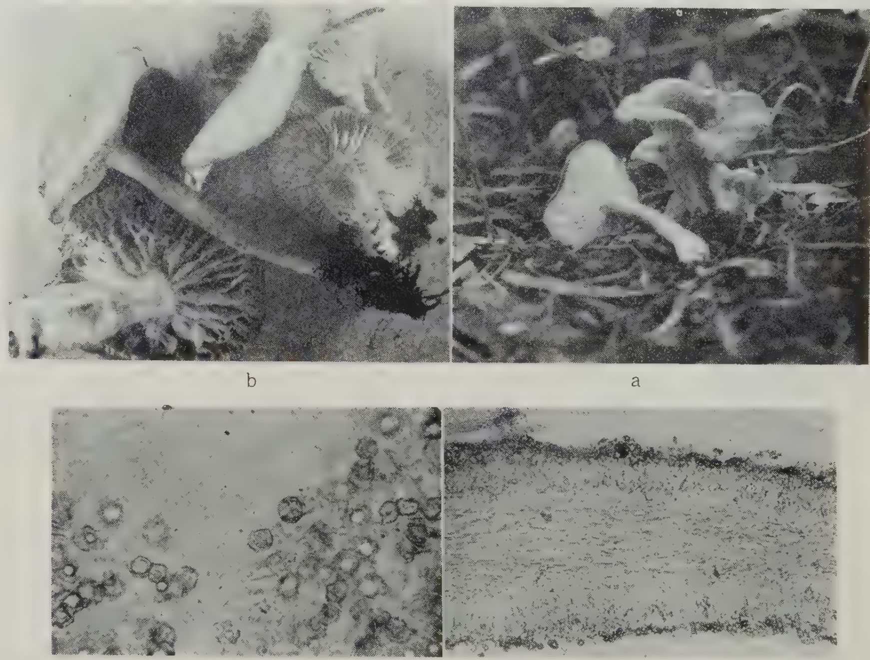
Rhodophyllus nidorosus (FR.) QUÉL.

コクサウラベニタケ

QUÉLET, Enchir. Fung. 59. 1886—PATOUILLARD, Ess. Tax. 160. 1900—LANGE. Agar. Denm. 4 : 31. 1921; Fl. Agar. Dan. 2 : 97. 1936—SINGER, Agaricales, 617. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 195. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. 78, A. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2 : 312, f. 224, A-D. 1957.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，79，1957）

Agaricus nidorosus FR. Epicr. Myc. 148. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 278. 1957; Hymen.



第 192 図　コクサウラベニタケ　Rhodophyllus nidorosus

a. 子実体発生の状 ×1/3　b. 子実体 ×1/2　c. 褶断面の一部 ×200　d. 胞子 ×500

（大谷氏）

Eur. 196. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 145. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 95. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3 : pl. 321(no. 341). 1886—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 105. 1876—WINTER, PILZE, 1 : 720. 1884.

Entoloma nidorosum QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1 : 119. 1872—GILLET Champ. Fr. 402. 1874—KARSTEN, Hattv. 1 : 268. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 149. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 697. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 541. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 ; 282. 1893 ; Brit. Fungi, 234. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 108. 1908—RICKEN, Blätterp. 287. 1915—REA, Brit. Basid. 251. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 12 : pl. 563. 1929—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 171. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 257. 1948—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 137, pl. 52, f. 1. 1950—HEIM, Champ. Eur. 2 : 312, f. 224, A-D. 1957.

（本郷，植．分．地．14 : 73, f. 1(7). 1951—原，日．菌．目．117. 1954）

Hyporhodius nidorosus P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 256, f. 120, E. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 572. 1912.

子実体は孤生或は少数群生；傘は径 3—6 cm，丸山形，のち開張し，屢々圧低され，凹形となりて，屢々不正形となり，裂く；表面は淡黄灰色或は鉛色，吸水性，乾時淡色〜殆ど白色となり光沢あり，縁はやや波状を呈し，時に割裂す；肉は白色，薄く，脆し，味温和，臭は強き刺戟性；褶は直生或は後方切断されて殆ど離生となる，白色，のち肉色，疎，広幅，稜は波曲す；茎は 5—10×0.3—1 cm，同幅或は上方僅か漸細，時に波曲或は捩曲す，帯白色，無毛，頂部白粉を被むる，中空；胞子は類球形にて有稜，8—10×7—9μ；胞子紋は桃色。

所在及産地

林内草間及芝生等—秋　　北海道，本州—欧

和名　コクサウラベニタケ（小臭裏紅茸）〔今井〕

Rhodophyllus clypeatus (L. ex FR.) QUÉL.

シメジタケモドキ

QUÉLET, Enchir. Fung. 59. 1886—PATOUILLARD, Ess. Tax. 160. 1900—LANGE, Agar. Denm. 4 : 30, f. 9. 1921; Fl. Agar. Dan. 2 : 95, pl. 75, f. c. 1936—SINGER, Agaricales, 617. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 196. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 77, B. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2 : 315. 1957.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，80, f. 205, pl. 35, f. 205. 1957）

Agaricus clypeatus L. Sp. Plant. 2 : 1174. 1753—FRIES, Epicr. Myc. 146. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 275. 1857 ; Hymen. Eur. 194. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 509. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 144, pl. 7, f. 6. 1860—KICKX. Fl. Crypt. Flandr. 2 : 162. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 93. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3 : pl. 319(no. 337). 1886. (sub nom. *clypeus*)—WINTER, Pilze, 1 : 721. 1884.

Entoloma clypeatum QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1 : 118. 1872—GILLET, Champ. Fr. 402, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 265. 1879 ; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 148. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 694. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 541. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 278. 1893; Brit. Fungi, 236. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 107. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 58, pl. 58. f. 129. 1910—RICKEN, Blätterp. 287, pl. 73, f. 1. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 552. 1918—REA, Brit. Basid. 249. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 12 : pl. 558. 1929—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido. Imp. Univ. 43 : 169, pl. 3, f. 11. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 256. 1948—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 137, pl. 51, f. 3. 1950—HEIM, Champ. Eur. 2 : 315. 1957.

（松浦，鳥取．農．報．4 : 96, f. 1. 1932; 蕈類辞典，17, f. 13. 1933—小林，日．隠．植．図．533, pl. 257, f. 1-2. 1939—今関，原色きのこ，pl. 27（左）．1942; 及土岐，林．試．研．報．87 : 52. 1956—原，日．菌．目．117. 1954）

Hyporhodius clypeatus SCHROET. Pilze Schles. 1 : 616. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 256. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 572. 1912.

子実体は群生或は叢生；傘は径 2—10cm，鐘形，のち開張し，中丘を有す；表面は汚黄褐〜暗褐色，通常周辺に微細の灰色線を有し，或は中央に灰色或は泥灰色の不規則の斑紋或は斑点を存す，無毛，吸水性，湿時僅か粘性，縁は屢々波状を呈し，時に短線条あり；肉は白色，むしろ薄く，脆し，味温和，臭は穀粉様；褶は彎状直生或は狭生，のち離生，初め白色〜灰白色，のち胞子により桃色となる，幾分疎，広幅，稜に不正鋸歯あり；茎は 4—8×0.5—1.5 cm，同幅或は基部やや肥大，白色或は帯白色，のち灰色，繊維あり，頂部粉状，脆し，充塞或は中空；胞子は類球形にて有稜，7.5—11×7—10 μ；胞子紋は桃色；可食。

所在及産地

林内或は樹下草間，果樹園内一春

北海道，本州一欧．北米．亜（小亜）

和名 シメジタケモドキ(擬湿地茸)〔松浦〕〔川村〕

Rhodophyllus rhodopolius (FR.) QUÉL.
クサウラベニタケ

QUÉLET, Enchir. Fung. 59. 1886—LANGE, Agar. Denm. 4 : 30, f. 10. 1921; Fl. Agar. Dan. 2 : 95, pl. 75, f. A. 1936—SINGER, Agaricales, 617. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 195. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 78, B. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2 : 312, f. 224, E-F, pl. 37, f. 2. 1957.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，79，f. 202，pl. 35，f. 202. 1957）

Agaricus rhodopolius FR. Syst. Myc. 1 : 197. 1821; Epicr. Myc. 147. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 1 : 275. 1857; Hymen. Eur. 195. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 509. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 145. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi. 1 : 94. 1871; Illus. Brit. Fungi, 3 : pl. 342(no. 338). 1886—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 104. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 721. 1884.

Entoloma rhodopolium QUÉL. Champ. Jura Vosg. 1 : 246. 1872—GILLET, Champ. Fr. 403, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 265. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 148. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 694. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 540. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 2 : 279. 1893—Brit. Fungi, 234. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 107. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 58, pl. 58, f. 128. 1910—RICKEN, Blätterp. 287, pl. 73, f. 2. 1915—MURRILL, N. Am. Fl. 10 : 122. 1917—KAUFFMAN, Agar. Mich. 553, pl. 105. 1918—REA, Brit. Basid. 250. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 133, pl. 65. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 12 : pl. 560. 1929—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 170. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 1 : 257. 1948—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 137, pl. 51, f. 2. 1950—HEIM, Champ. Eur. 2 : 312, f. 224, E-F, pl. 37, f. 2. 1957.

（KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi. pl. 18, f. 6-8. 1925—白井，日．菌．目．ed. 3. 129. 1927—今関，原色きのこ，pl. 28（左）. 1942；及土岐，林．試．研．報．67 : 41, pl. 1 B, pl. 4, f. 3. 1954—原，日．菌．目．117. 1954）

Hyporhodius hydrogrammus SCHROET. Pilze Schles. 1 : 616. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 256. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 573. 1912.

子実体は孤生；傘は径 3—8 cm，鐘形，のち開張扁平となり，僅か鈍丘を有し，往々圧低さる；表面は吸水性，湿時淡鼠色，乾時絹状光沢あり，幼時繊維あり，のち無毛，縁は初め内屈，大形品にては波状，時に浅裂す；肉は白色，皮下暗色，甚だ薄く，脆し，味温和，臭は穀粉様にて弱し；褶は直生，のち離生，初め白色，のち桃色となる，やや疎，広幅，稜は微細腐蝕状；茎は 5—10×0.5—1.5cm，同幅或は上方に僅か狭細，白色，幾分線条あり，頂部粉状，充塞のち中空；胞子は類球形にて有稜，10—12×7—8μ；胞子紋は桃色；有毒。

所在及産地

林地一夏秋

北海道，本州一欧．北米．亜(小亜)

和名 クサウラベニタケ（臭裏紅茸）〔川村〕

Rhodophyllus crassipes (IMAZ. et TOKI) IMAZ. et HONGO
ウラベニホテイシメジタケ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 32 : 146. 1957.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，79，f. 203，pl. f. 203. 1957）

Entoloma crassipes IMAZ. et TOKI, Bull. Gov. For. Exp. St. 67 : 39, f. 6, pl. 1. 1954.

子実体は孤生或は少数叢生；傘は径 7—12cm，円錐形，のち開張扁平となり，広き低き中丘を存し，市女笠状となる，縁は幼時内屈す；表面は乾燥，平滑，帯褐鼠色にて白色絹状繊維に薄く被われ，のち微細なる白色と鼠色との絣状を呈す；肉は白色，薄く，無味，無臭，噛めば糠臭を残す；褶は幼時汚白色，のち淡肉色，直状彎入して離れ易し，疎，広幅，稜は波状をなし鋸歯あり；茎は 10—18×1.5—2cm，ほぼ同幅或は僅か下方に肥大，白色，無毛，中実；胞子は類球形にて有稜，10—12(14)×8—10μ；胞子紋は桃褐色；嚢状体なし；可食。

所在及産地

広葉樹林地内一秋　　本州

和名 ウラベニホテイシメジタケ(裏紅布袋湿地茸)〔今関及土岐〕

疑問種

Agaricus virescens BERK. et CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4 : 116. 1860 = *Leptonia virescens* SACC. Syll. Fung. 5 : 714. 1887.（松村，植．名鑑，1 : 150. 1904—白井，日．菌．目．47. 1905; ed. 2. 321. 1917; ed. 3. 186. 1927—原，日．菌．目．180. 1954）

Russulaceae Roze ベニタケ科

Roze, Bull. Soc. Bot. Fr. 23 : 110. 1876 (ut *Russulariées*)—Singer, Agaricales, 697. 1949.

Lactariaceae Gäumann, Vergl. Morph. Pilze, 529. 1926.

傘及び茎は通常肉質，屢々生色あり；表皮層は諸構造を有し，屢々被膜の層に被わる，表皮層自体は3層即ち上表皮層中，表皮層及び下表皮層よりなり，更にその下に屢々表皮下層を有す；褶は正常的に小褶と交互するか或は小褶は少くして不規則に介在し，或は全く欠如し全褶同長なり，通常甚だ脆く，離生～垂生，疎生～群生，厚く～中位に薄く，断面楔形；担子柄は正常形，4胞子，稀に2胞子；真の嚢状体は褶稜の稜嚢体以外は稀に存在す；大嚢体は普通に存在するも，種類によりては擬嚢状体の一形即ち粘嚢体によりて置換えらる；托実質は類整型～不整型或は混淆型；ベニタケ属（*Russula*）にては屢々混淆型にて多数の球嚢を有し，チチタケ属（*Lactarius*）にては屢々球嚢なし；胞子紋は白色～帯褐淡黄色或は淡桃クリーム色；胞子は無色～帯黄色，通常短球形～短楕円形，稀に楕円状円壔形，表面に網状.棒状，粒状等の常に著しく糊性なる刻紋突起を有し，時に刻紋連結して平滑に見ゆるものを混ず，両側不等（即ち左右相称ならず heterotropic），通常多少明かなる臍あり；茎は通常中心生，中実，中空或は充塞，鍔を有し或は被膜なし，擬菌核を有せず，偽根なし；肉は白色，屢々乳汁を含む，球嚢の巣窠（nest）及び結締菌糸より成り不均一構造なり，これらすべての物は非糊性にて菌絆なし；粘液管，油脂菌糸或は乳管は常に存在す；林内地上に生じ通常菌根を作り，稀に腐材上に生ず；2属を有す。

本科に属する種類の分類に当りては胞子膜上の刻紋並に胞子紋の色に対して特に注意を要す。

(1) 胞子膜の刻紋—本科の種類の胞子の刻紋に就きては V. Melzer (1924, 1934), R. Crawshay (1930), F. Moreau(1930), J. Schaeffer(1933), M. Locquin(1948)氏等の研究ありて大体次の12種を掲げ時に只其番号を記載文中に記することあり。

Ⅰ. 粗大の背稜（うね）が網目状表面を作るもの。

Ⅱ. 背稜，細線及び疣が網目状表面を作るもの。

Ⅲ. 疣或は刺が細線にて連り網目を作るもの。

a. 完全なる網目を作るもの。

b. 不完全なる網目を作るもの。

Ⅳ. 疣或は刺が分散せる細線によりて連結さるるも網目或は網目の断片をも作らざるもの。

Ⅴ. 疣或は刺が短かき細線を附するも他の疣或は刺に達せざるもの。

Ⅵ. 疣或は刺は完全に分散するもの。

Ⅶ. 点及び細小線が往々互に接触或は交叉するもの。

Ⅷ. 疣が鎖状列に連結するもの。

Ⅸ. 刻紋が互に連続して平滑面を作るもの。

Ⅹ. 縦肋が屢々僅か螺旋状をなし，屢々幾分纒絡するもの。

Ⅺ. 短き疣或は円筒が異質の膜内に存するも殆ど貫通せざるもの。

Ⅻ. 表面が不規則なる疣状粗面なるもの。

(2) 胞子紋の色—Crawshay 氏 (1930) が前記刻紋につきての著，

The spore ornamentation of the Russulas 中に掲げたる胞子色彩表は一般に利用さるること多く，同氏は次の8段階に区分せり。

A. 白色 (white)

B. クリーム色 (cream)

C. クリーム藁色 (cream-straw)

D. クリーム肉色 (cream-flesh)

E. 淡黄土色 (pale ochre)

F. 淡黄鮭肉色 (pale yellowish salmon)

G. 黄土色 (ochre)

H. 濃黄黄土色 (deep yellowish-ochre)

尚著者によりて他の分け方をなすものもあり，時に前項刻紋の場合と同様に之れ等の記号を記載文に使用することあり。

属検索表

A. 乳汁なし；色素は多くは細胞内に存し，甚だ稀に膜内或は細胞間隙にあり；托実質は通常稜に近き半分に球嚢を存す；褶は同長或は小褶を混在す。
ベニタケ属 **Russula** (449)

B. 乳汁あり，水様液或は不透明乳様液の小滴を滲出するか或は傷面を湿潤ならしむ；色素は屢々膜内のみに存し，又細胞間隙にも生ず；托実質は少くとも稜に近き半分に球嚢を存せず；褶は大体常に小褶を混在す。チチタケ属 **Lactarius** (479)

Russula Pers. ex S. F. Gray
ベニタケ属

Persoon, Obs. Myc. 1 : 100. 1796—S. F. Gray, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 618. 1821—Fries, Gen. Hymen. 9. 1836; Epicr. Myc. 349. 1838—Singer, Agraicales, 698. 1949.

Omphalomyces BATTARA, Fung. Hist. 36. 1755.
Agaricus sect. *Russula* PERSOON, Syn Meth Fung. 438. 1801.
Agaricus trib. *Russula* FRIES. Syst. Myc. 1 : 54. 1821.
Russulina SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 550. 1889.
Lactarelis EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5 : 409. 1909.
Dixophyllum EARLE, l. c. 410. 1909.

一般性質は科の記載と同じきも乳汁を欠如するを特徴とす；裸実或は擬被実；殆ど汎布，約206種を知らる，種々なる樹木，特に多くの針葉樹に菌根を作る；食用菌並に毒菌あり。

（本属名は russus〔羅〕（赤色）より出づ）

基準種　*R. lutea*（HUDSON ex FR.）FR.

本邦既知節及種検索表

A．肉は堅く老時まで緻密，傘縁まで厚し；傘皮は分化少く，固着乾燥或は速に乾燥；褶は不等長にて規則正しく或は不規則に短褶を介在す；傘面帯白，灰，褐或は黒色にて生鮮色ならず；縁は鋭くして平坦；胞子紋は純白～クリーム色；肉は硫酸鉄反応灰紅色（正常），鮭肉色或は緑色，空気に触れて黒変，赤変或は不変化。
　　(1) クロハツタケ節 **Compactae** (450)

B．肉は前者より脆く，厚さも少く縁の方薄し；傘皮は分化し，乾燥固着或は粘性剝離；褶は等長，時に叉状或は短褶を混ず；傘面多くは鮮色；胞子紋は諸色（A-H）；$FeSO_4$ 反応は陽性或は陰性。
　a. 前節と化学反応に於て近似するも組織的及一般性状は後節に類似す，即ち肉は黒変し，フォルマリン液に強く反応して赤変するも，然し傘色は多くは鮮色なるのみならず，上下表皮層共によく発達し，又短褶を混ぜず；傘縁鋭し；胞子紋は屢々濃色（Dより濃し）。
　　(2) イロガワリベニタケ節 **Decolorantes** (451)
　b. 肉は空気に触れ或は老時黄～黄褐色となるものあるも黒色となるものなく，一般にフォルマリン反応なし。
　　α. 傘面多くは粘性，灰，褐，黄土，レモン色，帯緑クリーム色或はその混色又は白色にて赤或は紫色ならず；縁は幼時通常多少鋭し；味は屢々辛く，臭は糞臭或は辛辣又は幾分特異的；胞子紋は白或はクリーム色（Dより淡し）；傘皮は苛性加里にて暗色となり或はならず；縁は有溝或は平坦。
　　(3) クサハツタケ節 **Ingratae** (451)
　　β. 傘面多くは乾燥，全面粉状，絨毛，綿毛，網状，鱗片状罅裂，或は小鱗状～絹状等にて稀に平滑；味は温和或は苦味又は幼褶やや辛く，稀に甚だ辛し，糞臭なし；硫酸鉄は肉に対し陰性或は緑，鮭肉色，又は正常に反応す；胞子紋は白～クリーム肉（A～D）色；傘皮は苛性加里にて暗色とならず；肉は黄色或は黄褐色とならず（硫酸鉄にて緑となるものを除く）。
　　(4) アカフチベニタケ節 **Rigidae** (451)
　　γ. 傘面無毛，湿時粘性にて前節の如く粉状，絨毛，網状等ならず，稀に乾燥絨状のものあるもその時は胞子紋はクリーム肉色より濃色なり；硫酸鉄は肉に対し正常に作用し陰性或は緑色ならず；傘皮は苛性加里にて暗色となり或はならず；胞子紋は白～濃黄黄土色（A～H）
　　(5) ドクベニタケ節 **Fragilis** (452)

---

(1) クロハツタケ節 Compactae

A．肉は白色にて黒変せず；傘は白色；褶は不規則に短褶を介在す。（亜節 *Plorantes*）
　a. 胞子紋は白色；胞子大形
　　α. 褶は白色；味温和
　　　シロハツタケ ***R. delica*** (452)
　　β. 褶及茎の頂部緑青～青色；味辛し
　　　アイバシロハツタケ
　　　var. ***glaucophylla*** (453)
　b. 胞子紋は黄土色；胞子小形；褶は黄土色；味温和
　　　シロハツタケモドキ ***R. pseudodelica*** (454)

B．肉は白色にて老時或は傷時赤色を経て或は直ちに黒変す；傘は煤色，灰色或は黒色；褶は規則正しく短褶を介在す。（亜節 *Nigricantes*）
　a. 褶は厚くして疎；傘は大形；味温和或は僅か辛し。
　　　クロハツタケ ***R. nigricans*** (455)
　b. 褶は薄くして密；傘は前者より小形；味辛き方なり。
　　　クロハツタケモドキ ***R. densifolia*** (456)

C．肉は白色にて赤変するも黒色とならず。（亜節 *Rubentinae*）
　a. 傘は初め帯白色，全面或は斑紋状に淡赤褐～赤褐色；褶は屢々叉状；臭は老時及乾時不快
　　　アカカバイロタケ ***R. compacta*** (456)
　b. 傘は煤焦茶色；褶は叉状ならず；味及臭なし；前種と酷似す。

ニセクロハツタケ *R. subnigricans*(457)

(2) イロガワリベニタケ節 **Decolorantes**

傘は赤色，外皮剝げ易く；縁は老時線条あり；肉は白色，空気に触れて赤変し，のち黒色となる；臭微弱，味温和。

イロガワリベニタケ *R. rubescens*(457)

(3) クサハツタケ節 **Ingratae**

A．傘は鈍色，表面は苛性加里液にて暗色となる；縁は常に有溝；褶の前方多くは狭細。(亜節 *Foetentinae*)

a. 傘面に著しき皺なし。

α. 胞子紋は白色；傘表に嚢状体あり；傘面黄色～黄土色；味辛く，臭甚しからず。

I. 胞子小形，7—8×6—7μ。

コクサハツタケ *R. farinipes*(457)

II. 胞子大形，9—12×6.5—8.5μ。

イロガワリシロハツタケ *R. metachroa* (458)

III. 前者と外見酷似す；小笠原産

オガサワラキハツタケ *R. boninensis*(458)

β. 胞子紋はクリーム色；傘嚢体なし。

I. 傘は黄土色，黄褐色等

1. 傘は大形，7—15cm；肉は糞臭.

クサハツタケ *R. foetens*(458)

2. 傘は中形，5cm 肉は苦扁桃臭，胞子粗疣及著しき翼あり。クサハツタケモドキ *R. laurocerasi*(459)

II. 傘は前者より暗色，中形，10cm 以下

1. 傘は焦茶色にて灰黄，黄褐，類肉桂色より暗栗褐色等に変化し，皮下帯黄色；褶は離生；味甚だ辛し；胞子に切断せる網紋あり。

クシノハタケ *R. pectinata* (460)

2. 傘は汚藁色，黄褐或は焦茶褐色，中央暗色，皮下灰色；褶は直生或は狭生；味温和或は徐々に辛し；胞子に網紋あり。

クシノハタケモドキ *R. pectinatoides* (460)

3. 傘は多くはセピア色にて黄褐～暗褐色の間に変化し，皮下灰色；褶は狭生～殆ど離生；味辛し；胞子に網紋なし。

キチャハツタケ *R. sororia*(461)

b. 傘面に明かなる渋色或は黒褐色の皺あり，幼時特に著し，渋色，のち鈍黄色；茎は帯黄色にて暗褐色の点あり；味辛く，臭強し。

オキナクサハツタケ *R. senecis*(461)

B．傘はむしろ鮮色，苛性加里にて暗色とならず；縁は平滑或は幾分有溝；褶の前方円く或は多少円し。(亜節 *Felleinae*)

a. 傘は濃シトロン色，帯褐黄色或は鈍黄色，皮下幾分黄色；傘縁はのち鈍し；味辛し。

ヤマブキハツタケ *R. ochroleuca* (462)

b. 傘は鮮シトロン黄色，皮下深く黄色；縁は鋭く；味温和。

ナタネハツタケ *R. citrina* (463)

(4) アカフチベニタケ節 **Rigidae**

A．褶は不等長にて短褶を屢々多少交互に介在し，時に叉状となる；傘は鮮色にて往々混色；硫酸鉄反応は陰性或は僅か帯緑灰色となるのみ；傘皮は縁だけ剝げ，縁は鋭し；胞子紋は A.B.(亜節 *Cyanothanthinae*)

a. 傘は菫或は紫色の地色上に緑色を被むり遂に深緑色となる；縁は平坦，のち線条を生ず。

カワリハツタケ *R. cyanoxantha*(463)

b. 傘は青銅色(或は暗紫色)，周縁に特有の白色長大の罅裂を生ず。

アオムラサキハツタケ *R. cutefracta* (464)

B．褶は多くは叉状をなし，両端狭細；傘は鮮色なるも鮮赤系ならず；硫酸鉄反応は正常ならずして一部灰緑或は鮭肉又は黄金色にて陰性ならず；胞子紋はA或は AB.(亜節 *Lividinae*)—傘は大体鶯色にて変化あり；肉は硫酸鉄にて黄金色。

ウグイスタケ *R. furcata*(465)

C．褶は等長或は短褶を存し，単一或は少数叉状。

a. 傘皮は速に鱗片状破片に亀裂し，乾燥或は湿時粘性，特別なる構造 (virescens structure) 即ち球嚢連結菌糸を被むるを特徴とす。(亜節 *Virescentinae*)

α. 傘は淡黄土或は帯褐黄土色；縁は有線条

ヤブレキチャハツタケ *R. crustosa*(465)

β. 傘は緑青或は藍色；縁は平坦

アイタケ *R. virescens*(466)

b. 傘は鮮色にて赤，紫，黄色等；傘皮は疣状毛茸或は絨状粉塊となるを特徴とす。(亜節 *Amoeniae*)

α. 傘は紅紫色にて牡丹色，藤色，時に緑色等変化に富む；茎は白或は淡紫色。

ムラサキカスリタケ *R. amoena*(466)

β. 傘は橙色にて鬱金色；茎は同色。
ウコンハツタケ ***R. flavida***(467)

c. 前2者の特徴なく，傘皮は絨状，毛状或は粉状，稀に平滑，硫酸鉄に正常に反応す；縁は鈍円。

α. 傘は殆ど無毛，類絨状或は粉状，多くは紫，赤～桃色或は白色；傘嚢体なく通常多数の長毛あり。（亜節 *Lilaceineae*）

Ⅰ. 傘縁平坦，表面白色，剝皮せず，乾燥。
ユキハツタケ ***R. lactea*** (468)

Ⅱ. 傘縁平坦，のち僅か線条を生ず。

1. 傘は桃色，血赤色或は古血赤色，皮は殆ど固着或は剝げる。
コアケボノハツタケ ***R. uncialis***(468)

2. 傘は汚葡萄色，菫赤色或は肉紅色，皮は剝げる。
ウスムラサキハツタケ ***R. lilacea***(468)

β. 傘は類絨状～類細毛状，皮擬嚢体に被わる。（亜節 *Lepidinae*）—傘は桃血赤～朱赤色，平滑，屢々亀裂す；褶稜は赤色；皮は剝げず；縁に線条なし。
アカフチベニタケ ***R. lepida*** (469)

d. 硫酸鉄は肉に対して正常に反応せずして緑色となる，肉は傷によりて黄或は褐色となり，カニ或は trimethylamin の強臭あり；褶は等長，規則正しき叉状ならず；傘は深紫色～酒赤色，鈍縁。（亜節 *Xerampelinae*）
ニオイベニハツタケ ***R. xerampelina***(470)

（5） ドクベニタケ節 **Fragilis**

A. 胞子紋は白色～クリーム色；多くは強き辛味あり；傘縁は一時鋭し。

a. 胞子紋は白色～淡クリーム色。

α. 胞子の疣は低し；傘は暗紫色，径 4—12cm；褶及茎は白色；外くは無臭，味温和或は辛し。
ムラサキハツタケ ***R. atropurpurea***(471)

β. 味甚だ辛し；胞子の疣は刺状にて長し。

Ⅰ. 傘は鮮紅色，茎 2—11 cm；茎及褶は白色；僅か果実臭あり。
ドクベニタケ ***R. emetica***(471)

Ⅱ. 前者に酷似し，径 2—7 cm； 肉弛かにて脆弱。
コベニタケ ***R. fragilis***(473)

Ⅲ. 前者と同様にて白色。
シロコベニタケ f. ***nivea*** (474)

b. 胞子紋はクリーム色；傘は桃赤色～桃緋色，径 3—9cm；茎は桃赤色；褶はクリーム色；胞子は疣刺に連結糸なし。
チシオハツタケ ***R. rosacea*** (474)

B. 胞子紋はクリーム色～淡黄土色；傘は栗褐色～鮮血赤色，径 5—10 cm， 鈍縁； 茎及褶は白色；無臭。
ヨヘイジタケ ***R. integra***(475)

C. 胞子紋は前者より更に濃色にて淡黄鮭肉，黄土或は濃黄黄土色。

a. 傘面乾燥，絨毛状（*Rigidae* の如きも肉に対する硫酸鉄反応は正常にて胞子紋濃色なり）。

α. 傘縁は初め多少鋭く，のち鈍し；味甚だ辛し；傘は朱赤色，径 4—11 cm； 茎及褶は白色.
ウスクレナイタケ ***R. rubra***(475)

β. 傘縁は鈍く；味温和；傘はオリーブ褐色，径 6—12 cm；茎は淡紅色；褶は白～黄色。
クサイロアカネタケ ***R. olivacea***(476)

b. 傘面は粘性，無毛，鈍縁。

α. 傘は比較的小形

Ⅰ. 傘はオリーブ緑色，径 3—7cm；褶は黄土黄色；茎は白色。
コケイロタケ ***R. olivascens***(476)

Ⅱ. 傘は暗紫色，径 2—4 cm；褶は黄土黄色；茎は白色。
コシノムラサキハツタケ ***R. niigatensis*** (477)

β. 傘は大形

Ⅰ. 傘は赤紫色，暗血赤色或は諸色に変化し，径 7—15cm；褶は直ちに黄色となり；茎は白色にて帯赤色。
アカネタケ ***R. alutacea*** (477)

Ⅱ. 傘は美しき黄色，橙黄色，径5—9cm：褶及茎は美なるシトロン色。
ニシキタケ ***R. aurata***(478)

（1） Compactae Fr. (1938)
クロハツタケ節

Russula delica Fr.
シロハツタケ

Fries, Epicr. Myc. 350. 1838; Hymen. Eur. 440. 1874—Berkeley, Outl. Brit. Fung. 210. 1860—Kickx, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 204. 1867—Cooke, Handb. Brit. Fungi, 1 : 218. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 1068(no. 975). 1890—Quélet,

Champ. Jura Vosg. 1 : 204. 1872; Enchir. Fung. 132. 1886—GILLET, Hymen. Fr. 232, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 218. 1876; Hattsv. 1 : 200. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 126. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 538. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 455. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 409. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 53. 1893—W. G. SMITH, Brit. Basid. 282. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 43, pl. 42, f. 90. 1910—BURLINGHAM, N. Am. Fl. 9 : 207. 1915—RICKEN, Blätterp. 41, pl. 15, f. 1. 1915—MURRILL, Mycologia, 8 : 121, pl. 185, f. 1. 1916—KAUFFMAN, Agar. Mich. 125. 1918—REA, Brit. Basid. 457. 1922—SINGER, Hedwigia, 66 : 253. 1926; Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 369. 1932; Agaricales, 704. 1949—LANGE, Agar. Denm. 6 : 28. 1926; Fl. Agar. Dan. 5 : 58, pl. 177, f. c. 1940—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 86, pl. 37. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 9 : pl. 401. 1929—CRAWSHAY, Spore Ornam. Russulas, 79. 1930—J. SCHAEFFER, Ann. Myc. 314. pl. 27, f. 6f. 1933—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 352. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 123, pl. 43, f. 1. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 33. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 440. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 9. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2 : 172, pl. 22, f. 1. 1957. (Auct. plur. incl. var. *glaucophylla*)

(MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 4 : 99. 1932—広江，応用菌蕈学，f. 760—761(p. 1137). 1941—原，日．菌．目．319. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，92, f. 232, pl. 41, f. 232; pl. 68, f. 404. 1957)

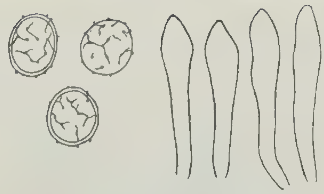
Russula deliciosa SCHROET. Pilze Schles. 1 : 549. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl-fam. 1, 1**: 220. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 360, pl. 44C. 1912.

Russula brevipes PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 54 : 178. 1901.

子実体は孤生或は群生；傘は径 5—10cm，丸山形にて中窩を有し，開張して凹下し，遂に漏斗形となる，緊緻；表面は白色，老時褐斑を生じ，或は全面淡褐色となる，初め細軟毛を有し，のち無毛，平滑，乾燥，乾燥季に屢々網状罅裂を生ず，表皮は剝げず；縁は初め内捲し，のち開展，平滑，鋭し；肉は白色にて変色せず，幼時緊緻にて堅く，脆からず，硫酸鉄にて灰紅色，味温和或は殆ど温和，臭は特異的；褶は直生或は垂生，狭幅，殆ど密生或は疎，多少叉状，小褶を混在し，白色，水滴を出す；茎は 2—5×1.5—3cm，同幅或は基部僅か狭細，白色，のち僅か褐色となる，無毛或は細軟毛あり，中実；担子柄は 40—55×8—16μ，小柄は 11—12μ；胞子は類球形～球形，短刺あり，大なる中心油球を有し，無色，8—11×7—10μ，沃度液にて網状～弱纒絡，或は有尾疣（第Ⅲ～Ⅴ型）を認めらる；胞子紋は純白色；嚢状体状の油脂菌糸あり，屢々隔膜を有し，60—80×8μ，多くは尖頭，或は鈍頭にて屢々縊れて附属突起を作り，サルフォバニリン*にて大部分青色となる，嚢状体は稍々稀生，鈍頭，広幅，上部幾分粒状，サルフォバニリンにて無色に残る；可食。



a



c　　　b

第193図　シロハツタケ Russula delica
a. 子実体 ×1/2　b. 嚢状体 ×500
c. 胞子 ×750（大谷氏）

所在及産地

林地—夏秋

北海道，本州，九州—欧．北米．亜（支．小亜）

和名　シロハツタケ（白初茸）〔松浦〕

var. **glaucophylla** QUÉL.

アイバシロハツタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 22 : 495, pl. 3, f. 7. 1901—SINGER, Hedwigia, 66 : 254. 1926; Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 370. 1932—CRAWSHAY, Spore Ornam. Russulas, pl. 11, n. 8, 8a. 1930—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 440. 1953.

Agaricus exsuccus PERS. Obs. Myc. 2 : 41. 1799.

* サルフォバニリン（Sulfovanillin）液処方
バニリン 0.5g.　硫酸 4.0cc.　蒸溜水 2.0cc.

Agaricus piperatus β. exsuccus PERS. Syn. Meth. Fung. 429. 1801.

Agaricus vellereus β. exsuccus FR. Syst. Myc. 1 : 77. 1821.

Agaricus chloroides KROMBH. Abbild. Schw. 8 : 7, pl. 56, f. 8–9. 1843.

Lactarius vellereus var. *exsuccus* COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 212. 1871.

Lactarius exsuccus W. G. SMITH, Jour. Bot. 11 : 336. 1873; Outl. Brit. Fung. Suppl. 240. 1891—SACCARDO, Syll. Fung. 6 : 437. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 375. 1915—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 311. 1889; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 981(no. 946). 1890.

Russula brevipes PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 43: 20. 1890.

Russula chloroides BRES. Fung. Trid. 2 : 89, pl. 202. 1900; Icon. Myc. 9 : pl. 402. 1929—MASSEE, Brit. Fungi, 191. 1911—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 410. 1915—REA, Brit. Basid. 458. 1922—HEIM, Champ. Eur. 2 : 173. 1957.

Russula delica var. *chloroides* KILLERM. Pilze Bayern. 6 : 7. 1936.

Russula delica f. *chloroides* IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 353. 1938.

（今関及土岐，林．試．研．報．67 : 58. 1954—原，日．菌．目．319. 1954）

Lactarius chloroides KAWAMURA，日．菌．図鑑，3 : 352, f. 337. 1954.

Russula delica Auct. plur. pr. p.

原種とは褶及び茎の頂部緑青～青色を呈し，少しく或は往々著しき辛味あるを異点とす；傘は10—15 cm，扁平丸山形にて中央凹下し浅き漏斗形をなす；表面は乾燥し往々亀裂す；白色にて速かに帯褐色となる；肉は白色，緊緻，$FeSO_4$にて灰紅色，味は辛く，特に褶部に於て著し，臭は不快にて強からず；褶は白色にて緑色を帯び，速かに稜は汚青緑色，茎に近き部は多くは青色となり，傷によりて通常淡紅色となる，殆ど疎生，多くは叉状，甚だ不同，水滴を出す；茎は 3—6×2—3 cm，白色にて屢々帯青色の頂部を有す；担子柄は約 55×13μ，小柄は 9μ；胞子は類球形～長球形， 著しく有刺， 11—11.5×9.5—10μ，沃度液にて弱纏絡疣（第Ⅳ型）を認めらる；囊状体は円筒形，鈍頭，多くは 65—90×7—8μ，サルフォバニリンにて暗青色となる。

所在及産地

林地—夏秋　北海道，本州—欧．北米．阿

和名　アイバシロハツタケ（藍歯白初茸）〔今井〕

シロモミタケ（白樅茸）〔方言，川村〕

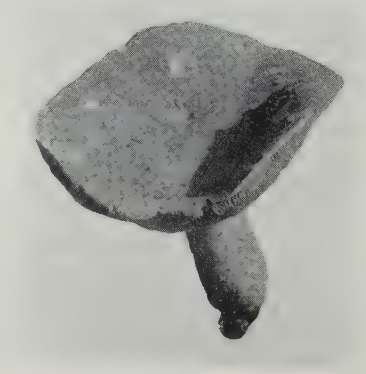
Russula pseudodelica LANGE

シロハツタケモドキ

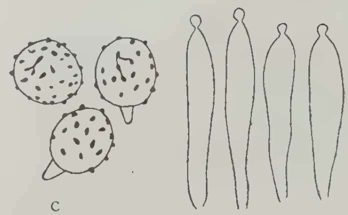
LANGE, Agar. Denm. 6 : 27. 1926; Fl. Agar. Dan. 5 : 58, pl. 178, f. A. 1940—SINGER, Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 371. 1932; Agaricales, 704. 1949—J. SCHAEFFER, Ann. Myc. 31 : 315. 1933—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 441. 1953—HONGO, Bull. Facul. Lib. Arts. Sci. Educ. Shiga Univ. 5 : 60, f. 1, F. 1956—HEIM, Champ. Eur. 21 : 173. 1957.

（今関及土岐，林．試．研．報．87 : 56, f. 6. 1956—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，92. 1957.

Russula japonica HONGO, Acta Phytotax. Geobot. 15 : 102, f. 1. 1954.



a



c　b

第 194 図　シロハツタケモドキ Russula pseudodelica

a. 子実体 ×1/3　b. 囊状体 ×500

c. 胞子 ×1000 （大谷氏）

子実体は群生；傘は径 6—14 cm，或は 20cm に及び，丸山形にて中窩を有し，のち開張して中部凹み，遂に漏斗形となる；表面は無毛或はやや粉状，時に上皮は破片に鱗裂す，速に乾燥， 白色， のち汚黄色或は帯褐色に染まる，上皮は容易に剝げず，線条なし；肉は厚く，緻密，白色，味温和，臭はむしろ明瞭；褶は殆ど離生なるも傘の開張により屢々垂生状をなす，初め白色，速にクリーム色となり，更に黄土色となる，甚だ密，むしろ狭幅（約 4mm），薄く，時に茎に近く叉状をなし，短褶を不規則に介在す， 稜は平坦；茎は 5—6×±2cm，屢々下方に

狭細，白色，時に基部に近く皺あり，乾燥，緊緻，充塞；胞子は淡黄色，球形，有刺，糊性，沃度液にて網目を認めず，径 5—6.5μ；胞子紋は黄土色，担子柄は 33—37×9.5—11.5μ，4胞子；稜嚢体は密生，円筒状紡錘形～長棍棒形，通常先端に乳頭状突起あり，31—48×7.5—10.5μ；褶側嚢体は散生，同形.

所在及産地

林地—夏秋　　本州，九州—欧

和名　シロハツタケモドキ（擬白初茸）〔本郷〕
カラシロハツ（辛白初茸）〔今関及土岐〕

Russula nigricans (BULL.) FR.
クロハツタケ

FRIES, Epicr. Myc. 350. 1838; Hymen. Eur. 439. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 452. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 209. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 203. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 218. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 1015(no. 970). 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 204, pl. 12, f. 1. 1872; Enchir. Fung. 132. 1886—GILLET, Hymen. Fr. 231, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 219. 1876; Hattsv. 1 : 199. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 126. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 538. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 453. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 408. 1915—SCHROETER, Pilze, Schles. 1 : 550. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 51. 1893; Brit. Fungi, 119. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 153. 1900—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl-fam. 1, 1** : 220, f. 111, D. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 127. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 281. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 40, pl. 37, f. 78. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 360, pl. 66C. 1912—BURLINGHAM, N. Am. Fl. 9 : 206. 1915—RICKEN, Blätterp. 42, pl. 15, f. 2. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 126. 1918—REA, Brit. Basid. 458. 1922—SINGER, Hedwigia, 66 : 256. 1926; Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 368. 1932; Agaricales, 704. 1949—LANGE, Agar. Denm. 6 : 26. 1926; Fl. Agar. Dan. 5 : 56, pl. 178, f. B. 1940—BRESADOLA, Icon. Myc. 8 : pl. 397. 1929—CRAWSHAY, Spore. Ornam. Russulas, 80, pl. 3, n. 2. 1930—J. SCHAEFFER, Ann. Myc. 31 : 308, pl. 27, f. 7a. 1933—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 351. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 123, pl. 43, f. 2. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 34. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 441. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 10. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2 : 173, pl. 22, f. 2. 1957.（安田，植．雑．38 : 76. 1924—白井，日．菌．目．ed. 3. 347. 1927—川村，日．菌．図説，n. 167. 1929；日．菌．図鑑，3 : 375，f. 354. 1954—小林，日．隠．植．図．515，pl. 248，f. 1—4. 1939—今関，原色きのこ，pl. 50(右). 1942；及土岐．林．試．研．報．67 : 59. 1954—広江，応用菌蕈学，1136. 1941—原，日．菌．目．319. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，92，f. 233，pl. 41，f. 233. 1957.

Agaricus nigricans BULL. Champ. Fr. pl. 212. 1784; pl. 579, f. 2. 1792.

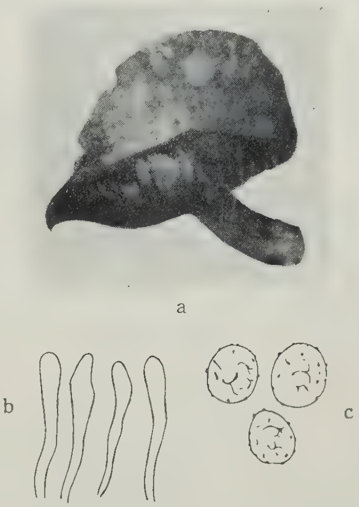
Agaricus elephantinus SOW. Col. Fig. Engl. Fungi, 1 : pl. 36. 1797.

Agaricus adustus β. elephantinus PERS. Syn. Meth. Fung. 459. 1801.

Agaricus adustus var. *crassus* ALB. et SCHW. Consp. Fung. 220. 1805.

Agaricus adustus BARLA, Champ. Nice, 30, pl. 17, f. 1—9. 1859.

Lactarelis nigricans EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5 : 410. 1909.



第195図　クロハツタケ Russula nigricans
a. 子実体 ×1/3　b. 嚢状体 ×500
c. 胞子 ×1000（大谷氏）

子実体は孤生或は群生；傘は径 4—15 cm，時に 20 cm に及び，饅頭形にて多くは中窩を有し，開張して凹下し遂に漏斗形となる，甚だ肉質にて緊緻；表面は初め或は湿時僅か粘性，のち多くは乾燥，無毛，初め淡色，速に灰色或は帯褐煤色となり，のち黒色となる，表皮は剝げず，傘嚢体なく，苛性加里反応なし；縁は初め内屈し，のち真直となり，平滑，稍々鋭きか或は鈍し；肉は緊緻にて堅し，白色，傷時煉瓦色となり，遂に黒色となる，硫酸鉄にてオリーブ緑色，フォルモールにて橙赤色となる，味温和或は徐々に僅か辛し，臭なし；褶は茎に彎入或は円形に直生，厚肉（1—2mm），広幅，甚だ疎生，小褶混在，帯黄白色，傷により煉瓦色，のち汚灰色より

黒色となる，脆し，水滴を出す，稜は異質；托実質は類糸状；嚢状体は円筒形～狭き便腹状，58—75×5.5—7μ，上部幅 2—7μ，サルフォバニリンにて青染す；茎は 3—8×1—3cm，同幅或は基部屢々太し，平滑，無毛，白色，基部帯灰褐色，のち全部同色となり，傷により煉瓦色となる，中実，茎嚢体なし；担子柄は 50—64×9—9.5μ，小柄長さ 4.5—5.5μ；胞子は長球形或は殆ど球形，僅か有疣，淡色，8—9×6—8μ，大なる中油球あり，沃度液にて只時々中断せる網目（第Ⅲ型）を認めらる；胞子紋は白色；可食。

所在及産地

広葉樹及針葉樹林地—夏秋

北海道，本州，九州—欧．北米．亜(小亜)

和名 クロハツタケ（黒初茸）〔川村〕クロベニタケ（黒紅茸）〔安田〕

Russula densifolia (SECR.) GILL.

クロハツタケモドキ

GILLET, Champ. Fr. 231, c. ic. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 320. 1883; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 1017(no. 973). 1890—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 54. 1893; Brit. Fungi, 119. 1911—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 454. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 409. 1915—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 220. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 360. 1912—KAUFFMAN, Agar. Mich. 127. 1918—REA, Brit. Basid. 459. 1922—KONRAD, Bull. Soc. Myc. Fr. 41 : 61. 1925 ; & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4 : pl. 342. 1926; Agaricales, 2 : 34. 1952—SINGER, Hedwigia, 66 : 255. 1926; Beih. Bot. Centr. 49 : 366. 1932 ; Agaricales, 704. 1949—LANGE, Agar. Denm. 6 : 26. 1926; Fl. Agar. Dan. 5 : 57, pl. 179, f. c. 1940—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 90, pl. 38. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 8 : pl. 399. 1929—CRAWSHAY, Spore Ornam. Russulas, 80, pl. 4, n. 5, 5a. 1930—J. SCHAEFFER, Ann. Myc. 31 : 308, pl. 27, f. 7a. 1933—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 124. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 441. 1953—HONGO, Bull. Fac. Lib. Arts Educ. 2 : 49, f. 4. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 173. 1957.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，92，f. 234. pl. 41，f. 234. 1957）

Agaricus densifolius SECR. Myc. Suis. 1 : 476. 1833.

Russula nigricans ssp. *densifolia* BAT. Fl. Monogr. Asterosp. 63. 1908.

? *Russula subusta* BURLINGH. N. Am. Fl. 9 : 207. 1915.

子実体は散生；傘は径 7—10cm，丸山形，のち開張し凹下し幾分漏斗形となる，緊緻；表面は初め幾分粘性，雨後中部粘性，速に乾燥，中部細毛あり，のち小粒状或は無毛，帯白色～帯褐灰色，のち灰緑～肉桂褐色となり，中部黒色より周辺淡色或は類白色に推移す，表皮剝げる；縁は無線条，内屈，のち甚だ鋭し；肉は白色，傷時直ちに赤色，稀に青色に移り，最後に黒色となる，緊緻にて堅し，味温和にて，多少辛き後味を残し，臭は多少果実様，$FeSO_4$ にて淡緑色，フォルモールにて橙赤色となる；褶は直生，歯にて垂生或は狭生，薄肉，狭幅，甚だ密生，叉状，正しく小褶を混在，白色，白黄色或は白赤色，傷時通常赤色となる；茎は 3—5×1—2cm，同幅或は一方太し，白色，接触により灰黒色，或は傘と同色，僅か粉状，のち裸出，平滑，時に甚だ微細の網皺あり，緊緻，中実；担子柄は 30—33×7.5—9μ，小柄は長さ 7—8μ；胞子は類球形，僅か有刺，1油球を有し，6—7.5×5.5—6.5μ，沃度液中にて太き或は細き線条の網目（第Ⅱ，Ⅲ，稀にⅦ型）を認めらる；胞子紋は白色；嚢状体は毛状，鈍頭，薄膜，52-67×4.5—6.5μ。

所在及産地

林地—夏秋　　本州—欧．北米

和名 クロハツタケモドキ（擬黒初茸）〔本郷〕

Russula compacta FROST et PECK

アカカバイロタケ

PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 32 : 32. 1880; Bull. N. Y. Sta. Mus. 116 : pl. 109, f. 1—4. 1907—BURLINGHAM, N. Am. Fl. 9 : 205. 1915—MURRILL, Mycologia, 8 : 123, pl. 185, f. 5. 1916—KAUFFMAN, Agar. Mich. 129. 1918—SINGER, Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 364. 1932; Bull. Soc. Myc. Fr. 54 : 141. 1938—J. SCHAEFFER, Ann. Myc. 31 : 317. 1933.

（松浦，菌類，1 : 96，f. 1. 1931；茸類辞典，134，f. 157. 1933；応用菌蕈学，f. 757 (p. 1133). 1941—原，日．菌．目．319. 1954）

子実体は孤生；傘は径 5—10cm，丸山形，のち圧低され，遂にやや漏斗形となる，縁は初め内屈し，薄く，のち隆起す；表面は乾燥，幼時帯白色，のち全面或は斑紋状に淡赤褐色或は赤褐色となる，無光沢，老時微細軟毛を生じ，縁辺線条なし；肉は厚く，緊緻，むしろ脆く，白色，老時及傷時帯赤色に変ず，味温和或は僅か辛く，臭は老時及乾時不快；褶は狭く着生，初め白色，のち汚赤色或は赤褐色，密，むしろ狭幅，短褶を混じ，屢々叉状をなす；茎は 3—6×1.5—3cm，同幅或は下方僅かに狭細，初め白色，

老時或は接触によりて帯赤色或は帯赤褐色となる，むしろ脆く，充塞；担子柄は 36—50×9—11 μ，4胞子；胞子は類球形，無色，大油球を含む，8—10×7—8μ，沃度液にて不完全なる網目（Ⅲ, Ⅳ型）を認めらる；胞子紋は白色；嚢状体は紡錘形或は円筒形にて鋭頭，50—60×5.8—11μ。

所在及産地

林地—夏秋　　本州—北米

和名　アカカバイロタケ（赤樺色茸）〔松浦〕

Russula subnigricans HONGO

ニセクロハツタケ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 30 : 78, f. 3. 1955.
（今関及本郷，原色日，菌，図鑑，92，f. 233′. 1957）

子実体は群生或は散生；傘は径 5—11.5 cm，或はそれ以上に及び，丸山形，のち扁平となりて中央圧低され，遂に漏斗形となる；表面は乾燥，微細絨毛状を呈し，煤焦茶色，周辺僅か淡色，外被は剝げ難く，粒状溝なし；肉は厚く，緻密，白色，傷時帯赤色となるも黒色とならず，味及臭なし；褶は直生或は僅か垂下歯を有し，淡クリーム色，傷時赤変す，疎，中位に広幅（6—9mm），むしろ厚く，脆く，叉状ならず，往々多少横脈あり；茎は 3—6×1—2.5 cm，同幅或は下方に狭細，不明瞭の粗渋線条あり，傘面より淡色，基部帯白色，中実（或は充塞）；胞子は類球形或はやや球状卵形，幾分有疣にて微細の網目あり，糊性，1油球あり，無色，7—9×6—7 μ；担子柄は 38—50×8—9.5μ，4胞子；稜及褶側嚢体は同形，散生，披針状担子柄形或は狭紡錘形，薄膜，53—88×9.5—12.5μ；托実質は混淆型；傘の外被は纒絡せる暗焦茶色の幅 4—13.5μ の菌糸より成る；有毒？

所在及産地

シイ林内地上—秋　　本州

和名　ニセクロハツタケ（贋黒初茸）〔本郷〕

(2) Decolorantes (R. MAIRE) SING. (1926)

イロガワリベニタケ節

Russula rubescens BEARDSLEE

イロガワリベニタケ

BEARDSLEE, Mycologia, 6 : 91, pl. 121, f. 1. 1915—BURLINGHAM, N. Am. Fl. 9 : 256. 1915—SINGER, Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 325. 1932; Agaricales, 705. 1949—F. SCHAEFFER, Ann. Myc. 31 : 385. 1933—HONGO, Bull. Facul. Lib. Arts Sci. 4 : 55, f. D-E. 1955.
（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，92，f. 235, pl. 41，f. 235．1957）

子実体は群生；傘は径 6.5—8.5 cm，或はそれ以上に及び，丸山形，のち開張し扁平となる；表面は湿時僅かに粘性，赤色，のち褪色してピンク或はピンククリーム色となり，屢々灰色～黒色の斑点を生ず，外皮剝げ易し；縁は老時有粒線条を存す；肉は中位に厚く，縁に於て甚だ薄し，白色，空気に触れて赤変し，遂に黒色となる，柔軟にて老時脆し，臭は微弱，味温和；褶は白色，のちクリーム色，狭生～離生，茎に近く叉状，密生，脆く，幅 7 mm 或はそれ以上，傷時赤色を呈し，遂に帯黒色となる；茎は長さ 3—5 cm，或はそれ以上，幅 1.3—2 cm，殆ど同幅，皺線あり，白色，のち灰色となり，遂に帯黒色となる，充塞；胞子は類球形～短楕円形，有刺，沃度液にて網目を認めず，7.5—9×6.5—7.5 μ；胞子紋はクリーム色；稜嚢体は束生，円筒形～棍棒形，附属突起あるか或は鈍頭，45—63×7.5—8 μ，褶側嚢体は多生，稜嚢体と同形，48—63×9.5—11μ。

所在及産地

混淆林地—夏秋　　本州—北米

和名　イロガワリベニタケ（色変紅茸）〔本郷〕

(3) Ingratae QUÉL. (1888)

クサハツタケ節

Russula farinipes ROMELL.

コクサハツタケ

in BRITZELMAYR, Hymen. Südbay. 8 : 12, f. 54. 1893—F. SCHAEFFER, Ann. Myc. 31 : 428: 1933—LANGE, Fl. Agar. Dan. 5 : 66, pl. 186, f. A. 1940—SINGER, Agaricales, 706. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 68. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 468. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 186. 1957.

Russula subfoetens W. G. SMITH, Jour. Bot. 11: 337. 1873; Brit. Basid. 288. 1908—MELZER, Bull. Soc. Myc. Fr. 48 : 200, f. 1, pl. 24, A. 1932—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 343. 1938. (non COOKE).
（松浦，茸類辞典，134，f. 158．1933；応用菌蕈学，f. 758(p. 1134)．1941—原，日．菌．目．320．1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，98．1957）

Russula foetens var. *subfoetens* MASS. Brit. Fung. Fl. 3 : 70. 1893—SINGER, Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 321. 1932.

Russula fellea BRES. Icon. Myc. 9 : pl. 427. 1929. (non FRIES).

子実体は孤生或は群生；傘は径 3—8 cm，丸山形より扁平となり，次に凹入し，更に浅き漏斗形となることあり，僅か肉質にて剛直弾性あり；表面は湿時甚だ粘性，時に老時罅裂す，革黄色～黄土色；縁は薄くして鋭く，溝条ありて粒疣を有し，甚だ屢々波曲す，幼時内屈す；肉は白色，皮下及び茎の基部黄色を呈す，味辛く，臭は甚しからず，硫酸鉄にて灰紅色となる；皮嚢状体はよく発達し，傘表にては長紡錘形，多少弓状をなし，60—120×6—8(10)μ，茎表にては束状をなし外見粉状に見ゆ，40—60×8—10μ；褶は直生～類垂生，狭幅にて両端に狭細，稍々密或は稍々疎，白色，のち淡黄色，多くは撓曲性，水滴を出す；稜は同質，褶側嚢状体は甚だ多生，束状，長紡錘形，多少屈曲し，僅か抽出し，頂端に附属突起あり，60—80×8—10(12)μ，サルフォバニリンにて青色となる；茎は 3—6×1—2 cm，同幅或は基部細く，往々僅か屈曲，白色，のち淡黄色，屢々基部に黄茶褐色小網あり，上半部微粉を有し，堅くして弾性あり，中実，のち空室を生ず；担子柄は 50—70×6—8μ；胞子は広楕円形或は時に卵形，有疣，網目なし，無色，7—8×6—7μ；胞子紋は白色。

所在及産地

広葉樹林地—夏秋　　北海道，本州—欧

和名　コクサハツタケ（小臭初茸）〔川村〕

ヘクソハツモドキ（擬屁糞初茸）〔松浦〕

Russula metachroa HONGO

イロガワリシロハツタケ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 30 : 219, f. 3. 1955; Bull. Facul. Lib. Arts Sci. Educ. Shiga Univ. 5 : 60. 1956.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，93, f. 239, pl. 42, f. 239. 1957）

子実体は群生；傘は径約 4—7.5 cm，丸山形～扁平～圧低され，のち類漏斗形となる；表面は粘性にて外被を被むり，白色，のち汚黄色或は汚黄土色，白粉を有す，縁はのち明らかに粒状溝を有す；肉は白色，傷時黄色となり，厚く，味辛し；褶は狭生，或は殆ど離生，初め白色，のち僅かクリーム色，擦時汚色，密，基部叉状をなす；茎は 2—5×0.7—1.5cm，殆ど同幅，白色，のち汚黄土色，粗渋線条あり，海綿状中空；胞子は球状卵形，有粒，非糊性，9—12×6.5—8.5μ（或は 8—11×7—9μ）；胞子紋は白色；担子柄は 38—49×9.5—13μ，4 胞子；稜嚢体は密生，円筒形にて先端狭細，30—76×7—9.5μ；褶側嚢体は多生にて前者と同様或は幾分大形，50—86×8—11μ；上皮層菌糸は纒絡し，幅 3.5—6.5μ；傘嚢体は円筒形，凸頭或は鈍頭，幅 5.5—8.5μ；凡ての菌糸に菌絆あり；無毒。

所在及産地

松林内地上—秋　　本州

和名　イロガワリシロハツタケ（色変白初茸）〔本郷〕

Russula boninensis S. ITO et IMAI

オガサワラキハツタケ

S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16 : 56. 1940.

子実体は群生或は孤生；傘は径約 4—7 cm，丸山形，のち扁平となり，遂に中央圧低さる；表面は粘性，平滑，帯白色～帯黄色，中央暗色，外被剝げ易し，縁辺のちに線条あり；肉は白色，厚く，海綿質，味辛く，臭なし；褶は直生，やや等長，初め白色，のち帯黄色，密；茎は 4—5×1—1.5 cm，同幅，白色，茎部帯黄色，無毛，光沢あり，充塞；胞子は類球形或は広楕円形，有刺，7.4—10×7—8μ。

所在及産地

リュウキュウマツ（*Pinus liuchuensis* MAYER）落葉間地上—秋　　小笠原島

和名　オガサワラキハツタケ（小笠原黄初茸）〔今井〕

〔因記〕前種と酷似するも当時顕微鏡的検査を欠き，目下之れを再検すること困難なり，暫く当時の記載を掲げ将来の研究を俟つ。

Russula foetens PERS. ex FR.

クサハツタケ

PERSOON, Obs. Myc. 1 : 102. 1796—FRIES, Epicr. Myc. 359. 1838; Hymen. Eur. 447. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 449. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 213. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 222. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 1046. (no. 1015). 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 209. 1872; Enchir. Fung. 135. 1886—GILLET, Hymen. Fr. 239, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 220. 1876; Hattsv. 1 : 208. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 127. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 531. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 467. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 438. 1911—SCHROETER, Pilze. Schles. 1 : 547. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 ; 70. 1893; Brit. Fungi, 288. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl-fam. 1, 1** : 219, f. 111, c. 1900—W. F. SMITH, Brit. Basid. 122. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 42, pl. 40, f. 87. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 356, pl. 45B. 1912—MURRILL, Myco-

logia, 4 : 292, pl. 76, f. 7. 1912—BURLINGHAM, N. Am. Fl. 9 : 214. 1915—RICKEN, Blätterp. 51, pl. 19, f. 4. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 136. pl. 17. 1918—REA, Brit. Basid. 464. 1922—SINGER, Hedwigia, 66 : 207. 1926; Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 319. 1932; Agaricales, 706. 1949—LANGE, Agar. Denm. 6 : 34. 1926; Fl. Agar. Dan. 5 : 65, pl. 185, f. c. 1940—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 93, pl. 40. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 9 : pl. 426. 1929—CRAWSHAY, Spore Ornam. Russulas, 139, pl. 5, n. 7a, pl. 6, n. 7c. 1930—J. SCHAEFFER, Ann. Myc. 31 : 434, pl. 27, f. 3d. 1933—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 343. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 126, pl. 48, f. 1. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 67. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 467, f. 660. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 11, A. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2 : 185, pl. 25, f. 1. 1957.

(梅村，富士．植．誌．371．1923—白井，日．菌．目．ed. 3. 346. 1927—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori. Soc. Agr. Sci. 3 : 113. 1931—今関，原色きのこ，pl. 51 (左)．1942；及土岐，林．試．研．報．67 : 59. 1954—川村，日．菌．図鑑，3 : 362, f. 345. 1954—原，日．菌．目．319. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，93, f. 237, pl. 42, f. 237. 1957)

Agaricus piperatus BULL. Herb. Fr. pl. 292. 1786.

Agaricus foetens PERS. Syn. Meth. Fung. 443. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1 : 59. 1821.

Agaricus incrassatus SOW. Col. Fig. Engl. Fungi, 3 : pl. 415. 1809.

Russula foetenula PECK, Bull. N. Y. St. Mus. 116 : 85. 1907.

子実体は孤生或は群生；傘は 7—15 cm，初め球形，のち饅頭形に開張し中央凹下す，硬固，中盤肉質；表面は甚だ粘性，黄褐色，帯渋赤黄褐色，或は黄土色，中央暗色；縁は初め内屈し，のち開展，鋭し，甚だ速かに長き (1cm 以上) 暗色繊維の線条を生じ，往々粒状線を有す，表皮は固着し，只縁辺少しく剝ぐを得；毛及び傘嚢体なし，苛性加里にて暗褐色となる；肉は白色，帯白色，或はクリーム色，表皮下淡黄褐色，遂に汚黄土色となる，緊緻，味甚だ苦辛，臭初め不快，のち糞臭を有す；褶は狭生，稍々狭幅，密生，叉状，小褶混在，淡黄色，汚黄色，屢々黒点を生じ，最後に褐斑を生ず，稜は同質，琥珀褐色の水滴を出す；托実質は一部糸状；茎は 5—10×1.5—3cm，同幅，或は便腹状，僅か皺あり，類白色にて屢々褐色を帯び，或は基部に褐色点あり，中実にて遂に中空となる；担子柄は 35—50×9—14 μ；胞子は球形，或は類球形，有刺或は有疣，中心油球あり，無色，7—10—12.5×7—9—11μ，沃度液にて表面刻紋は多様 (多くは第 Ⅳ，屢々Ⅲ或は Ⅴ，又はⅡ及び Ⅵ 型)；胞子はクリーム色；褶側嚢体は 72—95×11—12 μ，紡錘形，先端多くは鈍頭，内容あり，稜嚢体は多生，小形，45—70×9—11μ，棍棒状披針形，先端鈍頭，単一或は2附属突起あり，サルフォバニリンにて青色，最下部は淡紅色となる；円筒形の油脂菌糸あり，無毒なるが如きも悪臭あるにより食さず。

所在及産地

林地及草原地—夏秋

北海道，本州—欧．北米．亜(支．小亜)

和名 クサハツタケ (臭初茸)〔川村〕ヘクソハツタケ (屁糞初茸)〔川村〕ニギリタケ (松浦)

Russula laurocerasi MELZER
クサハツタケモドキ

MELZER, Bull. Soc. Myc. Fr. 48 : 200, pl. 24, f. B. 1932—KONRAD & JOSSERAND, Bull. Soc. Myc. Fr. 50 : 265. 1934—SINGER, Agaricales, 706. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 126. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 ; 67. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 468. 1953—HONGO, Bull. Fac. Lib. Arts. Educ. Shiga Univ. 6 : 34, f. G. 1957—HEIM, Champ. Eur. 2 : 185. 1957.

(今関及本郷，原色日．菌．図鑑，93. 1957)

Russula subfoetens Auct. nonnul.

子実体は群生；傘は径 5cm 或はそれ以上，球状～丸山形，のち扁平或は幾分圧低さる；表面は淡黄土色，のち汚粘土色，縁に有粒皺あり；肉は中盤に於て中位に厚く，縁に於て甚だ薄し，帯白色，老時幾分黄土色，臭苦扁桃臭，味は辛くして不快なり；褶は白色，老時多少帯褐色となる，屢々液を出し，殆ど離生，中位に密，屢々基部叉状，幅 4—6 cm；茎は 6×1 cm，同幅或は基部僅か肥大，白色，のち部基から汚粘土色となる，多少皺線条あり；胞子は球形或は類球形，7.5—9.5 μ (刻紋を除く) (刻紋を入るれば 10—11.5 μ)，粗疣及び深き翼が往々胞子を横に回る，糊性；担子柄は4胞子，41—45×12.5—16μ；紋は白～クリーム色；稜嚢体は群生，37—45×8.5—12.5μ，円筒形～棍棒形，先端鈍或は鋭頭；褶側嚢体は多生，44—80×9.5—16μ，円錐状円筒形～狭紡錘形，先端屢々鈍凸頭。

所在及産地

広葉樹林内地上—秋　本州—欧

和名　クサハツタケモドキ(擬臭初茸)〔本郷〕

Russula pectinata (BULL.) FR.

クシノハタケ

FRIES, Epicr. Myc. 358. 1838; Hymen. Eur. 449. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 450. 1844—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 206. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 332. 1889; Illus. Brit. Fungi. 7 : pl. 1101 (no. 1024). 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 210. 1872; Enchir. Fung. 135. 1886—GILLET, Champ. Fr. 244, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 209. 1879—WINTER, Pilze, 1 : 529. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 470. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 438. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 546. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 72. 1893; Brit. Fungi, 122. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 218. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 290. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze. 2(1) : 354. 1912—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 96. pl. 43. 1927—CRAWSHAY, Spore Ornam. Russulas, 132, pl. 27, f. 7, c. 1933—J. SCHAEFFER, Ann. Myc. 31 : 437, pl. 27, f. 7c. 1933—LANGE, Fl. Agar. Dan. 5 : 66, pl. 185, f. D. 1940—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 68. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 467. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 11, B. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2 : 186. 1957.

(松村, 植. 名鑑, 1 : 172. 1904—白井, 日. 菌. 目. 89. 1905; ed. 2. 591. 1917; ed. 3. 347. 1927—川村, 日. 菌. 図鑑, 3 : 361, f. 344. 1954—原, 日. 菌. 目. 319. 1954)

Agaricus pectinatus BULL. Herb. Fr. pl. 509, f. N. 1790.

Russula consorbrina var. *pectinata* SING. Hedwigia, 66 : 206. 1926; Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2: 318. 1932.

子実体は孤生; 傘は径 2—10cm, 多くは 5—7cm, 丸山形, のち扁平となり中央凹下し, 稀に漏斗形となる, 脆し; 表面は新鮮時粘性にて膨れゴム状に柔く, 乾けば只薄き透明の皮となり剝げ易く, 尚永く幾分光沢あり, 無毛, 多くは殆ど中央迄密なる放射状繊維あり, 色は明かなる焦茶色にて灰黄色, 黄褐色, 類肉桂色より暗栗褐色等に変化し, 稀に黒栗褐色となる, 屢々縁部淡くして中央濃色, 圧によりて銹斑を生ず; 縁は鋭く, 長き広き櫛歯状溝条ありて疣列を存す, 裂け易し; 傘嚢体なく, 大なる硬毛あり; 肉は永く純白色, のち多少灰色, 皮下帯黄色, 薄く, 甚だ脆し, 味甚だ辛く, 臭不良なるもクサハツより弱し; 褶は離生, 広幅, 前方幾分丸く中部最も広くして殆ど便腹状, 著しく密生或は稍々疎, 単一或は叉状, 幾分灰白〜クリーム色, 屢々銹斑あり, 稜は薄く基部厚く, 甚だ脆し, 同質, 多くは褐色; 嚢状体は褶側及び稜に多生, 紡錘形 60—100×6—10μ, 屢々狭くして 5—6μ, サルフォバニリンにて多くは青色を呈す; 茎は 3—6×1—2cm, 円筒形〜棍棒形, 稀に幾分紡錘形, 屢々永く純白色, 時に褐色或は灰色, 基部に屢々銅赤色の斑点或は繊維あり, 無毛にて光沢を有し, 頂部屢々幾分粉状, 脆し, 中部海綿状或は空室を有す; 担子柄は 30—40×8—11μ; 胞子は類球形〜楕円形, 有刺, 7—9×6—7μ, 沃度液にて各刺列生し, 幾分連結糸あり, 切断せられたる網刻を認めらる; 胞子紋はクリーム藁色(II)。

所在及産地

雑木林内及草原—夏秋　本州—欧. 阿

和名　クシノハタケ(櫛歯茸)〔川村〕

Russula pectinatoides PECK,

クシノハタケモドキ

PECK, Bull. N. Y. St. Mus. 116 : 43, pl. 105, f. 6-10. 1907—BURLINGHAM, N. Am. Fl. 9 : 214. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 137. 1918—J. SCHAEFFER, Ann. Myc. 31 : 439. 1933—SINGER, Agaricales, 706, 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 69. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 467. 1953.

Agaricus livescens BATSCH, Elench. Fung. Cont. 1 : 53, f. 67. 1786. (non SECRETAN, 1833, KICKX, 1867)

Russula livescens QUÉL. sensu BRESADOLA et LANGE—QUÉLET, Fl. Myc. 345. 1888—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 433. 1915—RICKEN, Blätterp. 43, pl. 15, f. 5. 1915—BRESADOLA, Icon. Myc. 9 : pl. 441. 1829—CRAWSHAY, Spore Ornam. Russulas, 141, pl. 23, f. 21. 1933—LANGE, Fl. Agar. Dan. 5 : 66, pl. 185, f. A. 1940—HEIM, Champ. Eur. 2 : 186. 1957.

Russula consorbrina var. *pectinatoides* SING. Hedwigia, 66 : 205. 1926; Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 317. 1932.

傘は径 3—7cm, 丸山形, のち扁平となり, 中央圧低さる; 表面は湿時粘性, 薄き剝げる皮を有し, 無毛, 汚藁色, 帯褐色或は焦茶褐色, 中央暗色, 縁に有疣溝を存す; 肉はむしろ緊緻にて脆くなり, 白色, 皮下僅か灰色, 変色せず, 薄し, 味は温和或は僅か徐々に辛し, 臭なきか魚臭あり; 褶は直生或は狭生, 白色, のちクリーム色となり, 傷時黄褐色, 密或はやや疎, 中位に広幅, 前方広く, 後方狭し, 薄し, 等長にて或物は茎に近く叉状をなす; 茎は 2—5×0.5—1cm, 白色或は汚色, ほぼ同幅, 無毛,

充塞，のち中空；胞子は類球形，有疣，径 6—8μ，沃度液にて網目を認めらる；胞子紋は帯白色〜クリーム白色；褶側嚢体は僅か便腹状或は円筒状棍棒形。

所在及産地

林地—夏秋　　本州—欧・北米

和名　クシノハタケモドキ（擬櫛歯茸）

Russula sororia FR.

キチャハツタケ

FRIES, Epicr. Myc. 359. 1838; Hymen. Eur. 447. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 466. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 436. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 138. 1918—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 346. 1938—J. SCHAEFFER, Ann. Myc. 31 : 440. 1933—SINGER, Agaricales, 706. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 127, pl. 48, f. 2. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 68. 1952—HEIM, Champ. Eur. 2 : 186. 1954.

（原，日．菌．目．320．1954—今関及本郷，原色日．菌，図鑑，93, f. 241, pl. 42, f. 241．1957）

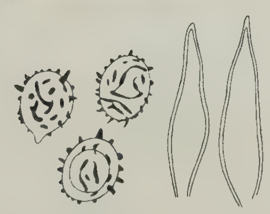
Russula consobrina var *sororia* GILL. Champ. Fr. 238. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 329. 1889; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 1057 (no. 1014). 1890—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 71. 1893; Brit. Fungi, 122. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 288. 1908—SINGER, Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 317. 1932—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 467. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 11, C. 1956.

Russula consobrina var. *intermedia* COOKE, Illus. Brit. Fungi, pl. 1057. 1890.

Russula pectinata ROLLAND, Atl. Champ. 39, pl. 36, f. 75. 1910—BURLINGHAM, N. Am. Fl. 9 : 213. 1915—BRESADOLA, Icon. Myc. 9: pl. 440. 1929.



a　　b



d　　c

第196図　キチャハツタケ　Russula sororia
a. 子実体表面　b. 同裏面 ×1/3
c. 嚢状体 ×500　d. 胞子 ×1000（大谷氏）

子実体は孤生或は群生；傘は 3—9(12)cm，初め類球形にて内屈縁を有し，のち丸山形より扁平となり，中央凹下するも漏斗形となること少し；表面は湿時粘性，皮は半ばはげ易く，無毛，縁に於て幾分灰色の綿絮あり，多くはセピア色にて黄褐〜暗褐色間に変化し，中央は屢々暗褐色，稀に銹斑あり；縁は鋭く，多くは粉状，熟時有溝にて粒疣あり；傘嚢体なし；肉は白色，傘皮下灰色にて褐色彩を有し，薄く，堅脆，$FeSO_4$ にて暗褐色となる，味は辛く，臭は僅か不快；褶は狭生〜殆ど離生，白色，速に灰色に移り，最後に灰クリーム色，甚だ稀に銹斑あり，密生〜殆ど疎，屢々叉状，小褶稀に混在，中央部最も広幅にて前方僅か円し，幾分弾性あり，脆し；稜は同質或は異質にて多くの嚢状体あり；褶側に甚だ多くの嚢状体あり，突錐状に尖り，100—120×6—8μ，サルフォバニリンにて青変す；茎は 2—6×1.5—2cm，同幅或は基部細く，多くは初めより灰色に傾き，鉛灰色或は褐色の部分を有す，多くは光沢なく，幾分綿絮状，頂端に褶端が密に平行に流れ，他部は平滑，空室〜中空となる；茎表に紡錘形の毛あり，後殆ど褶側嚢体の形となる；担子柄は 40—50×8—9μ；胞子はクシノハタケのものに殆ど同じきも沃度液にて彼れと異なり疣状にて連結糸なきか時に尾様の刻紋を認めらる；胞子紋はクリーム色(II).

所在及産地

林地及樹下地—夏秋

北海道，九州—欧，北米，阿

和名　キチャハツタケ（黄茶初茸）〔今井〕

Russula senecis IMAI

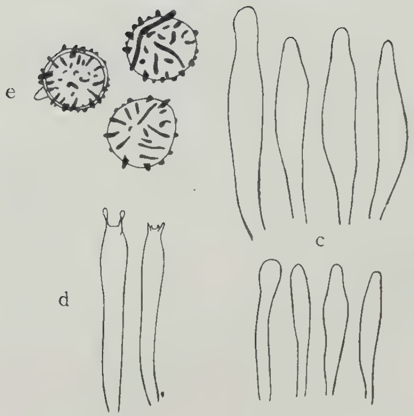
オキナクサハツタケ

IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 334, pl. 5, f. 7. 1938—HONGO, Bull. Facul. Lib. Arts Educ. Shiga Uniw. 4 : 54. f. c. 1955.

（原，日．菌．目．320，1954—今関及土岐，林．試．研．報．87 : 57．1956—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，93, f. 238, pl. 42, f. 237．1957）

子実体は群生或は孤生；傘は径 4—10cm，或はそれ以上に及び，初め類球形，のち丸山形となり，遂


a b



第 197 図 オキナクサハツタケ Russula senecis
a. 子実体 b. 同裏面 ×1/2 c. 嚢状体
d. 担子柄 ×600 e. 胞子 ×1000 (大谷氏)

に扁平となり凹下す; 表面は湿時粘性, 皮剝げ易し初め渋色にて, のち卵黄色或は鈍黄色となる, 渋色或は黒褐色の皺を有するを特徴とす; 縁は初め平滑のち僅か有条となる; 肉は白色, 脆く, 稍々厚く, 味辛く, 臭強し; 褶は直生或は僅か垂生, 稍々密, ほぼ同長, 白色, 稜は黒褐色; 茎は 5—10×0.9—1.5cm, 同幅, 帯黄色或は白色, 黒褐色の点を有す, 中実にてのち中空となる; 胞子は球形, 有刺, 無色径約 8μ; 胞子紋は白色。

所在及産地

林地—夏秋 北海道, 本州, 九州

和名 オキナクサハツタケ (翁臭初茸) 〔今井〕

Russula ochroleuca PERS. ex FR.

ヤマブキハツタケ

PERSOON, Obs. Myc. 1 : 102. 1796—FRIES, Epicr. Myc. 358. 1838; Hymen. Eur. 449. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 450. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 212. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 223. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 1049 (no. 1025) 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 210. 1872; Enchir. Fung. 135. 1886—GILLET, Champ. Fr. 244, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 219. 1876; Hattsv. 1: 210. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 128. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 529. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 :471. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 439. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 545. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 68. 1893; Brit. Fungi, 122. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 290. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 353, pl. 62, A. 1912—RICKEN, Blätterp. 51, pl. 18, f. 7. 1915—BURLINGHAM, N. Am. Fl. 9 : 218. 1915—REA, Brit. Basid. 465. 1922—SINGER, Hedwigia, 66 : 210, 1926; Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 311. 1932 : Agaricales, 707. 1949—LANGE, Agar. Denm. 6 : 36. 1926; Fl. Agar. Dan. 5 : 67, pl. 185, f. B. 1940—BRESADOLA, Icon. Myc. 9: pl. 437. 1929—CRAWSHAY, Spore Ornam. Russulas, 131, pl. 14, n. 17, pl. 15, n. 17 a. 1930—MOREAU, Bull. Soc. Myc. Fr. 46 : 137. 1930—KONRAD & FAVRE, Bull. Soc. Myc. Fr. 49 : 189. 1933—J. SCHAEFFER, Ann. Myc. 31 : 448, pl. 27, f. 5d. 1933—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4 : pl. 345. 1935; Agaricales, 2 : 69. 1952—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 345. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi. 127, pl. 49, f. 1. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 466. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 12, A. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2 : 179, pl. 25, f. 2. 1957.

(原, 日. 菌. 目. 319. 1954—川村, 日. 菌. 図鑑, 3 : 367, f. 348. 1954)

Agaricus ochroleucus PERS. Syn. Meth. Fung. 443. 1801.

Agaricus emeticus d. FRIES, Syst. Myc. 1 : 57. 1821.

子実体は孤生或は群生; 傘は 3—10cm, 丸山形, 開張して扁平となり, のち凹下す, 肉質, 堅緻, のち脆し; 表面は固着する粘性の表皮を被むり, 濃シトロン色, 黄色, 帯褐黄色或は鈍黄色, 老時淡色となる; 縁は多くは平滑, 殆ど鋭く, のち鈍くなる; 傘嚢体及び毛を有し, 苛性加里にて僅か帯緑色となり, 殆ど陰性, 硝酸及び塩酸に陽性にてシトロン色を呈す; 肉は白色, 皮下幾分黄色, のち柔くして脆し, 味は辛く, 臭は弱くして果実様なり; 褶は円状離生, 広幅, 前方多少円形, 殆ど密生, 殆ど同長に



a　　　b



d　　　c

第198図　ヤマブキハツタケ　Russula ochroleuca　a. b. 子実体 ×1/2　c. 嚢状体 ×600　d. 胞子 ×700（大谷氏）

て叉状ならず，脆し，白色のち鈍色；稜は類異質；茎は 5—7×1.2—2.5cm，同幅或は基部僅か肥大，網状皺あり，白色，帯褐白色，最後に屢々淡灰色，中実，緊緻，速に海綿状充塞となる；担子柄は 45—50×9—12μ；胞子は卵状球形，有刺，淡黄色，8—11×7—10μ，多くは 9—9.5×8—9μ；沃度液にて刻紋を認めらる（III～V 型）；胞子紋はクリーム白色（I-II）；褶側嚢体は 55—60×6.5—8.5μ，突錐形或は円筒状棍棒形，鋭或は鈍頭，短き附属突起あり（1.5—2μ），サルフォバニリンにて僅か3分の2程青色となる。

所在及産地

針葉樹林及混淆林地—夏秋　　北海道，本州—欧．北米

和名　ヤマブキハツタケ（山吹初茸）〔今井〕

Russula citrina GILL.

ナタネハツタケ

GILLET, Champ. Fr. Suppl. 1874; Rev. Myc. 3 : 5. 1881—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 471. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 437. 1915—COOKE, Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 1078 (no. 1031). 1890—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3: 54. 1893; Brit. Fungi, 119. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 462. 1922—SINGER, Hedwigia, 66 : 226. 1926; Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 310. 1932; Agaricales, 707. 1949—CRAWSHAY, Spore Ornam. Russulas, 90, pl. 18, n. 26a. 1930—J. SCHAEFFER, Ann. Myc. 31 : 449. 1933—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 344. 1938.

（白井，日．菌．目．ed. 3. 346. 1927—原，日．菌．目．319. 1954—川村，日．菌．図鑑，3 : 360, f. 343. 1954）

Russula violeipes QUÉL.-KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 446. 1953.

子実体は孤生或は群生；傘は 5—13cm，丸山形，のち扁平となり，屢々中央凹下す；表面は粘性よりは寧ろ湿潤，平滑，鮮かなるシトロン黄色，屢々縁の方淡色にて，中央帯褐黄色，時に帯緑の小孔あり，縁は鋭く，のち幾分線条を生じ，表皮剝げ易し；肉は白色，傘の中央表下黄色，茎の周辺は明灰色，かなり緊緻にて，堅脆，味は温和～徐々に辛く，臭なし；褶は僅か垂生，縁の方広幅，茎の方狭く，幾分叉状，密生，小褶混在，白色；茎は 4—8×1—1.5cm，殆ど同幅，白色，僅か皺あり，中実～充塞；胞子は類球形～広楕円形，有刺，無色，8.5—10×7.5—8.5μ，沃度液にて細脈の尾～一部網目等（第 III-IV, V，時に VIII 型）を認めらる；胞子紋は白色～淡色；嚢状体はサルフォバニリンにて青色となる。

所在及産地

林地—夏秋　　北海道，本州—欧

和名　ナタネハツタケ（菜種初茸）〔今井〕

(4) Rigidae FR. (1838)

アカフチベニタケ節

Russula cyanoxantha (SCHAEFF.) FR.

カワリハツタケ

FRIES, Monogr. Hymen. Suec. 2 : 194. 1863; Hymen. Eur. 446. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 222. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 1043 (no. 1006). 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1: 208. 1872; Enchir. Fung. 135. 1886—GILLET, Hymen. Fr. 242. c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1: 206. 1879—WINTER, Pilze, 1: 532. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 465. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 442. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1: 546. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 63. 1893;

Brit. Fungi, 121, pl. 9, f. 1. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 219. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 153. 1900—ROLLAND, Atl. Champ. 40, pl. 37, f. 79. 1910—W. G. SMITH, Brit. Basid. 287. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 355, pl. 44. 1912—RICKEN, Blätterp. 44, pl. 16, f. 1. 1915—BURLINGHAM, N. Am. Fl. 9: 217. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 141. 1918—REA, Brit. Basid. 462. 1922—SINGER, Hedwigia, 66 : 228. 1926; Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 323. 1932; Agaricales, 708. 1949—LANGE, Agar. Denm. 6: 38. 1926; Fl. Agar. Dan. 5 : 69, pl. 187, f. D. 1940—BRESADOLA, Icon. Myc. 9: pl. 423. 1929—CRAWSHAY, Spore Ornam. Russulas, 81, 83, 85, 90, pl. 1, n. 52-52 a 1930—J. SCHAEFFER, Ann. Myc. 31 : 332, pl. 27, f. 3 a. 1933—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 347. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 125, pl. 47, f. 1. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 40. 1952——KÜHNER & ROMAGNESI Fl. Analyt. Champ. Super. 443. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 15. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2: 175, pl. 21. 1957.

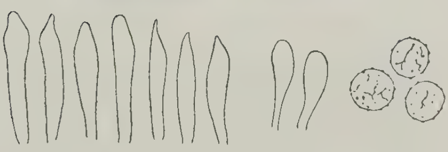
（原，日．菌．目．319. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，94, f. 244, pl. 43, f. 244. 1957）

Agaricus cyanoxanthus SCHAEFF. Fung. Bavar. 4 : Ind. 40, pl. 93. 1774—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 445. 1801.

Agaricus emeticus b. FRIES, Syst. Myc. 1 : 57. 1821.



a



b c d

第 199 図 カワリハツタケ Russula cyanoxantha
a. 子実体 ×1/3 b. 嚢状体 c. 稜嚢体 ×400 d. 胞子 ×650 （大谷氏）

子実体は孤生或は群生；傘は径 5—15cm，丸山形，のち扁平となり，更に凹下し，最後に屢々殆ど漏斗形となる；表面は湿時粘性，菫或は紫色の地色の上に中央より漸次緑色を被むり，のち不規則なる紫緑色の斑点，最後に一様に深緑色となり，暗色網状脈を有す；縁は鋭く，初め平坦，のち線条を生ず；傘嚢体あり，苛性加里にて稍々速に或は甚だ徐々に淡褐色，硝酸にて同様，塩酸にて黄色となる；稜は同質；托実質は類糸状；肉は白色，表皮下菫赤色，緊緻，のち粉砕し易し，味温和，臭なし，硫酸鉄にて反応なきか或は僅か緑灰色となる；褶は直生，白色，広幅，稍々密生，叉状，殆ど常に小褶介在；茎は 4—8×2—3cm，同幅或は殆ど同幅，白色，稀に赤色を帯ぶ，弱き皺あり，中実；茎嚢体あり；担子柄は 45—50×9—10μ；胞子は長球形～類球形，短刺を有し，無色，1中心球を存し，8—10×7—9μ，沃度液にて純疣状又は細微の線（第 IV，V 又は VI 型）を認めらる；胞子紋は白色；嚢状体は 60—95×6—8μ，稀に幅 9μ，紡錘形，先端鈍頭，稀に尖る，稜に甚だ多生，褶側に幾分稀生，サルフォバニリンにて下部淡紅色，上部青色となる；可食。

所在及産地

林地—夏秋

北海道，本州—欧．北米．阿．亜（小亜）

和名 カワリハツタケ（変初茸）〔今井〕

Russula cutefracta COOKE

アオムラサキハツタケ

COOKE, Grev. 10 : 46. 1882. pr. p. ; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 1040 (no. 993). 1890 (non pl. 1024)—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 219. 1900—LANGE Fl. Agar. Dan. 5 : 70, pl. 186, f. B. 1940—ROMAGNESI, Bull. Soc. Myc. Fr. 58 : 152. 1942—SINGER, Agaricales, 708. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 40. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 443. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2: 175, f. 158, A. 1957.

（川村，日．菌．図鑑，3 : 373, f. 352. 1954）

子実体は孤生或は群生；傘は径 6—11cm，厚く，甚だ堅く緻密，丸山形にて早くよりかなり著しく中央窪み，のち丸山状扁平となり内屈する縁を永く有し，最後に稍々漏斗形となる；表面は青銅の如き汚緑色或は暗紫色にて中心濃色，乾燥，光沢なく，粗面，縁より2分の1程の皮は剝ぐを得；縁辺に著しき長く太き縮れたる白色の不規則なる罅裂を生ず，この罅裂は中央に延びず；肉は厚くして堅く，白色，皮下灰緑色，或は灰藍色，茎の基部僅か褐色を帯ぶ

味は温和，臭は殆どなし，$FeSO_4$ に陰性；褶は初め類垂生，のち離生，稍々密，狭幅，薄く，叉状，前方稍々狭く鋭く，便腹状ならず，白色，僅か灰色となり緑或は褐色に傾く；茎は 4—6×1.5—2.5cm，短大，同幅或は少しく便腹状，堅緻，白色，のち基部黄色或は褐斑を生ず，細皺あり，担子柄は 50—55×7—9μ；胞子は多くは楕円形，有疣，疣は明かに分散し連結少し，7.5—9.5×6—6.5μ；胞子紋は白色；褶側嚢状体は多生，紡錘形，附属突起を有し，90—132×5—8μ，サルフォバニリンにて速に黒変す。

所在及産地

林地—夏秋　　本州—欧

和名　アオムラサキハツタケ（青紫初茸）〔川村〕

Russula furcata PERS. ex FR. sensu RICKEN

ウグイスタケ

PERSOON, Obs. Myc. 1:102. 1796—FRIES, Epicr. Myc. 352. 1838; Hymen. Eur. 441. 1874—ROLLAND, Atl. Champ. 39, pl. 36, f. 76. 1910—RICKEN, Blätterp. 1 : 44. 1915—BRESADOLA, Icon. Myc. 9: pl. 404. 1929—SINGER, Hedwigia, 66 : 251. 1926; Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 357. 1932; Agaricales, 708. 1949.

（川村，日．菌．図鑑，3 : 374, f. 353. 1954）

Agaricus bifidus BULL. Herb. Fr. pl. 2. 1780.

Agaricus furcatus PERS. Syn. Meth. Fung. 446. 1801—DE CANDOLLE, Fl. Fr. 2 : 140. 1815—FRIES, Syst. Myc. 1 : 59. 1821.

Russula bifida SCHROET. Pilze Schles. 1 : 549. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 219. 1900—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 432. 1915.

Dixophyllum furcatum EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5 : 410. 1909.

Russula heterophylla KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4 : pl. 353. 1927—J. SCHAEFFER, Ann. Myc. 31 : 321. 1933—HEIM, Champ. Eur. 2 : 175, pl. 23, f. 2. 1957.

Russula grisea GILL.—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 445. 1953.

子実体は散生；傘は径 6—12cm，丸山形，のち扁平となり，更に凹下し漏斗形に至る，肉質，緊緻；表面は湿時僅か粘性，速に乾燥，幾分絹糸状，僅か光沢を有し或は無光沢，乾燥により縁辺粉毛を見，屢々細裂し，時に全く絨毛に被われ最後に粒状となる，初め淡色其儘残るものあるも多くは速に帯褐緑色，オリーブ～オリーブ緑色，鶯色となり，稀に鮮緑色，時に菫色の色彩を帯ぶ，中部に於て屢々黄褐色，表皮は縁の方3分の1剝げる；縁は鋭く，真直平滑にて殆ど線条なし，屢々幾分粉状，傘嚢体なし；肉は白色，表皮下屢々表面の色を呈す，茎肉は幾分帯褐色，緊緻，のち海綿状，最後にチーズ状となる，味温和，臭なく，硫酸鉄にて黄金色，サルフォバニリンにて橙赤色，のち深洋紅色となる；褶は直生の観を呈して垂生，広幅ならず，両方一般に狭幅，甚だ密～殆ど疎生，多くは叉状，小褶介在或は同長，殆ど撓曲性，白色，稀に帯緑色の稜を有し，縁に向つて帯緑，帯黄或は帯褐色の観を呈す，光沢なし；稜は同質；茎は 4—8×1.5—2.5cm，同幅，便腹状或は下方細し，白色，僅か皺あり，中実，のち髄部充塞，遂に中空となる，毛状菌糸あり，茎嚢体なし；担子柄は 30—54×9—11μ，小柄は長さ 3.5—8μ；胞子は球形，細刺を有し，小なる中心油球あり，6—8×5.5—7μ，沃度液にて甚だ細疣ありて，ある疣は甚だ細き線にて連結さるるを認む；胞子紋は白色；嚢状体は 60—77×7—12μ，披針形或は便腹円筒形，分散粒を有し，屢々短き附属毛あり，サルフォバニリンにて染まらざるも，或物は僅か汚青色となる内容物を有す；食毒不明。

所在及産地

林地—夏秋　　本州—欧．北米．亜（西比）

和名　ウグイスタケ（鶯茸）〔川村〕

Russula crustosa PECK

ヤブレキチャハツタケ

PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 39 : 41. 1887; Bull. 67 : 45, pl. 84, f. 1-7, 1903—SACCARDO, Syll. Fung. 9 : 61. 1891—BURLINGHAM, N. Am. Fl. 9: 209. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 132. 1918—SINGER, Beih. Bot. Centralbl. 49, Abt. 2 : 336. 1932; Agaricales, 710. 1949—J. SCHAEFFER, Ann. Myc. 31 : 336. 1933—HONGO, Bull. Facul. Lib. Arts Sci. Educ. Shiga Univ. 5 : 61, f. 1, H. 1956.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，94, f. 243, pl. 43, f. 243. 1957）

子実体は群生；傘は径 5—11cm，或はそれ以上に及び，類球形～丸山形，のち広丸山形となり，遂に扁平にて中央圧低さる；表面は湿時僅か粘性にて速に乾燥し，淡黄土色或は帯褐黄土色，中央暗色，外皮は通常中盤以外に於て綿絮状破片に破る，縁に熟時僅か有粒線条あり；傘面に球嚢菌糸を有す；肉は白色，中位に厚く，緻密，臭弱きか或はなく，味温和；褶は狭生にて垂下歯を有し或は離生，白色，のち僅か帯黄色，或ものは基部叉状となる，幅 4—7mm；茎は 4—7×1.2—2.5cm，同幅或は時々下方に狭細，白色，屢々僅か汚黄土色，やや粉状，やや

粗面，海綿状充塞；胞子は類球状卵形，有疣にて微細類網状，糊性．6—6.5×5—5.5μ；胞子紋は白色；担子柄は 29—35×9μ，4胞子；稜及褶側嚢体は散生にて同形，38—48×10—14μ，便腹紡錘形，先端に鋭突起あり，無色，薄膜；$FeSO_4$にて鈍橙色となる；可食。

所在及産地

シイ林内地上—夏秋　　本州—北米

和名　ヤブレキチャハツタケ（破黄茶初茸）〔本郷〕

Russula virescens (SCHAEFF. ex ZANTED) FR.

アイタケ

FRIES, Epicr. Myc. 355. 1838; Hymen. Eur. 443. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 450. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 212, pl. 13, f. 6. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 220. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 1039 (no. 991). 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 207. 1872; Enchir. Fung. 133. 1886—GILLET, Hymen. Fr. 234, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 204. 1879—WINTER, Pilze, 1 : 535. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 460. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 412. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 548. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 57. 1893; Brit. Fungi, 119. 1911—PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 48 : 189, pl. 31. 1896—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 219, f. 111, B. 1900—PATOUILLARD, Ess. Tax. 153. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 126, pl. 40, f. 1. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 285. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 41, pl. 38, f. 81. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 357. 1912—BURLINGHAM, N. Am. Fl. 9 : 209. 1915—RICKEN, Blätterp. 43, pl. 16, f. 3. 1915—MURRILL, Mycologia, 8 : 122, pl. 185, f. 3. 1916—KAUFFMAN, Agar. Mich. 131. 1918—REA, Brit. Basid. 460. 1922—SINGER, Hedwigia, 66 : 248. 1926; Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 335. 1932; Agaricales, 710. 1949—LANGE, Agar. Denm. 6 : 37. 1926; Fl. Agar. Dan. 5 : 69, pl. 186, f. D. 1940—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 99, pl. 44. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 9 : pl. 412. 1929—CRAWSHAY, Spore Ornam. Russulas, 81, pl. 11, n. 69d, pl. 12, n. 69. 1930—J. SCHAEFFER, Ann. Myc. 31 : 334, pl. 27, f. 8 b. 1933—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 348. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 125, 131. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 36. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 443. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 17. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2 : 176, pl. 23, f. 1. 1957.

(P. HENNINGS, Hedwigia, 39, Beibl. 156. 1900—松村，植．名鑑，1 : 172. 1904—白井，日．菌．目．89. 1905; ed. 2. 591. 1917; ed. 3. 347. 1927—川村，植．雑．22 : 379. 1908; Illus. Jap. Fungi. pl. 1, f. 14-16. 1912; 日．菌．図説，n. 5. 1929; 食用菌及有毒菌，f. 22. p. 20). 1931; 日．菌．図鑑，3 ; 371. f. 351. 1954—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3 : 114. 1931—松浦，茸類辞典，34, f. 33. 1933; 応用菌蕈学，1136. 1941—小林，日．隠．植．図．513, pl. 247, f. 3-6. 1939—牧野，日．植．図鑑，1024, f. 3070. 1940—今関，原色きのこ，pl. 50（左）．1942; 及土岐，林．試．研．報．67 : 59. 1954—原，日．菌．目．320. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，94, f. 242, pl. 43, f. 242. 1957)

Agaricus virescens SCHAEFF. Fung. Bavar. 4 : Ind. 94, excl. f. 1. 1774—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 447. 1801.

Agaricus furcatus B. *heterophyllus b.* FR. Syst. Myc. 1 : 59. 1821.

子実体は孤生或は群生；傘は径 6—10cm，或はそれ以上となり，初め球形にて丸山形となり，のち殆ど扁平，遂に凹下す；表面は濃き或は鈍き緑青色，幼時及び老時汚白色となる，乾燥，厚き粗き糠状疣更に亀裂を生じ，淡緑色の表面に暗緑色の亀甲紋を作る；縁は鈍く，平滑，のち屢々短線条を生ず；傘嚢体なく，球嚢を有しこれは往々毛状に並びて有隔となる；肉は白色，甚だしき緊緻ならずして，のち脆し，味通常温和，臭なきか或は弱し；褶は狭生，白色，寧ろ広幅，殆ど密にて遂に稍々疎生，多くは叉状，殆ど同長，稜は同質；茎は 4—8×2—3cm，同幅或は下方細し，然し幼時屢々倒棍棒形，白色或は類白色，初め甚だ粉状，弱き渓流状皺あり，中実，茎嚢体なく，傘面と同じ毛あり；担子柄は 37—50×9—11.5μ，小柄は長さ 5—6μ；胞子は類球形，粗面～微疣あり，1中心油球を有し，無色，7—8×6—7μ，沃度液にて甚だ細微の線（第Ⅲ型）を認める；胞子紋は白色～クリーム白色；嚢状体は稀生，円筒形，先端円形，64—95×7—10μ，幾分粒状内容物あり，サルフォバニリンにて淡紅色，下柄内に僅少の分散せる青色内容物を認めらる；可食。

所在及産地

広葉樹林地—夏秋　北海道，本州—欧．北米

和名　アイタケ（藍茸）〔白井〕　アオハツ（青初茸）〔古名〕

Russula amoena QUÉL

ムラサキカスリタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 10 : 668, pl. 8, f. 10. 1880; Enchir. Fung. 131. 1886; Fl. Myc.

341. 1888—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 463. 1887—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 219. 1900—SINGER, Hedwigia, 66 : 250. 1926; Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 253. 1932; Agaricales, 710. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2: 38. 1950—ROMAGNESI; Nouv, Atl. Champ. pl. 18. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2 : 176. 1957.

Russula punctata GILL. Champ. Fr. 245, c. ic. 1874—SACCARDO, Syll. Fung. 6 : 473. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 429. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 46. 1893; Brit. Fungi, 117. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 291. 1908—MAIRE, Bull. Soc. Myc. Fr. 26 : 116, f. 6. 1910—REA, Brit. Basid. 476. 1922—KÜHNER & ROMAGNESI; Fl. Analyt. Champ. Super. 446. 1953.

(川村，日．菌．図説．n. 139. 1929；日．菌．図鑑，3 : 370, f. 350. 1954—原，日．菌．目. 320. 1954)

Russula punctata var. *leucopus* COOKE, Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 1032 (n 1032). 1890.

Russula Mariae J. SCHAEFFER, Ann. Myc. 31 : 328, pl. 27, f. 9 c. 1933. (non PECK, 1872)

子実体は群生；傘は径 4—6cm，初め半球形，のちほぼ扁平となり中央少しく圧低さる，脆肉質；表面は種々なる色を呈し，通常紅紫色なるも，紅色強きことあり或は青色強きことあり，即ち牡丹色及び藤色を呈する外，往々多少黄緑色を帯ぶることあり或は又ほぼ緑色なる場合あり，常に通有なる特徴として細点状の濃色なる短き疣状毛茸を密布す，老時周辺に浅き襞状皺を生じ，又往々裂けて白肉を露出す；肉は白色，皮下紫色を帯ぶ，脆質なるもやや硬し，悪臭なく，幼時辛味を有することあるも速かに消失す；褶は直生，初め白色，のちややクリーム色となる，密にして薄し；茎は 3—5×0. 7—1. 2cm，同幅或は下方やや狭細，白色或は淡紫色を帯び，充塞；胞子は類球形，細疣状刺あり，無色，7—9μ；褶側嚢体は寡生，中部円柱状にて両端紡錘状に尖る；可食。

所在及産地

主に針葉樹林内—夏秋　　本州—欧

和名　ムラサキカスリタケ（紫絣茸）〔川村〕

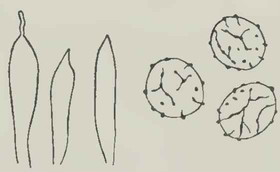
〔**因記**〕本菌の学名，種の範囲等につきては人によつて異るところあり，前記の記相文は本邦菌による川村氏のものを採用せり，将来の補遺を要す。

Russula flavida FROST et PECK
ウコンハツタケ

PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 32 : 32. 1880; Bull. 105 : 38, pl. 97, f. 1-6. 1906—SACCARDO, Syll. Fung. 9 : 60. 1891—BURLINGHAM, N. Am. Fl. 9 : 211. 1915—SINGER, Beih. Bot Centralbl. 49, Abt. 2:338. 1932; Agaricales, 710. 1949—J. SCHAEFFER, Ann. Myc. 31 : 331. 1933—HONGO, Bull. Facul. Lib. Arts Sci. Educ. Shiga Univ. 5 : 61. f. 1, G. 1956.

(今関及本郷，原色日．菌．図鑑，93, f. 240, pl. 42, f. 240. 1957)


a


b　　c

第 200 図　ウコンハツタケ　Russula flavida
a. 子実体 ×1/2　b. 嚢状体 ×550
c. 胞子 ×1000　（大谷氏）

子実体は孤生或は群生；傘は径 3—8. 5cm，丸山形，のち扁平となり中部圧低さる；表面は乾燥，絨粉状，殊に周辺に於て著し，中部橙色，周辺帯橙黄色，外皮附着，縁は平坦，老時僅か有粒線条あり；肉は白色，中位に厚く，味温和，臭は明かにて不快；褶は離生或は狭生，密～やや疎，時々叉状，連結脈あり，白色，のち汚色，幅 5—8mm；茎は 3—8×0. 8—2. 2cm，同幅或は下方に僅か狭細，皺線あり，傘面と同色，頂部淡色，中実，のち海綿状中空；胞子は類球形，無色，糊性，短疣ありてやや網目を作り，1 油球を含む，6. 5—7. 5(8. 5)×6—6. 5(7)μ，或は 7. 5—9×6—7. 5μ；担子柄は 30—39×9—12μ，或は 26—30×8—10μ，4 胞子；稜嚢体は散生或は多生，37—52×6—8μ，狭紡錘形或は棍棒形，鋭頭

或は長き突起を有す；褶側嚢体は稜嚢体に同じ；硫酸鉄にて徐々に桃色～帯灰色となる。

所在及産地

松林或は路傍草間地上—夏秋

本州，九州—北米

和名 ウコンハツタケ（鬱金初茸）〔本郷〕

Russula lactea (PERS.) FR.

ユキハツタケ

FRIES, Epicr. Myc. 355. 1838; Hymen. Eur. 433. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 450. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 220. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 1070 (no. 989). 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 207. 1872; Enchir. Fung. 133. 1886—GILLET, Hymen. Fr. 234, c. ic. 1874—WINTER, Pilze, 1 : 535. 1884—KARSTEN, Hattsv. 1 : 203. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 459. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 412. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 548. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 50. 1893; Brit. Fungi, 117. 1911—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 219. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 285. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 358, pl. 44 B. 1912—RICKEN, Blätterp. 41. 1915—BURLINGHAM, N. Am. Fl. 9 : 209. 1915—REA, Brit. Basid. 459. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 9 : pl. 411. 1929—CRAWSHAY, Spore Ornam. Russulas, 78. 1930—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 349. 1938—SINGER, Agaricales, 711. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 37. 1952.

（原，日．菌．目．319. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，92. 1957）

Agaricus lacteus PERS. Syn. Meth. Fung. 439. 1801.

Russula lepida var. *alba* SING. Hedwigia, 66 : 247. 1926; Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 341. 1933.

Russula lepida f. *lactea* J. SCHAEFF. Ann. Myc. 32 : 1934.

子実体は群生或は孤生；傘は径 4—8cm，丸山形或は殆ど半球形，のち徐々に開張し，稀に中心凹下す，堅緻；表面は乾燥，雨時只湿潤となるのみ，白色，屢々中央帯黄色，灰色或は淡肉色に傾き，稀に同色の斑点を生ず，皮は剝げず，粉状，光沢なく，堅緻；縁は平滑，鈍し；傘嚢体なし；肉は白色，堅緻，味温和，臭なし，サルフォバニリンにて橙黄色となる；褶は狭生，寧ろ広幅，厚く，稍々密，殆ど同長，屢々叉状，白色；嚢状体は 70—90×9—15μ，紡錘形，先端鈍頭，多くは附属突起なし，サルフォバニリンにて淡灰色となり青色とならず；茎は 3—5×1—1.5cm，同幅或は下方細く，堅緻，中実，多数の茎嚢体あり；担子柄は 35—45×9—13μ；胞子は類球形，有刺，無色，7—10×6—9μ，沃度液にて刻紋を認む（Ⅲ，稀にⅣ，屢々Ⅷ）；胞子紋はクリーム白色（Ⅰ，Ⅰ-Ⅱ）；可食。

所在及産地

林地—夏秋　　北海道—欧．北米

和名 ユキハツタケ（雪初茸）〔今井〕

Russula uncialis PECK

コアケボノハツタケ

PECK, Bull. N. Y. St. Mus. 2 : 10. 1888—MURRILL, Mycologia, 4 : 292, pl. 76, f. 6. 1912—BURLINGHAM, N. Am. Fl. 9 : 232. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 160. 1918—J. SCHAEFFER, Ann. Myc. 31 : 354. 1933—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 350. 1938—SINGER, Agaricales, 711. 1949.

（原，日．菌．目．320. 1954—今関及土岐，林．試．研．報．87 : 57. 1956）

Russula aurora ssp. *uncialis* SING. Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 343. 1932.

子実体は孤生或は群生；傘は径 2—5cm，丸山形，のち扁平となり，中央圧低さる；表面は湿時僅か粘性，乾時粉状或はやや絨毛状，皮は殆ど困着或は少しく剝げ，桃色，鮮肉色，古血赤色にて，一色或は中央暗色，縁は鈍く，平坦；嚢状体なく，毛状菌糸を有す；肉は白色，皮下帯赤色，不変化，薄く，比較的堅く，味温和，臭なし，サルフォバニリンにて濃赤～桃紅色となる；褶は直生，純白色，殆ど変色せず，やや疎或は密，むしろ広幅，前方広く，薄く，殆ど同長，後方僅か叉状，側脈あり；嚢状体は円筒形或は便腹状，稜のものは狭し，鈍頭，50—70×8—14μ，多くは附属突起あり，サルフォバニリンにて青色とならず；茎は 4—6×0.7—1cm，同幅，稀に僅か便腹状，白色，まれに桃色を帯ぶ，初め僅か粉状，多少皺あり，中実，のち空室を生ず；胞子は類球形，有刺，7—8μ，沃度液にて刻紋を認む（Ⅲ-Ⅴ型）；胞子紋は白色～クリーム色（Ⅰ～Ⅱ）；可食。

所在及産地

広葉樹林地—夏秋　　北海道—北米．欧

和名 コアケボノハツタケ（小曙初茸）〔今井〕

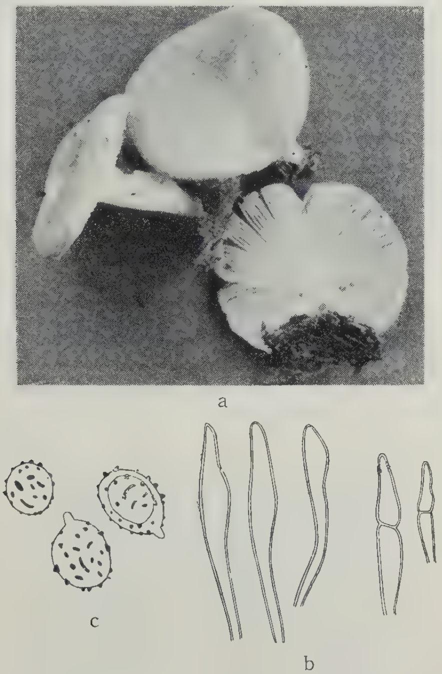
Russula lilacea QUÉL

ウスムラサキハツタケ

QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 4 : pl. 2, f. 8. 1876; Enchir. Fung. 134. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 465. 1887—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 219. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 287. 1908—RIC-

KEN, Blätterp. 45. 1915—REA, Brit. Basid. 462. 1922—LANGE, Agar. Denm. 6:33. 1926; Fl. Agar. Dan. 5 : 65, pl. 184, f. c. 1940—J. SCHAEFFER, Ann. Myc. 31 : 360, pl. 27, f. 1 d. 1933—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 340. 1938—SINGER, Agaricales, 711. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 39. 1952—HONGO, Bull. Fac. Lib. Arts Educ. Shiga Univ. 7 : 45, f. D. 1957—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 448. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 177, f. 155, A. 1957.

（原，日．菌．目．319．1954）



第201図　ウスムラサキハツタケ　Russula lilacea
a. 子実体 ×1/2　b. 嚢状体　c. 胞子 ×1000
（大谷氏）

子実体は孤生或は稍々群生；傘は径 3—8cm，丸山形，のち扁平となり，中央凹下す；表面は湿時粘性にて膨大し糊状となり剝ぐを得，速に乾燥し，完全に光沢なく，微粒状天鵞絨様となる，汚赤葡萄色，菫赤色，肉紅色，中央多くは殆ど黒色；縁は多少平滑，のち短線条を有し，多少鈍円，軟脆にて屢々広く裂け，時に中部より裂くることあり；肉は白色にて徐々に黄褐色に傾き或は汚灰色となる，傘の縁3分の1位は屢々甚だ薄く，それより急に厚さを増す，柔軟，軽く，味温和，臭は僅か果実様或は欠如，硫酸鉄にて淡銹赤色となる，幼時は幾分濃色なり；褶は白色，のち淡色，幾分灰色となる，離生，密～疎，幾分便腹状，屢々叉状，脆し；嚢状体は甚だ稀生，屢々凸出し，サルフォバニリンにて青色とならず；茎は 2—4×1—2cm，同幅或は基部太く，白色，多くは美紅色を帯び，幼時粉状，摩擦によりて容易に汚褐色脈を生ず，充塞さる；担子柄は 30—45×7—10μ；胞子は類球形～広楕円形，刺を分散し，連結脈なし，8—11×7—8μ；胞子紋は殆んど白色～クリーム色；可食。

所在及産地

林地—夏秋　　北海道，九州—欧

和名　ウスムラサキハツタケ（淡紫初茸）〔今井〕

Russula lepida FR.

アカフチベニタケ

FRIES, Epicr. Myc. 355. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 191. 1863; Hymen. Eur. 444. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 212. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 221. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 1072, 1073 (no. 994, 995). 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 207, pl. 12, f. 2. 1872; Enchir. Fung. 133. 1886—GILLET, Champ. Fr. 235, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 204. 1879—WINTER, Pilze, 1 : 534. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 461. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 413. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 547. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 59. 1893; Brit. Fungi, 120. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 153. 1900—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 219. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 126, pl. 40, f. 3. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 285. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 41, pl. 39, f. 83. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2 (1) : 358, pl. 66. 1912—RICKEN, Blätterp. 46, pl. 16, f. 4. 1915—BURLINGHAM, N. Am. Fl. 9 : 208. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 133. 1918—REA, Brit. Basid. 460. 1922—LANGE, Agar. Denm. 6 : 32. 1926; Fl. Agar. Dan. 5 : 61, pl. 183, f. B. 1940—SINGER, Hedwigia, 66 : 245. 1926; Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 340. 1932; Agaricales, 711. 1949—BRESADOLA, Icon. Myc. 9 : pl. 413. 1929—CRAWSHAY, Spore Ornam. Russulas, 78, 88, pl 16, n. 45 a-b. 1930—J. SCHAEFFER, Ann. Myc. 31 : 349, pl. 27, f. 8 a. 1933—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 124, pl. 44, f. 2. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 36. 1952—HONGO, Bull. Facul. Lib. Arts Sci. Educ. Shiga Univ. 5 : 61, f. 1, 1. 1956—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 447. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 19. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2 : 177. pl. 25, f. 4. 1957.

（松村，植．名鑑，1 : 172．1904—白井，日．菌．目．89．1905; ed. 2. 591. 1917; ed. 3. 346. 1927—原，日．菌．目．319．1954—今関及上岐，林．試．研．報．87 : 55，f. 5．1956—今関及本郷，原

色日. 菌. 図鑑, 92, f. 236, pl. 41, f. 236. 1957)

Agaricus sanguineus BATSCH, Elench. Fung. pl. 3, f. 13. 1873. pr. p.

Agaricus rosaceus PERS. Syn. Meth. Fung. 439. 1801. pr. p.

Russula Linnei Auct. nonnul.

子実体は群生或は孤生; 傘は径 4—6cm, 丸山形或は殆ど半球形, のち徐々に扁平となり, 時に中央圧低さる, 縁辺鈍円; 表面は雨によりて湿潤となるのみにて粘性なく, 桃血赤色, 朱赤色, のち中央より黄土色〜帯白色に褪色す, 幾分粉状にて最後に屢々肉質部迄鱗片状に亀裂し肉を露わす, 平滑, 無光沢, 外皮は固着して殆ど剝げず, 縁辺に線条なし; 肉は厚く, 緊緻, 白色にて変色せず, 味は僅か刺激性臭なし; 褶は直生, クリーム白色, 稜は赤色に縁取られ, 特に傘縁の方及び雨時に於て著し, 密, むしろ広幅にて後方狭し; 茎は 5—8×2—2.5cm, 殆ど同幅, 白色, 往々赤色を散らす, 緊緻, 充実; 胞子は広楕円〜類球形, 有疣, 無色, 7.5—9×6.5—7.5μ, 糊性, 沃度液にて不完全なる網目或は連鎖状疣 (III, VIII型) を認めらる; 胞子紋はクリーム白色; 担子柄は 35—45×9—13μ; 嚢状体は長紡錘形, 先端鈍頭, 時に短かき附属毛あり, 黄褐色, 80—100×8—10μ, サルフォバニリンにて青変せず, 傘の表面に菌糸状の毛を密生し, 内に嚢状体を混ず, それは黄褐色にて幅 5—7μ; 可食。

所在及産地

林地—夏秋　　　本州—欧. 北米. 阿

和名 アカフチベニタケ (赤稜紅茸) 〔今関及土岐〕

ヤブレベニタケ (破紅茸) 〔今関及本郷〕

Russula xerampelina (SCHAEFF.) FR.

ニオイベニハツタケ

FRIES, Epicr. Myc. 356. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2: 192. 1851; Hymen Eur. 445. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 450. 1844—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 1 : 320. 1872; Enchir. Fung. 131. 1886—GILLET, Champ. Fr. 236, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1: 205. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 127. 1889—COOKE, Hanbd. Brit. Fungi, ed. 2, 326. 1883; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 1053(no. 999), pl. 1074 (no. 1000). 1890—WINTER, Pilze, 1 : 533. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 463. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 415. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 60. 1893; Brit. Fungi, 286. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 120. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 361, pl. 63B. 1912—RICKEN, Blätterp. 50, pl. 17, f. 3. 1915—BURLINGHUM, N. Am. Fl. 9 : 208. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 144. 1918—REA, Brit. Basid. 471. 1922—SINGER, Hedwigia, 66: 237. 1926; Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 330. 1932; Agaricales, 1: 712. 1949—MELZER & ZVARA, Bull. Soc. Myc. Fr. 43 : 275, pl. 11-12. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 9: pl. 419. 1929—CRAWSHAY, Spore Ornam. Russulas, 103, pl. 27, n. 66 a. 1930—J. SCHAEFFER, Ann. Myc. 31 : 372, pl. 27, f. 5, f. 1933—KONRAD & JOSSERAND, Bull. Soc. Myc. Fr. 50 : 268. 1934—LANGE, Fl. Agar. Dan. 5 : 75, pl. 190, f. D. 1940—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 130, pl. 46, f. 4. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 54. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 449. 1953—HONGO, Jour. Jap. Bot. 31 : 254. 1956—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 20, A. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2 : 178.

(今関及本郷, 94, f. 246, pl. 43, f. 246. 1957)

Agaricus xerampelina SCHAEFF. Fung. Bavar. 4 : Ind. 49, pl. 214-215. 1774.

Russulina xerampelina SCHROET. Pilze Schles. 1 : 552. 1889.

子実体は散生; 傘は径 5—12cm, 丸山形, のち扁平圧低さる, 濃紫色〜酒赤色, 或は褐色, 中央屢々甚だ暗色, 乾燥, 雨時湿るも粘性とならず, 熟後細毛あり, 剝皮せず, 縁に溝なく, 鈍く厚し, 種々の形をなせる傘嚢体あり, 苛性加里にて黄褐色となる, 褶はむしろ密, 広幅, 陥入狭生, 屢々離生, 茎の方或は縁の方に対し或物は叉状をなす, 帯白色, のちクリーム〜黄土色, 殆ど同長; 肉は白色, 皮下幾分赤色, 傷時黄或は褐色, 老時汚褐色, 緊緻, 味温和, 臭は強く, カニ或は trimethylamin 臭, 硫酸鉄にて緑或はオリーブ緑色となる特長あり, 苛性加里にて褐色となる; 茎は 5—8×1.5—2.5cm, 同幅或は僅か上方細く, 或は便腹状, 白色にて屢々下部紫紅色を帯ぶ, 皺あり, 接触により汚褐色に変ず, 中実, のち充塞, 最後に腔室を作る, 茎嚢体あり; 胞子紋は帯白色〜クリーム色; 胞子は類球形, 6.5—8.5×6—7.5μ (刻紋を除く), 帯黄色, 粗疣を有し僅か甚だ細き連結線あり, 糊性; 担子柄は 4 胞子, 29—33×9—12μ; 稜及褶側嚢体は多生, 57—100×7.5—15μ, 先端やや鋭頭〜凸頭。可食。

所在及産地

松林地上—秋　　　本州—欧. 北米. 阿. 濠

和名 ニオイベニハツタケ (臭紅初臭) 〔本郷〕

(5) Fragilis Fr. (1838)
ドクベニタケ節

Russula atropurpurea (Krombh.) Britr.

ムラサキハツタケ

Britzelmayr, Bot. Centr. 54 : 99. 1893—R. Maire, Bull. Soc. Myc. Fr. 27: 167. 1910—Kauffman, Agar. Mich. 142. 1918—Rea, Brit. Basid. 469. 1922—Singer, Hedwigia, 66 : 218. 1926; Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 296. 1832; Agaricales, 714. 1949—Güssow & Odell, Mushr. Toadst. 86, pl. 36, A. 1927—Crawshay, Spore Ornam. Russulas, 89. pl. 14, n. 81. 1930—Zvara, Bull. Soc. Myc. Fr. 47 : 44. 1931—J. Schaeffer, Ann. Myc. 31 : 450, pl. 27, f. 5b. 1933—Imai, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 339. 1935—Lange, Fl. Agar. Dan. 5 : 64, pl. 182, f. D. 1940—Wakefield & Dennis, Comm. Brit. Fungi, 128, pl. 45, f. 3. 1950—Konrad & Maublanc, Agaricales, 2:60. 1952—Kühner & Romagnesi, Fl. Analyt. Champ. Super. 459. 1953—Heim, Champ. Eur. 2 : 182. 1957.

(川村, 日. 菌. 図説, n. 185. 1929; 日. 菌. 図鑑, 3 : 368, f. 349. 1954—広江, 応用菌蕈学, 1153, f. 759. 1941—原, 日. 菌. 目. 319. 1954)

Agaricus atropurpureus Krombh. Abbild. Schwamm. 9 : 6, pl. 64, f. 5-6. 1845.

Russula depallens Cooke, Handb. Brit. Fungi, 1 : 220. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 1021. (no. 985). 1890.

?(松村, 植. 名鑑, 1 : 172. 1904—白井, 日. 菌. 目. 89. 1905; ed. 2. 591. 1917; ed. 3. 346. 1927—原, 日. 菌. 目. 319. 1954)

Russulina atropurpurea P. Henn. in Engler & Prantl, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 220. 1900.

Russula purpurea

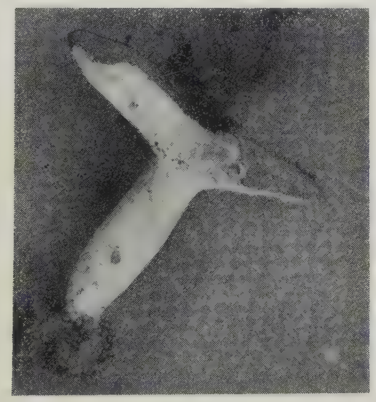
(川村, 植. 雑. 22 : 381. 1908; Illus. Jap. Fungi, pl. 1, f. 10-13. 1912—白井. 日. 菌. 目. ed. 2. 591. 1917; ed. 3. 347. 1927)

子実体は孤生或は群生; 傘は径 4—12cm, 半球形, のち丸山形, 最後に多くは扁平, 或は少くとも中央凹下す, 肉質, 緊緻, のち脆く或は脆からず; 表面は湿時粘性にてのち乾燥し, 皮は大部分或は縁より3分の1の部分剝げる, 暗血赤色, 暗紫色, 暗菫色等にて屢々褪色す; 縁は鋭く或は鈍く, 平滑或はのち線条あり; 皮擬嚢体あり, KOH は陽性にて明褐赤色或は明赤褐色を呈す; 肉は白色, 皮下に傘色移行し或は稀に純白色, 多くは茎の周囲は帯褐或は帯灰色を呈す, 緊緻, のち屢々硬脆となる, 味温和或は或瞬間の後辛し, 多くは臭なし; 褶は種々に狭生〜離生, 幅種々あり, 同長或は小褶混在, 白色, のち屢々藁黄色にて白粉を被むり, 遂に屢々褐黄色に褪む; 稜は類異質; 茎は 2—8×1—3cm, 同幅或は下方太く, 多少皺あり, 白色, 稀に桃色, のち屢々基部黄色, 褐色, 或は灰色を呈す, 上部初め僅か粉状, 傘と同様の皮擬嚢体を有す; 中実, 緊緻; 胞子は短楕円形或は類球形, 低き疣を有し連結糸あり, 大油球を有す, 径約 9×8μ; 胞子紋は白乃至淡クリーム色 (A〜AB); 可食。

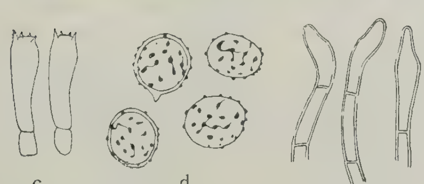
所在及産地　林地—夏秋

北海道, 本州—欧. 北米. 亜(西比)

和名　ムラサキハツタケ (紫初茸) 〔古名〕



a



c　d　b

第 202 図　ムラサキハツタケ　Russula atropurpurea　a. 子実体 1/2　b. 傘嚢体　c. 担子柄 ×500　d. 胞子 ×1000　(大谷氏)

Russula emetica (Schaeff. ex Fr.) Pers. ex S. F. Gray

ドクベニタケ

Persoon, Obs. Myc. 1 : 100. 1796—S. F. Gray, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 618. 1821—Fries, Epicr. Myc. 357. 1838; Hymen. Eur. 448. 1874—Rabenhorst, Deut. Krypt. Fl. 1: 451. 1844—Berkeley, Outl. Brit. Fung. 212. 1860—Cooke, Handb. Brit. Fungi, 1 : 223. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7: pl. 1030 (no. 1021). 1890—Quélet, Champ. Jura Vosg. 1: 210. 1872; Enchir. Fung. 135. 1886—Gillet, Hymen. Fr. 243, c. ic. 1874—Karsten, Myc. Fenn. 3 : 221, 1876; Hattsv. 1 : 209. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 128. 1889—Winter, Pilze, 1: 530. 1884—Saccardo, Syll. Fung. 5 : 469. 1887;

Fl. Ital. Crypt. Hymen. 439. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 545. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 73. 1893; Brit. Fungi, 123, 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 153. 1900—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 218, f. 111, A. 1900 —ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 129, pl. 40, f. 4. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 289. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 41, pl. 39, f. 84. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 354, pl. 41 F. 1912—MURRILL, Mycologia, 4 : 290, pl. 76, f. 3. 1912—RICKEN, Blätterp. 53. 1915—BURLINGHAM, N. Am. Fl. 9 : 234. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 151. 1918—REA, Brit. Basid. 468. 1922 —SINGER, Hedwigia, 66 : 212. 1926; Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2: 303. 1932; Agaricales, 714. 1949—LANGE, Agar. Denm. 6 : 30. 1926; Fl. Agar. Dan. 5 : 59, pl. 181, f. E. 1940—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 90, pl. 39. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 9 : pl. 435. 1929—CRAWSHAY, Spore Ornam. Russulas, 128, pl. 6, n. 28c, pl. 7, n. 28a. 1930—J. SCHAEFFER, Ann. Myc. pl. 31 : 455. pl. 27. f. 8 f. 1933—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 341. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 129, pl. 45, f. 2. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 58. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 460. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 12, B. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2 : 181, pl. 24, f. 1. 1957.

(田中，日．菌．図説，1(1) : pl. 2. 1890—P. HENNINGS, Hedwigia, 39 : Beibl. 156. 1900—松村，植．名鑑，1 : 172. 1904—白井，日．菌．目．88. 1905; ed. 2. 591. 1917; ed. 3. 346. 1927—川村，植．雑．22 : 381, f. 1908; Illus. Jap. Fungi, pl. 1, f. 7-9. 1912; 日．菌．図説，n. 178. 1929; 日．菌．図鑑，3 : 354, f. 338. 1954—安田，植．雑．28 : 193. 1914—梅村，富士．植．誌．370. 1923—松浦，茸類辞典，69, f. 69. 1933; 応用菌蕈学，813, 1135. 1941—S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16 : 55. 1940—今関，原色きのこ，pl. 49(左). 1942; 及土岐，林．試．研．報．67 : 58. 1954—原，日．菌．目．319. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，94. 1957)

Agaricus emeticus SCHAEFF. Fung. Bavar. 4 : Ind. 9, pl. 15, f. 4-6. 1774—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 439. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1 : 56. 1821.

Agaricus Linnaei FR. Obs. Myc. 1 : 67. 1815

Russula emetica var. *Clusii* COOKE, Ilius. Brit. Fungi, 7 : pl. 1031(no. 1022). 1890.

(川村，日．菌．図鑑，3 : 358, pl. 341. 1954)

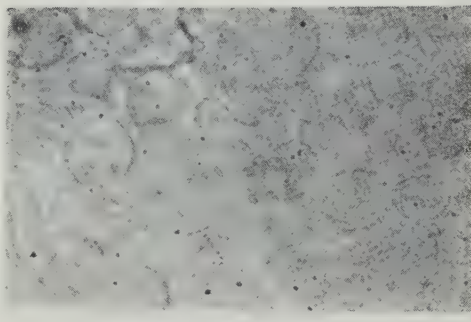
Russula emetica ssp. *euemetica* SING. Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 304. 1932.

Russula rubra (non BRESADOLA)

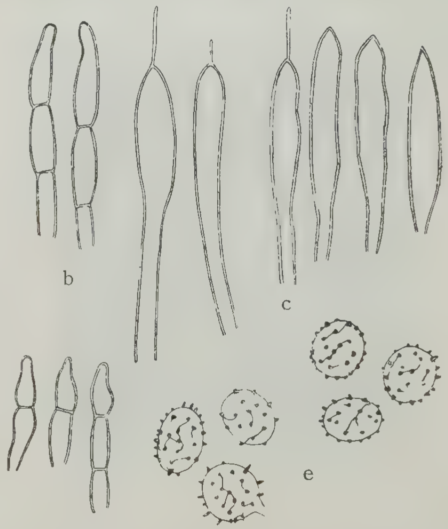
?(川村，日．菌．図説，n. 96. 1929—松浦，茸類辞典，69, f. 71. 1933—原，日．菌．目．319. 1954)



a



d



第 203 図　ドクベニタケ　Russula emetica
a. 子実体 1/2　b. 傘嚢体　c. 嚢状体×500
d. 球嚢細胞 ×400　e. 胞子 ×1000 (大谷氏)

子実体は孤生或は群生；傘は径 2—11 cm，丸山形，開張し扁平となり，のち凹入或は屢々中央窪む；表面は無毛，湿時粘性，乾けば屢々光沢なし，色は諸色あり，大形品にては多くは鮮美なる紅色或は血赤色，時に帯赤黄色，淡紅色，更に白色等とな

る，僅か緊緻にて肉質，皮は多くは広く剝げる；縁は初め殆ど鋭く或は殆ど鈍く，のち速に鈍円となる，初め平滑なるも多くは速かに短き溝を生ず；屢々種々なる形の皮膜嚢体を有し，時に綿絮毛あり，HNO_3 に陽性；肉は白色，皮下は表面と同色，脆し，味は甚だ辛く，臭は僅か果実様；苛性加里に陰性，硫酸鉄に陽性にて汚黄灰～美橙色となる；褶は種々に狭生～離生，広幅，密～疎生，多くは僅か小褶混在し，僅か叉状，脆し，純白色，遂に屢々帯灰色或は僅か鈍きクリーム色となる；稜は同質，托実質は嚢状；茎は 2—6×0.5—2 (3) cm，同幅或は下方太く，白色，稀に淡赤色，幼時屢々幾分粉状，僅か皺あり，髄部充塞，最後に空室を生ず，皮擬嚢体あり；担子柄は 30—70×10—15μ，小柄は 9μ，多くは多数の嚢状体を混ず，その形は披針形或は棍棒形，多くは鈍頭，附属毛 (2.5—3μ) を有し，長さ多くは 80—85×10—14μ，サルフォバニリンにて青変し柄部は桃色となる；胞子は楕円形，有刺，無色，大油球を含み，8—10×7—9μ，沃度液にて比較的長き疣刺ありて連結糸を認む；胞子紋は白～淡クリーム色 (A，AB 時に殆ど B)；毒性ありと称するも疑わし。

所在及産地

広葉樹及針葉樹林地—夏秋

北海道，本州，九州—欧．北米．濠．阿亜(小亜)

和名　ドクベニタケ (毒紅茸)〔田中〕，ベニタケ (紅茸)，ベニシメジ (紅湿地)〔方言〕

Russula fragilis (PERS.) FR.

コベニタケ

FRIES, Epicr, Myc. 359. 1838; Hymen. Eur. 450. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 449. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 213. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 206. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 224. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7: pl. 1091 (no. 1028). 1890—GILLET, Champ. Fr. 245, c. ic. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 211. 1872; Enchir. Fung. 136. 1886—GILLET, Champ. Fr. 245, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 222. 1876; Hattsv. 1 : 210. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 128. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 529. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 472. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 440. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 545. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 75. 1893; Brit. Fungi, 123, pl. 10, f. 7. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 153. 1900—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 218. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 290. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 39, pl. 77. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1): 354, pl. 61. 1912—RICKEN, Blätterp. 52, pl. 19, f. 3. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 153. 1918—REA, Brit. Basid. 468. 1922—LANGE, Agar. Denm. 6 : 30. 1926—BRESADOLA, Icon. Myc. 9 : pl. 442. 1929—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi. 129, pl. 45, f. 4. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 58. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Aanlyt. Champ. Super. 460. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 181, pl. 24, f. 2. 1957.

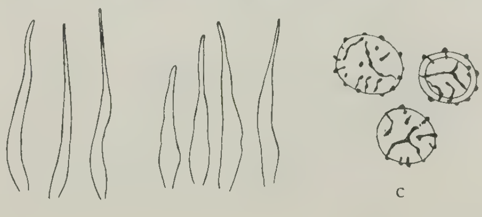
(P. HENNINGS, Hedwigia, 39, Beibl. 156. 1900—松村，植．名鑑，1 : 172. 1904—白井，日．菌．目 89. 1905; ed. 2. 591. 1917; ed. 3. 346. 1927—川村，植．雑．22 : 382. 1908; Illus. Jap. Fungi, pl. 1, f. 1-3. 1912; 日．菌．図説，n. 26. 1929; 日．菌．図鑑，3 : 356, f. 339. 1954(?)—小林，日．隠．植．図．513, pl. 247, f. 1-2. 1939—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sc. 3 : 114. 1931—松浦，茸類辞典，70, f. 73. 1933; 応用菌蕈学，f. 762 (p. 1138). 1941—今関及上岐，林．試．研．報．67 : 59. 1954—原，日．菌．目．319. 1954)

Agaricus fragilis PERS. Syn. Meth. Fung. 440. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1 : 57. 1874.

Russula emetica ssp. *fragilis* SINGER, Hedwigia 66 : 214. 1926; Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 306. 1932; Agaricales, 715. 1949.



a



b　c

第204図　コベニタケ　Russula fragilis
a. 子実体 ×1/2　b. 嚢状体 ×500
c. 胞子 ×1000　(大谷氏)

子実体は孤生或は群生，小形，瘠細；傘は径 2—7cm，丸山形，速に開張して扁平となり，のち中央凹下す，時に不正形となる，薄肉，脆し；表面は粘

性，諸色あり，多くは紅色或は血赤色又は淡紅色にて美なり，皮は全部或は縁に於て剝げる；縁は殆ど平滑，速に多くは有線条，鈍く或は初め殆ど鋭し；肉は白色，かなり脆し，味は甚だ辛きも永く続かず，臭は果実様；褶は狭生～離生，密～稍々疎生，薄くして広幅ならず，叉状或は叉せず，同長或は小褶混在，白色，屢々全部鈍クリーム色を呈す；茎は 2—5×0.5—1.5cm，殆ど同幅或は僅か倒棍棒形，僅か皺あり，白色，屢々絹糸状光沢あり，髄部脆弱，充塞，最後に中空となる；胞子は僅かに有刺，大さ及び沃度液にての刻紋はドクベニタケの如し；一般に有毒と認めらる。

所在及産地

林地，庭園樹陰地上一夏

本州，九州一欧．北米．濠．亜(小亜)

和名 コベニタケ（小紅茸）〔川村〕

f. **nivea** (PERS. ex COOKE) J. SCHAEFF.

シロコベニタケ

J. SCHAEFFER, Ann. Myc. 31 : 461. 1933—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 341. 1938.

Agaricus niveus PERS. Syn. Meth. Fung. 438. 1801.

Agaricus fragilis c. *pileo albo* FR. Syst. Myc. 1 : 88. 1821.

Russula fragilis var. *nivea* COOKE, Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 1060, f. b (no. 1029). 1890; Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 333. 1891—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 75. 1893; Brit. Fungi, 123. 1911—REA, Brit. Basid. 468. 1922.

（川村，植．雑．22 : 382. 1908; Illus. Jap. Fungi, pl. 1, f. 4-6. 1912; 日．菌．図説，n. 110. 1929; 日．菌．図鑑，3 : 357, f. 340. 1954—白井，日．菌．目．ed. 2. 591. 1917; ed. 3. 346. 1927—松浦，茸類辞典，94, f. 108. 1933; 応用菌蕈学，1123, f. 747 (右). 1941—原，日．菌．目．319. 1954)

Russula subfragilis BURLIGH. N. Am. Fl. 9 : 233. 1915, pr. p.

Russula emetica ssp. *fragilis* f. *nivea* SING. Hedwigia, 46 : 216. 1926; Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 308. 1932.

形状，大さ，肉の性質等はコベニタケと同様なるも，ただその色が初めより白色なるを異点とす。

所在及産地

林地，芝生一夏秋

北海道，本州一欧．北米．亜(小亜)

和名 シロコベニタケ（白小紅茸）〔川村〕

シロイロコベニタケ（白色小紅茸）〔川村〕

Russula rosacea (BULL.) S. F. GRAY em. FR.

チシオハツタケ

S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 618. 1821—FRIES, Epicr. Myc. 351. 1938; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 188. 1863; Hymen. Eur. 442. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 210. 1860—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 206. 1872; Enchir. Fung. 133. 1886—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 218. 1876; Hattsv. 1 : 202. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 126. 1889—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 322. 1883; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 1020(no. 982). 1890—WINTER, Pilze, 1 : 536. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 457. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 433. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 548. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 74. 1893; Brit. Fungi. 123. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 208. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2 (1) : 359. 1912—REA, Brit. Basid. 467. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 9 : pl. 405. 1928—SINGER, Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 289. 1932; Agaricales, 715. 1949.

Agaricus sanguineus BULL. Herb. Fr. pl. 42. 1780—POLLINI, Fl. Ver. 1822-4. (in valid) (non WULFEN, 1788—FRIES. 1821)

Agaricus rosaceus BULL. Herb. Fr. pl. 509, f. Z. 1790—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 439. 1801—NEES, Syst. Pilze Schwäm. 200, f. 184. 1817.

Russula sanguinea FR. Epicr. Myc. 351. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 188. 1863; Hymen. Eur. 442. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 210. 1860—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 205. 1872; Enchir. Fung. 133. 1886—KARSTEN, Hattsv. 1 : 202. 1879—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2 : 322. 1883; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 1019 (no. 981). 1889; Handb. Austr. Fungi, 78. 1892—WINTER, Pilze, 1 : 536. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 457. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 432. 1915—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 548. 1889—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 74. 1893; Brit. Fungi, 123. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 283. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2 (1) : 359, pl. 61B. 1912—RICKEN, Blätterp. 52, pl. 19, f. 2. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 155. 1918—REA, Brit. Basid. 466. 1922—SINGER, Hedwigia, 66 : 202. 1926; Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 291. 1932—LANGE, Agar. Denm. 6 : 29. 1926; Fl. Agar. Dan. 5 : 59, pl. 182, f. A. 1940—BRESADOLA, Icon. Myc. 9 : pl. 408. 1928—MELZER & ZVARA, Bull. Soc. Myc. Fr. 44 : 144. 1928—CRAWSHAY, Spore Ornam. Russulas, 138, pl. 13, n. 49, 49a. 1930—J. SCHAEFFER, Ann. Myc. 31 : 467. 1933—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4 : pl. 348. 1935; Agaricales, 2 : 61. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Super. 462. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 183. 1957.

（松田及本郷，植．研．雑．30 : 263, f. 2. 1955—

今関及本郷，原色日．菌．図鑑，94, f. 245, pl. 43, f. 245. 1957)

Russula luteotacta var. *rosacea* SING. Hedwigia, 66 : 202. 1926.

Russula sanguinea var. *rosacea* LANGE, Fl. Agar. Dan. 5 : 59, pl. 182, f. B. 1940.

子実体は散生或は群生；傘は径 3—9cm，丸山形，のち開張し，最後に僅か圧低さる；表面は湿時僅か粘性，速に乾燥，鮮桃赤色～桃緋色，周辺淡色，老時往々斑紋状に褪色す，平滑，外皮は只僅か縁辺剝げ，縁は平坦にて最後に短溝を作る，鋭く，のち屢々鈍くなるも円くならず；肉はむしろ薄く，白色，皮下赤色を帯び，のち少しく汚黄色となる，緊緻，堅く，味甚だ辛く，臭は僅か果実様；褶は狭生より垂生に及び，クリーム色，密～やや疎，狭幅～広幅，屢々叉状，稜は異質；茎は 4—7×1—2cm，同幅或は僅か便腹状，桃赤色，僅か赤斑を有し，甚だ稀に白色，甚だ僅か皺あり，充塞，のち中空；胞子は類球卵形，粗疣刺ありて連結糸なし，無色，糊性，7—8×6—7μ；胞子紋はクリーム色；担子柄は 37—42×10—11μ，4胞子；皮擬嚢体は多数，長く諸形を呈し，上部多くは鈍く，幅 5—11μ，KOH にて黄褐色，苛性加里にて赤色となる，稜嚢体は多生，円筒形～棍棒形，鈍頭或は小突起あり，50—60×9—11μ，褶側嚢体は多生，棍棒形～紡錘形，54—104×8—18μ，サルフォバニリンにて暗青色となる。

所在及産地

松林内—夏秋　本州—欧．阿．北米．濠

和名　チシオハツタケ（血汐初茸）〔松田及本郷〕

Russula integra (L.) FR.

ヨヘイジタケ

FRIES, Epicr. Myc. 360. 1838; Hymen. Eur. 450. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 210. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 206. 1867—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 711. 1872; Enchir. Fung. 136. 1886—KARSTEN, Hattsv. 1 : 211. 1879—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 475. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 424. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 40. 1893—BURLINGHAM, N. Am. Fl. 9 : 228. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 161. 1918—REA, Brit. Basid. 470. 1922—SINGER, Hedwigia, 66: 225. 1926; Beih. Bot. Centr. 49. Abt. 2 : 278. 1932—LANGE, Agar. Denm. 6 : 48. 1926; Fl. Agar. Dan. 5 : 78, pl. 196, f. E. 1940—BRESADOLA, Icon. Myc. 9 : pl. 451. 1929—CRAWSHAY, Spore Ornam. Russulas, 122, pl. 33, n. 62a, b, c. 1930—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 338. 1938—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 451. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 23. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2 : 188. 1957.

（川村，植．雑．22 : 382. 1908; Illus. Jap. Fungi, pl. 8, f. 3-5. 1913，日．菌．図鑑，3 : 364, 366, f. 346, 347. 1954—白井，日．菌．目．ed. 2. 591. 1917; ed. 3. 346. 1927—広江，応用菌蕈学，1135. 1941—原，日．菌．目．319. 1954）

Agaricus integer L. Sp. Plant. 2 : 1171. 1753.

Russulina integra SCHROET. Pilze Schles. 1 : 550. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl-fam. 1, 1** : 220. 1900—EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5 : 411. 1909.

子実体は孤生或は群生；傘は 5—10cm，丸山形，のち扁平となり中央凹下し，時に浅き漏斗形となる；表面は粘性，栗褐色，褐色，帯桃血赤色或は鮮明血赤色，普通中部より速に藍黄色，黄色或は褐色となり，又はただ僅か褪色し，稀に一色に褪紅色となる，皮は全部或は中央以外剝げる；縁は鈍く，平滑，のち溝を生ず；乾燥時屢々裂く，皮擬嚢体は稀生或は欠如；肉は堅緻，白色，味温和，臭なし；褶は殆ど離生，広幅（8mm 内外），疎生，殆ど同長，多少叉状，白色，屢々赤稜を有し，のち淡赭黄色となる；稜は同質或は類異質；托実質は嚢状；嚢状体は55—58×5—11μ，細き棍棒形，殆ど鈍頭，附属突起あり，サルフォバニリンにて青色，柄部桃色となる；茎は 5—6×1.5—2cm，殆ど同幅或は幾分棍棒形，幾分皺あり，白色，稀に僅か赤色を帯ぶ，中実，のち充塞；皮擬嚢体あり；担子柄は 30—40×9—11μ，小柄は 4—8μ；胞子は類球形，有刺，帯黄色，7.5—9×7.5—8μ，1 中心球を有し，沃度液にて約半数のものに刻紋を認めらる（III—IV型）；胞子紋はクリーム藁色～淡黄土色（B-E）．可食。

所在及産地

広葉及針葉樹林地—夏秋

北海道，本州—欧．北米．亜（西比）

和名　ヨヘイジタケ（与平治茸）〔方言〕

アカヨヘイジ（赤与平治）〔方言〕

〔因記〕古き文献に於ける*Russula integra* には現時の *R. furca* QUÉL., *R. melliolens* QUÉL., *R. pseudo-integra* ARN. et GORIS, *R. Romelli* MAIRE 等の諸種を混同せる場合多く，本邦のヨヘイジと呼ぶ菌もまた混合種なるが如し，従つてこれらの点につきては後来の調査を要するものと認めらる。

Russula rubra (KROMBH.) BRES.

ウスクレナイタケ

BRESADOLA, Fung. Trid. 2 : 91, pl. 203. 1900; Icon. Myc. 9 : pl. 415. 1929—RICKEN, Blätterp. 53. 1915—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 421. 1915—REA, Brit. Basid. 467, 1922—SINGER, Hedwigia,

66 : 240. 1926 um ; Beih. Bot. Centralbl. 49, Abt. 2 : 345. 1932 ; Agaricales, 718. 1949—BRESADOLA, Icon. Myc. 9 : pl. 415. 1929—J. SCHAEFFER, Ann. Myc. 31 : 489. 1933—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 65. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 463. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 191. 1957.

((IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 55 : 519. 1941—今関及土岐, 林. 試. 研. 報. 67 : 59. 1954)

子実体は孤生或は群生; 傘は径 4—11cm, 半球形～丸山形, のち開張し凹下す; 表面は実に特有的にて輝しき朱赤色を呈し, 屢々縁の方, 稀に全面類白色となる, 幾分絨毛状, 乾燥, 湿時湿潤或は幾分粘性, 剝皮し難し; 縁は線条なく, 初めやや鋭く, のちやや鈍し; 皮擬嚢体あり, 鈍頭にて甚だ結晶を被むる有隔の長毛なり; 肉は白色, 皮下時に帯赤色, 緊緻, 後海綿質, 脆し, 味甚だ辛烈にて忍び難し, 臭は殆どなきか或は弱し; 褶は直生或は円状に狭生, 白色, 遂に帯黄色, 広幅, 密生或は殆ど密生, 叉状, 小褶混注, 稜は類異質; 茎は 3.5—6.5×1—2.5 cm, 同幅, 稀に基部太く, 白色, 最後に多くは基部汚灰色, 僅か皺あり, 中実, のち充塞, 幼時傘と同様の毛を有す; 担子柄は 40—45×10μ; 胞子は殆ど球形有疣, 帯黄色, 8—9×7—8μ; 胞子紋は淡黄黄土色; 嚢状体は 64—78×8.5—9.5μ, 紡錘形, 尖頭, 稀に鈍頭, 内容あり, 長き附属突起あり, サルフォバニリンにて殆ど全部青色或は菫青色となる。

所在及産地

林地—夏秋 本州—欧

和名 ウスクレナイタケ (淡紅茸) 〔今井〕

Russula olivacea (SCHAEFF.) Fr.

クサイロアカネタケ

FRIES, Epicr. Myc. 356. 1838; Hymen. Eur. 445. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 448. 1844—GILLET, Champ. Fr. 236, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 206. 1879—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 326. 1889; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 1041(no. 1001). 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 10 : 668. 1880; Enchir. Fung. 134. 1886; Fl. Myc. 342. 1888—WINTER, Pilze, 1 : 533. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 464. 1887: Fl. Ital. Crypt. Hymen. 416. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 47. 1893; Brit. Fungi, 117. 1911—W. G. SMITH, 286. 1908—RICKEN, Blätterp. 48, pl. 18, f. 4. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 358. 1912—REA, Brit. Basid. 461. 1922—SINGER, Hedwigia, 66 : 244. 1926; Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 351. 1932; Agaricales, 718. 1949—BRESADOLA, Icon. Myc. pl. 421. 1929—CRAWSHAY, Spore Ornam. Russulas, 121. 1930—J. SCHAEFFER, Ann. Myc. 397, pl. 27, f. 5e. 1933—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 44. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 450. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 22. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2 : 188. 1957.

Agaricus olivaceus SCHAEFF. Icon. p. 204. 1770.

Russula alutacea var. *olivacea* LANGE, Agar. Denm. 6 : 44. 1926; Fl. Agar. Dan. 5 : 77, pl. 191, f. B. 1940—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4 : pl. 356. 1928.

(今関及土岐, 林. 試. 研. 報. 67 : 57, f. 15. 1954)

子実体は孤生或は群生; 傘は 6—12cm, 或は 20cm に及び, 饅頭形, のち扁平となり, 最後に凹下す, 肉質, 緊緻; 表面は初め殆ど無毛にて平滑, 湿時多, 少粘性なるも, 多くは速に完全に乾燥し, 光沢なく, 屢々絨毛状乃至鱗片状, 粗面或は粉状となり最後に亀裂す, オリーブ褐色, 或は紫色を有するオリーブ色, 稀に初めより紫色, 最後に多くは汚淡紅紫色となり黄斑を生ず, 縁は平滑, 鈍; 傘嚢体なく, 毛状菌糸あり, 苛性加里にて赤褐～黄褐色となる; 肉は白色, 遂に多少汚帯黄色となるも変色せず, 周辺帯黄色, 緊緻, 味は温和, 臭なし, フェノールにて濃赤菫色となり, 硫酸鉄にて汚灰色, 帯灰黄色となる; 褶は狭生, 白色～淡黄色にて縁の方シトロン黄色, 最後に帯赭黄色となる, 広幅, 殆ど密生, 叉状, 小褶混在, 稜に類異質; 茎は 6—7×2—3cm, 同幅, 或は下方太く, 稀に便腹状, 美しき淡紅色を呈し, 或は淡紅色綿絮を有し又は平滑, 中実, のち充塞, 茎嚢体なく, 長き毛状菌糸ありて粉状, KOH にて汚色となる; 担子柄は45—90×10—15μ, 小柄長さ 7—11μ; 胞子は広楕円形～球形, 黄色, 有刺, 中心油球あり, 10—12×8—10μ, 沃度液にて第Ⅳ, 稀にⅤ, 又はⅥ型の刻紋を認めらる; 胞子紋は濃黄黄土色 (Ⅲ); 嚢状体は稜に於ては 90—105×10.5—13.5μ, 突錐形, 甚だ尖り, 稀に僅か不明瞭の附属突起あり, 褶側のものは同筒形, 同大, サルフォバニリンにて稜嚢体は淡紅色となり, 甚だ僅かの青色粒を有す; 可食。

所在及産地

林地—夏秋 本州—欧

和名 クサイロアカネタケ (草色茜茸) 〔今関及土岐〕

Russula olivascens PERS. ex FR. sensu BRES.

コケイロタケ

PERSOON, Obs. Myc. 1 : 103. 1796—FRIES, Epicr.

Myc. 361. 1838—BRESADOLA, Icon. Myc. pl. 464. 1929—SINGER, Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 251. 1932; Agaricales, 718, 1949—LANGE, Agar. Denm. 6: 40. 1926—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 335. 1938—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 52. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 454. 1953.

(今関及土岐，林．試．研．報．67 : 59. 1954—原，日．菌．目．318. 1954)

Agaricus olivascens PERS. Syn. Meth. Fung. 447. 1801.

Russulina alutacea var. *olivascens* SCHROET. Pilze Schles. 1 : 552. 1889.

Russula subolivascens BURLINGH. N. Am. Fl. 9 : 223. 1915.

Russula alutacea var. *olivascens* REA, Brit. Basid. 475. 1922—SINGER, Hedwigia, 66 : 189. 1926.

子実体は孤生或は稀に群生；傘は径 3—7cm，丸山形，直ちに扁平となり，のち中央窪み或は僅か凹下す；表面は明緑色〜美オリーブ緑色，中央帯黄色或は淡色，のち屢々鈍黄色又は帯褐色の斑紋となる，無毛，粘性，のち乾燥，表皮は全部或は縁より3分の2程剝げ易し；縁は殆ど平滑，或は初め短線条あり，鈍し；皮擬嚢体は細長き棍棒形，多くの結晶を被むり，幅 4—5μ，サルフォバニリンにて 1—3 の青色内粒を存す，苛性加里にて褐黄〜クローム黄色となる；肉は白色，僅か緊緻，味温和，臭は弱し；褶は直生或は狭生，鈍黄色，のち一様に帯赭黄色，広幅，密生〜疎生，僅か叉状，小褶混注，薄く，脆し；稜は類異質；茎は 4—7×1—1.5cm，同幅，白色，初め粉状，のち裸出，僅か皺あり，充塞，のち中空，茎嚢体あり；担子柄は 35—42×11—14μ；胞子は短楕円形，有刺，黄色，大中心油球あり，8—10.5×7—9μ，沃度液にて第 III〜V 型の刻紋を認めらる；胞子紋は濃黄黄土色（III）；嚢状体は棍棒形或は便腹状，屢々長附属突起を有す，50—70×10—12μ。

所在及産地

林地—夏秋

北海道，本州—欧・北米・亜(小亜)

和名 コケイロタケ（蘚色茸）〔今井〕

Russula niigatensis HONGO et MATSUDA

コシノムラサキハツタケ

MATSUDA & HONGO, Jour. Jap. Bot. 30 : 153, f. 2, C-E. 1955—HONGO, Bull. Facul. Lib. Arts Sci. Educ. Shiga Univ. 5 : 62, f. 3. 1956.

(今関及本郷，原色日．菌．図鑑，94, f. 247, pl. 43, f. 247. 1957)

子実体は群生；傘は径 2—4cm，丸山形，のち開張し，中部多少圧低さる；表面は湿時粘性，暗紫色，周縁は平滑或は僅か線条あり；肉は白色，やや厚く，臭弱く，味温和；褶は離生，白色，のち黄土黄色，やや密，幅 3mm 内外；茎は 1.5—3.5×0.4—1cm，同幅或は上方にやや狭細，白色，僅か粗渋線条あり，中心海綿状；胞子は楕円形，短疣ありて網目状，糊性，(7)7.5—9.5(11.5)×5.5—6.5(8)μ；胞子紋は黄土色；担子柄は 29—42×9.5—11μ，4 胞子；稜嚢体は多生，長棍棒形にて先端に小突起あり，無色，薄膜，38—48×7.5—10.5μ；褶側嚢体は散生し，前者に同じ；托実質は多数の球嚢及結締菌糸より成る；外被の菌糸は幅 3—7μ，菌絆なし。

所在及産地

松林内砂土上—秋　本州．

和名 コシノムラサキハツタケ（越国紫初茸）〔本郷，松田〕

Russula alutacea PERS. ex FR.

アカネタケ

PERSOON, Obs. Myc. 1 : 107. 1796—FRIES, Epicr. Myc. 362. 1838; Hymen. Eur. 453. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 214, pl. 13, f. 8. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 207. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 225. 1871; QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 213. 1872; Enchir. Fung. 137. 1886—GILLET, Hymen. Fr. 249, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 224. 1876; Hattsv. 1 : 213. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 129. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 526. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 479. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 416. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 39. 1893; Brit. Fungi, 115. 1911—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 125, pl. 40, f. 2. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 292. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 365, pl. 43. 1912—BURLINGHAM, N. Am. Fl. 9 : 231. 1915—RICKEN, Blätterp. 49. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 150. 1918—REA, Brit. Basid. 474. 1922—LANGE, Agar. Denm. 6 : 43. 1923; Fl. Agar. Dan. 5 : 77, pl. 191, f. D. 1940—SINGER, Hedwigia, 66 : 187. 1926. pr. p.; Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 252. 1932; Agaricales, 717. 1949—BRESADOLA, Icon. Myc. 10 : pl. 459-461. 1929—CRAWSHAY, Spore Ornam. Russulas, 120, pl. 40, n. 39, 39a. 1930—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 336. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 130, pl. 64, f. 1. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 45. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 450. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 188, pl. 24. f. 3. 1957.

(今関，原色きのこ，pl. 49(右). 1942；及土岐，林．試．研．報．67 : 57. 1954—原，日．菌．目．

319. 1954)

Agaricus alutaceus PERS. Syn. Meth. Fung. 441. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1 : 55. 1821.

Russula xerampelina var. *alutacea* QUÉL. Fl. Myc. 341. 1888.

Russulina alutacea SCHROET. Pilze Schles. 1 : 552. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl-fam. 1, 1** : 220. 1900.

子実体は孤生或は群生；傘は径 7—15cm, 饅頭形, のち開張し丸山形となり屢々中央凹む，稀に中丘あることあり，のち凹下す，肉質；表面は粘性にてのち乾燥し，皮は稍々厚くして縁に於て剝げ易し，色は種々に変化し，暗赤紫色，暗血赤色，或は他色を帯ぶ；縁は鈍く，平滑，のち屢々溝を生ず；苛性加里に陽性なり；肉は白色，屢々外周黄色，或は屢々傘色浸入す，緊緻，のち僅か砕け易し，味温和，無臭；褶は彎生，所々屢々垂生，広幅，稍々疎生，同長或は僅か小褶混在，多くは叉状，直ちに黄色，のち濃革黄色となる，稀に赤稜；嚢状体は 60—85×8—12μ, サルフォバニリンにて常に一部青色となりニシキタケ（*R. aurata*）と鑑別さる；茎は 5—9×2—4cm，下方太く，或は同幅又は便腹状，白色にて赤色を帯び，皺あり，緊緻，中実，のち充塞或は幾分空室を生ず；担子柄は 45—55×11—13.5μ, 小柄は 7μ；胞子は類球形或は広楕円形，有刺或は有疣，黄色，中心油球あり，9—13×8—11μ；胞子紋は黄黄土色（Ⅲ）；可食。

所在及産地

林地—夏秋

北海道，本州—欧．北米．濠．亜(小亜)

和名 アカネタケ（茜茸）〔今井〕

Russula aurata (WITH.) FR.

ニシキタケ

FRIES, Epicr. Myc. 360. 1838; Hymen. Eur. 452. 1874—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 449. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 213. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 224. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 1080(no. 1041). 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 212. 1872; Enchir. Fung. 136. 1886—GILLET, Hymen. Fr. 247, c.ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 212. 1879—WINTER, Pilze, 1 : 527. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 477. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 428. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 45. 1893; Brit. Fungi, 116. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 291. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 43, pl. 42, f. 91. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 363. 1912—RICKEN, Blätterp. 48, pl. 17, f. 4. 1915—REA, Brit. Basid. 475. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4 : pl. 358. 1926; Agaricales, 2 : 49. 1952—SINGER, Hedwigia, 66 : 185. 1926; Beih. Bot. Centr. 49, Abt. 2 : 257. 1932; Agaricales, 718. 1949—LANGE, Agar. Denm. 6 : 42. 1926; Fl. Agar. Dan. 5 : 74, pl. 190, f. c. 1940—BRESADOLA, Icon. Myc. 10 : pl. 453. 1929—CRAWSHAY, Spore Ornam, Russulas, 119. pl. 42, n. 44a-b. 1930—J. SCHAEFFER, Ann. Myc. 31 : 406, pl. 27, f. 9d. 1933—Imai, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 337. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 130, pl. 47, f. 3. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 452. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 21, C. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2 : 191. 1957.

（川村，植．雑．22 : 380. 1908; Illus. Jap. Fungi, pl. 6, f. 4-6. 1913; 日．菌．図説，n. 86. 1929; 日．菌．図鑑，3 : 359, f. 342. 1954—白井，日．菌．目．ed. 2. 591. 1917; ed. 3. 346. 1927—広江，応用菌蕈学，1133. 1941—原，日．菌．目．319. 1954—HONGO, Jour. Jap. Bot. 31 : 199, f. 1, D-E. 1956）

Agaricus auratus WITH, Bot. Arr. Brit. Pl. 4 : 184. 1776.

Agaricus esculentus PERS. Syn. Meth. Fung. 350. 1801.

Agaricus aurantiicolor KROMBH. Abbild. 9 : 11, f. 8-11. 1845.

Russulina aurata P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl-fam. 1, 1** : 220. 1900.

子実体は孤生或は群生；傘は径 5—9cm，丸山形にてのち扁平となり，或は最後に中部凹下す；表面は著しき黄色，橙黄色，赤黄色を呈し，特に縁に於て濃く，深赤色の色を混じ，往々一様に赤味を帯ぶ，一様色或は中盤暗色なり，湿潤なる粘性の表皮を被むり，平滑，表皮は薄くして剝げず；縁は老時僅か線条を有し，鈍し；KOH に陰性，傘嚢体なし；肉は白色，類白色，皮下濃シトロン色，屢々周辺すべてシトロン色，初め緊緻にて硬く，のち海綿質，味温和，臭なし，フェノールにてチョコレート色，サルフォバニリンにて紫色となる；褶は殆ど離生或は僅か狭生，淡黄白色，稜はシトロン黄色，縁の方広幅，厚く，殆ど群生，後方幾分叉状，同長，稜は類異質；茎は 6—9×1—2cm，同幅～少しく便腹状，稀に基部太く，白色にて基部シトロン色に移行す，僅か光沢あり，幾分皺あり，中実，のち充塞，最後に空室を生ず，茎嚢体あり；担子柄は 45—55×13—16μ, 小柄は長さ 7—7.5μ；胞子は長球形，粗面，中心油球を有し，9—11×8—10μ，沃度液にて膜は黄色となり，多少網状の肋脈（第Ⅱ，Ⅲ又はⅦ型）を認めらる；胞子紋は濃黄黄土色（Ⅲ）；嚢状体は 60—93×9—11μ, 僅か便腹状或は円筒形，先端狭細僅か粒状，僅か附属毛あり，稜にも褶側の如く存在

す，サルフォバニリンにて淡紅色となり，先端に甚だ僅かの青色内容物を有す；可食。

所在及産地

林地—夏秋　北海道，本州，九州—欧

和名　ニシキタケ（錦茸）〔川村〕

Lactarius DC. ex S.F. GRAY
チチタケ属

S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 623. 1821—FRIES, Gen. Hymen. 8. 1836—SINGER, Agaricales, 719. 1949.

Lactaria PERSOON, Tent. Disp. Fung. 63. 1797.

Agaricus sect. *Lactifluus* PERSOON, Syn. Meth. Fung. 429. 1801.

Lactifluus ROUSSEL, Fl. Calvados, ed. 2, 66. 1806.

Agaricus trib. *Galorrheus* FRIES, Syst. Mycol. 1 : 61. 1821.

Galorrheus FRIES, Syst. Orb. Veg. 1 : 75. 1825.

Lactariella SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 544. 1889.

Lactariopsis P. HENNINGS, Bot. Jahrb. 30 : 51. 1901.

Hypohyllum PAULET, in EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5 : 408. 1909.

Gloeocybe EARLE, l. c. 409. 1909.

傘及び茎は通常肉質，屢々生色あり；表皮層は諸構造を有す；托は褶状；褶は通常小褶と交互す，中位に脆きか全然脆からず，類垂生〜垂生，疎〜密，厚く〜中位に薄く，断回楔形；担子柄は正常形，4胞子，稀に2胞子；往々真の嚢状体を存し，その膜は屢々厚し；棱嚢体は屢々存在す；大嚢体は普通存在す；托実質は類整型〜類不整型にて乳汁菌糸を有し，甚だ稀に球嚢を有す；胞子紋は白色〜濃き赭色或はピンク色を帯びたるクリーム色；胞子はベニタケ属（*Russula*）の如きも刻紋I-III型のものはベニタケ属より屢々存在す；茎は通常中心生，稀に偏心生或は側生，被膜あるものあるも屢々これを有せず；色素は傘の表皮層のみならず子実体の全部に存在し，稀に褶及び茎に欠如す，屢々膜内或は細胞間隙に存し，多くの種類に於て同時に又細胞内にも存す；肉は乳汁を有し，水様或は乳状の小滴を作り，或は単に有色乳汁は表面を潤す；多くの種に於てWood 光線及び分極光線にて少しく発光するを認めらる；乳汁菌糸は組織内を通じて走り甚だ著し，林内地上に生じ菌根を作り，稀に腐木上に生ず；擬被実或は裸実；汎布，約 75 種を知らる；良食用菌，稀に毒菌あり。

（本属名は lac [羅]（乳汁）より出づ）

基準種　*L. deliciosus* (L. ex FR.) S. F. GRAY

本邦既知節及種検索表

A. 傘は乾燥或は僅か粘性にて速に乾燥，細軟毛，絨毛，綿絮，小鱗片を有し或は粉状又は無毛。
 a. 乳汁は甚だ著しく多量，味は完全に温和
  (1) チチタケ節 **Dulces** (479)
 b. 乳汁は甚しく多量なることなく屢々乏し。
  α. 乳汁及肉は空気に触れて赤変す；味辛し。
   (2) クロチチタケ節 **Plinthogali** (479)
  β. 乳汁及肉は赤変せず。
   I. 傘は大体殆ど色素なし；味辛し。
    (3) ケシロハツタケ節 **Albati** (480)
   II. 傘は有色；乳汁は味温和或は苦くして辛し。
    (4) ヒメチチタケ節 **Russulares** (480)
B. 傘は粘性，稀に乾燥状なるも絨状又は粉状ならず。
 a. 乳汁は白色，不変色或は変色；通常味辛し。
  (5) カラハツタケ節 **Piperites** (480)
 b. 乳汁は常に初めより濃色にて橙，赤，紫，菫，藍色等。
  (6) アカモミタケ節 **Dapetes** (481)

---

(1) チチタケ節 **Dulces**

A. 傘は肉眼的には全然無毛に見ゆること多く，時に粉状，特に乾時粉絨状，橙黄色，橙暗褐色〜淡褐色，時に淡色；褶は密生，白色，のち帯黄色，老時暗色，傷時褐変す；茎は長し。
  チチタケ *L. volemus* (482)
B. 傘は明かに粉絨状。
 a. 褶は甚だ疎生，傷時褐色に染まらず；傘面は鈍藁色或は褐橙色〜暗褐或は黒褐色；褶は白色，のちクリーム色或は類黄色；茎は短し。
  ヒロハチチタケ *L. hygrophoroides* (483)
 b. 褶は密生，傷時褐色に染まる。
  α. 傘面に著しき縮緬状凹凸あり，赤褐色〜暗橙赤色；褶は幼時朱色に近く，のち淡黄褐色；茎短し。
   チリメンチチタケ *L. corrugis* (483)
  β. 全面平滑或は多少皺あり，狐色或は汚狐色；褶は帯白色，のち帯黄色；茎比較的長し。
   ビロウドチチタケ *L. luteolus* (484)

---

(2) クロチチタケ節 **Plinthogali**

A. 傘は湿時著しく粘性，灰黄褐〜暗黄褐色；乳汁

は速に鮮桃色となり，甚だ辛し；褶はやや密，淡色，のち黄肉色；茎は傘より淡色。

ハイイロカラチチタケ *L. acris* (484)

B. 傘は乾燥。

a. 乳汁甚だ辛し；傘は帯褐灰色；褶は甚だ疎，黄褐色；茎は傘より淡色，汚黄金色。

ヒロハウスズミチチタケ

L. subplinthogalus (485)

b. 乳汁は味温和，のち徐々に辛し。

α. 茎の頂部に深き溝あり；傘に中丘あり；放射状溝あり，暗褐或は煤色～黒色；茎は同色；褶は密～やや疎，純白，のち鈍赭色。

クロチチタケ *L. lignyotus* (485)

β. 茎の頂部は平坦；傘に中丘なし，皺なきか不規則の皺あり，淡黄白，灰色，のち焦茶色；茎は白色，のち淡桃或は淡灰褐色；褶は寧ろ密，帯白色，のち淡黄色，

ウスズミチチタケ *L. fuliginosus* (486)

(3) ケシロハツタケ節 Albati

A. 傘は無毛。

a. 茎は短大，屢々下方狭細；傘径 20cm に及び，最後に漏斗形にて殆で表面平坦。

ツチカブリタケ *L. piperatus* (486)

b. 茎は細長，円筒形；傘径 10cm 内外，初め饅頭形，のち厚き中盤を有す，縁に沿うて同心皺あり。

カワチチタケ f. *pargamenus* (487)

B. 傘は絨状～微細軟毛を被むる。

a. 褶は疎生；乳汁白色，変色度弱し。

ケシロハツタケ *L. vellereus* (488)

b. 褶は密生；乳汁は黄変す。

ケシロハツタケモドキ

L. subvellereus (489)

---

(4) ヒメチチタケ節 Russulares

A. 傘は細軟毛，絨毛，綿架或は小鱗片を有す，乾燥。

a. 味甚だ辛し；傘は初め綿架状絹糸あるも，早く無毛となる，赤栗褐～小豆色，大部分常に中丘あり，中大形 (3—10cm)；茎は細長。

アカチチタケ *L. rufus* (489)

b. 味温和～辛し；傘は無毛とならず。

α. 特殊のクマーリン臭強し，味温和或はやや辛し；傘は 4—10cm，灰蜜黄，灰肉赭，茶褐色，小鱗片を有す；乳汁は水液状，変色せず。

アカチチタケモドキ *L. helvus* (490)

β. 特殊の臭なし。

I. 傘縁に著しき房毛あり，傘は甚だ小形，径 1—2cm，褐色，微細粒絨状；胞子 7—8×6—7μ；味温和。

アシボソチチタケ *L. gracilis* (491)

II. 傘縁に房毛なし；味辛し。

1. 傘は菫灰～淡汚桃色，絨状，径 1—5cm；胞子 7.5—10×5—7.5μ。

ハイイロチチタケ *L. griseus* (491)

2. 傘は藍色～オリーブ黒色，微細鱗片を密布す，径 2—3cm；胞子 6—8×5—7μ。

ヒメアイイロチチタケ

L. sakamotoi (491)

B. 傘は無毛。

a. 傘面乾燥。

α. 乳汁は乳状，不変色。

I. 傘は黄褐～黄褐赤色，時に僅か中丘あり，味苦くして辛し，中形 (1—6cm)。

ヒメチチタケ *L. subdulcis* (492)

II. 傘は橙褐～暗肉桂色，屢々中丘あり；味温和，臭よし；小中形 (1.5—4cm)。

ニセヒメチチタケ

L. camphoratus (493)

β. 乳汁は漿液状，帯黄色に変る；味温和；傘は淡煉瓦色，のち淡色，屢々中丘あり；中形 (1—5cm)。

ヒメチチタケモドキ

L. tabidus (493)

b. 傘面は多少粘性，速に乾燥。

α. 乳汁は不変色或は極めて僅か変色。

I. 乳汁は不変色；味温和；傘は肉桂～煉瓦赤色，中丘なし；中形 (3—7cm)。

チョウジチチタケ *L. quietus* (494)

II. 乳汁は乾けば黄白塊となる；味辛し；傘は中部淡栗褐色，往々中丘あり，小中形(2—4cm)。

コウイロチチタケ *L. avellaneus* (494)

β. 乳汁は黄変す；味苦くして辛し；傘は帯肉灰黄色～淡渋赤或は黄褐色，中丘なし，中形(2—8cm)。

キチチタケ *L. thejogalus* (494)

---

(5) カラハツタケ節 Piperites

A. 乳汁は不変色にて肉を染めず。

a. 傘縁に著しき長き房毛あり；傘は 5—13.5cm，

鈍藁色にて桃肉色を帯び或は肉色，多少環紋あり；胞子 8—10×6—8μ；甚だ辛し。

カラハツタケ **L. torminosus** (495)

b. 傘縁に房毛なく，僅か軟毛あるか無毛。

α. 傘は明色，環紋明瞭。

I. 味辛し。

1. 傘は橙色，帯黄煉瓦色の環紋あり，径4.5—12cm，胞子 7.5—9×6—7.5μ。

カラハツタケモドキ **L. insulsus** (496)

2. 傘は淡卵黄色，淡肉桂色の環紋あり，径5—10cm；胞子 8—10×7.5—10μ。(前種との区別往々不正確)

キカラハツタケモドキ **L. zonarius** (497)

II. 味なし；傘は非粘性，淡肉色，肉桂色の環紋あり，径 2.5—4cm；胞子 7—8×6—7μ；臭はカレー粉～トウキ(当帰)様。

ニオイワチチタケ **L. subzonarius** (497)

β. 傘は暗色にて暗赤褐色，環紋不明瞭，径 6—10cm；胞子 8—10×6—8μ。

ヌメリアカチチタケ **L. hysginus** (498)

B. 乳汁は速に硫黄色となり肉を染む。

a. 傘縁に著しき房毛あり；傘は藁黄色～暗赭色，通常無環紋；茎は殆ど同色，孔窩を有す。

キカラハツタケ **L. scrobiculatus** (498)

b. 傘縁に房毛なし；傘は黄肉色～橙色，環紋あり；茎は白色，老時同色となる，往々斑点あり。

キチチタケモドキ **L. chrysorheus** (499)

C. 乳汁は菫色，暗菫色或は紫色となり，或は肉は傷時これらの色を呈す。

a. 傘は無毛。

α. 傘は灰色～帯菫茶褐色，或は淡栗褐色，通常無環紋，甚だ粘性，褶は老時も淡色。

トビチャチチタケ **L. uvidus** (500)

β. 傘は帯菫褐色～赭褐灰色，常に環紋あり，僅か粘性にて速に乾燥；褶は老時茶褐色。

ウズタケ **L. violascens** (501)

b. 傘は蜜黄色の軟毛に被われ，帯白色～蜜黄色，環紋あり；褶は老時も淡色。

ムラサキキカラハツタケ **L. speciosus** (501)

D. 乳汁或は肉は空気に触れて灰，オリーブ，緑，或は汚淡赭又は汚褐色となる，但し屢々只相当時間後に於て起る；傘及茎は屢々灰或は緑色なり。

a. 傘は甚だ大形 (6—15—20cm)，帯黒オリーブ色，オリーブ緑色或は鶯色，無環紋；乳汁は不変色なるも，褶を傷時汚染し著しき汚褐色に染む。

ウグイスチャチチタケ **L. necator** (502)

b. 傘には菫色を帯ぶ。

α. 傘は小形～中等大 (3—6cm)，菫灰色，淡肉桂色，緑灰色或は淡汚桃色等；乳汁は灰色となり或は変色せず；褶は傷時汚オリーブ褐色となる；茎は乾燥，老品のみ中空。

コキハダチチタケ **L. vietus** (503)

β. 傘は大～甚だ大形 (5—15cm)，鉛灰色～煙灰色或は紫色を帯び，又鉛色或は紅褐色等；乳汁は不変化或は微かに黄色を帯び，乾きて褶上に淡緑色となる；褶は老時赭色点を生ず；茎は粘性，速に膨大せる中空。

キハダチチタケ **L. trivialis** (504)

γ. 傘は中等大 (4—10cm)，淡紫煤色；乳汁は乾きて褶上に帯緑黄～汚緑色となる；茎は湿時僅か粘性，のち中空。

ウメネズチチタケ **L. akanensis** (504)

c. 傘は甚だ大形 (6—15cm)，帯白色，のちクリーム色～狐色；乳汁は灰緑色となる；本節の全他種と異り例外的に味温和なり；褶は傷時緑色となる；茎は中空。

キハツタケ **L. flavidulus** (504)

---

(6) アカモミタケ節 Dapetes

A. 乳汁は橙～朱色。

a. 傘は淡煉瓦色～トキ色，傷時藍緑の汚染を生ぜざるか僅か汚染するのみ。

アカモミタケ

L. deliciosus var. **japonicus** (505)

b. 傘は橙黄～黄赤色，傷時著しく藍緑色汚染を生ず。

アカハツタケ **L. akahatsu** (506)

B. 乳汁は暗紅褐色；傘は淡褐～淡汚褐色にて桃色を帯ぶ，傷時著しく藍緑色汚染を生ず。

ハツタケ **L. hatsudake** (506)

C. 乳汁は藍色；傘は汚桃色～帯桃白色，傷時青色汚染を生ず。

オガサワラハツタケ

L. ogasawarashimensis (507)

(1) Dulces HEIM ex SING. (1942)
チチタケ節

Lactarius volemus (FR.) FR.
チチタケ

FRIES, Epicr. Myc. 344. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 178. 1863; Hymen. Eur. 435. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 207. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2: 202. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 216. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 999 (no. 962). 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 201. 1872—GILLET, Champ. Fr. 221, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 196. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 123. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 543. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 447. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 398. 1915—ROLLAND, Bull. Soc. Myc. Fr. 7 : 12, pl. 2, f. 1. 1891; Atl. Champ. 38, pl. 35, f. 72. 1910—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 31. 1893; Brit. Fungi, 162. 1911—PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 48 : 186, pl. 30. 1896—PATOUILLARD, Ess. Tax. 153. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 115, f. 118. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 277. 1908—RICKEN, Blätterp. 38, pl. 14, f. 3. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 112, pl. 12. 1818—REA, Brit. Basid. 493. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 84, pl. 36. 1927—LANGE, Agar. Denm. 7 : 35. 1928; Fl. Agar. Dan. 5 : 44, pl. 176, f. G. 1940—KONRAD, Bull. Soc. Myc. Fr. 51 : 168. 1935—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 327. 1938—SINGER, Agaricales, 722. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 23. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 479. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 6. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2 : 161, f. 151, A, pl. 18, f. 1. 1957.

(川村, 植. 雑. 22 : 409, f. 9. 1908; Illus. Jap. Fungi, pl. 6. f. 21-3. 1913; 日. 菌. 図説, n. 174. 1929; 食用菌及有毒菌, f. 47(p. 39). 1931; 日. 菌. 図鑑, 3 : 345. 1954—白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 309. 1917; ed, 3. 181. 1927—梅村, 富士. 植. 志, 368. 1923—松浦, 茸類辞典, 85, f. 95. 1933; 応用菌蕈学, 1130. 1941—IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 49 : 610. 1935—小林, 日. 隠. 植. 図. 511, pl. 246, f. 3-7. 1939—今関, 原色きのこ, pl. 46 (右). 1942; 及土岐, 林. 試. 研. 報. 67 : 56, pl. 7, f. 2. 1954—原, 日. 菌. 目. 175. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 95, f. 248, pl. 44, f. 248. 1957)

Agaricus lactifluus L. Sp. Plant. 2 : 1172. 1753.

Agaricus oedematopus SCOP. Fl. Carn. 2 : 453. 1772.

Agaricus testaceus ALB. et SCHW. Consp. Fung. Lusat. 209. 1805.

Agaricus volemus FR. Syst. Myc. 1 : 69. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 548. 1844—BARLA, Champ. Nice, 36, pl. 20, f. 1-3. 1859.

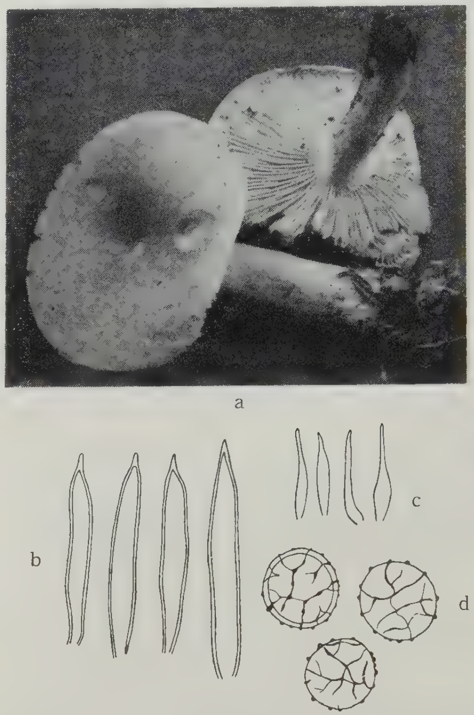
Lactarius lactifluus QUÉL. Enchir. Fung. 131. 1886.

Lactaria volema SCHROET. Pilze Schles. 1 : 535. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 214. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 335, pl. 56 D. 1912.

(松村, 植. 名鑑, 1 : 149. 1904)

Lactifluus volemus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 857. 1891.

Lactaria lactiflua BURLINGH. Mem. Torr. Bot. Club, 14 : 90. 1908; N. Am. Fl. 9 : 195. 1910.



第 205 図 チチタケ Lactarius volemus
a. 子実体 ×1/3 b. 嚢状体 c. 傘嚢体 ×500
d. 胞子×1000 (大谷氏)

子実体は群生或は散生; 傘は径 2.5—13cm, 丸山形, のち殆ど扁平に開張し, 或は僅か圧低さる; 表面は乾燥, 橙黄色, 橙暗褐色〜渋褐色, 時に淡色, 環紋なく, 肉眼的には無毛, 平滑, 又はやや粉状, 乾時特に粉状〜絨状明かなり, 或は遂に網状又は溪流状に罅裂す; 縁は初め内捲し, のち開平, 屢々淡色; 肉は緻密にて堅く, 類白色, 空気に触れて帯褐色となる, 味温和, 良香; 乳汁は白色, 甚だ多量, 寧ろ粘着性, 変色せず, 最後に帯黄色となる, 味温和, 肉及褶を褐色に染む; 褶は直状垂生, 白色, のち帯黄色, 老時暗色, 傷時褐色に変ず, 密生, 幾分叉生, 狭幅; 茎は 4—10×0.7—2cm, 殆ど同幅, 乾

燥，傘面と同色或は淡色，無毛，平坦，或は粉状，又は不平坦或は溪流状，中実或は充塞，稀に中空；胞子は球形或は類球形，有刺，沃度液にて網目状隆起を認めらる，10—11×8—11μ；胞子紋は白色；嚢状体は紡錘形，表面に凹凸あり，淡褐色，厚膜，50—70×6—8μ，傘面のものは棒状，厚膜，20—60×3—6μ；可食。

所在及産地

広葉樹林地及野外—夏秋

全土—欧．北米．亜(支．小亜)

和名　チチタケ(乳茸)〔川村〕

Lactarius hygrophoroides BERK. et CURT.

ヒロハチチタケ

BERKELEY & CURTIS, Ann. Mag. Nat. Hist. III, 4 : 293. 1859—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 448. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 398. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 114. 1918—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 78, pl. 30. 1927—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 324. 1938—SINGER, Agaricales, 722. 1949.

(今関及土岐，林．試．研．報．67 : 54. 1954—原，日．菌．目．174. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，95, pl. 44, f. 249. 1957)

Lactarius distans PECK, Rep. N. Y. St. Cab. 117. 1872; Mem. N. Y. St. Mus. 4(3) : 151, pl. 53, f. 7-11. 1900—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 448. 1887.

Lactifluus distans O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2: 856. 1891.

Lactifluus hygrophoroides O. KUNTZE, l. c. 857. 1891.

Lactaria hygrophoroides P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 214. 1900—BURLINGHAM, Mem. Torr. Bot. Club, 14 : 92. 1908; N. Am. Fl. 9 : 196. 1910—MURRILL, Mycologia, 8 : 192, pl. 187, f. 2. 1916.

Lactaria distans P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 214. 1900.



第206図　ヒロハチチタケ　Lactarius hygrophoroides ×1/2　(大谷氏)

子実体は群生或は散生；傘は径 3—10cm，丸山形，のち開張し，中央圧低され遂に中窩を生じ或は漏斗形となる；表面は乾燥し，殆ど無毛或は甚だ細微なる粉絨状をなし，往々粗皺或は網目状罅裂を生ず，鈍黄色或は褐橙色～暗褐或は黒褐色，環紋なし；縁は内捲し，のち開平或は上向す；肉は類白色，幾分脆く，厚し；乳汁は白色にて変色せず，褶及肉を染めず，味温和，臭なし，その量多し；褶は直状類垂生，類白色，のちクリーム色或は類黄色，傷時変色せず，疎生，叉状ならず，屢々中間脈あり，寧ろ狭幅；茎は短く，2—5×0.5—1.5cm，同幅或は下方狭細，傘面と同色，無毛或は粉状，中実或は充塞；胞子は球形或は広楕円形，細刺を有し，径 8—11μ；胞子粉は白色；可食。

所在及産地

広葉樹林地及野外—夏秋

北海道，本州—欧．北米

和名　ヒロハチチタケ(疎褶乳茸)〔今井〕

Lactarius corrugis PECK

チリメンチチタケ

PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 32: 31. 1880—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 449. 1887—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 116, f. 118. 1903—KAUFFMAN, Agar. Mich. 113. 1918—COKER, Jour. Elisha Mitch. Soc. 34 : 55. 1918.

(今関及土岐，林．試．研．報．67 : 52, f. 12. 1954)

Lactifluus corrugis O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2: 856. 1891.

Lactaria corrugis P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 214. 1900—BURLINGHAM, N. Am. Fl. 9 : 197. 1910.

子実体は群生或は孤生；傘は径 6—12cm，丸山形，のち開張し，中央稍々窪む；表面は乾燥，暗橙赤色～帯赤渋色，微細絨毛を被むり粉状に見ゆ，無環紋，縮緬状凹凸あり，或は網状皺あり；縁は初め内捲し，のち弓状或は開平す；肉は白色，傷時褐色に変ず，緊緻，僅か臭あり；乳汁は白色，不変色或は漸次褐色となり，多量，味温和或はやや渋味あり；褶は直状垂生，幼時朱色に近く，のち淡黄褐色となり，傷時暗褐色となる，密生，幾分狭幅，往々叉状；茎は 3.5—5×0.7—1cm，同幅，乾燥，傘面と同色或は淡色，上部粉状，基部細絨状，充塞；胞子は球形或は類球

形，有刺，沃度液にて完全なる網目状隆起を認む；10—11×8—11μ；胞子紋は白色；嚢状体は紡錘形，表面に凹凸あり，厚膜，淡褐色，60—70(90)×6—8μ；傘表のものは密生し，棒状，厚膜，20—60(100)×3—6；可食。

所在及産地

広葉樹林地及野外—夏秋　　本州—北米

和名　チリメンチチタケ（縮緬乳茸）〔今関及土岐〕

Lactarius luteolus PECK

ビロウドチチタケ

PECK, Bull. Torr. Bot. Club, 33 : 412. 1896—SACCARDO, Syll. Fung. 14:94. 1899—KAUFFMAN, Agar. Mich. 115. 1918—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 326. 1938—SINGER, Agaricales, 722. 1949.

Lactarius foetidus PECK, Bull. N. Y. St. Mus. 54 : 949. 1902.

Lactaria luteola BURLINGH. Mem. Torr. Bot. Club, 14 : 95. 1908; N. Am. Fl. 9 : 197. 1900.

子実体は孤生或は群生；傘は径 3—7cm，丸山形，のち殆ど扁平となり，往々中窩状に窪みてやや乳頭を存す；表面は乾燥，狐色或は汚狐色或は淡色，無環紋，微細なる粉絨状，多少皺あり；縁は初め内捲し，のち弓形となる；肉は白色，傷時褐色となる，味温和，臭は温和或は悪臭；乳汁は白色或は類白色，空気に触れて肉及褶を褐色に染む，味温和，その量多し；褶は直状類垂生，帯白色，のち帯黄色，傷時褐色となる，密生，狭幅；茎は 2.5—5×0.3—1cm，約同幅，帯白色或は狐色，無毛，或は粉絨状，充塞；胞子は球形或は類球形又は広楕円形，有刺，径 7—8μ；胞子紋は白色；可食。

所在及産地

混淆林地—夏秋　　北海道—北米

和名　ビロウドチチタケ（天鵞絨乳茸）〔今井〕

（2）Plinthogali SING. (1942)

クロチチタケ節

Lactarius acris (BOLT. ex Fr.) S. F. GRAY

ハイイロカラチチタケ

S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 625. 1821—FRIES, Epicr. Myc. 342. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 164. 1863; Hymen. Eur. 428. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 207. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 211. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 1005 (no. 941). 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 197. 1872; Enchir. Fung. 128. 1886—GILLET, Champ. Fr. 203. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 186. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 128. 1887—WINTER, Pilze, 1 : 550. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 434. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 15. 1893; Brit. Fungi, 157. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 272. 1908—RICKEN, Blätterp. 32, pl. 12, f. 2. 1910—REA, Brit. Basid. 485. 1922—LANGE, Agar. Denm. 7 : 32. 1928; Fl. Agar. Dan. 5 : 41, pl. 169, f. B. 1940—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 19. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 478. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 151. 1957.

（今関及土岐，林．試．研．報．67 : 51, f, 11. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，96, pl. 45, f. 255. 1957）

Agaricus pudibundus SCOP. Fl. Carn. 2 : 452. 1772.

Agaricus acris BOLT. Hist. Fung. 2:60, pl. 60. 1788—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 437. 1801—DE CANDOLLE, Fl. Fr. 2 : 141. 1815—FRIES, Syst. Myc. 1 : 65. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 549. 1844.

Lactaria pudibunda SCHROET. Pilze Schles. 1 : 542. 1889—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 342. 1912.

Lactifluus acer O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 856. 1891.

Lactaria acris P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 216. 1900.

Lactarius pudibundus SACC. Fl. Ital. Crypt. Hymen. 387. 1915.

子実体は群生或は散生；傘は径 5—7cm，丸山形，のち開張扁平となり，中央少しく窪み或は浅き漏斗形となる，往々不正形にて屢々偏心的となる；表面は湿時甚だ粘性，乾時粉状，灰黄褐～暗黄褐或は煤灰色，環紋なし，上皮層に薄膜の短毛あり；肉は白色，傷時速かに桃色に変ず，味甚だ辛く，臭強し；乳汁は白色乳状，空気に触れて速に桃色に変じ，のち凝固して黄白色となる，味甚だ辛し；褶は直状垂生，淡色，のち黄肉色，傷時桃変す，稍々密生し，薄く，叉状；茎は 2.5—6×0.5—1cm，殆ど同幅或は下部狭細，傘面より淡色，粉状，屢々偏心生，斜上或は屈曲，充塞；胞子は類球形，稀に広楕円形，有刺，沃度液にて断片的肋脈或は不完全網目隆起を認めらる，7.5—9×7—8μ；胞子紋はクリーム色；有毒。

所在及産地

広葉樹林地—夏秋　　本州—欧

和名　ハイイロカラチチタケ（灰色辛乳茸）〔今関及土岐〕

Lactarius subplinthogalus COKER

ヒロハウスズミチチタケ

COKER, Jour. Elisaha. Mitch. Soc. 34 : 50. 1918.
(今関及土岐，林．試．研．報．67 : 54. f. 13. 1954 —今関及本郷，原色日．菌．図鑑，95, pl. 44, f. 251. 1957)

子実体は群生或は散生；傘は径 4—6cm，丸山形，のち開張し，中央圧低さる；表面は帯褐灰色，乾燥，粉状，放射状の皺を有し，縁に襞を存す；上表層に薄膜の毛を有す；肉は比較的薄く，白色にて桃色に変る；乳汁は白色，空気に触れて桃色となる，味甚だ辛し；褶は直生，甚だ疎，広幅，叉状ならず，黄褐色，傷時桃色となる；茎は 3—5×0.5—1cm，殆ど同幅，傘面より淡色，汚黄金色の粉状，小皺あり，充塞；胞子は類球形，有刺，沃度液にて肋脈乃至不完全網目隆起を認めらる，径 8—10μ；胞子紋は黄褐色。

所在及産地

林地—秋　　本州—北米

和名　ヒロハウスズミチチタケ（疎褶薄墨乳茸）〔今関及土岐〕

Lactarius lignyotus FR.

クロチチタケ

FRIES, Monogr. Hymen. Suec. 2 : 177. 1863; Hymen. Eur. 434. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3: 214. 1876; Hattsv. 1 : 194. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 123. 1887—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 8 : 229. 1879; Enchir. Fung. 130. 1886—WINTER, Pilze, 1 : 544. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 445. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 396. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 29. 1893; Brit. Fungi, 161. 1911—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 117, f. 119. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 277. 1908—RICKEN, Blätterp. 35. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 106. 1918—REA, Brit. Basid. 492. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 8 : pl. 386. 1928—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4 : pl. 326. 1928; Agaricales, 2: 18. 1952—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 324. 1938—SINGER, Agaricales, 723. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 479. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 151, f. 43. 1957.
(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 49 : 610. 1935—原，日，菌．目．174. 1954)
(今関，原色きのこ，pl. 47 (左). 1942—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，96. 1957)

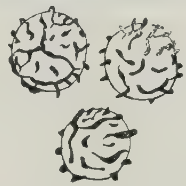
Lactarius fuliginosus var. *major* FR. Epicr. Myc. 348. 1838.

Lactariella lignyota SCHROET. Pilze Schles. 1 : 544. 1889.

Lactifluus lignyotus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 857. 1891.

Lactaria lignyota BURLINGH. Mem. Torr. Bot. Club, 14 : 86. 1908; N. Am. Fl. 9 : 194. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, pilze, 2(1): 335. 1912.





第 207 図　クロチチタケ Lactarius lignyotus
a. 子実体表面　b. 同裏面 ×1/3　c. 胞子 ×1000（大谷氏）

子実体は孤生或は群生；傘は径 3—8cm，丸山形，のち扁平或は僅か圧低され，中丘を有す；表面は乾燥，暗褐色或は煤色～黒色，無環紋，粉絨状，放射状襞或は溝を有す；縁は初め内屈し，時に波状；肉は寧ろ緊緻，白色，傷時徐々に桃色或は鮭肉色に変ず；乳汁は白色水様，徐々に桃変す，味温和或は最後に僅か辛し；褶は直状垂生，密生～やや疎生，初め純白色，のち鈍赭色，中位に広幅，薄く，長さ種々あり；茎は 6—12×0.7—1.5cm，同幅，頂部に著しき縦溝を有す，傘面と同色，基部淡色，粉絨状，充塞；胞子は球形，著しき刺あり，沃度液にて肋脈或は不完全網状隆起を認む，径 9—10μ；胞子紋は黄色；嚢状体は稜に多く，無色，円筒形，屈曲し，50—60×7—10μ；食毒不明。

所在及産地

主に針葉樹林地—夏秋

北海道，本州一欧・北米

和名 クロチチタケ（黒乳茸）〔今井〕

Lactarius fuliginosus (FR. ex FR.) FR.

ウスズミチチタケ

FRIES, Epicr. Myc. 348. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 178. 1863; Hymen. Eur. 434. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fungi. 209. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fung, 1 : 215. 1871; Ill. Brit. Fungi, 7 : pl. 996 (no. 959). 1890 (?)—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 201. 1872—GILLET, Champ. Fr. 207, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 215. 1876; Hattsv. 1 : 194. 1879—WINTER, Pilze, 1 : 544. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 446. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 393. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 27. 1893; Brit. Fungi, 161. 1911—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 118, f. 120. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 276. 1908—RICKEN, Blätterp. 34, pl. 12, f. 5. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 105. 1918—REA, Brit. Basid. 492. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 8:385. 1928 (?)—LANGE, Agar. Denm. 7 : 33. 1928; Fl. Agar. Dan. 5 : 42. 1940—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 325. 1938—SINGER, Agaricales, 723. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 117, pl. 41, f. 4. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 18. 1952—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 8, A. 1956—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 478. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 151. 1957.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 49 : 610. 1935—原，日．菌．目．174. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，96. 1957)

Agaricus azonites BULL. Champ. Fr. pl. 567, f. 3. 1791—DECANDOLLE, Fl. Fr. 2 : 142. 1815.

Agaricus plinthogalus OTTO, Vers. Agar. 75. 1816.

Agaricus fuliginosus FR. Syst. Myc. 1:73. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 546. 1844—BARLA, Champ. Nice, 40, pl. 21, f. 6-7. 1859.

Lactarius azonites FR. Epicr. Myc. 343. 1838—QUÉLET, Enchir. Fung. 130. 1886—KARSTEN, Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 123. 1889—ROLLAND, Atl. Champ. 36, pl. 33, f. 68. 1910—SACCARDO, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 393. 1915—BRESADOLA, Icon. Myc. 8 : pl. 387. 1929.

Lactariella azonites SCHROET. Pilze Schles. 1: 544. 1889.

Lactifluus fuliginosus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 856. 1891.

Lactaria phinthogala BURLINGH. Mem. Torr. Bot. Club, 14 : 84. 1908; N. Am. Fl. 9 : 194. 1910—MURRILL, Mycologia, 7 : 164, pl. 160, f. 2. 1915.

Lactaria azonites MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 336. 1912.



第208図 ウスズミチチタケ Lactarius fuliginosus ×1/2（大谷氏）

子実体は孤生或は群生；傘は径 2—7cm，丸山形，のち扁平となり，中央圧低され，遂に漏斗形となり，屢々不正形；表面は乾燥，初め帯白色，灰色，淡黄白色，灰褐色或は黄褐色等にて，のち帯褐灰色，焦茶色或は暗褐色となる，無環紋，粉絨状，小皺あり；縁は初め内屈す，全縁或は波状；肉は白色，空気に触れて肉色或は肉黄色に変ず；乳汁は白色，のち肉色或は桃色となり，乾時帯白粉状となる，味初め温和，のち徐々に辛し；褶は直状垂生，初め帯白色，のち淡黄色となる，寧ろ密生，薄く，最後或は乾時粉状，茎に近く叉状，傷時桃色或は鮭肉色となる；茎は 3—8×0.5—1cm，殆ど同幅，粗面，白色，のち淡桃色或は淡灰褐色，無毛或は僅か粉状，基部軟毛あり，緊緻，中実，のち中空；胞子は球形，有刺，沃度液にて粒状，少しく尾線を認めらる，径 6—10μ；胞子紋は黄赭色；嚢状体はやや多数，円筒形，基部太く，尖頭，30—50×5—7μ。

所在及産地

林地一夏秋　北海道一欧・北米・亜(小亜)

和名 ウスズミチチタケ（薄墨乳茸）〔今井〕

(3) Albati (BAT.) SING. (1942)

ケシロハツタケ節

Lactarius piperatus (L. ex FR.) S. F. GRAY

ツチカブリタケ

S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 623. 1821—FRIES, Epicr. Myc. 340. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 166. 1863; Hymen. Eur. 430. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 205. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 200. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 212. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 979 (no. 944). 1890; Handb. Austr. Fungi, 77. 1892—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1:198. 1872; Enchir.

Fung. 128. 1886—GILLET, Champ. Fr. 215. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 210. 1876; Hattsv. 1 : 187. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 120. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 548. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 436. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 378. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 17. 1893; Brit. Fungi, 157. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 153. 1900—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 120, f. 122. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 273. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 35, pl. 33, f. 66. 1910—RICKEN, Blätterp. 29, pl. 10, f. 3. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 95, pl. 9. 1918—REA, Brit. Basid. 486. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 80, pl. 32, f. 2. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 8: pl. 371. 1928—LANGE, Agar. Denm. 7 : 28. 1928; Fl. Agar. Dan. 5:36, pl. 171, f. D. 1940—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43:315, pl. 5, f. 3. 1938—SINGER, Agaricales, 723. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 22. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 473. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 157, pl. 19, f. 1. 1957.

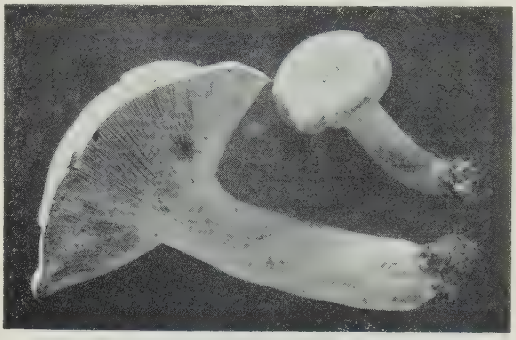
（白井，日．菌．目．45. 1905; ed. 2. 309. 1917; ed. 3. 180. 1927—川村，植．雑. 22 : 411, f. 10. 1908; Illus. Jap. Fungi, pl. 19, f. 1-4. 1925; 日．菌．図説, n. 176. 1920; 食用菌及有毒菌，f. 36. (p. 31). 1931; 日．菌．図鑑，3 : 350, f. 336. 1954—白井，日．菌．目．ed. 2. 309. 1917; ed. 3. 180. 1927—梅村，富士．植．志, 368. 1923—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3 : 113. 1931—松浦，茸類辞典，125, f. 145-147. 1933; 応用菌蕈学, 1128, f. 751-753. 1941—IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 49 : 606. 1935—小林，日．隠．植．図．509, pl. 245, f. 3-5. 1939—牧野，日．植．図鑑，1025, f. 3073. 1940—今関，原色きのこ，pl. 48(左). 1942; 及土岐，林．試．研．報．67 : 54. 1954—原，日．菌．目．174. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，97, f. 256, pl. 45, f. 256. 1957）

Agaricus piperatus L. Sp. Plant. 2 : 1173. 1753—SCOPOLI, Fl. Carn. 2:449. 1772—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 429. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1 : 76. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1:550. 1844—BARLA, Champ. Nice, 42, pl. 22, f. 1-5. 1859.

Lactaria piperata SCHROET. Pilze Schles. 1 : 536. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 216, f. 110, B. 1900—BURLINGHAM, Mem. Torr. Bot. Club, 14: 18. 1908; N. Am. Fl. 9 : 176. 1910—EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5 : 409. 1909—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 340, pl. 59. 1912—MURRILL, Mycologia, 6 : 164, pl. 132. 1914.

(P. HENNINGS, Hedwigia, 39, Beibl. 156. 1900—松村，植．名鑑，1 : 149. 1904—白井，日．菌．目．45. 1905）

Lactifluus piperatus (ut PERS.) O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 857. 1891.



第209図　ツチカブリタケ　Lactarius piperatus ×1/3　（大谷氏）

子実体は群生或は孤生；傘は径 4—18cm，時に 22cm に及ぶ，丸山形にて中窩あり，のち開張し中央圧低され，遂に漏斗状となる，傘は地表下にて開張し，発達後傘面に腐植土等を被むること多し；表面は乾燥，白色，のち帯黄或は帯褐色を混ず，無環紋，無毛，平坦或は有皺；縁は初め内捲し，のち開平，更に上向し，大波状をなす；肉は白色，緻密，厚く，傷時帯黄色となる；乳汁は白色，変色せざるか稀にクリーム色或は帯緑色となる，味甚だ辛し；褶は直状垂生，白色或はクリーム色，最後に褐色となる，甚だ密，狭幅，叉状；茎は短大，3—9×1—5cm，同幅，屢々下方狭細，白色，無毛或は粉状，乾燥，緊緻，中実或は充塞；胞子は類球形或は広楕円形，微疣，7—9×6—7.5μ；胞子紋は白色；嚢状体は無色，紡錘形，60—70×9—10μ；可食（水洗後）。

所在及産地

広葉樹林地—夏秋

北海道，本州，九州—欧．北米．濠．亜（支．西比）

和名　ツチカブリタケ（被土茸）〔方言〕

f. **pargamenus** (SWARTZ ex FR.) IMAI

カワチチタケ

IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 316. 1938.

（今関及土岐，林．試．研．報．67 : 54. 1954—原，日．菌．目．174. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，97. 1957）

Agaricus pargamenus SWARTZ, Sv. Vet. Akad. Nya Handl. 30 : 90. 1809—FRIES, Syst. Myc. 1 : 76. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 551. 1844.

Lactarius pargamenus FR. Epicr. Myc. 340. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:166. 1863; Hymen. Eur. 430. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 198. 1872—GILLET, Champ. Fr. 216, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 210. 1876; Hattsv. 1 :

187. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 120. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 549. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 436. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 377. 1915—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2 : 310. 1889; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 978 (no. 943). 1890—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 16. 1893; Brit. Fungi, 157. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 273. 1908.

(白井, 日. 菌. 目. ed. 3. 180. 1927—広江, 応用菌蕈学, 1127, f. 750. 1941—原, 日. 菌. 目. 174. 1954)

Lactaria pergamena SCHROET. Pilze Schles. 1 : 537. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 216. 1900—BURLINGHAM, Mem. Torr. Bot. Club, 14 : 21. 1908; N. Am. Fl. 9 : 176. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 340, pl. 59, C. 1912.

(安田, 植. 雑. 36 : 103. 1922)

Lactifluus pergamenus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 857. 1891.

Lactarius piperatus var. *pergamenus* REA, Brit. Basid. 486. 1922—LANGE, Agar. Denm. 7 : 28. 1928; Fl. Agar. Dan. 5 : 36, pl. 171. f. c. 1940.

(小林, 日. 隠. 植. 図. 509. 1939)

基種と異なる点は彼の茎は短大にて多くは傘径の $1/2$ 以下の長さなるも, この物は細長も通常にて傘径の半ばより長き円筒形をなし, 傘径 4—11cm, 初め饅頭形にて, のち厚き中盤を有し, 且つ縁に沿うて同心円的の皺を有し, 尚褶は直生にて甚だ幅狭く水平をなす等なり。

所在及産地

広葉樹林地—夏秋

北海道, 本州—

欧. 北米. 亜(朝. 西比)

和名 カワチチタケ(皮乳茸)〔安田〕

Lactarius vellereus (FR.) FR.

ケシロハツタケ

FRIES, Epicr. Myc. 340. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 167. 1863; Hymen. Eur. 430. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 206. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 201. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 212. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 980 (no. 945). 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 198. 1872; Enchir. Fung. 128. 1886—GILLET, Champ. Fr. 215, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 211. 1876; Hattsv. 1 : 188. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 121. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 548. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 437. 1887—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 18. 1893; Brit. Fungi, 273. 1908—RICKEN, Blätterp. 29, pl. 10, f. 2. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 92. 1918—REA, Brit. Basid. 486. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 84, pl. 35. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 8 : pl. 372. 1928—LANGE, Agar. Denm. 7 : 28. 1928; Fl. Agar. Dan. 5 : 35, pl. 170, f. B. 1940—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 317, pl. 5, f. 4. 1938—SINGER, Agaricales, 723. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 114, pl. 37, f. 3. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2: 22. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 473. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 157. 1957.

(白井, 日. 菌. 目. ed, 3. 181. 1927—IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 49 : 606. 1935—小林, 日. 隠. 植. 図. 511, pl. 246, f. 1-2. 1939—広江, 応用菌蕈学, 1129. 1941—今関, 原色きのこ, pl. 48(右). 1942; 及土岐林. 試. 研. 報. 67 : 56, pl. 5, f. 1. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 97. 1957)

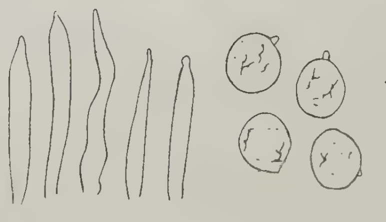
Agaricus Listeri SOW. Col. Fig. Engl. Fungi, pl. 104. 1797.

Agaricus vellereus FR. Syst. Myc. 1 : 76. 1821 RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 550. 1844—BARLA, Champ. Nice, 43, pl. 22, f. 6-8. 1859.

Lactaria vellerea SCHROET. Pilze Schles. 1 : 538. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 216. 1900—BURLINGHAM,



a



b c

第210図 ケシロハツタケ Lactarius vellereus

a. 子実体 ×1/2 b. 嚢状体 ×450
c. 胞子 ×1000 (大谷氏)

Mem. Torr. Bot. Club, 14 : 22. 1908; N. Am. Fl. 9 : 177. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1): 340, pl. 59, B. 1912.

（安田，植．雑．38 : 47. 1924—白井，日．菌．目．ed. 3. 181. 1927—原，日．菌．目．175. 1954）

Lactifluus vellereus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 857. 1891.

Lactarius Listeri SACC. Fl. Ital. Crypt. Hymen. 377. 1915.

子実体は孤生或は群生；傘は径 6—12cm. 或はそれ以上に及び，丸山形にて中窩を有し，のち開張し遂に中央部漏斗形となり縁は下屈す；表面は乾燥，白色或は類白色にて老時各所に灰色或は帯黄色の斑を生ず，無環紋，微細軟絨毛を被むる；肉は初め白色，傷時帯黄色となる；乳汁は白色，空気に触れてクリーム色も速に白色に復る，味甚だ辛し；褶は直状垂生，帯白色にて，のち帯黄色となり，傷時帯褐色となる，疎，寧ろ広幅にて厚く，幾分叉状；茎は短大，3—6×2—4cm. 同幅或は基部稍々狭細，白色或は帯白色，のち帯黄或は帯褐色となる，粉絨状中実；胞子は類球形或は広楕円形，殆ど平滑，沃度液にて僅少の微細なる不完全網状線を認める，7.5—9×6.5—7.5μ；胞子紋は白色；嚢状体は円筒形，鈍頭或は尖頭，70—90×6—8μ；有毒と称せらる。

所在及産地

林地—夏秋

北海道，本州，九州—欧・北米・亜(小亜)

和名 ケシロハツタケ（毛白初茸）〔安田〕

Lactarius subvellereus PECK

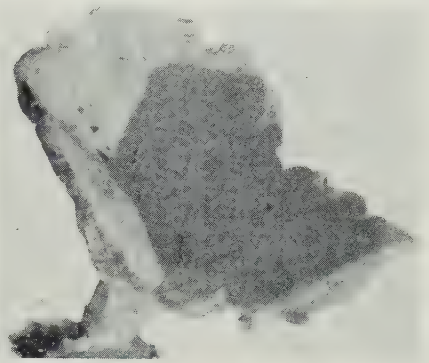
ケシロハツタケモドキ

PECK, Bull. Torr. Bot. Club, 25 : 369. 1898—COKER, Jour. Elisha Mitch. Soc. 34 : 10. 1918—SINGER, Agaricales, 723. 1949.

（今関及土岐，林．試．研．報．67 : 55, f. 4. 1954 今関及本郷，原色日．菌．図鑑，97, f. 257, pl. 45, f. 257. 1957）

Lactaria subvellerea BURLINGH. Mem. Torr. Bot. Club, 14 : 33. 1908; N. Am. Fl. 9 : 177. 1910.

子実体は孤生或は群生；傘は径 4—7cm，或はそれ以上 (15cm) に及び，丸山形，速に中窩を生じ，遂に殆ど漏斗形となる；表面は乾燥，白色，のち黄色を帯び或は黄斑を生ず，乾燥すれば肉桂色に変ず，絨毛に被われ，無環紋，縁は初め及び比較的永く内捲し，遂に開平す；肉は緊緻，薄く，帯褐白色にて変色せず，臭少し；乳汁は白色或は淡クリーム色，乾時黄色となる，味甚だ辛し；褶は直生或は稍々垂生，白色～淡クリーム色，密，狭幅，屢々叉状；茎は 2—3×0.8—1.5cm，同幅或は下方稍々狭細，乾燥，白色，基部褐色を帯び，絨毛を被むる；胞子は



a

第 211 図 ケシロハツタケモドキ
Lactarius subvellereus
a. 子実体 2/3
（大谷氏）

広楕円形或は類球形，殆ど平滑，6.5—7.5×5—6.5μ；胞子紋は白色；嚢状体は無色，紡錘形にて多くは乳頭突起あり，45—88×6.5—10μ。

所在及産地

湿潤林地—夏秋　　本州，九州—北米

和名 ケシロハツタケモドキ（擬毛白初茸）〔今関及土岐〕

（4）Russulares (FR.) FR. (1838)

ヒメチチタケ節

Lactarius rufus (SCOP. ex FR.) FR.

アカチチタケ

FRIES, Epicr. Myc. 347. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 173. 1863; Hymen. Eur. 433. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 208. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2: 203. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 215. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 985 (no. 954). 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1: 200. 1872; Enchir. Fung. 130. 1886—GILLET, Champ. Fr. 225, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 212. 1876; Hattsv. 1 : 192. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 122. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 545. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 442. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 381. 1915—ROLLAND, Bull. Soc. Myc. Fr. 7 : 14, pl. 2, f. 3. 1891; Atl. Champ. 37, pl. 35, f. 71. 1910—MASSEE, Brit. Fung. 3: 25. 1893; Brit. Fungi, 160, pl. 14, f. 7. 1911—PATOUILLARD, Ess. Tax. 153. 1900—W. G. SMITH, Brit.

Basid. 275. 1908—RICKEN, Blätterp. 36, pl. 13, f. 3. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 107. 1918—REA, Brit. Basid. 490. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 8 : pl. 381. 1928—LANGE, Agar. Denm. 7 : 35. 1928; Fl. Agar. Dan. 5 : 43, pl. 176, f. A. 1940—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4 : pl. 336. 1937; Agaricales, 2 : 20. 1952—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 321. 1938—SINGER, Agaricales, 724. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 118, pl. 38, f. 2. 1950—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 7, A. 1956—KÜHNER & RONAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 478. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 162, pl. 18, f. 2. 1957.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 49 : 609. 1935—原, 日. 菌. 目. 174. 1954)

Agaricus rufus SCOP. 2 : 451. 1772—FRIES Syst. Myc. 1 : 71. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 546. 1844.

Lactaria rufa SCHROET. Pilze Schles. 1 : 539. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 215, f. 110, A. 1900—BURLINGHAM, Mem. Torr. Bot. Club, 14 : 75. 1908; N. Am. Fl. 9 : 192. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2 (1) : 335, pl. 57. 1912.

Lactifluus rufus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 857. 1891.

Hypophyllum rufum EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5 : 408. 1909.

子実体は孤生或は群生；傘は径 3—10cm, 丸山形, のち圧低され遂に盃形となる，大部分常に中丘を存す；表面は乾燥，赤栗褐色〜小豆色，褪色せず，無環紋，微細なる綿架状絹糸あり，早く無毛となり，光沢あり；縁は初め内捲し白軟毛を有し，のち開平し無毛となる；肉は淡色或は桃色を帯び，脆く，臭なし；乳汁は白色，空気に触れて変色せず；味甚だ辛し；褶は直状垂生，淡肉桂色或は帯赭色，のち淡桃色或は朱色となる，密生，かなり狭幅，時に叉状をなし，粉状；茎は 3—10×0. 6—1cm, 殆ど同幅或は下方狭細，傘面とほぼ同色或は淡色，乾燥，無毛或は時に粉状にて基部に白軟毛あり，中実，充塞，時に中空；胞子は類球形〜広楕円形，有刺，沃度液にて僅か肋脈あり，8—10×7—8μ；胞子紋は白色或は僅かクリーム色；嚢状体は無色，紡錘形，尖頭，50—80×7—10μ。

所在及産地

林地—夏秋　　北海道，本州—欧・北米

和名 アカチチタケ（赤乳茸）〔今井〕

Lactarius helvus (FR.) FR.

アカチチタケモドキ

FRIES, Epicr. myc. 347. 1838; Myc. Monogr. Hymen. Suec. 2 : 174. 1863; Hymen. Eur. 433. 1874—QUÉLET, Champ. Jura. Vosg. Suppl. 3 : 440. 1875; Enchir. Fung 130. 1886—KARSTEN, Myc. Fenn. 213. 1876; Hattsv. 1 : 192. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 122. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 545. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 ; 443. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 395. 1915—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 314. 1889; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 994 (no. 955). 1890—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 25. 1893; Brit. Fungi, 160. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 275. 1908—RICKEN, Blätterp. 35. pl. 13, f. 2. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 106. 1918—REA, Brit. Basid. 490. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 8 ; 382. 1928—LANGE, Agar. Denm. 7 : 28. 1928; Fl. Agar. Dan. 5 : 43, pl. 175, f. F. 1940—PILÁT, Bull. Soc. Myc. Fr. 51 : 389. 1935—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4 : pl. 334. 1937; Agaricales, 2 : 21. 1952—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido. Imp. Univ. 43 : 322. 1938—SINGER, Agaricales, 724. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 477. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 157, f. 147. 1957.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 49 : 609. 1935—原, 日. 菌. 目. 174. 1954)

Agaricus helvus FR. Syst. Myc. 1 : 72. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 546. 1844.

Lactaria helva SCHROET. Pilze Schles. 1 : 539. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam, 1, 1** : 215. 1900—BURLINGHAM, Mem. Torr. Bot. Club, 14 : 74. 1908; N. Am. Fl 9 : 191. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pize, 2(1) : 337. pl. 58D. 1912.

Lactifluus helvus O. KUNTZE, Rev. Gen. pl. 2 : 857. 1891.

子実体は孤生或は群生；傘は径 4—10 cm, 或はそれ以上に及び，丸山形，のち開張扁平となり更に盃形となる；表面は乾燥，無環紋，微細の短毛，細鱗片或は粒状鱗片に被われ，灰蜜黄色，灰肉赭色，茶褐色等にて老時焦狐色となる，中央暗色；縁は初め内捲し，のち開平し，往々波状をなす；肉は初め帯白色，のち帯黄色，味殆ど温和，臭は屢々クマーリン臭；乳汁は漿液状，白色にて変色せず，味温和或は稍々辛し；褶は垂生，白色，のち黄赭色となる，甚だ密生，薄く，狭福，屢々叉状をなす；茎は 3—8×1—1. 5 cm, 同幅或は上方僅か狭細，傘面と同色或は淡色，粉状，基部に軟毛あり，充塞，のち中空；胞子は類球形〜広楕円形，有刺，沃度液にて僅か線を認めらる，7—9×5. 5—6. 5μ；胞子紋は淡クリー

ム色；嚢状体は褶稜に甚だ多生，紡錘形，円頭或は稍々鋭頭，40—70×9—12μ。

所在及産地

針葉樹林地—秋　北海道—欧．北米．亜(西比)

和名　アカチチタケモドキ（擬赤乳茸）〔今井〕

Lactarius gracilis HONGO

アシボソチチタケ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 32 : 144, f. g-h. 1957.

子実体は群生或は散生；傘は径 1—2 (2.5) cm，広丸山形，のち扁平圧低，鋭乳頭あり，乾燥，環紋なく，微細粒絨状，中部褐色，周縁は帯褐色～類灰褐色，縁は初め内屈，有髭；肉は薄く，帯褐色，無臭；乳汁は白色，不変化，味なし；褶は直状垂生，密或はやや疎，屢々叉状，淡肉色，傷時汚色となる，幅 2mm；茎は 2—5(7)×0.2—0.3 (0.6) cm，同幅或は上部に向つて狭細，屈曲，中空，赤褐色，廓大鏡下にて白色粉あり，基部粗豪；胞子紋はクリーム色；胞子は類球形，1 油球あり，有疣及び網状，7—8×6—7μ(刻紋を除く)，糊性；担子柄は 4 胞子，36—46×7.5—11μ；稜嚢体は散生，25—28×6.5—9.5μ，薄膜，無色，棍棒形。

所在及産地

シイ林中蘚間及落葉上—春夏　本州

和名　アシボソチチタケ（足細乳茸）〔本郷〕

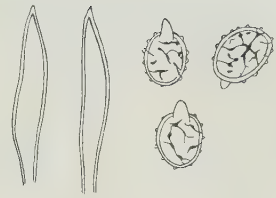
Lactarius griseus PECK

ハイイロチチタケ

PECK, Rep. N. Y. St. Cab. 23 : 119. 1872—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 444. 1887—KAUFFMAN, Agar. Mich. 108. 1918—KÜHNER, Bull. Soc. Myc. Fr. 44 : pl. 27, f. 6—10. 1928—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido. Imp. Univ. 43 : 323, pl. 5, f. 5. 1938—SINGER, Agaricales, 724. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 22. 1952.



a



b　c

第 212 図　ハイイロチチタケ Lactarius griseus
a．子実体 ×1　b．嚢状体 ×450
c．胞子 ×1000（大谷氏）

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 49 : 609. 1935—原，日．菌．目．174. 1954)

Lactifluus griseus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 857. 1891.

Lactaria grisea P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 216. 1900—BURLINGHAM, Mem. Torr. Bot. Club, 14 : 80, f. 14. 1908; N. Am. Fl. 9 : 192. 1910.

子実体は群生或は孤生；傘は 1—5cm，丸山形，のち扁平となり，遂に中央圧低され，小中丘を有す；表面は乾燥，菫灰色～淡汚桃色，無環紋，微細の軟毛或は絨毛を有す；縁は内捲し，のち開平，全縁なり；肉は帯白色，薄く，変色せず；乳汁は白色，変色せず，味辛く，臭は僅かに存するもクマーリン臭ならず；褶は垂生，帯白色或は藁色，のち赭色となる，粉状，傘厚より広幅；茎は 1.5—5×0.3—0.7 cm，殆ど同幅，傘面とほぼ同色或は淡色，無毛，粉状，不平坦，充塞，のち中空；胞子は広楕円形，有刺，7.5—10×5—7.5μ；胞子紋は白色。

所在及産地

林中蘚間地上—秋　北海道，本州—欧．北米

和名　ハイイロチチタケ（灰色乳茸）〔今井〕

Lactarius sakamotoi IMAI

ヒメアイイロチチタケ

IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 49 : 609. 1935; Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 323. 1938. (原，日．菌．目．174. 1954)

子実体は群生或は孤生；傘は径 2—3 cm，中丘を有し，のち漏斗形となる；表面は乾燥，微細の繊維状鱗片を密布す，初め暗黒灰色，灰黒色或は藍色又はオリーブ黒色，のち僅か淡色となり，中央濃暗灰色にて周辺淡色となる；縁は内屈す；肉は淡色，薄く，変色せず；乳汁は白色，変色せず，味辛し；褶は垂生，淡色，のち淡狐色或は淡橙鮭肉色にて粉状，茎に近く連結し或は叉状をなす，密生；茎は 2—4.5×0.3—0.4 cm，同幅或は上方

僅か狭細，菫灰色～暗菫灰色，無毛，中空；胞子は広楕円形～類球形，有刺，6—8×5—7μ；胞子紋は赭色。

所 在 及 産 地

林地—秋 北海道

和 名 ヒメアイイロチチタケ（姫藍色乳茸）

〔今井〕

Lactarius subdulcis (PERS. ex FR.) S. F. GRAY

ヒメチチタケ

S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 625. 1821 –FRIES, Epicr. Myc. 345. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 180. 1863; Hymen. Eur. 437. 1874 —BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 208. 1860—KICKX, Fl. Crypt Flandr. 2 : 203. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi. 1 : 217. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 1002 (no. 966). 1890 (?)—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 202, pl. 11, f. 3, 1872(?); Enchir. Fung. 131. 1886—GILLET, Champ. Fr. 224, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 216. 1876; Hattsv. 1 : 198. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 124. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 541. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 450. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 402. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 33. 1893; Brit. Fungi, 162. 1911—PATOULLARD, Ess. Tax. 153. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 278. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 38, pl. 35, f. 73. 1910—RICKEN, Blätterp. 39. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 115. 1918—REA, Brit. Basid. 494. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 8 : pl. 393. 1928—LANGE, Agar. Denm. 7 : 37. 1928; Fl. Agar. Dan. 5 : 46, pl. 170, f. D. 1940—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4 : pl. 337. 1937; Agaricales, 2 : 26. 1952—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 328. 1938—SINGER, Agaricales, 725. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 119, pl. 41, f. 3. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 480. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 162. 1957.

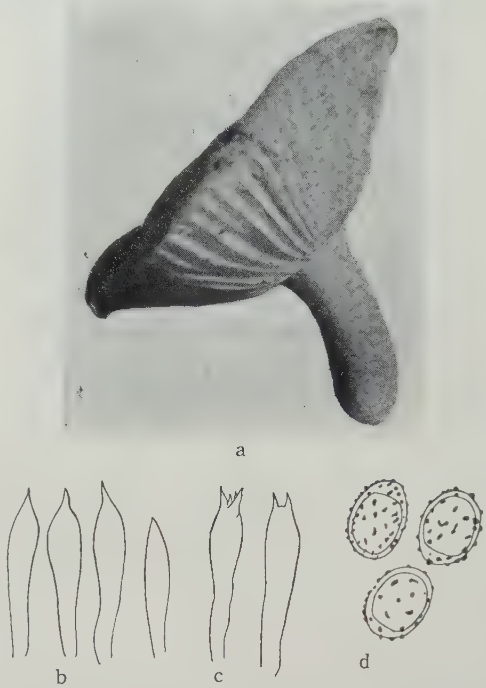
(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 49 : 610. 1935—今関，原色きのこ，pl. 47(右). 1942; 及土岐，林．試．研．報．67 : 54, pl. 6, f. 3. 1954)

Agaricus subdulcis PERS. Syn. Meth. Fung. 433. 1801—DECANDOLLE, Fl. Fr. 2 : 144. 1815—FRIES, Syst. Myc. 1 : 70. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 547. 1844—BARLA, Champ. Nice, 37, pl. 20, f. 4-10. 1859.

Lactaria subdulcis SCHROET. Pilze Schles. 1 : 535. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl. -fam. 1, 1** : 214. 1900—BURLINGHAM, Mem. Torr. Bot. Club, 14 : 100. 1908; N. Am. Fl. 9 : 198. 1910—MURRILL, Mycologia, 3 : 168, pl. 49, f. 5. 1911—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 334, pl. 58B. 1912.

Lactarius sp. (松浦，茸類辞典，86, f. 99. 1933)

Lactifluus subdulcis (ut PERS.) O. KUNTZE, Rev. Gen. pl. 2 : 857. 1891.



第 213 図 ヒメチチタケ Lactarius subdulcis
a. 子実体 ×1 b. 嚢状体 c. 担子柄 ×550
d. 胞子 ×1000（大谷氏）

子実体は群生或は孤生；傘は径 1—6cm，丸山形，のち開張圧低され，遂に盃形となる，時に僅か中丘あり；表面は乾燥，黄褐色～黄褐赤色，褪色せず，無環紋，無毛，平滑或は屢々中央に僅か皺あり；縁は初め内捲し，のち開平，薄し；肉は緊緻，脆く，帯白色，灰蜜黄色或は黄褐色を帯び，無臭；乳汁は白色，変色せず，味温和，或は徐々に辛～苦味となる；褶は直状垂生，弓状，帯白色或は灰蜜黄色，のち褐色を増し，粉状となる，密生，狭幅，時に叉状；茎は 1—7×0.2—1cm，同幅，傘面と同色或は淡色，無毛，時に基部に軟毛あり，乾燥，充塞，のち中空；胞子は広楕円形～類球形，有刺，沃度液にて連結線を認めず，7—10×6.5—7.5μ；胞子紋は淡黄肉色；嚢状体は無色，僅か多く，紡錘形，尖頭，30—60×7—10μ；可食。

所 在 及 産 地

林地—夏秋

北海道，本州，九州—欧．北米．亜（支．西比）

和名 ヒメチチタケ（姫乳茸）〔松浦〕

Lactarius camphoratus (BULL. ex FR.) FR.
ニセヒメチチタケ

FRIES, Epicr. Myc. 346. 1838; Hymen. Eur. 437. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 208. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 217. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 1013, f. a (no. 967). 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 202. 1872; Enchir. Fung. 131. 1886—GILLET, Champ. Fr. 221. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 198. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 124. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 541. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 451. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 400. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 34. 1893; Brit. Fungi, 162. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 278. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 38, pl. 35, f. 74. 1910—RICKEN, Blätterp. 39, pl. 14, f. 7. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 117, pl. 13. 1918—REA, Brit. Basid. 495. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 74. 1927—RRESADOLA, Icon. Myc. 8 : pl. 394. 1928—LANGE, Agar. Denm. 7 : 40. 1928; Fl. Agar. Dan. 5 : 48, pl. 175, f. D. 1940—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4 : pl. 341, f. 1. 1937; Agaricales, 2 : 28. 1952—SINGER, Agaricales, 724. 1921—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 120, pl. 40, f. 2. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 482. 1935—HEIM, Champ. Eur. 2 : 158. 1957.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，96, f. 253, pl. 45, f. 253. 1957）

Agaricus camphoratus BULL. Herb. Fr. pl. 567, f. 1. 1791—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 547, 1844.

Agaricus subdulcis var. *camphoratus* BARLA, Champ. Nice, 38, pl. 20, f. 11-13. 1859.

Lactaria camphorata SCHROET. Pilze Schles. 1: 535. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 214. 1900—BURLINGHAM, N. Am. Fl. 9 : 198. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 334. 1912.

Lactifluus camphoratus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 856. 1891.

Lactarius subumbonatus (non LINDGREN) HONGO, Jour. Jap. Bot. 27 : 369, f. 1(4). 1952.

子実体は散生或は群生；傘は径 1.5—4cm，丸山形，のち扁平となり，遂に中央圧低され，屢々小なる中丘あり；表面は湿潤，橙褐色，中央に向つて暗肉桂色となる，無環紋，皺あり，乾時幾分粉状；縁は初め内捲し，のち開平，屢々波状をなす，湿時僅かに透明線条あり；肉は稍々同色，臭よし；乳汁は多く，白色，変色せず，味温和；褶は直状垂生，橙褐色（帯赤栗褐色），密生，幅 3—5mm，屢々茎に近く叉状をなす，稜は同質；茎は 1.5—3.5×0.3—0.6cm，同幅或は下方稍々狭細，傘面と稍々同色無毛，粉状，基部屢々硬尖糙澁なり；胞子は球形～類球形，有点，沃度液にて微細なる網目を認めらる，7—8×6—7μ：胞子紋は白色；褶側嚢体は 75×11μ。

所在及産地

林地—春秋　　本州—欧．北米

和名 ニセヒメチチタケ（贋姫乳茸）
ヒメチチタケモドキ（擬姫乳茸）〔本郷〕
〔重複名〕

Lactarius tabidus FR.
ヒメチチタケモドキ

FRIES, Epicr. Myc. 346. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 182. 1863; Hymen. Eur. 438. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 203. 1872; Suppl. 5 : 323. xxxi. 1877—GILLET, Champ. Fr. 223. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 198. 1879—WINTER, Pilze, 1 : 541. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 452. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 401. 1915—MASSEE, Brit. Fungi, 154. 1911—REA, Brit. Basid. 496. 1922—LANGE, Agar. Denm. 7 : 39. 1928; Fl. Agar. Dan. 5:47, pl. 176, f. B-B'. 1940—KONRAD & MAUBLANC Icon. Sel. Fung. 4 : pl. 339, f. 2. 1937; Agaricales, 2 : 25. 1952—SINGER, Agaricales, 727. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 482. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 154. 1957.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo. 53 : 399. 1939—原，日．菌．目．175. 1954)

Agaricus subdulcis f. *d. e.* FR. Syst. Myc. 1 : 70. 1821.

Agaricus deliciosi-folius var. *A, B, D* SECR. Mycogr. Suisse. 1 : 448. 1833.

Lactarius subdulcis var. *tabidus* QUÉL Enchir. Fung. 131. 1886.

Lactarius mitissimus var. *tabidus* QUÉL. Fl. Myc. 360. 1888.

Lactifluus tabidus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 857. 1891.

Lactaria tabida P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat Pfl.-fam. 1, 1** : 214. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 333. 1912.

Lactaria isabellina BURLINGH. Bull. Torr. Bot. Club, 34 : 88. 1907; Mem. Torr. Bot. Club, 14 : 103, f. 15. 1908; N. Am. Fl. 9 : 199. 1910.

Lactarius isabellinus SACC. Syll. Fung. 21 : 86. 1912.

子実体は群生或は孤生；傘は径 1—5cm，丸山形，のち開張扁平となり，更に圧低され，屢々中丘を有す；表面は乾燥，淡煉瓦色，のち淡色，中央部僅か濃色，のち淡色となる，無毛，無光沢，無環紋，老時皺を生ず；縁は薄く，内屈し，無毛，淡色，透明線条あり，のち波状をなす；肉は薄く，同色，無臭；

乳汁は乏しく，白色にて徐々に黄変し，味温和，のち僅か辛し；褶は直状垂生，弓形，傘面より淡色，のち粉状，かなり密生，薄くして柔軟，僅か広幅，時に茎に近く叉状をなす；茎は 2—4×0.4cm，同幅或は上方に狭細，頂部淡色，中部同色，基部濃色，無毛，僅かに皺あり，基部に白絨軟毛を有す，中実，のち充塞，遅く中空となる；胞子は球形～楕円形，有刺，沃度液にて網目を認めず，7—9×5.5—7μ；胞子紋は淡クリーム色；囊状体は稀生，無色，紡錘形，鋭頭，30—60×6—10μ：可食。

所在及産地

林地—夏秋　　北海道—欧．北米

和名　ヒメチチタケモドキ（擬姫乳茸）〔今井〕

Lactarius quietus (FR.) FR.

チョウジチチタケ

FRIES, Epicr. Myc. 343. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 169. 1863; Hymen. Eur. 431. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 207. 1860—COOKE, Handb Brit. Fungi, 1 : 214. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 983 (no. 949). 1890—GILLET, Champ. Fr. 220. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 189. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 121. 1889—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 9 : 168. 1879; Enchir. Fung. 129. 1886—WINTER, Pilze, 1 : 547. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 440. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 392. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 21. 1893; Brit. Fungi, 159. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 274. 1908—RICKEN, Blätterp. 38, pl. 14, f. 2. 1915—REA, Brit. Basid. 488. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 8 : pl. 376. 1928(?)—LANGE, Agar. Denm. 7 : 37. 1928; Fl. Agar. Dan. 5 : 46, pl. 176, f. E. 1940—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 319. 1938—SINGER, Agaricales, 725. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 119, pl. 41, f. 1. 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 28. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 481. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 158. 1957.

（原，日．菌．目．174．1954）

Agaricus quietus FR. Syst. Myc. 1 : 69. 1821.

Lactaria quieta SCHROET. Pilze Schles. 1 : 537. 1889—BURLINGHAM, Mem. Torr. Bot. Club, 14 : 63. 1908; N. Am. Fl. 9 : 188. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 339, pl. 60. 1912.

子実体は群生或は孤生；傘は径 3—7cm，丸山形，のち中部圧低さる；表面は初め僅か粘性なるも速に乾燥す，肉桂色或は煉瓦褐色，中央暗色，屢々不明瞭の環紋あり，無毛，乾燥してのち殆ど絹糸状となる；縁は初め内捲し，のち開平し反転す；肉は白色，のち帯褐色となる，臭なし；乳汁は白色，変色せず，味温和；褶は直状垂生，白色にて早く赤褐色となる，殆ど密，茎に近く叉状をなす；茎は 3—7×0.4—1cm，時に更に太く，同幅或は下方狭細，傘面と殆ど同色，のち銹色或は暗色となる，無毛，或は基部に同色の軟毛あり，充塞，のち中空；胞子は類球形，有刺，沃度液にて短尾線を認めらる，8—10×8μ；胞子紋は白色，囊状体は無色，紡錘形，鈍頭，55—70×6—8μ。

所在及産地

林地—夏秋　　北海道，本州—欧．北米

和名　チョウジチチタケ（丁字乳茸）〔今井〕

Lactarius avellaneus IMAI

コウイロチチタケ

IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 49 : 608. 1935; Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 318, 1938.

（原，日．菌．目．173，1954）

子実体は孤生或は稍々群生；傘は径 2—4cm，丸山形，のち扁平となり，遂に中部僅か圧低さる，往々小丘を有す；表面は湿時僅か粘性，僅かに光沢あり，中部淡栗褐色，縁辺淡色，無毛，平滑，環紋なし；肉は白色或は帯灰色，寧ろ厚し；乳汁は白色，乾けば黄白色塊となる，辛味，無臭；褶は直状垂生，白色，のち汚色，乾時粉状，密生；茎は 2—4×0.5—0.7cm，同幅或は基部稍々太く，帯黄或は帯褐色，不平坦，無毛なるも粉状に見ゆ，中空；胞子は広楕円形或は類球形，有刺，8—10×7.5—8μ；胞子紋は白色。

所在及産地

林地—秋　　北海道

和名　コウイロチチタケ（香色乳茸）〔今井〕

Lactarius thejogalus (BULL. ex FR.) S. F. GRAY

キチチタケ

S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 624. 1821—FRIES, Epicr. Myc. 342. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 170. 1863; Hymen. Eur. 432. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 206. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 202. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 214. 1871—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 119. 1872; Enchir. Fung. 129. 1886(?)—GILLET, Champ. Fr. 208, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 190. 1879—WINTER, Pilze, 1 : 547. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 441. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 390. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 22. 1893; Brit. Fungi, 160. 1911—REA, Trans. Brit. Myc. Soc. 1 : 117, pl. 5. 1898-9; Brit. Basid. 489. 1922—W. G. SMITH, Brit. Basid. 275. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 34, pl. 30, f. 6. 1910 (?)—RICKEN, Blätterp. 36, pl. 13, f. 5. 1915(?)—KAUFFMAN, Agar. Mich. 97. 1918—BRESADOLA, Icon. Myc. 8 : pl. 378. 1928(?)—KONRAD, Bull. Soc.

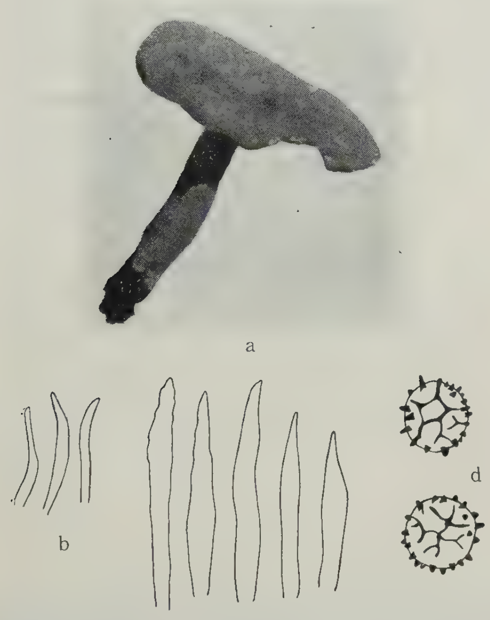
Myc. Fr. 51 : 176. 1935; & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4 : pl. 340. 1937; Agaricales, 2 : 24. 1952—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 320. 1938—SINGER, Agaricales, 725. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 121, pl. 37, f. 2. 1950—HEIM, Champ. Eur. 2 : 155. 1957.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 49 : 608. 1935—今関，原色きのこ，Pl. 45 (左)，1942—原，日．菌．目．195. 1954—川村，日．菌．図鑑，3 : 347, f. 334. 1954)

Agaricus thejogalus BULL. Champ. Fr. pl. 567, f. 2. 1791—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 431. 1801—DECANDOLLE, Fl. Fr. 2 : 142. 1815—FRIES, Syst. Myc. 1 : 71. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 549. 1844—BARLA, Champ. Nice, 39, pl. 20, f. 14-6. 1859.

Lactaria theiogala SCHROET. Pilze Schles. 1 : 541. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl. -fam. 1, 1** : 216. 1900—BURLINGHAM, Mem. Torr. Bot. Club, 14 : 70, f. 12. 1908; N. Am. Fl. 9 : 187. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilz, 2(1) : 339. 1912.

Lactifluus thejogalus (ut PERS.) O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 857. 1891.



第214図　キチチタケ　Lactarius thejogalus
a. 子実体 ×1/2　b. 稜嚢体　c. 嚢状体 ×500　d. 胞子 ×1000　(大谷氏)

子実体は群生或は孤生；傘は径 2—8cm，丸山形，のち開張し，中央圧低され或は類漏斗形となる；表面は帯肉灰黄色～淡渋赤色或は黄褐色，有環紋～無環紋，無毛，湿時粘性，乾時滑沢あり，平坦或は皺を有す；縁は初め内捲し，速に開平す，縁端粉状～甚だ微細の粉状綿毛あり；肉は白色にて乳汁によりて黄色となる，適度に厚く，緻密；乳汁は白色にて硫黄色に変色す，苦くして，のち辛し；褶は直状類垂生，密生，寧ろ狭幅，帯白色～帯黄色，老時或は傷時赤褐色となる，或物は茎に近く叉状となる；茎は 3—6×0.5—1.2cm，ほぼ同幅，傘面と殆ど同色或は淡色，時に微かに斑点あり，表面波状，無毛なるも屢々基部は僅か軟毛あり，充塞，のち中空；胞子は広楕円形，有刺，8—10×7—8μ；胞子紋は白色。

所在及産地

林地—夏秋　北海道，本州，九州—欧．北米

和名　キチチタケ (黄乳茸)〔今井〕

〔因記〕本菌の同定につきては欧州学者間に於て論議あるところにて殊にキチチタケモドキ(*L. chrysorheus*)との異同につきて然りとす，例えば KONRAD，MAUBLANC 両氏はその著 (1937) に於て次の如く迷べたり，即ち "QUÉLET 氏及びその門弟，のち BRESADOLA 氏等の混合せる *L. chrysorheus* とは明かに異り，Subdulces 群に属する良好の種類なり，本菌は彼れに比して傘は僅か肉質，少し湿潤性強く，無環紋にて，茎は細く，濃色，且つ乳汁は少く，淡硫黄色に徐々に変色するものなり，この乳汁黄変は色の淡色及び乳汁の少量なるために見遁さる" と記し，これに従えば前記文献中の多数のものを削除せざるべからず。

本邦学者の記事また必ずしも一様ならず，又キチチタケモドキと同一種と認めて異名となせるものもあり，ここには暫く今井氏の記事によりて記し，尚将来の研究をまつ。

(5) Piperites FR. (1838)

カラハツタケ節

Lactarius torminosus (SCHAEFF. ex FR.) S. F. GRAY

カラハツタケ

S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. pl. 1 : 623. 1821—FRIES, Epicr. Myc. 334. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 153. 1863; Hymen. Eur. 422. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 203. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 207. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 972 (no. 923). 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 194. 1872; Enchir. Fung. 127. 1886—GILLET, Champ. Fr. 211, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 206. 1876; Hattsv. 1 : 179. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 117. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 556. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5: 424. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 383. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 5. 1893; Brit. Fungi, 154. 1911.—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 119, f. 121. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 268. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 34, pl. 1, f. 63. 1910—RICKEN, Blätterp. 27, pl. 9, f. 3. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 91.

1918—REA, Brit. Basid. 479. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 82, pl. 33. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 8 : 357. 1928—LANGE, Agar. Denm. 7 : 27. 1928; Fl. Agar. Dan. 5 : 35, pl. 169, f. A. 1940—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 308. 1938—SINGER, Agaricales, 726. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 113, pl. 37, f. 1(?). 1950—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 10. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 474. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 2. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2 : 164. f. 153, A, pl. 17, f. 2. 1957.

(川村, 植. 雑. 23 : 492. 1909; 25 : 113, pl. 3. 1911; 日. 菌. 図説, n. 31. 1929; 食用菌及有毒菌, f. 24 (p. 21). 1931; 日. 菌. 図鑑, 3 : 343, f. 332, 1954—白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 309. 1917; ed. 3. 181. 1927—IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 49 : 603. 1935—牧野, 日. 植. 図鑑, 1025, f. 3072. 1940—広江, 応用菌蕈学, 789. 1941—今関, 原色きのこ, pl. 45 (右). 1942—原, 日. 菌. 目. 175. 1954)

Agaricus torminosus SCHAEFF. Fung. Bavar. 4 : Ind. 7, pl. 12. 1774—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, pl. 103. 1797—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 430. 1801—FRIES, Syst. Myc. 1 : 63. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 553. 1844—BARLA, Champ, Nice, 33, pl. 18, f. 7-10. 1859.

Lactaria torminosa SCHROET. Pilze Schles. 1 : 539. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl. -fam. 1, 1** : 217, f. 110, c. 1900—BURLINGHAM, Mem. Torr. Bot. Club, 14 : 30. 1908; N. Am, Fl, 9 : 178. 1910—MIGULA. Krypt. Fl. 3, Pilze, 2 (1) : 346, pl. 56, f. 3-4. 1912—MURRILL, Mycologia, 8 : 193, pl. 187, f. 5. 1916.

Lactifluus torminosus (ut PERS.) O. KUNTZE. Rev. Gen. Pl. 2 : 857. 1891.

子実体は群生或は孤生; 傘は径 5—13.5cm, 丸山形, 中窩を有し, 遂に類漏斗形となるも縁は下屈す; 表面は幼時及湿時粘性, 鈍藁色にて帯桃肉色を帯び, 或は肉色, 多少濃色の環紋を有し, 時に淡桃或は殆ど白色にて環紋を欠く, 中心は無毛なるも他は軟毛を有し, 縁辺に永存的の長き著しき房毛を叢生す; 縁は初め内捲し, 永く下屈す; 肉は寧ろ軟くして厚く, 白色或は肉色を帯ぶ; 乳汁は白色, 空気に触れて変色せず, 味甚だ辛し; 褶は垂生, 白〜クリーム色, 遂に肉色或は帯赤黄色となる, 密, 狭幅, 薄く, 茎に近く叉状をなす; 茎は 4—8×1—2.5cm. 同幅或は下方狭細, 傘面より淡色, 時に微に斑点あり, 無毛或は粉状; 中実にて速に中空となる; 胞子は広楕円形, 有刺, 沃度液にて網目線を認めらる, 8—10×6—8μ; 胞子紋は白色; 嚢状体は無色, 紡錘形, 鈍頭, 60—65×8—10μ; 有毒ならずと称せらる。

所在及産地

林地—夏秋

北海道, 本州—欧. 北米. 亜(西比)

和名 カラハツタケ (辛初茸) 〔川村〕

Lactarius insulsus (FR.) FR.

カラハツタケモドキ

FRIES, Epicr. Myc. 336. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 157. 1863; Hymen. Eur. 424. 1874—BERKELEY, Outl, Brit. Fung. 204, pl. 13, f. 2. 1860—KICKX, Fl. Crpyt. Flandr. 2 : 199. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 208. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 975(no. 929). 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 195. 1872—GILLET, Champ. Fr, 213, c. ic. 1874—KARSTEN. Hattsv. 1 : 181. 1879—WINTER, Pilze, 1 : 554. 1844—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 427. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 389. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 9. 1893; Brit. Fungi, 155. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 270. 1908—KAUFFMAN, Agar. Mich. 98, pl. 10. 1918—REA, Brit. Basid. 481. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 8 : pl. 362. 1928—LANGE, Agar. Denm. 7 : 30. 1928—Fl. Agar. Dan. 5 : 36, pl. 173, f. F-F′. 1940—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 311. 1938—SINGER, Agaricales, 726. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 15. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 473. 1953—HEIM, Champ. Fur. 2 : 169, f. 148, B. 1957.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo. 49 : 604. 1935—原, 日. 菌. 目. 174. 1954)

Agaricus insulsus FR. Syst. Myc. 1 : 68. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 552. 1844.

Lactifluus insultus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 857. 1891.

Lactaria insulsa P. HENN. in EEGLER & PRANTL, Nat Pfl. -fam. 1, 1**: 216. 1900—BURLINGHAM, Mem. Torr. Bot. Club, 14 : 51. 1908; N. Am. Fl. 9 : 180. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 344. 1912.

Groeocybe insulsum EARLE, Bull. N. Y. Bot. Gard. 5 : 409. 1909.

子実体は群生或は孤生; 傘は径 4.5—12cm, 丸山形にて中窩を有し, のち中央圧低され, 遂に漏斗形となる; 表面は湿時粘性, 帯黄煉瓦色, 濃き橙色の環紋を有し, のち僅か淡色となる, 無毛; 縁は初め強く内屈し, のち開平上向す, 初め白軟毛あるも遂に殆ど消失す, のち屢々浅裂す; 肉は白色, 変色せず, 臭なく, 味甚だ辛し; 乳汁は白色, 変色せず, 味辛し; 褶は垂生, 白色, のち淡黄色, 甚だ疎生, 寧ろ厚く, 中部に於て幅 1 cm. 茎に近く屢々叉状をなし, 脆し; 茎は 2—5×1.5—2.5cm, 下方狭細,

淡色，時に濃色の斑点あり，無毛或は白粉状，充塞，のち中空；胞子は類球形，有刺，7.5—9×6—7.5μ；胞子紋は黄色；嚢状体なし。

所在及産地

林地一夏秋　　北海道一欧．北米．亜(支)

和名　カラハツタケモドキ（擬辛初茸）〔今井〕

Lactarius zonarius (BULL.) Fr.

キカラハツタケモドキ

FRIES, Epicr. Myc. 336. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 158. 1863; Hymen. Eur. 425. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 204. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 209. 1871—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 196. 1872; Enchir. Fung. 127. 1886—GILLET, Champ. Fr. 214. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 182. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 118. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 553. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 428. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 388. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 10. 1893; Brit. Fungi, 155. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 270. 1908—REA, Brit. Basid. 481. 1922—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4 : pl. 329. 1926; Agaricales, 2 : 15. 1952—BRESADOLA, Icon. Myc. 8 : pl. 363. 1928—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 115, pl. 39, f. 4. 1950—KÜHNER & RRMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 474. 1953—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 3. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2 : 159, f. 148, A. 1957.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 49 : 605. 1935—原，日．菌．目．175. 1954)

Agaricus zonarius BULL. Champ. Fr. pl. 104. 1791—DE CANDOLLE, Fl. Fr. 2 : 141. 1815.

Agaricus flexuosus PERS. Syn. Meth. Fung. 430. 1801—FRIES, Syst, Myc. 1 : 74. 1821 (var. *b*)—BARLA, Champ. Nice, 41, pl. 21, f. 8-12. 1859.

Lactaria zonaria SCHROET. Pilze Schles. 1:538. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl. -fam, 1, 1** : 216. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1): 334. 1912.

Lactifluus zonarius O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2: 857. 1891.

子実体は群生；傘は径 5—10cm，丸山形にて中窩



c



a　　b

第215図　キカラハツタケモドキ
Lactarius zonarius
a. 子実体表面　b. 同裏面 ×1/2　c. 胞子 ×1000（大谷氏）

を有し，遂に漏斗形となる；表面は湿時僅か粘性，淡卵黄色，淡肉桂色，狭き交互環紋あり，無毛，縁は内屈して白粉状軟毛あり；肉は帯白色，のち僅か黄色を帯ぶ；乳汁は白色，不変色なるも，傷つける褶を或時間後に僅か帯褐色に染む，味甚だ辛し，多量；褶は垂生，初め淡汚桃色，のち僅か暗色となる，甚だ疎，寧ろ厚く，幅約 5—6mm，殆ど叉状ならず；茎は 3.5—5×1.5—2cm，同幅，無毛，上部白色，下部傘面より淡色，中実；胞子は球形或は球類形，有刺或はやや網状，8—10×7.5—10μ；胞子紋は帯黄色。

所在及産地

林地一秋　　北海道一欧．亜(小亜)

和名　キカラハツタケモドキ（擬黄辛初茸）〔今井〕

〔**因記**〕本菌とカラハツタケモドキとは著者により混同され，或は同一種の変種なりと称せらる。

Lactarius subzonarius HONGO

ニオイワチチタケ

HONGO, Jour. Jap. Bot. 32 : 212, f. 3, A-C. 1957.

子実体は群生；傘は径 2.5—4cm，圧低され，遂に盃状となる，非粘性，淡肉色及び肉桂色の環紋を有す；肉は淡色，僅か厚く，臭甚だ強し（カレー粉～トウキ（当帰）様）；乳汁は帯白色，水様，不変化，味なし；褶は直状垂生或は垂生，甚だ疎，時に叉状，淡肉色，接触により僅か褐色となり，薄し (2—2.5mm)；茎は 2.5—3×0.5—0.7cm，殆ど同幅，紅褐色，白色霜粉あり，粗渋，時に圧辺，中空，基部暗褐粗渋；胞子紋はクリーム色；胞子は類球形，7—8×6—7μ（刻紋を除く），網状，糊性；担子柄は 4 胞子，37—43×11—12μ；稜嚢体は群生，25—40×4.5—5μ，類円筒形，屢々上部に縊れあり，先端は類鋭或は鈍頭，無色，むしろ薄膜。

所在及産地

モミ樹下蘚間一夏秋　　本州

和名　ニオイワチチタケ（香環乳茸）〔本郷〕

Lactarius hysginus (FR.) FR.

ヌメリアカチチタケ

FRIES, Epicr. Myc. 337. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 160. 1863; Hymen. Eur. 426. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 204. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 209. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 989 (no. 932). 1890—GILLET, Champ. Fr. 214. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 208. 1876; Hattsv. 1 : 183. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 119. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 553. 1844—QUÉLET, Enchir. Fung. 127. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 430. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 389. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 11. 1893; Brit. Fungi, 156. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 270. 1908—RICKEN, Blätterp. 33, pl. 12, f. 4. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 100. 1918—REA, Brit. Basid. 482. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 78, pl. 31. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 8 : pl. 365. 1928—LANGE, Fl. Agar. Dan. 5 : 39, pl. 175, f. B. 1940—SINGER, Agaricales, 726. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2: 17. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 477. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 ; 166. 1957.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo. 55 : 518. 1941)

Agaricus hysginus FR. Syst. Myc. 1 : 67. 1821.

Lactifluus hysginus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 857. 1891.

Lactaria hysgina P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 216. 1900—BURLINGHAM, Mem. Torr. Bot. Club, 14 : 55. 1908; N. Am. Fl. 9 : 181. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2 (1) : 343. 1912.

子実体は孤生或は群生; 傘は径 6—10cm, 丸山形にて中窩を有し, のち開張し少しく圧低さる; 表面は粘性, 暗赤褐色, 老時淡色となる, 平滑, 屢々不明瞭なる環紋を有す; 縁は薄く, 内屈す, 無毛; 肉は白色, のち帯黄色, 外皮下赤色を帯ぶ; 乳汁は白色, 不変色, 辛し; 褶は直状類垂生, 白色にて帯黄色或はクリーム色となる, 密〜やや疎, 薄く, 叉状をなす; 茎は 3—6×1—2cm, 同幅, 淡黄色にて傘と同系の色彩を帯ぶ, 往々斑点あり, 粉状, 充塞或は中空; 胞子は類球形〜橢円形, 有刺, 8—10×6—8μ; 嚢状体は無色, 紡錘形, 60—75×8—9μ。

所在及産地

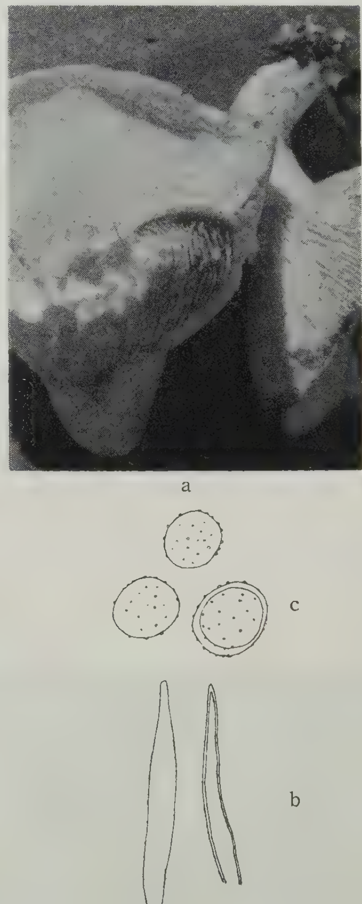
林内湿地及野外—夏秋　　本州—欧. 北米

和名 ヌメリアカチチタケ (粘赤乳茸) 〔今井〕

Lactarius scrobiculatus (SCOP. ex. FR.) FR.

キカラハツタケ

FRIES, Epicr. Myc. 334. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 152. 1863; Hymen. Eur. 422. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 194. 1872; Enchir. Fung. 126. 1886—GILLET, Champ. Fr. 206, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 205. 1876; Hattsv. 1 : 178. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 117. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 555. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 424. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 383. 1915—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed, 2. 305. 1889; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 971 (no. 922). 1890—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 4. 1893; Brit. Fungi, 154. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 268. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 34, pl. 30, f. 60. 1910—RICKEN, Blätterp. 27, pl. 9, f. 2. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 90. 1918—REA, Brit. Basid. 479. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 8 : pl. 356. 1928—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 307. 1938—LANGE, Fl. Agar. Dan. 5 : 35. 1940—SINGER, Agaricales, 726. 1949—KONRAD & MAUBLANC, Agaricales, 2 : 11. 1952—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 475. 1953—HEIM,



第 216 図　キカラハツタケ　Lactarius scrobiculatus　a. 子実体 ×1/3　b. 嚢状体 ×400　c. 胞子 ×1000 (大谷氏)

Champ. Eur. 2 : 153, f. 78(10). 1957.

Agaricus scrobiculatus SCOP. Fl. Carn. 2 : 450. 1772—FRIES, Syst. Myc. 1 : 62. 1821—RABENHORST. Deut. Krypt. Fl. 1 : 554. 1844—BARLA, Champ. Nice, 32, pl, 18, f, 3-6. 1859.

Lactaria scrobiculata SCHROET. Pilze Schles. 1 : 541. 1889—BURLINGHAM, Mem. Torr. Bot. Club, 14 : 32. 1908; N. Am. Fl. 9 : 179. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 345. 1912.

Lactifluus scrobiculatus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 857. 1891.

子実体は孤生或は群生; 傘は径 6—15cm, 或はそれ以上に及び, 丸山形にて中窩を有し, のち漏斗形となる; 表面は湿時粘性, 藁黄色～暗赭色, 中盤には膠着せる軟毛を有し, のち無毛となる; 縁は初め内捲し, 軟毛及密なる著しき房毛を有し, 最後に開張し或は上向し, 殆ど無毛となる; 肉は緊緻, 白色にて傷時黄色となる; 乳汁は白色, 空気に触れて速に硫黄色となり, 味辛し; 褶は垂生或は僅か直生, 帯白色或は淡黄色, 老時及傷時暗色となる; 密生, 往々茎に近く叉状をなし, 茎上に於て纒絡す; 茎は太く, 4—9×2.5—3cm, 同幅, 傘面と殆ど同色或は淡色, 稍々粘性, 鮮色なる類円形の孔窩を有す, 下部に甚だ短き膠着せる軟毛を有し, 上部は殆ど無毛, 中実, のち中空; 胞子は類球形或は広楕円形, 細刺を有し, 8—10×7.5—8μ; 胞子紋は白色或は淡黄色; 嚢状体は稀生, 類棍棒形, 先端黄色, 60—75×9—12μ; 食毒不明。

所 在 及 産 地

主に針葉樹林湿地—秋

北海道, 九州—欧. 北米. 亜(小亜)

和 名 キカラハツタケ (黄辛初茸) 〔今井〕

Lactarius chrysorheus FR.

キ チ チ タ ケ モ ド キ

FRIES, Epicr. Myc. 342. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 165. 1863; Hymen. Eur. 428. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 204. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 211. 1871; Illus. Brit. Fungi. 7 : pl. 984 (no. 940). 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 198. 1872—GILLET, Champ. Fr. 208, c. ic. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 190. 1879—WINTER, Pilze, 1 : 550. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 433 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 375. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 15. 1893; Brit. Fungi, 157. 1911—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 122, f. 125. 1903—W. G. SMITH, Brit. Basid. 272. 1908—RICKEN, Blätterp. 30, pl. 13, f. 4. 1910—KAUFFMAN, Agar. Mich. 96. 1918—REA, Brit. Basid. 485. 1922—LANGE, Agar. Denm. 7 : 31. 1928; Fl. Agar. Dan. 5 : 41, pl. 172, f. A. 1940—KONRAD, Bull, Soc. Myc. Fr. 51 : 167. 1935—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4 : pl. 322. 1937; Agaricales, 2 : 15. 1952—SINGER, Agaricales, 726. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 473. 1953.—ROMAGNESI, Nouv. Atl. Champ. pl. 5, B. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2 : 154, pl. 20, f. 3. 1957.

(本郷, 滋. 大. 学芸. 紀要, 4 : 54, f. F. 1955—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 95, f. 251, pl. 44, f. 251. 1957

Lactarius theiogalus var. *chrysorheus* QUÉL. Enchir. Fung. 129. 1886.

Lactaria chrysorrhea SCHROET Plize. Schles. 1 : 541. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 216. 1900—BURLINGHAM, N. Am. Fl. 9 : 188. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 342, pl. 56C. 1912.

Lactifluus chrysorrheus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 856. 1891.



第 217 図 キチチタケモドキ Lactarius chrysorheus a. 子実体 ×1/2 b. 稜嚢体 c. 嚢状体 ×400 d. 胞子 ×1000 (大谷氏)

子実体は孤生或は群生; 傘は径 4—10 cm, 丸山形にて広き中窩あり, のち開張し, 中部圧低され, 遂に漏斗形となる; 表面は乾燥或はやや粘性, 無毛, 平滑, 黄肉色～橙色, 濃橙色の環紋或は斑点環を

有す; 縁は初め内捲, のち開張し, 時に広波状をなす, 幼時白粉を有す; 肉は脆く, 白色, 傷時速に硫黄色に変ず, 茎の基部は屢々茶褐色を呈す, 臭なし; 乳汁は多く, 白色, 空気に触れて速に硫黄色に変り, 辛し; 褶は直状垂生, 白色或は汚黄色, 老時暗色となる, 密, 狭幅, 薄く, 基部に於て叉状; 茎は 4—6×1—1.5 cm, 同幅, 粉状, のち無毛, 白色, 老時傘色に変ず, 往々斑点あり, 中実, のち中空; 胞子は類球形, 有疣, 沃度液にて肋脈状網目を認めらる, 7.5—9×6.5—7.5μ; 胞子紋は淡クリーム色; 担子柄は4胞子を着く; 嚢状体は多生, 披針形～紡錘形, 尖頭, 薄膜, 44—54×9.5—14.5μ, 褶壁及稜上のもの同様なり; 可食。

所在及産地

林地—秋　本州, 九州—欧, 北米

和名 キチチタケモドキ (擬黄乳茸) 〔本郷〕

Lactarius uvidus (FR. ex FR.) FR.

トビチャチチタケ

FRIES, Epicr. Myc. 338. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 162. 1863; Hymen. Eur. 426. 1874—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 205. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 210. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 991 (no. 935). 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 196. 1872; Enchir. Fung. 128. 1886—GILLET, Champ. Fr. 202, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 208. 1876; Hattsv. 1 : 185. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 119. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 552. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 431. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 385. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 12. 1893; Brit. Fungi, 156. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 271. 1908—RICKEN, Blätterp. 32, pl. 11, f. 4. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 101. 1918—REA, Brit. Basid. 483. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 8 : pl. 367. 1928 (?)—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 314. 1935—LANGE, Fl. Agar. Dan. 5 : 40, pl. 170, f. c. 1940—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4 : pl. 319. 1937; Agaricales, 2 : 13. 1952—SINGER, Agaricales, 726. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 116, pl. 40, f. 4. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 475. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 151. 1957.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 49 : 666. 1935—今関及土岐, 林. 試. 研. 報. 67 : 56, pl. 6, f. 2. 1954—原, 日. 菌. 目. 175. 1954)

Agaricus lividorubescens BATSCH, Elench. Fung. 2 : 51. 1789.

Agaricus uvidus FR. Obs. Myc. 2 : 191. 1818; Syst. Myc. 1 : 66. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 551. 1844.

Lactaria uvida SCHROET. Pilze Schles. 1 : 543. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 216. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2 (1) : 342. 1912.

Lactaria lividorubescens BURLINGH. Mem. Torr. Bot. Club, 14 : 49. 1908; N. Am. Fl. 9 : 184. 1910.

Lactifluus uvidus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 857. 1891.



第 218 図　トビチャチチタケ Lactarius uvidus
a. 子実体 ×1/2　b. 嚢状体 ×500
c. 胞子 ×1000 (大谷氏)

子実体は群生或は孤生; 傘は径 4—10 cm, 丸山形, のち開張し, 中央圧低され, 遂に盃形となり, 稀に中丘あり; 表面は湿時甚だ粘性, 灰色～帯菫茶褐色或は淡栗褐色, 時に小汚斑あり, 無毛, 平滑, 幼時微かに環紋あることあるも成品にては無環紋; 縁は薄く, 初め内捲にて粉絨状, のち開平或は更に反転す; 肉は強靱, 白色, 空気に触れて淡菫色～暗菫色となる, 寧ろ薄し, 無臭或は弱き芳香あり; 乳汁は白色, 空気に触れて肉に接せるものは菫色となる, 苦くして, のち僅か辛し; 褶は直状垂生, 白色～クリーム白色, のちクリーム肉色, 傷時菫色となる, 密生, 僅か広幅, 茎に近く叉状, 薄し; 茎は 3—8×1—1.5 cm, 同幅, 白色, のち基部黄色, 僅か粘性, 無毛, 時に基部有毛, 時に皺或は僅か小窩あり, 中実, 充塞, 速に中空となる; 胞子は類楕円形,

有刺，沃度液にて不規則なる肋脈を認めらる，8.5—11×7—8.5μ；胞子紋は淡クリーム白色；嚢状体は稍々多生，無色，紡錘形，尖頭，50—80×7—11μ；可食と称せらる。

所在及産地

混淆湿林及野外—夏秋　北海道—欧．北米

和名　トビチヤチチタケ（鳶茶乳茸）〔今井〕

Lactarius violascens (OTTO ex FR.) FR.

ウズタケ

FRIES, Epicr. Myc. 342. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 165. 1863; Hymen. Eur. 429. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 3 : 545. 1873; Enchir. Fung. 128. 1886—GILLET, Champ. Fr. 202. 1874—KARSTEN, Hattsv. 1 : 186. 1879—WINTER, Pilze, 1 : 550. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 434. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 397. 1915—REA, Brit. Basid. 485. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 8: pl. 369. 1928—LANGE, Agar, Denm. 7 : 32. 1928; Fl. Agar. Dan. 5: 41, pl. 173, f. c. 1940—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 475. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2, 152. 1957.

（川村，日．菌．図鑑，3 : 349，f. 335. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，96，pl. 45，f. 254. 1957）

Agaricus violascens OTTO, Vers. Ordn. Agar. 34, n. 30. 1816—FRIES, Syst. Myc. 1 : 75. 1821.

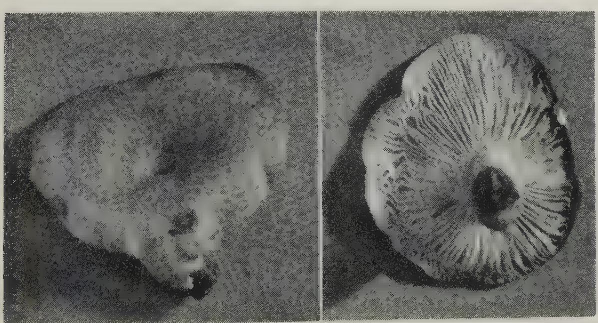
Lactarius uvidus var. *violascens* QUÉL. Fl. Myc. 352. 1888—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4 : pl. 320. 1937; Agaricales, 2 : 13. 1952.

Lactaria violascens SCHROET. Pilze Schles. 1: 542. 1888—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 216. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 342. 1912.

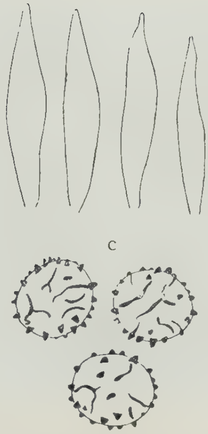
Lactarius maculatus PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 41 : 71. 1888—SACCARDO, Syll. Fung. 9 : 57. 1891.

Lactifluus violascens O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 857. 1891.

子実体は群生或は散生；傘は径 6—10 cm，時に 13 cm に及び，丸山形，のち扁平となり中央圧低さる，比較的屢々中丘あり；表面は僅か粘性，速に乾燥，帯



a　b



c　d

第219図　ウズタケ Lactarius violascens
a．子実体表面．　b．同裏面 ×1/2
c．嚢状体 ×500　d．胞子 ×1000
（大谷氏）

菫褐色～赭褐灰色，常に灰褐色の環紋あり，無毛，平滑；縁は薄く，初め内捲し粉絨状；肉は強靱，白色，空気に触れて菫色に変り，茎の中央部は屢々黄色を呈す，臭なし；乳汁は白色，空気に触れて肉に着くところは菫色となる，辛味あり；褶は直状垂生，クリーム白色，のちクリーム肉色，接触により菫斑を生じ，のち茶褐色となる，密生，薄く，僅か広幅，茎に近く叉状；茎は 4—7×1—2 cm，殆ど同幅，僅か粘性，レンズ下にて粉絨状，クリーム白色，傷によりて菫色斑を生じ，のち僅か黄赭色となる，中実，早く中空となる；胞子は広楕円形，有刺，沃度液にて不規則の肋脈を認めらる，10—13×8—10μ；胞子紋は白クリーム色；嚢状体は稍々多生，無色，紡錘形，尖頭，50—70×7—12μ。

所在及産地

広葉樹林地—夏秋　本州，九州—欧．北米

和名　ウズタケ（渦茸）〔川村〕

Lactarius speciosus (BURL.) SACC.

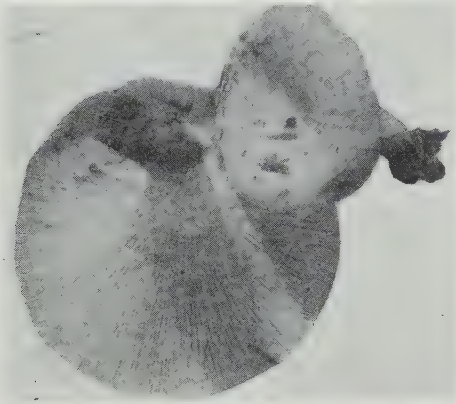
ムラサキキカラハツタケ

SACCARDO, Syll. Fung. 21 : 82. 1912—SINGER, Agaricales, 726. 1949.

（IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 55 : 519. 1941）

Lactaria speciosa BURL. Mem. Torr. Bot. Club, 14 : 34, f. 2. 1908; N. Am. Fl. 9 : 183. 1910.

傘は径 5—8 cm，丸山形にて中窩を有し，のち中央圧低さる；表面は湿時粘性，帯白色，中央部蜜黄色～白黄色に至る，環紋あり，蜜黄色軟毛に被わる；縁は初め内捲し，遂に開



a



b

第220図　ムラサキキカラハツタケ
Lactarius speciosus
a. 子実体 ×2/3　b. 胞子 ×1000(大谷氏)

平す，軟毛あり；肉は緊緻，白色，無臭；乳汁は白色，肉及褶を暗菫色に染む，味温和〜僅か辛し，幼時多量にて老品には乏し；褶は白色，のち淡白黄色となり粉状，傷時暗菫色に染まる，甚だ密生ならず，極めて僅か垂生，稀に叉状をなし，幅5—8mm；茎は2.5—7×1—1.5cm，蜜黄色を帯び，黄色橢円形の斑点を有し，往々小孔あり，擦傷により暗菫色に染まる，同幅，湿時粘性，往々基部に僅か軟毛あり，充塞，のち中空となる；胞子は橢円形，強刺あり，9.5—10×8—8.5μ；胞子紋は白色。

所在及産地

混淆林地—夏秋　　本州，九州—北米

和名　ムラサキキカラハツタケ（紫黄辛初茸）
〔今井〕

Lactarius necator (Pers. ex Fr.) Karst.
ウグイスチャチチタケ

Persoon, Obs. Myc. 2 : 42. 1799—Karsten, Hattsv. 1 : 179. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 118. 1889—Saccardo, Fl. Ital. Crypt. Hymen. 384. 1915—Imai, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 309. 1938—Singer, Agaricales, 727. 1949.

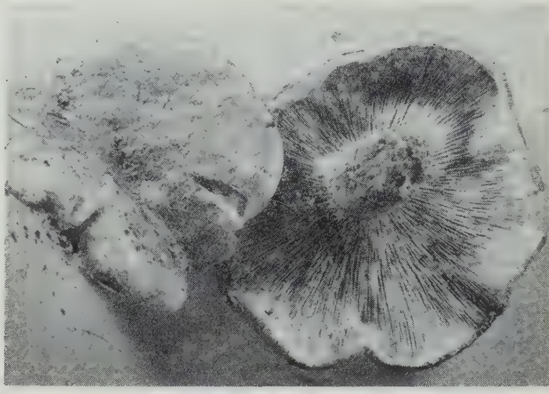
(原，日．菌．目．174．1954)

Agaricus necator Pers. Syn. Meth. Fung. 435. 1801—DeCandolle, Fl. Fr. 2 : 143. 1815—Fries, Syst. Myc. 1 : 64. 1821.

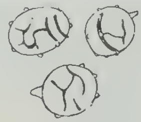
Lactarius necans S. F. Gray, Nat. Arr. Brit. Pl. 625. 1821.

Agaricus turpis Weinm. Syll. Pl. Nov. 2 : 85. 1828.

Lactarius turpis Fr. Epicr. Myc. 335. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 154. 1863; Hymen. Eur. 423. 1874—Berkeley, Outl. Brit. Fung. 203. 1860—Cooke, Handb. Brit. Fungi, 1 : 207. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 987 (no. 925). 1890; Handb. Austr. Fungi, 77. 1892—Quélet, Champ. Jura Vosg. 1 : 194. 1872—Gillet, Champ. Fr. 209, c. ic. 1874—Karsten, Myc. Fenn. 3 : 206. 1876—Winter, Pilze, 1 : 555. 1884—Saccardo, Syll. Fung. 5 : 426. 1887—Massee, Brit. Fung. Fl. 3 : 7. 1893; Brit. Fungi, 154. 1911—W. G. Smith, Brit. Basid. 269. 1908—Ricken, Blätterp. 28, pl. 9, f. 4. 1915—Kauffman, Agar. Mich. 88. 1918—Rea, Brit. Basid. 480. 1922—Bresadola, Icon. Myc. 8 : pl. 358. 1928—Lange, Agar. Denm. 7 : 27. 1928; Fl. Agar. Dan. 5 : 34, pl. 169, f. D. 1940—Wakefield & Dennis, Comm. Brit. Fungi,



a



c



b

第221図　ウグイスチャチチタケ
Lactarius necator
a. 子実体 ×1/2　b. 嚢状体 ×450
c. 胞子 ×1000　(大谷氏)

114, pl. 38, f. 1. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 475. 1953.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 49 : 604. 1935)

Lactarius plumbeus QUÉLET, Enchir. Fung. 127. 1886—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4 : pl. 318. 1937; Agaricales, 2 : 9. 1952.

Lactaria necator SCHROET. Pilze Schles. 1 : 540. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 217. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 345. 1912—HEIM. Champ. Eur. 2 : 161, pl. 20, f. 1. 1957.

Lactifluus turpis O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 857. 1891.

Lactaria turpis BURLINGH. Mem. Torr. Bot. Club, 14 : 44. 1908; N. Am. Fl. 9 : 183. 1910.

子実体は群生或は孤生；傘は径 6—15cm，或はそれ以上に及び，丸山形，のち扁平となり，遂に漏斗状となる；表面は粘性，褐黄色の地肌に黒オリーブ色或はオリーブ緑色又は鶯色の膠着せる纖維を被むり，中央暗色，時に汚点あるも環紋なし；縁は初め内捲し黄色の絨毛を有し，のち無毛；肉は緊密，厚く，白色；乳汁は白色，変色せず，甚だ辛し；褶は直状垂生，クリーム白色，密，狭幅，屢々茎に近く叉状，傷によりて汚染し，老時汚褐色に染まる；茎は 3—8×1—2.5cm，殆ど同幅或は下方狭細，傘面と殆ど同色，多少粘性，無毛或は軟毛あり，平滑或は凹凸あり，時に汚孔或は汚斑あり，緊緻，中実，充塞，のち中空となる；胞子は球形或は類球形，有刺，沃度液にて肋脈を認めらる，7—8×6—7μ；胞子紋は淡クリーム色；嚢状体は無色，紡錘形，50—70×6—9μ；可食と称せらる。

所 在 及 産 地

林地—夏秋

北海道，本州—欧・北米・濠・亜(小亜・西比)

和 名　ウグイスチャチチタケ（鶯茶乳茸）〔今井〕

Lactarius vietus (FR.) FR.

コキハダチチタケ

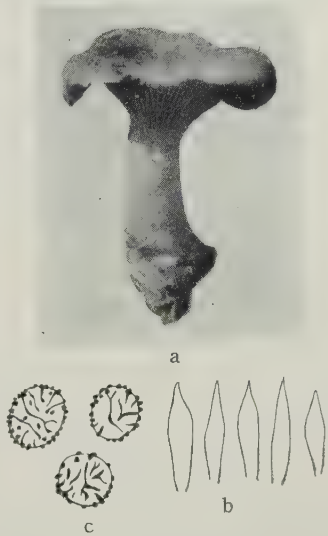
FRIES, Epicr. Myc. 344. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2 : 171. 1863; Hymen. Eur. 432. 1874—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 1 : 200. 1872; Enchir. Fung. 129. 1886—GILLET, Champ. Fr. 206, c. ic. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 212. 1876; Hattsv. 1 : 191. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 122. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 546. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 441. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 391. 1915—COOKE, Handb. Brit. Fungi, ed. 2. 313. 1889; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 1009, f. a (no. 952) 1890—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 24. 1893; Brit. Fungi, 160. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 275. 1908—RICKEN, Blätterp. 37, pl. 14, f. 1. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 109. 1918—REA, Brit. Basid. 489. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 8 : 379. 1928—LANGE, Agar. Denm. 7 : 31. 1928; Fl. Agar. Dan. 5 : 38, pl. 177, f. D. 1940—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4 : pl. 327. 1937; Agaricales, 2 : 13. 1952—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 318. 1938—SINGER, Agaricales, 727. 1949—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 116, pl. 38, f. 4. 1950—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 476. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 155. 1957.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 49 : 608. 1935—原，日．菌．目．175. 1954)

Agaricus vietus FR. Syst. Myc. 1 : 66. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 548. 1844.

Lactaria vieta SCHROET. Pilze Schles. 1 : 541. 1889—P. HENNINGS, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 216. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 338. 1912.

Lactifluus vietus O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 857. 1891.



第 222 図　コキハダチチタケ Lactarius vietus
a．子実体 ×1/2　b．嚢状体 ×300
c．胞子 ×1000　（大谷氏）

子実体は孤生或は群生；傘は径 3—6cm，丸山形，のち扁平圧低され，時に幼時中丘あり；表面は湿時粘性，平滑，無毛，環紋なし，菫灰色，淡肉桂色，緑灰色或は淡汚桃色，周辺淡色，乾時細微なる絹糸状毛を被むる；縁は薄く，初め内捲し白軟毛あり，速に消失す，遂に屈曲し縮む；肉は白色～帯白色，皮下淡色，無臭；乳汁は白色，のち灰色或は変化せず，遅く辛し；褶は直状垂生，白色，のち淡黄肉色，傷時汚オリーブ褐色となる，密生，薄く，僅か広幅，

屢々茎に近く叉状をなす；茎は 4—7×0.5—1.2cm, 殆ど同幅或は上方狭細, 傘面と同色或は淡色, 無毛, 有皺, 粘性ならず, 脆く, 中実, 充塞, のち中空；胞子は球形～楕円形, 有刺, 沃度液にて肋脈を認めらる, 7—10×7—8μ; 胞子紋は淡クリーム色；嚢状体は無色, 紡錘形, 尖頭, 45—55×8—11μ。

所在及産地

林地—夏秋　　北海道, 九州—欧. 北米

和名　コキハダチチタケ（小黄肌乳茸）〔今井〕

Lactarius trivialis. (FR. ex FR.) FR.

キハダチチタケ

FRIES, Epicr. Myc. 337. 1838; Monogr. Hymen. Suec. 2:160. 1863; Hymen. Eur. 426. 1874—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 210. 1871; Illus. Brit. Fungi, 7 : pl. 976 (no. 933). 1890—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 2 : 354. 1873; Enchir. Fung. 128. 1886—GILLET, Champ. Fr. 214. 1874—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 208. 1876; Hattsv. 1 : 184. 1879; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 119. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 552. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 430. 1887; Fl. Ital. Crypt. Hymen. 390. 1915—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 3 : 11. 1893; Brit. Fungi, 156. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 270. 1908—RICKEN, Blätterp. 33. 1915—KAUFFMAN, Agar. Mich. 100. 1918—REA, Brit. Basid. 483. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 82, pl. 34. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 8: 366. 1928—KONRAD & MAUBLANC, Icon. Sel. Fung. 4 : pl. 333, 1937; Agaricales, 2 : 17. 1952—IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43: 313. 1938—SINGER, Agaricales, 727. 1949—KÜHNER & ROMAGNESI, Fl. Analyt. Champ. Super. 477. 1953—HEIM, Champ. Eur. 2 : 156, f. 146, B. 1957.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 49 : 605. 1935—原, 日. 菌. 目. 175. 1954)

Agaricus trivialis FR. Obs. Myc. 1 : 61. 1815; Syst. Myc. 1 : 65. 1821—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 552. 1844.

Lactaria trivialis SCHROET. Pilze Schles. 1 : 538. 1889—BURLINGHAM, Mem. Torr. Bot. Club, 14 : 53. 1908; N. Am. Fl. 9 : 181. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 344, pl. 58 E. 1912.

Lactifluus trivialis O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 857. 1891.

子実体は群生或は孤生；傘は径 5—15 cm, 丸山形, 扁平となり, のち早く圧低され, 更に殆ど漏斗形となる；表面は甚だ粘性, 平滑, 無毛, 無環紋, 色種々あり, 鉛灰色～煙灰色或は黄色を帯び, 又鉛色或は赤褐色等あり；縁は薄く, 初め内捲し軟毛あるも, のち開平し無毛となり, 更に上向し波状をなす；肉は脆く, 白色～クリーム白色, 臭弱し；乳汁は白色, 空気に触れて淡黄色に変じ, 乾きて肉及褶上に淡緑色となる, 辛し；褶は直状垂生, 淡クリーム色, のち淡黄肉色, 老時赭色点を生ず, 稍々密生, 或物は叉状をなす；茎は 3—12×1—2cm, 殆ど同幅或は紡錘形, 時に偏心生なり, 傘面と同色或は淡色, 無毛, 平滑, 粘性, 早く中空となる；胞子は類球形或は広楕円形, 有刺, 沃度液にて僅かの短肋脈を認めらる, 8—10×7—9μ; 胞子紋は淡クリーム黄色；嚢状体は無色, 紡錘形, 尖頭, 50—70×7—10μ。

所在及産地

林地—夏秋　　北海道—欧. 北米

和名　キハダチチタケ（黄肌乳茸）〔今井〕

Lactarius akanensis IMAI

ウメネズチチタケ

IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 49 : 605. 1935; Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 313. 1938—SINGER, Agaricales, 727. 1949.

（原, 日. 菌. 目. 173. 1954）

子実体は群生；傘は径 4—10cm, 初め丸山形, のち中窩～圧低さる；表面は膠性, 無毛, 平滑, 淡帯紫煤色, 幼時僅かの間僅か暗色環紋あり, のち通常無環紋, 縁は内屈し, 無毛；肉は白色, 厚し；乳汁は白色, 褶上にて乾けば帯緑黄色或は汚緑色となる, 初め味温和, のち稍々辛く, 著し；褶は僅か垂生歯を有して直生, 帯白色或は微に黄色を帯び, 寧ろ疎生, 稀に茎に近く叉状をなす；茎は 2—5×1—1.5 cm, 通常下方僅か狭細, 白色或は帯白色, 湿時僅か粘性, 乾時光沢あり, 中実, のち中空；胞子は広楕円形或は類球形, 有刺, 8—10×6—8μ; 胞子紋は白色。

所在及産地

林地—秋　　北海道

和名　ウメネズチチタケ（梅鼠乳茸）〔今井〕

Lactarius flavidulus IMAI

キハツタケ

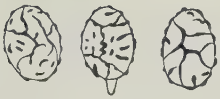
IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 49 : 604. 1935; Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 310. 1938.

（今関, 原色きのこ, pl. 46. (左). 1942; 及土岐, 林. 試. 研. 報. 67 : 54, pl. 7, f. 1. 1954—原, 日. 菌. 目. 174. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 96, pl. 44, f. 252. 1957）

子実体は群生或は孤生；傘は径 6—15 cm, 丸山形, のち中窩を生じ, 遂に広漏斗形となる；表面は初め帯白色, のちクリーム色～狐色, 僅か環紋あり,



a



b

第223図　キハツタケ　Lactarius flavidulus　a．子実体　×1/2　b．胞子　×1000（大谷氏）

湿時粘性，殆ど無毛，幾分粗面；縁は淡色，幼時内捲し微細絨毛あり，のち弓状，更に反転し無毛となる；肉は白色，厚く，剛直；乳汁は白色，空気に触れて灰緑色となる，味温和，臭よし；褶は垂生或は直状垂生，白色，のち帯黄色，傷によつて緑色となる，中位に密生，両端に狭細す；茎は 4—6×1.5—3 cm，同幅，乳白色，のちクリーム色，初め僅か絨状，のち無毛，中空；胞子は類球形或は球形，有刺，7.5—10×7—8.5μ；胞子紋は白色。

所在及産地

林地—秋　　　北海道，本州，九州

和名　キハツタケ（黄初茸）〔今井〕

（6）Dapetes Fr.（1838）

アカモミタケ節

Lactarius deliciosus (L. exFr.) S. F. Gray var. **japonicus** Kawam.

アカモミタケ

Kawamura, Jap. Fungi.（日．菌．図説），n. 17. 1929；日．菌．図鑑，3 : 342，f. 331. 1954.

（Matsuura & Kanada, Trans. Tottori. Soc. Agr. Sci. 3 : 113. 1931—松浦，茸類辞典，37，f. 35. 1933—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，98，f. 259，pl. 45，f. 259. 1957）

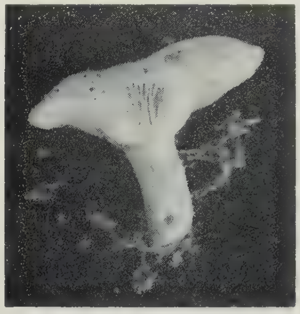
Lactarius deliciosus Kawam. Ilus. Jap. Fungi, 3 : pl. 10，f. 19—22. 1914.

（白井，日．菌．目．ed. 2. 309. 1917；ed. 3. 180. 1927—川村，食用菌及有毒菌，f. 23(p. 21). 1931）

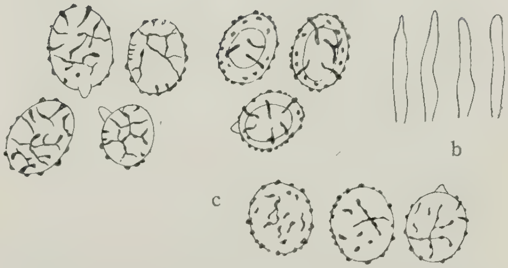
Lactarius deliciosus var. Kawam. Bot. Mag. Tokyo.（植．雑.），28 : 525. 1914.

Lactarius deliciosus f. *laeticolorus* Imai, Bot. Mag. Tokyo, 49 : 607. 1935; Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 331. 1938.

（今関，原色きのこ，pl. 44(左). 1942；及土岐，林．試．研．報．67 : 54，pl. 6，f. 1. 1954—原，日．菌．目．174. 1954）



a



第224図　アカモミタケ　Lactarius deliciosus var. japonicus　a．子実体　×1/3　b．嚢状体　×400　c．胞子　×1000（大谷氏）

子実体は群生或は孤生；傘は径 5—15cm，丸山形にて中窩を有し，のち扁平となり，遂に盃形となる；表面は湿時粘性，淡煉瓦色或はトキ色，不明瞭なる環紋を有す；縁は初め内捲，のち開平し，更に反転す；肉は緊緻，帯白色にてのちトキ色となり茎の周辺及び褶上に朱色線を有す；乳汁は橙色～朱色を呈し，褶に接せる肉中並に茎の周辺に多し；褶は直状垂生，傘及び茎面より濃色，密生，狭幅，茎に近く叉状をなす，擦傷により藍緑色の汚染を生ずること甚だ少きか或は殆ど認め難し；茎は 3—10×0.8—1.7 cm，同幅，傘面と同色，平滑，時に濃色の凹斑あり，充塞，のち中空；胞子は類球形～楕円形，通常疣ありて連結する少数の線あり，8—10×7—8μ；

胞子紋は帯黄色；可食。

所在及産地

樅属林地—夏秋

北海道，本州，九州，小笠原島

和名 アカモミタケ（赤樅茸）〔川村〕

Lactarius akahatsu TANAKA

アカハツタケ

TANAKA, Bot. Mag. Tokyo, 4 : 394, pl. 16, 17, f. 5—7. 1890—SACCARDO, Syll. Fung. 14 : 95. 1899.
（白井，日．菌．目．45. 1905 ; ed. 2. 309. 1917; ed. 3. 180. 1927—KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 7, f. 11—14. 1913；日．菌．図説，n. 17. 1929；日．菌．図鑑，3 : 340, f. 330. 1954—沢田，台．菌．調．報．1 : 512. 1919—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，98. 1897）

Lactaria deliciosa YAS. Bot. Mag. Tokyo, 27: 561. 1913.
（広江，応用菌蕈学，1126. 1941）

Lactarius Hatsudake var. *Akahatsu* KAW. Bot. Mag. Tokyo, 28 : 525. 1914.

Lactarius deliciosus f. *virescens* IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 49 : 607. 1935; Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 331. 1938.
（今関及土岐，林．試．研．報．67 : 54. 1954—原，日．菌．目．174. 1954）

Lactarius deliciosus KOBAY. 日．隠．植．図．509, pl. 245, f. 1—2. 1939.
（原，日．菌．目．174. 1954）

子実体は散生或は孤生；傘は径5—10 cm，丸山形にて中窩あり，のち開張し扁平となり，遂に盃形となる；表面は湿時多少粘性，橙黄色，黄赤色，不明瞭の環紋あり，平滑；縁は初め内捲し，のち開平，更に反転す，寧ろ薄くして鋭し；肉は帯白色，淡緑汚染を生じ，茎の周辺は橙黄色を帯ぶ；乳汁は微量，橙紅色，空気に触れて藍緑色となる；褶は直状垂生，傘面と同色，擦傷によりて藍緑色の汚染を生ず，密生，狭幅，前方に於て広く，基部に於て叉状をなす；茎は短く，3—5×1.5—2.5cm，殆ど同幅，淡橙赤色，平滑，充塞，のち中空；胞子は卵形～類球卵形，太き明かなる網状，糊性，7.5—8.5×5.8—6.4μ；担子柄は 32—45×8.5—11 μ，4胞子；嚢状体は甚だ散生，不著明；可食。

所在及産地

平野，低丘松林地—秋　全土

和名 アカハツタケ（赤初茸）〔田中〕

Lactarius hatsudake TANAKA

ハツタケ

TANAKA, Bot. Mag. Tokyo, 4 : 393, pl. 15. 1890—SACCARDO, Syll. Fung. 14 : 95. 1899.
（白井，日．植．図説．1 : pl. 24. 1900；日．菌．目．45. 1905; ed. 2. 309. 1917; ed. 3. 180. 1927—KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 7, f. 5—7. 1913；日．菌．図説，n. 54. 1929；日．菌．図鑑，3 : 338, f. 329. 1954—沢田，台．菌．調．報．1 : 513. 1919—梅村，富士．植．志．368. 1923—松浦，茸類辞典，34, f. 32. 1933—牧野，日．植．図鑑，1024, f. 3071. 1940—松田及本郷，植．研．雑．30: 262, f. 1, K-L. 1955—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，97, f. 258, pl. 45, f. 258. 1957）

Lactaria Hatsudake MATSUM. Ind. Pl. Jap. 1 : 149. 1904.

Lactarius sanguifluus IMAI, Jour. Facul. Agr. Hokkaido Imp. Univ. 43 : 331. 1938.
（IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 49 : 607. 1935—S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16 : 55. 1940—今関，原色きのこ，pl. 44（右）．1942—原，日．菌．目．174. 1952）

子実体は群生或は孤生；傘の径 5—10cm，丸山形にて中窩あり，のち開張し扁平となり，遂に盃形となる；表面は湿時稍々粘性，淡赤褐色或は淡汚褐色にて桃色を帯び，稍々濃色の環紋あり，環紋は老時不明瞭となる，平滑，往々灰色の光沢あり，擦傷により藍緑色の汚斑を生ず；縁は初め内捲し，白粉を有し或は灰色の光沢あり，のち開平し，往々反転す；肉は帯白色にて茎周及褶上部赤褐色を呈し，緊緻，臭よく，味僅か辛くして温和ならず；乳汁は暗紅褐色，僅か辛くして温和ならず；褶は直状垂生，ほぼ傘面と同色，擦傷により藍緑色となる，密生，寧ろ広幅，中部広し，屢々茎に近く叉状をなし，屢々小褶を混ず；茎は短く，2—5×1—2cm，殆ど同幅，或は上方及び基端狭細，傘面と殆ど同色，屢々暗赤或は藍緑の斑紋を有す，無毛或は粉状，充塞，のち中空；胞子は卵形～類球卵形，太き明かなる網状，糊性，7.5—9.5×6—6.7μ；胞子紋は帯黄色；担子柄は 41—55×9—11.5μ，4胞子；嚢状体は不鮮明；可食。

所在及産地

平野，低丘アカマツ林地—秋　全土—亜（台）

和名 ハツタケ（初茸）

アイタケ〔方言〕

Lactarius ogasawarashimensis
S. ITO et IMAI
オガサワラハツタケ

S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo. Nat. Hist. Soc. 16 : 55. 1940.

子実体は孤生或は群生；傘は径 3—10 cm, 丸山形，のち扁平となり，遂に中央圧低さる；表面は粘性，無毛，幼時汚桃色，のち帯桃白色，幼時殆ど環紋なく，のち汚白色及び暗色の交互環紋を生じ，白色光沢あり；縁は初め無毛；肉は白色，厚く，傷時乳汁によりて青色となる，臭及び味なし；乳汁は多からず，藍色；褶は垂生，オリーブ白色，密生，基部時に皺を有し，時に叉状をなす；茎は 2.5—6×0.6—1.5 cm, 下方狭細或は稍々同幅，淡青空色或は暗青空色，光沢あり，中空；胞子は類球形，有疣，7.5—8.5×7—7.5μ；胞子紋はクリーム白色；可食。

所在及産地
リゥキュウマツ (*Pinus liuchuensis* MAYR) 林地—秋　小笠原島

和名　オガサワラハツタケ (小笠原初茸)〔今井〕

疑問種

Lactarius lividatus BERK. et CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4 : 119. 1860—SACCARDO, Syll. Fung. 5 : 449. 1887. (MIQUEL, Prol. Fl. Jap. 392. 1867—白井，日．菌．目．45. 1905; ed. 2. 309. 1917; ed. 3. 180. 1927—原，日．菌．目．174. 1954) = *Lactaria lividata* P. HENN. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 214. 1898. (松村，植．名鑑，1 : 149. 1904)

Lactarius planus UMEMURA, 富士植物志，368 (白井，日．菌．目．ed. 3. 181. 1927—原，日．菌．目．174. 1954)

除外種

(分類上の位置未だ不確実なるものにて除外さるるもの)

Campanella Junghuhnii (MONT.) SING. Lloyd. 8 : 192. 1945—KOBAYASI, Jour. Hattori Bot. Lab. 8 : 2. 1953 = *C. cuculata* LLOYD, Myc. Writ. 5 : 815, f. 1358. 1919; 6 : 1096. 1921; 7 : 1225, f. 2525. 1923; STEVENSON & CASH, New. Fung. Names. Lloyd, 149. 1936. (LLOYD, Myc. Notes, 65 : 1095, 1096. 1920—安田，植．雑．35 : 120. 1921—広江，応用菌蕈学，1111. 1931) アミヒダタケ．本州—南洋

C. resupinata LLOYD, in STEVENSON & CASH, l. c. 150. 1936. (LLOYD, Myc. Writ. 7 : 1345. 1925)

Favolaschia fusisanensis KOBAY. l. c. 8 : 2, f. 2 A-D. 1953. コップラッシタケ．本州

F. nipponica KOBAY. l. c. 8 : 1, f. 1, 2 H-K. 1953. ニカワアナタケ．本州，北海道

F. pezizaeformis (BERK. et CURT.) O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 3(2) : 476. 1893—SINGER, l. c. 8 : 199. 1945; 13 : 251. 1950—KOBAYASI, l. c. 8 : 2. 1953. (小林，服部植．研．報．8 : 17. 1953) = *Laschia pezizaeformis* BERK. et CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4 : 123. 1858—SACCARDO, Syll. Fung. 6 : 406. 1887—KOBAYASI, Bull. Biogeogr. Soc. Jap. 7 : 2, pl. 1, f. 1-2. 1937. (白井，日．菌．目．45. 1905; ed. 2. 311. 1917; ed. 3. 182. 1927—S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16 : 124. 1940—平田，青島綜合調査報告書，78. 1954) エナシラッシタケ．九州，小笠原島—南米

F. phyllostachydis IMAZ. et KOBAY. in KOBAYASI, Jour. Hattori Bot. Lab. 8 : 2, f. 2 F-G. 1953. シャモジラッシタケ．本州

Xerotus fragilis BERK et CURT. l. c. 121. 1858—SACCARDO, l. c. 5 : 635. 1887. (松村，植．名鑑，1 : 184. 1904—白井，l. c. 114. 1905; ed. 2. 731. 1917; ed. 3. 426. 1927—原，日．菌．目．394. 1954) コモタケモドキ．小笠原島

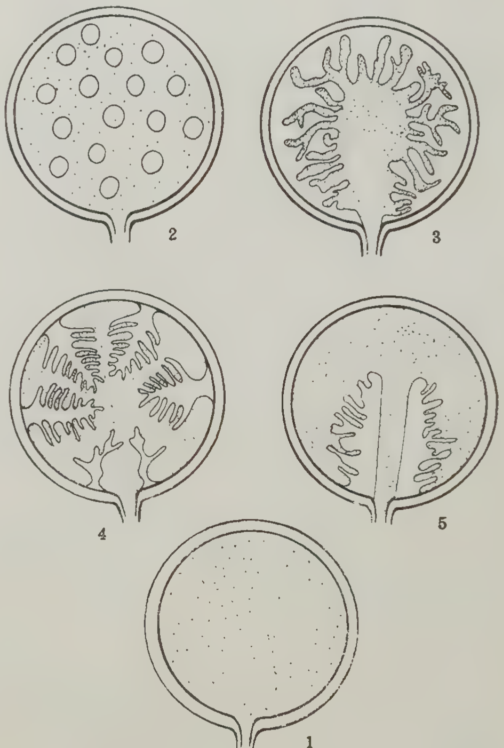
Gasteromycetes 腹　菌　類

子実体は無性の殻皮（外皮 peridium）を有し，内に基本体（gleba）を存す；基本体は多くは腔室を有し，其内壁に巣状に或は子実層を作り担子柄を生ず；担子柄は１室，有柄或は無柄の胞子を着生す；胞子が成熟するに及び殻皮は破れてこれを外出せしむ，斯くの如く胞子成熟期まで殻皮に包まるる担子菌の一群を総括して腹菌類（Gasteromycetes 或は Gastromycetes）と称し菌蕈類（Hymenomycetes）と対称す，但しこの称呼は屢々使用せらるるも分類上の単位にあらず，多くは数目に分つも本書に於ては暫く ED. FISCHER 氏（1933）により１目として記述せり。尚本類所属菌の命名出発点は 1810 年（PERSEOON 著 Synopsis Methodica Fungorum）なり。

Gasteromycetales フタキン目

Gastromyceteae ED. FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Pfl. fam. II, **7a** : 1. 1933.

菌糸は着生物の内部或は外部に弛く走り或は紐状に結合し稀に皮膜状をなす；多くは腐木，稀に糞上に生活するも，時に根に寄生し或は菌根を作るものあり；通常菌糸に菌絆あり；子実体は概説すれば多くは球状，高等なるものは屢々有茎なりというべきも，その成熟体には種々特有なる形態を有するものあり，その一生涯を或はその初期を地中に過ごし，又早くより露出するものあり；子実体の殻皮は 1～数層より成り，其質緻密堅硬なるもの或は柔軟にて紙質のもの等あり，或特別なるものに於ては幼時のみ存在し発育中に消失するものあり；殻皮に包まれたる内部の菌組織は多少肉質にて只単に基本体のみ或はそれを貫通する柱軸（columella）又は基層板（tramal plate, vein）を有す，基本体は通常多数の腔室（hymenial cavity）を有し，稀に只１室のものあり，又腔室を作らずして担子柄は組織内に一様に分散するものあり，又担子柄の集団が巣状をなし随処に存在するものあり；柱軸及び基層板は細き或は丈夫なる菌糸より成り養分の移動，支柱或は子実体の熟時に裂開せしむる等種々なる役目を持つものと考えらる，多くは胞子形成後胞子を残して基本組織は全部自家消化により崩壊し，僅かの種属に於て担子柄或は強靱なる弾糸（capillitium）を残存す，弾糸は分岐せる厚膜の菌糸にて，この纒絡せる塊は一時に胞子を脱出せしめざる役目をなす；腔室は種々なる形をなし其内壁に子実層を裏付し多数の担子柄を生じ，僅少の科に於て嚢状体を有す；担子柄は棍棒形或は円筒形なること菌蕈類の如きも多くは卵形或は球形に傾き，小柄は長短種々ありて時に欠如す；胞子は小柄の先端に左右相称的に座し，前の諸目の如く勢よく射出さるるが如きことなく往々小柄の全部或は一部を附して脱落す；胞子は球形或は円筒形又はレモン形，平滑或は有疣刺，又は縦溝を有し，膜は１層或は２層，発芽孔を有するものあり；若き担子柄は２核を存し，これは互に癒合して分裂して４単価の核となる，その第一分裂の紡錘糸は多くの場合横性にて時々縦性なり，或場合には更に分



第 225 図　腹菌基本体発育形式模型図
1. 均一型　2. 多孔型　3. 珊瑚型
4. 多冠型　5. 単冠型

裂し，8核又はそれ以上に及ぶ；通常胞子の数は4にて，稀に6—8，時に12に到る；胞子は子実体熟時一定の方法による裂開により或はこの胞子を食する動物によつて各所に運搬され，或は只子実体の崩壊腐敗によりてのみ外出す；此群中僅かの種類に於て人為的培養に成効せるものあるも，多くはその発芽をもせしめ得ず。

子実体の発生状態を探るに，初め菌糸が密に集合し，或は紐状菌糸束の一部に小塊を生じ，その最外側は無性に残りて第一次殻皮となり内部の菌糸団より基本体を生ず，この場合に菌の種類によりて種々なる基本型を有す，初め LOHWAG 氏 (1924—26) は4型に，後 ED. FISCHER 氏 (1933) は5型に区分せり。

1. 均一型 (Gleichmässiger Typus)：—担子柄は子実体内の菌組織中に全く不規則に散在す，この型は *Tulostoma* 属に見らる。

2. 多孔型 (Lakunärer Typus)：—子実体内の菌組織中に多少多くの点にて菌糸が崩れ，輪状に並列する閉ぢたる間隙を生じ，之れに多少規則正しく担子柄が充たされ，或は之の間隙が腔室に拡り，その壁面に子実層が裏付けらる，この型は *Melanogastraceae*, *Sclerodermatineae*, *Nidulariineae* に存す。

3. 珊瑚型 (Koralloider Typus)：—緻密なる基部或は中軸の褥状組織より放射状に隆起を生じ，之れが伸長し珊瑚状に分岐す，その襞の間が腔室となる，この型は *Hymenogastraceae*, *Lycoperdaceae* に見られ，型的のものは特に簡単なる *Hysterangiaceae* に於て見らる。

4. 多冠型 (Mehrhütiger Typus)：—前型に於て放射状となりたる珊瑚枝の一が肥大し，その先端が第一次殻皮の下に至りて楯形に拡がり，そのために放射状に配列する有柄の傘の群となる，この型は *Hysterangiaceae* の属 *Protubera*, *Phallogaster* 等，並に *Clathraceae* に於て認めらる.

5. 単冠型 (Einhültiger Typus)：—この型は前型の横側に存する傘はなく，最終の枝のみが鐘形の傘を作ると見做すべきものにて，この鐘状傘の内側に更に珊瑚状基層板を成生す，この型の主中茎は柱軸となりて残り或は下方に伸びて茎となる。

以上の如くその発生状態の複雑なるため他の菌群に於て見ることを得ざる特異の形態の変化を来し，他の菌群との或は本目中の各種属との相互親近関係等未だ不明なるところ多し。

従来本目に属する菌は約120属，1200—1500種を記さるるも研究尚不充分のもの多し，全世界に産するも特に熱帯地方に多し，多くは林内生にて草原及び畑地に生じ，湿地に多きも *Tulostoma* の如く砂地に生ずるものあり；経済的価値あるもの殆どなく，ショウロ等少数の食用菌を含む。

亜目検索表

A. 基本体，又は胞子塊は熟時まで殻皮内に存在し或は殻皮より抽出さる(稀に殻皮を欠く)。
- a. 基本体は熟時に至るも原形を保つ，子実体は多くは塊茎状にて地中生，稀に有茎のものあり。
  - (I) ヒメノガスター亜目 **Hymenogastrineae** (510)
- b. 基本体は胞子成熟に及び崩壊す，殻皮は熟時開口す。
  - α. 基本体は胞子成熟に及び粉状或は粥状の胞子塊となる。
    - I. 基本体は一様に分布せる担子柄を有し，或は組織の中に担子柄が巣状或は室状に群存し，初めより一定の腔室を生じ其壁に子実層を作るものと全く異なる。
      - (II) ニセショウロタケ亜目 **Sclerodermatineae** (519)
    - II. 基本体は基層板の成長によりて腔室を作られ，其壁に子実層が裏づけさる。
      - 1. 基本体は托を有せず，胞子塊は粉状，弾糸を有す。
        - (IV) ホコリタケ亜目 **Lycoperdineae** (538)
      - 2. 基本体は中央或は外囲に擬柔組織の海綿状托を有し，その伸長によりて子実体より挙上さる，胞子塊は粥状，弾糸なし。
        - (V) スッポンタケ亜目 **Phallineae** (562)
  - β. 基本体の腔室は中間組織の崩壊によりて硬き或は脆き小殻粒となりて互に遊離す。
    - (III) チャダイゴケ亜目 **Nidulariineae** (532)

B. 基本体又は胞子塊は熟時まで中心茎を有する傘の下側或は内側に存す。
- (VI) エッキホコリタケ亜目 **Podaxineae** (579)

(Ⅰ) Hymenogastrineae ヒメノガスター亜目

ED. FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. Ⅰ, 1** : 296. 1900; Ⅱ, **7a** : 7. 1933.

Hymenogastreae TULASNE, Sci. Nat. Bot. Acotyl. 394. 1846—1849.

Hymenogastrei TULASNE, Fungi Hypog. 61. 1851.

菌糸は地中に蔓延し，弛く纒絡し，或は更に結束して紐状の根状菌糸束を作り，その太きものは皮部と髄部とに区別し得るに至る，子実体は菌糸束の表面の多くの箇処より或はその末端に菌糸の小集塊として生ず，菌糸の色は多くは白色，稀に黄色或は褐色を呈し，菌根を作るもの或は寄生性を有するものを知らる；子実体は地中生にて塊茎状，稀に洋梨形或は紡錘形又は不正形にて，半地中生又は地上生のものあり，通常無茎なるも，僅少のものは有茎，子実体の表面は平滑或は綿毛状にて，時に菌糸束を纒う，淡色にて熟後濃色となる；殼皮は 1～3 層，外層は繊維組織にて通常各菌糸は表面に平行して走り，中層及内層は柔組織或は寒天状なり，多くは永存性にて裂開或は剝離することなし；基本体の中央に柱軸を有するもの或は柱軸より放射状に走る基層板を存するもの或は腔室が一様に散在するもの等あり；担子柄が特に子実層を作らずして基本体内に群生し，所謂巣（nest）を作るものあるも，多くは1定の腔室を作り，その内壁に子実層を作る，腔室は球形，長形，迷路状をなし，腔室との間，即ち基層板は弾性の軟骨質，或は肉質（前者は *Hysterangiaceae* の特性），成熟後に至るも自ら液化或は粉状となりて崩解し去らざるを本目の特徴とす；担子柄は多くは根棒形にて 1～8 胞子を坐生或は柄生，胞子の形及色は種々あり；通常嚢状体を欠如し，弾糸を有するものなし，本目所属菌は広く世界に分布するも，地中生にて外形単純なるがために見のがされ易く，本邦既知種甚だ少し。

本邦既知科検索表

A. 基本体は担子柄の集まりたる巣或は膠状物を充たせる室を有し，或は室壁に退化的の子実層状をなすも真の子実層を作らず；発育様式は多孔型。

メラノガスター科 Melanogastraceae (510)

B. 基本体は中空の腔室を有し，その壁面は真の子実層に被わる。

a. 基本体は多少に拘らず肉質。

α. 基本体は肉質或は臘質，柱軸なく，稀に有茎；多孔型；胞子平滑。

ショウロタケ科 Rhizopogonaceae (511)

β. 基本体は肉質，柱軸は著しからずして子実体基部に突起状或は樹枝状をなすも子実体の上端に達せず；珊瑚型；胞子有疣。

ヒメノガスター科 Hymenogastraceae (514)

γ. 基本体は肉質，一個の基本組織を貫通して頂点に達し殼皮に沿うて拡がる柱軸を有す；単冠型；胞子は有刺。

ヒドナンギウム科 Hydnangiaceae (516)

b. 基本体は軟骨状寒天質，柱軸は著しく，樹枝状をなし，時に基本組織を貫通し子実体の上端に及び傘状となる，稀に柱軸は子実体の基部より殼皮に沿うて頂点に達するものあり；珊瑚型或は多冠型。

ヒステランギウム科 Hysterangiaceae (517)

Melanogastraceae FISCHER メラノガスター科

ED. FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, **7a** : 9. 1933.

Melanogastreae TULASNE, in DURIEU, Explor. Sci. Algérie, **I** : 396. 1846—1849.

子実体は塊茎状にて，稀に遅れて有茎となるものあり；担子柄は集団となりて基本体内に巣状となり或は膠状物又は擬柔組織を充塞せる室の内壁に生ずるも退化的にて真の子実層ならず；熟後基本体は粉状とならず，弾糸なし；基本体が粉状とならざる点に於て明かにニセショウロタケ科と区別さる。

本邦既知属

シンジュタケ属 **Boninogaster** (510)

〔因記〕 1915 年 LLOYD 氏が安田篤氏送附の菌を MELANOGASTR sp. (Myc. Writ. 4, Lett. **54** : 3.) として記せるものあり。

Boninogaster KOBAYASI
シンジュタケ属

KOBAYASI, Bot. Mag. Tokyo, **51** : 753. 1937.

菌蕾は球形，無毛，基端に長き根状束あり，殼皮は3層より成り，柱軸なく，無茎；外皮は細き繊維，中皮は太き繊維より成り，内皮は擬柔組織にて無色；

基本体は多くの小室より成り，粉状とならず；小室は充塞され，球形或は不正形なるも縦長とならず；担子柄は取り囲める無色の菌糸より起り，円筒形，4—5 胞子を坐生す；胞子は長シトロン形，平滑，有色；発育形式は多孔型。

（本属名は Bonin（小笠原）gaster〔希〕（腹）より出づ）

基準種　*B. phalloides* KOBAY.

本邦既知種　シンジュタケ ***B. phalloides***(511)

Boninogaster phalloides KOBAY.

シンジュタケ

KOBAYASI, Bot. Mag. Tokyo, 51 : 753, f. 3, pl. 16, f. F. 1937.

子実体は材上生，球形，高さ約 6mm，径約 7mm，平滑，無毛，白色，基端に長さ 2.5 cm に及ぶ繊維を被むる白色の殆ど単一なる根状束を有す；殻皮は3層より成り，外皮は中皮より離れ易く，厚さ 25—50μ ありて，幅 0.9—1.4μ の細き無色菌糸より成る，中皮は緊緻，白色，厚さ 130—190μ，無色の幅 2.1—4.2μ，稀に 5.5μ に及ぶ菌糸より成る，内皮は擬柔組織にて白色，厚さ 265—365μ ありて，球形の無色なる径 8—25μ の細胞より成る；基本体は灰緑色～鶯色，粘湿性，実質の菌糸は幅 1.5—3μ，有隔，無色，分岐す；小室は密集，不正球状，屢々伸長；担子柄は円筒形，無色，幅約 3μ，4—5 胞子を坐生す；胞子は卵形或はシトロン形，オリーブ色，油球なく，5—5.5×2.9—3.2μ。

所在及産地

タコノキ(*Pandanus boninensis* WARBURG)の腐株上に孤生—春　小笠原島

和名　シンジュタケ（真珠茸）〔小林〕

Rhizopogonaceae DODGE ショウロタケ科

in GÄUMANN & DODGE, Comp. Morph. Fungi, 408. 1928.

子実体は球状或は塊状にて地中生，半地中生或は地表生，表面は平滑或は根状菌糸束を纏う，肉質或は蠟質；殻皮は1層にて稀に2層，菌糸組織或は仮柔組織より成り，裂開或は剝脱することなし；基本体をなす小室は多面体状，球状或は不正形にて初め寒天状組織にみたされ，或は中空にて，内壁に子実層発達し，成熟時胞子は室の1部をみたすことあり；柱軸を存せず；発育形式は多孔型。

本邦既知属

ショウロタケ属 **Rhizopogon** (511)

Rhizopogon FRIES et NORDH. em. TUL.

ショウロタケ属

FRIES & NORDHEIM, Symbolae Gasteromyc. 5. 1818—TULASNE, Giornale Botanico Italiano, 2 : 56. 1844—ED. FISCHER, in ENGLER & PRANTL. Nat. Pfl.-fam. II. 7a : 18. 1933.

Splanchnomyces CORDA, in STURM, Deut. Fl. III, 3 : 3, pl. 2. 1831; Icon. Fung. 5 : 26. 1842. pr. p.

Hysteromyces VITTADINI, Notizie Nat. Civili Lombardia, 1 : 340. 1844.

菌糸は白色或は淡褐色にて結束して繊維状或は根状菌糸束となり地中に拡布し，多くの子実体を生ず；子実体は地中生或は半地中生，球形，楕円形或は凹凸ある塊茎状をなし，大さ種々あり，多少特有の香臭あり，表面に菌糸纏絡し多少密着す；殻皮は単層，稀に2層，表面は菌糸束以外は平滑，薄き膜質或は厚くして肉質或は木栓質，菌糸叢より成る，初め白色，のち汚黄色，黄色，緑色，赤色，赤褐色等となり，乾時黒色となるものあり，基本体より離れ難く或は全く剝離せず；基本体は緊密，初め肉質，脆弱，白色にて漸次褐色或は黄褐色となる，小形なる球形，長形，迷路状の不規則に密集する腔室より成り，腔室の壁に子実層あり，子実層中に厚膜の細胞存在し胞子と共に永く残存することあり，腔室の壁は肉質或はのちに寒天質となり，永存或は崩壊液化す；担子柄は棍棒形或は円柱状，2—8，通常 6—8 胞子を坐生或は柄生す；胞子は楕円形或は紡錘形，平滑，単室，1—2 油球を含む，初め無色，熟後オリーブ色，黄色，褐色，灰赤色等を帯ぶ。分布広汎，約 30 種；菌根を作る，食用となるものあり。

（本属名は〔希〕riza（根）pogon（鬚）より出づ）

基準種　*R. luteolus* FR. et NORDH.

本邦既知種検索表

A. 殻皮は薄く，赤褐色を呈せず，子実層中に厚膜細胞なし。

a. 基本体は幼時白色，のち淡黄褐或は黄褐色となり肉質，胞子は無柄。

ショウロタケ ***R. rubescens*** (512)

b. 基本体は幼時より淡黄褐色にて肉質なるも，のち濃色となり，組織は崩壊して粘液状となる，胞子は普通有柄。

ホンショウロタケ ***R. luteolus*** (513)

B. 殻皮厚く，その細胞内に赤褐色の色素ありて，その為子実体表面は赤褐色を呈し，のち黒変す，子実層中に厚膜細胞あり，胞子は無柄。

オオショウロタケ ***R. nigrescens*** (513)

Rhizopogon rubescens (TUL.) TUL.

ショウロタケ

TULASNE, Giorn. Bot. Ital. 2 : 58. 1844; Fungi. Hypog. 89, pl. 2, f. 1; pl. 11, f. 4. 1851—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 294. 1860—FUCKEL, Symb. Mycol. 38. 1869—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 359, f. 105. 1871—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 7 : 233. 1879; Enchir. Fung. 246. 1886—WINTER, Pilze, 1 : 881. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 161. 1888—MASSEE, Monogr. Gast. 39, pl. 1, f. 7-7a. 1889; Brit. Fung. Fl. 1 : 16, f. 3. 1892; Brit. Fungi, 459. 1911—KARSTEN, Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 19. 1889—HESSE, Hypog. Deut. 1 : 92. 1891—W. G. SMITH, Brit. Basid. 491, f. 144. 1908—ZELLER & Dodge, Ann. Missouri. Bot. Gard. 5 : 18. 1918—REA, Brit. Basid. 29. 1922—LLOYD, Myc. Writ. 7 : 1171, f. 2313. 1922—COKER & COUCH, Gast. 28, pl. 21—22, 106, f. 7-10. 1928—BRESADOLA, Icon. Myc. 23 : pl. 1148. 1932—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, **7a** : 19, f. 11, D. 1933—KOBAYASI, Nova. Fl. Jap. Hymenogast. Phall. 6, f. 2-3. 1938—M. LANGE, Dansk. Bot. Arkiv, 16 : 55, f. 13, a-d. 1956.

(田中，植．雑．4 : 386. 1890—白井，日．隠．図．1 : pl. 19. 1900; 日．菌．目．ed. 2, 581. 1917; ed. 3, 342. 1927—松村，植．名鑑，1 : 170. 1904—LLOYD, Myc. Writ. 4, Lett. 47 : 9. 1913—安田，植．雑．27 : 470. 1913—KAWAMURA, Illus. Jap, Fungi, pl. 9, f. 4-6. 1914; 日．菌．図説，n. 182. 1929; 日．菌．図鑑，6 : 675, f. 651. 1949—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori. Soc. Agr. Sci. 3 : 120. 1931—遠藤茂，生物の研究，1 : 12. 1932—松浦，茸類辞典，185, f. 217. 1933; 応用菌蕈学，492, 1226, f. 369—370. 1941—小林，日．隠．植．図鑑，575, pl. 278, f. 4—8. 1939—牧野，日．植．図鑑，1015, f. 3043. 1940—原，日．菌．目．315. 1954)

Lycoperdon Tuber (THUNBERG, Fl. Japon. 349. 1784)

Lycoperdon aestivum WULFEN, in JACQ. Colect. pl. 1, 349. 1788.

Rhizopogon aestivus FR. Syst. Myc. 2 : 294. 1823—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 713. 1889—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilz, 2(2) : 739. 1912.

(P. HENNINGS, Bot. Jahrb. 28 : 271. 1901—松村，植．名鑑，1 : 170. 1904)

Rhizopogon albus WALLR. Fl. Crypt. Germ. 2 : 868. 1831—33.

Hymenangium virens KLOTZSCH, in DIETR. Fl. Boruss. 6 : 382. 1838—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 250. 1844.

Hysterangium rubescens TUL. Ann. Sci. Nat. II, 19 : 375. 1843.

Rhizopogon luteolus KROMBH. Nat. Abbild. Beschr. Schwämme, 8 : 21, pl. 60, f. 13—15. 1843. (non FR. et NORDH.)

Hymenangium aestivm RABH. Deut. Crypt. Fl. 1 : 250. 1844.

Melanogaster Berkeleyanus BROOME, Ann. Mag. Hist. 15 : 41. 1845.

Tuber cibarium MIQUEL, Prol. Fl. Iapon. 392. 1866—7.

(松村，植．名鑑，1 : 177. 1904)

Tuber virens ALB. et SCHW. Consp. Fung. Lusat. 77, pl. 8, f. 3. 1805.

Hysterangium Duriaeanum TUL. Act. Soc. Linn. Bord. 13 : 263. 1844.

Splanchnomyces luteolus CORDA, Icon. Fung. 6: 38, pl. 7, f. 69. 1854.

Splanchnomyces Cauvinianus CORDA, l. c. 39, pl. 8, f. 72.

Splanchnomyces Rabenhorstii CORDA, l. c. 39, pl. 8, f. 73.

Rhizopogon virens KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 354. 1876—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 713. 1889—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 739, pl. 143, f. 1—2. 1912.

Rhizopogon virens—(SCHROET. Gartenfl. 1886: 11—P. HENNINGS, Hedwigia, 29, Beibl. 157. 1900—松村，植．名鑑，1 : 170. 1904—白井，日．菌．目．ed. 2, 581. 1917)

Rhizopogon virescens—(白井，日．菌．目．86. 1905)

菌糸束は根状をなし，白色にて地中に蔓延し多くの子実体を群生す，子実体は半地中生，卵形，扁球形，稀に瘤状隆起ある塊茎状をなし，径 1—6 cm，軟くして弾性あり，微かに特有の香を有す，表面は殆ど平滑，粘性ならず，地中にあるものは白色にて，のち黄色となるも空気に触れて淡紫赤色或は淡赤褐色となり，乾燥せば更に濃色となる，子実体の側面及び下面に単一或は分岐せる甚だ少数の白色～帯赤色の菌糸束密着し，基端の1或は数個の多少著しき根状束に移る；殻皮は単層にて薄膜状，屡々裂目を生ず，厚さ約 160—220μ，表面に平行に走る有隔，薄膜，分岐する菌糸より成り，内部に至るに従つて密となる，初め白色，のち黄褐色，切傷時赤味を加う；基本体は弱粘性の肉質，初め白色，のち黄褐色，遂に暗褐色となる；腔室は球形或は不規則なる出入あり，或は迷路状をなし，内部は空虚，壁は厚さ 40—50μ，無色にて成熟後崩解せず；担子柄は洋梨形或は棍棒形にて子実層より上部突出し，長さ 12—14μ，普通小柄なく，4—8 胞子を坐生す，胞子生成後担子柄は殆ど全く萎凋す；胞子は長楕円形，平滑，殆ど無色或は淡黄色，9—14×3.5—4.5μ，1～2 油球

を含む；糸状体は長形，1—3 細胞より成り，棍棒状体欠如．食用。

所在及産地

松林砂地—春秋

本州，四国，九州　欧．北米．亜(西比)

和名　ショウロタケ（松露茸）〔古名〕ホド（塊）〔古名〕

ネバリショウロ，コメショウロ，モチショウロ，アワショウロ，ムギショウロ等の方言あり。

Rhizopogon luteolus FR. et. NORDH. emend. TULASNE

ホンショウロタケ

FRIES & NORDHEIM, Symb. Gast. 1 : 5. 1817—FRIES, Syst. Myc. 2 : 294. 1823—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 246. 1844—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 8. 1867—FUCKEL, Symb. Myc. 38. 1869—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 2 : 376. 1873; Enchir. Fung. 246. 1886—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 354. 1876—WINTER, Pilze, 1 : 880. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 161. 1888—MASSEE, Monogr. Gast. 40, pl. 1, f. 9. 1889; Brit. Fung. Fl. 1 : 16. 1892; Brit. Fungi, 49. 1911—TULASNE, Fung. Hypog. 87, pl. 1, f. 5; pl. 11, f. 5. 1891—HESSE. Hypog. Deut, 1 : 87, pl. 2, f. 1—4; pl. 5, f. 5—7; pl. 7, f. 29; pl. 9, f. 265. 1891—LLOYD, Myc. Writ. 1 : Gen. Gast. 13, pl. 1, f. 17—18. 1902 ; 7 : 1171, pl. 226, f. 2316—2318. 1923; 1304, pl. 248, f. 2912. 1924—W. G. SMITH, Brit. Basid. 492. 1908—ZELLER & DODGE, Ann. Missouri. Bot. Gard. 5 : 10. 1918—REA, Brit. Basid. 29. 1922—COKER & COUCH, Gast. 33. 1928—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 19, f. 11, A-C. 1933—KOBAYASI, Bot. Mag. Tokyo, 51 : 797, f. 1. 1937; Nova. Fl. Jap. Hymenogastr. Phall. 7, f. 4-6. 1938—M. LANGE, Dansk. Bot. Arkiv, 16 : 54, f. 13, e-f. 1956—HEIM, Champ. Eur. 2 : 499, f. 322. 1957.

（原，日．菌．目．314．1954）

菌糸束は根状にて淡黄色，有機質土中に蔓延し，外生菌根を作る；子実体は半地中生，扁球形，卵形，洋梨形，或は瓢形等，径 1.5—3 cm，初め白色なるも速に帯黄色となり，のち淡赤褐色に変じ，空気に触れて急変せず，少しく悪臭あり，表面に纒着する菌糸束はショウロに比すれば其数多く，細くして網状に連結し，弾性ありて殻皮と同色或は僅か濃色にて有隔の菌糸より成る；殻皮は1層，厚さ 300—450 μ，膜質，或はやや強靱なる肉質，表面に平行に走る有隔，分岐，薄膜の菌糸より成り，表面に近く疎，淡褐色を呈す；基本体は初め淡緑褐色，のち濃褐色となる；腔室は球形，長形或は迷路状にて成熟後胞子をみたす，壁は厚さ 30—60μ，無色，早く寒天質となり，次で崩解して粘液状となる；担子柄は棍棒形或は棒状，20×4—5μ，無色，頂に 4—6 の小柄ありて胞子を着く；胞子は長橢円形或は紡錘形，平滑，褐色，7.5—12.5×3.5—5μ，通常 9.5×4μ，2～3 油球を含む；棍棒状体は柱状，子実体は悪臭ありて幼時已に内部変色するため食用とせず。

所在及産地

松林地—春，秋

小笠原島，?本土—欧．北米．阿．濠．亜(支)

和名　ホンショウロタケ（真松露茸）〔小林〕
ショウロモドキ（擬松露）〔小林〕

Rhizopogon nigrescens COKER et COUCH

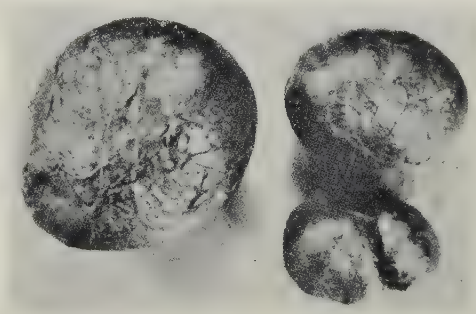
オオショウロタケ

COKER & COUCH, Gast. 30, pl. 23, 107, f. 5-8. 1928—KOBAYASI, Nova Fl. Jap. Hymenogastr. Phall. 9, f. 7-9. 1938.

（KOBAYASI, Bot. Mag. Tokyo, 51 : 757, f. 5. 1937—原，日．菌．目．315．1954）

Rhizopogon boninensis S. ITO et IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 15 : 11, f. 3. 1939.

子実体は半地中生，扁球形或は卵形，径 2.5—5.5 cm，高さ 2—3cm，白地に紫褐色の斑点あり，空気に触れて漸次黒変し，遂に乾燥して真黒色となる，殆ど粘性なく，特別の香あり，表面に根状の菌糸束纒着し，甚だ細かき網目を作り，殻皮と同色なり；殻皮は単層，厚さ 0.7—1mm，或は更に薄き部分もあり，表面に平行に走る菌糸より成る，菌糸は径 5—8μ，分岐し，細胞中に赤色の粒状物を含む；基本体は初め白色，崩解後黄褐色に変ず；腔室は球状，長形或は迷路状，長さ 1.5mm に及び，隔壁は厚さ 33—75μ，寒天状肉質，子実層及子実下層に厚膜細胞ありて，橢円形或は棍棒形，16～30×5—8μ，強く光を屈折す．胞子成熟後基本体は崩解し，胞子及



第 226 図　オオショウロタケ Rhizopogon nigrescens（今井氏）

厚膜細胞のみ粘液中に残存す; 担子柄は柱状, 子実層上に突出し, 26—30×3.5μ, 無色, 5個の胞子を生じ, 小柄は著しからず; 胞子は楕円形或は紡錘形, 淡黄褐色, 5—8.5(普通 6.5—7)×3—3.5μ, 1—2 油球を含む。

所在及産地

路傍, 林中—周年　　小笠原島—北米

和名 オオショウロタケ(大松露茸)〔小林〕

ムニンショウロ(無人島松露)〔今井〕

疑問種

Rhizopogon violaceus (ムラサキショウロ)

ZELLER & DODGE, Ann. Missouri. Bot. Gard. 5 : 21. 1918—KOBAYASI, Nova. Fl. Jap. Hymenogastr. Phall. 10. 1938. (Cfr. LLOYD, Myc. Writ. 7 : 1211. 1923) = *Hysterangium Phillipsii* HARKNESS sensu LLOYD, Myc. Writ. 5 : 611, f. 865. 1916. (原, 日. 菌. 目. 315. 1954

Hymenogastraceae FISCHER ヒメノガスター科

ED. FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 308. 1900; II, 7a : 13. 1933.

Splanchnomycetes CORDA, Icon. Fung. 5 : 26. 1842. pr. p.

Euhymenogastrei TULASNE, Fungi Hypogaei, 63. 1851. pr. p.

子実体は地中生, 或は半地中生, 塊茎状, 表面は平滑, 或は濃色の菌糸束を纏う; 殻皮は単層にて, 稀に2層のものあり, 残存性或は剝落性, 菌糸叢或は仮柔組織よりなる; 基本体は肉質にて, 決して軟骨状寒天質ならず, 腔室は不規則形, 或は迷路状にて, 不規則に配列するか, 或は子実体の基部, 柱軸等より周辺に向つて放射状に並ぶ; 柱軸の発達悪く, 又常に肉質なり; 基本体の発育形式は珊瑚型。

本邦既知属検索表

A. 胞子は担子柄上に通常2個着生, 球形ならず, 表面は平滑或は疣状, 網状, 其他種々の凹凸あり, 別に外膜を存することあり。

ヒメノガスター属 **Hymenogaster** (514)

B. 胞子は担子柄上に4個着生, 球状にて棘状突起あり。

ジャガイモタケ属 **Octaviania** (515)

Hymenogaster VITT.

ヒメノガスター属

VITTADINI, Monogr. Tuberac. 20. 1831—ED. FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 14. 1933.

Hymenangium KLOTZSCH, in DIETRICH, Fl. Reg. Boruss, 7 : n. 466. 1839—CORDA, Icon. Fung. 5 : 28. 1842. pr. p.

Splanchnomyces CORDA, Icon. Fung. 6 : 36. 1854. pr. p.

菌糸は細く白色, 淡黄色或は種々の色を呈し, 集りて繊維状或は綿毛状の菌糸束を作り, 地中に蔓延す; 子実体は地中生或は半地中生, 球形, 腎臓形, 洋梨形或は不正形にて瘤状突起あり, 肉質にて少しく弾性あるも, のち脆弱となる, 稀に子実体の下面に菌糸束を纏う, 白色, 汚褐色, 灰色, 卵黄色, 赤褐色等を呈す; 殻皮は肉質, 繊維質, 膜質或は紙質等, 表面は平滑或は綿毛状, 光沢あるもの或はなきものあり, 単層或は2層より成り, 通常基本体の隔壁と連結し剝離し難し; 基本体は初め白色或は鮮色なるも, のち褐色, 赤褐色, 黄色, 灰緑色等となる; 腔室は子実体の基部より放射状或は不規則に並び, 内部は空虚にて, のち1部胞子にみたされ, 熟後も容易に崩解せず, 隔壁は薄く, 乾時屢々裂ける, 柱軸は存在せざるも, 子実体の基部に不明瞭なる突起あり; 担子柄は棍棒形, 1—4, 通常2小柄を有し胞子を着く; 胞子は卵形, 楕円形, レモン形, 紡錘形, 披針形等ありて先端に突起を有し, 基部に柄を有することあり, 表面は平滑, 或は疣状, 網状, 皺状, 或は其他種々の凹凸あり, 表皮の外側に外膜を有することありて, 多少皺を有し, 褐色, 黄褐色, 黒褐色等を呈す。

(本属名は〔希〕ymen(皮) gaster(腹) より出づ)

基準種 *H. citrinus* VITT.

本邦既知種検索表

A. 殻皮は仮柔組織よりなり, 胞子は外膜を有す。

サザレイシタケ ***H. pacificus*** (514)

B. 殻皮は菌糸叢よりなり, 胞子に外膜なし。

マメツブタケ ***H. arenarius*** (515)

Hymenogaster pacificus KOBAY.

サザレイシタケ

KOBAYASI, Bot. Mag. Tokyo, 51 : 755, f. 4. 1937; Nova. Fl. Jap. Hgmenogastr. Phall. 14, f. 10—13. 1938.

(原, 日. 菌. 目. 160. 1954)

子実体は扁球形或は塊茎状, 径 1.5—2 cm, さ高

1cm，平滑，白色，触手により黄褐色或は汚褐色となる；殼皮は厚さ約 300μ，仮柔組織より成り，各細胞は球状，無色，径 5—15μ あり，表面に接して薄き菌糸を纒う，；子実体内部はほぼ基本体にみたされて褐色を呈し，その基部に不明確なる柱軸様突起あり；腔室は子実体基部より放射状或は不規則に並び，球形或は長形，内部は空虚なり；隔壁は無色菌糸より成り厚さ 15—40μ；子実層は高さ約 50μ，担子柄は棍棒形，35—40×8—9μ，2—4 小柄を有す；胞子は楕円形，卵形，紡錘形，先端に乳頭突起，基端に短柄あり，長さ 11.5—17.5μ，褐色，1 油球を含む，膜は平滑にて更に外側に外膜あり，溝を有す；子実層中に先端の尖れる棍棒状体あり。

所在及産地

庭地上—春　小笠原島

和名　サザレイシタケ（漣石茸）〔小林〕

Hymenogaster arenarius TUL.

マメツブタケ

TULASNE, Fung. Hypog. 73, pl. 10, f. 2. 1851—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 168. 1888—HESSE, Hypog. Deut. 1 : 124. 1891—LLOYD, Myc, Writ. 6 : 889, f. 1543. 1919—SOEHNER, Hedwigia, 64 : 201, f. 11—14. 1923—KOBAYASI, Nova. Fl. Jap. Hymenogastr. Phall. 15. 1938.

（原，日．菌．目．159．1954）

Hymenogaster Suzukianus P. HENN. Bot. Jahrb. 32 : 41 1902—SACCARDO, Syll. Fung. 17 : 240. 1905.

（松村，植．名鑑，1 : 148．1904—白井，日．菌．日．43．1905；ed. 2．289．1917；ed. 3．167．1927）

子実体は球形～卵形，径約 1cm，表面白色，乾時褐変す；殼皮は厚さ 200～320μ，乾燥せば縮小し 35—40μ となる，菌糸叢（組織）より成り，各菌糸は薄膜，無色，径 7—8μ；子実内基部に突起状をなす柱軸あり；基本体は白色，のち灰色となり，腔室は球形にて柱軸より放射状に配布さる，その壁は厚さ 22—35μ，纖維状細胞より成り，その径 3—5μ，薄膜なり，子実下層は仮柔組織状；担子柄は円筒形，30—35×5—7μ，長き 2 小柄を具う；胞子は卵円形，楕円形或はレモン形，表面に疣状突起ありて縦に約 6—8 個宛並ぶ，先端に乳頭突起ありて基部に柄を有す，赤褐色，11—18×8.5—11μ。

所在及産地

林中砂質或は砂礫質土中—春　本州—欧

和名　マメツブタケ（豆粒茸）〔小林〕

Octaviania VITT. em. CORDA, sensu KOBAY.

ジャガイモタケ属

VITTADINI, Monogr. Tuberac. 15. 1831—CORDA, Icon. Fung. 5 : 26. 1842—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 17. 1933—KOBAYASI, Nova Fl. Jap. Hymenogastr. Phall. 16. 1938.

Octavianina KUNTZE, Rev. Gen. Plant. 3 : 501. 1898.

菌糸は綿毛状，白色，地中に蔓延するも著しからず；子実体は地中生或は半地中生，塊茎状，初め脆き肉質，のち多少寒天質或は軟骨質を加う，表面平滑，初め淡色，漸次濃色となり，触手せる部は屢々変色す；殼皮は単層にて剝離し難し；基本体中に柱軸あり，柱軸は樹枝状に分岐し，或は子実体基部に円錐形となりて存在す；腔室は球形或は迷路状，内部は空虚なり；髄層は柱軸と同質の菌糸叢より成り，寒天状肉質にて空気に触れて紫紅色，褐色等に変じ，腔室間に間隙を生ずることあり；担子柄は円柱状或は棍棒形，4 小柄を生ず；胞子は球形，棘状突起を有し，有色。

（本属名は V. OTTAVIANI 氏の姓より出づ）

基準種　*O. asterosperma* VITT.

本邦既知種

ジャガイモタケ ***O. columellifera*** (515)

Octaviania columellifera KOBAY.

ジャガイモタケ

KOBAYASI, Bot. Mag. Tokyo, 51 : 297, f. 1—8, pl. 5, f. A-G. 1937; Nova Fl. Jap. Hymenogastr. Phall. 18, f. 14—16. 1938.

（小林，日．隠．植．図．577，pl. 279，f. 1—5. 1939）

子実体は多少半地中生，散生或は群生，幼時洋梨形或は卵形，のち扁球形或は塊茎状，径 4—7cm，基部短き根状菌糸束に連る，その附着点の周囲に瘤状の突起あり，表面は無毛平滑，幼時淡黄色，漸次黄褐色となり，傷時黒変す，熟後亀裂を生じ易し；殼皮は単層，厚さ約 1cm，部分的に更に厚く，剝離し難し；子実体内の基部及中心部に柱軸あり，数本の枝に分れ，更に多くの小枝を放射状に出し，その先端屢々殼皮に達するものあり，中心に空虚を生ずることあり，弾力ある肉質にて，のち寒天質を帯び，空気に触れて紫藍色となる；基本体は軟骨状肉質，弾性，白色或は淡黄褐色，のち暗色となる；腔室は柱軸の枝によつて分たれたる数個の円錐形の各区内

に無数に存在し，迷路状，球形或は楕円形，その壁は厚さ 0.1—0.2mm; 子実層は担子柄及糸状体よりなり，棍棒体なし，子実下層は仮柔組織状；担子柄は棍棒形，内容淡黄褐色，45—60×10—14μ，4小柄を具う；胞子は球形，大形の円錐状突起を密生し，突起を含めて径 15—20μ，通常 16μ，黄褐色～紫褐色，1大油球を含む。

所在及産地

蘚間及落葉間—秋　本州

和名　ジャガイモタケ（馬鈴薯茸）〔小林〕

Hydnangiaceae FISCHER　ヒドナンギウム科

ED. FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 30. 1933.

子実体は地中生，幼時傘形，後傘縁の下屈によりて塊状となる；柱軸は基本体を貫きて茎となり，或は無茎；基本体は肉質にて膠質ならず，傘の内側に存し，後全く或は下側を除き閉塞さる；子実層は屢々嚢状体を有す，時に乳管を存す；胞子は有刺，僅か有色，通常球形なり。

本邦既知属

ミツエタケ属 **Arcangeliella** (516)

Arcangeliella F. CAVARA
ミツエタケ属

F. CAVARA, Nuovo giornale botanico Italiano, 7 : 117—128. 1900—ZELLER & DODGE, Ann. Missouri Bot. Gard. 6 : 49. 1919—ED. FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 31. 1933.

子実体は群生，地中生或は半地上生；幼時傘形，下屈しその下側に基本体あり；殻皮は薄く，剝げ難く，老時基部消失す；柱軸は単一或は分岐し，上部屢々殻皮として拡り，基部は多少無性にて茎状となり菌糸束に連る，通常乳汁あり；基本体は脆弱，乳汁あり；腔室は小にて不正形，柱軸及び基部より多少放射状をなす；担子柄は 2—4 胞子，長き小柄上に生じ，嚢状体を有す；胞子は球形或は楕円形，有色，有刺～有疣。

（本属名は伊太利植物学者 ARCANGELI 氏の姓より出づ）

基準種　*A. Borziana* CAVARA

本邦既知種　ミツエタケ ***A. mitsueae*** (516)

Arcangeliella mitsueae IMAI
ミツエタケ

IMAI, Sci. Rep. Yokohama National Univ. II, 6 : 5. 1957.

子実体は地上生，不正球形，扁球形或は類洋梨形，径 1—6cm，高さ 1—4cm；表面は綿絮状或は殆ど平滑，往々微かに亀裂す，幼時シトロン黄色，黄黄土色或は硫黄色，のち淡帯褐黄土色或はセピア色に変り，酒精中に貯蔵せば帯黒色となる；生時切断せば初め白色，のちサルビア青色となり，遂に濃藍或は黒色となる；殻皮は厚さ 250—600μ，幅 5—10μ の帯黄色の菌糸より成り，僅かに帯褐色の内容を含む幅約 5—10μ の乳汁菌糸を混ず，殻皮の表面には毛状を呈する幅 3—10，多くは 3—6μ の菌糸を有す；殻皮と基本体の間には乳汁菌糸多数存在し褐色を呈す；基本体は珊瑚型，断面ネープル黄色或は橙黄色，幅 3—5μ の帯黄色の菌糸と帯褐色内容を含む乳汁菌糸とより成る；腔室は円墻形，円形或は迷路状にて多少放射状に配列す；子実層は初め白色，のち灰色となり，空気に触れてサルビア青或は帯黒色となる，但し酒精中にては殆ど栗色を呈す，菌糸は円筒形，円墻形或は僅か棍棒形をなし，長さ 18—30μ，幅 5—10μ にて平行に走る；無性基部は大にて高さ及び幅 2cm に及び，断面の約 1/3 を占む，初め白色にて濃藍色となり，遂に帯黒色となる，幅 4—15μ の帯黄菌糸より成り，各菌糸は多少平行に走る；柱軸は無性基部より殆ど掌状に拡り，多少平行に走る幅 3—7μ の帯黄菌糸より成り，殆ど乳汁菌糸なし；担子柄は棍棒形，長さ約 30μ，幅 10μ，無色，4胞子，胞子脱落後萎縮す；小柄は長さ 6—9μ にて細し；胞子は球形にて大なる円錐形～ピラミッド形の寧ろ鈍頭の長さ及び幅約 3μ の刺を密布す，刺を含めて径 12—21μ，帯黄褐色，稀に長さ約 5—6μ，幅 1.5μ の無色菌糸を柄状に附す，胞子紋は帯褐色。

所在及産地

路傍草地上—夏秋　本州

和名　ミツエタケ（光枝茸）〔今井〕

Hysterangiaceae FISCHER ヒステランギウム科

ED. FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. I, 1**: 304. 1900.

子実体は塊茎状，地中生，稀に有茎にて地上生，多くは著しき根状菌糸束を有す；殻皮は細き菌糸より成る単一層を有し，或は内側に基層と同様なる層或は寒天層を具う；基本体は軟骨状寒天質；子実体の基部或は根状菌糸束の髄部が子実体内に入りて作りたる褥状或は膠質の組織（柱軸）より放射状に出で多くは叉状分岐する基層板となり，基本体を多数の区劃に分つ，稀に柱軸が基本組織を貫通し或は其外囲をめぐりて頂点に達するものあり；珊瑚型或は多冠型にて単冠型のものあり。

本邦既知属検索表

A. 基本体内部は熟時数個の小区劃に分たれ，各小区劃は放射状に配列す。

ニカワショウロタケ属 **Protubera**(517)

B. 基本体内部に小区劃なく，柱軸は外囲に沿つて頂点に達す。

ハハシマアコウショウロタケ属 **Circulocolumella** (518)

Protubera MOELLER ニカワショウロタケ属

MOELLER, Brasil. Pilzblum. 10. 1895—ED. FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a: 26. 1933.

子実体は球形或は塊茎状，地中生，のち半地中生となる，基端に比較的太き分岐少き菌糸束あり；殻皮は1層，薄膜質，仮柔組織或は菌糸組織より成り分離し難し；内部は半透明なる寒天質より成り，その中に袋状の小区劃が完全に埋在し，子実体のほぼ中央を中心として放射状に排列す，各小区の1端は殻皮と紐状の組織によりて連絡することあり，卵形，楕円形或は舌状等にて或は少しく分岐し多数の腔室より成り，暗緑色或は暗褐色，その壁は薄くして寒天質なり，腔室は長形或は迷路状にて初め空虚にて内壁に子実層発達し，胞子熟後腔室内を充たすことあり；担子柄は棍棒形，小柄明かならず，6—8胞子を着く；胞子は桿形或は楕円形，平滑，淡緑褐色或は暗色を呈す。

（本属名は pro-〔希，羅〕(前) *Tubera* (属名) より出づ）

基準種　*P. maracuja* MOELLER

本邦既知種検索表

A. 子実体内部の寒天組織は密にて容易に崩解せず。

ニカワショウロタケ ***P. borealis*** (517)

B. 子実体寒天組織は熟後液化し中空となり，小区劃は箇々独立す。

シラタマタケ ***P. nipponica*** (517)

Protubera borealis IMAI ニカワショウロタケ

IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 50: 223, f. 4. 1936—KOBAYASI, Nova Fl. Jap. Hymenogastr. et Phall. 23, f. 17. 1938.

子実体は半地中生，扁球形或は塊状，径 2—5cm，膠状軟骨質，表面は白色，或は少しく灰白色，のち淡黄色を帯び，粗糙にて溝あり，底部は白色菌糸束に連る；殻皮は1層，厚さ 0.5—1mm，寒天質，白色，光沢あり，基本体より剝げ難く，短大の菌糸状細胞より成り，その幅 10—15μ；子実体内部には基本体より成る不規則長形の小区劃ありて放射状に並び，子実体中心縦断面にて約 20 個あり，緑褐色にて殻皮と細き紐状物にて連る；小区劃間は一様に無色なる細長の菌糸より成る寒天状組織にてみたされ子実体成熟するも崩解せず，又内部に空虚の部分を作らず；腔室は小区劃間に密に形成され，球状或は不正長形，長さ 160—500μ，その隔壁は小区劃間と同一組織よりなる；子実層は腔室の内壁に生じ厚さ 15μ；担子柄は8胞子；胞子は長楕円形，鏡下にて淡黄緑色，4—4.5×1.8—2.2μ。

所在及産地　杉林内一夏　北海道

和名　ニカワショウロタケ（膠松露茸）〔今井〕

Protubera nipponica KOBAY. シラタマタケ

KOBAYASI, Nova Fl. Jap. Hymenogastr. et Phall. 25, f. 18—22. 1938.

子実体は地上生，扁球形，寒天質，径 3—5cm，高さ 2.5—3.5cm，表面白色或は淡黄褐色，平滑，スッポンタケ類の菌蕾（卵）に類似す，少しく凹凸ありて熟後浅く亀裂す；根状菌糸束は子実体の底部に存し分岐少し；殻皮は甚だ薄く厚さ 20—30μ，寒天状膜質，菌糸層より成り，菌糸に2種あり，1は幅 3.5—7μ，多隔にて分岐し，無色，他は細くして殆ど隔壁なき寒天質の菌糸なり；基本体は放射状に排列する数個の舌状小区劃より成る；小区劃は長さ及び幅は約 1cm，厚さ約 5mm，軟骨状寒天質，内

部は球形，楕円形或は迷路状に連る多数の小室に分たれ暗緑色，小室の内壁に子実層あり，隔壁及び小区劃の表面は残存性の透明なる寒天層に包まる；子実体の中央及び小区劃間の寒天層は成熟後液状となり流出し，その為中央に空虚の部分を生ず；担子柄は棍棒形，小柄なく，6—7胞子を頂生す；胞子は楕円形，平滑，淡暗緑色，4.2—4.9×1.8—2.1μ。

所在及産地

林地—秋　　　本州

和名　シラタマタケ（白玉茸）〔小林〕

Circulocolumella S. Ito et Imai

ハハシマアコウショウロタケ属

Imai, Sci. Rep. Yokohama National Univ. II, 6 : 3. 1957.

Stalactocolumella Imai, Bot. Mag. Tokyo, 63 : 28. 1950. nom. nud.

子実体は地表生，類球形；殼皮は厚く，膠質，2層；基本体はオリーブ黒色，腔室は小形；柱軸は基本体の基部より壁に沿うてその頂部に達して環状となる，幅約 1 mm，膠質，白色；担子柄は糸状；胞子は楕円形，平滑。

（本属名は〔希〕circulus（環）columella（小柱）より出づ）

基準種　*C. hahashimensis*（S. Ito et Imai）S. Ito et Imai

本邦既知種　ハハシマアコウショウロタケ *C. hahashimensis*（518）

Circulocolumella hahashimensis
(S. Ito et Imai) S. Ito et Imai

ハハシマアコウショウロタケ

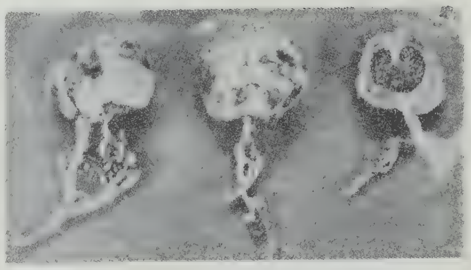
Imai, Sci. Rep. Yokohama National Univ II, 6 : 4, pl. 1, f. 1—8. 1957.

Hysterangium hahashimense S. Ito et Imai, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 15 : 10, f. 2. 1937 —Kobayasi, Nova Fl. Jap. Hymenogastr. Phall. 21. 1938.

（原，日．菌．目．167. 1954）

Gelopellis hahashimensis Zeller, Mycologia, 39 : 284. 1947.

Stalactocolumella hahashimensis Imai, Bot. Mag. Tokyo, 63 : 28. 1950.



第 227 図　ハハシマアコウショウロタケ
Circulocolumella hahashimensis（今井氏）

子実体は群生或は孤生，地表生，類球形或は不正球形，径 1—2 cm，生時白色或は帯白色，底部に帯白色，膠質，幅 1.5 mm にて分岐する菌糸紐を有す；殼皮は甚だ厚く，2層より成り，外層は厚さ約 200μ，密に纏絡せる菌糸より成り，各菌糸は無色，幅約 4—10μ，内層は厚さ 0.5—3 mm，弛く纏絡せる薄膜の幅 1.5—2.5μ の菌糸より成り，寒天の内に埋まり，稀に幅広き（5—6μ）結節状或は頭部幅 12μ に及ぶ菌糸を混ず；基本体は淡オリーブ～オリーブ黒色なり；柱軸は白色にて膠質；子実体の縦断面に於ては基本体の頂点より垂下せる真直無枝円筒形（長さ約 1mm）物として認めらる，然れども実は基本体の基部なる根状菌糸紐より起り基本体の外囲に沿うて頂点に達したるものにて，全柱軸は環状をなす，斯の如き特種の柱軸を有するものは従来知られざるところなり，柱軸は網状組織より成り，その菌糸は殼皮内層の菌糸より僅か広幅なり；分割板は柱軸より殼皮に向つて起り，基本組織はそれより基本体の中心に向つて起る；担子柄は糸状，通常 8 胞子，幅約 1.5—2μ，無色；小柄は不明瞭；胞子は楕円形，平滑，殆ど無色，4—5×2—2.5μ。

所在及産地

林地—秋

和名　ハハシマアコウショウロタケ（母島アコウ松露茸）〔今井〕

疑問種

Hysterangium cerebrinum Lloyd, Myc. Writ. 7 : 1119. 1922; Stevenson & Cash, New Fung. Names Lloyd, 198. 1936＝*Rhizopogon cerebrinum* Lloyd, Myc. Writ. 6 : 889, f. 1545. 1919.

（Ⅱ）Sclerodermatineae ニセショウロタケ亜目

ED. FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 32. 1933.

Sclerodermei FRIES, Syst. Myc. 3 : 5. 1832.

Plectobasidiineae (*Sclerodermineae*) SCHROET. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 62. 1897.

菌糸は粗綿状或は根状菌糸束を作り，或は稀に菌核となる；子実体は地中生或は地表生にて塊茎状，球形或は棍棒形等にて無茎或は有茎；基本体は多くの場合，少くともその発育初期に於ては真の腔室（即ち室壁を有し其内面は子実層を裏づけらる）を作らざるを特徴とす，担子柄は1様に不規則に分布し，或は担子柄が集団となり，所謂巣を作り，或は組織が疎開して間際を作り腔室状となること等あり；担子柄は棍棒形或は洋梨形にて，その先端或は側面に2—12 胞子を坐生或は柄生す；熟後基本体は粘球となるものあるも，多くの種類に於ては粉状の胞子塊となり，殼皮は星状裂開或は頂口を開きて胞子を散ず；胞子は球形，楕円形等にて平滑或は突起を有す，広く各地より知らるるも，その数少なく，菌根を作るもの多きが如し，食用或は有毒と称せらるるものあり，通常5科に分つも内1科 *Glischrodermataceae* は本邦に産するを知られず。

本邦既知科検索表

A. 基本体は熟後粉状となる

a. 殼皮は多くは単一；弾糸は多くは痕跡的或は欠如。

ニセショウロタケ科 **Sclerodermataceae** (519)

b. 殼皮は 2～多層，内皮は紙状強靱にて熟後外方の層より分離す；弾糸を有す。

I. 内皮は無茎にて熟後も原位置に存す。

クチベニタケ科 **Calostomataceae** (525)

II. 内皮は熟後茎上に存して殼皮の外部の層から挙揚さる。

ケシボウズタケ科 **Tulostomataceae** (528)

B. 基本体は熟後粘液化して1粘球となる。

タマハジキタケ科 **Sphaerobolaceae** (531)

Sclerodermataceae FISCHER　ニセショウロタケ科

ED. FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 334. 1900. pr. p. ; l. c. II, 7a : 35. 1933.

Sclerodermei FRIES, Syst. Mycol. 3 : 5. 1832. pr. p.

Pisocarpiaceae CORDA, Icon. Fung. 2 : 24. 1838.

子実体は多くは地表生，稀に地中或は半地中生，類球形，無茎或は不規則なる根状の茎を存す；殼皮は多くは単一にて強靱，稀に薄膜質，熟後不規則に或は唇状に裂開或は崩解す；基本体は無性菌糸の脈即ち基層板によつて明かに界されたる円形或は不整形の小区劃に区分され，その内部に担子柄は子実層を作らずに全く不規則に塡充さる；担子柄は洋梨形～棍棒形，熟後基本体は胞子粉となり，弾糸は欠如或は痕跡的なり，以上記するものは本科の正常なる特性にて，稀に異例のものを報ぜらるることあり，FISCHER 氏 (1933) は本科に 10 属を収む，内本邦にて報告せられしものは只3属に過ぎず。

本邦既知属検索表

A. 子実体は基部に根状部なきか或は茎部を有し，子座の上に存することなし。

a. 基本体は熟後粉状となる，殼皮は多くは厚くして強靱。

ニセショウロタケ属 **Scleroderma** (519)

b. 基本体は崩壊前に個々の担子柄の巣が密なる小塊粒となりて分離す，殼皮は薄くして崩解す。

コツブタケ属 **Pisolithus** (523)

B. 子実体の下面は広く拡がりて子座に連り，外見粘菌 *Lycogala* に類似す。邦産調査未了　(**Lycogalopsis**) (525)

Scleroderma PERS.

ニセショウロタケ属

PERSOON, Syn. Meth. Fung. 150. 1801. pr. p. —ED. FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 36. 1933.

Lycoperdastrum MICHELI, Nova Pl. Gen. 219. 1729.

Omlycus RAFINESQUE, Prec. Somiol. 52. 1814.

Actigea RAFINESQUE, l. c.

Sterrebekia LINK, Mag. Ges. Nat. Freunde Berl. 7 : 44. 1816.

Actinodermium NEES, Syst. Pilze Schw. 135. 1817.

Phlyctospora CORDA, in STURM, Deut. Fl. 3 : (19, 20) 51. 1841.

Sclerangium LÉVEILLÉ, Ann. Sci. Nat. Bot. 10 : 130. 1848.

Stella MASSEE, Jour. Myc. 5 : 184. 1889.

子実体は類球形，倒卵形或は洋独楽形にて，地中生或は地表生，基部に根状菌糸束を附し或は不規則なる茎状部に伸長す；殻皮の表面は平滑或は鱗片又は亀裂を有す，熟後緊緻にて革質，或は脆くして砕け易し，密なる纒れし菌糸より成り，遂に不規則に開き，或は星芒状の唇片に裂開し，薄き直ちに崩解する内皮によりて内部の胞子塊を包まるることあり；基本体は初め肉質にて白色，のち暗色となる，多数の無性の菌糸脈（基層板）に界されたる担子柄を塡充する小区劃（腔室状，但し無壁）に分たる，熟後乾燥し，粉化す；担子柄は洋梨形～棍棒形にて早く萎凋す；胞子は 2—5 個，互に多少離れ，屢々担子柄上に不等高に生ず，担子柄萎凋後外囲に密なる菌糸を纒うことあり，各胞子は球形，熟後暗色となる，表面に突起刻紋あり；弾糸は痕跡的にて無性菌糸脈の残物なり；各国に分布し，種類数約 40 内外，3 亜属 *Phlyctospora*, *Scleroderma* 及び *Actigea* とす，本邦後 2 者を知らる。

（本属名は（希）scleros［堅き］derma（皮）より出づ）

基準種　*S. verrucosum* PERS.

本邦既知種検索表

A. 子実体は地中生ならず，基端に根状部を存し屢々不規則なる茎に伸長す；殻皮は熟後頂部に於て不正に開く。（亜属　*Scleroderma*）

a. 殻皮は生時厚肉質，乾時薄くして革質或は殆ど軟骨質となる；子実体は無茎或は極めて短かき茎を有す；子実体は概して小形（径 2—5 cm）.

α. 殻皮は黄土色或は帯褐色にて，著しき鱗片或は疣を有し，胞子に著しき網状刻紋あり。

ニセショウロタケ ***S. aurantium***(520)

β. 殻皮は革色，或は栗毛色，大部分平滑にて部分的に鱗片あり，胞子は刺状突起を有す。

タマネギモドキタケ ***S. cepa*** (521)

b. 殻皮は生時薄くして，乾時破れ易し。

α. 殻皮多くは平滑，子実体は小形(径 2—5cm)。

I. 殻皮は帯黄色にて殆ど平滑或は微細の網目あり，胞子に著しき網状刻紋あり。

ハマニセショウロタケ ***S. bovista***(521)

II. 殻皮は開く前は藁色，平滑にて側面に大なる亀裂を生ず，胞子は刺状突起を有す。

ウスキニセショウロタケ

S. flavidum (522)

β. 殻皮は淡褐或は黄褐色にて，微小鱗片疣を密布す，子実体は屢々有茎，胞子に刺状突起あり，子実体は小形或は大形。

I. 子実体は径 2.5—8 cm，高さ 2—10 cm，欧洲系種。

ザラッキカタワタケ

S. verrucosum (522)

II. 前者に近きも子実体小形にて径 0.8—5 cm，多くは 1.5—2.5cm，北米系種。

ヒメカショウロタケ

S. lycoperdoides (523)

B. 子実体は地下生ならずして基部根状なること前亜属の如きも，殻皮は厚くして熟後星芒状唇片に裂開反転し，薄き崩れ易き内皮は胞子塊を包みて残存する異点を有す，大形にて径 4—13.5cm，裂開せば 15cm に及ぶ。（亜属　*Actigea*）

ツチグリカタワタケ ***S. polyrhizum*** (523)

Scleroderma aurantium (L.) PERS.

ニセショウロタケ

PERSOON, Syn. Meth. Fung. 153. 1801—HOLLÓS, Gast. Hung. 131, 177, pl. 23, f. 8—15, pl. 29, f. 11. 1804—QUÉLET, Enchir. Fung. 243. 1886—LLOYD, Myc. Writ. 1, Lyc. Austr. 15, pl. 31, f. 6, 7. 1905—REA, Brit. Basid. 49. 1922—COKER & COUCH, Gast. 165, pl. 91, 120. 1928—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, **7a** : 37, f. 26, B–C. 1933—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 273, pl. 111, f. 3. 1950.

（川村，植．雜．23 : 364. 1909—松浦，茸類辞典 157，f. 183. 1933；応用菌蕈学 593. 1941—原，日．菌．目．328. 1954）

Lycoperdon aurantium L. Sp. Pl. 2 : 1184. 1753—BULLIARD, Champ. Fr. 1 : 158, pl. 270. 1791—DECANDOLLE, Fl. Fr. 2 : 266. 1815.

Lycoperdon cervinum BOLT. Fung. 3 : 39, pl. 116. 1791.

Scleroderma citrinum PERS. Syn. Meth. Fung. 153. 1801.

（白井，日．菌．目．ed. 2, 601. 1917; ed. 3, 353, 1927—原，日．菌．目．328. 1954）

Lycoperdon tessulatum SCHUM. Saell, Enum. 2 : 191. 1803.

Scleroderma squamosum CHEV. Fl. Par. 357. 1826.

Scleroderma vulgare HORN. Fl. Dan. pl. 1969, f. 2. 1829—FRIES, Syst. Myc. 3 : 46. 1829—VITTADINI, Monogr. Lyc. 61. 1843. pr. p.—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 295. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 303, pl. 15, f. 4. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 10. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 374, f. 116. 1871—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 2 : 372. 1872—WINTER, Pilze, 1 : 888. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 134. 1888—MASSEE, Brit. Gast. 49, pl. 3, f. 45. 1889; Brit.

Fung. Fl. 1 : 21, f. 4. 1892; Brit. Fungi, 463, pl. 35, f. 6. 1911—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 704. 1889—W. G. SMITH, Brit. Basid. 479, f. 134. 1908—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1. 1** : 337, f. 175, B-C. 1900—PETRI, Fl. Ital. Crypt. Gast. 94, f. 53—54 (4). 1909—ROLLAND, Atl. Champ. 96, pl. 110, n. 254. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 763, pl. 145, f. 1—2. 1912—BRESADOLA, Icon. Myc. 23 : pl. 1141. 1932—HEIM, Champ. Eur. 2 : 496, f. 320, c, pl. 3, f. 4. 1957.

(川村, 日. 菌. 図. 4 : pl. 14, f. 7—9. 1915—沢田, 台. 菌. 調. 報. 5 : 98. 1931—牧野, 日. 植. 図鑑, 1013, f. 3037. 1940—広江, 応用菌蕈学, 1253. 1941—原, 日. 菌. 目. 328. 1954)

子実体は扁球形, 径約 2—5 cm, 基部波状をなし, 無茎; 殻皮は帯黄黄土色或は褐色, 生時厚くして約 2 mm, 乾時 1 mm 以下となる, 切断せば桃色に変ず, 表面に明かなる亀裂あり, 且つ其中央に瘤を有するものあり, 亀裂は屢々浮き彫り状模様をなす, 熟後徐々に不規則片に裂開するも星芒状とならず; 基本体は灰色, 後殆ど黒色となり, 基層板は白色を呈し網状なり; 胞子は球形, 黒褐色, 径 8—11 μ, 著しき網状突起を存す。

所在及産地　林間腐蝕土上—夏秋
本州, 九州—欧. 北米. 阿. 濠

和名　ニセショウロタケ (贋松露茸)〔川村〕
アワダンゴ (粟団子)
イヌショウロ (犬松露)

Scleroderma cepa PERS.

タマネギモドキタケ

PERSOON. Syn. Meth. Fung. 155. 1801—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 11. 1867—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 135. 1888—HOLLÓS, Gast. Hung. 130, 177, pl. 23, f. 3—7. 1904—LLOYD, Myc. Writ. 1, Lyc. Austr. 14, pl. 31, f. 1. 1905—PETRI, Fl. Ital. Crypt. Gast. 99, f. 54(1), 55. 1909—REA, Brit. Basid. 50. 1922—COKER & COUCH, Gast. 167, pl. 92, 93, 120, 1928—BRESADOLA, Icon. Myc. 23 : 1143, f. 1. 1932—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat Pfl.-fam. II, 7a : 37. 1933.

(LLOYD, Myc. Writ. 4, Lett. 42 : 13. 1912 ; Lett. 49 : 10. 1914; Lett. 53 : 8. 1914; 7 : 1188. 1923—安田, 植. 雑. 28 : 92. 1914—白井, 日. 菌. 目. ed. 2, 601. 1917; ed. 3, 352. 1927—小林, 日. 隠. 植. 図. 573, pl. 277. f. 1—4. 1939—広江, 応用菌蕈学, 1253. 1941—今関, 原色きのこ 68 (右上) 1942—川村, 日. 菌. 図鑑, 7 : 711, f. 709. 1949—原, 日. 菌. 目. 328. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 124, f. 322, pl. 58, f. 323. 1957)

Lycoperdon cepae-facie VAILL. Bot. Par. 123, pl. 16, f. 5, 6. 1727.

Scleroderma cepoides S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 582. 1821.

Tuber solidum WITH. Bot. Arr. ed. 6, 4 : 443. 1830.

子実体は扁球形, 径 2—5 cm, 殆ど無茎, 基部に白色の菌糸束を存す, 表面は初め殆ど純白, 速に藁色或は黄褐色となり, 後暗赤褐色となる, 摩擦せば暗赤紫色に変ず, 熟後多少亀裂を生じ, 大部分平滑或は微小なる鱗片を以て蔽わる; 殻皮は生時厚さ 1.5mm に及び, 乾時 0.5mm 以下, 緊密にて革質, 切断すれば初め白色なるも後暗赤紫色となる; 胞子塊は黒褐色より紫黒色となり, 白色網状の基層板あり; 胞子は球形, 紫褐色, 径 8—12 μ, 表面に鋭尖の著しき針状突起あり。

所在及産地
草原地—夏秋　本州—欧. 北米

和名　タマネギモドキタケ (擬玉葱茸)〔安田〕

Scleroderma bovista Fr.

ハマニセショウロタケ

FRIES, Syst. Myc. 3 : 48. 1829—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 295. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 303. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 375. 1871—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 363. 1876—WINTER, Pilze, 1 : 889. 1884—QUÉLET, Enchir. Fung. 243. 1886—SACCARDO, Syll. Eung. 7 : 135. 1888—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 704. 1889—MASSEE, Brit. Gast. 51, pl. 2, f. 36. 1889; Brit. Fung. Fl. 1 : 22. 1892; Brit. Fungi, 465. 1911—HOLLÓS, Gast. Hung. 132, 178, pl. 23, f. 16—20. 1904—W. G. SMITH, Brit. Basid. 480. 1908—PETRI, Fl. Ital. Crypt. Gast. 96, f, 54(2). 1909—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 764. 1912—REA, Brit. Basid. 49. 1922—COKER & COUCH, Gast. 163, pl. 89, 120. 1928—BRESADOLA, Icon. Myc. 23 : pl. 1142. 1932—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 37, f. 25. 1933.

(小林, 日. 隠. 植. 図. 571, pl. 276, f. 5—6. 1939—川村, 日. 菌. 図鑑, 7 : 712, f. 710. 1949—原, 日. 菌. 目. 328. 1954)

Lycoperdon polyrhizon BATSCH, Elench. Fung. 1 : 147. 1783.

Sclerodermatis vulgaris forma VITT. Monogr. Lyc. 61. 1843.

子実体は地表生, 扁球形, 径 3—4.5 cm, 高さ 2—2.5cm, 基部に白色の多く分岐せる菌糸束を存す, 表面は平滑なるも, 熟するに及んで頂部に小形なる浅き亀裂を生ずることあり, 初め淡黄色或は黄褐色, 後汚褐色にて頂部黒色となる傾きあり, 尚屢々黒点を存す; 殻皮は生時厚さ 0.7—1mm, 断面白色, 切断及摩擦によりて変色せず, 熟後頂より不規則に裂開し, 胞子を飛散す, 基本体は半成熟時紫灰色の肉

質にて，網状に光る白色の基層板あり，網目は球状又は多角形，熟後黄色にて甚だ明かに残存す；胞子塊は黒褐色，胞子は球形，褐色，径 10—14μ，多くは 12μ，1 油球を存す，表面に網状突起を有し，尚泡状無色の被覆物を存することあり。

所在及産地

海岸砂地—夏秋　　本州—欧．北米．濠

和名　ハマニセショウロタケ（浜擬松露）〔小林〕

Scleroderma flavidum Ell. et Ev.

ウスキニセショウロタケ

Ellis & Everhart, Jour. Myc. 1 : 88. 1875—Saccardo, Syll Fung. 7 : 139. 1888—Lloyd, Myc. Writ. 1, Lyc. Austr. 14, pl. 30, f. 4, 6. 1905—Coker & Couch, Gast. 162, pl. 87, 88, 120. 1928—Cleland, Toadst. Mushr. S. Austr. 2 : 319. 1935.

(Lloyd, Myc. Writ. 2, Lett. 7 : 1. 1905)

子実体は初め一部或は殆ど全部地中に埋在，扁球形，径 2—4 cm，無茎或は太き基部あり，群生時に叢生す；表面は淡黄色，上部多少亀裂し，側辺は乾泥の如き大なる亀裂を生ずることあり；殻皮は緊緻にて薄く，乾時厚さ 0.5—1 mm，不規則に裂開し，胞子塊を露す；基本体は種々の色を呈し，暗褐色，基層板の多数の菌糸を混ず；胞子は球形，径 8—12 μ，著しき刺を有し，屢々外輪を存す。

所在及産地

砂地—夏秋　　本州—北米．濠．阿

和名　ウスキニセショウロタケ（淡黄贋松露茸）

Scleroderma verrucosum Pers.

ザラツキカタワタケ

Persoon, Syn. Meth. Fung. 154. 1801—Fries, Syst. Myc. 3 : 49. 1829—Rabenhorst, Deut. Krypt. Fl. 1 : 296. 1844—Berkeley, Outl. Brit. Fung. 303. 1860—Kickx, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 10. 1867—Cooke, Handb. Brit. Fungi, 1 : 375. 1871—Quélet, Champ. Jura Vosg. 2 : 372. 1873; Enchir. Fung. 243. 1886—Winter, Pilze, 1 : 889. 1884—Barla, Champ. Nice, 123. 1886—Saccardo, Syll. Fung. 7 : 136. 1888—Massee, Brit. Gast. 50, pl. 3, f. 47. 1889; Brit. Fung. Fl. 1 : 22. 1892; Brit. Fungi, 465. 1911—Schroeter, Pilze Schles. 1 : 704. 1889—Lloyd, Myc. Writ. 1 : 77, f. 38. 1901; Lyc. Austr. 15, pl. 31, f. 8—9. 1905—Hollós, Gast. Hung. 131, 178, pl. 23, f. 21—29. 1904—W. G. Smith, Brit. Basid. 480. 1908—Petri, Fl. Ital. Crypt. Gast. 97, f. 54(3). 1909—Migula, Krpyt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 764. 1912—Rea, Brit. Basid, 50. 1922—Bresadola, Icon. Myc. 23 : pl. 1143, f. 2. 1932—Fischer, in Engler & Prantl, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 37, f. 26 (A). 1933—Cleland, Toadst. Mushr. S. Austr. 2 : 318. 1935—Wakefield & Dennis, Comm. Brit. Fungi, 273, pl. 111, f. 4. 1950—Heim, Champ. Eur. 2 : 496, f. 321, A. 1957.

(Lloyd, Myc. Writ. 1 : 108, 109. 1902; 2, Lett. 12 : 2. 1906; 5, Lett. 66 : 7. 1917—松村，植．名鑑，1 : 172. 1904—白井，日．菌．目．90. 1905; ed. 2. 601. 1917; ed. 3. 353. 1927—川村，日．菌．図鑑，7 : 710, f. 708. 1949—原，日．菌．目．328. 1954)

Lycoperdon defossum Batsch, Elench. Fung. 3 : 125. 1789—Sowerby, Col. Fig. Engl. Fung. pl. 311. 1801.

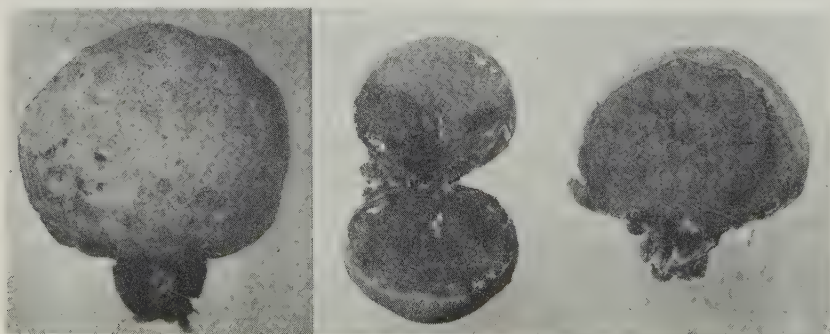
Lycoperdon dispar Batsch, Elench. Fung. 3: 147. 1789.

Lycoperdon verrucosum Bull. Champ. Fr. 1 : 157, pl. 24. 1791—DeCandolle, Fl. Fr. 2 : 265. 1815.

Scleroderma areolatum Ehrenb. Sylv. Myc. Berol. 27. 1818—Rabenhorst, Deut. Krpyt. Fl. 1 : 296. 1844.

Sclerodermatis vulgaris forma Vittadini, Monogr. Lyc. 58. 1843.

Scleroderma vulgare var. *verrucosum* Lloyd, Myc. Writ. 1 : 72, 79, f. 43. 1901.



a　　b

第 228 図　ザラツキカタワタケ Scleroderma verrucosum
a. 子実体 ×1/2　　b 同切断面 ×2/5（大谷氏）

子実体は類球形，径 2.5—8cm，高さ 2—10cm，基部は多少伸長し茎状となるか或は全く無茎；表面は黄土色或は汚褐色にて微小の暗色粒に蔽われ，稀に平滑；殻皮は上部薄く，脆弱なり；基本体は暗褐色，基層板

は白色；不規則に裂開す；胞子は暗褐色，鈍頭刺を有し，球形，径 10—14μ。

所在及産地

林間砂地—夏秋　　本州—欧．阿．亜(瓜)

和名　ザラツキカタワタケ（粗豪不具茸）〔梅村〕

ショウロダマシ（詐松露茸）〔川村〕

Scleroderma lycoperdoides SCHW.

ヒメカタショウロタケ

SCHWEINITZ, Fung. Carol. n. 350. 1822—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 137. 1877—COKER & COUCH, Gast. 168, pl. 94, 120. 1928—FISCHER, in ENGLER & PRANTL. Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 37. 1933.

Scleroderma verrucosum forma *minor* P. HENN. Bot. Jahrb. 32 : 41. 1903.

Scleroderma tenerum BERK. et. CURT.

(LLOYD, Myc. Writ. 2, Lett. 7 : 1. 1905; Lett. 9 : 2. 1906; Lett. 19 : 5. 1908—安田，植．雑．28: 235. 1914—白井，日．菌．目．ed. 2. 601. 1917; ed. 3. 353. 1927—広江，応用菌蕈学，1253. 1941—原，日．菌．目．328. 1954)

子実体は群生或は叢生，類球形，或は扁球形，径 0.8—5cm，多くは 1.5—2.5cm，表面は淡褐或は黄褐色にて，微小なる暗褐或は赤褐色の永在性の鱗片全面に点在す，老時黒色となる，平滑或は微粗面，下面扁平にて急に長短不定の根状部となりそれより菌糸束に連る；殻皮は薄く，生時幼き間は厚さ 0.5—0.7mm，後薄くなり，その内層は基層板に連り同じく繊維状にて熟後消失し，革質の外層のみを残す；基本体は小形にて径 0.2—0.5mm，基層板は甚だ薄く，繊細なる稍々真直の菌糸より成る；胞子塊は幼時乾酪色，後濃褐色，更に淡灰褐色となる；殻皮は明かに裂開することなく，緩漫に崩壊するを常とし，老時基部は皿状となりて残存す；胞子は球形，濃褐色，7.5—18.5μ，多くは 11—14μ，表面に刺を稍々密に存す，時に外輪を有するものあり。

所在及産地

地上或は腐材上—夏秋

北海道，本州，四国—北米

和名　ヒメカタショウロタケ（姫硬松露茸）〔安田〕

Scleroderma polyrhizum PERS.

ツチグリカタワタケ

PERSOON, Syn. Meth. Fung. 156. 1801—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 37. 1933.

Scleroderma geaster Fr. Syst. Myc. 3 : 46. 1829—VITTADINI, Monogr. Lyc. 203. 1843—QUÉLET, Champ. Jura Vorg. 2 : 372. 1873; Enchir. Fung. 243. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 138. 1888—MASSEE, Monogr. Gast. 51, pl. 2, f. 35. 1889; Brit. Fung. Fl. 1 : 22. 1892; Brit. Fungi, 465. 1911—LLOYD, Myc. Writ. 1 : 82, f. 47. 1902; 144. 1903; Lyc. Austr. 14, pl. 30, f. 1—3. 1905—W. G. SMITH, Brit. Basid. 480. 1908—REA, Brit. Basid. 50. 1922—COKER & COUCH, Gast. 161, pl. 82, 86, 120, f. 1. 1928.

(白井，日．菌．目．ed. 2. 601. 1917; ed. 3. 353. 1927—原，日．菌．目．328. 1954)

Sclerangium polyrrhizon LÉV. Fragm. Mycol. 132. 1848—PETRI, Fl. Ital. Crypt. Gast. 102, f. 56. 1909.

子実体は類球形にて圧辺されて屡々不正形となる，径 4—13.5cm，裂開せば 15cm に及ぶ，無茎にて殆ど熟する迄全く地中生，或は屡々半分以上埋在す，基部は拡布せる菌糸盤或は綿状菌糸束に連る；殻皮は堅くして強靱，生時厚さ 5mm に及び，乾時約 1—2mm，表面は殆ど白色，後黄色或は暗黄泥土色或は藁色となる，粗面にて亀裂及び鱗片に裂け，熟後不定数の裂片に裂け，乾けば裂片反転し，ややツチガキタケの如し；胞子塊は濃褐色を呈し，露出す；胞子は球形，僅かに紫色を帯ぶる濃褐色，径 5—10μ，多くは 6.5—8μ（刺を含む），表面に約 0.5—1μ の長さの刺を有し，不完全なる網状をなす。

所在及産地

林内地上—夏秋

本州—欧．北米．阿．濠．亜(中亜)

和名　ツチグリカタワタケ（土栗不具茸）

Pisolithus ALB. et SCHW.

コツブタケ属

ALBERTINI & SCHWEINIZ, Consp. Fung. Lusat. 82. 1805—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 705. 1889—ED. FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II. 7a : 39. 1933.

Lycoperdoides MICHELI, Nova Pl. Gen. 219. 1729.

Polysaccum DE CANDOLLE et DESPORTES, Rap. Voy. Bot. Françe, 1 : 8. 1807.

Pisocarpium LINK, Observ. 1 : 33. 1809.

Polypera K. SCHUBERT, in FICINUS, Fl. Gegend um Dresd. II, 2 : 306. 1821—1823.

? *Durosaccum* LLOYD, Myc. Writ. 7 : 1306. 1924.

Scleroderma PERS. pr. p.

子実体は半地中生，或は地表生；不正球形にて基端多少狭細となり明かに茎状を呈し，稀に長茎のことあり，其基端には屡々菌糸集まり頭状をなす；殻皮は薄くして膜質，熟後不規則に崩解す；基本体は

無性菌糸脈にて界せられ，子実体頭状上部にあるものは塡充され有性なるも，外囲に存するものは無性空窩なり，子実体の成熟に従つて基本体の頂部より基部に向つて漸次熟度を進め，球形或は多角形の小塊粒（peridiole）となりて互に遊離し集団となる，遂にのち粉状胞子塊となる；担子柄は洋梨形，頂に2—6 胞子を殆ど坐生す；胞子は球形，有疣或は平滑，褐色；弾糸は痕跡的なり．SACCARDO氏は21種を記せるも疑問種多し。

（本属名は〔希〕pisos（豌豆）lithos(石) より出づ）

基準種 *P. tinctorius* (PERS.) COKER et COUCH

本邦既知種 コツブタケ ***P. tinctorius*** (524)

Pisolithus tinctorius (PERS.)
COKER et COUCH
コツブタケ

COKER & COUCH, Gast. 170, pl. 96—97, 120, f. 13—19. 1909—CUNNINGHAM, Proc. Linn. Soc. N. S. Wales 56 : 288. 1931—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 40, f. 28. 1933—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 320. 1935.

(小林，日．隠．植．図．571, pl. 276, f. 1—4. 1939—原，日．菌．目．275. 1954)

Lycoperdoides tuberosum MICHEL. Nova Pl. Gen. 219, pl. 98, f. 2. 1729.

Lycoperdon capitatum GMELIN, in LINNÉ, Syst. Nat. 2 : 1463. 1735.

Lycoperdon arrhizum SCOP. Delic. Ins. 40. 1786.

Scleroderma tinctorium PERS. Syn. Meth. Fung. 152. 1801.

Scleroderma arrhizum PERS. Syn. Meth. Fung. 152. 1801.

Pisolithus arenarius ALB. et SCHW., Consp. Fung. Lusat. 82, pl. 1, f. 3. 1805—SCHROETER. Pilze Schles. 1 : 706. 1889—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 338, f. 176, A, B, 1900—HOLLÓS, Gast. Hung. 134, pl. 27, f. 1—4, pl. 28, f. 1—6. 1904—PETRI, Fl. Ital. Crypt. Gast. 108, f. 58(1, 3), 1909—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 765. 1912—REA, Brit. Basid. 50. 1922.

Polysaccum acaule DC. Rap. Voy. Bot. 2 : 80. 1807; Fl. Fr. 6 : 103. 1815.

Polysaccum crassipes DC. Rap. Voy. Bot. 1 : 8. 1807; Fl. Fr. 6 : 103. 1815—FRIES, Syst. Myc. 3 : 53, 1829—CORDA, Icon. Fung. 5 : 63, pl. 4, f. 41. 1842—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 294. 1844—WINTER, Pilze, 1 : 890. 1884—BARLA, Champ. Nice, 125, pl. 47, f. 11. 1886—MASSEE, Grev. 16 : 28. 1887—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 147, 490. 1888—LLOYD, Myc. Writ. 1, Gen. Gasterom. 19, pl. 7, f. 36. 1902; Lyc. Austr. 13, pl. 29, f. 3, 4. 1905—HEIM. Champ. Eur. 2 : 497, f. 321, c. 1957.

(LLOYD, Myc. Writ. 4, Lett. 56, 4. 1915)

Endacinus tinctorius RAF. Précis Samiol. 51. 1814.

Lycoperdon capsuliferum SOW. Col. Fig. Engl. Fung. pl. 425. 1815.

Piscocarpium arenarium NEES, Syst. Pilze Schw. 39, pl. 13, f. 131 B. 1817.

Piscocarpium clavatum NEES, Syst. Pilze Schw. 138. 1817.

Polysaccum tuberosum FR. Syst. Myc. 3 : 55. 1829-RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 294, 1844-WINTER, Pilze, 1 : 890. 1884—MASSEE, Grev. 16 : 29. 1887—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 149. 1888—LLOYD, Myc. Writ. 1, Lyc. Austr. 13, pl. 29, f. 5—6. 1905.

(LLOYD, Myc. Writ. 2, Lett. 15 : 4. 1907; 4. Lett. 56 : 4. 1915)

Polysaccum turgidum FR. Syst. Myc. 3 : 53. 1829—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 295. 1844—WINTER, Pilze, 1 : 891. 1884.

Polysaccum pisocarpium FR. Syst. Myc. 3 : 54. 1829—VITTADINI, Monogr. Lyc. 64. 1843—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 294. 1844—QUÉLET. Champ. Jura Vosg. 2 : 373. 1873—WINTER. Pilze, 1 : 890. 1884—MASSEE, Grev. 16 : 28. 1887; Brit. Gast. 52, pl. 3, f. 53. 1889; Brit. Fung. Fl. 1 : 23, f. 1. 1892; Brit. Fungi, 465. 1911—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 148. 1888—LLOYD, Myc. Writ. 1, Lyc. Austr. 12, pl. 29, f. 1—2. 1905—W. G. SMITH, Brit. Basid. 478, f. 133. 1908.

(LLOYD, Myc. Writ. 2, Lett. 7 : 1. 1905; Lett. 15 : 4. 1907; 4, Lett. 42 : 13. 1912; Lett. 44 : 8. 1913; Lett. 61 : 5. 1916; 6, Lett. 65 : 5. 1917; 7 : 1320 : 1924—安田，植．雑．27 : 167. 1913—白井，日．菌．目．ed. 2. 485. 1917; ed. 3. 297. 1927—原，日．菌．目．282. 1954)

Polysaccum olivaceum FR. Syst. Myc. 3 : 54. 1829—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 304. 1860—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 148. 1884—COOKE, Handb. 1 : 376, f. 117. 1871.

Polysaccum subarrhizum FR. Syst. Myc. 3 : 54 1829.

Polysaccum arenarium CORDA, Icon. Fung. 2 : 24, 25, pl. 12, f. 91. 1838—QUÉLET. Enchir. Fung. 242. 1886.

Polysaccum arrhizum RABENH. Deut. Krypt. Fl. 1 : 294. 1884—WINTER. Pilze, 1 : 890. 1884.

Polysaccum crassipes var. *clavatum* DIETR., Deut. Fl. pl. 118—BARLA, Champ. Nice 126. 1886—WINTER, Pilze, 1 : 890. 1889.

Polysaccum crassipes QUÉL. Enchir. Fung. 243. 1886.

Polysaccum piscocarpium var. *Rafinesquii* DE

TONI, in SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 148. 1888.

Pisolithus crassipes SCHROET. Pilze Schles 1 : 706. 1889—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl. fam. 1, 1** : 338, f. 176, C-E. 1900—PETRI, Fl. Ital. Crypt. Gast. 106, f. 58(4). 1909—MIGULA, Kypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 766. 1912.

Scleroderma umbrinum COOKE et MASS. Grev. 19 : 45. 1890.

Lycoperdoides tinctorium O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 859. 1891.

Polysaccum umbrinum LLOYD, Myc. Writ. 1, Lyc. Austr. 13. 1905; STEVENSON & CASH, New Fung. Names Lloyd, 192. 1936.

Polysaccum pygmaeum LLOYD, Myc. Writ. 7: 1306, f. 2924. 1924; STEVENSON & CASH, l. c. 191. 1936.

(LLOYD, Myc. Writ. 7 : 1320. 1924)

Pisolithus tuberosus PETRI, Fl. Ital. Crypt. Gast. 107, f. 58(2). 1909—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 765. 1912.

Pisolithus arrhizus MIGULA, l. c. 765. 1912.

Pisolithus turgidus MIGULA, l. c. 765. 1912.

子実体は不正球形或は洋梨形，通常径 2—4 cm，時に更に大形となる，基部に短大なる強き茎状柄を存す，その長さ及び太さは変化し，時に全く無茎なり，更にその基端に附着する菌糸束は極めて多く分岐し，暗褐色を呈す；子実体の質は緊密堅緻にて表面は無色，平滑，のち細皺或は網状凹凸を生じ，暗黄色にて暗帯赤黄色となり，のち褐色或は黒色となる；殻皮は甚だ薄き菌糸層にて，乾時脆弱，破片となり全内容を露出す；子実体内部は基本体にて幼時透明薄膜質，塊粒とその間をみたす密に纒絡する菌糸脈とより成る，のち菌糸は崩解して黄褐色の液となる；塊粒は幼時白色或は黄色，のち紫黄色～殆ど黒色となる，基本体の上方にあるものは成熟して大形，下方のものは未熟にて小形，淡色なり，形は類球形にて不規則稜を有し，圧辺され，厚さ 1—2mm，長さ 4mm に及ぶ，内部に担子柄散生す；担子柄は頭状棍棒形，径 7μ，無色，4 胞子を坐生す；胞子は球形，有刺，膠質物に包まれ，褐色，径 7.5—9μ。

所在及産地

松林砂地—夏秋

北海道，本州—欧．北米．濠

和名 コツブタケ（小粒茸）〔小林〕

コブクロタケ（小袋茸）〔安田〕

疑問種

Lycogalopsis reticulatus LLOYD, Myc. Writ. 7 : 1198, f. 2449—2450. 1923; 1244, f. 2650. 1924; STEVENSON & CASH, New Fung. Names Lloyd, 184. 1936. (LLOYD, Myc. Writ. 7 : 1125. 1922. sub *Lycoperdopsis*)

Calostomataceae FISCHER クチベニタケ科

ED. FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 339. 1900; II, 7a : 43. 1933.

子実体は地表生或は幼時地中生，球形，無茎或は基部根状に突出す；殻皮は甚だ発達し多層より或る；基本体は真の腔室及び子実層を作らずして，無性菌糸脈（基層板）によつて小区劃に分たれ，内に担子柄不規則に塡充さる；担子柄は洋梨形～棍棒形，その頂側辺に通常 4 個以上の胞子を分散坐生す；胞子は球形或は楕円形，有疣或は平滑，有色；弾糸は能く発達し，網状をなし，殻皮の内皮全面より起る；成熟後胞子は乾燥して粉状となり頂孔より逸出す，通常 2 属を収む．

本邦既知属検索表

A. 殻皮内膜の最内層は袋状をなし，軟骨質の内膜外層に頂部にて附着し，子実体の基部に軟骨質の根状突起を出す。

クチベニタケ属 **Calostoma** (525)

B. 殻皮内膜は基部に於て外膜に嵌入し，外膜の星芒状裂開によりて内膜は露出す，前者の如き根状茎なし。

ツチグリタケ属 **Astraeus** (527)

Calostoma DESV.
クチベニタケ属

DESVAUX, Jour. Bot. 2 : 94. 1809—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 43. 1933.

Mitremyces NEES, Syst. Pilze Schw. 136. 1817.

Gyropodium HITCHCOCK, Am. Jour. Sci. 9 : 56. 1825.

Husseia BERKELEY, Lond. Jour. Bot. 6 : 508. 1847.

子実体は地表に近く埋在し，球形，茎部の伸長により頭部は地上に挙揚せらる；茎部は特有なる性状を有し，緊緻なる膠質の多数の紐が纒れて結合し円筒状の柱体をなす；幼時即ち茎の伸長前は膠質層に包まるるも，のちその層は液化消失して頭部を表わす；殻皮は外膜と内膜とより成り，外膜は 2 層にて，

外層は厚く茎の如き性を有し，多くは膠化せり；内層は薄く密にて膠化せず，熟するに及び全部或は1部破片となりて剝落す；内膜は薄き緊緻なる軟骨質にて先端隆起し放射状裂目を以て開口す，口縁は屢々紅色を呈す，内膜の最内層は薄き軟かき紙質の膜にて頂点以外は次の層より放れ，漸次縮小するが故に吊り下げたる嚢となる；基本体は担子柄を有する菌糸の塊より成り，その塊間を分岐し環紋を有する菌糸が弛き束となりて走る，この菌糸は弾糸として記載さるることあり；担子柄は卵形，洋梨形，短棍棒形等にて不規則に拡布散生し，5—12 等の不定数の胞子を頂部或は側辺に坐生す；胞子は円筒状楕円形～球形，普通刻紋を有す。本属には 20 種程知られ，米国，濠州及び熱帯亜細亜等に産す，本邦にて知らるるもの2種，頂口赤きにより能く人に知らる（本属名は〔希〕calos（美しき）stoma（口）より出づ）

基準種 *C. cinnabarinum* (DESV.) MASS.

本邦既知種検索表

A. 胞子楕円形，殻皮外膜膠質，内膜飴色，茎部細短，頭部卵形或は球形。

クチベニタケ ***C. japonicum***(526)

B. 胞子楕円形にて球形のものを混ず，殻皮外膜膠質ならず，内膜暗褐色，茎部長大，頭部球形。

ツチイチジクタケ ***C. ravenelii*** (526)

Calostoma japonicum P. HENN.

クチベニタケ

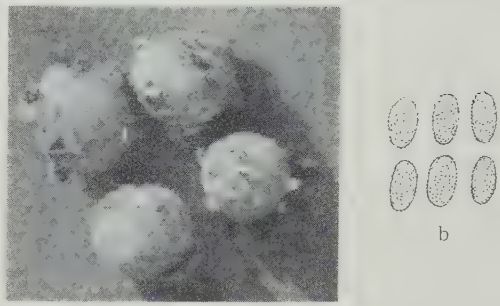
P. HENNINGS, Bot. Jahrb. 31 : 738. 1902.

（松村，植．名鑑，1 : 133. 1904—白井，日．菌．目．16. 1905; ed. 2, 107. 1917; ed. 3, 61. 1927—松浦，茸類辞典，130, f. 154. 1933; 応用菌蕈学，1241, f. 858. 1941—小林，日．隠．植．図鑑，573, pl. 277, f. 5—6. 1939—今関，原色きのこ，pl. 69(右下). 1942—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，124, pl. 58, f. 322. 1957）

Mitremyces japonicus SACC. et D. SACC. Syll. Fung. 17 : 225. 1905.

（白井，日．菌．目．ed. 2, 369. 1917）

子実体は基部と根状茎部とより成り，高さ 1.5—3cm；頭部は卵形或は球形，径 0.7—1.3 cm，飴色，表面は粉質或は亀裂を生じ小破片となり漸次剝脱す，上端少くし凸出し，星芒状或は電光形の裂目を生じ，各裂孔は更に2岐することあり，孔縁は朱紅色を呈す；茎部は多数の根状菌糸束より成り，各束は単一或は分岐し，又は互に癒合して捩曲す，飴色にて強靱なる膠状繊維質，乾時軟骨質となる；頭部



a　　b

第 229 図　クチベニタケ Calostoma japonicum

a. 子実体 ×2/3　b. 胞子 ×600（大谷氏）

の殻皮は4層より成り，外層はのちに剝落し，中層は軟骨質にて強靱，内層は膜質にて基本体を包み，内層と中層との界に存する1層は熟後消失するがため，内層は中層の孔縁より袋状となりて垂下す；基本体は熟後胞子より成る極めて淡き乾酪色の粉末体となる；胞子は楕円形，殆ど無色，表面に微粒状突起あり，11—12.5×6—7 μ；胞子に混じ弾糸状糸状物あり。

所在及産地

山中路傍—夏秋　　本州，四国，九州

和名　クチベニタケ　口紅茸

Calostoma ravenelii (BERK.) MASS.

ツチイチジクタケ

MASSEE, Ann. Bot. 2 : 42, pl. 3, f. 26—28. 1888—COKER & COUCH, Gast. 191, pl. 104, 123. 1909—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 45. 1933.

（安田，植．雑．28 : 293. 1914—中路，植．雑．30 : 102. 1916—白井，日．菌．目．ed. 3. 61. 1927—広江，応用菌蕈学，1241. 1941—川村，日．菌．図鑑，7 : 716. f. 712. 1949—原，日．菌．目．39. 1954）

Mitremyces ravenelii BERK. Trans. Linn. Soc. 22 : 130, pl. 25 B. 1857—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 68. 1888—LLOYD, Myc. Writ. 1 : 126. 1903; 2 : 218, f. 84. 1905.

（LLOYD, Myc. Writ. 1 : 201, f. 80. 1904; Lett. 1 : 4. 1904; 2 : 239. 1905; Lett. 7 : 1. 1905; Lett. 9 : 2. 1906; Lett. 12 : 4. 1906; Lett. 15 : 5. 1907; 4, Lett. 51 : 4. 1914—白井，日．菌．目．ed. 2. 369. 1917）

子実体は頭部と根状茎部とより成る；茎部は長さ 2—5 cm，頑健，むしろ緻密，湿潤粘土色の太き膠状繊維の纒絡塊より成る；殻皮の外膜は淡粘土色或は藁色にて，何れの時期にも膜状ならず，明かなる2層とならず，表面は海綿状或は繊維状にて 1mm

より薄く，のち破片となりて脱落するも，小形のものは永く附着残存す，この破片の外に甚だ薄き小鱗片あり，殼皮上端は凸出し，約5片に裂けて開口す，孔縁鮮赤色なり，内膜は淡色或は粘土色，のち暗褐色となる，球形，径 7—18mm，乾時縮小して 5.5—11mm 内外；胞子は多くは円壔状楕円形，或は球形のものを混ず，表面は一見平滑なるも，甚だ微小なる密の孔紋あり，無色，大さ形は変化に富み，10—17×6.5—7μ.

所在及産地

林間陽地—夏秋　　本州—北米・東亜

和名 ツチイチジクタケ（土無花果茸）〔安田〕

疑問種

Mitremyces yasudai LLOYD, Myc. Writ. 7 : 1345. 1925; STEVENSON & CASH, New Fung. Names Lloyd, 190. 1936. (LLOYD. Myc. Writ. 7 : 1346. 1925) (nom nud.)

Astraeus MORGAN
ツチグリタケ属

MORGAN, Jour. Cincinn. Soc. Nat. Hist. 12 : 19. 1889-1890—ED. FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 45. 1933.

Geaster Auct. pr. p.

子実体は初め地中に埋在し，類球形，基部に糸状根状束ありて，綿絮状繊維被覆を有す；殼皮は重複し，外膜は多層より成り，最外層は薄き不規則に纏れたる菌糸層にて，その中層は不規則に纏れたる菌糸より成る木栓質，更に次の最内層は著しき放射状に並ぶ菌糸より成る（厚角組織状）角質層なり；内膜は薄き膜質或は紙質なり；熟するに及びて外膜は深く星芒状に裂開し，子実体は地表に露出す；厚角組織の吸水性によりて乾時外膜は上方に捲き上り，湿時再び開く；外膜の裂開により内膜は球状体となりて露出し，その基部に於て外膜に結合し，頂孔にて開孔す；基本体には柱軸なし，型的の腔室を有せずして無性菌糸脈にて小区劃に分たる；担子柄は洋梨形，4—8胞子を着く，胞子は球形，有疣，小柄を有せず，熟後基本体は粉状塊となり，其間に内膜に連結する盛に分岐し網状をなす弾糸が貫走す。

（本属名は〔希〕aster（星）より出づ）

基準種 *A. hygrometricus* (PERS.) MORG.

本邦既知種

ツチグリタケ *A. hygrometricus* (527)

Astraeus hygrometricus (PERS.) MORG.

ツチグリタケ

MORGAN, Jour. Cincinn. Soc. Nat. Hist. 12 : 20, f. 12. 1889—REA, Trans. Brit. Myc. Soc. 3 : 351, pl. 17. 1912; Brit. Basid. 51. 1922—COKER & COUCH, Gast. 185, pl. 31. 77, 115, 117. 1928—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 45, f. 33. 1933—HEIM, Champ. Eur. 2 : 507, f. 320, A–B. 1957.

(P. HENNINGS, Bot. Jahrb. 32 : 41. 1903—松村，植. 名鑑. 1 : 132. 1904—白井，日. 菌. 目. 11. 1905—小林，日. 隠. 植. 図. 575, f. 1—3. 1939—牧野，日. 植. 図鑑，1013, f. 3036. 1940—今関，原色きのこ pl. 69（左）. 1942—川村，日. 菌. 図鑑，7 : 718, f. 713. 1949—原，日. 菌. 目. 29. 1954—今関及本郷，原色日. 菌. 図鑑，123, pl. 58, f. 319. 1957)

Lycoperdon stellatum SCOP. Fl. Carn. 63. 1760; ed. 2. 2 : 489. 1772.

Diploderma tuberosum LINK, Diss. 2 : 44. 1795—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 92. 1888.

Geastrum hygrometicum PERS. Syn. Meth. Fung. 135. 1801—DECANDOLLE, Fl. Fr. 3 : 209. 1815—NEES, Syst. Pilze Schw 135, pl. 12, f. 127. 1817.

(原，日. 菌. 目. 133. 1954)

Geastrum diderma DESV. Jour. Bot. 2 : 102. 1809.

Geaster fibrillosus SCHW. Syn. Fung. Carol. 40. 1882—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 90. 1888.

Geaster hygrometricus FR. Syst. Myc. 3 : 19. 1829—RABENHORST, Deut. Kypt. Fl. 1 : 301. 1844—COOKE, Handb. Brit. Fungi. 1 : 371. 1871—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 2 : 365. 1873; Enchir. Fung. 239. 1886—WINTER, Pilze, 1 : 914, f. 1–3. 1884—DETONI, Rev. Geastr. 21, pl. 2, f. E. 1887—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 90. 1888—MASSEE, Monogr. Gast. 83, pl. 4, f. 70. 1889; Brit. Fung. Fl. 1 : 41, f. 2. 1892; Brit. Fungi, 476. 1911—LLOYD, Myc. Writ. 1, Geastr. 8, 40, f. 5—11. 1902—W. G. SMITH, Brit. Basid. 471. 1908—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 221, pl. 111. 1927.

(P. HENNINGS, Hedw. 32 : 222. 1893; Monsunia, 1 : 23. 1889; Bot. Johrb. 28 : 270. 1901—PATOUILLARD, Bull. Soc. Myc. Fr. 3 : 119. 1887—白井，植. 雑. 10 : 9. 1896; 日. 菌. 目. 37. 1905; ed. 2. 253. 1917; ed. 3, 146. 1927—LLOYD, Myc. Writ. 1 : 102, 109. 1902; Lett. 7 : 1. 1905; Lett. 12 : 4. 1906; Lett. 15 : 5. 1907; Lett. 19 : 3. 1908; 3, Lett. 38 : 9. 1911; 4, Lett. 42 : 13. 1912; Lett. 47 : 15. 1914—川村，日. 菌. 図. 1 : pl. 2, f. 6—9. 1912—梅村，植. 雑. 28 : 196. 1914—松浦，茸類辞典，78, f. 84. 1933)

Geaster vulgaris CORDA, Icon. Fung. 5 : 64, pl. 4, f. 42. 1842.

Geaster stellatus SCHROET. Pilze Schles. 1 : 701. 1889.

Astraeus stellatus FISCH. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 341, f. 178. 1900——HOLLÓS, Gast. Hung. 79, 160, pl. 10. f. 26—29. 1904—PETRI, Fl. Ital. Crypt. Gast. 133, f. 80—82. 1909.

(P. HENNINGS, Hedwigia. 39 : 157. 1900—川村, 植. 雑. 23 : 176. 1909—白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 65. 1917; ed. 3. 30. 1927—広江, 応用菌蕈学, 1233, f. 851. 1941)

子実体は地中生或は半地中生, 成熟し子実体裂開せば地表に出で遊離転々す; 初め扁球形, 径 2.5—3.5 cm, 灰褐色, 基端に黒色の根状菌糸束あり; 殻皮は外膜と内膜とより成り, 外膜は3層より出来, 内外層は薄く中層厚し, 熟後殆ど基部迄 6—20 の裂片に裂け星芒状に展開反転す, この時厚膜層は細かき亀裂を生じ銀白色を呈して附着し或は剝落す; 裂開後扁球形, 薄膜の内膜を露出す, 径約 2 cm, 無茎, 淡灰褐色を呈し, 頂点に不規則に裂けて孔縁盤を有せざる1孔を生ず; 子実体の裂片は湿時展開するも乾燥せば旧態に戻り比較的強く内膜を包む; 基本体は幼時白色, 型的の腔室を作らず, 熟後褐色の



第 230 図 ツチグリタケ Astraeus hygrometricus ×1/3 (大谷氏)

胞子塊となる; 担子柄は不規則に散生し, 洋梨形, 18—24×11—15μ, その先端及び側辺に 4—8 胞子を坐生す; 胞子は球形, 有疣, 褐色, 径 6—10 μ; 弾糸は長くして纒絡, 分岐, 厚膜, 殆ど無色, 幅 3—6μ, 枝端狭尖することなく, 殻皮に連る。

所在及産地

山地路傍—夏秋　　本邦全土—欧・北米

和名 ツチグリタケ (土栗茸)
ツチガキタケ (土柿茸)

Tulostomataceae FISCHER ケシボウズタケ科

ED. FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 342. 1900; II. **7a** : 46. 1933.

Tyrostomeae FORQ. ex SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 49. 1888.

子実体は初め地中生; 殻皮は重複し, 内膜は薄くして, 堅靱なる性質の基部組織の伸長によりて挙揚せられ, その為外膜は1部崩解し1部は茎の基端に盃状物として残存す; 基本体には型的の腔室なく, 或は組織の疎間によつて無方向に間隙を生ず; 担子柄は不規則にて一様に子実体組織内に配置され, 或は間隙の壁に不規則なる子実層として裏付けらる; 弾糸は能く発達し, 内膜に連結す。

本邦既知属検索表

A. 環状或は螺旋状紋ある弾糸なし; 内膜は頂孔或は頂より唇状に裂けて開口す。
　ケシボウズタケ属 **Tulostoma** (528)

B. 環状或は螺旋状紋ある弾糸あり; 殻皮は水平の裂目により開口す; 基本体は扁平なる鐘形。
　コウボウフデタケ属 **Battarrea** (530)

Tulostoma PERS.
ケシボウズタケ属

PERSOON, Disp. Meth. Fung. 6. 1797; Syn. Meth. Fung. 139. 1801—ED. FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, **7a** : 47. 1933.

Tylostoma Syst. Veg. 4 : 378. 1825—1828.

Schizostoma EHRENB. sec. FRIES, Syst. Myc. 3 : 44. 1832.

Tulasnodea FRIES, Summa Veg. Scand. 440. 1849.

菌糸は結束して紐状となり, 子実体は菌核様の菌糸膨大部より起る, 初め地中生にて類球形; 内膜は膜質, 多少強靱, 熟すに及びて子実体は強靱なる円筒状或は下方に狭細せる長纎維質茎上に高く挙揚されて頂孔によりて開口し, 稀に頂より唇状に裂く; 外膜は樹皮状層より成り, 後に崩解して茎端に小盃状残物を残す; 基本体に腔室なく, 担子柄は単一或は稀に小束を作りて子実体組織内に不規則に横たわり, 棍棒形なり; 胞子は担子柄の側辺に不等高に着生し, 短き小柄を有し, 球形; 弾糸は多数存在して

網状をなし内膜に固着し，明かなる主茎を有せず，本属に属する種類は比較的多く知られ，約100種にも及び，温帯砂地に産す，本邦に於ては只2種を知らるるのみ。

（本属名は〔希〕tulos（節，瘤）stoma（口）より出づ）

基準種　*T. brumale* PERS.

本邦既知種検索表

A. 内膜の口は明かに境されたる円形にて多少短き管形；胞子殆ど平滑。

ケシボウズタケ　***T. brumale*** (529)

B. 内膜の口は少し隆起したる盤の中心にあり，縁は繊維状，胞子は微疣あり。

ナガエノホコリタケ　***T. granulosum*** (529)

Tulostoma brumale PERS.

ケシボウズタケ

PERSOON, Neues Mag. Bot. 1 : 86. 1794; Syn. Meth. Fung. 137. 1801—DECANDOLLE, Fl. Fr. 2 : 269. 1815—NEES, Syst. Pilze Schw. 137, f. 130. 1817—CORDA, Icon. Fung. 6 : 15, pl. 3, f. 39. 1856—REA, Brit. Basid. 52. 1922—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 48, f. 34. 1933.

（野口，植．研．雑．9 : 346, f. 1—3. 1933—小林，日．隠．植．図．577, pl. 279, f. 6. 1939—原，日．菌．目．373, 1954）

Lycoperdon mammosum MICHEL. Nov. Pl. Gen. 217. 1729.

Lycoperdon pedunculatum L. Sp. Pl. 2: 1184. 1753—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fung. pl. 406. 1810.

Tulostoma imbricatum PERS. Neues Mag. Bot. 1 : 86. 1794.

Lycoperdon squamosum GMEL in FR. Syst. Nat. 2 : 1462. 1796.

Tulostoma squamosum PERS. Syn. Meth. Fung. 139. 1801—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 767. 1912—PILÁT, Ann. Myc. 38 : 82. 1940.

（川村，日．菌．図鑑，7 : 720, f. 714. 1954）

Tylostoma mammosum FR. Syst. Myc. 3: 42. 1829—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 299. 1860—COOKE, Handb. Austr. Fung. 224. 1892—QUÉLET, Enchir. Fung. 236. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 60. 1888—SCHROETER. Pilze Schles. 1 : 694. 1889—MORGAN, North Amer. Fung. 12 : 163, pl. 16, f. 1. 1889—HOLLÓS, Gast. Hung. 42, 147, pl. 11, f. 18—20, pl. 12, f. 1, 1a. 1904—LLOYD, Myc. Writ. 2, Tylost. 16, pl. 78. 1906—PETRI, Fl. Ital. Crypt. Gast. 117, f. 68(3). 1909—COKER & COUCH, Gast. 151, pl. 83, 119, f. 1—3. 1928—HEIM, Champ. Eur. 2 : 493, pl. 55, f. 2. 1957.

Tulasnodea mammosa FR. Summ. Veg. Scand. 440. 1849—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 18. 1867 QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 2 : 365, pl. 3, f. 3. 1873.

Tylostoma pedunculatum SCHROET. Pilze Schles. 2 : 65. 1877—WHITE, Bull. Torr. Bot. Club, 28 : 428, pl. 31, f. 1—3. 1901.

Tulostoma mammosum COOKE, Handb. Brit Fungi, 1 : 368, f. 112. 1871—WINTER, Pilze, 1 : 892. f. 1-3, 1884-MASSEE, Monogr. Brit. Gast. 86, pl. 2, f. 33. 1889; Brit. Fung. Fl. 1 : 41, f. 3—4. 1892; Brit. Fungi, 477. pl. 36, f. 1. 1911—W. G. SMITH, Brit. Basid. 466, f. 128. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 767, pl. 146, f. 6. 1912.

Tylostoma brumale QUÉL. Enchir. Fung. 236. 1886.

子実体は地中にありて球形或は扁球形，径 9—13 mm；殻皮は2層より成り，外膜は剝げ易く，茎部の伸長により破れて頭部の下半部及び茎部の基部に残り，頭部は地上に露出す，初め白色〜黄色，のち暗褐色となり，表面粗糙なり；内膜即ち頭部の表面は白色或は黄褐色にて膜質或は紙質，薄くして平滑，頂端は乳頭状に突起し，平滑，鋭稜の円孔を有す；茎は 2—5×0.2—0.3cm，赭褐色，上部やや狭細，基端菌糸塊に囲まる，表面は平滑或は多少繊維あり，細き縦条を具う；内部はほぼ白色，中空或は中実す；頭部の内部は熟後乾燥粉塊となる；胞子は球形，微疣あるか殆ど平滑，淡褐色，径 5.5—6.5μ；弾糸は無色，分岐，厚膜，球状或は紡錘形の節を有し，幅 4—6μ。

所在及産地

砂地或は荒地—夏秋　　　本州—欧．北米

和名　ケシボウズタケ（芥子坊主茸）〔今関〕

Tulostoma granulosum (LÉV.) ROLL.

ナガエノホコリタケ

ROLLAND, Atl. Champ. 97, pl. 110, n. 255. 1910—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 48. 1933.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 50 : 223. 1936—原，日．菌．目．373. 1954)

Tylostoma granulosum LÉV, in DEMIDOFF, Voy. 120, pl. 4, f. 1, pl. 6, f. 8, 20—22. 1842—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 65. 1888—PETRI, Ann. Myc. 2 : 427. 1904; Fl. Ital. Crypt. Gast, 130, f. 76. 1909—LLOYD, Myc. Writ. 2, Tylost. 23, pl. 84, f. 1—4. 1906.

Tylostoma campestre MORG. Journ. Cincinn. Soc. Nat. Hist. 12 : 163, pl. 16, f. 4. 1890—WHITE, Bull. Torr. Bot. Club, 28 : 432, pl. 33, f. 10—12. 1901—LLOYD, Myc. Writ. 2, Tylost.

24, pl. 84, f. 5—7. 1906—COKER & COUCH, Gast. 156, pl. 83, 119, f. 14. 1928.

子実体は地中にありて類球形，径約 1—1.8 cm；殻皮は2層より成り，外膜は下部以外は崩壊し，内膜の 2/3 或は 3/4 を露出す，内膜は淡灰色〜淡褐色，平滑或は幾分有点；口部は明瞭にて海綿状，幾分隆起せる盤をなし中央に開口す，口縁は繊維状に裂ける；茎は 1.5—5.5×0.3—0.45cm，通常乾時縦溝ありて頂きの周りに明かなる襟帯を作る，表層は暗褐色，鱗片を被むる，内部白色，基端中等大に膨れ砂に蔽わる；胞子は球形或は類卵形，微疣あり，径 4.5—6.8 μ；弾糸は隔膜あり，不正形，幅 3—6.5μ。

所在及産地
砂地—夏秋　　本州—欧．北米
和名　ナガエノホコリタケ（長柄埃茸）
〔今井〕

Battarrea PERS.
コウボウフデタケ属

PERSOON, Syn. Meth. Fung. 129. 1801—FRIES, Syst. Myc. 3 : 6. 1829—WHITE, Bull. Torr. Bot. Club, 28 : 437. 1901—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 48. 1933.

Dendromyces LIBOSCHITZ, Beschr. neuentdeckt. Pliz, Wien. 1814.

Sphaericeps WELW. et CURR. Trans. Linn. Soc. 26 : 290. 1870.

Battarreopsis P. HENNINGS, Hedwigia, 41 : 212. 1902.

子実体は小形なる中高の傘が長き発達せる茎上に附着し，茎の下端は壺の内に存す；初め殻皮は2層より成り，外層は砂粒を混ずる菌糸より出来，速に消失し，内層は強靱なる膜質，後茎の伸長により殻皮の上半部は環状に裂開して，茎の先端の盤状部に覆蓋状に持ち上げられ，その下面に基本体を存す；基本体は熟後胞子と弾糸となり，弾糸は長き僅か分岐する糸状のものと，環状或は螺旋形刻紋を存するものとあり；胞子は球形，3層，平滑ならず；担子柄は長き小柄を有し，1—4胞子；孤生，1部砂に埋る。

（本属名は伊太利植物学者 ANTONIO BATTARA の姓より出づ）

基準種　*B. phalloides* (DICKS.) PERS.

本邦既知種

コウボウフデタケ ***B. japonica*** (530)

Battarrea japonica (KAWAM.) OTANI
コウボウフデタケ

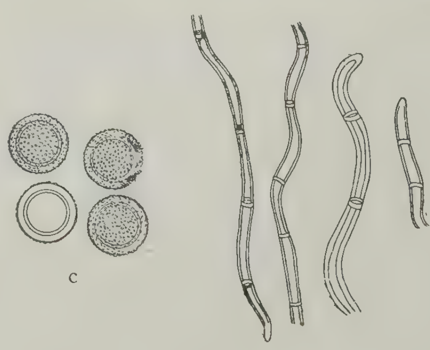
OTANI, Trans. Myc. Soc. Japan, (in press)

Dictyocephalos japaonicus KAWAM. Icon. Jap. Fungi, 7 : 723, f. 715. 1954.

（佐藤及鈴木，植．研．雑，31 : 111, f. 1—3. 1956）

子実体は散生，群生或は稀に 2—3 叢生；頭状棍棒形，全高 9.5—16cm；頭部は類球形にて，やや扁圧，径 1—3.2cm，鼠色〜灰褐色，殻皮は破れ易く，脱離して鼠色古綿状の老廃せる基本体を露出す，基本体と茎部との間に明かなる境界膜を認めず；茎は


a


c　b

第 231 図　コウボウフデタケ Battarrea japonica
a. 子実体 ×2/3　b. 弾　糸
c. 胞　子 ×1000　（大谷氏）

円筒形，時に圧辺され，真直或は弧状，上方漸次肥大して基本体に移行し，下方多くはやや漸細す，8.5—14.5×0.5—2.5cm，灰褐色，繊維状にて，やや浅き縦溝あり，類木質にて弾性あり，内部は帯藍鼠色の繊維より成り，中実；壺は卵形，上部鞘状にて数個の裂片に裂く，粘土色～淡橙褐色，外面は堅く，短毛を密生し，内面は鼠色，2.5—5.5×1.7—4cm；基本体内部は担子柄，胞子及び弾糸とより成る；担子柄は円筒形，散在して束生することなく，完熟せる箇体に於ては屢々識別困難なり；弾糸に2種あり，1は無色にて普通の菌糸状，薄膜にて隔膜なく，分岐せず，径 2μ 内外，他は一般に厚膜，各所に環状肥厚部を有す，円筒形，無色；胞子は球形～類球形，膜甚だ厚く，3層，疣状突起を密布す，径 7.8—9.6μ；胞子紋は鼠色，老時褐色。

所在及産地

広葉雑林落葉間—秋　　本州，九州

和名　コウボウフデタケ（弘法筆茸）〔川村〕

Sphaerobolaceae FISCHER　タマハジキタケ科

ED. FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1**: 346. 1900.

Carpoboli FRIES, Syst. Myc. 2: 305. 1823. pr. p.

Sphaerobolacei SCHROETER, Pilze Schles. 1: 688. 1889.

子実体は地表生；殻皮は多層より成り，その最内層の前層（第4層，柵状細胞層）は他に見ることを得ざる特別の構造を有し，放射状に並び膨張したる柵状細胞より成る；基本体は担子柄を有する無性菌糸脈に界せられたる組織区劃，或は組織の疎開によりて出来たる室を有す；基本体は熟後粘質となり，全部子実体より放出さる。只1属を含む。

本邦既知属

タマハジキタケ属 **Sphaerobolus** (531)

Sphaerobolus TODE ex PERS.
タマハジキタケ属

TODE, Fungi Meckl. 1: 43. 1790—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 115. 1801—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, **7a**: 51. 1933.

Carpobolus MICHELI, Nova Pl. Gen. 221. 1729.

Thelebolus ALB. et. SCHW. Consp. Fl. Lusat. 70. 1805.

子実体は小形にて球形～卵形或は円筒形，往々粗或は粘質組織より成る子座状菌糸膨部内に埋る；殻皮は多数の層より成り，外部より内部に向つて，(1) 膠皮層，(2) 仮柔組織層，(3) 強靱繊維より成る繊維層，(4) 柵状に伸長せる細胞より成る厚角或は柵状層，及び (5) 等径細胞より成る最内層にて胞子嚢膜とも称すべき層より成る，柵状層は屢々托（receptaculum）と称せらる；基本体は不明瞭の無性脈によりて界せられたる担子柄を含む組織，或は柵状に並ぶ子実層を有する室となる；担子柄は洋梨形，5—8 個の坐生する楕円形無色の胞子を着く；担子柄の外に基本体はその周辺に球状の嚢状体及び Gemma を有す，後者は不規則なる形を呈する内容に富むものにて任意の菌糸に於て絞れて生ぜる細胞にて，のちに直接再び菌糸に生長し行くものなり，但しこれが全部の種類に存するや否や不明なるが如し；熟するに及びて基本体は粉状とならずして粘液化し，容易に外囲の層より離る，かかる際に柵状層の表面が伸長するがために頂端より多少星形に裂けて基本体の上部は粘質球体として遊離す，かくて仮柔組織層より繊維層は離れて柵状層に固着して裏返り，基本体は緻密な粘球として強力に外部にはじき出さる，LEVA WALKER 氏 (1927) は柵状層の膨圧の増大はその細胞内に存するグリコーゲンがマルトースに転化したるためなるを証せり；放出後粘球内胞子は発芽管を生ず，然し少くともタマハジキタケに於ては大部分 gemma より菌糸を生ず。本属菌は約7種程知られ，腐木或は糞上に生ず，内最も広く分布するタマハジキタケは本邦にも産す。

（本属名は〔希〕sphaera（球）ballein（投げる）より出づ）

基準種．*S. stellatus* TODE ex PERS.

本邦既知種

タマハジキタケ ***S. stellatus*** (531)

Sphaerobolus stellatus TODE ex PERS.
タマハジキタケ

TODE, Fungi Meckl. 1: 43. 1790—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 115. 1801—NEES, Syst. Pilze Schw. 129, f. 122. 1817—FRIES, Syst. Myc. 2: 309. 1823—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1: 303. 1844—CORDA, Icon. Fung. 5: 66, pl. 6, f. 48. 1856—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 312, pl. 21, f. 2. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1: 412, f. 145. 1871; Handb. Austr. Fungi, 220, pl. 14, f. 107. 1892—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 2: 362, pl. 3, f. 2. 1873; Enchir. Fung. 234. 1886

—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 358. 1876; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 25. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 921, f. 1—3. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 46. 1888—MASSEE, Monogr. Gast. 60, pl. 4, f. 55. 1889; Brit. Fung. Fl. 1 : 27, f. 2. 1892; Brit. Fung. 468. 1911—HOLLÓS, Gast. Hung. 139, 185, pl. 28, f. 27—30. 1904—LLOYD, Myc. Writ. 2, Nidul. 28, pl. 111, f. 1—4. 1906; 3 : 431, f. 245—247. 1909—W. G. SMITH, Brit. Basid. 485, f. 138. 1908—PETRI, Fl. Ital. Crypt. Gast. 137, f. 83. 1909—REA, Brit. Basid. 54. 1922—COKER & COUCH, Gast. 147, pl. 82, 117. 1928—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 52, f. 39. 1933—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 2 : 323. 1935—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 276, pl. 111, f. 5. 1950—HEIM, Champ. Eur. 2 : 494, f. 318, B. 1957.

（白井，日．菌．目．ed. 2. 623. 1917; ed. 3. 368. 1927—沢田，台．菌．調．報．5 : 99. 1931—小林，日．隠．植．図. 579, pl. 280, f. 1—6. 1939—広江，応用菌蕈学，1249, f. 866. 1941—原，日．菌．目．347. 1954）

Lycoperdon Carpobolus L. Sp. Pl. 2 : 1684. 1753—SOWERBY, Col. Fig. Engl. Fungi, pl. 22. 1797.

Carpobolus albicans WILLD. Fl. Berol. 414. 1787.

Carpobolus stellatus DESM. Pl. Crypt. fasc. 41 : n. 2026. 1851—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 5. 1867.

Sphaerobolus carpobolus SCHROET. Pilze Schles. 1 : 688. 1889—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 346, f. 182. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 768. pl. 146, f. 1—5. 1912.

子実体は小形にて類球形，径約 1.5 mm，白色或は淡黄色，着生物上の白色菌糸中に半ば埋まりて群生或は着出物より放出して生ず；熟すれば頂部 6—10星芒状裂片に裂け，橙黄色にて光沢ある内面を露し，基本体を出す；殻皮の柵状層及び繊維層の反転により，基本体なる粘球は射出さる；粘球は初め白色透明，のち褐色を呈す，径約 1 mm；胞子は卵形或は楕円形，厚膜，無色，7—9×5—6μ。

所在及産地

腐木或は腐藁上—夏秋　　本州—汎布

和名　タマハジキタケ（玉弾茸）〔小林〕

(Ⅲ) Nidulariineae チャダイゴケ亜目

ED. FISHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 324. 1900.

Sarcospermi PERS. Syn. Meth. Fung. xv. 1801.

Nidulariaceae FRIES, Syst. Myc. 2 : 296. 1823.

菌糸は屢々菌絆を有し，弛く纏絡し，或は結束して紐状をなし，白色，のち帯黄色，遂に褐色となり，往々皮部と髄部とを区別さる；子実体は地上或は腐木上に生じ，幼時円筒形，洋独楽形或は不規則なる球形をなし，殻皮は 1～3 層にて，熟後開口して底広コップ形，椀形，倒釣鐘形或は倒円錐形等となる；子実体の内部の基本体には比較的少数の腔室を殻皮と平行して生ず，腔室の形は初め球形，のち多くは圧辺せられ殻皮に対して斜の位置をとる，腔室の壁に子実層を生じ，棍棒形の担子柄を不等高に生じ，糸状体を混在す；胞子は 2—8 坐生或は柄生し，楕円或は卵形，無色，平滑なり；胞子形成後子実層の各部は硬化して各腔室を包み，堅靱軟骨質の鏡玉形の小塊粒 (peridiole) を作り，基本体の他部は消失し，子実体開口して一見鳥の巣中に卵の累々として存するが如し；子実体の開口の初期に於て，薄き膜を以て口面を覆うものあり，これを表隔膜或は横隔膜 (epiphragma) と称す；子実体開口後小塊粒の背面に紐状物を有し，これによりて殻皮に連結するものあり，これを臍の緒 (funiculus) と呼ぶ；小塊粒の表面に白色の薄き或は厚き外被 (tunica) を有するもの或は欠如するものあり，これ等表隔膜，臍の緒，覆皮の厚薄等は属を区分する特徴として重視さる；小塊粒は熟後崩解するもの (*Arachniaceae*) あるも本邦に産せず，通常開口せずして動物により食されて胞子を分散するものと考えらる。2 科を含む。

本邦既知科

Nidulariaceae FRIES チャダイゴケ科

FRIES, Syst. Myc. 2 : 296. 1823—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II. 7a : 56. 1933.

子実体は地上生，強靱なる殻皮を有し，殻皮は多くは盃状に開く；基本体は比較的少数の多くは圧辺されたる円形の輪状の閉鎖されたる腔室を有し，腔室の壁に子実層が裏付けされて堅き組織層に包まれ，基本体の外部組織の解消によつて子実体の内周

に分離し小塊粒を作る，4属を含み，本邦3属を知らる。

本邦既知属検索表

A. 小塊粒は臍の緒を欠く，子実体は盃形，表隔膜なし，殻皮は厚く，規則正しく開口す，胞子に繊維を混ぜず。

コチャダイゴケ属 **Nidula** (533)

B. 小塊粒は臍の緒を有す，子実体は洋独楽形，表隔膜を有す，殻皮は規則正しく開口す。

a. 殻皮は1層にて中間の仮柔組織層なし，胞子に繊維を混ぜず。

ツネノチャダイゴケ属 **Crucibulum**(533)

b. 殻皮は3層にて中間に仮柔組織層あり，胞子に繊維を混ず。

チャダイゴケ属 **Cyathus**(535)



第232図　コチャダイゴケ Nidula niveotomentosa ×1/2(大谷氏)

Nidula WHITE
コチャダイゴケ属

WHITE, Bull. Torr. Bot. Club 29 : 271. 1902—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, **7a** : 1933.

子実体は開口せば底広コップ形或は椀形，開口初期には表隔膜に閉さる；殻皮には仮柔組織層なし；小塊粒は遊離し，其数多く，臍の緒なく，湿時粘質物内に埋まる；胞子に繊維を混ぜず；子実体の形及び表隔膜の存在は*Crucibulum* 属に，小塊粒に臍の緒なきは *Nidularia* 属に類似す，約4種を知らる。

（本属名は〔希〕nidulus（小巣）より出づ）

基準種　*N. candida* (PECK) WHITE

本邦既知種

コチャダイゴケ ***N. niveotomentosa*** (533)

Nidula niveotomentosa (P. HENN.) LLOYD
コチャダイゴケ

LLOYD, Myc. Writ. 3 : 455. 1910—BRODIE & DENNIS, Trans. Brit. Myc. Soc. 37 : 160, f. 2H. 1954.

Cyathus niveo-tomentosa P. HENN., Hedwigia, 37 : 274. 1898.

Nidula microcarpa PECK ex WHITE, Bull. Torr. Bot. Club, 29 : 272, pl. 17, f. 1—6, pl. 18, f. 14, 15, 17. 1902—SACCARDO, Syll. Fung. 17 : 215. 1905—LLOYD, Myc. Writ. 2, Nidul. : 11, pl. 103, f. 4—6. 1906—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, **7a** : 57. 1933—BRODIE, Mycologia, 43 : 334. f. 19. 1951.

（小林，日．隠．植．図．595, pl. 288, f. 4—6. 1939—LLOYD, Myc. Writ. 2 : 340. 1907; Lett. 15 : 5. 1907; 4, Lett. 54 : 3. 1915; Lett. 61 : 5. 1916; 5, Lett. 63 : 8. 1916—安田，植．雑．29 : 207. 1915—白井，日．菌．目．ed. 2. 393. 1917; ed. 3. 235. 1927—広江，応用菌蕈学，1249. 1941—原，日．菌．目．225. 1954）

Nidula microcarpa var. *rugispora* WHITE, Bull. Torr. Bot. Club, 29 : 272. 1902—BRODIE & DENNIS, Trans. Brit. Myc. Soc. 37 : 160. 1954.

子実体は類円筒形，高さ 0.5—1cm，頂部径 4—5 mm，基部 3—5mm，表面は帯白色或は淡灰黄色，短絨毛を密布し，緊緻，内面は平滑，縦線なく，膠質の内部物質の乾燥によりて作られたる薄き帯褐色の光沢ある層を有す；口は全縁，真直或は僅か反転し，緊緻；小塊粒は甚だ多数，鏡玉形，厚き繊維状外被に包まる，外被は容易に剝落す，乾時縮みて粗面となり，湿時平滑となる，赤褐色，幅 0.5—1mm，厚さ 0.4mm 以下；胞子は広楕円～類球形，厚膜，無色，6—9×4—6μ。

所在及産地

材上及地上—夏秋

北海道，本州—北米．中米．濠

和名　コチャダイゴケ（小茶台茸）〔安田〕

Crucibulum TUL.
ツネノチャダイゴケ属

TULASNE, Ann. Sci. Nat. III, 1 : 89. 1844—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, **7a** : 57. 1933.

子実体は初め球形，のち円筒形，開口して底広コップ形或は倒釣鐘形，腐木上に群生す；殻皮は厚き1層，外側面は初め絨毛状，老時殆ど平滑，内側面

は甚だ薄き銀光沢ある層に裏付けられ縦線なし，口は初め表隔膜を有するも，のち膜は裂開消失す，口周に縁なし；小塊粒は鏡玉形にて圧辺され，その数 *Cyathus* より多く，内部全部を殆どみたし，臍の緒によりて，殻皮に連る，小塊粒の表面に外被ありて，これを去れば黒色を呈す，胞子に纎維を混ぜず，本属に属する種類中確実と認めらるるものは只1種なり。

（本属名は〔羅〕crucibulum（るつぼ）より出づ）

基準種　*C. vulgare* TUL.

本邦既知種

ツネノチャダイゴケ　***C. vulgare*** (534)

Crucibulum vulgare TUL.
ツネノチャダイゴケ

TULASNE, Ann. Sci. not. III. 1 : 89, pl. 6, f. 9—24, pl. 7, f. 1, pl. 8, f. 13—17. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 312, pl. 2, f. 2. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fung. 1 : 411. f. 143. 1871; Handb. Austr. Fung. 219. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 357. 1876—WINTER, Pilze, 1 : 919. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 43. 1888—SCHROETER, Pilze. Schles. 1 : 708. 1889—MASSEE, Monogr. Brit. Garst. 56, pl. 3, f. 52. 1889; Brit. Eung. Fl. 1 : 25. 1892; Brit. Fungi, 468. 1911—HOLLÓS, Gast. Hung. 138, 184, pl. 28, f. 23—26. 1904—LLOYD, Myc. Writ. 2 : 302, f. 136. 1906; Nidul. 13, pl. 104, f. 1—8. 1906—W. G. SMITH, Brit. Basid. 483. f. 136. 1908—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1): 759, pl. 145, f. 9. 1912—REA, Brit. Basid. 46. 1922—COKER & COUCH, Gast. 181, pl. 61, 99, 101, 122. 1928—BRESADOLA, Icon. Myc. 23 : pl. 1147, f. 2. 1932—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II. **7a** : 57, f. 43. 1933—CLELAND, Toadst. Mushr. 2 : 322. 1935—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 275, pl. 111, f. 7. 1950.

（田中，植．雑．4 : 387. 1890—松村，植．名鑑，1 : 139. 1904—LLOYD, Myc. Writ. 2, Lett. 12 : 4. 1906; Lett. 17 : 6. 1907—安田，植．雑．26 : 19. 1912—原，植．雑．27 : 256. 1913—白井，日．菌．目．ed. 2. 185. 1917; ed. 3. 109. 1927—川村，日．菌．図説，n. 116. 1930；日．菌．図鑑，7 : 709, f. 707. 1949—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3 : 121. 1931；茸類辞典，170, f. 202. 1933—小林，日．隠．植．図．595, pl. 288, f. 2—3. 1939—広江，応用菌蕈学，1243, f. 860, 862—864. 1941—原，日．菌．目．96. 1954）

Peziza crucibuliformis SCHAEFF. Icon. Fung. 2: 125, pl. 175. 1763—SCOPOLI, Fl. Carn. 2 : 486. 1772.

Peziza lentifera OEDER, Fl. Dan. 2 : 9, pl. 105. 1763.

Peziza laevis HUDSON, Fl. Angl. 2 : 634. 1778.

Peziza Pixis BATSCH, Elench. Fung. 1 : 129. 1783.

Cyathus cylindricus WILLD. Fl. Berol. Prodr. 399. 1787.

Cyathus crucibuliformis HOFFM. Veg. Crypt. 2 : 29, pl. 8, f. 1. 1790—PERSOON, Comment. 72. 1880—S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 587. 1821—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 7. 1867.

Cyathus crucibulum PERS. Syn. Meth. Fung. 238, 1801—NEES, Syst. Pilze Schw. 140, pl. 13, f. 133. 1817—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 305. 1844—FRIES, Summ. Veg. Scand. 438. 1845—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 7. 1867—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 2 : 361. 1873; Enchir. Fung. 233. 1886.

Cyathus laevis D. C. Fl. Fr. 2 : 269. 1805.

Nidularia laevis BULL. Champ. 1 : 165. 1809.

Nidularia crucibulum FR. Syst. Myc. 2 : 299. 1823.

Nidularia juglandicola SCHWEIN. Trans. Am. Phil. Soc. 4 : 253. 1834.

Crucibulum juglandicolum DETONI, in SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 44. 1888.

Crucibulum cruciburiforme WHITE, Bull. Torr. Bot. Club, 29 : 269, pl. 16, f. 5—15, pl. 18, f. 7—13, 16. 1902.

Crucibulum lentiferum（白井，日．菌．目．ed. 2, 185. 1917.

子実体は群生或は叢生，短円筒状ルツボ形，下方に向つて少しく狭細，無茎，大さ種々あり，高さ 3—8 mm，上幅 4—8 mm，外面は幼時黄色或は黄土色，絨毛あり，のち殆ど平滑となり褐色を呈し老時淡淡色～灰白色となる；内面は平滑，時に光沢あり，通常銀灰色～白色；表隔膜は2層，外層は絨毛状にて外壁と同色，短大の不規則分岐せる特別の毛よりなり，熟後脱落し薄き内層を残すも，やがてこれも破れて消失す；小塊粒は鏡玉形，径 1—2mm，厚さ 0.4—0.5 mm，裏面中央部に乳房状突起ありて之に臍の緒附着し外壁に連る，臍の緒は単一，弾性ありて細く，湿時長く伸長するを得，小塊粒の表面にやや厚き白色の外被あり，これを去れば小塊粒の表面は黒色なり，熟後臍の緒は消失す；担子柄は長棍棒形，幅約3.7μ，細長の 2—4 小柄を生じ胞子を着く；胞子は楕円形，無色，大さ変化に富み，8—12×4—6μ；時に子実体内に子実体を重生することあり。

所在及産地

腐木，腐葉，堆肥上一夏秋

全土一欧．北米．阿．濠

和名　ツネノチャダイゴケ（常茶台茸）〔田中〕

Cyathus HALLER ex PERS.
チャダイゴケ属

HALLER, Hist. Stirp. Helvet. 3 : 127. 1768—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 236. 1801—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, **7a** : 57. 1933.

Fungoides VAILLANT, Bot. Par. 57. 1727.

Cyathoides MICHELI, Nova Pl. Gen. 222. 1729.

Cyathia BROWNE, Hist. Jamaica. 78. 1756-89—WHITE, Bull. Torr. Bot. Club, 29 : 255. 1902.

子実体は初め円筒形，のち洋独楽形にて開口せば倒円錐形となる；殻皮は明かに3層より成る；初めは口に淡色の薄き殆ど平滑なる表隔膜を有するも，のち破れて消失す，口周に多少の縁あり；小塊粒は普通内部の約半ばを充し，鏡玉形，黒色或は暗褐色，臍の緒によりて殻皮に連る，小塊粒の外囲には甚だ薄き外被を存するも小塊粒の地色を隠すに至らず；担子柄は明かなる子実層を作らず，腔室内に不等高に散在し，その間に無数の菌糸混在し，これ等の菌糸はのち硬化するがために胞子は其間に埋在するに至る；胞子は楕円形，無色，平滑，胞子間に太き角質の纖維を混ず；約 60 種知らる。

（本属名は〔希〕cyathos（盃）より出づ）

基準種　*C. striatus*（WILLD.）PERS.

本邦既知種検索表

A. 開口子実体の内面に明かなる条溝あり；胞子 16—20×8—9μ。
　　スジチャダイゴケ ***C. striatus***(535)

B. 開口子実体の内面平滑。
- a. 外面は永く絨毛に蔽わる。
  - α. 胞子は小形，8—10×5—7μ。
　　C. pallidus (536)
  - β. 胞子は中形，15—18×11—13μ。
　　カバイロチャダイゴケ ***C. badius***(536)
  - γ. 胞子は大形，22—35(40)×18—30μ。
　　ハタケチャダイゴケ ***C. stercoreus***(536)
- b. 外面は幼時有毛なるも早く脱落し殆ど平滑となる；胞子は 8—12×5—7.5μ。
　　チャダイゴケ ***C. olla*** (537)

Cyathus striatus WILLD. ex PERS.
スジチャダイゴケ

WILLDENOW, Fl. Berol. Prodr. 399. 1787—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 237. 1801—DECANDOLLE, Fl. Fr. 2 : 269. 1805—NEES, Syst. Pilze Schw. 140. pl. 13, f. 132. 1817—S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 587. 1821—TULASNE, Ann. Sci. Nat. 67, pl. 3, 4, f. 1—3. pl. 8, f. 1—12. 1844—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 306. 1844—FRIES, Summa. Veg. Scand. 438. 1845—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 312, pl. 2, f. 3. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 6. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fung. 1 : 409. f. 142. 1871—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 2 : 361. 1873—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 356. 1876—WINTER, Pilze, 1 : 920, f. 1—3. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 33. 1888—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 709. 1889—MASSEE, Monogr. Brit. Gast. 54, pl. 3, f. 48. 1889; Brit. Fung. Fl. 1 : 24, f. 7. 1892; Brit. Fungi, 467, pl. 27, f. 6. 1911—HOLLÓS, Gast. Hung. 135, 181, pl. 28, f. 7—10. 1904—LLOYD, Myc. Writ. 2 : 303, f. 137. 1906 ; Nidul. 17, pl. 106. 1906—W. G. SMITH, Brit. Basid. 482, f. 135. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 94, pl. 109, n. 246. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 760, pl. 145, f. 5—6. 1912—REA, Brit. Basid. 46. 1922—COKER & COUCH, Gast. 175, pl. 98, 99, 121. 1928—BRESADOLA, Icon. Myc. 23, pl. 1146, f. 2. 1932—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, **7a** : 59, f. 44. 1933—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 275, pl. 111, f. 9. 1950.

（安田，植．雑．29 : 235. 1915—白井，日．菌．目．ed. 2. 187. 1917; ed. 3. 111. 1927—川村，日．菌．図説，115. 1930; 日．菌．図鑑，7 : 707, f. 706. 1949—小林，日．隠．植．図．597, pl. 289, f. 1—11. 1939—牧野，日．植．図鑑，1013, f. 3038. 1940—広江，応用菌蕈学，1248. 1941—原，日．菌．目，99. 1954）

Peziza cyathiformis SCOP. Fl. Carn. 2 : 486. 1772. pr. p.

Peziza hirsuta SCHAEFF. Fung. Bav. Palat. 4 : 124. 1774.

Peziza striata HUDSON. Fl. Angl. 634. 1778.

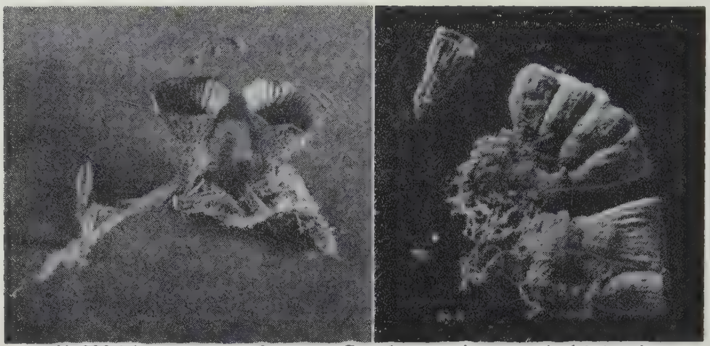
Nidularia striata WITH. Bot. Arr. 3 : 446. 1792—FRIES, Syst. Myc. 2 : 298. 1823.

Cyathodes striatum O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 850. 1891.

Cyathia hirsuta WHITE, Bull Torr. Bot. Club, 29 : 259, pl. 14, f. 11—14, pl. 18, f. 1—6. 1902.

Cyathus hirsutus QUÉLET, Enchir. Fung. 232. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 17 : 214. 1905—HEIM, Champ. Eur. 2 : 494, f. 318, A. pl. 5, f. 3. 1957.

子実体は群生，初め球形，成長して倒円錐形となり，短茎を有す，8—12×6—8mm，往々暗栗褐色の菌糸褥にて着生物に附着す；外面は粗茏毛に蔽われ，褐色或は暗褐色，時にやや不明瞭となり，脱落後は上部明かに縦溝を認めらる；内面は色種々ありて淡色～黒色，無毛，光沢あり，明かなる規則正しき 30



第 233 図 スジチャダイゴケ Cyathus striatus ×1（大谷氏）

本以上の強き縦溝を有す；口は初め薄き白色の表隔膜を有し，後破れて消失す；殻皮は明かに 3 層より成る；小塊粒は椀の下半部に限られて存し，鏡玉形，径 1.5—2mm，強き甚だ弾性に富む臍の緒によりて外壁に連る，臍の緒には之を包む筒形の袋あり；小塊粒は外被に蔽わる，外被は薄くして軟く淡色，屢々所々剝げ淡褐色の塊粒面を露わす；小塊粒の内壁に子実層あり，担子柄は長柄を有し頭部倒卵形，4 胞子を着く；胞子は長楕円形，無色，厚膜，16—20×8—9μ。

所在及産地

腐木，朽葉上—夏秋

北海道，本州，九州—欧．北南米．阿

和名 スジチャダイゴケ（条茶台茸）〔安田〕

Cyathus pallidus BERK. et CURT.

BERKELEY & CURTIS, Jour. Linn. Soc. Bot. 10 : 346. 1869—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 37. 1888—LLOYD, Myc. Writ. 2, Nidul. 22, pl. 109, f. 1—5. 1906—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, **7a** : 59. 1933—BRODIE & DENNIS, Trans. Brit. Myc. Soc. 37 : 157, f. 1A, 2E. 1954.

(P. HENNINGS, Bot. Jahrb. 28 : 271. 1901—松村，植．名鑑，1 : 139. 1904—白井，日．菌．目. 27. 1905; ed, 2, 187. 1917; ed, 3, 111. 1927—原，日．菌．目．99. 1954)

Cyathodes pallidum O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 851. 1891.

Cyathia pallida WHITE, Bull. Torr. Bot. Club, 29 : 263. 1902.

Cyathus sphaerosporus LLOYD, Myc. Writ. 2, Nidul. 23. 1906.

子実体は鐘形，高さ 5—7mm，口径殆ど同幅，側辺は著しく屈曲し狭き基部を有す，淡軟皮色～淡黄褐色，壁は薄くして脆し；外面は長き下屈せる剛毛を有す，剛毛は初め密生し，後やや疎となる，内面は平坦にて縦溝なし；小塊粒は鏡玉形，暗灰色～黒色，径約 2mm，甚だ薄き外被あり，壁は薄く 1 層；胞子は小なる楕円形，8—10×5—7μ。

所在及産地

腐木，地上

本州—西印度，阿

和名

Cyathus badius KOBAY.

カバイロチャダイゴケ

KOBAYASI, Bot. Mag. Tokyo, 51 : 755, pl. 16, f. D-E. 1937.

子実体は叢生或は散生，鐘状倒円錐形，小茎及び基部に絨毛ある樺色径 3—4 mm の円形盤を有す，高さ 8—10（稀に 6.5）mm，幅 6—8（稀に 5）mm；外面セピア色，圧着せる粗毛あり；内面は平滑，鉛色，光沢あり，乾時縦の灰色線あり；口縁は幼時内屈し，熟時真直，歯状房毛あり；表隔膜は淡黄土色，粉膜状；小塊粒は 15—25 個，鏡玉形，2.3×2×0.6—0.9mm，網状粗面，銀白色，光沢あり，粘液に埋まり黒色となる；外被は厚さ 25—35μ，淡灰色；壁の外層は厚さ 25—35μ，殆ど黒色，内層は厚さ 160—170μ，無色；臍の緒は白色；胞子は卵形，平滑，15—18×11—13μ。

所在及産地

砂に蔽われたる木框上—秋　小笠原島

和名 カバイロチャダイゴケ（樺色茶台茸）〔小林〕

Cyathus stercoreus (SCHW.) DETONI

ハタケチャダイゴケ

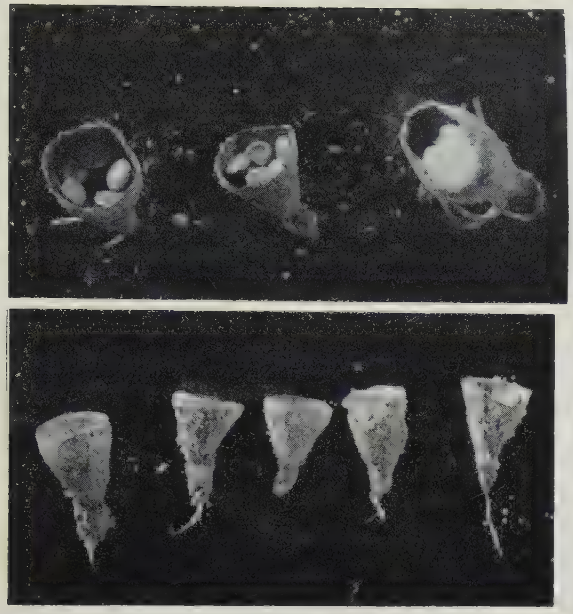
DETONI, in SACCARDO, Syll. Fung. 2 : 40. 1888—HOLLÓS, Gast. Hung. 137, pl. 28, f. 11—14. 1904—LLOYD, Myc. Writ. 2 : 304, f. 139. 1906; Nidul. 20, pl. 108, f. 1—6. 1906—COKER & COUCH, Gast. 177, pl. 100, 121. 1928—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, **7a** : 59. 1933—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 2 : 322. 1935—BRODIE, Mycologia, 40 : 614—626. 1948; DENNIS, Trans, Brit. Myc. Soc. 37 : 156, f. 2, D. 1954.

(LLOYD, Myc. Writ. 1 : 109. 1902; 2. Lett. 15 : 4, 5. 1907; Lett. 17 : 6. 1907; Lett. 19 : 3. 1908; Lett. 23 : 3. 1908; 5. Lett. 69 : 7. 1919—安田，植．雑．26 : 19. 1912—白井，日．菌．目. ed. 2. 187. 1917; ed. 3. 111. 1927—広江，応用菌蕈学，1248. 1941—原，日．菌．目．99. 1954)

Nidularia stercorea SCHW. Trans. Am. Phil. Soc. 4 : 253. 1834.

Nidularia melanosperma SCHW. l. c. 253. 1834.

Cyathus subiculosus KICKX, Bull. Acad. Roy.



第234図 ハタケチャダイゴケ Cyathus stercoreus ×1 （大谷氏）

Sci. Belles Lettres Bruxelles, 8 : 78. 1841.

Cyathus lesueurii TUL. Ann. Sci. Nat. III, 1 : 79, pl. 5, f. 5—13. 1844—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 38. 1888—COOKE, Hanb. Austr. Fung. 218. 1892—LLOYD, Myc. Writ. 2, Nidul. 21, pl. 108, f. 10, 11. 1906—COKER & COUCH, Gast. 179, 123. 1928.

(P. HENNINGS, Bot. Jahrb. 31 : 738. 1902—松村，植．名鑑，1 : 139. 1904—白井，日．菌．目．27. 1905; ed. 2. 187. 1917; ed. 3. 111. 1927—原．日．菌．目．99. 1954)

Cyathus Wrightii BERK. Grev. 2 : 34. 1873.

Cyathus melanospermus DETONI, in SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 42. 1888.

Cyathus puiggarii SPEG. Bolet. Acad. Nac. Ciendas Cordoba, 11 : 474. 1889.

Cyathodes stercoreum O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2:851. 1891.

Cyathus Baileyi MASS. Grev. 21 : 3. 1892.

Cyathus dimorphus COBB, Agric. Gaz. N. S. W. 3 : 1005. 1893.

Cyathus affinis PAT. Bull. Soc. Myc. Fr. 11 : 87. 1895.

Cyathus plumbagineus MCALP. Proc. Linn. Soc. N. S. W. 21 : 104. 1896.

Cyathus rufipes ELL. et Ev. Bull. Torr. Bot. Club, 24 : 125. 1897.

Cyathia melanosperma WHITE, Bull. Torr. Bot. Club, 29 : 262. 1902.

Cyathia rufipes WHITE, l. c. 29 : 265. 1902.

Cyathia Wrightii WHITE, l. c. 29 : 265. 1902.

Cyathia stercorea WHITE, l. c. 29 : 266. 1902.

子実体は群生或は叢生して峰窠状となることあり；初め球形，円筒形，のち鐘形〜漏斗形，大さ及び色等変化す，高さ約 5—10mm，殆ど無茎或は短茎を有す，菌糸は赤褐色にて，時に子実体基部に褥を作る；外面は幼時黄褐色，のち渋色或は灰褐色を呈し，厚き綿毛を密生す，毛は老時剝落し殆ど平滑となる；内面は平坦，帯青黒色〜鉛色；口は初め繊弱なる表隔膜あるも早く消失す；口縁は平滑にて毛状ならず；小塊粒は黒色にて外被なく，径 1.5—2.5mm，臍の緒によりて外壁に連るも，上部に存するものは之を欠き転倒せば容易に脱落す，断面は著しき2重皮；担子柄は棍棒形，先端膨大，4—8胞子を先端に近き部に輪生す；胞子は類球形〜卵形，厚膜，殆ど無色，大形にて大さ種々ありて 22—35×18—30μ，時に長さ 40μ に及ぶ。

所在及産地

堆肥，畑上—夏秋　　本邦全土—汎布

和名 ハタケチャダイゴケ（畑茶台茸）

チャダイゴケ（茶台茸）〔古名，安田〕

〔異物同名〕

Cyathus olla (Batsch) PERS.

チャダイゴケ

PERSOON, Syn. Meth. Fung. 237. 1801—NEES, Syst. Pilze Schw. 140, pl. 13, f. 133 B. 1817—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 305. 1844—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 709. 1889—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(1) : 759. 1912—REA, Brit. Basid. 47. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 231, pl. 119. 1927—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 59. 1933—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 2 : 323. 1935—PILÁT, Ann. Myc. 38 : 82. 1940—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 275, pl. 111, f. 10. 1950—BRODIE & DENNIS. Trans. Brit. Myc. Soc. 37 : 153. 1954.

Peziza lentifera α L. Sp. Pl. 2 : 1180. 1753.

Peziza tertia SCHAEFF. Fung. Bav. et Palat. Icon. 2 : pl. 180. 1763.

Peziza cyathiformis SCOP. Fl. Carn. 2 : 486. 1772. pr. p.

Peziza sericea SCHAEFF Fung. Bav. et Palat. 4 : 125. 1774.

Peziza lentifera HUDS. Fl. Angl. 2 : 633. 1778.

Peziza olla BATSCH, Elench. Fung. 1 : 127. 1783.

Nidularia vernicosa BULL. Champ. Fr. 1 : 164, pl. 488, f. 1. 1791.

Cyathus laevis HOFFM. Veg. Crypt. 2 : 31, pl. 8, f. 2. 1792.

Nidularia campanulata WITH. Bot. Arr. 3:445. 1792.

Cyathus vernicosus D. C. Fl. Fr. 2 : 270. 1805—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 312, pl. 21, f. 1. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 6. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fung. 1 : 410, f. 142. 1871; Handb. Austr. Fung. 218. 1892—TULASNE, Ann. Sci. Nat. III, 1 : 81, pl. 5, f. 14—23. 1884—WINTER, Pilze, 920. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 38. 1888—MASSEE, Monogr. Brit. Gast. 55, f. 49—51. 1889; Brit. Fung. Fl. 1 : 24, f. 6. 1892; Brit. Fungi, 467. 1911—LLOYD, Myc. Writ. 2 : 303, f. 138. 1906; Nidul. 24, pl. 110, f. 1—4. 1906—W. G. SMITH, Brit. Basid. 482. 1908—COKER & COUCH, Gast. 180, pl. 100, 120, f. 5. 1928—BRESADOLA, Icon. Myc. 23 : 1146, f. 1. 1932.

(田中, 植. 雑. 1 : 140, f. 1. 1887—松村, 植. 名鑑, 1 : 139. 1904—川村, 日. 菌. 図. 1 : pl. 4. f. 31. 1912—LLOYD, Myc. Writ. 4, Lett. 61 : 5. 1916—白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 187. 1917; ed. 3. 111. 1927—小林, 日. 隠. 植. 図. 595, pl. 288, f. 1. 1939—原, 日. 菌. 目. 99. 1954)

Nidularia plumbea PERS. Champ. Comest. 110. 1818.

Cyathus ollaris S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 587. 1821.

Nidularia fasicularis SCHW. Trans. Ann. Phil. Soc. 4 : 253. 1834.

Cyathus campanulatus D. C. Fl. Fr. 2 : 270. 1815—CORDA, Anleit. 80: pl. D, f. 42. 1842—FRIES, Summa. Veg. Scand. 438. 1845—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 2 : 361. 1873—KARSTEN, Myc. Fenn. 356. 1876.

Cyathodes lentiferum O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 850. 1891.

Cyathia lentifera WHITE, Bull. Torr. Bot. Club. 29 : 264. 1902.

子実体は初め球形, のち長倒円錐形或は鐘形, 8—12×6—9 mm; 外面は幼時圧低されたる白毛を有するも後脱落して殆ど平滑となる, 幼時黄褐色, のち淡色となり暗灰色を呈す; 内面は平坦, 暗灰褐色〜銀褐色, 光沢あり; 口は平坦にて外側に拡大す, 幼時は内屈, 圧低さる; 小塊粒は淡色, 円盤形にて大, 径 2.5—3.5mm, 中央の厚さ 0.5mm, 上面は凹形, 下面凸形, 大なる強き白色の臍の緒を有し外壁に連る, 外被は薄く一様に密着す; 胞子は卵形〜卵状楕円形, 無色, 8—12×5—7.5μ。

所在及産地

地上及木屑上　　本州—欧. 北南米. 阿. 濠

和名 チャダイゴケ (茶台苔)〔古名, 川村, 小林〕

疑問種

Cyathus Hookeri BERK. —LLOYD, Myc. Writ. 2, Nidul, 28, f. 20. 1906.

(LLOYD, Myc. Writ. 5, Lett. 63 : 8. 1906)

=*Cyathodes Hookeri* O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 851. 1891.

Cyathus minimus PAT. LLOYD, Myc. Writ. 2, Nidul. 26, f. 18, 1906.

(LLOYD, Myc. Writ. 2, Lett. 17 : 6. 1907)

(IV) Lycoperdineae ホコリタケ亜目

ED. FISCHER, in ENGLER & Prantl, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 313. 1900.

Trichospermi PERS. Syn. Meth. Fung. xiii. 1801. pr. p.

Lycoperdacei EHRENBERG, Sylvae Mycol. Berol. 14. 1818.

Lycoperdinei FRIES, Syst. Myc. 1 : Li. 1821.

菌糸は弛き蜘網状或は綿屑状をなし着生物内に貫走し, 時に子実体の周囲を包みて巣状をなし, 或は互に結合して紐状となり子実体の根の如き観を呈す, この根状菌糸束は多少太く白色にて屢々髄部と皮部とを区別することを得; 子実体は初めより着生物の表面に生じ, 或は初め地中にありて熟後地表に露出するものあり, 球形或は洋梨形にて多少明かなる茎状部を有す, 径僅かに数 mm のものより, オニフスベの如く半mに及ぶものあり; 子実体は外囲に表皮を有し内に基本体を蔵す; 基本体は甚だ多数の球形或は細長き屢々放射状に並ぶ腔室を有す. 多くの場合に於て基本体の小部分或は大部分に胞子を作らざる無性の部分を有す, 無性の部が全く密なる菌糸より成り有性部の中央に突出せる場合は柱軸(columella)と呼び, 若し有性部と同様なる多数の腔室を有するときは無性基部或は類基本体(subgleba)と称す, 有性部と無性部との区劃の確然たるものと然らざるものとあり, 有性部の腔室の壁には子実層を存す; 担子柄は球形, 洋梨形, 棍棒形, 時に先端広くして基部に狭細す, 先端に多くは 4—8 小柄を有し, 胞子を着生す; 胞子は多くは球形にて表面平滑, 有疣或は網紋あり, 脱離に際し胞子は小柄と共に落つるものあり; 熟後腔室の菌糸の或物は強靱の屢々有色の所謂弾糸となる, 遂に基本体全部は崩壊し

て粥状となり，のち水分を失つて粉状綿絮状となり只胞子と弾糸のみとなる；弾糸の色，分岐法，内皮と連結するや否や等は分類の目標とせらる；無性の基本体即ち無性基部は崩壊することなし；表皮は只弛き菌糸より成る簡単なるものあるも，多くは更に分化し，薄き紙状（稀に栓質）の内皮と纒絡せる細き菌糸より成る擬柔組織状の外皮となり，外皮はホコリタケ類にては多数の疣或は刺となる，ツチグリ類に至れば更に複雑となり，外皮の内側に柔靭の厚き肉質層を有す，熟後外皮は内皮より離れ破片となり或は星芒状に開く，内皮は頂端（稀に基部）に孔口を開く，ツチグリ類の孔口の周囲には屢々規則正しき繊維状或は襞状の口吻即ち孔縁盤（perstome）を存し，ノウタケ類に於ては頂孔を作らずして上部より不規則に崩壊す，但し或場合には内外皮は永く結合し遂に共に星芒状に開くもの（*Trichaster*），或は表皮全部が崩壊するもの（*Lycoperdopsis*）等あり；本目に属するものは成熟後子実体は発生源菌糸の場所にそのまま存在するを常とするも，シバフダンゴタケ類（*Bovista*）にてはその場所に留まらず風によりて転々する特性を有す。全世界に汎布し，幼時胞子の成生前に食用となるもの多く，弾糸は民間屢々血止剤として用いらる。通常 2 科に分つも ZELLER 氏（1949）は之れを 6 科に分類せり。

科　検　索　表

A. 外皮は肉質層を有せずして薄く，熟後崩壊す。

　　ホコリタケ科 **Lycoperdaceae** (539)

B. 外皮は肉質層を有して厚く，熟後星芒状に裂開す。

　　ヒメツチグリタケ科 **Geastraceae** (554)

Lycoperdaceae CORDA em. FISCH.　ホコリタケ科

CORDA, Icon. Fung. 5 : 22. 1842. pr. p.—ED. FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7**a** : 62. 1933.

子実体は菌糸体上に孤生或は群生し，多くは地表生，球形，洋梨形，或は下方茎状に伸長す；基本体は全部有性，或は基部無性なり；内皮は多くは紙質にて薄く，稀に栓質にて厚し；外皮は多くは擬柔組織状表層より成り，稀に膜質或は土粒を混ずる皮部を存す，熟時外皮の全部或は一部崩壊して内皮を露出す，内皮は遂に崩壊或は孔口を以て開く；弾糸は良く発達し，往々断片に切れる。FISCHER 氏は 13 属を収む，本邦に知らるるもの 5 属あり。

本邦既知属検索表

A. 弾糸はほぼ同幅にて長くして刺なく，特に著しき太き主幹を有することなし。

　a. 内皮は頂孔を以て開口せずして熟後不規則に崩壊す。

　　α. 弾糸は密に纒絡することなし。

　　　ノウタケ属 **Calvatia** (539)

　　β. 弾糸は著しく密に纒絡し遂に羊毛状団塊となりて残存す。

　　　オニフスベタケ属 **Lasiosphaera** (543)

　b. 内皮は頂孔を以て開く.

　　　ホコリタケ属 **Lycoperdon** (544)

B. 弾糸は盛に分岐し，著しき主幹を有して細長尖頭の枝を出す，内皮は頂孔を以て開く.

　a. 子実体は熟後着生菌糸より離脱し地上に転々す。

　　　シバフダンゴタケ属 **Bovista** (552)

　b. 子実体は熟後尚着生菌糸より離脱せずして其儘に残存す。

　　　ダンゴタケ属 **Bovistella** (552)

Calvatia FR. em. MORGAN
ノウタケ属

FRIES, Summa Veg. Scand. 2 : 442. 1849—MORGAN, Jour. Cincinnati Soc. Nat. Hist. 12 : 165. 1890—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7**a** : 63. 1933.

Lycoperdon Auct. pr. p.

Langermannia ROSTKOVIUS, in STURM, Deut. Fl. 3(5) : 23. 1839.

Utraria et *Globaria* QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 2 : 366 & 370. 1873. pr. p.

子実体は屢々甚だ大形にて，球形或は下方茎状に伸長す；外皮は厚く或は薄く，平滑，糠状，疣状或は襞状に不規則に破る；内皮は紙状にて薄く，熟時頂孔によりて開口することなく常に上部より不規則に崩壊脱落す；基本体は無性基部を有し或はこれを欠き，有性部との区劃明瞭或は然らず；弾糸は甚だ長くして同幅，分岐少く，時々隔壁を有す，内皮の内側より発源し或は之れと連結せず，熟時屢々短片に切断す。

（本属名は calvus〔希〕（禿頭）より出づ）

基本種　*C. craniiformis* (SCHW.) FR.

本邦既知種検索表

A. 胞子は平滑或は不明瞭なる微小疣あり。

　a. 弾糸の幅は胞子の径にほぼ同じ。

　　α. 子実体は擦傷時直ちに鮮黄色に変ず．殻皮一

見単層の如く，無性基部は同質，子実体は類球形。

イロガワリホコリタケ *C. rubroflava*(540)

β. 子実体は変色せず，表面に脳状皺を有し，表皮は2層，倒卵形或は洋独楽形，茎状部太く下端円形。

ノウタケ *C. craniiformis* (540)

b. 弾糸の幅は胞子の径より遙に広し，子実体の表面は菊目石状を呈す，倒円錐形或は洋独楽形，太き茎状部を有し或は殆ど欠如。

キクメタケ *C. caelata* (541)

B. 胞子は明かに有刺。

a. 胞子塊は紫～菫色，子実体は類球形或は洋独楽形，茎状部は太く或は殆ど欠如。

スミレホコリタケ *C. cyathiformis*(542)

b. 胞子塊は紫色ならず。

α. 胞子は楕円～円壔形，稀に卵形，子実体は卵形或は頭状，茎状部は太く短し。

オオノウタケ *C. boninensis* (542)

β. 胞子は球形，子実体は倒円錐形或は洋独楽形，茎状部は太く短し。

コマガタホコリタケ *C. gardneri* (542)

Calvatia rubroflava (CRAGIN) LLOYD

イロガワリホコリタケ

LLOYD, Myc. Writ. 1 : 90. 1902; 149. 1903; 2 : 292. 1906; 4, Lett. 43 : 2. 1912; STEVENSON & CASH, New Fung. Names Lloyd, 172. 1936—COKER & COUCH, Gaster. 60, pl. 33, 34, 112, f. 1—3. 1928.

(LLOYD, Myc. Writ. 4, Lett. 56 : 4. 1915; 7 : 1188, 1210. 1923)

Lycoperdon rubroflavum CRAGIN, Bull. Washburn Coll. 1 : 30. 1885.

Calvatia aurea LLOYD, Myc. Writ. 1 : 11. 1899.

Calvatia candia var. *rubroflava* CUNNINGH. Proc. Linn. Soc. N. S. Wales, 51 : 368. 1926.

子実体は類球形にて頂部扁平，径 2—10cm，高さ 1.5—5cm，下方甚だ襞状をなし，短き急に尖れる茎状部ありて細長の根状菌糸束に連続す；表面は生時殆ど白色にて未熟時ピンク或は淡菫色を帯ぶ，のちすべての部分は摩擦或は切断によりて直ちに鮮黄色となり数分後原色に復帰す，乾時は橙色或は黄橙色～橙赤色或は栗褐色，老時金属性褐色となる；殻皮は甚だ薄く乾時紙状をなす，一見単層の如く，外皮は繊弱なる糠状物なるに過ぎず，風雨によりて脱落し平滑光沢面を表わす，のち不規則なる部分に破れ乾燥によりて脱離開口す；基本体は幼時純白色，多数の微小なる長さ約 0.2mm の迷路状腔室を有し，無性基部の腔室はこれより大にて約1mmに及ぶも，のち不明瞭となり同質となる，基本体の有性部は充分成熟すれば蜜黄色或は淡渋色となり，無性部はこれよりやや褐色を帯び屢々チョコレート色を呈す；味は可良，臭は生時弱く，乾時古きハム状の強臭を有す；胞子は黄黄土色，球形，強度の顕微鏡下にて甚だ微細なる粒面を認められ，径 3—4.4μ，短柄を存す；担子柄は類球形，幅 6—8 μ，2—4 小柄を具う；弾糸は幅 4.4μ に及び，かなり有隔，中位に薄く，屢々明かなる孔を有す，波状をなし，通常短片に切断す。

所在及産地

圃場其他—夏秋　　本州—南北米．濠

和名 イロガワリホコリタケ（変色埃茸）

Calvatia craniiformis (SCHW.) Fr.

ノウタケ

FRIES, Summa Veg. Scand. 442. 1849—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 106. 1888—COKER & COUCH, Gast. 67, pl. 39, 112, f. 11—13. 1928—FISHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 64. 1933.

(KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 2, f. 6—7. 1914; 日．菌．図説，n. 84, 243. 1930；日．菌．図鑑，6 : 684, f. 656. 1954—白井，日．隠．植．図．587, pl. 284, f. 4—6. 1939—牧野，日．植．図鑑，1014, f. 3040. 1940—広江，応用菌蕈学，1240, f. 856. 1941—今関，原色きのこ，pl. 68(左). 1942—原，日．菌．目．40, 70. 1954—平田，青島綜合調査報告，78. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，124, pl. 58, f. 321. 1957)

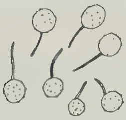
Bovista craniiformis SCHW. Trans. Am. Phil. Soc. II, 4 : 257. 1832.

Lycoperdon craniiformis FISCH, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 316. 1900.

子実体は孤生或は叢生，倒卵形或は洋独楽形，径 3—6cm，高さ 4—7cm，或は更に大形となる，茎状部は太くして基部円形となり纎維質の菌糸束に連る；外皮は甚だ薄く，紙状，平滑，殆ど無毛なるか或は微細粉状，淡渋色或は灰色，熟後脳状の皺を生ず；内皮も亦薄くして脆く，帯黄～帯赤色，熟後上方より破片となりて脱離す；基本体は初め白色，のち帯緑黄色或は黄褐色，無性基部は蜂窩状にて恰も海綿の如く，上方凹形にて永存す；胞子は平滑或は不明瞭の微小疣あり，短柄を有し，径 2.8—3.9μ；弾糸は淡褐色，僅か分岐し，隔膜乏しく，膜に多数



a



b

第235図　ノウタケ Calvatia craniiformis
a. 子実体 ×1/2　b. 胞子 ×1000（大谷氏）

の孔あり，容易に切断す，幅 2—3.5μ，幼時可食。

所在及産地

林地—夏秋　　北海道，本州，九州—欧．北米

和名　ノウタケ（脳茸）〔小林〕

Calvatia caelata (BULL.) MORG.

キクメタケ

MORGAN, Jour. Cin. Soc. Nat. Hist. 12 : 169. 1890—HOLLÓS, Gast. Hung. 83, 162, pl. 15, f. 1—12. 1904—LLOYD, Myc. Writ. 1, Lyc. Austr. 35, f. 39, pl. 36, f. 1—4. 1905—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 226, pl. 116. 1927—COKER & COUCH, Gast. 68, pl. 18, 112, f. 14—15. 1928—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 64, f. 46 A. 1933—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 267, pl. 110, f. 4. 1950.

(LLOYD, Myc. Writ. 4, Lett. 56 : 4. 1915—小林，日．隠．植．図．587, pl. 284, f. 1—3. 1939—原，日．菌．目．40. 1954)

Lycoperdon caelatum BULL. Herb. Fr. pl. 430. 1788—DECANDOLLE, Fl. Fr. 2 : 264. 1815—S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 583. 1821—FRIES, Syst. Myc. 3 : 32. 1829—VITTADINI. Monogr. Lyc. 188. 1843—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 300. 1844—BARLA, Champ. Nice, 116, pl. 46, f. 4—5. 1859—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 302, pl. 20, f. 7. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 13. 1869—FUCKEL, Symb. Myc. 36. 1869—COOKE, Handb, Brit. Fungi, 1 : 373. 1871; Handb. Austr. Fungi, 236. 1892—WINTER, Pilze, 1 : 897. 1884—MASSEE, Monogr. Lyc. n. 47. 1887; Monogr. Gast. 74, f. 58. 1889; Brit. Fung. Fl. 1 : 33. 1892; Brit. Fungi, 474. 1911—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 115, 481. 1888—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 698. 1889—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 316, f. 162A. 1900—W. G. SMITH, Brit. Basid. 475. 1908—PETRI. Fl. Ital. Crypt. Gast. 52, f. 10, 12, 24. 1909—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 743, pl. 144, f. 3—4. 1912—REA, Brit. Basid. 30. 1922—BRESADOLA, Icon. Myc. 23 : pl. 1137. 1932—HEIM, Champ. Eur. 2 : 511, f. 331, c. 1957.

Lycoperdon utriforme BULL. Herb. Fr. pl. 450, f. 1. 1789—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 143. 1801—DECANDOLLE, Fl. Fr. 2 : 263. 1815—S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 584. 1921 —RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 298. 1844—FUCKEL, Symb. Myc. 36. 1869—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 129. 1888—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 698. 1889—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 316. 1900—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 743. 1912.

(P. HENNINGS, Hedwigia, 39 Beibl. (157). 1900—松村，植．名鑑，1 : 151. 1904—白井，日．菌．目．48. 1905; ed. 2. 331. 1917; ed. 3. 195. 1927—原，日．菌．目．187. 1954)

Lycoperdon bovista PERS. Obs. Myc. 1 : 4. 1796; Syn. Meth. Fung. 141. 1801—NEES, Syst. Pilze Schw. 133, f. 125. 1817.

Bovista ? utriformis FR. Syst. Myc. 3 : 25. 1829.

Ultraria caelata QUÉL. Champ. Jura Vosg. 2 : 369. 1873; Enchir. Fung. 241. 1886.

Ultraria caelata var. *utriformis* QUÉL. Champ. Jura Vosg. 2 : 369. 1873.

Bovistaria caelata KARST. Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 11. 1889.

子実体は大形或は甚だ大形にて倒円錐形或は洋独楽形，径 10 cm，高さ 12 cm に及ぶ，上部やや扁平，無性基部は広大なる長円壔形或は短くして基部狭細して尖る；表面は初め帯白色，のち淡黄～帯褐色となる，上部はやや厚くして多少著しき網目を有し，各網目内に放射状の襞ありて恰も菊目石の表面の如し，基部はやや薄膜にて殆ど平滑にて皺を有す；内膜は薄くして頂端より漸次小破片となりて剝脱し，オリーブ黄金色～帯褐オリーブ色の甚だ脆き粉状の基本体を露出し，全形盃状となる；無性基部は幅 9.5 cm，高さ 10 cm に及び，明かなるやや大形の腔室を有し，殻皮の内面を上方に沿つて残存す；胞子は球形，平滑，或は甚だ不明瞭の疣あり，短柄を有し，径 4—4.5μ；弾糸は甚だ太く，通常幅 5—12μ，時に 17μ に及び，幾分分岐し，膜に狭き波線状の孔を有し，熟後容易に断片となる。幼時可食。

所在及産地

崖等の草地—秋　　本州—欧．北米．阿．濠

和名　キクメタケ（菊目茸）〔小林〕

キツネブクロ（狐袋茸）〔白井〕

Calvatia cyathiformis (BOSC) MORG.

スミレホコリタケ

MORGAN, Jour. Cin. Soc. Nat. Hist. 12 : 168. 1890—HOLLÓS, Gast. Hung. 84, 163, pl. 13—14, f. 1—5. 1904—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 228, pl. 117. 1927—COKER & COUCH, Gast. 63, pl. 35, 36, 112, f. 5—6. 1928.

（川村，日．菌．図鑑，6 : 685, f. 657. 1954—原，日．菌．目．40. 1954）

Lycoperdon cyathiforme BOSC, Mag. Ges. Nat. Freunde Berlin, 5 : 87, pl. 6, f. 11, A-B. 1811—FRIES, Syst. Myc. 3 : 60. 1829—MASSEE, Monogr. Lyc. n. 9. 1887—SACCARDO, Syll. Fung. 7: 123, 477. 1888—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 210. 1903.

Lycoperdon fragile VITT. Monogr. Lyc. 180. 1841—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 126, 477. 1888—PETRI, Fl. Ital. Crypt. Gast. 55, f. 27. 1909.

Bovista lilacina BERK. et MONT. Hook. Lond. Jour. Bot. 4 : 64. 1845.

Ultraria fragilis QUÉL. Champ. Jura Vosg. Suppl. 14 : 8. 1885; Enchir. Fung. 240. 1886.

Lycoperdon lilacinum MASS. Monogr. Lyc. n. 10. 1887—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 126, 477. 1888—COOKE, Handb. Austr. Fungi, 234. 1892.

Calvatia fragilis MORG. Jour. Cin. Soc. Nat. Hist. 12 : 168. 1890—LLOYD, Myc. Writ. 1 : 166. 1904.

（安田，植．雑．27 : 167. 1913—白井，日．菌．目．ed. 2. 331. 1917; ed. 3. 194. 1927. —広江，応用菌蕈学, 1234. 1941—原，日．菌．目．186. 1954）

Calvatia lilacina LLOYD, Myc. Writ. 1, Lyc. Austr. 35, pl. 35, f. 1. 1905; STEVENSON & CASH, New Fung. Names Lloyd, 172. 1936—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 64, f. 46, G. 1933—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 2 : 300. 1935.

(LLOYD, Myc. Writ. Lett. 44 : 8. 1913; 7 : 1188. 1923—川村，日．菌．図説，n. 181. 1830—広江，応用菌蕈学，1241, f. 857. 1941—原，日．菌．目．70. 1954)

子実体は大形，類球形或は洋独楽形にて頂部僅か扁平，径 7.5—1.5cm，茎状部は太くして基部皺を有す，時に茎状部小形にて殆ど欠如することあり，基端に短き根状束を附す，初め白色，のち全体汚褐色，淡菫色或は紫色となり，上面に細き網目を生ず；内皮は薄く繊弱，熟後外皮と共に破片となりて剝脱し暗紫色の内容を露出す；基本体は初め白色，のち黄色となり遂に濃紫色となる，無性基部は腔室なく，暗色，弾性ある盃状茎として永く残存す；胞子は淡紫色，球形，無柄或は稀に短柄を有し，多数の明かなる刺を有し，径 5—6μ; 弾糸は有色，幅 3—4μ，甚だ長く，稀に分岐し，互に纒絡す，隔膜多く，これより切断す，膜に不明瞭なる孔を有す，幼時可食。

所在及産地

草地—秋　　本州，九州—汎布

和名　スミレホコリタケ（菫埃茸）〔安田〕

ムラサキチドメタケ（紫血占茸）〔川村〕

Calvatia boninensis S. ITO et IMAI

オオノウタケ

S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 16 : 9. 1939.

Calvatia craniiformis var. *Gardneri* (non BERK.) KOBAY. Bot. Mag. Tokyo, 51 : 803. 1937.

子実体は大形にて径 14cm に及ぶ，卵形或は頭状，無性基部は広倒円錐形にて低く，径 13cm に及ぶ，殻皮は甚だ薄く，殆ど平滑，無性基部は皺縮あり，暗褐色或は黒褐色，老時崩壊す；基本体は暗褐色，暗黄褐色，有性部と無性部との区分明かなり，無性部は不明瞭の腔室ありて海綿状；胞子は楕円形～円壔形，稀に卵形，多くの小刺を有し，4.5—5.5×3—4μ; 弾糸は甚だ長く，僅かの隔膜を有し，分岐著しからず，幅 2—3.5μ，やや厚膜，時に微細の孔を有す。

所在及産地

林内地上—秋　　小笠原島

和名　オオノウタケ（大脳茸）〔小林〕

Calvatia gardneri (BERK.) LLOYD

コマガタホコリタケ

LLOYD, Myc. Writ. 1, Lett. 2 : 2. 1904; 5, Lett. 67 : 16. 1918; STEVENSON & CASH, New Fung. Names Lloyd, 171. 1936—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 64. 1933.

(LLOYD, Myc. Writ. 4, Lett. 44 : 8. 1913; 53 : 7. 1914; 56 : 4. 1915; 5, Lett. 65 : 5. 1917)

Lycoperdon Gardneri BERK. Jour. Linn. Soc. 14 : 79. 1875—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 129, 482. 1888.

（安田，植．雑，27 : 223. 1913—中路，植．雑．30 : 102. 1916—白井，日．菌．目．ed. 2 : 320. 1917; ed. 3. 193. 1927—広江，応用菌蕈学，1237. 1941—原，日．菌．目．186. 1954）

“子実体は倒円錐形或は独楽形をなし，高さ 4—5 cm．直径は上部にては 4—5cm，下部の中頃にては 2—2.5 cm あれども基脚部に近ずくに従い更に狭小

となる。外皮は灰褐色を呈し不規則に破裂す。弾糸は細くして数多の枝を分ち直径 2.5μ あり。胞子粉は緑褐色を帯ぶ。胞子は球形を呈し，微小にして細刺を具う，直径 3μ あり''〔安田氏による〕

所在及産地

本州—亜(錫，印，爪，馬)．南米．濠

和名　コマガタホコリタケ(独楽形埃茸)〔安田〕

〔因記〕 本菌は安田，梅村，LEWIS 諸氏が本邦採集品を LLOYD 氏に送附し検定を得たるものなるも，著者未だ本菌の詳細なる記載及び標品を見ざるがため安田氏の記載を玆に転載せり。

Lasiosphaera REICHARDT

オニフスベタケ属

H. W. REICHARDT, in Reise seiner Majestät Novara um die Erde, 135. 1870.

Eriosphaera REICHARDT—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 96. 1888. (non CASSINI, nec LESS (*Compositae*)

子実体は甚だ大形にて球状，無性基部なし，殻皮は3層，外皮及内皮は薄く，平行せる菌糸層より成り，中皮は厚く，擬柔組織状，外皮及中皮は熟後剝脱し内皮は亀裂し剝離すること少し，弾糸は纒絡し胞子と共に綿絮状団塊となりて残存す，子実下層なく担子柄は細長の4小柄を有し，球形，有刺の胞子を着く，弾糸は長糸状にて主幹なく尖頭の枝を有さず。

(本属名は lasios〔希〕(羊毛状) sphaira〔希〕(球)より出づ)

基準種　*L. Fenzlii* REICH.

本邦既知種

オニフスベタケ　***L. nipponica*** (543)

Lasiosphaera nipponica (KAWAM.) KOBAY.

オニフスベタケ

KOBAYASI, Nippon Inkwasyokubutu Dukan, 581, pl. 281, f. 1—5. 1954—KAWAMURA, Icon. Jap. Fungi, 6 : 687, pl. 659. 1954.

(原，日．菌．目．176. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，123, phot. V, f. 25. 1957)

Lycoperdon sp.

(田中，植．雑．1 : 209. 1887)

Lycoperdon Bovista (ut L.)

(白井，植．雑．12 : 324. 1898)

Globaria Bovista (ut QUÉLET)

(松村，植．名鑑，1 : 144. 1904—白井，日．菌．目．38. 1905—原，日．菌．目．132. 1954)

Bovista maxima (ut DILLENIUS)

(白井，日．菌．目．16. 1905—原，日．菌．目．36. 1954)

Lycoperdon giganteum (ut BATSCH)

(白井，日．菌．目．48. 1905)

Lasiosphaera Fenzlii (ut REICHARDT)

(LLOYD, Myc. Writ. 2 : 259. 1906; 411. 1908; 4 : Lett. 42 : 15. 1912—白井，日．菌．目．ed. 2. 311. 1917; ed. 3. 182. 1927—安田，植．雑．22 : 166. 1908; 28 : 192. 1914—KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 11. 1914; 日．菌．図説，n. 155, 158, 241. 1930—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3 : 120. 1931—松浦，茸類辞典，173, f. 205. 1933; 応用菌蕈学，1238, f. 855. 1941—小林，植．研．雑．9 : 468, 546, f. 1—13. 1933)

Calvatia nipponica KAWAM. Jour. Jap. Bot. 13: 748(757), f. 1—7. 1937.

(牧野，日．植．図鑑，1014, f. 3041. 1940)

子実体は孤生，球形或は扁球形，径 10—20 cm，稀に 30cm に及ぶ，無茎，幼時は内外共に純白色，柔肉質にて裂け易く，多少粘性あり，成時殻皮と基本体とに分れ，表面は平滑，熟時盛に尿臭ある水液を滲出し内部組織崩壊し全部乾燥す；殻皮は厚さ 1.2—1.6 mm，3層より成る，外皮は表面に走る細き菌糸より成り，中皮は厚くして擬柔組織状，内皮は表面に平行に走る細き菌糸より成り，組織密なり，内部の基本体が崩壊し乾燥するに至れば外皮は極めて薄く約 40μ，白色，膜質にて脆く，中皮は厚さ約 200μ，灰褐色にて脆くして外皮と共に亀裂を生じ剝落し易し，内皮は厚さ約 35μ，紙質，黄褐色或は紫褐色，剝落すること少し；基本体は濃黄，黄褐，紫褐，赤褐色等変化あるも通常紫褐色を呈す，無数の不規則迷路状の腔室を有し，その壁に子実層を存し，子実下層なし，無性基部なし；担子柄は卵形，基部屢々突起す，18—30×10—14 μ，細長の4小柄を生じ胞子を着く，熟後組織液化解壊し，胞子と弾糸との集合せる綿屑状団塊となる，その色紫褐或は赤褐色なり；胞子は球形，厚膜，多くの截頭刺を有し，黄褐色，1油球を含む，径 6—7.5 μ；弾糸は長糸状，叉状分岐し，先端に漸細，黄褐色，幅 2—6μ，多くは 3 μ，隔膜を有し，表面に小孔なし，幼時可食。

所在及産地

竹籔，雑木林，庭園，塵堆上—秋

北海道，本州，九州

和名　オニフスベタケ(鬼瘤茸)〔古名〕

ヤブダマ(籔玉茸)〔方言〕

チンプクリン〔方言〕

Lycoperdon TOURN. ex. PERS.
ホコリタケ属

TOURNEFORT, Insit. R. Herb. 1 : 563. 1719—PERSOON, Tent. Disp. Fung. 6. 1797; Syn. Meth. Fung. 140. 1801—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 65. 1933.

Utraria et *Globaria* QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 2 : 366 & 370. 1873. pr. p.

子実体は球形或は洋梨形或は下方茎状に伸長す; 外皮は多くは厚く, 擬柔組織状, 初め肉質, 表面に屢々特有の刻紋あり, のち破砕す; 内皮は紙状にて薄く, 熟時頂孔を以て開口す; 基本体は無性基部を有し或は欠如, 時に僅か隆起せる柱軸を有性部内に出す, 稀に有性部との区劃明かなり; 有性部の腔室は小形にて屢々放射状に配列す; 担子柄は棍棒形にて4個の屢々不等長の小柄を有し胞子を頂生す; 胞子は球形, 多少微疣或は小刺を存し, 屢々長短の小柄残物を附す; 弾糸は甚だ長く, 単一或は分岐, 同幅にて明かなる主枝を存せず, 往々有隔, 無色或は有色, 多くは内皮及柱軸存在せばこれに連結す。

(本属名は lycos〔希〕(狼) perdomai〔希〕(放屁す) より出づ)

基本種 *L. perlatum* PERS.

本邦既知種検索表

A. 子実体は通常茎状部よく発達す。
 a. 基本体の有性部と無性部との区分甚だ明なり, 弾糸は殆ど無色, 胞子の約2倍の幅を有す, 内皮は頂孔を以て開くも, のち往々その口を広くす—子実体は小～中形, 洋梨形～倒円錐形, 表面は粒状, 糠状或は短刺密生, 脱落後殆ど平滑, 淡褐色, 地上生。
  ヒメホコリタケ ***L. hyemale*** (545)
 b. 有性部と無性部との区分前者の如く著しからず, 弾糸有色, 胞子とほぼ同幅, 頂孔は広くならず。
  α. 無性基部の腔室明なり。
   I. 胞子は無柄或は短柄を有す。
    1. 胞子は平滑～微細疣刺あり。
     甲. 茎端に主根状菌糸束あり—子実体は小～中形, 洋梨形, 微粒或は糠状突起を被むり容易に脱落, 初め黄色, のち褐色, 地上生。
      キホコリタケ ***L. spadiceum***(545)
     乙. 茎端に主根状菌糸束なし。
      イ. 多くは腐木上に叢生, 基本体の中央に大なる柱軸あり—子実体は中形, 洋梨形～倒卵形, 粗面, 赤褐色。
       タヌキノチャブクロタケ ***L. pyriforme***(546)
      ロ. 地上生, 孤生或は群生, 柱軸なし—子実体は中形, 洋独楽形, 著しき尖刺を有し, 大刺脱落後網目を作る, 褐色。
       ホコリタケ ***L. perlatum***(547)
    2. 胞子は強き疣刺を有す—子実体は中形, 洋梨形, 微粒及小刺を有す, 褐色, 胞子の柄は時にやや長し。
      ツブホコリタケ ***L. umbrinum***(548)
   II. 胞子は長柄を有す。
    1. 大形(径 5cm 以上), 表面帯粉平滑—子実体は洋独楽形, 粘土色。
      オオキツネノチャブクロタケ ***L. colossum*** (548)
    2. 中形種, 表面有刺。
     甲. 表面の刺に2種あり, 大形のものは3—4回分岐す—子実体は類洋梨形, 帯黒色。
      フタトゲホコリタケ ***L. bispinosum*** (549)
     乙. 表面の刺は1種。
      イ. 刺の脱落後網目を残す—子実体は広卵形, 褐色, 胞子は類球或は僅か卵形。
       アラゲホコリタケモドキ ***L. pedicellatum*** (549)
      ロ. 刺の脱落後小孔を残す—子実体は卵球形, 褐色。
       ミヤベホコリタケ ***L. miyabei*** (549)
  β. 無性基部は腔室殆ど認め難く, 緻密—子実体は中形, 屢々洋梨形, 灰褐色, 初め微細粉状, 微刺, 小粒を存す, 胞子平滑, 無柄。
   タマネギチャブクロタケ ***L. polymorphum*** (549)
B. 茎状部欠如或は小形。
 a. 弾糸は有色。
  α. 子実体は樹上生, 甚だ小形(0.25—0.45cm), 白髪状, のち黄土色, 胞子平滑, 小笠原島産。
   コメツブホコリタケ ***L. henningsii***(550)
  β. 子実体は地上生, 小形 (0.9—1.8cm), 殆ど

平滑，暗褐色，胞子平滑～微疣あり，基端に主根状菌糸束あり。

チビホコリタケ ***L. pusillum***(550)

b. 弾糸は無色，材上生，小形，基本体は灰紫色。

α. 子実体は球形～扁球形，暗褐色，疣或は小刺に被われ，脱落後小孔を残す，小笠原島産。

アバタチャブクロタケ

L. subincarnatum (551)

β. 子実体は類球形或は類倒卵形，オリーブ黒色，長刺脱落後絨状，小笠原産。

クロゲチャブクロタケ

L. purpurascens (551)

Lycoperdon hyemale Bull. ex Pers. em. Vitt.

ヒメホコリタケ

Bulliard, Herb. Fr. pl. 72, f. E. 1781; pl. 475, f. E. 1789. pr. p.—Persoon, Syn. Meth. Fung. 144. 1801—Vittadini, Monogr. Lyc. 190, pl. 2, f. 5. 1843—Massee, Monogr. Lyc. n. 38. 1887—Saccardo, Syll. Fung. 7 : 115. 480. 1888—Fischer, in Engler & Prantl, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 316. 1900; II, 7a : 65. 1933—Hollós, Gast. Hung. 109, 170, pl. 20, f. 24—43. 1904—W. G. Smith, Brit. Basid. 475. 1908—Petri, Fl. Ital. Crypt. Gast. 50, f. 22. 1909—Bresadola, Icon. Myc. 23 : pl. 1139*, f. 3. 1932—Wakefield & Dennis, Comm. Brit. Fungi, 271, pl. 110. 1950—Heim, Champ. Eur. 2 : 511, f. 332, B. 1957.

Lycoperdon depressum Bonord. Bot. Zeit. 611. 1857—Winter, Pilze, 1 : 898. 1884—Massee, Monogr. Lyc. 714(n. 50). 1887—Saccardo, Syll. Fung. 7 : 116, 481. 1888—Fischer, in Engler & Prantl, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 316. 1900—Migula, Krypt. Fl. 1, Pilze, 2(2) : 745. 1912—Rea, Brit. Basid. 32. 1922—Cleland, Toadst. Mushr. S. Austr. 2 : 301, f. 68. 1935.

Lycoperdon Curtisii Berk. N. Am. Fungi, n. 333. 1859—Saccardo, Syll. Fung. 7 : 114, 480. 1888—Massee, Monogr. Gast, 75, f. 26. 1891; Brit. Fung. Fl. 1 : 34. 1892; Brit. Fungi, 476. 1911—Coker & Couch, Gast. 113, f. 21—22. 1928.

Lycoperdon Wrightii Berk. et Curt. N. Am. Fungi, n. 334. 1859—Saccardo, Syll. Fung. 7 : 111, 485. 1888—Lloyd, Myc. Writ. 2: 232, pl. 63. 1905; 271, f. 114. 1906; 324. 1907—Güssow & Odell, Mushr. Toadst. 223, pl. 115, f. 2. 1927.

(Lloyd, Myc. Writ. 2, Lett. 23 : 3. 1908; 5, Lett. 67 : 7. 1918—安田，植．雑．27 : 340. 1913—中路，植．雑．30 : 102. 1916—白井，日．菌．目. ed. 2. 333. 1917; ed. 3. 195 1927—Matsuura & Kanada, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3 : 120. 1931—松浦，茸類辞典，165, f. 195. 1933; 応用菌蕈学，1236, f. 853(下). 1941—原，日．菌．目．187. 1954)

Globaria Queletii Schulzer, Hedwigia, 24 : 149. 1885.

Globaria nigrescens var. *Queletii* Quél. Enchir. Fung. 240. 1886.

Bovista Queletii DeToni, in Saccardo, Syll. Fung. 7 : 105. 1888.

Lycoperdon pratense Lloyd

(Lloyd, Myc. Writ. 2, Lett. 7 : 1. 1905)

子実体は叢生或は散生し，その形，大さ及び色等変化性に富む，径 1—4cm，高さ 0.5—2.5cm，時に 4—5 cm に及ぶ；初め屢々洋梨形にて帯黄白色，表面は粒状，糠状或は上部に短き結合せる刺を密生す，のち倒円錐形にて上方圧低され，下方鈍円，屢々レンズ形，時に不正形，殆ど無茎或は円筒形の茎あり，下面は平滑或は襞状をなす，刺の落ちたるのちは粒状，糠状或は全く平滑となる；初め藁色或は褐黄色，のち淡褐，老時灰色となり，光沢あり，頂孔を以て開口するも，のち口は広くなり，往々ノウタケ類の如き観を呈す；基本体は初め白色，熟時帯緑褐色となり，無性基部より容易に離る，無性基部は熟時赤褐色，中等大の腔室を有し，弾性あり，甚だ永存的にて普通倒円錐形，上部は平滑にて有性部と境せられ，有性部の脱落後平滑扁平の上表面を見ることを得，この無性部は子実体が小形球状のものにては甚だ小にてレンズ形を呈し，円筒形のものにては有性部の 6 分の 5 を占むるに至る；胞子は球形，黄色，平滑或は微刺あり，無柄或は短柄を有す，径 3.5—4μ；弾糸は殆ど無色，分岐少く，有隔，幅 4—6μ，時に 8μ に及ぶ。

所在及産地

路傍，畑地，草原等—夏秋

北海道，本州—欧．北米．阿．濠

和名　ヒメホコリタケ（姫埃茸）〔安田〕

Lycoperdon spadiceum Pers.

キホコリタケ

Persoon, Jour. Bot. 2 : 20, pl. 1, f. 5. 1809—Hollós, Gast. Hung. 113, 171, pl. 21, f. 14-17, 57-70. 1904—Lloyd, Myc. Writ. 2 : 216, pl. 54. 1905—Rea, Brit. Basid. 36. 1922—Cleland, Toadst. Mushr. S. Austr. 2 : 303. 1935.

(Lloyd, Myc. Writ. 5, Lett. 69 : 10. 1919—安田，植．雑．33 : 190. 1919—小林，日．隠．植．図．583, pl. 282, f. 2. 1939—広江，応用菌蕈学，1236. 1941—原，日．菌．目．187. 1954)

Lycoperdon lividum Pers. Jour. Bot. 2 : 18, pl.

1, f. 4. 1809.

Lycoperdon Cookei MASS. Monogr. Lyc. 714, pl. 13, f. 24-26. 1887; Monogr. Gast. 75, f. 26. 1887 —SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 481 1889.

子実体は群生或は孤生，頭部は類球形～扁球形にて径 1.5—3 cm，茎部は頭部より順次移行し全形洋梨形となる，茎端は主根状菌糸束に連る，幼時下半部は白色，のち黄色，上半部は鉛白色，黄土色，のち褐色，屢々2色に見ゆるも老後一様に褐色となり光沢あり；外皮は密なる微小なる粒或は糠状突起より成り幾分石灰粉の如き観を呈し脱落し易し，内皮は薄く頂孔にて開口す，孔は小形，不規則形なり；基本体は初めオリーブ色を帯び，のち褐色となる，無性基部は白色，のち黄色，更に黄褐色となり凸形にて有性部の3分の1に及び，腔室は小形；胞子は球形，平滑或は微細の突起あり，無柄或は短柄を有す，黄褐色，径 4—4.5μ；弾糸は有色，無枝或は僅か分岐し，幅 4—6μ。

所在及産地

林内—秋　　本州—欧．北米．濠

和名 キホコリタケ（黄埃茸）〔安田〕

Lycoperdon pyriforme SCHAEFF. ex PERS.

タヌキノチャブクロタケ

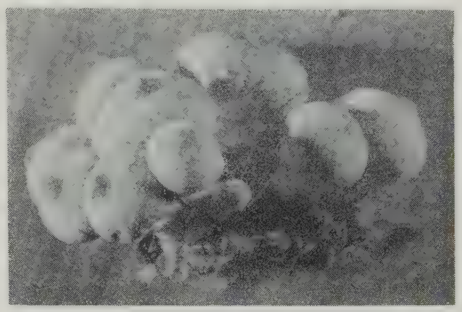
SCHAEFFER, Fung. Bavar. 2 : pl. 185. 1763—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 148. 1801—S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 584. 1821—FRIES, Syst. Myc. 3 : 38. 1829—VITTADINI, Monogr. Lyc. 196, pl. 2, f. 9. 1843—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 298. 1844—BARLA, Champ. Nice, 120, pl. 46, f. 10-11. 1859—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 302. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 16. 1869—FUCKEL, Symb. Myc. 35. 1869—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 374. 1871; Handb. Austr. Fungi, 236. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 362. 1872; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 15. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 905. 1884—MASSEE, Monogr. Lyc. 711 (n. 36). 1887; Monogr. Gast. 71, f. 61. 1889; Brit. Fung. Fl. 1 : 32. 1892; Brit. Fungi, 473, pl. 36, f. 7. 1911—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 117, 480. 1887—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 696. 1889—MORGAN, Jour. Cinc. Soc. Nat. Hist. 14 : 18. 1891—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 317. 1900; II, 7a : 65. 1933—HOLLÓS, Gast. Hung. 111, 1710, pl. 20, f. 4-7. 1904—LLOYD, Myc. Writ. 1. Lyc. Austr. 33, f. 36. 1905; 2 : 212, pl. 48, f. 83. 1905; 229, f. 86. 1905; 318, f. 151. 1907; 380, f. 195. 1908—W. G. SMITH, Brit. Basid. 474. 1908—PETRI, Fl. Ital. Crypt. Gast. 36, f. 12. 1909—ROLLAND, Atl. Champ. 94, pl. 109, f. 248. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 745. 1912—REA, Brit. Basid. 35. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 223, pl. 114. 1927—COKER & COUCH, Gast. 79, pl. 49, 50, 113, f. 8. 1928—BRESADOLA, Icon. Myc. 23 : pl. 1139, f. 2. 1932—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 2 : 301. 1935—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 269, pl. 109, f. 3. 1950—HEIM, Champ. Eur. 2 : 509, f. 331, B. 1957.

(LLOYD, Myc. Writ. 1 : 102. 1902; 2, Lett. 7 : 1. 1905; 12 : 2. 4. 1906—白井，日．菌．目．119. 1905; ed. 2. 331. 1917; ed. 3. 194. 1927—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3 : 120. 1931—川村，日．菌．図鑑，6 : 680, f. 654. 1954—原，日．菌．目．186. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，123, pl. 58, f. 318. 1957)

Utraria pyriformis QUÉL. Champ. Jura Vosg. 2 : 369. 1873; Enchir. Fung. 242. 1886.

? *Lycoperdon serotinum*

(LLOYD, Myc. Writ. 2, Lett. 7 : 1. 1905; 5 : 980. 1920)



第236図　タヌキノチャブクロタケ Lycoperdon pyriforme ×1/2 （大谷氏）

子実体は腐木上にては屢々叢生，地上にては多少散生，全形は洋梨形或は倒卵形，径 1.5—3 cm，高さ 2.5—5 cm，頭部は球形或は扁球形にて僅か中丘あるか鈍頭，叢生の際は互に圧辺さる，茎部は倒円錐形，時に殆ど無茎，基端に長き白色側根状菌糸束を附す，材上生の時は特に著し；頭部表面は白色～灰色，のち黄色～赤褐色，微小なる疣粒及刺を有し，永く粗面，幾分ヤスリの如き触感を与う，脱落後屢々網目を残す，内皮は薄膜状，遅く頂孔を開く，孔は小にて縁は細歯状に裂く；基本体は初め白色，のち帯緑黄色，遂に帯オリーブ褐色となる，基本体の中央に著しき円錐状の大なる柱軸あり，無性基部は白色，のち変色し，小なる腔室を存す；胞子は球形，平滑，淡黄～オリーブ褐色，径 3.5—4.5μ；弾糸は甚だ長く，分岐し，幅 3.5—5.5μ。

所在及産地

枯株，腐木上，稀に地上—夏秋　全土—汎布

和名 タヌキノチャブクロタケ（狸茶袋茸）〔川村〕
ケムリタケ（煙茸）

Lycoperdon perlatum PERS. ex PERS.
ホコリタケ

PERSOON, Obs. Myc. 1 : 4. 1796; Syn. Meth. Fung. 145. 1801—S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 584. 1821—VITTADINI, Monogr. Lyc. 194. 1843 —BARLA, Champ. Nice, 119, pl. 46, f. 8. 1859—FUCKEL, Symb. Myc. 710. 1869—MASSEE, Monogr. Lyc. 710 (n. 31) 1887; Monogr. Gast. 72, f. 31. 1889; Brit. Fung. Fl. 1 : 32. 1892—MORGAN, Jour. Cinc. Soc. Nat. Hist. 14 : 13. 1891—W. G. SMITH, Brit. Basid. 474. 1908—REA, Brit. Basid. 34. 1922—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam, II, 7a : 65, f. 46 C-F. 1933—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 269, pl. 110, f. 2. 1950.

(KOBAYASI, Bot. Mag. Tokyo, 51 : 802. 1937; 日．隠．植．図．585, pl. 283, f. 1. 1939—原，日．菌．目．186. 1954)

Lycoperdon gemmatum BATSCH, Elench. Fung. 1 : 147. 1783—FRIES, Syst. Myc. 3 : 36. 1829—CORDA, Icon. Fung. 5 : 62, pl. 4, f. 40. 1842—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 298. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 302. 1860—FUCKEL, Symb. Myc. 36. 1869—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 374. 1871; Handb. Austr. Fungi, 235. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 361. 1876; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 14. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 904. 1884—MASSEE, Monogr. Lyc. 710 (n. 32). 1887; Monogr. Gast. 70, f. 30. 1889; Brit. Fung. Fl. 1 : 32. 1892; Brit. Fungi, 473. 1911—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 109, 479. 1888—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 696. 1889—MORGAN, Jour. Cinc. Soc. Nat. Hist. 14 : 13. 1891—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 316, f. 162 C-F. 1900—LLOYD, Myc. Writ. 1, Lyc. Austr. 32, f. 35. 1905; 2 : 211, 228, pl. 46. 1905; 249, f. 92. 1906; 317, f. 150. 1907; 338, f. 164-165. 1907—ATKINSON, Mushrooms, ed. 2. 210, 1903—HOLLÓS, Gast. Hung. 102, 167, pl. 19, f. 14-25. 1904—W. G. SMITH, Brit. Basid. 473. 1908—PETRI, Fl. Ital. Crypt. Gast. 38, f. 18 (2-3). 1909—ROLLAND, Atl. Champ. 94, pl. 109, f. 247. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 746, pl. 143, f. 5-6. 1912 GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 223, pl. 113. 1927—COKER & COUCH, Gast. 82, pl. 52, 53 (left), 113, f. 12. 1928—BRESADOLA, Icon. Myc. 23 : pl. 1139, f. 1; pl. 1139*, f. 1. 1932—HEIM, Champ. Eur. 2 : 509, pl. 3, f. 2. 1957.

(P. HENNINGS, Hedwigia, 39. Beibl. (157). 1900 —松村，植．名鑑，1 : 151. 1904—LLOYD, Myc. Writ. 2, Lett. 7 : 1. 1905; Lett. 12 : 2. 1906; Lett. 15: 4. 1907; Lett. 19 : 4. 1908; 6 : 1096. 1920; 7 : 1162. 1922; 1188. 1923—白井，日．菌．目．48. 1905; ed. 2. 331. 1917; ed. 3. 194. 1927—安田，植．雑．23 : 69. 1909—梅村，植．雑．26 : 152. 1912—KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 9, f. 17—19. 1914; 日．菌．図説，n. 128. 1930; 日．菌．図鑑，6 : 678, f. 653. 1954—中路，植．雑．30 : 102. 1916—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3 : 120. 1931; 茸類辞典，173, f. 204. 1933; 応用菌蕈学，1234, f. 852. 1941 —牧野，日．植．図鑑，1015, f. 3042. 1940—今関，原色きのこ，pl. 68(右下). 1942—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，123, pl. 58, f. 317; pl. 68, f. 405. 1957)

Lycoperdon gemmatum var. *perlatum* FR. Syst. Myc. 3 : 37. 1829—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 298. 1844—WINTER, Pilze, 1 : 904. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 107, 479. 1888.

Lycoperdon excipuliforme var. *perlatum* KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 14. 1867.

Ultraria gemmata QUÉL. Champ. Jura Vosg. 2: 367. 1873; Enchir. Fung. 242. 1886.

子実体は孤生或は群生，全形は洋独楽形，その頭部は球形～扁球形にて中丘を有し，屡々下面に皺及び凹みあり，茎部は長き比較的太き円筒形或は倒円錐形，基端側根状菌糸束に連る，径 2—6 cm，高さ 3—7.5 cm；表面は初め白色，のち黄色を経て遂に褐


a


b


c

第 237 図　ホコリタケ Lycoperdon perlatum
a．子実体 ×1/3　b．同 ×1/2　c．胞子 ×750（大谷氏）

色となる，頭部には長短の刺或は疣を交雑して存し，一般に短きものは長きものより甚だ多し，両者共に外下方に至るに従つて小形となり，茎部にては痂疣となる，色は灰淡色〜革色にて長刺は屢々暗色〜黒色となる，この疣の形は甚だ変化し，或物は基部拡大しピラミッド形をなし，先端むしろ急に細き尖刺となる，或物は密に表面を被い，或は時に分散するもの等あり；何れの場合に於ても大刺脱落後甚だ明かなる網目或は瘢痕を残す，内皮は薄く，頂孔を以て開口す；基本体は白色，のち黄色を経て帯オリーブ色となり暗褐色に至り，時にやや紫色を帯ぶ，無性基部はよく発達し，茎部の全部を占め凸形，腔室は径約 1mm に及ぶ；胞子は淡灰褐色，球形，微細の小刺あり，径 3.5—4.5μ；弾糸は長く，分岐少く，淡褐色，幅 3.5—5μ，幼時可食。

所在及産地

林地，原野，路傍等—夏秋

本邦全土—汎布

和名 ホコリタケ（埃茸）〔安田〕

キツネノチャブクロ，メツブシ，ツンボタケ，ケムダシ（方言）

Lycoperdon umbrinum PERS. ex PERS.

ツブホコリタケ

PERSOON, Tent. Disp. Fung. 53. 1797; Syn. Meth. Fung. 147. 1801—HOLLÓS, Gast. Hung. 96, 166, pl. 21, f. 8-10, 1904—LLOYD, Myc. Writ. 2 : 209, pl. 43. 1905; 225, pl. 58. 1905—REA, Brit. Basid. 33. 1922—COKER & COUCH, Gast. 76, pl. 48, 113, f. 1-3. 1928—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7**a** : 65. 1933.

(LLOYD, Myc. Writ. 4, Lett. 42 : 13. 1912; Lett. 56 : 5. 1915; 7 : 1320. 1924—安田，植．雑．29 : 60. 1915—白井，日．菌．目．ed. 3. 194. 1927—小林，日．隠．植．図．585, pl. 283, f. 2. 1939—広江，応用菌蕈学，1235. 1941—原，日．菌．目．187. 1954.

Lycoperdon umbrinum var. *hirtum* PERS. Syn. Meth. Fung. 148. 1801.

Lycoperdon hirtum MART. Fl. Crypt. Erlang. 386. 1817—WINTER, Pilze, 1 : 905. 1884—MASSEE, Monogr. Lyc. 705. (n. 6) 1887—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 116, 476. 1888—MORGAN, Jour. Cinc. Soc. Nat. Hist. 14 : 8, pl. 1, f. 2. 1891—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 318. 1900.

Lycoperdon gemmatum var. *hirtum* FR. Syst. Myc. 3 : 38. 1829.

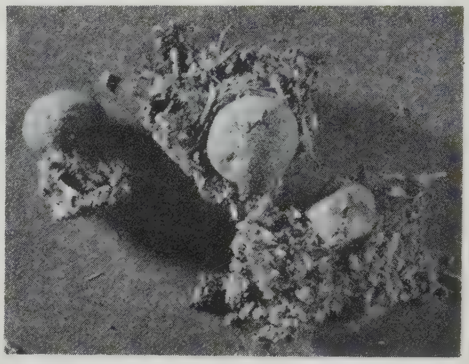
Lycoperdon turbinatum var. *hirtum* KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 15. 1869.

Utraria hirta QUÉL. Champ. Jura Vosg. 2 : 367, pl. 2, f. 9. 1873; Enchir. Fung. 242. 1886.

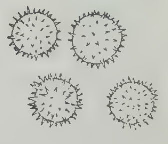
Lycoperdon glabellum PECK, Trans. Albany Inst. 9 : 304. 1879.

Lycoperdon umbrinum var. *glabellum* HOLLÓS, Gast. Hung. 101, 167, pl. 18, f. 23-29, pl. 29, f. 5. 1904.

Lycoperdon atropurpureum var. *hirtum* PETRI, Fl. Ital. Crypt. Gast. 46. 1909.



a



b

第 238 図 ツブホコリタケ
Lycoperdon umbrinum
a. 子実体 ×1/2
b. 胞子×1200（大谷氏）

子実体は扁球形にて急に茎部を附し或は徐々に茎部に移行して全形洋梨形となる，径 2.5—3cm，高さ 3—4cm，初め白色或は淡褐色，次第に黄褐色〜褐色となる，表面はホコリタケよりも小形の粒及小刺を混在し，永く存在するも老時一部分剥落し，平滑の面を露わす；基本体は淡オリーブ色，のちオリーブ褐色となる，屢々その色やや異り，稀に明かに帯紫褐色を呈す，無性基部は茎部を充し，腔室はやや大なり；胞子は基本体と同色，球形，強疣を有し，径 3.7—4.5μ，短柄を附す；弾糸は褐色，分岐し，幅 3—4μ。

所在及産地

林内—夏秋　　本州—欧．北米

和名 ツブホコリタケ（粒埃茸）〔安田〕

Lycoperdon colossum KAWAM.

オオキツネノチャブクロタケ

KAWAMURA, Icon. Jap. Fungi. (日．菌．図鑑)，6 : 681, f. 655. 1954.

Lycoperdon floccosum (ut LLOYD) KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, pl. 15, f. 3. 1914.

(白井，日．菌．目．ed. 3. 194. 1924—原，日．菌．目．186. 1954)

子実体は大形，頭部球形或は扁球形にて太き円筒状の茎を有す，径 4—7cm，高さ 7—11cm；表面は

初め白色，のち粘土色となる，帯粉平滑に見ゆるもレンズ下にて極微の短毛を密生しその若干づつ束となり粒状に見ゆ；基本体は初め暗褐色，無性基部は茶褐色，のち共に淡黄褐色となる；胞子は黄褐色，球形，平滑，径 4—4.5 μ，長柄を附す，柄の長さ 15μ 以上に及ぶ；弾糸は黄褐色，多く分岐し，太き部分は幅 5—6 μ，末梢の最も細き部は約 1.5 μ。

所在及産地

林地上—夏秋　本州—亜(満州)

和名 オオキツネノチャブクロタケ(大狐茶袋茸)〔川村〕

Lycoperdon bispinosum YAS.

フタトゲホコリタケ

YASUDA, Bot. Mag. Tokyo, 37 : 130, f. 5. 1923—LLOYD, Myc. Writ. 7 : 1277, f. 2836—2837. 1924.

(安田，植．雑．37 : 206. 1923—LLOYD, Myc. Writ. 7 : 1266. 1924—白井，日．菌．目．193. 1927—小林，日．隠．植．図．583, pl. 282, f. 1. 1939—広江，応用菌蕈学，1235. 1941—原，日．菌．目．186. 1954)

子実体は類球形，基部急に狭小となり短茎状，頭部径 3—4 cm，帯黒色，基部に近き下面は材木色を呈す；外皮は薄く暗褐色を帯び，2種の刺あるを特徴とす，その一は黒色にて甚だ微細，痂状をなし密生す，他は材木色にて大形，3—4回分岐し，或は更に多くの枝を分ち散生す；基本体は栗褐色を呈す；胞子は球形，褐色，細疣刺あり，取れ易き長柄を具う，柄は無色，8—25×1μ；弾糸は褐色，幅 3—7μ。

所在及産地

松林地上—秋　九州

和名 フタトゲホコリタケ(二刺埃茸)〔安田〕

Lycoperdon pedicellatum PECK

アラゲホコリタケモドキ

PECK, Rep. N. Y. Nat. Mus. 26 : 73. 1874—MORGAN, Jour. Cinc. Soc. Nat. Hist. 14 : 15, pl. 2, f. 2. 1891—MASSEE, Monogr. Lyc. n. 42. 1887—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 112, 480. 1888—HOLLÓS, Gast. Hung. 114, 172, pl. 20, f. 44-47. 1904—COKER & COUCH, Gast. 85, pl. 113, f. 14. 1928.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 50 : 222. 1936—原，日．菌．目．186. 1954)

Lycoperdon caudatum SCHROET. Pilze Schles. 1 : 698. 1889—SACCARDO, Syll. Fung. 9 : 276. 1891.

Bovistella pedicellata LLOYD, Myc. Writ. 2 : 282, pl. 88, f. 5-10. 1906.

子実体は扁球形にて下面皺を存し，無茎或は短茎を有し，広卵形，基端に纎弱の菌糸を附す，径 1.5—4 cm，表面は淡灰色，のち淡黄土色～淡黄土褐色となる，上方にやや丈夫なる刺あり，各刺は長さ 0.5—1mm，単一或は上方互に結合す，下方に至るに従つて小形となる，刺の脱落後は不明瞭なる疣状或は網目を有する内皮を露わす，内皮は淡褐色，光沢あり，無性基部は無茎のものには甚だ乏し；胞子は暗褐色，類球形或は僅か卵形，平滑或は僅か粗面，基本体は緑黄色，暗オリーブ色，のち褐色となる，無性基部は無茎のものにては甚だ乏し；胞子は暗褐色，類球形或は僅か卵形，平滑或は僅か粗面，4—5×3.5—4.5 μ，胞子の 4—5 倍に及ぶ長き永存的の柄を有す；弾糸は幅 6.6μ に及び，分岐し，壁に孔あり，黄土色を呈す。

所在及産地

林内地上及腐木上—夏秋　北海道—欧．北米

和名 アラゲホコリタケモドキ(擬粗毛埃茸)〔今井〕

Lycoperdon miyabei (LLOYD)

ミヤベホコリタケ

Bovistella Miyabei LLOYD, Myc. Writ. 2 : 282, pl. 88, f. 3—4. 1906; STEVENSON & CASH, New Fung. Names Lloyd, 168. 1936—SACCARDO, Syll. Fung. 21 : 482. 1912.

(白井，日．菌．目．ed. 2. 101. 1917; ed. 3. 58. 1927—原，日．菌．目．37. 1954)

子実体は卵状球形にて短茎を存す，頭部は幾分芽状の短刺を密生し，刺は下方に向つて漸次短小となり，茎部にては疎なる小粒となる，暗褐色，茎部淡色，刺の脱落後は網状にて小孔を穿つ，径約 2cm，高さ約 3 cm，頂孔を以て開口す；基本体はオリーブ色，無性基部は3分の1を占め，大なる腔室あり；胞子は球形，平滑，径 3—4μ，長き (20μ) 無色の柄を有す；弾糸は濃色，長く，分岐少く，胞子とほぼ同幅なり。

所在及産地

林地—秋　北海道

和名 ミヤベホコリタケ(宮部埃茸)

Lycoperdon polymorphum VITT.

タマネギチャブクロタケ

VITTADINI, Monogr. Lyc. 183, pl. 2, f. 8. 1843—MASSEE, Monogr. Lyc. 715, (n. 54). 1887—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 110, 482. 1888—LLOYD, Myc. Writ. 1, Lyc. Austr. 29, pl. 34, f. 1-6. 1905; 2 : 215, pl. 52. 1905—PETRI, Fl. Ital. Crypt. Gast. 47. 1909—REA, Brit. Basid. 36. 1922—COKER & COUCH, Gast. 92, pl. 113, f. 29. 1928—FISCHER, in

ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 65. 1933—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 2:303. 1935—S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 15 : 6. 1937.

(LLOYD, Myc. Writ. 2, Lett. 19 : 4. 1908)

Lycoperdon furfuraceum SCHAEFF. Fung. Bavar. 117, pl. 294. 1770—PERSOON, Comment. 117. 1880—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 110, 486. 1888. pr. p.—HOLLÓS, Gast. Hung. 105, 168, pl. 21, f. 19-23, 52-56, 1904—BRESADOLA, Icon. Myc. 23 : pl. 1140, f. 1. 1932—HEIM, Champ. Eur. 2 : 511, f. 332, D. 1957.

Lycoperdon cepaeforme BULL. Herb. Fr. pl. 435, f. 2. 1789. pr. p.—MASSEE, Monogr. Lyc. 722. 1887; Brit. Fungi, 473. 1911—LLOYD, Myc. Writ. 1, Lyc. Austr. 30, f. 31, 1905; 2 : 215, pl. 53, f. 1-4. 1905; 234, pl. 65, f. 1-7. 1905.

Lycoperdon ericetorum PERS. Jour. Bot. 2 : 17, pl. 2, f. 1a-b. 1809.

Lycoperdon erinaceum BONORD. Bot. Zeit. 16 : 628. 1858—WINTER, Pilze, 1:903. 1884—MASSEE, Monogr. Lyc. 715. 1887—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 114, 482. 1888.

Globaria furfuracea QUÉL. Champ. Jura Vosg. 3:370, pl. 3, f. 6. 1873—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 699. 1889. pr. p.

Lycoperdon coloratum PECK, Rep. N. Y. Nat. Mus. 29 : 46. 1878—MASSEE, Monogr. Lyc. 722. 1887—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 114, 487. 1888—MORGAN, Jour. Cincinn. Soc. Nat. Hist. 14 : 20, pl. 2, f. 10. 1891.

Utraria furfuracea QUÉL. Enchir. Fung. 241. 1886.

Bovista cepaeformis MASSEE, Monogr. Gast. 65, f. 72. 1891—W. G. SMITH, Brit. Basid. 477. 1908.

子実体は群生，大さ，形及色等甚だ変化性に富む，類球形にて僅か圧低され，或は屢々洋梨形にて甚だ短き或はやや長き皺ある茎部を存し，又屢々殆ど無茎，基端に砂上生のものは長き主根状菌糸束，腐葉上等にては白き繊維状の菌糸を附す，高さ及幅 1.5—2cm，或はそれ以上に及ぶ，初め白色，のち汚黄色，更に上方灰褐色，熟時黄褐色にて赤味を帯び或は暗褐色，基部帯赤色なり，外皮は微細粉状，微刺，小粒となり早失し，内皮は薄く，平滑，光沢あり，小なる頂孔を開く；基本体は帯黄色，淡オリーブ褐色，のち暗緑褐色にて赤味を帯び，甚だ密，無性基部は密にて腔室甚だ小にて殆ど認め難し；胞子は球形，黄色，平滑，無柄，径 3—4μ；弾糸は黄～黄褐色，分岐し，幅 4—6μ。

所在及産地

草原，砂土上一夏秋

本州，小笠原島一欧．北米．濠

和名 タマネギチャブクロタケ（玉葱茶袋茸）〔今井〕

Lycoperdon henningsii SACC. et SYD.

コメツブホコリタケ

SACCARDO & SYDOW, Syll. Fung. 16 : 242. 1902—KOBAYASI, Bot. Mag. 51 : 801, f. 2. 1937.

（原，日．菌．目．186. 1954）

Lycoperdon pisiforme P. HENN. Monsunia, 158. 1900 (non P. HENNINGS, Bot. Jahrb. 23 : 556. 1897, nec ILOYD, Myc. Writ. 5 : 795, f. 1198. 1918)

子実体は孤生，甚だ小形，球形，無茎，径 2.5—4.5mm，微疣或は軟毛に被われ，白髪状，熟後黄土色となる；頂孔は微小にて反転縁を有す；外皮は厚さ 250—300 μ，弛くして不規則に纒れたる無色厚膜，幅 3—12 μ にて屢々隔膜を有する菌糸より成る；内皮は厚さ 100—130μ，密に纒れたる淡黄土色の菌糸より成る；胞子は球形，オリーブ褐色，平滑，1油球を含み，3.2—3.5μ，短柄を存す；弾糸は僅か分岐し，長さ 140 μ に及び，幅 2.8—4.2μ，淡褐色，膜は平滑或は不明瞭の孔あり。

所在及産地

シマヒサカキ(*Eurya boninensis* KOIDZUMI)の樹皮上一秋 小笠原島一亜(瓜)

和名 コメツブホコリタケ（米粒埃茸）〔小林〕

Lycoperdon pusillum BATSCH ex PERS.

チビホコリタケ

BATSCH, Elench. Fung. 2 : 124, pl. 41, f. 228 a-c. 1789—PERSOON, Jour. Bot. 2 : 17, pl. 1, f. 1. 1809—FRIES, Syst. Myc. 3 : 33. 1829—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 300. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 302. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 13. 1869—FUCKEL, Symb. Myc. 35. 1869—COOKE, Handb. Brit. Fung, 1:373. 1871; Handb. Austr. Fungi, 239. 1892—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 360. 1876—WINTER, Pilze, 1 : 898. 1884—MASSEE, Monogr. Lyc. 723 (n. 106). 1887; Brit. Fung. Fl. 1 : 36. 1892—MORGAN, Jour. Cinc. Soc. Nat. Hist. 14 : 19, pl. 2, f. 7. 1891—HOLLÓS, Gast. Hung. 107, 169. pl. 21, f. 29-35. 1904—LLOYD, Myc. Writ. 1, Lyc. Austr. 30, f. 32. 1905; 2: 216, pl. 53, f. 9-11. 1905; 235, pl. 65, f. 8. 1905—PETRI, Fl. Ital. Crypt. Gast. 48, f. 21. 1909—REA, Brit. Basid. 37. 1922—COKER & COUCH, Gast. 91, pl. 58, 113, f. 25-28. 1928—BRESADOLA, Icon. Myc. 23: pl. 1139, f. 3. 1932—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 2 : 304. 1935—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 65. 1933.

(LLOYD, Myc. Writ. 5, Lett. 65 : 5. 1917—白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 331. 1917; ed. 3. 194. 1927—原, 日. 菌. 目. 187. 1954)

Bovista pusilla PERS. Syn. Meth. Fung. 138. 1801—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 110. 1888—MASSEE, Monogr. Gast. 65, f. 59. 1889—W. G. SMITH, Brit. Basid. 477. 1908.

Globaria pusilla QUÉL. Champ. Jura Vosg. 2 : 371, pl. 3, f. 7. 1873; Enchir. Fung. 239. 1886—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 750. 1912.

Lycoperdon furfuraceum DETONI, in SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 110, 486. 1888. pr. p.

Globaria furfuracea SCHROET. Pilze Schles. 1 : 699. 1889. pr. p.

Bovistaria pusilla KARST. Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 11. 1889.

子実体は茎部なく，球形或は扁球形にて小形，径 0.9—1.8cm，むしろ 1cm を超ゆるもの少し，基端に主根状の長き菌糸束を有す，上皮は変化に富み，通常肉眼にては殆ど平滑，レンズ下にて微細粉状或は微細小刺，稀に密疣を認められ，頂部帯褐黄土色の小鱗片となる，幼時純白，のち粘土色或は暗緑黄色，熟後内皮は暗褐色，平滑，光沢ありて先端に小なる不正形の孔口を開く；基本体は緑黄色，のち帯褐オリーブ色，遂に全く褐色となり，無性の部分なし；胞子は基本体と同色，球形，膜はむしろ厚く，平滑或は微細疣あり，屢々短柄を附す，径 3.5—4μ；弾糸は有色，長く，分岐し，胞子と同幅にて或物は僅か広し。

所在及産地

野外，林地—夏秋

本州—欧．北南米．阿．濠．亜(西比．瓜)

和名　チビホコリタケ（矮小埃茸）

Lycoperdon subincarnatum PECK

アバタチャブクロタケ

PECK, Rep. N. Y. St. Mus. 24 : n. 83. 1872—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 131, 484. 1888—MORGAN, Jour. Cinc. Soc. Nat. Hist. 14 : pl. 2, f. 6. 1891—LLOYD, Myc. Writ. 2 : 233, pl. 63, f. 5-9. 1905—CUNNINGHAM, Proc. Linn. Soc. N. S. Wales, 51 : 631, pl. 46, f. 4-5. 1926—COKER & COUCH, Gas. 80, 51, 57 (above), 113, f. 9-10. 1928—S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 15 : 6. 1937—KOBAYASI, Bot. Mag. Tokyo, 51 : 802. 1937.

(LLOYD, Myc. Writ. 4, Lett. 60 : 15. 1915)

子実体は着生物上に白色菌糸束によつて附着し，小形にて径約 1—2.5cm，球形或は扁球形，殆ど或は全く無茎；表面は幼時帯赤褐色，熟時暗褐色或は鈍革褐色，初め微細にて離れたる淡褐色の疣或は小刺に密に被わる，熟後これ等の疣或は刺及び組織は徐々に脱落し，淡褐色の内皮を露出す，内皮は甚だ緊緻にて剛直，全面に鋭稜の網状脈に囲まれたる特有なる小孔を有しレンズ下にて指貫きの観を呈す；基本体は明かに放射状基層板によりて分たれ，成熟前にはツチグリ類の場合に類似す，熟後帯灰紫色を呈す，無性基部は僅少或は殆ど欠如し，小なる腔室を有す，或場合には甚だ明かなる柱軸を作り益々ツチグリ類に類似する観を呈す；胞子は球形，鈍褐色，乾時明かに疣状，水浸にて高度顕微鏡下にて刺状に見ゆ，3.5—4.5μ；弾糸は長く，単一或は僅か分岐し，甚だ淡色，幅 6.5μ に及び，膜は各所不規則に厚く，時に内腔なし。

所在及産地

枯幹，切株及材上—秋

小笠原島—北米．濠．南洋

和名　アバタチャブクロタケ（痘痕茶袋茸）〔今井〕

Lycoperdon purpurascens BERK. et CURT.

クロゲチャブクロタケ

BERKELEY & CURTIS, Proc. Am. Acad. Arts. Sci. 4 : 124. 1858—MASSEE, Monogr. Lyc. 724. 1887—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 488. 1888—S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 15 : 7. 1937.

(松村，植．名鑑，1 : 151. 1904—白井，日．菌．目．48. 1905; ed. 2. 331. 1917; ed. 3. 194. 1927—原，日．菌．目．186. 1954)

? *Lycoperdon fuligineum* BERK. et CURT. Jour. Linn. Soc. Bot. 10 : 345. 1869—MASSEE, Monogr. Lyc. 718. 1887—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 132. 1888—LLOYD, Myc. Writ. 2 : 234, pl. 64, f. 5-9. 1905.

Bovista purpuracea DETONI, in SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 97. 1888.

(白井，日．菌．目．16. 1905—原，日．菌．目．36. 1954)

子実体は小形にて径約 1—1.5cm，類球形或は類倒卵形，殆ど或は全く無茎，乾品にて殆どオリーブ黒色，下部は帯白色～帯黄色或は帯褐色の長さ 1mm に及ぶやや束となれる刺に被われ，上部は束刺の脱落後甚だ短き剛毛を残し絨状を呈し網目を残さず，無性基部は明なり；基本体は灰紫色；胞子は球形，有刺，帯黄色，径 4—5μ；弾糸は殆ど無色或は甚だ淡色，分岐乏し。

所在及産地

腐木上—秋　　小笠原島—玖馬？

和名　クロゲチャブクロタケ（黒毛茶袋茸）〔今井〕

疑 問 点

Lycoperdon Desmazieres
(LLOYD, Myc. Writ. 7 : 1346. 1925)

L. fasciculatum LLOYD, in STEVENSON & CASH, New Fung. Names Lloyd, 185. 1936.
(LLOYD, l. c. 7 : 1345. 1925)

L. Lewisii LLOYD, l. c. 7 : 1228, pl. 257, f. 2552. 1923; STEVENSON & CASH, l. c. 186. 1936.
(LLOYD, l. c. 7 : 1188. 1923)

L. plicatum BERK. et CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4 : 14. 1858—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 112, 487. 1888.
(MIQUEL, Prol. Fl. Jap. 392. 1867—松村, 植. 名鑑, 1 : 151. 1904—白井, 日. 菌. 目. 48. 1905; ed. 2. 331. 1917; ed. 3. 194. 1923—安田. 植. 雑. 33 : 263, 1919—LLOYD, l. c. 6 : 980. 1920—広江, 応用菌蕈学, 1236. 1941—原, 日. 菌. 目. 186. 1954)

Bovista PERS. ex PERS.
シバフダンゴタケ属

PERSOON, Tent. Disp. Fung. 6. 1797; Syn. Meth. Fung. 136. 1801—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 69. 1933.

Lycoperdon Auct. pr. p.

Sackea ROSTKOVIUS, in STURM, Deut. Fl. 3 (5) : 33. 1839.

Endoneuron CZERNAJEW, Bull. Mosc. 151. 1846.

Globaria QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 2 : 370. 1873. pr. p.

子実体は類球形, 基部に菌糸束を有し熟時之れより離る; 外皮は平滑, 初め肉質, のち砕片となる; 内皮は紙状にて薄く, 緊緻, 頂点に明かに或は不明瞭に取り囲まれたる孔口を開く; 基本体は無性基部を欠如す; 弾糸は遊離し, 内皮に連結せず, 太き主枝を有し, 叉状に分岐し, 遊離端を持つ長き尖れる枝を有す; 胞子は球形或は楕円形, 褐色, 小柄を附し或は欠如す。

(本属名は Buff-Fist, Bovist〔独〕(ホコリタケ) より出づ)

基本種 *B. plumbea* PERS. ex PERS.

本邦既知種

シバフダンゴタケ ***B. plumbea*** (552)

Bovista plumbea PERS. ex PERS.
シバフダンゴタケ

PERSOON, Tent. Disp. Fung. 5. 1797; Syn. Meth. Fung. 137, pl. 3, f. 4. 1801—NEES, Syst. Pilze Schw. 132, f. 124. 1817—S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 582. 1821—FRIES, Syst. Myc. 3 : 24. 1829—CORDA, Icon. Fung. 5 : 61, pl. 6, f. 47. 1842—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 300. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 301, pl. 20, f. 6. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 372. 1871—FUCKEL, Symb. Myc. 36. 1869—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 12. 1869—KARSTEN, Myc. Fenn. 3 : 360. 1876; Krit. Oefv. Finl. Basidsv. 9. 1889—WINTER, Pilze, 1 : 907. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 96. 1888—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 700. 1889—MASSEE, Monogr. Gast. 63, f. 63. 1889; Brit. Basid. 472. 1911—MORGAN, Jour. Cinc. Soc. Nat. Hist. 14 : 146. 1892—LLOYD, Myc. Writ. 1 : 115, pl. 1. 1902—HOLLÓS, Gast. Hung. 122, 174, pl. 22, f. 32-35. 1904—W. G. SMITH, Brit. Basid. 477. 1908—PETRI, Fl. Ital. Crypt. Gast. 62, f. 32-33. 1909—ROLLAND, Atl. Champ. 95, pl. 109, f. 250. 1910—REA, Brit. Basid. 38. 1922—COKER & COUCH, Gast. 99, pl. 114, f. 7-8. 1928—BRESADOLA, Icon. Myc. 23 : pl. 1140, f. 2. 1932—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 69, f. 50, c. 1949—HEIM, Champ. Eur. 2 : 495, f. 319, A-B, pl. 55, f. 4. 1957.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo. 50 : 222. 1936—原, 日. 菌. 目. 36. 1954)

Lycoperdon ardosiaceum BULL. Herb. Fr. pl. 192. 1783—DECANDOLLE, Fl. Fr. 2 : 262. 1815.

Sackea plumbea ROSTK. in STURM, Deut. Fl. 3 : 35, pl. 16, f. a-c. 1839.

Lycoperdon plumbeum VITT. Monogr. Lyc. 174. 1843—MASSEE, Brit. Fung. Fl. 1 : 34. 1894.

Globcria plumbea QUÉL. Champ. Jura Vosg. 2: 371. 1873; Enchir. Fung. 240. 1886.

子実体は球形或は扁球形, 径 2—3cm, 基端に主根状菌糸束あり, 熟後子実体は之れより離脱遊離す; 外皮は薄く, 白色, 平滑にて熟後砕片となりて剝落し, 往々下面に残る; 内皮は鉛灰色, 平滑, 緊緻, 紙質, 熟後頂孔を以て開く; 基本体は密にて弾性あり, 初め黄土色或はオリーブ色, 熟後紫褐色; 胞子は卵形或は球形, 平滑, 弾糸より淡色, 6—7×5—6 μ, 長き無色の柄 (10—12 μ) を附す; 弾糸は褐色, 3—5 回分岐し, 枝端尖り遊離す, 主幹は太きところ幅 12—16 μ。

所 在 及 産 地

草原—秋 北海道—欧. 北米

和 名 シバフダンゴタケ (芝生団子茸)〔今井〕

Bovistella MORG. em. LLOYD
ダンゴタケ属

MORGAN, Jour. Cinc. Soc. Nat. Hist. 14 : 141. 1892—LLOYD, Myc. Writ. 1, Gen. Gastr. 11.

1902—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 70. 1933.
Bovista Auct.

子実体は球形或は洋梨形にて基部に菌糸座を有し，熟後之れより離脱せざるを以て前属と区別さる；外皮は薄くして通常消失す；内皮は薄く弱膜状，頂端に境の明かなる或は然らざる孔口を開く；基本体は無性基部を有し或は欠如；弾糸は遊離し，内皮に連結することなく，太き主枝を有し，叉状分岐し，遊離せる長くして先端尖れる枝を存す；胞子は球形，卵形或は楕円形，脱落後小柄の残片を附し或は附着せず。

（本属名は *Bovista*（属名）の示小辞）

基準種　*B. radicata*（Dur. et MONT.）PAT.

本邦既知種検索表

A. 子実体やや大形，胞子楕円形，平滑，内皮平滑。

ダンゴタケ ***B. radicata***（553）

B. 子実体は小形，胞子球形，有刺，内皮は円痕を存す。

トゲホコリタケ ***B. yasudae***（553）

Bovistella radicata（DUR. et MONT.）PAT.
ダンゴタケ

PATOUILLARD, Bull. Soc. Myc. Fr. 4 : 55, pl. 4, f. 2. 1899—HOLLÓS, Gast. Hung. 15. 1904—LLOYD, Myc. Writ. 2 : 262, 280, pl. 87, f. 1-4. 1906—COKER & COUCH, Gast. 95, pl. 59, 114, f. 2-4. 1928—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 71. 1933.
（川村，日．菌．図鑑，6 : 686, pl. 658. 1954）
Lycoperdon radicatum DURIEU et MONT. Syll. Crypt. 287. 1856—MASSEE, Monogr. Lyc. 715. 1887—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 117, 482. 1888.
Mycenastrum Ohiense ELLIS et MORG. Jour. Myc. 1 : 89. 1885.
Scleroderma ohiense DETONI, in SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 137. 1888.
Bovistella ohiensis MORG. Jour. Cinc. Soc. Nat. Hist. 14 : 141, pl. 5, f. 1-3. 1892—LLOYD, Myc. Writ. 2 : 279, pl. 86. 1906.

子実体は球形或は倒卵形，通常径 7cm に及び，稀にそれ以上に及ぶ，下部襞皺を有し，緊緻の太き主根状菌糸束に連る；外皮は上半部に於て軟きピラミッド形疣刺となる，下部に至るに従つて密なる痂状となる，初め白色，のち鼠色，遂に褐色となり，不規則に脱離し，薄き紙状の内皮を露わす，内皮は平滑，光沢あり，淡褐或は帯黄色，頂孔によりて開口し，乾燥後往々裂く；基本体は初め白色，肉質，のち帯黄色～褐色，無性基部は大にて広く，盃形をなし，腔室を存す；胞子は楕円形，平滑，4.3—5.2×3.5—4.5 μ，長さ約 11 μ の柄を存す；弾糸は短く，3—5回分岐し，先端尖り遊離す，主幹は幅 7—12μ。

所在及産地
林内，草原—夏秋
本州—北阿．北米．欧

和名　ダンゴタケ（団子茸）〔川村〕

Bovistella yasudae LLOYD
トゲホコリタケ

YASUDA, Bot. Mag. Tokyo, 36 : 177. 1922.
（白井，日．菌．目．ed. 3. 58. 1927—広江，応用菌蕈学，1239. 1941—原，日．菌．目．37. 1954）
Bovista yasudae LLOYD, in STEVENSON & CASH, New Fung. Names Lloyd, 165. 1936.
（LLOYD, Myc. Writ. 7 : 1162. 1922）

子実体は球形或は扁球形にて基脚部狭小となり根状束に連る，径 1.8—2.8cm，高さ 1.5—2.2cm；外皮は淡褐色にて暗褐色の刺となり，各刺は円錐形，先端往々彎曲し，長さ 0.5—1.2mm，基部径 0.2—0.5mm，老時脱落して円痕を残す；内皮は薄膜質，頂孔を以て開く；基本体は暗褐色，下部無性；胞子は球形，淡褐色，有刺，径 4—5μ，無色にて極めて細き柄（10—16×1μ）を有す；弾糸は太き幹より長き叉状枝を分つ，枝端尖鋭にて遊離す，淡褐色，幅 2—10μ。

所在及産地
林地—秋　本州

和名　トゲホコリタケ（刺埃茸）〔安田〕

疑問種

Bovistella japonica LLOYD, Myc. Writ. 2 : 281, pl. 88, f. 1—2, f. 126. 1906; STEVENSON & CASH, New Fung. Names Lloyd, 168. 1936—SACCARDO, Syll. Fung. 21 : 481. 1912.
（白井，日．菌．目．ed. 2. 101. 1917; ed. 3. 58. 1927—原，日．菌．目．36. 1954）

Geastraceae FISCHER ヒメツチグリタケ科

FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 72. 1933.

Geastrideae CORDA, Icon. Fung. 5 : 25. 1842.

子実体は初め地中生にて熟後地表に露われ，或は初めより地表生なり，球形或は基部茎状に伸長す；基本体は柱軸を有し，これより腔室は放射状に配列す；内皮は紙状にて薄く，外皮より遊離し，孔口を以て或は不規則に崩壊して開き，時に外皮と結着して残るものあり；外皮は 2—3 層にて，厚き擬柔組織肉質層を繊維層が包囲す，熟後外皮は星芒状に開く，普通4属を収む，本邦に知らるるものは只1属のみ。

本邦既知属

ヒメツチグリタケ属 **Geastrum** (554)

Geastrum PERS.
ヒメツチグリタケ属

PERSOON, Syn. Meth. Fung. 131. 1801—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 72. 1933.

Geaster MICHELI, Nova Plant. Genera, 220. 1729—FRIES, Syst. Myc. 3 : 8. 1829.

Geastroides BATTARRA, Fung. Arim. Hist. 74. 1755.

Plecostoma DESVAUX, Jour. de Bot. 2 : 99. 1809.

子実体は初め地中生にて裂開するに至りて初めて地表に露出し，或は初めより菌糸束或は菌糸膜を有して地表に存するものあり，球形，稀に先端尖り，或は洋梨形なり；内皮は薄くして紙質；皮外は内側に屢々かなり厚き擬柔組織肉質層ありて，次に緊緻なる薄き繊維層あり，更にその外部に地中生のものにては弛き綿屑状の菌糸被，地上生にては皮部を存す，熟後肉質層は内皮より離れて，全部の外皮は頂端より星芒状に裂開す，多くのものは各裂片下方に彎曲し，菌糸被或は皮部は地面に残り，時に皿状となる，最後に肉質層は乾燥す，かかる経過によりて内皮は球形或はやや長形の袋として露出し，無柄にて坐生し，或は柄によつて展開せる外皮上に立つ，のち頂孔を以て開口す，頂孔の性質は種類によりて著しく異なり，只単に開口して不規則形をなし，或は特別なる円錐形の口吻即ち孔縁盤 (peristome) を作り，その外囲に境せらたる円坐を有し又は有せざるものあり，尚孔縁盤に著しき縦溝を櫛歯状に有するもの或は只繊維状のもの等あり；基本体は基部に存する柱軸より明かに放射状をなす；担子柄は4—8胞子を坐生或は小柄上に生ず；胞子は球形，微細疣刺を有す；弾糸は長く，分岐すること少く，柱軸及内皮より発源す。

(本属名は Ge〔希〕(土) astron〔希〕(星) より出づ)

基本種 *G. pectinatum* PERS.

本邦既知種検索表

A. 孔縁盤は有溝或は襞状なり。
- a. 内皮は柄を有す，孔縁盤に強き縦溝あり。
  - α. 細長の柄を有し，内皮の下面に放射状の溝あり，内皮の表面は平滑にて屢々白粉を被むる，中形菌。
    コフキクロツチガキタケ **G. pectinatum** (556)
  - β. 少くとも熟時短柄を有し，内皮下面溝なく，表面は粗糙，小形菌。
    ヒメツチグリタケ **G. nanum** (556)
- b. 内皮は無柄，孔縁盤は波状襞を有す，小形菌。
  ヒダフクロツチグリタケ **G. badium** (556)

B. 孔縁盤は繊維状にて溝襞なし。
- a. 子実体は初め腐蝕物或は地中に埋在す。
  - α. 子実体の菌糸被は裂開後皿状をなして地上に残る一地上の皿は不完全にて之れに裂片先端にて直立す，内皮表面に粉粒状結晶を被むり，孔縁盤の外囲の円盤著し，短柄あり，裂片数は少く多くは4個，小形菌。
    ヒメカンムリツチグリタケ **G. minus** (556)
  - β. 菌糸被は皿状をなさず。
    - I. 肉質層は中半部に於て円形に横裂し上屈し内皮の周囲に襟巻状盃を作る，菌蕾は宝珠形，大形菌。
      エリマキツチガキタケ **G. triplex** (557)
    - II. 襟巻を作らず，内皮は外皮に沈みイズコ状。
      1. 菌蕾は著しき長嘴を有しクワエ球茎状，平滑或は皺あり，裂片は甚だ長く，徐々に先端に狭細す，屢々先端捩曲す，大形菌。
         トガリフクロツチグリタケ **G. lageniforme** (557)
      2. 菌蕾は宝珠形，軟絨毛を被むる，裂片は広き基部より急に狭細，先端捩れ易く，2分し易し，大形菌。
         フクロツチガキタケ **G. saccatum** (558)

b. 子実体は表生。

α. 子実体の基部に菌糸束を有す。

I. 外皮表面は絨軟毛を有す，内皮に微細絨毛あり，裂片は裂開反転す，イズコ形，小形菌。

ケブクロツチガキタケ **G. velutinum** (558)

II. 外皮表面は束状剛毛に被わる，内皮平滑，裂片は半開，桔梗花形，小形菌。

ヒナツチガキタケモドキ **G. trichiferum** (559)

β. 子実体は菌糸膜上に坐生す，外皮表面は綿絮を被むる，内皮殆ど平滑，裂片は半開にて桔梗花形或は開きてイズコ形，小形菌。

ヒナツチガキタケ **G. mirabile** (559)

* 前者より大形，外皮の綿絮少く，胞子やや大形，小笠原産。

チチシマヒナツチガキタケ f. **chichishimae** (560)

C. 頂口は不定形にて歯状或は繊維状，円坐なし。

a. 内皮は円褥状外皮上に坐し，無柄，表面絨毛なし，胞子は球形，径 3—4μ，淡黄褐色，不明瞭の疣あり，中形菌。

シロツチガキタケ **G. fimbriatum** (560)

b. 内皮は櫓状外皮上に立ち，短柄あり，表面粗糙，絨状，胞子は球形，径 4—5μ，濃褐色，短鈍刺あり，大形菌。

ヤブレツチグリタケ **G. rufescens** (561)

* 前者より小形のもの。

ヒメヤブレツチグリタケ f. **minor** (561)

Geastrum pectinatum PERS.

コフキクロツチガキタケ

PERSOON, Syn. Meth. Fung. 132, pl. 2, f. 4. 1801; Jour. Bot. 2 : 26, pl. 2, f. 4. 1809—ALBERTINI & SCHWEINITZ, Consp. Fung. Lusat. 78. 1805—S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1 : 585. 1821—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7**a** : 73. 1933.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 50 : 217, f. 1. 1936—S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 15 : 3. 1937—KOBAYASI, Bot. Mag. Tokyo, 51 : 799, pl. 17, f. A. 1937; 日. 隠. 植. 図. 591, pl. 286, f. 1—5. 1939)

Geastrum multifidum var. α. PERS. Disp. Meth. Fung. 6. 1797—DECANDOLLE, Fl. Fr. 2 : 267. 1815.

Geaster plicatus BERK. Ann. Nat. Hist. 3 : 399. 1839—LLOYD, Myc. Writ. 1, Lyc. Austr. 17, f. 13. 1905.

Geaster tenuipes BERK. HOOK. Jour. Bot. 12 : 576. 1848—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 76. 1888—LLOYD, Myc. Writ. 1 : 72, f. 37. 1901.

Geaster biplicatus BERK. et CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4 : 124. 1858—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 76, 472. 1888.

(松村，植．名鑑，1 : 144. 1904—白井，日．菌．目．38. 1905; ed. 2. 253. 1917; ed. 3. 146. 1927—川村，植．雑．32 : 76. 1909—広江，応用菌蕈学，1230. 1941)

Geaster pectinatus QUÉL. Enchir. Fung. 238. 1886—HOLLÓS, Term. Füzet. 25 : 121. 1901; Gast. Hung. 55, 152, pl. 8, f. 1—7, pl. 29, f. 16. 1904—LLOYD, Myc. Writ. 1, Gen. Gast. pl. 8, f. 38; Geast. 15, 41, f. 19—22. 1902; Lyc. Austr. 18, f. 14. 1905—PETRI, Fl. Ital. Crypt. Gast. 77, f. 40. 1909—REA, Brit. Basid. 40. 1922—COKER & COUCH, Gast. 132, pl. 74—75. 115, f. 27. 1928—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 2 : 312. 1935—LONG & STOUFFER, Mycologia, 40 : 550. 1948—HEIM, Champ. Eur. 2 : 505, f. 328, D. 1957.

Geastrum biplicatum(原，日．菌．目．132. 1954)

Globaria pectinatum (err. typ.)(原，日．菌．目．132. 1954)

子実体は群生，腐蝕物内に埋在し，軟き綿屑状白色菌糸に包まれ，裂開するに及び地上に露出す；菌蕾は扁球形，径 2.5cm，高さ 2cm 内外，上端少しく突出す；外皮は熟後ほぼ半ば或は 2/3 のところまで裂け星芒状に開張し，径 5—9cm，裂片は 7—12 個，甚だ不等，狭く，鋭頭，柔嫋，通常反転し，時に先端内屈す，中央部は凸面となりて内皮を持ち上げ，裂開後は最外部に存せし菌糸膜は地表に残る，肉質層は淡褐色或は鼠色にて，通常固着し，時に縦横に裂くることあり；内皮は薄く，紙質，鏡玉形或は類球形，鉛色～淡黒色，平滑，屢々容易に拭去し得る白粉を被むる，孔緣盤は嘴状或は狭円錐形，栗褐色，16—20 の著しき深き溝を有し，多少一定せる凹所に坐す，内皮の下面に放射状の溝ありて柄に連る，柄は細長にて，長さ 2—4mm，或はそれ以上に及び，首輪を有し或は欠如す；基本体は帯菫褐黒色～黒褐色，柱軸不明瞭；胞子は球形，暗褐色，粗疣を有し，径 4—6μ；弾糸は褐色，単一，厚膜，幅 3—7μ。

所在及産地

林内落葉間—秋　北海道，本州，小笠原島—欧．北米．阿．濠．亜(印)

和名 コフキクロツチガキタケ（粉吹黒土柿茸）〔小林〕

キクザツチグリ（菊坐土栗茸）〔今井〕

オガサワラツチグリ(小笠原土栗茸)〔川村〕

Geastrum nanum PERS.

ヒメツチグリタケ

PERSOON, Jour. Bot. 2 : 27, pl. 2, f. 3. 1909.

Geaster Schmidelii VITT. Monogr. Lyc. 157, pl. 1, f. 7. 1843—WINTER, Pilze, 1 : 910 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 76. 1888—LLOYD, Myc. Writ. 1, Geast. 18, 42, f. 27. 1902; Lyc. Austr. 19, f. 15. 1905—COKER & COUCH, Gast. 134, pl. 75, 115, f. 31. 1928—LONG & STOUFFER, Mycologia, 40 : 551, f. 4. 1948.

(川村, 植. 雑. 23 : 174. 1909; Illus. Jap. Fungi, 1, pl. 2, f. 29—31. 1912; 日. 菌. 図鑑, 7 : 703, f. 703. 1954—安田, 植. 雑. 37 : 205. 1923—広江, 応用菌蕈学, 1232, 1941)

Geaster nanus HOLLÓS, Gast. Hung. 55, 152, pl. 9, f. 7—11. 1904—PETRI, Fl. Ital. Crypt. Gast. 76. 1909—HEIM, Champ. Eur. 2 : 505, f. 329, A, pl. 55, f. 7. 1957.

Geastrum Schmidelii KOBAYASI, Nippon Inkwa-syokubutu Dukan (日. 隠. 植. 図), 591, pl. 286, f. 6. 1939.

(原, 日. 菌. 目. 133. 1954)

子実体は腐蝕物内に埋在し, 菌糸膜に包まる, 熟時裂開し地表に露わる, 小形; 外皮は熟後半ば或はそれ以上に 5—7 片に裂け, 開張して径 2.5—4cm, 各裂片は不等, 狭く, 鋭頭, 反転し, 往々先端少しく下方に反捲彎入す, 外面即ち下面は平滑, 淡褐色, 内面即ち肉質層は褐色, 乾けば往々薄膜状となりて剝離し割目を生ず; 内皮は薄く, 紙質, 類球形, 径 8—12mm, 灰褐色～鉛色, 粗糙, 孔縁盤は嘴状或は細円錐形, 強き縦溝あり, 多少明かなる凹部に坐す, 内皮の基部に短柄を有し或は殆ど無柄, 柄は長さ 1—3mm 或は以下, 円柱状, 首輪を有し或は欠如; 基本体は黒褐色, 柱軸は卵形にて比較的低し; 胞子は球形, 褐色, 細疣あり, 径 3.5～4.5μ; 弾糸は淡褐色, 無枝, 幅 5—7μ。

所在及産地

林内地上—秋　本州, 小笠原島—欧. 北米. 濠

和名　ヒメツチグリタケ (姫土栗茸)〔川村〕

Geastrum badium PERS.

ヒダフクロツチグリタケ

PERSOON. Jour. Bot. 2 : 27. 1809.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 50 : 221. 1936—原, 日. 菌. 目. 132. 1954)

Geaster umbilicatus FRIES, Syst. Myc. 3 : 14. 1829—HOLLÓS, Gast. Hung. 60, 153, pl. 9, f. 23—24. 1904.

Geaster elegans VITT. Monogr. Lyc. 159, pl. 1, f. 4. 1843—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. Suppl. 11 : 404. 1882; Enchir. Fung. 238. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 78. 1888—LLOYD, Myc. Writ. 2 : 312, pl. 99, f. 5—6. 1907—PETRI, Fl. Ital. Crypt. Gast. 86. 1909.

子実体は群生, 小形; 外皮は 4—7 片に半ばまで裂け, 裂片は不等大, 鋭頭, 反転し, 多くは彎入す, 中央部やや盃形, 肉質層は柔く, 破れ易く, 屢々裂ける, 帯白色或は柔皮色, のち褐色, 剝げ易し; 内皮は卵球形, 多くは圧低され, 径 5—10mm, 灰白色, 光沢なく, 無柄, 孔縁盤は襞状にて, 圧低されて臍状なるも, 屢々円錐形に突出し, 先端纖維状; 胞子は球形, 僅か疣あり, 黄褐色, 径 5—6μ; 弾糸は胞子の径より細し。

所在及産地

針葉樹林落葉間—秋　本州—欧

和名　ヒダフクロツチグリタケ (襞袋土栗茸)〔今井〕

Geastrum minus (PERS.) FISCH.

ヒメカンムリツチグリタケ

FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 73. 1933.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 50 : 216. 1936—原, 日. 菌. 目. 133. 1954)

Lycoperdon coronatus SCHAEFF. Icon. Fung. 127, pl. 183. 1763. pr. p.

Geastrum quadrifidum β. minus PERS. Syn. Meth. Fung. 133. 1801—ALBERTINI & SCHWEINITZ, Consp. Fung. 79. 1805.

Geaster fornicatus FR. Syst. Myc. 3 : 12. 1829. pr. p.—WINTER, Pilze, 1 : 912, f. 5. 1884—LLOYD, Myc. Writ. 1 : 71, f. 36. 1901.

Geaster umbilicatus QUÉL. Champ. Jura Vosg. 2 : 422, pl. 3, f. 6. 1873. (non FRIES)

Geaster Queletii HAZSLINSZKY, Abhandl. Ver. Prov. Brandenb. 24 : 136. 1882—QUÉLET. Enchir. Fung. 237. 1886.

Geaster coronatus SCHROET. Pilze Schles. 1 : 702. 1889. pr. p.—LLOYD. Myc. Writ. 1, Geast. 31, f. 58—61; Append. 1 : 40. 1902—HOLLÓS, Gast. Hung. 61, 153, pl. 7, f. 11—14; pl. 8, f. 19. 1904—MIGULA. Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 753, pl. 144, f. 5. 1912.

Geaster quadrifidus var. *minor* HOLLÓS, Term. Fützet. 25 : 116. 1902.

Geaster minimus (non SCHWEINITZ)

(LLOYD, Myc. Writ. 2, Lett. 7 : 1. 1905)

子実体は群生, 腐蝕物内に埋在し, 菌糸に包まれ, 裂開して表生となる, 小形; 外皮は熟後深く規則正しく 4 片, 稀に 5 片に裂け, 開張して径 2.5—5cm, 高さ 2—4cm, 裂片は殆ど等大にて鋭頭, 反転し,

檣状をなし，その先端は外皮の外を包みし菌糸が不完全なる皿状となりて地上に残り塵屑針葉等を附着し不規則の塊を作るものの上に附着し殆ど直立するに至る；肉質層は帯黄色，帯褐色，帯白色或は帯青灰色等にて一般に淡色，裂けて一部固着或は全部剝落す，外部は帯白色，平滑なり；内皮は多くは卵形或は洋梨形，径 4—10mm，青灰色，帯黒色或は帯褐色，甚だ屢々白色微細粉粒状結晶を被むる，頂端は帯黄色の著しく境せられたる纎維状の円盤あり，これより円錐形に突出せる孔縁盤に移行す，基部に首輪あり，柄は短し；基本体は暗褐色にて紫色を帯び，柱軸は細く，瘤状；胞子は球形，褐色，有疣，径 4—5μ；弾糸は管状，褐色，胞子より幅広く，幅 5—7μ。

所在及産地

針葉樹林内落葉間—秋　　北海道—欧．北米

和名　ヒメカンムリツチグリタケ（姫冠土栗茸）〔今井〕

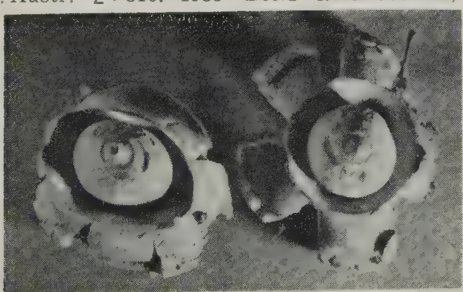
Geastrum triplex (JUNGH.) FISCH.

エリマキツチガキタケ

FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 73. 1933.

(KOBAYASI, Bot. Mag. Tokyo. 51 : 800. 1937—S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 15 : 5. 1937—原，日．菌．目．133. 1954)

Geaster triplex JUNGH. Tijdschr. Nat. Gesch. 7 : 287, pl. 8, f. 1—3. 1840—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 74. 1888—MORGAN, Jour. Cinc. Soc. Nat. Hist. 12 : 18. 1889—LLOYD, Myc. Writ. 1, Gen. Gast. pl. 8, f. 39; Geast. 25, 42, f. 47—49. 1902; Lyc. Austr. 23, f. 24. 1905; 2 : 309, f. 144, pl. 94; 339, f. 166. 1907—HOLLÓS, Gast. Hung. 73, 158, pl. 11, f. 1—6; pl. 29, f. 17. 1904—W. G. SMITH, Brit. Basid. 471. 1908—PETRI, Fl. Ital. Crypt. Gast. 72, f. 38. 1909—REA, Brit. Basid. 43. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 221, pl. 112. 1927—COKER & COUCH, Gast. 106, pl. 63, 115, f. 1. 1928—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 2 : 316. 1935—LONG & STOUFFER,



第239図　エリマキツチガキタケ
Geastrum triplex　×1/2　（大谷氏）

Mycologia, 40 : 572, f. 24. 1948—HEIM, Champ. Eur. 2 : 507, f. 330. 1957.

（川村，植．雑．23 : 173, f. 1. 1909; Illus. Jap. Fungi, 1 : pl. 2, f. 4—5. 1912；日．菌．図説，n. 65, 242. 1929；日．菌．図鑑，7 : 705, f. 705. 1954—白井，日．菌．目．ed. 2. 253. 1917; ed. 3. 146. 1927—牧野，日．植．図鑑，1014, f. 3039. 1940—広江，応用菌蕈学，1232. 1941）

子実体は小群生，腐蝕物内に埋在し，塵屑を附すること少し，裂開するに及び表生となる，大形；菌蕾は球形にて先端嘴状をなし宝珠形となる，径約 3cm；外皮は熟後半ば或はそれ以上まで 4—7 片に裂け，開張して径 6—12cm，厚く，堅くして脆し，裂片は殆ど等大，広く，鋭頭，反転し，更に彎入し，やや檣状となる，肉質層は甚だ肉質，赤褐色，熟後多くは円形に剝げ上屈し内皮の下に襟巻の如き盃状物を作る；内皮は膜質，扁球形，径 1.5—3.5cm，灰褐色，のち帯赤褐色，無柄，孔縁盤は短円錐形にて広く，放射纎維状にて強く境せられたる円坐あり；基本体は暗褐色，柱軸は棍棒形〜瘤状；胞子は球形，淡褐色，有疣，径 4—6μ；弾糸は胞子より甚だ太く，淡褐色，幅 6—7μ。

所在及産地

林内落葉間—秋　北海道，本州，小笠原島—欧．北米．濠．亜（瓜）．南洋

和名　エリマキツチガキタケ（襟巻土柿茸）〔川村〕

Geastrum lageniforme (VITT.) IMAI

トガリフクロツチグリタケ

IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 50 : 221. 1936—KOBAYASI, Bot. Mag. Tokyo, 51 : 801. 1937.

（小林，日．隠．植．図．593, pl. 287, f. 3. 1939—原，日．菌．目．132. 1954）

Geaster lageniformis VITT. Monogr. Lyc. 160. pl. 1, f. 2. 1843—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1: 371, f 113. 1871(?); Handb. Austr. Fungi, 230. 1892—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 86. 1888—MASSEE, Monogr. Gast. 84, f. 75. 1889; Brit. Fung. Fl. 1 : 39. 1892; Brit. Fungi, 476. 1911—MORGAN, Jour. Cinc. Soc. Nat. Hist. 12 : 19. 1889—LLOYD, Myc. Writ. 1 : 80, f. 44. 1901; Geast. 38, 41, f. 76—77. 1902—HOLLÓS, Gast. Hung. 70, 156, pl. 10, f. 11—14. 1904—W. G. SMITH, Brit. Basid. 470. 1908—PETRI, Fl. Ital. Crypt. Gast. 73. 1909—REA, Brit. Basid. 43. 1922—HEIM, Champ. Eur. 2 : 505, f. 328, c. 1957.

(LLOYD, Myc. Writ. 5, Lett. 63 : 8. 1916)

Geaster capensis THÜM. Myc. Univ. 715. 1877—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 85. 1888.

(KOBAYASI, Bot. Mag. Tokyo, 51 : 799. 1937)

Geaster dubius BERK. Jour. Linn. Soc. 16 : 40.

1878—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 91. 1888.
Geaster minutus P. HENN. Hedwigia, 39 : 54. 1900.
Globaria lageniforme (err. typ.)
(原, 日. 菌. 目. 132. 1954)

子実体は群生, 腐蝕物内に埋在し, 裂開するに及び表生となる; 菌蕾はクワエの球茎状をなし先端に著しき長嘴を有し, 径 2—2.5 cm, 高さ 2—3 cm, 淡黄褐色, 殆ど平滑或は皺あり; 外皮は熟後半ば以上まで 6—7 片に裂け, 開張して径 6—7 cm, 各裂片は殆ど等大, 甚だ長く, 狭く, 鋭頭, 先端屢々捩曲す, 少しく反捲す, 肉質層は黄土黄色, のち暗褐色, 粗糙, 基部に近く横裂するも襟巻を作らず, 中央部は凹み椀状となり内皮を取囲みイズコの如き観を呈す; 内皮は薄く, 紙質, 球形, 径 2—2.5 cm, 淡黄褐色, 孔縁盤は明かにて径 8—9mm, 円錐形, 絹糸状繊維質, 明かに境せられたる円坐あり, 無柄; 基本体は濃紫褐色, 柱軸は小瘤状或は殆ど欠如; 胞子は球形, 黄褐色, 僅か有疣, 径 3—4μ; 弾糸は管状, 単一或は先端に近く僅か分岐, 淡褐色, 径 6—8μ。

所在及産地
林内地上—秋　北海道, 本州—欧. 北南米

和名 トガリフクロツチグリタケ (尖袋土栗茸) 〔今井〕
トガリツチガキ (尖土柿茸) 〔小林〕

Geastrum saccatum (FR.) FISCH.
フクロツチガキタケ

FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7**a** : 73. 1933.
(小林, 日. 隠. 植. 図. 593, pl. 287, f. 1. 1939—原, 日. 菌. 目. 133. 1954)
Geaster saccatus FR. Syst. Myc. 3 : 16. 1829—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 86. 1888—MORGAN, Jour. Cinc. Soc. Nat. Hist. 12 : 18. 1889—LLOYD, Myc. Writ. 1 : 78, f. 40. 1901; Geast. 37, 42, f. 75. 1902; Ly . Austr. 22, f. 23. 1905—HOLLÓS, Gast. Hung. 71, 157, pl. 10, f. 19; pl. 29, f. 21—23. 1904—W. G. SMITH, Brit. Basid. 470. 1908—PETRI, Fl. Ital. Crypt. Gast. 75, f. 39. 1909—REA, Brit. Basid. 42. 1922—COKER & COUCH, Gast. 110, pl. 65, 115 f. 5—6, 117 f. 1. 1928.
(LLOYD, Myc. Writ. 2, Lett. 7 : 1. 1905; 12 : 4. 1916; 61 : 6. 1916—安田, 植. 雑. 23 : 68. 1909—川村, 植. 雑. 23 : 175. 1909—白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 253. 1917; ed. 3. 146. 1927—広江, 応用菌蕈学, 1231. 1941)



第 240 図　フクロツチガキタケ
Geastrum saccatum ×1/2 (大谷氏)

子実体は孤生或は群生, 地中に埋在或は半表生, 殆ど菌糸に包まれず, 裂開して全く表生となる; 菌蕾は球形にて頂部嘴状に尖り宝珠形をなす, 軟絨毛を被むり, 黄土色～柔皮色; 外皮は熟後半ばまで 5—7 片に裂け, 開張して径 5—7cm, 裂片は殆ど等大にて広き基部より先端に狭細, 捩れ易く, 長く伸び, 先端更に 2 分し易し, 裂開せざる基部即ち中央部は袋状をなして内皮の外囲を囲みイズコ形となる, 肉質層は薄く, 淡色にて紫色を帯び, 裂け易し; 内皮は薄き紙質, 扁球形, 径 2.5—3 cm, 黄褐色～黄土色, 平滑, 無柄, 孔縁盤は円錐形, 繊維質, 絹状, 広き円坐あり; 胞子は球形, 褐色, 微刺あり, 径 4—5μ; 弾糸は繊維状, 淡褐色, 幅 4—6μ。

所在及産地
林内地上—秋　北海道, 本州—欧. 北中米. 濠

和名 フクロツチガキタケ (袋土柿茸) 〔安田〕

Geastrum velutinum (MORG.) FISCH.
ケブクロツチガキタケ

FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7**a** : 73. 1933.
(小林, 日. 隠. 植. 図. 589, pl. 285, f. 1. 1939—原, 日. 菌. 目. 133. 1954)
Cycloderma ohiensis COOKE et MORG. Grev. 11 : 95, pl. 160, f. 3—10. 1882—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 56. 1888—PATOUILLARD, Bull. Soc. Myc. Fr. 16 : 182, pl. 7, f. 3. 1900.
Geaster Riederi COOKE et MASS. Grev. 16 : 73. 1888.
Geaster velutinus MORG. Jour. Cinc. Soc. Nat. Hist. 18, pl. 1, f. 7. 1895—SACCARDO, Syll. Fung. 14 : 260. 1899—LLOYD, Myc. Writ. 1, Geast. 33, 42, f. 62—71. 1902; Lyc. Austr. 21. 1905; 2 : 315, pl. 101, f. 1—2. 1907—COKER & COUCH, Gast. 113, pl. 31, 66—67, 115 f. 7. 1928.

(LLOYD, Myc. Writ. 4, Lett. 61 : 6. 1916—小林，蕈類の研究，1 : 6, f. 1. 1935)

Geaster Lloydii BRES. et PAT. Myc. Notes, n. 6 : 50. 1901.

Globaria velutinum (err. typ.)

(原，日．菌．目．132. 1954)

子実体は群生，着生物上に表生し，基部に菌糸束を有す，小形；菌蕾は卵形にて頂端鈍く尖り，径2.7cm に及ぶ，表面は淡黄褐色，微軟絨毛を布く；外皮は革質，熟後半ばまで 5—7 裂し，裂片はほぼ等大，反転す，肉質層は美しき肉色～暗赤褐色，内外2層に剝離し易し；内皮は膜状紙質，球形，微細なる絨毛を有し，灰色～暗褐色，殆ど或は全く無柄，外皮内に沈みイズコ状をなす，孔縁盤は広円錐形，放射繊維状，径 5—8mm；柱軸は不明瞭にて菌蕾にては棍棒形なり；胞子は球形，暗紫褐色，明かに微刺あり，径約 3μ；弾糸は屢々先端に近く分岐し，黄褐色，通常 3—5μ。

所在及産地

針葉林落葉間—秋　本州—北中南米．濠．阿

和名　ケブクロツチガキタケ（毛袋土柿茸）〔小林〕

Geastrum trichiferum (RICK) FISCH.

ヒナツチガキタケモドキ

FISCHER, Ann. Myc. 31 : 121. 1933.

Geaster trichifer RICK, in LLOYD, Myc. Writ. 2 : 314, f. 147—148. 1907; 5 : 804, f. 1251. 1918; STEVENSON & CASH, New Fung. Names Lloyd, 181. 1936—COKER & COUCH, Gast. 118, pl. 67, 115, f. 13. 1928.

(LLOYD, Myc. Writ. 7 : 1348. 1925)

Geaster mirabilis var. *trichifer* RICK, in SACCARDO, Syll. Fung. 21 : 477. 1912.

子実体は群生或は叢生；菌蕾は表生，類球形～円壔形，基部狭細して紐状菌糸束に連る，頂端僅かに隆起し，柔皮色，約 1mm の長さの多少束状をなす剛毛に被わるるを特徴とす；外皮は熟後半ば或はそれ以下まで裂け，裂片は直立或はその先端を開くのみ，大品に於ては広く開きて径 4cm に及ぶも小品に於ては約 3cm 内外；肉質層は柔皮色にて薄く，固着す；内皮は球形，無柄，コップ形外皮の内に存す，灰褐色，平滑，孔縁盤は甚だ明瞭，扁平にて中央隆起し，房毛を有する口あり；胞子は球形，微疣あり，径 3—3.6μ。

所在及産地

林内落葉及枯木上—秋

本州—ブラジル，ジャマイカ

和名　ヒナツチガキタケモドキ（擬雛土柿茸）

〔因記〕本菌は RICK 氏がブラジルに於て採集命名し LLOYD 氏が公表せし多毛外皮を有する極めて珍奇なるものなりしが日本より LEWIS 氏採集送附せし標本中にこれを見出し LLOYD 氏は甚だ不思議なる旨を報ぜり，その後ジャマイカに知られ，分布上にも興味あるものなり。

Geastrum mirabile (MONT.) FISCH.

ヒナツチガキタケ

FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 73 : 1933; Ann. Myc. 31 : 121. 1933.

(小林，蕈類の研究，1 : 7, f. 2. 1935; Bot. Mag. Tokyo, 51 : 799, pl. 17, f. B. 1937; 日．隠．植．図．589, pl. 285, f. 2—6. 1939—IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 50 : 219, f. 3. 1936—S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 15 : 4. 1937—今関，原色きのこ，pl. 69（右上）. 1942—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，124, pl. 58, f. 320. 1957)

? *Coilomyces Schweinitzii* BERK. et CURT. Jour. Acad. Nat. Sci. Phil. 2 : 279. 1853.

Geaster mirabilis MONT. Ann. Sci. Nat. IV, 3 : 139. 1855—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 79, 472. 1888—LLOYD, Myc. Writ. 1, Lyc. Austr. 20, f. 18—19. 1905; 2 : 313, pl. 100, f. 1—3. 1907—COKER & COUCH, Gast. 116, pl. 65, 67—68, 115 f. 10—12, 116 f. 4, 8. 1928.

(LLOYD, Myc. Writ. 4, Lett. 45 : 4. 1913)

Geaster papyraceus BERK. et CURT. Proc. Am. Acad. Arts Sci. 4 : 124. 1854—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 80. 1888.

(MIQUEL, Prol. Fl. Jap. 392. 1867—松村，植．名鑑，1 : 144. 1904—白井，日．菌．目．38. 1905; ed. 2. 253. 1917; ed. 3. 146. 1927—川村，植．雑．23 : 176. 1909—広江，応用菌蕈学，1231. 1941)

Geaster lignicola BERK. Jour. Linn. Soc. Bot. 18 : 386. 1881—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 80. 1888.

Geaster velutinus var. *caespitosus* LLOYD, Myc. Writ. 1, Geast. 36, f. 72—73. 1902—SACCARDO, Syll. Fung. 21 : 479. 1912.

Geaster caespitosus LLOYD, Myc. Writ. 2 : 315, pl. 100, f. 6—9. 1907; 6 : 960. 1920; STEVENSON & CASH, New Fung. Names Lloyd, 179. 1936.

Geastrum mirabile f. *papyraceum* IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 50 : 220, f. 3. 1936.

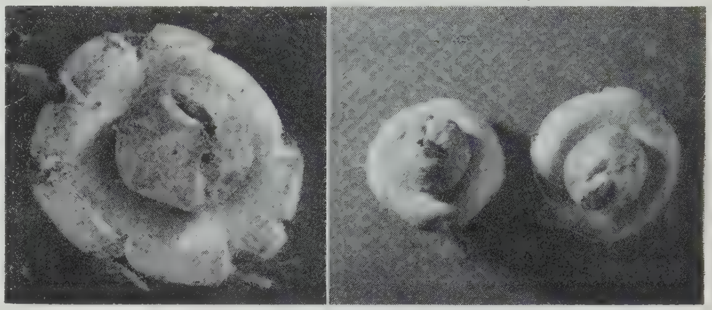
Geastrum papyraceus (原，日．菌．目．133. 1954)

Globaria mirabilis (err. typ.)（原，日．図．目．132. 1954)

子実体は通常群生，落葉枯木或は腐木上に纏絡せる著しき菌糸膜上に表生す；菌蕾は類球形にて基部やや突出し倒卵形となるもの多し，頂端尖らず，只乾時少しく隆起す，径 0.8—1.2cm，表面に淡褐色

の綿絮を密生す；外皮は熟後 6—7 片に裂け，径 1.4—2.2 cm，各裂片は充分開張せざるがために鐘形，或は開張するも下半部椀状となりて内皮を囲む，肉質層は初め厚さ約 0.5mm，平滑，灰白色～淡肉色，乾きて薄く，固着し，灰褐色となる；内皮は薄膜質，類球形，径 6—9 mm，淡褐色～暗褐色，殆ど平滑，無柄，孔縁盤は少しく突出し，溝条なく細歯状に裂け，周囲に明かなる円坐あり；胞子は球形，暗褐色，微疣あり，径 3.8—4.9 μ， 1 油球を包む；弾糸は糸状，厚膜，淡褐色，幅 3—4 μ。

a b



第 241 図　シロツチガキタケ Geastrum fimbriatum
a. 子実体 ×1 b. 同 ×1/2 （大谷氏）

所在及産地

林内落葉，腐木上—秋

本州，九州，小笠原島—北南米．濠．阿．亜（印．錫．支）南洋

和名　ヒナツチガキタケ（雛土柿茸）〔小林〕

f. **chichishimae** S. ITO et IMAI

チチシマヒナツチガキタケ

S. ITO & IMAI, Trans, Sapporo Nat. Hist. Soc. 15 : 5. 1937.

基種よりも大形にて径 0.9—2cm，暗色（汚黄褐，肉桂褐色或は黒銹色）にて外皮の綿絮少く，且つ胞子は僅か大形にて明かに有疣なり，菌糸体の発育は基種に劣る。

所在及産地

タチテンノウメ (*Osteomeles boninensis* NAKAI) の落葉上或はその間の地上—秋

小笠原島

和名　チチシマヒナツチガキタケ（父島雛土柿茸）〔今井〕

Geastrum fimbriatum (FR.) FISCH.

シロツチガキタケ

FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 73, f. 52, C-E. 1933—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 272, pl. 111, f. 1. 1950.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 50 : 221. 1936—KOBAYASI, Bot. Mag. Tokyo, 51 : 798. 1937)

Geaster fimbriatus FR. Syst. Myc. 3 : 16. 1829—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 302. 1884—BERKELEY, Outl. Brit. Fungi, 300, pl. 20, f. 4. 1860—FUCKEL, Symb. Myc. 36. 1869—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 17. 1869—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 370. 1871; Handb. Austr. Fungi, 229. 1892—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 2 : 364. 1873; Enchir. Fung. 239. 1886—WINTER, Pilze, 1 : 913. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 85. 1888—MASSEE, Monogr. Gast. 81, f. 77. 1889; Fl. Brit. Fungi, 1 : 40. 1892; Brit. Fungi, 476, pl. 35, f. 2. 1911—MORGAN, Jour. Cinc. Soc. Nat. Hist. 12 : 16. 1889—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 701. 1889—LLOYD, Myc. Writ. 1, Geast. 36, 40, f. 74. 1902—HOLLÓS, Gast. Hung. 68, 156, pl. 10, f. 17—18. 1904—W. G. SMITH, Brit. Basid. 471, f. 130, K-L. 1908—PETRI, Fl. Ital. Crypt. Gast. 80, f. 42. 1909—ROLLAND, Atl. Champ. 96, pl. 110, f. 252. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 754. 1912—REA, Trans. Brit. Myc. Soc. 3 : 353, pl. 19(infer.). 1912; Brit. Basid. 42. 1922—COKER & COUCH, Gast. 125, pl. 70, 115 f. 19. 1925—BRESADOLA, Icon. Myc. 23 : pl. 1134. 1932—CLELAND, Toadst. Mushr. S. Austr. 317. 1935—LONG & STOUFFER, Mycologia, 40 : 576, f. 28. 1948—HEIM, Champ. Eur. 2 : 505, pl. 5, f. 1. 1957.

（川村，日．菌．図説，n. 195, 1930；日．菌．図鑑，7 : 701, f. 701. 1954）

Geaster truncatus VITT. Monogr. Lyc. 18, pl. 3, f. 3. 1843—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 83. 1888.

Globaria fimbriatus (err. typ.)

（原，日．菌．目．132. 1954）

子実体は群生，腐蝕物内に埋在し，裂開するに及び表生となる，中等大；菌蕾は球形，先端尖らず；外皮は熟後半ばまで 5—10 片に裂け，径 1.5—4cm，各裂片は不等大，鋭頭，反転し，更に下方に彎曲し，扁平なる円褥状，その上に僅か沈みたる内皮を坐す，肉質層は厚さ 2—3.5mm，淡色，乾けば薄く，皮色～黄褐色，稀に赤褐色，平滑或は亀裂を生ず；内皮は類球形，少しく上方に尖り，径 1.5—2cm，帯白

～黄色或は淡褐色，頂口は僅か高まり，同色或は淡色，不定形にて縁は繊維状，溝及び円坐なし，無柄；基本体はセピア色，柱軸は倒卵形にて小形，胞子は球形，淡黄褐色，微疣あり，径 3—4μ；弾糸は褐色，管状，単一，幅約 5μ，時に 7μ に及ぶ。

所在及産地

林地落葉間一秋

北海道，本州，小笠原島一欧．北米．濠

和名 シロツチガキタケ（白土柿茸）〔今井〕

Geastrum rufescens Pers. ex Pers.

ヤブレツチグリタケ

Persoon, Dispos. Meth. Fung. 6, 54. 1797; Syn. Meth. Fung. 134. 1801—DeCandolle, Fl. Fr. 2: 268. 1815—S. F. Gray, Nat. Arr. Brit. Pl. 1: 585. 1821.

（小林，日．隠．植．図．593, pl. 287, f. 2. 1939）

Geaster rufescens Fr. Syst. Myc. 3: 1828—Rabenhorst, Deut. Krypt. Fl. 1: 302. 1844—Berkeley, Outl. Brit. Fung. 300. 1860—Fuckel, Symb. Myc. 36. 1869—Cooke, Handb. Brit. Fungi, 1: 370. 1871; Handb. Austr. Fungi, 231. 1869—Quélet, Champ. Jura Vosg. 2: 364. 1873; Enchir. Fung, 238. 1886. pr. p.—Winter, Pilze, 1: 914. 1884—Saccardo, Syll. Fung. 7: 88. 1888——Massee Monogr. Gast. 82, f. 79. 1889; Fl. Brit. Fungi, 1: 40. 1892; Brit. Fungi, 476. 1911—Morgan, Jour. Cinc. Soc. Nat. Hist. 12: 17. 1889—Schroeter, Pilze Schles. 1: 701. 1889—Lloyd, Myc. Writ. 1, Geast. 22, 41, f. 38—41. 1902; Lyc. Austr. 22, f. 22. 1905—Hollós, Gast. Hung. 72, 157, pl. 9, f. 7—8; pl. 29, f. 10. 1904—W. G. Smith, Brit. Basid. 471. 1908—Petri, Fl. Ital. Crypt. Gast. 84, f. 45. 1909—Migula, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 754, pl. 144, f. 6. 1912—Rea, Trans. Brit. Myc. Soc. 3: 352, pl. 19 (super.). 1912; Brit. Basid. 43. 1922—Coker & Couch, Gast. 121, pl. 69, 115 f. 17. 1928—Bresadola, Icon. Myc. 23: pl. 1136. 1932—Long & Stouffer, Mycologia, 40: 575, f. 27. 1948—Heim, Champ. Eur. 2: 507, f. 329, B. 1957.

（Lloyd, Myc. Writ. 2, Lett. 7: 1. 1905—川村，植．雑．23: 175, f. 3. 1909; Illus. Jap. Fungi, 1: pl. 2, f. 32—33. 1912; 日．菌．図鑑，7: 702, f. 702. 1954—白井，日．菌．目．ed. 2. 253. 1917; ed. 3. 146. 1927—安田．植．雑．38: 95. 1924—広江，応用菌蕈学，1231. 1941）

子実体は群生，土中に埋在し，菌糸に包まれ，裂開するに及んで表生となる，大形；菌蕾は類球形，頂端無嘴，果実臭あり；外皮は熟後殆ど中部まで 6—9 片に裂け，開張して径 5—9 cm，裂片は殆ど等大，広く，鋭頭，反転し，更に下方に彎入し，中央部は凸形をなす，肉質層は厚くして 5 mm に及ぶ，平滑，横裂し，往々桃色斑を生じ，のち赤褐色，乾けば薄き粗鬆なる革状をなし，大なる薄片となりて剝落す；内皮は球形或は広卵形，径 2—3 cm，淡肉色～灰肉色或は灰褐色，乾けば褐色～灰褐色，粗糙，絨状，頂口は不定形にて僅か隆起し，縁は繊維細歯状，同色或は僅か暗色，明かなる孔縁盤なし，内皮の基部には通常短柄を有し，首輪欠如或は存在；基本体はセピア色，柱軸は大なる球状；胞子は球形，暗褐色，粗鈍頭刺を有し，径 4—5μ；弾糸は単一，管状，淡或は暗褐色，幅 3—6μ 或はそれ以上。

所在及産地

林内落葉間一秋　　北海道，本州一欧．北米．濠

和名 ヤブレツチグリタケ（破土栗茸）〔川村〕

f. minor (Pers.) Imai

ヒメヤブレツチグリタケ

Imai, Bot. Mag. Tokyo, 50: 222. 1936.

（原，日．菌．目．133. 1954）

Geastrum rufescens var. *minor* Pers. Syn. Meth. Fung. 134. 1801.

Geaster rufescens var. *minor* Rea, Brit. Basid. 44. 1922.

基種に比して小形なり。

所在及産地

針葉樹林地一秋　　北海道一欧

和名 ヒメヤブレツチグリタケ（姫破土栗茸）〔今井〕

〔今井〕

疑　問　種

Geaster mammosus

（Lloyd, Myc. Writ. 5, Lett. 69: 10. 1919）

Geaster subiculosus

（Lloyd, Myc. Writ. 4, Lett. 61: 5. 1916）

(V) Phallineae スッポンタケ亜目

ED. FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 276. 1900.

Gymnocarpi Lytothecii PERS. Syn. Meth. Fung. xx. 1801.

Phalloideae FRIES, Syst. Myc. 2 : 281. 1823.

菌糸は多くは根状菌糸束を作り,地中に拡布し,主に白色なるも稀に紫,紫紅,褐或は黄色を呈するものあり,長く伸長し分岐し,よく分化せるものは髄部と皮部とに分る,多くは其先端より子実体を生ず;子実体は初め完全に或は1部地中生,初め小形の菌糸塊となりて現れ,のち漸次大形となり球形或は卵形の菌蕾(俗に卵或は蛇の卵と呼ぶ)となる,菌蕾は3層より成る殻皮を有し,外皮は薄き膜質にて表面通常平滑,稀に刺状突起或は亀甲状凹凸あるものあり,内皮は強靱なる薄き白色の膜質なり,中間層は厚き半透明の寒天質にて雞卵の卵白の如く,通常寒天層という,この寒天層は基部以外1様に連続するもの(スッポンタケ科)或は外皮より内方に突出せる薄き隔壁によりて数個の小区劃に分割さるるもの(アカカゴタケ科)あり;殻皮より内部は主に基本体及び本目に特有なる托(receptaculum)より成る;基本体は何れの場合にも同様なる構造を有し,軟骨様膠質にて迷路状の腔室を有し,その壁面に子実層を生ず,担子柄は棍棒形にて先端に多くは 6—8 個の胞子を坐生す,胞子は長楕円形,平滑,無色,通常 3—5×1—3μ,胞子の集塊はオリーブ色〜褐色,嚢状体なし;菌蕾中に於て已に腔壁及び担子柄は崩解し,暗緑或は暗褐色の粘液となり,内に無数の胞子を含む,弾糸なし;托は殻皮内にありて子実体の中軸となりおるもの(スッポンタケ科)と,殻皮と基本体との間に全部或は少くとも上部に於て介在するもの(アカカゴタケ科)との二型あり,何れも球形或は管状にのびたる,膠質物を充たせる,擬柔組織より成る壁に囲まれたる小室より成る,但し成熟直前までは小室は圧辺され,その壁は折畳まる。

子実体成熟するに至れば托の小室内の膠質物は急激なる化学変化を起して強き膨圧を生じ,そのため各小室は膨大し托は殻皮の先端を不規則の数片に破りて速に伸長して茎部となり,その表面或は内面に基本体の崩壊せる粘液を附し,基端に殻皮は壺となりて残る,かくして外出せる托の形態は多種多様にて属の区別の標徴とせらる;托の寿命は短かく,永きも4—5日に過ぎず,遂に萎縮し腐敗す,托上に存する粘液は多くは特有なる強き悪臭を有し,蠅を誘致す,蠅はこれを食し或はこれに産卵し,内に含まるる胞子を遠く且つ広く分散す,COBB 氏(1906)によれば胞子は蠅の消化器を通ずるも害を受けずという。

本目所属菌の子実体発育に2型あり,即ちアカカゴタケ科に於ては多冠型にてスッポンタケ科に於ては単冠型なり,通常本目を分ちて前記 2科とするも,更に1科(*Claustulaceae*)を設くるものあり,多くは熱帯或は亜熱帯に産し,甘蔗の害菌として報告さるるものあり,温帯にては種類数並に発生頻度少きも其形態の奇異なるがため人の注意をひき,キヌガサタケの如きは古来より支那に於て竹蓀と称して市販され食用に供せらる。

科 検 索 表

A. 托は有茎或は無茎,籠形,唇状或は不規則に分岐す,基本体は托に包まれ或は托の枝間に存す,多冠型。

アカカゴタケ科 **Clathraceae** (562)

B. 托は茎状,管状,円筒状或は紡錘形,中空,子実体の中軸に存在し,傘を有し或は欠如,基本体は托の表面に存す,単冠型。

スッポンタケ科 **Phallaceae** (570)

Clathraceae FISCHER アカカゴタケ科

FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 280. 1900; II, 7a : 83. 1933.

Clathraceae et *Lysuroideae* CORDA, Icon. Fung. 5 : 28. 1842.

Lysurei et *Clathrei* FRIES, Summa Veg. Scand. 2 : 434, 435. 1849.

Claustulaceae CUNNINGHAM, Proc. Linn. Soc. N. S. Wales, 56(3) : 198. 1931.

菌蕾は倒卵形或は類球形,初め埋生,のち表生,或は殆ど表生;殻皮の外皮は薄膜質,その内側の寒天層は厚く,内皮は托に接しこれを包む,寒天層は托の腕状部の数及位置により膜状隔壁によりて数区劃に区分さる,殻皮は熟後先端より下方に向つて数片に破れ,托を露出し,基端に壺として残る;托は無茎或は有茎,稀に閉鎖されたる中空球をつくる(*Claustula*),外出せる托は種々なる形態を有し,網目ある中空の籠球,腕状部に分れて網状に連り,或は先端結合し又は放射状をなす;基本体は初め菌蕾の中央にあり,熟後液化し,托の抽出後は腕状部の

内面或は側面に附着す；子実体の発育形式は多冠型，本科に約15属を収む，本邦にては6属を知らる。

本邦既知属検索表

A．托或は托の頭部は網目ある中空の籠体なり，（族 *Clathrateae*）

a．托は無茎にて菌蕾中に腕状部は縦に圧縮されありて，抽出後托の基部は壺に暫く結合す，腕は多層の小室より成る。

アカカゴタケ属 **Clathrus** (563)

b．托は無茎にて菌蕾中に腕状部は折膝状をなしありて抽出前己に壺より分離す，腕は単一の管或は2〜3の小室より成る。

カゴタケ属 **Ileodictyon** (564)

B．托は網目ある中空の籠体ならず。

a．托は無茎，数本の腕状部は直立し基部より互に離れ上端結合す（族 *Columnateae*）—腕状部太く，粘液は上半部内側に附着す。

カニノツメタケ属 **Linderia**(565)

b．托は柱状の茎を有し上端に数本の腕を輪生す。（族 *Stellateae*）

α．茎の先端円盤状となり，或は放射状に数本の腕を展開す。イカタケ属 **Aseroe** (566)

β．茎の先端円盤状ならず，数本の腕は上端結合す。

I．腕状部の外面以外は基本体に埋り，或は側壁は粘液により連る。

ツマミタケ属 **Lysurus** (568)

II．腕状部は上端に於て結合し，時に離るるも反捲することなし，その内面に基本体を附着す。

サンコタケ属 **Pseudocolus** (569)

Clathrus MICH. ex PERS.

アカカゴタケ属

MICHELI, Nova Pl. Gen, 213. 1729—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 241. 1801—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam, II, 7**a** : 84. 1933.

?*Dycticia* RAFINESQU, ex DESVAUX, Jour. Bot. 2 : 176. 1809.

Clathrella FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 284. 1900; II, 7**a** : 87. 1933. pr. p.

菌蕾は表面に托の形に相当する亀甲状或は瘤状の隆起ありて特に幼時に於て著し，寒天層は比較的厚し；托は中空なる球形或は卵形にて籠の如く，その籠目は多角形或は下方のものは長形なり，托の抽出せるのちも暫く壺に結合しおるものち遊離す；籠の腕状部は太くして断面多角形或は外壁を底辺とする2等辺3角形をなし，多層の小室より成る，最内層の小室は屢々内面に開孔す，熟後その壁は細かき横皺を有すること多し；胞子を含む粘液は托の全内壁に附着す。

（本属名は cleithron［希］（格子）より出づ）

基準種　*C. ruber* MICH. ex PERS.

本邦既知種検索表

A．籠目の数は10個以上ありてその大さ大差なし，托は多くは紅色。アカカゴタケ ***C. ruber*** (563)

B．籠目の数は10個以下，壺上にては上部数個以外は縦長にて数本の腕が壺より直立し上部が結合して網目を作るが如く見ゆ，托は淡紅色。

アンドンタケ　f. ***kusanoi*** (564)

Clathrus ruber MICH. ex PERS.

アカカゴタケ

MICHELI, Nova Pl. Gen. 214, pl. 93. 1729—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 241. 1801—NEES, Syst. Pilze Schw. 253., f. 261. 1817—QUÉLET, Enchir. Fung. 235. 1886—REA, Brit. Basid. 21. 1922—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7**a** : 84, f. 56-57, A. 1933—KOBAYASI, Nova Fl. Jap. Hymenogast. Phall. 33. 1938.

（原，日．菌．目．71．1954）

Boletus cancellatus purpureus TOURN. Inst. rei Herb. 361, pl. 320. 1719.

Clathrus cancellatus L. Sp. Pl. 2 : 1179. 1753—FRIES, Syst. Myc. 2 : 288. 1823—CORDA, Icon. Fung. 5 : 70, pl. 6, f. 49. 1842—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 304. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 298. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 366. f. 110. 1871—GILLET, Champ. Fr. 786, c. ic. 1874—WINTER, Pilze, 1 : 870, f. 1. 1884—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 19. 1888—MASSEE, Monogr. Gast. 90, f. 46. 1889; Brit. Fung. Fl. 1 : 46, f. 2, 4. 1892; Brit. Fungi, 482, pl. 36, f. 8. 1911—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 283, f. 128, A-E, f. 129, A. 1900—LLOYD, Myc. Writ. 2 : 296, pl. 92, f. 7. 1906; 325, f. 160, pl. 112, f. 1-10; 355, 1907; 3, Syn. Phall. 54, f. 70. 1909; 5 : 839, f. 1400. 1919—W. G. SMITH, Brit. Basid. 462, f. 125. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 93, pl. 108, f. 245. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2 (2) : 720, pl. 141B, f. 2. 1912—COKER & COUCH, Gast. 6. 1928—BRESADOLA, Icon. Myc. 23 : pl. 1132, f. 1. 1932—HEIM, Champ. Eur. 2 : 503, f. 325, B, pl. 54, f. 2. 1957.

（南方，植．雑．42：243．1928—川村，植．研．雑．5：292．1928；日．菌．図鑑，6：651，f．637．1954—広江，応用菌蕈学，1224, f. 843. 1941）

Clathrus volvaceus BULL. Herb. Fr. pl. 441. 1789.

菌蕾は球形，径数 cm，白色，表面に低き亀甲状隆起あり，根状束を有す；托は殻皮を破り倒卵状或

は類球状の籠体となり,基部は壺の内底部に附着す,高さ約 6cm, 径約 4cm, 籠目は 10 個以上ありて不規則なる多角形をなし, 下方にあるものは少しく縦長なり, 腕の横断面は2等辺3角形にて外面は初め細横皺あるものち平滑となる, 多くは全体紅色にて稀に帯黄色, 内面は濃赤色なり; 内面に附着する粘液は暗緑褐色にて強き悪臭あり; 胞子は長楕円形, 殆ど無色, 5—6×2μ。

所在及産地

山地上—夏

本州—欧. 北阿. 中米. 亜(イラン)

和名 アカカゴタケ(赤籠茸)〔川村〕

f. **kusanoi** KOBAY.

アンドンタケ

KOBAYASI, Nova Fl. Jap. 33, f. 23. 1938.

(原, 日. 菌. 目. 71. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 122, pl. 57, f. 316. 1957)

菌蕾は扁球形, 高さ 1.8—2.2cm, 径 1.5—2cm, 表面は白色, 大形の亀甲状の区劃に分たれ, 根状束を有す; 寒天層は厚く, 外皮より内部に突出し寒天層を貫く隔壁は顕著なり; 托は卵形或は楕円形にて行燈状の籠体となり, 高さ 4—4.5cm, 径 2cm, 壺より抽出せる部分は縦位置の5本の腕より成り, 基部は壺の内底に僅か結合し, 上部は叉状に分岐して互に相連り3—4箇の角形の籠目を作る, 腕は3角柱状にて外面僅かに弧状, 稜部に少しく凹凸あり, 背面は腕の下部に於て径 5mm, 上部に於て 3.5mm, 細皺及び微孔ありて淡紅色を帯び, 内面は細横皺及び突起ありて濃紅色を呈し, 暗褐色の悪臭ある粘液に蔽わる; 胞子は長楕円形或は桿状, 殆ど無色, 4.5—5×1.2—1.5μ。

所在及産地

山林地上—夏秋 本州

和名 アンドンタケ(行燈茸)〔小林〕

Ileodictyon TUL.

カゴタケ属

TULASNE, Ann. Sci. Nat. III, 2 : 114. 1844—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, **7a** : 85. 1933.

Clathrus Auct. pr. p.

菌蕾は卵形, 球形等にて表面は平滑; 寒天層は薄し; 托は菌蕾中にては屈膝状に曲り, すでに外皮と遊離し抽出後は只壺上に載りたるに過ぎず, 形は類球形の中空籠体にて, 籠目は多くは甚だ広き等径の多角形にて各目ほぼ等大なり, 腕は細く, 白色, 不規則の小皺あるか或は平滑, 単管状或は断面2—3の小室あるのみにて多層ならず; 粘液は腕の内壁に附着す。(本属名は ile〔羅〕(内臓) dictyon〔希〕(網)より出づ)

基準種 *I. cibarium* TUL.

本邦既知種 カゴタケ ***I. gracile***(564)

Ileodictyon gracile BERK.

カゴタケ

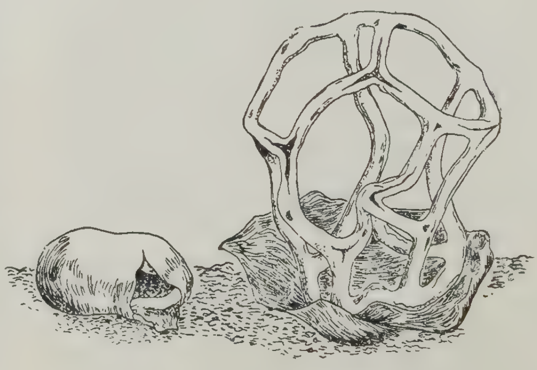
BERKELEY, HOOK. Lond. Jour. Bot. 4 : 69, pl. 2, f. 8. 1845—CORDA, Icon. Fung. 6 : 26, pl. 5, f. 57. 1854—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, **7a** : 86, f. 59, B. 1933—KOBAYASI, Nova Fl. Jap. Hymenogast. Phall. 36, f. 24. 1938.

(小林, 植. 研. 雑. 13 : 270, f. 9. 1937; 日. 隠. 植. 図. 589, pl. 290, f. 2. 1939—原, 日. 菌. 目. 165. 1954—本郷, 植. 分. 地. 14 : 55. 1950—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 122. 1957)

Clathrus gracilis SCHLECHT. Linnaea, 31 : 166. 1862—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 20. 1888—COOKE, Handb. Austr. Fungi, 218, f. 104. 1892—LLOYD, Myc. Writ. 2 : 294, pl. 91, f. 1-6. 1906: Phall. Austr. 22, f. 23. 1907; 3, Syn. Phall. 62, f. 79. 1909; 4, Lett. 60 : 16. 1915—CUNNINGHAM, Proc. Linn. Soc. N. S. Wales, 56(3) : 196. 1931.

(川村, 植. 雑. 5 : 290. 1928; 7 : 193. 1931; 食用菌及有毒菌, 35, f. 41. 1931; 日. 菌. 図鑑, 6 : 649, f. 636. 1954—牧野, 日. 植. 図鑑, 1016, f. 3046. 1940—原, 日. 菌. 目. 71. 1954)

Ileodictyon cibarium var. *gracile* TUL. ex FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. I, 1** : 288, f. 131, A-B. 1900.



第 242 図 カゴタケ Ileodictyon gracile (小林氏)

菌蕾は扁球形, 径 2cm 内外, 殻皮の外皮は膜質にて白色或は淡褐色, 平滑, 寒天層は極めて薄くして殆どこれを欠く, 内皮は薄膜質, 白色; 托は白色の籠体にて類球形, 径 4—7cm, 籠目は 9—15 箇ありて広き多角形にて径 2.5cm 内外; 腕状部は細く軟く, 円管状, 太さ一様ならずして径 2.5—4cm, 平滑或は縦溝あり, 溝に沿うて処々に開孔すること

あり，内部は単管状或は横断面に於て2－3個の小室より成り，各小室は縦に走れる管状をなす；粘液は腕状部の内壁に沿うて附着し，緑褐色にて臭気あり；胞子は橢円形，殆ど無色或は淡緑褐色，4.5—6×1.8—2.5μ。

所在及産地

林地上—春夏　　本州—濠．タスマニア

和名　カゴタケ（籠茸）〔川村〕

Linderia CUNN.

カニノツメタケ属

CUNNINGHAM, Proc. Linn. Soc. N. S. Wales, 56 (3): 192. 1931.

Colonnaria RAFINESQUE, N. Y. Med. Repos. II, 5(11): 355. 1801 (anceps)—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl. -fam. II, 7a: 84. 1933.

Laternea Auct. pr. p.

菌蕾は球形，殻皮の外皮は膜質，寒天層は厚し；托は2－5本の柱状体よりなり，その基部は互に離れありて上端に於て結合す，多層の小室より成り，外面は平或は横皺ありて両側に翼状突起あり；粘液は柱状体の上部の内面に附着し，暗緑色にて悪臭あり；胞子は橢円形。

（本属名は北米 D. H. LINDER 教授の姓より出づ）

基準種　*L. columnata* (BOSC) CUNN.

本邦既知種検索表

A. 托は 3—5，通常3個の柱状体より成り，先端のみ結合し，その他の部分は離れてアーチ形となるが為に全形四つ手網の柄部の状を呈す，小笠原産。　ヨツデタケ　***L. columnata*** (565)

B. 托は2又は4，通常2個の柱状体より成り，中部以上近接し，全形やや蟹の爪状を呈す。　カニノツメタケ　***L. bicolumnata***(565)

Linderia columnata (BOSC) CUNN.

ヨツデタケ

CUNNINGHAM, Proc. Linn. Soc. N. S. Wales, 56(3): 193, pl. 9, f. 14-15. 1931—KOBAYASI, Nova Fl. Jap. Hymenogast. Phall. 42. 1938.

（原，日．菌．目．185．1954）

Clathrus columnatus BOSC, Mag. Ges. Nat. Freunde Berlin, 5: 85, pl. 5, f. 5. 1811—NEES, Syst. Pilze Schw. 253, f. 262. 1817—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl. -fam. 1, 1**: 283, f. 129, B. 1900—COKER & COUCH, Gast. 5, pl. 1, 105 f. 1. 1928.

Clathrus colonnarius LEMAN, Dict. Sci. Nat. 9: 360. 1817.

Laternea columnata NEES et HENRY, Syst. Pilze, 2: 96. 1858—MÖLLER, Brasil. Pilzblumen, 42, pl. 2, f. 3-4. 1895—LLOYD, Myc. Writ. 3, Syn. Phall. 48, f. 57-58. 1909.

Clathrus cancellatus c. *columnatus* FISCH. Denkschr. Schw. Nat. Ges. 32: 56. 1890.

Clathrus trilobatus COBB, Rep. Exp. St. Hawaii Sugar Pl. Assoc. Bull. 5: 209. 1906.

Colonnaria columnata FISCH. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl. -fam. II, 7a: 85, f. 57, B. 1933. pr. p. —S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 15: 2. 1937.

（原，日．菌．目．84．1954）

菌蕾は球形或は卵形，径約 2cm，高さ 2—3cm，外皮は白色或は少しく汚黄色；托は高さ 3.5—5cm に及び，4（或は3－5）本の柱状体より成り，下端は離れ，両端少しく狭細し，上端結合しアーチ状をなし，或は1個の網目を作る，下部橙色，上部に至りて緋紅色となる，外面は平にて両側に全長に亘りて2本の平行に走る低き稜線あり，内面に不規則なる横皺及び突起あり；粘液は黒褐色，初め柱状体により包まれたる上方内部を充し，のち柱状体の下部以外の内面に附着す，悪臭あり；胞子は長橢円形，淡緑黄色，3.8—6×1.5—2.5μ。

所在及産地

林地上—夏秋　小笠原島—北中南米．布哇．濠

和名　ヨツデタケ（四つ手茸）〔今井〕

Linderia bicolumnata (LLOYD) CUNN.

カニノツメタケ

CUNNINGHAM, Proc. Linn. Soc. N. S. Wales, 56: 193. 1931—KOBAYASI, Nova Fl. Jap. Hymenogast. Phall. 41, f. 27, pl. 1 (inferior), 2 (dexter). 1938.

（小林，植．研．雑．13: 269, f. 8. 1937；日．隠．植．図．599, pl. 290, f. 1. 1939—今関，原色きのこ，pl. 70(中). 1942—原，日．菌．目．185．1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，122, pl. 57, f. 315. 1957）

Laternea bicolumnata LLOYD, Myc. Writ. 2: 405, f. 242. 1908; 3, Syn. Phall. 51, f. 64. 1909; STEVENSON & CASH, New Fung. Names Lloyd, 159. 1936.

（LLOYD, Myc. Writ. 2, Lett. 21: 3. 1908; 3, Lett. 34: 3. 1911—白井，日．菌．目．ed. 2. 311. 1917; ed. 3. 182. 1927—安田，植．雑．32: 332. 1918—KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, 3: pl. 12, f. 8-9. 1914；日．菌．図説，n. 127. 1929；食用菌及有毒菌，36, f. 42. 1931；日．菌．図鑑，6: 654, f. 639. 1954—松浦，茸類辞典，165, f. 194. 1933；応用菌蕈学，1221, f. 837, 853(右上). 1941—牧野，日．植．図鑑，1016, f. 3045. 1940—原，日．菌．目．176. 1954）

Clathrus bicolumnatus SACC. et TROTT. Syll. Fung. 21: 462. 1912.

（白井，日．菌．目．ed. 2. 141. 1917; ed. 3. 84. 1927）

Colonnaria columnata FISCH. in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl. -fam. II, 7a: 85. 1933. pr. p.



第243図 カニノツメタケ
Linderia bicolumnata (小林氏)

菌蕾は卵形，径 1.6—2.2cm，外皮は薄く，白色，基端に白色根状束あり；托は通常2本の柱状体をなし壺より並立し，上部狭細し外側に彎曲せる弧状をなし，中央部互に離れ，先端に至りて結合す，高さ 3—11 cm，柱状体の断面は下部にては半月形にて外面平なり，上部に至りて次第に円形に近く，平なる部分は小となり或は少しく凹入す，外側面に接して小形の泡状小室が1列に並び，その他の部分は数個のやや大なる室より成り，これ等の壁は不規則に裂開することあるにより柱状体の外側面以外に不規則なる泡状凹凸を生ず，外側面は平にて下部は径 6—18 mm，上部は 2—4 mm，処々に開孔す，柱状体の下部は淡クリーム色，上部は次第に橙黄色に変じ，上端に近き部分は最も濃色にて朱赤色を呈す；粘液は柱状体の上部内壁に沿うて附着し，黒褐色にて人糞臭あり；胞子は楕円形，淡緑色，3.5—4.5×1.5—1.8μ。

所在及産地 竹林，芝生，畑，庭園地上—秋冬 本州（北米）

和名 カニノツメ（蟹の爪茸）〔安田〕
ハサミタケ（剪刀茸）〔安田〕

Aseroe Bill. ex Fr.
イカタケ属

La Billardiere, Rélat. Voy. La Pérouse, 1 : 145. 1799-1800—Fries, Syst. Myc. 2 : 285. 1823. (sub. *Ascroe*)—Fischer, in Engler & Prantl, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 289. 1900; II, 7a : 92. 1933.

Calathiscus Montagne, Ann. Sci. Nat. II, 16 : 278. 1841.

菌蕾の殻皮は3層より成り，外皮は薄く，寒天層は厚し；托は中空の円筒状茎部と其上にのれる頭部とあり，茎部の上端は開孔し或は中央に小孔ある膜状物を存す，頭部は円盤状をなし，その縁辺は水平の放射状に延びたる数個の腕となる，腕は単一或は分岐し，先端漸細す，全体白色或は紅色；粘液化せる基本体は腕の上面及び円盤部に附着し，暗緑色にて悪臭あり；胞子は楕円形。

（本属名は aseros［希］（胸悪くす，嘔気を催す）より出づ）

基準種 *A. rubra* Bill. ex Fr.

本邦既知種検索表

A. 托は赤色にて上端に水平盤状部あり，腕は横断面に於て数個の小室より成る。
　　アカイカタケ ***A. rubra*** (566)

B. 托は白色にて上端に盤状部なく直ちに腕を生ず，その断面は1個の小室より成る。
　　イカタケ ***A. arachnoidea***(567)

Aseroe rubra Bill. ex Fr.
アカイカタケ

La Billardiere, Rélat. Voy. La Pérouse, 1 : 145, 1799-1800—Fries, Syst. Myc. 2 : 285. 1823 (sub *Ascroe*)—Corda, Icon. Fung. 6 : 23, pl. 4, f. 9-11. 1854—Saccardo, Syll. Fung. 7 : 26. 1888—Massee, Monogr. Gast. 90. 1889; Brit. Fung. Fl. 46. 1892; Brit. Fungi, 482. 1911—Cooke, Handb. Austr. Fungi, 216, f. 104. 1892—Fischer, in Engler & Prantl, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 289, f. 137, A-C. 1900; II. 7a : 93, f. 68-69. 1933—Lloyd, Myc. Writ. 2, Phall. Austr. 16, f. 16. 1907; 3, Syn. Phall. 46, f. 50. 1909; 4 : 522, f. 518. 1912; 5 : 631, f. 898. 1917; 7 : 1117, pl. 198, f. 2118. 1922—Rea, Brit. Basid. 22. 1922—Cunningham, Proc. Linn. Soc. N. S. Wales, 56(3) : 131, pl. 8, f. 10; pl. 9, f. 11-12. 1931. (cum syn. mult.)—Boedijn, Bull. Jard. Bot. Buitenz. III, 12 : 81. 1932—Cleland, Toadst. Mushr. S. Austr. 2 : 279, pl. 10 (inferior). 1935—Kobayasi, Nova Fl. Jap. Hymenogast. Phall. 44, f. 28. 1938.

（本郷，植．研．雑．27 : 189, f. 1. 1952—原，日．菌．目．24. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑．122. 1957）

Aseroe pentactina Endl. Icon. Gen. Pl. 1 : 50. 1838—Corda, Icon. Fung. 6 : 23, pl. 4, f. 12-13. 1854—Lloyd, Myc. Writ. 2, Phall. Austr. 16, f. 17. 1907; Syn. Phall. 46, f. 51. 1909.

Aseroe Ceylanica Berk. Hook. Lond. Jour. Bot. 5 : 535. pl. 18. 1846—Saccardo, Syll. Fung. 7 : 25. 1888.

Aseroe Junghuhnii Schlecht. Aser. Gen. Diss.

11, c. ic. 1847—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 25. 1888.

Aseroe actinobola CORDA, Icon. Fung. 6 : 23, pl. 4, f. 14-18. 1854.

Aseroe rubra a. *typica*, b. *pectinata*, c. *actinobola*, et d. *Muelleriana*, FISCH. in SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 26. 1888.

Aseroe rubra f. *Ceylanica*, et *Junghuhnii* FISCH. Denkschr. Schw. Nat. Ges. 22 : 74, 75. 1890.

Aseroe Muelleriana LLOYD, Myc. Writ. 2, Phall. Austr. 18. 1907; 3 Syn. Phall. 46, f. 53. 1909.

Aseroe pallida LLOYD, Myc. Writ. 3, Syn. Phall. 47, f. 53a. 1909.

Aseroe zeylandica LLOYD, Myc. Writ. 3, Syn. Phall. 47, f. 54. 1909.



第244図　アカイカタケ　Aseroe rubra
（本郷氏）

菌蕾は白色或は灰色にて上端屢々黒色を帯び，外面に不規則なる裂目を生ず，径 2—4cm，基端に淡赤色或は淡紫色の根状束あり；托は高さ 3—9cm，茎部は中空にて紅色を帯び基部は殆ど白色，径 1.5—3.5cm，壁は2層の小室より成り，外層の小室は内層に比して小形なり，茎の上部は水平に拡がりて盤状となり径 2.5—6cm，中央に径 1—2cm，の大孔ありてその縁辺には細かき歯状の凹凸あり，上面は美なる淡赤色にて乾時橙色を呈す，放射状の皺あり，孔縁に濃赤色の環状部ありて低き波状隆起に被わる，盤状部の外縁より 18—24 本の腕を放射状に出す，各腕は縦に深く2分するか或は2本宛相接すること多く，稀に不規則に排列す，水平に伸展し，先端次第に細く尖る，盤状部と同色，長さ 1.5—8 cm，その基部横断面にて多数の小室よりなり，先端に至りて漸次その数を減じ遂に1室となる；粘液は盤状部の上面に附着し，殆ど黒色，悪臭あり；胞子は長楕円形，無色，4.5—6×1.5—1.6μ。

所在及産地　林地上—秋

本州，四国，九州—亜（錫．爪．スマトラ），濠．南米

和名　アカイカタケ（赤烏賊茸）〔小林〕

Aseroe arachnoidea FISCH.

イカタケ

FISCHER, Denkschr. Schw. Nat. Ges. 32:76. 1890; in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 289. 1900; II, 7a : 93, f. 67. 1933—PENZIG, Ann. Jard. Bot. Buitenz. II, 1 : 165, pl. 25, f. 4-13. 1899—SACCARDO, Syll. Fung. 16 : 229. 1902—LLOYD, Myc. Writ. 3. Syn. Phall. 48, f. 55-56. 1909—PETCH, Ann. Roy. Bot. Gard. Peradeniya, 4 : 180: 7 : 59. 1919—BOEDIJN, Bull. Bot. Buitenz. III, 12 : 82. 1932—KOBAYASI, Nova Fl. Jap. Hymenogast. Phall. 46, f. 29. 1938.

（安田，植．雑．37 : 207. 1923—门井，日．菌．日．eb. 3. 26. 1927—沢田，台．博．学．報．26 : 123. 1934—広江，応用菌蕈学，1220，f. 835-836. 1941—原，日．菌．目．24. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，122. 1957）

Aseroe rubra var. *bogoriensis* PAT. Bull. Soc. Myc. Fr. 14 : 191. 1898.

Aseroe arachnoidea var. *americana* FISCH. Viert. Nat. Ges. Zürich, 73, Beibl. 15 : 17. 1928.

菌蕾は球形，径 1.3—3.5cm，粗面，基端に数本の白色根状束あり；托の茎部は単一円柱状にて直立し，中空；脆弱，3—8.8×1.1—2.7cm，粗面にて光沢なく，縦横の小皺を有し，処々に小孔あり，壁の厚さ 3—6mm，2層より成り，外層は小泡状，内層は大形の小室より成る，茎の頂端より 7—15 本の単一なる腕を星芒状に輪生す，各腕は基部太く先端に向つて漸細し，先端は波状をなす鞭状となり，恰も烏賊の足の如し，長さ 1.1—5.5cm，基部の径 1.5—8mm，中空，上面に網状の皺を有し，平面は平滑にて1縦線あり，腕の開張の径 3.5—12cm，その中央部即ち茎の頂上に1孔ありて茎の中洞に連る，この部に寒天質物ありて，その上に粘液附着す，粘液流失後露出し更に孔口を穿つ；粘液は泥暗色，悪臭あり；胞子は長楕円形，殆ど無色，3.7—4.5×2—2.5μ。

所在及産地

腐蝕質土上—夏

本州—亜（交趾支那，爪．ボルネオ，スマトラ，支．台）

和名　イカタケ（烏賊茸）〔安田〕

Lysurus FR.
ツマミタケ属

FRIES, Syst. Myc. 2 : 285. 1823—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 90. 1933.

Aseroephallus LEPR. et MONT. Ann. Sci. Nat. III, 4 : 360. 1845.

托は壺より1本抽出し，茎部と頭部より成り，その境界劃然たり；茎部は円柱状或は角柱状，中空，壁は多くの小室より成り，1—3層；頭部は3—7腕状体より成り，幼時は基本体内に殆ど埋没し，ただ外側面の1部及び内面を露出し，或は外側面を残し，他はすべて基本体内に埋ることあり，熟後基本体は腕状体の間を充し，のちその流失によりて各腕間に空隙を生ずることあり，その側壁に横皺ありて茎部と明かに区別さる；基本体は熟後暗緑色の悪臭ある粘液となる；胞子は長形。

（本属名は lyo [希]（弛める）oura [希]（尾）より出づ）

基準種 *L. mokusin* (L. ex PERS.) FR.

本邦既知種検索表

A. 腕状体の頂端に突起を有せず。
ツマミタケ ***L. mokusin***(568)

B. 腕状体頂端結合部より更に角状の突起を生ず。
ツノツマミタケ f. ***sinensis*** (568)

Lysurus mokusin (L. ex PERS.) FR.
ツマミタケ

FRIES, Syst. Myc. 2 : 286. 1823—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 22. 1888—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 286, f. 138, A-B. 1900; II, 7a : 92. f. 65. 1933—LLOYD, Myc. Writ. 2 : 402, f. 241. 1908; 3 Syn. Phall. 36, f. 37. 1909: 5 : 586, f. 828. 1916; 647, f. 924. 1917—CUNNINGHAM, Proc. Linn. Soc. N. S. Wales, 56(3) : 189. 1931—KOBAYASI, Nova Fl. Jap. Hymenogast. Phall. 48, f. 30-32. 1935.

(KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, 2 : pl. 6, f. 12-14. 1913; 日．菌．図鑑，6 : 655, f. 640. 1954—白井，日．菌．目．ed. 2. 333. 1917; ed. 3. 195. 1927—沢田，熱帯農学会誌，7 : 55, f. 1-14. 1935—原，日．菌．目．187. 1954)

Mokusin CIBOT, Novi Comm. Petrop. 19 : 373-378, pl. 5. 1775.

Phallus Mokusin L. f. Suppl. Pl. 452. 1781—*Persoon*, Syn. Meth. Fung. 245. 1801.

Mutinus pentagonus BAILEY, Queensl. Bot. Bull. 10 : 35. 1895—LLOYD, Myc. Writ. 2, Phall. Austr. 10, f. 11. 1907; Syn. Phall. 30, f. 28. 1909—SACCARDO, Syll. Fung. 21 : 461. 1912.

Lysurus Beauvaisii MOLL. Rev. Gén. Bot. 12 : 61. 1899—SACCARDO, Syll. Fung. 16 : 229. 1902.

Mutinus pentagonus var. *Hardyi*, BAILEY, Queensl. Agr. Jour. 16 : 494. 1906.

Lysurus borealis (sub P. HENN.) 川村，日．菌．図説．n. 145. 1930.

Mutinus quadrigonus SAW. Trans. Nat. Hist. Soc. Formosa, 21 : 331. 1931. pr. p.

Colus pentagonus SAW. Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 4 : 170, f. 2. 1933; pr. p.

（沢田，台．菌．調．報．6 : 64. 1933）

Clathrus Mokusin

（原，日．菌．目．71. 1954）

菌蕾は長卵形，2—3.5×1—2cm，表面は白色，光沢なく，基部に白色根状束あり；托は全長 5—12 cm，茎部は4—6，通常5角柱状にて，多くは基部細く上方に向つて漸次太く，或は中央よりやや上部最も太し，径 0.5—1.5cm，中空，淡紅色，上部やや濃色なり，稜角部に縦溝あり，面部も少しく彎入し，その表面に泡状の凹凸あり，壁は下部にては1層の大小不同なる小室より成り，太き部にては2，稀に3層より成る；頭部は茎との界に於て少しく縊れ，茎の稜角と同数の腕状部となり，その外側面に縦溝ありて茎の溝に連なる，腕の上端は結合し軽く合して離れ易きもの或は短突起状をなして離れ難きものあり，頭部の全形は角錐形，楕円形等をなし，径は茎よりも太きもの或は細きものあり；腕の内外面は露出するも，その側面は相隣れる腕との間に褐色の粘液塊を有するにより頭部は粘液に蔽われ其間に数条の稜線ある観を呈す，粘液を去ればその側面に細皺あり，稜角部は紅色，他部は褐紅色なり，腕の断面は卵形，1端に小凹窩あり，茎部より厚肉にて1—2個の小室を形成す；粘液は暗褐色，悪臭あり；胞子は紡錘形，1端少しく細く，淡オリーブ色，4-4.5×1.4—2μ。

所在及産地

庭園，林地—夏秋　　本州—亜(支．台)濠

和名　ツマミタケ（抓茸）〔川村〕

f. sinensis (LLOYD) KOBAY.
ツノツマミタケ

KOBAYASI, Nova Fl. Jap. Hymenogast. Phall. 52, f. 33-34. 1938.

（今関及本郷，原色日．菌．図鑑，121, pl. 57, f. 311. 1957）

Lysurus sinensis LLOYD, Myc. Writ. 5 : 718, f. 1075-1076. 1917; 764. 1918.

Mutinus coracoideus KAWAM. Jap. Jour. Bot.

4：300, f. 16, pl. 29, f. 4. 1929.
（川村，日．菌．図説，n. 133. 1930—原，日．菌．目．213．1954）
Mutinus quadrigonus SAW. Trans. Nat. Hist. Soc. Formosa, 21：331. 1931. pr. p.
Colus pentagonus SAW. Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 4：170. f. 2. 1933. pr. p.
（沢田，台．菌．調．報．6：64．1933）

基種に比して腕状部の結合点より上に更に角状或は角柱状の著しき突起を生じ，長さ 0.5—1cm あり，その稜角の数は茎部と同数にて，稜部は平なるか或は浅き縦溝をなす，横断面に於て中央に大形の空室あり，その周囲に稜角数に相当する小室あり，突起部全体は淡紅色或は白色を呈す。

所在及産地
庭園，林地—夏秋　本州—亜（支．台）濠．北米

和名　ツノツマミタケ（角抓茸）〔小林〕
トリノクチバシ（鳥嘴茸）〔川村〕
ゴリョウタケ（五稜茸）〔沢田〕

Pseudocolus LLOYD
サンコタケ属

LLOYD, Myc. Writ. 2, Phall. Austr. 18. 1907—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, **7a**：90. 1933.
Colus Auct. pr. p.
Anthurus Auct. pr. p.

菌蕾は球形或は卵形，表面は平滑或は数本の縦横脈ありて少しく窪む；托は茎部と腕部とより成り，茎部は円柱状にに中空；壺外に現われ或は短かくして壺内に隠る，基部は細くして，壺の内皮に接す；腕は茎の上端に３—６，通常３本ありて，円柱状或は角柱状，先端漸細し互に集り結合しアーチ状となる，熟後時に各腕上端互に離るることあるも，外方に反捲することなし，外面はほぼ平滑或は泡状，内面は横皺或は裂目を有し，時に不規則なる突起あり，腕の横断面には大小数個の小室あるを普通とす。
（本属名は pseudo[僞]（偽似の）colus[羅]（属名；糸巻竿，紡錘）より出づ）

基準種　*P. rothae* LLOYD

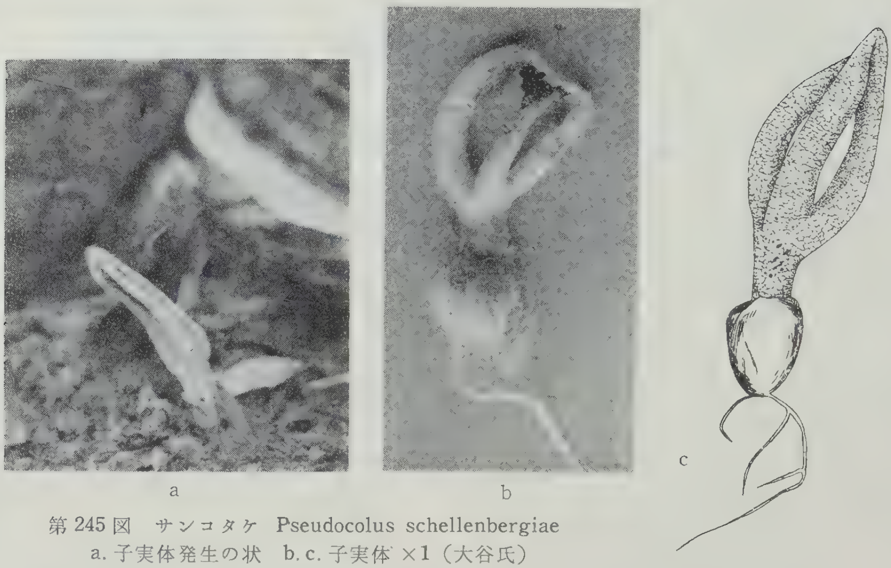
本邦既知種

サンコタケ　***P. schellenbergiae*** (569)

Pseudocolus schellenbergiae (SUMST.) JOHNSON
サンコタケ

JOHNSON, Bull. Ohio Biol. Surv. 22：336. 1929—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a：90. 1933—KOBAYASI, Nova Fl. Jap. Hymenogast. Phall. 55. f. 35. 1938.
（小林，植．研．雑．13：267, f. 6. 1937—川村，日．菌．図鑑，6：659-660, f. 642-643. 1954—原，日．菌．目．286．1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，122, pl. 57, f. 314. 1957）
Pseudocolus javanicus LLOYD, Myc. Writ. 3：456, f. 272. 1910. (non LLOYD, 1909, et 1917)
（LLOYD, Myc. Writ. 3, Lett. 34：3. 1911—KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, 3：pl. 10, f. 7-10. 1914. (ut PENZIG)；日．菌．図説，n. 134. 1929；食用菌及有毒菌，25, f. 29. 1931；日．菌．図鑑，6：657, f. 641 1949—白井，日．菌．目．ed. 2. 497. 1917；ed. 3. 304. 1927—松浦，茸類辞典，165, f. 198. 1933；応用菌蕈学，1223, f. 834. 1941—北沢栄一郎，茸類の研究，1：105, f. 1. 1935—遠藤及横山，動．植．3：473. 1935—S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 15：2. 1937—牧野，日．植．図鑑，1015 f. 3044. 1940）
Colus Schellenbergiae SUMSTINE, Mycologia, 8：183. 1916—SACCARDO, Syll. Fung. 23：585. 1925—COKER & COUCH, Gast. 7, 1928—SEAVER, Mycologia, 23：83, pl. 8. 1931.
（沢田，鳥取農学会報，4：167, f. 1. 1933；台．菌．調．報．6：62. 1933）
Pseudocolus Rothae LLOYD, Myc. Writ. 5：586, f. 826. 1916. (non LLOYD, 1907, 1909 et 1917)
（LLOYD, Myc. Writ. 5, Lett. 63：9. 1916；679, f. 1013. 1917—安田．植．雑．30：298. 1916—白井，日．菌．目．ed. 2. 497. 1917；ed. 3. 305. 1927—広江，応用菌蕈学，1222. 1941）
Pseudocolus javanicus f. *Schellenbergiae* S. ITO et IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 15：3. 1937 (in nota).

菌蕾は卵形，1.5—2×1—1.5cm，表面は白色にて数本の脈条あり，或はこれを欠き平滑，寒天層は薄く，基端に白色根状束あり；托は通常高さ 4.5—7cm，稀に 8.8cm に及ぶものありという，茎部と腕状部とに分れ，茎部は円柱状，中空なり，短きものは壺中に隠れ，長きものは腕状部の倍長に及び（稀に 6.5cm に至る）高く抽出し，下方少しく漸細することあり，表面に石垣状皺あれど泡状突起は著しからず，殆ど白色，壁は１層の小室より成り，内外処々に開孔す；腕は通常３本（３—６）茎の上端より出で，斜上方に向い弧状をなし上方漸細，先端に於て互に結合す，下部の横断面はほぼ２等辺３角形をなし外面は長くして径約 7mm，内側に３個程の少しく大形の小室あり，外面に沿いて数個の小形の小室が１列に並ぶ，上部の横断面は円形或は４角形，外面の径約 1.5mm，内側に１個の大形の小室，外側に数個の小室あり，通常腕の外面はほぼ平滑にて



第245図　サンコタケ　Pseudocolus schellenbergiae
a. 子実体発生の状　b. c. 子実体 ×1（大谷氏）

極めて浅き皺あるのみなれど内側面には粗き多数の横皺ありて処々裂開し或は小孔を穿つ，腕の下部は淡橙黄色或は淡紅色，上部濃色，特に上部内面は紅色を呈す，腕の先端の結合は比較的強くして離るること少し；粘液は褐色にて悪臭あり，腕の内面に附着す；胞子は楕円或は長楕円形，殆ど無色，4.5—5×2.2—2.5μ。

所在及産地

林地—秋

北海道，本州，九州—北中米．亜(台．樺)

和名　サンコタケ（三鈷茸）〔川村〕
イカリタケ（錨茸）〔川村〕

疑問種

Anthurus trifidus HAR. et PAT. Bull. Mus. Hist. Nat. 2 : 132. 1902—SACCARDO, Syll. Fung. 17 : 214. 1905.
（白井，日．菌．目．ed. 2. 47. 1917; ed. 3. 20. 1927—原，日．菌．目．18. 1954）

Pseudocolus Archeri
（LLOYD, Myc. Writ. 4, Lett. 54 : 3. 1915）

Phallaceae FISCHER　スッポンタケ科

FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 289. 1900; II, 7a : 96. 1933.

Phalloideae CORDA, Icon. Fung. 5 : 29. 1842.

Phallei FRIES, Summa Veg. Scand. 2 : 434. 1849.

菌蕾は類球形或は倒卵形，初め埋生，のち表生；殻皮は3層より成り，寒天層は鐘状にて小区劃に分たるることなし，内皮は上部基本体を包み基部托に接す，殻皮は熟後先端より下方に向つて数片に破れ，托を露出し，基端に壺として残る；托は単柱状中空，1～数層の小室よりなり，先端に鐘形の傘を有し或はこれを欠く，傘の表面は平滑或は種々の突起を存す，傘を有するものにて其内側より網目を有する菌網（マント indusium）をスカート状に生ずるものあり；基本体は托の頭部或は傘の表面に粘液となりて附着す；子実体の発育形式は単冠型，本科に約10属を収め，本邦にては4属を知らる。

本邦既知属検索表

A. 托は単一なる茎状をなし，傘を有せず。
　a. 茎の頭部は粘液に蔽われ下部と同一。
　　キツネノロウソクタケ属　***Mutinus*** (571)
　b. 茎の粘液に蔽われたる部分の表面に袋状の附属物ありてこれに密着す，その表面は粒状，指状，網状或は環状の突起あり。
　　シマイヌノエフデタケ属　***Jansia*** (573)
B. 托は鐘状の傘を有し，上端は通常開口し，或は盤状。
　a. 菌網（マント）なし。
　　スッポンタケ属　***Phallus*** (573)
　b. 菌網（マント）あり。
　　キヌガサタケ属　***Dictyophora*** (577)

Mutinus Fr.

キツネノロウソクタケ属

FRIES, Summa Veg. Scand. 3 : 434. 1849 (nom. conserv.)—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 97. 1933.

Phallus PERSOON, Syn. Meth. Fung. 242. 1801. pr. p.

Aedycia RAFINESQUE, in DESVAUX, Jour. Bot. 1 : 222. 1808.

Phallus §*Cynophalluso* FRIES, Syst. Myc. 2:284. 1923.

Cynophallus CORDA, Icon. Fung. 5 : 29. 1842.

Corynites BERKELEY et CURTIS, Trans. Linn. Soc. London, 21 : 149. 1855,

Caromyxa MONTAGNE, Syll. Crypt. 281. 1856.

菌蕾は比較的小形にて卵形，寒天層は薄し；托は菌蕾中にありては紡錘形にて先端殻皮に達し，熟後これを破りて抽出す，円柱状或は紡錘形，中空，下端壺中にありて閉鎖し，上端は閉鎖或は開孔す，壁は１層の小室より成り，上部は下部と同構造或は少しく突起あり，又は厚膜なることあり，小室は上部にありては内方に，下部にありては外方に開孔し或は開孔せず，托の上部には袋状の組織なし；粘液は托の上部表面を被い，緑褐色にて臭あり。

（本属名は mutinus[羅]（男根）より出づ）

基準種　*M. caninus* (HUDS. ex PERS.) FR.

本邦既知種検索表

A. 頭部の壁は茎部より厚くして最も太き部は中央附近にあり，茎部との境界明かなり。
- a. 菌体各部後者より大形(托は 7—9×0.8—1cm)，茎部の小室は通常外方に開孔せず。
  キツネノロウソクタケ　***M. caninus*** (571)
- b. 前者より小形（托は 4—5×0.6—0.8cm)，茎部の小室は通常殆んど全部外方に開孔す。
  キタキツネノロウソクタケ
  f. ***septentrionalis*** (572)

B. 頭部の壁の厚さは茎部と等しく，最も太き部は最下部にて上方に狭細し，茎部との界は表面に於て著しからず。
  キツネノエフデタケ　***M. bambusinus*** (572)

Mutinus caninus (HUDS. ex PERS.) FR.

キツネノロウソクタケ

FRIES, Summa Veg. Scand. 2 : 434. 1849—FISCHER, Jahrb. Bot. Gart. Mus. Berl. 4 : 43. 1886; in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 290. f. 142, A-E. 1900; II, 7a : 98, f. 73, A-F. 1933—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 12. 1888—MASSEE, Monogr. Gast. 89, f. 43. 1889; Brit. Fung. Fl. 1 : 45, f. 1. 1892; Brit. Fungi, 481, pl. 36, f. 3. 1911—MORGAN, Jour. Cinc. Soc. Nat. Hist. 11 : 147. 1889—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 688. 1889—HOLLÓS, Gast. Hung. 29, 143, pl. 1, f. 3-11. 1904—LLOYD, Myc. Writ. 2 : 325, pl. 113. 1907; 362, f. 184. 1907; 370. 1908; 3, Syn. Phall. 28, f. 23. 1909—W. G. SMITH, Brit. Basid. 461, f. 124. 1908—ROLLAND, Atl. Champ. 93, pl. 108, n. 244. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2) : 726, pl. 141B. f. 1. 1912—KOBAYASI, Nova Fl. Jap. Hymenogast. Phall. 61, f. 37. 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 266, pl. 108, f. 2. 1950—HEIM, Champ. Eur. 2 : 503, pl. 54, f. 3. 1957.

(P. HENNINGS, Hedwigia, 39, Beibl. 157. 1900—松村，植．名鑑，1 : 155. 1904—白井，日．菌．目. 57. 1905; ed. 2. 377. 1917; ed. 3. 223. 1927—川村，食用菌及有毒菌，24, f. 27. 1931；日．菌．図鑑，6: 661, f. 644. 1954—広江，応用菌蕈学，1218, f. 830 (右), 833. 1941—原，日．菌．目．213. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，122, pl. 57, f. 313. 1957)

Phallus caninus HUDSON, Fl. Angl. 630. 1778—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 245. 1801—NEES, Syst. Pilze Schw. f. 260. 1817—FRIES, Syst. Myc. 2 : 284. 1823—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 307. 1844—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 298. 1860—QUÉLET, Champ. Jura Vorg. 2 : 363. 1873; Enchir. Fung. 235. 1886—GILLET, Champ. Fr. 785, c. ic. 1874—WINTER, Pilze, 1 : 869, f. 3. 1884.

Phallus inodorus SOW. Col. Fig. Engl. Fungi, 330. 1803.

Corynites brevis BERK. et CURT. Geol. Nat. Hist. N. C. 3 : 110. 1867.

Cynophallus caninus BERK. Outl. Brit. Fung. 298. 1860—COOKE Handb. Brit. Fungi. 1 : 365, f. 109. 1871—REA, Brit. Basid. 23. 1922—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 219, pl. 109, f. 2. 1927.

Mutinus brevis MORG. Jour. Cinc. Soc. Nat. Hist. 11 : 147. 1889.

Aedycia canina O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 441. 1898.

菌蕾は卵形或は長卵形，2.5×1.5cm 内外，白色～淡黒色，基端に白色菌糸束あり；托は円柱状，中空，高さ 7—9cm，茎部は殆ど同幅にて径 8—10mm，白色或は淡紅色，表面に多くの亀甲形の区劃あり，普通開孔せず，茎の下方のものは大形なり，壁は１—２層の小室より成り内方に開孔せず，頭部は円錐形或は中央部より少しく下部が膨れ，1.5—2×0.9—1.1cm，鮮紅色，上端開孔或は閉鎖し，表面は粘液に被われ，更にその上を白色の薄膜により包まれ，熟後膜は剝落することあり；茎部との境界明かなり；粘液は暗緑色，悪臭少し；胞子は楕円形，淡緑

色，3.5—4.5×1.5—2μ。

所在及産地

林内其他地上，稀に腐木上一秋

本州、九州一北米．欧

和名 キツネノロウソクタケ（狐蠟燭茸）〔川村〕

f. **septentrionalis**

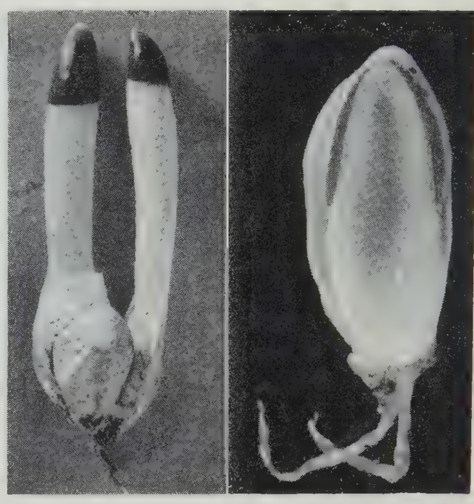
キタキツネノロウソクタケ

基種に比して全体各部小形にて茎部の小室は殆ど全部外方に開孔す；菌蕾は卵形或は楕円体状，高さ1—2cm，径0.7—1cm，表面は白色，平滑，基端に白色菌糸束あり；托は円柱状，中空，高さ4.5—5cm，茎部は殆ど同幅にて屢々基部やや狭細す，径0.6—0.8cm，桃紅色～鮭肉色，下部淡色～白色，全面に亀甲状区劃ありて殆ど全部開孔す，頭部は円錐形，0.5—0.6×0.6cm 内外，鮮紅色，上端開孔或は閉鎖，表面は粘液に被われ，その上に白色の薄膜を有し，熟後剝落す，茎部との境界明かなり，茎部の壁は1層の小室より成り厚さ約1mm，頭部にては通常2層の小室より成り厚さ約1.3mm，内方に開孔するものあり；粘液は頭部の表面を被い，暗緑色，悪臭あり；胞子は楕円形，3.6—5×1.5—2μ。

所在及産地

庭園，笹藪内地上一夏～初秋 北海道

和名 キタキツネノロウソクタケ（北狐蠟燭茸）



a b

第246図 キタキツネノロウソクタケ
Mutinus caninus f. septentrionalis
a. 子実体 ×1 b. 菌蕾断面 ×4.5
（大谷氏）

Mutinus bambusinus (Zoll.) FISCH.

キツネノエフデタケ

FISCHER, Ann. Jard. Bot. Buitenz. 6 : 30, pl. 4-5, f. 26-31. 1887; in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 290, f. 142, G-I. 1900; II, 7a : 100, f. 73, G-I. 1932—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 12. 1888—MASSEE, Monogr. Gast. 89. 1889; Brit. Fung. Fl. 1 : 45. 1892; Brit. Fungi, 482. 1911—MÖLLER, Brasil. Pilzblumen, 72, pl. 4, f. 3. 1895—LLOYD, Myc. Writ. 2 : 358, f. 178, 179. 1907; 3 : 505. 1911; Syn. Phall. 28, f. 26. 1909; 5 : 629, f. 892. 1917—MENDOZA, Philipp. Jour. Sci. 65 : 104, pl. 68. 1938—KOBAYASI, Nova Fl. Jap. Hymenogast. Phall. 62, f. 38-41, pl. 2 (sinister). 1938.

(LLOYD, Myc. Writ. 6 : 980. 1920—安田，植．雜．37 : 204. 1923—白井，日．菌．目．ed. 3. 223. 1927—小林，日．隠．植．図．603, pl. 292, f. 2. 1939—広江，応用菌蕈学，1216, f. 830. 1941—川村，日．菌．図鑑，6 : 662, f. 645. 1954—原，日．菌．目．213. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，122. 1957)

Phallus bambusinus ZOLL. Syst. Verz. Arch, 1 : 11. 1854.

Mutinus argentinus SPEG. An. Soc. Argent. 24 : 62. 1887.

Mutinus Muelleri FISCH. Denkschr. Schw. Nat. Ges. 32 : 91. 1890; in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 290. 1900—SACCARDO, Syll. Fung 7 : 12. 1888.

Aedycia bambusina O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 441. 1898.

Mutinus boninensis non FISCH.) LLOYD, Myc. Writ. 2 : 402, f. 240. 1908.

（牧野、日．植．図鑑，1017, f. 3050. 1940—原，日．菌．目．213. 1954)

Cynophallus bambusinus REA, Brit. Basid. 23. 1922.



第247図 キツネノエフデタケ Mutinus bambusinus ×1
（大谷氏）

菌蕾は長倒卵形或は楕円体状，1.2—3.5×1—2cm，表面白色，平滑，熟後淡黄褐斑を生ずることあり，基端に白色菌糸束あり；托は円柱状，中空，高さ7—12 cm，茎部と上部粘液を附する頭部とより成る，茎部はほぼ同幅，径6—10mm，壺に入れる部は細し，頭部に至りて漸細し，先端は鈍頭或は嘴状に延ぶ，頂孔ありて茎の中洞に連る，全表面に亀甲状模様ありて開孔

せず，頭部は托の上端より，1.5—2.5cm 程の部分を占め，先端裸出し，それより下部粘液に被わる，茎部との境界明瞭ならず，頭部鮮紅色，茎部漸次淡色となり，下部淡紅～白色，壁は1層の小室より成り，茎部にては厚さ 1—1.3mm，上部以外は内外共に開孔せず，頭部にては厚さ 1.3mm，内側は茎の上部の小室と共に開孔す；粘液は黒褐色悪臭あり；胞子は長楕円形，淡青色，3.6—4.5×1.5—1.9μ。

所在及産地

竹林，庭園，圃場等地上—夏秋

北海道，本州—南米.欧.亜(錫.瓜.セレベス)

和名 キツネノエフデタケ(狐絵筆茸)〔古名〕

Jansia PENZIG
シマイヌノエフデタケ属

PENZIG, Ann. Jard. Bot. Buitenz. II, 1 : 139. 1899—FISCHER, in ENGLER & PRANTL. Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 100. 1933.

Mutinus subg. *Jansia* FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 556. 1900.

托は円柱状或は紡錘形，中空，上端細し，菌蕾中にありては托の先端殼皮に達す，壁は通常1層の小室より成る，頭部は明かに茎部と区別せられ，内層は茎部と連続し同一構造をなすも，更にその外側に膜状或は網状の附属物ありてこれを被いてほぼ密着す，膜状の附属物の表面には皺状，粒状の突起あり，或は中空なる指状突起あり，或は環状の溝あり，頭部の全表面は粘液にて被われ，先端は閉鎖或は開孔す。

(本属名は和蘭植物学者 J. M, JANSE 氏の姓より出づ)

基準種 *J. elegans* PENZIG

本邦既知種

シマイヌノエフデタケ ***J. boninensis***(573)

Jansia boninensis (FISCH.) LLOYD
シマイヌノエフデタケ

LLOYD, Myc. Writ. 3, Syn. Phall. 34, f. 35. 1900 SACCARDO, Syll. Fung. 21 : 461. 1912—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 101. 1933—KOBAYASI, Bot. Mag. Tokyo, 51 : 751, f. 2, pl. 16, f. G. 1937; Nova Fl. Jap. Hymenogast. Phall. 65, f. 42-43. 1938.

(白井，日．菌．目．ed. 2. 303. 1917—原，日．菌．目．169. 1954)

Mutinus boninensis FISCH. Denkschr. Schw. Nat. Ges. 33 : 17, pl. 3, f. 69-74. 1893; in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 290. 1900—P. HENNINGS, Hedwigia, 32 : 222. 1893; Monsunia, 1 : 22. 1900—S. ITO & IMAI, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 15 : 1. 1937.

(白井、日．菌．目．57. 1905; ed. 377. 1917; ed. 3. 223. 1927—広江，応用菌蕈学，1218, f. 831. 1941)

菌蕾は長卵形，2—2.5×1cm，表面平滑純白色，基端に1乃至数本の根状束あり；托は殼皮を両瓣状に裂開して抽出し，円柱状にて茎部と頭部に分れ，茎部は壺上高さ 3.5—4cm，径 6mm 内外，1層の小室より成り，内外共に開孔せず，表面に少しく隆起せる亀甲状模様あり，下部純白色，上部僅か橙黄色なり，頭部は中空の円柱状にて上方に漸細し，鈍端にて開孔す，長さ 1.5—2cm，径は茎部より細くして 4—5mm，その内層は茎部と連り，1層の小室よりなりて内方に開孔す；表面を蔽う附属物は多くの横溝を有するがため不規則なる環状をなし，又疎らに小突起あり，1面に粘液に蔽わるるも，これを去れば附属物の色は朱赤色なり，その実質は擬柔組織状にて各細胞は球形，径 12—20μ，内部に朱赤色の色素を包む；粘液は暗緑赤色，濃き甘香あり；胞子は楕円形，殆ど無色，3.5—4×1.4—1.8μ。

所在及産地

林地—夏　　小笠原島—南洋

和名 シマイヌノエフデタケ(島犬絵筆茸)

Phallus HADR. ex PERS. em FR.
スッポンタケ属

HADRIANUS JUNIUS, Phalli ex Fung. Gen. 1562—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 242, 1801. pr. p.—FRIES, Summa Veg. Scand. 2 : 434. 1849—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 102. 1933 (nom conserv.)

Phallus § *Ithyphallus* et *Lejophallus* FRIES, Syst. Myc. 2 : 283. 284. 1823.

Dictyophallus CORDA, Icon. Fung. 6 : 19. 1854.

Kirchbaumia SCHULZER Verh. Zool. Bot. Ges. Wien, 16 : 798. 1866.

Omphalophallus KALCHBRENNER, Flora, 66 : 95. 1883.

Ithyphallus FISCHER, Jahrb. Bot. Gart. Berlin, 4 : 41. 1886.

菌蕾は大なる球形或は卵形，寒天層は多くは特に厚し；托は茎部と傘部とより成り，茎部は円筒形或は紡錘形，中空，下端閉鎖し上端通常開孔す，壁は1—3層の小室より成り，各室は内外に開孔することあり，傘は茎部の上端に結合して垂下し，鐘形にてその内側は茎部より離る，茎部と共に擬柔組織より成り，脆弱，白色，紅色或は黄色，平滑或は網状，

瘤状又は褶状の突起あり，上端は円盤状に拡がり，或は開孔して茎部の中洞に連る，マント状菌網を存せず；粘液は緑褐色，悪臭あり，傘面に附着す。（本属名は phallos [希]（男根）より出づ）

基準種 *P. impudicus* L. ex PERS.

本邦既知種検索表

A. 傘の表面に疣状突起或は皺ありて粘液に蔽わる（節 *Rugulosi* [*Satyrus* BOSC, *Lejophallus* FR.]

a. 茎部及傘は暗赤色にて茎の下部漸次白色となる。

キツネノタイマツタケ **P. rugulosus** (574)

b. 茎部及傘は橙黄色なり。

ダイダイスッポンタケ

P. aurantiacus(574)

B. 傘の表面に著しき網状突起あり（節 *Reticulati* [*Ithyphallus* FR.]

a. 傘の実質は白色なり。

α. 菌蕾は常に白色或は淡灰褐色，根状束白色，傘は円錐状，円盤小形，網状突起は多くは歯状ならず。

スッポンタケ **P. impudicus** (575)

β. 菌蕾は紅色を帯び，根状束も紅色を帯ぶるに至る，傘は卵状，円盤大形，網状突起は著しく歯状。

アカダマスッポンタケ

var. **iosmos** (576)

b. 傘の実質は黄色なり。

α. 茎部は1層の小室より成り脆弱，傘の網目は浅くして細小。

ヒメスッポンタケ **P. tenuis**(576)

β. 茎部は2－3層の小室より成り，傘の網目は深くして大。

I. 腐幹上に生じ，傘は鐘形，稜線薄し。

キイロスッポンタケ **P. costatus**(576)

II. 地上に生じ，傘は鐘形或は倒盃形，稜線やや厚し，胞子大形。

アミガサスッポンタケ

var. **epigaeus** (577)

Phallus rugulosus (FISCH.) KUNTZE

キツネノタイマツタケ

O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 865. 1891—LLOYD, Myc. Writ. 2 : 402, f. 238. 1908; 3 : 458. 1910; Syn. Phall. 18, f. 9. 1909; STEVENSON & CASH, New Fung. Names Lloyd, 162. 1936—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 103. 1933—KOBAYASI, Nova Fl. Jap. Hymenogast. Phall. 77, f. 55-56, pl. 1 (superior). 1935.

（白井，日．菌．目．ed. 2. 427. 1917—川村，日．菌．図説，n. 191. 1930；食用菌及有毒菌，24, f. 28. 1931；日．菌．図鑑，6 : 664, f. 646. 1954—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3 : 120. 1931—松浦，茸類辞典，166, f. 200-201. 1933—小林，日．隠．植．図．601, pl. 291, f. 4-5. 1939—牧野，日．植．図鑑，1017, f. 3047. 1940—今関，原色きのこ，pl. 70（右）. 1942—原，日．菌．目. 250. 1954）

Ithyphallus rugulosus FISCH. Ann. Jard. Bot. Buitenz. 6 : 35, pl. 5, f. 32-34. 1887—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 10. 1888.

（田中，植．雑．4 : 386. 1890—松村，植．名鑑，1 : 149. 1904—白井，日．菌．目．44. 1905; ed. 2. 303. 1917; ed. 3. 177. 1927—安田，日．植．図．pl. 28. 1900；植．雑．27 : 562. 1913—沢田，台．博．報．19 : 34. 1925；台．菌．調．報．5 : 93. 1931—広江，応用菌蕈学，1216. f. 828-829. 1941）

Phallus aurantiacus var. *rugulosus* KOBAY. Nova Fl. Jap. Hymenogast. Phall. 77. 1935.

菌蕾は球形或は卵形，白色，のち淡紫赤色を帯び，2. 5—3×2 cm，基端に白色根状束あり；茎部は円筒形，中空，長さ 12—15 cm，下部の径 1. 1—1. 3cm，上方に漸細し，傘に接する部分は径 7 mm 内外，上方は暗赤色，下方淡色となりて淡紅色或は殆ど白色なり，茎の下半部の壁は3層の小室より成り，外層のものは小形にて多くは開孔し，内層のものは開孔せず，茎の上部にては殆ど1層の小室よりなる；傘は鐘形にて薄く，下縁部は少しく狭まり，或は真直，高さ 2. 5—3 cm，最大径 1. 2—1. 7 cm，実質は暗赤色を呈す，上端は少しく截頭状にて径 5—10 mm，浅く凹形に窪み，その底部は低き円丘状をなし，径 2—2. 5 mm ありて開孔せず，傘の表面は極めて細かき縮緬皺ありて縦に走るもの多し，内面は平滑，淡紅色；粘液は暗黒褐色，悪臭あり；胞子は長楕円形，殆ど無色，3. 5—4. 2×2—2. 2μ。

所在及産地

林地，圃場等—秋　　本州—亜（支．台）

和名 キツネノタイマツタケ（狐松明茸）〔古名〕

Phallus aurantiacus MONT.

ダイダイスッポンタケ

MONTAGNE, Ann. Sci. Nat. II, 16 : 277, pl. 16, f. 1. 1841—LLOYD, Myc. Writ. 2 : 353, f. 171. 1907; 402. 1908; Phall. Austr. 8. 1907—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 103. 1933—KOBAYASI, Nova Fl. Jap. Hymenogast Phall. 78. 1938.

（P. HENNINGS, Hedwigia, 39, Beibl. 157. 1900—

松村, 植. 名鑑, 1 : 159. 1904—白井, 日. 菌. 目. 65. 1905; ed. 2. 427. 1917—原, 日. 菌. 目. 249. 1954)

Dictyophallus aurantiacus CORDA, Anl. Stud. Myc. 190. 1842.

Ithyphallus aurantiacus FISCH. Jahrb. Bot. Gart. Mus. Berl. 4 : 51. 1886; in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 292. 1900—SACCARDO, Syll. Fung. 7 ; 9. 1888—BOEDIJN, Bull. Jard. Bot. Buitenz. III, 12 :87, f. 7. 1932.

(白井, 日. 菌. 目. 44. 1905; ed. 2. 301. 1917; ed. 3. 176. 1927)

菌蕾は卵形, 2—3×1—1.5cm, 白色; 茎部は円柱状, 7—9×0.7—1.2cm, 壁は2—3層の小室より成り, 一様に淡橙黄色なり; 傘は鐘形, 時に上端截頭, 開孔し或は閉鎖す, 高さ 1.5—3cm, 最大部の径 2—15mm, 下縁は少しく狭まりて茎に接し, 歯牙状をなすことあり, 表面に細かき疣状突起ありて屢々癒合し, 縁辺に近く低き平行の稜線をなす, やや低き網目状をなすことあり; 粘液は緑褐色, 悪臭あり; 胞子は楕円形, 淡緑色, 4—4.8×1.7—2.1μ。

所在及産地

地上—秋　　本州—亜(印. 瓜. 支. 台)

和名 ダイダイスッポンタケ (橙鼈茸)〔小林〕

ヘビノアンドウ (蛇行燈茸)〔方言〕

Phallus impudicus L. ex PERS.

スッポンタケ

LINNÉ, Sp. Pl. 2 : 1179. 1753—PERSOON, Comm. Clav. 80. 1797; Syn. Meth. Fung. 242. 1801—DECANDOLLE, Fl. Fr. 2: 214. 1815—NEES, Syst. Pilze Schw. 252, f. 259. 1817—S. F. GRAY, Nat. Arr. Brit. Pl. 1: 675. 1821—FRIES, Syst. Myc. 2: 283. 1823—CORDA, Icon. Fung. 5 : 71, pl. 7, f. 50. 1842—RABENHORST, Deut. Krypt. Fl. 1 : 307. 1844—BARLA, Champ. Nice, 104, pl. 45, f. 1-4. 1859—BERKELEY, Outl. Brit. Fung. 297, pl. 20, f. 3. 1860—KICKX, Fl. Crypt. Flandr. 2 : 30. 1867—FUCKEL, Symb. Myc. 34. 1867—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 364, f. 108. 1871—QUÉLET, Champ. Jura Vosg. 2 : 363. 1873; Enchir. Fung. 234. 1886—GILLET, Champ. Fr. 785, c. ic. 1874—WINTER, Pilze, 1 : 869. f. 1-2. 1884—SCHROETER, Pilze Schles. 1 : 687. 1889—LLOYD, Myc. Writ. 2 : 327, pl. 114. 1907; Phall. Austr. 8, f. 4. 1907; 400, f. 237. 1908; 3 : 508. 1911; Syn. Phall. 10, f. 1. 1900—ROLLAND, Atl. Champ. 93, pl. 107, n. 243. 1910—MIGULA, Krypt. Fl. 3, Pilze, 2(2): 727, pl. 141. 1912—REA, Brit. Basid. 23. 1922—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl. -fam. II, 7a: 103. f. 78, A-E. 1933—KOBAYASI, Nova Fl. Jap. Hymenogast. Phall. 72, f. 48-49, pl. 3 (dexter). 1938—WAKEFIELD & DENNIS, Comm. Brit. Fungi, 266, pl. 108, f. 1. 1950.

(田中, 植. 雑. 1 : 12, f. 1-2. 1887—白井, 日. 菌. 目. 65. 1905; ed. 2. 427. 1917—P. HENNINGS, Hedwigia, 39, Beibl. 157. 1900—小林, 日. 隠. 植. 図. 603, pl. 292, f. 1. 1939—川村, 日. 菌. 図説, n. 123. 1930—牧野. 日. 植. 図鑑, 1017, f. 3048. 1940—原, 日. 菌. 目. 250. 1945—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 121, f. 312, pl. 57, f. 312. 1957)

Phallus vulgaris MICH. Nov. Pl. Gen. 201, pl. 83. 1729.

Phallus volvatus BATSCH, Elench. Fung. 1:133. 1786.

Phallus foetidus SOW. Col. Fig. Engl. Fungi, 3 : pl. 329. 1803.

Ithyphallus impudicus FISCH. Jahrb. Bot. Gart. Mus. Berl. 4 : 43. 1886; in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 292, f. 144, A-E. 1900—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 8. 1888—MASSEE, Monogr. Gast. 88, f. 44. 1889; Brit. Fung. Fl. 1 : 44, f. 3. 1892; Brit. Fungi. 480, pl. 36, f. 1-2. 1911—COOKE, Handb. Austr. Fungi, 212. 1892—W. G. SMITH, Brit. Basid. 459, f. 123. 1908—GÜSSOW & ODELL, Mushr. Toadst. 217. 1927—BRESADOLA, Icon. Myc. 23 : pl. 1131. 1932—HEIM, Champ. Eur. 2 : 503. f. 325, A, pl. 54, f. 1. 1957.

(TANAKA, Mycogr. Nipp. 1(1) : 4, pl. 4. 1890—松村, 植. 名鑑, 1 : 149. 1904—白井, 日. 菌. 目. 44. 1905; ed. 2. 30. . 1917; ed. 3. 176. 1927—KAWAMURA, Illus. Jap. Fungi, 1 : pl. 1, f. 20-23. 1912—梅村, 植. 雑. 28 : 358. 1914—広江, 応用菌蕈学, 1214, f. 325-326. 1941)

Phallus impudicus var. *vulgaris* ULBRICH, Ber. Deut. Bot. Ges. 50a : 306, f. 1(1-7, /a). 1932. (incl. f. *alveolata* ULB. & f. *reticulata* ULB.)—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 103. 1933.

(川村, 日. 菌. 図鑑, 6 : 666, f. 647. 1954)

菌蕾は球形, 径 4—6cm, 基端に白色根状束あり, 表面は常に白色或は淡灰褐色, 細かき綿毛あり, 不規則なる亀裂を生ず, 寒天層は厚くして暗色; 托は円柱状, 中空, 茎部と傘とより成り, 茎部は中央より下部が最も太く, 下端は閉じ上端は通常開孔す, 長さ 8—15cm, 径は最広部 2.5cm に及び, 傘の下縁に接する部分は 1.6cm に及ぶ, 壁は純白色, 表面に多数円形の凹窩あり, 茎の下半部に於ては 3—4 層の小室より成り, 上半部にては 2 層にて内側のもの最大なり; 傘は円錐状鐘形, 高さ 3.5—5cm, 下縁部の径 2.5—2.8cm, 上端は盤状をなし, その径 5—8mm, 1孔ありて茎部の中洞に連り, 或は開孔せずして少しく凹陥す, 実質は白色, 表面は網状突起ありて, 網目は大形にて縦長の多角形, 壁の高さは多少変化し, 多くは歯状ならず, 内壁は白色

にて少しく光沢あり，多くの低き円丘状隆起を有す；粘液は暗緑褐色，傘の表面を蔽い，甘臭あり；胞子は楕円形，淡緑色，3.5—4.5×2—2.5μ。

所在及産地

庭園，竹籔地上—夏秋　　全土—欧．北米．亜(温帯)

和名 ズッポンタケ（鼈茸）〔古名〕

ツネノスッポンタケ（常鼈茸）〔川村〕

var. **iosmos** (BERK.) COOKE

アカダマスッポンタケ

in REA, Brit. Basid. 24. 1922—ULBRICH, Ber. Deut. Bot. Ges. 50 **a** : 311, f. 2. 1932—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7**a** : 105. 1933.

（川村，日．菌．図鑑，6 : 668, f. 648. 1954）

Phallus Hadriani VENTENAT, Mém. Inst. Nat. Sci. Arts, 1 : 517. 1798—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 286. 1801. pr. p.—FRIES, Syst. Myc. 2 : 284. 1823—GILLET, Champ. Fr. 786. 1874.

Hymenophalls Hadriani NEES, Syst. Pilze Schw. 251, f. 258, B. 1817.

Phallus iosmos BERK. Engl. Fl. 5 : 227. 1836; Outl. Brit. Fung. 298. 1860—COOKE, Handb. Brit. Fungi, 1 : 365. 1871.

Phallus caninus var. *Hadriani* ? QUÉL. Enchir. Fung. 235. 1886.

Ithyphallus impudicus var. *iosmos* FISCH. Jahrb. Bot. Gart. Mus. Berl. 4 : 44. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 9. 1888—W. G. SMITH, Brit. Basid. 459. 1908.

Phallus arnarius KALLENB. Zeits. Pilzk. 15 : 106. 1931.

菌蕾は卵形或は球形，初め白色，のち紅色を帯び，又は淡汚赤褐色となる，基端に根状束あり，根状束は初め白色，空気に触れて少しく淡紅又は淡紅紫色を帯ぶ；托は基種に比して短大，高さ 5—12cm，白色，或は淡黄色，淡赤色を帯び，傘は特に大形にて卵状，鈍頭，頂端の円盤は特に大なり，白色，時に僅か紅色を帯ぶることあり，網目は粗大にて深く 2—5mm に及ぶ，縁辺平ならずして歯状突起あり；胞子は長楕円形，淡黄緑色，3—4.5×1.5—2.5μ。

所在及産地

庭園等地上—夏秋　　本州—欧

和名 アカダマスッポンタケ（赤玉鼈茸）〔川村〕

Phallus tenuis (FISCH.) KUNTZE

ヒメスッポンタケ

O. KUNTZE, Rev. Gen. Pl. 2 : 865. 1891—LLOYD, Myc. Writ. 2 : 402, f. 239. 1908; Syn. Phall. 10, f. 3. 1909; STEVENSON & CASH, New Fung. Names Lloyd, 162. 1936—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7**a** : 103, f. 78. F-I. 1933—MENDOZA, Philipp. Jour. Sci. 65 : 104, pl. 67. 1938—KOBAYASI, Nova Fl. Jap. Hymenogast. Phall. 74. 1938.

（白井，日．菌．目．ed. 2. 427. 1917—原，日．菌．目．250. 1954）

Ithyphallus tenuis FISCH. Ann. Jard. Bot. Buitenz. 6 : 4, pl. 1-3, f. 1-18. 1887; in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 292, f. 144, F-I. 1900—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 9. 1888—PENZIG, Ann. Jard. Bot. Buitenz. II. 1 : 144, pl. 23, f. 6-9. 1889—BOEDIJN, Bull. Jard. Bot. Buitenz. III, 12 : 90. 1930.

（白井，日．菌．目．ed. 3. 177. 1927）

菌蕾は球形，径 1.5—2cm，上部多少不規則に裂開し，基端に1乃至数本の根状束あり；托は高さ 7—10cm，茎部は円筒形，鮮黄色，壺に接する部分の径 1—1.2cm，上方に狭細し，傘に接する部分の径 4—5mm，最大のものにて 7mm あり，上端に狭く開孔し，孔縁の壁は外側に反捲し皿状となる，壁は1層の小室より成り，小室の壁は 2—3 層の擬柔組織細胞より成る，脆弱にて半透明なり；傘は鐘形，高さ 2.5cm，下縁の径 1.2cm に及び，茎部と同じく脆弱，厚さ 120—150μ，4—6 層の擬柔組織細胞より成り，各細胞は球形にて 25—30μ，表面に並ぶ細胞は面に直角に延ぶ，表面には低き稜線ありて波状に屈曲し，網目に連り，上部中部のものは顕著なるも下部のものは低く，傘の実質と同一構造なり，網目の底部に横皺ありて傘の内面に突出す；胞子は楕円形，3×1—1.5μ。

所在及産地

腐幹，腐株上—夏秋　　本州—亜(瓜．錫)

和名 ヒメスッポンタケ（姫鼈茸）〔小林〕

Phallus costatus (PENZIG) LLOYD

キイロスッポンタケ

LLOYD, Myc. Writ. 3, Syn. Phall. 10, f. 2. 1909—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7**a** : 105. 1933—KOBAYASI, Nova Fl. Jap. Hymenogast. Phall. 75, f. 51-52, pl. 3 (sinister). 1938.

（川村，日．菌．図鑑，6 : 669, f. 649. 1954—原，日．菌．目．249. 1954—今関及本郷，原色日．菌．図鑑，122. 1957）

Ithyphallus costatus PENZIG, Ann. Jard. Bot. Buitenz. II, 1 : 147. pl. 23, f. 10-11, pl. 24, f. 1-3. 1899—SACCARDO, Syll. Fung. 16 : 225. 1902—BOEDIJN, Bull. Jard. Bot. Buitenz. III, 12 : 88, f. 8. 1932.

（朝比奈，植．研．雑．4 : 113, f. 1-2. 1927—広江，

応用菌蕈学, 1214. 1941)



第248図 キイロスッポンタケ
Phallus costatus ×2/3 (大谷氏)

菌蕾は卵形, 高さ約 3cm, 径約 2.5cm, 表面は純白色にて繭の如き触感あり, 寒天層は薄く, 基端に多数の白色菌糸束あり; 茎部は円柱状, 中空, 長さ 8—10cm, 上部に向つて漸細, 下端は閉じ上端は開孔す, 太き部分の径 1.5—2cm, 壁は亀甲状或は円形の区劃あり, 2—3層の小室より成り, クリーム色にてのち褪色して白色となることあり; 傘は鐘形, 高さ 2.5—4cm, 径 2—3cm, 上端は円盤状をなし開孔し茎部の中洞に連る, 実質は黄色なり, 表面にやや大形の網状突起ありて薄膜質, 網目の底面に皺あり; 粘液は暗緑褐色, 悪臭あり; 胞子は楕円形, 淡緑色, 3.5—4.2×1.5—2μ。

所 在 及 産 地

腐幹, 腐株上—春夏 本州—亜(瓜)

和 名 キイロスッポンタケ (黄色鼈茸)〔朝比奈〕

var. **epigaeus** KOBAY.

アミガサスッポンタケ

KOBAYASI, Nova Fl, Jap. Hymenogast. Phall. 76, f. 53-54. 1938.

(原, 日. 菌. 目. 249. 1954)

基種と異り地上生なり; 菌蕾は卵形, 2.5×2cm, 白色, 基端に長き根状束を附する外, 表面各所に疎に短き突起状の菌糸束を附することあり; 托の高さ 12—16cm, 茎部は円柱形, 淡黄色或は白色, 傘は鐘形或は倒盃形, 茎部と同色, 下縁の径 2.5—4.5 cm, 頂端に円盤ありて開孔す, 表面に大小不同の網目あり, その壁は厚くして低し; 胞子は楕円形, 淡緑色, 14—16×3.5—3.8μ。

所 在 及 産 地

林地—夏 北海道

和 名 アミガサスッポンタケ (網笠鼈茸)〔小林〕

Dictyophora DESV.

キヌガサタケ属

DESVAUX, Jour. Bot. 2 : 88. 1809—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 106. 1933.

Phallus Auct. pr. p.

Hymenophallus NEES, Syst. Pilze Schw. 251. 1817.

Dictyopeplos KUHL et VAN HASSELT, Konst en Letter Bode, 327. 1824.

Sophronia PERS. in GAUDICH. Voy. Freyc. 178. 1826.

Retigerus RADDI, Mem. Soc. Ital. Moden, 20 : 46. 1829.

Clautriavia LLOYD, Myc. Writ. 3, Syn. Phall. 24. 1909.

菌蕾は球形, 白色, 紫色或は紅色, 基端に同色の根状束あり, 寒天層厚し; 托は茎部, 傘部及びマント状菌網より成る, 茎部は円筒形, 中空, 上端開孔, 壁は2—3層の小室より成る, 傘は茎部の上端より懸垂し, 鐘形或は倒盃形, 熟後縁辺少しく反転することあり, 表面に迷路状, 粒状或は網状等の隆起あり, マント状菌網は傘の内部茎の上端に近き部より起り, 鐘形に伸長し傘より抽出し茎の中部或は基部まで, スカートの如く垂下す, 網状に連る紐状物より成るか, 或は膜状にて多数の円形或は亀甲状の孔を穿てる状を呈す, その組織は茎部及び傘と同様にて極めて脆弱なり, 各部は純白, 紅, 黄, 紫色等を呈す; 粘液は暗緑色, 悪臭あり, 傘表を蔽う。

(本属名は dictyon [希] (網) phero [希] (荷う) より出づ)

基準種 *D. indusiata* (VENT. ex PERS.) FISCH.

本邦既知種検索表

A. 菌網は白色。

キヌガサタケ ***D. indusiata*** (578)

B. 菌網は橙黄色或は淡紅色。

ウスキキヌガサタケ f. ***aurantiaca***(579)

Dictyophora indusiata

(VENT. ex PERS.) FISCH.

キヌガサタケ

FISCHER, Ann. Myc. 25 : 472. 1927; Viert. Nat. Ges. 73, Beibl. 15 : 28. 1928; in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 108, f. 80-82. 1933—CUNNINGHAM, Proc. Linn. Soc. N. S. Wales, 56(2) : 12, pl. 2, f. 9. 1931. (cum syn. mult.)—BOEDIJN, Bull. Jard. Bot. Buitenz. III, 12 : 92, f. 11. 1932—KOBAYASI, Nova Fl. Jap. Hymenogast. Phall. 80, f. 57. 1938.

(小林, 日. 隠. 植. 図. 605. 1949—今関, 原色きのこ, pl. 70(左). 1942—川村, 日. 菌. 図鑑, 6 : 671, f. 650. 1954—原, 日. 菌. 目. 107. 1954—今関及本郷, 原色日. 菌. 図鑑, 122. 1957)

Phallus Daemonum RUMPH. Herb. Amboin. 6 : 131, pl. 56, f. 7. 1750.

Phallus indusiatus VENT. Mém. Inst. Nat. Sci. Arts, 1 : 520. 1798—PERSOON, Syn. Meth. Fung. 244. 1801—LLOYD, Myc. Writ. 2 : 332, pl. 119, f. 1-2. 1907; 400, f. 236. 1908; Phall. Austr. 4, f. 1. 1907; 3, Syn. Phall. 18, f. 12. 1909.

(白井, 日. 菌. 目. ed. 2. 427. 1917)

Dictyophora phalloidea DESV. Jour. Bot. 2 : 88. 1809—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 3. 1888—COOKE, Handb, Austr. Fungi, 211. 1892—MÖLLER, Brasil. Pilzblumen, 111, pl. 4, f. 4. 1895—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 296, f. 146-147. 1900.

(松村, 植. 名鑑, 1 : 140. 1904—白井, 日. 菌. 目. 29. 1905; ed. 2. 201. 1917; ed. 3. 120. 1927—安田, 植. 雑. 30 : 395. 1916—川村, 日. 菌. 図説, n. 92. 1930; 食用菌及有毒菌, 36-37, f. 43-44. 1931—MATSUURA & KANADA, Trans. Tottori Soc. Agr. Sci. 3 : 120, pl. 2, f. 3. 1931—松浦, 茸類辞典, 22, f. 20-21; 138, f. 161-162. 1933—野口, 植. 研. 雑. 9 : 207, f. 1-5. 1933—牧野, 日. 植. 図鑑, 1016. f. 3047. 1940.

Hymenophallus indusiatus NEES, Syst. Pilze Schw. 251. 1817—CORDA, Icon. Fung. 5 : 73. 1842.

Sophronia brasiliensis PERS. in GAUD. Voy. Freyc. 178. 1826.

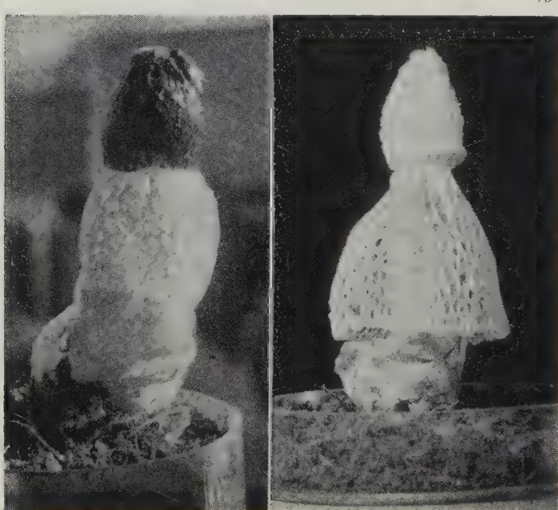
Dictyophora campanulata NEES, in Lév. Mém. Soc. Linn. Paris, 499. 1827—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 5. 1888.

Dictyophora speciosa MEYEN, Nov. Act. Acad. Caes. Leop. Carol. 19, Suppl. 1 : 239. 1843—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 5. 1888.

Phallus brasiliensis SCHLECHT. Linnaea, 31 : 124. 1862.

Dictyophora brasiliensis FISCH. Jahrb. Bot. Gart. Mus. Berl. 4 : 32. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 5. 1888.

菌蕾は球形, 径 3.5—4cm, 白色或は灰色, 稀に上半部褐色或は紫色, 表面平滑, 基端に白色或は帯紫色根状束あり; 托は高さ不定にて 10-20cm. 或は 30cm 余に及ぶものあり, 茎部は円筒形, 中空, 下端は閉じ上端は通常開孔す, 壺に接する部最も太くして径 2.2—2.8cm, 上方に漸細し径約 1—2cm, 壁は多角形の小室よりなり, 下部 3 層, 中部 2 層, 上部 1 層をなし, 表面に開孔するものあれど傘中に入れる部分にては開孔せず; 傘は鐘形にて截頭, 高さ 2.5—4cm, 下縁の径 2.5—4cm, 下縁は初めマント状菌網に接するも, のち外方に反捲して離る, 上端に釜敷様の環状物を具うることあり, 表面に大形の網目ありて深く, 稜は傘の上部及び下部に於てやや縦に平行に並び薄し; 菌網は茎部の上端に近き部より発生し, 傘の内より抽出し, 鐘形或は円錐状に伸展し, 下縁は地に達し或は茎部の中部程に終り, 更に傘より少しく抽出するに止まるもあり, 全縁或は裂く, 網目は円形或は多角形, 大さ区々なるも縁辺部のもの多くは小形なり, 壁は擬柔組織より成る小室によりて構成され, 紐状にて処々開孔し, その横断面は扁平或は円形なり, 茎部, 傘の実質及び菌網はすべて白色にて脆し; 粘液はオリーブ色, 悪臭あり, 傘表に附着す; 胞子は 3.5—4.5×1.5—2μ。



第 249 図　キヌガサタケ　Dictyophora indusiata ×1/2

所 在 及 産 地

庭園, 芝生, 圃場等—夏秋

本邦全土—米. 阿. 濠. 亜(熱帯)

和 名　キヌガサタケ (衣笠茸)

コムソウタケ (虚無僧茸)

シケタケ (湿茸)

f. **aurantiaca** KOBAY.

ウスキキヌガサタケ

KOBAYASI, Nova Fl. Jap. Heymenogast. Phall. 83. 1938.

（原，日．菌．日．107．1954）

? *Hymenophallus roseus* CESATI, Atti Reale Acc. Sci. Fis. Nat. Napoli, 12, 1879.

? *Dictyophora rosea* FISCH. Jahrb. Bot. Gart. Mus. Berl. 4 : 35. 1886.

Dictyophora phalloidea (non DESV.) PETCH, Ann. Roy. Bot. Gard. Peraden. 4 : 145, pl. 7-8. 1908 —MENDOZA, Philipp. Jour. Sci. 65 : 103, pl. 65. 1938.

（沢田，台．菌．調．報．5 : 94. 1931）

子実体の構造はキヌガサタケに似て傘及び茎部はほぼ白色なれどマント状菌網は橙黄色，或は淡紅色を呈す。

産地　九州—亜(台．錫)

和名　ウスキキヌガサタケ（淡黄衣笠茸）〔小林〕

(VI) Podaxineae エツキホコリタケ亜目

ED. FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 109. 1933.

Podaxidei FRIES, Syst. Myc. 3 : 5. 1832.

Podaxinées MONTAGNE, Ann. Sci. Nat. Bot. 20 : 69. 1843.

子実体は多くは地上生にて，其の形普通のキノコの如く裸実或は被実の傘と茎とより成る；茎の先端は柱軸となりて基本体を貫通し殻皮の先端に及び，殻皮は基本体の外囲を完全に或はやや不完全に包み，キノコの傘の如し；基本体は不正形或は管状の腔室又は放射状に並ぶ褶を作り，その内壁上に子実層を裏付けす；熟後なお原態を存するもの（*Secotiaceae*）と，全部胞子粉塊となるもの（*Podaxaceae**）あり；殻皮即ち傘は熟後多くは下方縁辺にて茎より離れ，往々開張す，本目に2科を収む。

本邦既知科

スナタマゴタケ科　**Secotiaceae** (579)

* 従来 *Podaxaceae* の標準和名としてナガエホコリタケ科とせられしも，この和名は *Tulostoma granulosum* に附されあるにより不当と認められ，従つてエツキホコリタケと改めたり。

Secotiaceae FISCHER スナタマゴタケ科

ED. FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 299. 1900; II, 7a : 110. 1933.

Secotieae TULASNE, Ann. Sci. Nat. III, 4 : 176. 1845.

子実体は多くは地上生，有茎傘形にて裸実或は被実；茎は殻皮を貫きて柱軸となり頂端に達し，基本体は腔室，管状或は褶状の空隙を生じ，その壁上に子実層を作る，殻皮は熟後茎の周囲或は傘の長径に沿うて裂開す；往々嚢状体を有し，熟後粉状塊とならずして原態を保持し，多くは弾糸を存せず，5属を含む。

本邦既知属

スナタマゴタケ属　**Secotium** (579)

Secotium G. KUNZE

スナタマゴタケ属

G. KUNZE, Flora, 23, I : 321. 1840—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 112. 1933.

Endoptychum CERNIAIEV, Bull. Soc. Nat. Moscou, 18, II : 146. 1845.

子実体は被実にて，基本体は柱軸と殻皮との間の水平環状空洞をみたす；子実体は熟時地上生となり，強靭，永存性，長き或は短き茎を有す；茎は柱軸となりて殻皮の先端に達し，中実或は中空なり；傘は球形，円錐形或は不正形；無性菌糸脈は殻皮より或は柱軸の上端より起りて不正形の腔室或は上方より下方に向つて褶となりて区劃を作る；子実層にはただ幼時のみ嚢状体を存す；担子柄は棍棒形にて4小柄を生じ胞子を着く；胞子は球形～卵形，平滑或は微疣あり；熟後殻皮は茎の附着部より離れて唇状に裂く，無性菌糸脈は熟後迄残存す；本属菌25種程知らるるも，内濠州に産するもの最も多く北米これに次ぎ，其他の地方にてはただ1種を知らるるのみ。

（本属名は［希］secotos（区劃さる）より出づ）

基準種　*S. gueinzii* G. KUNZE

本邦既知種

スナタマゴタケ **S. agaricoides** (580)

Secotium agaricoides (CZERN.) HOLLÓS

スナタマゴタケ

HOLLÓS, Trem. Füzet. 25 : 93-95. 1902; Gast. Hung. 33, 145, pl. 3, f. 1-26, pl. 4, f. 1-23, pl. 5, f. 1-24, pl. 6, f. 1-18, pl. 6, bis. f. 1-17, pl. 29, f. 33-35. 1904—CONARD, Mycologia 7 : 94, f. 1, pl. 157, f. 1-6. 1915—COKER & COUCH, Gast. 54, pl. 32, 111. 1928—FISCHER, in ENGLER, & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. II, 7a : 114, f. 86 A-D. 1933.

(IMAI, Bot. Mag. Tokyo, 50 : 244. 1936)

Secotium erythrocephalum TUL. Ann. Sci. Nat. III, 2 : 115, 1844; 4 : 176, pl. 9, f. 5-17. 1845—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 54. 1888—COOKE, Handb. Austr. Fung. 221. 1892—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 302, f. 149 B-E. 1900—CUNNINHAM, Trans. Brit. Myc. Soc. 10 : 221, pl. 11, f. 1, 3, pl. 12, f. 14-18. 1925.

Endoptychum agaricoides CZERN. Bull. Imp. Nat. Moscou 18 : 148, pl. 4, f. 1—5. 1845.

Secotium Czerniaevii MONT. Rev. Bot. 310. 1846.

Secotium acuminatum MONT. Explor. Sci. Alger. 1 : 371, pl. 22 bis, f. 4. 1846-49—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 53. 1888—COOKE, Handb. Austr. Fung. 220. 1892—FISCHER, in ENGLER & PRANTL, Nat. Pfl.-fam. 1, 1** : 302. 1900—LLOYD, Myc. Writ. 1 : 138, pl. 13. 1903; 2 : 267, 269. 1906; 5 : 617, f. 874. 1916—PETRI, Fl. Ital. Crypt. Gasterom. 23, f. 2. 1909—HEIM, Champ. Eur. 2 : 499, f. 324. 1957.

Lycoperdon Warnei PECK, Bull. Torr. Bot. Club, 4 : 77. 1879.

Secotium Warnei PECK, Bull. Torr. Bot. Club, 9 : 2, pl. 9, f. 6-11. 1882—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 52. 1888.

Secotium rubigenum HARKN. Bull. Calif. Acad. Sci. 257. 1886—SACCARDO, Syll. Fung. 7 : 53. 1888—LLOYD, Myc. Writ. 1 : 139. f. 68. 1903.

子実体は地上生，孤生或は群生，通常心臓形，稀に類球形，明かなる円錐形或は球形の茎を有し，その下端に太き菌糸紐を有す，形及び大さは変化性に富み，1.5—6×1—5.5 cm；殻皮は幼時殆ど純白色，熟後或は乾燥時藁色～肉桂色或は鞣皮色となる，1層にて厚さ1—3mm，幼時殆ど平滑なるも熟後魚鱗状或は不規則に並ぶ固着鱗片を生ず，肉質或は軟弱なるも乾時やや堅緻なる纖維質となる；基本体は幼時殆ど純白，後黄色となり，遂に褐色となる；腔室は幾分迷路状をなし，その幅変化し 1 mm に及ぶ；基層板は厚さ約 75 μ，熟時又は乾時褶状となりて残存す；幼時臭なく，味よし；胞子は球形或は殆ど球形，平滑，黄色，6.6—8×5.5—6.8 μ，不正形にて大なるものを混ず；子実層は厚さ 25—30 μ，担子柄は棍棒形，幅 7.4—9.3 μ，4 胞子を着く，嚢状体なし。

所在及産地

砂地　　北海道—欧．北米．阿．濠

和名　スナタマゴタケ（砂卵茸）〔今井〕

—— 本 文 終 ——

菌学名属別索引

（括孤内数字は挿図のある頁を示す）

A

D

I

菌学名種別索引

C

菌和名索引

ア

イ

サ

シ

ス

セ

ヒ

フ

ヘ

ホ

マ

―― 終 ――

昭和34年10月27日 第1版印刷
昭和34年11月1日 第1版発行

日本菌類誌
第二巻・第五号

定価 1800円

著作者 伊藤誠哉
東京都文京区森川町70番地
発行者 株式会社 養賢堂
代表者 及川伍三治
東京都新宿区市ケ谷本村町27
印刷者 平尾秀吉
東京都新宿区市ケ谷本村町27
新日本印刷株式会社

東京都文京区森川町70番地
発行所 株式会社 養賢堂
振替東京 25700番・電話小石川 (92)0659・1635・6536番

定 価 1800円

地方書店でのお買上は送料の内
30円だけを御負担を願います。